

Nways
マルチプロトコル・アクセス・サービス



ソフトウェア使用者の手引き
バージョン 3.2

Nways
マルチプロトコル・アクセス・サービス



ソフトウェア使用者の手引き
バージョン 3.2

お願い

本書をご使用になる前に、xxvページの『特記事項』をお読みください。

原 典： SC30-3886-04
Nways Multiprotocol Access Services
Software User's Guide
Version 3.2

発 行： 日本アイ・ビー・エム株式会社

担 当： ナショナル・ランゲージ・サポート

第1刷 1999.2

この文書では、平成明朝体™W3、平成明朝体™W9、平成角ゴシック体™W3、平成角ゴシック体™W5、および平成角ゴシック体™W7を使用しています。この(書体*)は、(財)日本規格協会と使用契約を締結し使用しているものです。フォントとして無断複製することは禁止されています。

注* 平成明朝体™W3、平成明朝体™W9、平成角ゴシック体™W3、
平成角ゴシック体™W5、平成角ゴシック体™W7

© Copyright International Business Machines Corporation 1997, 1998. All rights reserved.

Translation: © Copyright IBM Japan 1999

目次

図	xxi
表	xxiii
特記事項	xxv
本書のオンライン・バージョンのご使用条件	xxvii
商標	xxix
まえがき	xxx
本書の対象読者	xxx
ソフトウェアについて	xxx
本書の表記上の規則	xxxii
ライブラリーの概説	xxxv
IBM 2216 ソフトウェア・ライブラリーの変更の要約	xxxvi
編集上の変更	xxxix
ネットワーク・ユーティリティーによってサポートされるソフトウェア・フィ ーチャー	xl

第1部 ソフトウェアの概要と使用	1
第1章 はじめに	3
開始の前に	3
現行リリースへの移行	3
ローカル・コンソールおよびリモート・コンソールの使用によるソフトウェア へのアクセス	4
ローカル・コンソール	4
リモート・コンソール	5
リモートまたはローカル・ログイン	5
ルーターの再ロード	6
ルーターの終了	7
ユーザー・インターフェース・システムの説明	7
第 1 レベルのユーザー・インターフェースについて	7
第2章 ソフトウェアの使用	11
コマンドの入力	11
プロセスへの接続	11
プロンプトの識別	12
ヘルプを得る	12
下位レベル操作環境を終了する	13
OPCON に戻る	13
構成に関する推奨事項	13
初めての構成の作成	14
既存の構成に基づく構成	14
第 2 レベルのプロセスへのアクセス	16
構成プロセス CONFIG へのアクセス (Talk 6)	17
操作/監視プロセス GWCON へのアクセス (Talk 5)	17
2 次 ELS コンソール・プロセス、ELSCON (Talk 7)	18
第 3 レベルのプロセスへのアクセス	18

ネットワーク・インターフェースの構成および操作プロセスへのアクセス . . .	19
フィーチャーの構成および操作プロセスへのアクセス	24
プロトコルの構成および操作プロセスへのアクセス	25
GWCON および CONFIG コマンド行のコマンド活動記録	27
コマンド活動記録内のコマンドの反復	27
コマンド活動記録内の一連のコマンドの反復	27
第3章 コマンド行インターフェースからファームウェアへのアクセス	31
ファームウェア・プロンプトへのアクセス	31
2216 で使用可能なブート・オプション	31
在席モード	32
不在モード	32
第4章 OPCON プロセス	33
第5章 OPCON の使用	35
OPCON プロセスへのアクセス	35
OPCON コマンド	35
Diags	36
Divert	36
Flush	37
Halt	37
Intercept	38
Logout	38
Memory	39
Reload	39
Status	40
Talk	41
Telnet	41

第2部 基本サービスの概要と構成と使用 45

第6章 BOOT Config の使用による変更管理の実行	47
変更管理の概要	47
トリビアル・ファイル転送プロトコル (TFTP) の使用	47
特定時刻にイメージをロード	48
第7章 変更管理の構成	49
変更管理構成環境へのアクセス	49
変更管理構成コマンド	49
Add	50
Copy	51
Describe	52
Disable	52
Enable	52
Erase	53
List	55
Lock	55
Set	56
TFTP	57
Timedload	59
Unlock	61
Update-firmware	62

第8章 構成プロセス (CONFIG - Talk 6) とコマンド	65
CONFIG とは？	65
Config-Only (構成専用) モード	66
Config-Only モードに自動的に入る	66
Config-Only モードに手動で入る	66
クイック構成	66
Quick Config モードに手動で入る	67
Quick Config モードの終了	68
ユーザー・アクセスの構成	68
技術サポート・アクセス	68
予備インターフェースの構成	68
予備インターフェースの制約事項	70
インターフェースのリセット	72
インターフェースのリセットに関する制約事項	73
システム・ダンプの使用	75
第9章 CONFIG プロセスの構成と監視	77
CONFIG への出入り	77
CONFIG コマンド	77
Add	78
Boot	85
Change	85
Clear	92
Delete	94
Disable	95
Enable	96
Event	97
Feature	98
List	99
Load	102
Network	103
Patch	103
Performance	106
Protocol	106
Qconfig	107
Set	107
System Retrieve	113
System View	114
Time	115
Unpatch	116
Update	116
Write	116
第10章 操作/監視プロセス (GWCON - Talk 5) とコマンド	117
GWCON とは？	117
GWCON の出入り	117
GWCON コマンド	118
Activate	118
Buffer	119
Clear	120
Configuration	120
Disable	123

Enable	124
Error	124
Event	125
Feature.	125
Interface	126
Memory	127
Network	128
Performance	129
Protocol	130
Queue	130
Reset	131
Statistics	131
Test.	132
Uptime.	133
第11章 メッセージ通信 (MONITR - Talk 2) プロセス.	135
メッセージ通信 (MONITR) とは ?	135
メッセージ通信に影響するコマンド	135
メッセージ通信 (MONITR) プロセスへの出入り	135
メッセージの受信	136
第12章 イベント・ログ・システム (ELS) の使用.	137
ELS とは ?	137
ELS 構成環境への出入り	138
イベント・ログの概念	138
イベントの原因	138
メッセージの解釈	139
ELS の使用	142
ELS メッセージの回転の管理	142
UNIX ホスト上の Telnet 接続を使用した ELS 出力のキャプチャー	143
イベント・メッセージを SNMP トラップで送信できるように ELS を構成	143
ELS を使用してのトラブルシュート	144
ELS 例 1	144
ELS 例 2	145
ELS 例 3	145
ELS リモート・ログの使用と構成	146
SYSLOG の機能およびレベル	146
リモート・ワークステーション構成	147
リモート・ログ記録のための 2216 の構成	148
リモート・ログ出力	150
追加考慮事項	153
ELS メッセージ・バッファリングの使用	155
第13章 イベント・ログ・システム (ELS) の構成と監視	157
ELS 構成環境へのアクセス	157
ELS 構成コマンド	157
Add.	158
Advanced.	158
Clear	159
Default.	159
Delete	159
Display	159

Filter	160
List	160
Nodisplay	162
Noremote	163
Notrace	164
Notrap	165
Remote	166
Set	168
Trace	173
Trap	173
ELS ネット・フィルター構成コマンド	174
ELS メッセージ・バッファリング構成コマンド	177
ELS 操作環境への出入り	181
ELS 監視コマンド	181
Advanced	182
Clear	182
Display	183
Files Trace TFTP	184
Filter	184
List	184
Nodisplay	187
Noremote	188
Notrace	188
Notrap	189
Packet Trace.	190
Remote	190
Remove	192
Restore	193
Retrieve	193
Save	193
Set	193
Statistics	198
Trace	200
Trap	201
View	202
Packet-trace 監視コマンド	202
ELS ネット・フィルター監視コマンド	205
ELS メッセージ・バッファリング監視コマンド	208
第14章 性能の構成と監視	215
性能についての概説	215
パフォーマンス報告の正確度	215
性能構成環境へのアクセス	216
性能構成コマンド	216
Disable	216
Enable	216
List	217
Set	217
性能監視環境へのアクセス	217
性能監視コマンド	217
Disable	218
Enable	218

List	218
Report	218
Set	219

第3部 インターフェースの概要と構成と操作 221

第15章 ネットワーク・インターフェースの使用開始	223
先に進む前に	223
ネットワーク・インターフェースと GWCON インターフェース・コマンド	223
ネットワーク・インターフェースの構成プロセスおよびコンソール・プロセス へのアクセス	223
リンク・レイヤー・プロトコルの構成プロセスおよびコンソール・プロセスへ のアクセス	224
予備インターフェースの定義	224
第16章 IEEE 802.5 トークンリング・ネットワーク・インターフェースの構成	225
トークンリング・インターフェース構成プロセスへのアクセス	225
トークンリング構成コマンド	225
List	226
LLC	226
Media	227
Packet-Size	227
Set	227
Source-routing	228
Speed	229
インターフェース監視プロセスへのアクセス	229
トークンリング・インターフェース監視コマンド	229
Dump	230
LLC	230
トークンリング・インターフェースと GWCON インターフェース・コマンド	231
802.5 トークンリング・インターフェースについて表示される統計	231
第17章 高速トークンリング・ネットワークの構成と監視	235
FasTR インターフェース構成プロセスへのアクセス	235
FasTR 構成コマンド	235
List	236
LLC	236
Media	237
Packet-Size	237
Set	237
Source-routing	237
Speed	238
インターフェース監視プロセスへのアクセス	238
FasTR インターフェース監視コマンド	239
Dump	239
LLC	240
FasTR インターフェースと GWCON インターフェース・コマンド	240
FasTR インターフェースに関して表示される統計	240
第18章 FDDI の使用	243
ファイバー分散データ・インターフェース (FDDI) 概説	243
トークン・パッシング環状ネットワーク	243

1 次リングと 2 次リング	243
装置の接続	244
FDDI とトークンリングの相違点	244
装置クラス A および B	244
FDDI ネットワーク図	245
第19章 FDDI の構成と監視	247
FDDI 構成コマンドへのアクセス	247
FDDI 構成コマンド	247
LLC	248
List	248
Set	248
FDDI 監視コマンドへのアクセス	250
FDDI 監視コマンド	250
LLC	250
List	251
Srt-stats	251
FDDI インターフェイスと GWCON コマンド	251
FDDI インターフェイスから表示される統計	251
第20章 LLC インターフェイスの構成と監視	255
インターフェイス構成プロセスへのアクセス	255
LLC 構成コマンド	255
List	256
Set	257
インターフェイス監視プロセスへのアクセス	259
LLC 監視コマンド	259
Clear-Counters	259
List	260
Set	265
第21章 イーサネット・ネットワーク・インターフェイスの使用	267
Interface コマンドによるイーサネット統計の表示	267
第22章 イーサネット・ネットワーク・インターフェイスの構成と監視	271
イーサネット・インターフェイス構成プロセスへのアクセス	271
イーサネット構成コマンド	271
Connector-Type	272
IP-Encapsulation	272
List	272
Physical-Address	272
イーサネット・インターフェイス操作プロセスへのアクセス	273
イーサネット・インターフェイス監視コマンド	273
Collisions	274
第23章 10/100 Mbps イーサネット・ネットワーク・インターフェイスの使用	275
10/100 Mbps イーサネット統計の表示	275
第24章 10/100 Mbps イーサネット・ネットワーク・インターフェイスの構成 と監視	279
インターフェイス構成プロセスへのアクセス	279
10/100 Mbps イーサネット構成コマンド	279
Duplex	280

IP-Encapsulation	280
List	280
Physical-Address	281
Speed	281
10/100 Mbps インターフェース監視プロセスへのアクセス	282
10/100 Mbps イーサネット・インターフェース監視コマンド	282
Collisions	282
第25章 LAN エミュレーションの概説	285
LAN エミュレーションの利点	285
LAN エミュレーションのコンポーネント	286
ATM でのアドレッシング	287
ESI	288
LAN エミュレーション・コンポーネントの ATM アドレス	289
関連 ILMI 機能の概説	289
シグナル・バージョンの手動による構成	290
ILMI の使用による LECS の探索	290
LECS 機能の概説	290
LECS 割り当てポリシーの使用例	292
TLV に関するその他の情報	294
LES への接続	295
アドレス登録	296
アドレス解決	296
BUS への接続	297
BUS 機能	297
データ・ダイレクト VCC の確立	298
LAN エミュレーションの拡張機能の概説	299
ブロードキャスト・マネージャー	299
IP の BCM サポート	300
IPX の BCM サポート	300
NetBIOS の BCM サポート	301
ソース・ルート・ブリッジングの BCM サポート	301
LAN エミュレーションの信頼性	302
LAN エミュレーションのセキュリティー	303
LAN エミュレーションの主要な構成パラメーター	304
第26章 ATM の使用	305
ATM と LAN エミュレーション	305
アドレスを入力する方法	305
ATM-LLC 多重化	306
ATM バーチャル・インターフェースの概念	306
ATM バーチャル・インターフェースの使用による利点	307
ATM バーチャル・インターフェースの使用による不利益	308
第27章 ATM の構成と監視	309
ATM インターフェース構成プロセスへのアクセス	309
ATM 構成コマンド	310
ATM インターフェース構成コマンド	310
Add	311
List	311
QoS Configuration	312
Remove	312

Set	312
Enable	317
Disable	317
バーチャル ATM インターフェース構成プロセスへのアクセス	317
ATM バーチャル・インターフェース構成コマンド	318
Add.	318
List	318
Remove	319
ATM 監視プロセスへのアクセス	319
ATM 監視コマンド	320
Interface	320
ATM-LLC	320
ATM インターフェース監視コマンド (ATM INTERFACE+ プロンプト)	320
List	321
Trace	322
Wrap	323
ATM-LLC 監視コマンド	323
List	324
ATM バーチャル・インターフェース監視コマンド	324
第28章 LAN エミュレーション・クライアントの使用	325
LAN エミュレーション・クライアントの概要	325
第29章 LAN エミュレーション・クライアントの構成と監視	327
LAN エミュレーション・クライアントの構成	327
Add.	327
Config.	328
List	328
Remove	328
ATM フォーラム準拠 LE クライアントの構成.	329
ARP Configuration	329
RIF-Timer (トークンリング・フォーラム準拠 LEC の場合のみ)	332
Source-Routing (トークンリング・フォーラム準拠 LEC の場合のみ).	332
IP-Encapsulation (イーサネット ATM フォーラム準拠 LEC の場合のみ)	332
List	333
QoS.	333
Set	333
LEC 監視環境へのアクセス.	344
LEC 監視コマンド	345
List	345
MIB	348
QoS Information	352
第30章 チャンネル・アダプターの使用	355
ホスト定義の計画	355
2216 の IOCP 定義.	356
オペレーティング・システムに対する 2216 の定義	360
ホスト・プログラムに対する 2216 の定義	362
2216 サポートの計画	376
2216 チャンネル・アダプターの問題の分析と解決	377
再構成.	377
チャンネル・アダプターの概説	377

LAN チャンネル・ステーション (LCS) サポート	380
リンク・サービス・アーキテクチャー (LSA) サポート	382
マルチパス・チャンネル+ (MPC+) サポート	389
チャンネル・アダプター・インターフェースの構成	397
第31章 ESCON および並列チャンネル・アダプターの構成と監視	399
チャンネル・インターフェースへのアクセス	399
チャンネル・アダプター構成コマンド	400
Add	401
Delete	416
Mod	417
List (ESCON)	419
List (PCA)	420
Set (PCA の場合のみ)	420
チャンネル・インターフェース監視プロセスへのアクセス	421
チャンネル・インターフェース監視コマンド	421
List	422
Net	424
チャンネル・アダプター LCS インターフェース監視コマンド	425
List	425
チャンネル・アダプター LSA インターフェース監視コマンド	426
List	426
チャンネル・アダプター MPC+ インターフェース監視コマンド	428
List	428
第32章 シリアル・ライン・インターフェースの構成	435
インターフェース構成プロセスへのアクセス	435
クロックとケーブル・タイプ	435
ネットワーク・インターフェースと GWCON インターフェース・コマンド	436
第33章 X.25 ネットワーク・インターフェースの使用	437
基本構成手順	437
ナショナル・パーソナリティの設定	438
X.25 のデフォルト値について	438
ヌル・カプセル化 (Null Encapsulation)	440
制限	440
構成変更	440
ヌル・カプセル化と閉域ユーザー・グループ (CUG) の構成	441
閉域ユーザー・グループの概要	442
相互閉域接続ユーザー・グループ	443
拡張閉域ユーザー・グループのタイプ	443
装置上における閉域ユーザー・グループとの X.25 回線の確立	443
X.25 閉域ユーザー・グループの構成	444
第34章 X.25 ネットワーク・インターフェースの構成と監視	447
X.25 構成コマンド	447
Set	448
Enable	453
Disable	454
National Enable	454
National Disable	457
National Set	458
National Restore	462

Add.	464
Change	471
Delete	472
List	474
インターフェース監視プロセスへのアクセス	476
X.25 監視コマンド	477
List	477
Parameters	478
Statistics	479
X.25 ネットワーク・インターフェースと GWCON インターフェース・コマンド	480
X.25 インターフェースについて表示される統計	480
第35章 XTP の使用	485
X.25 トランスポート・プロトコル	485
構成情報	486
DTE アドレスのワイルドカード	488
XTP バックアップ・ピア機能	488
リモート DTE の検索	489
接続要求タイマー	489
ローカル XTP	490
XTP と閉域ユーザー・グループ	490
XTP の構成	490
構成手順	490
データ・リンクの設定	491
IP インターフェースの構成	492
X.25 の構成	492
ナショナル・パーソナリティの設定	494
IP アドレスの定義	494
内部 IP アドレスの設定	494
XTP の構成	495
リモート・ルーターの構成例	496
第36章 XTP の構成と監視	499
XTP 構成コマンド	499
Add.	499
Change	502
Delete	503
Enable	504
Disable	504
Set	504
List	504
XTP 監視コマンド	506
Add.	507
Delete	507
List	508
第37章 フレーム・リレー・インターフェースの使用	513
フレーム・リレーの概説	513
フレーム・リレー・ネットワーク	514
フレーム・リレー・スイッチド・バーチャル・サーキット	515
フレーム・リレー・インターフェースの初期化	515

オーファン回線	517
フレーム・リレー・インターフェースの状態に影響を与える PVC 状態の構成	518
フレーム・リレーのフレーム	519
フレーム・リレー・ネットワークを介したフレーム転送	521
プロトコル・アドレス	521
マルチキャスト・エミュレーションとプロトコル同報通信	522
フレーム・リレー・ネットワーク管理	522
管理状態報告書	523
全状態報告書	523
リンク整合性検証報告書	524
統合リンク・レイヤー・マネージメント (CLLM)	524
フレーム・リレー・データ速度	524
認定情報速度 (CIR)	524
オーファン・パーマネント・バーチャル・サーキット CIR	525
認定バースト (Bc) サイズ	525
超過バースト (Be) サイズ	526
回線速度	526
最小情報速度	527
最大情報速度	527
可変情報速度	527
回線輻輳 (ふくそう)	528
CIR の監視	528
輻輳 (ふくそう) 監視	528
輻輳 (ふくそう) 通知と回避	529
フレーム・リレー上の帯域幅予約	531
フレーム・リレー構成プロンプトの表示	531
フレーム・リレー基本構成手順	531
フレーム・リレー PVC マネージメントの使用可能化	532
フレーム・リレー SVC マネージメントの使用可能化	533
第38章 フレーム・リレー・インターフェースの構成と監視	535
フレーム・リレー構成コマンド	535
Add	536
Change	544
Disable	544
Enable	547
List	552
LLC	559
Remove	559
Set	561
フレーム・リレー監視プロンプトへのアクセス	567
フレーム・リレー監視コマンド	567
Clear	567
Disable	568
Enable	568
List	568
LLC	578
Notrace	578
Set	578
Trace	580

フレーム・リレー・インターフェースと GWCON インターフェース・コマンド	580
フレーム・リレー・インターフェースについて表示される統計	580
第39章 ポイント・ポイント・プロトコル・インターフェースの使用	583
PPP の概説	583
PPP データ・リンク・レイヤー・フレーム構造	584
PPP リンク制御プロトコル (LCP)	586
LCP パケット	587
リンク確立パケット	588
リンク終了パケット	590
リンク保守パケット	590
PPP 認証プロトコル	590
パスワード認証プロトコル (PAP)	591
チャレンジ/ハンドシェイク認証プロトコル (CHAP)	592
Microsoft PPP CHAP 認証 (MS-CHAP)	592
Shiva パスワード認証プロトコル (SPAP)	592
PPP 認証の構成	593
PPP コールバックの構成	594
PPP による AAA の使用	595
PPP ネットワーク制御プロトコル	596
AppleTalk 制御プロトコル	596
Banyan VINES 制御プロトコル	596
ブリッジング制御プロトコル	596
コールバック制御プロトコル	597
DECnet IV 制御プロトコル	597
IP 制御プロトコル	597
IPv6 制御プロトコル	598
IPX 制御プロトコル	598
OSI 制御プロトコル	599
APPN HPR 制御プロトコル	599
APPN ISR 制御プロトコル	599
バーチャル・コネクションの使用と構成	599
VC に関する考慮事項	599
VC の構成	600
第40章 ポイント・ポイント・プロトコル・インターフェースの構成と監視	601
インターフェース構成プロセスへのアクセス	601
PPP インターフェース構成プロンプトへのアクセス	602
ポイント・ポイント構成コマンド	602
Disable	602
Enable	604
List	606
LLC	611
Set	611
インターフェース監視プロセスへのアクセス	622
ポイント・ポイント監視コマンド	622
Clear	623
List	623
LLC	647
ポイント・ポイント・プロトコル・インターフェースと GWCON インターフェース・コマンド	647

第41章 マルチリンク PPP プロトコルの使用	651
MPの考慮事項	652
マルチシャシー MP	653
マルチリンク PPP インターフェースの構成	653
PPP ダイアル回線での MP の構成	653
PPP シリアル・リンクでの MP の構成	654
レイヤー 2 トンネル伝送ネットでの MP の構成	655
マルチシャシー MP の構成	655
第42章 マルチリンク PPP プロトコル (MP) の構成と監視	657
MP 構成プロンプトへのアクセス	657
マルチリンク PPP インターフェースの MP 構成コマンド	657
Disable	657
Enable	658
Encapsulator	658
List	658
Set	659
MP インターフェース状態の監視	661
MP 監視コマンドへのアクセス	661
マルチリンク PPP プロトコル監視コマンド	661
List	662
第43章 SDLC リレーの構成	667
基本構成手順	667
SDLC リレー構成環境へのアクセス	667
SDLC リレー構成コマンド	668
Add	668
Delete	669
Disable	670
Enable	670
List (ネットワーク SRLY の場合)	671
List (プロトコル SDLC の場合)	672
Set	673
SDLC リレー監視環境へのアクセス	675
SDLC リレー監視コマンド	676
Clear-Port-Statistics	676
Disable	676
Enable	677
List	678
SDLC リレー・インターフェースと GWCON インターフェース・コマンド	679
第44章 SDLC インターフェースの使用	681
基本構成手順	681
交換 SDLC コールイン・インターフェースの構成	681
SDLC 構成要件	683
第45章 SDLC インターフェースの構成と監視	685
SDLC 構成環境へのアクセス	685
SDLC 構成コマンド	686
Add	686
Delete	687
Disable	687
Enable	688

List	688
Set	691
SDLC 監視環境へのアクセス	697
SDLC 監視コマンド	697
Add.	698
Clear	698
Delete	698
Disable	699
Enable	699
List	699
Set	702
Test.	705
SDLC インターフェースと GWCON インターフェース・コマンド	705
SDLC インターフェースで表示される統計	705
第46章 V.25bis ネットワーク・インターフェースの使用	709
開始の前に	709
構成手順	709
V.25bis アドレスの追加	709
V.25bis インターフェースの構成	710
ダイヤル回線の追加	711
ダイヤル回線の構成	711
第47章 V.25bis ネットワーク・インターフェースの構成と監視	715
インターフェース構成プロセスへのアクセス	715
V.25bis 構成コマンド	715
List	716
Set	717
インターフェース監視プロセスへのアクセス	720
V.25bis 監視コマンド	720
Calls	720
Circuits	721
Parameters	722
Statistics	723
V.25bis と GWCON コマンド	725
V.25bis インターフェースおよびダイヤル回線の統計	725
第48章 ISDN インターフェースの使用	729
ISDN の概説	729
ISDN アダプターとインターフェース	730
ダイヤル回線	730
アドレッシング	731
回線過多と回線の競合	732
デマンド回線を介したコスト制御	732
コーラー ID と LIDS	732
ISDN 原因符号	733
サンプル ISDN 構成	735
ISDN を介するフレーム・リレー構成	735
WAN 復元構成	735
チャンネル化 T1/E1	736
ISDN インターフェースの要件と制約	737
サポートされるスイッチ/サービス	737

ISDN インターフェースの制約事項	737
ダイヤル回線の構成要件	737
開始の前に	737
構成手順	738
ISDN アドレスの追加	738
ISDN パラメーターの構成	738
ISDN インターフェースの構成	740
ダイヤル回線の追加	741
ダイヤル回線の構成	741
I.431 スイッチ変数	743
ネイティブ I.431 サポート	743
第49章 ISDN インターフェースの構成と監視	745
ISDN 構成コマンド	745
Block-Calls	745
List	746
Remove	746
Set	746
Cause Code	750
インターフェース監視プロセスへのアクセス	751
ISDN 監視コマンド	751
Block-Calls	752
Calls	752
Channels	753
Circuits	753
Dial-dump	754
L2_Counters	754
L3_Counters	754
TEI	755
Parameters	755
Statistics	755
ISDN と GWCON コマンド	756
Interface -- ISDN インターフェースとダイヤル回線の統計	756
Configuration -- ルーターのハードウェアおよびソフトウェアに関する情報	758
第50章 ダイヤル回線の構成と監視	759
ダイヤル回線構成コマンド	759
Delete	760
Encapsulator	760
List	761
Set	763
ダイヤル回線監視コマンド	766
Callback	766

第4部 付録および後付け 769

付録A. クイック構成リファレンス	771
クイック構成に関する注記	771
選択	771
終了と再開	772
完了	772
クイック構成プログラムの開始	772

LAN エミュレーションの構成	773
ブリッジングの構成	773
プロトコルの構成	775
IP の構成	775
IPX の構成	777
DECnet (DNA) の構成	779
IBM 2216 のリスタート	781
付録B. X.25 ナショナル・パーソナリティー	783
GTE-Telenet	783
DDN	783
付録C. 複数のディスクからのルーター・ロード・ファイルの作成	785
DOS でのロード・ファイルのアセンブル	785
UNIX でのロード・ファイルのアセンブル	786
DOS でのロード・ファイルの分割	786
UNIX でのロード・ファイルの分割	787
付録D. リモート AAA 属性	789
Radius	789
キーワード	789
TACACS+	790
略語集	793
用語集	803
索引	833



1. 一般的なタスクと IBM 2216 ライブラリー	xxxiv
2. マルチプロトコル・アクセス・サービス	8
3. プロセスおよびコマンドの関係.	8
4. メモリー使用状況.	39
5. イベントによって生成されるメッセージ	139
6. SYSLOG メッセージ記述.	146
7. syslog.conf 構成ファイル	148
8. リモート・ログ記録のための 2216 の構成	149
9. リモート・ログ記録のためのサブシステムおよびイベントの構成	150
10. Syslog News Info ファイルのサンプル内容	151
11. Talk 2 の出力	152
12. Syslog_user_alert ファイルのサンプル内容.	152
13. 静的 ARP エントリーのセットアップ例	153
14. SYSLOG 出力における再発シーケンス番号の例	154
15. FDDI ネットワーク図	245
16. 単純な LAN エミュレーション・ネットワークの物理図と論理図	286
17. LE クライアントと LES 間のデフォルト接続	295
18. LE クライアント (LEC) と BUS 間のデフォルト接続	297
19. LAN エミュレーションの冗長度	302
20. ESCON チャンネル構成例	356
21. EMIF ホストの構成例	358
22. 並列チャンネル・アダプター構成例.	359
23. 2216 が ESCON/PCA チャンネル・アダプターを介してホストに接続されて いる場合 - 論理図	378
24. LCS および LSA の場合の 2216 バーチャル・ネットワーク・ハンドラー	380
25. MPC+ の場合の 2216 バーチャル・ネットワーク・ハンドラー.	380
26. LAN チャンネル・ステーション (LCS) バーチャル・ネットワーク・ハンド ラーの構成	381
27. リンク・サービス・アーキテクチャー (LSA) バーチャル・ネットワー ク・ハンドラーの構成	383
28. LSA 直接接続用のバーチャル・ネットワーク・ハンドラーの構成.	384
29. LSA APPN 接続用のバーチャル・ネットワーク・ハンドラーの構成.	385
30. LSA DLSw 接続用のバーチャル・ネットワーク・ハンドラーの構成.	386
31. LSA DLSw ローカル変換用のバーチャル・ネットワーク・ハンドラーの構 成	388
32. さまざまなタイプの MPC+ 接続	390
33. マルチパス・チャンネル+ (MPC+) を介する APPN 用のバーチャル・ネット ワーク・ハンドラーの構成	391
34. MPC+ を介する UDP+ 用のバーチャル・ネットワーク・ハンドラーの構 成	393
35. MPC+ を介する TCP/IP 用のバーチャル・ネットワーク・ハンドラーの構 成	395
36. 閉域ユーザー・グループのヌル・カプセル化.	442
37. XTP の使用前および使用後の構成	486
38. XTP 構成例.	491
39. フレーム・リレー・ネットワーク内の DLCI.	514
40. フレーム・リレー・ネットワーク内の DLCI.	516
41. オーフアン回線	518

42.	フレーム・リレーのフレーム・フォーマット.	519
43.	輻輳 (ふくそう) 通知と減速.	530
44.	ポイント・ポイント・リンクの例.	584
45.	PPP フレーム構造	585
46.	LCP フレーム構造 (PPP 情報フィールド内の)	587
47.	マルチシャシー MP.	656
48.	ISDN を介するフレーム・リレー構成	735
49.	WAN 復元のための ISDN の使用.	736

一 表

1. 2216 モデル 400 およびネットワーク・ユーティリティーでサポートされるコード・フィーチャー	xl
2. プロセス、プロセスの目的、およびアクセスするためのコマンド	12
3. ネットワーク体系とサポートされるインターフェース	22
4. OPCON コマンド	35
5. 変更管理構成コマンド	49
6. Quick Config 機能	67
7. CONFIG コマンドの要約	77
8. アクセス許可	84
9. IBM 2216 フィーチャー番号と名前	98
10. Set Prompt Level コマンドによって提供される追加機能	111
11. インターフェースのデフォルトおよび最大設定値	112
12. GWCON コマンドの要約	118
13. ログ・レベル	140
14. バケット完結符号 (誤り符号)	141
15. ELS 構成コマンドの要約	157
16. ELS ネット・フィルタ構成コマンド	175
17. ELS メッセージ・バッファリング構成コマンド	177
18. ELS 監視コマンドの要約	181
19. Packet Trace 監視コマンドの要約	202
20. ELS ネット・フィルタ監視コマンド	205
21. ELS メッセージ・バッファリング監視コマンド	208
22. PERF 構成コマンドの要約	216
23. PERF 監視コマンドの要約	217
24. トークンリング構成コマンドの要約	225
25. トークンリング 4/16 の有効なパケット・サイズ	227
26. トークンリング監視コマンドの要約	229
27. FasTR 構成コマンドの要約	235
28. FasTR 監視コマンドの要約	239
29. FDDI 構成コマンドの要約	247
30. FDDI 監視コマンドの要約	250
31. LLC 構成コマンドの要約	255
32. LLC 監視コマンドの要約	259
33. イーサネット構成コマンドの要約	271
34. イーサネット監視コマンドの要約	273
35. 10/100 Mbps イーサネット構成コマンドの要約	279
36. イーサネット監視コマンドの要約	282
37. ATM 構成コマンドの要約	310
38. ATM INTERFACE 構成コマンドの要約	311
39. ATM バーチャル・インターフェース構成コマンドの要約	318
40. ATM 監視コマンドの要約	320
41. ATM INTERFACE 監視コマンドの要約	320
42. ATM LLC 構成コマンドの要約	323
43. LAN EMULATION クライアント構成コマンドの要約	327
44. LAN エミュレーション・クライアント構成コマンドの要約	329
45. ATM LAN エミュレーション・クライアント ARP 構成コマンドの要約	330
46. ATM LAN エミュレーション・クライアント ARP 構成コマンドの要約	331
47. LE Config 監視コマンドの要約	345

48.	チャンネル・インターフェース構成コマンド	400
49.	チャンネル・インターフェース監視コマンド	421
50.	チャンネル・アダプター LCS インターフェース監視コマンド	425
51.	チャンネル・アダプター LSA インターフェース監視コマンド	426
52.	チャンネル MPC+ インターフェース監視コマンド	428
53.	Set コマンド	438
54.	National Enable パラメーター	439
55.	National Set パラメーター	439
56.	閉域ユーザー・グループの着信 X.25 回線の確立	444
57.	X.25 構成コマンドの要約	447
58.	2216 インターフェースで内部クロックが使用される場合の回線速度	451
59.	2216 インターフェースで外部クロックが使用される場合の回線速度	452
60.	VC 定義の例	453
61.	X.25 監視コマンドの要約	477
62.	XTP 構成コマンドの要約	499
63.	XTP 監視コマンドの要約	506
64.	プロトコル・アドレス・マッピング	522
65.	フレーム・リレー・マネージメント・オプション	533
66.	フレーム・リレー構成コマンドの要約	535
67.	2216 インターフェースで内部クロックが使用される場合の回線速度	564
68.	2216 インターフェースで外部クロックが使用される場合の回線速度	565
69.	フレーム・リレー・マネージメント・オプション	565
70.	2216 シリアル・インターフェースの転送遅延の単位と範囲	566
71.	フレーム・リレー監視コマンドの要約	567
72.	LCP パケット符号	587
73.	ポイント・ポイント構成コマンドの要約	602
74.	2216 インターフェースのケーブル・タイプ	614
75.	2216 インターフェースで内部クロックが使用される場合の回線速度	615
76.	2216 インターフェースで外部クロックが使用される場合の回線速度	616
77.	ポイント・ポイント監視コマンドの要約	622
78.	MP 構成コマンド	657
79.	MP 監視コマンド	661
80.	SDLC リレー構成コマンドの要約	668
81.	2216 インターフェースのケーブル・タイプ	673
82.	Set Frame-Size コマンドのフレーム・サイズの有効値	674
83.	2216 インターフェースで内部クロックが使用される場合の回線速度	674
84.	2216 インターフェースで外部クロックが使用される場合の回線速度	675
85.	SDLC リレー監視コマンドの要約	676
86.	SDLC 構成コマンドの要約	686
87.	2216 インターフェースのケーブル・タイプ	692
88.	Link Frame-Size コマンドのフレーム・サイズの有効値	692
89.	2216 インターフェースで内部クロックが使用される場合の回線速度	695
90.	2216 インターフェースで外部クロックが使用される場合の回線速度	695
91.	SDLC 監視コマンドの要約	697
92.	V.25bis 構成コマンドの要約	715
93.	V.25bis 監視コマンドの要約	720
94.	ISDN Q.931 原因符号	733
95.	ISDN 構成コマンドの要約	745
96.	ISDN Cause Codes コマンドの要約	750
97.	ISDN 監視コマンドの要約	751
98.	ダイヤル回線構成コマンドの要約	759
99.	ダイヤル回線監視コマンドの要約	766

特記事項

本書において、日本では発表されていないIBM製品（機械およびプログラム）、プログラミングまたはサービスについて言及または説明する場合があります。しかし、このことは、弊社がこのようなIBM製品、プログラミングまたはサービスを、日本で発表する意図があることを必ずしも示すものではありません。本書で、IBMライセンス・プログラムまたは他のIBM製品に言及している部分があっても、このことは当該プログラムまたは製品のみが使用可能であることを意味するものではありません。これらのプログラムまたは製品に代えて、IBMの知的所有権を侵害することのない機能的に同等な他社のプログラム、製品またはサービスを使用することができます。ただし、IBMによって明示的に指定されたものを除き、これらのプログラムまたは製品に関連する稼働の評価および検証はお客様の責任で行っていただきます。

IBMおよび他社は、本書で説明する主題に関する特許権（特許出願を含む）商標権、または著作権を所有している場合があります。本書は、これらの特許権、商標権、および著作権について、本書で明示されている場合を除き、実施権、使用権等を許諾することを意味するものではありません。実施権、使用権等の許諾については、下記の宛先に、書面にてご照会ください。

〒106-0032 東京都港区六本木3丁目2-31

AP事業所

IBM World Trade Asia Corporation

Intellectual Property Law & Licensing

本書において解決されているライセンス・プログラムおよびそのライセンス・プログラム資料は、「IBM プログラム使用契約書」の契約条件にもとづいて弊社が提供するものです。

本書は、プロダクション使用を目的としたものでなく、いかなる種類の保証も含まれていません。このため、商用および特定の目的への適合性の保証を含め、すべての保証に対し本書は関与しません。

本書のオンライン・バージョンのご使用条件

弊社は、お客様に対して以下のことを許諾します。

本媒体に取められた文書 (IBM プログラムを除く。以下、「資料」という) をお客様の社内使用のために複製し、改変し、印刷することができます。ただし、資料のすべての複製物上には、全文複製か部分複製かを問わず、著作権表示、すべての注意書きのほか必要な表示をそのまま複製するものとします。

上記の条件に違反があった場合は、本使用権は終了するものとします。この場合、お客様は、ただちに複製物のすべてを破棄し、本媒体を弊社に返却するものとします。

商標

以下の用語は米国またはその他の国における IBM 社の商標です。

Advanced Peer-to-Peer Networking	IBM	PS/2
AIX	Micro Channel	RS/6000
AIXwindows	NetView	System/370
APPN	AS/400	Nways
VTAM	BookManager	ESCON

UNIX は、X/Open Company Limited がライセンスしている米国ならびに他の国における登録商標です。

Microsoft、Windows、Windows NT、および Windows のロゴは、Microsoft Corporation の商標または登録商標です。

その他の社名、製品名、およびサービス名は、他社の商標またはサービス・マークです。

まえがき

本書には、ルーター・ユーザー・インターフェースを使用して、Nways 装置 に導入された マルチプロトコル・アクセス・サービスの基本コードを構成および操作するのに必要な情報が記載されています。本書は、以下のプロセスおよび操作を行うのに役立ちます。

- マルチプロトコル・アクセス・サービス の基本コードの構成、監視、および使用
- Nways 装置 によってサポートされる、インターフェースおよびリンク・レイヤー・ソフトウェアの構成、監視、および使用

本書には、Nways 装置 のブリッジング機能およびルーティング機能を構成するのに必要な情報が収められています。本書では、このソフトウェアで提供されるフィーチャーおよび機能のすべてを説明しています。説明されているすべてのフィーチャーおよび機能が、どの Nways 装置 でも提供されるわけではありません。装置に特有のフィーチャーおよび機能については、該当する章または節に、その制約を示してあります。

本書は IBM 2216 をサポートし、この製品を“ルーター”または“装置”と呼んでいます。本書の例は IBM 2216 の構成を表していますが、実際の出力は本書のものとは異なる場合があります。示されている例は、ユーザーが装置を構成する際に表示される内容のガイドラインとして使用してください。

本書の対象読者

本書は、コンピューター・ネットワークの導入と運用を担当する方々を対象にしています。コンピューター・ネットワークのハードウェアおよびソフトウェアを扱った経験があれば役に立ちますが、プロトコル・ソフトウェアを使用する上ではプログラミングの経験は必要ありません。

追加情報の入手: 本書の印刷後に内容が変更されている場合があります。本書の印刷後に追加情報が得られた場合、または変更が必要になった場合には、構成プログラム・ディスクットのディスクット 1 の中のファイル (README という名前) に入っています。このファイルは ASCII テキスト・エディターで見ることができます。

ソフトウェアについて

IBM Nways マルチプロトコル・アクセス・サービス は、IBM 2216 (ライセンス・プログラム番号 5765-C90) をサポートするソフトウェアです。このソフトウェアには、以下の構成要素があります。

- 基本コード。これは次のものから構成されます。
 - 装置のルーティング、ブリッジング、データ・リンク交換、および SNMP エージェント機能を提供するコード
 - ルーター・ユーザー・インターフェース。これにより、装置に導入されたマルチプロトコル・アクセス・サービスの基本コードを構成、監視、および使用することができます。ルーター・ユーザー・インターフェースには、サービス・ポートに接続された ASCII 端末またはエミュレーターを通してローカルでアク

セスすることも、Telnet セッションまたはモデムに接続された装置を介してリモートからアクセスすることもできます。

基本コードは工場で 2216 に導入済みです。

- IBM Nways マルチプロトコル・アクセス・サービス の構成プログラム (本書では構成プログラム と呼びます) は、独立型ワークステーションから装置を構成することができるグラフィカル・ユーザー・インターフェースです。構成プログラムには、誤り検査とオンライン・ヘルプ情報が含まれています。

構成プログラムは、工場ですべてロードされていません。ソフトウェアの発注に含めて装置とは別に納入されます。

IBM Nways マルチプロトコル・アクセス・サービス の構成プログラム は、IBM ネットワーキング・テクニカル・サポートのホーム・ページから入手することができます。サーバーのアドレスおよびディレクトリーについては、Nways マルチプロトコル・アクセス・サービス製品構成プログラム 使用者の手引き GC88-6657 を参照してください。

本書の表記上の規則

本書では、コマンドの構文およびプログラムの応答を表示するのに、以下の規則を使用しています。

1. コマンドの省略形は、次の例のようにアンダーラインを付けて表示されていません。

reload

この例では、コマンド全体 (reload) を入力することも、その省略形 (rel) を入力することもできます。

2. パラメーターのキーワード選択項目については、大括弧で囲み、or (または) という語で区切ってあります。たとえば、

command [keyword1 or keyword2]

キーワードの中から 1 つを選択してパラメーターの値とします。

3. オプションの後に 3 つのピリオドが続いている場合は、そのオプションの後に追加データ (たとえば、変数) を入力することを示しています。たとえば、

time host ...

この例では、ピリオドの代わりにホストの IP アドレスを入力します (このコマンドの説明の箇所に説明してあります)。

4. コマンドに回答して表示される情報では、オプションの省略時値を、オプションの直後に大括弧に入れて示してあります。たとえば、

Media (UTP/STP) [UTP]

この例では、ユーザーが STP を指定しなかった場合、デフォルトの媒体は UTP になります。

5. キーボードのキーの組み合わせは、本文の中で次のように表示しています。

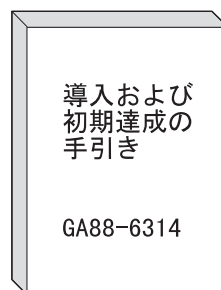
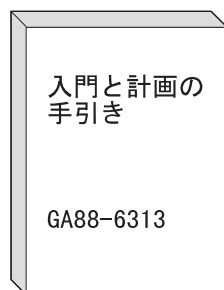
- **Ctrl-P**
- **Ctrl -**

キーの組み合わせ **Ctrl -** では、CTRL キーとハイフンを同時に押す必要があります。特定の状況では、このキー組み合わせを使用するとコマンド行プロンプトを変更します。

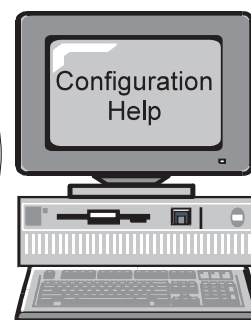
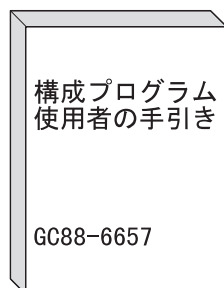
6. キーボードのキーの名前は、たとえば、**Enter** のように示してあります。
7. 変数 (つまり、ユーザーが定義するデータを表すのに使用する名前) は、イタリックで示してあります。たとえば、

File Name: *filename.ext*

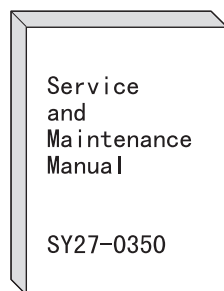
計画と導入



構成



診断/保守



運用と ネットワーク管理

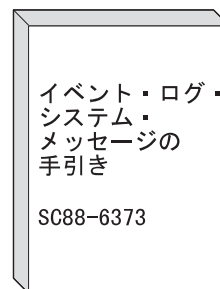


図1. 一般的なタスクと IBM 2216 ライブラリー

ライブラリーの概説

以下のリストは、IBM 2216 ライブラリーの資料をタスク別に並べています。

情報の更新および訂正：資料の印刷後に組み込まれた技術変更、説明、および修正について最新情報を入手するには、次のアドレスの IBM 2216 のホーム・ページを参照してください。

<http://www.networking.ibm.com/216/216prod.html>
および
<http://www.networking.ibm.com/216/216lib.html>

計画

GA88-6313

IBM 2216 マルチアクセス・コネクタ 入門と計画の手引き

この資料は IBM 2216 と一緒に出荷されます。導入の準備の仕方と初期構成の方法について説明しています。

導入

GA88-6314

IBM 2216 Nways マルチアクセス・コネクタ 導入および初期構成の手引き

この小冊子は IBM 2216 と一緒に出荷されます。IBM 2216 の導入方法とその導入の検査方法について説明しています。

GX88-6053

2216 Nways マルチアクセス・コネクタ ハードウェア構成クイック・リファレンス

この参照カードは、IBM 2216 が正しい状態にあるかどうかを調べるのに使用するハードウェア構成情報を記入し、保管しておくために使用します。

診断と保守

SY27-0350

2216 Nways Multiaccess Connector Service and Maintenance Manual

この資料は IBM 2216 と一緒に出荷されます。IBM 2216 に関する問題を診断し、修理する方法を示しています。

運用とネットワーク管理

以下のものは、Nways マルチプロトコル・アクセス・サービス・プログラムをサポートする資料のリストです。

SC88-6699

Nways マルチプロトコル・アクセス・サービス ソフトウェア使用者の手引き

この資料では、以下について説明しています。

- Nways マルチプロトコル・アクセス・サービス・ソフトウェアを構成、監視、および使用する方法

- Nways マルチプロトコル・アクセス・サービスのコマンド行ユーザー・インターフェースを使用して、IBM 2216 と共に出荷されるネットワーク・インターフェースおよびリンク・レイヤー・プロトコルを構成および監視する方法。

SC88-6697

Nways マルチプロトコル・アクセス・サービス プロトコルの構成と監視 解説書 第 1 巻

SC88-6698

Nways マルチプロトコル・アクセス・サービス プロトコルの構成と監視 解説書 第 2 巻

この 2 つの資料は、Nways マルチプロトコル・アクセス・サービスのコマンド行ユーザー・インターフェースにアクセスし、これを使用して、製品と共に出荷されるルーティング・プロトコル・ソフトウェアの構成および監視を行う方法について説明しています。

装置がサポートする各プロトコルに関する情報も含まれています。

SC88-6373

Nways イベント・ログ・システム・メッセージの手引き

この資料には、出される可能性があるエラー・コードのリストとエラーの説明、およびエラーを訂正するための推奨処置が記載されています。

構成

GC88-6657

構成プログラム使用者の手引き

この資料は、Nways マルチプロトコル・アクセス・サービス構成プログラムの使用法について解説しています。

安全

SD21-0030

Caution: Safety Information--Read This First

この資料は IBM 2216 と一緒に出荷され、IBM 2216 の導入および保守作業に適用される注意と危険に関するただし書きが掲記されています。

製品情報

URL: <http://www.networking.ibm.com/216/216prod.html>

この IBM Web ページでは、ワールド・ワイド・ウェブ (WWW) を通して製品情報を提供しています。

IBM 2216 ソフトウェア・ライブラリーの変更の要約

以下に、バージョン 3.2 で行われたソフトウェアの変更をリストします。以下に挙げる変更が行われています。

- 新しい機能

- IP バージョン 6

- TCP6、UDP6、Telnet、PING-6 および traceroute-6、ICMPv6、および IPsec

- ホストの自動構成用近隣ディスカバリー・プロトコル (NDP)
- 静的ルート、RIPng、プロトコル独立型マルチキャスト高密度モード (PIM-DM)、およびマルチキャスト・リスナー・ディスカバリー (MLD)
- IPv4 ネットワークでの IPv6 パケットの構成済みトンネル伝送または自動トンネル伝送
- イーサネット (10 および 100 Mbps)、トークンリング、FDDI、FasTR、チャンネル (ESCON および LCS 並列チャンネル)、および PPP インターフェースのサポート
- リソース ReSerVation プロトコル (RSVP)
 - パケット送達の望みのサービス品質を達成するために、IPv4 ネットワーク上のアプリケーションにネットワーク資源を予約させることを可能にするシグナル機構
 - ATM ポイント・ポイント SVC、PPP、フレーム・リレー、X.25、トークンリング、およびイーサネット (10 および 100 Mbps) でのサポート
- シン・サーバー・サポート
 - ネットワーク・ステーション用ブート・サーバーとして機能
 - サポートされるサーバーとしては、OS/400 上の Network Station Manager (NSM) R2.5 と 3.0、および NFS サーバー (Windows NT、OS/390、AIX、VM など) 用の NSM R3.0 がある
- Web サーバー・キャッシュ
 - 2216 が Web サーバーをサポートするキャッシュとして機能できるようにし、ウェブ・ページへの高速ユーザー・アクセスを提供しつつ、サーバーのオーバーヘッドを削減
- **拡張された機能**
 - 基本サービス
 - 大規模ボリューム ELS メッセージの取り込み、形式設定、およびオフロードを行うための、イベント・ログ・システム (ELS) の機能強化
 - 複数の圧縮ダンプ・ファイルを保守するためのサポート
 - オペレーショナル・コードからファームウェアをアップグレードするためのサポート
 - 再ロードおよびリスタートを通じて持続する構成ツールからの、定時構成変更サポート
 - PPP インターフェースおよびフレーム・リレー・インターフェース用のパケット・トレース・サポート。
 - ESCON/PCA チャンネルの機能強化
 - LAN チャンネル・ステーション (LCS) を通じた IP マルチキャスト・サポート
 - LCS を通じた IP パススルー (ブリッジング)
 - フレーム・リレーにおけるソース・ルート・ブリッジング用のマルチアクセス・ブリッジ・ポートのためのブリッジング・サポート。マルチアクセス・ポートは、拡張容易性が向上しているため、単一ブリッジ・ポートに多くの DLCI を包含します。
 - DIALs

変更の要約

- Microsoft ダイアルアップ・ネットワーク・クライアントによってサポートされる機能のための DIALs サポート
 - コールバック制御プロトコル (CBCP) のサポート
 - Microsoft ポイント・ポイント暗号化 (MPPE) および Microsoft PPP CHAP (MS-CHAP) のサポート
- シン・パスワード認証プロトコル (SPAP) が使用されている場合、ダイアルアップ・コネクションを中断および再開するためのバーチャル・コネクション
- IP 関連
 - IP 優先順位 /TOS フィルターの機能強化
 - ポリシー・ベースのルーティング
 - インターフェースごとの IP MTU の構成
 - IBM 6611 ルーター・ネットワークの移行を容易にするための OSPF 機能強化
 - パス選択のため、近隣ごとのポリシーおよびその他の属性に応じた BGP-4 サポート
 - DVMRPv3 サポート
 - IGMP プルーニングおよびグラフティンク・サポート
- コーラー ID およびコール・ブロッキングに基づく、コールバックの ISDN サポート
- 2216 に別のルーターとの間の L2TP トンネルを作成可能にする、L2TP クライアント・モデルに対する L2TP サポート。そのトンネルは、2216 に入る任意のトラフィックのために使用することができます。L2TP ネットワーク・サーバー (LNS) 機能も、L2TP ネットワーク・アクセス・コンセントレーター (LAC) に対する発信コールを開始できるよう機能強化されました。
- ネットワーク・ディスパッチャー関連
 - ステートレス UDP アプリケーションのサポート
 - ネットワーク・ニュース転送プロトコル (NNTP)、POP3、シンプル・メール転送プロトコル (SMTP)、および Telnet のための新規プロトコル・アドバイザー
 - TN3270 サーバーの平衡化を行っている間、TN3270 サーバーの 1 つがネットワーク・ディスパッチャー機能として同一の 2216 内に存在可能
- ACE/ サーバーを使用した PPP 認証のサポート
- セキュリティー機能の強化
 - セキュリティー・アソシエーションのうちの最大 2 つのネスト・レベルを作成するための、IPsec トンネルイントンネル・サポート
 - IPsec ESP NULL アルゴリズム・サポート
 - *don't fragment* ビットの設定とパス MTU の伝送のための IPsec サポート
 - IPsec に応じた動的再構成の改良
- PPP 専用回線、ISDN、および V.25bis コネクションを組み込むための、混合媒体マルチリンク PPP サポート
- APPN の機能強化
 - APPN SDLC の 2 次分岐サポート

- すべてのリンク・ステーション・タイプに応じた APPN 伝送グループ (TG) 番号の構成
- Talk 5 における APPN Ping (APING) コマンドのサポート
- 新規トレース・オプション
- TN3270 の機能強化
 - 注: この TN3270 機能強化は、V3.2 の初期リリースでは使用できませんが、98 年 12 月 31 日までには 2216 Web サーバーで使用可能になる予定です。
 - SNA LU を名前付きプールにグループ化できるようにする、TN3270 LU プーリング・サポート
 - LU 名マッピングに対する TN3270 IP アドレス
 - 自己定義従属 LU (SDDL) および動的定義従属 LU (DDDL) のサポート
 - 複数 TCP ポートのサポート
- DLSw の機能強化
 - 重複 MAC アドレスのサポート
 - リモート SDLC 装置によってコンタクトされるまで、SDLC 装置のポーリングを遅らせるためのサポート
- X.25 の機能強化
 - PVC の範囲を定義するための構成サポート
 - 最大 2500 までの PVC のサポート
- スイッチド・バーチャル・サーキットのフレーム・リレー・サポート
- フレーム・リレーのパーマネント・バーチャル・サーキット (PVC) における IPXWAN サポート (番号制 RIP、無番号 RIP、および静的ルーティングのサポートを含む)

• 変更の説明と訂正箇所の表示

技術的な変更および追加は、変更箇所の左側に縦線 (|) を付けて表示してあります。

上記の機能的な変更の外に、新製品のネットワーク・ユーティリティーが使用可能になりました。この製品のモデル群は、2216 の機能のサブセットを提供します。詳しくは、x1ページの表1 を参照してください。

編集上の変更

新版を機に、本書だけでなく他のソフトウェア資料にも、さらに以下のような編集上の変更が数多く加えられました。

- 題材の再編成
- 不要かつ冗長な情報の除去
- 検索性の向上
- 一部の情報に対する追加説明

再編成の最初のステップとして以下が完了しました。

- **フィーチャー (機構) の理解、使用および構成** という表題の部分は、*Nways* マルチプロトコル・アクセス・サービス ソフトウェア使用者の手引き から **機構の使用と構成** に移動されました。

変更の要約

- DIALs 機能の使用、構成、および監視に関する章は、機構の使用と構成 に移動されました。

こうした再編成は版を重ねるごとに行われる予定です。この変更についてご意見がある場合は、本書の巻末のご意見記入用紙にご記入の上、郵便または FAX でお寄せください。

ネットワーク・ユーティリティーによってサポートされるソフトウェア・フィーチャー

ネットワーク・ユーティリティーの各モデルには、表1 に示す 2216 ソフトウェア・フィーチャーのサブセットがあります。2216 モデル 400 Web サーバー・キャッシュ (WSC) は IP プロトコルをサポートしますが、APPN フィーチャーは提供しません。

表1. 2216 モデル 400 およびネットワーク・ユーティリティーでサポートされるコード・フィーチャー

フィーチャーまたは プロトコル	2216 モデル 400 基本で使用可能	2216 モデル 400 WSC で使用可能	ネットワーク・ ユーティリティーの モデル TN1 で使用可能	ネットワーク・ ユーティリティーの モデル TX1 で使用可能
TN3720e	yes ¹	--	yes ¹	--
ネットワーク・ディスパッチャー	yes	yes	yes	yes
TN3720e サーバー・アドバイザー (またはネットワーク・ディスパッチャー・アドバイザー)	yes	yes ²	yes	yes ²
帯域幅予約と優先待ち行列	yes	yes	yes	yes
MAC フィルター	yes	yes	yes	yes
WAN 復元	yes	yes	--	--
WAN 再ルート	yes	yes	--	--
データ圧縮	yes	yes	yes	yes
データ・リンク交換 (DLSw)	yes	--	yes	yes
暗号化	yes	yes	--	--
サービス品質 (QoS)	yes	yes	yes	yes
IPsec (IP セキュリティー)	yes	yes	--	--
L2TP	yes	yes	--	--
ネットワーク・アドレス変換	yes	yes	--	--
AAA (認証、許可、および会計セキュリティ)	yes	yes	yes	yes
RSVP	yes	yes	yes	yes
IPv6	yes	--	yes	yes
シン・サーバー	yes	--	--	--
Web サーバー・キャッシュ	--	yes	--	--

表 1. 2216 モデル 400 およびネットワーク・ユーティリティーでサポートされるコード・フィーチャー (続き)

フィーチャーまたは プロトコル	2216 モデル 400 基本で使用可能	2216 モデル 400 WSC で使用可能	ネットワーク・ ユーティリティーの モデル TN1 で使用可能	ネットワーク・ ユーティリティーの モデル TX1 で使用可能
IPX	yes	--	--	--
Appletalk	yes	--	--	--
DECnet IV	yes	--	--	--
OSI	yes	--	--	--
Banyan Vines	yes	--	--	--
DIALs	yes	yes	--	--
APPN フィーチャー				
分岐拡張	yes	--	yes	yes
従属 LU リクエスター (DLuR)	yes	--	yes	yes
エンタープライズ・エクス テンダー	yes	--	yes	yes
拡張ボーダー・ノード	yes	--	yes	yes
高性能ルーティング (HPR)	yes	--	yes	yes
ネットワーク・ノード (NN)	yes	--	yes	yes
1. 別料金のフィーチャー 2. IBM ルーティング・プロダクト上で TN3270e サーバーと通信する場合				

変更の要約

第1部 ソフトウェアの概要と使用

第1章 はじめに

この章では、IBM 2216 モデル 400 スイッチ (2216) および マルチプロトコル・アクセス・サービス に関連する下記の構成要素の使用を開始する方法について説明します。

- ルーター・コンソール端末
- ルーター・ソフトウェア (マルチプロトコル・アクセス・サービス)
- ルーター・ソフトウェア・ユーザー・インターフェース

この章は、以下の節から構成されています。

- 『開始の前に』
- 4ページの『ローカル・コンソールおよびリモート・コンソールの使用によるソフトウェアへのアクセス』
- 7ページの『ユーザー・インターフェース・システムの説明』

開始の前に

開始する前に、以下のチェックリストを参照して、ルーターが正しく導入されているかどうかを検証します。

検証の内容

- 必要なハードウェアがすべて導入されているか ?
- コンソール端末 (ビデオ端末) がルーターに接続されているか ?

重要: サービス・ポートに接続された端末を使用して IBM 2216 を構成または監視しており、そのサービス端末が読み取り不能である場合は、構成の一部のパラメーターを変更する必要があります。

ハードウェア資料を参照してください。

- 適正なネットワーク・インターフェースとケーブルを使用して、ルーターがネットワークに接続されているか ?
- 必要なハードウェア診断がすべて実行されているか ?

以上の手順の詳細については、*IBM 2216 Nways マルチアクセス・コネクタ 導入および初期構成の手引き* を参照してください。

現行リリースへの移行

新規のコード・レベルへの移行に関する説明については、*2216 Nways Multiaccess Connector Service and Maintenance Manual* を参照してください。

ローカル・コンソールおよびリモート・コンソールの使用によるソフトウェアへのアクセス

ルーター・コンソールから、ルーター・ユーザー・インターフェースを使用して、ルーターのネットワーク・ソフトウェア (マルチプロトコル・アクセス・サービス) の機能を監視したり、変更したりすることができます。ルーターは、ローカルおよびリモート・コンソールをサポートします。

ローカル・コンソール

ローカル・コンソールは、ルーターに EIA 232 (RS-232) ケーブルによって直接接続されるか、モデムを介して接続されるかいずれかです。ソフトウェアの初期導入時には、ローカル・コンソールの使用が必要になる場合があります。初期セットアップ接続の後には、IP 転送が使用可能になっている限り、Telnet を使用して接続することができます。(IP 転送を使用可能にする方法についての詳細は、[プロトコルの構成と監視 解説書](#) を参照してください。)

構成したルーターを初めて始動すると、画面にブート・メッセージが表示され、続いてオペレーターのコンソール (OPERATOR'S CONSOLE) つまり OPCON プロンプト (*) が表示されます。この * プロンプトは、ルーターが OPCON コマンドを受け入れ可能な状態にあることを示します。

2216 サービス・ポートに接続された ASCII 端末を使用して、初期構成を行う必要があります。

重要: 不要情報、ランダム文字、逆疑問符、または端末を 2216 サービス・ポートに接続できないなどの問題が生じる場合は、さまざまな原因が考えられます。以下に、それらの原因の一部のものをリストします。

- サービス・コンソール上に不要情報またはランダム文字が生じる最も一般的な原因は、ボー・レートが IBM 2216 と同期していないことです。

2216 が特定のボー・レートに設定されている場合、端末または端末エミュレーターはそれと同じボー・レートに設定する必要があります。

IBM 2216 が通信速度自動選択 (これがデフォルト) に設定されている場合は、端末の break キー・シーケンスを押し、**Enter** キーを押します。

PC 端末エミュレーターの一般的なキー・シーケンスは、Alt-B です (端末エミュレーターの資料を参照してください)。ASCII 端末は、ほとんどに **Break** キーが備えられています (しばしば **Ctrl** キーと一緒に使用されます)。

詳しくはハードウェア資料を参照してください。

- 端末または装置 (AC) の接地の欠陥
- 端末と IBM 2216 間の EIA 232 (RS-232) ケーブルの欠陥、不適正なシールド、または不適正な接地
- 端末または端末エミュレーターの欠陥
- IBM 2216 システム・ボードの欠陥
- 高レベルの電磁気干渉 (EMI)
- 送電線の妨害

2216 の初期構成が終わった後は、IP が使用可能になっている限り、ルーターの操作にローカル・コンソールを使用する必要はありません。

ルーター・ソフトウェアが自動的にコンソール・アクティビティを処理します。ソフトウェアのアップグレード時に、ローカル・コンソールを使用することが必要になる場合もあります。ローカル・コンソールの接続と構成に関する説明については、*IBM 2216 Nways マルチアクセス・コネクタ 導入および初期構成の手引き* を参照してください。

リモート・コンソール

リモート・コンソールは、標準リモート端末プロトコルを使用してルーターに接続します。初期構成にはローカル・コンソールを使用しなければならないことを除いて、リモート・コンソールはローカル・コンソールと同じ機能を提供します。configuration。ルーター上では同時に 2 台までリモート・コンソールを使用できます。リモート・コンソールは、Telnet 接続を介してルーターに接続することができます。この機能を使用不可にするためのオプションが提供されています。

Telnet 接続

ルーターは、Telnet クライアントとサーバーの両方をサポートします。ルーター上のリモート・コンソールが Telnet サーバーの役を務めます。OPCON (*) プロセスで **telnet** コマンドを使用して、ルーターから別のルーターまたはホストに接続するときは、ルーターは Telnet クライアントの役を務めます。

リモート・ログイン名とパスワード

リモート・ログイン時に、ルーターはログイン名とパスワードの入力を求めます。リモート・コンソールからルーターにログインするときに、ルーター **status** コマンドを使用して、ログイン名を表示することができます。

リモートまたはローカル・ログイン

ローカル・コンソールへのログインは、ホスト・システム上で Telnet を開始してルーターに接続する必要があることを除けば、リモート・コンソールへのログインと同じです。リモート・ログインの場合は、ステップ 1 から始めます。ローカル・ログインの場合は、ステップ 6 ページの 3 から始めます。

リモート・コンソールからログインする場合は、次のようにします。

1. ホスト・システム上で Telnet を開始して、ルーターに接続する。ホスト・システムとは、リモート端末が接続されているシステムのことです。
2. ルーターの名前またはインターネット・プロトコル (IP) アドレスを提供する。
ルーター名を使用する場合は、ネットワークにネーム・サーバーがあることが必要です。次の例に示すように、ルーター名または IP アドレスを出します。

```
% telnet brandenburg
```

または

```
% telnet 128.185.132.43
```

ここまでは、リモート・ログインとローカル・ログインには相違はありません。

3. プロンプトで指示されたら、ログイン名とパスワードを入力する。

```
login:  
Password:
```

ログイン名はあるがパスワードはないということもあり得ます。パスワードは、ルーターへのアクセスを制御します。パスワードが設定されていない場合は、**Password:** プロンプトで **Enter** キーを押します。ログインは自動的に設定されません。セキュリティのために、**CONFIG** プロセスで **add user** コマンドを使用して、ユーザー名とパスワードを設定することができます。追加情報については、84 ページの **add user** 構成コマンドを参照してください。変更を行った場合は、再ロードを行って、その変更をアクティブにする必要があります。

注: 初期プロンプトが表示されてから 1 分以内にログイン名および有効なパスワードを入力しなかった場合、または間違ったパスワードを 3 回連続して入力した場合は、ルーターは Telnet 接続を除去します。

4. **Enter** キーを押して、アスタリスク (*) プロンプトを表示させる。

Enter キーを複数回押すか、**Ctrl-P** を押さないと、* プロンプトが表示されない場合があります。

この段階に達すれば、キーボードからコマンドの入力を始めることができます。コマンド行に入力した最後の文字を削除する場合は、**後退** キーを押します。コマンド行の入力全体を削除してコマンドを再入力できるようにする場合は、**Delete (削除)** キーまたは **Ctrl-U** を押します。前に入力したコマンドにアクセスする方法については、27 ページの『GWCON および CONFIG コマンド行のコマンド活動記録』を参照してください。

Telnet クライアント上でローカル Telnet コマンドを使用して、Telnet 接続をクローズすることもできます。

注: VT100 端末を使用している場合、**後退** キーを押すと目に見えない文字が挿入されるので、このキーは押さないようにします。代わりに **Delete** キーを使用してください。

5. 7 ページの『ルーターの終了』の説明に従って、ルーターを終了する。

ルーターの再ロード

reload コマンドは、構成の新規コピーをメモリーからロードすることによって、装置をリブートする場合に使用します。動的構成不能のユーザー構成可能パラメーターを変更した場合は、そのつど装置を再ロードしないと、変更が有効になりません。下に例を挙げます。

* **reload**

```
The configuration has been changed, save it? (Yes or [No] or Abort)
```

```
Are you sure you want to reload the gateway? (Yes or [No]): yes
```

ルーターの終了

* プロンプトに戻って、Telnet 接続をクローズします。下に例を挙げます。

```
IP Config> exit
Config> Ctrl-P
* logout

%
```

Telnet クライアント上でローカル Telnet コマンドを使用して、Telnet 接続をクローズすることもできます。

ユーザー・インターフェース・システムの説明

ルーター・ソフトウェア (マルチプロトコル・アクセス・サービス) は、さまざまなプロセスおよびハードウェア装置間の CPU の使用をスケジュールするマルチタスク処理システムです。ルーター・ソフトウェアは、次のようなものです。

- タイミングおよびメモリー管理を提供し、ローカルおよびリモート・オペレーター・コンソール の両方 (そこから、ルーターの動作パラメーターを表示および変更できる) をサポートします。
- 各種のユーザー・インターフェース・プロセス、すべてのネットワーク・インターフェース・ドライバー、およびルーターと一緒に購入されたすべてのプロトコル転送プログラムを含む、機能モジュールで構成されます。

第 1 レベルのユーザー・インターフェースについて

ソフトウェアへのユーザー・インターフェースは、メイン・メニュー (プロセス) といくつかの補助メニュー (プロセス) で構成されます。これらのメニューは、ソフトウェア内の複数レベルのプロセスに関連するものです。

第 1 レベルのプロセスは、OPCON プロセスと CONFIG-ONLY プロセスで構成されます。ほとんどの場合は、OPCON プロセスを使用して第 2 レベルにアクセスして、IBM 2216 上で実行する基本サービス、フィーチャー、インターフェース、およびプロトコルの構成または操作を行います。

第 2 レベルのプロセスは、**status** コマンドの実行によってリストされるプロセスで構成されます。第 2 レベルのプロセスにアクセスする場合は、**talk pid** コマンドを使用します。ソフトウェア内で使用できないプロセスがあります。プロセスの概要については、12ページの表2 を参照してください。

8ページの図2 は、各種のプロセスを示し、ルーター・ソフトウェアの構造内でのそれらの配置を示しています。

ルーター・ソフトウェア・プロセス

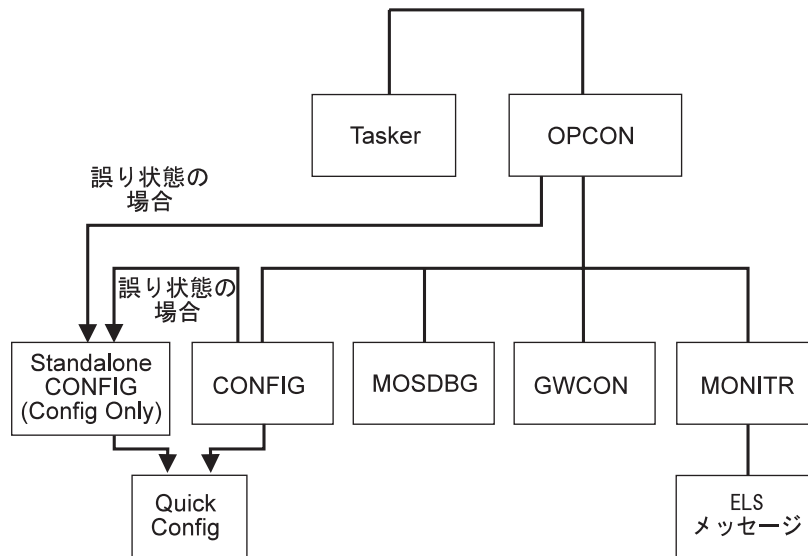


図2. マルチプロトコル・アクセス・サービス

図3 に、さまざまなプロセス・レベル間の関係を例示してあります。

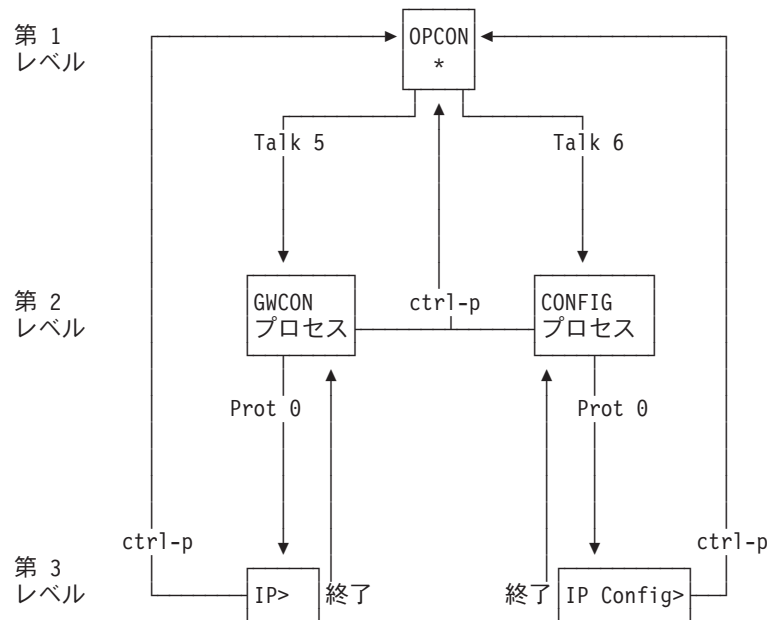


図3. プロセスおよびコマンドの関係

注: 図3 には、それぞれのプロセス・レベルにアクセスする場合、およびそれぞれのプロセス・レベルから戻る場合に使用するさまざまなコマンドも示してあります。

OPCON についての詳細は、33ページの『第4章 OPCON プロセス』を、CONFIG-ONLY についての詳細は、66ページの『Config-Only (構成専用) モード』を、それぞれ参照してください。

ROPCON プロセスでは、リモート・コンソールからの処理を扱いますが、本質的には OPCON プロセスの場合と同じです。

クイック構成プロセス

クイック構成 (つまり、QUICK CONFIG) では、特定のオペレーティング・システム・コマンドを処理しなくても、ルーターの部分を即時に構成することができます。構成をもたないルーターを初期ロードまたは再ロードすると、Config-Only に入り、そのプロセスから Quick Config メニューにアクセスできます。ルーターに装置が構成されており、その装置にプロトコルが構成されていない場合、ルーターは自動的に CONFIG-ONLY でスタートし、その後で QUICK CONFIG に入ります。

また、CONFIG プロセスから **qconfig** コマンドを使用して QUICK CONFIG に入ることもできます。

システム・セキュリティー

add user コマンドを使用して、ログイン許可をもつ複数のユーザーを追加することができます。セキュリティー問題についての詳細、および **set password** コマンドと **add user** コマンドの説明は、68ページの『ユーザー・アクセスの構成』を参照してください。

第2章 ソフトウェアの使用

この章では、ソフトウェアの使用法について説明します。この章は次の節に分かれています。

- 『コマンドの入力』
- 『プロセスへの接続』
- 13ページの『構成に関する推奨事項』
- 16ページの『第 2 レベルのプロセスへのアクセス』
- 18ページの『第 3 レベルのプロセスへのアクセス』
- 27ページの『GWCON および CONFIG コマンド行のコマンド活動記録』

コマンドの入力

コマンドを入力するときは、以下の点に注意してください。

- 使用可能なコマンド間でそのコマンドを固有に識別できる十分な数の文字だけを順次入力します。たとえば、**reload** コマンドを実行する場合は、最小限として **rel** と入力します。コマンド構文に関する章では、最小数の必須文字に下線を付けて示してあります。
- コマンドは大文字小文字の区別をしません。
- コマンド (および、後続のオプション) の先頭文字を入力するだけで、コマンドを実行できる場合もあります。たとえば、* プロンプトで **s** と入力して **Enter** キーを押すと、**status** コマンドが実行されます。

プロセスへの接続

ルーターを開始すると、コンソールにブート・メッセージが表示されます。次に、OPCON プロンプト (*) が画面に表示され、これで OPCON プロセスに入ったので OPCON コマンドの入力を開始できることが示されます。これが異なるプロセスとの通信を行うコマンド・プロンプトになります。

コンソールをプロセスに接続するには、以下のようになります。

1. * プロンプトで **status** コマンドを入力して、プロセスのプロセス ID (PID) 番号を見付ける。

status コマンドは、プロセス ID (PID)、プロセス名、およびプロセスの状態など、ルーター・プロセスに関する情報を表示します。**status** コマンドを出すと、次の例のような表示が得られます。

```
* status
Pid  Name      Status TTY  Comments
1    COpCn1    RDY   TTY0
2    Monitr    DET   --
3    Tasker    RDY   --
4    MOSDBG    DET   --
5    CGWCon    DET   --
6    Config    DET   --
7    ELScon    DET   --
8    ROpCn1    IDL   TTY1 128.185.210.125
9    ROpCn2    IDL   TTY2
```

2. **talk pid** コマンドを使用する。ただし、*pid* は、接続したいプロセスの番号です。(これらのコマンドおよび他の **OPCON** コマンドの詳細については、33ページの『第4章 OPCON プロセス』を参照してください。)

注: リストされたすべてのプロセスにそれぞれユーザー・インターフェースがあるとは限りません (たとえば、**talk 3** プロセスにはありません)。**talk 4** コマンドは、IBM サービス技術員が使用するためのコマンドです。

プロンプトの識別

各プロセスは、それぞれ異なるプロンプトを使用します。プロンプトを見れば、コンソールが接続されているプロセスが分かります。(talk pid コマンドを入力してもプロンプトが表示されない場合は、**Return** キーを数回押してください。)

次のリストには 5 つのメイン・プロセスのプロンプトが示してあります。

表2. プロセス、プロセスの目的、およびアクセスするためのコマンド

プロセス	レベルおよび目的	アクセスするためのコマンド	入力プロンプト
OPCON	レベル 1 - すべての 2 次レベルへのアクセス	Ctrl-P	アスタリスク(*)
CONFIG	レベル 2 - 基本サービスの構成および第 3 レベルでの構成へのアクセス	talk 6	Config >
GWCON	レベル 2 - 基本サービスの操作と監視、および第 3 レベルでの操作と監視へのアクセス	talk 5	正符号 (+)
MONITR	レベル 2 - メッセージの表示	talk 2	(なし)
ELSCon	レベル 2 - 直接監視および ELS コンソールへのアクセス	talk 7	ELS Secondary Console>
MOSDBG	レベル 2 - 診断環境	talk 4	db>
DIAGS	レベル 2 - ハードウェア診断の実行	diags	

注: サービス技術員の指導のもとで **talk 4** コマンドを入力するだけです。

OPCON プロンプト・レベルでは、キーボードからのコマンド入力を開始することができます。コマンド行に入力した最後の文字を削除するときは **後退** キーを使用します。コマンド行の入力全体を削除してコマンドを再入力できるようにする場合は、**Ctrl-U** を使用します。前に入力したコマンドにアクセスする方法については、27ページの『GWCON および CONFIG コマンド行のコマンド活動記録』を参照してください。

ヘルプを得る

コマンド・プロンプトで、そのプロンプト・レベルで使用可能なコマンドのリストという形でヘルプを得ることができます。その場合は、**? (help コマンド)** を入力してから、**Enter** キーを押します。**?** は、現行プロンプト・レベルで使用可能なコマ

ンドをリストさせる場合に使用します。特定のコマンド名の後に **?** を入力して、そのオプションをリストすることもできます。たとえば、* プロンプトで **?** と入力すると、次の情報が表示されます。

```
*?  
  
DIAGS hardware diagnostics  
DIVERT output from process  
FLUSH output from process  
HALT output from process  
INTERCEPT character is  
LOGOUT  
MEMORY statistics  
RELOAD  
  
STATUS of process(es)  
TALK to process  
TELNET to IP-Address
```

下位レベル操作環境を終了する

ソフトウェアには複数レベルにまたがる本質があるため、2216 の構成または操作に応じて、2 次レベル、3 次レベル、またはさらに下位のレベルの環境に入ることができます。次に上位のレベルに戻る場合は、**exit** コマンドを入力します。2 次レベルにアクセスする場合は、2 次レベルのプロンプト (**Config>** と **+** のどちらか) が表示されるまで、**exit** を入力し続けます。

たとえば、IP プロトコル構成プロセスを終了する場合は、次のように入力します。

```
IP config> exit  
Config>
```

1 次レベル (OPCON) にアクセスする必要がある場合は、インターセプト文字 (デフォルトでは **Ctrl P**) を入力します。

OPCON に戻る

OPCON プロンプト (*) に戻る場合は、**Ctrl-P** を押します。OPCON に戻ってからでないと、別のプロセスと通信することはできません。たとえば、GWCON プロセスに接続されているとき、CONFIG プロセスに接続したい場合は、**Ctrl-P** を押して、まず OPCON に戻る必要があります。**Ctrl-P** キーの組み合わせは、デフォルトのインターセプト文字です。

第 3 レベル以下のレベルのプロセスからインターセプト文字を使用して * プロンプトに戻った場合は、次に **talk** コマンドを使用すると、再び第 3 レベルのプロセスに入ります。このリンクがなくなるのは、ルーターを再初期化したときです。

構成に関する推奨事項

2216 の構成は、初めての構成であるのか、既存の構成に基づいた構成の作成であるのか、または構成の更新に過ぎないのかによって異なります。以下の各項は、要件に応じて最善の手順を使用するための指針としてご使用いただけます。

初めての構成の作成

この手順では、これから構成しようとしている 2216 の構成に似た構成を備えた 2216 が他にない場合を前提としています。また、2216 を梱包から取り出したばかりであるという前提にも立っています。この手順では順序を指定していますが、実際の構成は、(ステップ 3 の後は) 任意の順序で実行することができます。

初めて IBM 2216 を構成する手順は、以下のとおりです。

1. 構成しようとしている 2216 を調べて、構成の必要があるインターフェースを判別します。後で使用できるように、このようなインターフェースをメモしておきます。
2. 4ページの『ローカル・コンソールおよびリモート・コンソールの使用によるソフトウェアへのアクセス』の説明に従って、2216 に接続します。
3. 2216 上のポートを 1 つと装置の内部 IP アドレスを少なくとも 1 つ、66ページの『クイック構成』または 771ページの『付録A. クイック構成リファレンス』の説明に従って Quick Config を使用して初期構成します。装置内への Telnet ができるようにするために必要な最小構成を行います。
4. ブート・オプションなど、基本サービスをすべて構成します。17ページの『構成プロセス CONFIG へのアクセス (Talk 6)』の説明に従って、構成プロセスにアクセスします。
5. インターフェースを構成します。19ページの『ネットワーク・インターフェース構成プロセスへのアクセス』の説明に従って、インターフェース構成プロセスにアクセスします。
6. 必要なフィーチャーがあればすべて構成します。24ページの『フィーチャーの構成および操作プロセスへのアクセス』の説明に従って、フィーチャー構成プロセスにアクセスします。
7. この装置を介して稼働するプロトコルをすべて構成します。25ページの『プロトコルの構成および操作プロセスへのアクセス』の説明に従って、プロトコル構成プロセスにアクセスします。

注: 最小限でも、このステップで IP を構成します。

8. 6ページの『ルーターの再ロード』の説明に従って、ルーターを再ロードします。

既存の構成に基づく構成

この項では、次のことを行う方法について説明します。

- 稼働中の 2216 の構成に基づく構成
- 2216 の構成の永続的更新
- 2216 の稼働時における 2216 の構成の一時的更新

既存の構成に基づく構成

新しい 2216 を対象として構成しようとしているインターフェース、フィーチャー、およびプロトコルと同じものが構成されている 2216 がすでにある場合は、既存の 2216 に基づいて構成を行うことによって、構成時における時間の節約ができます。こ

のタイプの構成については、コマンド行インターフェースを使用して実行してもよいし、2216 に付属の構成プログラムを使用して実行することもできます。いずれの場合も、2216 が実動ネットワーク内にないことが構成手順の前提となります。

コマンド行インターフェースの使用による既存の構成に基づく構成は、以下の手順で行います。

1. 使用する構成のコピーを用意します。
 - a. OPCON (*) コマンドで **talk 6** と入力する。
 - b. Config> プロンプトで **boot** と入力する。
 - c. Boot config> プロンプトで **copy configuration file** コマンドを入力する。詳しくは、47ページの『第6章 BOOT Config の使用による変更管理の実行』を参照してください。
2. 構成対象の 2216 に接続します。
3. TFTP GET を使用して、ステップ 1 で用意した構成を 2216 にロードします。47ページの『第6章 BOOT Config の使用による変更管理の実行』を参照してください。
4. 構成を更新します。
5. 構成を書き込みます。65ページの『第8章 構成プロセス (CONFIG - Talk 6) とコマンド』を参照してください。
6. 2216 を再ロードします。

構成プログラムの使用による既存の構成に基づく構成は、以下の手順で行います。

1. 構成プログラムを開始します。
2. 現在行おうとしている構成の基にしたい構成を 2216 から検索します。
3. 新規構成に必要な変更を施します。このような変更としては、アドレス、ホスト名、ユーザー、およびその他の項目があります。
4. 構成の検索に使用した名前とは異なる名前を付けて構成を保管します。
5. この構成を構成対象の 2216 に送信します。
6. 2216 を再ロードします。

構成プログラムの使用に関する詳細については、*Nways* マルチプロトコル・アクセス・サービス製品構成プログラム 使用者の手引き GC88-6657 を参照してください。

構成の永続的更新

構成の永続的更新は、以下の手順で行います。

1. 4ページの『ローカル・コンソールおよびリモート・コンソールの使用によるソフトウェアへのアクセス』の説明に従って、2216 にアクセスします。* プロンプトが表示されるはずですが。
2. **talk 6** コマンドを入力して、構成プロセスにアクセスします。
3. 該当するコマンドを入力して、変更対象項目の構成を行う第 3 レベルのプロセスにアクセスします。
4. 必要な回数だけ **exit** と入力して、構成プロセスに戻ります。

5. 構成を書き込みます。65ページの『第8章 構成プロセス (CONFIG - Talk 6) とコマンド』を参照してください。
6. 2216 を再ロードします。

構成の一時的更新

構成を一時的に更新できる能力を使用すると、構成に対して永続的更新を行うことができるようになる時点まで、2216 の動作特性の一部に変更を加えることができます。したがって、問題を解決したり、パフォーマンスを向上させたり、ピーク時の休止を回避したりする変更を即時に実施することができます。その上で、構成に対して永続的変更を行い、再ロードして、変更を有効にすることができるように、休止をスケジューリングすることができます。

構成の一時的更新は、以下の手順で行います。

1. 4ページの『ローカル・コンソールおよびリモート・コンソールの使用によるソフトウェアへのアクセス』の説明に従って、2216 にアクセスします。* プロンプトが表示されるはずですが、
2. **talk 5** コマンドを入力して、操作/監視プロセスにアクセスします。

注: すべてのインターフェース、プロトコル、またはフィーチャーが talk 5 コマンドによる構成の一時的な変更を許可しているわけではありません。
3. 該当するコマンドを入力して、変更対象項目の監視を行う第 3 レベルのプロセスにアクセスします。
4. 必要な回数だけ **exit** と入力して、操作/監視プロセスに戻ります。
5. **Ctrl-P** と入力して、* プロンプトに戻ります。
6. 7ページの『ルーターの終了』の説明に従って、ルーターを終了します。

第 2 レベルのプロセスへのアクセス

すべてのインターフェース、フィーチャー、およびプロトコルには、以下のプロセスにアクセスする場合に使用するコマンドがあります。

- 構成プロセス。インターフェース、フィーチャー、またはプロトコルを初期構成して使用可能にし、その後の構成変更を実行するためのプロセスです。
- 操作/監視プロセス。それぞれのインターフェース、フィーチャー、またはプロトコルに関する情報を表示し、一時的構成変更を行い、構成変更をアクティブにするためのプロセスです。

また、基本システム・サービスの中にも、第 2 レベルのプロセスによって構成または操作ができるものがあります。上記の機能を実行するためのコマンドについては、65ページの『第8章 構成プロセス (CONFIG - Talk 6) とコマンド』以降で説明します。

以下の各項では、第 2 レベルのプロセスにアクセスする手順について説明します。

構成プロセス CONFIG へのアクセス (Talk 6)

各プロトコル構成プロセスへのアクセスは、ルーターの CONFIG プロセスを通して行います。CONFIG はルーター・ユーザー・インターフェースの第 2 レベルのプロセスで、第 3 レベルのプロセスとの通信を可能にします。第 3 レベルのプロセスの例としては、プロトコル・プロセスがあります。

CONFIG コマンド・インターフェースは、幾つかのレベル (モードと呼ばれる) で構成されています。プロトコル構成コマンド・インターフェースは、CONFIG インターフェースのモードです。各プロトコル構成インターフェースには、それぞれ独自のプロンプトがあります。たとえば、TCP/IP プロトコル・コマンド・インターフェースのプロンプトは IP config> です。

以下の項では、これらの手順についてさらに詳しく説明します。

CONFIG プロセスに入る

OPCON から CONFIG コマンド・プロセスに入って、CONFIG プロンプトを表示させるためには、OPCON **talk** コマンドと CONFIG の PID を入力します。CONFIG の PID は 6 です。

* talk 6

コンソールに CONFIG プロンプト (Config>) が表示されます。このプロンプトが表示されない場合は、再度 **Return** キーを押してください。

クイック構成プロセス: クイック構成 (つまり、QUICK CONFIG) では、特定のオペレーティング・システム・コマンドを処理しなくても、ルーターの部分を即時に構成することができます。CONFIG プロセスから **qconfig** コマンドを使用して、Quick Config メニューに入ります (66ページの『クイック構成』を参照してください)。

ルーターの再ロード

CONFIG によってプロトコル・パラメーターに加えた変更が有効になるのは、動的変更が含まれるネットをアクティブにしたあと、あるいはルーター・ソフトウェアを再ロードしたあとです。

注: 変更を装置のフラッシュ・メモリーに保管するためには、**write** コマンドを入力する必要があります。

操作/監視プロセス GWCON へのアクセス (Talk 5)

インターフェース、フィーチャー、またはプロトコルに関する情報を表示させて見たり、実行中にパラメーターを変更したりする場合は、操作 (監視) プロセスにアクセスして使用する必要があります。操作コマンド・インターフェースは、GWCON インターフェースのモードです。GWCON モード内では、各インターフェース、フィーチャー、またはプロトコルには、それぞれ独自のプロンプトがあります。たとえば、TCP/IP プロトコルのプロンプトは IP> です。

注: このプロセスで変更したパラメーターについては、2216 にオペレーショナル・コードの再ロードを余儀なくさせるようなイベント (たとえば、電源異常や **reload** コマンドの入力など) が生じた場合は、その後までアクティブであり続けることはありません。

以下の項では、これらの手順についてさらに詳しく説明します。

GWCON コマンド・プロセスに入る

OPCON から GWCON プロセスに入って、GWCON プロンプトを表示させるためには、**talk** コマンドと GWCON の PID を入力します。下に例を挙げます。

```
*talk 5
```

これにより、GWCON プロンプト (+) がコンソールに表示されます。このプロンプトが表示されない場合は、再度 **Return** キーを押してください。

2 次 ELS コンソール・プロセス、ELSSCon (Talk 7)

2 次 ELS コンソールは、GWCON の現在の状態を中断することなく、GWCON talk 5 ELS への便利なアクセスを提供します。talk 5 内の **ping** の中間に入ることも、talk 5 メニュー構造の奥深く入ることもでき、また GWCON の現在の状態を中断することなく ELS の制御が可能です。Talk 7 はこの目的に使用されます。

以下の例では、**ping** コマンドを実行中に、もう 1 つ別の ELS イベントが表示されます。

注: インターセプト文字 (デフォルトの場合は Ctrl-P) を使用すると OPCON プロンプト (*) を表示できます。

```
*talk 5
+protocol ip
IP>ping 10.0.0.9
PING 10.0.0.2 -> 10.0.0.9: 56 data bytes, ttl=64, every 1 sec.
```

```
*talk 7
```

```
ELS Secondary Console>display event ip.7
Complete
ELS Secondary Console>
*talk 2
00:20:48 IP.007: 10.0.0.2 -> 10.0.0.9
00:20:49 IP.007: 10.0.0.2 -> 10.0.0.9
```

第 3 レベルのプロセスへのアクセス

第 2 レベルにアクセスした後で、IBM 2216 のインターフェース、フィーチャー、およびプロトコルを構成または操作する場合は、第 3 レベルのコマンドを入力する必要があります。以下の各項では、第 3 レベルのプロセスにアクセスする方法について説明します。

ネットワーク・インターフェースの構成および操作プロセスへのアクセス

この項では、ネットワーク・インターフェースの構成プロセスおよび操作プロセスへのアクセスを開始する方法について説明します。これらのプロセスにアクセスすると、ルーターで使用されているネットワーク・インターフェースのソフトウェア構成可能パラメーターを変更したり、監視したりすることができます。

ネットワーク・インターフェース構成プロセスへのアクセス

ルーターの構成プロセスにアクセスするには、以下の手順を使用します。このプロセスにより、特定のインターフェースの構成プロセスにアクセスできます。

1. OPCON プロンプトで、OPCON **talk** コマンドと CONFIG の PID を入力する。
(このコマンドについての詳細は、33ページの『第4章 OPCON プロセス』を参照してください。)

* talk 6

talk 6 コマンドを入力すると、コンソール上に CONFIG プロンプト (Config>) が表示されます。最初に **CONFIG** に入ったときにプロンプトが表示されない場合は、再度 **Return** を押してください。

add device コマンドを使用して、ネットワーク・インターフェースを作成します。**add device** コマンドは、インターフェース番号を自動的に割り当て、以下のタイプの装置をサポートします (**add device ?** と入力すると、装置タイプのリストが表示されます)。

- a. 複数ポート・アダプター

add device コマンドで複数ポート・アダプター装置名を指定すると、アダプターのスロット番号とインターフェース用に使用するアダプター上のポート番号を入力するように求められます。

アダプター上の複数のポートを使用する場合は、**add device** コマンドを複数回入力して、毎回異なるポート番号を指定する必要があります。

たとえば、スロット 7 の 8 ポート X.21 アダプター上のポート 0 と 1 にインターフェースを作成する場合は、次のようなコマンドを入力します。

```
Config> add device x21
Device Slot #(1-8) [1]? 7
Device Port #(0-7) [0]? 0
Defaulting Data-link protocol to PPP
Adding X.21 PPP device in slot 7 port 0 as interface #6
Use "set data-link" command to change the data-link protocol
Use "net 6" to configure X.21 PPP parameters
```

```
Config> add device x21
Device Slot #(1-8) [1]? 7
Device Port #(0-7) [0]? 1
Defaulting Data-Link protocol to PPP
Adding X.21 PPP device in slot 7 port 1 as interface #7
Use "set data-link" command to change the data-link protocol
Use "net 7" to configure X.21 PPP parameters
```

注: シリアル・アダプター・ポート番号は 0 が基底です。その他のすべての複数ポート・アダプターのポート番号は 1 が基底です。

4 ポート ISDN チャネル化 T1 および E1 アダプターの場合は、1 つの **add device** コマンドで複数のポートを構成することができます。これらのアダプターの 1 つを追加すると、ソフトウェアがプロンプトを出して、追加するポー

トの範囲の指定を指示してきます。次の例には、ダイヤルイン・ネットを使用しているスロット 4 に 4 ポート ISDN チャンネル化 T1 および E1 アダプターを追加する方法を示してあります。

```
Device Slot #(1-8) [1]? 3
Device Port Range (1-8)
  Lowest Port #(1) [1]? 2
  Highest Port #(8) [8]? 2
Automatically add dial-in nets for this base net? (Yes or [No]): yes
Automatically enable IP for these dial-in nets?(Yes or [No]): yes
Enable as a Multilink PPP link?(Yes or [No]): yes
Adding 23 dial-in nets on top of base net 14
Adding 8-port ISDN Primary T1/J1 devices in slot 3 port 2 as interfaces #14.
Use "net 14" to configure 8-port ISDN Primary T1/J1 parameters.
```

b. 単一ポート・アダプター

add device コマンドで単一ポート・アダプター装置名を指定すると、アダプターのスロット番号を入力するように求められます。

次の例は、スロット 2 に 1 ポート ISDN-PRI T1/J1 アダプターのインターフェースを追加します。

```
Config> add device t1-isdn
Device Slot #(1-8) [1]? 2
Adding ISDN Primary T1/J1 device in slot 2 port 1 as interface #7
Use "net 7" to configure ISDN Primary T1/J1 parameters
```

c. ダイヤル回線

次の例は、ダイヤル回線インターフェースを追加します。

```
Config> add device dial-circuit
Enter the number of PPP Dial Circuit interfaces [1]?
Adding device as interface 8
Base net for this circuit[0]?4
Defaulting Data-link protocol to PPP
Use "set data-link" command to change the data-link protocol
Use "net 8" command to configure circuit parameters
```

d. 次の例では、ダイヤルイン回線を追加します。

```
Config>add device dial-in
Enter the number of dial-in interfaces [1]?
Adding device as interface 5
Base net for this circuit [0]? 5
Defaulting Data-link protocol to PPP
Use "set data-link" command to change the data-link protocol
Use "net 5" command to configure circuit parameters
```

e. マルチリンク PPP

次の例は、マルチリンク PPP インターフェースを追加します。

```
Config>add device multilink-ppp
Enter the number of Multilink PPP interfaces [1]?
Adding device as interface 7
Defaulting Data-link protocol to PPP
Use "net 7" command to configure circuit parameters
```

注:

- a. シリアル・アダプター用またはダイヤル回線用のインターフェースを作成する場合は、PPP がデフォルトのデータ・リンク・タイプです。ただし、**set data-link** コマンドを使用して、データ・リンク・タイプを変更することができます。シリアル・ポートおよびダイヤル回線でサポートされるデータ・リンク・タイプに関する 22 ページの表 3、および 108 **set data-link** コマンドの説明を参照してください。

2. Config > プロンプトで **list devices** コマンドを入力して、ルーターが現在構成されているネットワーク・インターフェース番号を表示する。次のような表示が出ます。


```
Config> list devices
```

Ifc 0 Token Ring	Slot: 1	Port: 1
Ifc 1 Token Ring	Slot: 1	Port: 2
Ifc 2 Token Ring	Slot: 2	Port: 1
Ifc 3 Token Ring	Slot: 2	Port: 2
Ifc 4 Ethernet	Slot: 4	Port: 1
Ifc 5 Ethernet	Slot: 4	Port: 2
Ifc 6 Ethernet	Slot: 5	Port: 1
Ifc 7 Ethernet	Slot: 5	Port: 2
Ifc 8 Ethernet	Slot: 6	Port: 1
Ifc 9 Ethernet	Slot: 6	Port: 2
Ifc 10 V.35/V.36 Frame Relay	Slot: 8	Port: 0
Ifc 11 V.35/V.36 X.25	Slot: 8	Port: 1
Ifc 12 V.35/V.36 PPP	Slot: 8	Port: 2
Ifc 13 V.35/V.36 PPP	Slot: 8	Port: 3
Ifc 14 V.35/V.36 PPP	Slot: 8	Port: 4
Ifc 15 V.35/V.36 PPP	Slot: 8	Port: 5

3. インターフェース番号を記録する。

4. CONFIG **network** コマンドと構成したいインターフェースの番号を入力する。下に例を挙げます。

```
Config> network 1
```

これで、該当する構成プロンプト（たとえば、トークンリングの場合は TKR Config>）がコンソール上に表示されます。

注: ネットワーク・インターフェースはすべてがユーザー構成可能とは限りません。構成できないインターフェースの場合は、次のようなメッセージが出ます。

```
That network is not configurable
```

IBM 2216 の装置サポートの制約事項: IBM 2216 に装置を追加するときには、以下の規則が適用されます。

- ATM インターフェースは 2 つまで定義できる。
- ISDN-PRI インターフェースは 4 つまで定義できるが、以下の制限が付く。
 - 使用できる 1 ポート・アダプターは 4 つ以下とする。
 - 使用できる 4 ポート ISDN チャネル化 T1 および E1 アダプターは 1 つ以下とする。
- LAN 装置をスロット 3、4、7、または 8 に追加すると、その対の他方のスロットは使用不可になる。たとえば、LAN 装置をスロット 4 に追加すると、スロット 3 が使用不可になります。同様に、装置をスロット 3 に追加すると、スロット 4 が使用不可になります。LAN 装置をスロット 7 と 8 に追加した場合も、同じ規則が適用されます。
- V.35/V.36 アダプター上のすべてのインターフェースは、V.35 ケーブルまたは V.36 ケーブルのいずれかを使用する必要がある。V.35/V.36 アダプターに接続されている多分岐ケーブルのタイプによって、使用できるケーブルのタイプ (V.35 または V.36) が決まります。

インターフェース構成の表示: 同じインターフェース構成プロンプトから **list** コマンドを使用して、選択されたインターフェースに特定の構成情報をリストすることができます。下に例を挙げます。

```
TKR Config> list
```

```
Token-Ring configuration:
```

```
PACKET SIZE (INFO FIELD): 4472  
Speed: 16 Mb/sec
```

Media: Shielded
 RIF Aging Timer: 120 Source Routing: Enabled
 MAC Address: 000000000000

ネットワーク・インターフェースの構成: IBM 2216 のネットワーク・インターフェースの構成についての詳しい情報は、本書の該当する章を参照してください。

表3 は、ネットワーク体系と各体系でサポートされるインターフェースをリストしています。

表3. ネットワーク体系とサポートされるインターフェース

ネットワーク体系	サポートされるインターフェース
ATM	1 ポート ATM 155 Mbps MMF 1 ポート ATM 155 Mbps SMF
802.5 トークンリング	2 ポート・トークンリング
イーサネット	<ul style="list-style-type: none"> • 1 ポート 10/100 Mbps イーサネット • 2 ポート 10 Mbps イーサネット
ISDN	<ul style="list-style-type: none"> • 1 ポート ISDN-PRI (T1/J1) * • 1 ポート ISDN-PRI (E1) * • 4 ポート ISDN チャンネル化 T1 および E1 * <p>注: アスタリスク (*) が付いているインターフェースは、ISDN インターフェースとしてもチャンネル・インターフェースとしても使用できます。</p>
ポイント・ポイント	8 ポート V.24/EIA 232E、6 ポート V.35/V.36、8 ポート X.21、1 ポート HSSI、およびダイヤル回線インターフェース
フレーム・リレー	8 ポート V.24/EIA 232E、6 ポート V.35/V.36、8 ポート X.21、1 ポート HSSI、およびダイヤル回線インターフェース
X.25	8 ポート V.24/EIA 232E、6 ポート V.35/V.36、および 8 ポート X.21 アダプター
SDLC リレー	8 ポート V.24/EIA 232E、6 ポート V.35/V.36、および 8 ポート X.21
SDLC	8 ポート V.24/EIA 232E、6 ポート V.35/V.36、8 ポート X.21、およびダイヤル回線インターフェース
V.25bis	8 ポート V.24/EIA 232E
Dial-In	デフォルトで DIAL をサポートする構成パラメーターをもった PPP ダイヤル回線インターフェース
マルチリンク PPP (MP)	任意の PPP リンクでサポートされる
ESCON チャンネル・アダプター	LAN チャンネル・ステーション (LCS)、リンク・サービス・アーキテクチャー (LSA)、およびマルチパス・チャンネル+ (MPC+)
パラレル・チャンネル・アダプター	LAN チャンネル・ステーション (LCS)、リンク・サービス・アーキテクチャー (LSA)、およびマルチパス・チャンネル+ (MPC+)
L2TP	レイヤー 2 トンネル伝送プロトコル (L2TP) を介するバーチャル PPP DIAL 接続をサポートする
FDDI	1 ポート FDDI

注:

1. PPP ダイアルイン回線インターフェースでは、ISDN またはV.25bis を基本ネットワーク・インターフェースとして使用することができます。
2. FR ダイアル回線インターフェースでは、ISDN または V.25bis ネットワークを基本ネットワーク・インターフェースとして使用することができます。
3. ダイアルイン回線インターフェースでは、ISDN ネットワークを基本ネットワーク・インターフェースとして使用することができます。
4. SDLC ダイアル回線では、V.25bis をネットワーク・インターフェースとして使用します。

ネットワーク・インターフェース・コンソール・プロセスへのアクセス

特定のインターフェースに関連する情報を監視する場合は、以下の手順を使用して、インターフェース・コンソール・プロセスにアクセスします。

1. OPCON プロンプトで、OPCON **talk** コマンドと GWCON の PID を入力する。下に例を挙げます。

```
*talk 5
```

2. GWCON プロンプト (+) がコンソールに表示される。最初に GWCON に入ったときにプロンプトが表示されない場合は、再度 **Return** を押してください。
3. GWCON プロンプトで **configuration** コマンドを入力して、ルーターに構成されているプロトコルとネットワークを表示する。下に例を挙げます。

```
+configuration
```

```
Multiprotocol Access Services
```

```
2216-MAS Feature 2822 V3.2 Mod 0 PTF 0 RPQ 0 MAS.EF9 cc4_2a
```

```
Num Name Protocol
0 IP DOD-IP
3 ARP Address Resolution
4 DN DNA Phase IV
6 VIN Banyan Vines
7 IPX NetWare IPX
10 BGP Border Gateway Protocol
11 SNMP Simple Network Management Protocol
12 OSPF Open SPF-Based Routing Protocol
22 AP2 AppleTalk Phase 2
23 ASRT Adaptive Source Routing Transparent Enhanced Bridge
26 DLS Data Link Switching
27 XTP X.25 Transport Protocol
28 APPN Advanced Peer-to-Peer Networking [HPR]
30 APPN Advanced Peer-to-Peer Networking [ISR]
```

```
Num Name Feature
2 MCF MAC Filtering
```

```
16 Networks:
Net Interface MAC/Data-Link Hardware State
0 TKR/0 Token-Ring/802.5 Token-Ring Up
1 TKR/1 Token-Ring/802.5 Token-Ring Up
2 TKR/2 Token-Ring/802.5 Token-Ring Up
3 TKR/3 Token-Ring/802.5 Token-Ring Up
4 Eth/0 Ethernet/IEEE 802.3 Ethernet Up
5 Eth/1 Ethernet/IEEE 802.3 Ethernet Up
6 Eth/2 Ethernet/IEEE 802.3 Ethernet Up
```

7	Eth/3	Ethernet/IEEE 802.3	Ethernet	Up
8	Eth/4	Ethernet/IEEE 802.3	Ethernet	Up
9	Eth/5	Ethernet/IEEE 802.3	Ethernet	Up
10	FR/0	Frame Relay	V.35/V.36	Up
11	X25/0	X.25	V.35/V.36	Up
12	PPP/0	Point to Point	V.35/V.36	Up
13	PPP/1	Point to Point	V.35/V.36	Up
14	PPP/2	Point to Point	V.35/V.36	Up
15	PPP/3	Point to Point	V.35/V.36	Up

4. **GWCON network** コマンドと監視したいインターフェースの番号を入力する。下に例を挙げます。

```
+ network 11
X.25>
```

この例では、X.25 コンソール・プロンプトがコンソールに表示されます。ここで X.25 コンソール・コマンドを入力して、X.25 インターフェースに関する情報を表示させることができます。

ネットワーク・インターフェースの監視: 2216 のネットワーク・インターフェースの監視についての詳しい情報は、本書の該当する章を参照してください。

フィーチャーの構成および操作プロセスへのアクセス

マルチプロトコル・アクセス・サービス・フィーチャーの構成プロセスおよび操作プロセスにアクセスする場合に役立てていただくために、ここでは以下の手順の両方について概説します。

フィーチャー・プロセスへのアクセス

プロトコル構成プロセスおよびネットワーク・インターフェース構成プロセス以外の、特定のマルチプロトコル・アクセス・サービス・フィーチャーに関する構成コマンドにアクセスする場合は、CONFIG プロセスから **feature** コマンドを使用します。

プロトコル・コンソール・プロセスおよびネットワーク・インターフェース・コンソール・プロセス以外の、特定のフィーチャーに関するコンソール・コマンドにアクセスする場合は、GWCON プロセスから **feature** コマンドを使用します。

使用しているソフトウェア・リリースで使用可能なフィーチャーのリストを表示させるには、**feature** コマンドの後に疑問符を入力します。下に例を挙げます。

```
Config> feature ?
WRS
BRS
MCF
TSF
Feature name or number [1] ?
```

特定のフィーチャーの構成プロンプトまたは操作プロンプトにアクセスする場合は、Config> プロンプトまたは + (GWCON) プロンプトで、それぞれ **feature** コマンドを入力し、その後続けてフィーチャー番号または短縮名を入力します。下に例を挙げます。

```
Config> feature mcf
MAC filtering user configuration
Filter Config>
```

98ページの表9 は、使用できるフィーチャーの番号と名前をリストしています。

あるフィーチャーに関して構成プロンプトまたは操作プロンプトにアクセスした後は、そのフィーチャーに関する特定のコマンドの入力を開始して構いません。直前のプロンプト・レベルに戻るには、フィーチャーのプロンプトで **exit** コマンドを入力します。

プロトコルの構成および操作プロセスへのアクセス

ここでは、プロトコルの構成プロセスおよび操作プロセスにアクセスする方法について説明します。

プロトコル構成プロセスに入る

CONFIG> プロンプトから、必要なプロトコル構成プロセスに入るには、次のようにします。

1. CONFIG> プロンプトで **list configuration** コマンドを使用して、ソフトウェアのコピーとして購入したプロトコルの番号と名前を表示する。 **list configuration** コマンドの出力例については、99 ページを参照してください。
2. Config> プロンプトで、構成したいプロトコルの番号と短縮名（たとえば、IP、IPX、および ARP）を指定して **protocol** コマンドを入力する。プロトコル番号と短縮名は **list configuration** コマンドの画面から入手します。次の例では、IP プロトコル構成プロセスにアクセスするためのコマンドが入力されています。

```
Config> protocol IP
```

または

```
Config> protocol 0
```

これにより、プロトコル構成プロンプトがコンソールに表示されます。次の例は、IP プロトコル構成プロンプトを示しています。

```
IP config>
```

これで、このプロトコルの構成コマンドの入力を開始することができます。特定のプロトコル構成コマンドの詳細については、**プロトコルの構成と監視 解説書** の該当するプロトコルのセクションを参照してください。

要約すると、**protocol** コマンドを使用すると、ルーターに導入されているプロトコル・ソフトウェアの構成プロセスに入ることができます。 **protocol** コマンドは、プロトコルのコマンド・プロセスに入ります。 **protocol** コマンドを入力すると、指定されたプロトコルのプロンプトが表示されます。このプロンプトから、そのプロトコル特定のコマンドを入力できます。

プロトコル操作プロセスに入る

GWCON プロンプトからプロトコル・コンソール・プロセスに入るには、次のようにします。

1. GWCON プロンプトで **configuration** コマンドを入力して、ルーターに構成されているプロトコルとネットワークを表示する。下に例を挙げます。

```
+configuration
```

```
Multiprotocol Access Services
```

```
2216-MAS Feature 2822 V3.2 Mod 0 PTF 0 RPQ 0 MAS.EF9 cc4_2a
```

```
Num Name Protocol
0 IP DOD-IP
3 ARP Address Resolution
4 DN DNA Phase IV
6 VIN Banyan Vines
7 IPX NetWare IPX
10 BGP Border Gateway Protocol
11 SNMP Simple Network Management Protocol
12 OSPF Open SPF-Based Routing Protocol
22 AP2 AppleTalk Phase 2
23 ASRT Adaptive Source Routing Transparent Enhanced Bridge
26 DLS Data Link Switching
27 XTP X.25 Transport Protocol
28 APPN Advanced Peer-to-Peer Networking [HPR]
30 APPN Advanced Peer-to-Peer Networking [ISR]
```

```
Num Name Feature
2 MCF MAC Filtering
```

```
16 Networks:
```

Net	Interface	MAC/Data-Link	Hardware	State
0	TKR/0	Token-Ring/802.5	Token-Ring	Up
1	TKR/1	Token-Ring/802.5	Token-Ring	Up
2	TKR/2	Token-Ring/802.5	Token-Ring	Up
3	TKR/3	Token-Ring/802.5	Token-Ring	Up
4	Eth/0	Ethernet/IEEE 802.3	Ethernet	Up
5	Eth/1	Ethernet/IEEE 802.3	Ethernet	Up
6	Eth/2	Ethernet/IEEE 802.3	Ethernet	Up
7	Eth/3	Ethernet/IEEE 802.3	Ethernet	Up
8	Eth/4	Ethernet/IEEE 802.3	Ethernet	Up
9	Eth/5	Ethernet/IEEE 802.3	Ethernet	Up
10	FR/0	Frame Relay	V.35/V.36	Up
11	X25/0	X.25	V.35/V.36	Up
12	PPP/0	Point to Point	V.35/V.36	Up
13	PPP/1	Point to Point	V.35/V.36	Up
14	PPP/2	Point to Point	V.35/V.36	Up
15	PPP/3	Point to Point	V.35/V.36	Up

2. 構成情報に表示されている必要なプロトコルのプロトコル番号と短縮名を指定して、GWCON **protocol** コマンドを入力する。

次の例では、IP プロトコル構成プロセスにアクセスするためのコマンドが入力されています。

```
+ protocol 0
```

または

```
+ protocol IP
```

これにより、プロトコル・コンソール・プロンプトがコンソールに表示されます。次の例は、IP プロトコル・コンソール・プロンプトを示しています。

```
IP>
```

これで、このプロトコルのコマンドを入力し始めることができます。特定のプロトコル・コンソール・コマンドの詳細については、**プロトコルの構成と監視 解説書**の該当するプロトコルのセクションを参照してください。

GWCON および CONFIG コマンド行のコマンド活動記録

コマンド活動記録には、ユーザーが GWCON (Talk 5) または CONFIG (Talk 6) コマンド行メニューから入力したコマンドが、最大で最後の 50 個が入っています。

逆方向および順方向の検索キーを使用して、以前に入力したコマンドを再度呼び出すことができます。また、熟練したユーザー向けに、一連の特定コマンドを反復して使用できる機能も用意されています。

コマンド活動記録内のコマンドの反復

GWCON または CONFIG メニューの任意のコマンド行プロンプトで **Ctrl-B** (逆方向) または **Ctrl-F** (順方向) を押すと、現行コマンド行がコマンド活動記録内の前のコマンドまたは次のコマンドで置き換えられます。コマンド活動記録は、GWCON と CONFIG の両方に共通です。つまり、GWCON メニューで入力したコマンドを CONFIG 内から検索したり、CONFIG メニューで入力したコマンドを GWCON から検索するといったことが可能です。

コマンド活動記録には、最新に入力されたコマンドが、最大で最後の 50 個が入っています。リスタート以後に入力したコマンドが 3 つしかない場合は、**Ctrl-F** または **Ctrl-B** を押すと、この 3 つのコマンドだけが循環します。これまでに入力したコマンドがない場合は、**Ctrl-F** または **Ctrl-B** を押すと、『ベル』が鳴ります。これは 1 行分のテキストの先頭を超えて後退を試みたときに鳴るベルと同じものです。

注: **Ctrl-U** を押してコマンドを打ち切った場合は、そのコマンドがコマンド活動記録に入ることはありません。

2 つの類似したコマンドを入力する場合

```
display sub les
```

```
display sub lec
```

次のようにします。

display sub les と入力して、**Enter** を押す

BACKWARD を表す **Ctrl-B** を押すと、現在行が次のように置き換わる

```
display sub les
```

後退 キーを押し、『s』を『c』で置き換えて

```
display sub lec
```

として、**Enter** キーを押す

コマンド活動記録内の一連のコマンドの反復

特定の一連の GWCON または CONFIG コマンドを簡単に反復使用することができる追加機能が提供されています。コマンド活動記録の中の C1, C2,...,Cn を反復シーケンスと呼びます。複数のコマンドを必要とする特定のタスクを繰り返す必要がある場合は、単に **Ctrl-B** および **Ctrl-F** を使用するよりも、この機能の方が便利ことがあります。**Ctrl-R** (REPEAT) を入力して、反復シーケンスの開始をコマンド C1 に設定します。連続して **Ctrl-N** (NEXT) を入力して、反復シーケンス内

の次のコマンド (複数の場合もある) を検索します。コマンドは自動的に入力されるのではなく、現行のコマンド行に置かれるので、ユーザーはそのコマンドを修正したり、入力したりすることができます。

望ましい振る舞いの反復シーケンスを生成する場合は、最初に **Ctrl-N** (NEXT) を使用して最初に検索されるコマンドは、**Ctrl-R** (REPEAT) を使用して反復シーケンスの開始を設定した方法によって異なります。

Ctrl-R による反復シーケンスの開始の設定は、次の 2 通りの方法で行うことができます。

1. C1 を最初に入力するときに設定する
2. **Ctrl-B** または **Ctrl-F** を用いて C1 をコマンド活動記録から検索するときに設定する。

コマンドの入力時に反復シーケンスを開始

C1 コマンドの入力時に **Ctrl-R** を入力し、次にコマンド C2、C3、...、Cn を入力した場合は、**Ctrl-N** を入力すると、コマンド行にコマンドが C1, C2, ... Cn, C1, C2, ... Cn、 C1, ... と連続的に置かれます。

例 1 では、反復シーケンスの開始は、最初のコマンドの入力時に設定されています。ユーザーは事前に、GWCON に入力するのと同じコマンドを CONFIG で反復する必要があることを知っています。

例 1

1. シーケンスの最初のコマンドを入力するとき、**Ctrl-R** (REPEAT) を使用して反復シーケンスの開始を設定し、

```
* talk 5
+event Ctrl-R
```

次に、**Enter** キーを押して反復シーケンスの開始を設定する。

2. シーケンス内の後続のコマンドを入力する。

```
Event Logging System user console
ELS>display sub les
ELS>display sub lec
ELS>exit
+
```

3. これと同じコマンドを CONFIG に入力するために、

Ctrl-P (デフォルトの OPCON インターセプト文字) を押して、CONFIG に進む。

```
+--press Ctrl-P-
* talk 6
Config>Ctrl-N for NEXT to retrieve the start of
this sequence-
Config>event Enter
Event Logging System user configuration
ELS config>Ctrl-N for NEXT to retrieve the next
command in sequence-
ELS config>display sub les Enter
ELS config>Ctrl-N for NEXT to retrieve the next
command in sequence-
ELS config>display sub lec Enter
```



```
ELS config>Ctrl-N for NEXT to retrieve the next
command in sequence-
ELS config>exit Enter
Config>
```

すべてのコマンドの入力後に反復シーケンスを開始

これに対して、最初に C1、C2、...、Cn を入力し、**Ctrl-B** または **Ctrl-F** を用いて C1 を検索した場合は、**Ctrl-R** を入力し、**Ctrl-N** を入力すると、コマンド行にコマンドが C2,..., Cn, C1、C2,..., Cn, C1、...、Cn のように連続的に置かれます (例 2 を参照)。C1 が検索された時点では、C1 はすでにコマンド行に置かれていて、最初の **Ctrl-N** で再度呼び出す必要はないので、最初の C1 はバイパスされます。

例 2 では、すべてのコマンドを入力した後で、反復するシーケンスの最初のコマンドを取り出します。一連のコマンドが GWCON で入力されており、同じシーケンスを CONFIG で反復する必要があります。

例 2

1. 以下のコマンドを GWCON に入力する。

```
* talk 5
+event
Event Logging System user console
ELS>display sub les
ELS>display sub lec
ELS>exit
+
```

2. これと同じコマンドを CONFIG に入力するために、**Ctrl-P** (デフォルトの OPCON インターセプト文字) を押して、CONFIG に進む。

```
+Ctrl-P-
*talk 6
Config>Ctrl-B four times to retrieve the start of
the four command sequence in this example-
Config>event
Config>event Ctrl-R for REPEAT to set the start of
the repeat sequence-
Config>event Enter
Event Logging System user configuration
ELS config>Ctrl-N for NEXT to retrieve the next
command in sequence-
ELS config>display sub les Enter
ELS config>Ctrl-N for NEXT to retrieve the next
command in sequence-
ELS config>display sub lec Enter
ELS config>Ctrl-N for NEXT to retrieve the next
command in sequence-
ELS config>exit Enter
Config>
```

33ページの『第4章 OPCON プロセス』で説明されている OPCON **intercept** コマンドを使用して、OPCON インターセプト文字をデフォルト文字の **Ctrl-P** からコマンド活動記録制御文字の 1 つ、つまり **Ctrl-B**、**Ctrl-F**、**Ctrl-R**、または **Ctrl-N** に定義し直した場合は、OPCON インターセプト文字が優先されます。たとえば、インターセプト文字が **Ctrl-F** に変更された場合でも、**Ctrl-F** でコマンド活動記録内の順方向の検索が行われることはなく、ユーザーは OPCON プロンプト (*) に戻されることになります。

第3章 コマンド行インターフェースからファームウェアへのアクセス

この章では、Firmware and Operational コマンド・プロンプトから設定できるブート・オプションについて説明します。ファイル転送およびファイル管理の説明については、*IBM 2216 Nways* マルチアクセス・コネクタ 導入および初期構成の手引きを参照してください。

2216 は、内蔵イメージ・バンクの 1 つからブートするように設計されています。ハード・ディスクが搭載されているので、2216 には装置の IML またはブートに使用できるイメージ・バンクが 2 つあります。また 2216 には、在席モードまたは不在モードでの立ち上げを選択できるオプションもあります。在席モードでは、シリアル・ポートに接続されたコンソールでユーザーと直接対話する必要があります。

装置は、ハード・ディスク (バンク A およびバンク B と呼ばれる) からブートすることができます。

ファームウェア・プロンプトへのアクセス

ルーター のブートにあたっては、その前に以下の点に注意してください。

- 2216 に接続された端末または IP ワークステーションが必要になります。これは、シリアル・ポートを通して直接接続された VT100 TTY 装置でも構いません。IP ワークステーションは、2216 内に接続するための SLIP を使用して、接続することができます。デフォルトの 2216 IP アドレスは 10.1.1.2 であり、ワークステーション・アドレスは 10.1.1.3 になるはずです。

重要：ファームウェア・プロンプトにアクセスする場合は、2216 のブートを停止することができます。これを停止するためには、TTY コンソールがシリアル・ポートに直接接続されていることが必要です。2216 がブート・シーケンスを開始している場合は、コンソールから **Ctrl-C** を押して、ブート・シーケンスを中断します。

ブートを制御する別の方法として、2216 が在席モードで立ち上がるように構成する方法があります。在席モードは、ファームウェア・コマンド・セットから構成できます。

2216 で使用可能なブート・オプション

2216 は、不在モード用として構成することができます。不在モードでは、ロードするロード・イメージおよび構成を選択しておく必要があります。2 つのバンクが用意されているので、その中から選択することができます。イメージ・バンクの構造は、次のとおりです。

- IMAGE - イメージの状態
- CONFIG 1 - 構成の状態
- CONFIG 2 - 構成の状態
- CONFIG 3 - 構成の状態
- CONFIG 4 - 構成の状態

ファイルの状態については、55ページの『List』を参照してください。

在席モード

2216 が在席モードで立ち上がるように構成されているときは、ファームウェア・コマンド・セットにアクセスすることができます。このコマンド・レベルから、イメージおよび構成をロードするイメージ・バンクを選択できます。これで、新しい構成ファイルまたはイメージ・ファイルをロードすることが可能になります。この接続は、TTY 接続または Telnet 接続です。TTY 接続では Xmodem プロトコルを使用して、また IP 接続では TFTP を使用して、ファイルを転送することができます。

重要: リリース 2 以降では、複数のロード・モジュールで 1 つの装置ロードが構成されています。XMODEM を使用してロードをバンクに転送する場合は、ファイルを個別に転送する必要があります。以下のことが適用されます。

1. LML.ld を最初に転送します。
2. そのロードを構成しているすべてのファイルが正常に転送されたことを確認する必要があります。ファイルの転送中に誤りが発生すると、『ERROR WRITING FILE』が入っているメッセージ・ボックスを受け取ります。これを受け取らなかった場合は、ファイルが正常に転送されたもの見なすことができます。
3. すべてのファイルが転送されると、バンクの状態が『Corrupt』から『Avail』に変わります。

在席モードでは、**F9** または **<Esc>9** を押してオペレーティング・システムをスタートすることによって、2216 のブートを開始できます。

不在モード

これが 2216 の通常モードです。ユーザーの選択に応じて、Active、Local、または Pending のイメージおよび構成で立ち上がります。

第4章 OPCON プロセス

オペレーター・コンソール・プロセス (OPCON) は、ルーター・ソフトウェア・ユーザー・インターフェースのルート・レベルのプロセスです。OPCON の主な機能は、どのプロセスがコンソールに接続されるかを制御することです。OPCON コマンドを使用して、以下のことが行えます。

- プロセスからの出力を操作する
- インターセプト文字を変更する
- ルーター・メモリーの使用状況に関する情報を表示する
- ルーター・ソフトウェアを再ロード (リブート) する
- 他のルーターまたはホストに Telnet する
- すべてのルーター・プロセスに関する情報を表示する
- 2 次レベルでプロセスと通信する
- MOS システム・デバッグ・ツールにエスケープする

第5章 OPCON の使用

この章では、OPCON インターフェースの構成およびオペレーショナル・コマンドについて説明します。この章は以下の節に分かれています。

- 『OPCON プロセスへのアクセス』
- 『OPCON コマンド』

OPCON プロセスへのアクセス

ルーターを初めて開始したときは、ブート・メッセージがコンソール上に表示されます。次いで OPCON プロンプト (*) がコンソール上に表示されて、OPCON プロセスがアクティブで、コマンドを受け入れることができる状態であることが示されます。

OPCON プロセスでは、ルーターの動作パラメーターのすべてを構成、変更、および監視することができます。OPCON プロセスでは、ルーターはデータ・トラフィックを転送しています。ルーターがブートされて OPCON に入ると、著作権ロゴとアスタリスク (*) プロンプトが表示されます。これが OPCON (OPERator's CONsole (オペレーターのコンソール)) プロンプトで、第 2 レベルのプロセスへのアクセスを可能にするメイン・ユーザー・インターフェースです。

OPCON で行われるルーターの動作パラメーターの変更の一部のものは、ルーターを再初期化しなくても、即時に有効になります。変更が有効にならない場合は、* プロンプトで **reload** コマンドを使用します。

* プロンプトでは、使用できるコマンド・セットが広範囲にわたって用意されているので、それを入力してさまざまな内部ソフトウェア・プロセスの状況を検査し、ルーターのインターフェースおよびパケット転送機能のパフォーマンスを監視し、さまざまな動作パラメーターを構成することができます。

OPCON コマンド

この節では OPCON コマンドについて説明します。各コマンドごとに、説明、構文の要件、および例を示します。OPCON コマンドの要約を表4 に示します。これらのコマンドを使用するには、OPCON プロセスにアクセスし、OPCON プロンプト (*) で該当のコマンドを入力します。

表 4. OPCON コマンド

コマンド	機能
? (Help)	このコマンド・レベルで使用可能なコマンドをすべて表示するか、特定のコマンドに関するオプション (ただし、選択可能な場合) をリストします。12ページの『ヘルプを得る』を参照してください。
Diags	装置の状態、およびハードウェア・テスト・ログとハードウェア誤りログの内容を表示します。
Divert	プロセスからの出力をコンソールまたは他の端末に送信します。
Flush	プロセスからの出力を廃棄します。
Halt	プロセスからの出力を中断します。

表 4. OPCON コマンド (続き)

コマンド	機能
Intercept	デフォルトの OPCON インターセプト文字を設定します。
Logout	リモート・コンソールからログアウトします。
Memory	ルーターのメモリー使用量を報告します。
Reload	ルーター・ソフトウェアを再ロードします。
Status	すべてのルーター・プロセスに関する情報を示します。
Talk	別のルーター・プロセスに接続し、そのコマンドの使用を可能にします。
Telnet	別のルーターに接続します。

Diags

diags コマンドは、診断メインメニューを表示させる場合に使用します。診断メニューを使用して、ハードウェア・アダプターまたはポートの使用可能化、使用不可化、およびテストを行うことができます。診断メニューの画面では、種々のオプションのヘルプ情報と、利用可能な状態情報を入手できます。

“b” (back (後退)) キーを使用すれば、直前のメニューに戻ることができます。“e” (exit (終了)) キーを使用すると、診断を終了して、OPCON コマンド・プロンプトに戻ります。

診断サポートに関する詳細については、2216 用の *Service and Maintenance Manual* を参照してください。

構文：

diags

Divert

divert コマンドは、指定したプロセスからの出力を指定した端末に送信する場合に使用します。このコマンドを使用すると、複数のプロセスの出力を同じ端末に着信先変更し、出力を同時に見ることができます。**divert** コマンドが一般的に使用されるのは、MONITR 出力メッセージを特定の端末に着信先変更する場合です。ルーターで着信先変更が許されるのは、特定のプロセスだけです。

このコマンドを入力した後に PID と tty# (出力端末の番号) を入力します。これらの値は、OPCON status コマンドを使用して入手することができます。端末番号は、ローカル・コンソール (tty0) またはリモート・コンソール (tty1, tty2) の 1 つのいずれかです。次の例は、MONITR プロセス (2) で生成されたイベント・ログ・システム・メッセージをリモート・コンソール tty1 (1) に送信する場合を示しています。

イベント・メッセージは、コマンドを入力している最中であっても、即時に表示されます。コマンドが混同されるのを防止するために、ディスプレイとキーボードにはそれぞれ別々のバッファが用意されています。次の例は、**divert 2 1** コマンドの実行後、MONITR プロセスが TTY1 に接続されていることを示しています。出力を停止したい場合は、**halt 2** と入力します。**halt** コマンドについては、37ページの『Halt』で説明します。

構文：

divert *pid tty#*

例 : **divert 2 1**

Copyright Notices:
Copyright IBM Corp. 1994, 1997
MOS Operator Control

* **divert 2 1**

```
* status
Pid Name      Status TTY  Comments
1  COpCN1     IOW  TTY0 gzs
2  Monitr     IDL  TTY0
3  Tasker     RDY  --
4  MOSDBG     DET  --
5  CGWCon     DET  --
6  Config     DET  --
7  ELSCon     DET  --
8  ROpCN1     IDL  TTY1
9  ROpCN2     RDY  TTY2 j1g@128.185.40.40
```

Flush

flush コマンドは、MONITR プロセスの出力バッファを消去する場合に使用します。一般的に、このコマンドは MONITR の FIFO バッファの内容を表示する前に使用され、メッセージがスクロールして画面から消えるのを防止します。累積されたメッセージは廃棄されます。

ルーターで着信先変更が許されるのは、特定のプロセスだけです。 *pid* および *tty#* を入手する場合は、OPCON **status** コマンドを使用します。次の例では、**flush 2** コマンドの実行後、MONITR プロセスの出力は SNK (プロセスはフラッシュされた) に送信されます。

構文 :

flush *pid*

例: **flush 2**

```
* status
Pid Name      Status TTY  Comments
1  COpCN1     IOW  TTY0 gzs
2  Monitr     IDL  SNK
3  Tasker     RDY  --
4  MOSDBG     DET  --
5  CGWCon     DET  --
6  Config     DET  --
7  ELSCon     DET  --
8  ROpCN1     IDL  TTY1
9  ROpCN2     RDY  TTY2 j1g@128.185.40.40
```

Halt

halt コマンドは、指定したプロセスからの後続の出力を、そのプロセスに対して **divert**、**flush**、または **talk** OPCON コマンドが出されるまで、すべて中断する場合に使用します。ルーターは、すべてのプロセスを着信先変更できるわけではありません。**Halt** は、プロセスからの出力のデフォルトの状態です。このコマンドの **PID** を入手する場合は、OPCON **status** コマンドを使用します。次の例では、**halt 2** コマンドの実行後は、MONITR プロセスは TTY1 に接続されていません。イベント・メッセージも表示されなくなります。

構文 :

halt *pid*

例 : halt 2

```
* status
Pid Name      Status TTY  Comments
1  COpCN1     IOW  TTY0 gzs
2  Monitr     IDL  --
3  Tasker     RDY  --
4  MOSDBG     DET  --
5  CGWCon     DET  --
6  Config     DET  --
7  ELSCon     DET  --
8  ROpCN1     IDL  TTY1
9  ROpCN2     RDY  TTY2 jlg@128.185.40.40
```

Intercept

intercept コマンドは、OPCON インターセプト文字を変更する場合に使用します。 インターセプト文字は、OPCON プロセスに戻るために、他のプロセスから入力する文字です。デフォルトのインターセプト・キーの組み合わせは **Ctrl-P** です。

インターセプト文字は制御文字であることが**必須**です。 ^ (シフト 6) 文字に続けて、インターセプト文字として使用する英字を入力します。

注: インターセプト文字は、Return キーまたは印刷可能文字に設定しないでください。OPCON インターセプト文字をデフォルトの **Ctrl-P** からコマンド活動記録制御文字の 1 つ (**Ctrl-B**、**Ctrl-F**、**Ctrl-R**、または **Ctrl-N**) に変更しても、OPCON インターセプト文字が優先されます。

たとえば、インターセプト文字を **Ctrl-F** に変更した場合でも、**Ctrl-F** がコマンド活動記録を順方向に検索することはなく、OPCON プロンプト (*) に戻るようになります。前に入力した GWCON または CONFIG コマンドにアクセスする方法については、27ページの『GWCON および CONFIG コマンド行のコマンド活動記録』を参照してください。

構文 :

intercept *character*

例 : intercept ^u

この例では、インターセプト文字は **Ctrl-U** になっています。

Logout

logout コマンドを使用すると、logout コマンドを入力したユーザーの現行セッションが終了します。コンソール・ログインが使用可能になっている場合、このコマンドにより、次のユーザーは許可ユーザー ID/パスワードの組み合わせを使用してログインすることが必要になります。コンソール・ログインが使用可能になっていない場合は、OPCON プロンプトが再表示されます。

構文 :

logout

Memory

memory コマンドは、ルーターのヒープ・メモリーの全体的な使用量に関する情報を入力し、表示させる場合に使用します。この表示を見れば、ルーターが効率的に使用されているかどうかを判断することができます。メモリー使用状況の例は、図4を参照してください。

talk 5 によるメモリー使用量の場合は、127ページの『Memory』を参照してください。

構文：

memory

例：

```
memory
Number of bytes:  Busy = 319544, Idle = 1936, Free = 1592
```

Busy 現在割り振られているバイト数を示します。

Idle 以前に割り振られていたが解放され、再利用できるバイト数を示します。

Free 初期空き記憶域から割り振られたことのないバイト数を示します。

注: Idle と Free メモリーの和が、使用可能な合計ヒープ・メモリーに等しくなります。



図4. メモリー使用状況

Reload

reload コマンドは、ルーター・ソフトウェアの新規コピーをロードすることによって、ルーターをリブートする場合に使用します。リモート・コンソールからこのコマンドを使用すると、ルーターのところに行かなくても、新規ソフトウェア・ロードを導入することができます。このコマンドは、ルーターがダンプを取らないこと(そのように構成されている場合)を除けば、リセット・ボタンが押されたときと同じ機能を実行します。再ロードが有効になる前に、再ロードの確認を求めるプロンプトが出ます。構成変更を保管しなかった場合にもプロンプトが出されます。

構文：

reload

例 :

reload

Are you sure you want to reload the gateway (Yes or No)?

Status

status コマンドは、すべてのルーター・プロセスに関する情報を表示させる場合に使用します。 **status** コマンドの後に **PID** を入力することによって、必要なプロセスだけを選択して、その状態を見ることができます。 次の例は、全状態表示を示しています。

構文 :

status *pid*

例 : **status**

Pid	Name	Status	TTY	Comments
1	COpCN1	IOW	TTY0	
2	Monitr	IDL	--	
3	Tasker	RDY	--	
4	MOSDBG	DET	--	
5	CGWCon	IOW	--	
6	Config	IOW	TTY1	
7	ELSCon	DET	--	
8	ROpCN1	IOW	TTY1	128.185.46.101
9	ROpCN2	RDY	TTY2	128.185.46.104

Pid PID を指定します。これは **OPCON** との間でトークするためのプロセスであり、特定プロセスの状態に関する情報を要求する **STATUS** コマンドの引き数として使用することができます。

Name プロセス名を指定します。通常は、プロセスで実行中のプログラムの名前に対応しています。

Status

次のいずれか 1 つを指定します。

IDL プロセスがアイドルで、何らかの外部事象 (非同期入出力など) が完了するのを待っています。

RDY プロセスがレディー状態で、CPU の使用を待っていることを示します。

IOW プロセスが同期入出力 (通常は、予期する標準入力) が完了するのを待っています。

DET プロセスの出力が表示可能な状態にあり、プロセスはディスプレイ・コンソールに接続されるのを待っているか、その出力が指定コンソールに着信先変更されるのを待っていることを示しています。

FZN プロセスが誤りのために凍結されていることを示します。これは通常、プロセスが、障害のある装置または間違っ構成されている装置を使おうとしていることを意味しています。

TTY_n プロセスが現在接続されている出力端末 (もしあれば) を指定します。

TTY0 ローカル・コンソール

TTY1 または **TTY2**

Telnet コンソール

SNK プロセスはフラッシュされた。

2 つのダッシュ (--)
プロセスは停止された。

Comments

ユーザーが Telnet を使用してログインするときに提供した、ユーザーのログイン IP アドレスを指定します (ROpCon)。

Talk

talk コマンドは、GWCON、MONITR、または CONFIG など、他のプロセスに接続する場合に使用します。新しいプロセスに接続した後は、そのプロセスに特定のコマンドを送信し、そのプロセスから出力を受信することができます。TASKER または OPCON プロセスにトークすることはできません。前に入力した GWCON または CONFIG コマンドにアクセスする方法については、27ページの『GWCON および CONFIG コマンド行のコマンド活動記録』を参照してください。

PID を入手する場合は、OPCON **status** コマンドを使用します。第 2 レベルのプロセス (たとえば、CONFIG など) に接続した後で、* プロンプトに戻る場合は、インターセプト文字 **Ctrl-P** を使用します。

構文 :

talk *pid*

例 : **talk 5**

第 3 レベルのプロセス (たとえば、IP Config または IP) を使用していて、第 2 レベルに戻る場合は、**exit** コマンドを使用します。

Telnet

telnet コマンドは、別のルーターまたはリモート・ホストにリモート接続する場合に使用します。唯一のオプション・パラメーターは、エミュレートしたい端末タイプです。

telnet コマンドは、IPv4 または IPv6 アドレスとともに使用することができます。

ルーターは最大 5 つの Telnet セッションを持つことができます。2 つのサーバー (ルーターへのインバウンド) と 3 つのクライアント (ルーターからのアウトバウンド) です。

注: 純然たるブリッジング環境で Telnet を使用する場合は、ホスト・サービスを使用可能にします。

構文 :

telnet *ip-address terminal-type*

例 1: **telnet 128.185.10.30** または **telnet 128.185.10.30 23** または **telnet 128.185.10.30 vt100**

```
Trying 128.185.10.30 ...
Connected to 128.185.10.30
Escape character is '^']'
```

例 2: telnet 1:9::10

```
Trying 1:9::10 ...
Connected to 1:9::10
Escape character is '^']'
```

存在しない IP アドレスに Telnet すると、ルーターは次のように表示します。

```
Trying 128.185.10.30 ...
```

Telnet コマンド・モードに入るには、エスケープ文字列 (どのプロンプトでも **Ctrl-]**) を入力します。

```
telnet>
```

ルーターに Telnet するときは、次のようにします。

- コマンド行に入力した最後の文字を削除するには ← **後退** キーを押す。

注: VT100 端末を使用しているときは、← **後退** キーを押すと、目に見えない文字が挿入されるため、このキーは押さないようにしてください。最後の文字を削除する場合は、**Delete** キーを押します。

- コマンド行の入力全体を削除して、コマンドを再入力できるようにする場合は、telnet> プロンプトで **Ctrl-U** を押す。

Telnet コマンド・モードは、以下のサブコマンドから構成されます。

close 現行接続をクローズします。

display

動作パラメーターを表示します。

mode 逐次行モードまたは逐次文字モードに入ろうと試みます。

open サイトに接続します。

quit Telnet を終了します。

send 特殊文字を送信します (続く場合は 'send ?')。

set 動作パラメーターを設定します (続く場合は、'set ?')。

status 状態情報を印刷します。

toggle 動作パラメーターを切り替えます (続く場合は、'toggle ?')。

z Telnet を中断します。

? ヘルプ情報を印刷します。

status および **send** サブコマンドでは、ユーザーが別のホストに接続されているかどうかに応じて、2 つの応答のうちのいずれか一方になります。下に例を挙げます。

ホストに接続されている場合:

```
telnet> status
Connected to 128.185.10.30 Operating in character-at-a-time mode.
```

```
Escape character is '^'].
```

```
telnet> send ayt
```

注: send コマンドが現在サポートするのは ayt だけです。

ホストに接続されていない場合:

```
telnet> status  
Need to be connected first.  
  
telnet> send ayt  
  
Need to be connected first.
```

リモート・ホストへの接続をクローズし、Telnet セッションを終了する場合は、**close** サブコマンドを使用します。**telnet** コマンド・モードを終了し、接続をクローズし、Telnet セッションを終了する場合は、**quit** サブコマンドを使用します。

```
telnet> close
```

または

```
telnet> quit  
  
logout  
*
```

第2部 基本サービスの概要と構成と使用

第6章 BOOT Config の使用による変更管理の実行

この章では、ブート/ダンプ構成プロセスについて説明します。この章は以下の節に分かれています。

- 『変更管理の概要』
- 『トリビアル・ファイル転送プロトコル (TFTP) の使用』
- 48ページの『特定時刻にイメージをロード』

変更管理の概要

変更管理とは、IBM 2216 のソフトウェアおよび構成データを処理することをいいます。これには、以下のものが含まれます。

1. IBM 2216 との間でコードおよび構成を移動する。
2. IBM 2216 の持続記憶装置 (現在はディスク・ドライブとフラッシュ・メモリー) 上でコードおよび構成データを移動する。
3. 特定の組み合わせのソフトウェアと構成を選択してアクティブにする。

変更管理が使用可能になるためには、**boot** コマンドを `Boot config>` プロンプト (`talk 6`) で入力するか、またはファームウェア・ボックスが、ハード・ディスクまたはコンパクト・フラッシュ に実行可能なソフトウェアが入っていない (つまり、`talk 6` にアクセスできない) 状態である必要があります。

IBM 2216 のコードおよび構成データの記憶資源は、“システム・バンク” (略して、バンクという) と呼ばれる区域に分割され、各区域には、それぞれ 1 つのバージョンの操作コードとそのリリースのコードに関連する他のすべてのファイルが入っています。各バンクのソフトウェアには、最大 4 つの構成ファイルが関連付けられています。

IBM 2216 の一般的な変更管理モデルは、システムを現行レベルで稼働しながら、新規コードまたは構成データ (あるいは、その両方) を導入し、変更されたコードまたは構成データ・セットを後で活性化するというものです。何らかの理由で、新規コードまたは構成が予想どおりに機能しない場合は、前のバージョンの構成に戻すことができます。

トリビアル・ファイル転送プロトコル (TFTP) の使用

TFTP は、インターネット UDP プロトコル上で実行されるファイル転送プロトコルです。これが実装されると、IBM 2216 の不揮発性構成メモリー、イメージ・バンク、およびリモート・ホストの間で、TFTP ファイルの複数同時転送を行うことができます。

TFTP では、以下のことが可能です。

- サーバーから IBM 2216 への構成ファイルの GET
- IBM 2216 からサーバーへの構成ファイルの PUT

BOOT Config の使用

- サーバーから IBM 2216 へのロード・モジュールの GET
- IBM 2216 からサーバーへのロード・モジュールの PUT

TFTP 転送には、クライアント・ノードとサーバー・ノードが関与します。クライアント・ノードは、ネットワーク上に TFTP GET または PUT 要求を生成します。IBM 2216 はクライアント・ノードとして機能し、Boot config> プロセスの **tftp** コマンドを使用して、IBM 2216 コンソールから TFTP 要求を生成します。

クライアントは、サーバーのイメージ・バンクに保管されている構成ファイルまたはイメージ・ファイルのコピーを転送することができます。

サーバーは、TFTP 要求を受信してサービスする装置 (たとえば、パーソナル・コンピュータやワークステーション) です。IBM 2216 がサーバーとして機能する場合、転送はユーザーには透過的 (無関係) になります。進行中の転送を見たい場合は、ELS サブシステム TFTP メッセージ・ログを使用します。

特定時刻にイメージをロード

ユーザーに不都合な特定の日時に装置にロードしたい場合があります。 **timeload activate** コマンドを使用すると、指定した時刻に装置がロードを実行するように構成することが可能です。装置にスケジュールされているロード情報を表示したり、スケジュールされたロードを取り消したりするコマンドも用意されています。これらのコマンドについては、49ページの『変更管理構成コマンド』を参照してください。

第7章 変更管理の構成

この章では、変更管理構成コマンドについて説明します。この章は以下の節に分かれています。

- 『変更管理構成環境へのアクセス』
- 『変更管理構成コマンド』

変更管理構成環境へのアクセス

変更管理構成コマンド環境に入るには、CONFIG **boot** コマンドを使用します。ルーターのソフトウェアは、初期ロード時には OPCON プロセスで動作し、* プロンプトが表示されます。* プロンプトから、次のようにします。

1. **talk 6** と入力する。
2. Config> プロンプトで、**boot** と入力する。

CONFIG プロセスに戻るには、**exit** と入力します。

変更管理構成コマンド

この節では、変更管理構成コマンドについて説明します。各コマンドごとに、説明、構文の要件、および例を示します。表5 は、変更管理構成コマンドを要約しています。

変更管理構成環境にアクセスした後、Boot config> プロンプトで構成コマンドを入力します。

表 5. 変更管理構成コマンド

コマンド	機能
? (Help)	このコマンド・レベルで使用可能なコマンドをすべて表示するか、特定のコマンドに関するオプション (ただし、選択可能な場合) をリストします。12ページの『ヘルプを得る』を参照してください。
Add	オプションの記述を構成ファイルに追加します。
Copy	バンクとの間でブート・ファイルおよび構成ファイルを相互にコピーします。
Describe	保管されているロード・ファイル・イメージに関する情報を表示します。
Disable	さまざまな変更管理機能をオフにします。
Enable	さまざまな変更管理機能をオンにします。
Erase	保管されているイメージまたは構成ファイルを消去します。
List	構成ファイルに関する情報およびスケジュールされたロード情報を表示します。
Lock	装置が選択された構成を他の構成で上書きするのを防止します。
Set	使用するコード・バンクおよび構成を選択します。
TFTP	IBM 2216 とリモート・サーバーの間で TFTP ファイル転送を開始します。

表 5. 変更管理構成コマンド (続き)

コマンド	機能
Timedload	特定の日に時に装置にロードすることをスケジュールしたり、スケジュールされたロードを取り消したり、あるいはスケジュールされたロード情報を表示したりします。
Unlock	構成のロックを解除して、装置がその構成を更新できるようにします。
Update Firmware	2216 のバンク A またはバンク B のいずれかで受信した Firm.ld ロード・モジュールをインストールします。
Exit	直前のコマンド・レベルに戻ります。 13ページの『下位レベル操作環境を終了する』を参照してください。

Add

add コマンドは、オプションの記述を構成ファイルに追加するのに使用します。

構文 :

```
add configuration file description
load image description
```

例 : Boot config> **add**

```
+----- BankA -----+----- Description -----+----- Date -----+
| IMAGE - NONE          |                               | 01 Jan 1970 00:01 |
| CONFIG 1 - AVAIL     | test config for pubs         | 01 Jan 1970 01:26 |
| CONFIG 2 - AVAIL    * | test config for pubs         | 01 Jan 1970 01:13 |
| CONFIG 3 - AVAIL     |                               | 01 Jan 1970 01:39 |
| CONFIG 4 - AVAIL     |                               | 01 Jan 1970 01:52 |
+----- BankB -----+----- Description -----+----- Date -----+
| IMAGE - ACTIVE       |                               | 01 Jan 1970 00:30 |
| CONFIG 1 - AVAIL     | test config for pubs         | 01 Jan 1970 00:54 |
| CONFIG 2 - AVAIL     |                               | 01 Jan 1970 00:01 |
| CONFIG 3 - AVAIL     |                               | 01 Jan 1970 00:14 |
| CONFIG 4 - ACTIVE    * |                               | 01 Jan 1970 00:24 |
```

```
+-----+-----+-----+
* - Last Used Config      L - Config File is Locked
```

```
Select the source bank: (A, B): [A]
Select the source configuration: (1, 2, 3, 4): [1] 3
Enter the description of the file: () New config for today
```

Attempting to set description for bank A configuration 3.

Operation completed successfully.

```
Boot config>list
+----- BankA -----+----- Description -----+----- Date -----+
| IMAGE - NONE          |                               | 01 Jan 1970       |
| CONFIG 1 - AVAIL     | test config for pubs         | 01 Jan 1970 00:58 |
| CONFIG 2 - AVAIL    * | test config for pubs         | 01 Jan 1970 01:13 |
| CONFIG 3 - NONE      | New config for today         | 09 Jan 1970 00:58 |
| CONFIG 4 - AVAIL     |                               | 01 Jan 1970 01:05 |
+----- BankB -----+----- Description -----+----- Date -----+
| IMAGE - ACTIVE       |                               | 01 Jan 1970       |
| CONFIG 1 - AVAIL     | test config for pubs         | 01 Jan 1970 00:54 |
| CONFIG 2 - AVAIL     |                               | 01 Jan 1970 00:01 |
| CONFIG 3 - AVAIL     |                               | 01 Jan 1970 00:14 |
| CONFIG 4 - ACTIVE    * |                               | 01 Jan 1970 00:24 |
```

```
+-----+-----+-----+
* - Last Used Config      L - Config File is Locked
```

Auto-boot mode is enabled. Fast-boot mode is disabled.

Copy

copy コマンドは、バンクとの間で構成ファイルおよびロード・イメージを相互にコピーする場合に使用します。

構文 :

```
copy configuration file
load image
```

例 : Boot config>**copy load**

```
+----- BankA -----+----- Description -----+----- Date -----+
| IMAGE - AVAIL                |                               | 01 Jan 1970 00:01 |
| CONFIG 1 - AVAIL             | test config for pubs         | 01 Jan 1970 01:26 |
| CONFIG 2 - AVAIL *           | test config for pubs         | 01 Jan 1970 01:13 |
| CONFIG 3 - AVAIL             |                               | 01 Jan 1970 01:39 |
| CONFIG 4 - AVAIL             |                               | 01 Jan 1970 01:52 |
+----- BankB -----+----- Description -----+----- Date -----+
| IMAGE - ACTIVE                |                               | 01 Jan 1970 00:01 |
| CONFIG 1 - AVAIL             |                               | 01 Jan 1970 00:14 |
| CONFIG 2 - AVAIL             |                               | 01 Jan 1970 00:01 |
| CONFIG 3 - AVAIL             |                               | 01 Jan 1970 00:37 |
| CONFIG 4 - ACTIVE *          |                               | 01 Jan 1970 00:24 |
+-----+-----+-----+
* - Last Used Config      L - Config File is Locked

Select the source bank: (A, B): [A] b
Select the destination bank: (A, B): [B] a
Copy SW load image from: bank B
                        to: bank A.
```

Operation completed successfully.

例 : Boot config>**copy configuration**

```
+----- BankA -----+----- Description -----+----- Date -----+
| IMAGE - CORRUPT              |                               | 01 Jan 1970 00:01 |
| CONFIG 1 - AVAIL             | test config for pubs         | 01 Jan 1970 01:26 |
| CONFIG 2 - AVAIL *           | test config for pubs         | 01 Jan 1970 01:13 |
| CONFIG 3 - AVAIL             |                               | 01 Jan 1970 01:39 |
| CONFIG 4 - AVAIL             |                               | 01 Jan 1970 01:52 |
+----- BankB -----+----- Description -----+----- Date -----+
| IMAGE - ACTIVE                |                               | 01 Jan 1970 00:01 |
| CONFIG 1 - AVAIL             |                               | 01 Jan 1970 00:14 |
| CONFIG 2 - AVAIL             |                               | 01 Jan 1970 00:01 |
| CONFIG 3 - AVAIL             |                               | 01 Jan 1970 00:37 |
| CONFIG 4 - ACTIVE *          |                               | 01 Jan 1970 00:24 |
+-----+-----+-----+
* - Last Used Config      L - Config File is Locked

Select the source bank: (A, B): [A]
Select the source configuration: (1, 2, 3, 4): [1]
Select the destination bank: (A, B): [B]

Select the destination configuration: (1, 2, 3, 4): [1]
Copy SW configuration from: bank A, configuration 1
                        to: bank B, configuration 1.
/hd0/sys0/CONFIG0 --> /hd0/sys1/CONFIG0
```

Operation completed successfully.

コピーに失敗すると、次のメッセージのいずれかを受け取ります。

Error: Active bank cannot be overwritten or erased.

現在 IBM 2216 が使用中のバンクに構成をコピーしようとした。

Error: File copy failed.

この状態は、アクティブ構成にコピーしようとしたこと以外の理由でコピー操作が失敗した場合に起こります。最も一般的な原因は、コピー元とコピー先の構成に同じものを指定した場合です。構成をリストして見ると (55ページの『List』を参照)、損傷したバンクの横に CORRUPT と表示されています。

Describe

describe コマンドは、保管されたイメージに関する情報を表示するのに使います。

構文 : describe

例 : Boot config>**describe**

BANK A				BANK B			
Product ID	-	2216-MAS		Product ID	-	2216-MAS	
Version	3	Release	2	Version	3	Release	2
Maint.	0	PTF	0	Maint.	0	PTF	0
Feat.	2822	RPQ	0	Feat.	2822	RPQ	0
Date		31 Dec	1996	Date		31 Dec	1996

Disable

disable コマンドは、さまざまな変更管理機能をオフにする場合に使用します。

構文 :

disable auto-boot
fast-boot

auto-boot

auto-boot を使用不可にすると、ルーター・ブート・シーケンスがサービス回復インターフェースで停止し、ルーター・オペレーショナル・コードは実行されません。 デフォルトの auto-boot (自動ブート) モードは 『enabled (使用可能)』 です。

例 :

```
Boot config>disable auto-boot  
Auto-boot mode is now disabled
```

fast-boot

fast-boot を使用不可にすると、ルーターが電源オン時またはソフトウェアの再ロード時にブートすると、ルーターは診断テストを実行します。これによって、ハードウェアの誤り検出は向上しますが、ブート時間は遅くなります、これがデフォルト・モードで、ルーターが稼働環境にあるときは、いつでもこのモードを推奨します。

Enable

enable コマンドは、さまざまな変更管理機能をオンにする場合に使用します。

構文 :

enable auto-boot

fast-boot

auto-boot

auto-boot を使用可能にすると、ルーターがブートしてルーター・オペレーショナル・コードを実行し、サービス回復インターフェースで停止することはありません。デフォルトの auto-boot モードは『enabled』です。

注: このコマンドを使用して auto-boot モードを使用可能にするためには、ファームウェアで不在モードが選択してあることも必要です。

fast-boot

fast-boot を使用可能にすると、ルーターが電源オン時またはソフトウェアの再ロード時にブートすると、ルーターは診断テストを飛ばします。これによって、ハードウェアの誤り検出は落ちますが、ブート時間は速くなります。デフォルト・モードは『disabled (使用不可)』であり、ルーターが実稼働環境にあるときは、いつでもこのモードを推奨します。

例 :

```
Boot config>enable fast-boot
Fast-boot mode is now enabled
```

Erase

erase コマンドは、保管されているイメージまたは構成ファイルを消去する場合に使用します。

構文 :

```
erase configuration [file]
load [image]
```

config または load

構成ファイルまたはロード・イメージを消去します。erase コマンドの後に、消去する config 番号を入力します。

例 : Boot config>erase load

```
+----- BankA -----+----- Description -----+----- Date -----+
| IMAGE - CORRUPT      |                               | 01 Jan 1970 00:01 |
| CONFIG 1 - AVAIL    | test config for pubs        | 01 Jan 1970 01:26 |
| CONFIG 2 - AVAIL *  | test config for pubs        | 01 Jan 1970 01:13 |
| CONFIG 3 - NONE     |                               | 01 Jan 1970 00:58 |
| CONFIG 4 - AVAIL    |                               | 01 Jan 1970 00:39 |
+----- BankB -----+----- Description -----+----- Date -----+
| IMAGE - ACTIVE      |                               | 01 Jan 1970 00:01 |
| CONFIG 1 - AVAIL    | test config for pubs        | 01 Jan 1970 00:54 |
| CONFIG 2 - AVAIL    |                               | 01 Jan 1970 00:01 |
| CONFIG 3 - AVAIL    |                               | 01 Jan 1970 00:14 |
| CONFIG 4 - ACTIVE * |                               | 01 Jan 1970 00:24 |
+-----+-----+-----+
* - Last Used Config      L - Config File is Locked
```

```
Select the bank to erase: (A, B): [A] a
Erase SW load image from bank A.
```

Operation completed successfully.

Boot config>list

```
+----- BankA -----+----- Description -----+----- Date -----+
| IMAGE - NONE        |                               | 01 Jan 1970      |
```

```

| CONFIG 1 - AVAIL          | test config for pubs | 01 Jan 1970 00:26 |
| CONFIG 2 - AVAIL *       | test config for pubs | 01 Jan 1970 01:13 |
| CONFIG 3 - AVAIL          |                       | 01 Jan 1970 00:58 |
| CONFIG 4 - AVAIL          |                       | 01 Jan 1970 00:39 |
+----- BankB -----+----- Description -----+----- Date -----+
| IMAGE - ACTIVE           |                       | 01 Jan 1970       |
| CONFIG 1 - AVAIL         | test config for pubs | 01 Jan 1970 00:54 |
| CONFIG 2 - AVAIL         |                       | 01 Jan 1970 00:01 |
| CONFIG 3 - AVAIL         |                       | 01 Jan 1970 00:14 |
| CONFIG 4 - ACTIVE *      |                       | 01 Jan 1970 00:24 |
+-----+-----+-----+
* - Last Used Config      L - Config File is Locked

Auto-boot mode is enabled. Fast-boot mode is disabled.

```

例 : Boot config>erase configuration

```

+----- BankA -----+----- Description -----+----- Date -----+
| IMAGE - NONE             |                       | 01 Jan 1970 00:01 |
| CONFIG 1 - AVAIL         | test config for pubs | 01 Jan 1970 00:26 |
| CONFIG 2 - AVAIL *       | test config for pubs | 01 Jan 1970 01:13 |
| CONFIG 3 - AVAIL         |                       | 01 Jan 1970 01:26 |
| CONFIG 4 - AVAIL         |                       | 01 Jan 1970 01:39 |
+----- BankB -----+----- Description -----+----- Date -----+
| IMAGE - ACTIVE           |                       | 01 Jan 1970 00:01 |
| CONFIG 1 - AVAIL         | test config for pubs | 01 Jan 1970 00:54 |
| CONFIG 2 - AVAIL         |                       | 01 Jan 1970 00:01 |
| CONFIG 3 - AVAIL         |                       | 01 Jan 1970 00:14 |
| CONFIG 4 - ACTIVE *      |                       | 01 Jan 1970 00:24 |
+-----+-----+-----+
* - Last Used Config      L - Config File is Locked

```

```

Select the source bank: (A, B): [A]
Select the configuration to erase: (1, 2, 3, 4): [1] 3
Erase SW configuration file from bank A, configuration 3.

Operation completed successfully.

```

```

Boot config>list
+----- BankA -----+----- Description -----+----- Date -----+
| IMAGE - NONE             |                       | 01 Jan 1970 00:14 |
| CONFIG 1 - AVAIL         | test config for pubs | 01 Jan 1970 01:13 |
| CONFIG 2 - AVAIL *       | test config for pubs | 01 Jan 1970 00:58 |
| CONFIG 3 - NONE          |                       | 01 Jan 1970 00:26 |
| CONFIG 4 - AVAIL         |                       | 01 Jan 1970 00:26 |
+----- BankB -----+----- Description -----+----- Date -----+
| IMAGE - ACTIVE           |                       | 01 Jan 1970       |
| CONFIG 1 - AVAIL         | test config for pubs | 01 Jan 1970 00:54 |
| CONFIG 2 - AVAIL         |                       | 01 Jan 1970 00:01 |
| CONFIG 3 - AVAIL         |                       | 01 Jan 1970 00:14 |
| CONFIG 4 - ACTIVE *      |                       | 01 Jan 1970 00:24 |
+-----+-----+-----+
* - Last Used Config      L - Config File is Locked

Auto-boot mode is enabled. Fast-boot mode is disabled.

```

list コマンドによって、バンク A の構成 3 の横に **NONE** と表示されていることに注意してください。

消去が正常に行われなかった場合、障害を示すメッセージが、障害のあったバンクと共にコンソールに表示されます。

List

list コマンドは、ロード・イメージおよび構成ファイルが使用可能でアクティブであるという情報を表示させる場合に使用します。また、このコマンドは、ブート・オプションおよびスケジュールされたロード情報を表示させる場合にも使用することができます。

構文：

list

例：Boot config>**list**

```
+----- BankA -----+----- Description -----+----- Date -----+
| IMAGE - AVAIL                |                               | 01 Jan 1970 00:01 |
| CONFIG 1 - AVAIL             | test config for pubs         | 01 Jan 1970 01:26 |
| CONFIG 2 - AVAIL             | test config for pubs         | 01 Jan 1970 01:13 |
| CONFIG 3 - NONE              |                               | 01 Jan 1970 00:58 |
| CONFIG 4 - AVAIL             |                               | 01 Jan 1970 00:39 |
+----- BankB -----+----- Description -----+----- Date -----+
| IMAGE - ACTIVE               |                               | 01 Jan 1970 00:01 |
| CONFIG 1 - AVAIL             | test config for pubs         | 01 Jan 1970 00:54 |
| CONFIG 2 - AVAIL             |                               | 01 Jan 1970 00:01 |
| CONFIG 3 - AVAIL             |                               | 01 Jan 1970 00:14 |
| CONFIG 4 - ACTIVE            |                               | 01 Jan 1970 00:24 |
+-----+-----+-----+
* - Last Used Config      L - Config File is Locked
Auto-boot mode is enabled.  Fast-boot mode is disabled.
```

Time Activated Load Schedule Information...

The router is scheduled to reload as follows.

```
Date: June 26, 1997
Time: 16:30
The load modules are in bank A.
The configuration is CONFIG 1 in bank A.
Boot config>
```

可能なファイル状態記述子には、以下のものがあります。

ACTIVE

ファイルは現在 2216 にロードされ、実行中です。

AVAIL ACTIVE にすることができる有効なファイルです。

CORRUPT

ファイルは損傷したか、または 2216 に完全にロードされていませんでした。ファイルを置き換える必要があります。

LOCAL

ファイルは次回の再ロード時またはリセット時のみ使用されます。使用された後は、ファイルは AVAIL 状態になります。

PENDING

ファイルは次回の再ロード時、リセット時、または 2216 のパワーアップ時にロードされます。

Lock

lock コマンドは、装置が選択された構成を他の構成で上書きするのを防止するのに使用します。

構文 :

lock

例 : Boot config>**lock**

```
+----- BankA -----+----- Description -----+----- Date -----+
| IMAGE - NONE                                     |                               | 01 Jan 1970 01:03 |
| CONFIG 1 - AVAIL                               | test config for pubs       | 01 Jan 1970 00:26 |
| CONFIG 2 - AVAIL *                             | test config for pubs       | 01 Jan 1970 01:13 |
| CONFIG 3 - NONE                                 |                               | 01 Jan 1970 00:58 |
| CONFIG 4 - AVAIL                               |                               | 01 Jan 1970 00:26 |
+----- BankB -----+----- Description -----+----- Date -----+
| IMAGE - ACTIVE                                   |                               | 01 Jan 1970 00:01 |
| CONFIG 1 - AVAIL                               | test config for pubs       | 01 Jan 1970 00:54 |
| CONFIG 2 - AVAIL                               |                               | 01 Jan 1970 00:01 |
| CONFIG 3 - AVAIL                               |                               | 01 Jan 1970 00:14 |
| CONFIG 4 - ACTIVE *                             |                               | 01 Jan 1970 00:24 |
+-----+-----+-----+
* - Last Used Config      L - Config File is Locked
```

Auto-boot mode is enabled. Select the source bank: (A, B): [A]

Select the source configuration: (1, 2, 3, 4): [1] 4
Attempting to lock bank A and configuration 4.

Operation completed successfully.

Boot config>**list**

```
+----- BankA -----+----- Description -----+----- Date -----+
| IMAGE - NONE                                     |                               | 01 Jan 1970       |
| CONFIG 1 - AVAIL                               | test config for pubs       | 01 Jan 1970 00:13 |
| CONFIG 2 - AVAIL *                             | test config for pubs       | 01 Jan 1970 01:13 |
| CONFIG 3 - NONE                                 |                               | 01 Jan 1970 00:58 |
| CONFIG 4 - AVAIL                               |                               | 01 Jan 1970 00:26 |
|                                     L |                               |                               |
+----- BankB -----+----- Description -----+----- Date -----+
| IMAGE - ACTIVE                                   |                               | 01 Jan 1970 00:54 |
| CONFIG 1 - AVAIL                               | test config for pubs       | 01 Jan 1970 00:01 |
| CONFIG 2 - AVAIL                               |                               | 01 Jan 1970 00:14 |
| CONFIG 3 - AVAIL                               |                               | 01 Jan 1970 00:14 |
| CONFIG 4 - ACTIVE *                             |                               | 01 Jan 1970 00:24 |
+-----+-----+-----+
* - Last Used Config      L - Config File is Locked
```

Auto-boot mode is enabled. Fast-boot mode is disabled.

注: バンク A の構成 4 に 『L』 のマークが付いていることに注意してください。

Set

set コマンドは、コード・バンク、使用する構成、および使用する期間を選択するのに使用します。有効な期間は、次のとおりです。

once 構成は次回のブート時にのみアクティブになります。

always

構成は、再び変更されるまで、以降のブート時に毎回アクティブになります。

構文 :

set

例 : Boot config>**set**

```

+----- BankA -----+----- Description -----+----- Date -----+
| IMAGE - NONE                |                               | 01 Jan 1970 01:03 |
| CONFIG 1 - AVAIL            | test config for pubs         | 01 Jan 1970 00:13 |
| CONFIG 2 - AVAIL *          | test config for pubs         | 01 Jan 1970 01:13 |
| CONFIG 3 - NONE             |                               | 01 Jan 1970 00:58 |
| CONFIG 4 - AVAIL            |                               | 01 Jan 1970 00:26 |
+----- BankB -----+----- Description -----+----- Date -----+
| IMAGE - ACTIVE              |                               | 01 Jan 1970 00:01 |
| CONFIG 1 - AVAIL            | test config for pubs         | 01 Jan 1970 00:54 |
| CONFIG 2 - AVAIL            |                               | 01 Jan 1970 00:01 |
| CONFIG 3 - AVAIL            |                               | 01 Jan 1970 00:14 |
| CONFIG 4 - ACTIVE *         |                               | 01 Jan 1970 00:24 |
+-----+-----+-----+
* - Last Used Config      L - Config File is Locked

```

Select the source bank: (A, B): [A] b

Select the source configuration: (1, 2, 3, 4): [1] 4
 Select the duration to use for booting: (once, always): [always]
 Set SW to boot using bank B and configuration 4, always.

Operation completed successfully.

```

Boot config>list
+----- BankA -----+----- Description -----+----- Date -----+
| IMAGE - NONE                |                               | 01 Jan 1970       |
| CONFIG 1 - AVAIL            | test config for pubs         | 01 Jan 1970 00:13 |
| CONFIG 2 - AVAIL *          | test config for pubs         | 01 Jan 1970 01:13 |
| CONFIG 3 - NONE             |                               | 01 Jan 1970 00:58 |
| CONFIG 4 - AVAIL            |                               | 01 Jan 1970 00:26 |
+----- BankB -----+----- Description -----+----- Date -----+
| IMAGE - ACTIVE              |                               | 01 Jan 1970       |
| CONFIG 1 - AVAIL            | test config for pubs         | 01 Jan 1970 00:54 |
| CONFIG 2 - AVAIL            |                               | 01 Jan 1970 00:01 |
| CONFIG 3 - AVAIL            |                               | 01 Jan 1970 00:14 |
| CONFIG 4 - ACTIVE *         |                               | 01 Jan 1970 00:24 |
+-----+-----+-----+
* - Last Used Config      L - Config File is Locked

```

Auto-boot mode is enabled. Fast-boot mode is disabled.

TFTP

tftp コマンドは、2216 とリモート・サーバーの間で TFTP ファイル転送を開始する場合に使用します。

注: イメージを解凍すると、『.ld』で終わっているファイルが複数あることが分かります。複数のロード・モジュールを入手するには、**tftp get load modules** コマンドを使用します。

構文 :

```

tftp get                config
                        load modules

tftp put                config
                        load single image
                        load modules

```

例 : Boot config>**tftp get load single**

```

+----- BankA -----+----- Description -----+----- Date -----+
| IMAGE - NONE                |                               | 01 Jan 1970 01:03 |
| CONFIG 1 - AVAIL            | test config for pubs         | 01 Jan 1970 00:01 |
+-----+-----+-----+

```

```

| CONFIG 2 - AVAIL * | test config for pubs | 01 Jan 1970 01:13 |
| CONFIG 3 - NONE | | 01 Jan 1970 00:58 |
| CONFIG 4 - AVAIL | | 01 Jan 1970 00:14 |
+----- BankB -----+----- Description -----+----- Date -----+
| IMAGE - ACTIVE | | 01 Jan 1970 00:01 |
| CONFIG 1 - AVAIL | test config for pubs | 01 Jan 1970 00:54 |
| CONFIG 2 - AVAIL | | 01 Jan 1970 00:01 |
| CONFIG 3 - AVAIL | | 01 Jan 1970 00:14 |
| CONFIG 4 - ACTIVE * | | 01 Jan 1970 00:24 |
+-----+-----+-----+
* - Last Used Config L - Config File is Locked

```

```

Specify the server IP address (dotted decimal): : [1.2.3.4] 192.9.200.1
Specify the remote file name: : (/u/bin) /usr/2216load/c200-rtr.img
Select the destination bank: (A, B): [A] a
TFTP SW load image
get: /usr/2216load/c200-rtr.img
from: 192.9.200.1
to: bank A.

```

Operation completed successfully.

ソフトウェアの動的ロードに関する注: 指定されたディレクトリー内のロード・モジュールはすべて、バンクへのロードの一部として取り出されます。バージョン 1、リリース 2 より前のリリースのロードでは、これは単一のロード・モジュールです。バージョン 1、リリース 2 ロードおよびそれ以降では、これは複数のロード・モジュールである場合があります。

例 : Boot config>tftp get load modules

```

+----- BankA -----+----- Description -----+----- Date -----+
| IMAGE - NONE | | 01 Jan 1970 01:03 |
| CONFIG 1 - AVAIL | test config for pubs | 01 Jan 1970 00:01 |
| CONFIG 2 - AVAIL * | test config for pubs | 01 Jan 1970 01:13 |
| CONFIG 3 - NONE | | 01 Jan 1970 00:58 |
| CONFIG 4 - AVAIL | | 01 Jan 1970 00:14 |
+----- BankB -----+----- Description -----+----- Date -----+
| IMAGE - ACTIVE | | 01 Jan 1970 00:01 |
| CONFIG 1 - AVAIL | test config for pubs | 01 Jan 1970 00:54 |
| CONFIG 2 - AVAIL | | 01 Jan 1970 00:01 |
| CONFIG 3 - AVAIL | | 01 Jan 1970 00:14 |
| CONFIG 4 - ACTIVE * | | 01 Jan 1970 00:24 |
+-----+-----+-----+
* - Last Used Config L - Config File is Locked

```

```

Specify the server IP address (dotted decimal): : [1.2.3.4] 192.9.200.1
Specify the remote modules directory: : (/u/bin) /usr/2216load/
Select the destination bank: (A, B): [A] a
TFTP SW load image
get: /usr/2216load/LML.ld
from: 192.9.200.1
to: bank A.

```

Operation completed successfully.

注:

ファイルをサーバーに PUT するときには、次のことに注意してください

1. ターゲット・サーバー上のファイルに、誰でもそのファイルに書き込むことが許される適切な許可が与えられていることを確認してください。そうでない場合、PUT 操作は失敗します。
2. ターゲット・サーバーに PUT するファイルについて承知している必要があります。バンク内のイメージが単一モジュールであるか、複数のモジュールであるか

を判別するには、 **describe** コマンドを使用します。バージョン 1、リリース 2 より前のロードは単一モジュールです。バージョン 1、リリース 2 以降のロードは、複数のモジュールです。

Timedload

timedload コマンドは、装置へのロードをスケジュールしたり、スケジュールされたロードを取り消したり、スケジュールされたロードの情報を表示させて見る場合に使用します。

このコマンドにより、ネットワーク・トラフィックのピーク期間を外して、サポート技術員が不在のときでも、装置へのロードを実行することが可能になります。

注: 構成プログラム を使用して装置の再ロードをスケジュールすることもできます。装置は再ロードや電源異常によって影響を受けません。こうした状況下では再ロードは脱落するのが普通です。詳細については、 **構成プログラム 使用者の手引き** の中の、『構成プログラムの使用』 の章を参照してください。

構文 :

```
timedload          activate
                    deactivate
                    view
```

activate

装置へのロードをスケジュールします。 **tftp get load** および **tftp get config** コマンドの場合と同様に、時刻起動のロードに関する情報の入力を指示するプロンプトが出されます。パラメーターに関する説明については、57ページの『TFTP』 を参照してください。

Time of day to load the device

装置にロードする日付と時刻を指定します。値は **YYYYMMDDHHMM** 形式で指定します。ただし、

YYYY は 4 桁の年号です。

注: 装置の現在の月が 12 月のときは、年号データは現行年または翌年でなければなりません。また、装置の現在の月が 1 月～11 月のときは、年号データは現行年でなければなりません。

MM は 2 桁の月です。

MM の有効値: 01 ～ 12 (01 は 1 月を表します)

DD は 2 桁の日です。

DD の有効値: 01 ～ 31 (MM の値によって異なります)

HH は 2 桁の時間 (24 時間計) です。

HH の有効値: 00 ～ 23

MM は 2 桁の分です。

MM の有効値: 00 ～ 59

以下に、種々のソースからのロードをスケジュールする例を示します。

例 1. ロード・モジュールおよび構成のソースがリモート・ホストの場合:

Boot config>timedload activate

```

+----- BankA -----+----- Description -----+----- Date -----+
| IMAGE - AVAIL                |                               | 01 Jan 1970 00:01 |
| CONFIG 1 - AVAIL             | test config for pubs         | 01 Jan 1970 01:26 |
| CONFIG 2 - AVAIL *          | test config for pubs         | 01 Jan 1970 01:13 |
| CONFIG 3 - NONE              |                               | 01 Jan 1970 00:58 |
| CONFIG 4 - AVAIL             |                               | 01 Jan 1970 00:39 |
+----- BankB -----+----- Description -----+----- Date -----+
| IMAGE - ACTIVE                |                               | 01 Jan 1970 00:01 |
| CONFIG 1 - AVAIL             | test config for pubs         | 01 Jan 1970 00:54 |
| CONFIG 2 - AVAIL             |                               | 01 Jan 1970 00:01 |
| CONFIG 3 - AVAIL             |                               | 01 Jan 1970 00:14 |
| CONFIG 4 - ACTIVE *          |                               | 01 Jan 1970 00:24 |
+-----+-----+-----+
* - Last Used Config      L - Config File is Locked

```

Time Activated Load Processing...

Select the bank to use: (A, B): [A] a

Do you want to put load modules into the bank? (Yes, No, Quit): [Yes] yes

Do you want to retrieve a SINGLE image or a set of MODULES? [MODULES]? modules

Specify the server IP address (dotted decimal): : [1.2.3.4] 192.9.200.1

Specify the remote modules directory: : (/u/bin) /usr/601bin/205img

The destination bank is bank A

TFTP SW load image

get: /usr/601bin/205img/
from: 192.9.200.1

to: bank A.

tftp: connect to '192.9.200.1'

tftp: connect to '192.9.200.1'

tftp: connect to '192.9.200.1'

tftp: connect to '192.9.200.1'

tftp: connect to '192.9.200.1'

tftp: connect to '192.9.200.1'

tftp: connect to '192.9.200.1'

tftp: connect to '192.9.200.1'

tftp: connect to '192.9.200.1'

tftp: connect to '192.9.200.1'

tftp: connect to '192.9.200.1'

tftp: connect to '192.9.200.1'

tftp: connect to '192.9.200.1'

tftp: connect to '192.9.200.1'

Operation completed successfully.

Do you want to put a configuration into the bank? (Yes, No, Quit): [Yes] yes

Specify the server IP address (dotted decimal): : [1.2.3.4] 192.9.200.1

Specify the remote file name: : (config.dat) /tftpboot/192.9.200.6.config

The destination bank is bank A

Select the destination configuration: (1, 2, 3, 4): [1] 1

TFTP SW configuration file

get: /tftpboot/192.9.200.6.config
from: 192.9.200.1

to: bank A, configuration 1.

tftp: connect to '192.9.200.1'

Operation completed successfully.

Time of day to load the router (YYYYMMDDHHMM) []? 199706261630

The load timer has been activated.

Boot config>

例 2. ロード・モジュールおよび構成のソースがバンクの場合:

Boot config>timedload activate

```

+----- BankA -----+----- Description -----+----- Date -----+
| IMAGE - AVAIL                |                               | 01 Jan 1970 00:01 |
| CONFIG 1 - AVAIL             | test config for pubs         | 01 Jan 1970 01:26 |
| CONFIG 2 - AVAIL *          | test config for pubs         | 01 Jan 1970 01:13 |
| CONFIG 3 - NONE              |                               | 01 Jan 1970 00:58 |
| CONFIG 4 - AVAIL             |                               | 01 Jan 1970 00:39 |
+----- BankB -----+----- Description -----+----- Date -----+
| IMAGE - ACTIVE                |                               | 01 Jan 1970 00:01 |
| CONFIG 1 - AVAIL             | test config for pubs         | 01 Jan 1970 00:54 |
| CONFIG 2 - AVAIL             |                               | 01 Jan 1970 00:01 |
| CONFIG 3 - AVAIL             |                               | 01 Jan 1970 00:14 |
| CONFIG 4 - ACTIVE *          |                               | 01 Jan 1970 00:24 |
+-----+-----+-----+
* - Last Used Config      L - Config File is Locked

```



```

Time Activated Load Processing...
Select the bank to use: (A, B): [A] a
Do you want to put load modules into the bank? (Yes, No, Quit): [Yes] no
Do you want to put a configuration into the bank? (Yes, No, Quit): [Yes] no
Select the configuration to use: (1, 2, 3, 4): [1] 1
Time of day to load the router (YYYYMMDDHHMM) []? 199706261630
The load timer has been activated.
Boot config>

```

deactivate

スケジュールされたロードを取り消します。

例 1: 時刻起動のロードを非活動化します。

```

Boot config>timedload deactivate
Deactivate Load Timer Processing...
Do you want to deactivate the load timer? (Yes, No, Quit): [No] yes
The load timer has been deactivated.
Boot config>

```

view スケジュールされたロード情報を表示します。

```

Boot Config> timedload view
Time Activated Load Schedule Information...
The router is scheduled to reload as follows.
Date: June 26, 1997
Time: 16:30
The load modules are in bank A.
The configuration is CONFIG 1 in bank A.
Boot config>

```

Unlock

unlock コマンドは、以前にロックした指定の構成に、装置が上書きできるようにするのに使用します。

構文 :

unlock

例 : Boot config>**unlock**

```

+----- BankA -----+----- Description -----+----- Date -----+
| IMAGE - NONE          |                               | 01 Jan 1970 01:03 |
| CONFIG 1 - AVAIL      | test config for pubs         | 01 Jan 1970 00:13 |
| CONFIG 2 - AVAIL      | * test config for pubs       | 01 Jan 1970 01:13 |
| CONFIG 3 - NONE       |                               | 01 Jan 1970 00:58 |
| CONFIG 4 - AVAIL      | L                               | 01 Jan 1970 00:26 |
+----- BankB -----+----- Description -----+----- Date -----+
| IMAGE - ACTIVE        |                               | 01 Jan 1970 00:01 |
| CONFIG 1 - AVAIL      | test config for pubs         | 01 Jan 1970 00:54 |
| CONFIG 2 - AVAIL      |                               | 01 Jan 1970 00:01 |
| CONFIG 3 - AVAIL      |                               | 01 Jan 1970 00:14 |
| CONFIG 4 - ACTIVE     | *                               | 01 Jan 1970 00:24 |
+-----+-----+-----+
* - Last Used Config      L - Config File is Locked

```

Select the source bank: (A, B): [A]

Select the source configuration: (1, 2, 3, 4): [1] 4
Attempting to unlock bank A and configuration 4.

Operation completed successfully.

```

Boot config>list
+----- BankA -----+----- Description -----+----- Date -----+
| IMAGE - NONE          |                               |                               |

```

CONFIG 1 - AVAIL	test config for pubs	01 Jan 1970 00:01
CONFIG 2 - AVAIL *	test config for pubs	01 Jan 1970 01:13
CONFIG 3 - NONE		01 Jan 1970 00:58
CONFIG 4 - AVAIL		01 Jan 1970 00:14
+----- BankB ----- Description ----- Date -----+		
IMAGE - ACTIVE		01 Jan 1970
CONFIG 1 - AVAIL	test config for pubs	01 Jan 1970 00:54
CONFIG 2 - AVAIL		01 Jan 1970 00:01
CONFIG 3 - AVAIL		01 Jan 1970 00:14
CONFIG 4 - ACTIVE *		01 Jan 1970 00:24

* - Last Used Config L - Config File is Locked

Auto-boot mode is enabled. Fast-boot mode is disabled.

注: バンク A の構成 4 に付いていた 『L』 のマークがなくなっていることに注意してください。

Update-firmware

update-firmware コマンドは、2216 のバンク A またはバンク B のいずれかで受信した Firm.ld ロード・モジュールをインストールするために使用します。

このコマンドが実行された後、リブートは自動的に起きません。Boot config> set コマンドを使用して、リブート元のバンクを設定してください。そうすると、リブート時に新規ファームウェアが更新されます。リブート情報に関しては、31ページの『第3章 コマンド行インターフェースからファームウェアへのアクセス』を参照してください。

構文 :

update-firmware

例 :

Boot config>update

BANK A			BANK B		
Product ID -	2216-MAS		Product ID -	2216-MAS	
Version	3 Release	1	Version	3 Release	1
Maint.	0 PTF	0	Maint.	0 PTF	0
Feat.	2807 RPQ	0	Feat.	2807 RPQ	0
Date	14 Jul 1998	07:45	Date	7 Aug 1998	14:05
Build	cc_155b		Build	cc_158b	
				test-load	

DO NOT POWER OFF while firmware is updating.
To exit, type Ctrl-c at the Select bank/restore prompt.

Select the source bank or P to restore from Precover.img: (A, B, P): [A]B

```
Using Local Firmware image /hd0/sys1/Firm.ld
flash: ID = 0x01A4, sector wp = 0x00
flash: Found /hd0/sys1/Firm.ld:524774 bytes.
flash: Loading file /hd0/sys1/Firm.ld...
flash: File /hd0/sys1/Firm.ld loaded at 0x0025f0ec for 524288 bytes
flash: Creating /hd0/precover.img from flash
flash: Recovery image created.
flash: Validating firmware image
flash: Update from:0025F0EC, offset=00010000, flash size=524288
flash: Erasing sector 7f
flash: Erasing sector 3f
```

```
flash: Erasing sector 1f  
flash: Erasing sector f  
flash: Erasing sector 7  
flash: Erasing sector 3  
flash: Erasing sector 1  
flash: Current addr = 0007f000
```

```
Operation completed successfully.
```


第8章 構成プロセス (CONFIG - Talk 6) とコマンド

この章では CONFIG プロセスについて説明し、以下の節が含まれています。

- 『CONFIG とは ?』
- 66ページの『Config-Only (構成専用) モード』
- 66ページの『クイック構成』
- 68ページの『ユーザー・アクセスの構成』
- 68ページの『予備インターフェースの構成』
- 72ページの『インターフェースのリセット』
- 75ページの『システム・ダンプの使用』

CONFIG とは ?

構成プロセス (CONFIG) は、ルーター・ユーザー・インターフェースの第 2 レベルのプロセスです。 CONFIG コマンドを使用して、次のことが行えます。

- 構成パラメーターを設定または変更する
- ハードウェア構成にインターフェースを追加または削除する
- Boot CONFIG コマンド・モードに入る
- クイック構成モードに入る
- 構成情報を消去、リスト、または更新する
- コンソール・ログインを使用可能または使用不可にする
- プロトコル環境を含めて、第 3 レベルのプロセスと通信する

注: 新規のコード・レベルへの移行に関する説明については、2216 *Nways Multiaccess Connector Service and Maintenance Manual* 中の、『Migrating to a New Code Level』の章を参照してください。

CONFIG では、ルーターの不揮発性構成メモリーに記憶されている構成情報を表示または変更することができます。システム・パラメーターおよびプロトコル・パラメーターに加えた変更は、ルーター・ソフトウェアを再ロードするまで有効になりません。(詳細については、33ページの『第4章 OPCON プロセス』の OPCON reload コマンドを参照してください。)

注: 変更を装置のフラッシュ・メモリーに保管するためには、**write** コマンドを入力する必要があります。

CONFIG コマンド・インターフェースは、幾つかのレベル (モードと呼ばれる) で構成されています。各モードには、それぞれ独自のプロンプトがあります。たとえば、TCP/IP プロトコルのプロンプトは IP config> です。

自分が通信しているプロセスおよびモードを知りたい場合は、**Return** キーを押すと、プロンプトが表示されます。この章で説明する一部のコマンド (**network** や **protocol**

CONFIG (Talk 6) プロセスの使用

など) では、CONFIG の種々のレベルにアクセスし、それを終了することができます。CONFIG プロセスから出すことができるコマンドのリストは、77ページの表7 を参照してください。

Config-Only (構成専用) モード

Config-Only モードに入るのは、使用しようとする構成ファイルが空の場合か、あるいはプロトコルがまったく構成されていない場合です。Config-Only モードには、ルーターがスタート時に破損する原因になる無効な構成から回復するために、手動で入ることもできます。

Config-Only モードに自動的に入る

ルーターが空き構成ファイルとブートする場合や、構成ファイルに不完全な構成データがある場合に、Config-Only モードに入ります。

以下の条件によって、ルーターは Config-Only モードに入ります。

- 装置は構成されているが、プロトコルが構成されていない。
- すべてのルーター・インターフェース情報の削除
- 構成ファイルが空である。

Config-Only モードに手動で入る

Config-Only モードに入るには、次のうちの 1 つを行います。

- 構成なしでルーターを再ロードする。
- インターフェースを構成せずにルーターを再ロードする。
- プロトコルを構成せずにルーターを再ロードする。

詳しくは、31ページの『第3章 コマンド行インターフェースからファームウェアへのアクセス』を参照してください。

クイック構成

クイック構成 (Quick Config) は、ルーター・ロードに存在するブリッジング・プロトコルおよびルーティング・プロトコルを構成するのに必要な最小限の一組のコマンドを提供します。また、WRITE_READ_TRAP アクセスを備えた SNMP コミュニティを構成することもできます。これが特に役立つのは初期セットアップ時です。構成プログラムが SNMP SET コマンドを使用して、構成を転送するからです。

重要: クイック構成を使用する前に、少なくとも 1 つのネットワーク装置が構成されていることが必要です。装置を追加する場合は、**add device** コマンドを `config(only)>` または `config>` プロンプトで使用します。

以下の表は、クイック構成でサポートされるプロトコルをリストしています。

表 6. Quick Config 機能

ATM プロトコル	ブリッジング・プロトコル	ルーティング・プロトコル
LAN エミュレーション	STB、SRT、SRB	IP、IPX、DNA IV

Quick Config は、ショートカットを提供して、既存の構成プロセスを補足します。このショートカットにより、構成プロセスを終了して別の構成プロセスに入ることを必要とせずに、ブリッジング・プロトコルおよびルーティング・プロトコルに必要な最小数のパラメーターを構成することが可能になります。その他のパラメーターは、選択されたデフォルトに設定されます。

ルーターのクイック構成が必要になる状態としては、次のものがあります。

- 構成メモリーがブランクであるか、破壊されている (次のいずれかの状態が生じた場合など)。
 - ルーターを初めて構成する場合
 - 電圧変動によってハード・ディスクが破壊された場合
- デモンストレーションで、ルーターの機能を実証するためにルーターをクイック構成する必要がある場合
- ベンチマーク・テストで、各種のテストを進める (ルーターのオペレーティング・システム・コマンドについて学習する必要はない) 場合

Quick Config は、以下のように動作します。

- デフォルト値を示しながら一連の質問をする。
- 通常モード・コマンド・セットの詳細構成へのショートカットを提供する。

Quick Config は、構成質問に対するユーザーの応答に基づいて、多数のデフォルト・パラメーターを設定します。Quick Config で構成できないものについては、Quick Config を終了した後で、Config を使用して構成することができます。

Quick Config の内部から Quick Config 情報を削除することはできません。ただし、いったん終了して Quick Config に戻るか、一部の Quick Config 質問への応答として **reload** コマンドを入力するかのいずれかにより、情報を訂正することができます。

Quick Config ソフトウェアの使用についての詳しい説明は、771ページの『付録A. クイック構成リファレンス』を参照してください。

Quick Config モードに手動で入る

ルーターの機能を実証したい場合や、ルーターのオペレーティング・システム・コマンドを学習する必要のないベンチマーク・テストを実行するために動的再構成を行いたい場合、手動で Quick Config に入ることができます。

Quick Config に入るには、Config> プロンプトで **qconfig** と入力します。

CONFIG (Talk 6) プロセスの使用

Quick Config モードの終了

Quick Config を終了するには、任意のプロンプトから **r** を入力してリスタートします。**no** を入力するまで照会に従い、その後で **q** を入力して終了します。ルーターは `Config (only)>` または `Config>` プロンプトに戻ります。

ユーザー・アクセスの構成

ルーター構成プロセスでは、最大 50 名のユーザー名、パスワード、および許可レベルを使用できます。各ユーザーにパスワードと許可レベルを割り当てる必要があります。許可レベルには、**管理**、**操作**、および**監視** の 3 つがあります。

詳しくは、**add user** コマンド を参照してください。

技術サポート・アクセス

ユーザーがシステム管理者の場合、新規ユーザーを初めて追加するときに、技術サポート・アクセスを追加するかどうかを尋ねられます。**yes** と応答すると、ユーザーがシステム管理者として持っているのと同じアクセス特権が、技術サポートに対しても認められます。

このためのパスワードはソフトウェアによって自動的に選択され、サービス技術員に知らされます。このパスワードは **change user** コマンドを使用して変更できますが、パスワードを変更すると、カスタマー・サービスはリモート・サポートを提供できなくなります。**change user** コマンドの使用についての詳しい説明は、85ページの『Change』 を参照してください。

予備インターフェースの構成

装置をリスタートする必要はないが、新規インターフェースをそのブリッジングおよびルーティング・プロトコルと共に構成する必要がある場合があります。装置上に多数の**予備インターフェース**を構成しておくことによって、これを実現できます。予備インターフェースは、次のような場合に便利です。

- 新規アダプターを装置に『ホット・プラグ』する場合
アダプターを導入し、構成した後、装置のプラグを抜いたり、リスタートしたりせずに、アダプターを起動することができます。
- ダイヤル回線を装置に追加する場合
予備インターフェースを使用して、新規の V.25bis または ISDN ダイヤル回線を既存の V.25bis または ISDN インターフェースに追加します。
- ATM LAN エミュレーション・クライアントを追加する場合
予備インターフェースを使用して、トークンリングまたはイーサネット ATM LAN エミュレーション・クライアントを既存の ATM インターフェースに追加します。
- バーチャル・ネットワークを既存の ESCON チャンネル・アダプターまたは並列チャンネル・アダプターに追加する場合

予備インターフェースを構成するには、以下のようにします。

CONFIG (Talk 6) プロセスの使用

1. **talk 6** と入力して、CONFIG プロセスにアクセスする。
2. **set spare-interfaces** コマンドを使用して、予備インターフェースの数を構成する。
3. **Ctrl-P** を押して、CONFIG プロセスを終了する。
4. 装置を再ロードする。

例 :

```
* talk 6
Config> set spare 2
Config>
*reload
Are you sure you want to reload the gateway? (Yes or [No]) yes
```

装置を再ロードすると、予備インターフェースは空き装置として導入されます。

予備インターフェースの 1 つを使用するには、次のようにします。

1. 新規アダプターをアダプター・スロットに挿入する。

注: ESCON チャネル・アダプターまたは並列チャネル・アダプターを使用する場合は、追加のアダプターを使用しないで、接続されているネットワークのそれぞれに予備インターフェースを定義することができます。その場合は、このステップを飛ばすことができます。

2. **talk 6** と入力して、CONFIG プロセスにアクセスする。
3. **add device** コマンドを使用して、インターフェースおよびダイヤル回線を追加する (必要な場合)。
4. インターフェースを構成するため、または ATM LAN エミュレーション・クライアントを追加するために、**net** コマンドを使用して予備インターフェースを構成する。
5. **protocol** および **feature** コマンドを使用して、種々のプロトコルおよびフィーチャーを構成する。
6. **Ctrl-P** を押して、CONFIG プロセスを終了する。
7. **talk 5** と入力して、GWCON プロセスにアクセスする。
8. **activate** コマンドを使用して、新規インターフェースをネットワークにオンラインにする。

次の例は、IP プロトコルが使用可能にされた新規ダイヤル回線を構成し、起動する方法を示しています。ダイヤル回線と IP プロトコルの構成は示されていません。

例 :

```
* talk 6
Config> add device dial-circuit
Config> net 6
Circuit configuration
Circuit config>
:
Here you would configure the dial circuit
:
Circuit config> exit
Config> protocol ip
IP>
:
```

CONFIG (Talk 6) プロセスの使用

```
Here you would configure the IP protocol on the dial circuit.  
:  
IP> exit  
Config>  
* talk 5  
+ activate 6
```

予備インターフェースの制約事項

以下の条件のもとでは、**activate** コマンドを使用して新規インターフェースをネットワークで起動することはできません。

- すでに **delete interface** コマンドを入力した場合。いずれかの インターフェースを削除した場合は、装置をリスタートする必要があります。予備インターフェース (リストに **null** と表示) は削除できません。
- 予備インターフェースが、プロトコルまたはフィーチャーを使用可能にする唯一のインターフェースである場合。プロトコルまたはフィーチャーは、既存のインターフェース上ですでに使用可能にされていないと、予備インターフェースで使用することはできません。
- 新規の予備インターフェースのヘッダー・サイズまたはトレーラー・サイズが、他のインターフェースのサイズより大きい場合
- 新規インターフェースに受信バッファを割り当てるためのメモリーが不十分である場合

上記の場合は、新規のインターフェースをオンラインにするためには、装置をリスタートする必要があります。

以下のインターフェースは、予備インターフェースとして構成することは可能ですが、**activate** コマンドを使用してこれらをネットワークで起動することはできません。

- ATM
- SDLC
- SDLC リレー
- V.25bis
- PPP マルチリンク・マスターおよび専用リンク・ネット

これらのインターフェースをオンラインにするためには、装置をリスタートする必要があります。

以下のプロトコルは、予備インターフェースで構成することは可能ですが、**activate** コマンドを使用してこれらをネットワークで起動することはできません。

- IPv6
- LNM
- OSI/DECnet V
- XTP

注: 構成プログラムを使用するときは、以下のようにして予備インターフェースを処理します。

1. 装置上の予備インターフェースの構成変更を行う。

CONFIG (Talk 6) プロセスの使用

2. 装置上で **activate** コマンドを入力して、予備インターフェース、プロトコル、およびフィーチャーをオンラインにする。
3. 構成プログラムを使用して、構成を検索する (取り出す)。
4. 検索した (取り出した) 構成を構成プログラム・データベースに保管する。

特定の機能に関しては要件があります。それは次のとおりです。

APPN	予備インターフェース上でこのプロトコルを起動する場合は、まずインターフェースを起動してから、起動されたインターフェース上でプロトコルを構成する必要があります。
帯域幅予約 (BRS)	予備インターフェースに BRS を構成するには、各ネットワーク・インターフェースの BRS を使用可能にして、予備インターフェースを起動する前にフレーム・リレー回線がアクティブになるようにすることが必要です。予備インターフェースを起動した後は、BRS 構成コマンドを使用して、トラフィック・クラスの追加またはトラフィック・クラスへのプロトコルの割り当てなどのような変更を加えることができます。
DECnet IV	予備インターフェース上でこのプロトコルを起動する場合は、まずインターフェースを起動してから、起動されたインターフェース上でプロトコルを構成する必要があります。構成変更を起動する場合は、DECnet IV set コマンドを使用します。
フレーム・リレー	<ul style="list-style-type: none">• ダイヤル回線の基本ネットワークがすでにアクティブになっていないと、FR ダイヤル回線インターフェースを起動することはできません。• 予備インターフェースに必要なフレーム・サイズ、MAC ヘッダー、またはトレーラーが、すでに基本ネットワークに割り当てられている他のダイヤル回線よりも大きい場合、FR ダイヤル回線の起動は失敗します。• 装置のデータ圧縮がすでにアクティブになっていないと、データ圧縮用に定義された予備インターフェースのデータ圧縮は機能しません。
BGP	新規近隣を起動する場合は、BGP reset neighbor コマンドを使用します。
IPX	静的ルート、静的サービス、および予備インターフェース上のフィルター・リストを起動する場合は、 reset コマンドを使用します。
PPP	<ul style="list-style-type: none">• 装置のデータ圧縮がすでにアクティブになっていないと、データ圧縮用に定義された予備インターフェースではデータ圧縮は機能しません。• 装置のブロック・バッファが小さすぎて 1500 バイト PPP MRU をサポートできない場合、予備 PPP インターフェースを起動することはできません。• ダイヤル回線の基本ネットワークがすでにアクティブになっていないと、PPP ダイヤル回線インターフェースを起動することはできません。• 予備インターフェースに必要なフレーム・サイズ、MAC ヘッダー、またはトレーラーが、すでに基本ネットワークに割り当てられている他のダイヤル回線よりも大きい場合、PPP ダイヤル回線の起動は失敗します。

CONFIG (Talk 6) プロセスの使用

- ブリッジング
- ブリッジングがすでにアクティブになっていません。
 - 予備インターフェースに NetBIOS フィルターが定義されています。
 - 予備インターフェースによってブリッジのパーソナリティまたは振る舞いに変更が生じました (たとえば、純然たる TB ブリッジに SR ポートが追加されたり、SR-TB 変換が使用可能にされるなど)。
- IP
- アクセス制御およびパケット・フィルターについて構成変更をオンラインにする場合は、reset IP コマンドを使用します。
- チャネル・バーチャル・ネット (MPC、LCS、LSA)
- 予備インターフェースは、その構成済みサブチャネルがすでに別のインターフェースによって使用中であるか、または別のインターフェースとの間で共用されている場合は、起動することができません。
- WAN 復元/
WAN 再ルート
- 以下の条件のいずれが該当する場合も、予備インターフェースは起動することができません。
- 予備インターフェースが WRS 1 次として構成され、その構成済み WRS 2 次がすでに WRS 1 次、あるいは WRR 1 次または WRR 代替になっている場合
 - 予備インターフェースが WRS 1 次として構成され、その構成済み WRS 2 次がすでに別の WRS 1 次をアクティブに復元中である場合
 - 予備インターフェースが WRS 2 次として構成され、その構成済み WRS 1 次がすでに WRS 2 次、あるいは WRR 1 次または WRR 代替になっている場合
 - 予備インターフェースが WRS 2 次として構成され、その構成済み WRS 1 次がすでに別の WRS 2 次によってアクティブに復元中である場合
 - 予備インターフェースが WRR 1 次として構成され、その構成済み WRR 代替がすでに WRS 1 次または WRS 2 次、あるいは WRR 1 次または WRR 代替になっている場合
 - 予備インターフェースが WRR 代替として構成され、その構成済み WRR 1 次がすでに WRS 1 次または WRS 2 次、あるいは WRR 代替になっている場合
 - 予備インターフェースが WRR 代替として構成され、その構成済み WRR 1 次がすでに別の WRR 代替によってアクティブに再ルート選択中である場合

インターフェースのリセット

装置はリスタートしないで、ネットワーク・インターフェースの構成をそのブリッジングおよびルーティング・プロトコルの構成と共に変更する必要がある場合があります。reset コマンドを使用すれば、ネットワーク・インターフェースを使用不可にした上で、新しいインターフェース、ブリッジング、およびルーティング構成パラメーターを使用して使用可能にすることができます。

インターフェース、プロトコル、およびフィーチャーの構成パラメーターは、CONFIG プロセス (talk 6) コマンドを使用して変更します。talk 6 コマンドを使用すると、構成メモリーの内容に影響が生じます。構成変更をアクティブにするには、GWCON プロセス (talk 5) reset コマンドを発行します。

CONFIG (Talk 6) プロセスの使用

インターフェースのリセットは、次の手順に従って行います。

1. CONFIG プロセス (talk 6) にアクセスする。
2. **net** コマンドおよびその他のコマンドを使用して、構成パラメーターを変更する。
3. **protocol** および **feature** コマンドを使用して、インターフェース・ベースの構成パラメーターを変更する。
4. **Ctrl-P** を押して、CONFIG プロセスを終了する。
5. GWCON プロセス (talk 5) にアクセスする。
6. **reset** コマンドを使用して、インターフェースとインターフェース上のプロトコルおよびフィーチャーをリセットする。

例：

```
* talk 6
Config>net 1
PPP Config>

... change PPP parameters ...

PPP Config>exit
Config>protocol ipx
IPX Config>

... change IPX parameters on the PPP interface ...

IPX Config>exit
Config>
* talk 5
+reset 1
Resetting net 1 PPP/0...successful
```

注：構成プログラムを使用するときは、以下のようにして既存のインターフェースに構成変更を加えます。

1. 装置上のインターフェースの構成変更を行う。
2. **reset** コマンドを入力して、インターフェース、プロトコル、およびフィーチャーのパラメーターをリセットする。
3. 構成プログラムを使用して、構成を検索する (取り出す)。
4. 検索した (取り出した) 構成を構成プログラム・データベースに保管する。

インターフェースのリセットに関する制約事項

以下の条件のもとでは、**reset** コマンドを使用してネットワーク・インターフェースをリセットすることはできません。

- すでに **delete interface** コマンドを入力した場合。削除されたインターフェースがある場合は、装置を再ロード する必要があります。
- ハードウェアまたはデータ・リンクのタイプを変更した場合。例として、データ・リンク・タイプを PPP からフレーム・リレーに変更した場合があります。
- 大型の MTU を構成した場合
- インターフェース上にルーティング・プロトコルまたはブリッジングを構成したが、そのルーティング・プロトコルまたはブリッジングが現在装置内でアクティブになっていない場合

上記の場合、装置を再ロードして、構成変更を起動する必要があります。

CONFIG (Talk 6) プロセスの使用

以下のタイプのインターフェースの構成パラメーターを変更することはできませんが、**reset** コマンドを使用して、構成変更を起動することはできません。

- ATM
- PPP マルチリンク・マスターおよび専用リンク・ネット
- ISDN
- X.25
- SDLC
- SDLC リレー
- V.25bis

上記の構成変更を起動するには、装置を再ロードする必要があります。

以下のプロトコルおよびフィーチャーの構成パラメーターを変更することはできませんが、**reset** コマンドを使用して、その変更を起動することはできません。

- AppleTalk
- Vines
- OSI/DECnet V
- LNM
- XTP
- WAN 復元
- WAN 再ルート

上記の構成変更を起動するには、装置を再ロードする必要があります。

特定の機能に関しては要件もあります。それらは、以下に示されています。

PPP ダイアル回線 ダイアル回線パラメーターに変更されたものがある場合は、PPP ダイアル回線はリセットできません。

フレーム・リレー・ダイアル回線 ダイアル回線パラメーターに変更されたものがある場合は、フレーム・リレー・ダイアル回線はリセットできません。

圧縮 圧縮にはヘッダーおよびトレーラーのサイズを大きくする必要があります。別のインターフェース上で圧縮がすでに使用可能になっている場合を除けば、ヘッダーもトレーラーもサイズが小さ過ぎる可能性が大です。この場合は、インターフェース上で圧縮が自動的に使用不可になり、ELS メッセージがログに記録されます (リセット・インターフェース全体が失敗するのではなく)。

ESCON 基本ネット ESCON 基本ネットをリセットすると、関連するバーチャル・ネットはすべて自動的にリセットされます。

PCA 基本ネット PCA 基本ネットをリセットすると、関連するバーチャル・ネットはすべて自動的にリセットされます。

CONFIG (Talk 6) プロセスの使用

チャンネル・バーチャル・ネット	次のバーチャル・ネット・パラメーターをリセットするために、ESCON または PCA 基本ネットをリセットする必要があります：サブチャンネル (追加/削除/変更/移動)、LAN タイプ、LAN 番号、ブロック・タイマー、肯定応答長さ。
ブリッジング	<ul style="list-style-type: none">ブリッジングがすでにアクティブになっていません。リセットしようとしているインターフェース上で NetBIOS フィルターが定義されています。リセット・インターフェースによってブリッジのパーソナリティまたは振る舞いに変更が生じました (たとえば、純然たる TB ブリッジに SR ポートが追加されたり、SR-TB 変換が使用可能にされるなど)。
BGP	新規近隣を起動する場合は、BGP reset neighbor コマンドを使用します。
APPN	構成変更を起動する場合は、 activate_new_config コマンドを使用します。
IPX	静的ルート、静的サービス、およびフィルター・リストの構成変更を起動する場合は、IPX reset コマンドを使用します。
DNA IV	構成変更を起動する場合は、DNA IV set コマンドを使用します。
SNMP	構成変更を起動する場合は、SNMP revert コマンドを使用します。

システム・ダンプの使用

2216 でのデバッグの問題に役立つツールにシステム・ダンプがあります。ダンプは、システムがハード・ディスクまたはネットワーク上のリモート・ホストに保管する圧縮スナップショットです。

ダンプの構成手順は、次のとおりです。

1. いずれの 3 つのダンプ・ファイルを保管するかを指定する。詳しくは 109 ページを参照してください。
2. ダンプのあと、再度ダンプを使用可能にするかどうかを指定する。詳しくは 109 ページを参照してください。
3. 2216 でダンプを使用可能にする。詳しくは 97 ページを参照してください。

システム・ダンプの状況を表示させることも、システムからダンプを検索することもできます。それぞれについて、114ページの『System View』 および 113ページの『System Retrieve』 を参照してください。

第9章 CONFIG プロセスの構成と監視

この章では、CONFIG プロセスの構成およびオペレーショナル・コマンドについて説明します。この章は以下の節に分かれています。

- 『CONFIG への出入り』
- 『CONFIG コマンド』

CONFIG への出入り

OPCON (*) から CONFIG に入るには、次のようにします。

1. OPCON プロンプトで **status** コマンドを入力して、CONFIG の PID を見付ける。
(**status** コマンドの出力例は、11 ページを参照してください。)

* status

2. OPCON **talk** コマンドと CONFIG の PID を入力する。

* talk 6

コンソールに CONFIG プロンプト (Config>) が表示されます。ここで CONFIG コマンドを入力することができます。このプロンプトが表示されない場合は、再度 **Return** キーを押してください。CONFIG を終了して OPCON プロンプト (*) に戻るには、インターセプト文字を入力します。(デフォルトは **Ctrl-P** です。)

CONFIG コマンド

この節では、個々の CONFIG コマンドについて説明します。各コマンドごとに、説明、構文の要件、および例を示します。CONFIG コマンドの要約を表7 に示します。

CONFIG 環境にアクセスした後、Config> プロンプトで構成コマンドを入力します。

表7. CONFIG コマンドの要約

コマンド	機能
? (Help)	このコマンド・レベルで使用可能なコマンドをすべて表示するか、特定のコマンドに関するオプション (ただし、選択可能な場合) をリストします。12ページの『ヘルプを得る』を参照してください。
Add	インターフェースをルーター構成に追加するか、またはユーザーをルーターに追加します。
Boot	Boot CONFIG コマンド・モードに入ります。
Change	ユーザーのパスワード、またはこのインターフェースに関連するユーザーのパラメーター値を変更します。インターフェースのスロット/ポートも変更します。
Clear	構成情報を消去します。
Delete	インターフェースをルーター構成から削除するか、または構成済みのユーザーを削除します。また、システム・ダンプ・ファイルも削除します。
Disable	リモート・コンソールからのログインを使用不可にします。
Enable	リモート・コンソールからのログインを使用可能にし、モデムの使用を使用可能にします。

CONFIG コマンド

表 7. CONFIG コマンドの要約 (続き)

コマンド	機能
Event	イベント・ログ・システム構成環境に入ります。
Feature	通常のプロトコルおよびネットワーク・インターフェースの構成プロセスの外部の、独立したルーター・フィーチャーの構成コマンドへのアクセスを提供します。
List	システム・パラメーター、ハードウェア構成、ユーザーの 全リストを表示します。
Load	オプションのソフトウェア・パッケージをリスト、追加、または削除します。
Network	指定されたネットワークの構成環境に入ります。
Patch	ルーターのグローバル構成を変更します。
Performance	メインプロセッサの使用状況統計のスナップショットを提供します。
Protocol	指定されたプロトコルのコマンド環境に入ります。
Qconfig	Quick Config プロセスを開始します。
Set	バッファ、ホスト名、非活動タイマー、パケット・サイズ、プロンプト・レベル、予備インターフェースの数、 dump parameters, location, and contact person.
System Retrieve	ダンプを検索します。
System View	ダンプ設定値および現行ダンプ状況を表示します。ダンプの要約も表示します。
Time	システム時刻を維持し、コンソールに表示します。
Unpatch	変更した変数をデフォルト値に復元します。
Update	構成の現行バージョンを更新します。
Write	現行構成情報を不揮発性メモリーに書き込みます。

Add

add コマンドは、インターフェースを構成に追加したり、ユーザー・アクセスのために使用します。このコマンドは、不注意で構成を消失した場合、装置レコードを再作成するのにも使用されます。

構文 :

```
add                callback . . .  
                   device  
                   isdn-address . . .  
                   ppp-user  
                   tunnel-profile  
                   user . . .  
                   v25-bis-address
```

Callback

add callback コマンドを使用して、ISDN でのコールバックに関する情報を追加、削除またはリストします。

Add 認証リストにコールバック番号を追加します。

Delete 認証リストからコールバック番号を削除します。

Lists 認証リストおよび他の関連情報を表示します。

device *device_type additional-config-info*

add device コマンドでは、インターフェース装置タイプ (*device_type*) を入力する必要があります。追加の構成パラメーターの入力を指示するプロンプトが出されます。この追加情報は、装置やプラットフォームによって異なります。装置タイプおよび構成パラメーターについての詳細は、19ページの『ネットワーク・インターフェースの構成および操作プロセスへのアクセス』を参照してください。

注: 複数のインターフェースを追加する場合、装置は追加される装置に順次にインターフェース番号を割り当てるので、追加する順序は重要です。このインターフェース番号は、装置リストのインデックス番号であり、装置を他のプロトコル構成情報 (装置に関連した IP アドレスなど) に関係します。(詳細については、99ページの『List』の **list devices** コマンドの項を参照してください。)

ネットワーク・インターフェースに関連する装置およびプロトコルの構成情報は、すべてインターフェース番号別に保管されます。インターフェース番号に変更を加えると、プロトコル内の装置構成情報の多くが無効になります。

例 :

```
add device atm
Device Slot #(1-8) [1]? 2
Adding CHARM ATM Adapter device in slot 2 port 1 as interface x
(where x is the interface number assigned)
```

追加できる装置を判別するには、**add devices ?** command.

isdn-address *address-name network-dial-address network-subdial-address*

ルーターと通信する ISDN エンドポイントのローカル番号とリモート番号を追加します。

address-name

何でも構いません (ポートの記述など)。

network-dial-address

ローカル・ポートまたはあて先ポートの電話番号

network-subdial-address

インターフェースを PBX に接続したときに解釈される、電話番号の追加部分 (内線番号など)。このパラメーターはオプションです。

注: 句読点 (括弧やダッシュなど) も使用できますが、句読点は有効文字とは見なされません (ルーターは数字だけを使用します)。

```
Example: add isdn-address line 1 local
Assign network dial address [0 - 32 digits]? 1 2345 67
Assign network subdial address [0 - 19 digits]? 98765
```

ppp-user

リモート・ユーザーのユーザー・プロファイルをローカル PPP ユーザー・データベースに追加します。最大 500 のユーザーを追加できます。構成している装置に接続できるそれぞれのリモート・ルーターまたは DIAL クライアントごとに、PPP ユーザーを追加します。以下の条件のいずれかが存在する場合は、PPP ユーザーを構成する必要があります。

CONFIG コマンド

- PPP 認証プロトコル、PPP 暗号化を使用する場合、または、ユーザーにダイヤルアウト・フィーチャーの使用を認める場合。以下のタイプの暗号化に合うように PPP ユーザーを構成する必要があります - 暗号化制御プロトコル (ECP) または Microsoft ポイント・ポイント暗号化 (MPPE)。ただし、MPPE には暗号化キーは不要です。
- PPP ユーザー・データベースを装置によってローカルに保管、管理させたい場合。PPP ユーザー情報を RADIUS、TACACS、または TACACS+ サーバーから入手するようにしたい場合は、ローカル PPP ユーザーを構成する代わりに、認証機能を構成することが必要です。

注: MPPE は、RADIUS、TACACS、または TACACS+ サーバーを使用することはできません。MPPE の場合、PPP ユーザー・データベースはローカルである必要があります。

そのユーザーに対して ECP が使用可能にされた場合、PPP ユーザー名、パスワード、IP アドレス、および暗号化キーを入力するように求められます。

DIALs フィーチャーがソフトウェア・ロードにある場合、これが DIALs ユーザーかどうかを尋ねられます。

DIALs クライアントにユーザーを追加する場合、ホスト名、ルートのタイプ、ネットワーク・マスク、接続時間、およびコールバック情報をプロンプト指示されます。

詳しくは、**機構の使用と構成** 中の『LAN へのダイヤルイン・アクセス (DIALs) サーバーの使用』を参照してください。

装置上にローカルに保管されるユーザー・プロファイルは、以下から構成されます。

Name 認証中に使用される、PPP ユーザーのユーザー ID。590ページの『PPP 認証プロトコル』を参照してください。

Password

認証中に使用される、ユーザーおよび装置に認知されるパスワード。長さが最大 31 文字で、任意の英数字が使用でき、大文字小文字の区別があります。詳しくは、590ページの『PPP 認証プロトコル』を参照してください。

Enter again to verify

検査のために再度パスワードを入力します。

Allow inbound access

このユーザー・プロファイルへのインバウンド・アクセスを許可します。

有効値 : yes、no

デフォルト値 : no

Will user be tunneled?

このダイヤルイン・ユーザーについて、LNS であって先にトンネル伝送される必要があるかどうか指定します。『yes』と応答する場合は、LNS に関する情報の入力を指示するプロンプトが出されます。

有効値 : yes、no

デフォルト値 : no

Number of days before account expiry

パスワード失効までの日数

有効値 : 0 ~ 360

デフォルト値 : 180

Number of grace logins allowed

パスワード失効後にも許可されるログインの試行回数

有効値 : 0 ~ 100

デフォルト値: 0

Hostname to use when connecting to this peer:

トンネル・セットアップ中に ID として LNS に渡される、この LAC のローカル・ホスト名を指定します。

Tunnel Server endpoint:

このユーザーのトンネル伝送先 LNS の IP アドレスを指定します。

Type of Route

『ホスト・ルート』 と 『ネット・ルート』 のいずれかです。

ホスト・ルートが該当するのは、一般的に単一ユーザー・アクセスの場合です。ネット・ルートが該当するのは、一般的にネットワーク・アクセスの場合です。ネット・ルートではネットマスクを入力することができます。

IP Address

ユーザーに割り当てられる IP アドレス

必要な場合にダイヤルイン・クライアントに示されるユーザー・プロファイル・ベースの IP アドレス。2216 がダイヤルイン・クライアントの IP アドレスを入手する方法は数多くあります。詳しくは、597ページの『IP 制御プロトコル』を参照してください。

有効値 : 任意の有効な IP アドレス

デフォルト値 : なし

Net-Route Mask

ネットワーク・ユーザーのマスク

ダイヤルイン・ユーザーが DIAL 使用可能 PPP インターフェースに接続する場合は、ルーターは、PPP セッションの期間中、そのクライアントへの一時的な静的ルートを自動的に追加します。一般的に、この静的ルートには 255.255.255.255 (デフォルト値) というネットマスクがあり、これは、PPP リンクの他端に単一の IP ホストがあることを暗黙に示すものです。ただし、ネットマスクはオーバーライドすることができます。このマスクが構成されている場合は、一時ルートの追加時に使用されます。その一例として、ホストのネットワークを1つもち、DIAL 使用可能ルーターにダイヤルインする小規模なルーターがあります。小規模なオフィス・ルーターへの単一ルートは、ユーザー・プロファイルに基づいて自動的に導入されるので、2つのホス

CONFIG コマンド

ト間にルーティング・プロトコルを構成する必要はなく、潜在的に低速のリンクでのルーティング・トラフィック・オーバーヘッドが削減されます。

Hostname

動的 DNS で使用するためにプロキシ DHCP サーバーに送信されるホスト名。詳しくは、 *機構の使用と構成* 中の『LAN へのダイヤルイン・アクセス (DIALs) サーバーの使用』を参照してください。

Time-Allotted

DIAL ユーザーが接続できる時間の長さ。これはこのセッションの合計であって、非活動タイマーと混同してはなりません。

有効値 : 0 ~ 71 827 788 分 (0= 無制限)

デフォルト値: 0

Callback type

『Roaming』と『Required』のどちらかのコールバック方式。コールバック・パラメーターは、ルーターがユーザーをコールバックするかどうかを指定し、コールバックする番号を指定する場合に使用されます。追加情報については、594ページの『PPP コールバックの構成』を参照してください。

Set encryption key

ECP 暗号化をこのユーザー / ポートについて使用可能にするかどうかを指定します。

有効値 : yes、no

デフォルト値 : no

ECP encryption key

16 文字の ECP 暗号化キーを入力します。

このパラメーターが表示されるのは、talk 6 PPP Config> **enable ecp** コマンドを使用して PPP 暗号化制御プロトコル (ECP) が使用可能にされている場合だけです。MPPE には暗号化キーは不要です。この ECP 暗号化キーは、PPP 暗号化制御プロトコル (ECP) によって使用されます。 *機構の使用と構成* 中の、『暗号化プロトコルの使用および構成』を参照してください。

Disable user

ユーザー・プロファイルを使用不可にすることができます。

有効値 : yes、no

デフォルト値 : no

例 :

```
Config>add ppp-user
Enter name: [ ]? pppusr01
Password:
Enter again to verify:
Allow inbound access for user? (Yes, No): [yes]
Will user be tunneled? (Yes, No): [No]
Number of days before account expiry[0-1000] [0]? 10
Number of grace logins allowed after an expiry[0-100] [0]? 5
IP address: [0.0.0.0]? 1.1.1.1
Set ECP encryption key for this user? (Yes, No): [No] no
Disable user ? (Yes, No): [No]
```

```

    PPP user name: pppusr01
    User IP address: 1.1.1.1
    Virtual Conn: disabled
    Encryption: disabled
    Status: enabled
    Login Attempts: 0
    Login Failures: 0
    Lockout Attempts: 0
    Account expires: Sun 17Feb2036 06:28:16
    Account duration: 10 days 00.00.00
    Password Expiry: <unlimited>

```

User 'pppusr01' has been added

例 :

```

Config>add ppp-user
Enter name: [ ]? tunusr01
Password:
Enter again to verify:
Allow inbound access for user? (Yes, No): [yes]
Will user be tunneled? (Yes, No): [No] yes
Enter hostname to use when connection to this peer: []? host01
Tunnel-Server endpoint address: [0.0.0.0]? 1.1.1.1

--more--          PPP user name: tunusr01
--more--          Endpoint: 1.1.1.1
--more--          Hostname: host01

```

User 'tunusr01' has been added

ECP 暗号化による例 :

```

Config>add ppp-user
Enter name: [ ]? ppp_user2
Password:
Enter again to verify:
Allow inbound access for user? (Yes, No): [Yes]
Will user be tunneled? (Yes, No): [No]
Is this a 'DIALs' user? (Yes, No): [Yes]
Type of route? (hostroute, netrout): [hostroute]
Number of days before account expiry[0-1000] [0]?
Number of grace logins allowed after an expiry[0-100] [0]?
IP address: [11.0.0.185]?
Allow virtual connections? (Yes, No): [No]
Give user default time allotted ? (Yes, No): [Yes]
Enable callback for user? (Yes, No): [No]
Will user be able to dial-out ? (Yes, No): [No]
Set ECP encryption key for this user? (Yes, No): [No] y
Encryption key should be 16 characters long.
Encryption Key (16 characters ) in Hex(0-9, a-f, A-F):
Encryption Key again (16 characters) in Hex(0-9, a-f, A-F):
ECP encryption key is set.
Disable user ? (Yes, No): [No]

```

```

    PPP user name: ppp_user2
    User IP address: 11.0.0.185
    Netroute Mask: 255.255.255.255
    Hostname:          Virtual Conn: disabled
    Time allotted: Box Default
    Callback type: disabled
    Dial-out: disabled
    Encryption: enabled
    Status: enabled
    Login Attempts: 0
    Login Failures: 0
    Lockout Attempts: 0
    Account Expiry:   Password Expiry:
Is information correct? (Yes, No, Quit): [Yes]

```

User 'ppp_user1' has been added

tunnel *tunnel-name*

IP ネットワークを介するルーターへのピア・アクセスを付与します。そうすると、このピアにルーター内へのトンネル伝送 PPP セッションを開始する許可が与えられます。トンネルを構成するには、以下の指定が必要です。

Name トンネル・ピアのホスト名

CONFIG コマンド

Hostname to use when connecting to this peer

このピアに接続するとき使用するローカル・ホスト名。この名前は、ピア上のホストの識別のために使用されます。

Set shared secret

共用シークレットを使用するかどうかを指定します。

Shared Secret

LAC と LNS の間で共用される秘密。これはトンネルの両端で同じである必要があります。

Enter again to verify

検査のために共用シークレットを再度入力します。

Tunnel-Server endpoint address

トンネル・ピア (LAC または LNS) の IP アドレス。

例 :

```
Config> add tunnel
Enter name: []? tunnel02
Enter hostname to use when connecting to this peer: []? host02
Set shared secret? (Yes, No): [No]? yes
Shared secret for tunnel authentication:
Enter again to verify:
Tunnel-Server endpoint address: [0.0.0.0]? 2.2.2.22
```

```
Tunnel name: tunnel02
Endpoint: 2.2.2.22
```

user *user_name*

ルーターへのユーザー・アクセスを付与します。最高 50 人のユーザーにルーターへのアクセスを許可することができます。 *user_name* はそれぞれ 8 文字で、大文字小文字を区別します。

最初のユーザーが追加されると、コンソール・ログインが自動的に使用可能にされます。追加された各ユーザーに、表8 に定義されている許可レベルの 1 つを割り当てる必要があります。

ユーザーが追加されたら、ログイン認証を local (ローカル) に設定します。そうでない場合は、リモート・サーバーを使用する必要があります。

表8. アクセス許可

許可レベル	説明
システム管理者 (A)	構成およびユーザー情報を表示し、構成およびユーザー情報を追加/変更/削除します。システム管理者は、どのルーター機能にもアクセスできます。
オペレーター (O)	ルーター構成の表示、統計の表示、システム中断の有無を調べるテストの実行、ルーターの動作の動的変更、およびルーターのリスタートを行います。オペレーターは、固定されたルーター構成を変更することはできません。処置はすべて、システム・リスタートによってやり直すことができます。
モニター (M)	ルーターの構成および統計を表示しますが、ルーターの動作を変更したり、中断したりすることはできません。
技術サポート	パスワードを忘れたときに、サービス技術員がルーターにアクセスできるようにします。ユーザーに割り当てることはできません。

CONFIG コマンド

注: ユーザーを追加するには、管理許可が必要です。ユーザーを追加した後でルーターを再初期化する必要はありません。

例 :

```
add user John
Enter password:
Enter password again:
Enter permission (A)dmin, (O)perations, (M)onitor [A]?
Do you want to add Technical Support access? (Yes or [No]):
```

Enter password

ユーザーのアクセス・パスワードを確認します。80 字の英数字に限定され、大文字小文字を区別します。

Enter password again

ユーザーのアクセス・パスワードを確認します。

Enter permission

ユーザーの許可レベル (A、O、または M) を指定します (84ページの表8 を参照してください)。

v25-bis-address

ルーターと通信するローカルおよびリモートの V.25bis エンドポイントの番号を追加します。ネットワークの *address-name* は、何でも構いません (ポートの記述など)。最大 23 字までの印刷可能 ASCII ストリングを使用できます。*network-dial-address* は、ローカル・ポートまたは先ポートの電話番号です。詳しくは、709ページの『第46章 V.25bis ネットワーク・インターフェースの使用』を参照してください。

注: 句読点 (括弧やダッシュなど) も使用できますが、句読点は有効文字とは見なされません (ルーターは数字だけを使用します)。

```
例 : add v25-bis-address
      remote-site baltimore 1-909-555-0983
```

Boot

boot コマンドは、Boot CONFIG コマンド環境に入るのに使用します。Boot CONFIG 情報については、47ページの『第6章 BOOT Config の使用による変更管理の実行』を参照してください。

構文 :

boot

Change

change コマンドは、構成内のインターフェースの変更、ユーザー自身のパスワードの変更、またはユーザー情報の変更を行うのに使用します。

構文 :

```
change                               device . . .
                                         password
                                         ppp_user . . .
```

tunnel-profile

device *device_type*

With the **change device** command you can:

- 既存のインターフェースのスロットを変更する (インターフェース・レコード *n* 内のスロット *x* を *y* (ただし、スロット *y* は空スロット) に変更します。)
- 既存のインターフェースのポートを変更する (インターフェース・レコード *n* 内のポート *x* を *y* (ただし、ポート *y* は空ポート) に変更します。)
- 2 つの既存のインターフェースのスロットを交換する (インターフェース・レコード内のスロット *x* とスロット *y* を、*x* または *y* と交換します。)
- 2 つの既存のインターフェースのポートを交換する (あるインターフェース・レコード内のポート *u* とスロット *x* を、同じハードウェア・タイプの別のインターフェース・レコード内のポート *v* とスロット *y* と交換します。)
- 既存のインターフェースのスロットを、別のインターフェースのスロットで置き換える (スロット *x* のインターフェース構成が、スロット *y* のインターフェース構成になります。スロット *y* のインターフェース・レコードは削除されます。)
- ある既存のインターフェースのポートを、別のインターフェースのポートで置き換える (スロット *x* ポート *u* のインターフェース構成が、スロット *y* ポート *v* のインターフェース構成になります。スロット *y* ポート *v* のインターフェース・レコードは削除されます。)

ターゲット・スロットが占有されている場合は、次のようになります。

1. 『swap』 オプションを選択した場合、すべての該当するインターフェース・レコード内のソース・スロットおよびターゲット・スロットが交換されます。
2. 『replace』 オプションを選択した場合、スロット *x* のインターフェース構成が、スロット *y* のインターフェース構成になります。スロットのインターフェース・レコードは削除されます。

ターゲット・ポートが占有されている場合は、次のようになります。

1. 『swap』 オプションを選択した場合、該当するインターフェース・レコード内のハードウェア・タイプが同一であれば、ソース・ポートとターゲット・ポートはそれぞれのインターフェース・レコード内で交換できます。たとえば、1 ポート ISDN T1/J1。
2. 『replace』 オプションを選択した場合、スロット *x* ポート *u* のインターフェース構成が、スロット *y* ポート *v* のインターフェース構成になります。スロット *y* ポート *v* のインターフェース・レコードは削除されず。

注: イーサネットまたはトークンリング・アダプター・カードは、スロット 3、4、7、または 8 に導入する場合、2 つの空スロットが必要です。したがって、トークンリングまたはイーサネット・アダプターは、スロット 3 と 4 (または 7 と 8) の両方とも空の場合にのみ、スロット 3 または 4 (あるいは、スロット 7 または 8) に導入することができます。

CONFIG コマンド

スロット 3 と 4 (または、7 と 8) の両方ともが空でないときに、トークンリングまたはイーサネット・アダプターのスロットを、スロット 3 または 4 (あるいは、7 または 8) に変更しようとした場合、その変更は受け入れられず、警告メッセージが出ます (87『インターフェース 1 のスロット 6 を空スロット 8 に変更』の例に示されています)。

例 - インターフェース 1 のスロット 1 を占有スロット 2 に変更 (置換) する。

```
Config>list dev
Ifc 0 CHARM ATM           Slot: 2 Port: 1
Ifc 1 CHARM ATM           Slot: 1 Port: 1

Config>change device
Which configured slot would you like to change? (1, 2) [2]? 1
Which slot would you like to change to? (1-2) [1]? 1

Configuration for slot 2 already exists. You can:
a - abort this operation
r - replace configuration
   (Interface configuration for slot 1 will become interface
   configuration for slot 2. Interface records for slot 2
   will be deleted!)
s - swap configuration (slot 1 will be swapped with slot 2.)
r

Moved slot 2 to slot 1 in 1 intf (port) record...

Config>list dev
Ifc 0 CHARM ATM           Slot: 2 Port: 1
```

例 - インターフェース 0 のスロット 5 を空スロット 7 に変更する。

```
Config>list dev
Ifc 0 Token Ring          Slot: 5 Port: 1
Ifc 1 Token Ring          Slot: 6 Port: 1
Ifc 2 Token Ring          Slot: 1 Port: 1
Ifc 3 8 port EIA-232E/V.24 PPP Slot: 2 Port: 0
Ifc 4 8 port EIA-232E/V.24 PPP Slot: 2 Port: 1
Ifc 5 8 port EIA-232E/V.24 PPP Slot: 2 Port: 2
Ifc 6 6 port V.35/V.36 PPP Slot: 3 Port: 0
Ifc 7 6 port V.35/V.36 PPP Slot: 3 Port: 5
Ifc 8 8 port EIA-232E/V.24 PPP Slot: 4 Port: 0

Config>change device
Which configured slot would you like to change? (1, 2, 3, 4, 5, 6)[1]? 5
Change all ports on slot # 5 (Yes or No)? [Yes]: y
Which slot would you like to change to? (1-8) [1]? 7

Changed slot 5 to slot 7 in 1 intf (port) record...

Config>list dev
Ifc 0 Token Ring          Slot: 7 Port: 1
Ifc 1 Token Ring          Slot: 6 Port: 1
Ifc 2 Token Ring          Slot: 1 Port: 1
Ifc 3 8 port EIA-232E/V.24 PPP Slot: 2 Port: 0
Ifc 4 8 port EIA-232E/V.24 PPP Slot: 2 Port: 1
Ifc 5 8 port EIA-232E/V.24 PPP Slot: 2 Port: 2
Ifc 6 6 port V.35/V.36 PPP Slot: 3 Port: 0
Ifc 7 6 port V.35/V.36 PPP Slot: 3 Port: 5
Ifc 8 8 port EIA-232E/V.24 PPP Slot: 4 Port: 0
```

これで、インターフェース 0 はスロット 7 に変更されました。

例 - インターフェース 1 のスロット 6 を空スロット 8 に変更する。

```
Config>change device
Which configured slot would you like to change? (1, 2, 3, 4, 6, 7)[1]? 6
Change all ports on slot # 6 (Yes or No)? [Yes]: y
Which slot would you like to change to? (1-8) [1]? 8

Cannot add Token Ring to slot 8.
Slot 7 is occupied so Token Ring cannot be added in slot 8.
```

注: トークンリングまたはイーサネットの場合に、スロット 3、4、7、および 8 を変更するための要件については、86ページの2の注を参照してください。

CONFIG コマンド

例 - インターフェース 1 のスロット 6 を占有スロット 1 と交換する。

```
Config>change device
Which configured slot would you like to change? (1, 2, 3, 4, 6, 7) [1] 6
Change all ports on slot # 6 (Yes or No)? [Yes]: y
Which slot would you like to change to? (1-8) [1]? 1

Configuration for slot 1 already exists. You can:
a - abort this operation
r - replace configuration
   (Interface configuration for slot 6 will become interface
   configuration for slot 1. Interface records for slot 1
   will be deleted!)
s - swap configuration (slot 1 will be swapped with slot 6.)
s

Swapped slot 6 with slot 1 in 1 port record...

Config>list dev
Ifc 0 Token Ring                Slot: 7 Port: 1
Ifc 1 Token Ring                Slot: 1 Port: 1
Ifc 2 Token Ring                Slot: 6 Port: 1
Ifc 3 8 port EIA-232E/V.24 PPP  Slot: 2 Port: 0
Ifc 4 8 port EIA-232E/V.24 PPP  Slot: 2 Port: 1
Ifc 5 8 port EIA-232E/V.24 PPP  Slot: 2 Port: 2
Ifc 6 6 port V.35/V.36 PPP      Slot: 3 Port: 0
Ifc 7 6 port V.35/V.36 PPP      Slot: 3 Port: 5
Ifc 8 8 port EIA-232E/V.24 PPP  Slot: 4 Port: 0
```

インターフェース 2 とインターフェース 1 の構成が交換されています。

例 - インターフェース 1 のスロット 1 でスロット 6 を置換し、インターフェース 1 が削除される。

```
Config>change device
Which configured slot would you like to change? (1, 2, 3, 4, 6, 7) [1] 6
Change all ports on slot # 6 (Yes or No)? [Yes]: y
Which slot would you like to change to? (1-8) [1]? 1

Configuration for slot 1 already exists. You can:
a - abort this operation
r - replace configuration
   (Interface configuration for slot 6 will become interface
   configuration for slot 1. Interface records for slot 1
   will be deleted!)
s - swap configuration (slot 1 will be swapped with slot 6.)
r

Moved slot 6 to slot 1 in 1 intf (port) record...

Config>list dev
Ifc 0 Token Ring                Slot: 7 Port: 1
Ifc 1 Token Ring                Slot: 1 Port: 1
Ifc 2 8 port EIA-232E/V.24 PPP  Slot: 2 Port: 0
Ifc 3 8 port EIA-232E/V.24 PPP  Slot: 2 Port: 1
Ifc 4 8 port EIA-232E/V.24 PPP  Slot: 2 Port: 2
Ifc 5 6 port V.35/V.36 PPP      Slot: 3 Port: 0
Ifc 6 6 port V.35/V.36 PPP      Slot: 3 Port: 5
Ifc 7 8 port EIA-232E/V.24 PPP  Slot: 4 Port: 0
```

スロット 6 のレコードが元のスロット 1 のレコードと置き換わり、その他のインターフェースは番号が付け直されています。

例 - スロット 2 を空スロット 5 に変更する。

```
Config>change device
Which configured slot would you like to change? (1, 2, 3, 4, 7) [1]? 2
Change all ports on slot # 2 (Yes or No)? [Yes]: y
Which slot would you like to change to? (1-8) [1]? 5

Changed slot 2 to slot 5 in 3 intf (port) records...

Config>list dev
Ifc 0 Token Ring                Slot: 7 Port: 1
Ifc 1 Token Ring                Slot: 1 Port: 1
Ifc 2 8 port EIA-232E/V.24 PPP  Slot: 5 Port: 0
Ifc 3 8 port EIA-232E/V.24 PPP  Slot: 5 Port: 1
Ifc 4 8 port EIA-232E/V.24 PPP  Slot: 5 Port: 2
Ifc 5 6 port V.35/V.36 PPP      Slot: 3 Port: 0
Ifc 6 6 port V.35/V.36 PPP      Slot: 3 Port: 5
Ifc 7 8 port EIA-232E/V.24 PPP  Slot: 4 Port: 0
```

以前はスロット 2 に構成されていたインターフェース 2、3、および 4 が、スロット 5 に構成されています。

例 - ポート 1 スロット 5 を空スロット 2 のポート 0 に変更する。

```
Config>change device
Which configured slot would you like to change? (1, 3, 4, 5, 7) [1]? 5
Change all ports on slot # 5 (Yes or No)? [Yes]: n
Which port would you like to change in slot 5? (0, 1, 2) [0]? 1
Which slot would you like to change to? (1-8) [1]? 2
Which port would you like port 1 in slot 5 to move to in slot2?#(0-7)[0]? 0

Changed slot 5 port 1 to slot 2 port 0...
```

```
Config>list dev
Ifc 0 Token Ring                Slot: 7 Port: 1
Ifc 1 Token Ring                Slot: 1 Port: 1
Ifc 2 8 port EIA-232E/V.24 PPP  Slot: 5 Port: 0
Ifc 3 8 port EIA-232E/V.24 PPP  Slot: 2 Port: 0
Ifc 4 8 port EIA-232E/V.24 PPP  Slot: 5 Port: 2
Ifc 5 6 port V.35/V.36 PPP      Slot: 3 Port: 0
Ifc 6 6 port V.35/V.36 PPP      Slot: 3 Port: 5
Ifc 7 8 port EIA-232E/V.24 PPP  Slot: 4 Port: 0
```

インターフェース 3 (スロット 5 - ポート 1 にあった) が、スロット 2 ポート 0 に変更されました。

例 - ポート 0 スロット 2 をスロット 3 のポート 5 に変更する (異なるハードウェア・タイプ)。

```
Config>change device
Which configured slot would you like to change? (1, 2, 3, 4, 5, 7) [1]? 2
Change all ports on slot # 2 (Yes or No)? [Yes]: n
Which port would you like to change in slot 2? (0) [0]? 0
Which slot would you like to change to? (1-8) [1]? 2
Which port would you like port 0 in slot 2 to move to in slot 3? #(0-7) [0] 5

Aborting - source and target slots of different type.
```

例 - ポート 0 スロット 2 をスロット 4 のポート 5 に変更する (同じハードウェア・タイプ)。

```
Config>change device
Which configured slot would you like to change? (1, 2, 3, 4, 5, 7) [1]? 2
Change all ports on slot # 2 (Yes or No)? [Yes]: n
Which port would you like to change in slot 2? (0) [0]? 0
Which slot would you like to change to? (1-8) [1]? 4
Which port would you like port 0 in slot 2 to move to in slot 4? #(0-7)[0] 5

Changed slot 2 port 0 to slot 4 port 5...
```

```
Config>list dev
Ifc 0 Token Ring                Slot: 7 Port: 1
Ifc 1 Token Ring                Slot: 1 Port: 1
Ifc 2 8 port EIA-232E/V.24 PPP  Slot: 5 Port: 0
Ifc 3 8 port EIA-232E/V.24 PPP  Slot: 4 Port: 5
Ifc 4 8 port EIA-232E/V.24 PPP  Slot: 5 Port: 2
Ifc 5 6 port V.35/V.36 PPP      Slot: 3 Port: 0
Ifc 6 6 port V.35/V.36 PPP      Slot: 3 Port: 5
Ifc 7 8 port EIA-232E/V.24 PPP  Slot: 4 Port: 0
```

インターフェース 3 (ポート 0、スロット 2 にあった) が、ポート 5、スロット 4 に変更されています。

例 - ポート 5 スロット 4 をスロット 4 のポート 1 に変更する (同じスロット)。

```
Config>change device
Which configured slot would you like to change? (1, 3, 4, 5, 7) [1]? 4
Change all ports on slot # 4 (Yes or No)? [Yes]: n
Which port would you like to change in slot 4? (0, 5) [0]? 5
Which slot would you like to change to? (1-8) [1]? 4
Which port would you like port 5 in slot 4 to move to in slot 4? #(0-7) [0] 1

Changed slot 4 port 5 to slot 4 port 1...
```

CONFIG コマンド

```
Config>list dev
Ifc 0 Token Ring                Slot: 7 Port: 1
Ifc 1 Token Ring                Slot: 1 Port: 1
Ifc 2 8 port EIA-232E/V.24 PPP  Slot: 5 Port: 0
Ifc 3 8 port EIA-232E/V.24 PPP  Slot: 4 Port: 1
Ifc 4 8 port EIA-232E/V.24 PPP  Slot: 5 Port: 2
Ifc 5 6 port V.35/V.36 PPP      Slot: 3 Port: 0
Ifc 6 6 port V.35/V.36 PPP      Slot: 3 Port: 5
Ifc 7 8 port EIA-232E/V.24 PPP  Slot: 4 Port: 0
```

現在、インターフェース 3 はポート 1、スロット 4 にあります。

例 - ポート 1 スロット 4 をスロット 5 の占有ポート 0 に変更 (交換) する。

```
Config>change device
Which configured slot would you like to change? (1, 3, 4, 5, 7) [1]? 4
Change all ports on slot # 4 (Yes or No)? [Yes]: n
Which port would you like to change in slot 4? (0, 1) [0]? 1
Which slot would you like to change to? (1-8) [1]? 5
Which port would you like port 1 in slot 4 to move to in slot 5? #(0-7) [0] 0

Configuration for slot 5 (port 0) already exists. You can:
a - abort this operation
r - replace configuration
    (Interface record for slot 4 port 1 will become interface
    configuration for slot 5 port 0. The interface record for
    slot 5 port 0 will be deleted!)
s - swap configuration (slot 5 port 0 will be swapped with slot 4
    port 1.)
s

Swapped slot 4 port 1 with slot 5 port 0...
```

```
Config>list dev
Ifc 0 Token Ring                Slot: 7 Port: 1
Ifc 1 Token Ring                Slot: 1 Port: 1
Ifc 2 8 port EIA-232E/V.24 PPP  Slot: 4 Port: 1
Ifc 3 8 port EIA-232E/V.24 PPP  Slot: 5 Port: 0
Ifc 4 8 port EIA-232E/V.24 PPP  Slot: 5 Port: 2
Ifc 5 6 port V.35/V.36 PPP      Slot: 3 Port: 0
Ifc 6 6 port V.35/V.36 PPP      Slot: 3 Port: 5
Ifc 7 8 port EIA-232E/V.24 PPP  Slot: 4 Port: 0
```

インターフェース 2 とインターフェース 3 は、それぞれのポート構成およびスロット構成が交換されました。

例 - ポート 1 スロット 4 をスロット 5 の占有ポート 0 に変更 (置換) する。

```
Config>change device
Which configured slot would you like to change? (1, 3, 4, 5, 7) [1]? 4
Change all ports on slot # 4 (Yes or No)? [Yes]: n
Which port would you like to change in slot 4? (0, 1) [0]? 1
Which slot would you like to change to? (1-8) [1]? 5
Which port would you like port 1 in slot 4 to move to in slot 5? #(0-7) [0] 0

Configuration for slot 5 (port 0) already exists. You can:
a - abort this operation
r - replace configuration
    (Interface configuration for slot 4 port 1 will become interface
    configuration for slot 5 port 0. The interface record for
    slot 5 port 0 will be deleted!)
s - swap configuration (slot 5 port 0 will be swapped with slot 4
    port 1.)
r

Moved slot 4 port 1 to slot 5 port 0...

Config>list dev
Ifc 0 Token Ring                Slot: 7 Port: 1
Ifc 1 Token Ring                Slot: 1 Port: 1
Ifc 2 8 port EIA-232E/V.24 PPP  Slot: 5 Port: 0
Ifc 3 8 port EIA-232E/V.24 PPP  Slot: 5 Port: 2
Ifc 4 6 port V.35/V.36 PPP      Slot: 3 Port: 0
Ifc 5 6 port V.35/V.36 PPP      Slot: 3 Port: 5
Ifc 6 8 port EIA-232E/V.24 PPP  Slot: 4 Port: 0
```

インターフェース 2 は、スロット 5 - ポート 0 に構成されています。元のインターフェース 3 は削除され、その他のインターフェースは番号が付け直されています。

password

現在ログインしているユーザーのパスワードを変更します。

注: ユーザー・パスワードを変更するには、管理許可が必要です。

例 :

```
change password
Enter current password:
Enter new password:
Enter new password again:
```

Enter current password

現行パスワードを指定します。

Enter new password

新規パスワードを指定します。

Enter new password again

確認のために、新規パスワードを再び指定します。確認のために指定したパスワードが直前に指定した新規パスワードに一致しない場合、旧パスワードが有効のままになります。

ppp_user

特定の PPP ユーザーに関する情報を変更します。

構文 :

```
change ppp_user          encryption-key
                        parameters
                        password
```

encryption-key

PPP ユーザーの暗号化キーを変更します。次の例は、暗号化キーを変更するためのダイアログを示しています。

例 - 暗号化キーの変更

```
Config>change ppp_user encryption-key
Enter user name: []? leslie
Enable encryption for this user/port (y/n) [No]:y
Encryption key should be 16 characters long.
Encryption Key (16 characters ) in Hex(0-9, a-f, A-F):
Encryption Key again (16 characters) in Hex(0-9, a-f, A-F):
User 'leslie' has been updated
Config>
```

parameters

ユーザーのすべての ppp-user オプションを変更します。このパラメーターは **add ppp_user** と同様に動作します。ただし、[] 内に示されている値は現行値であり、change コマンドは変更の確認を行ったり、変更時にリストを再表示したりしません。 **add ppp_user** コマンドの詳細については、78ページの『Add』を参照してください。

password

PPP ユーザーのパスワードを変更します。

例 - パスワードの変更

CONFIG コマンド

```
Config>change ppp_user password
Enter user name: []? sam
Password:
Enter password again:
User 'sam' has been updated
Config>
```

user 以前に **add user** コマンドを使用して構成したユーザー情報を変更します。

注: ユーザーを変更するには、管理許可が必要です。

例 :

```
change user
User name: []
Change password? (Yes or No)
Change permission? (Yes or [No])
```

tunnel-profile

トンネル・ピアの構成を変更します。

```
Config>change tunnel-profile
Enter name: []? lac.org
Enter hostname to use when connecting to this peer: [lns.org]?
set shared secret? (Yes, No): [No]
Tunnel-Server endpoint address: [11.0.0.1]? 11.0.0.2

profile 'lac.org' has been updated
Config>
```

Clear

clear コマンドは、ルーターの構成情報を不揮発性構成メモリーから削除するのに使用します。

考慮事項: このコマンドは、サービス技術員に連絡してから使用してください。

構文 :

```
clear
    all
    ap2 (AppleTalk 2)
    arp (ARP)
    asrt (Adaptive Source Route Protocol)
    appn (Advanced Peer-to-Peer Networking)
    atm (Asynchronous Transfer Mode)
    auth (Authentication)
    bgp (Border Gateway Protocol)
    boot
    brs (Bandwidth Reservation)
    callback
    cmprs (Data Compression)
    dls (Data Link Switching)
    device
    dialer-circuit
    dn (DECnet)
```


CONFIG コマンド

els (Event Logging System Information)

fr (Frame Relay)

gsmp (OSI)

hdlc

hostname

ip (IP)

ip-security

ipv6

ipx (Novell IPX)

isdn

l2tp

lnm

mcf

named-profiles

nat

ndp6

ndr

osi (OSI)

ospf (OSPF routing protocol)

ppp (Point-to-Point)

prompt

rip6

rsvp

sdlc

snmp

srlly (SDLC Relay)

tcp/ip-host

time (Time of day information)

tsf (Thin Server)

user

v25bis

vines (Banyan VINES)

webc (Web server cache)

wrs (WAN Restoral feature)

x25

xtp

CONFIG コマンド

プロセスを不揮発性構成メモリーから消去するときは、**clear** コマンドとプロセス名を入力します。装置情報を除いて、すべての情報を構成メモリーから消去するときは、**clear all** コマンドを使用します。装置情報も含めてすべての情報を消去する場合は、**clear all** コマンドを使用した上で、**clear device** コマンドを使用します。

clear user コマンドは、ルーター・コンソール・ログイン情報を除いて、すべてのユーザー情報を消去します。これは、デフォルト値が『使用不可』であっても、使用可能のままにされます (使用可能として構成した場合)。

注:

1. ユーザー情報を消去するには、管理許可が必要です。
2. ソフトウェア・ロードに組み込まれているものに応じて、リストに他の項目が含まれている場合があります。

例: **clear els**

```
You are about to clear all Event Logging configuration information
Are you sure you want to do this (Yes or No):
```

注: 上記のメッセージは、どのパラメーター構成を削除している場合も表示されません。

Delete

delete コマンドは、構成内に保管されている装置のリストからインターフェースまたはインターフェースの範囲を除去する場合、またはユーザーを除去する場合に使用します。**delete** コマンドを使用するには、管理許可が必要です。

構文 :

```
delete                interface . . .
                        dump-files
                        isdn-address
                        ppp_user . . .
                        tunnel
                        user . . .
                        v25-bis-address
```

dump-files

ハード・ディスク からすべてのシステム・ダンプ・ファイルを削除します。

注: このコマンドを入力してハード・ディスク が利用不能の場合、ハード・ディスクが使用不可であることを示すメッセージが出されます。

例 :

```
Config> delete dump-files
Number of existing dump files: 3
Are you sure you want to delete the dump files ? (Yes, No): [No] Yes
Dump files deleted.
```

interface [intfc#または intfc#range]

インターフェースを削除するには、インターフェースまたはネットワークの

CONFIG コマンド

番号をコマンドの一部として入力します。(削除することができるのは、**add device** コマンドを用いて追加された装置だけです。) ルーターが割り当てるインターフェース番号を入手するには **list device** コマンドを使用します。

delete interface コマンドは、そのインターフェースの装置構成とプロトコル情報を削除します。ただし、ルーターでは、再ロードされるまでは、以前の構成を実行し続けます。

基本 ISDN インターフェースまたは基本 ATM インターフェース を削除すると、その基本ネットワーク上で実行されているすべてのバーチャル・インターフェースも削除されます。したがって、ISDN インターフェースを削除すると、基本 ISDN インターフェース上に構成されているすべてのダイヤル回線が除去されます。同様に、ATM 基本ネットワークを削除すると、基本 ATM インターフェース上で実行されているすべての LAN エミュレーション・クライアントが削除されます。

インターフェースの範囲を削除する場合は、次の例に示すように、範囲内の最初のインターフェースと最後のインターフェースをハイフンで区切って指定します。

```
delete interface 13-21
```

また、プロンプトで指示された場合は、インターフェース番号またはインターフェース番号の範囲を入力することもできます。

isdn-address *address-name*

前に追加された ISDN アドレスを削除します。

注: *address-name* にスペースが含まれている場合 (たとえば、**remote site XYZ**)、コマンドを 1 行に入力することはできません。 **delete isdn-address** と入力して **Return** を押します。その後、プロンプトで指示されたら、名前を入力します。

ppp_user *user_name*

ユーザーを PPP ユーザー・データベースから削除します。

tunnel-profile

トンネル・プロファイル・データベースからトンネルを削除します。

user *user_name*

指定されたユーザーの、ルーターへのユーザー・アクセスを削除します。

v25-bis-address *address-name*

前に追加された V25bis アドレスを削除します。

注: *address-name* にスペースが含まれている場合 (たとえば、**remote site Baltimore**)、コマンドを 1 行に入力することはできません。 **delete v25-bis-address** と入力して **Return** を押します。その後、プロンプトで指示されたら、名前を入力します。

Disable

disable コマンドは、リモート・コンソールからのログインを指示するプロンプトが出されるのを防止するのに使用します。

CONFIG コマンド

また、`disable` コマンドは、重大な誤りが発生したときに、インターフェース、記憶域ダンプ、またはリブートを使用不可にするのにも使用できます。

構文：

```
disable                console-login
                        interface . . .
                        dump-memory . . .
                        reboot-system . . .
```

console-login

物理コンソール上でユーザー ID とパスワードの入力をユーザーに求めることを使用不可にします。デフォルトでは使用不可です。

interface *interface#*

reload コマンドが出された後、指定されたインターフェースは使用不可にされます。デフォルトは使用可能です。

dump-memory

重大な誤りが発生したときにシステム記憶域ダンプを導入済みハード・ディスクに取ることを使用不可にします。

reboot-system

重大な誤りが発生したときのシステム・リブートを使用不可にします。これは、ネットワークの保守担当者がオンラインでトラブルシュートを行いたい場合に便利です。システム・リブートを使用不可にするためには、記憶域ダンプも使用不可にしておく必要があります。記憶域ダンプが使用可能のときにシステム・リブートを使用不可にしようとする、システム・リブートは打ち切れ、次のようなメッセージが表示されます。

```
System reboot not disabled: memory dumping must be disabled first
```

Enable

enable コマンドは、リモート・コンソールからのログインを許可するのに使用します。

構文：

```
enable                console-login
                        interface . . .
                        dump-memory . . .
                        reboot-system . . .
```

console-login

物理コンソール上でユーザー ID とパスワードの入力をユーザーに求めることを使用可能にします。これはセキュリティに役立ちます。管理ユーザーを構成せずにこのフィーチャーを使用可能にすると、次のようなメッセージが表示されます。

```
Warning: Console login is disabled until an
administrative user is added.
```

CONFIG コマンド

重要: コンソール・ログインを使用可能にする前に、コンソール・ログインを使用不可にして構成を保管します。 ログイン認証が Radius または Tacacs+ を使用するリモート・サーバーに設定され、ルーターが認証サーバーに到達できない場合は、ルーターへのアクセスは否認されます。 コンソール・ログインを使用可能にすると、ロック状態を防止できます。

interface *interface#*

reload コマンドが出された後、インターフェースが使用可能にされます。

dump-memory

これは、誤りが発生したときの装置の状態を保存して、後でトラブルシューティングする場合に便利です。 システム・リポートが使用可能になっていないと、記憶域ダンプ機能を使用可能にできません。 システム・リポートが使用不可のときに記憶域ダンプ機能を使用可能にしようとすると、記憶域ダンプ機能は打ち切れ、次のようなメッセージが表示されます。

```
System memory dump function not enabled: rebooting must be enabled first
```

システム・ダンプに最初の 3 つのダンプ・ファイルを保管させるように構成してあり、3 つのダンプ・ファイルがすでに存在する場合は 記憶域ダンプを使用可能にするときシステムは次のメッセージを表示します。

```
*** System dump cannot be enabled until the   ***
*** existing dump files are deleted.          ***
```

set dump enable-mode および **set dump save-mode** コマンドを参照してください。

例 :

```
Config> enable dump
```

```
Current System Dump Status:
  System dump is currently disabled.
  Number of existing dump files: 0
```

```
Enable system memory dumping? [No]: Yes
```

```
Current System Dump Status:
  System dump is currently enabled.
  Number of existing dump files: 0
```

注: このコマンドを入力し、ハード・ディスクが利用不能の場合、ハード・ディスクが利用不能であることを示すメッセージが出されます。

reboot-system

重大な誤りが発生したときのシステム・リポートを使用可能にします。

Event

event コマンドは、イベント・ログ・システム (ELS) 環境に入り、コンソールに表示されるメッセージを定義できるようにするために使用します。 ELS についての説明は、137ページの『第12章 イベント・ログ・システム (ELS) の使用』を参照してください。

構文 :

event

CONFIG コマンド

Feature

feature コマンドは、プロトコルおよびネットワーク・インターフェースの構成プロセスの外部の特定ルーター・フィーチャーの構成コマンドにアクセスするのに使用します。

構文：

feature [feature# または feature-short-name]

すべての 2216 フィーチャーには、次の方法で実行されるコマンドがあります。

- フィーチャーを初期構成して使用可能にしたり、後で構成変更を行うために、構成プロセスにアクセスする。
- 各フィーチャーに関する情報を表示したり、一時的な構成変更を行うために、コンソール・プロセスにアクセスする。

これらのプロセスにアクセスする手順は、すべてのフィーチャーで同じです。この手順を以下で説明します。

使用しているソフトウェア・リリースで利用可能なフィーチャーのリストを入手するには、**feature** コマンドの後に疑問符を入力します。

フィーチャーの構成プロンプトにアクセスするには、**feature** コマンドを入力し、その後に続けてフィーチャー番号または短縮名を入力します。表9 に、利用可能なフィーチャー番号と短縮名がリストされています。

表9. IBM 2216 フィーチャー番号と名前

フィーチャー番号	フィーチャー短縮名	アクセスするフィーチャー構成プロセス
0	WRS	WAN 復元/再ルート
1	BRS	帯域幅予約
2	MCF	MAC フィルター
4	VCRM	バーチャル・サーキットおよびリソース管理
7	CMPRS	データ圧縮
8	NDR	ネットワーク・ディスパッチャー
9	DIALs	LAN へのダイヤルイン・アクセス
10	AUTH	認証
11	IPSec	IP セキュリティー・フィーチャー・ユーザー構成
12	LAYER	レイヤー 2 トンネル伝送プロトコル
13	NAT	ネットワーク・アドレス変換プログラム・ユーザー構成
14	TSF	シン・サーバー機能

フィーチャーの構成プロンプトにアクセスしたら、そのフィーチャー特有の構成コマンドの入力を開始することができます。CONFIG プロンプトに戻るには、フィーチャーの構成プロンプトから **exit** コマンドを入力します。

List

list コマンドは、すべてのネットワーク・インターフェースの構成情報またはルーターの構成情報を表示するのに使用します。

構文：

```
list
    _configuration
    _devices
    _isdn-address
    _patches . . .
    _ppp_users . . .
    _tunnel-profile
    _users . . .
    _v25-bis-address
    _ypd
```

devices [*device* または *devicerange*]

インターフェース番号とハードウェア・インターフェースの関係を表示します。このコマンドは、**add** コマンドを出して装置が正しく追加されているかどうかを検査するのに使用できます。

また、次の例に示すように、リストしたい装置の範囲を指定することもできます。

```
list dev 2-5
Ifc 2 Token Ring           Slot: 2 Port: 1
Ifc 3 Token Ring           Slot: 2 Port: 2
Ifc 4 Ethernet             Slot: 4 Port: 1
Ifc 5 Ethernet             Slot: 4 Port: 2
```

注: インターフェース番号もインターフェースの範囲も指定しなかった場合は、すべてのインターフェースが表示されます。

例: list devices

```
Ifc 0 Token Ring           Slot: 1 Port: 1
Ifc 1 Token Ring           Slot: 1 Port: 2
Ifc 2 Token Ring           Slot: 2 Port: 1
Ifc 3 Token Ring           Slot: 2 Port: 2
Ifc 4 Ethernet             Slot: 4 Port: 1
Ifc 5 Ethernet             Slot: 4 Port: 2
Ifc 6 Ethernet             Slot: 5 Port: 1
Ifc 7 Ethernet             Slot: 5 Port: 2
Ifc 8 Ethernet             Slot: 6 Port: 1
Ifc 9 Ethernet             Slot: 6 Port: 2
Ifc 10 V.35/V.36 Frame Relay Slot: 8 Port: 0
Ifc 11 V.35/V.36 X.25      Slot: 8 Port: 1
Ifc 12 V.35/V.36 PPP       Slot: 8 Port: 2
Ifc 13 V.35/V.36 PPP       Slot: 8 Port: 3
Ifc 14 V.35/V.36 PPP       Slot: 8 Port: 4
Ifc 15 V.35/V.36 PPP       Slot: 8 Port: 5
```

注: 注記されている受信バッファ数、受信バッファのデフォルト値からの例外報告です。**set receive buffers** コマンドについては、107ページの『Set』で説明しています。

configuration

ルーターに関する構成情報を表示します。

例: list configuration

```

Hostname: [none]
Maximum packet size: [autoconfigured]
Maximum number of global buffers: [autoconfigured]
Number of spare interfaces: 0
Console inactivity timer (minutes): 0
Physical console login: disabled
System rebooting on error: disabled
System memory dumping: disabled
Contact person for this node: [none]
Location of this node: [none]

Configurable Protocols:
Num Name Protocol
0 IP DOD-IP
3 ARP Address Resolution
4 DN DNA Phase IV
6 VIN Banyan Vines
7 IPX NetWare IPX
8 OSI ISO CLNP/ISIS/ISIS
9 DVM Distance Vector Multicast Routing Protocol
10 BGP Border Gateway Protocol
11 SNMP Simple Network Management Protocol
12 OSPF Open SPF-Based Routing Protocol
20 SDLC SDLC/HDLC-Relay
22 AP2 AppleTalk Phase 2
23 ASRT Adaptive Source Routing Transparent Enhanced Bridge
24 HST TCP/IP Host Services
25 LNM LAN Network Manager
26 DLS Data Link Switching
27 XTP X.25 Transport Protocol
28 APPN Advanced Peer-to-Peer Networking [HPR]
29 NHRP Next Hop Routing Protocol
30 APPN Advanced Peer-to-Peer Networking [ISR]

Configurable Features:
Num Name Feature
0 WRS WAN Restoral
1 BRS Bandwidth Reservation
2 MCF MAC Filtering
6 QOS Quality of Service
7 CMPRS Data Compression Subsystem
8 NDR Network Dispatching Router
10 AUTH Authentication
14 TSF Thin Server Function

26176 bytes of configuration memory
free

```

isdn-address

現行 ISDN アドレス構成を表示します。

```

Example: list isdn-address
Address assigned name      Network Address      Network Subdial Address
-----
remote site XYZ           1 2345 67           98765

```

patches

patch コマンドを使用して入力されたパッチ変数の値を表示します。

例 :

```

list patches
Patched variable      Value
-----
ping-size              60
ping-ttl               59
ip-default-ttl         60
ethernet-security      3
rip-static-suppress    3

```

ppp_users

特定の PPP ユーザー・プロファイル・パラメーターをリストします。

例 : DIAL がソフトウェア・ロード内でない場合の PPP ユーザーのリスト

```

Config> list ppp_users
List (Name, Verb, User, Addr, Encr):

      PPP User Name: joe
      User IP Address: Interface Default
      Encryption: Not Enabled

```


例 :DIAL がソフトウェア・ロード内にある場合の PPP ユーザーのリスト

```
Config> list ppp_users
List (Name, Verb, User, Addr, Call, Time, Dial, Encr):

    PPP User Name: joe
    User IP Address: Interface Default
    Net-Route Mask: 255.255.255.255
    Hostname: <undefined>
    Time-Allotted: Box Default
    Call-Back Type: Not Enabled
    Dial-Out: Not Enabled
    Encryption: Not Enabled
```

list ppp_users を入力すると、ソフトウェアがプロンプトを出して、次のいずれか 1 つの入力を指示してきます。

Name データベース内の名前のすべてをリストします。

Verb 各ユーザーに関する冗長情報をリストします。各ユーザー・プロファイルに関連するすべての情報をリストします。

User 単一のユーザーに関する冗長情報をリストします。

Addr (address)

各ユーザーごとに、IP アドレス、ネットマスク、およびホスト名も含めて、IP アドレス情報をリストします。

Call (callback)

各ユーザーごとに、コールバックのタイプおよび番号も含めて、コールバック情報をリストします。

Time 各ユーザーごとに構成されている許可時間をリストします。

Encr (encryption)

各ユーザーごとに暗号化が使用可能になっているかどうかをリストします。

tunnel-profile

トンネル・プロファイル・パラメーターを表示します。

例 :

```
Config>list tunnel-profile
Endpoint Tunnel name Hostname
11.0.0.192 tac lns

1 TUNNEL record displayed.
Config>
```

Tunnel Name

ピアの構成済みの名前を指定します。

Server Endpoint

ピアの IP アドレス

Type ピア間接続のタイプを指定します。

Medium

トンネルが使用するプロトコルを指定します。

Local Host Name

ピアへの接続時に使用するために構成された名前を指定します。

users システムにアクセスするように構成されたユーザーを表示します。

CONFIG コマンド

例 :

```
list users
USER      PERMISSION
joe       operations
mary      administrative
peter     monitor
```

v25-bis-address

現行の V25bis アドレス構成を表示します。V25bis アドレス構成は、ローカル・ポート (シリアル・ライン・インターフェース) またはあて先ポートのネットワーク・アドレスとネットワーク・アドレス名から構成されます。ネットワーク・アドレスは、ローカル・ポートまたはあて先ポートの電話番号です。ネットワーク・アドレス名は、何でも構いません (ポートの記述など)。詳しくは、709ページの『第46章 V.25bis ネットワーク・インターフェースの使用』を参照してください。

```
Example:
list v25-bis-address
Address assigned name      Network Address
-----
v25-1                      8982800
v25-2                      8980001
delaware                   1-666-555-4444
```

vpd ハードウェアおよびソフトウェアの重要プロダクト・データを表示します。

Load

load コマンドは、ソフトウェア・ロード内の使用可能であるが構成されていないパッケージ、またはソフトウェア・ロード内で構成されているパッケージをリストする場合に使用します。また、ソフトウェア・パッケージを追加または削除する場合も、**load** コマンドを使用します。

構文 :

```
load          add package packagename
               delete package packagename
               list . . .
```

ソフトウェアは、複数のロード・モジュールに分割されています。これらのロード・モジュールは、ソフトウェア・パッケージとしてグループ化されています。これらのソフトウェア・パッケージの中には、製品と一緒に出荷はされるものの、自動的にロードされないため、オプションであるものもあります。

暗号化が含まれているソフトウェア・パッケージについては、インターネットを使用してアクセスできる 2216 Web サーバーから入手することができます。

オプションのソフトウェア・パッケージをロードし、実行するには、次のようになります。

1. **load add** コマンドを使用して、パッケージを追加する。
2. リポートする。このアクションにより、オプション・ソフトウェアが装置のメモリーにロードされます。
3. オプション・ソフトウェアを構成する。
4. 構成を保管する。

5. 装置をリブートする。このアクションにより、ソフトウェアは新規構成で使用可能になります。

add package *packagename*

ソフトウェア・パッケージをソフトウェアに追加します。 *packagename* は、ソフトウェアに組み込むロード・モジュールのパッケージの名前です。

例 : **load add package appn**

delete package *packagename*

ソフトウェアからソフトウェア・パッケージを除去します。 *packagename* は、ソフトウェアから除去するロード・モジュールのパッケージの名前です。

例 : **load delete package appn**

- list** ソフトウェア・ロード内の使用可能であるが構成されていないパッケージか、ソフトウェア・ロード内で構成されているパッケージか、どちらかをリストします。 次の 1 つを指定できます。

available

現行ソフトウェア・ロード内の未構成のソフトウェア・パッケージをリストします。

configured

現行ソフトウェア・ロード内の構成済みソフトウェア・パッケージをリストします。

Network

network コマンドは、サポートされるネットワークのネットワーク・インターフェース構成環境に入るのに使用します。 インターフェース番号またはネットワーク番号をコマンドの一部として入力します。(インターフェース番号を入手するには、**CONFIG list device** コマンドを使用します。) 該当する構成プロンプト (たとえば、TKR Config>) が表示されます。必要なネットワーク・インターフェース・タイプの構成についての詳しい説明は、本書のネットワーク・インターフェース構成の章を参照してください。

構文 :

network *interface#*

注:

1. ユーザー構成可能パラメーターを変更した場合は、必ずルーターを **reload** して、変更を有効にする必要があります。 これを行うには、OPCON プロンプト (*) で **reload** コマンドを入力します。
2. ネットワーク・インターフェースはすべてがユーザー構成可能とは限りません。ユーザーが構成できないインターフェースの場合は、メッセージ **That network is not configurable.** を受け取ります。

Patch

patch コマンドは、ルーターのグローバル構成を変更するのに使用します。パッチ変数は不揮発性メモリーに記録され、即時に有効になります。ルーターを次回にリス

CONFIG コマンド

タートするまで待つ必要はありません。このコマンドを使用するのは、一般的でない構成を扱う場合だけに限ります。普通に構成するものは、やはり特定の構成コマンドを使用して処理すべきです。以下に示すのは、このリリースで文書化され、サポートされている現行のパッチ変数のリストです。

構文 :

patch

- bgp-subnets
- dls-ignore-lfs
- ethernet-security
- filter-nr
- ip-default-ttl
- ip-mtu
- lnm-link-via-tbport
- more-lines
- mosheap-lowmark
- ospf-import-rate
- ping-size
- ping-ttl
- ppp-echo
- relax-jate
- rip-static-suppress

bgp-subnets *new value*

BGP スピーカーが近隣にサブネット・ルートを公示するようにしたい場合は、*new value* を 1 に設定します。デフォルトは 0 です。

dls-ignore-lfs *new value*

1 に設定すると、回線の設定時に、DLSw はソース・ルーティング・フレーム内の『最大フレーム』サイズ・ビットを無視します。これにより、これらのビットを正しく設定しない一部の旧 LAN プロダクトに伴う回線設定の問題を回避することができます。デフォルト値は 0 です。

ethernet-security *new value*

非ゼロ値に設定すると、データ部分が物理最小値の 60 バイト未満のイーサネット・パケットに適用される埋め込みをゼロにします。セキュリティ上の理由から、これが必要になる場合があります。デフォルト: 0。

filter-nr

ブリッジ・コードによってフィルターに掛けられる NetBIOS の現行リストと共に、NetBIOS 『認知名』 をフィルターに掛けることができます。NetBIOS ネーム・フィルターは、次のタイプの 1 つでないすべての NetBIOS パケットを通過させます。ADD_GROUP_NAME_QUERY、ADD_NAME_QUERY、DATAGRAM、NAME_QUERY。このパラメーターは、NAME_RECOGNIZED をこのタイプ・リストに追加します。

ip-default-ttl *#_of_packets*

ルーターによって発信されるパケットで使用される TTL。デフォルトは 64 です。

注: **set ttl** IP 構成コマンドを使用して、このパラメーターを設定することをお勧めします。(プロトコルの構成と監視 解説書 第 1 巻の中の、『IP の使用と構成』の章の『Set』の項を参照してください。) このパッチ変数は、旧リリースの構成との互換性のために残されています。

ip-mtu *bytes*

このパラメーターは、IP MTU サイズを指定された値に制限します。このパラメーターが設定されている場合、ネットワーク・インターフェースの IP MTU サイズは、ip-mtu 値とそのネットワーク・インターフェースに構成されているフレーム・サイズが収容できる最大値のうちの小さい方の値に設定されます。

lnm-link-via-tbport *new value*

LNМ がイーサネット透過型ブリッジ (TB) ポートを通してトークンリングにリンクすることができます。

1 に設定すると、LNМ リンクが許されます。

デフォルトの 0 に設定すると、LNМ リンクは許されません。

more-lines *#_of_lines*

IP ルーティング・テーブルをリストするときにはコンソールに表示される行数。『more pipe』 (i) を使用します。

mosheap-lowmark *new value*

このパラメーターは、空き MOS ヒープ・メモリーのパーセント値を指定します。この値に達すると、装置はメモリー不足誤りが近づいていることをオペレーターに知らせます。この通知により、装置が誤りを受け取って停止する前に、オペレーターが MOS ヒープ・メモリーを解放する処置を取ることができます。

オペレーターは通知を受け取ると、ルーターを再構成してリポートすることにより、ネットワークの故障率を最小化することができます。このパラメーターを 0 に指定すると、この警告は抑止されます。

有効値: 0 ~ 100

デフォルト値: 10

ospf-import-rate *rate*

1 秒当たりのインポートされるルートの数

ping-size *bytes*

IP> **ping** コマンドによって送信される ICMP PING パケットのデータ部分 (つまり、IP ヘッダーと ICMP ヘッダーを除いた部分) のサイズ。デフォルト: 56 バイト。(PING データのサイズは、プロトコルの構成と監視 解説書 第 1 巻の中の『IP の監視』の章の『Ping』の項に説明されている ping コマンドのパラメーターとして入力することもできます。)

ping-ttl *seconds*

IP>**ping** コマンドによって PING で送信される TTL (存続時間)。デフォルト

CONFIG コマンド

: 64 (TTL は、プロトコルの構成と監視 解説書 第 1 巻 中の『IP の監視』の章の『Ping』の項で説明されている **ping** コマンドのパラメーターとして入力することもできます。)

ppp-echo *new value*

1 に設定すると、装置はどの PPP インターフェースでも PPP エコー要求を送信しません。リモート装置を動作可能に維持するために、PPP エコー要求は PPP 保守の一部としてリモート装置に送信されます。PPP を低速ラインで実行しており、そのラインを大きなデータ・パケットの転送に使用しているので、PPP インターフェースをアップに保つのに十分な頻度で PPP 保守パケットが交換されない場合に、この変数を使用可能にすることを考慮してください。

relax-jate

JATE ISDN 制限を緩和します。

rip-static-suppress *new value*

非ゼロ値に設定すると、インターフェースに IP config> **enable send static** コマンドが与えられない限り、静的ルートはそのインターフェースを介して RIP によって公示されなくなります。これは **enable send static** コマンドの意味を変更します。rip-static-suppress が 0 (デフォルト) のときは、RIP を介して公示されるルートのリストは、そのインターフェースの RIP フラグによって指定されたルートの集合になります。

注: 変更したいパッチ変数は、完全な名前を指定する必要があります。パッチ名に省略構文を使用することはできません。

Performance

performance コマンドは、パフォーマンスの構成環境に入る場合に、GWCON> プロンプト (+) で使用します。詳しくは、215ページの『第14章 性能の構成と監視』を参照してください。

Protocol

ルーターに導入されているプロトコル・ソフトウェアの構成環境に入るには、Config> プロンプトで **protocol** コマンドを使用します。

構文 :

protocol [prot# または prot_name]

protocol コマンドに続けて、必要なプロトコル番号または 短縮名を入力すると、プロトコルのコマンド環境に入ることができます。このコマンドを入力すると、指定したプロトコルのプロンプトが表示されます。このプロンプトから、そのプロトコル特定のコマンドを入力できます。Config> に戻るには、**exit** コマンドを入力します。

注:

1. ソフトウェア・ロード内のプロトコルの名前と番号を見たい場合は、Config> プロンプトで **list configuration** と入力します。

2. ユーザー構成可能パラメーターを変更した場合は、ルーターをリスタートして、変更を有効にする必要があります。これを行うには、OPCON プロンプト (*) で **reload** コマンドを入力します。

CONFIG を通して加えた変更は、不揮発性メモリー内の構成データベースに保管され、ルーターをリスタートすると、あらためて呼び出されます。

Qconfig

qconfig コマンドは、Quick Config を開始するのに使用します。Quick Config では、ブリッジングおよびルーティング・プロトコルのパラメーターを、それぞれ別々の構成環境に入らずに構成することができます。

構文：

qconfig

注: ルーターと一緒に提供される Quick Config ソフトウェアの使用に関する詳細な説明については、771ページの『付録A. クイック構成リファレンス』を参照してください。

Set

set コマンドは、システム全体の種々のパラメーターを構成するのに使用します。

構文：

```
set
    contact-person . . .
    data-link . . .
    down-notify . . .
    dump enable-mode
    dump save-mode
    global-buffers
    hostname
    inactivity-timer
    input-low-water
    location . . .
    logging level
    packet-size
    prompt-level
    receive-buffers
    spare-interfaces
```

contact-person *sysContact*

この管理 SNMP ノードの連絡先担当者の名前または ID を設定します。
sysContact 名の長さは 80 文字までに制限されます。

CONFIG コマンド

この変数は、情報のためだけのものであり、ルーターの動作には影響しません。システムの SNMP 管理 ID として有用です。

data-link *type interface#*

シリアル・インターフェースまたはデータ回線インターフェースのデータ・リンク・タイプを選択します。タイプ は次のいずれか 1 つです。

- FRAME-RELAY
- PPP
- SDLC
- SRLY
- V25BIS
- X25

注:

1. ダイアル回線インターフェースでサポートされるデータ・リンクは、PPP、SDLC、およびフレーム・リレーだけです。X.25 は、ISDN BRI D チャネルのみでサポートされます。
2. 8 ポート EIA 232E アダプター、6 ポート V.35/V.36 アダプター、および 8 ポート X.21 アダプターでは、すべてのデータ・リンク・タイプを使用できます。ただし V.25bis は例外で、これは EIA 232E アダプターでしか使用できません。

Interface# は、構成するインターフェースの番号です。

down-notify *interface# # of seconds*

ユーザーは、インターフェースをダウンとして宣言する前の秒数を指定することができます。通常の保守パケット間隔は 3 秒で、保守障害が 4 回あると、インターフェースはダウンとして宣言されます。

set down-notify コマンドを主に使用するのには、OSPF を使用して IP ネットワークを介して LLC トラフィックをトンネル伝送する場合があります。インターフェースがダウンした場合、インターフェースをダウンとして宣言するまでに時間がかかるために、OSPF はただちにそれを検出することはできません。そのため、LLC セッションがタイムアウトになります。down-notify タイマーを低い値に設定すれば、OSPF はより早くインターフェースのダウンを検知できるようになります。これにより、代替ルートを迅速に選択して、LLC セッションのタイムアウトを防止することが可能になります。

注: シリアル・リンクの一方の端で **set down-notify** コマンドを実行する場合、リンクの他方の端でも同じコマンドを実行する必要があります。そうしないと、リンクがアップにならず、アップに保てないことがあります。

Interface#

構成するインターフェースの番号です。

of seconds

ダウンしたインターフェースがダウンとしてマーク付けされるまでに経過する最大時間を指定するダウン通知時間値です。値を大きくすると、ルーターは一時的な接続問題を無視することになり、値を小さくすると、ルーターはより迅速に反応するよ

うになります。値の範囲は 1 ~ 300 秒で、デフォルトは 0 (3 秒間に設定) です。ダウン通知時間を 0 に設定すると、そのインターフェースのデフォルト時間に復元されます。

list devices コマンドは、デフォルト値がオーバーライドされているインターフェースのダウン通知時間を表示します。

dump enable-mode

次のシステム・ダンプに続いてダンプを使用可能にするかどうかを指定します。保管モード (**set dump save-mode** コマンドを参照) を構成して最初の 3 つのダンプを保管するようにしてあり、システムがすでに 3 番目のダンプ・ファイルを作成した場合には、指定がどうであれ、ダンプは使用不可になります。システムが 3 番目のダンプ・ファイルを作成すると、以下のメッセージを受け取ります。

```
Active Dump Detected.
Dump Compression in Progress, please be patient ...

*** System dumping is being DISABLED because dumping is ***
*** configured to save the 3 initial dumps, but 3          ***
*** dump files already exist.                               ***
```

例 :

```
Config> set dump enable-mode

Current System Dump Settings:
  Disable System Dump following the next system dump.
  Save the last 3 (most recent) dump files.

Do you want to change system dump enable-mode to
re-enable System Dump following the next system dump ? (Yes, No): [No] Yes

Current System Dump Settings:
  Re-enable System Dump following the next system dump.
  Save the last 3 (most recent) dump files.

Current System Dump Status:
  System dump is currently enabled.
  Number of existing dump files: 2
```

デフォルト値 : disable

注: **enable dump-memory** コマンドを使用すると、ダンプは使用可能になります。

dump save-mode

最初の 3 つの (初期の) システム・ダンプ・ファイルを保管するか、それとも最後の 3 つ (最新のもの) を保管するかを指定します。最新 (recent) モードの使用と初期 (initial) モードの使用を対比した考慮事項については、**dump enable-mode** を参照してください。

例 :

```
Config> set dump save-mode

Current System Dump Settings:
  Re-enable System Dump following the next system dump.
  Save the last 3 (most recent) dump files.

Do you want to change system dump save-mode to
save the first (initial) dump files ? (Yes, No): [No] Yes

Current System Dump Settings:
  Re-enable System Dump following the next system dump.
  Save the first 3 (initial) dump files, then disable system dump.
```

CONFIG コマンド

```
Current System Dump Status:
System dump is currently enabled.
Number of existing dump files: 2
```

デフォルト値 : recent (最新)

global-buffers *max#*

グローバル・パケット・バッファ (ローカル発信パケットに使用されるパケット・バッファ) の最大数を設定します。デフォルトでは、バッファの最大数 (最高 1000) を自動構成します。デフォルトに復元するには、この値を 0 に設定します。 **global-buffers** の設定値を表示したい場合は、**list configuration** コマンドを使用します。

hostname *name*

ルーター名を追加または変更します。ルーター名は識別のためだけのものであり、ルーター・アドレスには影響を与えません。名前は78 文字未満である必要があります、大文字小文字を区別します。

inactivity-timer *#_of_min*

非活動タイマーの設定値を変更します。このコマンドで指定された時間の間、リモート(または、物理) コンソールが非アクティブの場合、非活動タイマーはユーザーをログアウトします。このコマンドは、ログインを必要とするコンソールにのみ適用されます。デフォルト設定値の 0 は非活動タイマーをオフにし、どんなに長時間コンソールが非アクティブのままでも、ログオフは行われなことを示します。

input-low-water *interface# low_ #_of_receive_buffers*

受信バッファ数またはパケット数の下限値をインターフェース単位で構成して、デフォルトをオーバーライドすることができます。

空バッファ数が下限値または最低水準値に等しいかそれ以下になると、バッファを節約するようにバッファ割り当て方法が変更されます。パケットを受信したときに、インターフェースの現行値が最低水準値より小さい場合、そのパケットはフロー制御 (除去) 可能になります。

値の範囲は 1 ~ 255 です。デフォルトは、プラットフォームと装置の両方に依存します。値を 0 に設定すると、自動構成されたデフォルトに復元されます。

Interface# は、構成するインターフェースの番号です。 *Low_#_of_receive_buffers* は最低水準値です。

値を下げると、このインターフェースからのパケットが、輻輳 (ふくそう) したネットワーク上に送信された場合に、除去される確率が低くなります。ただし、値を下げたために、受信待ち行列が頻繁に空になるほどパケットが除去されると、性能に悪影響が生じることがあります。値を上げると、これとは逆の効果があります。

下限設定値を表示するには、GWCON プロンプト (+) で **QUEUE** または **BUFFER** コマンドを入力します。

location *sysLocation*

SNMP ノードの物理ロケーションを設定します。 *sysLocation* 名の長さは 80 文字に制限されます。この変数は、情報のためだけのものであり、ルーターの動作には影響しません。システムの SNMP 管理 ID として有用です。

logging level #

ELS にまだ変換されていないメッセージの出力を制御します。ログ・レベルは構成内に記録されます。ルーターが電源オンになるか、またはリスタートすると、ログ・レベルが有効になり、それによってメッセージ出力が決まります。デフォルトのログ・レベルは 76 です。ログ・レベル 0 はログ・レベルなしと等価です。

Example: set logging level 76

packet-size max_packet_size_in_bytes

グローバル・バッファおよび受信バッファの最大サイズを設定または変更します。値 0 を最大パケット・サイズとして指定した場合、インターフェースの受信バッファ・サイズは、そのインターフェースに構成されているパケット・サイズになり、グローバル・バッファのサイズは自動構成されます。非ゼロ値を指定した場合、構成された値がグローバル・バッファ・パケット・サイズとして使用され、この最大パケット・サイズより大きいパケット・サイズが構成されているインターフェースは、それぞれの受信バッファの最大パケット・サイズを使用します。値 0 (自動構成) がデフォルトです。

重要: このコマンドを使用するのは、サービス技術員から直接指示を受けた場合だけにします。パケット・サイズを小さくする目的では**絶対に** 使用しないでください。大きくする場合に**のみ** 使用してください。

prompt-level user-defined-name

ユーザー定義の名前をすべてのオペレーター・プロンプトへのプレフィックスとして追加し、ホスト名と置き換えます。

user-defined-name は、文字、数字、およびスペースを任意に組み合わせて、最大 80 字まで使用できます。また、特殊文字も、表10 に説明されている追加機能を要求するのに使用できます。

例 :

```
set prompt
What is the new MOS prompt [y]? AnyHost 99
AnyHost 99 Config>
```

表 10. Set Prompt Level コマンドによって提供される追加機能

特殊文字	Set Prompt Level コマンドによって提供される機能
\$n	ホスト名を表示します。これは、ホスト名をプロンプトに含めたい場合に便利です。下に例を挙げます。 Config> set prompt What is the new MOS prompt [y]? \$n hostname:: Config>
\$t	時刻を表示します。下に例を挙げます。 Config> set prompt. What is the new MOS prompt [y]? \$t 02:51:08[GMT-300] Config>

CONFIG コマンド

表 10. *Set Prompt Level* コマンドによって提供される追加機能 (続き)

特殊文字	Set Prompt Level コマンドによって提供される機能
\$d	現在の年月日を表示します。下に例を挙げます。 Config> set prompt. What is the new MOS prompt [y]? \$d 26-Feb-1997 Config>
\$v	ソフトウェア VPD 情報を次のような形式で表示します。 program-product-name Feature xxxx Vx Rx.x PTFx RPQx
\$e	ユーザー定義プロンプト内のこの組み合わせの後の 1 文字を消去します。
\$h	ユーザー定義プロンプト内のこの組み合わせの前の 1 文字を消去します。
\$_	ユーザー定義プロンプトに復帰を追加します。
\$\$	\$ を表示します。
注: これらのコマンドを組み合わせで使用することができます。下に例を挙げます。 Config> set prompt What is the new MOS prompt [y]? \$n::\$d hostname::26-Feb-1997 Config>	

receive-buffers interface# max#

ほとんどのインターフェースの私用受信バッファ数を調整します。

範囲は 5 ~ 1000 です。

注: このコマンドは、ISDN 1 次群インターフェースおよび 10/100 Mbps イーサネット・インターフェースの場合には適用できません。ISDN PRI の場合は、受信バッファの数は B チャンネル 1 つにつき 5、T1 の場合は 115、E1 の場合は 150 に固定されています。チャンネル化モードの場合、PRI は構成タイム・スロットあたり 5 つの受信バッファを獲得します。

(一部の装置では、表11 に示すように、最大値にさらに制約があります。) デフォルトに復元するには、値を 0 に設定します。インターフェースの受信性能を上げたい場合は、**set receive-buffers** コマンドを使用して行うことができます。また、このコマンドは、ルーターが高速インターフェースから低速インターフェースに多数のパケットを転送しているときに、フロー制御による廃棄数を減らすようにするのも使用できます。このコマンドの効果は、**GWCON buffer** コマンドで表示して見るすることができます。

重要: **set receive-buffer** コマンドは、サービス技術員の直接指示のもとでのみ使用してください。

表 11. インターフェースのデフォルトおよび最大設定値

インターフェース	デフォルト値	最大値
ATM	80*	1000
10 Mbps イーサネット	40*	1000
10/100 Mbps イーサネット	64*	1000
シリアル	24	250
TKR	40*	1000
FDDI	80	80

表 11. インターフェースのデフォルトおよび最大設定値 (続き)

インターフェース	デフォルト値	最大値
HSSI	60*	1000
ESCON	1000	1000
PCA	1000	1000

* これは、2216-400 の場合のデフォルト値です。ネットワーク・ユーティリティーの場合、デフォルト値は 1000 です。

spare-interfaces *n*

この装置の予備インターフェースの数 *n* を定義します。追加情報については、68ページの『予備インターフェースの構成』を参照してください。

System Retrieve

system retrieve コマンドは、重大な誤りが発生した後で、インストールしてあるハード・ディスク から 1 つまたは複数の記憶域イメージ・ファイルを検索するために使用します。

構文 :

```
system retrieve
```

TFTP を使用して、選択した記憶域イメージ・ファイルをリモート・ホストに送信します。システムは、リモート・ホストの IP アドレスとファイル名を入力するよう指示します。

ダンプ・ファイルがない場合は、次のようなメッセージを受け取ります。

```
No dump files exist to retrieve
```

例 :

```
Config> system retrieve

Current System Dump Settings:
  Re-enable System Dump following the next system dump.
  Save the first 3 (initial) dump files, then disable system dump.

3 dump files currently exist.

Do you want to see a summary of the dump files ? (Yes, No): [No] No

Destination IP address [0.0.0.0]? 9.9.9.1

Filename: core0.cmp
Dump Date: Tue May 05 14:38:59 1998

Do you want to retrieve this file ? (Yes, No): [No] Yes
Fully qualified destination path/file name [/tmp/dump0.cmp]?
The memory image file is 19.3 Mb long.

Proceed? [No]: Yes
Sending memory image file by tftp
TFTP transfer of /hd0/core0.cmp complete, size=20331888 status: OK
tftp transfer completed successfully.

Filename: core1.cmp
Dump Date: Wed May 06 07:53:51 1998

Do you want to retrieve this file ? (Yes, No): [No]

Filename: core2.cmp
```

CONFIG コマンド

```
Dump Date: Wed May 06 09:14:55 1998
Do you want to retrieve this file ? (Yes, No): [No]
```

System View

system view コマンドは、現行システム・ダンプの設定値とシステム・ダンプの状況を表示するために使用します。また、存在するダンプ・ファイルの数も表示します。さらに、ダンプ・ファイルの要約も表示できます。

構文 :

```
system                view
```

例 :

```
Config> system view

Current System Dump Settings:
  Re-enable System Dump following the next system dump.
  Save the first 3 (initial) dump files, then disable system dump.

Current System Dump Status:
  System dump is currently enabled.
  Number of existing dump files: 2

Do you want to see a summary of the dump files ? (Yes, No): [No]Yes
-----
Filename: core0.cmp

Dump Date: Tue May 05 14:38:59 1998

Fatal messages:
  Data St. Excp Reading 0x6c6966b1 at 0x3090fca4 in thread MOSDBG (0x304d54)

CMVC Build: cc_144b
Builder: build
Build Name: LML.1d
Retain Name: MAS.DF1
Product Number: 2216-MAS
Build Date: Wed May 6 11:47:03 1998

-----
Filename: core1.cmp

Dump Date: Wed May 06 07:53:51 1998

Fatal messages:
  Data St. Excp Reading 0x6c6966b1 at 0x3090fca4 in thread MOSDBG (0x304d54)

CMVC Build: cc_144b
Builder: build
Build Name: LML.1d
Retain Name: MAS.DF1
Product Number: 2216-MAS
Build Date: Wed May 6 11:47:03 1998
```

| Time

time コマンドは、2216 システム・クロックと日付を設定し、それらの値をユーザー・コンソールに表示するのに使用します。これらの値を使用して、ELS メッセージにタイム・スタンプを表示することができます。

注: 2216 には、ルーターの再初期化後に日付と時刻を維持するハードウェア・クロックが内蔵されています。

構文 :

```
time                host . . .
                   list
                   offset
                   set . . .
                   sync . . .
```

host *IP_address*

時刻源として使用される RFC 868 準拠のホストの IP アドレスを設定します。これは、UDP ポート 37 上の空のデータグラムに、現在の時刻が入っているデータグラムで応答するホストのアドレスです。

list 構成された時刻関連のすべてのパラメータを表示します。これには、現在の時刻 (設定されている場合) および時刻源 (最後に受信した時刻の発信元のオペレーターまたは IP アドレス) が含まれます。

```
Example: time list
05:20:27 Wednesday December 7, 1994
Set by: operator
Time Host: 131.210.4.1
Sync Interval: 10 seconds GMT
Offset: -300 minutes
```

offset *minutes*

GMT (グリニッジ標準時) からのオフセット時間帯を分単位で定義します。GMT の西側の値は負になることに注意してください。たとえば、EST (米東部標準時) は GMT より 5 時間早いので、コマンドは **time offset -300** となります。

有効値 : -720 ~ 720

デフォルト値: 0

set *<year month date hour minute second>*

現在の時刻を入力するように求めます。このコマンドで時刻全体を指定しなかった場合は、残りの値の入力を求めるプロンプトが出ます。次の例に示すように、日付を変更することができます。

```
Example: time set
year [1996] 1997
month [12]?
date [6]? 7
hour [11]? 12
minute [3]?
second [2]?
```

sync *seconds*

ルーターが現在の時刻を時刻ホストにポーリングする期間を秒数で設定します。

CONFIG コマンド

Unpatch

unpatch コマンドは、**patch** コマンドで入力したパッチ変数の値をデフォルト値に復元するのに使用します。詳細については、103ページの『Patch』の **patch** コマンドを参照してください。

構文：

unpatch *variable_name*

注：必ず、復元するパッチ変数の長名を指定することが**必要**です。

Update

update コマンドは、新しいソフトウェア・ロードを受け取ったときに、構成メモリーを更新するのに使用します。

構文：

update *_version-of-SRAM*

ソフトウェアに添付されているリリース通知の指示に従ってください。**update** コマンドは、新規ソフトウェアをロードするときに最後に入力するコマンドです。このコマンドを入力すると、構成メモリーを更新中であることを示すメッセージがコンソールに表示されます。

Write

write コマンドは、再ロードの前に、構成を装置に保管するのに使用します。

構文：

write

write コマンドを出さずに装置を再ロードしようとする、構成を保管するかどうかを尋ねられます。構成は、現在使用しているバンク内のハード・ディスクの次の CONFIG に保管されます。

第10章 操作/監視プロセス (GWCON - Talk 5) とコマンド

この章では GWCON プロセスについて説明し、以下の節が含まれています。

- 『GWCON とは ?』
- 『GWCON の出入り』
- 118ページの『GWCON コマンド』

GWCON とは ?

ゲートウェイ・コンソール (監視) プロセス GWCON (CGWCON とも言います) は、ルーター・ユーザー・インターフェースの第 2 レベルのプロセスです。

GWCON コマンドを使用して、次のことが行えます。

- ルーターに現在構成されているプロトコルおよびインターフェースをリストする。
- メモリーおよびネットワークの統計を表示する。
- 現行のイベント・ログ・システム (ELS) パラメーターを設定する。
- 指定されたネットワーク・インターフェースをテストする。
- 第 3 レベルのプロセス (プロトコル環境を含む) と通信する。
- インターフェースを使用可能および使用不可にする。

GWCON コマンド・インターフェースは、幾つかのレベル (モードと呼ばれる) で構成されています。各モードには、それぞれ独自のプロンプトがあります。たとえば、IP プロトコルのプロンプトは `IP>` です。

自分が通信しているプロセスおよびモードを知りたい場合は、**Return** キーを押すと、プロンプトが表示されます。この章で説明する一部のコマンド (**network** や **protocol** など) では、GWCON の種々のレベルにアクセスすることができます。

GWCON の出入り

OPCON から GWCON コマンド環境に入り、GWCON プロンプトを表示させる場合は、**talk 5** と入力します。

* **talk 5**

コンソールに GWCON プロンプト (+) が表示されます。このプロンプトが表示されない場合は、**Return** キーを押します。ここで GWCON コマンドを入力することができます。

OPCON に戻るには、OPCON インターセプト文字を入力します。(デフォルトは **Ctrl-P** です。)

GWCON コマンド

この節には GWCON コマンドを記載します。各コマンドごとに、説明、構文の要件、および例を示します。 GWCON コマンドの要約を 表12 に示します。

GWCON コマンドを使用するには、**talk 5** と入力して GWCON プロセスにアクセスし、(+) プロンプトで GWCON コマンドを入力します。

表 12. GWCON コマンドの要約

コマンド	機能
? (Help)	このコマンド・レベルで使用可能なコマンドをすべて表示するか、特定のコマンドに関するオプション (ただし、選択可能な場合) をリストします。 12ページの『ヘルプを得る』を参照してください。
Activate	新たに構成された予備インターフェースを使用可能にします。
Buffer	各インターフェースに割り当てられたパケット・バッファに関する情報を表示します。
Clear	ネットワーク統計を消去します。
Configuration	現行のプロトコルおよびインターフェースの状態をリストします。
Disable	指定されたインターフェースまたはスロットをオフラインにします。
Enable	アダプターのすべてのインターフェースを使用可能にします。
Error	誤りのカウントを表示します。
Event	イベント・ログ・システム環境に入ります。
Feature	通常のプロトコルおよびネットワーク・インターフェースのコンソール・プロセスの外部の、独立したルーター・フィーチャーのコンソール・コマンドへのアクセスを提供します。
Interface	ネットワークのハードウェア統計または指定されたインターフェースの統計を表示します。
Memory	メモリー、バッファ、およびパケット・データを表示します。
Network	指定されたネットワークのコンソール環境に入ります。
Performance	メインプロセッサの使用状況統計のスナップショットを提供します。
Protocol	指定されたプロトコルのコマンド環境に入ります。
Queue	指定されたインターフェースのバッファ統計を表示します。
Reset	指定されたインターフェースを使用不可にした上で、新しいインターフェース、プロトコル、およびフィーチャーの構成パラメーターを使用して、指定されたインターフェースを再度使用可能にします。
Statistics	指定されたインターフェースの統計を表示します。
Test	使用不可にされているインターフェースを使用可能にするか、または指定されたインターフェースをテストします。
Uptime	ルーターの時間に関する統計を表示します。

Activate

activate コマンドは、この装置上で予備インターフェースを使用可能にする場合に使用します。詳細については、68ページの『予備インターフェースの構成』を参照してください。

構文：

activate *interface#*

Buffer

buffer コマンドは、それぞれのインターフェースまたはインターフェースの範囲に割り当てられたパケット・バッファに関する情報を表示させる場合に使用します。

注: 1 つの装置上の各バッファは同じサイズで、動的に作成されます。バッファのサイズは装置によって異なります。

1 つのインターフェースだけの情報を表示する場合は、そのインターフェースまたはネットワークの番号を、コマンドの一部として入力します。インターフェース番号を入力するには、GWCON **configuration** コマンドを使用します。

構文 :

buffer [network# または range_of_network#]

複数のインターフェースに関する情報を表示させる場合は、range_of_network# (または network# と range_of_network# の組み合わせ) を指定します。たとえば、**buffer 0 3 25-50** と指定すると、ネット 0、3、および 25 ~ 50 に関する情報が表示されます。

例 :

buffer

Nt	Interface	Input Buffers:				Buffer sizes:					
		Req	Alloc	Low	Curr	Hdr	Wrap	Data	Trail	Total	Bytes
0	TKR/0	20	20	7	0	109	92	2052	7	2260	45200
1	PPP/0	20	20	7	20	109	92	2052	7	2260	45200
2	PPP/1	10	10	4	0	108	92	2048	0	2248	22480

Nt ソフトウェアに関連したネットワーク・インターフェース番号

Interface

インターフェースのタイプ

入力バッファ :

Req 要求されたバッファ数

Alloc 割り振られたバッファ数

Low 最低水準点 (フロー制御)

Curr この装置の現行のバッファ数。装置が使用不可にされている場合は、この値は 0 になります。パケットを受信したときに、Curr の値が Low より下である場合、そのパケットはフロー制御可能です。(条件については、queue コマンドを参照してください。)

バッファ・サイズ :

Hdr 最大ハードウェア、MAC、およびデータ・リンク・ヘッダーの合計

Wrap プロトコル折り返しのために MAC、LLC、またはネットワーク・レイヤー・ヘッダーに与えられる許容範囲

Data 最大データ・リンク・レイヤー・パケット・サイズ

Trail 最大 MAC およびハードウェア・トレーラーの合計

Total 各パケット・バッファの合計サイズ

GWCON プロセス

Bytes Alloc

この装置のバッファ・メモリの量。この値は、*Alloc x Total* の乗算値によって決まります。

Clear

clear コマンドは、ルーターのネットワーク・インターフェースの 1 つまたはすべての統計情報を削除するのに使用します。このコマンドは、大容量カウンター内の変更を追跡するのに便利です。このコマンドを使用しても、スペースの節約やルーターのスピードアップにはなりません。

インターフェース (または、ネットワーク) 番号を、コマンドの一部として入力します。インターフェース番号を入手するには、GWCON **configuration** コマンドを使用します。

構文 :

clear *interface#* または *range_of_interface#*

複数のインターフェースに関する情報を消去する場合は、*range_of_network#* (または *interface#* と *range_of_interface#* の組み合わせ) を指定します。たとえば、**clear 0 3 25-50** と指定すると、ネット 0、3、および 25 ~ 50 に関する情報が消去されます。

Configuration

configuration コマンドは、プロトコルまたはネットワーク・インターフェースに関する情報を表示するのに使用します。出力は 3 つのセクションに分けて表示されます。最初のセクションには、ルーターの識別、ソフトウェア・バージョン、ブート ROM バージョン、および自動ブート・スイッチの状態がリストされます。2 番目と 3 番目のセクションには、プロトコルおよびインターフェースの情報がリストされます。

構文 :

configuration

複数のインターフェースに関する情報を表示させる場合は、*range_of_network#* (または *network#* と *range_of_network#* の組み合わせ) を指定します。たとえば、**configuration 0 3 25-50** と指定すると、ネット 0、3、および 25 ~ 50 に関する情報が表示されます。

例 :

configuration

Multiprotocol Access Services

2216-MAS Feature 2822 V3.2 Mod 0 PTF 0 RPQ 0 MAS.EF9 cc4_2a

Num	Name	Protocol
0	IP	DOD-IP
3	ARP	Address Resolution
4	DN	DNA Phase IV
6	VIN	Banyan Vines

```

7 IPX NetWare IPX
10 BGP Border Gateway Protocol
11 SNMP Simple Network Management Protocol
12 OSPF Open SPF-Based Routing Protocol
22 AP2 AppleTalk Phase 2
23 ASRT Adaptive Source Routing Transparent Enhanced Bridge
26 DLS Data Link Switching
27 XTP X.25 Transport Protocol
28 APPN Advanced Peer-to-Peer Networking [HPR]
30 APPN Advanced Peer-to-Peer Networking [ISR]

```

```

Num Name Feature
2 MCF MAC Filtering

```

```

16 Networks:
Net Interface MAC/Data-Link Hardware State
0 TKR/0 Token-Ring/802.5 Token-Ring Up
1 TKR/1 Token-Ring/802.5 Token-Ring Up
2 TKR/2 Token-Ring/802.5 Token-Ring Up
3 TKR/3 Token-Ring/802.5 Token-Ring Up
4 Eth/0 Ethernet/IEEE 802.3 Ethernet Up
5 Eth/1 Ethernet/IEEE 802.3 Ethernet Up
6 Eth/2 Ethernet/IEEE 802.3 Ethernet Up
7 Eth/3 Ethernet/IEEE 802.3 Ethernet Up
8 Eth/4 Ethernet/IEEE 802.3 Ethernet Up
9 Eth/5 Ethernet/IEEE 802.3 Ethernet Up
10 FR/0 Frame Relay V.35/V.36 Up
11 X25/0 X.25 V.35/V.36 Up
12 PPP/0 Point to Point V.35/V.36 Up
13 PPP/1 Point to Point V.35/V.36 Up
14 PPP/2 Point to Point V.35/V.36 Up
15 PPP/3 Point to Point V.35/V.36 Up
Up

```

- 最初の行は、プロダクト名を示しています。
- 2行目は、プログラム/プロダクト番号、フィーチャー番号、バージョン、リリース、PTF、および RPQ 情報を示しています。
- 残りの行は、構成済みのプロトコルをリストし、その後に構成済みフィーチャーをリストしています。

プロトコルについて次の情報が表示されます。

Num プロトコルに関連付けられている番号

Name プロトコルの簡略名

Protocol

プロトコルのフルネーム

フィーチャーについて次の情報が表示されます。

Num フィーチャーに関連付けられている番号

Name フィーチャーの簡略名

Feature

フィーチャーのフルネーム

ネットワークについて次の情報が表示されます。

Net ソフトウェアがインターフェースに割り当てるネットワーク番号。ネットワークには 0 から始まる番号が付けられます。これらの番号は、CONFIG プロセスの項で説明したインターフェース番号に対応しています。

Interface

インターフェースの名前とこのタイプのインターフェースのインスタンス

GWCON プロセス

MAC/Data Link

インターフェースに構成された MAC/データ・リンクのタイプ

Hardware

ハードウェア・タイプで表された特定の種類のインターフェース

State ネットワーク・インターフェースの現在の状態

Testing

インターフェースが自己テスト中であることを示します。自己テストが行われるのは、ルーターが最初にスタートしたとき、インターフェースで問題が検出されたとき、または **test command** が使用されたときです。(**enable slot** コマンドを使用して、アダプター上のすべてのインターフェースの自己テストを開始することもできます。)

インターフェースが運用可のときは、インターフェースは定期的に保守パケットを送り出すか、ポートまたは伝送路の物理的状态をチェックする(あるいは、その両方を行う)ことによって、インターフェースがまだ正常に機能していることを確認します。この保守で障害が生じた場合、インターフェースはダウンとして宣言され、5 秒後に自己テストを実行するようにスケジュールされています。自己テストに失敗した場合、インターフェースはダウン状態に変換され、次の自己テストまでの期間が、最大 2 分まで増やされます。自己テストが正常に行われた場合、ネットワークはアップとして宣言されます。

Up インターフェースが運用可であることを示します。

Down インターフェースが運用不可であり、自己テストに失敗したことを示します。ネットワークは定期的に **testing** 状態になり、インターフェースが再び運用可になったかどうかを調べます。

Disabled

インターフェースが使用不可にされていることを示します。インターフェースは、次の方法で使用不可にすることができます。

- **CONFIG disable** コマンドを使用して、インターフェースを使用不可として構成する。ルーターを再初期化するたびに、インターフェースの初期状態は使用不可になります。使用可能にする処置を取るまでは、使用不可の状態のままです。
- **GWCON disable** コマンドを使用して、インターフェースを使用不可にする。この方法は一時的なもので、ルーターを再初期化すると、インターフェースは構成された状態(使用可能または使用不可)に戻ります。
- ネットワーク・マネージャーが **SNMP** を使用してインターフェースを使用不可にする。この方法は一時的なもので、ルーターを再初期化すると、インターフェースは構成された状態(使用可能または使用不可)に戻ります。

インターフェースが使用不可にされている場合、次の方法の 1 つを使用して使用可能にするまでは、使用不可のままです。

GWCON プロセス

- **GWCON test** コマンドを使用して、インターフェースの自己テストを開始する。
- **GWCON enable slot** コマンドを使用して、アダプター上のすべてのインターフェースの自己テストを開始する。
- ネットワーク・マネージャーが **SNMP** を使用して自己テストを開始する。

WAN 再ルートを使用して、使用不可にされたインターフェースの状態を変更することもできます。インターフェースが WAN 再ルートの代替インターフェースとして構成されており、構成された状態が使用不可である場合、WAN 再ルートは、1 次インターフェースがダウンするとインターフェースの自己テストを開始します。1 次インターフェースが再び運用可になり安定すると、WAN 再ルートは代替インターフェースを構成された状態に戻します。詳しくは、**機構の使用と構成** の WAN 再ルート・フィーチャーを参照してください。

Available

インターフェースは 2 次 WAN 復元インターフェースとして構成されており、1 次インターフェースのバックアップとして利用可能であることを示します。

Not Present

インターフェースのアダプターのプラグが差し込まれていないことを示します。

Not Present は、空の装置の状態を示すのにも使用されます。予備インターフェースは、起動されるまでは空の装置として表示されず。

HW Mismatch

構成されたアダプター・タイプが、実際にスロット内に存在するアダプターのタイプと一致していないことを示します。

HW Failure

インターフェースのハードウェアに回復不能な誤りがあることを示します。

Diagnostics

ハードウェア診断が実行中であることを示します。

Disable

disable コマンドは、ネットワーク・インターフェースまたはスロットをオフラインにし、そのインターフェースまたはスロットを使用不可にする場合に使用します。このコマンドを使用すると、インターフェースまたはスロットは即時に使用不可になります。確認を求めるプロンプトは出ず、検証メッセージも表示されません。このコマンドを用いてインターフェースまたはスロットを使用不可にした場合は、**GWCON test** コマンドまたは **OPCON reload** コマンドを使用して使用可能にするまでは、使用不可のままになっています。

GWCON プロセス

インターフェースまたはネット番号あるいはスロットは、コマンドの一部として入力します。インターフェース番号またはスロット番号を入手するには、**GWCON configuration** コマンドを使用します。

注: 使用不可にしようとしているインターフェースが代替 WAN 再ルートとして構成されている場合、この代替インターフェースを含む WAN 再ルート 1 次/代替の対を使用不可にするかどうかを尋ねられます。 *yes* と応答すると、インターフェースは使用不可にされ、1 次インターフェースのバックアップとして利用できなくなります。 *no* と応答すると、代替インターフェースは使用不可にされますが、対応する 1 次インターフェースがダウンした場合には、WAN 再ルートはこれの起動を試みます。 代替インターフェースを使用不可にするときに、そのインターフェース上の WAN 再ルートを使用不可にして、アダプターを取り外せるようにしたい場合があります。 追加の情報については、**機構の使用と構成** の中の WAN 再ルート・フィーチャー、WAN 復元の使用、および WAN 復元の構成と監視 を参照してください。

構文 :

```
disable                interface interface#  
                        slot slot#
```

Enable

Enable コマンドは、アダプターのすべてのインターフェースを使用可能にするのに使用します。これは **test** コマンド (132ページの『Test』 を参照) と同じ動作をしますが、指定されたスロット内のアダプターを使用して、各インターフェースごとに処置を実行します。

構文 :

```
enable                 slot slot#
```

Error

error コマンドは、ネットワークの誤りの統計を表示するのに使用します。このコマンドは、1 群の誤りカウンターを提供します。

構文 :

```
error                  [network# または range_of_network#]
```

複数のインターフェースに関する情報を表示させる場合は、*range_of_network#* (または *network#* と *range_of_network#* の組み合わせ) を指定します。たとえば、**error 0 3 25-50** と指定すると、ネット 0、3、および 25 ~ 50 に関する情報が表示されます。

例 :

```
error
```

Nt	Interface	Input Discards	Input Errors	Input Unk Proto	Input Flow Drop	Output Discards	Output Errors
----	-----------	----------------	--------------	-----------------	-----------------	-----------------	---------------

0	TKR/0	0	0	0	0	0	0
1	PPP/0	0	0	0	0	0	0
2	PPP/1	0	0	0	0	0	0

Nt ソフトウェアに関連したネットワーク・インターフェース番号

Interface

インターフェースのタイプ

Input Discards

誤りは検出されなかったが、高位レイヤー・プロトコルに送達される可能性を防止するために廃棄されたインバウンド・パケットの数。これらのパケットは、バッファ・スペースを空けるために廃棄された可能性もあります。

Input Errors

データ・リンクで欠陥が見付かったパケットの数

Input Unk Proto

不定のプロトコルの受信パケットの数

Input Flow Drop

出力時にフロー制御された受信パケットの数

Output Discards

ルーターがフロー制御のために転送せずに廃棄することを選択したパケットの数

Output Errors

ダウンしているネットワークや転送中にダウンしたネットワーク上で送信を試みるなどの出力誤りの数

注: 廃棄された出力パケットの合計は、すべてのネットワーク上の入力フロー除去数と同じではありません。廃棄された出力には、ローカルで発信されたパケットが含まれていることもあります。

Event

event コマンドは、イベント・ログ・システム (ELS) コンソール環境にアクセスするのに使用します。この環境は、トラブルシューティングのために一時的にメッセージ・フィルターを設定するのに使用されます。ELS コンソール環境で行われたすべての変更は即時に有効になりますが、ルーターが再初期化されると無効になります。イベント・ログ・システムとそのコマンドについては、137ページの『第12章 イベント・ログ・システム (ELS) の使用』を参照してください。GWCON プロセスに戻るには **exit** コマンドを使用します。

構文 :

event

Feature

feature コマンドは、プロトコルおよびネットワーク・インターフェースのコンソール・プロセスの外部の、特定 2216 フィーチャーに関するコンソール・コマンドにアクセスするのに使用します。

GWCON プロセス

feature コマンドの後に疑問符を入力して、使用しているソフトウェア・リリースで利用可能なフィーチャーのリストを入手します。

そのフィーチャーのコンソール・プロンプトにアクセスするには、GWCON プロンプトで **feature** コマンドを入力し、その後続けてフィーチャー番号または短縮名を入力します。98ページの表9 に、利用可能なフィーチャー番号と短縮名がリストされています。

そのフィーチャーのプロンプトにアクセスしたら、そのフィーチャーを監視するための特定のコマンドの入力を開始することができます。GWCON プロンプトに戻るには、フィーチャーのコンソール・プロンプトで **exit** コマンドを入力します。

構文：

feature *feature#* または *feature-short-name*

Interface

interface コマンドは、ネットワーク・インターフェース (たとえば、イーサネットまたはトークンリング) に関する統計情報を表示させる場合に使用します。このコマンドは、クォリファイヤーを付けずに使用して、すべてのインターフェースの要約 (下記の出力に表示) を示したり、クォリファイヤーを付けて、1 つの特定インターフェースの詳細な情報を表示したりすることができます。

各タイプのインターフェースの詳細な出力についての説明は、本書の中の特定インターフェースの監視 の項に記載されています。インターフェース番号を入手するには、GWCON **configuration** コマンドを使用します。

構文：

interface [*interface#* または *range_of_interface#*]

複数のインターフェースに関する情報を表示させる場合は、*range_of_network#* (または *interface#* と *range_of_interface#* の組み合わせ) を指定します。たとえば、**interface 0 3 25-50** と指定すると、ネット 0、3、および 25 ~ 50 に関する情報が表示されます。

例：**interface**

Nt	Nt'	Interface	Slot-Port	Self-Test Passed	Self-Test Failed	Maintenance Failed
0	0	TKR/0	Slot: 1 Port: 1	1	0	0
1	1	TKR/1	Slot: 1 Port: 2	2	1	0
2	2	TKR/2	Slot: 2 Port: 1	2	1	0
3	3	TKR/3	Slot: 2 Port: 2	2	1	0
4	4	Eth/0	Slot: 4 Port: 1	1	0	0
5	5	Eth/1	Slot: 4 Port: 2	1	0	0
6	6	Eth/2	Slot: 5 Port: 1	1	0	0
7	7	Eth/3	Slot: 5 Port: 2	3	2	2
8	8	Eth/4	Slot: 6 Port: 1	1	0	0
9	9	Eth/5	Slot: 6 Port: 2	5	4	1
10	10	FR/0	Slot: 8 Port: 0	2	1	0
11	11	X25/0	Slot: 8 Port: 1	1	0	0
12	12	PPP/0	Slot: 8 Port: 2	2	1	0
13	13	PPP/1	Slot: 8 Port: 3	1	0	0
14	14	PPP/2	Slot: 8 Port: 4	1	0	0
15	15	PPP/3	Slot: 8 Port: 5	1	0	0

注: 表示は装置によって異なります。

Nt グローバル・インターフェース番号

Nt' ダイヤル回線用に予約済み。ダイヤル回線が使用する物理ネットワーク・インターフェースのインターフェース番号

Interface

インターフェース名

Slot-Port

インターフェースのスロット番号とポート番号

Self-Test Passed

自己テストが正常に行われた回数 (インターフェースがダウンからアップに変わった状態)

Self-Test Failed

自己テストが正常に行われなかった回数 (インターフェースがアップからダウンに変わった状態)

Maintenance Failed

保守障害の数

Memory

memory コマンドは、現行の CPU メモリ使用量 (バイト数)、バッファの数、およびパケット・サイズを表示するのに使用します。

このコマンドを使用するためには、空きメモリーが利用可能であることが必要です。空きパケット・バッファ数がゼロに落ちて、一部の着信パケットが失われる結果を招くことがあります。それによってルーターの動作に悪影響を与えることはありません。ルーターのアイドル時には、空きバッファ数は一定に保たれていることが必要です。そうならない場合は、サービス技術員に連絡してください。

構文 :

memory

例 :

```
memory
Physical installed memory:      16 MB
Total routing (heap) memory:    12 MB
Routing memory in use:         13 %

                Total  Reserve  Never      Perm      Temp      Prev
                Alloc  Alloc   Alloc    Alloc    Alloc    Alloc
Heap memory    12231155  26488 10687312  1438487  104924   432

Number of global buffers: Total = 300, Free = 300, Fair = 77, Low = 60
Global buff size: Data = 2048, Hdr = 17, Wrap = 72, Trail = 65, Total = 2208
```

Physical installed memory

ルーターに導入されている物理 RAM の合計量

Total routing memory

ルーティング機能に使用可能なメモリーの量。基本オペレーティング・システムやシステム拡張部分、または APPN などのオプションに割り当てられるメモリーは含みません。これは "ヒープ"・メモリーとも呼ばれ、このすぐ後で説明するヒープ・メモリー・サイズの "合計" に一致します。

GWCON プロセス

Routing memory in use

現在ルーティング機能によって使用されている合計ルーティング・メモリー (total routing memory) のパーセンテージ。現在使用中のヒープ・メモリーは、**Perm Alloc** および **Temp Alloc** というヘッダーのもとでカウントされます。

Heap memory:

データ構造を動的に割り振るために使用するメモリーの量

Total メモリーの割り振りに使用可能なスペースの合計量

Reserve

現在構成済みのプロトコルおよび機能が必要とするメモリーの最小の量

Never Alloc

割り振られたことがないメモリー

Perm Alloc

ルーターのタスクが永続的に要求するメモリー

Temp Alloc

ルーターのタスクに対して一時的に割り振られたメモリー

Prev Alloc

一時的に割り振られ、返されたメモリー

Number of global buffers:

Total システム内のグローバル・バッファの合計数

Free 使用可能なグローバル・バッファの数

Fair 各インターフェース用として妥当なバッファ数 (『Low』を参照)

Low 割り振り方法が変わってバッファを保存する基準となる空きバッファの数。 *Free* の値が *Low* よりも小さい場合は、バッファの数が *Fair* を超える待ち行列にバッファが置かれることはありません。

Global buff size:

グローバル・バッファ・サイズ

Data 任意のインターフェースの最大データ・リンク・パケット・サイズ

Header

最大ハードウェア、MAC、およびデータ・リンク・ヘッダーの合計

Wrap プロトコル折り返しのために MAC、LLC、またはネットワーク・レイヤー・ヘッダーに与えられる許容範囲

Trailer

最大 MAC およびハードウェア・トレーラーの合計

Total 各パケット・バッファの合計サイズ

Network

network コマンドは、サポートされるネットワーク (X.25 ネットワークなど) のコンソール環境に入るのに使用します。このコマンドを実行すると、指定したインターフェースのコンソール・プロンプトが表示されます。このプロンプトから、統計情報 (トークンリング・ネットワークのルーティング情報フィールドなど) を表示することができます。

構文：

```
network                interface#
```

GWCON プロンプト (+) で **configuration** コマンドを入力すると、ルーターが構成されているプロトコルおよびネットワークが表示されます。構成コマンドについての詳細は、120ページの『Configuration』を参照してください。

ルーターが構成されているネットワークを表示させる場合は、+ プロンプトで **interface** と入力します。

GWCON **network** コマンドおよび監視または変更したいインターフェースの番号を入力します。下に例を挙げます。

```
+network 3
X.25>
```

この例では X.25> プロンプトが表示されます。そこで、X.25 操作コマンドを入力すれば、X.25 インターフェースに関する情報を表示させて見ることができます。

監視するインターフェースのインターフェース番号を識別した後、インターフェース特有の情報を監視したい場合は、本書の中の指定のネットワークまたはリンク・レイヤー・インターフェースの監視の項を参照してください。以下のネットワークおよびリンク・レイヤー・インターフェースには、コンソール・サポートが提供されています。

- イーサネット
- フレーム・リレー
- PPP
- SDLC
- SDLC リレー (SRLY)
- トークンリング
- V.25bis
- X.25
- ATM
- ISDN
- ダイヤルイン
- マルチリンク PPP (MP)
- Layer-2-Tunneling

Performance

performance コマンドは、パフォーマンスの監視環境に入る場合に、Config> プロンプトで使用します。詳しくは、215ページの『第14章 性能の構成と監視』を参照してください。

GWCON プロセス Protocol

protocol コマンドは、ルーターに導入されているネットワーク・プロトコルを実現しているルーター・ソフトウェアと通信するのに使用します。プロトコルのコマンド環境にアクセスするには **protocol** コマンドを使用します。このコマンドを入力すると、指定したプロトコルのプロンプトが表示されます。このプロトコルから、そのプロトコルに特有のコマンドを入力することができます。

構文：

```
protocol                prot#
```

プロトコルの番号または短縮名を、コマンドの一部として入力します。プロトコルの番号または短縮名を入力するには、**CONFIG** コマンド環境 (Config>) に入った上で、**list configuration** コマンドを入力します。Config> にアクセスする方法については、17ページの『構成プロセス CONFIG へのアクセス (Talk 6)』を参照してください。GWCON に戻る場合は、**exit** と入力します。

特定のプロトコルのコンソール・コマンドについては、本書または **プロトコルの構成と監視 解説書** の該当する監視の項を参照してください。

Queue

queue コマンドは、指定したインターフェース上の入出力待ち行列の長さに関する統計を表示させる場合に使用します。queue コマンドによって提供される入出力待ち行列に関する情報には、以下のものが含まれます。

- 割り振られたバッファの合計数
- 最低水準バッファ値
- インターフェース上の現在アクティブのバッファの数

構文：

```
queue                interface# または range_of_interface#
```

複数のインターフェースに関する情報を表示させる場合は、**range_of_network#** (または **interface#** と **range_of_interface#** の組み合わせ) を指定します。たとえば、**queue 0 3 25-50** と指定すると、ネット 0、3、および 25 ~ 50 に関する情報が表示されます。

1つのインターフェースだけの情報を表示する場合は、そのインターフェースまたはネットワークの番号を、コマンドの一部として入力します。インターフェース番号を入力するには、GWCON **configuration** コマンドを使用します。

例：

```
queue
      Input Queue      Output Queue
Nt Interface Alloc Low Curr Fair Curr
0 Eth/0      30 10 30    30 1
1 PPP/0     24 4 24     4 0
2 FR/0      24 4 24     5 0
```

Nt ソフトウェアに関連したネットワーク・インターフェース番号

Interface

インターフェースのタイプ

Input Queue:

Alloc この装置に割り振られたバッファの数

Low この装置のフロー制御の最低水準点

Curr この装置の現行のバッファ数。装置が使用不可にされている場合は、この値は 0 になります。

Output Queue:

Fair この装置の出力待ち行列の長さの妥当なレベル

Curr この装置上で送信されるのを現在待っているパケットの数。ローカル発信パケットの場合は、廃棄可能性は **memory** コマンドの項で説明されている、グローバル最低水準点によって異なります。

ルーターは、少なくとも Low 値のパケット数を、インターフェースを介して受信できるように維持しようとします。パケットを受信し、その Curr 値が Low より小さい場合、そのパケットはフロー制御の対象になります。フロー制御の対象のバッファがこの装置上で待ち行列化されることになり、その Curr レベルが Fair より大きい場合、そのバッファは待ち行列化されずに廃棄されます。廃棄されたバッファは、**error** コマンドの Output Discards 欄に表示されます。また、ELS イベント GW.036 または GW.057 も生成します。

ルーターのスケジューリング・アルゴリズムが原因で、Curr (特に、Input Queue Curr) の動的な数が、パケット転送中の標準的な値を十分に表していないことがあります。コンソール・コードは、入力待ち行列が空になったときのみ実行されます。したがって、Input Queue Curr が非ゼロになるのは、通常、パケットが低速の送信待ち行列上で待っているときだけということになります。

Reset

reset コマンドは、指定したインターフェースを使用不可にした上で、新しいインターフェース、プロトコル、およびフィーチャーの構成パラメーターを使用して、指定したインターフェースを再度使用可能にする場合に使用します。詳しくは、72ページの『インターフェースのリセット』を参照してください。

構文：

```
reset interface#
```

Statistics

statistics コマンドは、ネットワーク・ソフトウェアに関する統計情報 (ルーター内のネットワークの構成など) を表示させる場合に使用します。

構文：

```
statistics interface# または range_of_interface#
```

GWCON プロセス

複数のインターフェースに関する情報を表示させる場合は、`range_of_network#` (または `interface#` と `range_of_interface#` の組み合わせ) を指定します。たとえば、**statistics 0 3 25-50** と指定すると、ネット 0、3、および 25 ~ 50 に関する情報が表示されます。

1 つのインターフェースだけの情報を表示する場合は、そのインターフェースまたはネットワークの番号を、コマンドの一部として入力します。インターフェース番号を入力するには、**GWCON configuration** コマンドを使用します。

例 :

```
statistics
Nt Interface      Unicast Pkts Rcv  Multicast Pkts Rcv  Bytes Received  Packets Trans  Bytes Trans
0 Eth/0           137      1      8832      1068      65297
1 PPP/0           0        0        0         0         0
2 PPP/1           0        0        0         0         0
```

Nt ソフトウェアに関連したネットワーク・インターフェース番号

Interface

インターフェースのタイプ

Unicast Pkts Rcv

MAC レイヤーの非マルチキャスト、非同報通信の、特別にアドレスされたパケットの数

Multicast Pkts Rcv

受信したマルチキャストまたは同報通信のパケットの数

Bytes Received

MAC レイヤーのこのインターフェースで受信されたバイト数

Packets Trans

送信されたユニキャスト、マルチキャスト、または同報通信タイプのパケットの数

Bytes Trans

MAC レイヤーで送信されたバイト数

Test

test コマンドは、インターフェースの状態を検証する場合、または **disable** コマンドを用いて前に使用不可にしたインターフェースを使用可能にする場合に使用します。インターフェースが使用可能で、トラフィックを通過させている場合に、**test** コマンドを実行すると、インターフェースはネットワークから除去され、自己診断テストがインターフェースに対して実行されます。

構文 :

test *interface#*

注: このコマンドが機能するためには、コマンドの**完全な** 名前に続けて、インターフェース番号を入力する必要があります。

GWCON プロセス

インターフェース番号またはネットワーク番号をコマンドの一部として入力します。インターフェース番号を入手するには、**GWCON configuration** コマンドを使用します。たとえば、テストが開始されると、コンソールに次のようなメッセージが表示されます。

```
Testing net 0 TKR/0...
```

テストが完了するか、失敗するか、あるいは GWCON がタイムアウトになると (30 秒後)、次のようなメッセージが表示される可能性があります。

```
Testing net 0 Eth/0 ...successful
Testing net 0 Eth/0 ...failed
Testing net 0 Eth/0 ...still testing
```

インターフェースによっては、テストが完了するまでに 30 秒以上かかる場合があります。

注: テストしているインターフェースが代替 WAN 再ルート・インターフェースとして構成されている場合、次のことを尋ねるプロンプトが出ます。

- 現在 WAN 再ルートの代替インターフェースが使用不可にされている場合、インターフェースの 1 次/代替の対を使用可能にするかどうか。

yes と応答した場合は、**t 5 enable alternate-circuit** WAN reroute コマンド (機構の使用と構成 の WAN 復元の構成と監視 で説明している) を入力した場合と同じアクションが生じます。

- インターフェースをテストしたいかどうか。

通常、WAN 再ルート・インターフェースは、対応する 1 次インターフェースをバックアップする必要があるまで、使用不可にされています。*yes* と応答すると、インターフェースの自己テストが開始します。*no* と応答すると、自己テストは行われません。

追加の情報については、機構の使用と構成 の中の WAN 再ルート・フィーチャー、WAN 復元の使用、および WAN 復元の構成と監視 を参照してください。

Uptime

uptime コマンドは、ルーターに関する時間統計を表示させる場合に使用し、以下のものが表示されます。

- リスタートの回数
- 認知された破壊の数
- ルーターが前回に再ロードまたはリスタートされたかどうか
- 前回の再ロードからの経過時間
- 前回のリスタートからの経過時間

構文 :

uptime

GWCON プロセス

第11章 メッセージ通信 (MONITR - Talk 2) プロセス

この章では、メッセージの収集および表示の方法について説明します。(ELS およびメッセージ・フォーマットについては、137ページの『第12章 イベント・ログ・システム (ELS) の使用』を参照してください。) 各メッセージの説明は、*IBM Nways* イベント・ログ・システム・メッセージの手引きを参照してください。この章は以下の節に分かれています。

- 『メッセージ通信 (MONITR) とは ?』
- 『メッセージ通信に影響するコマンド』
- 『メッセージ通信 (MONITR) プロセスへの出入り』
- 136ページの『メッセージの受信』

メッセージ通信 (MONITR) とは ?

MONITR プロセスでは、ルーターおよびネットワークの内部のアクティビティを表示して見ることができます。また、MONITR によってソフトウェアからのログ・メッセージも表示されます。

メッセージ通信に影響するコマンド

メッセージ通信プロセスに影響するコマンドは、次のとおりです。

- OPCON コマンド :
 - **divert** では、出力を一時的に別の装置に転送します。
 - **flush** では、ソフトウェアに収集したメッセージを廃棄させます。
 - **halt** では、divert コマンドのアクションを取り消します。
 - **talk** では、メッセージ出力を表示します。
- CONFIG **set logging disposition** コマンドでは、ソフトウェアによるその出力の送信先となる初期装置を設定します。

メッセージ通信 (MONITR) プロセスへの出入り

OPCON からメッセージ通信プロセスに入る場合は、**talk 2** コマンドを入力します。

ソフトウェアに累積されたメッセージがコンソールに表示されます。

メッセージ通信を終了して OPCON に戻る場合は、OPCON インターセプト文字 (デフォルトは **Ctrl-P**) を入力します。

メッセージの受信

コンソールでメッセージを受信する場合は、前節の説明に従ってメッセージ通信プロセスに入ります。そうすると、ソフトウェアが前回の起動以降に記録したメッセージをすべて表示します。メッセージ通信プロセスに接続されている間は、その間に到着するメッセージがすべて表示されます。

ルーターで何か別のことを行いながら、ソフトウェア・メッセージを表示させて見る場合は、OPCON **divert** および **halt** コマンドを使用します。許可された装置は、出力を TTY0 (ローカル・コンソール)、TTY1、または TTY2 (リモート・コンソール) に着信転送します。

第12章 イベント・ログ・システム (ELS) の使用

この章では、イベント・ログ・システム (ELS) について説明します。ELS は、すべてのイベントを継続的にログに記録し、それらをユーザーが選択したパラメーターに従ってフィルター処理します。操作カウンターと ELS を組み合わせることによって、システムの正常な動作とアクティビティを監視するための情報が得られます。この章は、以下の節に分けて説明します。

- 『ELS とは ?』
- 138ページの『ELS 構成環境への出入り』
- 138ページの『イベント・ログの概念』
- 142ページの『ELS の使用』
- 144ページの『ELS を使用してのトラブルシュート』
- 146ページの『ELS リモート・ログの使用と構成』
- 155ページの『ELS メッセージ・バッファリングの使用』

ELS とは ?

ELS は監視システムで、ルーター・オペレーティング・システムの一部です。ELS は、ルーターのアクティビティの結果としてログに記録されたメッセージを管理します。ELS コマンドを使用して、重要であると思われるメッセージだけを選別する構成をセットアップします。そうしておけば、メッセージは、コンソール端末画面に表示したり、リモート・ワークステーションのログに記録したり、シンプル・ネットワーク管理プロトコル (SNMP) トラップの使用によってネットワーク管理端末に送信したりすることができます。

ELS システムと操作カウンターは、ルーターに生じた問題を分離する上で最高の障害追及ツールとなります。イベント・メッセージにざっと目を通せば、ルーターに問題が生じているかどうかを知り、問題の解明をどこから始めればよいか分かります。

ELS 構成環境では、コマンドを使用してデフォルト構成を設定します。このデフォルト構成が有効になるのは、ルーターの再初期化の後です。

ときには、ELS 構成環境で設定したもの以外のメッセージを一時的に表示して見ることが役立ちますが、その場合はルーターを再初期化する必要はありません。ELS の操作および監視環境を使用するのは、次の場合です。

- デフォルトの ELS 表示設定値を一時的に変更する。
 - ELS コンソール環境で行った変更は、即時に有効になります。
 - 操作/監視環境で行った変更は、不揮発性構成記憶域には保管されません。
- ELS による動的 RAM の使用に関する統計情報を表示する。

注: 特定の ELS メッセージについては、*IBM Nways イベント・ログ・システム・メッセージの手引き* で説明しています。

ELS の使用

ELS は OPCON プロセスから利用するサブプロセスです。

ELS 構成環境への出入り

ELS 構成環境 (CONFIG プロセスからアクセス可能) は、ELS Config> プロンプトによって示されます。このプロンプトで入力されたコマンドは、ELS のデフォルト状態を作成します。これはルーターのリスタート後に有効になります。これらのコマンドについては、この章の後半で詳しく説明します。

サブシステム、グループ、またはイベントをパラメーターとする構成コマンドは、次の順序で実行されます。

- サブシステム
- グループ
- イベント

基本 ELS 構成を設定するには、ELS Config> プロンプトで **display subsystem all standard** コマンドを入力します。このコマンドは、STANDARD ログ・レベル (つまり、すべての誤りと異常通知コメント) を持つすべてのサブシステムからのメッセージを表示するように、ELS を構成します。

注: ルーターには、デフォルトの ELS 構成はありません。ユーザーが ELS 構成環境に入り、デフォルト状態を設定する必要があります。

OPCON から ELS 構成環境に入るには、次のようにします。

1. **talk 6** コマンドを入力します。コンソールに CONFIG プロンプト (Config>) が表示されます。最初に CONFIG に入ったときにこのプロンプトが表示されない場合は、**Return** を押してください。
2. CONFIG プロンプトで、次のコマンドを入力して ELS にアクセスする。

```
Config> eve
```

コンソールに ELS 構成プロンプト (ELS config>) が表示されます。これで、ELS 構成コマンドを入力できます。

ELS 構成環境を終了するには、**exit** コマンドを入力します。

イベント・ログの概念

この節では、イベントをログに記録する方法およびメッセージの解釈方法について説明します。また、サブシステム、イベント番号、およびログ・レベルの概念についても説明します。大部分の ELS 機能は、サブシステム、イベント番号、およびログ・レベルをパラメーターとして受け取るコマンドが基本になっています。

イベントの原因

イベントは、ルーターが動作している間、連続的に発生します。以下の理由のいずれも、その原因になります。

- システム・アクティビティー

- 状態の変更
- サービス要求
- データの送受信
- データ誤りおよび内部の誤り

イベントが発生すると、ELS はその発生源とイベントの性質を識別するデータを、システムから受け取ります。ELS は、受信したデータをその一部として使用してメッセージを生成します。

メッセージの解釈

この節では、ELS によって生成されるメッセージの解釈方法について説明します。図5 に、メッセージの内容を示します。



図5. イベントによって生成されるメッセージ

図5 に示されている情報、および **list subsystem** コマンドによって表示される ELS ログ・レベル情報について、以下で説明します。

サブシステム

サブシステム とは、ルーターのコンポーネント (プロトコルやインターフェースなど) を表す、事前定義された短縮名です。図5 では、**GW** がこのイベントを発生したサブシステムを識別しています。

その他のサブシステムの例としては、**IP**、**TKR**、**X25** などがあります。特定のルーター上に実際に存在するサブシステムは、そのルーターに構成されているハードウェアおよびソフトウェアによって異なります。この章で後述する **list subsystem** コマンドを使用すれば、ルーター上のサブシステムのリストを表示して見ることができます。

ELS コマンドの影響がサブシステム全体に及ぶようにしたい場合は、そのサブシステムをコマンドのパラメーターとして入力します。たとえば、ELS コマンド **display subsystem GW** では、**GW** サブシステム全体で発生するイベントが ('debug' ログ・レベルのイベントを除いて) すべて表示されます。

イベント番号

イベント番号 は、サブシステム内の各メッセージに割り当てられる、事前定義された固有の任意の番号です。図5 では、**019** が **GW** サブシステム内のイベント番号です。**list subsystem** コマンドを使用すれば、サブシステム内のすべてのイベントのリストを表示することができます (ただし、*subsystem* はそのサブシステムの短縮名)。

イベント番号は常に、ピリオドで区切って、サブシステム識別子と共に表示されます。たとえば、**GW.019** のように表示されます。サブシステムとイベント番号の組み

合わせて、個々の イベントを識別します。これらは、所定の ELS コマンドのパラメーターとして入力されます。コマンドの影響が指定のイベントだけに及ぶようにしたい場合は、サブシステムとイベント番号をその ELS コマンドのパラメーターとして入力します。

ログ・レベル

ログ・レベル は、各メッセージをその生成の原因となったイベントのタイプによって分類する、事前定義された設定値です。ログ・レベルの設定を表示させる場合は、**list subsystem** ELS コンソール・コマンドを使用します。表13 は、ログ・レベルとタイプをリストしています。ERROR、INFO、TRACE、STANDARD、および ALL は、他のログ・レベル・タイプを集合したものです。STANDARD が推奨されるデフォルト値です。

表 13. ログ・レベル

ログ・レベル	タイプ
UI ERROR	異常な内部誤り
CI ERROR	通常の内外部誤り
UE ERROR	異常な外部誤り
CE ERROR	通常の外外部誤り
ERROR	上記のすべての誤りレベルが含まれる
UINFO	異常な通知コメント
CINFO	通常の情報コメント
INFO	上記のすべてのコメント・レベルが含まれる
STANDARD	すべての誤りレベルとすべての通知コメント・レベルが含まれる (デフォルト)
PTRACE	パケット単位のトレース
UTRACE	異常な動作トレース・メッセージ
CTRACE	通常動作トレース・メッセージ
TRACE	上記のすべてのトレース・レベルが含まれる
DEBUG	デバッグ用のメッセージ
ALL	すべてのログ・レベルが含まれる

ログ・レベルの設定値は、以下のコマンドの動作に影響を与えます。

- **Display subsystem**
- **Nodisplay subsystem**
- **Trap subsystem**
- **Notrap subsystem**
- **Remote subsystem**
- **Noremote subsystem**

ログ・レベルは、上記のコマンドの 1 つのパラメーターとして指定すると、その特定コマンドに対して設定されます。下に例を挙げます。

```
display subsystem TKR ERROR
```

このログ・レベルをコマンド行に含めると、**display** コマンドが変更されて、UI-ERROR または CI-ERROR のログ・レベルをもつイベントがサブシステム TKR で発生するたびに、その結果のメッセージがコンソールに表示されるようになります。

グループまたはイベントに影響を与える動作に対してログ・レベルを指定することはできません。

メッセージ・テキスト

メッセージ・テキストは短縮形で表示されます。139ページの図5で、Slf tst nt 1 int ETH/0 は、このイベントによって生成されたメッセージです。変数 (*source_address* や *network* など) は、メッセージがコンソールに表示されるときに実データに置き換えられます。

一部のイベント・ログ・システム・メッセージ記述では、変数 *error_code* が参照されます (通常は、その前に *rsn* (reason 理由) が付いています)。これらは、検出されたパケット誤りのタイプを示しています。表14は、誤り符号、つまりパケット完結符号を記述しています。パケット完結符号は、ルーターが受信したパケットの後処理を示します。

表 14. パケット完結符号 (誤り符号)

符号	意味
0	パケットは出力のために正常に待ち行列に入れられました。
1	ランダムな未識別の誤り
2	パケットは、フロー制御の理由で、出力のために待ち行列に入れられませんでした。
3	パケットは、ネットワークのダウンにより、待ち行列に入れられませんでした。
4	パケットは、ループまたは不正な同報通信を回避するために、待ち行列に入れられませんでした。
5	パケットは、あて先ホストのダウンのため (これを検出できるネットワーク上のみ)、待ち行列に入れられませんでした。

ELS はネットワーク情報を、次のように表示します。

```
nt 1 int Eth/0 (または) network 1, interface Eth/0,
```

ただし、

- 1 はネットワーク番号 (ルーター上の各ネットワークには、ゼロから順に番号が付けられています)。
- 0 は、装置番号です (各ハードウェア・タイプのインターフェースには、ゼロから順に番号が付けられています)。

イーサネットおよび 802.5 ハードウェア・アドレスは、長い 16 進数として表示されます。

IP (インターネット・プロトコル) アドレスは、ピリオドで区切られた 4 つの 10 進バイト (たとえば、18.123.0.16) として表示されます。

グループ

グループは、名前が付けられた (グループ名) ユーザー定義のイベントの集合です。サブシステム、サブシステムとイベント番号、およびログ・レベルと同様、グルー

ELS の使用

プ名も ELS コマンドのパラメーターとして使用します。ただし、事前定義されたグループ名はありません。グループを作成してからでないと、その名前をコマンド行で指定することができません。

グループを作成するには、**add** 構成コマンドを使用し、グループの呼び名を指定し、次にそのグループに含めるイベントを指定します。グループに追加するイベントは、サブシステムおよびログ・レベルが異なっても構いません。

グループを作成した後は、グループ名を使用して、グループ内のイベントを一括して操作します。たとえば、`grouptwo` という名前のグループに追加されたイベントからのすべてのメッセージの表示をオフにするには、次のように、コマンド行にグループ名を含めます。

```
nodisplay group grouptwo
```

グループを削除するときは、**delete** コマンドを使用します。

ELS の使用

ELS の効果的な使用には、以下のステップを実行します。

- ELS システムを使用する前に、何が見たいかをはっきり知っておく。MONITR プロセスを使用する前に、表示して見たい問題またはイベントを明確に定義しておきます。
- コマンド **nodisplay subsystem all all** を実行して、すべての ELS メッセージをオフにする。
- 直面している問題に関連したメッセージだけをオンにする。
- *IBM Nways* イベント・ログ・システム・メッセージの手引き を使用して、表示されているどのメッセージが正常かを判別する。

初めて MONITR プロセスから ELS を表示させたときは、相当な量の情報が表示されます。中度から重度の負荷時には、ルーターはすべてのパケットをバッファリングして表示することはできないので、バッファリングはフラッシュされます。この状態が起これると、次のようなメッセージが表示されます。

```
xx messages flushed
```

ルーターは、これらのメッセージを保管しません。このメッセージが表示されたときは、ELS 出力を調整して、監視対象の現行タスクにとって重要な情報だけが表示されるようにします。あるいは、拡張 ELS コマンドを使用してメッセージ・バッファリングを設定します。155ページの『ELS メッセージ・バッファリングの使用』を参照してください。

ELS メッセージの回転の管理

ELS メッセージはルーターのバッファリングを連続して回転していることに注意することも大切です。ELS メッセージの表示の停止およびリスタートには、以下のキーの組み合わせを使用します。

Ctrl-S スクロールを一時停止する場合

Ctrl-Q スクロールを再開する場合

Ctrl-P 最後のプロセスに戻る場合

ELS 出力をファイルにキャプチャーすることもできます。これは、ルーターに Telnet しているときに、自分の場所からスクリプト・ファイルまたはログ・ファイルをスタートさせて行うことができます。あるいは、PC をルーターのコンソール・ポートに接続し、端末エミュレーション・パッケージ内からログ・ファイルをスタートさせて行うこともできます。この情報は、カスタマー・サービスによる問題の診断に役立てるために必要です。

UNIX ホスト上の Telnet 接続を使用した ELS 出力のキャプチャー

画面上の ELS メッセージをホスト上のファイルにキャプチャーする場合は、AIX または UNIX ホスト上の Telnet 接続を使用します。ただし、始める前に、157ページの『第13章 イベント・ログ・システム (ELS) の構成と監視』の ELS コンソール・コマンドを使用して、キャプチャーしたいメッセージ用の ELS をセットアップしておきます。

AIX または UNIX ホスト上のファイルに ELS 出力をキャプチャーするには、以下のステップに従います。

1. ホストから **telnet router_ip_addr | tee local_file_name** と入力する。

router_ip_addr は、ルーターの IP アドレスです。

local_file_name は、ELS メッセージを保管したいホスト上のファイルの名前です。

tee コマンドは、ELS メッセージを画面に表示し、同時に、それをローカル・ファイルにコピーします。

2. OPCON プロンプト (*) から **t 2** と入力する。これにより MONITR プロセスにアクセスしますが、これが ELS メッセージを画面に表示するプロセスです。構成した ELS メッセージに応じて、画面に ELS メッセージが表示されるはずですが、MONITR プロセスにある限り、すべての ELS メッセージがローカル・ファイルに書き込まれます。MONITR プロセスを終了する (**Ctrl-P** を入力して) か、Telnet セッションを終了すると、ローカル・ファイルへのメッセージのログ記録は停止します。

ELS 出力を Unix ホスト上でキャプチャーするのではなく、リモート・ログを使用することもできます。リモート・ログについて詳しくは、146ページの『ELS リモート・ログの使用と構成』を参照してください。

イベント・メッセージを SNMP トラップで送信できるように ELS を構成

イベント・メッセージが SNMP エンタープライズ特定トラップでネットワーク管理端末に送信されるように、ELS を構成することができます。これらのトラップは状態や診断結果を報告するのに便利であり、2216 のリモート監視にしばしば使用されます。ELS が適正に構成されていると、選択されたイベントが発生するたびに、SNMP トラップが生成されます。SNMP の詳細については、プロトコルの構成と監視 解説書 を参照してください。

ELS の使用

特定のイベントを SNMP トラップとして送信するために起動する必要があることを ELS に通知するには、ELS config> プロンプトまたは ELS> プロンプトで、たとえば IP を使用して、次のように入力します。

```
trap event ip.007
```

注: ELS config> プロンプトを使用する場合は、リポートする必要があります。

ELS エンタープライズ特定トラップを使用可能にするには、以下のステップに従います。

1. SNMP config> プロンプトで、たとえば **public** を使用して、次のように入力する。

```
SNMP config> add address public <network manager IP address>
SNMP config> enable trap enterprise public
SNMP config> set community access read_trap public
```

注: これらの変更を起動するためには、リポートする必要があります。

2. ネットワーク管理ステーションがエンタープライズ特定トラップを受信し、正しく表示できるようにする。

上記のステップに従って、グループ、サブシステム、およびイベントをトラップします。

ELS を使用してのトラブルシュート

特定の問題のトラブルシュートを行うときは、その問題に関連するメッセージを表示します。たとえば、ブリッジングに問題が生じているときは、ブリッジング・メッセージをオンにします。

```
display subsystem srt all
```

```
display subsystem br all
```

画面上のメッセージのスクロールする速度が速いので、当初は、表示された番号をメモしておき、後でそれを イベント・ログ・システム・メッセージの手引き 解説書で調べても構いません。特定プロトコルについて表示される種々のタイプのメッセージに慣れてきたら、トラブルシュートに必要な情報が含まれているメッセージだけをオン、オフにすることができるようになります。以下に、特定の ELS の例を示します。問題の種類によって必要なステップが異なることに留意してください。

ELS 例 1

トークンリング・インターフェース上のポーリングの頻度を調べ、ポーリングが正常に行われているかどうかを知りたいものとします。

```
ELS> nodisplay subsystem all all
ELS> display subsystem tkr all
Ctrl-P
* t 2
```

メッセージがスクロールし始めたら、ELS メッセージ tkr.031 を探します。

ELS 例 2

SRB ブリッジングが働いていません。

1. 構成をチェックする。
2. GWCON ブリッジング・コンソールを使用して、ブリッジング・インターフェースが使用可能になっているかどうかを検査する。
3. 次のように入力する。

```
* t 6
config> event
ELS config> nodisplay subsystem all all
ELS config> display subsystem srb all
ELS config> exit
config> Ctrl-P
```

4. ルーティング・サブシステムをリスタートする。サブシステムがリスタートしたら、次のように入力する。

```
* t 2
```

ELS 例 3

ルーターがイーサネット上の IPX サーバーと通信できません。

1. **talk** コマンドと GWCON の PID を入力する。

```
*talk 5
```

コンソールに GWCON プロンプト (+) が表示されます。最初に GWCON に入ったときにこのプロンプトが表示されない場合は、**Return** を押してください。

2. GWCON プロンプト (+) で **IPX** と入力し、IPX コンソール・プロンプト (IPX>) にアクセスする。
3. IPX コンソール・プロンプトで **slist** コマンドを入力して、そのサーバーがリストされているかどうかを検査する。(slist コマンドについては、プロトコルの構成と監視 解説書 の IPX の監視に関する項を参照してください。)
4. IPX 構成をチェックする。
5. 次のように入力する。

```
* t 5
+ event
ELS> nodisplay subsystem all all
ELS> display subsystem IPX all
ELS> display subsystem eth all
ELS> Ctrl-P
* t 2
```

メッセージがスクロールし始めたら、ELS メッセージ eth.001 を探します。このメッセージは、サーバーでイーサネット・タイプ・フィールドが不良であることを示します。

ELS リモート・ログの使用と構成

リモート・ログ記録 ELS メッセージには、talk 2 で表示される、モニター待ち行列に入っている ELS メッセージに含まれている情報がすべて含まれ、図6 に示す追加情報も含まれます。

Date/Time	IP address assigned by the user	Sequence Number used for detecting missing messages	Local Name assigned by the user	ELS Subsystem Name, & Formatted message
Nov 20 12:13:47	5.1.1.1	Msg [0444] from	** IBM/2216 **	:els: ARP.011 Del ent ...

図6. SYSLOG メッセージ記述

リモート・ログの画面には次の相違点があることに注意してください。

- 常に時刻として表示される時間に加えて、月日が表示される。
- ユーザー指定の送信元 IP アドレスである、IP アドレスが表示される。DNS サーバーが送信元 IP アドレスをホスト名に解決する場合は、IP アドレスではなく、ホスト名が表示されます。
- 送信元装置によってメッセージにシーケンス番号が追加され、これが廃棄されたメッセージの検出に役立つ。廃棄されたメッセージの説明については、150ページの『リモート・ログ出力』を参照してください。メッセージのシーケンス番号が9999に達すると、次のシーケンス番号は0001になります。
- 送信元ルーターの『ローカル名』が表示され、これが複数の送信元間の区別に役立つ。ローカル名が構成されていない場合は、このフィールドはブランクです。

SYSLOG の機能およびレベル

リモート・ログ記録 ELS メッセージは、ネットワークを通して UDP パケットで伝送され、その UDP ヘッダーの着信ポート番号は常に 514 に等しく、SYSLOG ポートになっています。UDP パケットの受信および処理を行うためには、ELS メッセージの受信およびログ記録を行うリモート・ワークステーションで、SYSLOG デーモン (syslogd) が稼働している必要があります。詳細については、147ページの『リモート・ワークステーション構成』を参照してください。

リモート・ログ記録 ELS メッセージが表示されても、その中に示されることはありませんが、ネットワークを通して UDP パケットとして送信されるすべての ELS メッセージには、それぞれ *syslog_facility* および *syslog_level* が割り当てられている必要があります。SYSLOG デーモンでは、機能とレベルの組み合わせを使用して、メッセージのルート先を判別します。一般的には、ELS メッセージがリモート・ホストの1つまたは複数のファイルに書き込まれるようにしたいものです。それ以外にも、メッセージをコンソールに表示させたり、メッセージを単数または複数のユーザーに送信したり、メッセージを別のワークステーションに送信したりするオプションを選択することができます。

syslog_facility および *syslog_level* の値を指定する場合に使用するコマンドについては、その他のリモート・ログ関連コンソール・コマンドと共に、181ページの『ELS 監視コマンド』および157ページの『ELS 構成コマンド』で説明します。これらのコマンドの検討を行ってから、次の項に読み進んでください。

リモート・ワークステーション構成

以下の構成では、単一の 2216 による単一のリモート・ワークステーションへのリモート・ログ記録を前提としています。複数の 2216 による同一リモート・ワークステーションへのリモート・ログ記録の構成もできます。ただし、特定の 2216 によるログ記録の対象となりうるリモート・ワークステーションは 1 台であり、1 台だけです。この例で使用するオペレーティング・システムは、AIX 4.2 です。実際の環境はこれとは多少異なる場合があります。SYSLOG について詳しくは、使用しているオペレーティング・システムの資料を参照してください。

AIX ワークステーション上で構成を実行する場合は、**ルート**としてログインする必要があります。ワークステーションを構成する手順は、以下のとおりです。

1. `syslog.conf` ファイルを作成または編集して、特定の `syslog_facility` および `syslog_level` の値をもつ ELS メッセージが書き込まれる先を指定します。メッセージの着信先を指定する方法の例については、148ページの図7の最下部を参照してください。ログ・ファイルの全パス名を指定する必要があることに注意してください。SYSLOG 構成ファイルのデフォルトの場所は、`/etc/syslog.conf` です。
2. `syslog.conf` ファイル内で指定した、SYSLOG メッセージのログ記録用のファイルを作成します。
3. **syslogd** と入力して、SYSLOG デーモンを開始します。SRC (システム・リソース・コントローラー) から SYSLOG デーモンを開始する場合は、**startsrc -s syslogd** と入力します。構成ファイルのパス名が `/etc/syslog.conf` でない場合は、**syslogd -f pathname** を入力します。SYSLOG デーモンをデバッグ・モードで開始する場合は、**syslogd -d.** と入力します。

注: SYSLOG デーモンの複数インスタンスの実行はサポートされません。

4. `syslog.conf` ファイルの作成または変更時に SYSLOG デーモンがすでに稼働している場合は、デーモンをリスタートして、`syslog.conf` から構成を再初期化させる必要があります。
5. 次のように **logger** コマンドを使用して、セットアップを検証します。

```
logger -p user.alert THIS IS A TEST MESSAGE (user.alert)
logger -p news.info THIS IS A TEST MESSAGE (news.info)
```

セットアップが正しければ、`syslog.conf` で指定したファイルに THIS IS A TEST MESSAGE... と書き込まれます。

ELS の使用

```
# @(#)34      1.9 src/bos/etc/syslog/syslog.conf, cmdnet, bos411, 9428A410j 6/13/93 14:52:39
#
# COMPONENT_NAME: (CMDNET) Network commands.
#
# FUNCTIONS:
#
# ORIGINS: 27
#
# (C) COPYRIGHT International Business Machines Corp. 1988, 1989
# All Rights Reserved
# Licensed Materials - Property of IBM
#
# US Government Users Restricted Rights - Use, duplication or
# disclosure restricted by GSA ADP Schedule Contract with IBM Corp.
#
# /etc/syslog.conf - control output of syslogd
#
# Each line must consist of two parts:-
#
# 1) A selector to determine the message priorities to which the
#    line applies
# 2) An action.
#
# The two fields must be separated by one or more tabs or spaces.
#
# format:
#
# <msg_src_list>          <destination>
#
# where <msg_src_list> is a semicolon separated list of <facility>.<priority>
# where:
#
# <facility> is:
# * - all (except mark)
# kern,user,mail,daemon, auth, syslog, lpr, news, uucp, cron, authpriv, local0 - local7
#
# <priority or level> is one of (from high to low):
# emerg,alert,crit,err(or),warn(ing),notice,info,debug
# (meaning all messages of this priority or higher)
#
# <destination> is:
# /filename - log to this file
# username[,username2...] - write to user(s)
# @hostname - send to syslogd on this machine
# * - send to all logged in users
#
# example:
# "mail messages, at debug or higher, go to Log file. File must exist."
# "all facilities, at debug and higher, go to console"
# "all facilities, at crit or higher, go to all users"
# mail.debug          /usr/spool/mqueue/syslog
# *.debug             /dev/console
# *.crit              *
#   syslog messages with facility / priority values of LOG_USER,   LOG_ALERT
user.alert           /tmp/syslog_user_alert
#   syslog messages with facility / priority values of LOG_NEWS,   LOG_INFO
news.info            /tmp/syslog_news_info
```

図7. *syslog.conf* 構成ファイル

リモート・ログ記録のための 2216 の構成

2216 の構成手順は、次のとおりです。

1. talk 6 で、149ページの図8 に示すようにして、リモート・ログ記録機能を構成します。 *source-ip-addr* として指定される IP アドレスは、IP アドレスまたはホスト名がリモート・ログ記録 ELS メッセージに示されると、識別が一層容易になるように 2216 内で構成される、IP アドレスであることが必要です。また、この IP アドレスがネーム・サーバーによって即時にホスト名に解決されるかどうか、またはネーム・サーバーが少なくとも、『address not found』によって即時に応答するかどうか検証する必要もあります。これが行われるかどうか判別するには、ワークステーション次のように **host** コマンドを発行します。


```
workstation> host 5.1.1.1
host: address 5.1.1.1 NOT FOUND
workstation>
```

応答にかかる時間が 1 秒を超える場合は、より迅速に解決する IP アドレスを選択します。

2. talk 6 で、150ページの図9 に示すようにして、リモート・ログ記録のためのイベントおよびサブシステムを構成します。
3. 構成を書き込み、2216 を再ロードします。

```
ELS config>set remote source-ip-addr 5.1.1.1
Source IP Addr = 5.1.1.1

ELS config>set remote remote-ip-addr 192.9.200.1
Remote Log IP Addr = 192.9.200.1

ELS config>set remote local-id ** IBM/2216 **
Remote Log Local ID = ** IBM/2216 **

ELS config>set remote no-msgs-in-buffer 100
Number of Messages in Remote Log Buffer must be 100-512
Number of Messages in Remote Buffer = 100

ELS config><B>set remote facility log_news
Default Syslog Facility = LOG_NEWS

ELS config>set remote level log_info
Default Syslog Level = LOG_INFO

ELS config>set remote on
Remote Logging is ON

ELS config>list remote

----- Remote Log Status -----

Remote Logging is ON
Source IP Address = 5.1.1.1
Remote Log IP Address = 192.9.200.1
Default Syslog Facility = LOG_NEWS
Default Syslog Priority Level = LOG_INFO
Number of Messages in Remote Log = 100
Remote Logging Local ID = ** IBM / 2216 **
ELS config>
```

図 8. リモート・ログ記録のための 2216 の構成

ELS の使用

```
ELS config>display sub snmp all
ELS config>remote sub snmp all log_news log_info

ELS config>display event srt.017
ELS config>remote event srt.017 log_news log_info

ELS config>display event stp.016
ELS config>remote event stp.016 log_user log_info

ELS config>display event stp.026
ELS config>remote event stp.026 log_news log_info

ELS config>display event stp.024
ELS config>remote event stp.024 log_news log_info

ELS config>display event ip.068
ELS config>remote event ip.068 log_news log_info

ELS config>display event ip.058
ELS config>remote event ip.058 log_news log_info

ELS config>display event ip.022
ELS config>remote event ip.022 log_news log_info

ELS config>display event gw.022
ELS config>remote event gw.22 log_news log_info

ELS config>display event arp.011
ELS config>remote event arp.011 log_user log_alert

ELS config>display event arp.002
ELS config>remote event arp.022 log_user log_alert

ELS config>list status
Subsystem:      SNMP
Disp levels:   ERROR INFO TRACE
Trap levels:   none
Trace levels:  none
Remote levels: ERROR INFO TRACE
               Syslog Facility/Level: LOG_NEWS LOG_INFO

Event   Display Trap   Trace   Remote
SRT.017 On      Unset   Unset   On
               Syslog Facility/Level: LOG_NEWS LOG_INFO
STP.016 On      Unset   Unset   On
               Syslog Facility/Level: LOG_NEWS LOG_INFO
STP.026 On      Unset   Unset   On
               Syslog Facility/Level: LOG_NEWS LOG_INFO
STP.024 On      Unset   Unset   On
               Syslog Facility/Level: LOG_NEWS LOG_INFO
IP.068  On      Unset   Unset   On
               Syslog Facility/Level: LOG_NEWS LOG_INFO
IP.058  On      Unset   Unset   On
               Syslog Facility/Level: LOG_NEWS LOG_INFO
IP.022  On      Unset   Unset   On
               Syslog Facility/Level: LOG_NEWS LOG_INFO
GW.022  On      Unset   Unset   On
               Syslog Facility/Level: LOG_NEWS LOG_INFO
ARP.011 On      Unset   Unset   On
               Syslog Facility/Level: LOG_USER LOG_ALERT
ARP.002 On      Unset   Unset   On
               Syslog Facility/Level: LOG_USER LOG_ALERT
```

図9. リモート・ログ記録のためのサブシステムおよびイベントの構成

リモート・ログ出力

151ページの図10 に、/tmp/syslog_news_info ファイルからのサンプルを示します。最初のメッセージのシーケンス番号が 310 であることに注意してください。つまり、最初の 309 個の ELS メッセージは送信元 2216 から送信されなかったことを意味しています。それには、次のように幾つかの理由があります。

- それらのメッセージが最初に ELS に渡された時点では、リモート・ログ記録機能が初期化を完了していなかった。
- 送信元 2216 からリモート・ワークステーションへのルートがルーティング・テーブルになかった。
- ELS メッセージが入っているアウトバウンド UDP パケット用のインターフェースが『Up』状態ではなかった。

1 では、メッセージ 311 ~ 313 がリモート・ログに記録されなかったことに注意してください。その理由は、ARP 要求がアウトスタンディングであり、ARP 応答が受信されるまでは、最初のパケット以外はすべて送信元 2216 内で廃棄されるからです。さらに、ARP キャッシュはユーザー構成のリフレッシュ速度でクリアされ、新しい ARP 要求が発行されます。この発生時点を判別するために、該当の 1 次 ELS イベントに加えて、イベント ARP.002 および ARP.011 をリモート・ログに記録することができます。152ページの図12には、`syslog_user_alert` ファイルのログに記録された ARP イベントを示してあり、図10には欠落として示されていたイベント 445 および 446 が説明されています。

```
Nov 20 12:03:16 worksta01 root: THIS IS A TEST MESSAGE (news.info)
Nov 20 12:08:48 5.1.1.1 Msg [0310] from ** IBM / 2216 **: els: IP.022: add nt 192.9.200.0 int 192.9.200.20
nt 0 int Eth/0
```

1 (messages 311, 312, and 313 did not get remote-logged due to ARP request outstanding - see explanation in the text)

2 (messages 314 and 315 were logged to a separate file - see explanation in the text)

```
Nov 20 12:08:48 5.1.1.1 Msg [0316] from ** IBM / 2216 **: els: IP.068: routing cache cleared
Nov 20 12:08:48 5.1.1.1 Msg [0317] from ** IBM / 2216 **: els: IP.022: add nt 5.0.0.0 int 5.1.1.1 nt 5 int Eth/4
Nov 20 12:08:48 5.1.1.1 Msg [0318] from ** IBM / 2216 **: els: SRT.017: Enabling SRT on port 5 nt 5 int Eth/4
```

(message 319 was logged to a separate file)

```
Nov 20 12:08:48 5.1.1.1 Msg [0320] from ** IBM / 2216 **: els: IP.068: routing cache cleared
```

(120 messages not shown)

```
Nov 20 12:13:33 5.1.1.1 Msg [0441] from ** IBM / 2216 **: els: GW.022: Nt fld slf tst nt 3 int Eth/3
Nov 20 12:13:33 5.1.1.1 Msg [0442] from ** IBM / 2216 **: els: GW.022: Nt fld slf tst nt 6 int Eth/5
Nov 20 12:13:38 5.1.1.1 Msg [0443] from ** IBM / 2216 **: els: GW.022: Nt fld slf tst nt 11 int ISDN/0
```

(messages 444 and 447 were logged to a separate file)

(messages 445 and 446 did not get remote-logged due to ARP request outstanding)

```
Nov 20 12:13:50 5.1.1.1 Msg [0448] from ** IBM / 2216 **: els: GW.022: Nt fld slf tst nt 4 int PPP/0
Nov 20 12:13:50 5.1.1.1 Msg [0449] from ** IBM / 2216 **: els: IP.068: routing cache cleared
Nov 20 12:13:50 5.1.1.1 Msg [0450] from ** IBM / 2216 **: els: IP.058: del nt 4.0.0.0 rt via 0.0.0.4 nt 4 int PPP/0
```

図 10. Syslog News Info ファイルのサンプル内容

ブート時およびブートの直後に生成される初期 ELS メッセージに特に関心がある場合は、そのようなメッセージについても、talk 2 で表示されるモニター待ち行列の中で表示されるようにすることをお勧めします。152ページの図11には、リモート・ログに記録されていなかった初期メッセージも含めて、talk 2 出力が示してあります。talk 2 出力の中に、リモート・ログ記録機能が使用可能であることを示すメッセージがあることに注意してください。ただし、これはリモート・ワークステーションへのルートが存在することを示すものでもなければ、関連するインターフェースが『Up』状態であることを示すものではありません。これによって示されるのは参照点だけであり、その前ではメッセージが正常にリモート・ログに記録されることはありません。

ELS の使用

また、talk 2 出力では欠落していた (151ページの図10 に **2** で示されている) メッセージについても説明できることにも注意してください。

```
12:08:17 SNMP.024: generic trc (P2) at snmp_mg.c(766): Now 0 trap destinations
12:08:17 SNMP.012: comm public added
12:08:17 SNMP.012: comm public added
12:08:27 SNMP.022: ext err (Z1) at snmp_resconf.c(322): add_router_if_info(): sr
rdrec failed

12:08:27 SNMP.022: ext err (Z1) at snmp_resconf.c(322): add_router_if_info(): sr
rdrec failed

12:08:27 SNMP.028: err (E2) at snmp_moh.c(1583) : Duplicate
12:08:27 SNMP.028: err (E2) at snmp_moh.c(1583) : Duplicate
12:08:28 GW.022: Nt fld slf tst nt 13 int PPP/3
12:08:28 IP.022: add nt 4.0.0.0 int 4.1.1.1 nt 4 int PPP/0

    ( 297 messages not shown )

12:08:43 GW.022: Nt fld slf tst nt 12 int PPP/2
12:08:43 GW.022: Nt fld slf tst nt 13 int PPP/3
12:08:48 IP.022: add nt 192.9.200.0 int 192.9.200.20 nt 0 int Eth/0
12:08:48 SRT.017: Enabling SRT on port 1 nt 0 int Eth/0
12:08:48 STP.016: Select as root TB-1, det topol chg
12:08:48 STP.026: Root TB-1, strt hello tmr
12:08:48 ARP.002: Pkt in 1 1 800 nt 0 int Eth/0
12:08:48 ARP.002: Pkt in 2 1 800 nt 0 int Eth/0
12:08:48 IP.068: routing cache cleared

    ( 126 messages not shown )

12:13:38 GW.022: Nt fld slf tst nt 11 int ISDN/0
12:13:47 ARP.011: Del ent 1 3 nt 0 int Eth/0
12:13:47 ARP.011: Del ent 1 3 nt 0 int Eth/0
12:13:47 ARP.002: Pkt in 1 1 800 nt 5 int Eth/4
12:13:47 ARP.002: Pkt in 2 1 800 nt 0 int Eth/0
12:13:50 GW.022: Nt fld slf tst nt 4 int PPP/0
```

*Corresponding Sequence
Numbers in
Remote-Logging Files :*

```
[0310] first message logged
-- not logged (ARP request)--
-- not logged (ARP request)--
-- not logged (ARP request)--
[0314]
[0315]
[0316]

[0443]
[0444]
-- not logged (ARP request)--
-- not logged (ARP request)--
[0447]
[0448]
```

図 11. Talk 2 の出力

リモート・ログ出力ファイルと talk 2 出力の両方に現れるタイム・スタンプを使用して、最初の ELS メッセージが正常にリモート・ログに記録される時刻を判別することができます。この目的でタイム・スタンプを使用する場合は、モニター待ち行列内のタイム・スタンプで時刻が表示されるように、ELS を構成します。

また、151ページの図10 では、メッセージ 311 ~ 313 がリモート・ログに記録されていなかったことにも注意してください。その理由は、ARP 要求がアウトスタンディングであり、ARP 応答が受信されるまでは、最初のパケット以外はすべて送信元 IBM 2216 内で廃棄されるからです。ARP キャッシュはユーザー構成のリフレッシュ速度でクリアされ、装置は新しい ARP 要求を出します。ARP 要求が生じる時点を判別するために、該当の ELS イベントに加えて、イベント ARP.002 および ARP.011 をリモート・ログに記録することができます。図12 には、*syslog_user_alert* ファイルのログに記録された ARP イベントを示してあり、151ページの図10 には欠落として示されていたイベント 445 および 446 が説明されています。

```
Nov 20 12:02:53 worksta01 root: THIS IS A TEST MESSAGE (user.alert)
Nov 20 12:08:48 5.1.1.1 Msg [0314] from ** IBM / 2216 **: els: ARP.002: Pkt in 1 1 800 nt 0 int Eth/0
Nov 20 12:08:48 5.1.1.1 Msg [0315] from ** IBM / 2216 **: els: ARP.002: Pkt in 2 1 800 nt 0 int Eth/0
Nov 20 12:08:48 5.1.1.1 Msg [0319] from ** IBM / 2216 **: els: ARP.002: Pkt in 2 1 800 nt 0 int Eth/0
Nov 20 12:13:47 5.1.1.1 Msg [0444] from ** IBM / 2216 **: els: ARP.011: Del ent 1 3 nt 0 int Eth/0
Nov 20 12:13:47 5.1.1.1 Msg [0447] from ** IBM / 2216 **: els: ARP.002: Pkt in 2 1 800 nt 0 int Eth/0
```

図 12. *syslog_user_alert* ファイルのサンプル内容

この ARP シーケンスが原因で生じる ELS メッセージの消失は、IP アドレスと MAC アドレスの間に静的関係を確立することによって防止することができます。基本的な手順のステップを以下で概説し、153ページの図13 に図示してあります。

1. talk 5 で、リモート・ワークステーションの IP アドレスを『PING』する。
2. talk 5 で、メッセージをリモート・ワークステーションの IP アドレスに送信する場合に使用するインターフェース (ネット) 番号を判別する。
3. 前のステップでのネット番号を使用して、関連する MAC アドレスを判別する。
4. talk 6 で、ARP エントリーを追加して、静的 IP アドレスと MAC アドレスの関係を確立する。

```

*t 5
+p ip

IP>ping 192.9.200.1
PING 192.9.200.20 -> 192.9.200.1: 56 data bytes, ttl=64, every 1 sec.
56 data bytes from 192.9.200.1: icmp_seq=0. ttl=64. time=0. ms
----192.9.200.1 PING Statistics----
1 packets transmitted, 1 packets received, 0% packet loss
round-trip min/avg/max = 0/0/0 ms

IP>dump

  Type  Dest net          Mask          Cost   Age      Next hop(s)
  .
  Dir*  192.9.200.0      FFFFFFF0      1      102305  Eth/0
  .

IP>exit
+int

Net  Net'  Interface  Slot-Port          Self-Test  Self-Test  Maintenance
0   0     Eth/0      Slot: 1  Port: 1           Passed     Failed     Failed
                                1          0             0
  .

+p arp
ARP>dump
Network number to dump [0]? 0
Hardware Address      IP Address      Refresh
02-60-8C-2D-69-5D    192.9.200.1    2

Ctrl-P
*t 6
config>p arp
ARP config>add entry
Interface Number [0]? 0
Protocol [IP]? IP
IP Address [0.0.0.0]? 192.9.200.1
Mac Address []? 02608C2D695D
ARP config> list entry

Mac address translation configuration

IF #      Prot #  Protocol -> Mac address
0         0      192.9.200.1 -> 02608C2D695D
ARP config>exit
Config>write

Ctrl-P

*reload
Are you sure you want to reload the gateway? (Yes or [No]): Yes

(after reload, static ARP entry is active)

```

図 13. 静的 ARP エントリーのセットアップ例

追加考慮事項

IP アドレスを含む ELS メッセージ

リモート・ワークステーションの IP アドレスに一致する IP アドレスが含まれている ELS メッセージは、リモート・ログ記録のために構成されている場合でも、リモート・ログに記録されることはなく、talk 2 の下に表示される場合があります。この

ELS の使用

ようなメッセージは、ネットワーク上を送信される UDP パケットの数が過剰にならないようにするため、リモート・ログに記録されないで、廃棄されます。

重複ログ

たとえば、次のように、1 つの機能値が *syslog.conf* 内で繰り返される場合があります。

```
user.debug      /tmp/syslog_user_debug
user.alert     /tmp/syslog_user_alert
```

このような場合は、SYSLOG デーモンでは、*user.debug* メッセージについては、*/tmp/syslog_user_debug* ファイルのみのログに記録し、*user.alert* メッセージについては、*/tmp/syslog_user_debug* ファイルと */tmp/syslog_user_alert* ファイルの両方のログに記録します。このことは、より重大な状態を複数の場所でログに記録する SYSLOG 設計と整合性があります。

このような重複ログ記録を防ぐために、*syslog.conf* ファイルでは異なる機能値の指定を推奨します。合計 19 の機能値が使用可能です。

SYSLOG 出力ファイルにおけるシーケンス番号の再発

ネットワークの構成によっては、ELS メッセージを含む重複 UDP パケットがリモート・ホストに到着する可能性があります。また、パケットが送信された順序とは異なる順序で到着する可能性もあります。このような現象の例が 図14 に示してあります。シーケンス番号が 628 ~ 633 のメッセージが 2 回ずつログに記録されるされていることに注意してください。また、シーケンス番号 0630 が始めて現れた後で、シーケンス番号 0629 が再度現れ、その後続けて 2 回目の 0630 が現れていることにも注意してください。

```
Apr 01 10:48:33 0.0.0.0 Msg [0628] from: RA22: : els: IPX.018: SAP gen rply sent nt 5 int TKR/1, 1 pkts
Apr 01 10:48:33 0.0.0.0 Msg [0628] from: RA22: : els: IPX.018: SAP gen rply sent nt 5 int TKR/1, 1 pkts
Apr 01 10:49:08 0.0.0.0 Msg [0629] from: RA22: : els: IPX.037: RIP resp sent nt 0 int TKR/0, 1 pkts
Apr 01 10:49:08 0.0.0.0 Msg [0630] from: RA22: : els: IPX.018: SAP gen rply sent nt 0 int TKR/0, 1 pkts
Apr 01 10:49:08 0.0.0.0 Msg [0629] from: RA22: : els: IPX.037: RIP resp sent nt 0 int TKR/0, 1 pkts
Apr 01 10:49:08 0.0.0.0 Msg [0630] from: RA22: : els: IPX.018: SAP gen rply sent nt 0 int TKR/0, 1 pkts
Apr 01 10:49:33 0.0.0.0 Msg [0631] from: RA22: : els: IPX.037: RIP resp sent nt 5 int TKR/1, 1 pkts
Apr 01 10:49:33 0.0.0.0 Msg [0631] from: RA22: : els: IPX.037: RIP resp sent nt 5 int TKR/1, 1 pkts
Apr 01 10:49:33 0.0.0.0 Msg [0632] from: RA22: : els: IPX.018: SAP gen rply sent nt 5 int TKR/1, 1 pkts
Apr 01 10:49:33 0.0.0.0 Msg [0632] from: RA22: : els: IPX.018: SAP gen rply sent nt 5 int TKR/1, 1 pkts
Apr 01 10:50:08 0.0.0.0 Msg [0633] from: RA22: : els: IPX.037: RIP resp sent nt 0 int TKR/0, 1 pkts
Apr 01 10:50:08 0.0.0.0 Msg [0633] from: RA22: : els: IPX.037: RIP resp sent nt 0 int TKR/0, 1 pkts
```

図 14. SYSLOG 出力における再発シーケンス番号の例

SYSLOG にも UDP にも重複パケットや順序間違いパケットを処理する能力はないため、シーケンス番号の重複が生じる可能性があることを認識することが大切です。

ELS メッセージ・バッファリングの使用

メッセージ・バッファリングは、ELS の拡張機能の 1 つで、問題判別に役立ちます。デフォルトで ELS がメッセージ・バッファリングを使用するように設定できます。あるいは、ルーターが稼働中に、メッセージのバッファ方法を変更することもできます。メッセージ・バッファリングを使用すれば、メッセージがデフォルト・メッセージ・バッファ内にはラップされているため、情報の脱落を最小限に抑えることができます。メッセージ・バッファリングには、**advanced** 構成または監視コマンドを使用してアクセス可能です。メッセージ・バッファリングによって以下が可能になります。

- バッファリングをアクティブにするかどうかを指定する。
- メッセージ・バッファに書き込むイベントの種類を指定する。
- バッファリングを停止しバッファリング用に割り振ったメモリーを解放する。
- メッセージ・バッファの状況を表示する。
- メッセージ・バッファリングを停止させるイベントと、そのイベントが発生した時にとるシステムのアクションを指定する。
- リモート・サーバーのファイルに、バッファのフォーマット済みバージョンを送信する。
- バッファ内の ELS メッセージの特定番号またはメッセージのすべてを表示させる。
- バッファをハード・ディスク に書き込む (ハード・ディスク がある場合)。
- ハード・ディスク からフォーマット済み ELS メッセージが入っているファイルを読み取る (ハード・ディスク がある場合)。
- ハード・ディスク からフォーマット済み ELS メッセージが入っているファイルを読み取る (ハード・ディスク がある場合)。

コマンドに応じた特定の機能については、177ページの『ELS メッセージ・バッファリング構成コマンド』 および 208ページの『ELS メッセージ・バッファリング監視コマンド』 を参照してください。

以下の例は、ELS メッセージ・バッファリングの方法を示しています。

```
MOS Operator Control

*t 5 :Enter t 5 at the * prompt.

CGW Operator Console

+ev :Enter ev at the + prompt.
Event Logging System user console
ELS>a :Enter a for advanced at the ELS prompt.
Advanced ELS Console
ELS Advanced>li s :Enter li s to list status at the > prompt.
-----Advanced ELS Configuration-----
Logging Status: OFF Wrap Mode: ON Logging Buffer Size: 0 KB
Stop-Event: NONE Stop-String: NONE
Additional Stop-Action: NONE
-----Run-Time Status-----
Has Stop Condition Occurred? NO Messages currently in buffer: 0

ELS Advanced>s b :Enter s b to set buffer size.
Enter buffer size of 0 KB or between 148 and 593 KB 148 ?
Buffer size set to 148 KB
ELS Advanced>s s e gw.26 :Enter s s e to set stop event eg. gw.26
Stop Event "GW.026" has been set
ELS Advanced>ex :Enter ex to exit Advanced to list gw.26
ELS>list ev gw.26
```

ELS の使用

```
Level: C-TRACE
Message: Mnt nt %n int %s/%d
Active:          Count: 742

ELS>a :Enter a to get back to advanced.
Advanced ELS Console
ELS Advanced>s s s Mnt nt 5 :Enter s s s to set the stop string.
Stop String set to "Mnt nt 5"
ELS Advanced>s s a ? :Enter s s a ? to query available stop actions.
NONE
APPN-DUMP :Only available if APPN active and in the load image.
SYSTEM-DUMP
ELS Advanced>s s a s :Enter s s a s to set SYSTEM-DUMP stop action.
Stop Action has been set to SYSTEM-DUMP
ELS Advanced>s w off to :Enter s w on to set wrap mode off.
Advanced Wrap Mode set to OFF.

ELS Advanced>log sub gw all :Enter to enable the whole gw subsystem
ELS Advanced>s l on :Enter s l on to start the logging process.
Advanced Logging set to ON.
ELS Advanced>li s :Enter to list status of logging.
-----Advanced ELS Configuration-----
Logging Status: OFF Wrap Mode: OFF Logging Buffer Size: 148 KB
Stop-Event:      GW.026 Stop-String: Mnt nt 5
Additional Stop-Action: SYSTEM-DUMP
-----Run-Time Status-----
Has Stop Condition Occurred? YES Messages currently in buffer: 7

ELS Advanced>v a n :Enter to view all messages in buffer. For this
trivial example any viewing command suffices.

 1 10:52:10 GW.026: Mnt nt 0 int Eth/0
 2 10:52:10 GW.026: Mnt nt 5 int Eth/1->This triggers stop action
 3 10:52:14 GW.026: Mnt nt 0 int Eth/0 Note that 5 more events
 4 10:52:14 GW.026: Mnt nt 5 int Eth/1 get logged before
 5 10:52:18 GW.026: Mnt nt 0 int Eth/0 logging stops and
 6 10:52:18 GW.026: Mnt nt 5 int Eth/1 the stop action occurs.
 7 10:52:22 GW.026: Mnt nt 0 int Eth/0

BugHlt: Dump initiated by ELS Stop Action.

BUGHLT+80; Dump initiated by ELS Stop Action.

Note:
In reality if the stop action is the SYSTEM-DUMP you will not be
able to list the final status as above nor view the buffer because
the router will be attempting to reload.
```


第13章 イベント・ログ・システム (ELS) の構成と監視

この章では、ELS によってログに記録されるイベントの構成方法、および ELS コマンドの使用法について説明します。この章には、以下の節が含まれています。

- 『ELS 構成環境へのアクセス』
- 『ELS 構成コマンド』
- 181ページの『ELS 操作環境への出入り』
- 181ページの『ELS 監視コマンド』

イベント・ログ・システム、および ELS イベント・メッセージの解釈方法について詳しくは、137ページの『第12章 イベント・ログ・システム (ELS) の使用』を参照してください。

ELS 構成環境へのアクセス

ELS 構成環境の特徴は ELS config> プロンプトにあります。このプロンプトで入力されるコマンドについては、『第13章 イベント・ログ・システム (ELS) の構成と監視』で説明します。

ELS 構成環境に入る手順は、次のとおりです。

1. **talk 6** と入力する。

モニターに Config> プロンプトが表示されます。このプロンプトが表示されない場合は、**Return** キーを押します。

2. Config> プロンプトで、次のコマンドを入力して ELS にアクセスする。

```
event
```

モニターに ELS 構成プロンプト (ELS config>) が表示されます。これで、ELS 構成コマンドを入力できます。

ELS 構成環境を終了するには、**exit** コマンドを入力します。

ELS 構成コマンド

表15 は、ELS 構成コマンドを要約しています。この節の残りの部分で、各コマンドについて詳しく説明します。ELS 構成環境にアクセスした後、ELS Config> プロンプトから ELS 構成コマンドを入力することができます。

表 15. ELS 構成コマンドの要約

コマンド	機能
? (Help)	このコマンド・レベルで使用可能なコマンドをすべて表示するか、特定のコマンドに関するオプション (ただし、選択可能な場合) をリストします。12ページの『ヘルプを得る』を参照してください。
Add	イベントを既存のグループに追加するか、または新しいグループを作成します。
Advanced	メッセージ・バッファリングの構成が可能な、拡張構成環境に入ります。

ELS 構成コマンド (Talk 6)

表 15. ELS 構成コマンドの要約 (続き)

コマンド	機能
Clear	すべての ELS 構成情報を消去します。
Default	イベント、グループ、またはサブシステムの表示またはトラップ設定値をリセットします。
Delete	イベント番号を既存のグループから削除するか、またはグループ全体を削除します。
Display	コンソール・モニター上のメッセージの表示を使用可能にします。
Filter	ネット番号に基づいて ELS メッセージをフィルター処理します。
List	ELS 設定値およびメッセージに関する情報をリストします。
Nodisplay	コンソール上のメッセージの表示を使用不可にします。
Noremote	リモート・ワークステーションへのリモート・ログ記録を使用不可にします。
Notrace	パケット・トレース・イベントの使用不可化を制御します。
Notrap	メッセージが SNMP トラップで送信されないようにします。
Remote	メッセージがリモート・ワークステーションでログに記録できるようにします。
Set	ピン・パラメーターおよびタイム・スタンプ・フィーチャー・オプションを設定します。
Trace	パケット・トレース・イベントの使用可能化を制御します。
Trap	メッセージが SNMP トラップでネットワーク管理ワークステーションに送信されるようにします。
View	トレースされたパケットを表示できるようにします。
Exit	直前のコマンド・レベルに戻ります。13ページの『下位レベル操作環境を終了する』を参照してください。

Add

add コマンドは、個々のイベントを既存のグループに追加したり、新しいグループを作成したりするのに使用します。グループ名は英字で始める必要があり、大文字小文字を区別します。サブシステム全体をグループに追加することはできません。

構文：

add *group_name subsystem.event_number*

注：指定されたグループが存在しない場合は、次のようなプロンプトが出され、新しいグループの作成を確認するように求められます。

Group not found. Create new group? (yes or no)

Advanced

advanced コマンドを使用して拡張構成環境に入ります。この環境で、メッセージ・バッファリングを構成します。

構文：

advanced

Clear

clear コマンドは、すべての ELS 構成情報を消去するのに使用します。

構文：

clear

例：

clear

```
You are about to clear all ELS configuration information
Are you sure you want to do this (Yes or No):
```

Default

イベント、グループ、またはサブシステムの表示またはトラップ設定値をリセットして、使用不可の状態に戻します。

構文：

```
default                                display
                                           trap
                                           remote
```

display *event* または *group* または *subsystem*
モニターへのメッセージの表示の出力を制御します。

trap *event* または *group* または *subsystem*
ネットワーク管理ワークステーションへのトラップの生成を制御します。

remote *event* または *group* または *subsystem*
リモート端末へのトラップの生成を制御します。

Delete

delete コマンドは、既存のグループからイベント番号を削除したり、グループ全体を削除したりするのに使用します。指定したイベントがグループ内で削除される最後のイベントのときは、ユーザーに通知されます。 *subsystem.event_number* ではなく *all* を指定した場合は、グループ全体の削除を確認するように求めるプロンプトが出ます。

構文：

```
delete                                group_name subsystem.event_number
```

Display

display コマンドは、特定のイベント、サブシステムに関するある範囲のイベント、グループ、またはサブシステムに関して、監視モニター上でのメッセージの表示を使用可能にする場合に使用します。

構文：

```
display                                event . . .
```

ELS 構成コマンド (Talk 6)

group . . .
range . . .
subsystem . . .

event *subsystem.event#*

指定されたイベント (*subsystem.event#*) のメッセージを表示します。

group *groupname*

指定されたグループ (*groupname*) のメッセージを表示します。

range *subsystemname first_event_number last_event_number*

ただし、*first_event_number* は、指定されたイベント範囲の最初のイベントの番号であり、*last_event_number* は、指定されたイベント範囲の最後のイベントの番号です。

指定されたサブシステムの一定範囲のメッセージを表示します。

例：

```
display range gw 19 22
```

イベント gw.19、gw.20、gw.21、および gw.22 を表示します。

subsystem *subsystemname*

指定されたサブシステムに関連するメッセージを表示します。ルーター上にあるサブシステムがあるかを調べたい場合は、**list subsystems** を入力します。

注: ELS はルーター上のサブシステムをすべてサポートしますが、すべての装置がすべてのサブシステムをサポートしているとは限りません。現在サポートされているサブシステムのリストを調べるには、イベント・ログ・システム・メッセージの手引きを参照してください。

Filter

filter コマンドは、フィルター構成コマンド環境にアクセスする場合に使用します。コマンドの詳細については、174ページの『ELS ネット・フィルター構成コマンド』を参照してください。

構文：

```
filter net
```

List

list コマンドは、ELS 設定値の更新情報および選択されたメッセージのリストを入手するのに使用します。

構文：

```
list all  
filter-status  
groups
```

pin
remote-log status
status
subsystem . . .
subsystems all
trace-status

all すべての **list** カテゴリの情報をリストします。

filter-status

ELS ネット番号のフィルターをリストします。

groups

ユーザー定義のグループ名と内容をリストします。

pin SNMP トラップで送信される ELS イベント・メッセージの現在数 (1 秒当り) をリストします。

remote-log status

リモート・ログ・オプションの現行値をリストします。

例 :

list r

```
Remote Logging is ON
Source IP Address = 192.67.38.2
Remote Log IP Address = 192.9.200.1
Default Syslog Facility = LOG_DAEMON
Default Syslog Priority Level = LOG_CRIT
Number of Messages in Remote Log = 256
Remote Logging Local ID = MYHOSTNAME
```

status display、**nodisplay**、**trap**、**notrap**、**trace**、**notrace**、**remote**、および **noremove** コマンドで変更されたサブシステム、グループ、およびイベントをリストします。

例 :

list status

```
Subsystem:          TKR
Disp Levels:        STANDARD
Trap levels:        none
Trace levels:       none
Remote levels:      ERROR INFO TRACE
Syslog Facility/Level: LOG_USER LOG_INFO

Group   Disp   Trap   Trace   Remote
Mygroup Unset   Unset   Unset   On
                               Syslog Facility/Level: LOG_DAEMON LOG_CRIT

Event   Disp   Trap   Trace   Remote
IP.007  Unset   Unset   Unset   On
                               Syslog Facility/Level: LOG_CRON LOG_NOTICE
```

注: リモート・ログ記録が使用可能にされるだけでなく、それぞれのサブシステム、グループ、およびイベントごとに、SYSLOG 機能/レベル値が表示に組み込まれます。イベントの範囲は個々のイベントとしてリストされます。

subsystem

すべてのサブシステムの名前、イベント、および記述をリストします。

ELS 構成コマンド (Talk 6)

(**list subsystem** コマンドの出力例については、186 ページ以降に記載してあります。)

subsystem *subsystem*

指定されたサブシステム内のすべてのイベントをリストします。

例 :

```
list subsystem gw
```

Event	Level	Message
GW.001	ALWAYS	Copyright 1984 Mass Institute of Technology
GW.002	ALWAYS	Portable CGW %s Rel %s strtd
GW.003	ALWAYS	Unus pkt len %d nt %d int %s/%d
GW.004	ALWAYS	Sys %s q adv alloc %d excd %d
GW.005	ALWAYS	Bffrs: %d avail %d idle fair %d low %d
GW.006	C-INFO	Pkt frm nt %d int %s/%d for uninit prt, disc
GW.007	C-INFO	Ip err %x nt %d int %s/%d
GW.008	U-INFO	Ip ovfl nt %d int %s/%d, disc
GW.009	UI-ERROR	Nt dwn ip rstrt nt %d int %s/%d
GW.010	UI-ERROR	Ip q len %d no ip buf nt %d int %s/%d
GW.011	U-INFO	Op err %x hst %wo nt %d int %s/%d
GW.012	U-INFO	Op err cnt excd hst %wo nt %d int %s/%d
GW.013	U-INFO	Rtrns cnt excd hst %wo nt %d int %s/%d
GW.014	UI-ERROR	Nt dwn op rstrt nt %d int %s/%d
GW.015	UI-ERROR	Nt dwn to hst %wo nt %d int %s/%d
GW.016	U-INFO	Op ovfl to hst %wo nt %d int %s/%d
GW.017	UE-ERROR	Intfc hdw mmsg nt %d int %s/%d
GW.018	U-TRACE	Strt nt slf tst nt %d int %s/%d
GW.019	C-INFO	Slf tst nt %d int %s/%d
GW.020	U-TRACE	Nt pss slf tst nt %d int %s/%d
GW.021	UE-ERROR	Nt up nt %d int %s/%d
GW.022	U-TRACE	Nt fld slf tst nt %d int %s/%d

subsystems *all*

すべてのサブシステム内のすべてのイベントをリストします。

trace-status

構成および実行時情報を含めて、パケット・トレースの状況に関する情報を表示します。

例 :

```
list trace-status
```

```
----- Configuration -----  
Trace Status:ON Wrap Mode:ON Decode Packets:ON HD Shadowing:ON  
RAM Trace Buffer Size:100000 Maximum Trace Buffer File Size:10000000  
Max Packet Bytes Trace:256 Default Packet Bytes Traced:100  
Trace File Record Size:2048 Stop Trace Event: TCP.013  
Maximum Hours to HD Shadow: 1
```

Nodisplay

nodisplay コマンドは、コンソール上でのメッセージの表示を選択し、オフにする場合に使用します。

構文 :

```
nodisplay          event . . .  
                   group . . .  
                   range . . .  
                   subsystem . . .
```

event *subsystem.event#*

指定されたイベント (*subsystem.event#*) の表示を抑制します。

group *groupname*

指定されたグループ (*groupname*) に以前に追加されたメッセージの表示を抑制します。

range *subsystemname first_event_number last_event_number*

ただし、*first_event_number* は、指定されたイベント範囲の最初のイベントの番号であり、*last_event_number* は、指定されたイベント範囲の最後のイベントの番号です。

指定されたサブシステムの一定範囲のメッセージを表示を抑制します。

例：

```
nodisplay range gw 19 22
```

イベント gw.19、gw.20、gw.21、および gw.22 の表示を抑制します。

subsystem *subsystemname*

指定されたサブシステムに関連するメッセージの表示を抑制します。

Noremote

noremote コマンドは、イベント番号、グループ、イベントの範囲、またはサブシステムを基にして、リモート・ワークステーションへのイベントのログ記録を抑制する場合に使用します。

注: **noremote** コマンドでは、通常、**remote** コマンドの場合のように、*syslog_facility* および *syslog_level* を指定する必要はありません。ただし、**noremote subsystem** コマンドの場合は、メッセージ・レベルをすべてオフにするのではなく、特定のメッセージ・レベル (たとえば、『error』のみまたは『trace』のみ) を選択的に抑制するオプションが存在します。(特定のメッセージ・レベルを指定しなければ、『all』と見なされます。) その上、**noremote subsystem** コマンドでは、メッセージ・レベルがオフにされないで残っている場合は、残っているメッセージ・レベルに関して *syslog_facility* および *syslog_level* を設定することもできます。

構文：

```
noremote          event . . .
                   group . . .
                   range . . .
                   subsystem . . .
```

event *subsystem.event#*

指定されたイベントに関するメッセージのリモート・ログ記録を抑制します。

group *group.name*

指定されたグループ (*group*) に以前に追加されたメッセージのリモート・ログ記録を抑制します。

range *subsystemname first_event_number last_event_number*

ELS 構成コマンド (Talk 6)

ただし、*first_event_number* は、指定されたイベント範囲の最初のイベントの番号であり、*last_event_number* は、指定されたイベント範囲の最後のイベントの番号です。

指定されたサブシステムに関する一定範囲のメッセージのリモート・ログ記録を抑制します。

例：

```
noremove range gw 19 22
```

イベント gw.019、gw.020、gw.021、および gw.022 のリモート・ログ記録を抑制します。

subsystem *subsystem.name* [*syslog_facility* *syslog_level*]

指定されたサブシステム (*subsystem.name*) に関連するメッセージのリモート・ログ記録を抑制します。

例 1:

```
noremove subsystem tkr
```

すべての 『tkr』 メッセージのリモート・ログ記録を抑制します。

例 2:

```
ELS config> noremove subsystem tkr info
ELS config> SYSLOG FACILITY[LOG_USER]?
ELS config> SYSLOG LEVEL[LOG_INFO]?
```

この例では、『LOG_USER』 および 『LOG_INFO』 は、サブシステム TKR 用として最後に選出された値でした。こうして指定されたコマンドでサブシステム TKR に関するリモート・ログ記録がオフになるのは、『info』に関して符号化されたメッセージの場合だけです。*syslog_facility* および *syslog_level* は指定されなかったため、ソフトウェアはプロンプトを出して、*syslog_facility* および *syslog_level* の入力を指示してきます。プロンプトで別の値を入力した場合は、TKR サブシステムに関してリモート・ログに記録される残りのメッセージについては、こうして入力した値が *syslog_facility* および *syslog_level* を置き換えます。

noremove および **remove** コマンドを用いた設定を表示させる場合は、**list all** または **list status** コマンドを使用します。

syslog_facility および *syslog_level* について詳しくは、166ページの『Remote』を参照してください。

Notrace

指定されたイベント/範囲/サブシステム/グループのトレースを使用不可にします。

構文：

```
notrace                event . . .
                        group . . .
                        range . . .
                        subsystem . . .
```


event *subsystem.event#*

指定された event# のパケット・トレース・データの送信を抑制します。

group *groupname*

指定されたグループ (*groupname*) に以前に追加されたパケット・トレース・データの送信を抑制します。

range *subsystemname first_event_number last_event_number*

ただし、*first_event_number* は、指定されたイベント範囲の最初のイベントの番号であり、*last_event_number* は、指定されたイベント範囲の最後のイベントの番号です。

指定されたサブシステムの一定範囲のメッセージのパケット・トレース・データの送信を使用不可にします。

例 :

```
trace range gw 19 22
```

イベント gw.19、gw.20、gw.21、および gw.22 のパケット・トレース・データの送信を抑制します。

subsystem *subsystemname*

指定されたサブシステム (*subsystemname*) のパケット・トレース・データの送信を抑制します。

Notrap

notrap コマンドは、メッセージを選択してオフにし、SNMP トラップでネットワーク管理ワークステーションに送信されないようにするのに使用します。

構文 :

```
notrap                event . . .
                        group . . .
                        range . . .
                        subsystem . . .
```

event *subsystem.event#*

指定されたメッセージの SNMP トラップでの送信 (*subsystem.event#*) を抑制します。

group *groupname*

指定されたグループ (*groupname*) に以前に追加されたメッセージの SNMP トラップでの送信を抑制します。

range *subsystemname first_event_number last_event_number*

ただし、*first_event_number* は、指定されたイベント範囲の最初のイベントの番号であり、*last_event_number* は、指定されたイベント範囲の最後のイベントの番号です。

指定されたサブシステムの指定された範囲のイベントのメッセージの SNMP トラップでの送信を抑制します。

例 :

ELS 構成コマンド (Talk 6)

notrap range gw 19 22

イベント gw.19、gw.20、gw.21、および gw.22 のメッセージの SNMP トラップでの送信を抑制します。

subsystem *subsystemname*

指定されたサブシステムに関連するメッセージの SNMP トラップでの送信を抑制します。

Remote

remote コマンドは、リモート・ワークステーションでログに記録されるイベントをイベント番号別、イベントの範囲別、グループ別、またはサブシステム別に選択する場合に使用します。

構文：

```
remote                event . . .  
                        range . . .  
                        group . . .  
                        subsystem . . .
```

event *subsystem.event# syslog_facility syslog_level*

指定したイベントがリモート・ログに記録されます。

リモート・ワークステーションの SYSLOG デーモンが SYSLOG 機能およびレベルの値を使用して、メッセージのログ記録先を決めます。この値によって、**set facility** および **set level** コマンドで設定されているデフォルト値がオーバーライドされます。

syslog_facility

- log_auth
- log_authpriv
- log_cron
- log_daemon
- log_kern
- log_lpr
- log_mail
- log_news
- log_syslog
- log_user
- log_uucp
- log_local0-7

syslog_level

- log_emerg
- log_alert
- log_crit

```
log_err
log_warning
log_notice
log_info
log_debug
```

これらの値には、IBM 2216 上のどのデーモンにも特定の関連はありません。リモート・ワークステーション上の SYSLOG デーモンで使用される識別子に過ぎません。

range *subsystemname first_event_number last_event_number syslog_facility syslog_level*

ただし、*first_event_number* は、指定されたイベント範囲の最初のイベントの番号であり、*last_event_number* は、指定されたイベント範囲の最後のイベントの番号です。

指定したサブシステムに関する指定した範囲のイベントが、*syslog_facility* および *syslog_level* の値に基づいて、リモート・ログに記録されます。166ページのremote event コマンド を参照してください。

例 :

```
remote range gw 19 22 log_user log_info
```

イベント gw.19、gw.20、gw.21、および gw.22 が、*syslog_facility* 値 log_user および *syslog_level* 値 log_info に基づいてリモート・ログに記録されます。

group *group.name syslog_facility syslog_level*

指定されたグループに属するイベントが、*syslog_facility* および *syslog_level* の値に基づいて、リモート・ログに記録されることができます。166ページのremote event コマンド を参照してください。

subsystem *subsystem.name message_level syslog_facility syslog_level*

ただし、*subsystem.name* は、サブシステムの名前であり、*message_level* は、サブシステム内で選択されたメッセージのレベルです。

message_level が指定した *message_level* に一致する、指定した *subsystem.name* が、*syslog_facility* および *syslog_level* の値に基づいて、ファイルのリモート・ログに記録されます。166ページのremote event コマンド を参照してください。

Message_level は、『ALL』、『ERROR』、『INFO』、または『TRACE』などのような値です。140ページの『ログ・レベル』 を参照してください。

remote コマンドで指定する値は、サブシステム内で特定のイベントに対して符号化されている値と一致する必要があります。これが一致しない場合は、サブシステム内のそのイベントはリモート・ログに記録されません。

例 :

```
remote subsystem TKR all log_user log_info
```

上の例では、サブシステム TKR 内のメッセージはすべて (『all』には、『error』、『info』、または『trace』に関して符号化されたメッセージもすべて含まれる) が、リモート・ホストで log_user および log_info の値に基づいてリモート・ログに記録されます。

ELS 構成コマンド (Talk 6)

noremove および **remote** コマンドを用いた設定を表示させる場合は、**list all** または **list status** コマンドを使用します。

Set

set コマンドは、1 秒当たりの最大タグ数の設定、タイム・スタンプ・フィーチャーの設定、またはトレース・オプションの設定に使用します。

構文：

```
set                               pin . . .
                                     remote-logging . . .
                                     timestamp . . .
                                     trace . . .
```

pin *max_traps*

ピン・パラメーターを秒単位で送信できるトラップの最大数に設定するには、**set pin** コマンドを使用します。 内部で、ピンは 10 分の 1 秒ごとにリセットされます。(10 分の 1 の数 (*max_traps*) が、10 分の 1 秒ごとに送信されます。)

remote-logging

set remote-logging コマンドは、リモート・ログ・オプションを構成する場合に使用します。これらのオプションを監視環境で構成すると、変更は即時に有効となり、装置をリブートすると、以前構成されていた設定値に戻ります。

構文：

```
set remote-logging             on
                                     off
                                     facility . . .
                                     level . . .
                                     no-msgs
                                     remote_ip_addr . . .
                                     source_ip_addr ...
                                     local_id
```

on リモート・ログ記録がオンになります。これでリモート・ログ記録が使用可能になったので、**remote** コマンドで選択されたメッセージは、いずれもログに記録することができます。

off リモート・ログ記録がオフになります。'remote' コマンドで選択されたメッセージは、すべてログに記録されなくなります。

facility

メッセージのログ記録先を決める場合に、リモート・ワークステーションの SYSLOG デーモンが、*level* 値と組み合わせて使用する値を指定します。**remote** コマンドを用いて特定の ELS イベント、範

ELS 構成コマンド (Talk 6)

囲、グループ、またはサブシステムに関して別の値を指定しない限り、リモート・ログに記録されるメッセージのすべてでこの値が使用されます。

SYSLOG 機能の値として指定できる値をすべて下に挙げておきます。

log_auth
log_authpriv
log_cron
log_daemon
log_kern
log_lpr
log_mail
log_news
log_syslog
log_user
log_uucp
log_local0-7

level メッセージのログ記録先を決める場合に、リモート・ワークステーションの SYSLOG デーモンが、*facility* 値と一緒に使用する値を指定します。 **remote** コマンドを用いて特定の ELS イベント、範囲、グループ、またはサブシステムに関して別の値を指定しない限り、リモート・ログに記録されるメッセージのすべてでこの値が使用されます。

SYSLOG レベルの値として指定できる値をすべて下に挙げておきます。

log_emerg
log_alert
log_crit
log_err
log_warning
log_notice
log_info
log_debug

no-msgs

ログの循環前にリモート・ログ用のバッファーに入るメッセージの数を指定します。

remote_ip_addr

xxx.xxx.xxx.xxx 形式の IP アドレスであり、xxx は 0 ~ 255 の範囲の任意の整数です。 ログ・ファイルが常駐するリモート・ホストの IP アドレスを表します。

source_ip_addr

xxx.xxx.xxx.xxx 形式の IP アドレスであり、xxx は 0 ~ 255 の範囲の任意の整数です。

ELS 構成コマンド (Talk 6)

リモート・ログに記録される ELS メッセージに IP アドレスまたはホスト名が示されるときは、識別を容易にするために 2216 内で構成されている IP アドレスを使用する必要があります。また、この IP アドレスがネーム・サーバーによって即時にホスト名に解決されるかどうか、または少なくともネーム・サーバーが『address not found』によって即時に応答するかどうか検証する必要があります。

IP アドレスの解決が適正に行われるかどうか判断するには、ワークステーションで次に示すように **host** コマンドを入力します。

```
workstation>host 5.1.1.1
host: address 5.1.1.1 NOT FOUND
workstation>
```

応答にかかる時間が 1 秒を超える場合は、より迅速に解決する IP アドレスを選択します。

local_id

リモート・ファイルのログに記録されるメッセージに組み込まれ、メッセージをログに記録したマシンの識別に役立つ、長さが最大 32 文字の任意の文字ストリングです。

timestamp [timeofday or uptime or off]

メッセージ・タイム・スタンプをオンにして、時刻またはアップタイム (日付はなく、ルーターの最後の初期化以降の時間、分、および秒数) が、各メッセージの横に表示されます。Set timestamp をオフにすることもできます。

set timestamp コマンドを使用して、以下のタイム・スタンプ・オプションの 1 つを使用可能にします。

timeofday

1 日 24 時間での発生時刻を示す HH:MM:SS プレフィックスを、各メッセージに追加します。

uptime

100 時間周期における発生時刻を示す HH:MM:SS プレフィックスを、各メッセージに追加します。アップタイム 100 時間後に、アップタイム・カウンターはゼロに戻り、別の 100 時間周期を開始します。

off ELS タイム・スタンプ・プレフィックスをオフにします。

trace トレース・オプションを構成するには、**set trace** コマンドを使用します。監視環境からトレース・オプションを構成する場合、変更は即時に有効になります。そして、装置をリブートすると、以前に構成されていた設定値に戻ります。

注: トレースは、熟練したサポート技術員の指示の下でのみ使用してください。トレースは、特にシャドー・ディスクを使用可能にして使用する場合、装置の資源を使用するので、全体的な性能およびスループットに影響を与える可能性があります。

構文 :

```
set trace                                decode
                                           default-bytes-per-pkt
```

disk-shadowing
max-bytes-per-pkt
memory-trace-buffer-size
off
on
reset
stop-event
wrap-mode

decode *off/on*

パケットの復号をオンまたはオフにします。パケット復号は、すべてのコンポーネントによってサポートされているとは限りません。

default-bytes-per-pkt *bytes*

デフォルトのトレースされるバイト数を設定します。トレースを行うコンポーネントによって値が指定されない場合、この値が使用されます。

disk-shadowing **[[off または on] または record-size または time-limit または delete-file または max-file-size]**

シャドー・ディスクをオンまたはオフにする、最大トレース・ファイル・サイズを設定する、またはシャドー・ディスク・トレースの最大時間を設定します。

[off または on]

シャドー・ディスクをオンまたはオフにします。シャドー・ディスクが使用可能になっている場合は、トレース・レコードがハード・ディスクにコピーされます。トレース・レコードは、ハード・ディスクにコピーされてしまうと、モニターで表示させて見ることはできなくなります。

注: WRITE、TFTP software、RETRIEVE system dump、または COPY software コマンドを出すときは、必ずシャドー・ディスクをオフに設定しておくことが必要です。

disk-shadowing delete-file

トレース・ファイルを削除します。

disk-shadowing max-file-size *Mbytes*

トレース・ファイルの最大ファイル・サイズを設定します。

有効値: 1 MB ~ 16 MB

デフォルト値: 10 MB

disk-shadowing record-size *bytes*

トレース・ファイル・レコードのレコード・サイズを設定します。

有効値 1024、2048、または 4096 バイト

デフォルト値 2048 バイト

ELS 構成コマンド (Talk 6)

注:

1. トレース・ファイルがすでに存在する場合は、『Cannot change Record Size without first deleting the existing Trace File』が表示され、レコード・サイズは変更されません。
2. レコード・サイズを構成したが、トレース・ファイルがすでに存在している場合、トレースは既存のファイルのレコード・サイズを使用します。

disk-shadowing time-limit *hours*

トレースのシャドー・ディスクの最大時間を設定します。

有効値 1 ~ 72 時間

デフォルト値 24 時間

注: この時間が経過すると、シャドー・ディスクは停止します (トレースは続行されます)。シャドー・ディスクが再びオンにされると、実際の時間は 0 にリセットされます。

max-bytes-per-pkt *bytes*

各パケットごとに、トレースされる最大バイト数を設定します。

memory-trace-buffer-size *bytes*

RAM トレース・バッファのサイズをバイト数で設定します。

有効値 : 0、 $\geq 10,000$

デフォルト値: 0

off パケット・トレースを使用不可にします。

on パケット・トレースを使用可能にします。

reset トレース・バッファをクリアし、すべての関連のカウンターをリセットします。

stop-event *event id*

イベント (event id) が発生したときにトレースを停止します。ELS イベント ID (たとえば、TCP.013) または『None』を入力します。

『None』がデフォルトです。特定の ELS イベントの表示が使用可能にされている場合にのみ、トレースは停止します。

stop-event が発生すると、トレース・バッファにエントリーが書き込まれます。このトレース・エントリーに対して **view** コマンドを出すと、『Tracing stopped due to ELS Event Id: TCP.013』が表示されます。

stop-event のためにトレースが停止した後は、**set trace on** コマンドを使用して、トレースを再び使用可能にする必要があります。(ELS Config> プロンプトからトレースが使用可能にされている場合は、リスタートしても、トレースは再び使用可能になります。)

wrap-mode [**off** または **on**]

トレース・バッファ折り返しモードをオンまたはオフにします。折り返しモードがオンのときにトレース・バッファがいっぱいの場

合、トレースを継続するのに必要なため、前のトレース・レコードが新しいトレース・レコードによって上書きされます。

Trace

指定されたイベント/範囲/サブシステム/グループのトレースを使用可能にします。**trace** コマンドを ELS Config> プロンプトから使用した場合、変更は構成の一部になり、その変更をアクティブにするためにはリブートが必要です。

構文：

```
trace                event . . .
                        group . . .
                        range . . .
                        subsystem . . .
```

event *subsystem.event#*

指定したトレース・イベント (*subsystem.event#*) がシステム・モニターに表示されます。

group *groupname*

指定したグループに以前に追加されたトレース・イベントがルーター・モニターに表示できます。

range *subsystemname first_event_number last_event_number*

ただし、*first_event_number* は、指定されたイベント範囲の最初のイベントの番号であり、*last_event_number* は、指定されたイベント範囲の最後のイベントの番号です。

指定したサブシステムの指定した範囲のトレース・イベントがシステム・モニターに表示されます。

例：

```
trace range gw 19 22
```

トレース・イベント gw.19、gw.20、gw.21、および gw.22 がシステム・モニターに表示されます。

subsystem *subsystemname*

指定したサブシステムに関連するトレース・イベントがルーター・モニターに表示できます。

Trap

trap コマンドは、リモート SNMP ネットワーク管理ワークステーションに送信するメッセージを選択するのに使用します。リモート SNMP ネットワーク管理ワークステーションは、SNMP マネージャーとして働くネットワーク内の IP ホストです。

構文：

```
trap                event . . .
                        group . . .
```

ELS 構成コマンド (Talk 6)

range . . .

subsystem . . .

event *subsystem.event#*

指定されたメッセージ (*subsystem.event#*) が SNMP でネットワーク管理ワークステーションに送信されるようにします。

group *groupname*

指定されたグループに以前に追加されたメッセージが、SNMP トラップでネットワーク管理ワークステーションに送信されるようにします。

range *subsystemname first_event_number last_event_number*

ただし、*first_event_number* は、指定されたイベント範囲の最初のイベントの番号であり、*last_event_number* は、指定されたイベント範囲の最後のイベントの番号です。

指定されたサブシステムの指定された範囲のメッセージが、SNMP トラップでネットワーク管理ワークステーションに送信されるようにします。

例：

```
trap range gw 19 22
```

イベント gw.19、gw.20、gw.21、および gw.22 内のメッセージが、SNMP トラップでネットワーク管理ワークステーションに送信されるようにします。

subsystem *subsystemname*

指定されたサブシステムに関連するメッセージが、SNMP トラップで管理ワークステーションに送信されるようにします。

注: IP、ICMP、ARP、および UDP サブシステムのメッセージは、SNMP トラップで送信することはできません。これらの区域は SNMP トラップを送信する過程で使用されているか、使用される可能性があるからです。これはトラフィックの無限のループを招いて、ルーターに不当な無理を掛けることとなります。

ELS ネット・フィルター構成コマンド

ELS ネット・フィルターによって、特定のネット番号の ELS メッセージだけを見て、それ以外の ELS メッセージは廃棄することができます。

フィルターの作成時に、そのフィルターが適用されるサブシステム、イベント、またはイベントの範囲を指定します。また、待ち行列 (たとえば、『DISPLAY』、『TRAP』、『TRACE』、または『REMOTE-LOGGING』) も指定します。最後に、フィルター処理したいネット番号 (またはネット番号の範囲) を指定します。

フィルターを使用可能にすると、ELS コマンドによってオンにされたメッセージはフィルター処理を受けることとなります。フィルターによって許容されるのは、指定されたネット番号のメッセージだけです。フィルターは、装置に対して指定されたネット番号が含まれていないメッセージを廃棄させます。

送信される ELS メッセージの数を減らすことによって、関心のあるインターフェースに関するメッセージをより簡単に見付けることができます。

ELS 構成コマンド (Talk 6)

ここでは、ELS ネット・フィルターを構成するためのコマンドについて説明します。このようなフィルターを構成する場合は、ELS> プロンプトで **filter net** コマンドを入力します。その上で、ELS Filter net> プロンプトで構成コマンドを入力します。

表 16. ELS ネット・フィルター構成コマンド

コマンド	機能
? (Help)	このコマンド・レベルで使用可能なコマンドをすべて表示するか、特定のコマンドに関するオプション (ただし、選択可能な場合) をリストします。12ページの『ヘルプを得る』を参照してください。
Create	フィルターを作成し、それに番号を割り当てます。最大 64 のフィルターが使用できます。
Delete	指定されたフィルター番号またはすべてのフィルターを削除します。
Disable	指定されたフィルター番号またはすべてのフィルターを使用不可にします。
Enable	指定されたフィルター番号またはすべてのフィルターを使用可能にします。
List	指定されたフィルター番号またはすべてのフィルターをリストします。
Exit	直前のコマンド・レベルに戻ります。13ページの『下位レベル操作環境を終了する』を参照してください。

Create

ELS ネット・フィルターを作成する場合は、**create** コマンドを使用します。

構文：

```
create queue          event event_name net#_start net#_end  
                        range event_range net#_start net#_end  
                        subsystem subsystem_name net#_start net#_end
```

queue フィルターを設定する待ち行列。指定できる有効な待ち行列は、次のとおりです。

- Display
- Trace
- Trap
- Remote

event *event_name net#_start net#_end*

フィルター処理の対象とするイベントおよびネットワーク番号を指定します。

net#_start と *net#_end* を同じ番号として指定した場合は、単一のネットワーク番号上でフィルター処理します。

コマンド **create trap event GW.009 2 10** では、ネットワーク番号 2 ~ 10 のメッセージ GW.009 のトラップがフィルターに掛けられます。

range *event_range net#_start net#_end*

フィルター処理の対象とする ELS メッセージおよびネットワーク番号の範囲を指定します。

net#_start と *net#_end* を同じ番号として指定した場合は、単一のネットワーク番号上でフィルター処理します。

ELS 構成コマンド (Talk 6)

コマンド **create remote range ipx 19 22 3 6** では、ネット番号が 3 ~ 6 で、IPX.019 に始まり IPX.022 で終わる IPX メッセージがすべて、フィルター処理されてリモート・ログに記録されます。

subsystem *subsystem_name net#_start net#_end*

フィルター処理の対象とするサブシステムおよびネット番号を指定します。

net#_start と *net#_end* を同じ番号として指定した場合は、単一のネットワーク番号上でフィルター処理します。

コマンド **create display subsys ip 1 1** では、IP サブシステムに関する ELS メッセージでネット番号 1 のものがすべて、フィルター処理されて表示されます。それ以外の IP サブシステム・メッセージは、すべて廃棄されます。

Delete

特定の ELS フィルターまたはすべての ELS フィルターを削除する場合は、**delete** コマンドを使用します。

構文：

```
delete                all  
                        filter filter#
```

all 現在構成済みのフィルターをすべて削除します。

filter *filter#*

filter# で指定されたフィルターを削除します。削除したいフィルターの番号は、**list** コマンドを使用して入手します。

Disable

特定の ELS フィルターまたはすべての ELS フィルターを使用不可にする場合は、**disable** コマンドを使用します。

構文：

```
disable              all  
                        filter filter#
```

all 現在構成済みのフィルターをすべて使用不可にします。

filter *filter#*

filter# で指定されたフィルターを使用不可にします。使用不可にしたいフィルターの番号は、**list** コマンドを使用して入手します。

Enable

特定の ELS フィルターまたはすべての ELS フィルターを使用可能にする場合は、**enable** コマンドを使用します。

構文：

```
enable              all  
                        filter filter#
```

all 現在構成済みのフィルターをすべて使用可能にします。

filter *filter#*

filter# で指定されたフィルターを使用可能にします。使用可能にしたいフィルターの番号は、**list** コマンドを使用して入手します。

List

特定の ELS フィルターまたはすべての ELS フィルターをリストさせる場合は、**list** コマンドを使用します。

構文：

```
list                all
                    filter filter#
```

all 現在構成済みのフィルターをすべてリストします。

filter *filter#* で指定されたフィルターをリストします。

ELS メッセージ・バッファリング構成コマンド

表17 は、ELS Config Advanced> プロンプトで利用可能なコマンドをリストしています。

表 17. ELS メッセージ・バッファリング構成コマンド

コマンド	機能
? (Help)	このコマンド・レベルで使用可能なコマンドをすべて表示するか、特定のコマンドに関するオプション (ただし、選択可能な場合) をリストします。12ページの『ヘルプを得る』を参照してください。
List	メッセージ・バッファリングの構成設定値を表示します。
Log	メッセージ・バッファラーに対する選択メッセージのログ記録を使用可能にします。
Nolog	メッセージ・バッファラーに対する選択メッセージのログ記録をオフにします。
Set	メッセージ・バッファラーのサイズ、折り返しモード、ログ記録の実行の有無、メッセージ・バッファリングを終了させるイベントの種類、およびイベントによってメッセージ・バッファリングが停止された場合にシステムが実行する事柄を設定します。
Exit	直前のコマンド・レベルに戻ります。13ページの『下位レベル操作環境を終了する』を参照してください。

List

list コマンドは、ELS メッセージ・バッファリング構成をリストするのに使用します。

構文：

```
list                status
```

例：

ELS 構成コマンド (Talk 6)

```
ELS Config Advanced> list status
-----Configuration-----
Logging Status:   OFF   Wrap Mode:   ON   Logging Buffer Size:  8500   Kbytes
Stop-Event:      APPN.2   Stop-String:   netdn for intf 6
Additional Stop-Action:  NONE
```

ディスプレイの値を変更するコマンドについては、179ページの『Set』を参照してください。

Log

log コマンドはメッセージ・バッファに記録するメッセージを選択するために使用します。

構文 :

```
log                event
                   group
                   range
                   subsystem
```

event *subsystem.event#*

指定されたメッセージ (*subsystem.event#*) が、メッセージ・バッファに記録されるようにします。

group *groupname*

指定したグループに以前に追加されたメッセージがメッセージ・バッファに記録できます。

range *subsystemname first_event_number last_event_number*

ただし、*first_event_number* は、指定されたイベント範囲の最初のイベントの番号であり、*last_event_number* は、指定されたイベント範囲の最後のイベントの番号です。

指定したサブシステムの指定した範囲にあるメッセージがメッセージ・バッファに記録されます。

例 :

```
log range gw 19 22
```

イベント gw.19、gw.20、gw.21、および gw.22 のメッセージがメッセージ・バッファに記録されます。

subsystem *subsystemname*

指定したサブシステムに関連するメッセージが、メッセージ・バッファに記録されるようにします。

Nolog

nolog コマンドは、メッセージ・バッファに記録される定義済みのメッセージ・リストからメッセージを消去するために使用します。

構文 :

```
nolog                event
```

group

range

subsystem

event *subsystem.event#*

指定されたメッセージ (*subsystem.event#*) が、メッセージ・バッファに記録されないようにします。

group *groupname*

指定したグループに以前に追加されたメッセージがメッセージ・バッファに記録できないようにします。

range *subsystemname first_event_number last_event_number*

ただし、*first_event_number* は、指定されたイベント範囲の最初のイベントの番号であり、*last_event_number* は、指定されたイベント範囲の最後のイベントの番号です。

指定したサブシステムの指定した範囲にあるメッセージがメッセージ・バッファに記録されないようにします。

例 :

log range gw 19 22

イベント gw.19、gw.20、gw.21、および gw.22 のメッセージがメッセージ・バッファに記録されないようにします。

subsystem *subsystemname*

指定したサブシステムに関連するメッセージが、メッセージ・バッファに記録されないようにします。

Set

set コマンドは、多様な ELS メッセージ・バッファリング・オプションを構成する場合に使用します。

構文 :

set

buffer-size *Kbytes*

logging [on または off]

stop action . . .

stop event *subsystem.event#*

stop string *text*

wrap on または off]

buffer-size *Kbytes*

システムが割り振るメッセージ・バッファのサイズをキロバイトで指定します。 **mem** コマンドは、このメモリー量を 『Never Alloc.』 として表示します。この値を高く設定し過ぎると、プロトコルおよびフィーチャーのためのメモリーが不足して、リブート後にルーターが正常に動作しなくなることがあります。

有効値 : 0 KB ~ルーターで利用可能なメモリーの 80%

ELS 構成コマンド (Talk 6)

デフォルト値 : 0 (メッセージ・バッファリングなし)

注: このコマンドを使用してバッファを割り振ってから、logging on を設定する必要があります。

logging [on または off]

メッセージ・バッファリングを行うかどうかを指定します。このコマンドが有効になるのは、**set buffer-size** コマンドを使用してバッファを割り振った後です。デフォルトは off です。

stop action [appn-dump または disk-offload または none または system-dump]

『stop event』(および、指定されている場合は『stop string』)の場合に、システムがとる追加のアクションを指定します。アクションは、次のとおりです。

appn-dump

APPN プロトコルがアクティブの場合、これをダンプする。APPN ダンプは、stop action の結果としてダンプが行われたことを表示します。

disk-offload

バッファのフォーマット済みバージョンを、ハード・ディスクのファイルに書き込む。ファイルがすでに存在する場合は、新規のファイルでそれを置き換えます。そのあとで、**tftp file** 監視コマンドを使用してこのファイルをリモート・ホストに送信することができます。

none ログ記録のあとでその他のアクションは実行されない。

system-dump

システム全体をダンプする。system dump は、stop action の結果としてダンプが行われたことを表示します。

デフォルト値 : none

stop event [subsystem.event# または none]

ログ記録を停止するイベント (*subsystem.event#*) を指定します。stop string を指定した場合は、stop string 内のテキストも一致している必要があります。stop event の場合、以下が行われます。

1. 次の 5 つの ELS メッセージが記録される。
2. ログ記録が停止する。
3. システムは指定された『stop action』を実行する。

次の **set logging on** コマンドを出すか、ルーターをリブートするまで、ログ記録は停止したままです。

コマンドを入力するときに stop event を指定しないと、システムは stop event の入力をプロンプト指示します。**none** を指定すれば、stop event 機能は使用不可になります。

デフォルト値 : none

stop string *text* または **none**

ログ記録を停止するための 『stop event』 とともに使用される文字列を指定します。stop event を指定しなかった場合、システムは 『stop string』 を無視します。

Text は、最大 32 文字長の任意の ASCII 文字列が使用できます。*text* を指定しないでコマンドを入力すると、システムは文字列の入力をプロンプト指示します。 **none** を入力すると、『stop string』 はクリアされます。

デフォルト値 : none

wrap [**on** または **off**]

バッファがフルのときにログを停止するか (off)、それともバッファの先頭から新規のメッセージを記録するか (on) を指定します。

デフォルト値 : off

ELS 操作環境への出入り

ELS 監視環境 (GWCON プロセスからアクセス可能) の特徴は、ELS> プロンプトにあります。このプロンプトで入力されるコマンドは、現行の ELS パラメータの設定値を変更します。これらのコマンドについては、157ページの『第13章 イベント・ログ・システム (ELS) の構成と監視』で説明します。

OPCON から ELS 監視環境に入る手順は、以下のとおりです。

1. **talk 5** コマンドを入力する。

*talk 5

モニターに GWCON プロンプト (+) が表示されます。初めて GWCON に入ったとき、このプロンプトが表示されなかった場合は、**Return** を押します。

2. GWCON プロンプトで、次のコマンドを入力して ELS にアクセスする。

+ event

モニターに ELS 監視プロンプト (ELS>) が表示されます。ここで ELS 監視コマンドを入力することができます。

ELS 監視環境を終了する場合は、**exit** コマンドを入力します。

ELS 監視コマンド

この節では、ELS 監視コマンドのすべてについて要約した上で、個々に説明します。ELS 監視環境にアクセスすると、ELS> プロンプトで ELS 監視コマンドを入力することができます。

表 18. ELS 監視コマンドの要約

コマンド	機能
? (Help)	このコマンド・レベルで使用可能なコマンドをすべて表示するか、特定のコマンドに関するオプション (ただし、選択可能な場合) をリストします。12ページの『ヘルプを得る』を参照してください。

ELS 監視コマンド (Talk 5)

表 18. ELS 監視コマンドの要約 (続き)

コマンド	機能
Advanced	メッセージ・バッファリングの構成が可能な、拡張構成環境に入ります。
Clear	指定されたイベント、グループ、またはサブシステムに関連するメッセージのカウントをゼロにリセットします。
Display	コンソール上のメッセージの表示を使用可能にします。
Exit	ELS コンソール・プロセスを終了し、ユーザーを GWCON に戻します。
Filter	ネット番号に基づいて ELS メッセージをフィルター処理します。
List	ELS 設定値およびメッセージに関する情報をリストします。
Nodisplay	コンソール上のメッセージの表示を使用不可にします。
Noremote	リモート・ワークステーションのファイルへのリモート・ログ記録を使用不可にします。
Notrace	コンソール上のトレース・イベントの表示を使用不可にします。
Notrap	メッセージが SNMP トラップでネットワーク管理ワークステーションに送信されないようにします。
Packet-trace	アクティブ・パケット・トレース・パラメーターを設定およびリストするための拡張中央環境を提供します。
Remote	メッセージがリモート・ワークステーションでファイルにログ記録できるようにします。
Remove	保管されている情報を消去して、メモリーを解放します。
Restore	現行の設定値を消去して、初期 ELS 構成を再ロードします。
Retrieve	保管されている ELS 構成を再ロードします。
Save	現行構成を保管します。
Set	ピン・パラメーターおよびタイム・スタンプ機能を設定します。
Statistics	使用可能なサブシステムと関連する統計を表示します。
Trace	コンソール上のトレース・イベントの表示を使用可能にします。
Trap	メッセージが SNMP トラップでネットワーク管理ワークステーションに送信されるようにします。
View	トレースされたパケットを表示できるようにします。
Exit	直前のコマンド・レベルに戻ります。13ページの『下位レベル操作環境を終了する』を参照してください。

Advanced

advanced コマンドは、拡張監視環境に入るために使用します。この環境で、メッセージ・バッファリング操作を変更します。

構文：

advanced

Clear

clear コマンドは、特定のイベント、グループ、またはサブシステムに関連して、display、trace、trap、または remote コマンドのカウントをゼロにリセットする場合に使用します。

構文：

clear event . . .

group . . .

`_subsystem . . .`**event** *subsystem.event#*

指定されたイベント (*subsystem.event#*) の表示、トラップ、トレース、またはリモート・ログ記録のために、イベントのカウントをゼロにリセットします。

group *group.name*

指定されたグループ (*group.name*) の表示、トラップ、トレース、またはリモート・ログ記録のために、イベントのカウントをゼロにリセットします。

subsystem *subsystem.name*

指定されたサブシステム (*subsystem.name*) の表示、トラップ、トレース、またはリモート・ログ記録のために、イベントのカウントをゼロにリセットします。

Display

`display` コマンドは、特定のイベントに関して、監視モニター上でのメッセージの表示を使用可能にする場合に使用します。

構文：

```
display                event . . .
                        group . . .
                        range . . .
                        subsystem . . .
```

event *subsystem.event#*

指定されたイベント (*subsystem.event#*) に関するメッセージを表示します。

group *groupname*

指定されたグループ (*groupname*) のメッセージを表示します。

range *subsystemname first_event_number last_event_number*

ただし、*first_event_number* は、指定されたイベント範囲の最初のイベントの番号であり、*last_event_number* は、指定されたイベント範囲の最後のイベントの番号です。

指定されたサブシステムの一定範囲のメッセージを表示します。

例：

```
display range gw 19 22
```

イベント gw.19、gw.20、gw.21、および gw.22 を表示します。

subsystem *subsystem.name*

指定されたサブシステム (*logging level*) に関連するメッセージを表示します。ログ・レベルを指定しないと、そのサブシステムのすべてのメッセージがオンになります。

ELS 監視コマンド (Talk 5)

Files Trace TFTP

files trace tftp コマンドは、以下に関連したサブディレクトリーからトレース・ファイルを検索するのに使用します。

- 現在アクティブのバンク (ハード・ディスク上のバンク A またはバンク B)
- ハード・ディスク上のバンク A
- ハード・ディスク上のバンク B
- ネットワーク・サブディレクトリーに保管されているトレース・ファイル (アクティブ・バンクがない場合)

構文 :

```
files trace tftp          active-bank ...  
                             bank-a ...  
                             bank-b ...  
                             net-subdir ...
```

リモート・サーバー IP アドレス および リモート・パス/ファイル名 の入力を求めるプロンプトが出ます。

active-bank

現在アクティブのバンクからトレース・ファイルを検索します。

bank-a

バンク A からトレース・ファイルを検索します。

bank-b

バンク B からトレース・ファイルを検索します。

net-subdir

ネットワーク・サブディレクトリーに保管されているトレース・ファイルを検索します (アクティブ・バンクがない場合)。

Filter

filter コマンドは、フィルター構成コマンド環境にアクセスする場合に使用します。コマンドの詳細については、205ページの『ELS ネット・フィルター監視コマンド』を参照してください。

構文 :

```
filter                    net
```

List

list コマンドは、ELS 設定値の更新情報や、選択されたメッセージのリストを入手するのに使用します。

構文 :

```
list                      all
```

active . . .
event . . .
filter-status
groups . . .
pin
remote-log status
subsystem . . .
trace-status

all すべてのサブシステム、定義されたグループ、使用可能にされたサブシステム、使用可能にされたイベント、およびピンをリストします。

active *subsystem.name*

特定のサブシステムのアクティブのイベント、およびメッセージの発生カウントを表示します。

例 :

```
list active ip
EventActiveCount
IP.00789354
ETH.009D10
Subsystem X25: no event active
```

リモート・ログ記録がオンにされると、サブシステムに関してアクティブと表示されたイベントは、その名前の隣に 『R』 が表示されます。

event *subsystem.event#*

指定されたイベントのログ・レベル、メッセージ、およびカウントを表示します。

例 :

```
list event ip.007
Level: p-TRACE
Message: source_ip address -> destination_ip_address
Active: Count: 84182
```

このイベントに関してリモート・ログ記録が起動されていて、 *syslog_facility* および *syslog_level* の値が *log_daemon* および *log_crit* であった場合は、最後の行は次のようになります。

```
Active: R count:84182
Syslog Facility: log_daemon Syslog Level: log_crit
```

filter-status

ELS ネット番号のフィルターをリストします。

groups *group.name*

ユーザー定義のグループ名を表示します。

pin SNMP トラップで送信される ELS イベント・メッセージの現在数 (1 秒当たり) をリストします。これは、SNMP トラップ・トラフィックの量を減らすために使用できる限界値です。

例 :

ELS 監視コマンド (Talk 5)

```
list pin
Pin: 100 events/second
```

remote-log status

set remote-logging コマンドで設定されたりモート・ログ・オプションの現行値をリストします。

例 :

```
list r
Remote Logging is On
Source Ip Address = 192.9.200.8
Remote Log IP Address = 192.9.200.1
Default Syslog Facility = LOG_USER
Default Syslog Priority Level = LOG_INFO
Number of Messages in Remote Log = 256
Remote Logging Local ID = SPHINX
```

subsystem *subsystem.name*

イベント名、発生したイベントの合計数、およびその記述を表示します。

注: ELS はルーター上のサブシステムをすべてサポートしますが、すべての装置がすべてのサブシステムをサポートしているとは限りません。現在サポートされているサブシステムのリストを調べるには、ELS メッセージを参照してください。

subsystem *subsystem.name*

指定されたサブシステムに関するすべてのイベント、ログ・レベル、およびメッセージを表示します。

例 :

```
list subsystem eth
Event      Level      Message
ETH.001    P-TRACE   brd rcv unkwn type packet_type source_Ethernet_address ->
            destination_Ethernet_address nt network
ETH.002    UE-ERROR  rcv unkwn typ packet_type source_Ethernet_address ->
            destination_Ethernet_address nt network
ETH.010    C-INFO    LLC unk SAP_DSAP source_Ethernet_address ->
            destination_Ethernet_address nt network
```

subsystem all

すべてのイベント、ログ・レベル、およびルーター上で発生した各イベントのすべてのメッセージをリストします。

trace-status

構成および実行時情報を含めて、パケット・トレースの状況に関する情報を表示します。

例 :

```
list trace-status
----- Configuration -----
Trace Status:ON  Wrap Mode:ON  Decode Packets:ON  HD Shadowing:ON
RAM Trace Buffer Size:100000  Maximum Trace Buffer File Size:10000000
Max Packet Bytes Trace:256  Default Packet Bytes Traced:100
Trace File Record Size:2048  Stop Trace Event: TCP.013
Maximum Hours to HD Shadow: 1
----- Run-time Status -----
Packets in RAM Trace Buffer:1  Free Trace Buffer Memory:99958
Trace Errors:0  First Packet:1  Last Packet:1
Trace Records Stored on HD:8  Trace Buffer File Size:16560
HD-Shadowing Time Exceeded? NO  Elapsed Time: 0 hr, 0 min, 10 sec
Has Stop Trace Event Occurred? NO
```

- STOP-ON-EVENT アクションが発生すると、LIST TRACE-STATUS 画面の『Trace Status』は OFF を示します。

ELS 監視コマンド (Talk 5)

- STOP-ON-EVENT アクションが発生するか、タイム・リミットを超過すると、LIST TRACE-STATUS 画面の『HD Shadowing』は OFF を示します。
- トレース・ファイルでラップアラウンドが起こると、『Trace Buffer File Size』は『<wrapped>』を表示します。
- シャドー・ディスクのタイム・リミットを超過したが、時間が満了した以降はトレース・レコードが書き込まれていない場合には、『HD-Shadowing Time Exceeded? NO <Next trace will turn it OFF>』が表示されます。次のトレース・レコードが書き込まれると、『HD-Shadowing Time Exceeded? YES』が表示されます。

talk 6 の下で ELS Config>LIST TRACE コマンドを実行すると、次のような情報が表示されます。

```
----- Configuration -----  
Trace Status:ON  Wrap Mode:ON  Decode Packets:ON  HD Shadowing:ON  
RAM Trace Buffer Size:100000  Maximum Trace Buffer File Size:10000000  
Max Packet Bytes Trace:256  Default Packet Bytes Traced:100  
Trace File Record Size:2048  Stop Trace Event: TCP.013  
Maximum Hours to HD Shadow: 1
```

Nodisplay

nodisplay コマンドは、コンソール上でのメッセージの表示を選択し、オフにする場合に使用します。

構文 :

```
nodisplay          event . . .  
                   group . . .  
                   range . . .  
                   subsystem . . .
```

event *subsystem.event#*

指定されたイベントに関するメッセージの表示を抑制します。

group *group.name*

指定されたグループ (*group.name*) に以前に追加されたメッセージの表示を抑制します。

range *subsystemname first_event_number last_event_number*

ただし、*first_event_number* は、指定されたイベント範囲の最初のイベントの番号であり、*last_event_number* は、指定されたイベント範囲の最後のイベントの番号です。

指定されたサブシステムの一定範囲のメッセージを表示を抑制します。

例 :

```
nodisplay range gw 19 22
```

イベント gw.19、gw.20、gw.21、および gw.22 の表示を抑制します。

subsystem *subsystem.name*

指定されたサブシステム (*logging level*) に関連するメッセージの表示を抑制します。

ELS 監視コマンド (Talk 5)

Noremote

noremote コマンドは、リモート・ワークステーションへのメッセージのログ記録を選択し、オフにする場合に使用します。

構文：

```
noremote          event . . .  
                   group . . .  
                   range . . .  
                   subsystem . . .
```

event *subsystem.event#*

指定されたイベントに関するメッセージのリモート・ログ記録を抑制します。

group *group.name*

指定されたグループ (*group*) に以前に追加されたメッセージのリモート・ログ記録を抑制します。

range *subsystemname first_event_number last_event_number*

ただし、*first_event_number* は、指定されたイベント範囲の最初のイベントの番号であり、*last_event_number* は、指定されたイベント範囲の最後のイベントの番号です。

指定されたサブシステムに関する一定範囲のメッセージのリモート・ログ記録を抑制します。

例：

```
noremote range gw 19 22
```

イベント gw.19、gw.20、gw.21、および gw.22 のリモート・ログ記録を抑制します。

subsystem *subsystem.name*

指定されたサブシステム (*logging level*) に関連するメッセージのリモート・ログ記録を抑制します。

例：

```
noremote subsystem tkr
```

注: Noremote の場合は、通常、Remote の場合のように、SYSLOG 機能およびレベルを指定する必要はありません。

remote および **noremote** コマンドを用いた設定を検証する場合は、**list event** および **list active** コマンドを使用します。

Notrace

notrace コマンドは、選択したトレース・イベントのモニターでの表示を停止する場合に使用します。

構文：

notrace event . . .
 group . . .
 range . . .
 subsystem . . .

event *subsystem.event#*
 指定されたトレース・イベントの表示を抑制します。

group *groupname*
 指定されたグループ (*groupname*) に関連するトレース・イベントの表示を抑制します。

range *subsystemname first_event_number last_event_number*
 ただし、*first_event_number* は、指定されたイベント範囲の最初のイベントの番号であり、*last_event_number* は、指定されたイベント範囲の最後のイベントの番号です。

指定されたサブシステムの一定範囲のメッセージの packets・トレース・データの送信を使用不可にします。

例 :
`notrace range gw 19 22`

イベント gw.19、gw.20、gw.21、および gw.22 の packets・トレース・データの送信を抑制します。

subsystem *subsystemname [logging-level]*
 指定されたサブシステムおよびログ・レベルに関連するイベントのトレースの表示を抑制します。*logging-level* を指定しない場合は、サブシステムのすべてのログ・レベルに関するトレースを抑制します。

例 :
`notrace subsystem fr1 error`
`notrace subsystem fr1`

Notrap

notrap コマンドは、メッセージを選択してオフにし、SNMP トラップでネットワーク管理ワークステーションに送信されないようにするのに使用します。

構文 :

notrap event . . .
 group . . .
 range . . .
 subsystem . . .

event *subsystem.event#*
 指定されたメッセージの SNMP トラップでの送信 (*subsystem.event#*) を抑制します。

ELS 監視コマンド (Talk 5)

group *groupname*

指定されたグループ (*groupname*) に以前に追加されたメッセージの SNMP トラップでの送信を抑制します。

range *subsystemname first_event_number last_event_number*

ただし、*first_event_number* は、指定されたイベント範囲の最初のイベントの番号であり、*last_event_number* は、指定されたイベント範囲の最後のイベントの番号です。

指定されたサブシステムの指定された範囲のイベントのメッセージの SNMP トラップでの送信を抑制します。

例：

```
notrap range gw 19 22
```

イベント gw.19、gw.20、gw.21、および gw.22 のメッセージの SNMP トラップでの送信を抑制します。

subsystem *subsystemname [logging-level]*

指定されたサブシステムおよびログ・レベルに関連するメッセージの SNMP トラップでの送信を抑制します。*logging-level* を指定しない場合は、サブシステムのすべてのログ・レベルに関するトラップを抑制します。

例：

```
notrap subsystem tkr error
```

Packet Trace

packet-trace コマンドは、種々のサブシステムに関するパケット・トレース情報を表示/使用可能/使用不可にするのに使用します。このコマンドで得られる機能は、**Trace** コマンドに似ています。

構文：

packet-trace

Packet Trace の使用を終了するときは、**Exit** コマンドを使用します。

詳細な説明については、202ページの『Packet-trace 監視コマンド』を参照してください。

Remote

remote コマンドは、リモート・ファイルのログに記録されるイベントをイベント番号別、イベントの範囲別、グループ別、またはサブシステム別に選択する場合に使用します。

構文：

```
remote                               event . . .  
                                       group . . .  
                                       range . . .
```

_subsystem . . .

event *subsystem.event# syslog_facility syslog_level*

指定したイベントがリモート・ログに記録されます。

リモート・ワークステーションの SYSLOG デーモンが SYSLOG 機能およびレベルの値を使用して、メッセージのログ記録先を決めます。この値によって、**set facility** および **set level** コマンドで設定されているデフォルト値がオーバーライドされます。

syslog_facility

log_auth
log_authpriv
log_cron
log_daemon
log_kern
log_lpr
log_mail
log_news
log_syslog
log_user
log_uucp
log_local0-7

syslog_level

log_emerg
log_alert
log_crit
log_err
log_warning
log_notice
log_info
log_debug

これらの値には、IBM 2216 上のどのデーモンにも特定の関連はありません。リモート・ワークステーション上の SYSLOG デーモンで使用される識別子に過ぎません。

例 :

```
remote event gw.019 log_user log_info
```

group *group.name syslog_facility syslog_level*

指定されたグループに属するイベントが、*syslog_facility* および *syslog_level* の値に基づいて、リモート・ログに記録されることができます。remote event コマンド を参照してください。

range *subsystemname first_event_number last_event_number syslog_facility syslog_level*

ELS 監視コマンド (Talk 5)

ただし、*first_event_number* は、指定されたイベント範囲の最初のイベントの番号であり、*last_event_number* は、指定されたイベント範囲の最後のイベントの番号です。

指定したサブシステムの指定した範囲のイベントが、*syslog_facility* および *syslog_level* に基づいて、リモート・ログに記録されます。191ページの `remote event` コマンド を参照してください。

例：

```
remote range gw 19 22 log_user log_info
```

イベント `gw.19`、`gw.20`、`gw.21`、および `gw.22` が、*syslog_facility* 値 `log_user` および *syslog_level* 値 `log_info` によって指定されたファイルのリモート・ログに記録されます。

subsystem *subsystem.name message_level syslog_facility syslog_level*

ただし、*subsystem.name* は、サブシステムの名前であり、*message_level* は、サブシステム内で選択されたメッセージのレベルです。

message_level が指定した *message_level* に一致する、指定した *subsystem.name* 内のイベントが、*syslog_facility* および *syslog_level* の値に基づいて、リモート・ログに記録されます。191ページの `remote event` コマンド を参照してください。

Message_level は、『ALL』、『ERROR』、『INFO』、または『TRACE』などのような値です。140ページの『ログ・レベル』 を参照してください。

remote コマンドで指定する値は、サブシステム内で特定のイベントに対して符号化されている値と一致する必要があります。これが一致しない場合は、サブシステム内のそのイベントはリモート・ログに記録されません。

例：

```
remote subsystem TKR all log_user log_info
```

上の例では、サブシステム `TKR` 内のメッセージはすべて (『all』には、『error』、『info』、または『trace』に関して符号化されたメッセージもすべて含まれる) が、リモート・ホストで `log_user` および `log_info` によって指定されたファイルのリモート・ログに記録されます。

remote および **noremote** コマンドを用いた設定を検証する場合は、**list event** および **list active** コマンドを使用します。

Remove

remove コマンドは、保管されている情報を消去して、メモリーを解放するのに使用します。以前に **save** コマンドを使用して現行構成を保管した場合、**remove** を使用すると、保管した構成を消去することができます。

構文：

remove

Restore

restore コマンドは、すべての現行設定値 (カウンターを除く) をクリアし、初期 ELS 構成を再ロードするのに使用します。現行設定値を保存する場合は、初期構成に復元する前に **save** コマンドを使用します。

構文 :

restore

Retrieve

retrieve コマンドは、保管された ELS 構成を再ロードするのに使用します。以前に **save** コマンドを使用して現行構成を保管した場合、**retrieve** を使用してそれを再ロードします。**Retrieve** を実行しても、保管された構成は消去されません。保管された構成を消去するには、**remove** コマンドを使用します。

構文 :

retrieve

Save

save コマンドは、現行構成 (カウンターを除く) を保管するのに使用します。**Save** は、デフォルト構成 (構成コマンドを用いて設定した構成) には影響を与えません。監視コマンドを用いて構成を変更した後に **save** を使用するのは、リスタート後もこの構成を保存したい場合です。保管された構成は、一度に 1 つしか存在できません。保管された構成を再ロードするには、**retrieve** コマンドを使用します。

構文 :

save

Set

set コマンドは、1 秒当たりの最大トラップ数の設定、タイム・スタンプ機能の設定、またはトレース・オプションの設定に使用します。

構文 :

```
set                pin . . .
                   _remote-logging . . .
                   _timestamp . . .
                   trace . . .
```

pin ピン・パラメーターを秒単位で送信できるトラップの最大数に設定するには、**set pin** コマンドを使用します。内部で、ピンは 10 分の 1 秒ごとにリセットされます。(10 分の 1 の数 (*max_traps*) が、10 分の 1 秒ごとに送信されます。)

remote-logging

set remote-logging コマンドは、リモート・ログ・オプションを構成する場

ELS 監視コマンド (Talk 5)

合に使用します。これらのオプションを監視環境で構成すると、変更は即時に有効となり、装置をリブートすると、以前構成されていた設定値に戻ります。

構文：

```
set remote-logging      on
                           off
                           facility . . .
                           level . . .
                           local_id
                           remote_ip_addr . . .
                           source_ip_addr ...
```

on リモート・ログ記録がオンになります。これでリモート・ログ記録が使用可能になったので、**remote** コマンドで選択されたメッセージは、いずれもログに記録することができます。

off リモート・ログ記録がオフになります。**remote** コマンドで選択されたメッセージは、すべてログに記録されなくなります。

facility

メッセージのログ記録先を決める場合に、リモート・ワークステーションの SYSLOG デーモンが、*level* 値と組み合わせて使用する値を指定します。**remote** コマンドを用いて特定の ELS イベント、範囲、グループ、またはサブシステムに関して別の値を指定しない限り、リモート・ログに記録されるメッセージのすべてでこの値が使用されます。

SYSLOG 機能の値として指定できる値をすべて下に挙げておきます。

```
log_auth
log_authpriv
log_cron
log_daemon
log_kern
log_lpr
log_mail
log_news
log_syslog
log_user
log_uucp
log_local0-7
```

level メッセージのログ記録先を決める場合に、リモート・ワークステーションの SYSLOG デーモンが、*facility* 値と一緒に使用する値を指定します。**remote** コマンドを用いて特定の ELS イベント、範囲、

ELS 監視コマンド (Talk 5)

グループ、またはサブシステムに関して別の値を指定しない限り、リモート・ログに記録されるメッセージのすべてでこの値が使用されます。

SYSLOG レベルの値として指定できる値をすべて下に挙げておきます。

```
log_emerg
log_alert
log_crit
log_err
log_warning
log_notice
log_info
log_debug
```

local_id

リモート・ログ記録メッセージ内に現れ、特定のメッセージのログ記録先マシンを識別するのに使用できる、1 ~ 32 文字の識別子を指定します。

remote_ip_addr

ログ・ファイルが常駐するリモート・ホストの IP アドレスです。

source_ip_addr

リモート・ログに記録されるメッセージの発信元マシンの IP アドレスを指定します。

リモート・ログに記録される ELS メッセージに IP アドレスまたはホスト名が示されるときは、識別を容易にするために 2216 内で構成されている IP アドレスを使用する必要があります。また、この IP アドレスがネーム・サーバーによって即時にホスト名に解決されるかどうか、または少なくともネーム・サーバーが『address not found』によって即時に応答するかどうか検証する必要もあります。

IP アドレスの解決が適正に行われるかどうか判断するには、ワークステーションで次に示すように **host** コマンドを入力します。

```
workstation>host 5.1.1.1
host: address 5.1.1.1 NOT FOUND
workstation>
```

応答にかかる時間が 1 秒を超える場合は、より迅速に解決する IP アドレスを選択します。

timestamp

メッセージ・タイム・スタンプをオンにして、時刻またはアップタイム (日付はなく、ルーターの最後の初期化以降の時間、分、および秒数) が、各メッセージの横に表示したり、あるいはメッセージ・タイム・スタンプをオフにしたりすることができます。

注: タイム・スタンプをオンにする場合は、CONFIG プロセスに戻り、time コマンドを使用してルーターの日付と時刻を設定することを忘れないようにしてください。そうしないと、すべてのメッセージに 00:00:00 が表示

ELS 監視コマンド (Talk 5)

されるか、時間、分、または秒数 (あるいは、その全部) に負数が表示される (たとえば、00:-4:-5) ことになります。

set timestamp コマンドを使用して、以下のタイム・スタンプ・オプションの 1 つを使用可能にします。

timeofday

1 日 24 時間での発生時刻を示す HH:MM:SS プレフィックスを、各メッセージに追加します。

uptime

ルーターのアップタイムの 100 時間周期における発生時刻を示す HH:MM:SS プレフィックスを、各メッセージに追加します。アップタイム 100 時間後に、アップタイム・カウンタはゼロに戻り、別の 100 時間周期を開始します

off ELS タイム・スタンプ・プレフィックスをオフにします。

構文 :

set timestamp [timeofday または uptime または off]

trace トレース・オプションを構成するには、**set trace** コマンドを使用します。トレース・オプションを監視環境で構成すると、変更は即時に有効となり、装置をリポートすると、以前構成されていた設定値に戻ります。

構文 :

set trace decode . . .
default-bytes-per-pkt . . .
disk-shadowing . . .
max-bytes-per-pkt . . .
memory-trace-buffer-size . . .
off
on
reset
stop-event . . .
wrap-mode . . .

decode [off または on]

パケットの復号をオンまたはオフにします。パケット復号は、すべてのコンポーネントによってサポートされているとは限りません。

default-bytes-per-pkt bytes

デフォルトのトレースされるバイト数を設定します。トレースを行うコンポーネントによって値が指定されない場合、この値が使用されます。

disk-shadowing [[off または on] または [delete-file または record-size または time-limit]]

シャドー・ディスクをオンまたはオフにする、最大トレース・ファイル・サイズを設定する、またはシャドー・ディスク・トレースの最大時間を設定します。

[off または on]

シャドー・ディスクをオンまたはオフにします。シャドー・ディスクが使用可能になっている場合は、トレース・レコードがハード・ディスクにコピーされます。トレース・レコードは、ハード・ディスクにコピーされてしまうと、モニターで表示させて見ることはできなくなります。

注: WRITE、TFTP software、RETRIEVE system dump、または COPY software コマンドを出すときは、必ずシャドー・ディスクをオフに設定しておく必要があります。

シャドー・ディスクをオンまたはオフにしたり、最大トレース・ファイル・サイズを設定したりします。シャドー・ディスクが使用可能になっている場合は、トレース・レコードがハード・ディスクにコピーされます。トレース・レコードは、ハード・ディスクにコピーされてしまうと、モニターに表示させて見ることはできなくなります。

record-size bytes

トレース・ファイル・レコードのレコード・サイズを設定します。

有効値 : 1024、2048、または 4096 バイト

デフォルト値: 2048 バイト

注:

1. トレース・ファイルがすでに存在する場合は、『Cannot change Record Size without first deleting the existing Trace File』が表示され、レコード・サイズは変更されません。
2. レコード・サイズを構成したが、トレース・ファイルがすでに存在している場合、トレースは既存のファイルのレコード・サイズを使用します。

delete-file

トレース・ファイル (アクティブ・バンクのみに関連するサブディレクトリー内の) を削除します。

注: コマンドが出されたときにシャドー・ディスクが ON の場合、『Disk-shadowing must be set to OFF before trace file can be deleted』が表示され、ファイルは削除されません。

time-limit hours

トレースのシャドー・ディスクの最大時間を設定します。

有効値 :

1 ~ 72 時間

ELS 監視コマンド (Talk 5)

デフォルト値

24 時間

注: この時間が経過すると、シャドー・ディスクは停止します (トレースは続行されます)。 シャドー・ディスクが再びオンにされると、実際の時間は 0 にリセットされます。

max-bytes-per-pkt *bytes*

各パケットごとに、トレースされる最大バイト数を設定します。

memory-trace-buffer-size *bytes*

RAM トレース・バッファのサイズをバイト数で設定します。

有効値 : 0、 $\geq 10,000$

デフォルト値: 0

off パケット・トレースを使用不可にします。

on パケット・トレースを使用可能にします。

reset トレース・バッファをクリアし、すべての関連のカウンターをリセットします。

stop-event *event id*

イベント (event id) が発生したときにトレースを停止します。 ELS イベント ID (たとえば、TCP.013) または 『None』 を入力します。

『None』 がデフォルトです。 特定の ELS イベントの表示が使用可能にされている場合にのみ、トレースは停止します。

stop-event が発生すると、トレース・バッファにエントリーが書き込まれます。 このトレース・エントリーに対して **view** コマンドを出すと、『Tracing stopped due to ELS Event Id: TCP.013』が表示されます。

stop-event のためにトレースが停止した後は、**set trace on** コマンドを使用して、トレースを再び使用可能にする必要があります。(ELS Config> プロンプトからトレースが使用可能にされている場合は、リスタートしても、トレースは再び使用可能になります。)

例 :

```
set trace stop-event TCP.013
```

wrap-mode *off/on*

トレース・バッファ折り返しモードをオンまたはオフにします。 折り返しモードが使用可能のときにトレース・バッファがいっぱいの場合、トレースを継続するのに必要なため、前のトレース・レコードが新しいトレース・レコードによって上書きされます。

Statistics

statistics コマンドは、すべての利用可能なサブシステムとそれらの統計を表示するのに使用します。

ELS 監視コマンド (Talk 5)

注: 下記の例は、ユーザーのディスプレイとは正確に一致しない場合があります。
コマンドの出力は、導入されているソフトウェアのバージョンおよびリリースによって異なります。

構文 :

statistics

例 :

statistics

Subsys	Vector	Exist	String	Active	Heap
GW	105	101	3411	0	0
FLT	20	7	184	0	0
BRS	50	5	201	0	0
ARP	150	142	7030	0	0
IP	100	100	2463	2	20
ICMP	30	21	529	0	0
TCP	60	57	2420	0	0
UDP	10	6	179	0	0
BTP	40	13	695	0	0
RIP	30	22	474	0	0
OSPF	80	73	2859	0	0
MSPF	40	17	593	0	0
TFTP	35	29	819	0	0
SNMP	30	28	821	0	0
DVM	30	21	589	0	0
DN	140	115	5842	0	0
XN	35	21	780	0	0
IPX	110	110	4705	0	0
CLNP	80	58	1763	0	0
ESIS	40	24	716	0	0
ISIS	80	58	2422	0	0
DNAV	50	26	1314	0	0
AP2	80	70	1755	0	0
ZIP2	60	51	1859	0	0
R2MP	50	38	1185	0	0
VIN	90	79	3159	0	0
SRT	120	94	5040	0	0
STP	60	32	1590	0	0
BR	50	30	1616	0	0
SRLY	30	28	1409	0	0
ETH	60	47	1098	0	0
SL	50	35	584	0	0
TKR	60	45	2031	0	0
X25	70	53	1909	0	0
FDDI	30	27	1155	0	0
SDLC	100	95	4263	0	0
FRL	130	97	6068	0	0
PPP	190	186	6394	0	0
X251	50	16	546	0	0
X252	50	34	996	0	0
X253	50	42	1649	0	0
ISDN	50	43	1994	0	0
IPPN	20	4	132	0	0
WRS	40	33	1938	0	0
LNM	70	60	3137	0	0
LLC	170	168	9840	0	0
BGP	80	74	2477	0	0
MCF	15	9	244	0	0
DLS	500	497	24340	0	0
V25B	30	28	1058	0	0
BAN	30	29	1223	0	0
COMP	80	26	1050	0	0
NBS	100	50	3029	0	0
ATM	300	216	10808	0	0
LEC	200	174	7258	0	0
APPN	100	28	467	0	0
ILMI	150	23	487	0	0
SAAL	30	26	621	0	0
SVC	30	26	465	0	0
LES	400	361	22333	0	0
LECS	150	145	5666	0	0

ELS 監視コマンド (Talk 5)

EVLOG	1	1	105	0	0
NOT	25	15	508	0	0
NHRP	250	211	8193	0	0
XTP	64	58	2271	0	0
ESC	150	67	3122	0	0
LCS	40	22	858	0	0
LSA	70	61	3506	0	0
MPC	130	30	1677	3	44
SCSP	40	34	1234	0	0
ALLC	50	36	1842	0	0
NDR	50	38	1150	0	0
MLP	100	93	4006	0	0
SEC	50	30	688	0	0
ENCR	100	4	194	0	0
PM	25	6	120	0	0
DGW	20	9	238	0	0
QLLC	55	54	2411	0	0
Total	6490	4942	215805	5	64

Maximum:7976 vector, 155 subsystem
Memory:71784/620 vector+ 81256/217714 data+ 64 heap=371438Subsys

Subsys

サブシステムの名前

Vector

サブシステムの最大サイズ

Exist このサブシステムに定義されているイベントの数

String このサブシステム内でメッセージの保管に使用されるバイト数

Active サブシステム内のアクティブな (表示、トラップ、またはカウントされた) イベントの数

Heap サブシステムにより使用中の動的メモリー

Trace

trace コマンドは、システム・モニターに表示されるトレース・イベントを選択する場合に使用します。このコマンドで得られる機能は、202ページの『Packet-trace 監視コマンド』で説明する **packet trace** コマンドに似ています。

構文：

```
trace                event . . .  
                        group . . .  
                        range . . .  
                        subsystem . . .
```

event *subsystem.event#*

指定したトレース・イベント (*subsystem.event#*) がシステム・モニターに表示されます。

group *groupname*

指定したグループに以前に追加されたトレース・イベントがルーター・モニターに表示できます。

range *subsystemname first_event_number last_event_number*

ELS 監視コマンド (Talk 5)

ただし、*first_event_number* は、指定されたイベント範囲の最初のイベントの番号であり、*last_event_number* は、指定されたイベント範囲の最後のイベントの番号です。

指定したサブシステムの指定した範囲のトレース・イベントがシステム・モニターに表示されます。

例：

```
trace range gw 19 22
```

トレース・イベント gw.19、gw.20、gw.21、および gw.22 がシステム・モニターに表示されます。

subsystem *subsystemname*

指定したサブシステムに関連するトレース・イベントがルーター・モニターに表示できます。

Trap

trap コマンドは、リモート SNMP ネットワーク管理ワークステーションに送信するメッセージを選択するのに使用します。リモート SNMP ネットワーク管理ワークステーションは、SNMP マネージャーとして働くネットワーク内の IP ホストです。

構文：

```
trap                event . . .  
                    group . . .  
                    range . . .  
                    subsystem . . .
```

event *subsystem.event#*

指定されたメッセージ (*subsystem.event#*) が SNMP でネットワーク管理ワークステーションに送信されるようにします。

group *groupname*

指定されたグループに以前に追加されたメッセージが、SNMP トラップでネットワーク管理ワークステーションに送信されるようにします。

range *subsystemname first_event_number last_event_number*

ただし、*first_event_number* は、指定されたイベント範囲の最初のイベントの番号であり、*last_event_number* は、指定されたイベント範囲の最後のイベントの番号です。

指定されたサブシステムの指定された範囲のメッセージが、SNMP トラップでネットワーク管理ワークステーションに送信されるようにします。

例：

```
trap range gw 19 22
```

イベント gw.19、gw.20、gw.21、および gw.22 内のメッセージが、SNMP トラップでネットワーク管理ワークステーションに送信されるようにします。

ELS 監視コマンド (Talk 5)

subsystem *subsystemname*

指定されたサブシステムに関連するメッセージが、SNMP トラップで管理ワークステーションに送信されるようにします。

注: IP、ICMP、ARP、および UDP サブシステムのメッセージは、SNMP トラップで送信することはできません。これらの区域は SNMP トラップを送信する過程で使用されているか、使用される可能性があるからです。これはトラフィックの無限のループを招いて、ルーターに不当な無理を掛けることになります。

View

view コマンドは、トレース・パケットを表示するのに使用します。

構文 :

```
view                current
                    first
                    jump
                    last
                    next
                    prev
                    search ...
```

current

現行のトレース・パケットを表示します。現行パケットが無効の場合は、トレース・バッファ内の最初のパケットが表示されます。

first トレース・バッファ内の最初のトレース・パケットを表示します。

jump *n*

現行パケットから *n* パケット前または後のトレース・パケットを表示します。

last トレース・バッファ内の最後のトレース・パケットを表示します。

next 次のトレース・パケットを表示します。

prev 直前のトレース・パケットを表示します。

search *hexstring*

指定された 16 進ストリングが入っている、次のトレース・パケットを表示します。

Packet-trace 監視コマンド

ここでは Packet-trace 監視コマンドについて説明します。Packet-trace 監視環境にアクセスすると、ELS Packet Trace> プロンプトで ELS Packet-trace 監視コマンドを入力することができます。

表 19. Packet Trace 監視コマンドの要約

コマンド	機能
? (Help)	このコマンド・レベルで使用可能なコマンドをすべて表示するか、特定の コマンドに関するオプション (ただし、選択可能な場合) をリストします。 12ページの『ヘルプを得る』を参照してください。
Off	パケット・トレースを使用不可にします。
On	パケット・トレースを使用可能にします。メモリー・トレース・バッファ ー・サイズの入力を求めるプロンプトが出ます (前に設定されていない場 合)。
Reset	トレース・バッファをクリアし、すべての関連カウンターをリセットし ます。
Set	トレース・オプションを構成します。
Subsystems	パケット・トレースをサポートするサブシステムのトレースを起動する か、または要約を表示します。
Trace-status	構成および実行時情報を含めて、パケット・トレースの状況に関する情報 を表示します。
View	キャプチャーされたパケット・トレース・バッファをコンソールに表示 する機能を提供します。
Exit	直前のコマンド・レベルに戻ります。13ページの『下位レベル操作環境を 終了する』を参照してください。

Off

off コマンドは、パケット・トレースを使用不可にするのに使用します。

構文 :

off

On

on コマンドは、パケット・トレースを使用可能にするのに使用します。

構文 :

on

Reset

reset コマンドは、トレース・バッファをクリアし、すべての関連カウンターをリ
セットするのに使用します。

構文 :

reset

Set

set コマンドは、トレース・オプションを構成するのに使用します。

構文 :

set

decode

default-bytes-per-pkt

ELS 監視コマンド (Talk 5)

disk-shadowing
max-bytes-per-pkt
memory-trace-buffer-size
stop-event
wrap-mode
exit

set コマンドの説明は、193ページの『Set』を参照してください。

Subsystems

subsystems コマンドは、パケット・トレースをサポートするサブシステムのトレースを起動する場合、または要約を表示させる場合に使用します。

構文：

```
subsystems          atm  
                     lec  
                     summary
```

例：

```
subsystems atm  
Network number? 0  
ATM Interface is selected  
on | off | list [list]? on  
Note that SVC uses VPI = 0, VCI = 5  
and ILMI uses VPI = 0, VCI = 16  
Beginning of VPI range [0]?  
End of VPI range [0]?  
Beginning of VCI range [0]? 16  
End of VCI range [0]? 16  
Tracing event ATM.88: ATM frames
```

例：

```
subsystems lec  
Network number? 1  
ATM Emulated LAN is selected  
on | off | list [list]? on  
Trace which types of frames (data, control, both) [both]?  
Tracing event LEC.11: data frames over ATM Forum LEC: interface 1  
Tracing event LEC.12: control frames over ATM Forum LEC: interface 1  
Note that if the user DISABLEs and TESTs this LEC interface,  
the LEC trace settings from Talk 6 Config will take effect.
```

例：

```
subsystems summary  
Subsystems Being Traced  
  
ATM      net number = 0, VPI Range:    0 -    0  
         VCI Range:    16 -   16  
LEC      net number = 1
```

Trace-Status

trace-status コマンドは、パケット・トレースに関する更新情報を入手するのに使用します。

構文 :

trace-status

例 :

```

trace-status
----- Configuration -----
Trace Status:OFF Wrap Mode:OFF Decode Packets:OFF HD Shadowing:OFF
RAM Trace Buffer Size:0 Maximum Trace Buffer File Size:10000000
Max Packet Bytes Trace:256 Default Packet Bytes Traced:100
Trace File Record Size:2048 Stop Trace Event: None
Maximum Hours to HD Shadow: 24
----- Run-time Status -----
Packets in RAM Trace Buffer:0 Free Trace Buffer Memory:0
Trace Errors:0 First Packet:0 Last Packet:0
Trace Records Stored on HD:0 Trace Buffer File Size:0
HD-Shadowing Time Exceeded? NO
Has Stop Trace Event Occurred? NO
    
```

View

view コマンドは、「キャプチャーされたパケット・トレース・バッファをモニターに表示させて見る」環境に入る場合に使用します。

view コマンドの説明は、202ページの『View』を参照してください。

構文 :

```

view                current
                     first
                     jump
                     last
                     next
                     prev
                     search hexstring
                     exit
    
```

ELS ネット・フィルター監視コマンド

この項では、ELS ネット・フィルターを操作するためのコマンドについて説明します。フィルター環境に入るには、ELS> プロンプトで **filter net** コマンドを入力します。ELS Filter net> プロンプトが表示されたら、監視コマンドを入力します。

表 20. ELS ネット・フィルター監視コマンド

コマンド	機能
? (Help)	このコマンド・レベルで使用可能なコマンドをすべて表示するか、特定のコマンドに関するオプション (ただし、選択可能な場合) をリストします。12ページの『ヘルプを得る』を参照してください。
Create	フィルターを作成し、それに番号を割り当てます。最大 64 のフィルターが使用できます。
Delete	指定されたフィルター番号またはすべてのフィルターを削除します。
Disable	指定されたフィルター番号またはすべてのフィルターを使用不可にします。

ELS 監視コマンド (Talk 5)

表 20. ELS ネット・フィルター監視コマンド (続き)

コマンド	機能
Enable	指定されたフィルター番号またはすべてのフィルターを使用可能にします。
List	指定されたフィルター番号またはすべてのフィルターをリストします。
Exit	直前のコマンド・レベルに戻ります。13ページの『下位レベル操作環境を終了する』を参照してください。

Create

ELS ネット・フィルターを作成する場合は、**create** コマンドを使用します。

構文：

```
create queue event event_name net#_start net#_end  
range event_range net#_start net#_end  
subsystem subsystem_name net#_start net#_end
```

queue フィルターを設定する待ち行列。指定できる有効な待ち行列は、次のとおりです。

- Display
- Trace
- Trap
- Remote

event *event_name* *net#_start* *net#_end*

フィルター処理の対象とするイベントおよびネット番号を指定します。

net#_start と *net#_end* を同じ番号として指定した場合は、単一のネットワーク番号上でフィルター処理します。

コマンド **create trap event GW.009 2 10** では、ネット番号 2 ~ 10 のメッセージ GW.009 のトラップがフィルターに掛けられます。

range *event_range* *net#_start* *net#_end*

フィルター処理の対象とする ELS メッセージおよびネット番号の範囲を指定します。

net#_start と *net#_end* を同じ番号として指定した場合は、単一のネットワーク番号上でフィルター処理します。

コマンド **create remote range ipx 19 22 3 6** では、ネット番号が 3 ~ 6 で、IPX.019 に始まり IPX.022 で終わる IPX メッセージがすべて、フィルター処理されてリモート・ログに記録されます。

subsystem *subsystem_name* *net#_start* *net#_end*

フィルター処理の対象とするサブシステムおよびネット番号を指定します。

net#_start と *net#_end* を同じ番号として指定した場合は、単一のネットワーク番号上でフィルター処理します。

ELS 監視コマンド (Talk 5)

コマンド **create display subsystem ip 1 1** では、IP サブシステムに関する ELS メッセージでネット番号 1 のものがすべて、フィルター処理されて表示されます。それ以外の IP サブシステム・メッセージは、すべて廃棄されず。

Delete

特定の ELS フィルターまたはすべての ELS フィルターを削除する場合は、**delete** コマンドを使用します。

構文：

```
delete                all  
                        filter filter#
```

all 現在構成済みのフィルターをすべて削除します。

filter *filter#*

filter# で指定されたフィルターを削除します。削除したいフィルターの番号は、**list** コマンドを使用して入手します。

Disable

特定の ELS フィルターまたはすべての ELS フィルターを使用不可にする場合は、**disable** コマンドを使用します。

構文：

```
disable              all  
                        filter filter#
```

all 現在構成済みのフィルターをすべて使用不可にします。

filter *filter#*

filter# で指定されたフィルターを使用不可にします。使用不可にしたいフィルターの番号は、**list** コマンドを使用して入手します。

Enable

特定の ELS フィルターまたはすべての ELS フィルターを使用可能にする場合は、**enable** コマンドを使用します。

構文：

```
enable               all  
                        filter filter#
```

all 現在構成済みのフィルターをすべて使用可能にします。

filter *filter#*

filter# で指定されたフィルターを使用可能にします。使用可能にしたいフィルターの番号は、**list** コマンドを使用して入手します。

ELS 監視コマンド (Talk 5)

List

特定の ELS フィルターまたはすべての ELS フィルターをリストさせる場合は、**list** コマンドを使用します。

構文：

```
list                                all  
                                     filter filter#
```

all 現在構成済みのフィルターをすべてリストします。

filter filter#
filter# で指定されたフィルターをリストします。

ELS メッセージ・バッファリング監視コマンド

表21 は、ELS Config Advanced> プロンプトで利用可能なコマンドを説明しています。

表 21. ELS メッセージ・バッファリング監視コマンド

コマンド	機能
? (Help)	このコマンド・レベルで使用可能なコマンドをすべて表示するか、特定のコマンドに関するオプション (ただし、選択可能な場合) をリストします。 12ページの『ヘルプを得る』を参照してください。
Flush	メッセージ・バッファをクリアし、メッセージ・バッファへのログ記録をオフにします。
List	メッセージ・バッファリングの操作設定値を表示します。
Log	メッセージ・バッファに対する選択メッセージのログ記録を使用可能にします。
Nolog	メッセージ・バッファに対する選択メッセージのログ記録をオフにします。
Read-file	ファイルからフォーマット化されたメッセージ・バッファを読み取り、それをコンソールに表示します。
Set	メッセージ・バッファのサイズ、折り返しモード、ログ記録の実行の有無、メッセージ・バッファリングを終了させるイベントの種類、およびイベントによってメッセージ・バッファリングが停止された場合にシステムが実行する事柄を設定します。
Tftp	ELS メッセージ・バッファをリモート・ホストのファイルに送信します。
View	メッセージ・バッファ内のメッセージの全部または特定数を表示します。メッセージのスクロール方法も制御できます。
Write-buffer	ELS メッセージ・バッファをハード・ディスク に書き込みます。バッファはフォーマットされてから書き込まれます。ハード・ディスク のファイル名は常に ELSADV.LOG です。
Exit	直前のコマンド・レベルに戻ります。 13ページの『下位レベル操作環境を終了する』を参照してください。

Flush

flush コマンドは、ログオフを設定して、バッファからメッセージをクリアし、システムが使用する他の用途にバッファ・メモリーを解放するために使用します。

構文：

flush buffer

List

list コマンドは、ELS メッセージ・バッファリング構成をリストするのに使います。

構文 :

list status

例 :

```
ELS Advanced> list status
-----Configuration-----
Logging Status:  OFF      Wrap Mode:  ON      Logging Buffer Size:  8500 Kytes
Stop-Event:     APPN.2    Stop-String:  netdn for intf 6
Additional Stop-Action:  APPN DUMP
-----Run-Time Status-----
Has Stop Condition Occurred ?  YES      Messages currently in buffer:  1222
```

ディスプレイの値を変更するコマンドの説明については、211ページの『Set』を参照してください。

Log

log コマンドはメッセージ・バッファに記録するメッセージを選択するために使います。

構文 :

log event
group
range
subsystem

event *subsystem.event#*

指定されたメッセージ (*subsystem.event#*) が、メッセージ・バッファに記録されるようにします。

group *groupname*

指定したグループに以前に追加されたメッセージがメッセージ・バッファに記録できます。

range *subsystemname first_event_number last_event_number*

ただし、*first_event_number* は、指定されたイベント範囲の最初のイベントの番号であり、*last_event_number* は、指定されたイベント範囲の最後のイベントの番号です。

指定したサブシステムの指定した範囲にあるメッセージがメッセージ・バッファに記録されます。

例 :

```
log range gw 19 22
```

ELS 監視コマンド (Talk 5)

イベント gw.19、gw.20、gw.21、および gw.22 のメッセージがメッセージ・バッファに記録されます。

subsystem *subsystemname*

指定したサブシステムに関連するメッセージが、メッセージ・バッファに記録されるようにします。

Nolog

nolog コマンドは、メッセージ・バッファに記録される定義済みのメッセージ・リストからメッセージを消去するために使用します。

構文：

```
nolog                event
                        group
                        range
                        subsystem
```

event *subsystem.event#*

指定されたメッセージ (*subsystem.event#*) が、メッセージ・バッファに記録されないようにします。

group *groupname*

指定したグループに以前に追加されたメッセージがメッセージ・バッファに記録できないようにします。

range *subsystemname first_event_number last_event_number*

ただし、*first_event_number* は、指定されたイベント範囲の最初のイベントの番号であり、*last_event_number* は、指定されたイベント範囲の最後のイベントの番号です。

指定したサブシステムの指定した範囲にあるメッセージがメッセージ・バッファに記録されないようにします。

例：

```
log range gw 19 22
```

イベント gw.19、gw.20、gw.21、および gw.22 のメッセージがメッセージ・バッファに記録されないようにします。

subsystem *subsystemname*

指定したサブシステムに関連するメッセージが、メッセージ・バッファに記録されないようにします。

Read-file

read-file コマンドは、ハード・ディスク、ELSADV.LOG 上の **write-buffer** コマンドによって作成されたファイルから、フォーマット済み ELS メッセージを読み取るために使用します。

注: このコマンドを入力してハード・ディスク が利用不能の場合、ハード・ディスク が使用不可であることを示すメッセージが出されます。

構文 :

read-file

Set

set コマンドは、構成済み ELS メッセージ・バッファリング・オプションを変更する場合に使用します。

構文 :

```
set                logging [on または off]
                   stop action . . .
                   stop event subsystem.event#
                   stop string text
                   wrap [on または off]
```

logging [*on* または *off*]

メッセージ・バッファリングを行うかどうかを指定します。このコマンドが有効になるのは、**set buffer-size** コマンドを使用してバッファを割り振った後です。デフォルトは *off* です。

stop action [*appn-dump* または *disk-offload* または *none* または *system-dump*]

『stop event』 (および、指定されている場合は 『stop string』) の場合に、システムがとる追加のアクションを指定します。アクションは、次のとおりです。

appn-dump

APPN プロトコルがアクティブの場合、これをダンプする。APPN ダンプは、stop action の結果としてダンプが行われたことを表示します。

disk-offload

バッファのフォーマット済みバージョンを、ハード・ディスク のファイルに書き込む。ファイルがすでに存在する場合は、新規のファイルでそれを置き換えます。そのあとで、**tftp file** 監視コマンドを使用してこのファイルをリモート・ホストに送信することができます。

none ログ記録のあとでその他のアクションは実行されない。

system-dump

システム全体をダンプする。system dump は、stop action の結果としてダンプが行われたことを表示します。

デフォルト値 : none

stop event [*subsystem.event#* または *none*]

ログ記録を停止するイベント (*subsystem.event#*) を指定します。stop string を指定した場合は、stop string 内のテキストも一致している必要があります。stop event の場合、以下が行われます。

1. 次の 5 つの ELS メッセージが記録される。
2. ログ記録が停止する。

ELS 監視コマンド (Talk 5)

3. システムは指定された 『stop action』 を実行する。

次に **set logging on** コマンドを出すか、ルーターをリブートするまで、ログ記録は停止したままです。

コマンドを入力するときに **stop event** を指定しないと、システムは **stop event** の入力をプロンプト指示します。**none** を指定すれば、**stop event** 機能は使用不可になります。

デフォルト値 : none

stop string *text* または **none**

ログ記録を停止するための 『stop event』 とともに使用されるストリングを指定します。**stop event** を指定しなかった場合、システムは 『stop string』 を無視します。

Text は、最大 32 文字長の任意の ASCII ストリングが使用できます。*text* を指定しないでコマンドを入力すると、システムはストリングの入力をプロンプト指示します。**none** を入力すると、『stop string』 はクリアされます。

デフォルト値 : none

wrap [**on** または **off**]

バッファがフルのときにログを停止するか (off)、それともバッファの先頭から新規のメッセージを記録するか (on) を指定します。

デフォルト値 : off

Tftp

tftp コマンドは、ELS メッセージ・バッファをフォーマット済みファイルとしてリモート・ホストに送信するために使用します。

構文 :

```
tftp                buffer [formatted ] dest_ip_address dest_filename  
                   file dest_ip_address dest_filename
```

buffer [formatted] *dest_ip_address dest_filename*

ELS メッセージ・バッファが、*dest_ip_address* により指定されたりリモート・ホストに、ファイル *dest_filename* として送信されることを指定します。バッファもフォーマット化できます。

View

view コマンドは、メッセージ・バッファ内のすべてのメッセージまたは特定数のメッセージを表示するために使用します。

構文 :

```
view                all [scroll/noscroll]  
                   last [scroll/noscroll number]
```

all *scroll/noscroll*

メッセージ・バッファ内のすべてのメッセージを表示します。

[scroll]

スペース・バーをヒットするまでは画面を一時停止するように指定します。

注: 大量のメッセージを表示する場合は、`scroll` を指定してください。そうすると、重要なメッセージを見逃すことはありません。

noscroll

メッセージ数が画面長さを超えた場合、画面移動してメッセージを表示するよう指定します。

last scroll/noscroll number

メッセージ・バッファ内の最終番号 メッセージを表示します。

[scroll]

画面全体にメッセージを表示した後に画面を停止させ、ユーザーがスペース・バーをヒットして次の画面を開くのを待つように指定します。

注: 大量のメッセージを表示する場合は、`scroll` を指定してください。そうすると、重要なメッセージを見逃すことはありません。

noscroll

バッファ内のすべてのメッセージ (または要求された最終番号メッセージ) を表示し終えるまで、スクロール制御を使用せずにメッセージが連続して画面移動するよう指定します。

number

メッセージ・バッファ内の メッセージの 1 から全数までのメッセージ数を指定します。バッファ内のメッセージの全数を表示するには、**list status** 監視コマンドを使用してください。

Write-buffer

write-buffer コマンドは、フォーマット済み ELS メッセージをハード・ディスク に書き込むために使用します。

注: このコマンドを入力してハード・ディスク が利用不能の場合、ハード・ディスク が使用不可であることを示すメッセージが出されます。

構文 :

write-buffer

ELS 監視コマンド (Talk 5)

第14章 性能の構成と監視

この章では、性能の構成および監視コマンドの使用法について説明します。この章は以下の節に分かれています。

- 『性能についての概説』
- 『パフォーマンス報告の正確度』
- 216ページの『性能構成環境へのアクセス』
- 216ページの『性能構成コマンド』
- 217ページの『性能監視環境へのアクセス』
- 217ページの『性能監視コマンド』

性能についての概説

性能を構成すると、CPU の負荷を監視することができます。アイドル状態 (作業負荷がない状態) では、性能は、ルーターが外部インターフェースの管理の一部として実行する動作を反映します。アイドル状態で記録される CPU 負荷は、以下によって左右されます。

- 稼働するプロトコルの数
- 導入されているインターフェース / カードの数
- 導入されているインターフェースのタイプ

性能監視機能は、傾向分析、ボトルネック評価、およびキャパシティー・プランニングのためのツールとして使用することができます。ルーターに関する CPU 使用状況の情報を収集することにより、ネットワーク管理プログラムは以下を監視することができます。

- CPU 負荷対時刻
- CPU 負荷対ネットワーク内のルーターの位置
- CPU 負荷対トラフィック・スループット
- CPU 負荷対ユーザー負荷 (たとえば、TN3270 セッション、ISDN ダイアルイン・クライアント)。

パフォーマンス報告の正確度

2216 が初めてオンラインになったときに性能分析を要求すると、ネットワーク・トラフィックがほとんどないか皆無の初期化状態を反映した値しか分からないので、ネットワーク負荷のバランスにはあまり役立ちません。

最善の方法は、運用を開始してから約 2 分後に、通常の負荷のもとで生成された性能報告を使用することです。

性能構成環境へのアクセス

性能モニター構成プロセスにアクセスする場合は、以下の手順を使用します。

1. OPCON プロンプトで、**talk 6** を入力する。(このコマンドの詳細については、65ページの『第8章 構成プロセス (CONFIG - Talk 6) とコマンド』を参照してください。) 下に例を挙げます。

```
* talk 6
Config>
```

talk 6 コマンドを入力すると、端末に CONFIG プロンプト (Config>) が表示されます。最初に構成に入ったときにプロンプトが表示されない場合は **Return** をもう一度押してください。

2. CONFIG プロンプトで **perf** コマンドを入力する。これで PERF Config> プロンプトが表示されます。

性能構成コマンド

性能を構成する場合は、PERF Config> プロンプトでコマンドを入力します。

表 22. PERF 構成コマンドの要約

コマンド	機能
? (Help)	このコマンド・レベルで使用可能なコマンドをすべて表示するか、特定のコマンドに関するオプション (ただし、選択可能な場合) をリストします。12ページの『ヘルプを得る』を参照してください。
Disable	CPU 使用状況統計の収集または Talk 2 ELS モニター出力を使用不可にします。
Enable	CPU 使用状況統計の収集または Talk 2 ELS モニター出力を使用可能にします。
List	構成をリストします。
Set	報告期間を設定します。
Exit	直前のコマンド・レベルに戻ります。13ページの『下位レベル操作環境を終了する』を参照してください。

Disable

disable コマンドは、CPU 使用状況統計を使用不可にする場合、および talk 2 ELS モニター出力を使用不可にする場合に使用します。

構文：

```
disable                cpu statistics
                        t2 output
```

Enable

enable コマンドは、CPU 使用状況統計を使用可能にする場合、および talk 2 ELS モニター出力を使用可能にする場合に使用します。

構文：

```
enable                 cpu statistics
```

t2 output

List

list コマンドは、性能モニター構成を表示させる場合に使用します。

構文：

list

Set

set コマンドは、報告期間を設定する場合に使用します。

構文：

set *time*

time 短ウィンドウ時間を指定します。

有効値：2 ～ 30 秒

デフォルト値：2

性能監視環境へのアクセス

性能監視コマンドにアクセスする場合は、以下の手順に従います。このプロセスでは、性能 監視 プロセスにアクセスすることができます。

1. OPCON プロンプトで、**talk 5** を入力する。(このコマンドの詳細については、117ページの『第10章 操作/監視プロセス (GWCON - Talk 5) とコマンド』を参照してください。) 下に例を挙げます。

```
* talk 5
+
```

talk 5 コマンドを入力すると、端末に GWCON プロンプト (+) が表示されます。最初に構成に入ったときにプロンプトが表示されない場合は **Return** をもう一度押してください。

2. + プロンプトで **perf** コマンドを入力する。これで PERF Console> プロンプトが表示されます。

例：

```
+ perf
PERF Console>
```

性能監視コマンド

この節では性能監視コマンドについて説明します。

表 23. PERF 監視コマンドの要約

コマンド	機能
? (Help)	このコマンド・レベルで使用可能なコマンドをすべて表示するか、特定のコマンドに関するオプション (ただし、選択可能な場合) をリストします。 12ページの『ヘルプを得る』を参照してください。

性能監視コマンド

表 23. *PERF* 監視コマンドの要約 (続き)

コマンド	機能
Clear	Clear the CPU 高水準使用状況統計をクリアし、報告期間を新規サイクルにリセットします。
Disable	CPU 使用状況統計の収集または Talk 2 ELS モニター出力を使用不可にします。
Enable	CPU 使用状況統計の収集または Talk 2 ELS モニター出力を使用可能にします。
List	構成をリストします。
Report	性能統計の報告書を表示します。
Set	報告期間を設定します。
Exit	直前のコマンド・レベルに戻ります。 13ページの『下位レベル操作環境を終了する』を参照してください。

Disable

disable コマンドは、CPU 使用状況統計を使用不可にする場合、および talk 2 ELS モニター出力を使用不可にする場合に使用します。

構文 :

```
disable                cpu statistics
                        t2 output
```

Enable

enable コマンドは、CPU 使用状況統計を使用可能にする場合、および talk 2 ELS モニター出力を使用可能にする場合に使用します。

構文 :

```
enable                 cpu statistics
                        t2 output
```

List

list コマンドは、性能モニター構成を表示させる場合に使用します。

構文 :

```
list
```

Report

report コマンドは、性能モニター統計を表示させる場合に使用します。

構文 :

```
report
```

例 :

```
PERF Console>report
-----
KEY:  SW = Short Window = 9 seconds
```

KEY: LW = Long Window = 9.0 minutes (60 x SW)

```

CPU UTIL :  Most recent SW           = 38%
             Most recent LW         = 33%
             Highest for all SW's    = 92%
             Highest for all LW's    = 52%
             % of time cpu util (SW) was > 60% = 16%
             % of time cpu util (SW) was > 70% = 15%
             % of time cpu util (SW) was > 80% = 1%
             % of time cpu util (SW) was > 90% = 0%
             % of time cpu util (SW) was > 95% = 0%
-----

```

Set

set コマンドは、報告期間を設定する場合に使用します。

構文 :

```
set time
```

time 短ウィンドウ時間を指定します。

有効値 : 2 ~ 30 秒

デフォルト値 : 2

性能監視コマンド

第3部 インターフェースの概要と構成と操作

第15章 ネットワーク・インターフェースの使用開始

この章では、ルーターによってサポートされるネットワーク・インターフェースおよびリンク・レイヤー・プロトコルの構成と監視の方法について説明します。この章の目的は、いくつかの基本的な構成と監視に関するガイドラインを示すことです。また、**GWCON interface** コマンドを用いてインターフェースを監視するのに必要な基本的な手順および情報も提供します。この章は以下の節に分かれています。

- 『先に進む前に』
- 『ネットワーク・インターフェースと GWCON インターフェース・コマンド』
- 『ネットワーク・インターフェースの構成プロセスおよびコンソール・プロセスへのアクセス』
- 224ページの『リンク・レイヤー・プロトコルの構成プロセスおよびコンソール・プロセスへのアクセス』
- 224ページの『予備インターフェースの定義』

先に進む前に

先に進む前に、ネットワーク・インターフェース構成プロセスにアクセスするのに必要な手順を十分に理解しておいてください。

これらの手順についての詳しい情報は、本章の以下の節を参照してください。

ネットワーク・インターフェースと GWCON インターフェース・コマンド

ネットワーク・インターフェースの構成時に、特定のインターフェースについての特定の情報を表示することが必要になる場合があります。一部のインターフェースは、それぞれ独自の監視用コンソール・プロセスを備えています。GWCON 環境から **interface** コマンドを使用すると、ルーターはすべての 導入済みネットワーク・インターフェースの統計を表示します。(126ページの『Interface』を参照してください。)

ネットワーク・インターフェースの構成プロセスおよびコンソール・プロセスへのアクセス

以下に示す参照個所には、背景情報と、インターフェースの構成プロンプトおよびコンソール・プロンプトにアクセスする方法の例が示されています。

インターフェースの構成プロセスおよびコンソール・プロセスへのアクセスに関する詳しい情報は、19ページの『ネットワーク・インターフェースの構成および操作プロセスへのアクセス』、19ページの『ネットワーク・インターフェース構成プロセスへのアクセス』、および 23ページの『ネットワーク・インターフェース・コンソール・プロセスへのアクセス』を参照してください。これらのプロセスにアクセスす

ネットワーク・インターフェースの使用開始

ると、ルーターで使用されているネットワーク・インターフェースのソフトウェア構成可能パラメーターの変更や監視を行うことができます。

リンク・レイヤー・プロトコルの構成プロセスおよびコンソール・プロセスへのアクセス

プロトコルの構成プロセスおよびコンソール・プロセスへのアクセスについての詳しい情報は、3ページの『第1章 はじめに』を参照してください。これらのプロセスにアクセスすると、ルーターによってサポートされているリンク・レイヤー・プロトコルの構成可能パラメーターの変更や監視を行うことができます。

予備インターフェースの定義

装置上に現在は存在していないインターフェースを定義することが必要になる場合があります。装置のこの**動的再構成**は、装置を構成する際に予備インターフェースを定義しておき、装置が存在するようになったときに、コンソール・プロセスを使用して起動する方法で行います。詳しくは、68ページの『予備インターフェースの構成』および118ページの『Activate』を参照してください。

第16章 IEEE 802.5 トークンリング・ネットワーク・インターフェースの構成

この章では、トークンリング・インターフェースの構成およびオペレーショナル・コマンドについて説明します。この章は以下の節に分かれています。

- 『トークンリング・インターフェース構成プロセスへのアクセス』
- 『トークンリング構成コマンド』
- 229ページの『インターフェース監視プロセスへのアクセス』
- 229ページの『トークンリング・インターフェース監視コマンド』
- 231ページの『トークンリング・インターフェースと GWCON インターフェース・コマンド』

トークンリング・インターフェース構成プロセスへのアクセス

TKR config> プロンプトを表示するには、network コマンドに続けて、トークンリング・インターフェースのインターフェース番号を入力します。下に例を挙げます。

```
Config>network 0
Token-Ring interface configuration
TKR Config>
```

Config> プロンプトで、**list devices** コマンドを使用すると、ルーター上に構成されているインターフェース番号のリストが表示されます。

注: パラメーターを変更した場合は、必ずルーターをリスタートして、その変更を有効にする必要があります。

トークンリング構成コマンド

この節ではトークンリング構成コマンドについて説明します。コマンドは TKR config> プロンプトで入力します。表24 にトークンリング構成コマンドがリストしてあります。

表 24. トークンリング構成コマンドの要約

コマンド	機能
? (Help)	このコマンド・レベルで使用可能なコマンドをすべて表示するか、特定のコマンドに関するオプション (ただし、選択可能な場合) をリストします。12ページの『ヘルプを得る』を参照してください。
List	選択されたトークンリング・インターフェース構成を表示します。
LLC	LLC 構成環境およびサブコマンドにアクセスします。
Media	媒体タイプを shielded (シールド付き) または unshielded (シールドなし) として設定します。
Packet-size	すべてのトークンリング・ネットワークについて、パケット・サイズのデフォルト値を変更します。
Set	RIF キャッシュおよび物理 (MAC) アドレスのエージング・タイマーを設定します。

トークンリング・ネットワーク・インターフェースの構成

表 24. トークンリング構成コマンドの要約 (続き)

コマンド	機能
Source-routing	インターフェース上のソース・ルーティングを使用可能または使用不可にします。
Speed	インターフェースの速度を Mbps 単位で設定します。
Exit	直前のコマンド・レベルに戻ります。13ページの『下位レベル操作環境を終了する』を参照してください。

List

list コマンドは、トークンリング・インターフェースの現行構成を表示させる場合に使用します。

注: MAC アドレスが 0 のときは、デフォルト端末アドレスが使用されます。

構文 :

list

例 :

```
list
Token-Ring configuration:

    Packet size (INFO field): 2052
Speed:                        16 Mb/sec
Media:                        Shielded

RIF Aging Timer:             120
Source Routing:               Enabled
MAC Address:                   000000000000
```

Packet size

トークンリング・パケットのサイズ

Speed ネットワークの速度

Media ネットワークが使用する媒体のタイプ (シールド付きまたはシールドなし)

RIF Aging Timer

ルーティング情報フィールド (RIF) に入っている情報をルーターが保持する時間の長さ

Source Routing

ソース・ルーティング・フィーチャーの状態 (使用可能または使用不可)

MAC Address

set physical-address コマンドを用いて設定された構成済み MAC アドレス。ゼロばかり (オール 0) が表示された場合は、MAC アドレスはデフォルトのアドレスです。

LLC

llc コマンドは、LLC 構成環境にアクセスする場合に使用します。各コマンドについての説明は、255ページの『LLC 構成コマンド』を参照してください。

構文 :

llc

トークンリング・ネットワーク・インターフェースの構成

注: ルーター・ソフトウェア・ロードに APPN が含まれていない場合、このコマンドを使用しようとすると、次のようなメッセージを受け取ります。

```
LLC configuration is not available for this network.
```

LLC 構成環境は、ソフトウェア・ロードに APPN が含まれている場合にのみ利用可能です。

Media

media コマンドは、ネットワークの媒体タイプを変更する場合に使用します。デフォルトの媒体タイプは STP ケーブルです。有効な媒体タイプ値は、シールド付き (shielded) とシールドなし (unshielded) です。 **media** コマンドの後に *media-type* を入力します。

構文 :

```
media media-type
```

例 :

```
media unshielded
```

Packet-Size

packet-size コマンドは、すべてのトークンリング・ネットワークの最大パケット・サイズを変更する場合に使用します。 **packet-size** コマンドの後に、必要なバイト数を入力します。

構文 :

```
packet-size bytes
```

表 25. トークンリング 4/16 の有効なパケット・サイズ

ネットワーク・データ速度	値 (バイト数)
4 Mbps	516 ~ 4498 注: 4 Mb TR の場合に 4498 より大きい値を定義すると、ソフトウェアがそれを 4498 に設定します。ユーザーが値を指定しなかった場合は、デフォルト値は 2052 です。
16 Mbps	516 ~ 18144 注: 値を指定しなかった場合は、デフォルト値は 2052 です。

注: パケット・サイズが大きくなると、バッファのメモリー所要量が増えます。

Set

set コマンドは、ルーティング情報フィールド (RIF) タイマーおよび物理 (MAC) アドレスを設定する場合に使用します。

構文 :

```
set physical-address  
rif-timer
```

トークンリング・ネットワーク・インターフェースの構成

physical-address

トークンリング・インターフェースの MAC サブレイヤー・アドレスにローカル管理アドレスを定義するか、あるいはデフォルトの工場で設定されたステーション・アドレス (オール 0 で示される) を使用するかを指示します。MAC サブレイヤー・アドレスは、トークンリング・インターフェースがフレームの送受信に使用するアドレスです。

注: **Return** を押すと、値はそのままです。 **0** を入力して **Return** を押すと、ルーターは工場設定の端末アドレスを使用します。デフォルトでは、工場設定の端末アドレスを使用します。

有効値: 任意の 12 桁の 16 進アドレス

デフォルト値: 刻印されたアドレス (オール 0 で示されます)

例 :

```
set physical-address
MAC address in 00:00:00:00:00:00 form []?
```

rif-timer

更新される前に RIF 内の情報が維持される最大時間 (秒数) を設定します。デフォルト値は 120 です。

例 :

```
set rif-timer
RIF aging timer value [120]? 120
```

Source-routing

source-routing コマンドは、エンド・ステーションのソース・ルーティングを使用可能または使用不可にする場合に使用します。ソース・ルーティングというのは、エンド・ステーションがソース・ルーティング・ブリッジを経由するのに使用するソース・ルートを決めるプロセスです。ソース・ルーティングにより、IP、IPX、および AppleTalk フェーズ 2 プロトコルは、ソース・ルーティング・ブリッジの反対側のノードに到達することが可能になります。

このスイッチは、このインターフェースが SRT 転送機能を介してソース・ルーティングを提供しているかどうかとは完全に無関係です。デフォルトの設定値は「使用可能」です。

一部のステーションは、ソース・ルーティング RIF をもつフレームを正常に受信できません。これは特に NetWare ドライバーに共通に見られる特徴です。この状態のときは、ソース・ルーティングを使用不可にすれば、これらのステーションと通信できるようになります。

IP、IPX、および AppleTalk フェーズ 2 パケットを通過させたいソース・ルーティング・ブリッジがこのリング上に存在する場合だけ、ソース・ルーティングを使用可能にします。また、LLC テスト応答メッセージを戻すようにしたい場合は、ソース・ルーティングを使用可能にする必要があります。

構文 :

```
source-routing enable
```


disable

Speed

speed コマンドは、データ速度を変更する場合に使用します。デフォルトの速度は 4 Mbps です。**speed** コマンドの後に続けて speed-value (Mbps 単位) を入力します。

構文：

speed *speed-value*

speed-value

トークンリング・インターフェースを設定する対象の速度

有効値：4 または 16 Mbps

デフォルト値：4 Mbps

インターフェース監視プロセスへのアクセス

トークンリング監視プロンプト (TKR>) を表示させるには、**network** コマンドの後に続けてトークンリング・インターフェースのインターフェース番号を入力します。下に例を挙げます。

```
+network 0
TKR>
```

Config> プロンプトで、**list devices** コマンドを使用すると、ルーター上に構成されているインターフェース番号のリストが表示されます。

19ページの『ネットワーク・インターフェース構成プロセスへのアクセス』で説明されている手順に従って、この章で説明するインターフェースに関するインターフェース監視プロセスにアクセスします。必要なインターフェース監視プロセスにアクセスすると、監視コマンドの入力を始めることができます。

トークンリング・インターフェース監視コマンド

この節ではトークンリング監視コマンドについて説明します。コマンドは TKR> 監視プロンプトで入力します。表26 に監視コマンドがリストしてあります。

表 26. トークンリング監視コマンドの要約

コマンド	機能
? (Help)	このコマンド・レベルで使用可能なコマンドをすべて表示するか、特定のコマンドに関するオプション (ただし、選択可能な場合) をリストします。12ページの『ヘルプを得る』を参照してください。
Dump	RIF キャッシュのダンプを表示します。
LLC	LLC 監視プロンプトを表示します。
Exit	直前のコマンド・レベルに戻ります。13ページの『下位レベル操作環境を終了する』を参照してください。

トークンリング・ネットワーク・インターフェースの構成

Dump

ソース・ルーティングが `tkr config>` プロセスで使用可能にされると、**dump** コマンドを使用して、RIF キャッシュの内容のダンプを要求することができます。

構文：

dump

例：

```
dump
MAC address      State      Usage      RIF
0000C90B1A57    ON_RING    Yes        0220
```

MAC address

トークンリング・インターフェースの MAC アドレスを表示します。

State インターフェースの状態の 1 つを表示します。

On_ring - リング上のノードあての RIF が見付かったことを示しています。

Have_route - リモート・リング上のノードあての RIF が見付かったことを示しています。

No_route - 探索フレームが送信され、ルーターが戻りを待っている間、短時間表示されます。

Discovering - RIF を再発見するためにルーターが探索フレームを送信したことを示しています。

St_route - ルートがスパンニング・ツリー探索から入手されたことを示しています。

Usage パケット内で RIF が使用されたことを示します。番号は任意で、機能的な重要性はありません。

RIF RIF を 16 進で示す符号を表示します。

注: RIF が表示されるのは、ソース・ルート・ブリッジングがトークンリング・インターフェース上で使用可能になっている場合だけです。

- NetBIOS RIF データは、次の一連のコマンドを使用して表示することができます。**talk 5、protocol ASRT、name-caching、list cache rifs。**
- データ・リンク交換 RIF データは、次の一連のコマンドを使用して表示することができます。**talk 5、protocol dlsw、list llc2 session all。**

LLC

LLC コマンドは、LLC 監視プロンプトにアクセスする場合に使用します。LLC コマンドは、この新たに表示されたプロンプトで入力します。各コマンドについての説明は、259ページの『LLC 監視コマンド』を参照してください。

構文：

llc

トークンリング・インターフェースと GWCON インターフェース・コマンド

トークンリング・インターフェースには監視を目的とする独自の監視プロセスがありますが、GWCON 環境から **interface** コマンドを使用すると、ルーターでも導入済みネットワーク・インターフェースに関する完全な統計を表示します。

802.5 トークンリング・インターフェースについて表示される統計

GWCON 環境からトークンリング・インターフェースに関して **interface <net#>** コマンドを入力すると、次のような統計が表示されます。

```

Nt Nt' Interface Slot-Port Self-Test Self-Test Maintenance
0 0 TKR/0 Slot: 1 Port: 1 Passed Failed Failed
                                1 0 0

Token-Ring/802.5 MAC/data-link on Token-Ring interface

Physical address      08005AFE0106
Microcode Level      ww19cg
Network speed        16 Mbps
Max packet size (INFO) 2052
Handler state        Ring open
Last Reported Ring status SERR | CO
# times Signal lost  0 # times Beaconing 0
Hard errors          0 Lobe wire faults 0
Auto-removal errors  0 Removes received 0
Ring recovery actions 0

Line errors          0 Burst errors 0
ARI/FCI errors      0 Inputs dropped 0
Frame copy errors   0 Token errors 0
Lost frames         0
Input overflows     0 Driver output errors 0

```

以下は、一般的なインターフェース統計を示しています。

Nt グローバル・インターフェース番号

Nt' ダイヤル回線にのみ該当

Interface

タイプ 『intrfc』 のインターフェース内でのこのインターフェースのインターフェース名と番号

Port ポート番号

Slot スロット番号

Self-Test: Pass

自己テストが正常に行われた回数

Self-Test: Fail

自己テストが正常に行われなかった回数

Maint: Fail

保守障害の回数

以下は、トークンリング・インターフェースに特定して表示される統計を示しています。

Physical address

トークンリング・インターフェースの物理アドレスを示します。

GWCON インターフェース・コマンドの使用

Network speed

インターフェースに接続するトークンリング・ネットワークの速度を示します。ネットワーク速度カウンターには、インターフェースが渡せる 1 秒当たりのパケット数が表示されます。

Max packet size (info)

そのインターフェースに関して構成された最大パケット・サイズを表示します。最大パケット・サイズ・カウンターは、インターフェースが送信または受信できるパケットの最大長さ (バイト数) を表示します。このカウンターはユーザーが定義します。

Handler state

トークンリング・ハンドラーの現在の状態を表示します。ハンドラー状態カウンターには、自己テスト実行後のハンドラーの状態が表示されます。

Last Reported Ring status

トークンリング・インターフェースの最後のリング状態

SIGL SIGNAL_LOSS インターフェースはリング上で信号の損失を検出しました。

HERR HARD_ERROR インターフェースは現在、リンク上でビーコン・フレームを送信中または受信中です。

SERR SOFT_ERROR インターフェースは報告誤り MAC フレームを転送しました。

BEAC TRANSMIT_BEACON インターフェースはリングへ (または、リングからの) ビーコン・フレームを転送中です。

LWF LOBE_WIRE_FAULT インターフェースは、インターフェースとコンセントレーターの間のケーブルで回線の開きまたは短絡を検出しました。インターフェースはクローズされ、初期化後の状態になっています。

ARMV AUTO_REMOVAL_ERROR インターフェースは、ローブ折り返しテストに失敗し (ビーコン自動除去プロセスの結果として)、自動的にリングから除去されました。インターフェースはクローズされ、初期化後の状態になっています。

RMVD REMOVED_RECEIVED インターフェースはリング・ステーション除去 MAC フレーム要求を受信し、自動的にリングから除去されました。インターフェースはクローズされ、初期化後の状態になっています。

CO COUNTER_OVERFLOW 次の誤りカウンターの 1 つが 254 から 255 に増分されました。Line、ARI/FCI、Frame Copy、Lost Frames、Burst、Lobe wire faults、Removes received。このディスプレイは、これらの誤りカウンターを表示します。

SSTA SINGLE_STATION インターフェースは、それがリング上の唯一のステーションであることを検出しました。

RR RING_RECOVERY インターフェースは、リング上でトークン請求 MAC フレームを監視します。インターフェースはトークン請求フレ

GWCON インターフェース・コマンドの使用

ームを送信している可能性があります。この状態は、インターフェースがリング除去フレームを送信するまで残ります。

of times signal lost

信号の損失が原因でルーターがパケットを転送できなかった合計回数を示します。

Hard errors

インターフェースがネットワークとの間でビーコン・フレームを送信または受信する回数を表示します。

Auto-removal errors

ビーコン自動除去プロセスが原因で、インターフェースがローブ折り返しテストに失敗し、ネットワークから除去される回数を表示します。

Ring recovery actions

インターフェースがネットワーク上でトークン請求媒体アクセス制御 (MAC) フレームを検出する回数を表示します。

Line errors

伝送路誤りカウンターは、フレームが繰り返されるかコピーされ、着信フレームのエラー検出標識 (EDI) がゼロになると増分されます。

また、以下の条件の 1 つが存在している必要もあります。

- コード違反のトークンが存在する。
- フレームの開始区切り文字と終了区切り文字の間にコード違反がある。
- フレーム検査シーケンス (FCS) 誤りが発生している。

ARI/FCI errors

ARI/FCI (アドレス認知インディケーター/フレーム・コピー・インディケーター) 誤りカウンターは、インターフェースが次のどちらを受信した場合にも増分します。

ARI/FCI ビットがゼロに等しいアクティブ・モニター存在 (AMP) MAC フレームと、ARI/FCI ビットがゼロに等しいスタンドバイ・モニター存在 (SMP) MAC フレーム。

AMP MAC フレームが介在しない、ARI/FCI ビットがゼロに等しい複数の SMP MAC フレーム。

この誤りは、アップストリーム近隣がフレームをコピーしたが、ARI/FCI ビットを設定できないことを示しています。

Frame copy errors

受信/反復モードにあるインターフェースがその特定アドレスあてのフレームを認知したが、アドレス認知表示 (ARI) ビットがゼロに等しくないことを検出した回数を表示します。この誤りは、伝送路のヒットまたは重複アドレスの可能性のあることを示しています。

Lost frames

インターフェースが送信モード (除去) にあり、送信フレームの終わりの受信に失敗した回数を表示します。

GWCON インターフェース・コマンドの使用

Input overflows

受信されたフレームで、入力バッファ・サイズより大きかったものの数を示します。大き過ぎて 1 つの入力バッファに収まらないフレームは廃棄されます。

times beaconing

インターフェースがネットワークにビーコン・フレームを送信する回数を表示します。

Lobe wire faults

インターフェースが、インターフェースとコンセントレーターの間のケーブルに回線の開きまたは短絡を検出する回数を表示します。

Removes received

インターフェースがリング・ステーション除去 MAC フレーム要求を受信し、ネットワークから除去される回数を表示します。

Burst errors

インターフェースが、開始区切り文字 (SDEL) と終了区切り文字 (EDEL) の間、または EDEL と SDEL の間で、5 回の半ビット期間に変換がなかったことを検出した回数を表示します。

Inputs dropped

反復モードにあるインターフェースが、自身のアドレスあてのフレームを認知したが、利用可能なバッファ・スペースがないためにフレームをコピーできなかった回数を表示します。

Token errors

トークン誤りカウンターは、アクティブ・モニターが以下のいずれかの誤りをもつトークン・プロトコルを検出すると増分されます。

非ゼロの優先順位をもつトークンの MONITOR_COUNT ビットが 1 に等しい。

フレームの MONITOR_COUNT ビットが 1 に等しい。 10-ms ウィンドウ以内にトークンまたはフレームを受信していません。

開始区切り文字/トークンのシーケンスの、コード違反が存在してはならない区域にコード違反がある。

第17章 高速トークンリング・ネットワークの構成と監視

高速トークンリング FasTR では、既存の IBM 2216 ATM アダプターを高速トークンリング・アダプターとして使用します。IP ルーティング、DLSw、APPN、および SRB (ソース・ルート・ブリッジング) がサポートされます。

この章では、FasTR ネットワークの構成および FasTR 用操作コマンドについて説明します。この章は以下の節に分かれています。

- 『FasTR インターフェース構成プロセスへのアクセス』
- 『FasTR 構成コマンド』
- 238ページの『インターフェース監視プロセスへのアクセス』
- 239ページの『FasTR インターフェース監視コマンド』
- 240ページの『FasTR インターフェースと GWCON インターフェース・コマンド』

FasTR インターフェース構成プロセスへのアクセス

FasTR config> プロンプトを表示させる場合は、network コマンドに続けて FasTR インターフェースのインターフェース番号を入力します。たとえば、次のように入力します。

```
Config>network 0
Fast Token-Ring interface configuration
FasTR Config>
```

Config> プロンプトで **list devices** コマンドを使用すると、ルーター上に構成されているインターフェース番号のリストを表示することができます。

注: パラメーターを変更した場合は、必ずルーターをリスタートして、その変更を有効にする必要があります。

FasTR 構成コマンド

この節では FasTR 構成コマンドについて説明します。コマンドは FasTR config> プロンプトで入力します。表27 に FasTR 構成コマンドがリストしてあります。

表 27. FasTR 構成コマンドの要約

コマンド	機能
? (Help)	このコマンド・レベルで使用可能なコマンドをすべて表示するか、特定のコマンドに関するオプション (ただし、選択可能な場合) をリストします。12ページの『ヘルプを得る』を参照してください。
List	選択された FasTR インターフェースの構成を表示します。
LLC	LLC 構成環境およびサブコマンドにアクセスします。
Media	デフォルト値の fiber (ファイバー) になります。入力は許されません。
Packet-size	FasTR ネットワークでの最大パケット・サイズを設定します。
Set	RIF キャッシュおよび物理 (MAC) アドレスのエージング・タイマーを設定します。

FasTR ネットワークの構成

表 27. FasTR 構成コマンドの要約 (続き)

コマンド	機能
Source-routing	インターフェース上のソース・ルーティングを使用可能または使用不可にします。
Speed	デフォルト値の 155 Mbps になります。入力は許されません。
Exit	直前のコマンド・レベルに戻ります。13ページの『下位レベル操作環境を終了する』を参照してください。

List

list コマンドは、FasTR インターフェースの現行構成を表示させる場合に使用します。

注: MAC アドレスが 0 のときは、デフォルト・ステーション・アドレスが使用されます。

構文: `list`

例: `list`

```
Fast Token-Ring configuration:
      Packet size (INFO field): 2052
      Speed:                    155Mbps
      Media:                    Fiber

      RIF Aging Timer:         120
      Source Routing:         Enabled
      MAC Address:            000000000000
```

Packet size	最大 FasTR パケット・サイズ。
Speed	ネットワークの速度で、155Mbps。
Media	ネットワークが使用する媒体のタイプで、fiber (ファイバー)。
RIF Aging Timer	ルーターがルーティング情報フィールド (RIF) に入っている情報を保持する時間の長さ。
Source Routing	ソース・ルーティング・フィーチャーの状態 (使用可能または使用不可)。
MAC Address	set physical-address コマンドを使用して設定された構成済み MAC アドレス。オール 0 が表示された場合、その MAC アドレスはデフォルト・アドレスです。

LLC

LLC コマンドは、LLC 構成環境にアクセスするのに使用します。各コマンドについての説明は、255ページの『LLC 構成コマンド』を参照してください。

構文: `llc`

例: `llc`

```
LLC config>
```

注: ルーター・ソフトウェア・ロードに APPN が含まれていない場合、このコマンドを使用しようとする、次のようなメッセージを受け取ります。

```
LLC configuration is not available for this network.
```

LLC 構成環境は、ソフトウェア・ロードに APPN が含まれている場合にのみ利用可能です。

Media

デフォルトの媒体タイプは fiber (ファイバー) です。 入力は許されません。

Packet-Size

packet-size コマンドは、FasTR ネットワークでの最大パケット・サイズを設定する場合に使用します。 **packet-size** コマンドの後に、必要なバイト数を入力します。

注: パケット・サイズが大きくなれば、バッファのメモリー所要量も増えます。

構文: `packet-size #bytes`

例: `packet-size 4399`

Set

set コマンドは、ルーティング情報フィールド (RIF) タイマーおよび物理 (MAC) アドレスを設定するのに使用します。

構文: **set**

`physical-address`

`rif-timer`

physical-address

FasTR インターフェースの MAC サブレイヤー・アドレスとしてローカル管理アドレスを定義したいのか、デフォルトの工場設定のステーション・アドレス (ゼロばかりで示される) を使用したいのかを指示します。 MAC サブレイヤー・アドレスは、FasTR インターフェースがフレームの送受信に使用するアドレスです。

注: **Return** を押すと、値はそのままです。 **0** を入力して **Return** を押すと、ルーターは工場設定の端末アドレスを使用します。 デフォルトでは、工場設定の端末アドレスを使用します。

有効値: 任意の 12 桁の 16 進アドレス

デフォルト値: 刻印されたアドレス (オール 0 で示されます)

例: `set physical-address`

MAC address in 00:00:00:00:00:00 form []?

rif-timer

更新される前に RIF 内の情報が維持される最大時間 (秒数) を設定します。デフォルト値は 120 です。

例: `set rif-timer`

RIF aging timer value [120]? 120

Source-routing

source-routing コマンドは、エンド・ステーションのソース・ルーティングを使用可能または使用不可にするのに使用します。 ソース・ルーティングというのは、エンド・ステーションがソース・ルーティング・ブリッジを経由するのに使用するソー

FasTR ネットワークの構成

ス・ルートを決めるプロセスです。ソース・ルーティングを使用すると、IP プロトコルはソース・ルーティング・ブリッジの反対側にあるノードに到達することができます。

このスイッチは、このインターフェースが SRT 転送機能を介してソース・ルーティングを提供しているかどうかとは完全に無関係です。デフォルトの設定値は「使用可能」です。

一部のステーションは、ソース・ルーティング RIF をもつフレームを正常に受信できません。これは特に NetWare ドライバーに共通して見られる特徴です。この状態のときは、ソース・ルーティングを使用不可にすれば、これらのステーションと通信できるようになります。

ソース・ルーティングを使用可能にする必要があるのは、ブリッジを通して IP パケットを通過させたいソース・ルーティング・ブリッジがこのリンク上にある場合だけです。また、LLC テスト応答メッセージを戻すようにしたい場合は、ソース・ルーティングを使用可能にする必要があります。

構文: **source-routing**

enable

disable

例: **source-routing enable**

Speed

デフォルトの速度は 155 Mbps です。 入力は許されません。

インターフェース監視プロセスへのアクセス

トークンリング監視プロンプト (TKR>) を表示させる場合は、**network** コマンドの後に続けて FasTR インターフェースのインターフェース番号を入力します。たとえば、次のように入力します。

```
+network 0  
TKR>
```

Config> プロンプトで **list devices** コマンドを使用すると、ルーター上に構成されているインターフェース番号のリストを表示することができます。

223ページの『第15章 ネットワーク・インターフェースの使用開始』で説明されている手順に従って、この章で説明するインターフェースに関するインターフェース監視プロセスにアクセスします。必要なインターフェース監視プロセスにアクセスすると、監視コマンドの入力を始めることができます。

FasTR インターフェース監視コマンド

この節では FasTR 監視コマンドについて説明します。コマンドは TKR> 監視プロンプトで入力します。表28 に監視コマンドがリストしてあります。

表 28. FasTR 監視コマンドの要約

コマンド	機能
? (Help)	このコマンド・レベルで使用可能なコマンドをすべて表示するか、特定のコマンドに関するオプション (ただし、選択可能な場合) をリストします。12ページの『ヘルプを得る』を参照してください。
Dump	RIF キャッシュのダンプを表示します。
LLC	LLC 監視プロンプトを表示します。
Exit	直前のコマンド・レベルに戻ります。13ページの『下位レベル操作環境を終了する』を参照してください。

Dump

ソース・ルーティングが FasTR config> プロセスで使用可能にされると、**dump** コマンドを使用して、RIF キャッシュの内容のダンプを要求することができます。

構文: `dump`

例: `dump`

```
MAC address  State  Usage  RIF
0000C90B1A57  ON_RING  Yes    0220
```

MAC address

FasTR インターフェースの MAC アドレスを表示します。

State

インターフェースの状態の 1 つを表示します。

On_ring - リング上のノードあての RIF が見付かったことを示しています。

Have_route - リモート・リング上のノードあての RIF が見付かったことを示しています。

No_route - 探索フレームが送信され、ルーターが戻りを待っている間、短時間表示されます。

Discovering - RIF を再発見するためにルーターが探索フレームを送信したことを示しています。

St_route - ルートがスパンニング・ツリー探索から入手されたことを示しています。

Usage

パケット内で RIF が使用されたことを示しています。番号は任意であり、機能的には重要な意味はありません。

RIF

RIF を示す符号を 16 進数で表示します。

注: RIF が表示されるのは、ソース・ルート・ブリッジングが FasTR インターフェース上で使用可能になっている場合だけです。

- NetBIOS RIF データは、次のコマンド・シーケンスを使用して表示することができます。 **talk 5, protocol ASRT, name-caching, list cache rifs.**
- データ・リンク交換 RIF データは、次のコマンド・シーケンスを使用して表示することができます。 **talk 5, protocol dlsw, list llc2 session all.**

FasTR ネットワークの構成

LLC

LLC コマンドは、LLC 監視プロンプトにアクセスするのに使用します。LLC コマンドは、この新たに表示されたプロンプトで入力します。各コマンドについての説明は、259ページの『LLC 監視コマンド』を参照してください。

構文: `llc`

例: `llc`

```
LLC user monitoring
LLC>
```

FasTR インターフェースと GWCON インターフェース・コマンド

FasTR インターフェースには監視を目的とする独自の監視プロセスがありますが、GWCON 環境から **interface** コマンドを使用すると、ルーターでも導入済みネットワーク・インターフェースに関する完全な統計を表示します。

FasTR インターフェースに関して表示される統計

GWCON 環境から FasTR インターフェースに関する **interface <net #>** コマンドを入力すると、次のような統計が表示されます。

```
+i 0
Nt Nt' Interface Slot-Port Self-Test Self-Test Maintenance
0 0 TKR/0 Slot: 1 Port: Passed Failed Failed
0 0 0 1 1 0

Token-Ring/802.5 MAC/data-link on Fast Token Ring interface

Physical address 000000019100
Network speed 155 Mbps
Max packet size (INFO) 2052
Handler state Ring open

Hdr Thresh: 0 Bad CRC: 0
Bad Length: 0 Max Len Exc.: 0
Rcv Timeout: 0 Fwd Aborts: 0
Nonzero CPI: 0

Cells Rcvd: 0 NUD Rcvd: 0
NUD Bad CRC: 0 Bad HEC: 0

LCD Events:
AAL0 No Buf: 0 AAL5 No Buf: 0
NUD No Buf: 0
Rx No Sysbuf: 0 Tx No Chrmbf: 0

GPDMA Events:
Tx DMA Error: 0 Rx DMA Error: 0
Buf Overflow: 0 Virt Mem Res: 0
Lost Events: 0 Ill. Events: 0
+
```

以下は、一般的なインターフェース統計を示しています。

Nt	グローバル・インターフェース番号
Nt'	ダイヤル回線にのみ適用
Interface	タイプ "intrfc" のインターフェース内のこのインターフェースのインターフェース名と番号
Slot-Port	スロット番号とポート番号
Self-Test: Pass	自己テストが正常に行われた回数

Self-Test: Fail 自己テストで障害が起きた回数
 Maintenance Failed 保守障害の回数

以下は、FasTR インターフェースに特有のものとして表示される統計の説明です。

Physical address	FasTR インターフェースの物理アドレスを示します。
Network speed	インターフェースに接続する FasTR ネットワークの速度を示します。ネットワーク速度カウンターには、インターフェースが渡せる 1 秒当たりのパケット数が表示されます。
Max packet size (info)	そのインターフェースに関して構成された最大パケット・サイズを表示します。最大パケット・サイズ・カウンターは、インターフェースが送信または受信できるパケットの最大長さ (バイト数) を表示します。このカウンターはユーザーが定義します。
Handler state	FasTR ハンドラーの現在の状態を表示します。ハンドラー状態カウンターには、自己テスト実行後のハンドラーの状態が表示されます。
Hdr Thresh	パケット・ヘッダーのしきい値を超過しました。
Bad CRC	受信したパケットの CRC が無効でした。
Bad Length	受信したパケットの長さが無効でした。
Max Len Exc.	受信したパケットが最大長を超えています。
Rcv Timeout	受信したパケット再組み立てがタイムアウトになっています。
Fwd Aborts	受信したパケットが順方向強制終了で終了しています。
Nonzero CPI	受信したパケットで CPI フィールドがゼロに設定されていません。
Cells Received	受信したのが (パケットではなく) セルでした。
NUD Rcvd	非ユーザー・データ・フィールドを受信しました。
NUD Bad CRC	受信した非ユーザー・データ・フィールドの CRC_10 は無効です。
Bad HEC	受信したセルでヘッダー誤りチェックが無効でした。
LCD Events	
AAL0 No Buf	プール・バッファ不足が原因で AAL0 セルが除去されました。
AAL5 No Buf	プール・バッファ不足が原因で AAL5 セルが除去されました。
NUD No Buf	プール・バッファ不足が原因で非ユーザー・データが除去されました。
Rx No Sysbuf	パケットを受信したが、システム・バッファが使用不能であったため除去されました。
Tx No Chrmbuf	アダプター・バッファが使用不能であったため、送信パケットが除去されました。
GPDMA Events	
Tx DMA Error	送信 DMA に誤りがありました。
Rx DMA Error	受信 DMA に誤りがありました。
Buf Overflow	受信したパケット数が実バッファ・サイズを超えていました。
Virt Mem Res	仮想メモリ資源イベント、仮想メモリへのセルの書き込み。
Lost Events	受信待ち行列がいっぱいであったため、イベントが逸失しました。
Ill. Events	イベントが認識不能でした。

GWCON インターフェース・コマンドの使用

第18章 FDDI の使用

この章では、ルーター内でファイバー分散データ・インターフェースに関するソフトウェア構成可能情報を設定する方法について説明します。

この章には、以下の節が含まれています。

- 『ファイバー分散データ・インターフェース (FDDI) 概説』

ファイバー分散データ・インターフェース (FDDI) 概説

ファイバー分散データ・インターフェース (FDDI) については、ANSI X3T9.5 委員会および ISO 9314 委員会で、100 Mbps という定義済み速度で稼働する二重逆回転リングとして説明されています。

FDDI は多くの点で IEEE 802.5 トークンリングに似ていますが、相違点もあり、相違点の一部については 244ページの『FDDI とトークンリングの相違点』で説明します。

トークン・パッシング環状ネットワーク

FDDI はトークン・パッシング・プロトコルとして定義されています。各端末には、パスを渡すときそれぞれデータを送信する機会があります。端末では、『帯域幅』の割り振りを許可するアルゴリズムを使用して、送信するフレーム数を定めることができます。

また、FDDI を使用すると、端末では、IEEE 802.5 トークンリング標準の場合に似た方法でトークンを解放しなくても、多くのフレームを送信することができます。

FDDI 環状ネットワークは、一組の端末/装置が一続きの端末/装置として接続されたものと伝送媒体とで構成されて、物理的に閉じたループを形成します。情報は適切に符号化された信号のストリームとして、アクティブな端末 / 装置から次のアクティブな端末 / 装置へ順次送信されます。

各端末 / 装置は、一般に、それぞれが各トークンを再生成して繰り返し、1 つまたは複数の端末/装置をネットワークに接続する手段となることができます。

1 次リングと 2 次リング

FDDI では次の 2 つのリングが定義されます。

- 1 次リング は、トークンリング・ネットワークのメインリング・パスに似ています。
- 2 次リング は、トークンリング・ネットワークのバックアップ・リング・パスに似ています。

各リング・パスはそれぞれが 2 本のファイバーで構成され、各ファイバーはそれぞれが信号を 1 つ送信し、装置内で 1 つはプッシュ、1 つはプルです。各ファイバーは、

FDDI の使用

それぞれが一对の銅線に相当します。ファイバー光学的観点からの物理的手法は、光ファイバー・トークンリング・パスの場合と同様です。

装置の接続

FDDI では、多くの装置の接続が許されます。

- 端末または装置
- コンセントレーター
- ブリッジ

これらの装置については、トークンリング・ネットワークの場合と同様、多くの方法で FDDI ネットワークに接続することができます。

FDDI とトークンリングの相違点

FDDI とトークンリングの技法上の主要な相違点は、次のとおりです。

- トークンリングの場合のマルチステーション・アクセス装置 (MSAU) のようなコンセントレーターを使用しないで、装置をリングに直接接続することができる。
- 1 次リングと 2 次リングのいずれか一方にも両方にも装置を接続することができる。

FDDI では、次の項で説明するように、装置クラス A と B を定義して、一方のリングまたは両方のリングに接続する装置を区別します。

装置クラス A および B

FDDI では、次のように 2 つの装置クラスを定義します。

- **クラス A** 装置は、両方のリングに直接接続します。
クラス A 端末 または デュアル・アクセス・ステーション (DAS) と呼ばれるステーションの場合もあれば、デュアル・アクセス・コンセントレーター (DAC) と呼ばれるコンセントレーターの場合もあります。
- **クラス B** 装置は、リングの一方だけに直接、またはコンセントレーターを介して接続します。
クラス B 端末 または 単一アクセス・ステーション (SAS) と呼ばれるステーションの場合もあれば、単一アクセス・コンセントレーター (SAC) と呼ばれるコンセントレーターの場合もあります。

FDDI ネットワーク図

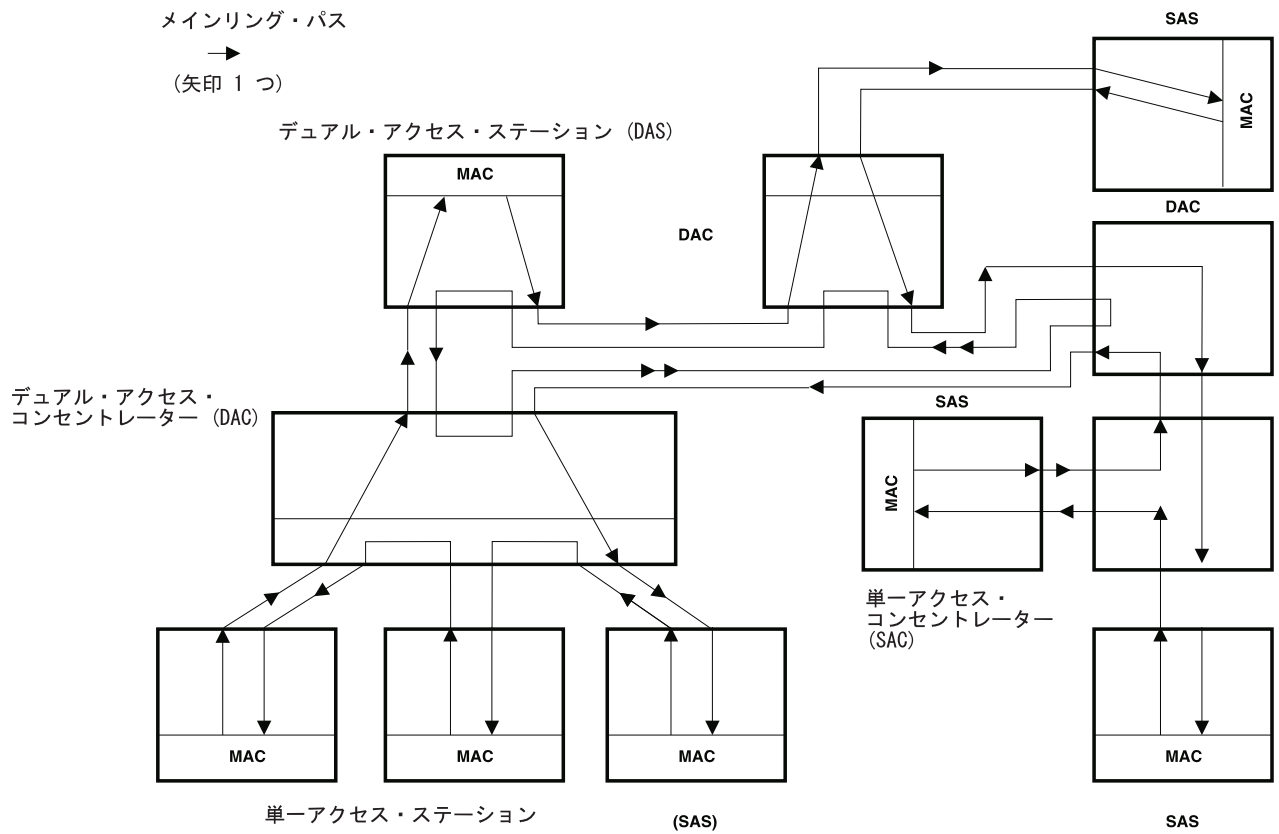


図 15. FDDI ネットワーク図. この図には、FDDI ネットワークの 1 つのメインリング・パス内の単一アクセス・ステーション (SAS)、デュアル・アクセス・ステーション (DAS)、単一アクセス・コンセントレーター (SAC)、デュアル・アクセス・コンセントレーター (DAC) が示されています。

第19章 FDDI の構成と監視

この章では、FDDI インターフェースの構成およびオペレーショナル・コマンドについて説明します。この章は以下の節に分かれています。

- 『FDDI 構成コマンドへのアクセス』
- 『FDDI 構成コマンド』
- 250ページの『FDDI 監視コマンドへのアクセス』
- 250ページの『FDDI 監視コマンド』

FDDI 構成コマンドへのアクセス

FDDI の構成には、Talk 6 からアクセスすることができます。その場合は、**add device** コマンドを入力して、ネットワークに FDDI インターフェースを追加し、それにインターフェース番号を割り当て、次に **network** コマンドを使用して、次の例に示すように FDDI インターフェースにアクセスします。

```
800 Config> add device fddi
SK-NET FDDI device in slot 0 port 1 as interface #2
Use "net 2" to configure SK-NET FDDI parameters

800 Config> network ?
0 :CHARM ATM Adapter
1 :ATM Token Ring LAN Emulation: elan1
2 :SK-NET FDDI

800 Config> network 2
FDDI Interface Configuration
FDDI Config>
```

これで FDDI Config> プロンプトが表示されます。

終了したら、**Exit** を入力すれば、直前のプロンプト・レベルに戻ります。

FDDI 構成コマンド

この節では、表29 に示す FDDI 構成コマンドについて説明します。コマンドは FDDI Config> プロンプトから入力します。

表 29. FDDI 構成コマンドの要約

コマンド	機能
? (Help)	このコマンド・レベルで使用可能なコマンドをすべて表示するか、特定のコマンドに関するオプション (ただし、選択可能な場合) をリストします。 12ページの『ヘルプを得る』を参照してください。
LLC	LLC 構成環境へのアクセスを提供します。
List	選択された FDDI 構成を表示します。
Set	FDDI パラメーターを設定します。
Exit	直前のコマンド・レベルに戻ります。 13ページの『下位レベル操作環境を終了する』を参照してください。

FDDI の構成

LLC

LLC コマンドは、LLC 構成環境にアクセスするのに使用します。LLC コマンドの説明については、255ページの『LLC 構成コマンド』を参照してください。

構文：

llc

List

list コマンドは、FDDI に関する現行構成を表示させる場合に使用します。

構文：

```
list                all  
                    ler  
                    pmf  
                    tmax  
                    tmin  
                    treq  
                    tvx  
                    userdata
```

all 後に続くさまざまなパラメーターでの出力のすべてをリストします。

ler ポート A およびポート B のリンク誤り率アラームおよびカットオフ値をリストします。

a -- ポート A のリンク誤り率アラームおよびカットオフ値をリストします。

b -- ポート B のリンク誤り率アラームおよびカットオフ値をリストします。

pmf PMF パスワード (最大 8 文字) を表示します。

tmax 最大トークン回転時間 (ミリ秒数) をリストします。

tmin 最小トークン回転時間 (ミリ秒数) をリストします。

treq 要求ターゲット・トークン回転時間 (ミリ秒数) をリストします。

tvx 有効伝送タイマー有効期限 (マイクロ秒数) をリストします。

userdata

ユーザー・データ (最大 32 文字) を表示します。

Set

set コマンドは、FDDI を構成する場合に使用します。

構文：

```
set                ler
```

	<u>pmf</u>
	<u>tmax</u>
	<u>tmin</u>
	<u>treq</u>
	<u>tvx</u>
	<u>userdata</u>
ler port# type	ポート A およびポート B のアラームおよびカットオフの値を次のように設定します。
	ler a alarm ポート A のアラーム値を設定します。
	ler a cutoff ポート A のカットオフ値を設定します。
	ler b alarm ポート B のアラーム値を設定します。
	ler b cutoff ポート B のカットオフ値を設定します。

有効値とデフォルト値

アラームまたはカットオフ	有効値	デフォルト値
アラーム	4 ~ 15	8
カットオフ	4 ~ 15	7

pmf	PMF パスワード (最大 8 文字) を設定します。
tmax	このステーションで受け入れることができる最大トークン回転時間 (ミリ秒数) を設定します。FDDI 仕様では通常 T_Max と呼んでいます。 有効値 : 5 ~ 165 ミリ秒 デフォルト値 : 165 ミリ秒
tmin	このステーションで受け入れることができる最小トークン回転時間 (ミリ秒数) を設定します。交渉 TTRT がこの値より小さい場合は、アダプターはそれより上のレイヤーに適正なサービスを提供しません。FDDI 仕様では通常 T_Min と呼んでいます。 有効値 : 5 ~ 165 ミリ秒 デフォルト値 : 5 ミリ秒
treq	このステーションが初期化中に送信権要求する要求ターゲット・トークン回転時間 (ミリ秒) を設定します。FDDI 仕様では通常 T_Req と呼んでいます。 有効値 : 5 ~ 165 ミリ秒 デフォルト値 : 165 ミリ秒
tvx	有効伝送タイマー有効期限 (マイクロ秒数) を設定し

FDDI の構成

ます。ステーションが有効なフレームまたは非制限トークンを見るたびに、このタイマーはリセットされます。タイマーが有効期限切れになると、トラフィックがリング上で適正に循環しておらず、したがって請求プロセスが開始されることを示します。FDDI 仕様では通常 TVX と呼んでいます。

有効値：2500 ～ 10 000 マイクロ秒

デフォルト値：2500 マイクロ秒

ユーザー・データ (最大 32 文字) を設定します。

userdata

FDDI 監視コマンドへのアクセス

FDDI 構成には、Talk 5 からアクセスすることができます。その場合は、**network** コマンドを入力して、次の例に示すように FDDI インターフェースにアクセスします。

```
800+ network ?
0 :CHARM ATM Adapter
1 :ATM Token Ring LAN Emulation: elan1
2 :SK-NET FDDI

800 + network 2
FDDI Interface
FDDI>
```

これで FDDI> プロンプトが表示されます。

終了したら、**Exit** を入力すれば、直前のプロンプト・レベルに戻ります。

FDDI 監視コマンド

FDDI の監視コマンドは、次のとおりです。

表 30. FDDI 監視コマンドの要約

コマンド	機能
? (Help)	このコマンド・レベルで使用可能なコマンドをすべて表示するか、特定のコマンドに関するオプション (ただし、選択可能な場合) をリストします。12ページの『ヘルプを得る』を参照してください。
List	FDDI アダプター情報を表示します。
LLC	LLC 監視プロンプトを表示します。
Srt-stats	FDDI プリッジング統計を表示します。
Exit	直前のコマンド・レベルに戻ります。13ページの『下位レベル操作環境を終了する』を参照してください。

LLC

LLC コマンドは、LLC 構成環境にアクセスするのに使用します。LLC コマンドの説明については、255ページの『LLC 構成コマンド』を参照してください。

構文：

llc

List

list コマンドは、現行 FDDI 構成パラメータを表示させる場合に使用します。

構文：

```
list
```

例：

```
FDDI> list
MAC Address: 00:00:5A:00:00:01
```

Srt-stats

srt-stats コマンドは、このインターフェース上でのハードウェア支援ブリッジ統計を表示させる場合に使用します。

構文：

```
srt-stats
```

例：

```
srt-stats
Port Supports:                Transparent Bridging Only

Frames received:                806
Bytes received:                 34588
Maximum size of filter table in adapter: 4088
Number of entries in filter table: 0
Number of dynamic entries in filter table: 0
```

FDDI インターフェースと GWCON コマンド

トークンリング・インターフェースには監視を目的とする独自の監視プロセスがありますが、GWCON 環境から `interface` コマンドを使用すると、ルーターでも導入済みネットワーク・インターフェースに関する完全な統計を表示します。

FDDI インターフェースから表示される統計

GWCON 環境から FDDI インターフェースに関する `interface net#` コマンドを入力すると、次のような統計が表示されます。

```

          Self-Test  Self-Test  Maintenance
Nt  Nt'  Interface  Slot-Port  Passed  Failed  Failed
0   0   FDDI/0     Slot: 1   Port: 1    1       0       0

IEEE 802.2/FDDI MAC/data-link on SK-NET FDDI interface
Address: 00:60:94:C4:00:40
UNA:     00:00:5A:02:2D:1E -> DNA: 00:00:5A:02:2D:1E
-----
ECM State Machine:          IN
PCM State Machine Port A:   SIGNAL
PCM State Machine Port B:   ACTIVE
CFM State Machine Port A:   ISOLATED
CFM State Machine Port B:   CONCATENATED
CF State Machine:           C WRAP B
MAC Current Path:           PRIMARY
RMT State Machine:          RING_OP
-----
TVX expired ct: 0
Beacon ct:      0
Claim ct:       0
RingOp ct:      1
```

FDDI の監視

```
-----  
PHYA:LEM_Ct: 0 LEM_Reject_Ct: 0 LCT_fails: 40  
Alarm: 10°-8 Cutoff: 10°-7 Estimate: 10°-15  
PHYB:LEM_Ct: 0 LEM_Reject_Ct: 0 LCT_fails: 40  
Alarm: 10°-8 Cutoff: 10°-7 Estimate: 10°-15  
-----  
T_Notify 10 sec, SMT frames in:55363 SMT frames out:35317  
-----  
Frames:211764, Errors:0, Losses:0, Xmts:144058, Copied:171046, Not Copied:0
```

以下は、一般的なインターフェース統計を示しています。

Nt グローバル・インターフェース番号

Nt' ダイヤル回線にのみ該当

インターフェース (interface)

タイプ "intrfc" のインターフェース内のこのインターフェースのインターフェース名と番号

Port ポート番号

Slot スロット番号

Self-Test Passed

自己テストが正常に行われた回数

Self-Test Failed

自己テストが正常に行われなかった回数

Maintenance Failed

保守障害の数

以下は、FDDI インターフェースに特有のものとして表示される統計の説明です。

Address

FDDI インターフェースの物理アドレスを示します。

UNA アップストリーム近隣の物理アドレスを示します。

DNA ダウンストリーム近隣の物理アドレスを示します。

ECM State Machine

Entity Coordination Management (エンティティ調整管理) では、ノードのすべてのポートも含めて、メディア・インターフェースの管理を制御します。また、光バイパスの制御もします。

```
OUT  
IN  
TRACE  
LEAVE  
PATH-TEST  
INSERT  
CHECK  
DEINSERT
```

PCM State Machine

Physical Connection Management (物理接続管理) では、管理対象のポートと隣接ノードの別のポートとの間の物理接続の管理を制御します。

```
OFF  
BREAK  
TRACE  
CONNECT  
NEXT  
SIGNAL
```


JOIN
 VERIFY
 ACTIVE
 MAINT

CFM State Machine

Configuration Management (構成管理) では、1 つのノード内の MAC およびポートの構成を管理します。

ISOLATED
 LOCAL
 SECONDARY
 PRIMARY
 CONCATENATED
 THRU

CF State Machine

接続構成。

ISOLATED
 LOCAL_A
 LOCAL_B
 LOCAL_AB
 LOCAL_S
 WRAP_A
 WRAP_B
 WRAP_AB
 WRAP_S
 C_WRAP_A
 C_WRAP_B
 C_WRAP_S
 THRU

MAC Current Path

この MAC が挿入される現行パス。

ISOLATED
 LOCAL
 SECONDARY
 PRIMARY

RMT State Machine.

Ring Management (リング管理) では、MAC 管理フレームのタイミングを制御します。

ISOLATED
 NON_OP
 RING_OP
 DETECT_BEACON
 NON_OP_DUP
 RING_OP_DUP
 DIRECTED
 RM-TRACE
 DETECT_CLAIM
 DETECT_IDLE

TVX expired ct

TVX の有効期限が切れた回数

Beacon ct

ビーコン状態に入った回数

Claim ct

請求状態に入った回数

RingOp ct

リングが動作状態に入った回数

LEM_Ct

リンク誤りモニターの誤り件数

FDDI の監視

LCT fails

リンク信頼性テストに連続して不合格であった回数

Alarm リンク接続がアラームを生成する推定値

Cutoff リンク接続が切断される推定値

Estimate

長期平均リンク誤り率

Frames

受信フレーム数

Errors 誤りが検出されたフレーム数

Losts 受信時のフォーマット誤り数

Xmts 送信フレーム数

Copied

コピーされたフレーム数

Not Copied

コピーされなかったフレーム数

T_Notify

隣接局通知タイマー

SMT frames in

受信 SMT フレーム数

SMT frames out.

送信 SMT フレーム数

第20章 LLC インターフェースの構成と監視

この章では、インターフェース・コマンドと GWCON interface コマンドのどちらかを使用して、ルーター内で特定の LLC インターフェースを構成する方法について説明します。

論理リンク・レベルは『サブプロトコル』と考えることができます。Talk 6 (構成) 環境からも Talk 5 (監視) 環境からも直接アクセスすることはできません。その代わりに、トークンリング、ポイント・ポイント (PPP)、またはフレーム・リレー・プロトコル(複数の場合もある)から **LLC** コマンドを入力してアクセスします。

この章は以下の節に分かれています。

- 『インターフェース構成プロセスへのアクセス』
- 259ページの『インターフェース監視プロセスへのアクセス』
- 259ページの『LLC 監視コマンド』
- 『LLC 構成コマンド』

インターフェース構成プロセスへのアクセス

LLC を介して構成するプロトコルの構成コマンドにアクセスするには、次のようにします。

- トークンリングの場合は、225ページの『第16章 IEEE 802.5 トークンリング・ネットワーク・インターフェースの構成』の説明に従います。
- ポイント・ポイントの場合は、583ページの『第39章 ポイント・ポイント・プロトコル・インターフェースの使用』の説明に従います。
- フレーム・リレーの場合は、513ページの『第37章 フレーム・リレー・インターフェースの使用』の説明に従います。
- FDDI の場合は、243ページの『第18章 FDDI の使用』の説明に従います。

これらのプロンプト・レベルのそれぞれに LLC コマンドがあります。 **LLC** と入力して LLC 構成コマンドにアクセスし、LLC を構成します。終了したら、**Exit** と入力して、構成しているプロトコルのプロンプト・レベルに戻ります。

LLC 構成コマンド

SNA ネットワークを介してパケットを渡す必要がある場合、LLC 構成が必要です。これらのコマンドを入力するには、最初に LLC 構成環境に入る必要があります (225ページの『トークンリング・インターフェース構成プロセスへのアクセス』を参照してください)。

この節では、すべての LLC 構成コマンドの要約を示し、その後で個々のコマンドについて説明します。256ページの表31 に示すこれらのコマンドは、SNA ネットワークを介してパケットを渡す必要がある場合に、LLC を構成できるようにします。

LLC の構成

表 31. LLC 構成コマンドの要約

コマンド	機能
? (Help)	このコマンド・レベルで使用可能なコマンドをすべて表示するか、特定のコマンドに関するオプション (ただし、選択可能な場合) をリストします。 12ページの『ヘルプを得る』を参照してください。
List	選択された LLC 構成を表示します。
Set	LLC に関連したタイマーと、送信および受信ウィンドウのサイズを設定します。
Exit	直前のコマンド・レベルに戻ります。 13ページの『下位レベル操作環境を終了する』を参照してください。

List

list コマンドは、LLC に関する現行構成を表示させる場合に使用します。

構文 :

list

例 :

```
list
Reply Timer (T1):           1 seconds
Receive ACK Timer (T2):     100 milliseconds
Inactivity Timer (Ti):      30 seconds
Max Retry value (N2):       8
Rcvd I-frames before ACK (N3): 1
Transmit Window (Tw):       2
Receive Window (Rw):        2
Acks needed to increment Ww (Nw): 1
```

Reply Timer (T1)

このタイマーは、LLC が相手側の LLC ステーションから必要な確認またはレスポンスを受信できないと満了します。

Receive ACK Timer (T2)

このタイマーは、受信 I フォーマット・フレームの確認の送信を遅らせるのに使用します。

Inactivity Timer (Ti)

このタイマーは、指定された期間に LLC がフレームを受信しないと満了します。このタイマーが満了すると、相手側の LLC が応答するか、N2 再試行カウントを超えるまで、LLC は RR を送信します。デフォルト値は 30 秒です。

Max Retry value (N2)

LLC プロトコルによる再試行の最大回数。デフォルト値は 8 です。

Rcvd I-frames before ACK (N3)

この値は、T2 タイマーと合わせて、受信 I フレームの確認トラフィックを削減するのに使用されます。このカウンターは、指定された値にセットされ、I フレームを受信するたびに減分します。このカウンターが 0 に達するか、T2 タイマーが満了すると、確認が送信されます。デフォルト値は 1 です。

Receive Window (Rw)

LLC がリモート・ホストから受信できる未確認のシーケンス番号付き I フレームの最大数を示します。

Transmit Window (Tw)

RR の受信前に送信できる I フレームの最大数を示します。

Acks needed to increment Ww (Nw)

このフィールドはデフォルト値 1 に設定されます。

Set

set コマンドは、LLC を構成する場合に使用します。

重要: LLC パラメーターをデフォルト値から変更すると、LLC プロトコルの動作方法に影響を与える可能性があります。

構文 :

```
set                n2-max-retry count
                   n3-frames-rcvd-before-ack count
                   nw-acks-to-inc-window count
                   rw-receive-window count
                   t1-reply-timer seconds
                   t2-receive-ack-timer seconds
                   ti-inactivity-timer seconds
                   tw-transmit-window count
```

n2-max-retry

LLC プロトコルによる再試行の最大数。たとえば、N2 は、非活動タイマーが満了したときに、LLC が確認を受信せずに RR を送信する最大回数です。デフォルト値は 8、最小値は 1 で、最大値は 127 です。

例 :

```
set n2-max-retry
Max Retry value (N2) [8]?
```

n3-frames_rcvd-before-ack

この値は、T2 タイマーと合わせて、受信 I フレームの確認トラフィックを削減するのに使用されます。このカウンターは、指定値に設定します。I フレームを受信するたびに、この値が減分します。このカウンターが 0 に達するか、T2 タイマーが満了すると、確認が送信されます。デフォルト値は 1 です。最小値は 1 です。最大値は 255 です。

例 :

```
set n3-frames_rcvd-before-ack
Number I-frames received before sending ACK(N3) [1]?
```

rw-receive-window

LLC がリモート LLC ピアから受信できる未確認シーケンス番号付き I フレームの最大数を示します。この値は 127 以下でなければなりません。

例 :

```
set rw-receive-window
Receive Window (Rw), 127 Max. [2]?
```

LLC の構成

nw-acks-to-inc-ww

このフィールドはデフォルト値 1 に設定されます。

t1-reply-timer

このタイマーは、LLC が相手側の LLC ステーションから必要な確認またはレスポンスを受信できないと満了します。このタイマーが満了すると、ポーリング・ビットをセットして RR が送信され、T1 が再びスタートします。LLC が構成された再試行最大数 (N2) の後もレスポンスを受信しない場合、基礎リンクは動作不能として宣言されます。デフォルト値は 1 です。最小値は 1 です。最大値は 256 です。

例 :

```
set t1-reply-timer
Reply Timer (T1) in sec. [1]?
```

t2-receive-ack-timer

このタイマーは、受信 I フォーマット・フレームの確認の送信を遅らせるのに使用します。このタイマーは、I フレームを受信するとスタートします。確認が送信されると、タイマーはリセットされます。このタイマーが満了すると、LLC2 はできるだけ速やかに確認を送信します。この値は、T1 の値より小さくなるように設定します。これにより、T1 タイマーが満了する前に、リモート LLC2 ピアが遅らせた確認を確実に受信できるようになります。デフォルト値は 1 (100 ミリ秒)。最小値は 1 です。最大値は 2560 です。

例 :

```
set t2-receive-ack-timer
Receive Ack timer (T2) in 100 millisec. [1]?
```

注: 1 (デフォルト値) に設定されている場合は、このタイマーは動作しません (たとえば、**n3-frames_rcvd-before-ack =1**)。

ti-inactivity-timer

このタイマーは、指定された期間に LLC がフレームを受信しないと満了します。このタイマーが満了すると、相手側の LLC が応答するか、N2 再試行カウントを超えるまで、LLC は RR を送信します。デフォルト値は 30 秒です。最小値は 1 秒。最大値は 256 秒。

例 :

```
set ti-inactivity-timer
Inactivity Timer (Ti) in sec. [30]?
```

tw-transmit-window

RR を受信する前に送信できる I フレームの最大数を示します。相手側の LLC セッションが実際にこの数の連続 I フレームを受信することが可能であり、しかもルーターに、確認を受信するまでこれらのフレームのコピーを保持できる十分なヒープ・メモリーがあると仮定した場合、この値を大きくすると、スループットが向上します。デフォルト値は 2、最小値は 1 で、最大値は 127 です。

例 :

```
set tw-transmit-window
Transmit Window (Tw), 127 Max. [2]?
```

インターフェース監視プロセスへのアクセス

LLC を介して監視したいプロトコルに関する監視コマンドにアクセスする手順は、次のとおりです。

- トークンリングの場合は、225ページの『第16章 IEEE 802.5 トークンリング・ネットワーク・インターフェースの構成』の説明に従います。
- ポイント・ポイントの場合は、601ページの『第40章 ポイント・ポイント・プロトコル・インターフェースの構成と監視』の説明に従います。
- フレーム・リレーの場合は、535ページの『第38章 フレーム・リレー・インターフェースの構成と監視』の説明に従います。
- FDDI の場合は、243ページの『第18章 FDDI の使用』の説明に従います。

これらのプロンプト・レベルのそれぞれに LLC コマンドがあります。 **LLC** と入力して、LLC を監視するための LLC 監視コマンドにアクセスします。終了したら、**Exit** と入力すれば、監視しているプロトコルに関するプロンプト・レベルに戻ります。

LLC 監視コマンド

この節では、すべての LLC 監視コマンドの要約を示し、個々のコマンドについて説明します。表32 に示すこれらのコマンドを使用すると、SNA ネットワークを介してパケットを渡している間 LLC を監視することができます。

表 32. LLC 監視コマンドの要約

コマンド	機能
? (Help)	このコマンド・レベルで使用可能なコマンドをすべて表示するか、特定のコマンドに関するオプション (ただし、選択可能な場合) をリストします。12ページの『ヘルプを得る』を参照してください。
Clear-counters	すべての統計カウンターを消去します。
List	インターフェース、SAP、およびセッション情報を表示します。
Set	セッションの存続期間中だけ有効な LLC パラメーターを動的に構成することができます。
Exit	直前のコマンド・レベルに戻ります。13ページの『下位レベル操作環境を終了する』を参照してください。

Clear-Counters

clear-counters コマンドは、LLC 統計をすべてクリアする場合に使用します。

構文 :

clear-counters

LLC の監視

List

list コマンドは、インターフェース、サービス・アクセス・ポイント (SAP)、およびセッション情報を表示させる場合に使用します。

構文 :

```
list                interface
                    sap . . .
                    session
```

interface

このインターフェース上のすべてのオープンしている SAP を表示します。

例 :

```
list interface
SAP      Number of Sessions
F4       1
```

sap sap_number

インターフェース上の指定された SAP の情報を表示します。

例 :

```
list sap
SAP value in hex (0FE) [1]? F4

Interface                0, TKR/0
Reply Timer(T1)          1 sec
Receive ACK Timer (T2)   100 millise
Inactivity Timer (Ti)    30 sec
MAX Retry Value (N2)     8
MAX I-field Size (N1)    2052
Rcvd I-frames before ACK (N3) 1
Transmit Window Size (Tw) 2
Acks Needed to Inc Ww (Nw) 1

Frame                    Xmt    Rcvd
UI-frames                 4      5
TEST-frames               0      1
XID-frames                 0      0
I-frames                  291    26
RR-frames                  81     291
RNR-frames                 0      0
REJ-frames                 0      0
SABME-frames              1      0
UA-frames                  0      1
DISC-frames               0      0
DM-frames                  0      0
FRMR-frames                0      0
I-frames discarded by LLC 0
I-frames Refused by LLC user 0

Cumulative number of sessions 1
Number of active sessions     1

Session ID                Remote
(int-sap-id)              SAP    State
00F40000      00:00:C9:08:41:DB  10:00:5A:F1:02:37  F4  OPENED
```

SAP value in hex (0FE)

セッションの SAP 値

Interface

セッションが実行されているインターフェースの番号およびタイプ

Reply Timer (T1)

LLC が相手側ステーションから確認または応答を受信できない場合に、このタイマーが満了するまでにかかる時間を示します。

Receive ACK Timer (T2)

LLC が受信した I フレームに関する確認を送信するまでに使用する時間遅延を示します。

Inactivity Timer (Ti)

LLC が RR を発行するまでの非活動時に待つ時間を示します。

MAX Retry Value (N2)

LLC プロトコルによる再試行の最大回数

MAX I-field Size (N1)

LLC2 フレームの I フィールドに入れることができるデータの最大量 (バイト数)

Rcvd I-frame before ACK (N3)

受信した I フレームに関する確認トラフィックを削減するために、T2 タイマーと共に使用される値を示します。

Transmit Window Size (Tw)

RR の受信前に送信することができる I フレームの最大数を示します。

Acks Needed to Inc Ww (Nw)

このフィールドはデフォルト値 1 に設定されます。

Frames Xmt and Rcvd

伝送されたフレーム・タイプ (Xmt) および (Rcvd) の合計数を表示するカウンター

I-frames discarded by LLC

LLC によって廃棄された (通常は、シーケンス番号の順序間違いのため) I フレームの合計数を表示するカウンター

I-frames refused by LLC user

LLC の上位のソフトウェアによって廃棄された I フレームの数を表示するカウンター (たとえば、DLSw (データ・リンク交換))

Cumulative number of sessions

この SAP を通してオープンされたセッションの合計数

Number of active sessions

インターフェースを通して実行されている現在アクティブのセッションの合計数

Session ID (int-sap-id)

監視インターフェースのセッション ID

Local MAC

ルーターの LLC MAC アドレス

Remote MAC

リモート LLC の MAC アドレス

Remote SAP

LLC 接続のリモート SAP

LLC の監視

Remote State

LLC ピア間の対話の結果である有限状態。これには 21 の状態があり、それぞれ以下で説明します。

Link_Closed

リモート LLC ピアがローカル LLC ピアに認知されず、存在しないものと見なされます。

Disconnected

ローカル LLC ピアは、相手側に認知されています。この LLC ピアは、XID、TEST、SABME、および DISC コマンド、XID TEST、UA、および DM レスポンスを送受信することができます。

Link_Opening

受信した SABME に応答して SABME または UA を送信した後のローカル LLC ピアの状態

Disconnecting

DISC コマンドをリモート LLC ピアに送信した後のローカル LLC の状態

FRMR_Sent

ローカル LLC ピアは、フレーム・リジェクト例外状態に入り、リンクを介して FRMR レスポンスを送信しました。

Link_Opened

ローカル LLC ピアは、データ転送フェーズにあります。

Local_Busy

ローカル LLC ピアは、追加の I フレームを受信できません。

Rejection

ローカル LLC ピアが、1 つまたは複数のシーケンス誤り I フレームを受信しました。

Checkpointing

ローカル LLC ピアは、リモート LLC ピアにポーリングを送信し、適切なレスポンスを待っています。

CKPT_LB

チェックポイント状態とローカル・ビジー状態の組み合わせ

CKPT_REJ

チェックポイント状態とリジェクト状態の組み合わせ

Resetting

ローカル LLC ピアは SABME を受信し、リンクを再確立中です。

Remote_Busy

リモート LLC ピアから RNR を受信したときに生じる状態

LB_RB

local_busy 状態と remote_busy 状態の組み合わせ

REJ_LB

リジェクト状態と local_busy 状態の組み合わせ

REJ_RB

リジェクト状態と remote_busy 状態の組み合わせ

CKPT_REJ_LB

チェックポイント、リジェクト、および local_busy 状態の組み合わせ

CKPT_CLR

LLC ピアが CKPT_LB の間に local_busy 状態が終了した結果生じた組み合わせ状態

CKPT_REJ_CLR

リンク・ステーションが CKPT_REJ_LB 状態にあるときに未確認ローカル・ビジュー・クリアが転送された結果生じた組み合わせ状態

REJ_LB_RB

リジェクト、local_busy、および remote_busy 状態の組み合わせ

FRMR_Received

ローカル LLC ピアは、リモート LLC ピアから FRMR レスポンスを受信しました。

Session

インターフェース上でオープンしている指定の LLC セッションに関する情報を表示します。

例：

```
list session
Session Id: [0]? 00-F4-0000

Interface0,           TKR/0
Remote MAC addr      10:00:5A:F1:02:37
Source MAC addr      00:00:C9:08:35:47
Remote SAP            F4
Local SAP             F4
RIF                  (089E 0101 0022 0010)
Access Priority       0
State                 LINK_OPENED
Replay Timer          1 sec
Receive ACK Timer (T2) 100 millisec
Inactivity Timer (Ti) 30 sec
MAX I-field Size (N1) 2052
MAX Retry Value (N2)  8
Rcvd I-frames before ACK (N3) 1
Transmit Window Size (Tw) 2
Working Transmit Size (Ww) 2
Acks Needed to Inc Ww (Nw) 1
Current Send Seq (Vs)  9
Current Rcv Seq (Vr)   7
Last ACK'd sent frame (Va) 9
No. of frames in ACK pend q 0
No. of frames in Tx pend q 0
Local Busy            NO
Remote Busy           NO
Poll Retry count      8
Appl output flow stopped NO
Send process running  YES

Frame                Xmt   Rcvd
I-frames              1456 2678
RR-frames              502  403
RNR-frames             0    0
REJ-frames             0    0
I-frames discarded by LLC      0
I-frames Refused by LLC user   0
```

Session Id

セッション ID 番号を示します。

Interface

このセッションが実行されているインターフェースの番号を示します。

Remote MAC addr

リモート LLC ピアの MAC アドレスを示します。

LLC の監視

Source MAC addr

ローカル LLC の MAC アドレスを示します。

Remote SAP

LLC 接続のリモート側 SAP

Local SAP

LLC 接続のローカル側 SAP

RIF フレームの実際の RIF

Access Priority

パケットの優先順位。高位レイヤー制御の場合は 07

State LLC ピア間の対話の結果である有限状態。詳しくは、260 ページの **list sap** コマンドを参照してください。

Receive ACK timer (T2)

LLC が受信した I フレームに関する確認を送信するまでに使用する時間遅延を示します。

Inactivity timer (Ti)

LLC が RR を発行するまでの非活動時に待つ時間を示します。

MAX I-field size (N1)

フレームのデータ・フィールドの最大サイズ (バイト数)。デフォルトではインターフェースのサイズです。

MAX Retry Value (N2)

LLC が確認を受信しないで RR を送信する最大回数

Rcvd I-frames before ACK (N3)

受信した I フレームに関する確認トラフィックを削減するために、T2 タイマーと共に使用される値を示します。

Transmit window size (Tw)

RR の受信前に送信できる I フレームの最大数を示します。

Working transmit size (Ww)

RR を受信する前に送信される I フレームの最大数

Acks Needed to Inc Ww (Nw)

このフィールドはデフォルト値 1 に設定されます。

Current send seq (Vs)

送信状態変数 (次に転送される I フレームの Ns 値)

Current Rcv seq (Vr)

受信状態変数 (次に受け入れられる順位の Ns)

Last ACK'd sent frame (Va)

確認状態変数 (最後に受信した有効な Nr)

No. of frames in ACK pend q

確認待ちの送信済み I フレームの数

No. of frames in transmit pend q

送信待ちのフレームの数

Local Busy

LLC 接続のローカル側が RNR を送信中です。

Remote Busy

LLC のリモート側が RNR を受信中です。

Poll Retry count

LLC プロトコル内のカウンター (カウントダウンする) の再試行の現行値を示します。

Appl output flow stopped

LLC がアプリケーションに対して発信データ・フレームの提供の停止を指示しました。

Send process running

このプロセスは、他のすべてのフレーム・アクションと並行して実行され、I フレームを送信待ち行列に入れて送信します。

Frames Xmt and Rcvd

伝送されたフレーム・タイプ (Xmt) および (Rcvd) の合計数を表示します。

I-frames discarded by LLC

LLC によって廃棄された (通常は、シーケンス番号の順序間違いのため) I フレームの合計数を表示するカウンター

I-frames refused by LLC user

LLC の上位のソフトウェアによって廃棄された I フレームの数を表示するカウンター (たとえば、DLSw (データ・リンク交換))

Set

set コマンドは、現行 LLC セッションで LLC パラメーターを動的に構成する場合に使用します。パラメーターに加えた変更は、セッションの存続期間中だけ有効です。これらのパラメーターは、257ページの『Set』 にリストされているものと同じものです。

重要: LLC パラメーターをデフォルト値から変更すると、LLC プロトコルの動作方法に影響を与える可能性があります。

構文 :

```

set                                n2-max_retry count
                                       n3-frames-rcvd-before-ack count
                                       nw-acks-to-inc-ww count
                                       t1-reply-timer seconds
                                       t2-receive-ack-timer seconds
                                       ti-inactivity-timer seconds
                                       tw-transmit-window seconds

```

n2-max_retry

LLC プロトコルによる再試行の最大数。たとえば、N2 は、非活動タイマー

LLC の監視

が満了したときに、LLC が確認を受信せずに RR を送信する最大回数です。デフォルト値は 8、最小値は 1 で、最大値は 127 です。

n3-frames-rcvd-before-ack

この値は、T2 タイマーと合わせて、受信 I フレームの確認トラフィックを削減するのに使用されます。このカウンターは、指定値に設定します。I フレームを受信するたびに、この値が減分します。このカウンターが 0 に達するか、T2 タイマーが満了すると、確認が送信されます。デフォルト値は 1 です。最小値は 1 で、最大値は 255 です。

nw-acks-to-inc-ww

このフィールドはデフォルト値 1 に設定されます。

t1-reply-timer

このタイマーは、LLC が相手側の LLC ステーションから必要な確認またはレスポンスを受信できないと満了します。このタイマーが満了すると、ポーリング・ビットをセットして RR が送信され、T1 が再びスタートします。LLC が構成された再試行最大数 (N2) の後もレスポンスを受信しない場合、基礎リンクは動作不能として宣言されます。デフォルト値は 1 です。最小値は 1 で、最大値は 256 です。

t2-receive-ack-timer

このタイマーは、受信 I フォーマット・フレームの確認の送信を遅らせるのに使用します。このタイマーは、I フレームを受信するとスタートし、確認を送信するとリセットされます。このタイマーが満了すると、LLC2 はできるだけ速やかに確認を送信します。この値は、T1 の値より小さくなるように設定します。これにより、T1 タイマーが満了する前に、リモート LLC2 ピアが遅らせた確認を確実に受信できるようになります。デフォルト値は 1 (100 ミリ秒)。最小値は 1 です。最大値は 2560 です。

注: このタイマーが 1 (デフォルト値) に設定されている場合、タイマーは動作しません (たとえば、**n3-frames_rcvd-before-ack=1**)。

ti-inactivity-timer

このタイマーは、指定された期間に LLC がフレームを受信しないと満了します。このタイマーが満了すると、相手側の LLC が応答するか、N2 タイマーが満了するまで、LLC は RR を送信します。デフォルト値は 30 秒です。最小値は 1 秒。最大値は 256 秒。

tw-transmit-window

RR を受信する前に送信できる I フレームの最大数を示します。相手側の LLC セッションが実際にこの数の連続 I フレームを受信することが可能であり、しかもルーターに、確認を受信するまでこれらのフレームのコピーを保持できる十分なヒープ・メモリーがあると仮定した場合、この値を大きくすると、スループットが向上します。デフォルト値は 2、最小値は 1 で、最大値は 127 です。

第21章 イーサネット・ネットワーク・インターフェースの使用

この章では、イーサネット・インターフェースを使用する方法について説明します。以下の節、『Interface コマンドによるイーサネット統計の表示』において説明します。

Interface コマンドによるイーサネット統計の表示

GWCON 環境から **interface** コマンドを使用して、以下の統計を表示することもできます。

```
+ interface 4
Nt Nt' Interface Slot-Port Self-Test Self-Test Maintenance
4 4 Eth/0 Slot: 4 Port: 1 Passed Failed Failed
Ethernet/IEEE 802.3 MAC/data-link on Ethernet interface
Physical address AA0004000318
PROM address 10005AFF0016
Microcode Level Uu17c

Input statistics:
failed, packet too long 0 failed, CRC error 1
failed, alignment error 0 failed, FIFO over-run 0
buffer full warnings 0 packets missed 1
internal mac rx errors 0

Output statistics:
initially deferred 12 single collision 1
multiple collisions 1 total collisions 4
failed, excess collisions 0 failed, FIFO under-run 0
failed, carrier check 0 CD heartbeat error 0
```

これらの統計は、次のような意味を持っています。

Nt グローバル・ネットワーク番号

Nt' このフィールドは、シリアル・インターフェース・カード用です。出力とは無関係です。

Interface

インターフェース名とそのインスタンス番号

Port ポート番号

Slot スロット番号

Self-Test: Passed

成功した自己テストの回数

Self-Test: Failed

失敗した自己テストの回数

Maintenance: Failed

保守障害の数

Physical address

現在使用している装置のイーサネット・アドレス。これは PROM アドレス、あるいは他のプロトコルによって上書きされたアドレスです。

イーサネット・ネットワーク・インターフェースの使用

PROM address

このイーサネット・インターフェースの PROM 内の永続的な固有のイーサネット・アドレス

Input statistics:

failed, packet too long または failed, frame too long

「障害、パケットが長過ぎる」カウンターは、インターフェースが、イーサネット・フレームの最大サイズである 1518 バイトより大きいパケットを受信すると増分します。このデータは SNMP を介して dot3StatsFrameTooLongs カウンターとしてエクスポートされます。

failed, CRC error または failed, FCS (Frame Check Sequence) error

「障害、CRC (巡回冗長検査) 誤り」カウンターは、インターフェースが CRC 誤りを含むパケットを受信すると増分します。このデータは SNMP を介して dd3StatsFCSErrors カウンターとしてエクスポートされます。

failed, framing error または failed, alignment error

「障害、フレーム誤り」カウンターは、インターフェースが、長さ (ビット数) が 8 の倍数でないパケットを受信すると増分します。

failed, FIFO over-run または failed, FIFO overrun

「障害、FIFO (先入れ先出し) オーバーラン」カウンターは、イーサネット・チップ・セットが、線路から送り出される速度に見合う速度で、ローカル・パケット・バッファにバイトを保管できない場合に増分します。

buffer full warnings

「バッファ満ぱい警告」カウンターは、ローカル・パケット・バッファが満ぱいになるたびに増分します。

packets missed

「パケット紛失」カウンターは、インターフェースがパケットを受信しようとしたが、ローカル・パケット・バッファが満ぱいであるときに増分します。この誤りは、インターフェースの処理能力を超えるトラフィックがネットワーク上に存在することを示しています。

internal mac rcv errors

遅延、過剰、またはキャリア・チェック衝突以外の受信誤り。このデータは SNMP を介して dot3StatsInternalMacReceiveErrors カウンターとしてエクスポートされます。この統計は FIFO オーバーランの合計値です。

Output statistics:

initially deferred または deferred transmission

「初期遅延」カウンターは、キャリア・センス機構がインターフェースの転送を遅らせるような伝送路アクティビティを検出すると増分します。このデータは SNMP を介して dot3StatsDeferredTransmissions カウンターとしてエクスポートされます。

single collision

「単一衝突」カウンターは、初回の転送試行でパケットが衝突した後、2 回目の転送試行でパケットを正常に送信できた場合に増分します。このデータは SNMP を介して dot3StatsSingleCollisionFrames カウンターとしてエクスポートされます。

multiple collisions

「複数衝突」カウンターは、パケットが正常に転送されるまでに複数回の衝突が生じた場合に増分します。このデータは SNMP を介して dot3MultipleCollisionFrames カウンターとしてエクスポートされます。

total collisions

「合計衝突数」カウンターは、パケットに発生した衝突の数だけ増分されず。

failed, excess collisions

「障害、超過衝突」カウンターは、16 回の連続衝突によりパケット転送が失敗すると増分します。この誤りは、ネットワーク通信量が多いか、ネットワークにハードウェア問題があることを示しています。このデータは SNMP を介して dot3StatsExcessiveCollisions カウンターとしてエクスポートされます。

failed, FIFO underrun

「障害、FIFO アンダーラン」カウンターは、インターフェースがネットワーク上の転送に対応できる速度でローカル・パケット・バッファーからパケットを取り出せないためにパケットの転送に失敗すると増分します。

failed, carrier check または failed, carrier sense error

「障害、キャリア・チェック」カウンターは、キャリア・センスが使用不可にされているためにパケットが衝突すると増分します。この誤りは、インターフェースとそのイーサネット・トランシーバー間に問題があることを示しています。このデータは SNMP を介して dot3StatsCarrierSenseErrors カウンターとしてエクスポートされます。

CD heartbeat error または SQE test error

「CD (衝突検出) ハートビート誤り」または「SQE (信号品質誤り)」カウンターは、インターフェースがパケットを送信したが、トランシーバーがハートビートを生成しないことを検出すると増分します。トランシーバーによってはハートビートを生成しないものがあるので、このパケットは正常に転送されたものとして扱われます。このデータは SNMP を介して dot3StatsSQETestErrors カウンターとしてエクスポートされます。

イーサネット・ネットワーク・インターフェースの使用

第22章 イーサネット・ネットワーク・インターフェースの構成と監視

この章では、イーサネット・インターフェースの構成およびオペレーショナル・コマンドについて説明します。この章は以下の節に分かれています。

- 273ページの『イーサネット・インターフェース操作プロセスへのアクセス』
- 273ページの『イーサネット・インターフェース監視コマンド』

イーサネット・インターフェース構成プロセスへのアクセス

構成プロセスにアクセスするには、以下の手順を使用します。このプロセスにより、イーサネット・インターフェースの構成プロセスにアクセスできます。

1. OPCON プロンプトで **talk 6** と入力する。(このコマンドの詳細については、33ページの『第4章 OPCON プロセス』を参照してください。)たとえば、次のように入力します。

```
* talk 6
Config>
```

コンソールに CONFIG プロンプト (Config>) が表示されます。最初に構成に入ったときにプロンプトが表示されない場合は **Return** をもう一度押してください。

2. CONFIG プロンプトで **list devices** コマンドを入力して、ルーターが現在構成されているネットワーク・インターフェース番号を表示する。
3. インターフェース番号を記録する。
4. **network** コマンドと、構成するイーサネット・インターフェースの番号を入力する。たとえば、次のように入力します。

```
Config> network 0
ETH Config>
```

イーサネット構成プロンプト (ETH Config>) が表示されます。

イーサネット構成コマンド

この節では、イーサネット構成コマンドの要約を示し、個々のコマンドについて説明します。コマンドは ETH config> プロンプトで入力します。

表 33. イーサネット構成コマンドの要約

コマンド	機能
? (Help)	このコマンド・レベルで使用可能なコマンドをすべて表示するか、特定のコマンドに関するオプション (ただし、選択可能な場合) をリストします。12ページの『ヘルプを得る』を参照してください。
Connector-Type	コネクタ・タイプを設定します。
IP-Encapsulation	IP カプセル化を、イーサネット (タイプ X'0800') または IEEE (SNAP 付き 802.3) として設定します。

イーサネット構成コマンド (Talk 6)

表 33. イーサネット構成コマンドの要約 (続き)

コマンド	機能
List	現行のコネクター・タイプ、NetWare IPX カプセル化、および IP カプセル化を表示します。
Physical-Address	物理 MAC アドレスを設定します。
Exit	直前のコマンド・レベルに戻ります。13ページの『下位レベル操作環境を終了する』を参照してください。

Connector-Type

connector-type コマンドは、コネクター・タイプを設定するのに使用します。2216では、AUI (10BASE5) および RJ-45 (10BASE-T) コネクターと、auto-config オプションをサポートします。

構文：

```
connector-type          name
```

IP-Encapsulation

ip-encapsulation コマンドは、イーサネット (イーサネット・タイプ X'0800') または IEEE 802.3 (SNAP を備えたイーサネット 802.3) を選択する場合に使用します。**e** または **i** を入力します。

構文：

```
ip-encapsulation      type
```

List

list コマンドは、コネクター・タイプ、IPX カプセル化タイプ、および IP カプセル化タイプを含めて、イーサネット・インターフェースの現行構成を表示するのに使用します。

構文：

```
list                   all
```

例: **list all**

```
Connector type:      AUI (10BASE5)
MAC Address:         12:15:00:FA:00:FE
```

Physical-Address

physical-address コマンドは、物理 (MAC) アドレスを設定する場合に使用します。

構文: **physical-address** *address*

physical-address

このコマンドでは、イーサネット・インターフェースの MAC サブレイヤー・アドレスにローカル管理アドレスを定義するのか、あるいはデフォルトの刻印されたアドレス (オール 0 で示される) を使用するのかを指示することができます。MAC サブレイヤー・アドレスは、イーサネット・インターフェースがフレームの送受信に使用するアドレスです。

イーサネット構成コマンド (Talk 6)

注: **Enter** を押すと、値はそのままになります。 **0** を入力すると、ルーターは刻印されたアドレスを使用します。デフォルトでは、刻印されたアドレスを使用します。

有効値: 任意の 12 桁の 16 進アドレス

デフォルト値: 刻印されたアドレス (オール 0 で示されます)

例: `physical-address`

```
MAC address in 00:00:00:00:00:00 form []? 12:15:00:FA:00:FE
```

イーサネット・インターフェース操作プロセスへのアクセス

イーサネット・ネットワーク・インターフェースに関連する情報を監視する場合は、以下の手順を使用して、インターフェース監視プロセスにアクセスします。

1. OPCODE プロンプトで **talk 5** を入力する。たとえば、次のように入力します。

```
* talk 5
```

GWCON プロンプト (+) がコンソールに表示されます。最初に GWCON に入ったときにプロンプトが表示されない場合は、再度 **Return** を押してください。

2. GWCON プロンプトで **configuration** コマンドを入力して、ルーターに構成されているプロトコルとネットワークを表示する。たとえば、次のように入力します。

```
+ configuration
```

(**configuration** コマンドの出力例については、120ページの『Configuration』 ページを参照してください。)

3. **network** コマンドとイーサネット・インターフェースの番号を入力する。この例では、次のように入力します。

```
+ network 0  
ETH>
```

イーサネット監視プロンプトが表示されます。したがって、監視コマンドを入力すれば、イーサネット・インターフェースに関する情報を表示させて見ることができます。

イーサネット・インターフェース監視コマンド

この節では、イーサネット監視コマンドについて要約し、個々に説明します。コマンドは ETH> プロンプトで入力します。表34 に監視コマンドがリストしてあります。

表 34. イーサネット監視コマンドの要約

コマンド	機能
? (Help)	このコマンド・レベルで使用可能なコマンドをすべて表示するか、特定のコマンドに関するオプション (ただし、選択可能な場合) をリストします。12ページの『ヘルプを得る』を参照してください。

イーサネット・インターフェース監視コマンド

表 34. イーサネット監視コマンドの要約 (続き)

コマンド	機能
Collisions	指定されたイーサネット・インターフェースの衝突統計を表示します。
Exit	直前のコマンド・レベルに戻ります。 13ページの『下位レベル操作環境を終了する』を参照してください。

Collisions

このコマンドは、正常に転送される前に衝突を起こしたパケットの転送数を示します。カウンターは、15回の衝突の後に送信された、衝突 XXXXXx パケットの後に送信されたパケット数を示します。衝突を伴って転送されたパケット数が増えること、およびパケット当たりの衝突回数が増えることは、ビジー状態のイーサネットに転送されていることを示しています。

これらのカウンターは、OPCON **clear** コマンドを実行すればクリアされます。このデータはSNMPを介してdot3CollTableカウンターとしてエクスポートされます。

構文：

collisions

例：

```
Eth> coll
Transmitted with 1 collisions:0
Transmitted with 2 collisions:0
Transmitted with 3 collisions:0
Transmitted with 4 collisions:0
Transmitted with 5 collisions:0
Transmitted with 6 collisions:0
Transmitted with 7 collisions:0
Transmitted with 8 collisions:0
Transmitted with 9 collisions:0
Transmitted with 10 collisions:0
Transmitted with 11 collisions:0
Transmitted with 12 collisions:0
Transmitted with 13 collisions:0
Transmitted with 14 collisions:0
Transmitted with 15 collisions:0
```

第23章 10/100 Mbps イーサネット・ネットワーク・インターフェースの使用

この章では、10/100 Mbps イーサネット・インターフェースの使用法について説明します。本章には、以下の節が含まれています。

- 『10/100 Mbps イーサネット統計の表示』

10/100 Mbps イーサネット統計の表示

GWCON 環境から **interface** コマンドを使用して、次のような統計を表示させることができます。

```
+i 0
                                     Self-Test Self-Test Maintenance
Nt Nt' Interface Slot-Port          Passed   Failed   Failed
0  0  Eth/0   Slot: 1  Port: 1             1         0         0

Ethernet/IEEE 802.3 MAC/data-link on 100MB Ethernet interface

Physical address      10005A991431
PROM address          10005A991431
Actual address        10005991431
Adapter Level         0
Configured Duplex     : Auto-Negotiation
Actual Duplex          : Half Duplex
Configured Speed      : Auto-Negotiation
Actual Speed          : 100 Mbps

Input statistics:
failed, packet too long      0 failed, CRC error          0
failed, alignment error      0 failed, receive overflow    0
*receive collision           0 *missed frame               0
**frames filtered            0 receive underrun           0

Output statistics:
one retry                    0 single collision            0
multiple collisions          0 failed, transmit underflow  0
failed, excess collisions    0 failed, loss of carrier     0
late collisions              0 more than one retry         0
buffer error                 0 total collisions            0
excessive deferral           0 deferred                    0
memory error                  0

* cannot be cleared
** cleared automatically when read
```

これらの統計は、次のような意味を持っています。

Nt グローバル・ネットワーク番号

Nt' このフィールドは、シリアル・インターフェース・カード用です。出力とは無関係です。

Interface

インターフェース名とそのインスタンス番号

Self-Test: Passed

成功した自己テストの回数

Self-Test: Failed

失敗した自己テストの回数

10/100 Mbps イーサネット・ネットワーク・インターフェースの使用

Maintenance: Failed

保守障害の数

Physical address

現在使用している装置のイーサネット・アドレス。これは PROM アドレス、あるいは他のプロトコルによって上書きされたアドレスです。

PROM address

このイーサネット・インターフェースの PROM 内の永続的な固有のイーサネット・アドレス

Actual address

Adapter level

Configured duplex

二重に関して構成された値。値は Half Duplex (半二重)、 Full Duplex (全二重)、または Auto-Negotiation (自動交渉) になります。

Actual duplex

アダプターが現在作動している値です。スイッチの能力によっては、構成された値とは異なる場合があります。アダプターがアップでない場合は、表示される値は "Unknown" (確認不能) になります。それ以外の場合は、値は Half Duplex か Full Duplex になります。

注: ここに示される値は正確でない場合があります。その原因は、交渉およびリンク信号がメーカーの製品内でサポートされていることにあります。

Configured speed

速度に関して構成された値。 値は 10 Mbps、100Mbps、または Auto-Negotiation (自動交渉) になります。

Actual speed

アダプターが現在作動している速度です。スイッチの能力によっては、構成された速度とは異なる場合があります。アダプターがアップでない場合は、表示される値は "Unknown" (確認不能) になります。それ以外の場合は、値は 10 Mbps か 100 Mbps になります。

注: ここに示される値は正確でない場合があります。その原因は、交渉およびリンク信号がメーカーの製品内でサポートされていることにあります。

Input statistics:

failed, packet too long または failed, frame too long

「障害、パケットが長過ぎる」カウンターは、インターフェースが、イーサネット・フレームの最大サイズである 1518 バイトより大きいパケットを受信すると増分します。このデータは SNMP を介して dot3StatsFrameTooLongs カウンターとしてエクスポートされます。

failed, CRC error または failed, FCS (Frame Check Sequence) error

「障害、CRC (巡回冗長検査) 誤り」カウンターは、インターフェースが CRC 誤りを含むパケットを受信すると増分します。このデータは SNMP を介して dd3StatsFCSErrors カウンターとしてエクスポートされます。

10/100 Mbps イーサネット・ネットワーク・インターフェースの使用

failed, alignment error

「障害、フレーム誤り」カウンターは、インターフェースが、長さ (ビット数) が 8 の倍数でないパケットを受信すると増分します。

failed, receive overflow

「オーバーフロー誤り」では、内部 FIFO がオーバーフローする前に、受信 FIFO からメモリー・バッファーにデータを移動することができないため、受信側で着信フレームの全部または一部が逸失したことを示します。

receive collision

アダプター上で受信側サポートによって検出された衝突の合計数を示します。

注: このカウンターは、アダプター上に保持されるため、**clear statistics** コマンドでクリアすることはできません。このカウンターをリセットする唯一の手段としては、**test network** コマンドがあります。

missed frame

システム内で受信バッファーが使用不能のため逸失した着信フレームの数を示します。この誤りでは、システムが受信したフレームを処理する速度がローカル・ネットワークから受信する速度に追いつかないことが示されます。

注: このカウンターは、アダプター上に保持されるため、**clear statistics** コマンドでクリアすることはできません。このカウンターをリセットする唯一の手段としては、**test network** コマンドがあります。

frames filtered

アダプターによって廃棄された着信フレームの数を示します。このカウンターが更新されるのは、ブリッジングが使用可能にされるときだけです。

注: このカウンターはアダプター上に保持され、読み取られるたびにクリアされます。このカウンターは、**interface statistics** および **test network** コマンドでクリアされます。

receive underrun

アダプターに 2 番目のバッファーがなくて、長いフレーム (複数のバッファーを必要とする) を保管することができなかった回数を示します。

Output statistics:

one retry

フレームを送信するための再試行が 1 回だけ必要であったことを示します。このデータは SNMP を介して `dot3StatsDeferredTransmissions` カウンターとしてエクスポートされます。

single collision

「単一衝突」カウンターは、初回の転送試行でパケットが衝突した後、2 回目の転送試行でパケットを正常に送信できた場合に増分します。このデータは SNMP を介して `dot3StatsSingleCollisionFrames` カウンターとしてエクスポートされます。

multiple collisions

「複数衝突」カウンターは、パケットが正常に転送されるまでに複数回の衝突が生じた場合に増分します。このデータは SNMP を介して `dot3MultipleCollisionFrames` カウンターとしてエクスポートされます。

10/100 Mbps イーサネット・ネットワーク・インターフェースの使用

failed, transmit underflow

「送信アンダーラン」では、メモリーからデータを読み取ることができる速度が不十分であったため、送信側がメッセージを切り捨てたことを示します。また、フレームの終わりに達する前に、アダプター上の FIFO が空になったことも示します。

failed, excess collisions

「障害、超過衝突」カウンターは、16 回の連続衝突によりパケット転送が失敗すると増分します。この誤りは、ネットワーク通信量が多いか、ネットワークにハードウェア問題があることを示しています。このデータは SNMP を介して dot3StatsExcessiveCollisions カウンターとしてエクスポートされます。

failed, loss of carrier

キャリアが伝送中に逸失すると、キャリアの逸失が設定されます。キャリアの逸失時にアダプターが再試行することはありません。フレーム全体が送信されるまで送信し続けます。

late collisions

「遅れ衝突」では、衝突の発生が最初のチャネル・スロット・タイムの経過後であったことを示します。遅れ衝突時にアダプターが再試行することはありません。

more than one retry

「複数回再試行」では、フレームを送信するための再試行が複数回必要であったことを示します。

buffer error

「バッファ誤り」が生じるのは、システム内に、またはアダプター上の特定の FIFO アンダーフロー条件下で、メモリー破壊問題がある場合です。

total collisions

「合計衝突数」カウンターは、パケットに発生した衝突の数だけ増分されません。

excessive deferral

「過剰据え置き」では、ISO 8802-3 (IEEE/ANSI 802.3) 標準に過剰据え置きが定義されているこの送信フレーム上に、アダプター上で送信側が過剰据え置きを検出したことを示します。

deferred

「据え置き」では、アダプターがフレームの送信を試行している間に据え置きを必要とした回数を示します。この条件が生じるのは、アダプターの送信準備ができているとき、DMA チャネルがビジーの場合です。

memory error

メモリー誤りが生じるのは、プログラム可能時間内に、アダプターがシステム・インターフェース・バスにアクセスできない場合です。この誤りは、通常、送信操作中に起こり、送信アンダーランを示します。

第24章 10/100 Mbps イーサネット・ネットワーク・インターフェースの構成と監視

この章では、10/100 Mbps イーサネット・インターフェースの構成およびオペレーショナル・コマンドについて説明します。この章は以下の節に分かれています。

- 『インターフェース構成プロセスへのアクセス』
- 『10/100 Mbps イーサネット構成コマンド』
- 282ページの『10/100 Mbps インターフェース監視プロセスへのアクセス』
- 282ページの『10/100 Mbps イーサネット・インターフェース監視コマンド』

インターフェース構成プロセスへのアクセス

構成プロセスにアクセスするには、以下の手順を使用します。このプロセスにより、イーサネット・インターフェースの構成プロセスにアクセスできます。

1. OPCON プロンプトで、**talk 6** と入力する。(このコマンドの詳細については、33ページの『第4章 OPCON プロセス』を参照してください。) 下に例を挙げます。

```
* talk 6
Config>
```

コンソールに CONFIG プロンプト (Config>) が表示されます。最初に構成に入ったときにプロンプトが表示されない場合は **Return** をもう一度押してください。

2. CONFIG プロンプトで、**list devices** コマンドを入力して、ルーターが現在構成されているネットワーク・インターフェース番号を表示させる。
3. インターフェース番号を記録する。
4. **network** コマンドと、構成したいイーサネット・インターフェースの番号を入力する。下に例を挙げます。

```
Config> network 0
Ethernet 100 interface configuration
ETH100 Config>
```

10/100 Mbps イーサネット構成プロンプト (ETH100 Config>) が表示されます。

10/100 Mbps イーサネット構成コマンド

この節では、10/100 Mbps イーサネット構成コマンドについて説明します。コマンドは ETH config> プロンプトで入力します。

表 35. 10/100 Mbps イーサネット構成コマンドの要約

コマンド	機能
? (Help)	このコマンド・レベルで使用可能なコマンドをすべて表示するか、特定のコマンドに関するオプション (ただし、選択可能な場合) をリストします。12ページの『ヘルプを得る』を参照してください。
Duplex	二重モードを設定します。

イーサネット・ネットワーク・インターフェースの構成

表 35. 10/100 Mbps イーサネット構成コマンドの要約 (続き)

コマンド	機能
IP-Encapsulation	IP カプセル化を、イーサネット (タイプ X'0800') または IEEE (SNAP 付き 802.3) として設定します。
List	現行のコネクター・タイプおよび IP カプセル化を表示します。
Physical-Address	物理 MAC アドレスを設定します。
Speed	リンク速度を設定します。
Exit	直前のコマンド・レベルに戻ります。13ページの『下位レベル操作環境を終了する』を参照してください。

Duplex

duplex コマンドは、二重モードを設定する場合に使用します。

注: **auto** のデフォルト値が推奨されます。値 **half-duplex** または **full-duplex** を指定する必要があるのは、リンク・パートナーも同じモードに構成されている場合に限りです。

構文 :

```
duplex                half_duplex
                        full_duplex
                        auto
```

Half_duplex

インターフェースは受信中は送信せず、送信中は受信しません。

Full_duplex

インターフェースは送受信を同時に行います。

Auto インターフェースは、リンク・パートナーの能力に応じて、半二重または全二重を自動的に選択します。

IP-Encapsulation

IP-encapsulation コマンドは、イーサネット (イーサネット・タイプ X'0800') または IEEE 802.3 (SNAP を備えたイーサネット 802.3) を選択する場合に使用します。タイプを表す **e** または **i** を入力します。

構文 :

```
IP-encapsulation      type
```

例: **IP-encapsulation e**

List

list コマンドは、10/100 Mbps イーサネット・インターフェースの現行構成を表示させる場合に使用します。

構文 :

```
list all
```

```
例: list all
The duplex is HALF DUPLEX
The speed is 100Mb
IP Encapsulation: Ether
MAC Address: 023456789A56
```

Physical-Address

physical-address コマンドは、物理 (MAC) アドレスを設定する場合に使用します。

構文 :

```
physical-address address
```

physical-address

このコマンドでは、イーサネット・インターフェースの MAC サブレイヤー・アドレスにローカル管理アドレスを定義するのか、あるいはデフォルトの刻印されたアドレス (オール 0 で示される) を使用するのかを指示することができます。MAC サブレイヤー・アドレスは、イーサネット・インターフェースがフレームの送受信に使用するアドレスです。

注: **Enter** を押すと、値はそのままになります。 **0** を入力すると、ルーターは刻印されたアドレスを使用します。デフォルトでは、刻印されたアドレスを使用します。

有効値: 任意の 12 桁の 16 進アドレス

デフォルト値: 刻印されたアドレス (オール 0 で示されます)

例:

```
physical-address
MAC address in 00:00:00:00:00:00 form []? 12:15:00:FA:00:FE
```

Speed

speed コマンドは、このインターフェースで使用される速度を設定する場合に使用します。

注: **auto** のデフォルト値が推奨されます。値 **ten** または **hundred** を指定する必要があるのは、リンク・パートナーも同じモードに構成されている場合に限りです。

構文 :

```
speed ten
hundred
auto
```

Ten インターフェースは 10 Mbps で動作します。

Hundred

インターフェースは 100 Mbps で動作します。

イーサネット・ネットワーク・インターフェースの構成

Auto インターフェースは、リンク・パートナーの能力に応じて、速度 (10 Mbps または 100 Mbps) を自動的に選択します。

10/100 Mbps インターフェース監視プロセスへのアクセス

10/100 Mbps イーサネット・ネットワーク・インターフェースに関連する情報を監視する場合は、以下の手順によってインターフェース監視プロセスにアクセスします。

1. OPCON プロンプトで **talk 5** と入力する。下に例を挙げます。

```
* talk 5
```

GWCON プロンプト (+) がコンソールに表示されます。最初に GWCON に入ったときにプロンプトが表示されない場合は、再度 **Return** を押してください。

2. GWCON プロンプトで **configuration** コマンドを入力して、ルーターが構成されているプロトコルおよびネットワークを表示させる。下に例を挙げます。

```
+ configuration
```

configuration コマンドの出力例については、120ページの『Configuration』を参照してください。

3. **network** コマンドとイーサネット・インターフェースの番号を入力する。この例では、次のように入力します。

```
+network 0  
ETH100>
```

10/100 Mbps イーサネット監視プロンプトが表示されます。したがって、監視コマンドを入力すれば、10/100 Mbps イーサネット・インターフェースに関する情報を表示させて見ることができます。

10/100 Mbps イーサネット・インターフェース監視コマンド

この節では、10/100 Mbps イーサネット監視コマンドについて要約します。コマンドは ETH100> プロンプトで入力します。表36 に監視コマンドがリストしてあります。

表 36. イーサネット監視コマンドの要約

コマンド	機能
? (Help)	このコマンド・レベルで使用可能なコマンドをすべて表示するか、特定のコマンドに関するオプション (ただし、選択可能な場合) をリストします。12ページの『ヘルプを得る』を参照してください。
Collisions	指定されたイーサネット・インターフェースの衝突統計を表示します。
Exit	直前のコマンド・レベルに戻ります。13ページの『下位レベル操作環境を終了する』を参照してください。

Collisions

このコマンドは、正常に転送される前に衝突を起こしたパケットの転送数を表示します。カウンターは、15回の衝突の後に送信されたパケットについて表示されます。

イーサネット・ネットワーク・インターフェースの構成

衝突を伴って転送されたパケット数が増えること、およびパケット当たりの衝突回数が増えることは、ビジー状態のイーサネットに転送されていることを示しています。

これらのカウンターは、OPCON **CLEAR** コマンドによってクリアされます。このデータは SNMP を介して dot3CollTable カウンターとしてエクスポートされます。

構文：

collisions

```
例:      Eth100> coll
          Transmitted with 1 collisions:0
          Transmitted with 2 collisions:0
          Transmitted with 3 collisions:0
          Transmitted with 4 collisions:0
          Transmitted with 5 collisions:0
          Transmitted with 6 collisions:0
          Transmitted with 7 collisions:0
          Transmitted with 8 collisions:0
          Transmitted with 9 collisions:0
          Transmitted with 10 collisions:0
          Transmitted with 11 collisions:0
          Transmitted with 12 collisions:0
          Transmitted with 13 collisions:0
          Transmitted with 14 collisions:0
          Transmitted with 15 collisions:0
```

イーサネット・ネットワーク・インターフェースの構成

第25章 LAN エミュレーションの概説

注：本章で使用されている頭字語および用語の定義については、用語集を参照してください。

IBM 2216には、複数ベンダーのマルチプロトコルの相互運用性に関する業界標準として広く受け入れられている *LAN Emulation Over ATM: Version 1.0 Specification* が実装されています。この章では、MSS 実現のコンテキストの中で LAN エミュレーション (LE) の基本概念を紹介します。最初に、エミュレートされた LAN (ELAN) を導入する動機について検討します。

LAN エミュレーションの利点

LAN エミュレーション・プロトコルを使用すると、ATM ネットワークをイーサネット LAN およびトークンリング LAN のように見せることができます。LAN エミュレーションは、ATM の利点のすべてを活用できるわけではありませんが、ATM 技術への移行やネットワーク管理コストの削減に役立ちます。高速 ATM リンクを利用できる上に、ソフトウェアとハードウェアの投資の保護を図れます。

ソフトウェア投資を保護できるのは、アプリケーション・インターフェースが変更されないからです (LAN エミュレーションは、エンド・ステーションのデバイス・ドライバ・インターフェースの下にある、データ・リンク制御レイヤー内で実現されます)。ハードウェア投資を保護できるのは、転送装置本体が LAN ネットワークおよび ATM ネットワークをブリッジするので、既存のアダプターや配線を引き続き使用できるからです。

LAN エミュレーションを使用すれば、高帯域幅をもつステーション (たとえば、サーバーや、技術ワークステーションおよびマルチメディア・ワークステーション) に ATM アダプターを増設していくことができます。単純な LAN エミュレーションの例の物理図と論理図を 図16 に示してあります。

LAN エミュレーションの概説

単純な LAN エミュレーション・ネットワーク

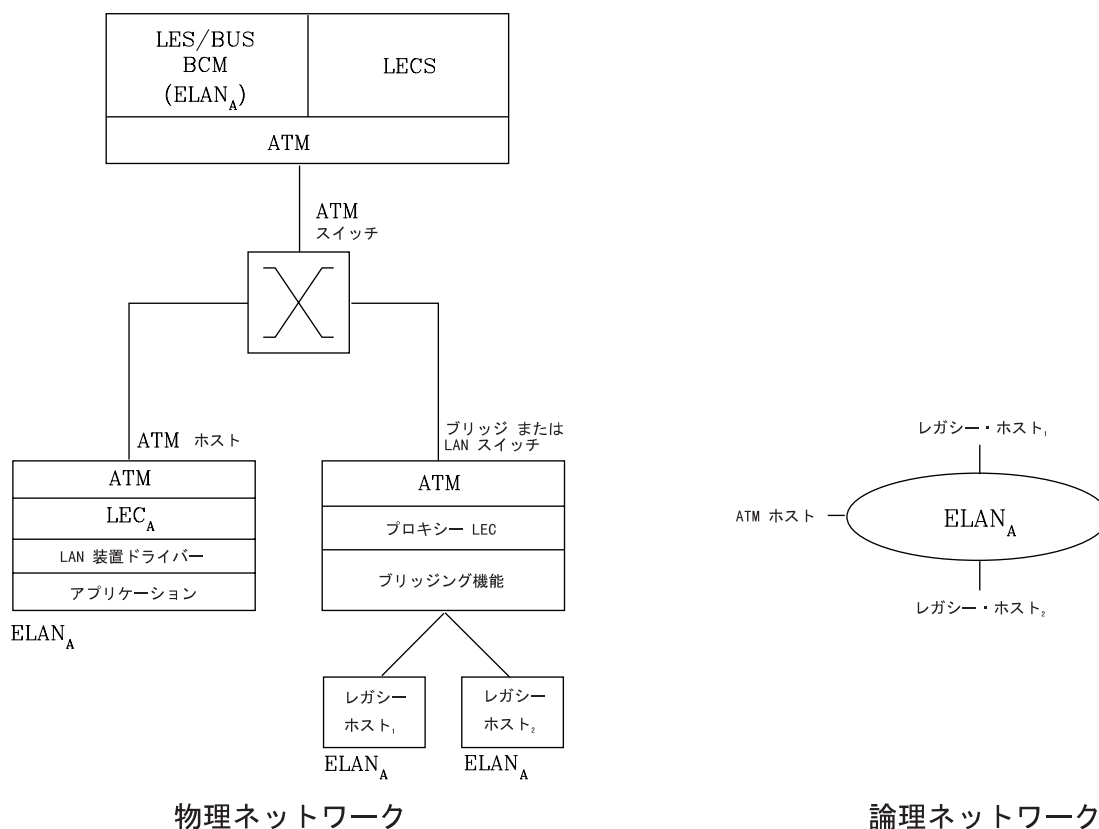


図 16. 単純な LAN エミュレーション・ネットワークの物理図と論理図

エミュレートされた LAN (ELAN) のネットワーク管理上の利点は、移動、追加、および変更の扱いが柔軟になることによって得られます。ELAN のメンバーシップは物理的な場所に基づくものではなく、論理的に関連したステーションがグループ化されて、1 つの ELAN を形成します (ステーションは複数の ELAN のメンバーになることも可能です)。

ELAN メンバーシップが保持されている限り、ステーションが物理的に別の場所に移動しても、再構成の必要はありません。同様に、ステーションをある ELAN から別の ELAN に移動しても、配線を変える必要はありません。

LAN エミュレーションのコンポーネント

以下のコンポーネントによって ELAN が実現します。

LAN エミュレーション (LE) クライアント (LEC)

エミュレートされた LAN のユーザーを表す LAN エミュレーションのコンポーネント

LE 構成サーバー (LECS)

構成データを中央に集めて広く配布する LAN エミュレーション・サービス・コンポーネント

LE サーバー (LES)

LAN あて先を ATM アドレスに変換する LAN エミュレーション・サービス・コンポーネント

同報通信および不明サーバー (BUS)

マルチキャスト・フレームおよび不明ユニキャスト・フレームの送達を担当する LAN エミュレーション・サービス・コンポーネント

LES、BUS、および LECS をまとめて LE サービス・コンポーネントと呼んでいます。各 ELAN には専用の LES および BUS があります。LE クライアントは、エンド・システム内 (ATM 接続ホスト内、あるいはブリッジまたは LAN スイッチ内のいずれか) に存在します。ブリッジまたは LAN スイッチは、イーサネット LAN またはトークンリング LAN に接続されているホストを表します。LE クライアントは、MAC レベルのサービスを高位レベル・ソフトウェアに提供します。イーサネット IEEE 802.3 LAN も IEEE 802.5 トークンリング LAN もエミュレートできますが、ELAN 上のステーションはすべて同じタイプであることが必要です。

トークンリングまたはイーサネット LAN セグメントと ELAN の間をブリッジする機能は、プロキシ LEC と呼ばれます。LAN をエミュレートする場合は、LE クライアントは LECS、LES、および BUS からのサービスを要求します。以下の節では、ATM アドレッシングおよび関連の中間ローカル管理インターフェース (ILMI) 機能について簡単に説明します。これらの概念を理解しておかないと、ネットワーク内での LE コンポーネントの機能は理解できません。

ATM でのアドレッシング

ATM では 20 バイトの階層型アドレッシングを使用します。



ATM アドレスの最初の 13 オクテットはネットワーク・プレフィックスです。ATM ネットワーク内の各スイッチは、固有のネットワーク・プレフィックスをもっていることが必要です。ATM スイッチは、ネットワーク・プレフィックスを使用して、VCC 設定要求をあて先 ATM スイッチにルートします。エンド・システム (このルーターのような) は、起動したときに、ATM スイッチからネットワーク・プレフィックスを取り出します。

ATM アドレスのオクテット 14-19 は、エンド・システム識別子 (ESI) です。同じスイッチに接続されている各エンド・システムは、別々の ESI セットを使用しなければなりません。エンド・システムが起動すると、一時ローカル管理インターフェース (ILMI) を使用して、その ESI を ATM スイッチに登録しようと試みます。

LAN エミュレーションの概説

ILMI は、エンド・システムと ATM スイッチ間のインターフェースを管理するのに使用される一組の SNMP ベースの手順を定義します。エンド・システムは ILMI を使用して、以下のことを行います。

- スイッチからネットワーク・プレフィックスを入手する。
- ESI をスイッチに登録する。
- ATM スイッチの UNI バージョンを動的に判別する。
- LEC はスイッチから LECS アドレスのリスト入手できるようになる。

スイッチは、すべての登録済み ESI が固有になるようにします。

ATM アドレスのオクテット 20 はセクターです。

エンド・ステーションは、スイッチからネットワーク・プレフィックスを入手し、ESI とセクターを追加して、独自のアドレスを形成します。こうして作成されたアドレスがスイッチに登録されますが、ATM アドレスが固有でない場合、スイッチは登録を拒否します。

ESI

ルーター上の各 ATM インターフェースは、汎用管理または出荷時設定 MAC アドレスをもっています。この MAC アドレスを、ルーターの ATM アドレスの一部または全部の ESI として使用することができます。あるいは、各インターフェースに最大 64 個のローカル管理アドレスを定義することもできます。すべてのエンド・システムが汎用管理 MAC アドレスを ESI として使用すれば、ATM アドレスが固有であることが保証されます。こうすれば、構成の負担が軽くなります。ただし、ローカル管理 ESI を使用すると、問題判別が容易になることがあります。ユーザーは、汎用管理 ESI とローカル管理 ESI を任意に組み合わせて使用することができます。

固有の ATM アドレスを得る 1 つの方法として、出荷時設定 IEEE MAC アドレスを ESI として使用し、固有のセクターをローカルで選択するという方法もあります。デフォルトでは、ルーターは ATM インターフェースの MAC アドレスを、その ATM アドレス内の ESI として使用します。各 ATM インターフェースに追加 ESI を構成できます。

各 ESI は最大 255 個の対応するセクター (0x00 ~ 0xff) をもつことができます。セクターの範囲は、構成されるセクター範囲と自動的に割り当てられるセクター範囲の 2 つに区分されています。構成されるセクター範囲の上限は、ATM インターフェース・パラメーター max-configured-selector で定めます。

ルーター上の ATM コンポーネントは、さまざまな方法でセクターを選択します。あるコンポーネントの場合は、構成されるセクター範囲から、ユーザーが明示的にセクターを構成する必要があります。そのようなコンポーネントの例としては、LES/BUS があります。別のコンポーネントの場合は (クラシカル IP クライアントなど)、実行時に自動的にセクターを割り当てることができます。ユーザーはルーターを選択する必要はなく、ルーターが起動時にこれを選択します。このセクターは、ルーターのリスタートのたびに一貫しているとは保証されません。自動的なセクターの割り当ては、ネットワーク上の他の装置があらかじめその ATM アドレスを知っていなくても構わない ATM コンポーネントの場合にのみ便利です。

ATM の構成は、エミュレートされた LAN、ブリッジング、またはルーティングを構成する前に行う必要があります。

LAN エミュレーション・コンポーネントの ATM アドレス

一般的には、ATM アドレスは LAN エミュレーション・コンポーネント間で固有であることが必要です。唯一の例外として、同じ ELAN にサービスする LES と BUS は ATM アドレスを共用できます (ルーターはこれに当たります)。

LAN エミュレーション・コンポーネントは、特定の ATM インターフェースに対して構成されます。コンポーネントの ATM アドレスの ESI 部分として出荷時設定 MAC アドレスの使用を決めることもできれば、その ATM インターフェースに対して定義されたローカル管理 ESI の 1 つを選択することもできます。セレクターが固有であれば、複数の LE コンポーネントが同じ ESI を共用することも可能です。デフォルトでは、構成インターフェースが各 ESI コンポーネントごとに、構成済み ESI に対して固有のセレクター値を割り当てます。ただし、この割り当てをオーバーライドして、明示的に特定のセレクター値を構成することも可能です。

ATM インターフェース・パラメーターを用いて、明示的な割り当て用として予約される ESI 当たりのセレクター数を定めます。残りは、実行時に ATM インターフェースが動的に割り当てられるのに利用できます。LE コンポーネントは、明示的な割り当て用に予約されたセレクターのみを使用します。デフォルトでは、ESI 当たり可能な 256 個のセレクターのうち 200 個が、明示的割り当て用として予約されます。実行時のセレクター割り当てが有利なのは、割り当てられたセレクターを制御する必要がない場合です。たとえば、ARP サーバーと対をなしていないクラシカル IP 内のクライアントを構成する場合などです。

LE コンポーネント間では ATM アドレスは固有でなければなりません、LE コンポーネントは、クラシカル IP サーバー機能のような非 LE コンポーネントとは同じ ATM アドレスを使用しても構いません。

関連 ILMI 機能の概説

ILMI は、エンド・システムと ATM スイッチの間のユーザー・ネットワーク・インターフェース (UNI) を管理するのに使用される一組の SNMP ベースの手順を定義します。特に LAN エミュレーションに関係のある ILMI 機能には、次の 3 つがあります。

1. ATM アドレス登録 (287ページの『ATM でのアドレッシング』で説明)
2. スイッチで実行中のシグナル・バージョンの動的な判別
3. LECS ATM アドレスの獲得

287ページの『ATM でのアドレッシング』で言及されているように、ATM アドレス登録は、ATM エンド・システムとスイッチの間で共同で行われる作業です。あらかじめスイッチに ATM アドレスを登録しておかないと、コールを送信または受信することはできません。

デフォルトでは、ルーターの ATM インターフェースは ILMI 手順を使用してスイッチ MIB を照会し、スイッチで実行されているシグナル・バージョンの判別 (UNI 3.0

LAN エミュレーションの概説

または 3.1) を試みます。照会が正常に行われた場合、ATM インターフェースはスイッチと同じ UNI バージョンを実行します。照会が正常に行われなかった場合は、ATM インターフェースは UNI 3.0 を実行します。あるいは、デフォルトをオーバーライドして、ATM インターフェースで実行される UNI バージョンを明示的に構成することもできます。

シグナル・バージョンの手動による構成

ATM スイッチが UNI 3.1 を実行しており、UNI バージョン MIB 変数がない場合は、シグナル・バージョンを手動で構成する必要があります。この場合、ATM インターフェースは UNI バージョンを動的に判別することはできません。ルーターの ATM インターフェースは、デフォルトでは UNI 3.0 を使用するの、ユーザーは ATM インターフェースが UNI 3.1 を使用するよう手動で構成する必要があります。

ILMI の使用による LECS の探索

ILMI は、LECS を見付ける方式として特に優れています。ATM スイッチの ILMI MIB には、LE クライアントが検索できる LECS ATM アドレスのリストが入っています。この方式が便利な理由は、LECS ATM アドレスを構成する必要があるのは ATM スイッチだけで、LE クライアントはその必要がなく、しかもスイッチの数は LE クライアントの数より少ないことにあります。クライアントは、このリストの最初の LECS への接続を試みます。接続に失敗すると、クライアントは接続が確立されるまで、順番に次の LECS アドレスへの接続を試みます。

LECS 機能の概説

LE クライアントは、LECS の使用が推奨されますが、必ず使用しなければならないわけではありません。LECS を使用しない場合は、各 LE クライアントで、ELAN にサービスする LES の ATM アドレスを構成することが必要です。LECS は、構成データの中央リポジトリとして機能することによりネットワーク管理の負担を減らし、LE クライアントの構成を最小限に抑えます。

注: 各ルーターに構成できる LECS は最高で 1 つです。

クライアントは、事前定義された手順を使用して LECS に接続します。LECS へのバーチャル・チャンネル・コネクション (VCC) が確立されるまで、クライアントは以下の手順を試みます。

1. 構成された LECS アドレス情報があれば (LE クライアントでの LECS ATM アドレスの構成はオプションであり、推奨されていません)、それを使用して LECS に接続する。
2. ILMI を使用して LECS のリストを入手し、VCC が確立されるまで、リストの各 LECS への接続を順番に試みる。
3. ATM フォーラムで定義されている事前割り当て LECS ATM アドレスへの VCC を確立する。

前述のとおり、ILMI は、LE クライアントが LECS を見付ける方法として優先されます。一部のスイッチは ILMI 方式をサポートしないので、事前割り当て LECS アドレスが必要になります。LE クライアントで LECS アドレスを構成するのは、ス

スイッチが ILMI 方式をサポートせず、LE サービスが事前割り当て LECS アドレスをサポートしない場合に**限る** が必要です。

ルーターと IBM ATM スイッチは、3 つの方式、つまり、事前割り当て LECS アドレス、ILMI 接続、および事前割り当て LECS ATM アドレスをすべてサポートします。

LECS は、初期構成データを LE クライアントに提供する必要があります。最も重要なデータは、LES の ATM アドレスです。この情報を LE クライアントに提供するためには、LECS が LE クライアントを識別し、その LE クライアントの正しい LES を判別できる必要があります。LECS は、LE クライアントによって送信される LE_CONFIGURATION_REQUEST フレーム内の情報を使用して、LE クライアントを識別します。この構成要求には、LE クライアントが加入を求めている ELAN を識別するための情報も含まれています。構成要求には、以下の情報を含めることができます。

1. LE クライアントの 1 次 ATM アドレス

このフィールドは必須であり、LE クライアントを固有に識別します。

2. LAN クライアントに対応する LAN あて先

このフィールドには、LE クライアントを固有に識別する MAC アドレスまたはルート記述子を入れてもよいし、指定しなくても構いません。

3. ELAN 名

このフィールドには、要求される ELAN または要求する LE クライアントを識別する名前を入れることができます。ルーターの実現では、ELAN 名は標準 ASCII スtring です。ELAN 名は、要求の中で指定しなくても構いません。

4. ELAN タイプ

このフィールドでは、LE クライアントがイーサネットまたはトークンリング ELAN に属することを指定できますが、指定しなくても構いません。LE クライアントが ELAN のタイプを指定している場合、LECS はそのクライアントに異なるタイプの ELAN を割り当てることはできません。

5. LE クライアントによってサポートされる最大フレーム・サイズ

このフィールドでは、LE クライアントが処理できるデータ・フレームのサイズの上限を指定できますが、指定しなくても構いません。LECS はクライアントを、そのクライアントが指定したより**大きい** 最大フレーム・サイズをもつ ELAN に割り当てることはできません。ELAN が使用するフレームが大き過ぎてクライアントが処理できない場合、クライアントはその ELAN 上では機能できません。

この情報に基づいて、LECS は LE クライアントを LES に割り当てます。これは、ポリシーとポリシー値を使用して行います。ポリシーとは、LECS が LE クライアントの LES への割り当てを決めるときに使用する基準のことです。ポリシー値とは、指定の値を指定の LES に割り当てることを指示する (値、LES) 対のことです。たとえば、ポリシーは LE クライアントの MAC アドレスとし、ポリシー値は (MAC ADDR_A, LES_1) というように指定します。MAC ADDR_A の LE クライアントが、LES_1 に割り当てられることとなります (その LE クライアントが、ポリシーの優先順位が上位のために、すでに別の LES に割り当てられていない場合)。一組のポリシーとポリシー値が、すべての ELAN に適用されます。

2 番目のタイプの ATM アドレス・ポリシー値は、ATM アドレスの ESI とセレクターです。たとえば、ポリシー値 (10002345003281, LES_A) は、ESI が 100023450032 で、セレクターが 81 の LE クライアントを、LES A に割り当ててを意味しています。

LE クライアントの ATM アドレスが与えられると、LECS は最初に ESI とセレクターが一致するものを探します。一致が戻されなかった場合、LECS は、一致するプレフィックスが最も長い ATM アドレス・プレフィックス・ポリシー値を探します。したがって、上記の例のポリシーは、ポリシー値 (39999999999999990000, LES_B) より優先されます。

ATM アドレス ESI とセレクター・ポリシー値を使用すると、LE クライアントの物理的な場所から独立した形で、クライアントを LES に割り当てることができます (ESI とセレクターは、ローカルでクライアントに定義されます)。ATM アドレス・プレフィックスが、地理情報を示す唯一のポリシー値です。

LAN あて先ポリシー

MAC アドレスまたはルート記述子に基づいて、LE クライアントを LES に割り当てることができます。LAN あて先は、地理的な場所から独立した形で LE を固有に識別するので、このポリシーは、LE クライアントを物理的な場所とは関係なく (たとえば、ワークステーションをあるスイッチから別のスイッチに移動するときに、そのメンバーシップを保持したままで) 正しい ELAN に確実に割り当てることができるので便利です。

ELAN ネーム・ポリシー

ELAN ネームは、おそらく最も柔軟な割り当て基準です。以下に、ELAN ネーム・ポリシー値を使用できる方法をいくつか挙げます。

- ELAN の実名の使用

LES_A が Elan 1 にサービスする場合は、ポリシー値 (Elan 1, LES_A) を作成します。この場合、構成要求で Elan 1 を指定している LE が、LES_A に割り当てられます。

- ELAN の別名の使用

たとえば、経理部に属するすべての LE クライアントは ELAN ネーム *Accounting* を使用し、技術部に属するすべての LE クライアントは ELAN ネーム *Engineering* を使用するように構成することができます。ELAN 上の LE クライアントの数に応じて、これらの名前を同じ ELAN に割り当てる場合は、ポリシー値を次のように構成します。

```
(Accounting, LES_A)  
(Engineering, LES_A)
```

あるいは、異なる ELAN に割り当てる場合は、ポリシー値を次のように構成します。

```
(Accounting, LES_A)  
(Engineering, LES_B)
```

この設定の場合は、LE クライアントに正しい ELAN ネームを構成することが必要です。

LAN エミュレーションの概説

- LE クライアントの名前の使用

各 LE クライアントに独自の名前を与えることができます。たとえば、ポリシー値 (Joe, LES_A) と (Mary, LES_A) を作成できます。この場合、これらの名前を構成された LE クライアントは、同じ LES に割り当てられることになります。この方法では、個々の LE クライアントと LECS で、ELAN ネームを構成する必要があります。ただし、Joe と Mary はクライアントを新しい場所に移動することができます。移動によって、クライアントは新しい ATM アドレスまたは MAC アドレスを持つことになりますが、新しい LE クライアントを同じ ELAN ネームで構成する限り、元の ELAN のメンバーシップが保持されます。各 LE クライアントの名前をパスワードと見なせば、この方式は適度のセキュリティーも提供することになります。

ELAN タイプ・ポリシー

ELAN タイプ・ポリシー値は、デフォルト ELAN を提供する場合に非常に便利です。たとえば、次のポリシー値は、個々の LE クライアントが確実に LES の 1 つに割り当てられます。

(Token-ring ELAN Type, LES_A)
(Ethernet ELAN Type, LES_B)
(Unspecified ELAN Type, LES_C)

一般的には、デフォルト ELAN 割り当てを提供するポリシーには低い優先順位を与え、特定のポリシーが先に考慮されるようにすべきです。

最大フレーム・サイズ・ポリシー

最大フレーム・サイズ・ポリシーも、デフォルト ELAN 割り当てを提供するのに使用できます。

重複ポリシー値

特定のポリシーの複数の LES に対して同じポリシー値が対応している場合に、重複が起きます。ELAN タイプ・ポリシーと最大フレーム・サイズ・ポリシーでは、重複ポリシー値は許容されますが、その他のポリシーでは認められません。重複値が便利なのは、同じ優先順位の異なるポリシーと組み合わせる場合だけです。

たとえば、次のような 3 つの ELAN があるとします。最大フレーム・サイズが 4544 バイトのイーサネット ELAN、最大フレーム・サイズが 4544 バイトのトークンリング ELAN、および最大フレーム・サイズが 18190 バイトの別のトークンリング ELAN です。ELAN タイプ・ポリシーと最大フレーム・サイズ・ポリシーを同じ優先順位に設定し、次のポリシー値を定義することにより、LE クライアントを該当する ELAN に割り当てることができます。

(Ethernet ELAN Type, LES_1) (Max Frame Size = 4544, LES_1)
(Token-Ring ELAN Type, LES_2) (Max Frame Size = 4544, LES_2)
(Token-Ring ELAN Type, LES_2) (Max Frame Size = 18190, LES_2)

TLV に関するその他の情報

TLV は、ELAN ベースで定義されます。したがって、特定の ELAN に割り当てられるすべての LE クライアントに、同じ TLV セットが戻されます。構成応答に TLV が含まれている場合、LE クライアントは TLV に指定されている値を動作パラメー

ターとして使用することが**必要**です (LE クライアントがその ELAN タイプを認識できる場合)。TLV が有益と考えられる状況の例を、以下に幾つか挙げます。

- ELAN が地理的に大きな場所に広がっている場合は、LE クライアントのデフォルトのタイムアウト値では不十分な場合があります。すべての LE クライアントのタイムアウト値は、LECS で TLV にそれぞれの値を指定することによって制御できます。
- デフォルトでは、ELAN はベストエフォート接続を使用して BUS に接続します。BUS トラフィックが多い ELAN の場合、BUS への予約帯域幅接続を使用することにより、性能の向上を図ることができます。LE クライアントと BUS 間のマルチキャスト・センド VCC の特性は、TLV を用いて制御することができます。
- TLV を使用して、ELAN セグメント番号をソース・ルート・ブリッジにダウンロードすることができます。

TLV は、構成の微調整に加えて、ELAN 上のすべてのクライアントが矛盾のないパラメーターで動作することを要求します。IBM 2216は、すべての ATM フォーラム定義の TLV、ならびに任意のユーザー定義の TLV をサポートします。

LES への接続

LES への ATM アドレスを入手した後、LE クライアントは LES へのコントロール・ダイレクト VCC を開始します。この VCC が確立されると、LE クライアントは LE_JOIN_REQUEST を LES に送信します。LES は、LE クライアントを該当するポイント・マルチポイント間コントロール・ディストリビュート VCC に追加し、LE_JOIN_RESPONSE を戻して応答します。デフォルトでは、図17 に示すように、LES はプロキシ・クライアントと非プロキシ・クライアントを区分して、別々のコントロール・ディストリビュート VCC に割り当てますが、必要なポイント・マルチポイント VCC の数を減らすために、すべての LE クライアントに対して単一のコントロール・ディストリビュート VCC を使用するように構成することも可能です。VCC を区分すると、非プロキシ・クライアントに送信される妨害トラフィックが減るので、一般的には有用です。296ページの『アドレス解決』で説明するように、LE_ARP_REQUEST が非プロキシ LE クライアントに送信されることはありません。

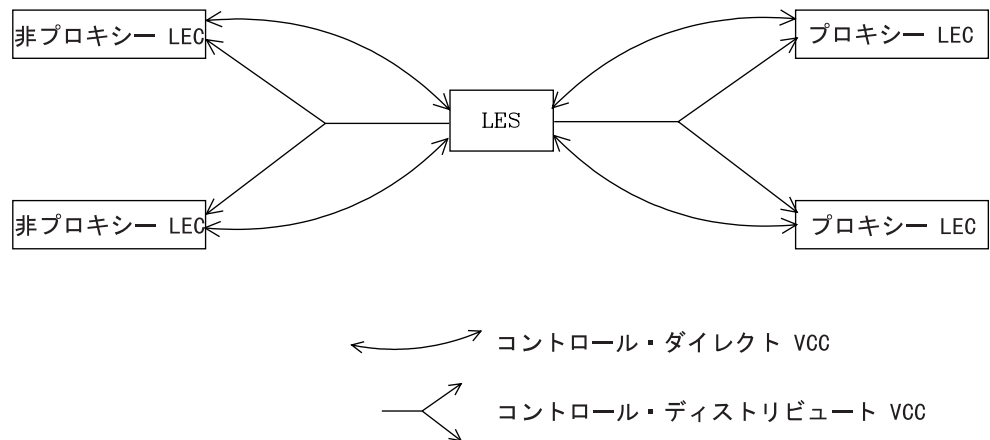


図 17. LE クライアントと LES 間のデフォルト接続

LAN エミュレーションの概説

LE クライアントと LES 間に、以下の ATM 接続が確立されます。

コントロール・ダイレクト VCC (双方向、ポイント・ポイント)

LE クライアントから LES へ

コントロール・ディストリビュート VCC (ポイント・マルチポイント)

LES から LE クライアントへ

アドレス登録

LE クライアントは、LAN あて先を LES に登録して固有性を確保し、LES が LE_ARP_REQUEST (LE クライアントが、特定の LAN あて先に対応する ATM アドレスを確認するために出す) に応答できるようにします。登録するのは、LAN あて先と、LE クライアントがその LAN あて先に対応する ATM アドレスです。LAN あて先は、MAC アドレスまたはルート記述子のいずれでも構いません。

プロキシ LE クライアントは、それが ELAN にブリッジしている LAN セグメント上のステーションの MAC アドレスを登録しません。これに対して、非プロキシ LE クライアントは、それが表す LAN あて先をすべて登録する必要があります。ルート記述子は、対応する LE クライアントがプロキシであるか、非プロキシであるかに関係なく、すべて登録する必要があります。ルート記述子を適用できるのは、ソース・ルート・ブリッジングを実行しているプロキシ LEC だけです。ルート記述子には、プロキシ LE クライアントのブリッジ番号と、LE クライアントがブリッジしている先のリンクのセグメント番号 (1 ホップの隔たりに相当する) が入っています。

アドレス解決

LAN 通信は、発信元とあて先の MAC アドレスが基礎になります。このような通信を ATM ネットワーク上で可能にするためには、MAC アドレスを ATM アドレス変換 (解決) することが必要です。LE クライアントは、LE_ARP_REQUEST を LES に送信して、特定の LAN あて先の ATM アドレスを確認します。LAN あて先が登録されている場合、LES はその LAN あて先に対応する ATM アドレスで応答します。そうでない場合は、要求はコントロール・ディストリビュート VCC 上のすべてのプロキシ LE クライアントに転送されます。非プロキシ LEC は、それぞれの LAN あて先がすべて登録されているので、要求を転送する必要はありません。ただし、LES が単一のコントロール・ディストリビュート VCC を使用するように構成されている場合には、プロキシおよび非プロキシの両方の LE クライアントが要求を受け取ることになります。コントロール・ディストリビュート VCC は、LES が複数の LE クライアントに制御フレームを配布するための効率的な手段を提供します。

プロキシ LE クライアントは、それが表す未登録 MAC アドレスに対する LE_ARP_REQUEST に応答します。LE_ARP_RESPONSE は、コントロール・ダイレクト VCC で LES に送信され、LES は要求を出した LE クライアントに応答を転送します。

BUS への接続

LES に接続した後、LE クライアントはオール 1 の同報通信 MAC アドレスに対して LE_ARP_REQUEST を出します。LES は、BUS の ATM アドレスで応答します。次に LE クライアントは、BUS へのマルチキャスト・センド VCC の確立を開始します。BUS は、LE クライアントを該当するポイント・マルチポイント間マルチキャスト・フォワード VCC に追加することによって応答します。デフォルトでは、プロキシ・クライアントと非プロキシ・クライアントを区分して、別々のマルチキャスト・フォワード VCC に割り当てますが、コントロール・ディストリビュート VCC の場合と同様に、すべての LE クライアントに対して単一のマルチキャスト・フォワード VCC を使用するように BUS を構成することも可能です。図18 は、分割されたマルチキャスト・フォワード VCC を示します。

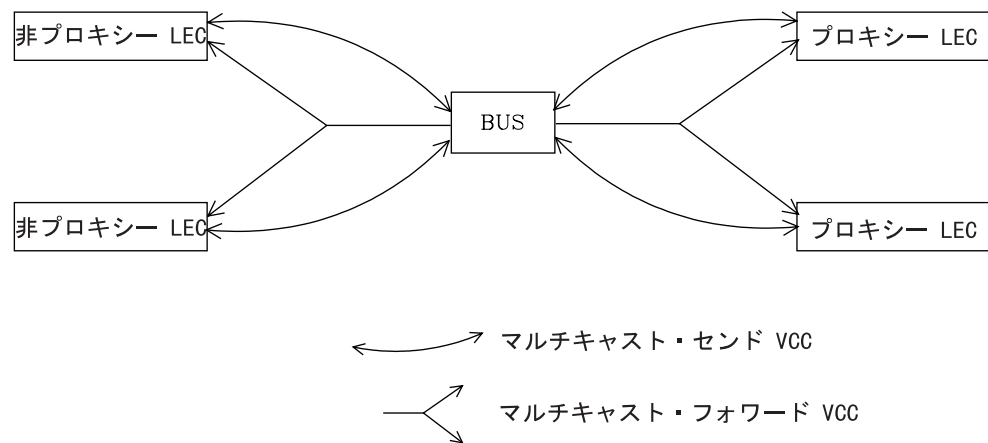


図18. LE クライアント (LEC) と BUS 間のデフォルト接続

LE クライアントと BUS 間に確立される ATM 接続を明確にするために、次のリストを示します。

マルチキャスト・センド VCC (双方向、ポイント・ポイント)

LE クライアントから BUS へ

マルチキャスト・フォワード VCC (ポイント・マルチポイント)

BUS から LE クライアントへ

BUS 機能

BUS には 2 つの基本機能があります。

1. マルチキャスト・フレームを ELAN 内のすべての LE クライアントに配布する。
2. ユニキャスト・フレームを該当するあて先に転送する。

LE クライアントがユニキャスト・フレームを BUS に送信するのは、あて先を表す LE クライアントへの直接接続がない場合です。BUS にネックが生じるのを避けるために、LE クライアントが BUS にユニキャスト・フレームを送信できる速度には制限があります。

LAN エミュレーションの概説

このルーターの実現では、BUS には 2 つの動作モードがあります。つまり、ユニキャスト・フレーム領域の区分化と、ユニキャスト・フレーム領域の非区分化です。ユニキャスト・フレーム領域を区分化した場合、BUS は 2 つのマルチキャスト・フォワード VCC を使用します。そうでない場合、BUS は単一のマルチキャスト・フォワード VCC を使用します。

単一のマルチキャスト・フォワード VCC が使用される場合、BUS の動作は非常に単純です。受信したすべてのフレームがすべての LE クライアントに転送されるだけです。2 つのマルチキャスト・フォワード VCC が使用される場合、BUS はユニキャスト・フレームをすべての LE クライアントに同報通信する必要はありません。代わりに、非プロキシー・クライアントあてのユニキャスト・フレームが、マルチキャスト・センド VCC であて先 LE クライアントに直接転送され、それ以外のすべてのユニキャスト・フレームは、プロキシー・マルチキャスト・フォワード VCC を使用して、プロキシー LE クライアントにだけ転送されます。2 つのマルチキャスト VCC が使用される場合、ルーターはインテリジェント BUS (IBUS) モードにあるものと見なされます。

IBUS では、妨害ユニキャスト・フレーム (クライアントあてでないユニキャスト・フレーム) が減ります。プロキシー・クライアントは非プロキシー・クライアントあてのユニキャスト・フレームを受信せず、非プロキシー・クライアントが妨害ユニキャスト・フレームを受信することは決してありません。妨害フレーム専用のネットワークの帯域幅も減ります。一方、BUS の処理の所要量は増え、マルチキャスト・フレームは 2 回 (各マルチキャスト・フォワード VCC ごとに 1 回) 転送する必要があります。一般的には IBUS 動作が推奨されますが、非プロキシーとして ELAN に加入するソース・ルート・ブリッジをもつ構成では、このオプションを使用不可にする必要があります。

データ・ダイレクト VCC の確立

データ・ダイレクト VCC は、2 つの LE クライアントを接続し、BUS が介在せずにユニキャスト・フレームを交換するのに使用されます。LE クライアントは、アドレス解決手順を使用して、必要な LAN あて先に対応した ATM アドレスを判別します。LE クライアントがすでにその ATM アドレスへのデータ・ダイレクト VCC を持っている場合 (おそらく、そのターゲット LE クライアントによって表される別の LAN あて先への)、以降のユニキャスト・フレームは既存の VCC 上で伝送されます。そうでない場合は、LE クライアントは信号プロトコルを起動して、新しい VCC を確立します。

LE クライアントは、LAN あて先と ATM アドレスのマッピングが入っている LE_ARP キャッシュを維持します。このキャッシュのエントリーはエージング (経時処理) されるので、定期的に更新する必要があります。LAN あて先からデータ・フレームを受信すると、エントリーは更新されます。データ・トラフィックがないときでも、LE クライアントはエントリーの更新を試みます。

また、データ・ダイレクト VCC の使用状況が監視され、VCC タイムアウト期間 (これは構成可能) にトラフィックがないと、VCC は解放されます。利用可能な資源が不十分なために新規データ・ダイレクト VCC を正常に確立できない場合も、LRU (最も古くに使用されたものから順に) 方式でデータ・ダイレクト VCC が解放されます。

LAN エミュレーションの拡張機能の概説

IBM では、ルーター上で利用可能な ATM フォーラム LAN エミュレーションに付加価値の機能強化を実施しました。これらの機能強化により、性能、信頼性、セキュリティ、および管理性の向上が図られています。

ブロードキャスト・マネージャー (BCM)

この機能は、ELAN の同報通信を減らすことにより、ネットワーク全体の性能を向上させます。

冗長度 冗長機構は、1 次サーバーに障害が生じたときにバックアップ・サーバーに引き継ぐことを可能にし、信頼性を高めます。

セキュリティ

LECS に ELAN メンバーシップを制御させることにより、セキュリティが向上します。

BUS モニター

この機能は、BUS の上位ユーザーを識別することにより、管理を強化します。

以下の各節では、これらの拡張機能のそれぞれについて説明します。

ブロードキャスト・マネージャー

ブロードキャスト・マネージャー (BCM) は、IBM による LAN エミュレーション BUS 拡張機能からなる LAN エミュレーションの拡張です。BCM がないと、以下のイベントが起こります。

- BUS に送信されたマルチキャスト・フレームが、ELAN 上のすべての LE クライアントに転送される。
- ブリッジング・サポートを提供するためにプロキシー機能が組み込まれている LE クライアントは、同報通信フレームを他の LAN セグメントに転送する。
- すべてのエンド・ステーションが、すべての同報通信フレームを受信して処理する。

BCM は、個々の ELAN 上で次のプロトコルに対して使用可能にすることができます。

IP

IPX

NetBIOS

BCM が使用可能な場合、BUS に送信される特定タイプの同報通信フレームの最少量のレイヤー 2 およびレイヤー 3 情報が復号されます。可能な場合はいつでも、BCM は同報通信フレームをユニキャスト・フレームに変換し、それを関係のある LE クライアントとエンド・ステーションにのみ送信します。BCM は、妨害同報通信フレームをフィルターすることにより、ネットワーク・トラフィックと関連エンド・ステーションの両方のオーバーヘッドを減らします。これらの機能により、システム全体の性能を高め、より大規模な ELAN の実用化を可能にします。

IP の BCM サポート

IP に対して使用可能にすると、BCM はすべての IP ARP 要求と応答をスキャンし、この ELAN を含む IP サブネット内の IP アドレスのロケーションを確認します。その目的は、BCM が各同報通信 ARP 要求フレームを受け取り、それをユニキャスト・フレームとして直接、ターゲット IP ステーションを表す LE クライアントに転送することにあります。要求は、マルチキャスト・フォワード VCC を通してすべての LE クライアントに同報通信されるのではなく、マルチキャスト・センド VCC で該当する LE クライアントに直接転送されるので、ネットワーク上のトラフィックとエンド・ステーションの処理の両方が削減されます。あて先ステーションがブリッジ機能の背後にある場合は、その着信ステーションが属する LAN も、同報通信トラフィックの削減の恩恵を受けることになります。

IPX の BCM サポート

IPX の場合は、BCM は公示およびその他の同報通信要求の有効範囲を制限します。IPX ルーターおよびサーバーは、それぞれが知っているネットワーク情報およびサービス情報を定期的に同報通信します。IPX クライアントは同報通信要求を送信して、特定のサービスまたはルーターを見付けます。一般的には、これらの同報通信は、ルーティング情報プロトコル (RIP) パケットおよびサービス公示プロトコル (SAP) パケットと呼ばれ、他の IPX ルーターおよびサーバーだけが受信すればよいものです。

BCM を IPX に対して使用可能にすると、BCM は公示伝送に基づいて IPX ルーターおよびサーバーの集合を動的に識別し、RIP 公示および SAP 公示と、その他の同報通信要求を他の IPX ルーターおよびサーバーに転送するだけです。BCM IPX の管理を受ける同報通信フレームは、一連のユニキャスト・フレームとして、動的に確認された一組の IPX ルーターおよびサーバーに送信されます。

BCM IPX Server Farm Detection (サーバー・ファーム検出機能) が使用可能にされている場合は、特定の LEC の背後で検出された IPX ルーターおよびサーバーの数が構成可能なしきい値である、BCM IPX サーバー・ファームしきい値を超えると、BCM IPX は IPX サーバーを検出します。サーバー・ファームが検出されると、BCM IPX は、そのサーバー・ファーム内の各ダウンストリーム IPX ルーターおよびサーバーに複数のユニキャスト・フレームを送信するのではなく、サーバー・ファームを表す各 LEC に管理フレームを同報通信します。こうして、BCM IPX は同報通信機構のインテリジェントな使用が望ましいエリアでそれを行うことができることとなります。

BCM を使用可能にした場合は、IPX 公示を受信する必要がある静的装置 (つまり、IPX 公示を送信しない装置) を BCM 静的ターゲットとして構成する必要があります。このような装置の例としては、IPX 公示を監視することにより IPX ネットワーク・トポロジを検出するソフトウェアを実行するステーションがあります。

BCM IPX Server Farm Detection (サーバー・ファーム検出機能) が使用可能にされているとき、特定の LEC が BCM IPX によってサーバー・ファームとして処理されることがないようにしたい場合は、LEC の ATM アドレスをもち、MAC アドレスが 00.00.00.00.00.00 の BCM 静的ターゲットを構成します。こうすれば、検出されたルーターおよびサーバーの数がたとえ BCM IPX サーバー・ファームしきい値を超えた場合でも、BCM IPX は、BCM の管理を受けるフレームを複数のユニキャスト・フ

フレームとして、この LEC の背後で検出された各ダウンストリーム IPX ルーターおよびサーバーに強制的に送信することになります。

NetBIOS の BCM サポート

NetBIOS は同報通信を多用するプロトコルと見なされているので、BCM には最適な用途です。NetBIOS 通信は名前に基づいて行われます。送信側ステーションは、照会を同報通信するか、フレームを NetBIOS 機能アドレスにマルチキャストすることにより、特定のあて先名に対応した MAC アドレスを確認することができます。後者の場合、ネットワーク上のすべての NetBIOS 装置がフレームを受信し、フレームのあて先名が自身に該当するかどうかを判別する必要があります。さらに悪いことに、NetBIOS 装置は特定タイプのフレームの転送を 10 回も繰り返す傾向があります。従来、これはネットワークの輻輳（ふくそう）がひどい場合に、すべての装置が確実にフレームを受信できるようにするために取られた処置です。

BCM 戦略は、BUS に送信された NetBIOS フレームから名前を確認して、固有の NetBIOS 名を MAC アドレスと LE クライアントに対応付けます。固有の NetBIOS 名が確認された後は、その名前あての後続の NetBIOS 同報通信フレームは、単一の LE クライアントにユニキャスト・フレームとして転送されます。また、BCM は、繰り返し同報通信される特定の NetBIOS フレームをフィルターします。

BCM は、NetBIOS 名前共用に対するサポートを提供します。つまり、BCM NetBIOS は、複数の LAN アダプターが同じ NetBIOS 名を共用する OS/2 LANServer ステーションを処理します。

ソース・ルート・ブリッジの BCM サポート

ソース・ルート・マネージメント (SRM) は、802.5 ELAN 用に構成できる追加 BCM フィーチャーです。このフィーチャーが使用可能にされているときは、BCM IP または BCM NetBIOS の管理を受けるフレームをさらに処理し、可能な場合はいつでも、全ルート探索 (ARE) フレームまたはスパンニング・ツリー探索 (STE) フレームを特別ルート・フレーム (SRF) に変換します。フレームを SRF に変換すれば、そのフレームはブリッジ・ネットワークの各リングに転送する必要がなくなります。

各 LE クライアントの背後のトークンリング・トポロジーは、BUS が受信したフレームのルーティング情報フィールド (RIF) を記録することにより確認されます。SRM はトークンリング・トポロジー情報を動的に確認するため、エイジング機構を使用して、最近更新されていない情報を除去します。

BCM または SRM (あるいは、その両方) を使用可能にするかどうかを決める際は、ネットワーク・システム全体の利益と、BCM または SRM を使用可能にすると不可避のパケット転送速度の低下とを比較してみる必要があります。

注: ブロードキャスト・マネージャーおよびソース・ルート・マネージメント機能は、**bus-mode** が *adapter* に設定されている場合は利用できず、使用可能にすることはできません。

LAN エミュレーションの信頼性

堅固さの欠如が、これまでの LAN エミュレーションに対する最も大きな批判の 1 つでした。ATM フォーラムでは、LE サービス配布の仕様を用いてこの問題の解決に取り組んでいます。ルーターはその中間解答の 1 つを提供するものです。図 19 は、MSS 冗長問題の解決の枠組みを示しています。

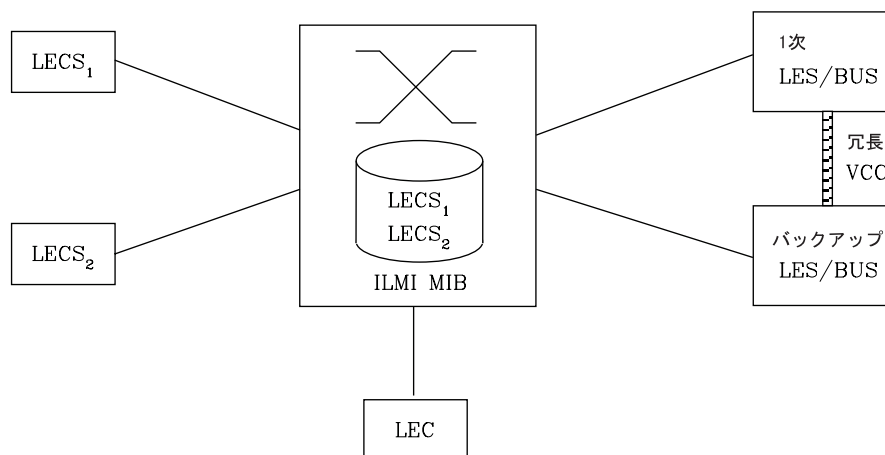


図 19. LAN エミュレーションの冗長度

各 LES/BUS を独立して構成することにより、冗長度をもたせることができます (デフォルトでは冗長度なし)。冗長度が使用可能な場合、LES/BUS は 1 次またはバックアップの役割を担うように構成されます。冗長 LES/BUS として構成されていない場合は、LES/BUS は 1 次です。通常は、LE クライアントから見える LES/BUS は、1 次 LES/BUS だけです。これがバックアップ LES への冗長 VCC の設定と維持の責任を持ちます。この VCC が存在することは、1 次 LES/BUS が運用可能であることを示しています。冗長 VCC が確立されている間は、バックアップ LES はコントロール・ダイレクト VCC を受け入れませんが、冗長 VCC が存在しない場合は、バックアップ LES/BUS は通常どおりに ELAN 要求にサービスします。

冗長プロトコルが有効であるためには、LE クライアントは 1 次 LES/BUS を検出し、バックアップに接続しなければなりません。LE クライアントは VCC の解放によってサーバーの障害を検出します。バックアップ LES/BUS への接続は、LECS を介して行われます。

LE_CONFIGURE_REQUEST を受信すると、LECS は LE クライアントを該当する LES および ELAN に割り当てます。この LES にバックアップが構成されていない場合、LECS は LES の ATM アドレスを戻します。LES にバックアップ LES が構成されている場合には、LECS は 1 次またはバックアップ LES アドレスを戻します。

LECS がバックアップ LES アドレスを戻すのは、バックアップ LES が LECS と同じ MSS サーバー上に存在し、現在 ELAN として機能している場合、1 次 LES が LECS と同じ MSS サーバー上に存在し、現在 ELAN として機能していない場合、あるいはどちらの LES も LECS と同じ MSS サーバー上に存在せず、クライアントが 1 次 LES に割り当てられた最後のクライアントである場合 (過去 5 分以内) です。それ以外の場合は、1 次 LES アドレスが LE クライアントに戻されます。

LECS は、すべてのクライアント割り当ての短期メモリーを保存し、LE クライアントの割り当てを 1 次とバックアップ LES 間で交代できるようにしています。この単純なヒューリスティックは、名目上、無障害で正しい割り当てを行い、自動修正します。最悪の場合でも、このヒューリスティックは、LE クライアントを ELAN に加入させる構成フェーズを繰り返すだけです。

LECS 堅固さは、複数のプラットフォームに重複 LECS を設定し、それらの ATM アドレスを ILMI データベースに含めることによって達成できます。これで、1 次 LECS が利用不能の場合に、LE クライアントはバックアップ LECS に接続するようになります。

LAN エミュレーションのセキュリティ

従来型の LAN では、物理接続により、2 つのステーションが同じ LAN 上にあることが暗黙に示されるので、その意味ではセキュリティが提供されています。複数のエミュレートされた LAN が単一の ATM ネットワーク上に存在できるので、ELAN 上に存在しないステーションが ELAN 上のステーションに物理的に接続することが可能です。このような状態では、不許可ステーションが LES に接続し、そのサービスの使用を試みることができるので、セキュリティ上の危険が生じます。

ELAN メンバーシップを制御するために、LECS で LE_JOIN_REQUEST を検証するように MSS LES を構成することができます。このモードでは、LES は LE_JOIN_REQUEST からの情報を使用して、LE クライアントに代わって、LE_CONFIGURE_REQUEST を作成します。これらの LE_CONFIGURE_REQUEST には、IBM セキュリティ TLV と共に、発信元 LAN あて先、発信元 ATM アドレス、ELAN タイプ、最大フレーム・サイズ、LE_JOIN_REQUEST からの ELAN 名が入っています。セキュリティ要求は、LECS インターフェースと呼ばれる多重化コンポーネントによって LECS に転送され、LECS はその要求を ELAN 割り当てデータベースを用いて検証してからでない、LE クライアントは ELAN への加入を認められません。

LECS インターフェースは ATM インターフェースに対応しており、ATM インターフェース上に構成されたすべての LES が同じ LECS インターフェースを使用します。LECS インターフェースは、複数の LES からのセキュリティ要求を多重化して単一の VCC で LECS に送ることにより、VCC 資源を節約します。LECS インターフェースは、ILMI および事前割り当て LECS アドレス機構を使用して、LECS を動的に見つけます。LECS への VCC を確立した後、LECS インターフェースはローカル照会を出して、LECS が同じルーター上にあるかどうかを調べます。LECS が同じルーター上にある場合は、ATM ネットワーク上に要求を転送しないで、ローカル・インターフェースを使用して、加入の要求を確認します。

LECS インターフェースによって、ルーターは、LE Client が ELAN に加入するのは、LECS がその加入を承認した場合だけであることを保証することができます。こうして、セキュリティの負担は LES から LECS にシフトされます。残念ながら、LECS はやはり無保護です。LECS は、どのステーションからの接続および照会でも検証なしで受け入れます。侵害を図るステーションがあれば、LECS に接続し、さまざまな構成について繰り返し照会することもできます。この侵害ステーションは、他のステーションを装って、別のステーションの構成をダウンロードする場合もあり得ます。

LAN エミュレーションの概説

LECS アクセス制御によって、ユーザーは、LECS 構成データベースへのアクセスを許可されていない ATM アドレス・プレフィックスのリストを構成することができます。一致する ATM アドレスからの LECS 接続の試みおよび LE_CONFIGURE_REQUEST は、すべて自動的にリジェクトされます。LECS インターフェースと一緒に使用すれば、安全な LANE 環境が得られます。

ELAN のセキュリティーを最大化するために、以下のステップを実行することをお勧めします。

1. LECS で、ATM アドレスを使用して、クライアントを LES に割り当てる。詳細については、290ページの『LECS 機能の概説』を参照してください。
2. ルーター上の LECS インターフェースを起動する。
3. LES のセキュリティー・オプションを起動する。
4. LECS へのアクセスを許可してはならない ATM アドレス・プレフィックスがあれば、それに対して LECS アクセス制御を起動する。
5. ATM スイッチで アドレス・スクリーニング を使用する。このオプションにより、スイッチはコーリング・ステーションがコール設定で実際の ATM アドレスを使用しているかどうかを検証します。これにより、ステーションは他のステーションを偽装することはできません。

これらのステップにより、確実に、ステーションを正しく識別し、許可されたステーションのみを ELAN に加入させることができます。

LAN エミュレーションの主要な構成パラメーター

この節では、ルーターの LAN エミュレーション・コンポーネントの必須構成パラメーターについて、簡単に説明します。LAN エミュレーション・コンポーネントの ATM インターフェースを定義してからでないと、コンポーネントを作成することはできません。

1. LEC:

LE クライアントを作成するのに必要なのは、ELAN タイプを指定することだけです。1つの ATM インターフェース上に2つの LE クライアントを定義し、それらを一緒にブリッジする場合には、LE クライアントの1つはデフォルト以外の MAC アドレスを使用することが必要です。デフォルトでは、LE クライアントは ATM インターフェースの出荷時設定 MAC アドレスを使用します。デフォルトの最大フレーム・サイズは、イーサネット LE クライアントの場合は 1516 バイトで、トークンリング LE クライアントの場合は 4544 バイトです。

第26章 ATM の使用

この章では、ATM インターフェースの使用法について説明します。この章は以下の節に分かれています。

- 『ATM と LAN エミュレーション』
- 『アドレスを入力する方法』
- 306ページの『ATM-LLC 多重化』
- 306ページの『ATM バーチャル・インターフェースの概念』

ATM と LAN エミュレーション

LAN エミュレーションは、ATM ネットワークを介するバーチャル・トークンリングおよびイーサネット LAN に対するサポートを提供します。ATM アドレッシングについては、『アドレスを入力する方法』を参照してください。

アドレスを入力する方法

アドレスを入力する方法は、アドレスが (1) IP アドレスであるか、あるいは (2) ATM アドレス、MAC アドレス、またはルート記述子であるかによって、2 通りの方法があります。

1. IP アドレス

IP アドレスは、小数点付き 10 進数で入力し、4 バイト・フィールドに 4 つの 10 進数 (0 ~ 255) をピリオド (.) で区切って指定します。

IP アドレスの例

01.255.01.00

2. ATM アドレス、MAC アドレス、またはルート記述子

ATM アドレス、MAC アドレス、およびルート記述子は、16 進文字列として入力し、バイト間の区切り文字はオプションで、付けても付けなくても構いません。有効な区切り文字は、ダッシュ (-)、ピリオド (.), またはコロン (:) です。

ATM アドレス、MAC アドレス、またはルート記述子の例

A1FF01020304

または

A1-FF-01-02-03-04

または

A1.FF.01.02.03.04

または

39.84.0F.00.00.00.00.00.00.00.00.03.10.00.5A.00.DE.AD.08

または

A1:FF:01:02:03:04

または

A1-FF.01:0203:04

各タイプのアドレスに必要な 16 進文字数は、それぞれ異なります。

ATM 40

MAC 12

ESI 12

ATM と LAN エミュレーションの構成

ルート記述子

4

この情報は、ATM、LAN エミュレーション、ATM を介するクラシカル IP と ARP、および ATM を介する IPX と ARP に対して入力するアドレスに適用されます。

ATM-LLC 多重化

ATM インターフェースを介して固有に実行されるプロトコルは、ATM-LLC 多重化を使用して、ATM アドレスと SVC および PVC の両方のチャンネルを、ユーザー間で共用することができます。ATM-LLC は、プロトコルを構成するときに暗黙に構成され、`t 5` から `ATM Config+` コマンド・プロンプトを使用して監視することができます。ATM-LLC 多重化機能の明示的な構成オプションはありません。たとえば、ATM-LLC 多重化を使用する 2 つのプロトコルが同じローカル ATM アドレス (ローカル・エンドポイント) を使用するように構成されている場合、これは暗黙に、両方のプロトコルが同じ共用 ATM アドレスを使用するように構成していることとなります。

詳細については、323ページの『ATM-LLC 監視コマンド』を参照してください。

ATM-LLC 多重化機能を使用するプロトコルと ATM-LLC 多重化機能を使用しないプロトコル (クラシカル IP など) の間で、ATM アドレスまたは SVC/PVC チャンネルを共用することはできません。現在、ATM-LLC 多重化機能を使用できるプロトコルは、サーバー・キャッシュ同期プロトコル (SCSP) と APPN の 2 つだけです。

ATM バーチャル・インターフェースの概念

ATM バーチャル・インターフェース (AVI) は、実際には 1 つの物理インターフェースしか存在しないのに、複数の ATM インターフェースがあるような様相を呈します。ルーター上の各物理 ATM インターフェースに対して、複数の AVI を構成することができます。AVI には、次のような特性があります。

- 各 AVI は、1 つの (そして、1 つだけの) 物理 ATM インターフェースに定義する必要があります。以下では、物理 ATM インターフェースを意味するものとして、ATM 実インターフェース (ARI) を使用します。
- ルーター上の各 ARI には、複数の AVI を構成することができます。
- 高位レイヤーのプロトコルは、ARI と AVI を同等に扱います。プロトコルは、ATM インターフェースの合計数を、ルーター上に構成された ARI と AVI の数の合計と見なします。
- プロトコルは、他のインターフェースからは独立して、各 ATM インターフェース (実または仮想) ごとに構成することができます。

たとえば、インターフェース 0 (これは、実 ATM インターフェース) では IP アドレス 9.1.1.1 を用いて IP を構成し、インターフェース 1 (これは AVI) ではアドレス 9.2.1.1 を用いて IP を構成することができます。インターフェースが実 ATM インターフェースであるか、実インターフェースに構成されたバーチャル・インターフェースであるかは、プロトコル (たとえば、IP) にとっては違いはありません。

ATM バーチャル・インターフェースの概念

せん。また、バーチャル・インターフェース 1 が、実 ATM インターフェース 0 上に構成されているのか、他の物理 ATM インターフェース上に構成されているのかも、プロトコルにとっては無関係です。

ATM バーチャル・インターフェースの使用による利点

ATM バーチャル・インターフェースを使用することによる主な利点は、次のとおりです。

- ATM バーチャル・インターフェース機構を使用すると、物理 ATM インターフェースでサポートできるプロトコル・インスタンスが増えます。

ARI 上に構成できる AVI の実際数は、ルーター上で利用可能な物理資源（メモリなど）によって制限されます。作成できるインターフェースの合計数は、インターフェースのデータ・パケット・サイズによって異なりますが、最大数はルーター当たり 253 に限定されています。

AVI を使用すると、ATM インターフェース当たり 1 インスタンス（または、アドレス）に制限されているプロトコル（IPX など）の構成オプションが、大きく改善されます。適切な数の AVI を構成することによって、各物理 ATM インターフェースが複数の IPX アドレスをサポートできるようになります。

- ATM バーチャル・インターフェース機構は、ATM ネットワーク上でマルチキャスト・ルーティング・プロトコル（MOSPF など）をサポートするために欠かせないものです。

マルチキャストが正しく動作するためには、各論理サブネットを異なるインターフェース上に構成する**必要**があります。マルチキャスト・ルーティング・プロトコルは、通常、ルーター・インターフェースから着信したパケットは、決して同じインターフェースを介して送信されないという方法で動作するからです。つまり、あるインターフェースに 2 つ以上のサブネットが構成されており、あるサブネット内の発信元が、同じインターフェース上に定義された別のサブネット内のメンバーにマルチキャスト・パケットを送信する場合、このメンバーは決してそのパケットを受信することはありません。

各サブネットに対して個別のバーチャル・インターフェースを作成することによって、パケットのマルチキャストを正常に実行することができます。通常は、ルーター上の ATM インターフェースの数が制限され、そのために、マルチキャスト動作に正しく構成できるサブネットの数が制限されることとなります。しかし、AVI を（ルーター上に構成する必要があるサブネットの数に応じて）必要な数だけ作成すれば、物理 ATM インターフェースの数によって、ルーターに構成できるサブネットの数が制限されることはなくなり、正しいマルチキャスト動作を行えるようになります。

たとえば、『one-armed』ルーターは、AVI 機構がなければ、ELAN 以外のインターフェースを介したマルチキャスト・トラフィックをサポートできません。着信パケットは決して同じインターフェースから送信されることはなく、廃棄されてしまうからです。

- ARI 上に複数の AVI を作成し、同じ ARI 上の異なる AVI に異なるプロトコル・インスタンス（たとえば、各 IP サブネット）を構成することによって、性能の向上を図ることができます。

たとえば、1 つの物理 ATM インターフェース上に複数のサブネットが構成されている場合は、インターフェースは、最大伝送単位または MTU（そのインターフェー

ATM バーチャル・インターフェースの概念

スを紹介して送信または受信できる最大パケット・サイズ) を、同じインターフェースを共用するすべてのサブネットのうちの最小の MTU に減らすことが必要になります。しかし、その ARI に複数の AVI が作成されており、各 IP サブネットが異なる AVI 上に構成されている場合には、各サブネットは、同じ物理 ATM インターフェース上に構成された他のサブネットを考慮せずに、既存の MTU サイズを使い続けることができます。これにより、MTU サイズの縮小が原因で生じるパケットの分割と再組み立てに起因するスループットの低下および遅延を回避することができます。

さらに、物理インターフェースに構成されたプロトコル・アドレスの数を、同じ物理インターフェースに構成された異なるバーチャル・インターフェースに分散させることによっても、性能の向上を図ることができます。インターフェース当たりのプロトコル・リストが短縮されるので、探索が速くなり、処理時間を削減できるからです。

ATM バーチャル・インターフェースの使用による不利益

ATM バーチャル・インターフェースを使用した場合の不利益としては、以下のものがあります。

- AVI は独自の物理資源をもっていないので、各バーチャル・インターフェースで確立できるバーチャル・コネクション (VC) の数は、1 つの物理インターフェースで確立できる数より少なくなります。利用可能な資源 (この場合は、VC) は、1 つの ARI 上に構成された異なるバーチャル・インターフェースと ARI 自体の間に区分されます。

現行の実現では、資源の割り当てはオンデマンド方式になっています。各物理 ATM インターフェースが資源をプールしており、これをすべての AVI と 1 つの ARI 自体が利用できるようになっています。

注: すべての資源が ARI とそのすべての AVI 間で共用されるので、ARI に追加された ESI は、自動的に ARI 上に構成されたすべての AVI で利用可能になります。同じ ARI を使用する 2 つの異なるプロトコル・クライアントに対しては、それらが異なる AVI 上に構成されていても、同じ ESI とセレクターの組み合わせを割り当てるべきではありません。

ARI と ARI に基づいて構成された AVI にわたって許される PVC の共用は限定されたものです。PVC の共用は異なるプロトコル・インスタンスに限定されます。同一プロトコルの複数インスタンスが同じ PVC を共用することはできません。

第27章 ATM の構成と監視

この章では、ATM インターフェースの構成およびオペレーショナル・コマンドについて説明します。この章は以下の節に分かれています。

- 『ATM インターフェース構成プロセスへのアクセス』
- 310ページの『ATM 構成コマンド』
- 310ページの『ATM インターフェース構成コマンド』
- 318ページの『ATM バーチャル・インターフェース構成コマンド』
- 324ページの『ATM バーチャル・インターフェース監視コマンド』
- 319ページの『ATM 監視プロセスへのアクセス』
- 320ページの『ATM 監視コマンド』
- 320ページの『ATM インターフェース監視コマンド (ATM INTERFACE+ プロンプト)』
- 323ページの『ATM-LLC 監視コマンド』

ATM インターフェース構成プロセスへのアクセス

構成プロセスにアクセスするには、以下の手順を使用します。

1. OPCON プロンプトで **talk 6** と入力する。(このコマンドの詳細については、33ページの『第4章 OPCON プロセス』を参照してください。) たとえば、次のように入力します。

```
* talk 6  
Config>
```

コンソールに CONFIG プロンプト (Config>) が表示されます。最初に構成に入ったときにプロンプトが表示されない場合は **Return** をもう一度押してください。

2. CONFIG プロンプトで **list devices** コマンドを入力して、ルーターが現在構成されているネットワーク・インターフェース番号を表示する。
3. インターフェース番号を記録する。ATM がインターフェースとして指定されていない場合は、Config> プロンプトで **add device** コマンドを使用して、ATM インターフェースを作成してください。
4. **network** コマンドと構成する ATM の番号を入力する。たとえば、次のように入力します。

ATM 構成プロンプト (ATM Config>) が表示されます。

ATM 構成コマンド

この節では、ATM 構成コマンドの要約を示します。コマンドは ATM config> プロンプトで入力します。

表 37. ATM 構成コマンドの要約

コマンド	機能
? (Help)	このコマンド・レベルで使用可能なコマンドをすべて表示するか、特定のコマンドに関するオプション (ただし、選択可能な場合) をリストします。12ページの『ヘルプを得る』を参照してください。
INTERFACE	<p>ATM Interface Config> プロンプトを表示するので、ここから ATM インターフェースをリスト、変更、または構成することができます。</p> <ul style="list-style-type: none"> • ESI を追加する • 現行構成をリストする、または ESI をリストする • ESI を除去する • ATM ネットワークのパラメーターを設定する • ESI を使用可能または使用不可にする • 終了する
LE-CLIENT	<p>LE Client Config> プロンプトを表示するので、325ページの『第28章 LAN エミュレーション・クライアントの使用』で説明しているように、LAN エミュレーション・クライアント・インターフェースをリスト、変更、または構成することができます。</p> <ul style="list-style-type: none"> • トークンリングまたはイーサネットのエミュレートされた LAN に対して、LAN エミュレーション・クライアント (LEC) を追加する。 • ネットワーク # により LEC を構成する。このコマンドは LE Config> プロンプトを表示するので、ここから特定の LAN エミュレーション・クライアント (LEC) を構成することができます。 • LAN エミュレーション・クライアント (LEC) をリストする。 • LAN エミュレーション・クライアント (LEC) を除去する。
VIRTUAL ATM	<p>ATM Virtual Interface Config> プロンプトを表示するので、318ページの『ATM バーチャル・インターフェース構成コマンド』で説明しているように、ATM バーチャル・インターフェースをリスト、追加、または除去することができます。</p>
Exit	直前のコマンド・レベルに戻ります。13ページの『下位レベル操作環境を終了する』を参照してください。

ATM インターフェース構成コマンド

この節では、特定の ATM インターフェースを構成するためのコマンドの要約を示し、個々のコマンドについて説明します。

ATM インターフェース構成コマンド

コマンドは ATM INTERFACE> プロンプトで入力します。

表 38. ATM INTERFACE 構成コマンドの要約

コマンド	機能
? (Help)	このコマンド・レベルで使用可能なコマンドをすべて表示するか、特定のコマンドに関するオプション (ただし、選択可能な場合) をリストします。12ページの『ヘルプを得る』を参照してください。
Add	ESI を追加します。
List	現行構成をリストするか、または ESI をリストします。
Qos	ATM I/F 0 QoS Config> プロンプトを表示するので、312ページの『QoS Configuration』で説明しているように、サービス品質 (QoS) を構成することができます。
Remove	ESI を除去します。
Set	ATM ネットワークのパラメーターを設定します。
Disable	ESI を使用不可にします。
Enable	ESI を使用可能にします。
Exit	直前のコマンド・レベルに戻ります。13ページの『下位レベル操作環境を終了する』を参照してください。

Add

add コマンドは、ESI を ATM 構成に追加するのに使用します。

ATM アドレスのオクテット 14-19 は、エンド・システム識別子 (ESI) です。同じスイッチに接続されている各エンド・システムは、別々の ESI セットを使用しなければなりません。エンド・システムが起動すると、ILMI を使用して、その ESI を ATM スイッチに登録しようと試みます。スイッチは、すべての登録済み ESI が固有になるようにします。

構文：

```
add esi esi-address
```

esi *esi-address*

エンド・システム識別子のアドレス

有効値： 任意の 12 桁の 16 進数

デフォルト値：
なし

List

list コマンドは、この ATM 装置の構成をリストしたり、あるいは構成された ESI の集合をリストするのに使用します。

構文：

```
list configuration  
esi
```

configuration

ATM 装置構成をリストします。リストされたフィールドの説明は、312ページの『Set』を参照してください。

ATM インターフェース構成コマンド

例: **list con**

```
ATM Configuration
Interface (net) number = 0
Maximum VCC data rate Mbps = 155
Maximum frame size = 9234
Maximum number of callers = 209
Maximum number of calls = 1024
Maximum number of parties to a multipoint call = 512
Maximum number of Selectors that can be configured = 200
UNI Version = UNI 3.0
Packet trace = OFF
```

esi ATM 構成内の ESI をリストします。

例: **list esi**

```
ATM INTERFACE> list esi

          ESI                Enabled
-----
0000000000009              YES
0000000000100              YES
```

QoS Configuration

qos-configuration コマンドを使用すると ATM I/F 0 QOS Config> プロンプトが表示されるので、『QoS Configuration』で説明しているように、サービス品質 (QoS) を構成することができます。

構文 :

qos-configuration

Remove

remove コマンドは、ESI を ATM 構成から除去するのに使用します。この ESI を使用しているすべての ATM コンポーネントは、別の ESI を使用するように再構成する必要があります。除去された ESI の使用を試みる ATM コンポーネントの場合は、ルーターの次回リスタート時に起動しない可能性があります。

構文 :

remove esi *esi-address*

esi *esi-address*

エンド・システム識別子のアドレス

有効値 : 任意の 12 桁の 16 進数

デフォルト値 :

なし

Set

set コマンドは、ATM ネットワーク・パラメーターを指定するのに使用します。

構文 :

set max-data-rate

ATM インターフェース構成コマンド

max-frame

max-config-selectors

max-calls

max-callers

max-mp-parties

trace

uni-version

network-id

max-data-rate *speed*

ほとんどの LANE および CIP 接続の VCC トラフィック・パラメーターのデフォルト値および上限を設定します。たとえば、これは LE クライアントが開始するベストエフォート VCC のデフォルト PCR です。シグナルされた SCR 数および PCR 数は、この限界を超えることはできません。たいていの状況では、デフォルト値で十分です。この値を変更した方が有利な状況の一例として、大多数のステーションが 25-Mbps のアダプターを使用している場合があります。この場合は、VCC 上のデータ速度を 25 Mbps に制限して、低速のステーションがルーターからのフレームに圧倒されないようにします。このパラメーターの単位は Mbps です。

有効値 :

25

100

155

デフォルト値:

155

例 :

```
ATM INTERFACE> set speed 155
```

max-calls

この ATM 装置上に存在できるスイッチド・バーチャル・サーキット (SVC) の最大数を設定します。すべてのポイント・ポイントおよびポイント・マルチポイント SVC は、システム資源を使用します。このパラメーターは、シグナル接続および交換接続用に予約されるシステム資源を制限するのに役立ちます。このパラメーターを増やすと、同時 SVC の数を増やすことができますが、これらの接続を管理するために必要なシステム・メモリーも増えることとなります。

有効値 :

64 ~ 10500 の範囲の整数

デフォルト値 :

1024

例 :

```
ATM INTERFACE> set max-calls 500
```

ATM インターフェース構成コマンド

max-callers

ATM インターフェースを使用する、ルーター上のエンティティの最大数を設定します。それぞれの LEC、クラシカル IP、および 1483 ブリッジ・インターフェースには、ATM インターフェースのユーザーとしての資格があります。このパラメーターを増やすと、インターフェースのユーザーの数を増やすことができますが、システム・メモリーの使用量も増えます。

有効値：

64 ～ 1024 の範囲の整数

デフォルト値：

209

例：

```
ATM INTERFACE> set max-callers 25
```

max-config-selectors

ユーザーの特定の制御下にあるセレクターの最大数を設定します。

セレクターは、同じエンド・システム上の異なるユーザーを区別するのに使用されます。VCC 設定要求は、次のような階層方式でルートされます。つまり、ATM スイッチがネットワーク・プレフィックスを使用して着信先 ATM スイッチにルートします。あて先 ATM スイッチは、ESI を使用して着信先エンド・システムにルートします。そして、エンド・システムがセレクターに基づいてあて先ユーザーに通知します。

各 ESI は最大 255 個の対応するセレクター (0x00 ～ 0xff) をもつことができます。セレクターの範囲は、構成されるセレクター範囲と自動的に割り当てられるセレクター範囲の 2 つに区分されています。構成されるセレクター範囲の上限は、ATM インターフェース・パラメーター max-config-selector で定めます。

ルーター上の ATM コンポーネントは、さまざまな方法でセレクターを選択します。あるコンポーネントの場合は、構成されるセレクター範囲から、ユーザーが明示的にセレクターを構成する必要があります。他のコンポーネント (たとえば、クラシカル IP クライアントなど) では、セレクターを実行時に自動的に割り当てることができます。ユーザーはルーターを選択する必要はなく、ルーターが起動時にこれを選択します。このセレクターは、ルーターのリスタートのたびに一貫しているとは保証されません。自動的なセレクターの割り当ては、ネットワーク上の他の装置があらかじめその ATM アドレスを知っていなくても構わない ATM コンポーネントの場合にのみ便利です。

セレクターの範囲の相対サイズは、ルーター上の ATM ユーザーのタイプと数に適合するように変更することができます。

有効値：

0 ～ 255 (0x00 ～ 0xFF)

デフォルト値：

200

注: セレクターは、20 バイトの ATM アドレスのバイト 20 です。

例：

```
ATM INTERFACE> set max-config-selectors 225
```

max-frame

ATM インターフェース上で送信または受信されるデータに許されるオクテットの最大数を設定します。このパラメーターに基づいて、システム・メモリーが割り当てられます。max-frame を増やすと、システム・メモリーの所要量が増えますが、より大きなフレームを処理できるようになります。

ATM インターフェースを使用するすべてのルーター・エンティティは、ATM インターフェースの max-frame-size 以下の最大フレーム・サイズを使用する必要があります。これには、すべての LEC および 1483 ブリッジ・インターフェースが含まれます。

有効値：

16 ~ 32000 の範囲の整数

デフォルト値：

9234

例：

```
ATM INTERFACE> set max-frame 1000
```

max-mp-parties

ルーターが開始するポイント・マルチポイント接続上のリーフの最大数を設定します。このパラメーターは、システム・メモリーの割り当てに影響を与えます。ルーターが多数のあて先へのポイント・マルチポイント接続を設定する必要がある場合は、この値を増やすことが必要です。

有効値：

1 ~ 5000 の範囲の整数

デフォルト値：

512

例：

```
ATM INTERFACE> set max-mp-parties 300
```

トレース (trace)

インターフェース上のパケット・トレース・パラメーターを設定します。パケット・トレースは、VPI/VCI 値の範囲で、使用可能または使用不可にすることができます。トレースの一般的な VPI/VCI 値は、次のとおりです。

- シグナル・パケットの場合は、0/5
- ILMI パケットの場合は、0/16

有効値：

ON または OFF

デフォルト値：

ON

トレースする VPI/VCI 範囲の入力をプロンプトで指示されます。

開始 VPI の有効値:

0 ~ 255

ATM インターフェース構成コマンド

デフォルト値 :

0

終了 VPI の有効値:

0 ~ 255

デフォルト値 :

255

開始 VCI の有効値:

0 ~ 65535

デフォルト値 :

0

終了 VCI の有効値:

0 ~ 65535

デフォルト値 :

65535

例 :

```
ATM INTERFACE> set trace on
beginning of VPI range [0]? 0
end of VPI range [255]? 0
beginning of VCI range [0]? 5
end of VCI range [65535]? 5
```

uni-version

ATM インターフェースが、接続された ATM スイッチと通信するのに使用する、ユーザー・ネットワーク・インターフェース (UNI) バージョンを設定します。UNI バージョンが ATM スイッチおよび ATM 装置接続機構上で特定のバージョン (AUTO-DETECT ではない) に構成されている場合は、UNI バージョンは一致する必要があります。

UNI バージョンが AUTO として構成されている場合、ATM 装置は使用する UNI バージョンをスイッチから確認しようと試みます。

UNI AUTO-DETECT モードでは、スイッチが UNI バージョンに関する照会に 응답しない場合は、デフォルト値は UNI 3.0 です。スイッチが UNI 3.0 または UNI 3.1 以外の値で応答する場合は、デフォルト値は UNI 3.1 です。

有効値 :

[UNI 3.0|UNI 3.1|AUTO-DETECT|なし]

デフォルト値 :

UNI 3.0

注: ATM スイッチに一致する必要があります。

例:

```
ATM INTERFACE> set uni-version 3.0
```

network-id

ATM インターフェースのネットワーク ID を設定します。インターフェース間が ATM で接続されている場合は、複数の ATM インターフェースは同じネットワーク ID をもっている必要があります。

有効値 :
0 ~ 255

デフォルト値 :
0

Enable

enable コマンドは、ATM 装置の構成内の ESI を使用可能にするのに使用します。ATM インターフェースは、起動されると、使用可能な ESI のみを登録しようと試みます。

構文 :

enable esi *esi-address*

esi *esi-address*

エンド・システム識別子のアドレス

有効値 :
任意の 12 桁の 16 進数

デフォルト値 :
なし

例: **enable esi**

```
ATM INTERFACE> enable esi 00:00:00:00:00:09
```

Disable

disable コマンドは、構成内の ESI を使用不可にするのに使用します。使用不可にされた ESI を使用している ATM コンポーネントは、次回にルーターがリスタートされるときには、アクティブになりません。

構文: **disable** esi *esi-address*

esi *esi-address*

エンド・システム識別子のアドレス

有効値 :
任意の 12 桁の 16 進数

デフォルト値 :
なし

例: **disable esi**

```
ATM INTERFACE> disable esi 00:00:00:00:00:09
```

バーチャル ATM インターフェース構成プロセスへのアクセス

選択された実 ATM インターフェースの ATM Config> プロンプトから、**Virtual ATM** コマンドを使用して、バーチャル ATM 構成コマンド・モードに入ります。

ATM バーチャル・インターフェース構成コマンド

この節では、ATM バーチャル・インターフェース構成コマンドの要約を示します。コマンドは ATM virtual interface config> プロンプトで入力します。

表 39. ATM バーチャル・インターフェース構成コマンドの要約

コマンド	機能
? (Help)	このコマンド・レベルで使用可能なコマンドをすべて表示するか、特定のコマンドに関するオプション (ただし、選択可能な場合) をリストします。12ページの『ヘルプを得る』を参照してください。
Add	バーチャル ATM インターフェースを追加します。
List	現在構成されているバーチャル ATM インターフェースをリストします。
Remove	バーチャル ATM インターフェースを現行構成から除去します。
Exit	直前のコマンド・レベルに戻ります。13ページの『下位レベル操作環境を終了する』を参照してください。

Add

add コマンドは、ATM バーチャル・インターフェースを追加するのに使用します。新規の ATM バーチャル・インターフェースが、対応する ATM 実インターフェース (この ATM バーチャル・インターフェースにアクセスするのに使用した構成メニュー) に追加されます。新たに作成された ATM バーチャル・インターフェースに割り当てられたネットワーク/インターフェース番号が表示されます。

構文 :

add

例 :

```
ATM Virtual Interface config> add
Added ATM Virtual Interface Net as interface 5 on physical ATM interface 0
ATM Virtual Interface config>
```

List

list コマンドは、現行の実 ATM インターフェースに定義された構成済み ATM バーチャル・インターフェースをリストするのに使用します。

構文 :

list

例 :

```
ATM Virtual Interface config> list

                        ATM Virtual Interface Nets
-----
ATM interface number = 0
ATM Virtual Interface Net interface number = 5

ATM Virtual Interface config>
```

Remove

remove コマンドは、ATM バーチャル・インターフェースを除去するのに使用します。実 ATM インターフェース上の、指定されたインターフェース番号をもつバーチャル ATM インターフェースが、SRAM 構成レコードから除去されます。インターフェース番号を指定しなかった場合は、この実 ATM インターフェース上の最後の ATM バーチャル・インターフェースが削除されます。疑問符 (?) を入力すると、現行の実 ATM インターフェース上のすべての ATM バーチャル・インターフェースがリストされ、そのリストから削除したいインターフェースを選択することができます。

構文：

```
remove n
```

例: **remove 5**

```
Virtual ATM 5 deleted successfully.
ATM Virtual Interface config>
```

ATM 監視プロセスへのアクセス

ATM 監視コマンドにアクセスする場合は、以下の手順を使用します。このプロセスにより ATM の監視 プロセスにアクセスできます。

1. OPCON プロンプトで **talk 5** と入力する。(このコマンドの詳細については、33ページの『第4章 OPCON プロセス』を参照してください。) たとえば、次のように入力します。

```
* talk 5
+
```

GWCON プロンプト (+) がコンソールに表示されます。初めてコンソールで入力したとき、このプロンプトが表示されなかった場合は、もう一度 **Return** キーを押します。

2. + プロンプトで **interface** と入力して、構成されたインターフェースのリストを表示する。
3. インターフェース番号を記録する。
4. **network** と入力し、続けて ATM インターフェースの番号を入力する。

```
+ network 5
ATM+
```

ATM 監視プロンプト (ATM+) が表示されます。

ATM 監視コマンド

この節には、ATM インターフェースを監視するための ATM 監視コマンドを要約してあります。コマンドは ATM+ プロンプトで入力します。

表 40. ATM 監視コマンドの要約

コマンド	機能
? (Help)	このコマンド・レベルで使用可能なコマンドをすべて表示するか、特定のコマンドに関するオプション (ただし、選択可能な場合) をリストします。12ページの『ヘルプを得る』を参照してください。
Interface	ATM Interface+ プロンプトを表示するので、『ATM インターフェース監視コマンド (ATM INTERFACE+ プロンプト)』で説明しているように、ATM インターフェースを監視することができます。
Atm-llc	ATM LLC+ プロンプトを表示するので、ここからエンドポイント、ユーザー・クライアントの集合、および ATM チャンルの集合を監視することができます。
Exit	直前のコマンド・レベルに戻ります。13ページの『下位レベル操作環境を終了する』を参照してください。

Interface

『ATM インターフェース監視コマンド (ATM INTERFACE+ プロンプト)』で説明している ATM Interface+ プロンプトを表示します。

構文 :

interface

ATM-LLC

323ページの『ATM-LLC 監視コマンド』で説明している ATM-LLC+ プロンプトを表示します。

構文 :

atm-llc

ATM インターフェース監視コマンド (ATM INTERFACE+ プロンプト)

この節では、特定の ATM インターフェースを監視するためのコマンドの要約を示し、個々のコマンドについて説明します。

コマンドは ATM INTERFACE+ プロンプトで入力します。

表 41. ATM INTERFACE 監視コマンドの要約

コマンド	機能
? (Help)	このコマンド・レベルで使用可能なコマンドをすべて表示するか、特定のコマンドに関するオプション (ただし、選択可能な場合) をリストします。12ページの『ヘルプを得る』を参照してください。
List	ATM アドレスおよび VCC をリストします。

ATM インターフェース監視コマンド (Talk 5)

表 41. ATM INTERFACE 監視コマンドの要約 (続き)

コマンド	機能
Trace	指定された VPI/VCI 範囲のパケット・トレースを開始/停止します。トレースは ELS によって表示できます。
Wrap	VCC 上のループバック・テストを開始/停止します。
Exit	直前のコマンド・レベルに戻ります。13ページの『下位レベル操作環境を終了する』を参照してください。

List

list コマンドは、さまざまなカテゴリーの ATM データをリストするのに使用します。

構文：

```
list
  addresses
  all
  circuit
  vccs
  reserved-bandwidth
```

addresses

装置上で使用されている ATM アドレスを、記述名と共にリストします。

例：

```
ATM INTERFACE+ list addresses
```

```

-----
          ATM Address                               Name
-----
399999999999999999990000099999020000041347391804 LEC 1 'eth1'
399999999999999999990000099999020000041347391802 LES/BUS
'eth1'
```

all 下に挙げるものがすべてリストされます。

- アドレス
- 回線統計
- VCC
- 予約帯域幅

circuit 特定の VCI-VPI の対を指定することにより、特定の VCC の統計をリストします。コマンド行で回線を指定することもできます (たとえば、list circuit 33)。

例：

```
ATM INTERFACE+ list circuit
VPI [0]?
VCI [32]?33
```

```

Frames transmitted =      2 Bytes transmitted =      216
Frames received   =      2 Bytes received   =      216
```

vccs ルーターによって確立されたすべての VCC をリストします。VCC は、パーマネント (PVC) またはスイッチド (SVC)、ポイント・ポイントまたはポイント・マルチポイントで、それぞれ固有の VPI/VCI によって識別されます。trace コマンドは、VCC の VPI/VCI 値を使用して、特定の VCC 上でパケット・トレースを実行します。

例：

ATM インターフェース監視コマンド (Talk 5)

- P-P** ポイント・ポイント VCC
- P-MP** ポイント・マルチポイント VCC
- ILMI** 一時ローカル管理インターフェース VCC
- SAAL** シグナル VCC
- Bx-y** VPI x、VCI y への内部結合 VCC
- Sx-y** VPI x、VCI y への内部スプライス VCC

reserved-bandwidth

ATM インターフェース上の予約帯域幅をリストします。

例 :

```
ATM INTERFACE+ list reserved-bandwidth
Line Rate           : 155000 Kbps
Peak Reserved Bandwidth : None
Sustained Reserved Bandwidth : None
```

Trace

trace コマンドは、指定された範囲の VPI/VCI 値に対するパケット・トレースを起動するのに使用します。202ページの『View』で説明しているように、ELS を使用してトレース・データを表示することができます。

構文 :

```
trace list
          on
          off
```

list ATM インターフェース上の現行のパケット・トレース・オプションを表示します。

例 :

```
ATM Interface+ trace
on | off | list []? list
Packet trace is ON
Range of VPIs to be traced:      0 -      0
Range of VCIs to be traced:     32 -     39
```

on 指定された VPI/VCI 範囲内のすべてのアクティブ VCC 上のパケット・トレースを開始します。

例 :

```
ATM Interface+ trace on
beginning of VPI range [0]?
end of VPI range [0]?
beginning of VCI range [32]?
end of VCI range [65535]? 39
```

off すべての VCC 上のパケット・トレースを停止します。

例 :

```
ATM Interface+ trace off
ATM Interface+ trace list
Packet trace is OFF
```

Wrap

wrap コマンドは、アダプターの ATM インターフェース上でループバック・データ・テストを実行するのに使用します。Wrap は、VPI-VCI の対を指定することにより、VC 単位で出すことができます。データは内部でループバックされます。

ラップの開始、ラップの停止、または現行ラップ設定値の表示を、選択的にスタートさせることができます。

ラップを停止または表示すると、以下の統計が表示されます。

- ラップ送信数
- ラップ受信数
- ラップ送信誤りの数
- ラップ受信誤りの数
- ラップ受信タイムアウト数

表示の場合は、現行ラップ統計が表示されます。

停止の場合は、最終ラップ統計が表示されます。

構文：

```
wrap                display
                    start
                    stop
```

display

現行ラップ設定値を表示します。

start ラップ手順を開始し、パターンの VPI-VCI 長さとパターン自体を指定します。

例：

```
ATM Interface+ wrap start
VPI [0]?
VCI [32]?
wrap pattern length [32]?
Enter 32-byte wrap pattern: [ABCDEFGHIJKLMNQRSTUWXYZ123456]?
```

stop ラップ手順を停止し、最終ラップ統計を表示します。

ATM-LLC 監視コマンド

この節では、ATM LLC 多重化のためのコマンドについて説明します。

コマンドは ATM-LLC+ プロンプトで入力します。

表 42. ATM LLC 構成コマンドの要約

コマンド	機能
? (Help)	このコマンド・レベルで使用可能なコマンドをすべて表示するか、特定のコマンドに関するオプション (ただし、選択可能な場合) をリストします。12ページの『ヘルプを得る』を参照してください。
List	各種のオプションをリストします。

ATM-LLC 監視コマンド (Talk 5)

表 42. ATM LLC 構成コマンドの要約 (続き)

コマンド	機能
Exit	直前のコマンド・レベルに戻ります。13ページの『下位レベル操作環境を終了する』を参照してください。

List

list コマンドは、さまざまなカテゴリーの ATM LLC 監視データをリストするのに使われます。

構文：

```
list                endpoints
                    channels
```

endpoints

装置上の ATM-LLC 多重化機能を使用するプロトコルによって使用される ATM アドレスをリストします。エンドポイントは、エンド・システム識別子とセレクターとして表示されます。

例: **list endpoints**

```
ATM-LLC+ list endpoints
```

channels

装置上の ATM-LLC 多重化機能を使用するプロトコルによって使用されるチャンネルをリストします。

例: **list channels**

```
ATM-LLC+ list channels
```

ATM バーチャル・インターフェース監視コマンド

ATM バーチャル・インターフェースの監視は、ATM LLC 監視コマンドを使用して行います。詳細については、323ページの『ATM-LLC 監視コマンド』を参照してください。

第28章 LAN エミュレーション・クライアントの使用

この章では、LAN エミュレーション・クライアント (LEC) について説明します。本書には、以下の節が含まれます。

- 『LAN エミュレーション・クライアントの概要』

LAN エミュレーション・クライアントの概要

ルーター上の LEC は、従来のルーターおよびブリッジ上の『プロンプト』または『インターフェース』の役目を果たします。ルーターは、LEC を介してトラフィックを送受信し、ポート間のトラフィックをブリッジおよびルートします。

LEC には、2 つのプロンプト・レベルがあります。

1. LE Client Config> では、すべての LEC の環境を制御するコマンドを入力できます。このプロンプト・レベルのコマンドについては、327ページの『LAN エミュレーション・クライアントの構成』で説明します。
2. コマンドの 1 つの **config** を使用すると、もう 1 つのプロンプト・レベルである LEC Config> にアクセスします。ここでは、特定の LEC を構成するコマンドを入力することができます。

以下では、LAN エミュレーション・クライアントのコマンドについて説明します。

第29章 LAN エミュレーション・クライアントの構成と監視

この章では、LAN エミュレーション・クライアント (LEC) を構成する方法について説明します。この章は以下の節に分かれています。

- 『LAN エミュレーション・クライアントの構成』
- 329ページの『ATM フォーラム準拠 LE クライアントの構成』
- 344ページの『LEC 監視環境へのアクセス』
- 345ページの『LEC 監視コマンド』

LAN エミュレーション・クライアントの構成

この節では、特定の ATM インターフェース上の LE クライアントの集合を表示、変更、および使用するためのコマンドについて説明します。

LE Client Config> プロンプトにアクセスするには、310ページの『ATM 構成コマンド』で説明しているように、ATM Config> プロンプトで **le-c** と入力します。

コマンドは、310ページの『ATM 構成コマンド』で説明しているように、ATM Config> プロンプトのもとにある LE Client Config> プロンプトで入力します。

表 43. LAN EMULATION クライアント構成コマンドの要約

コマンド	機能
? (Help)	このコマンド・レベルで使用可能なコマンドをすべて表示するか、特定のコマンドに関するオプション (ただし、選択可能な場合) をリストします。12ページの『ヘルプを得る』を参照してください。
Add	以下のタイプの ATM フォーラム準拠のエミュレートされた LAN アーキテクチャーの LEC を追加します。 <ul style="list-style-type: none">• イーサネット• トークンリング
Config	LEC Config> プロンプトを表示するので、ここから特定の LAN エミュレーション・クライアントを構成することができます。
List	LEC をリストします。
Remove	LEC を除去します。
Exit	直前のコマンド・レベルに戻ります。13ページの『下位レベル操作環境を終了する』を参照してください。

Add

add コマンドは、トークンリングまたはイーサネット・エミュレート LAN の LEC を追加するのに使用します。

構文 :

```
add Ethernet  
                  Token Ring
```

token-ring

トークンリング・エミュレート LAN

LE Client Config>

例: add token ring

```
LE Client Config> add token-ring
Added Emulated LAN as interface 3
```

ethernet

イーサネット・エミュレート LAN

例: add ethernet

```
LE Client Config> add ethernet
Added Emulated LAN as interface 2
```

Config

config コマンドを使用すると、LEC Config> プロンプトが表示されるので、ここから特定の LAN エミュレーション・クライアントの詳細を構成することができます。

構文 :

```
config                interface#
```

interface#

LEC が構成に追加されたときにルーターによって割り当てられた整数の番号。LEC に割り当てられているインターフェース番号を調べるときは、**list** コマンドを使用します。

例: config

```
LE Client Config> config 3
ATM LAN Emulation Client configuration
```

List

list コマンドは、LAN エミュレーション・クライアントをリストするのに使用します。

構文 :

```
list
```

例 :

```
LE Client Config> list
                        ATM Forum Compliant Emulated LANs
-----
Physical ATM interface number = 0
LEC interface number = 1
Emulated LAN type = Token Ring Forum Compliant
Emulated LAN name =
```

Remove

remove コマンドは、LEC を除去するのに使用します。LEC が構成に追加されたときにルーターによって割り当てられたインターフェース番号を指定する必要があります。LEC に割り当てられているインターフェース番号を調べるときは、**list** コマンドを使用します。

構文 :

```
remove                interface#
```

interface#

ルーターによって割り当てられた整数の番号

ATM フォーラム準拠 LE クライアントの構成

この節では、ATM フォーラム準拠 LAN エミュレーション・クライアントを構成するためのコマンドについて説明します。Ethernet Forum Compliant LEC Config> プロンプトまたは Token Ring Forum Compliant LEC Config> プロンプトのどちらかを入力します。次の表に挙げてあるコマンドは、特に断りがない限り、トークンリング LEC と イーサネット LEC の両方に該当します。

これらのコマンドを LEC Config> プロンプトで入力するのは、**config** コマンドを LE Client Config> プロンプトで入力した後です。

表 44. LAN エミュレーション・クライアント構成コマンドの要約

コマンド	機能
? (Help)	このコマンド・レベルで使用可能なコマンドをすべて表示するか、特定のコマンドに関するオプション (ただし、選択可能な場合) をリストします。12ページの『ヘルプを得る』を参照してください。
ARP-Configuration	ATM フォーラム準拠クライアントの LE-ARP 構成を構成することができます。
RIF-Timer	RIF 内の情報が更新される前に維持されている最大時間数を設定します。トークンリング LEC にのみ適用されます。
Source-routing	ソース・ルート・ブリッジングを使用可能または使用不可にするのに使用します。トークンリング LEC にのみ適用されます。
IP-Encapsulation	IP カプセル化を、イーサネット (タイプ X'0800') または IEEE (SNAP 付き 802.3) として設定します。イーサネット LEC にのみ適用されます。
List	LAN エミュレーション・クライアント構成をリストします。
QoS-Configuration	e1an-x LEC QoS Config> プロンプトが表示されるので、LE Client QoS 構成コマンド (機構の使用と構成) の説明に従って、サービス品質を構成することができます。
Set	LAN エミュレーション・クライアントのパラメーターを設定します。
Exit	直前のコマンド・レベルに戻ります。13ページの『下位レベル操作環境を終了する』を参照してください。

ARP Configuration

arp-configuration コマンドは、ATM フォーラム準拠 LAN エミュレーション・クライアントの静的 LE-ARP エントリを構成する場合に使用します。

構文 :

arp-configuration

例 :

```
Token Ring Forum Compliant LEC Config> arp-configuration
ATM LAN Emulation Clients ARP configuration
```

フォーラム LE クライアントの構成

表 45. ATM LAN エミュレーション・クライアント ARP 構成コマンドの要約

コマンド	機能
? (Help)	このコマンド・レベルで使用可能なコマンドをすべて表示するか、特定のコマンドに関するオプション (ただし、選択可能な場合) をリストします。12ページの『ヘルプを得る』を参照してください。
Add	MAC またはルート記述子 ARP を使用して、LE-ARP キャッシュ・エントリーを追加します。
Config	キャッシュ・エントリー QoS パラメーター値を設定します。
List	構成された ARP キャッシュ・エントリーをリストします。
Remove	ARP キャッシュ・エントリーを除去します。
Exit	直前のコマンド・レベルに戻ります。13ページの『下位レベル操作環境を終了する』を参照してください。

Add

add コマンドは、MAC アドレスまたはルート記述子を使用して ARP キャッシュ・エントリーを追加する場合に使用します。

MAC アドレスおよびルート記述子は、16 進文字列として入力し、バイト間の区切り文字はオプションで、付けても付けなくても構いません。有効な区切り文字は、ダッシュ (-)、ピリオド (.), またはコロン (:)

構文 :

```
add mac  
route-descriptor
```

例 1:

```
ARP config for LEC>add mac  
MAC address of LE ARP Entry []? 123456789098  
ATM address in 00.00.00.00.00.00:... form []? 390f0000000000000000000000000000123456789098  
Destination Type - REMOTE or LOCAL [Remote]?
```

例 2:

```
ARP config for LEC>add route 12.34  
ATM address in 00.00.00.00.00.00:... form []? 390f00000000000000000000000000001234567890988888  
ARP config for LEC>
```

Config

Config コマンドは、ATM フォーラム固有 LAN エミュレーション・クライアントの永続 ARP キャッシュ・エントリー QOS パラメーターを構成する場合に使用します。

構文 :

```
config arp-entry-number
```

例 :

```
ARP config for LEC> config  
ARP entry number [1]  
Configure LEC ARP entry
```

表 46. ATM LAN エミュレーション・クライアント ARP 構成コマンドの要約

コマンド	機能
? (Help)	このコマンド・レベルで使用可能なコマンドをすべて表示するか、特定のコマンドに関するオプション (ただし、選択可能な場合) をリストします。12ページの『ヘルプを得る』を参照してください。
Set	QoS パラメーター値を設定します。
Exit	直前のコマンド・レベルに戻ります。13ページの『下位レベル操作環境を終了する』を参照してください。

Set:

Set コマンドは、ATM フォーラム固有 LAN エミュレーション・クライアントの永続 ARP キャッシュ・エントリー QoS パラメーターを構成する場合に使用します。

構文 :

```

set                               max-reserved-bandwidth
                                   traffic-type
                                   peak-cell-rate
                                   sustained-cell-rate
                                   qos-class
                                   max-burst-size
    
```

例 :

```

ARP entry 'identifier' config> set ?
MAX-RESERVED-BANDWIDTH
TRAFFIC-TYPE
PEAK-CELL-RATE
SUSTAINED-CELL-RATE
QOS-CLASS
MAX-BURST-SIZE
    
```

QoS パラメーターの詳細については、サービス品質 (QoS) の構成および監視 (機構の使用と構成) を参照してください。

List

list コマンドは、ARP 構成に関する情報を表示させる場合に使用します。

Remove

remove コマンドは、構成された MAC アドレスまたはルート記述子 LE-ARP エントリーを除去する場合に使用します。

提供されたリストから、除去する ARP エントリー番号を選択します。

構文 :

```

remove                             arp-entry-number
    
```

RIF-Timer (トークンリング・フォーラム準拠 LEC の場合のみ)

RIF-Timer コマンドは、RIF 内の情報が更新される前に維持されている最大時間数を設定するのに使用します。範囲は 0 ~ 4096 です。デフォルトでは 120 秒です。

構文 :

```
rif-timer value
```

例 :

```
rif-timer 100
```

Source-Routing (トークンリング・フォーラム準拠 LEC の場合のみ)

source-routing コマンドは、エンド・ステーションのソース・ルーティングを使用可能または使用不可にするのに使用します。ソース・ルーティングというのは、エンド・ステーションがソース・ルーティング・ブリッジを経由するのに使用するソース・ルートを決めるプロセスです。ソース・ルーティングにより、IP、IPX、および AppleTalk フェーズ 2 プロトコルは、ソース・ルート・ブリッジの反対側のノードに到達することが可能になります。

ソース・ルーティングが使用可能でも使用不可でも、装置のこの機能は変更されません。デフォルトの設定値は「使用可能」です。

一部のステーションは、ソース・ルーティング RIF をもつフレームを正常に受信できません。これは特に NetWare ドライバーに共通して見られる特徴です。この状態のときは、ソース・ルーティングを使用不可にすれば、これらのステーションと通信できるようになります。

ソース・ルーティングを使用可能にするのは、IP、IPX、および AppleTalk フェーズ 2 パケットを通過させたいソース・ルーティング・ブリッジがこのリング上に存在する場合だけに限るべきです。また、LLC テスト応答メッセージを戻すようにしたい場合は、ソース・ルーティングを使用可能にする必要があります。

構文 :

```
source-routing enable  
source-routing disable
```

例 :

```
source-routing disable
```

IP-Encapsulation (イーサネット ATM フォーラム準拠 LEC の場合のみ)

IP-encapsulation コマンドは、イーサネット (イーサネット・タイプ X'0800') または IEEE 802.3 (SNAP を備えたイーサネット 802.3) を選択する場合に使用します。タイプ **E** (イーサネット) と IEEE-802.3 のどちらかを指定します。

構文 :

```
IP-encapsulation Ethernet
```


List

list コマンドは、LE クライアント構成をリストさせる場合に使用します。

構文：

list

QoS

qos-configuration コマンドを使用すると、LEC QoS Config> プロンプトが表示されるので、そこから、LE クライアント QoS 構成コマンド (機構の使用と構成) の説明に従ってサービス品質を構成することができます。

構文：

qos-configuration

Set

set コマンドは、LE クライアントのパラメーターを設定する場合に使用します。

構文：

set

- arp-aging-time
- arp-cache-size
- arp-queue-depth
- arp-response-time
- auto-config
- best-effort-peakrate
- bus-connect-retries
- conn-completion-time
- control-timeout
- elan-name
- esi-address
- flush-timeout
- forward-delay
- forward-disconnect-timeout
- frame-size
- initial-control-timeout
- lecs-atm-address
- les-atm-address

mac-address
multicast-send-avg
multicast-send-peak
multicast-send-type
multiplier-control-timeout
path-switch-delay
reconfig-delay-min
reconfig-delay-max
retry-count
selector
trace
unknown-count
unknown-time
vcc-timeout

arp-aging-time

ARP エージング・タイムを設定します。これは、その関係の検証がない場合に、LEC が LE_ARP キャッシュ内にエントリーを維持する最大時間です。エージング・タイムを大きくすると、セッションの設定時間が速くなりますが、メモリーの使用量が増え、ネットワーク構成の変更への対応が遅くなる可能性があります。

有効値：

10 ～ 300 秒の範囲の整数

デフォルト値：

300

例：

```
LEC Config> set arp-aging-time 200
```

arp-cache-size

ARP キャッシュ内のエントリー数を設定します。ARP キャッシュのサイズは、同時伝送できるデータ・ダイレクト VCC の数を制限します。ARP キャッシュを大きくすると、メモリーの所要量が増えますが、クライアントはより多くのあて先と同時に通話できるようになります。

有効値：

10 ～ 65535 の範囲の整数

デフォルト値：

5000

例：

```
LEC Config> set arp-cache-size 10
```

arp-queue-depth

ARP キャッシュ・エントリー当たりの待ち行列化フレームの最大数を設定し

フォーラム LE クライアントの構成

ます。LEC は、データ・パスを、マルチキャスト・センド VCC からデータ・ダイレクト VCC に切り替えるときに、フレームを待ち行列に入れます。待ち行列が満ばいときは、転送するために LEC に渡されたフレームは廃棄されます。待ち行列を大きくすると、メモリーの所要量は増えますが、データ・パスを切り替えるときに廃棄されるフレームの数が減ります。

有効値：

0 ～ 10 の範囲の整数

デフォルト値：

5

例：

```
LEC Config> set arp-queue-depth 10
```

arp-response-time

予期される ARP 応答時間を設定します。この値は、未応答 LE ARP 要求を再試行する頻度を制御します。値を大きくすると、LE ARP の数が少なくなり、その結果、トラフィックが減って、データ・ダイレクト VCC が確立される前の時間が長くなる可能性があります。

有効値：

1 ～ 30 秒の範囲の整数

デフォルト値：

1 秒

例：

```
LEC Config> set arp-response-time 20
```

auto-config

この LEC が LECS auto-config モードを使用するかどうかを指定します。YES または NO を指定します。LEC は LECS に連絡して、その LES のアドレスおよびその他の種々の構成パラメーターを入手することができます。

有効値：

YES のときは、LES の ATM アドレスを構成する必要はありません。

NO のときは、338 の説明に従って **set les-atm-address** コマンドを使用して、LES の ATM アドレスを構成する必要があります。

デフォルト値：

NO

例：

```
LEC Config> set auto-config yes
```

best-effort-peakrate

ベストエフォート・ピーク速度を設定します。ベストエフォート・マルチキャスト・センド接続を確立するとき使用されます。

最大ピーク速度は、ATM 装置の最大データ速度によって決まります。

以下のように、1 から最大ピーク速度 (定義は最大データ速度) までの範囲内の整数 (Kbps) を指定します。

フォーラム LE クライアントの構成

- ATM 最大データ速度が 25 Mbps の場合、最大ピーク速度は 25,000 Kbps
- ATM 最大データ速度が 155 Mbps の場合、最大ピーク速度は 155,000 Kbps

有効値 :

1 ~ 装置の最大データ速度の範囲の整数

デフォルト値 :

155000

例 :

```
LEC Config> set best-effort-peakrate 24000
```

bus-connect-retries

このパラメーターでは、LEC が初期状態に戻る前に BUS への再接続を試みる最大回数を設定します。

有効値 :

0 ~ 2

デフォルト値 :

1

connection-completion-time

接続完了時間を設定します。これは、コーリング側からのデータまたは READY_IND メッセージが予期される時間間隔です。

クライアントへのデータ・ダイレクト VCC が確立されると、LEC は、この時間枠内にデータまたは READY_IND メッセージを受信することを予期します。LEC は、データまたは READY_IND を受信するまでは、確立されたデータ・ダイレクト VCC を介してフレームを送信しません。このパラメーターは、LEC が READY QUERY (READY_IND を受信するホップ数) を出す前に経過する時間を制御します。値を小さくすると、応答時間が速くなりますが、不要な伝送も増えます。

有効値 :

1 ~ 10 秒の範囲の整数

デフォルト値 :

4

例 :

```
LEC Config> set connection-completion-time 5
```

control-timeout

このパラメーターでは、1 つの要求の最大累積制御タイムアウトを設定します。

現行タイムアウト値が **initial-control-timeout** の値に初期設定されます。要求に対する応答が現行タイムアウト値以内に受信されなかった場合は、現行タイムアウト値が **multiplier-control-timeout** の値倍されて、要求が再発行されます。現行タイムアウト値が満了すると、現行タイムアウト値が **control-timeout** の値を超えるまで、そのつどこのプロセスが繰り返されます。

有効値 :

10 ~ 300 秒の範囲の整数

デフォルト値 :

30

例 :

```
LEC Config> set control-timeout 100
```

elan-name

LEC が加入を望む ELAN の名前を指定します。これは、構成要求で LECS に送信される (LEC が自動構成される場合)、または加入要求で LES に送信される ELAN 名です。LECS または LES は、レスポンスで異なる ELAN 名を戻すことがあります。

有効値 :

0 ~ 32 バイトの長さの文字列

デフォルト値 :

ブランク

注: ブランク名 (長さが 0 のストリング) は有効です。

例 :

```
LEC Config> set elan-name FUZZY
```

esi-address

LEC の ATM アドレスの ESI 部分を設定します。

LEC の ATM アドレスの ESI 部分 (オクテット 13 ~ 19) を指定します。LEC の ESI とセレクターの組み合わせは、装置上のすべての LAN エミュレーション・コンポーネント間で固有であることが必要です。

有効値 :

任意の 12 桁の 16 進数

デフォルト値 :

刻印されている出荷時設定 ESI

例 :

```
set esi
Select ESI
(1) Use burned in ESI
(2) 11.22.33.44.55.66
Enter selection [1]?
```

flush-timeout

フラッシュ・タイムアウトを設定します。LE_FLUSH_REQUEST の送信後、回復処置を取る前に LE_FLUSH_RESPONSE の受信を待つ制限時間です。回復時には、待ち行列に入っているフレームはいずれも除去され、新規フラッシュ要求が送信されます。

データ・バスを、マルチキャスト・センドからデータ・ダイレクトに切り替えるときに、クライアントはマルチキャスト・センド VCC を介してフラッシュ要求を送信します。フラッシュ応答を受信するまで、またはバス・スイッチ遅延が満了するまで、フレームはあて先用の待ち行列に入れられます。

有効値 :

1 ~ 4 秒の範囲の整数

フォーラム LE クライアントの構成

デフォルト値 :

4

例 :

```
LEC Config> set flush-timeout 3
```

forward-delay

転送遅延を設定します。LE ARP キャッシュ内のエントリは定期的に再検証の必要があります。転送遅延時間は、ネットワーク・トポロジーの変更時に、リモート・エントリがキャッシュ内にとどまっていた最大時間です。エイジング・タイムを長くすると、エントリは古くなった (無効の) ものが増える可能性があります、再検証トラフィックは減ります。

有効値 :

4 ~ 30 秒の範囲の整数

デフォルト値 :

15

例 :

```
LEC Config> set forward-delay 10
```

forward-disconnect-timeout

このパラメーターでは、LEC が BUS からの最後のマルチキャスト・フォワード VCC を失った後、初期状態に戻る前に待つ時間の長さを設定します。この遅延によって、BUS は初期状態に戻らないで、クライアントへの再接続を試みることができます。

有効値 :

10 ~ 300 秒

デフォルト値 :

60

frame-size

フレーム・サイズを設定します。

frame-size として指定される値は、314 ページの説明 に従って、ATM INTERFACE>set max-frame コマンドを使用して ATM max-frame として指定された値以下である必要があります。

有効値 :

1516

4544

9234

18190

デフォルト値 :

ELAN タイプがトークンリングの場合、デフォルト値は 4544 です。

ELAN タイプがイーサネットの場合、デフォルト値は 1516 です。

例 :

```
LEC Config> set frame-size 4544
```

initial-control-timeout

このパラメーターでは、336 ページに説明してある制御タイムアウト・アルゴリズムで使用される初期制御タイムアウトの値を設定します。

有効値 :

1 ~ 10

デフォルト値 :

5

例 :

```
LEC Config> set initial-control-timeout 10
```

lecs-atm-address

LECS の ATM アドレスを指定します。

クライアントは、自動構成に設定されている場合、LECS への接続を試みます。ある LECS に接続できない場合には、別の LECS ATM アドレスを試行することができます。LECS ATM アドレスを試行する順序は、次のとおりです。

1. この構成された LECS アドレス
2. ILMI を通して入手した任意の LECS アドレス
3. ATM フォーラムによって定義された事前割り当て LECS アドレス

デフォルト値は、提供されていません。

注: このコマンドは、1 行のコマンド行に入力する必要があります。本書では、スペースの関係で 2 行に示してあります。

例 :

```
LEC Config> set lecs-atm-address
39.84.0F.00.00.00.00.00.00.00.01.10.00.5A.00.DE.AD.01
```

les-atm-address

LES ATM アドレスを設定します。このコマンドは、335 ページの **set auto-config** コマンドの項で説明されている `lecs-auto-config` の設定値に応じて、次のように任意指定にも必須にもなります。

- `auto-config` が YES の場合は、`les-atm-address` は構成不能です。
- `auto-config` が NO の場合は、`les-atm-address` は必須です。

LES の ATM アドレスを指定します。デフォルト値は、提供されていません。

注: このコマンドは、1 行のコマンド行に入力する必要があります。本書では、スペースの関係で 2 行に示してあります。

例 :

```
LEC Config> set les-atm-address
39.84.0F.00.00.00.00.00.00.00.00.01.10.00.5A.00.DE.AD.02
```

mac-address

この LE クライアントの MAC アドレスを設定します。クライアントが ATM インターフェースの出荷時設定 MAC アドレスを使用することを指定しても、

フォーラム LE クライアントの構成

別の MAC アドレスを指定しても構いません。2つのクライアントがブリッジされている場合は、それぞれが異なる MAC アドレスを使用する必要があります。

この MAC アドレスは、クライアントが ELAN に加入するときに LES に登録されます。

有効値：

任意の有効な MAC アドレス

デフォルト値：

なし

例：

```
LEC Config> set mac-address
Use adapter address for MAC? [No]
MAC address []: 10.00.5a.00.00.01
```

multicast-send-avg

マルチキャスト・センド VCC の平均速度 (Kbps) を設定します。LEC が VCC 上の帯域幅を BUS に予約するのに使用します。これは、予約帯域幅マルチキャスト・センド VCC を設定するときに使用され、順方向と逆方向の持続セル速度を指定します。

このパラメーターは、multicast-send-type が予約帯域幅である場合にのみ適用できます。multicast-send-avg と multicast-send-peak が等しいときには、固定ビット速度 (CBR) マルチキャスト・センドがシグナルされます。そうでない場合は、可変ビット速度 (VBR) マルチキャスト・センドがシグナルされます。multicast-send-avg は multicast-send peak 以下である必要があります。

予約帯域幅マルチキャスト・センド VCC は、輻輳 (ふくそう) したネットワークではデータ転送速度が速くなる可能性があります。帯域幅を予約しておき、それを使用しないことは、ネットワーク・リソースの浪費になります。

multicast-send-type が予約されている場合は、multicast-send-avg および multicast-send-peak を指定する必要があります。

例：

```
LEC Config> set multicast-send-avg 4000
```

multicast-send-peak

マルチキャスト・センド・ピーク速度 (Kbps) を設定します。LEC が VCC 上の帯域幅を BUS に予約するのに使用します。これは、予約帯域幅マルチキャスト・センド VCC を設定するときに使用され、順方向と逆方向のピーク・セル速度を指定します。

このパラメーターは、multicast-send-type が予約帯域幅である場合にのみ適用できます。multicast-send-avg と multicast-send-peak が等しいときには、固定ビット速度 (CBR) マルチキャスト・センドがシグナルされます。そうでない場合は、可変ビット速度 (VBR) マルチキャスト・センドがシグナルされます。multicast-send-avg は multicast-send peak 以下である必要があります。

フォーラム LE クライアントの構成

予約帯域幅マルチキャスト・センド VCC は、輻輳 (ふくそう) したネットワークではデータ転送速度が速くなる可能性があります、帯域幅を予約しておき、それを使用しないことは、ネットワーク・リソースの浪費になります。

multicast-send-type が予約されている場合は、multicast-send-avg および multicast-send-peak を指定する必要があります。

例 :

```
LEC Config> set multicast-send-peak 155
```

multicast-send-type

マルチキャスト・センド・タイプを設定します。マルチキャスト・センド VCC を確立するときに LEC が使用する方式を指定します。

multicast-send-avg と multicast-send-peak が等しいときには、固定ビット速度 (CBR) マルチキャスト・センドがシグナルされます。そうでない場合は、可変ビット速度 (VBR) マルチキャスト・センドがシグナルされます。

Multicast-send-avg は、少なくとも multicast-send peak に等しくなければなりません。

予約帯域幅マルチキャスト・センド VCC は、輻輳 (ふくそう) したネットワークではデータ転送速度が速くなる可能性があります、帯域幅を予約しておき、それを使用しないことは、ネットワーク・リソースの浪費になります。

multicast-send-type が予約されている場合は、multicast-send-no および multicast-send-peak を指定する必要があります。

有効値 :

ベストエフォートまたは予約

デフォルト値 :

ベストエフォート

例 :

```
LEC Config> set multicast-send-type best-effort
```

multiplier-control-timeout

このパラメーターでは、336 ページに説明してある制御タイムアウト・アルゴリズムで使用される制御タイムアウト乗数の値を設定します。

有効値 :

2 ~ 5

デフォルト値 :

2

例 :

```
LEC Config> set multiplier-control-timeout 5
```

path-switch-delay

パス・スイッチ遅延を設定します。

LEC は、データ・ダイレクト VCC の使用を開始する前に、BUS を通して着側に送信されたすべてのフレームがあて先に到達したことを確認する必要があります。この確認は、フラッシュ・プロトコルを使用して行うか、あるいは

フォーラム LE クライアントの構成

は BUS に最後のパケットを送信した後で `path-switch-delay` 秒数だけ待つことによって行います。値を小さくすると性能が改善しますが、非常に輻輳 (ふくそう) したネットワークでは、順序誤り (out-of-order) パケットが発生する可能性があります。

有効値 :

1 ~ 8 秒の範囲の整数

デフォルト値:

6

例 :

```
LEC Config> set path-switch-delay 5
```

reconfig-delay-min

このパラメーターでは、LEC が初期状態に戻る最小遅延時間を設定します。この値は \leq **reconfig-delay-max** である必要があります。

有効値 :

1 ~ **reconfig-delay-max** の値

デフォルト値:

1

例 :

```
LEC Config> set reconfig-delay-min 5
```

reconfig-delay-max

このパラメーターでは、LEC が初期状態に戻る最大遅延時間を設定します。この値は \geq **reconfig-delay-min** である必要があります。

有効値 :

1 ~ 10

デフォルト値 :

5

例 :

```
LEC Config> set reconfig-delay-max 9
```

retry-count

再試行カウントを設定します。これは、LEC が特定のフレームの LAN あて先に対して `LE_ARP_REQUEST` を再試行する最大回数です。指定された再試行回数後も ARP レスポンスを受信しなかった場合は、そのエントリーは LE ARP キャッシュから除去されます。

有効値 :

0、1、または 2

デフォルト値 :

1

例 :

```
LEC Config> set retry-count 2
```

selector

クライアントの ATM アドレスのセレクター部分を指定します。ESI とセレ

フォーラム LE クライアントの構成

クターの組み合わせは、装置上のすべての LANE コンポーネントの間で固有であることが必要です。デフォルトでは、構成された ESI に対して固有のセレクターが選択されます。

有効値 :

同じ ESI を使用する別の LANE コンポーネントによって使用されていない、16 進数の任意のオクテット。

例 :

```
LEC Config> set selector 01
```

trace LEC のトレースを使用可能にします。パケット・トレースを実行するには、3 つのステップが必要です。

1. パケット・トレース・システムを使用可能にする (ELS 下で)
2. LEC サブシステム上のトレースを使用可能にする (ELS 下で)
3. 必要な LEC 上のパケット・トレースを使用可能にする (このコマンドを使用して)

有効値 :

Enable または Disable

デフォルト値 :

Disable

例 :

```
Token Ring LEC config>set trace  
Trace packets on the LEC? [No]?yes
```

unknown-count

不明フレーム・カウントを設定します。これは、unknown-time パラメーターで指定された時間内に BUS に送信できる、特定のユニキャスト MAC アドレスまたはルート記述子のフレームの最大数です。値を大きくすると、廃棄されるフレーム数は減りますが、BUS の負荷が増えます。

有効値 :

1 ~ 255 の範囲の整数

デフォルト値 :

10

unknown-time

不明フレーム時間を設定します。これは、特定のユニキャスト MAC アドレスまたはルート記述子のフレームの最大数 (unknown-count パラメーターで示された) を BUS に送信できる時間間隔です。値を大きくすると、廃棄されるフレーム数が増えますが、BUS の負荷は減ります。

有効値 :

1 ~ 60 秒の範囲の整数

デフォルト値 :

1

例 :

```
LEC Config> set unknown-time 5
```

フォーラム LE クライアントの構成

vcc-timeout

VCC タイムアウトを設定します。この期間トラフィックの送信がなかった場合、データ・ダイレクト VCC を解放する必要があります。

有効値 :0 ~ 31536000 秒 (1 年)

デフォルト値 :1200

注: このパラメーターに意味があるのは、SVC 接続の場合だけです。

例 :

```
LEC Config> set vcc-timeout 1000
```

LEC 監視環境へのアクセス

LEC 監視コマンドにアクセスする場合は、以下の手順を使用します。このプロセスにより LEC の監視 プロセスにアクセスできます。

1. OPCON プロンプトで **talk 5** と入力する。(このコマンドの詳細については、33ページの『第4章 OPCON プロセス』を参照してください。) 下に例を挙げます。

```
* talk 5  
+
```

talk 5 コマンドを入力すると、GWCON プロンプト (+) がコンソールに表示されます。最初に構成に入ったときにプロンプトが表示されない場合は **Return** をもう一度押してください。

2. + プロンプトで **network ?** コマンドを入力する。すると、ルーターが現在構成されている対象のネットワーク・インターフェース番号が表示されるので、監視したい LEC のインターフェース番号を入力します。下に例を挙げます。

```
+ network ?  
  
1 : ATM Ethernet LAN Emulation: ETH  
2 : IP Protocol Network  
3 : Bridge Application  
5 : CHARM ATM Adapter  
Network number [0]? 1  
LEC+
```

LEC 監視プロンプト (LEC+) が表示されます。

監視したい LEC のインターフェース番号が分かっている場合は、**network** コマンドの後に続けて、LEC の インターフェース番号 を入力します。

```
+ network 1  
LEC+
```

LEC 監視コマンド

この節では、LEC 監視コマンドを要約し、個々に説明します。LEC 監視コマンドには LEC+ プロンプトでアクセスできます。表47 は、コマンドを示しています。

表 47. LE Config 監視コマンドの要約

コマンド	機能
? (Help)	このコマンド・レベルで使用可能なコマンドをすべて表示するか、特定のコマンドに関するオプション (ただし、選択可能な場合) をリストします。12ページの『ヘルプを得る』を参照してください。
List	以下のものをリストします。 <ul style="list-style-type: none"> • LEC アドレス解決テーブル (ARP) • LEC 構成 • データ・ダイレクト VCC 情報 • LEC 統計 • VCC テーブル
MIB	以下を含む LEC MIB オブジェクトを表示します。 <ul style="list-style-type: none"> • LEC MIB 構成テーブル • LEC MAC ARP テーブル • LEC ルート記述子テーブル • LEC MIB サーバー VCC テーブル • LEC MIB 統計テーブル • LEC MIB 状態テーブル
QoS	LEC x QoS+ プロンプトが表示されるので、そこから サービス品質監視コマンド (機構の使用と構成) の説明に従って、サービス品質を監視することができます。
Trace	パケット・トレースをオンまたはオフに設定します。
Exit	直前のコマンド・レベルに戻ります。13ページの『下位レベル操作環境を終了する』を参照してください。

List

list コマンドは、LEC アドレス解決テーブル (ART)、LEC 構成、データ・ダイレクト VCC 情報、または LEC 統計のリストを表示させる場合に使用します。

構文 :

```
list          arp-table
             configuration
             data-direct-vccs
             statistics
             vcc-table
```

arp LEC アドレス解決テーブル (ARP キャッシュ内のエントリー) をリストします。

例 :

フォーラム LE クライアントの構成

LEC+ list arp

LEC Address Resolution (LE ARP Cache) Table

```
Max Table Size      = 10
Free Table Entries  = 10
Current Mac Entries = 0
Current RD Entries  = 0
Arp Aging Time     = 300
Verify Sweep Interval = 60
```

MAC Address	Remote	Conn Handle	Xmit Queue Depth	BUS Frame Count	Arp Retry Count	Aging Timer	Destination	ATM Address
40.00.00.00.00.09	False	652	0	0	0	60	39.99.99.99.99.99.	99.00.00.99.99.30.02.40.00.00.00.00.09.81

注: スイープ間隔は常に ARP エージング・タイマー値の 1/5 です。

Max Table Size

利用可能なエントリーの合計数

Free Table Entries

空きエントリーの数

Current MAC Entries

Current RD Entries

ルート記述子 ATM エントリー

ARP Aging Time

エントリーをエージングにより除去するまでの時間

Verify Sweep Interval

MAC Address

Remote

Connection Handle

Queue Depth

Xmit Frame Count

BUS Retry Count

ARP Aging Timer

Destination ATM Address

configuration

LEC 構成をリストします。

イーサネットの場合:

例 :

```
IBM LEC+list config
      ATM IBM LEC Configuration
Physical ATM interface number = 0
LEC interface number         = 7
Primary ATM address
      ESI address             = Use burned in addr
      Selector byte           = 0x3
Emulated LAN type            = Ethernet IBM
Maximum frame size           = 1523
LE Client MAC address        = Use burned in addr
LE Server ATM address        = 00.00.00.00.00.00.00.00.00.00.00.00.00.00.00.00
Forward Peak Rate            = 155000
Backward Peak Rate          = 155000
      MAC cache size         = 32
MAC cache aging period      = 60
Route Descriptor cache size  = 32
Route Descriptor aging period = 60
LES Registration interval    = 60
LES Registration retry count = 3
LES keep alive count         = 10
Packet trace                 = No
IP Encapsulation             = ETHER
```

トークンリングの場合:

例 :

```
IBM LEC+list config
      ATM IBM LEC Configuration
Physical ATM interface number = 0
LEC interface number         = 10
Primary ATM address
      ESI address             = Use burned in addr
      Selector byte           = 0x6
Emulated LAN type            = Token Ring IBM
Maximum frame size           = 4551
LE Client MAC address        = Use burned in addr
LE Server ATM address        = 39.84.07.00.00.00.00.00.00.00.00.00.01.10.00.5A.DD.DA.02
Forward Peak Rate            = 155000
Backward Peak Rate          = 155000
      MAC cache size         = 32
MAC cache aging period      = 60
Route Descriptor cache size  = 32
Route Descriptor aging period = 60
LES Registration interval    = 60
LES Registration retry count = 3
LES keep alive count         = 10
Packet trace                 = No
RIF Aging Timer              = 120
Source Routing                = Enabled
```

例 :

```
LEC+ list config
Physical ATM interface number = 0
LEC interface number         = 9
LEC ATM address              = 39.99.99.99.99.99.00.00.99.99.31.01.09.FC.DD.D0.32.70.0A
LEC MAC address              = 40.00.82.10.17.09
lecConfigMode                 = Manual
lecConfigLanType              = 802.5 - Token Ring
lecConfigMaxDataFrameSize    = 4544
lecConfigLanName              =
lecConfigLesAtmAddress        = 39.99.99.99.99.99.00.00.99.99.31.01.40.00.82.10.17.00.09
lecControlTimeout            = 30
lecMaxUnknownFrameCount      = 10
lecMaxUnknownFrameTime       = 1
lecVccTimeoutPeriod          = 1200
lecMaxRetryCount              = 1
lecAgingTime                  = 300
lecForwardDelayTime           = 15
lecExpectedArpResponseTime    = 1
lecFlushTimeout              = 4
lecPathSwitchingDelay        = 6
lecLocalSegmentId            = 0x0
lecMulticastSendType         = 1
lecMulticastSendAvgRate       = 365566
lecMulticastSendPeakRate     = 365566
lecConnectionCompleteTimer   = 4
lecInitialControlTimeout      = 5
lecControlTimeoutMultiplier  = 2
V2 Capable                    = TRUE
```

フォーラム LE クライアントの構成

```
lecForwardDisconnectTimeout = 60
lecMinReconfigDelay          = 1
lecMaxReconfigDelay          = 5
lecMaxBusConnectRetries     = 0
lecElanId                     = 0
ExplorerExclude              = TRUE
LE ARP queue depth           = 5
LE ARP cache size            = 5000
Forward peakrate             = 365566
Backward peakrate            = 365566
Packet trace                  = Off
RIF aging timer              = 120
Source Routing                = enabled
```

上記の例に示されているパラメーターの定義は、333ページの『Set』を参照してください。

data LEC データ・ダイレクト VCC 情報をリストします。

例 :

LEC+ list data

```
LEC Data Direct VCC Table

Max Table Size = 1019      Max no of SVC connections
Current Size   = 0        Currently used
Inactivity Timeout = 1200 No Data Xfer Timeout before connection is
                           closed (seconds)

Sweep Interval = 60
Conn           Inactive User
Handle VPI VCI Timer Count Destination ATM Address
-----
652      0 7241 300     1 39.99.99.99.99.99.00.00.99.99.30.02.
                           40.00.00.00.00.09.81
-----
```

statistics

LEC 統計をリストします。

例 :

LEC+ list stat

```
LEC Statistics

In Octets.high = 0      No of Bytes received
In Octets.low  = 346
In Discards    = 2      Packets discarded
In Errors      = 0      Rx.Errors
In Unknown Protos = 0  Unknown protocols received
Out Octets.high = 0      No of Bytes xmitted.
Out Octets.low  = 0
Out Discards    = 0
Out Errors      = 0      Tx.Errors
In Frames       = 0
Out Frames      = 0
In Bytes        = 0
Out Bytes       = 0
```

VCC table

VCC テーブルをリストします。

例 :

LEC+ list vcc

MIB

mib コマンドは、MIB オブジェクトを表示させる場合に使用します。

注: この情報の中には、**list** コマンドを使用して、別のフォーマットで表示できるものもあります。

構文 :

mib
config-table
mac-arp-table
rd-arp-table
server-vcc-table
statistics-table
status-table

config LEC MIB 構成テーブルを表示します。

例 :

LEC+ mib config

```
lecConfigTable:
lecConfigMode          = Manual
lecConfigLanType       = 802.3 - Ethernet
lecConfigMaxDataFrameSize = 1516
lecConfigLanName       =
lecConfigLesAtmAddress  = 39.84.0F.00.00.00.00.11.23.24.24.24.55.66.77.88.99.00
lecControlTimeout      = 120
lecMaxUnknownFrameCount = 1
lecMaxUnknownFrameTime = 0
lecVccTimeoutPeriod    = 1200
lecMaxRetryCount       = 1
lecAgingTime           = 300
lecForwardDelayTime    = 15
lecExpectedArpResponseTime = 1
lecFlushTimeout        = 4
lecPathSwitchingDelay  = 6
lecLocalSegmentId      = 0
lecMulticastSendType   = 1
lecMulticastSendAvgRate = 25000000
lecMulticastSendPeakRate = 25000000

lecConnectionCompleteTimer = 4
```

lecConfigMode

LEC 構成モード : AUTO または MANUAL。 AUTO の場合、LEC は LECS を使用して LES ATM アドレスを入手します。

lecConfigLanType

LAN タイプ。イーサネットまたはトークンリングのいずれかです。

lecConfigMaxDataFrameSize

最大フレーム・サイズ

lecConfigLanName

ELAN 名

lecConfigLesAtmAddress

LE サーバー ATM アドレス

lecControlTimeout

要求/応答制御フレームのタイムアウト

lecMaxUnknownFrameCount

不明フレームの最大数

lecMaxUnknownFrameTime

LEC が特定のユニキャスト LAN あて先あての最大数の

フォーラム LE クライアントの構成

MaxUnknownFrameCount フレームを BUS に送信し、さらにアドレス解決プロトコルを開始して、その LAN まで先を変換する必要もある期間。

lecVccTimeoutPeriod

SVC データ・ダイレクト VCC の非アクティブ・タイムアウト

lecMaxRetryCount

LE ARP 再試行カウント

lecAgingTime

ARP テーブル内の未検証エントリーの存続期間

lecForwardDelayTime

lecExpectedArpResponseTime

ARP 要求/応答サイクル・タイム

lecFlushTimeout

LE フラッシュ要求/フラッシュ応答タイムアウト期間

lecPathSwitchingDelay

lecLocalSegmentId

エミュレートされた LAN のセグメント ID。 802.5 クライアントの場合のみ

lecMulticastSendType

LEC がマルチキャスト・SEND VCC で使用するシグナル・パラメーター

lecMulticastSendAvgRate

LEC がマルチキャスト・SEND VCC で使用するシグナル・パラメーター

lecMulticastSendPeakRate

LEC がマルチキャスト・SEND VCC で使用するシグナル・パラメーター

lecConnectionCompleteTimer

mac LEC MAC ARP テーブルを表示します。

rd LEC ルート記述子テーブルを表示します。

サーバー (server)

LEC MIB サーバー VCC テーブルを表示します。

例 :

LEC+ mib server

```
lecServerVccTable:
lecConfigDirectInterface = 0
lecConfigDirectVpi      = 0
lecConfigDirectVci      = 0
lecControlDirectInterface = 1
lecControlDirectVpi     = 0
lecControlDirectVci     = 38
lecControlDistributeInterface = 1
lecControlDistributeVpi = 0
lecControlDistributeVci = 37
lecMulticastSendInterface = 1
```

```
lecMulticastSendVpi      = 0
lecMulticastSendVci     = 34
lecMulticastForwardInterface = 1
lecMulticastForwardVpi  = 0
lecMulticastForwardVci  = 33
```

lecConfigDirectInterface

コンフィギュレーション・ダイレクト VCC に対応するインターフェース

lecConfigDirectVpi

上記の VCC (存在する場合) を識別する VPI

lecConfigDirectVci

上記の VCC (存在する場合) を識別する VCI

lecControlDirectInterface

コントロール・ダイレクト VCC に対応するインターフェース

lecControlDirectVpi

上記の VCC (存在する場合) を識別する VPI

lecControlDirectVci

上記の VCC (存在する場合) を識別する VCI

lecControlDistributeInterface

コントロール・ディストリビュート VCC に対応するインターフェース

lecControlDistributeVpi

上記の VCC (存在する場合) を識別する VPI

lecControlDistributeVci

上記の VCC (存在する場合) を識別する VCI

lecMulticastSendInterface

マルチキャスト・SEND VCC に対応するインターフェース

lecMulticastSendVpi

上記の VCC (存在する場合) を識別する VPI

lecMulticastSendVci

上記の VCC (存在する場合) を識別する VCI

lecMulticastForwardInterface

マルチキャスト・フォワード VCC に対応するインターフェース

lecMulticastForwardVpi

上記の VCC (存在する場合) を識別する VPI

lecMulticastForwardVci

上記の VCC (存在する場合) を識別する VCI

statistics

LEC MIB 統計テーブルを表示します。

例 :

LEC+ mib statistics

```
lecStatisticsTable:
  lecArpRequestsOut      = 1
  lecArpRequestsIn      = 0
  lecArpRepliesOut      = 0
```

フォーラム LE クライアントの構成

```
lecArpRepliesIn      = 1
lecControlFramesOut  = 2
lecControlFramesIn   = 2
lecSvcFailures       = 1
```

lecArpRequestsOut

この LEC によって送信された LE ARP 要求数

lecArpRequestsIn

この LEC によって受信された LE ARP 要求数

lecArpRepliesOut

この LEC によって送信された LE ARP 応答数

lecArpRepliesIn

この LEC によって受信された LE ARP 応答数

lecControlFramesOut

この LEC によって送信された制御パケット数

lecControlFramesIn

この LEC によって受信された制御パケット数

lecSvcFailures

以下の合計数

- このクライアントがオープンを試行したが失敗した発信 LAN エミュレーション SVC の数
- このクライアントが確立を試行したが失敗した着信 LAN エミュレーション SVC の数
- このクライアントがプロトコルまたはセキュリティーを理由にリジェクトした着信 LAN エミュレーション SVC の数

status MIB 状態をリストします。

例 :

LEC+ mib status

```
lecStatusTable:
lecPrimaryAtmAddress      = 39.84.0F.00.00.00
Client ATM address=      = 00.00.00.00.00.01.10.00.5A.00.DE.AD.03
lecId                     = 1                               Assigned by LES
lecInterfaceState         = Operational                   State of the LEC
lecLastFailureRespCode    = None                          Error code from last
                                                                    failed Config/Join resp.
lecLastFailureState       = Initial State                  State of LEC when
                                                                    updating above field.
lecProtocol                = 1                             Protocol specified by
                                                                    LEC in Join requests.
lecVersion                 = 1                             LEC Protocol Version
                                                                    of above
lecTopologyChange         = False
lecConfigServerAtmAddress = 00.00.00.00.00.00.
lecConfigSource            = Did not use LECS
lecActualLanType          = 802.3 - Ethernet               Frame format currently
                                                                    used by LEC
lecActualMaxDataFrameSize = 1516
lecActualLanName          = ETH                             Name of emulated LAN
                                                                    that LEC joined.
lecActualLesAtmAddress     = 39.84.0F.00.00.00.
lecProxyClient            = False                           Is LES acting like a
                                                                    proxy ?
```

QoS Information

qos-information コマンドを使用すると、LEC x QoS+ プロンプトが表示されるので、そこから サービス品質監視コマンド (機構の使用と構成) の説明に従ってサービス品質を監視することができます。

構文 :

qos-information

フォーラム LE クライアントの構成

第30章 チャンネル・アダプターの使用

この章では、ホスト定義と 2216 の ESCON および並列チャンネル・アダプター (PCA) サポートの計画の仕方について説明します。この章は以下の節に分かれています。

- 『ホスト定義の計画』には、ホスト定義の計画に役立つ情報が記載されています。
- 376ページの『2216 サポートの計画』では、ネットワーク内での 2216 およびチャンネル・アダプターのサポートに関する考慮事項について説明します。
- 377ページの『チャンネル・アダプターの概説』では、チャンネル・アダプター・サポートについて説明します。
 - TCP/IP を実行できる LCS (LAN チャンネル・ステーション)
 - 階層型 SNA (DLSw、APPN ISR、または APPN HPR を含む) を実行できる LSA (リンク・サービス・アーキテクチャー)
 - APPN HPR、TCP/IP、および HPDT UDP (UDP+) を実行できる MPC+ (マルチパス・チャンネル)

注: UDP+ は並列チャンネル・アダプター (PCA) ではサポートされません。

- 397ページの『チャンネル・アダプター・インターフェースの構成』
- 400ページの『チャンネル・アダプター構成コマンド』

ホスト定義の計画

この節では、ホスト定義を計画するのに役立つ情報を提供します。これにはホスト側からのシステム定義に関する情報と 2216 側からの定義に関する情報があります。

2216 をチャンネルに接続する前に、ホスト・システムが正しく構成されていることが必要です。ホストへの 2216 の接続を定義するにあたっては、以下の一連のステップが必要です。これらの定義ステップは、システム・プログラマーが行います。

1. ホスト入出力構成プログラム (IOCP) とハードウェア構成定義 (HCD) プログラムのどちらかを使用して、ホスト・チャンネル・サブシステムに対して 2216 を定義する。
2. ホスト・オペレーティング・システムに対して 2216 を制御装置として定義する。
3. ホスト・プログラム (TCP/IP または VTAM) に対して 2216 および構成を定義する。

以上の定義が完了したら、コマンド行インターフェースを使用するか、構成プログラム使用者の手引き、GC88-6657 で説明されている構成プログラムを使用して、2216 チャンネル・インターフェースを構成する必要があります。2216 の構成時に指定するパラメーターの多くは、ホスト定義の中の対応するパラメーターに一致する必要があります。

最後に、ステーションについて、2216 を介してホスト・アプリケーションと通信するように構成する必要があります。

以下の節では、ホスト定義について説明し、ホスト構成ステートメントのサンプルを示します。

2216 の IOCP 定義

以下の各項では、チャンネル・アダプターを備えた 2216 の IOCP 定義の例について説明します。IOCP 装置定義の出力 (入出力構成データ・セットまたは IOCDs) は、MVS、VM、VSE、またはスタンドアロン環境を使用して生成することができます。詳細については、*ES/9000 and ES/3090 Input/Output Configuration Program User's Guide Volume A04*, GC38-0097 を参照してください。

ESCON チャンネルの IOCP 定義の例

図20 は、ESCON 構成の例を示しています。S/390 ホストは、2 つの論理区画 (LP)、LPA と LPB に分けられています。LPA と 2216A の間に、ESCD スイッチ 00 を介して、パス 30 を通る接続が構成されています。LPA は ESCD のポート C0 に接続され、2216A はポート C1 に接続されています。ポート C0 と C1 間の接続は動的です。

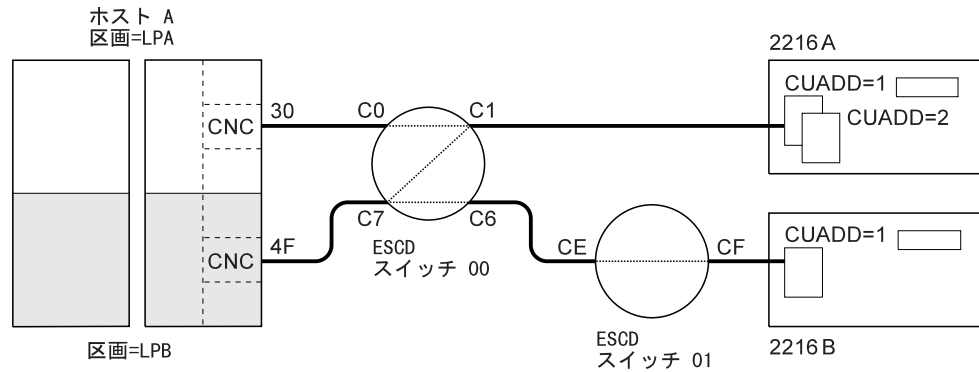


図20. ESCON チャンネル構成例

パス 4F 上の LPB には、ESCD スイッチ 00 を介して 2216A との接続があり、ESCD スイッチ 00 および 01 を介して 2216B との接続があります。ポート C7 と C6 間の接続は動的であり、ESCD ポート CE と CF 間の接続は専用です。

以下の定義例は、図20 に対応しています。

チャンネル・パス定義:

```
CHPID    PATH=((30)),TYPE=CNC,PART=(LPA),SWITCH=00
CHPID    PATH=((4F)),TYPE=CNC,PART=(LPB),SWITCH=00
```

2216 の制御装置および装置定義 (2216A の論理アドレス = 1 の場合)

```
CNTLUNIT CUNUMBR=500,PATH=30,UNIT=3172,LINK=C1,      X
          UNITADD=(00,32),CUADD=1
IODEVICE ADDRESS=(500,32),CUNUMBR=500,UNIT=3172,    X
          UNITADD=00
```

2216 の制御装置および装置定義 (2216A の論理アドレス = 2 の場合)

```
CNTLUNIT CUNUMBR=600,PATH=4F,UNIT=3172,LINK=C1,      X
          UNITADD=(00,32),CUADD=2
IODEVICE ADDRESS=(600,32),CUNUMBR=600,UNIT=3172,    X
          UNITADD=00
```


2216 の制御装置および装置定義 (2216B の論理アドレス = 1 の場合)

CNTLUNIT	CUNUMBR=620,PATH=4F,UNIT=3172,LINK=C6, UNITADD=(20,32),CUADD=1	X
IODEVICE	ADDRESS=(620,32),CUNUMBR=620,UNIT=3172, UNITADD=20	X

例の IOCP マクロ命令は、次のとおりです。

- CHPID を論理区画 LPA と LPB に割り当てる。
- 区画 LPA に関しては、2216 へのチャンネル・パス 30 を定義し、区画 LPB に関しては、チャンネル・パス 4F を定義する。
- チャンネル・タイプを ESCON チャンネル (CNC) として識別する。
- 2 つの CHPID を ESCD スイッチ番号 00 に割り当てる。
- 制御装置番号 500 および 600 を 2216A 上の論理アドレス 1 および 2 に、制御装置番号 620 を 2216B 上の論理アドレス 1 に対応付ける。
- リンク・アドレス C1 を制御装置 500 と 600 に割り当て、リンク・アドレス C6 を制御装置 620 に割り当てる。
- 装置アドレス (サブチャンネル) 00 ~ 1F を制御装置 500 と 600 に定義し、装置アドレス 20 ~ 3F を制御装置 620 に定義する。
- 各制御装置を 3172 装置として識別する。

考慮事項:

1. 許容される装置アドレス範囲は 00 ~ FF です。2216 のアドレス範囲は 32 個のアドレスに限定され、ホスト・コンピューターで定義されているアドレスが 2216 に構成されているアドレス (複数の場合もある) にマップする必要があるだけです。アドレス範囲は、実際に使用されている範囲を超えても構いませんが、同じ CHPID またはチャンネルに接続されている他の制御装置のアドレスとオーバーラップしてはなりません。
2. ESCON チャンネルの動作モードは、基本 ESCON チャンネル・モードの場合はタイプ CNC、ESCON コンバーターが接続されている場合はタイプ CVC です。
3. IODEVICE UNIT パラメーターは、3172 に設定する必要があります。
4. LINK 番号では、2216 が接続されるリンク・アドレス (ESCD ポート番号) を指定します。2 台の ESCD が直列に接続される場合は、リンク・アドレスは、動的接続をもち、2216 が接続されている ESCD のポート番号である必要があります。
5. 論理アドレス (CUADD) は、ホスト・チャンネルと 2216 の間の特定のパスに固有であることが必要です。

EMIF ホストの IOCP 定義例

358ページの図21 は、ESCON 複数イメージ・ファシリティー (EMIF) を使用する ESCON 構成の例を示しています。S/390 ホストは、2 つの論理区画 (LP)、LPA と LPB に分けられています。LPA と LPB は両方ともパス 30 を通り、スイッチ 00 を介して 2216 A に接続されています。

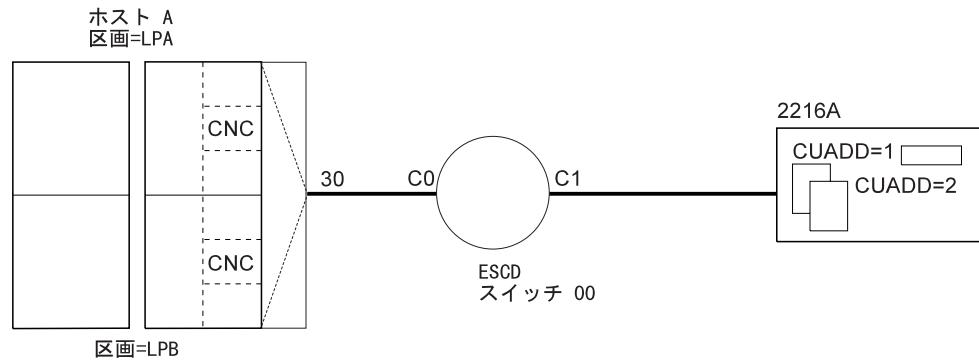


図 21. EMIF ホストの構成例

以下の定義例は、図21 に対応しています。

チャンネル・パス定義:

CHPID PATH=((30)),TYPE=CNC,PART=(LPA,LPB),SWITCH=00

2216 の制御装置および装置定義 (2216A の論理アドレス = 1 の場合)

CNTLUNIT	CUNUMBR=500,PATH=30,UNIT=3172,LINK=C1,	X
	UNITADD=(00,32),CUADD=1	
IODEVICE	ADDRESS=(500,32),CUNUMBR=500,UNIT=3172,	X
	UNITADD=00	

2216 の制御装置および装置定義 (2216A の論理アドレス = 2 の場合)

CNTLUNIT	CUNUMBR=620,PATH=30,UNIT=3172,LINK=C1,	X
	UNITADD=(20,32),CUADD=2	
IODEVICE	ADDRESS=(620,32),CUNUMBR=620,UNIT=3172,	X
	UNITADD=20	

例の IOCP マクロ命令は、次のとおりです。

- CHPID を論理区画 LPA と LPB に割り当てる。
- 2216 へのチャンネル・パス 30 が区画 LPA と区画 LPB によって共用されるよう定義する。
- チャンネル・タイプを ESCON チャンネル (CNC) として識別する。
- CHPID を ESCD スイッチ番号 00 に割り当てる。
- 制御装置番号 500 を 2216A 上の論理アドレス 1 に、620 を論理アドレス 2 に対応付ける。
- リンク・アドレス C1 を制御装置 500 と 620 に割り当てる。
- 装置アドレス (サブチャンネル) 00 ~ 1F を制御装置 500 に定義し、20 ~ 3F を制御装置 620 に定義する。
- 各制御装置を 3172 装置として識別する。

考慮事項:

1. 許容される装置アドレス範囲は 00 ~ FF です。2216 のアドレス範囲は 32 個のアドレスに限定され、ホスト・コンピューターで定義されているアドレスが 2216 に構成されているアドレス (複数の場合もある) にマップする必要があるだけです。アドレス範囲は、2216 用として実際に使用されている範囲を超えても構いませんが、同じ CHPID またはチャンネルにケーブル接続されている他の制御装置のアドレスとオーバーラップすることはできません。

2. ESCON チャンネルの動作モードは、基本 ESCON チャンネル・モードの場合はタイプ CNC、ESCON コンバーターが接続されている場合はタイプ CVC です。
3. IODEVICE UNIT パラメーターは、3172 に設定する必要があります。
4. LINK 番号では、2216 が接続されるリンク・アドレス (ESCD ポート番号) を指定します。2 台の ESCD が直列に接続される場合は、リンク・アドレスは、動的接続をもち、2216 が接続されている ESCD のポート番号である必要があります。
5. 論理アドレス (CUADD) は、ホスト・チャンネルと 2216 の間の特定のパスに固有であることが必要です。
6. 各区画は、それぞれ固有の論理アドレスが 2216 上に定義されている必要があります。

並列チャンネル・アダプター (PCA) の IOCP 定義例

図22 に、チャンネル・タイプがパス 5 上のブロック・マルチプレクサー・チャンネル TYPE=BL として識別されている、単純な並列チャンネル・アダプター構成の例が示してあります。

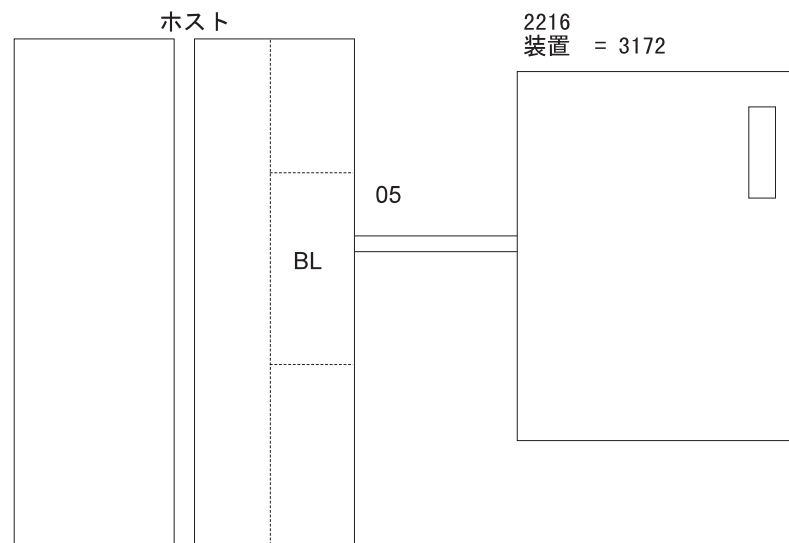


図 22. 並列チャンネル・アダプター構成例

IBM 2216 入出力装置は、ホストには 3172 に見えるので、3172 として定義する必要があります。

以下の定義例は 図22 に対応しています。

```

CHPID      PATH=((05)),TYPE=BL
CNTLUNIT   CUNUMBR=640,PATH=05,                X
           PROTOCL=S4,UNIT=3172,              X
           SHARED=N,UNITADD=((40,32))
IODEVICE   UNIT=3172,ADDRESS=((640,32)),       X
           STADET=N,CUNUMBER=640,TIMEOUT=Y

```

例の IOCP マクロ命令は、次のとおりです。

- チャンネル・タイプをブロック・マルチプレクサー・チャンネル (BL) として識別する。
- PCA が接続されるチャンネル・パス 05 の名前を指定する。
- PCA に制御装置番号 640 を割り当てる。

- ホスト・チャンネルが最大 4.5 MB のデータ・ストリームをサポートすることを指定する。
- 制御装置を、複数の入出力要求が並行してサポートされるタイプ 2 として識別する (SHARED=N)。
- PCA に装置アドレス 40 ~ 5F (32 個のアドレスを含む範囲) を定義する。
- PCA 制御装置を 3172 タイプの装置として識別する。

考慮事項:

1. 各 PCA のアドレス範囲は、TCP/IP の場合は連続するアドレス対であり、VTAM の場合は単一アドレスであり、MPC+ の場合は少なくとも読み取りサブチャンネルが 1 つ、書き込みサブチャンネルが 1 つであることが必要です。

許容される装置アドレス範囲は 00 ~ FF です。各 2216 PCA ごとに、それぞれ最大 32 本のサブチャンネルがサポートできます。2216 PCA では、32 個のアドレスの範囲を必要とするわけではなく、ホスト・コンピューターで定義されているアドレスが 2216 PCA 用として構成されているアドレス (複数の場合もある) にマップする必要があるだけです。使用するアドレスが、同じ CHPID またはチャンネルにケーブル接続されている他の制御装置や PCA で使用されているアドレスとオーバーラップすることはできません。

2. PROTOCL パラメーターは、ホスト・システムの能力に応じて、それぞれ次の値に設定することができます。

- D** 直接結合インターロック (DCI) モード
- S** 最大 3.0 MBps のデータ・ストリーム速度
- S4** 最大 4.5 MBps のデータ・ストリーム速度

こうして PROTOCL パラメーターとして指定する転送モードおよびチャンネル転送速度は、転送モードおよびチャンネル転送速度の PCA 設定値と一致する必要があります。

3. CNTLUNIT および IODEVICE ステートメントの UNIT パラメーターは、3172 に設定する必要があります。
4. ESCON コンバーターがチャンネル・パスである場合は、CHPID TYPE パラメーターは、FX に設定する必要があります、それ以外の場合は、BL に設定する必要があります。

オペレーティング・システムに対する 2216 の定義

以下の定義が適用されるのは、チャンネル・アダプター付き 2216 の場合です。

VM/SP の場合の 2216 の定義

2216 は、VM/SP オペレーティング・システムに対して定義する必要があります。この定義は、RDEVICE および RCTLUNIT マクロの中の 2216 に関するエントリーで実入出力構成ファイル (DMKRIO) を更新することによって行います。下の例では、640 が基本装置アドレスで、アドレス範囲のサイズは 32 です。

```
RDEVICE ADDRESS=(640,32),DEVTYPE=3088
RCTLUNIT ADDRESS=640,CUTYPE=3088,FEATURE=32-DEVICE
```

VM/XA および VM/ESA の場合の 2216 の定義

2216 は、VM/拡張アーキテクチャー (VM/XA) または VM/ESA オペレーティング・システムに対して定義する必要があります。この定義は、RDEVICE マクロの中の 2216 に関するエントリーで実入出力構成ファイル (HCPRIO) を更新することによって行います。下の例では、640 と 2A0 が基本制御装置アドレスです。UCW または IOCP に定義されたアドレス範囲サイズは、両方の例とも 8 です。

次の例は VM/XA HCPRIO 定義です。

```
RDEVICE ADDRESS=(640,8),DEVTYPE=CTCA
```

次の例は VM/ESA HCPRIO 定義です。

```
RDEVICE ADDRESS=(2A0,8),DEVTYPE=CTCA
```

HCD なし MVS/XA および MVS/ESA の場合の 2216 の定義

注: HCD 付き MVS/ESA システムに対する 2216 の定義については、『HCD 付き MVS/ESA の場合の 2216 の定義』の項を参照してください。

2216 は、IBM 多重仮想記憶/拡張アーキテクチャー (MVS/XA) または MVS/ESA オペレーティング・システムに対して定義する必要があります。この定義は、IODEVICE マクロの中の 2216 に関するエントリーで MVS 制御プログラムを更新することによって行います。

ESCON チャンネルの場合、IODEVICE マクロの例は、次のようになります。

```
IODEVICE UNIT=3172,ADDRESS(540,8)
```

並列チャンネルの場合の IODEVICE マクロの例は次のとおりです。

```
IODEVICE UNIT=CTC,ADDRESS(640,8)
```

基本制御装置アドレスは 640 と 540 です。UCW または IOCP に定義されたアドレス範囲サイズは、両方の例とも 8 です。

HCD 付き MVS/ESA の場合の 2216 の定義

MVS/ESA SP バージョン 4.2 および 4.3 (APAR #OY67361 付き) のハードウェア構成定義 (HCD) コンポーネントでは、2216 のシステム・ハードウェア構成を定義するために用意された方式が改善されています。HCD を使用すれば、ハードウェア構成データを入力するのに必要な複雑なステップを、対話式のダイアログを使用して行うことができます。

2216 の場合に必要な構成データは、以下のとおりです。

1. HCD (APAR #OY67361 付き) を使用する場合は、2216 は (UNIT=3172) として定義します。

```
IODEVICE UNIT=3172,ADDRESS(740,8)
```

2. HCD がない場合は、2216 は次のように定義します。

- 並列チャンネルを 3088 装置として (UNIT = 3088 または CTC)

```
IODEVICE UNIT=CTC,ADDRESS(840,8)
```

- ESCON チャンネルをシリアル CTC 装置として (UNIT = SCTC)

IODEVICE UNIT=SCTC,ADDRESS(A40,8)

注:

1. MVS バージョン 4 用の HCD を使用して ESCON ホスト接続を定義する場合、装置定義 (UNIT=3172) に対する UIM サポートを得るために、APAR #OY67361 が必要になります。
2. IOCP 定義およびオペレーティング・システム定義を HCD 環境に移行するにあたっては、2216 の装置ステートメントをすべて (UNIT=3172) に変更することが重要です。

VSE/ESA の場合の 2216 の定義

2216 は、VSE/ESA オペレーティング・システムに対して定義する必要があります。この定義は、初期プログラム・ロード (IPL) 時に、各チャンネル装置アドレスごとに ADD ステートメントを提供することによって行います。次の例に示すように、ADD ステートメントの装置タイプは CTCA,EML としてコーディングします。

```
ADD 640,CTCA,EML
```

例では、基本制御装置アドレスは 640 です。追加するチャンネル装置アドレスの数だけ、IOTAB 記憶マクロを増分します。

ホスト・プログラムに対する 2216 の定義

この項の構成定義では、2216 のチャンネル・アダプターに接続する場合に必要なホスト定義のサンプルを使用しています。

TCP/IP のホストの構成

TCP/IP は、LCS と MPC+ のどちらを使用しても 2216 のチャンネル・アダプターに接続できます。MPC+ を使用すると、ホスト内の TCP/IP は VTAM を介して 2216 に接続します。

注: MPC+ を参照する場合は、ホストでは用語 HPDT MPC を使用しますが、2216 では用語 MPC+ を使用します。

TCP の構成は、ホスト上で TCP/IP プロファイルを変更することによって行います。TCP/IP プロファイル・データ・セットのデフォルト名は、MVS では TCPIP.PROFILE.TCPIP、VM では PROFILE TCPIP です。各チャンネル接続は、以下のものがが必要です。

- それぞれのサブチャンネル対またはグループごとに DEVICE ステートメント
- 2216 上の各 LCS インターフェースごとに LINK ステートメント 1 つの DEVICE に複数の LINK を定義することができます。
- MPC+ グループにわたってサポートされる各 IP アドレスごとに LINK ステートメント。1 つの DEVICE に定義できる LINK は 1 つだけです。
- 各 LINK ステートメントごとに HOME ステートメント内にエントリー
- 使用するリンクの GATEWAY ステートメント内にエントリー (ROUTED が使用されていない場合)
- 各装置ごとに START コマンド

TCP/IP の構成について詳しくは、OS/390 TCP/IP OpenEdition の資料を参照してください。

LCS の使用による TCP/IP のホストの構成: LCS の使用時にホスト上に TCP/IP を構成する場合に必要なステートメントには、以下に挙げるものがあります。

DEVICE および LINK ステートメント: DEVICE および LINK ステートメントのフォーマットは、次のとおりです。

```
DEVICE devicename LCS subchannel  
LINK iplinkname LANtype LANnumber devicename
```

ただし、

devicename

装置を識別するローカル名。364ページの『LCS 使用時の TCP/IP コマンドの例』に示すように、TCP/IP プロファイルの終わりに、この装置名に関する START ステートメントが必要です。

LCS subchannel

2216 へのこの接続で使用する 2 つの LCS サブチャンネルからなる偶数サブチャンネル

iplinkname

リンクを識別するローカル名。この名前は、構成するリンクを識別するのに役立ちます。

LANtype

リンクのタイプ

LANnumber

該当する NETWORK サブメニューの LIST NETS コマンドを使用して、2216 から入手します。

HOME コマンド: 次のフォーマットを使用して、各チャンネル接続の IP アドレスを指定します。

```
HOME hostipadd iplinkname
```

ただし、

hostipadd

TCP/IP ネットワークへのこの接続の、ホストの IP アドレス

注: この IP アドレスは、2216 内でコーディングされている対応する IP アドレスと同じ IP サブネットワーク内で固有のアドレスであることが必要です。

iplinkname

『DEVICE および LINK ステートメント』で説明されている LINK ステートメントによって定義するリンク名

GATEWAY コマンド: ROUTED サーバーを使用しない場合、ルーティング情報を指定します。

```
GATEWAY network first hop driver packet size subn mask subn value
```

ただし、

network

ネットワークの IP アドレス。デフォルト値は DEFAULTNET であり、明示的にルーティングが行われていないネットワークの場合に、デフォルトのルーティング・エントリーを指定します。

first hop

次のいずれか 1 つを指定します。

メッセージがそのネットワーク上のあて先に直接、またはそのホストに直接、ルーティングされることを意味する等号 (=)。DEFAULTNET の場合はサポートされません。

直接到達することができ、しかもあて先ネットワークまたはホストに対するメッセージを転送する、ゲートウェイまたはルーターのインターネット・アドレス。

driver 363ページの『DEVICE および LINK ステートメント』で説明されている LINK ステートメントによって定義される *iplinkname*。

packet size

ネットワークまたはホストの最大伝送単位 (バイト)

subn mask

サブネット・フィールドを構成するホスト・フィールドのビットを定義するビット・マスク

subn value

サブネット・フィールドの値

START コマンド: すべてのインターフェースを開始します。

```
START devicename
```

ただし、

devicename

363ページの『DEVICE および LINK ステートメント』で説明されている DEVICE ステートメントによって定義されるパラメーター

LCS 使用時の TCP/IP コマンドの例:

```
DEVICE LCS1 LCS 108
LINK TR1 IBMTR 0 LCS1
HOME
 16.51.136.199 TR1 1
GATEWAY
 16.51.136.201 = TR1 4000 HOST 2
DEFAULTNET 16.51.136.201 TR1 4000 0
START LCS1
```

1 16.51.136.199 は、2216 LCS インターフェースの IP アドレスと同じ IP サブネットワーク内にあります。

2 16.51.136.201 は、2216 LCS インターフェースの IP アドレスです。

MPC+ の使用による TCP/IP のホストの構成: MPC+ の使用時にホスト上に TCP/IP を構成する場合に必要なステートメントには、以下に挙げるものがあります。

DEVICE および LINK ステートメント:

```
DEVICE devicename MPCPTP
LINK iplinkname MPCPTP devicename
```


ただし、

devicename

2216 へのこの接続で使用する TRL の名前。追加情報については、368ページの『MPC+ 用の MVS または VM の TCP/IP に対する 2216 定義例』を参照してください。

MPCPTP

MPC ポイント・ポイント・リンクを指定します。

iplinkname

リンクの区別をするリンク名。この名前は、構成するリンクを識別するのに役立ちます。

HOME コマンド: 次のフォーマットを使用して、各チャネル接続の IP アドレスを指定します。

```
HOME hostipadd iplinkname
```

ただし、

hostipadd

TCP/IP ネットワークへのこの接続の、ホストの IP アドレス

注: この IP アドレスは、2216 内でコーディングされている対応する IP アドレスと同じ IP サブネットワーク内で固有のアドレスであることが必要です。

iplinkname

364ページの『DEVICE および LINK ステートメント』で説明されている LINK ステートメントによって定義するリンク名

GATEWAY コマンド: ROUTED サーバーを使用しない場合、ルーティング情報を指定します。

```
GATEWAY network first hop driver packet size subn mask subn value
```

ただし、

network

ネットワークの IP アドレス。デフォルト値は *defaultnet* で、これは明示的にルートされていない任意のネットワークのデフォルト・ルーティング・エントリを指定します。

first hop

次のいずれか 1 つを指定します。

メッセージがそのネットワーク上のあて先に直接、またはそのホストに直接、ルーティングされることを意味する等号 (=)。DEFAULTNET の場合はサポートされません。

直接到達することができ、しかもあて先ネットワークまたはホストに対するメッセージを転送する、ゲートウェイまたはルーターのインターネット・アドレス。

driver 364ページの『DEVICE および LINK ステートメント』で説明しているように、LINK ステートメントで定義された *iplinkname*

packet size

ネットワークまたはホストの最大伝送単位 (バイト)

subn mask

サブネット・フィールドを構成するホスト・フィールドのビットを定義する
ビット・マスク

subn value

サブネット・フィールドの値

START コマンド: すべてのインターフェースを開始します。

```
START devicename
```

ただし、

devicename

364ページの『DEVICE および LINK ステートメント』で説明しているように、DEVICE ステートメントで定義されたパラメーター

MPC+ 使用時の TCP/IP コマンドの例:

```
DEVICE IPTRL1 MPCPTP
LINK LINK1 MPCPTP IPTRL1
HOME
  198.10.70.199 LINK1 1
GATEWAY
  198.10.70.203 = LINK1 16000 HOST 2
  DEFAULTNET 198.10.70.203 LINK1
START IPTRL1
```

1 198.10.70.199 は、2216 MPC+ インターフェースの IP アドレスの 1 つと同じ IP サブネットワーク内にあります。

2 198.10.70.203 は、2216 MPC+ インターフェースの IP アドレスの 1 つです。

LCS 用の MVS または VM の TCP/IP に対する 2216 定義例

LCS 装置を構成する場合に、TCP/IP プロファイル・データ・セットの中でホスト・コンピューターに提供される TCP/IP 定義の例を以下に示します。TCP/IP プロファイル・データ・セットのデフォルト名は、MVS では TCPIP.PROFILE.TCPIP、VM では PROFILE TCPIP です。

最初に 2216 の装置およびリンクが TCP/IP に対して定義されます。

2216 にアクセスする場合に使用する各サブチャネル対ごとに、DEVICE ステートメントが 1 つずつあります。指定する最初のアドレスは、**偶数** アドレスでなければなりません。この例では、2 つの装置 (サブチャネル対) が定義されています。1 つはアドレス 640 で、もう 1 つはアドレス 642 です。これらの装置がある 2216 は、同じものでも異なるものでも構いません。LCS (LAN チャネル・ステーション) の装置タイプを使用して、これらの装置を TCP/IP に定義します。

これらの装置からアクセスできる各 LAN アダプターごとに LINK ステートメントがあります。この例では、1 つのイーサネット/802.3 アダプターが、サブチャネル 640 および 641 を使用する装置に割り当てられ、2 つのトークンリング・アダプターが、642 および 643 を使用する装置に割り当てられ、1 つの FDDI アダプターが、644 および 645 を使用する装置に割り当てられています。これらの 2 つのトークンリン

グは、同一の装置に対応しているため、同じ 2216 の中にあります。各アダプターの LINK 番号 (この例では 0 と 1) は、アダプターをプロファイルに追加すると、2216 によって割り当てられます。

注: 送信用と受信用の 2 つのサブチャンネル・アドレス (例では、640 と 641) が必要ですが、最初のアドレスのみを定義します。

```
DEVICE LCS1 LCS 640
LINK ETH1 ETHERor802.3 0 LCS1
DEVICE LCS2 LCS 642
LINK TR1 IBMTR 0 LCS2
LINK TR2 IBMTR 1 LCS2
DEVICE LCS3 LCS 644
LINK FD1 FDDI 0 LCS3
```

注: この例では、0 と 1 が、これらの接続の LAN 番号です。

TCP/IP プロファイルの例の下記のセクションは、ローカル・ホストのインターネット・アドレスを定義しています。

```
HOME
193.5.2.1 ETH1
130.50.75.1 TR1
130.50.76.1 TR2
195.10.70.1 FD1
```

TCP/IP プロファイルの例の下記のセクションは、LAN/WAN ゲートウェイ定義を表しています。

```
GATEWAY
Network First hop Driver Packet Size Subnet mask Subnet value
193.5.2 = ETH1 1500 0
130.50 = TR1 2000 0.0.255.0 0.0.75.0
130.50 = TR2 2000 0.0.255.0 0.0.76.0
195.10 = FD1 4000 0.0.255.0 0.0.70.0
```

TCP/IP プロファイルの例の下記のセクションは、LCS 装置を起動します。

```
START LCS1
START LCS2
START LCS3
```

以下の各例は、TCP/IP プロファイル内のサブチャンネル対に対して LAN アダプターを指定し、リンクする種々の方法を示しています。

2 組のサブチャンネル対 (40,41 および 42,43) 用の 2 つの LCS 装置と、4 つの LAN アダプターを、次のように 2216 内に定義します。

```
DEVICE LCS1 LCS 640
LINK ETH1 ETHERNET 0 LCS1
LINK ETH2 ETHERNET 1 LCS1
DEVICE LCS2 LCS 642
LINK TRN1 IBMTR 0 LCS2
LINK TRN2 IBMTR 1 LCS2
```

4 組のサブチャンネル対 (40,41、42,43、44,45、および 46,47) 用の 4 つの LCS 装置と、4 つの LAN アダプターを、次のように 2216 内に定義します。

```
DEVICE LCS1 LCS 640
LINK ETH1 ETHERNET 0 LCS1
DEVICE LCS2 LCS 642
LINK ETH2 ETHERNET 1 LCS2
DEVICE LCS3 LCS 644
LINK TRN1 IBMTR 0 LCS3
DEVICE LCS4 LCS 646
LINK FD1 FDDI 0 LCS4
```

サブチャンネル対 (40,41) 用の 1 つの LCS 装置と、4 つの LAN アダプターを、次のように 2216 内に定義します。

```
DEVICE LCS1 LCS 640
LINK ETH1 ETHERNET 0 LCS1
LINK ETH2 ETHERNET 1 LCS1
LINK ETH3 ETHERNET 2 LCS1
LINK ETH4 ETHERNET 3 LCS1
```

MPC+ 用の MVS または VM の TCP/IP に対する 2216 定義例

MPC+ 装置を構成する場合に、TCP/IP プロファイル・データ・セットの中でホスト・コンピューターに提供される TCP/IP 定義の例を以下に示します。TCP/IP プロファイル・データ・セットのデフォルト名は、MVS では TCPIP.PROFILE.TCPIP、VM では PROFILE TCPIP です。

最初に、VTAM ホストで、TCP/IP が稼働する必要がある TRL を定義します。

```
IPTRL VBUILD TYPE=TRL
IPTRL1 TRLE LNCTL=MPC,
      MAXBFRTU=6,
      READ=(06),
      WRITE=(07)
      REPLYTO=3.0
```

注:

1. 複数の TCP/IP スタックで同じ TRL を使用することができます。
2. 詳細については、375ページの『IP の MPC+ 用の VTAM ホストの構成』を参照してください。

TCP/IP で使用される各 TRL ごとに、DEVICE ステートメントが 1 つずつあります。

```
DEVICE IPTRL1 MPCPTP
```

TRL を使用する各 TCP/IP ローカル・ホストのインターネット・アドレスごとに、LINK ステートメントが 1 つずつあります。特定の TCP/IP スタックについては、1 つの TRL につき LINK ステートメントは 1 つだけです。

```
LINK LINK1 MPCPTP IPTRL1
```

TCP/IP プロファイル例の次のセクションでは、ローカル・ホストのインターネット・アドレスを定義し、アドレスをリンクに対応付けています。

```
HOME
198.10.70.199 LINK1 1
```

1 198.10.70.199 は、2216 MPC+ インターフェースの IP アドレスの 1 つと同じ IP サブネットワーク内にあります。

TCP/IP プロファイルの例の次のセクションは、LAN/WAN ゲートウェイ定義を表しています。

```
GATEWAY
Network      First hop      Driver  Packet Size  Subnet mask  Subnet value
198.10.70.203 =           LINK1   16000        HOST         1
DEFAULTNET   198.10.70.203 LINK1   16000        0
```

1 198.10.70.203 は、2216 MPC+ インターフェースの IP アドレスの 1 つです。

TCP/IP プロファイル例の次のセクションでは、MPC+ 装置を起動します。

```
START IPTRL1
```

注: 対応する TRL がまだアクティブでない場合は、この装置の起動に先立って、それを起動しておきます。

HPDT UDP 用ホストの構成

重要!

HPDT UDP 用として S/390 を構成する場合は、その前に APAR #OW31305 が導入されている必要があります。

HPDT UDP が 2216 に接続できるのは、MPC+ を使用する ESCON チャネル・アダプターを介する場合だけです。

注:

1. 2216 では、HPDT UDP を UDP+ と呼びます。
2. UDP+ は並列チャネル・アダプター (PCA) ではサポートされません。

HPDT UDP は、ホスト上で OS/390 TCP/IP OpenEdition (OE) を使用して、構成および実行します。したがって、OS/390 TCP/IP OpenEdition をホストに導入する必要があります。

HPDT UDP コマンドを使用して、HPDT UDP 資源を構成および制御します。HPDT UDP 用として OE を導入および使用方法の詳細については、*OS/390 TCP/IP Update Guide* を参照してください。

2216 上で HPDT UDP 接続を構成および起動する場合は、次の例に示すように、**oeifconfig** コマンドを発行します。

```
oeifconfig interface_name source_IP_address destination_IP_address mtu nnnn
```

ただし、

interface_name

HPDT UDP コネクション用の TRL の名前

TRL がまだアクティブでない場合は、これで起動されることとなります。

注: TRL の説明については、375ページの『IP の MPC+ 用の VTAM ホストの構成』を参照してください。

source_IP_address

HPDT UDP 接続のホスト内でのローカル IP アドレス

この IP アドレスは、2216 内で UDP+ MPC+ ネットワーク・ハンドラー用としてコーディングされている IP アドレスと同じ IP サブネットワーク内にある必要があります。

destination_IP_address

HPDT UDP 接続の 2216 内でのあて先 IP アドレス

このあて先 IP アドレスは、2216 内で UDP+ MPC+ ネットワーク・ハンドラーに関してコーディングされている IP アドレスに等しい必要があります。

mtu nnnn

nnnn は、HPDT UDP 接続の最大伝送単位サイズです。

この MTU サイズは、2216 内で UDP+ MPC+ ネットワーク・ハンドラーに関してコーディングされている Maxdata に等しいことが必要です。値が等しくない場合は、HPDT UDP 接続は立ち上がりません。

注: これはポイント・ポイント接続であるため、このコマンドでネットマスク・パラメーターをコーディングする必要はありません。

MVS または VM の場合の HPDT UDP に対する 2216 の定義例

最初に、VTAM ホストで、HPDT UDP が稼働する必要がある TRL を定義します。

```
UDPTRL VBUILD TYPE=TRL
TRL1   TRLE LNCTL=MPC,
        MAXBFRU=9,
        READ=(EA0),
        WRITE=(EA1),
        REPLYTO=3.0
```

注: 詳細については、375ページの『IP の MPC+ 用の VTAM ホストの構成』を参照してください。

次に、OE 環境に進んで、次のようにコマンドを発行します。

```
oeifconfig trl1 198.10.60.199 198.10.60.203 mtu 16384
```

ホストで LSA を構成するのに使用する VTAM 制御ブロック

VM または MVS ホストを構成するには、2 つの VTAM 制御ブロック内にエントリが必要で

- 外部通信アダプター (XCA) 大ノード定義ファイル
- 交換回線大ノード構成ファイル

VTAM の構成についての詳細は、*VTAM Resource Definition Reference* を参照してください。

XCA 大ノード定義ファイル - サンプル: XCA 大ノードを定義するためには、以下の特性を定義する VTAM 定義ステートメントをコーディングすることが必要です。

- ノード・タイプ (VBUILD 定義ステートメント)
- LAN が使用するポート (PORT 定義ステートメント)
- 2216 チャンネル・アダプターを介して接続される交換回線 (GROUP、LINE、および PU 定義ステートメント)

大ノード用の VBUILD 定義ステートメントと PORT 定義ステートメント、および小ノード用の GROUP、LINE、および PU 定義ステートメントをコーディングする必要があります。

また、LAN またはエミュレートされた LAN への各バーチャル・チャンネルで使用されるサービス・アクセス・ポイント (SAP) も割り当てる必要があります。

交換回線大ノード定義ファイル - サンプル: 交換回線大ノード定義ファイルでは、VTAM が 2216 チャンネル・アダプターを介してアクセスできるワークステーションを定義し、以下の識別を行います。

- ノード・タイプ (VBUILD 定義ステートメント)

- ネットワーク資源 (PU および LU 定義ステートメント)

2216 LAN/WAN ゲートウェイを VTAM に定義するためには、IBM 2216 内の該当する LAN アダプターをサブチャンネル・アドレスに関連付けることが必要です。このアソシエーションは、VTAM バージョン 3 リリース 4、および VTAM バージョン 4 リリース 1 でサポートされている大ノード定義で、VTAM に定義します。

VTAM ホストでの LSA 直接接続の構成

VM または MVS ホストを構成するには、2 つの VTAM 制御ブロック、XCA 大ノード定義ファイル、および交換回線大ノード定義ファイルが必要です。この制御ブロックの目的についての説明は、370ページの『ホストで LSA を構成するのに使用する VTAM 制御ブロック』 および VTAM 資料を参照してください。

XCA 大ノード定義ファイル - サンプル:

```
ROUTE6B1 VBUILD TYPE=XCA
PORT6B1 PORT CUADDR=0CB,ADAPNO=0,TIMER=60,SAPADDR=08, C
          MEDIUM=RING
GRP6B1 GROUP DIAL=YES
*****
LN06B001 LINE ANSWER=ON,CALL=INOUT,ISTATUS=ACTIVE
PU06B001 PU ISTATUS=ACTIVE
```

注:

1. ADAPNO は、2216 LSA インターフェースの LAN 番号です。
2. CUADDR は、チャンネル・アドレスです。これは、2216 LSA インターフェースの装置アドレス (チャンネル・アドレスを定義する 3 つの 16 進文字) に対応します。
3. MEDIUM=RING (トークンリングの場合)、MEDIUM=CSMACD (イーサネットの場合)、および MEDIUM=FDDI (FDDI の場合)。これは、2216 インターフェースの LANtype に指定された値に対応します。

交換回線大ノード定義ファイル - サンプル:

```
PS06SW VBUILD TYPE=SWNET
PS06PU PU ADDR=01,IDBLK=05D,IDNUM=54445,MAXOUT=7,PACING=0,VPACING=0, C
          SSCPFM=USSSCS,MAXDATA=4105,MODETAB=LMT3270,MAXPATH=1, C
          ANS=CONT,ISTATUS=ACTIVE,DLOGMOD=B22NNE
PS06LU2 LU LOCADDR=02
PS06LU3 LU LOCADDR=03
PS06LU4 LU LOCADDR=04
PS06LU5 LU LOCADDR=05
```

VTAM ホストでの LSA APPN 接続の構成

VM または MVS ホストを構成するには、2 つの VTAM 制御ブロック、XCA 大ノード定義ファイル、および交換回線大ノード定義ファイルが必要です。この制御ブロックの目的についての説明は、370ページの『ホストで LSA を構成するのに使用する VTAM 制御ブロック』 および VTAM 資料を参照してください。

XCA 大ノード定義ファイル - サンプル:

```
P15AP63X VBUILD TYPE=XCA
PORT63X PORT CUADDR=0CD,ADAPNO=0,TIMER=60,SAPADDR=04, C
          MEDIUM=CSMACD
GRP63X GROUP DIAL=YES
*****
LN630403 LINE ANSWER=ON,CALL=INOUT,ISTATUS=ACTIVE
PU630403 PU ISTATUS=ACTIVE
```

注:

1. ADAPNO は、2216 LSA インターフェースの LAN 番号です。
2. CUADDR は、チャンネル・アドレスです。これは、2216 インターフェースの装置アドレス (チャンネル・アドレスの下位バイトを定義する 2 つの 16 進文字) に対応します。
3. トークンリングの場合は MEDIUM=RING、イーサネットの場合は MEDIUM=CSMACD です。これは、2216 LSA インターフェースの LANtype に指定された値に対応します。

交換回線大ノード定義ファイル - サンプル:

```
LS601  VBUILD TYPE=SWNET
CS601  PU ADDR=02,CPNAME=C210,MAXOUT=7,PACING=0,VPACING=0,          C
        CPCP=YES,MAXDATA=4105,MODETAB=LMT3270,MAXPATH=10,          C
        CONNTYPE=APPN,DYNLU=YES
```

VTAM ホストでの LSA DLSw 接続の構成

VM または MVS ホストを構成するには、2 つの VTAM 制御ブロック、XCA 大ノード定義ファイル、および交換回線大ノード定義ファイルが必要です。この制御ブロックの目的についての説明は、370ページの『ホストで LSA を構成するのに使用する VTAM 制御ブロック』 および VTAM 資料を参照してください。

XCA 大ノード定義ファイル - サンプル:

```
P15AP60X VBUILD TYPE=XCA
PORT60X PORT CUADDR=0CC,ADAPNO=1,TIMER=60,SAPADDR=04,              C
           MEDIUM=CSMACD
GRP60X  GROUP DIAL=YES
*****
LN600403 LINE ANSWER=ON,CALL=INOUT,ISTATUS=ACTIVE
PU600403 PU  ISTATUS=ACTIVE
LN600404 LINE ANSWER=ON,CALL=INOUT,ISTATUS=ACTIVE
PU600404 PU  ISTATUS=ACTIVE
```

注:

1. ADAPNO は、2216 LSA インターフェースの LAN 番号です。
2. CUADDR は、チャンネル・アドレスです。これは、2216 インターフェースの装置アドレス (チャンネル・アドレスの下位バイトを定義する 2 つの 16 進文字) に対応します。
3. トークンリングの場合は MEDIUM=RING、イーサネットの場合は MEDIUM=CSMACD です。これは、2216 LSA インターフェースの LANtype に指定された値に対応します。

交換回線大ノード定義ファイル - サンプル:

```
PSK5SW VBUILD TYPE=SWNET
PSK5PU PU ADDR=03,IDBLK=05D,IDNUM=07251,MAXOUT=7,PACING=0,VPACING=0, C
        DLOGMOD=B22NNE,                                           C
        SSCPFM=USSSCS,MAXDATA=2000,MODETAB=LMT3270
PSK5LU2 LU LOCADDR=02
PSK5LU3 LU LOCADDR=03
PSK5LU4 LU LOCADDR=04
PSK5LU5 LU LOCADDR=05
PSK5LU6 LU LOCADDR=06
```


VTAM ホストでの LSA DLSw ローカル変換の構成

VM または MVS ホストを構成するには、2 つの VTAM 制御ブロック、XCA 大ノード定義ファイル、および交換回線大ノード定義ファイルが必要です。この制御ブロックの目的についての説明は、370ページの『ホストで LSA を構成するのに使用する VTAM 制御ブロック』 および VTAM 資料を参照してください。

XCA 大ノード定義ファイル - サンプル:

```
P15AP60X VBUILD TYPE=XCA
PORT60X PORT CUADDR=0CC,ADAPNO=1,TIMER=60,SAPADDR=04, C
          MEDIUM=CSMACD
GRP60X GROUP DIAL=YES
*****
LN600403 LINE ANSWER=ON,CALL=INOUT,ISTATUS=ACTIVE
PU600403 PU ISTATUS=ACTIVE
LN600404 LINE ANSWER=ON,CALL=INOUT,ISTATUS=ACTIVE
PU600404 PU ISTATUS=ACTIVE
```

注:

1. ADAPNO は、2216 LSA インターフェースの LAN 番号です。
2. CUADDR は、チャンネル・アドレスです。これは、2216 インターフェースの装置アドレス (チャンネル・アドレスの下位バイトを定義する 2 つの 16 進文字) に対応します。
3. トークンリングの場合は MEDIUM=RING、イーサネットの場合は MEDIUM=CSMACD です。これは、2216 LSA インターフェースの LANtype に指定された値に対応します。

交換回線大ノード定義ファイル - サンプル:

```
PS06SW VBUILD TYPE=SWNET,MAXDLUR=20
PS06PU PU ADDR=01,IDBLK=05D,IDNUM=54445,MAXOUT=7,PACING=0,VPACING=0, C
          SSCPFM=USSSCS,MAXDATA=4105,MODETAB=LMT3270,MAXPATH=1, C
          ANS=CONT,ISTATUS=ACTIVE,DLOGMOD=B22NNE
PS06LU2 LU LOCADDR=02
PS06LU3 LU LOCADDR=03
PS06LU4 LU LOCADDR=04
PS06LU5 LU LOCADDR=05

PSK5SW VBUILD TYPE=SWNET
PSK5PU PU ADDR=03,IDBLK=05D,IDNUM=07251,MAXOUT=7,PACING=0,VPACING=0, C
          DLOGMOD=B22NNE, C
          SSCPFM=USSSCS,MAXDATA=2000,MODETAB=LMT3270
PSK5LU2 LU LOCADDR=02
PSK5LU3 LU LOCADDR=03
PSK5LU4 LU LOCADDR=04
PSK5LU5 LU LOCADDR=05
PSK5LU6 LU LOCADDR=06
```

以下の例には、トークンリング・アダプターおよびイーサネット・アダプターの LAN 大ノードをそれぞれ定義する、XCA マクロおよび SWNET マクロが示してあります。例では、次のようになっています。

- GROUP1T、GROUP1E、および GROUP1F は、VBUILD TYPE=SWNET を必要とする LAN に接続されたリソースを表しています。
- GROUP2T、GROUP2E、および GROUP2F は、PU 5 ノードのコネクションを表しています。

モード・テーブルとデフォルト・モード・エントリーは、例に過ぎません。必ず、システムに定義されているモード・テーブルおよびモード・エントリーを使用してください。

```

TRLAN1  VBUILD TYPE=XCA
PORT1   PORT MEDIUM=RING,ADAPNO=0,CUADDR=644,TIMER=60,SAPADDR=4
GROUP1T GROUP DIAL=YES * Switched Attachment
LINE1TA LINE ANSWER=ON,CALL=INOUT,ISTATUS=ACTIVE
PU1TA   PU ISTATUS=ACTIVE
LINE1TB LINE ANSWER=ON,CALL=INOUT,ISTATUS=ACTIVE
PU1TB   PU ISTATUS=ACTIVE
GROUP2T GROUP DIAL=NO * Leased Definition
LINE2T  LINE USER=SNA * Multi-domain Connection
PU2T    PU MACADDR=400000000001,TGN=1,SUBAREA=2,SAPADDR=4,PUTYPE=5

ENLAN2  VBUILD TYPE=XCA
PORT2   PORT MEDIUM=CSMACD,ADAPNO=0,CUADDR=645,TIMER=60,SAPADDR=4
GROUP1E GROUP DIAL=YES * Switched Attachment
LINE1EA LINE ANSWER=ON,CALL=INOUT,ISTATUS=ACTIVE
PU1EA   PU ISTATUS=ACTIVE
LINE1EB LINE ANSWER=ON,CALL=INOUT,ISTATUS=ACTIVE
PU1EB   PU ISTATUS=ACTIVE
GROUP2E GROUP DIAL=NO * Leased Definition
LINE2E  LINE USER=SNA * Multi-domain Connection
PU2E    PU MACADDR=400000000002,TGN=2,SUBAREA=2,SAPADDR=4,PUTYPE=5

```

以下の例は、交換回線大ノード定義です。

```

LS100SW VBUILD TYPE=SWNET,MAXGRP=400,MAXNO=400
CS100001 PU ADDR=01,PUTYPE=2,MAXPATH=4,ANS=CONT,DLOGMOD=B22NNE,
ISTATUS=ACTIVE,MAXDATA=521,IRETRY=YES,MAXOUT=7,
PASSLIM=5,IDBLK=111,IDNUM=00001,MODETAB=LMT3270
PATH DIALNO=0104400000000004,GRPNM=GROUP1T
S00102 LU LOCADDR=2
CS100002 PU ADDR=02,PUTYPE=2,MAXPATH=4,ANS=CONT,DLOGMOD=B22NNE,
ISTATUS=ACTIVE,MAXDATA=521,IRETRY=YES,MAXOUT=7,
PASSLIM=5,CPNAME=MYNS2,MODETAB=LMT3270
PATH DIALNO=0104400000000005,GRPNM=GROUP1T
S00200 LU LOCADDR=0,DLOGMOD=LU62MODE
S00202 LU LOCADDR=2
CS100003 PU ADDR=03,PUTYPE=2,MAXPATH=4,ANS=CONT,DLOGMOD=B22NNE,
ISTATUS=ACTIVE,MAXDATA=521,IRETRY=YES,MAXOUT=7,
PASSLIM=5,IDBLK=111,IDNUM=00003,MODETAB=LMT3270
PATH DIALNO=0104400000000006,GRPNM=GROUP1E
S00302 LU LOCADDR=2
CS100004 PU ADDR=04,PUTYPE=2,MAXPATH=4,ANS=CONT,DLOGMOD=B22NNE,
ISTATUS=ACTIVE,MAXDATA=521,IRETRY=YES,MAXOUT=7,
PASSLIM=5,IDBLK=111,IDNUM=00004,MODETAB=LMT3270
PATH DIALNO=0104400000000007,GRPNM=GROUP1E
S00402 LU LOCADDR=2

CS100005 PU ADDR=05,PUTYPE=2,MAXPATH=4,ANS=CONT,DLOGMOD=B22NNE,
ISTATUS=ACTIVE,MAXDATA=521,IRETRY=YES,MAXOUT=7,
PASSLIM=5,IDBLK=111,IDNUM=00005,MODETAB=LMT3270
PATH DIALNO=0104400000000008,GRPNM=GROUP1F
S00502 LU LOCADDR=2
CS100006 PU ADDR=06,PUTYPE=2,MAXPATH=4,ANS=CONT,DLOGMOD=B22NNE,
ISTATUS=ACTIVE,MAXDATA=521,IRETRY=YES,MAXOUT=7,
PASSLIM=5,IDBLK=111,IDNUM=00006,MODETAB=LMT3270
PATH DIALNO=0104400000000005,GRPNM=GROUP1F
S00602 LU LOCADDR=2

```

VTAM 定義について詳しくは、以下の資料を参照してください。

VTAM V4R4 Network Implementation Guide, SC31-8370

VTAM V4R4 Resource Definition Reference, SC31-8377

APPN の MPC+ 用の VTAM ホストの構成

APPN の MPC+ 用の VTAM ホストの構成には、2 つの VTAM 制御ブロック (つまり、ローカル SNA 大ノードとトランスポート・リソース・リスト (TRL) 大ノード) のエントリー、および VTAM 始動パラメーターの変更が必要です。TRL は MPC+ グループに対応します。VTAM の構成についての詳細は、*VTAM Resource Definition Reference* を参照してください。

ローカル SNA 大ノード: VTAM のローカル SNA 大ノードを定義するには、以下の定義ステートメントを使用します。

```
UTYLSNA VBUILD TYPE=LOCAL
UTYHCC1 PU TRLE=UHCC1,XID=YES,CONNTYPE=APPN,CPCP=YES,HPR=YES
```

トランスポート・リソース・リスト (TRL) 大ノード:

```
BC4UTRL VBUILD TYPE=TRL
UHCC1 TRLE LNCTL=MPC,
      MAXBFRU=n,
      READ=(xxx1,xxx2,...),
      WRITE=(yyy1,yyy2,...),
      REPLYTO=3.0
```

C
C
C
C

ただし、次のとおりです。

n VTAM がチャンネルを通してデータを受信する場合に使用する 4K バッファ
ー・ページの数

xxx1,xxx2,...

読み取りサブチャンネル番号 **1**

yyy1,yyy2,...

書き込みサブチャンネル番号 **1**

1 サブチャンネルは連続している必要はありません。

読み取りおよび書き込みサブチャンネル番号は、2216 上に構成されている番号に付加される必要があります (たとえば、メッセージ・オペレーター・マウントまたは attach コマンドによって)。

注: VTAM への“読み取り”サブチャンネルは、2216 への“書き込み”サブチャンネルであり、VTAM への“書き込み”サブチャンネルは、2216 への“読み取り”サブチャンネルです。

VTAM 始動パラメーター: VTAM 初期設定ファイル ATCSTRxx (ただし、xx はユーザーが定義) で、ネットワーク・ノードを定義します。

```
NODETYPE=NN
```

高性能ルーティング (HPR) が使用されているので、このファイルにも追加する必要があります。

```
HPR=YES
```

注: MPC+ インターフェース上では、APPN HPR のみがサポートされます。APPN ISR はサポートされません。

APPN PU を起動する場合は、対応する TRLE を起動 (まだアクティブでない場合) してから、PU を起動します。

VTAM のコマンドの説明については、*VTAM Operation* を参照してください。

IP の MPC+ 用の VTAM ホストの構成

注: UDP+ は並列チャンネル・アダプター (PCA) ではサポートされません。

TCP/IP の場合または HPDT UDP の場合の MPC+ 用の VTAM ホストの構成には、VTAM トランスポート・リソース・リスト (TRL) 大ノード制御ブロックのエントリ

ーが必要です。TRL は MPC+ グループに対応します。VTAM の構成についての詳細は、*VTAM Resource Definition Reference* を参照してください。

トランスポート・リソース・リスト (TRL) 大ノード:

```
TRL      VBUILD TYPE=TRL
TRL1    TRLE LNCTL=MPC,
        MAXBFRU=n,
        READ=(xxx1,xxx2,...),
        WRITE=(yyy1,yyy2,...),
        REPLYTO=3.0
```

C
C
C
C

ただし、次のとおりです。

n VTAM がチャンネルを通してデータを受信する場合に使用する 4K バッファ
ー・ページの数

注: TCP/IP の場合も HPDT UDP の場合も両方とも、MAXBFRU*4K は、
2216 で MPC+ ネットワーク・ハンドラーに関してコーディングされて
いる Maxdata より大であることが必要です。

MAXBFRU に関するその他の制約事項については、*OS/390 TCP/IP
OpenEdition*、および *OS/390 Update Guide* を参照してください。

xxx1,xxx2,...

読み取りサブチャンネル番号 **1**

yyy1,yyy2,...

書き込みサブチャンネル番号 **1**

1 サブチャンネルは連続している必要はありません。

読み取りおよび書き込みサブチャンネル番号は、2216 上に構成されている番号に一致する
必要があります (たとえば、メッセージ・オペレーター・マウントまたは attach コ
マンドによって)。

注: VTAM への“読み取り”サブチャンネルは、2216 への“書き込み”サブチャンネル
であり、VTAM への“書き込み”サブチャンネルは、2216 への“読み取り”サブ
チャンネルです。

2216 サポートの計画

この節では、ネットワーク内での 2216 およびチャンネル・アダプターのサポートに関
する考慮事項について説明します。チャンネル・アダプターとホストまたは LAN の間
の通信問題の分析および解決には、2216 の問題解決手順の開始が必要になる場合があ
ります。

考えられる問題としては、次のものが挙げられます。

- 構成またはホスト定義の問題
- 2216 のハードウェアまたはソフトウェアの問題
- 2216 とホストの間のチャンネルの問題
- ホストのプログラム、リソース、またはハードウェアの問題
- LAN アダプター、アクセス・ユニット、または他のハードウェアの障害

- LAN ワークステーションの問題またはリソースの問題
- 2216 と LAN の間の通信の問題
- ハードウェアまたはソフトウェアの使用上の問題

問題は、ユーザーの報告、2216 または他の装置上のインディケータや表示される符号、あるいはプログラムによって表示されるメッセージによって示されます。これらの指示は、その問題がハードウェア、ソフトウェア、またはユーザーのいずれに原因があるのかを判別する助けになります。また、問題のあるネットワーク上の場所 (2216、LAN、ホスト) およびコンポーネント (装置、アダプター、チャンネル、またはプログラム) を特定するのにも役立ちます。

問題の性質を判別すると、それを解決するのに必要な手順、ツール、または追加情報が明らかになることがしばしばあります。同様に、ツール、手順、および情報により、保守を依頼する必要があるかどうかも分かります。問題判別および保守用のインターフェース (NetView、SNMP クライアント) が、ユーザーのために用意されています。

2216 チャンネル・アダプターの問題の分析と解決

2216 *Nways Multiaccess Connector Service and Maintenance Manual*、SY27-0350 で説明されている 2216 ESCON チャンネル・アダプターおよび PCA の問題分離手順は、問題を訂正したり (可能な場合)、保守を依頼する時期を判別する場合に役立ちます。

再構成

ネットワークの拡張、縮小、または再配置が行われた場合は、そのつど、以下の目的でホスト・プログラムおよび 2216 プロファイルの再構成を行う必要がある可能性があります。

- ネットワークのトラフィックおよびワークロードの平衡を取る
- ホスト・プログラムの新規バージョンまたはリリースに移行する
- 新規バージョンまたはリリースの 2216 に移行する
- ホスト SYSGEN を変更する

チャンネル・アダプターの概説

ESCON チャンネル・アダプターおよび PCA によって、2216 は、LAN、WAN、および ATM から SNA および TCP/IP ホスト・アプリケーションへのアクセスが得られます。

378ページの図23 には、2216 がチャンネル・アダプターを介して VTAM ホストに接続されている場合が示してあります。各チャンネル・アダプターには、LAN チャンネル・ステーション (LCS)、リンク・サービス・アーキテクチャー (LSA)、およびマルチパス・チャンネル (MPC+) プロトコルをサポートすることができる、最大 32 のサブチャンネルと最大 16 の関連バーチャル・ネットワーク・ハンドラーが用意されています。各 2216 には、それぞれ最大 4 つのチャンネル・アダプターを組み込むことができます。

各 ESCON チャンネル・アダプターでは、それぞれ最大で下記の接続を用意することができます。

- LCS または MPC+ の使用による、16 のホストまたは論理ホスト・イメージへの接続 (ESCON ディレクターを使用する場合)
- LSA の使用による、32 のホストまたは論理ホスト・イメージへの接続 (ESCON ディレクターを使用する場合)
- 論理区画モードの EMIF 対応可能プロセッサ内の 15 の論理ホスト・イメージへの接続 (ESCON ディレクターが存在しない場合)

各 PCA では、それぞれ 1 つのホストまたは 1 つの論理ホスト・イメージへの接続を用意することができます。

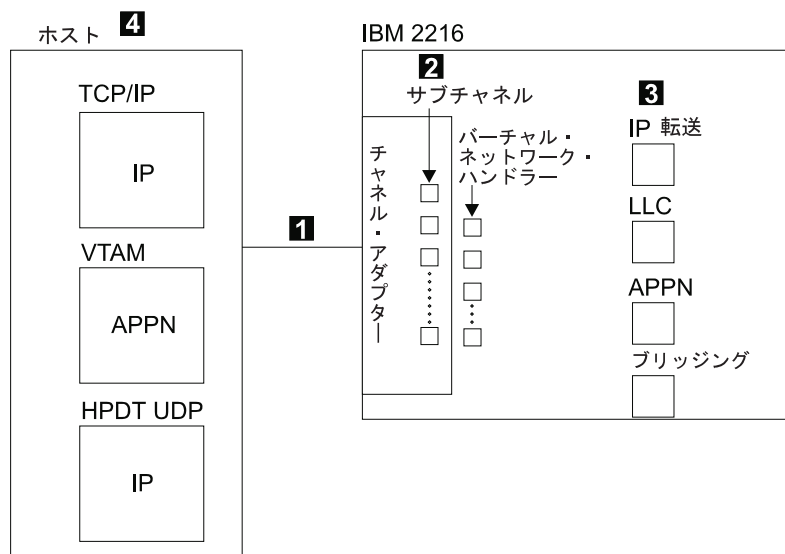


図 23. 2216 が ESCON/PCA チャンネル・アダプターを介してホストに接続されている場合 - 論理図

1 物理レベルで、ESCON チャンネル・アダプターは、ホスト・プロセッサの通信チャンネルへの柔軟な光ファイバー接続を提供します。PCA の物理レベルはこれよりもかなり複雑で、PCA への最終接続には一対の非常に太い銅線ケーブルと一組の (構成に応じて 1 ~ 3 本からなる) 細い対より線 (銅線) ケーブルが必要です。

2 論理レベルで、チャンネル・アダプターは、最大 32 のサブチャンネルと最大 16 の関連バーチャル・ネットワーク・ハンドラーを備えます。

各バーチャル・ネットワーク・ハンドラーは、以下のプロトコルの 1 つをサポートします。

LCS LAN チャンネル・ステーション

LSA リンク・サービス・アーキテクチャー

MPC+ マルチパス・チャンネル+

各 LCS バーチャル・ネットワーク・ハンドラーごとに、それぞれ 2 つのサブチャンネル (1 つは読み取り用、1 つは書き込み用) を定義する必要があります。

す。各チャンネル・アダプターごとに、それぞれ最大 16 の LCS バーチャル・ネットワーク・ハンドラーを定義することができます。

各 LSA バーチャル・ネットワーク・ハンドラーに対して、最低 1 つのサブチャンネルを定義する必要があり、最高 32 までサブチャンネルを定義できます。各チャンネル・アダプターごとに、最大 16 の LSA バーチャル・ネットワーク・ハンドラーを定義することができます。

MPC+ に対して、最高 32 のサブチャンネルを定義することができます。少なくとも 1 つの読み取り用サブチャンネルと、少なくとも 1 つの書き込み用サブチャンネルが必要です。各チャンネル・アダプターごとに、最大 16 の MPC+ バーチャル・ネットワーク・ハンドラーを定義することができます。

注:

1. LCS と LSA を同じチャンネル・アダプター上に構成することができます。
2. 移行目的では、MPC+ は LCS/LSA と同じチャンネル・アダプター上に構成できる場合もあります。ただし、これは長期的な解決策としては、お勧めできません。MPC+ を同じアダプター上で他のタイプのバーチャル・インターフェース (LCS/LSA) と組み合わせて使用すると、MPC+ インターフェースによって提供される性能上の利点に影響がでる可能性があります。

- 3** 2216 チャンネル・アダプターは、IP 転送、論理リンク制御 (LLC)、拡張ピアツーピアネットワーク機能 (APPN) およびブリッジングにサービスを提供します。
- 4** バーチャル・ネットワーク・ハンドラーは、380ページの図24 および 380ページの図25 に示されているように、ホスト・アプリケーションの情報パケットを送受信するためのコネクションを提供します。

チャンネル・アダプターを導入し、LCS、LSA、および MPC+ 用に構成すると、以下の機能が提供されます。

- DLSw トラフィックを含む階層型 SNA と、LSA 接続を通して実行される APPN ISR および HPR トラフィック。(DLSw および APPN は、LLC ループバックを必要とします。)
- LCS および MPC+ を通して実行される TCP/IP トラフィック
- MPC+ を通して実行される APPN HPR トラフィック
- MPC+ を通して実行される HPDT UDP トラフィック

注: UDP+ は並列チャンネル・アダプター (PCA) ではサポートされません。

380ページの図24 には、LCS および LSA が構成されたチャンネル・アダプターの基本的な流れを示し、380ページの図25 には、MPC+ が構成されているチャンネル・アダプターの基本的な流れが示してあります。

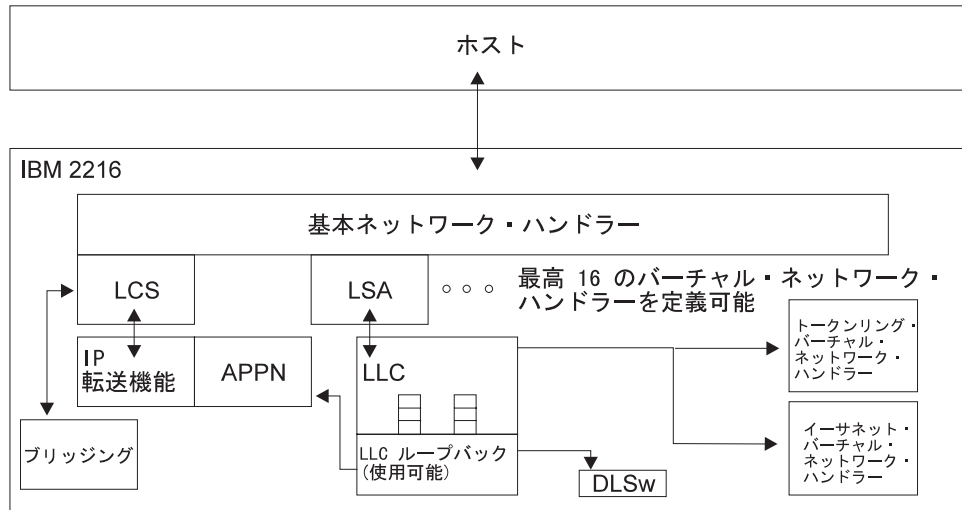


図 24. LCS および LSA の場合の 2216 バーチャル・ネットワーク・ハンドラー

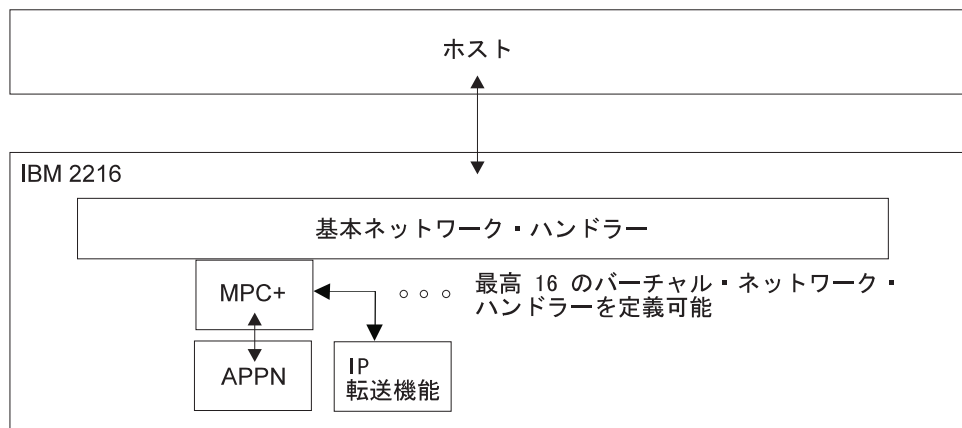


図 25. MPC+ の場合の 2216 バーチャル・ネットワーク・ハンドラー

LAN チャネル・ステーション (LCS) サポート

381ページの図26 には、TCP/IP データがホストから出て、LCS およびその他の 2216 ソフトウェア・コンポーネントを経由し、LAN/WAN に流れる様子が示してあります。

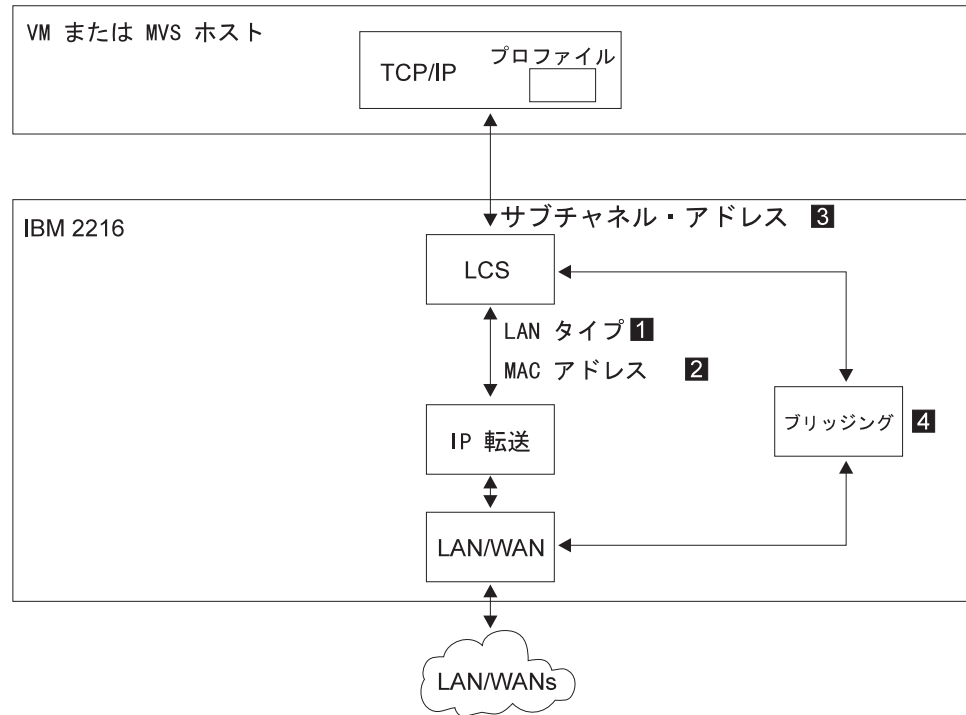


図26. LAN チャンネル・ステーション (LCS) バーチャル・ネットワーク・ハンドラーの構成. この図には、LCS の流れを示し、ホストおよび 2216 の主要なパラメーターを強調表示してあります。

LCS 用の 2216 の構成

図26 に LCS 接続が示してあります。LCS 用として 2216 を構成する手順は、次のとおりです。

1. 接続のための LAN タイプ (1) として、イーサネット、トークンリング、FDDI のうちいずれかを構成する。これは、ホストが送受信を予期するフレーム・タイプです。
2. このバーチャル・インターフェースを表す固有の MAC アドレス (2) を構成する。

注: LAN タイプがイーサネットの場合、MAC アドレスは標準フォーマットでなければなりません。

3. 402ページの『LCS サブチャンネルの構成』の説明に従って、この接続で使用されるサブチャンネル対 (3) を構成する。
4. (4) IP のルートを定めたい場合は、IP アドレスとマスクを LCS バーチャル・ネットワーク・ハンドラーに構成する必要があります。IP ルーティングの構成については、プロトコルの構成と監視 解説書 第 1 巻 中の IP の構成 の章を参照してください。IP をブリッジしたい場合は、ブリッジングを LCS バーチャル・ネットワーク・ハンドラーに構成する必要があります。IP を LCS バーチャル・ネットワーク・ハンドラーでブリッジングすることは、TCP/IP パススルーと呼ばれます。ブリッジングの構成の詳細については、382ページの『TCP/IP パススルー』を参照してください。

IP アドレスとマスクを構成する必要があります。 プロトコルの構成と監視 解説書 第 1 巻 を参照してください。

次のような任意指定パラメーターがあります。

maxdata

このバーチャル・ネットワークが扱うデータの最大サイズ

acklen

このインターフェースを介する確認フレームのサイズ (バイト)

blktimer

非フル・データ・ブロックをホストに送信する前に待つ最大時間 (ミリ秒)

対応するホスト定義については、362ページの『TCP/IP のホストの構成』 を参照してください。

TCP/IP パススルー

TCP/IP パススルーは、LCS バーチャル・ネットワーク・ハンドラーで受信した IP フレームを、LAN または WAN インターフェースに対して (ルートを定めるのではなく) ブリッジします。このフィーチャーを使用するには、LCS バーチャル・ネットワーク・ハンドラーと、相互接続したい LAN および WAN にブリッジングを構成する必要があります。ブリッジングの構成の詳細については、プロトコルの構成と監視 解説書 第 1 巻 中の ブリッジングの構成と監視 を参照してください。構成するブリッジングのタイプは、LCS バーチャル・ネットワーク・インターフェースの LAN タイプによって異なります。以下の表に、それぞれの LCS LAN タイプに応じたブリッジング・パラメーターを示します。

LCS LAN タイプ	ブリッジング・タイプ	フォワード STE フレーム
トークンリング	ソース・ルーティング、 透過、または、両方	使用可能化
イーサネット	透過	N/A
FDDI	透過	N/A

注: スパニング・ツリー・プロトコルは、LCS バーチャル・ネットワーク・ハンドラーで自動的に使用不可になります。

重要: LCS に対して IP アドレスとブリッジングの両方を構成することはできません。両方を構成すると、構成プログラムは、IP アドレス・オプションだけが指定されたかのように動作します。IP フレームをブリッジしたい場合は、IP アドレスを指定しないでください。

リンク・サービス・アーキテクチャー (LSA) サポート

リンク・サービス・アーキテクチャー (LSA) によって、VTAM ホストは 2216 内のチャンネル・アダプターと通信することができます。

383ページの図27 に、4 つのタイプの LSA 接続が示してあります。構成については、それぞれ下記の各項で説明します。

- 384ページの『2216 での LSA 直接接続の構成』

- 385ページの『2216 での LSA APPN 接続の構成』
- 386ページの『2216 での LSA DLSw 接続の構成』
- 388ページの『2216 での LSA DLSw ローカル変換の構成』

対応するホスト定義については、370ページの『ホストで LSA を構成するのに使用する VTAM 制御ブロック』を参照してください。

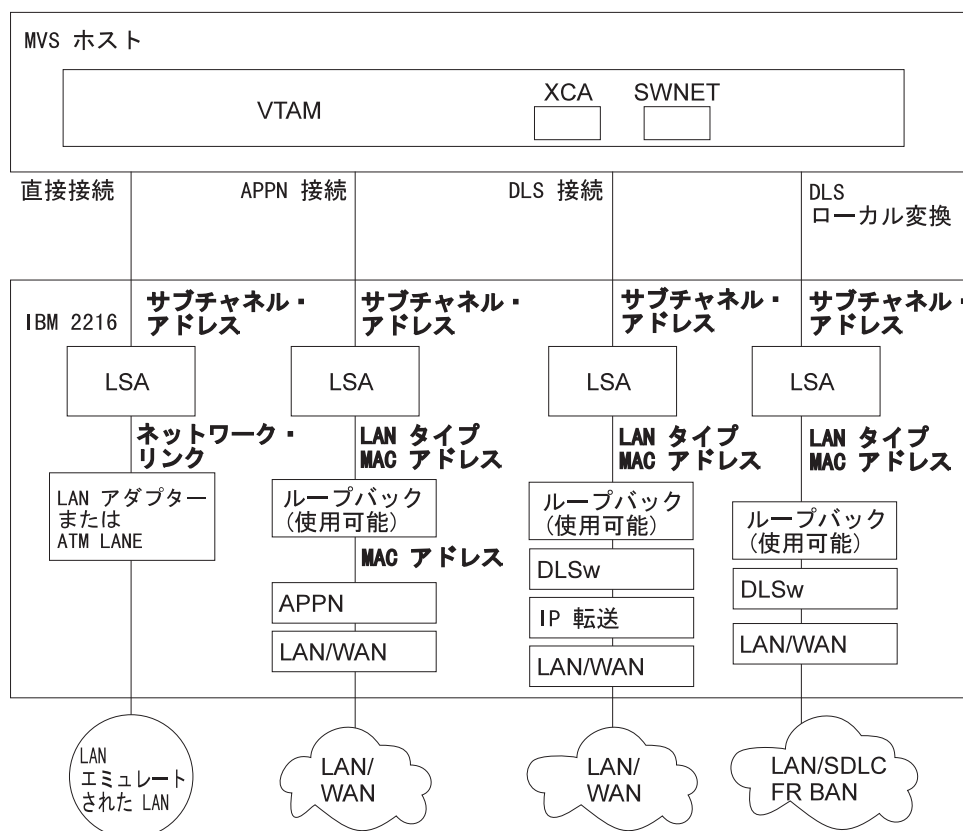


図 27. リンク・サービス・アーキテクチャ (LSA) バーチャル・ネットワーク・ハンドラーの構成

2216 での LSA 直接接続の構成

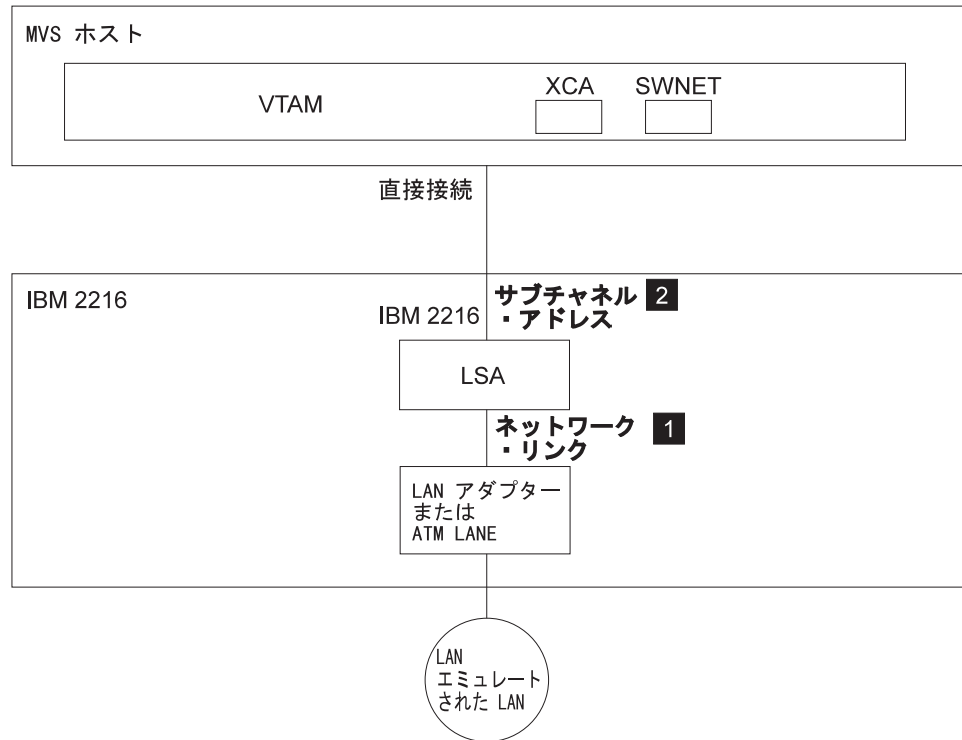


図 28. LSA 直接接続用のバーチャル・ネットワーク・ハンドラーの構成

図28 に LSA 直接接続が示してあります。LSA 接続の構成は、以下の手順で行います。

1. ネットワーク・リンク (1) を構成する。LSA ネットワークがリンクされる LAN アダプターのネットワーク・インターフェース番号です。これは 2216 がホストのデータをネットワークに送信する場合に使用するインターフェースです。
2. 407ページの『LSA サブチャネルの構成』の説明に従って、この接続で使用されるサブチャネル (複数の場合もある) (2) を構成する。

次のような任意指定パラメーターがあります。

maxdata

このバーチャル・ネットワークが扱うデータの最大サイズ

acklen

このインターフェースを介する確認フレームのサイズ (バイト)

blktimer

非フル・データ・ブロックをホストに送信する前に待つ最大時間 (ミリ秒)

注: LSA ネットワークでは、Net Link コマンドを用いて構成された 2216 インターフェースから、その MAC アドレスを読み取ります。

対応するホスト定義については、371ページの『VTAM ホストでの LSA 直接接続の構成』を参照してください。

2216 での LSA APPN 接続の構成

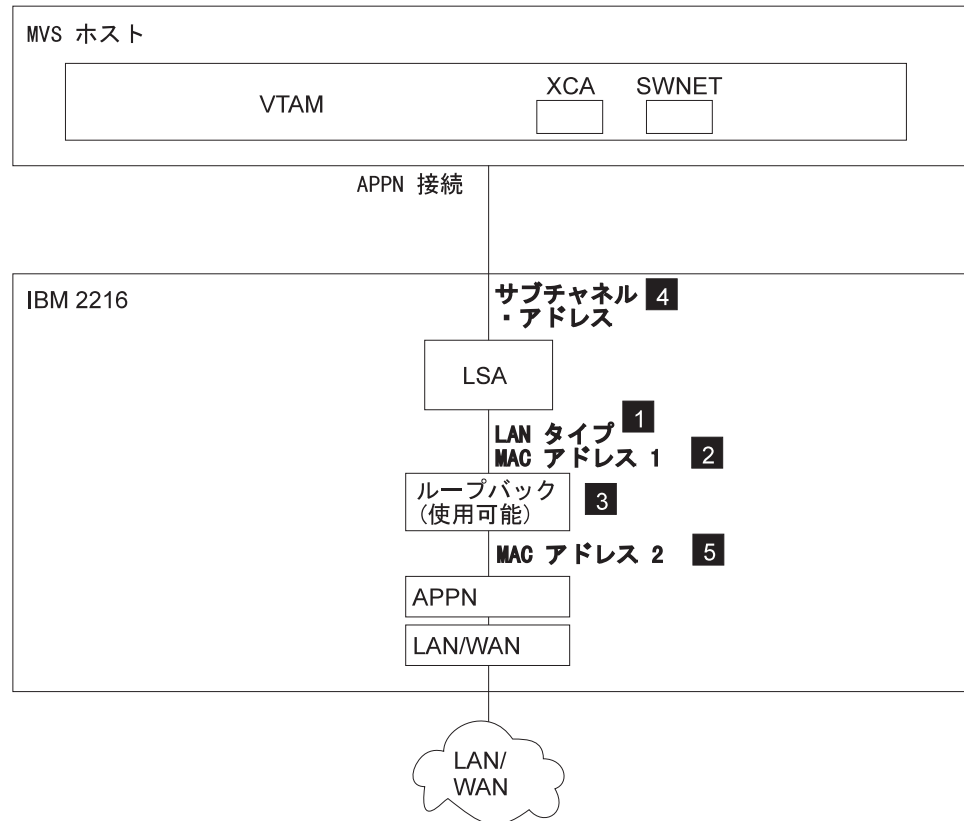


図29. LSA APPN 接続用のバーチャル・ネットワーク・ハンドラーの構成

図29 に LSA APPN 接続が示してあります。LSA APPN 接続のための 2216 の構成は、以下の手順で行います。

1. **enable** コマンドを使用して、LSA ループバック (**3**) を使用可能にする。
2. LAN タイプ (**1**) として、イーサネットとトークンリングのどちらかを構成する。

注: LSA ネットワークとループバック・ネットワークの両方に、同じ LAN タイプを構成する必要があります。

3. ループバック接続のホスト (VTAM) 端を識別するための固有の MAC アドレス (**2**) を構成する。

注: LAN タイプがイーサネットの場合、MAC アドレスは標準フォーマットでなければなりません。

4. 407ページの『LSA サブチャネルの構成』の説明に従って、この接続で使用されるサブチャネル (複数の場合もある) (**4**) を構成する。

次のような任意指定パラメーターがあります。

maxdata

このバーチャル・ネットワークが扱うデータの最大サイズ

acklen

このインターフェースを介する確認フレームのサイズ (バイト)

blktimer

非フル・データ・ブロックをホストに送信する前に待つ最大時間 (ミリ秒)

5. APPN が APPN ループバック・ネットワークを使用するように構成する。APPN ループバック・ネットワーク上に、APPN ポートを構成する必要があります。次に、この APPN ポートを介する APPN リンク・ステーションを構成するために、リンク・ステーション定義のあて先 MAC アドレスを、LSA ネットワークの MAC アドレスとして設定することが必要です。
6. MAC アドレス 2 (**5**)、つまりループバック接続の 2216 (APPN) 端を識別するための固有の MAC アドレスを構成する。

注: LAN タイプがイーサネットの場合、MAC アドレスは標準フォーマットでなければなりません。

対応するホスト定義については、371ページの『VTAM ホストでの LSA APPN 接続の構成』を参照してください。

2216 での LSA DLSw 接続の構成

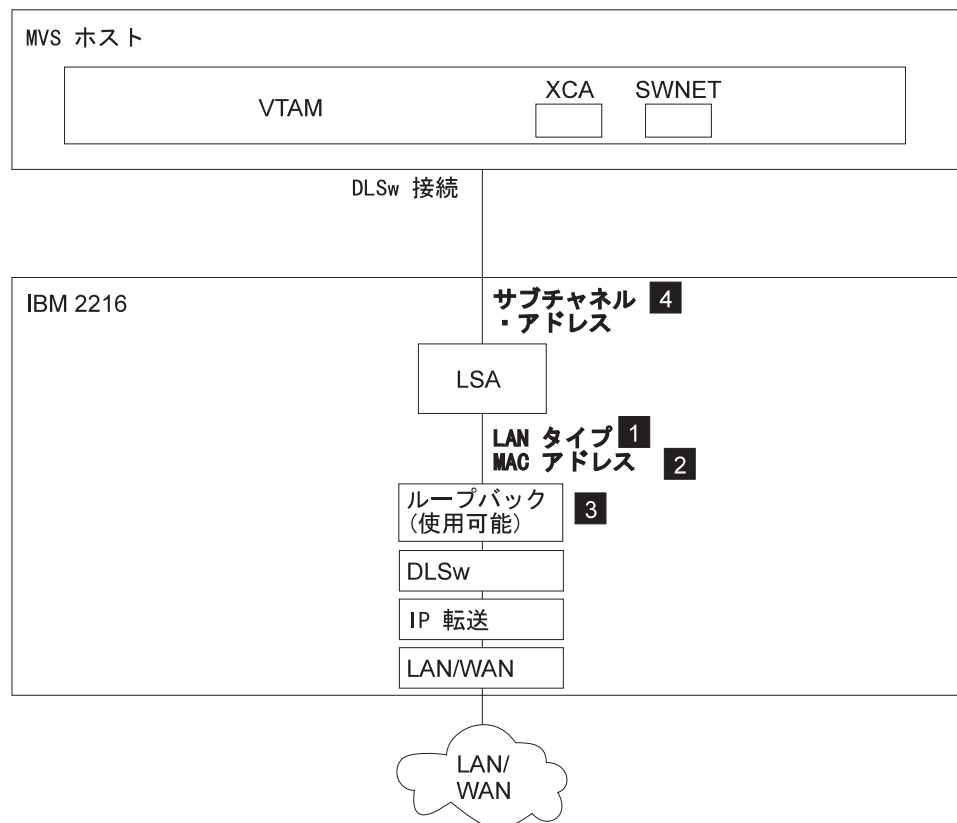


図 30. LSA DLSw 接続用のバーチャル・ネットワーク・ハンドラーの構成

図30 に LSA DLSw 接続が示してあります。LSA DLSw 接続の構成は、以下の手順で行います。

1. **enable** コマンドを使用して、LSA ループバック (**3**) を使用可能にする。
2. LAN タイプ (**1**) として、イーサネットとトークンリングのどちらかを構成する。これは、ホストが送受信を予期するフレーム・タイプです。

3. ループバック接続のホスト (VTAM) 端を識別するための固有の MAC アドレス (2) を構成する。

注: LAN タイプがイーサネットの場合、MAC アドレスは標準フォーマットでなければなりません。

4. 407ページの『LSA サブチャネルの構成』の説明に従って、この接続で使用されるサブチャネル (複数の場合もある) (4) を構成する。
5. DLSw を構成する。DLSw の構成には、DLSw の使用可能化、DLSw セグメント番号の設定、リモート DLSw TCP パートナーの追加、および DLSw 用として使用されるループバック・インターフェースに関連するサービス・アクセス・ポイント (SAP) のオープンが伴います。DLSw の構成は、config> プロンプトから行います。

DLSw を使用可能にするには、enable dls コマンドを使用します。

DLSw セグメント番号の設定は、set srb コマンドを使用して行います。DLSw セグメント番号は固有であることが必要です。

リモート DLSw TCP パートナーの追加には、add tcp コマンドを使用します。

LSA ループバック・インターフェースで使用される SAP をオープンするには、open コマンドを使用します。open コマンドを実行すると、インターフェース番号の入力を指示するプロンプトが出されます。そこで、DLSw での使用のために定義されている LSA ループバック・インターフェースに割り当てられているインターフェース番号を入力します。

DLSw 構成パラメーターの説明については、プロトコルの構成と監視 解説書 第 1 巻 の "DLSw の使用と構成" の章を参照してください。

次のような任意指定パラメーターがあります。

maxdata

このバーチャル・ネットワークが扱うデータの最大サイズ

acklen

このインターフェースを介する確認フレームのサイズ (バイト)

blktimer

非フル・データ・ブロックをホストに送信する前に待つ最大時間 (ミリ秒)

対応するホスト定義については、372ページの『VTAM ホストでの LSA DLSw 接続の構成』を参照してください。

2216 での LSA DLSw ローカル変換の構成

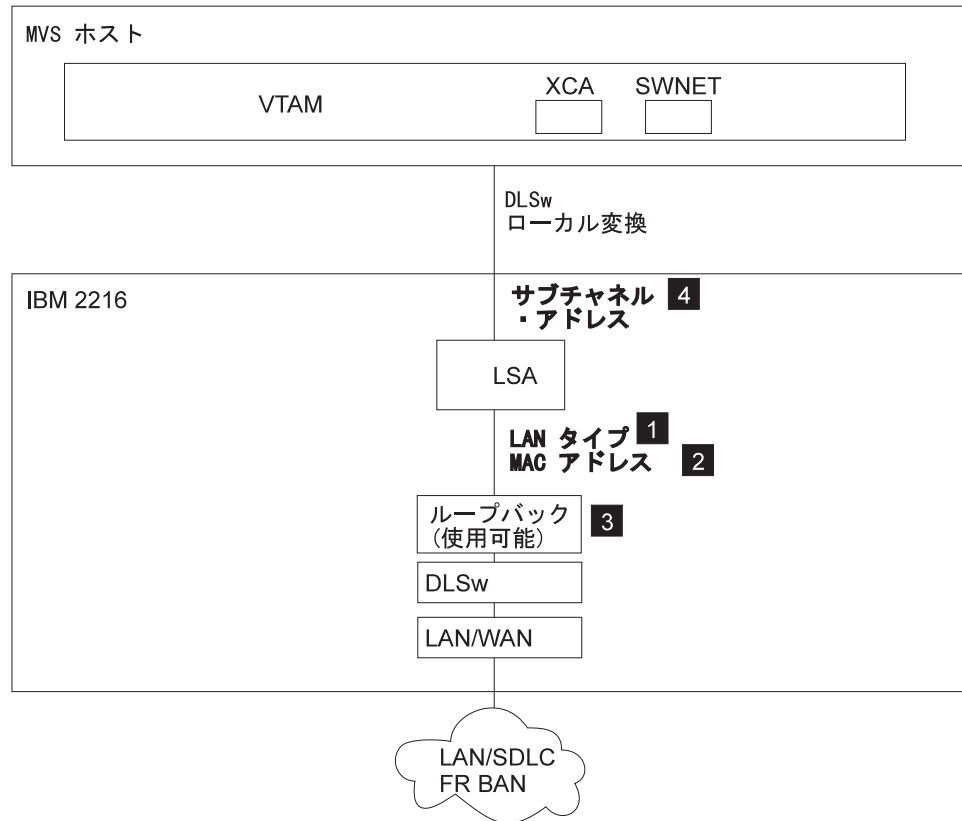


図 31. LSA DLSw ローカル変換用のバーチャル・ネットワーク・ハンドラーの構成

図31 に LSA DLSw ローカル変換をサポートする構成が示してあります。LSA DLSw 変換のための 2216 を構成する手順は、以下のとおりです。

1. **enable** コマンドを使用して、LSA ループバック (3) を使用可能にする。
2. LAN タイプ (1) として、イーサネットとトークンリングのどちらかを構成する。これは、ホストが送受信を予期するフレーム・タイプです。
3. ループバック接続のホスト (VTAM) 端を識別するための固有の MAC アドレス (2) を構成する。

注: LAN タイプがイーサネットの場合、MAC アドレスは標準フォーマットでなければなりません。

4. 407ページの『LSA サブチャネルの構成』の説明に従って、この接続で使用されるサブチャネル (複数の場合もある) (4) を構成する。
5. DLSw を構成する。DLSw の構成には、DLSw の使用可能化、DLSw セグメント番号の設定、ローカル DLSw TCP パートナーの追加、および DLSw 用として使用されるループバック・インターフェースに関連するサービス・アクセス・ポイント (SAP) のオープンが伴います。DLSw の構成は、config> プロンプトから行います。

DLSw を使用可能にするには、enable dls コマンドを使用します。

DLSw セグメント番号の設定は、`set srb` コマンドを使用して行います。DLSw セグメント番号は固有であることが必要です。DLSw セグメント番号は、他のインターフェースに割り当てられたセグメント番号とは異なっている必要があります。

ローカル DLSw TCP パートナーの追加には、`add tcp` コマンドを使用します。

LSA ループバック・インターフェースで使用される SAP をオープンするには、`open` コマンドを使用します。`open` コマンドを実行すると、インターフェース番号の入力を指示するプロンプトが出されます。そこで、DLSw での使用のために定義されている LSA ループバック・インターフェースに割り当てられているインターフェース番号を入力します。

SAP をオープンし、ローカル LAN/WAN インターフェース上にブリッジングを構成することが必要な場合があります。SAP をオープンし、ブリッジングを構成すると、着信フレームが DLSw に転送できます。

注: それぞれの LSA インターフェースは、SAP あたり最大 10240 の LLC リンク・ステーションをサポートできます。1 つの LSA インターフェースは複数の SAP をサポートできます。

DLSw 構成パラメーターの説明については、*プロトコルの構成と監視 解説書 第 1 巻* の "DLSw の使用と構成" の章を参照してください。

次のような任意指定パラメーターがあります。

maxdata

このバーチャル・ネットワークが扱うデータの最大サイズ

acklen

このインターフェースを介する確認フレームのサイズ (バイト)

blktimer

非フル・データ・ブロックをホストに送信する前に待つ最大時間 (ミリ秒)

マルチパス・チャネル+ (MPC+) サポート

マルチパス・チャネル+ (MPC+) によって、VTAM ホストは 2216 内のチャネル・アダプターと通信することができます。MPC+ グループは、少なくとも 1 つの読み取りサブチャネルと 1 つの書き込みサブチャネルが含まれ、エンドポイントが VTAM ホスト内の共通 MPC+ イメージに収束する、一組のサブチャネルです。

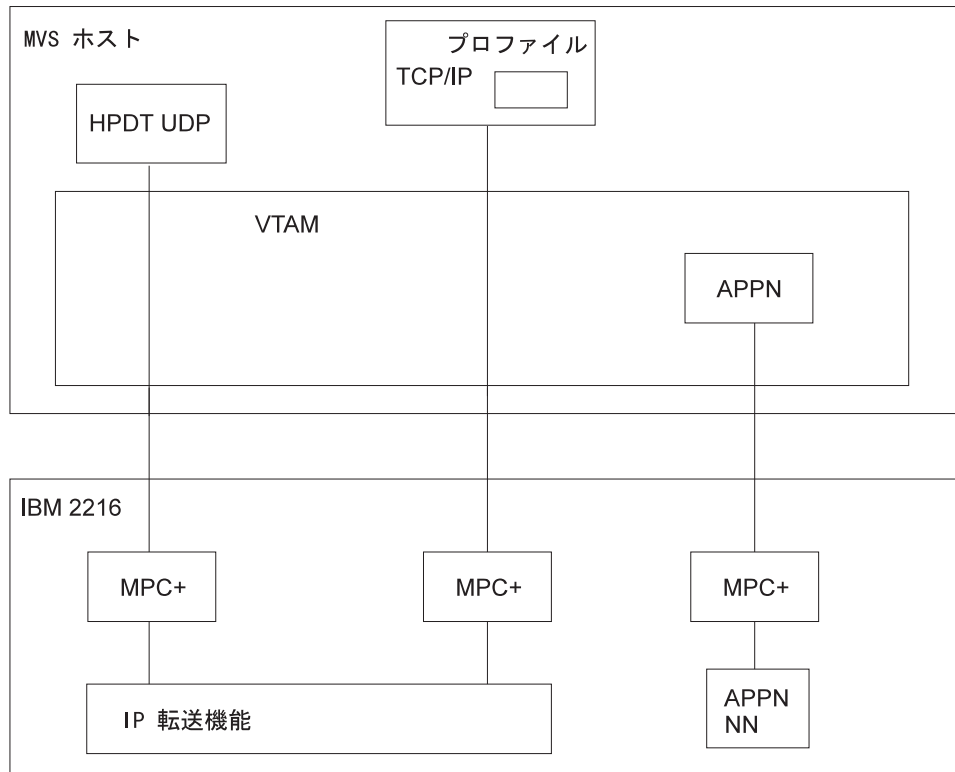


図 32. さまざまなタイプの MPC+ 接続。

注: UDP+ は並列チャンネル・アダプター (PCA) ではサポートされません。

図32 には、3 つのタイプの MPC+ 接続が示してあります。下記の項でそれぞれのタイプについて詳述します。

- 391ページの『MPC+ を介する APPN 用の 2216 の構成』
- 392ページの『MPC+ を介する UDP+ 用の 2216 の構成 (ESCON チャンネル・アダプターの場合のみ)』
- 394ページの『MPC+ を介する TCP/IP 用の 2216 の構成』

対応するホスト定義の説明については、362ページの『ホスト・プログラムに対する 2216 の定義』を参照してください。

2216 内に MPC+ グループを構成する場合は、基本 ESCON または PCA インターフェース上に MPC+ インターフェースを構成します。

- ホスト内の HPDT UDP への MPC+ 接続には、専用 MPC+ グループが必要です。MPC+ グループが専用の場合、他のユーザーまたはプロトコルによる共用はできません。

注: UDP+ は並列チャンネル・アダプター (PCA) ではサポートされません。

- MPC+ グループが専用でない場合は、複数の TCP/IP による共用も APPN による共用もできます。
- 単一のチャンネル・アダプター上に複数の MPC+ グループがあっても構いません。

MPC+ を介する APPN 用の 2216 の構成

図33 に、MPC+ の流れを示し、ホストおよび 2216 の主要なパラメーターを強調表示してあります。

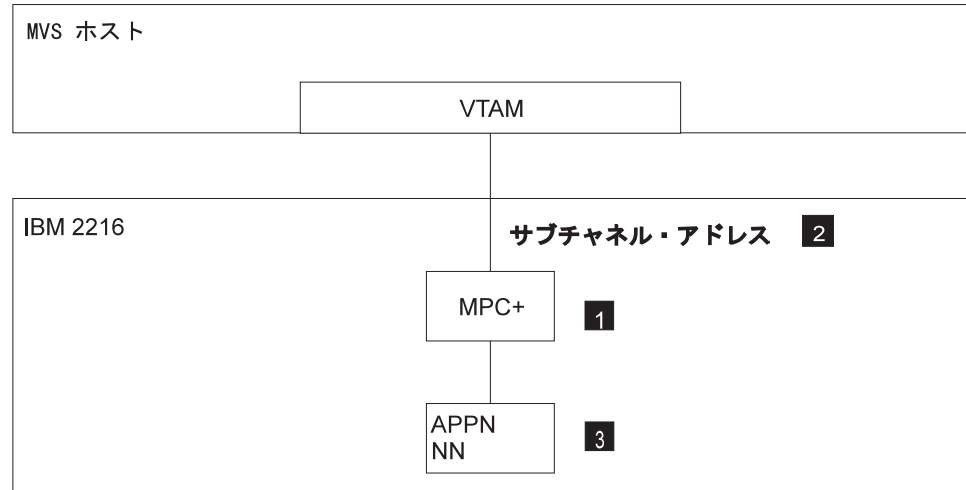


図33. マルチパス・チャネル+ (MPC+) を介する APPN 用のバーチャル・ネットワーク・ハンドラーの構成

図33 には、APPN 用の MPC+ を構成する場合に必要なパラメーターが示してあります。

1 409ページの『MPC+ バーチャル・インターフェースの構成』の説明に従って、MPC+ バーチャル・インターフェースを構成します。

2 411ページの『MPC+ サブチャネルの構成』の説明に従って、ホストへの読み取り接続および書き込み接続用のサブチャネルを構成します。

注: MPC+ インターフェース上で UDP+ 専用を使用可能にしないようにします。「disable outbound protocol data blocking」パラメーターは無視します。APPN の場合は、このパラメーターは適用外で無効です。

次のような任意指定パラメーターがあります。

reply timeout

XID2/Disconnect タイムアウトのタイマー (ミリ秒)

これは、MPC+ グループが XID2 および DISC 交換時に、チャネルの相手側が応答しないので、こちら側は MPC+ グループの起動または切断を続行する必要があるとして決定する前に、チャネルからの応答を待つ時間の長さです。

sequencing interval timer

シーケンス・インターバル・タイマー (ミリ秒) です。

このタイマーは、コネクション型のデータが MPC+ グループ上の接続を介して円滑に流れているかどうかを判別するのに使用されます。MPC+ 制御流れはコネクション型です。これらのコマンドは、コネクション型で流れるリン

ク・レベルの送達が保証される必要があるので、シーケンス・インターバル・タイマーを使用して、コネクション型トラフィックを送達できる十分な時間が経過したかをチェックします。

maxdata

このバーチャル・ネットワークによって扱われるデータの最大サイズ

acklen

このインターフェースを介する確認フレームのサイズ (バイト)

blktimer

非フル・データ・ブロックをホストに送信する前に待つ最大時間 (ミリ秒)

3 以下の例外を除いて、MPC+ インターフェースを介する APPN の構成は、他のインターフェース・タイプを介する場合と同様です。

- APPN “add port” コマンドで、リンク・タイプ MPC+ を指定する。
- APPN “add port” コマンドで、シーケンス・インターバル・タイマーを指定できる場合がある。

対応するホスト定義については、374ページの『APPN の MPC+ 用の VTAM ホストの構成』を参照してください。

MPC+ を介する UDP+ 用の 2216 の構成 (ESCON チャネル・アダプターの場合のみ)

393ページの図34 に、MPC+ を介する UDP+ 構成が図示してあります。

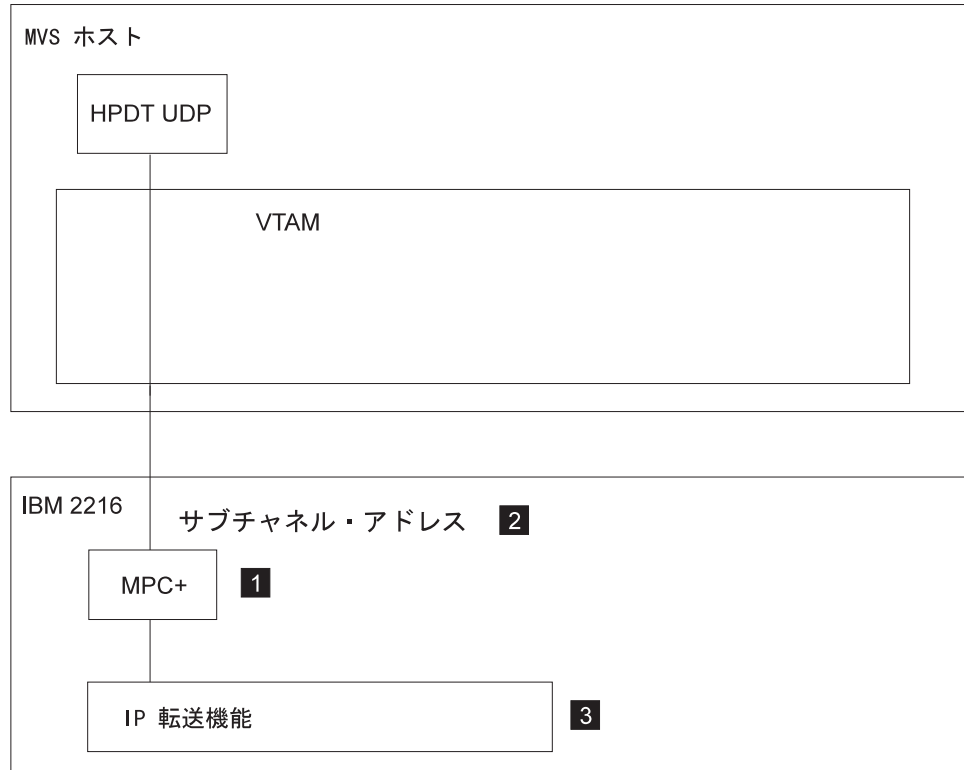


図 34. MPC+ を介する UDP+ 用のバーチャル・ネットワーク・ハンドラーの構成

1 409ページの『MPC+ バーチャル・インターフェースの構成』の説明に従って、MPC+ バーチャル・インターフェースを構成します。

MPC+ インターフェース上で UDP+ 専用を使用可能にする。

次のような任意指定パラメーターがあります。

reply timeout

XID2/Disconnect タイムアウトのタイマー (ミリ秒)

これは、MPC+ グループが XID2 および DISC 交換時に、チャネルの相手側が応答しないので、こちら側は MPC+ グループの起動または切断を続行する必要があるとして決定する前に、チャネルからの応答を待つ時間の長さです。

sequencing interval timer

シーケンス・インターバル・タイマー (ミリ秒) です。

このタイマーは、コネクション型のデータが MPC+ グループ上の接続を介して円滑に流れているかどうかを判別するのに使用されます。MPC+ 制御流れはコネクション型です。これらのコマンドは、コネクション型で流れるリンク・レベルの送達が保証される必要があるため、シーケンス・インターバル・タイマーを使用して、コネクション型トラフィックを送達できる十分な時間が経過したかをチェックします。

maxdata

このバーチャル・ネットワークによって扱われるデータの最大サイズ

注: この値はホスト内の HPDT UDP 用としてコーディングされている MTU に等しいことが必要です。

acklen

このインターフェースを介する確認フレームのサイズ (バイト)。

blktimer

非フル・データ・ブロックをホストに送信する前に待つ最大時間 (ミリ秒)

outbound protocol blocking

一般的に、このパラメーターは使用可能にしたままにしておく必要があります。詳細については、409ページの『MPC+ バーチャル・インターフェースの構成』を参照してください。

2 411ページの『MPC+ サブチャネルの構成』の説明に従って、ホストへの読み取り接続および書き込み接続用のサブチャネルを構成します。

3 MPC+ インターフェースを介する IP の構成は、他のインターフェース・タイプを介するその構成と同様に行われます。ただし、以下の例外があります。

- UDP+ MPC+ インターフェースの場合は、IP アドレスは 1 つ構成する必要があるだけです。このアドレスは、ホスト内の HPDT UDP 用としてコーディングされた `destination_IP_address` に等しいことが必要です。

注: 複数の IP アドレスが構成された場合は、最後に構成されたものが使用されません。

- ホスト内の HPDT UDP 用としてコーディングされた `source_IP_address` は、2216 内で UDP+ MPC+ インターフェース上に構成された IP アドレスと同じ IP サブネットワーク内にある必要があります。

対応するホスト定義の説明については、369ページの『HPDT UDP 用ホストの構成』を参照してください。

MPC+ を介する TCP/IP 用の 2216 の構成

395ページの図35 に、MPC+ を介する TCP/IP 構成が図示してあります。

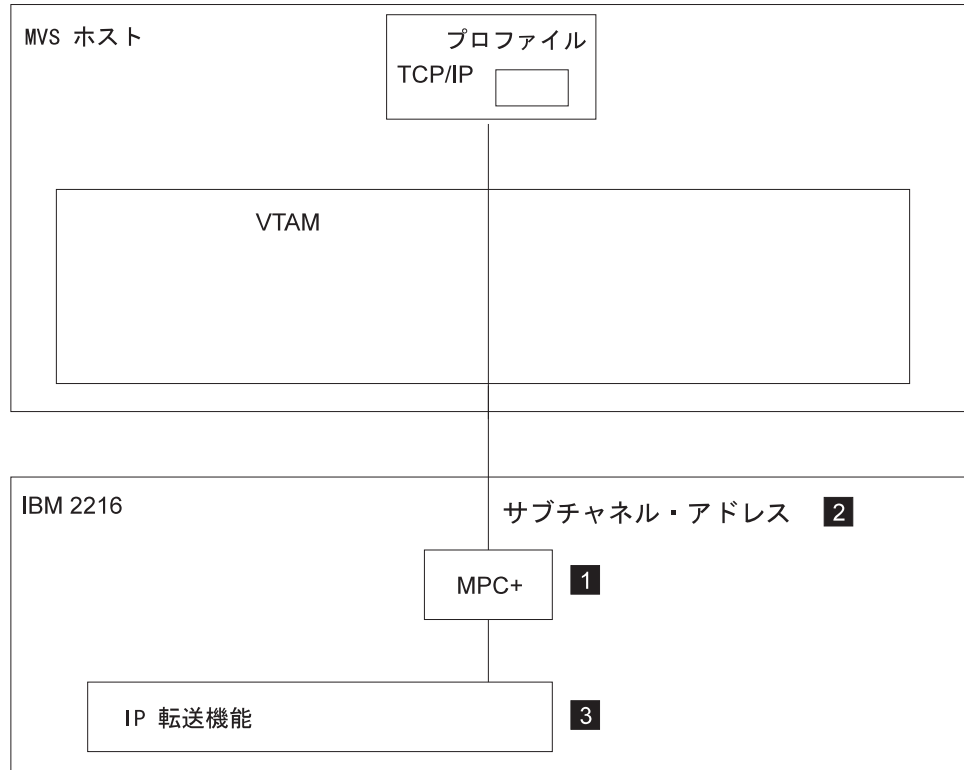


図 35. MPC+ を介する TCP/IP 用のバーチャル・ネットワーク・ハンドラーの構成

1 409ページの『MPC+ バーチャル・インターフェースの構成』の説明に従って、MPC+ バーチャル・インターフェースを構成します。

注: MPC+ インターフェース上で UDP+ 専用を使用可能にしないようにします。MPC+ インターフェース上での TCP/IP の構成は、MPC+ ネットワーク・ハンドラーの IP アドレスを構成し、MPC+ インターフェースが UDP+ の専用として構成されないようにすることによって行われます。

次のような任意指定パラメーターがあります。

reply timeout

XID2/Disconnect タイムアウトのタイマー (ミリ秒)

これは、MPC+ グループが XID2 および DISC 交換時に、チャンネルの相手側が応答しないので、こちら側は MPC+ グループの起動または切断を続行する必要があるとして決定する前に、チャンネルからの応答を待つ時間の長さです。

sequencing interval timer

シーケンス・インターバル・タイマー (ミリ秒) です。

このタイマーは、コネクション型のデータが MPC+ グループ上の接続を介して円滑に流れているかどうかを判別するのに使用されます。MPC+ 制御流れはコネクション型です。これらのコマンドは、コネクション型で流れるリンク・レベルの送達が保証される必要があるため、シーケンス・インターバル・タイマーを使用して、コネクション型トラフィックを送達できる十分な時間が経過したかをチェックします。

maxdata

このバーチャル・ネットワークによって扱われるデータの最大サイズ

注:

1. この値は、ホストがチャンネルを通して受信して扱うことができるデータの最大量以下であることが必要です (つまり、MAXBFRU*4K。ただし、MAXBFRU は 2216 内のこの MPC+ インターフェースに対応する VTAM TRLE からです)。
2. 2216 が MPC+ グループを通して maxdata より長い IP パケットを送信することは決してありません。ただし、この MPC+ インターフェースと同じ基本チャンネル・インターフェースを使用する他のバーチャル・ネットワーク・ハンドラー用として構成された maxdata の値によっては、2216 がホストからもっと長い IP パケットを実際に受け入れる場合もあります。

acklen

このインターフェースを介する確認フレームのサイズ (バイト)。

blktimer

非フル・データ・ブロックをホストに送信する前に待つ最大時間 (ミリ秒)

outbound protocol blocking

一般的に、このパラメーターは使用可能にしたままにしておく必要があります。詳細については、409ページの『MPC+ バーチャル・インターフェースの構成』を参照してください。

2 411ページの『MPC+ サブチャンネルの構成』の説明に従って、ホストへの読み取り接続および書き込み接続用のサブチャンネルを構成します。

3 MPC+ インターフェースを介する IP の構成は、他のインターフェース・タイプを介するその構成と同様に行われます。ただし、以下の例外があります。

- MPC+ インターフェース接続を介する複数の TCP/IP が、単一の MPC+ インターフェースを介して確立できます。
- MPC+ 接続を介する TCP/IP を確立するためには、TCP/IP HOME IP アドレスが、2216 内で MPC+ インターフェース上に構成された IP アドレスの 1 つと同じ IP サブネットワーク内にある必要があります。
- ホスト内の複数の TCP/IP インスタンスが、2216 MPC+ インターフェース用として構成されたものと同じ IP サブネットワーク内にある場合は、MPC+ 接続を介する複数の TCP/IP が、同じ 2216 IP アドレスを使用してセットアップされます。

対応するホスト定義については、362ページの『TCP/IP のホストの構成』を参照してください。

チャンネル・アダプター・インターフェースの構成

ESCON または PCA インターフェースを構成する場合は、以下のステップが必須です。

1. 399ページの『チャンネル・インターフェースへのアクセス』の説明に従って、ESCON または PCA インターフェースにアクセスする。これで基本インターフェースが定義されることとなります。
2. 以下の説明に従って、バーチャル・ネットワーク・ハンドラーを構成する。
 - 401ページの『LCS バーチャル・インターフェースの構成』
 - 404ページの『LSA バーチャル・インターフェースの構成』
 - 409ページの『MPC+ バーチャル・インターフェースの構成』
3. サブチャンネルを構成する。
 - 402ページの『LCS サブチャンネルの構成』
 - 407ページの『LSA サブチャンネルの構成』
 - 411ページの『MPC+ サブチャンネルの構成』

2216 ESCON または PCA の構成が完了したら、以下のことを行います。

- プロトコルを構成する。
- 構成を保管する。
- 2216 をリポートして、変更をアクティブにする。

第31章 ESCON および並列チャンネル・アダプターの構成と監視

この章では、エンタープライズ・システム接続 (ESCON) および並列チャンネル・アダプターの構成および操作コマンドについて説明します。この章は以下の節に分かれています。

- 『チャンネル・インターフェースへのアクセス』
- 400ページの『チャンネル・アダプター構成コマンド』
- 421ページの『チャンネル・インターフェース監視プロセスへのアクセス』
- 421ページの『チャンネル・インターフェース監視コマンド』
- 425ページの『チャンネル・アダプター LCS インターフェース監視コマンド』
- 426ページの『チャンネル・アダプター LSA インターフェース監視コマンド』
- 428ページの『チャンネル・アダプター MPC+ インターフェース監視コマンド』

監視に関するその他の情報については、ソフトウェア使用者の手引きを参照してください。

例についての注

この章の以下の各節には、ESCON および PCA インターフェースの構成例が示してあります。ESCON と PCA の間の違いが大きい場合については、複数の例を示します。

チャンネル・インターフェースへのアクセス

チャンネル・アダプター・インターフェースにアクセスする手順は、以下のとおりです。

1. OPCON プロンプトで **talk 6** と入力する。下に例を挙げます。

```
* talk 6
Config>
```

talk 6 コマンドを入力すると、コンソールに CONFIG プロンプト (Config) が表示されます。このプロンプトが表示されない場合は、再度 **Return** キーを押してください。

2. **list devices** コマンドを入力して、現在構成されているネットワーク・インターフェース番号を表示させる。
3. インターフェース番号を記録する。
4. 次のいずれかを行って、チャンネル・インターフェースを作成する。
 - **add device esc** コマンドを Config> プロンプトで入力して、ESCON チャンネルを作成する。

```
Config> add dev esc
Device Slot x(1-8) 1?
Adding ESCON Adapter device in slot 1 port 1 as interface x
```

注: x は、割り当てられたインターフェース番号です。

注: 2216 には、1 ~ 8 番まで 8 つのスロットがあります。

- **add device pca** コマンドを Config> プロンプトで入力する。

```
Config> add dev pca
Device Slot x(1-8) 1?
Adding PCA device in slot 1 port 1 as interface x
```

注: x は、割り当てられたインターフェース番号です。

注: 2216 には、1 ~ 8 番まで 8 つのスロットがあります。

5. **network** コマンドと、ステップ 4 で入手したインターフェースの番号を入力する。たとえば、インターフェース 0 が ESCON インターフェースの場合は、次のように入力します。

```
Config> network 0
ESCON Config>
```

ESCON 構成プロンプト (ESCON Config>) が表示されます。

6. 表48 のコマンドを使用して、チャンネル・アダプター・バーチャル・ネットワーク・ハンドラーおよび関連サブチャンネルを構成する。

チャンネル・アダプター構成コマンド

以下のコマンドは、チャンネル・アダプター構成コマンド・プロンプト (ESC Config> と PCA Config> のどちらか) で入力できます。

表 48. チャンネル・インターフェース構成コマンド

コマンド	説明
? (Help)	このコマンド・レベルで使用可能なコマンドをすべて表示するか、特定のコマンドに関するオプション (ただし、選択可能な場合) をリストします。12ページの『ヘルプを得る』を参照してください。
add	基本プロトコルの 1 つのバーチャル・ネットワーク・ハンドラーを追加するか、または APPN ループバックを追加します。 <ul style="list-style-type: none">• LCS - LAN チャンネル・ステーション・サポート• LSA - リンク・サービス・アーキテクチャー• MPC+ - マルチパス・チャンネル+• APPN ループバック
delete	各プロトコルは、バーチャル・ネットワーク・ハンドラーを構成するのに使用できる、固有のパラメーター・セットを提供します。
list	チャンネル・アダプター上のインターフェースを削除します。チャンネル・アダプター構成をリストし、オプションでサブチャンネルをリストします。さらに、PCA の場合は、転送モードとチャンネル転送速度をリストさせることもできます。
mod set	チャンネル・アダプター上のインターフェースの構成を変更します。並列チャンネル・アダプター (PCA) に関する転送モードおよびチャンネル転送速度を設定します。 注: このコマンドにアクセスできるのは、PCA インターフェースを構成する場合だけです。

表 48. チャンネル・インターフェース構成コマンド (続き)

コマンド	説明
Exit	直前のコマンド・レベルに戻ります。13ページの『下位レベル操作環境を終了する』を参照してください。

Add

add コマンドは、LCS、LSA、および MPC+ 用のバーチャル・ネットワーク・ハンドラーを追加する場合に使用します。

構文：

```
add          lcs
             lsa
             mpc
             appn loopback
```

LCS バーチャル・インターフェースの構成

add lcs コマンドを使用して、LCS バーチャル・インターフェースを追加すると、ESCON Add Virtual> プロンプトまたは PCA Add Virtual> プロンプトが表示されるので、そこから他のインターフェース・パラメーターおよびサブチャンネル・パラメーターを入力することができます。

注: LCS は 2 つのサブチャンネルを必要としますが、指定する必要があるのは 1 つのサブチャンネルだけです。隣接するサブチャンネルが選択されて、この 2 つのサブチャンネルが、読み取りサブチャンネル (装置アドレスが奇数) の前の書き込みサブチャンネル (装置アドレスが偶数) と順次の対を形成するようにされます。

add lcs を入力すると、ESCON Add Virtual> プロンプトと PCA Add Virtual> プロンプトのどちらかが表示されます。こうして表示されたプロンプトで、以下のコマンドを入力することができます。

コマンド 説明

acklen *bytes* このインターフェースを介する確認フレームのサイズ (バイト数)

注: デフォルト値の 10 では、確認フレームはブロックされます。この値をデフォルト **blktimer** 値と共に使用すると、トラフィック量の多いネットワークでは、最良の性能が得られます。IP 対話式トラフィックおよび大量データ転送の場合は、**acklen** を 100 に設定します。

有効値: 1 ~ 500 バイト

デフォルト値: 10

blktimer *milliseconds*

非フル・データ・ブロックをホストに送信する前に待つ最大時間 (ミリ秒)

チャンネル・アダプター構成コマンド (Talk 6)

注: デフォルト値は、トラフィック量の多いネットワークで最高の性能が得られる値に設定されています。 IP 対話式トラフィックおよび大量データ転送の場合は、 **blktimer** を 10 に設定します。

有効値: 1 ~ 20

デフォルト値: 5

lantype *type* LAN タイプ (イーサネット、トークンリング、FDDI のいずれか)
例 :ESCON インターフェース上の LCS インターフェースに関する LAN タイプの指定

```
ESCON Add Virtual>lan
Please select one of the following LAN types:
  E Ethernet
  T Token Ring
  F FDDI
LCS LAN Type: [E]?
```

mac *address* バーチャル・ネットワーク・ハンドラーの MAC アドレス

maxdata *bytes* このバーチャル・ネットワークによって扱われるデータの最大サイズ

有効値 : 516 ~ 17749 (トークンリングの場合)、 1500 (イーサネットの場合)、 4478 (FDDI の場合)

デフォルト値 : 2052 (トークンリングの場合)、 1500 (イーサネットの場合)、 4478 (FDDI の場合)

subchannels *command*

コマンド の値に応じて、次のプロンプトが表示されます。コマンドは、次のいずれか 1 つです。

- add
- list
- mod

こうして表示されるプロンプトで入力できるコマンド、およびそれらの説明については、『LCS サブチャンネルの構成』を参照してください。

LCS サブチャンネルの構成

subchannels コマンド を入力すると、コマンド の値に応じて、次のプロンプトが表示されます。コマンド は、次のいずれか 1 つです。

- add
- list
- mod
- exit

コマンド 説明

add サブチャンネル対が追加され、ESCON Config LCS Subchannel> プロンプトまたは PCA Config LCS Subchannel> プロンプトが表示されるので、装置アドレス、LPAR 番号、リンク・アドレス、および CU 論理アドレスを追加することができます。

チャンネル・アダプター構成コマンド (Talk 6)

注:

1. PCA インターフェースの場合は、装置アドレスを指定するだけで済みます。
2. LCS バーチャル・インターフェースに対して 1 つのサブチャンネルを追加または構成する必要があります。LCS は 2 つのサブチャンネルを必要としますが、指定する必要があるのは 1 つのサブチャンネルだけです。隣接するサブチャンネルが選択されて、この 2 つのサブチャンネルが、読み取りサブチャンネル (装置アドレスが奇数) の前の書き込みサブチャンネル (装置アドレスが偶数) と順次の対を形成するようにされます。

device address

2216 装置を選択するためにチャンネル・パス上を送信される装置アドレス。S/370 入出力アーキテクチャーでは、チャンネル番号とも呼ばれます。これは 2 桁の 16 進値で、X'00' ~ X'FF' の範囲です。この値は、ホスト IOCP 内で、実装置の CNTLUNIT マクロ命令の UNITADD ステートメントによって定義されます。

有効値: X'00' ~ X'FF'

デフォルト値: なし

重要

以下のパラメーターは、PCA の場合は該当しません。

lpar number

論理区画番号。これは、複数の論理ホスト区画 (LPAR) が 1 つの ESCON チャンネルを共用できるようにします。

この値は、ホスト入出力構成プログラム (IOCP) の RESOURCE マクロ命令によって定義されます。

ホストが EMIF を使用していない場合は、デフォルトの 0 を LPAR 番号として使用します。

有効値: X'0' ~ X'F'

デフォルト値: X'0'

link address

通信パスに ESCON ディレクター (ESCD) が 1 つある場合、リンク・アドレスは、ホストに接続された ESCD ポート番号

通信パスに ESCD が 2 つある場合は、動的接続で定義された ESCD のホスト側ポート番号

通信パスに ESCD がない場合、この値は X'01' に設定する必要があります。

有効値: X'01' ~ X'FE'

デフォルト値: X'01'

チャンネル・アダプター構成コマンド (Talk 6)

cu address

2216 に関してホスト内で定義される制御装置アドレス。この値は、ホスト入出力構成プログラム (IOCP) の CNTLUNIT マクロ命令の CUADD ステートメントで定義されます。

制御装置アドレスは、同じホスト上で定義された各論理区画ごとに固有でなければなりません。

有効値: X'0' ~ X'F'

デフォルト値: X'0'

例 : ESCON インターフェースの LCS インターフェースに関するサブチャンネルの追加

```
ESCON Add Virtual>sub add
Please add or configure one subchannel for an LCS virtual interface.
Although LCS requires two subchannels, it is only necessary to specify
one subchannel. An adjacent subchannel will be chosen such that the two
subchannels will form a sequential pair with the write subchannel (device
address is even) before the read subchannel (device address is odd).
ESCON Config LCS Subchannel>d 4
ESCON Config LCS Subchannel>e
```

list

LCS サブチャンネルの情報をリストします。

例 :ESCON LCS インターフェースに関するサブチャンネルのリスト

```
ESCON Add Virtual>sub lis
Read Subchannels:
Sub 0 Device address : 5 LPAR number : 0
      Link address : 1 CU Logical Address : 0
Write Subchannels:
Sub 1 Device address : 4 LPAR number : 0
      Link address : 1 CU Logical Address : 0
```

例 :PCA LCS インターフェースに関するサブチャンネルのリスト

```
PCA Add Virtual>sub lis
Read Subchannels:
Sub 2 Device address : 3
Write Subchannels:
Sub 3 Device address : 2
```

mod

構成された LCS サブチャンネル対を変更します。これは、構成済みの LCS サブチャンネルの構成をリストし、そのリストから 『sub』 番号を指定して、サブチャンネルの 1 つを変更することができます。サブチャンネルを選択すると、402ページの『LCS サブチャンネルの構成』で説明しているように、装置アドレス、LPAR 番号、リンク・アドレス、および CU 論理アドレスを変更することができます。

注:

1. PCA の場合は、変更できるのは装置アドレスだけです。
2. ESCON または PCA で、サブチャンネルが 1 つしか構成されていない場合は、このサブチャンネルは変更できるだけで、削除することはできません。

LSA バーチャル・インターフェースの構成

add lsa コマンドを使用して、LSA バーチャル・インターフェースを追加すると、ESCON Add Virtual> プロンプトまたは PCA Add Virtual> プロンプトが表示されるので、そこから以下のコマンドを入力することができます。

コマンド 説明

[enable または disable]

LSA インターフェース上のループバックを使用可能または使用不可にします。

注: ループバック機能の状態に応じて、これらのパラメーターのうちの **1 つ** だけを入力することができます。ループバックが使用不可にされている場合は、それを使用可能にすることができます。使用可能になっている場合は、それを使用不可にすることができます。

有効値: 使用可能または使用不可

デフォルト値: 使用不可

acklen bytes このインターフェースを介する確認フレームのサイズ (バイト数)

注: デフォルト値の 10 では、確認フレームはブロックされます。この値をデフォルト **blktimer** 値と共に使用すると、トラフィック量の多いネットワークでは、最良の性能が得られます。IP 大量データ転送および対話式トラフィックの場合は、**acklen** を 100 に設定します。

有効値: 1 ~ 500 バイト

デフォルト値: 10

blktimer milliseconds

非フル・データ・ブロックをホストに送信する前に待つ最大時間 (ミリ秒)

注: デフォルト値は、トラフィック量の多いネットワークで最良の性能が得られる値に設定されています。イーサネット LAN およびトークンリング LAN での IP 大量データ転送および対話式トラフィックの場合は、**blktimer** を 10 に設定します。

有効値: 1 ~ 20

デフォルト値: 10

lantype type LAN タイプ (イーサネットとトークンリングのどちらか)

mac address このバーチャル・インターフェースを識別する固有の MAC アドレス
このパラメーターは、ループバックが使用可能のときにのみ利用可能です。これはループバック接続の LSA/VTAM 側の MAC アドレスです。ループバック接続の APPN 側の MAC アドレスは、ADD APPN を使用して指定します。

maxdata bytes このバーチャル・ネットワークによって扱われるデータの最大サイズ

有効値: トークンリングの場合は 516 ~ 17749、イーサネットの場合は 1500

デフォルト値: トークンリングの場合は 2052、イーサネットの場合は 1500

チャンネル・アダプター構成コマンド (Talk 6)

net interface# このパラメーターは、ループバックが使用不可のときにのみ利用可能です。この LSA ネットワークが通信するときに使用する LAN アダプターを示します。この LAN アダプターは、以前に構成されている必要があり、トークンリング、イーサネット (エミュレートされた LAN も含む)、FDDI のいずれかであれば構いません。

subchannels コマンド の値に応じて、次のプロンプトが表示されます。コマンドは、次のいずれか 1 つです。

- add
- delete
- list
- mod

こうして表示されるプロンプトで入力できるコマンド、およびそれらの説明については、407ページの『LSA サブチャンネルの構成』を参照してください。

383ページの図27 に示されているように、LSA コネクションには 4 つのタイプがあります。それらは、以下に示されています。

- 384ページの『2216 での LSA 直接接続の構成』
- 385ページの『2216 での LSA APPN 接続の構成』
- 386ページの『2216 での LSA DLSw 接続の構成』
- 388ページの『2216 での LSA DLSw ローカル変換の構成』

例は、2 つの LSA インターフェースの追加を示しています。最初の例はループバックを使用し、2 番目の例は直接接続です。

例 1 : ループバックを用いる ESCON LSA インターフェースの追加

```
ESCON Config>add lsa
ESCON Add Virtual>enable
Enabling loopback through network 2.
Please set the MAC address using the "MAC" command
ESCON Add Virtual>mac 40:00:00:00:22:16
ESCON Add Virtual>lan
Please select one of the following LAN types:
  E Ethernet
  T Token Ring
LSA LAN Type: [E]? e
ESCON Add Virtual>sub add
ESCON Add LSA Subchannel>link c5
ESCON Add LSA Subchannel>d 8
ESCON Add LSA Subchannel>e
ESCON Add Virtual>e
ESCON Config>list all
Net: 2 Protocol: LSA LAN type: LSA Ethernet LAN number: 0
Maxdata: 1500
Loopback is enabled.
MAC address: 400000002216
Block timer: 10 ms ACK length: 10 bytes
Sub 0 Dev addr: 8 LPAR: 0 Link addr: C5 CU addr: 0
```

例 2 : 直接接続を用いる PCA LSA インターフェースの追加

```
PCA Config>add lsa
PCA Add Virtual>net 0
PCA Add Virtual>sub add
PCA Add LSA Subchannel>d 7
PCA Add LSA Subchannel>e
PCA Add Virtual>e
```

```
PCA Config>list all
Net: 6 Protocol: LSA LAN type: Token Ring LAN number: 0
Maxdata: 2052
Loopback is not enabled.
MAC address: Obtained from net 0
Block timer: 10 ms ACK length: 10 bytes
Sub 0 Dev addr: 7
PCA Config>
```

LSA サブチャンネルの構成

subchannels コマンド を入力すると、コマンド の値に応じて、次のプロンプトが表示されます。コマンド は、次のいずれか 1 つです。

- add
- delete
- list
- mod
- exit

コマンド 説明

add サブチャンネルが追加され、ESCON Add LSA Subchannel> プロンプトまたは PCA Add LSA Subchannel> プロンプトが表示されるので、次の追加ができます。

device *address*

2216 装置を選択するためにチャンネル・パス上を送信される装置アドレス。S/370 入出力アーキテクチャーでは、チャンネル番号とも呼ばれます。これは、2 桁の 16 進値で、範囲は 00 ~ FF です。この値は、ホストIOCP 内で、実装置の CNTLUNIT マクロ命令の UNITADD ステートメントによって定義されます。

有効値: X'00' ~ X'FF'

デフォルト値: なし

重要

以下のパラメーターは、PCA の場合は該当しません。

lpar *number*

論理区画番号。これは、複数の論理ホスト区画 (LPAR) が 1 つの ESCON チャンネルを共用できるようにします。

この値は、ホスト入出力構成プログラム (IOCP) の RESOURCE マクロ命令によって定義されます。

ホストが EMIF を使用していない場合は、デフォルトの 0 を LPAR 番号として使用します。

有効値: X'0' ~ X'F'

デフォルト値: X'0'

チャンネル・アダプター構成コマンド (Talk 6)

link address

通信パスに ESCON ディレクター (ESCD) が 1 つある場合、リンク・アドレスは、ホストに接続された ESCD ポート番号。

通信パスに ESCD が 2 つある場合は、動的接続で定義された ESCD のホスト側ポート番号。

通信パスに ESCD がない場合、この値は X'01' に設定する必要があります。

有効値: X'01' ~ X'FE'

デフォルト値: X'01'

cu address

2216 に関してホスト内で定義される制御装置アドレス。この値は、ホスト入出力構成プログラム (IOCP) の CNTLUNIT マクロ命令の CUADD ステートメントで定義されます。制御装置アドレスは、同じホスト上で定義された各論理区画ごとに固有でなければなりません。

有効値: X'0' ~ X'F'

デフォルト値: X'0'

直前のプロンプトに戻る場合は、**exit** と入力します。

例 : ESCON LSA インターフェースに関するサブチャンネルの追加

```
ESCON Add Virtual>sub add
ESCON Add LSA Subchannel>link f7
ESCON Add LSA Subchannel>device 0
ESCON Add LSA Subchannel>cu 0
ESCON Add LSA Subchannel>lpar 0
ESCON Add LSA Subchannel>exit
```

例 : PCA LSA インターフェースに関するサブチャンネルの追加

```
PCA Add Virtual>sub add
PCA Add LSA Subchannel>device 2
PCA Add LSA Subchannel>exit
```

delete

構成された LSA サブチャンネルを削除します。これは、構成済みの LSA サブチャンネルの構成をリストし、そのリストから 『sub』 番号を指定して、サブチャンネルの 1 つを削除することができます。

list

LSA サブチャンネルの情報をリストします。

例 : ESCON LSA インターフェースに関するサブチャンネルのリスト

```
ESCON Config Virtual>sub list
Sub 0 Device address : 42 LPAR number : 0
      Link address : C5 CU Logical Address : 0
Sub 1 Device address : 43 LPAR number : 0
      Link address : C5 CU Logical Address : 0
Sub 2 Device address : 44 LPAR number : 0
      Link address : C5 CU Logical Address : 0
```

例 : PCA LSA インターフェースに関するサブチャンネルのリスト

```
PCA Config Virtual>sub list
Sub 0 Device address : B
Sub 1 Device address : 12
Sub 2 Device address : 10
Sub 3 Device address : A
Sub 4 Device address : C
Sub 5 Device address : E
```

チャンネル・アダプター構成コマンド (Talk 6)

mod

構成された LSA サブチャンネルを変更します。これは、構成済みの LSA サブチャンネルの構成をリストし、そのリストから『sub』番号を指定して、サブチャンネルの 1 つを変更することができます。サブチャンネルを選択したら、407ページの『LSA サブチャンネルの構成』で説明しているように、装置アドレス、LPAR 番号、リンク・アドレス、および CU 論理アドレスを変更することができます。

注:

1. PCA の場合は、変更できるのは装置アドレスだけです。
2. ESCON または PCA で、サブチャンネルが 1 つしか構成されていない場合は、このサブチャンネルは変更できるだけで、削除することはできません。

MPC+ バーチャル・インターフェースの構成

add mpc コマンドを使用して、MPC+ バーチャル・インターフェースを追加すると、ESCON Add Virtual> プロンプトまたは PCA Add Virtual> プロンプトが表示されるので、他のインターフェース・パラメーターおよびサブチャンネル・パラメーターを入力することができます。

コマンド 説明

acklen *bytes* このインターフェースを介する確認フレームのサイズ (バイト)。

注: デフォルト値の 10 では、確認フレームはブロックされます。この値をデフォルト **blktimer** 値と共に使用すると、トラフィック量の多いネットワークでは、最良の性能が得られます。

有効値: 1 ~ 500 バイト

デフォルト値: 10

blktimer *milliseconds*

非フル・データ・ブロックをホストに送信する前に待つ最大時間 (ミリ秒)。

注: デフォルト値は、トラフィック量の多いネットワークで最良の性能が得られる値に設定されています。

有効値: 1 ~ 20

デフォルト値: 5

disable_outbound_protocol_blocking

ホストへのデータの送信時に、MPC+ グループによって、単一 MPC+ パケット・グループ内の複数のプロトコル・パケットがブロックされないようにします。

注: このパラメーターの影響を受けるのは、UDP+ および TCP/IP トラフィックです。このパラメーターを使用可能にすると、トラフィックが大量のネットワークでの性能が向上します。Enable (使用可能) がデフォルト値です。

チャンネル・アダプター構成コマンド (Talk 6)

disable udp+ exclusive use

UDP+ による MPC+ インターフェースの専用を解除します。

注:

1. このパラメーターが該当するのは、ESCON インターフェースの場合だけです。
2. つまり、MPC+ グループにまたがって接続を確立できるのは、ホスト内の HPDT UDP だけであることを意味します。UDP+ が他のプロトコル (たとえば、APPN、TCP/IP など) と MPC+ グループを共用することは絶対にできません。

enable_outbound protocol blocking

ホストへのデータの送信時に、MPC+ グループが単一 MPC+ パケット・グループ内の複数のプロトコル・パケットをブロックすることができるようにします。

注: このパラメーターの影響を受けるのは、UDP+ および TCP/IP トラフィックです。このパラメーターを使用可能にすると、トラフィックが大量のネットワークでの性能が向上します。Enable (使用可能) がデフォルト値です。

enable udp+ exclusive use

MPC+ インターフェースを UDP+ の専用にします。

注:

1. このパラメーターが該当するのは、ESCON インターフェースの場合だけです。
2. つまり、MPC+ グループにまたがって接続を確立できるのは、ホスト内の HPDT UDP だけであることを意味します。UDP+ が他のプロトコル (たとえば、APPN、TCP/IP など) と MPC+ グループを共用することは絶対にできません。

maxdata *bytes* このバーチャル・ネットワークによって扱われるデータの最大サイズ。

有効値: 512 ~ 32 768

デフォルト値: 2 048

reply timeout *milliseconds*

XID2/Disconnect タイムアウトのタイマー (ミリ秒)

有効値: 1 ~ 50 000

デフォルト値: 45 000

sequencing interval timer *milliseconds*

シーケンス・インターバル・タイマー (ミリ秒) です。

有効値: 1 ~ 50 000

デフォルト値: 3000

subchannels コマンド の値に応じて、次のプロンプトが表示されます。コマンドは、次のいずれか 1 つです。

- addr

チャンネル・アダプター構成コマンド (Talk 6)

- addw
- delete
- list
- mod
- exit

入力できるコマンドおよびそれらの説明については、『MPC+ サブチャンネルの構成』を参照してください。

MPC+ サブチャンネルの構成

注: VTAM への読み取りサブチャンネルとして定義されたサブチャンネルは、2216 への書き込みサブチャンネルであり、VTAM への書き込みサブチャンネルとして定義されたサブチャンネルは、2216 への読み取りサブチャンネルです。

subchannels コマンドを入力すると、コマンドの値に応じて、次のプロンプトが表示されます。コマンドは、次のいずれか 1 つです。

- addr
- addw
- delete
- list
- mod
- exit

コマンド

説明

addr

読み取りサブチャンネルが追加され、ESCON Add MPC+ Read Subchannel> プロンプトまたは PCA Add MPC+ Read Subchannel> プロンプトが表示されるので、以下のコマンドを入力することができます。

コマンド

説明

device address

2216 装置を選択するためにチャンネル・パス上を送信される装置アドレス。S/370 入出力アーキテクチャーでは、チャンネル番号とも呼ばれます。これは、2桁の16進値で、範囲は00～FFです。この値は、ホストIOCP内で、実装置のCNTLUNITマクロ命令のUNITADDステートメントによって定義されます。

有効値: X'00' ～ X'FF'

デフォルト値: なし

チャンネル・アダプター構成コマンド (Talk 6)

重要

以下のパラメーターは、PCA の場合は該当しません。

lpar number 論理区画番号。これは、複数の論理ホスト区画 (LPAR) が 1 つの ESCON チャンネルを共用できるようにします。

この値は、ホスト入出力構成プログラム (IOCP) の RESOURCE マクロ命令によって定義されます。

ホストが EMIF を使用していない場合は、デフォルトの 0 を論理区画番号として使用します。

有効値: X'0' ~ X'F'

デフォルト値: X'0'

link address 通信パスに ESCON ディレクター (ESCD) が 1 つある場合、リンク・アドレスは、ホストに接続された ESCD ポート番号です。

通信パスに ESCD が 2 つある場合は、動的接続で定義された ESCD のホスト側ポート番号。

通信パスに ESCD がない場合、この値は X'01' に設定する必要があります。

有効値: X'01' ~ X'FE'

デフォルト値: X'01'

cu address 2216 に関してホスト内で定義される制御装置アドレス。この値は、ホスト入出力構成プログラム (IOCP) の CNTLUNIT マクロ命令の CUADD ステートメントで定義されます。

制御装置アドレスは、同じホスト上で定義された各論理区画ごとに固有でなければなりません。

有効値: X'0' ~ X'F'

デフォルト値: X'0'

exit を入力すると、ESCON Add Virtual> プロンプトに戻ります。

例 : PCA MPC+ インターフェースに関する読み取りサブチャンネルの追加

```
PCA Add Virtual>sub addr
PCA Add MPC+ Read Subchannel>d 8
PCA Add MPC+ Read Subchannel>e
PCA Add Virtual>sub addr
PCA Add MPC+ Read Subchannel>d 9
PCA Add MPC+ Read Subchannel>e
```

addw

書き込みサブチャンネルが追加され、ESCON Add MPC+ Write Subchannel> プロンプトまたは PCA Add MPC+ Write Subchannel> プロンプトが表示されるので、以下のコマンドを入力することができます。

チャンネル・アダプター構成コマンド (Talk 6)

コマンド 説明

device *address*

2216 装置を選択するためにチャンネル・パス上を送信される装置アドレス。S/370 入出力アーキテクチャーでは、チャンネル番号とも呼ばれます。これは、2桁の16進値で、範囲は00～FFです。この値は、ホストIOCP内で、実装置のCNTLUNITマクロ命令のUNITADDステートメントによって定義されます。

有効値: X'00' ～ X'FF'

デフォルト値: なし

重要

以下のパラメーターは、PCAの場合は該当しません。

lpar *number*

論理区画番号。これは、複数の論理ホスト区画(LPAR)が1つのESCONチャンネルを共用できるようにします。

この値は、ホスト入出力構成プログラム(IOCP)のRESOURCEマクロ命令によって定義されます。

ホストがEMIFを使用していない場合は、デフォルトの0をLPAR番号として使用します。

有効値: X'0' ～ X'F'

デフォルト値: X'0'

link *address*

通信パスにESCONディレクター(ESCD)が1つある場合、リンク・アドレスは、ホストに接続されたESCDポート番号

通信パスにESCDが2つある場合は、動的接続で定義されたESCDのホスト側ポート番号

通信パスにESCDがない場合、この値はX'01'に設定する必要があります。

有効値: X'01' ～ X'FE'

デフォルト値: X'01'

cu *address*

2216に関してホスト内で定義される制御装置アドレス。この値は、ホスト入出力構成プログラム(IOCP)のCNTLUNITマクロ命令のCUADDステートメントで定義されます。

制御装置アドレスは、同じホスト上で定義された各論理区画ごとに固有でなければなりません。

有効値: X'0' ～ X'F'

デフォルト値: X'0'

チャンネル・アダプター構成コマンド (Talk 6)

例：ESCON MPC+ インターフェースに関する書き込みサブチャンネルの追加

```
ESCON Add Virtual>sub addw
ESCON Add MPC+ Write Subchannel>d 10
ESCON Add MPC+ Write Subchannel>e
ESCON Add Virtual>sub addw
ESCON Add MPC+ Write Subchannel>d 11
ESCON Add MPC+ Write Subchannel>e
```

delete

構成された MPC+ サブチャンネルを削除します。これは、構成済みの MPC+ サブチャンネルの構成をリストし、そのリストから『sub』番号を指定して、サブチャンネルの 1 つを削除することができます。

list

MPC+ サブチャンネルの情報をリストします。

例：ESCON MPC+ インターフェースに関するサブチャンネルのリスト

```
ESCON Add Virtual>sub lis
Read Subchannels:
Sub 0 Device address : 8 LPAR number : 0
      Link address  : 1 CU Logical Address : 0
Sub 1 Device address : 9 LPAR number : 0
      Link address  : 1 CU Logical Address : 0
Write Subchannels:
Sub 2 Device address : 10 LPAR number : 0
      Link address  : 1 CU Logical Address : 0
Sub 3 Device address : 11 LPAR number : 0
      Link address  : 1 CU Logical Address : 0
```

例：PCA MPC+ インターフェースに関するサブチャンネルのリスト

```
PCA Add Virtual>sub lis
Read Subchannels:
Sub 0 Device address : 12
Sub 1 Device address : 13
Write Subchannels:
Sub 2 Device address : 14
Sub 3 Device address : 15
```

mod

構成された MPC+ サブチャンネルを変更します。これは、構成済みの MPC+ サブチャンネルの構成をリストし、そのリストから『sub』番号を指定して、サブチャンネルの 1 つを変更することができます。サブチャンネルを選択したら、411ページの『MPC+ サブチャンネルの構成』で説明しているように、装置アドレス、LPAR 番号、リンク・アドレス、および CU 論理アドレスを変更することができます。

注：PCA の場合は、変更できるのは装置アドレスだけです。

直前のプロンプトに戻ったら、次の例に示すように、MPC+ 構成全体をリストさせることができます。

例：ESCON MPC+ 構成のリストおよび変更

```
ESCON Config>list all
Net: 1 Protocol: MPC+ LAN type: MPC+ LAN number: 0
Maxdata: 2048
Reply TO: 45000 Sequencing Interval Timer: 3000
MPC Group is for exclusive use of UDP+
Outbound protocol data blocking is enabled
Block timer: 5 ms ACK Length: 10 bytes
Read Subchannels:
Sub 0 Dev addr: 40 LPAR: 0 Link addr: F5 CU addr: 0
Write Subchannels:
Sub 1 Dev addr: 41 LPAR: 0 Link addr: F5 CU addr: 0

Net: 2 Protocol: MPC+ LAN type: MPC+ LAN number: 1
Maxdata: 2048
Reply TO: 45000 Sequencing Interval Timer: 3000
Outbound protocol data blocking is enabled
Block timer: 5 ms ACK Length: 10 bytes
Read Subchannels:
```

チャンネル・アダプター構成コマンド (Talk 6)

```
Sub 0 Dev addr: 42 LPAR: 0 Link addr: F5 CU addr: 0
Write Subchannels:
Sub 1 Dev addr: 43 LPAR: 0 Link addr: F5 CU addr: 0
Net: 3 Protocol: MPC+ LAN type: MPC+ LAN number: 2
Maxdata: 2048
Reply TO: 45000 Sequencing Interval Timer: 3000
Outbound protocol data blocking is enabled
Block timer: 5 ms ACK Length: 10 bytes
Read Subchannels:
Sub 0 Dev addr: 44 LPAR: 0 Link addr: F5 CU addr: 0
Write Subchannels:
Sub 1 Dev addr: 45 LPAR: 0 Link addr: F5 CU addr: 0
```

```
ESCON Config>mod 3
ESCON Config Virtual> ?
REply timeout
SEquencing int timer
MAXdata
SUBchannels
Exit
ESCON Config Virtual>rep 3100
ESCON Config Virtual> exit
ESCON Config>list all
Net: 1 Protocol: MPC+ LAN type: MPC+ LAN number: 0
Maxdata: 2048
Reply TO: 45000 Sequencing Interval Timer: 3000
MPC Group is for exclusive use of UDP+
Outbound protocol data blocking is enabled
Block timer: 5 ms ACK Length: 10 bytes
Read Subchannels:
Sub 0 Dev addr: 40 LPAR: 0 Link addr: F5 CU addr: 0
Write Subchannels:
Sub 1 Dev addr: 41 LPAR: 0 Link addr: F5 CU addr: 0
Net: 2 Protocol: MPC+ LAN type: MPC+ LAN number: 1
Maxdata: 2048
Reply TO: 45000 Sequencing Interval Timer: 3000
Outbound protocol data blocking is enabled
Block timer: 5 ms ACK Length: 10 bytes
Read Subchannels:
Sub 0 Dev addr: 42 LPAR: 0 Link addr: F5 CU addr: 0
Write Subchannels:
Sub 1 Dev addr: 43 LPAR: 0 Link addr: F5 CU addr: 0
Net: 3 Protocol: MPC+ LAN type: MPC+ LAN number: 2
Maxdata: 2048
Reply TO: 3100 Sequencing Interval Timer: 3000
Outbound protocol data blocking is enabled
Block timer: 5 ms ACK Length: 10 bytes
Read Subchannels:
Sub 0 Dev addr: 44 LPAR: 0 Link addr: F5 CU addr: 0
Write Subchannels:
Sub 1 Dev addr: 45 LPAR: 0 Link addr: F5 CU addr: 0
```

ESCON Config>

APPN ループバックの構成

重要: APPN ループバックを構成する必要があるのは、それぞれの物理 2216 について 1 回だけです。APPN ループバックを ESCON チャンネル上に構成した場合は、同じ 2216 内の PCA チャンネル上でそれを使用可能にする必要はありません。

注:

1. APPN ループバックは、404ページの『LSA バーチャル・インターフェースの構成』で説明しているように、LSA バーチャル・ネットワーク上のループバックが使用可能にされていないと、追加することはできません。
2. 特定の IBM 2216 上に APPN ループバックを追加できるのは 1 回だけです。

チャンネル・アダプター構成コマンド (Talk 6)

APPN ループバックを追加する場合は、**add appn** コマンドを使用します。ESCON Add Virtual> プロンプトと PCA Add Virtual> プロンプトのどちらかが表示されるので、以下のコマンドを入力することができます。

コマンド	説明
lantype <i>type</i>	イーサネットまたはトークンリング
mac <i>address</i>	2216 内のループバック接続の APPN 側を識別するための固有の MAC アドレス。このアドレスは、LSA インターフェースの構成時にループバック接続のホスト (VTAM) 側に指定された MAC アドレスとは異なっていなければなりません。

例：ESCON インターフェースへの APPN ループバックの追加

```
ESCON Config>add appn
ESCON Add Virtual>
ESCON Add Virtual>lan
Please select one of the following LAN types:
  E Ethernet
  T Token Ring
APPN LAN Type: [T]?
ESCON Add Virtual>mac
MAC address in 00:00:00:00:00:00 form [000000000000]?
  40:00:22:16:00:09
ESCON Add Virtual>e
ESCON Config>li all
Net: 9 Protocol: APPN Loopback LAN type: Token-Ring/802.5
      APPN loopback MAC address: 400022160009

Net: 5 Protocol: LSA LAN type: Token Ring LAN number: 0
      Maxdata: 2052
      Loopback is enabled.
      MAC address: 400022160005
      Block timer: 10 ms ACK length: 10 bytes
      Sub 0 Dev addr: 0 LPAR: 0 Link addr: 1 CU num: 0

Net: 6 Protocol: LSA LAN type: Token Ring LAN number: 1
      Maxdata: 2052
      Loopback is not enabled.
      MAC address: Obtained from net 3
      Block timer: 10 ms ACK length: 10 bytes
      Sub 0 Dev addr: 1 LPAR: 0 Link addr: 1 CU num: 0

Net: 7 Protocol: LCS LAN type: LCS Ethernet 802.3 LAN number: 0
      Maxdata: 1500
      MAC address: 400022160007
      Block timer: 5 ms ACK length: 10 bytes
      Read Subchannels:
      Sub 0 Dev addr: 5 LPAR: 0 Link addr: 1 CU num: 0
      Write Subchannels:
      Sub 1 Dev addr: 4 LPAR: 0 Link addr: 1 CU num: 0
ESCON Config>e
```

注:

1. APPN ポートは、例のネットワーク 9 上に構成されます。
2. LSA ネットワークの MAC アドレスをあて先 MAC アドレスとして使用するために、ESCON チャンネルを通して VTAM に接続する APPN リンク・ステーションを構成します。この目的では、APPN ループバックは使用しません。
3. APPN への LSA ネットワーク接続は、いずれも APPN ループバック・ネットワークと同じ LAN タイプであることが必要です。

Delete

delete コマンドは、チャンネル・アダプター上のインターフェースを削除する場合に使用します。削除したいインターフェース番号が分かっている場合は、それを指定す

チャンネル・アダプター構成コマンド (Talk 6)

ることができます。そうでない場合、インターフェース番号を入力しないと、構成がリストされ、インターフェース番号を入力するようにプロンプトで指示されます。

構文 :

```
delete                               interface_number  
                                         (no parameter)
```

interface_number

指定されたインターフェース番号の構成を削除します。

(no parameters)

チャンネル・アダプターに関する構成済みインターフェースがリストされ、削除したいインターフェース番号の入力を指示するプロンプトが表示されません。

例: インターフェースの削除 (パラメーターが指定されない場合)

```
PCA  
Config>del  
  
Net: 5 Protocol: APPN Loopback LAN type: Token-Ring/802.5  
      APPN loopback MAC address: 400000000406  
Net: 2 Protocol: LSA LAN type: Token Ring LAN number: 0  
      Maxdata: 2052  
      Loopback is enabled.  
      MAC address: 400000000403  
      Block Timer: 10 ms ACK length: 10 bytes  
Net: 3 Protocol: LSA LAN type: Token Ring LAN number: 1  
      Maxdata: 2052  
      Loopback is not enabled.  
      MAC address: Obtained from net 1  
      Block Timer: 10 ms ACK length: 10 bytes  
Net: 4 Protocol: MPC+ LAN type: MPC+ LAN number: 0  
      Maxdata: 2048  
      Reply TO: 3100 Sequencing Interval Timer: 3000  
  
      Outbound protocol data blocking is enabled  
      Block Timer: 5 ms ACK length: 10 bytes  
Virtual net number to delete: [2]? 3  
Are you sure?(Yes or [No]): y
```

Mod

mod コマンドは、チャンネル・アダプター上の構成済みインターフェースを変更する場合に使用します。変更するインターフェース番号が分かっている場合は、それを指定することができます。そうでない場合、インターフェース番号を入力しないと、構成がリストされ、インターフェース番号を入力するようにプロンプトで指示されます。

構文 :

```
modify                               interface_number  
                                         (no parameters)
```

interface_number

指定されたインターフェース番号の構成を変更します。

(no parameters)

チャンネル・アダプターに関する構成済みインターフェースがリストされ、変更したいインターフェース番号の入力を指示するプロンプトが表示されません。

チャンネル・アダプター構成コマンド (Talk 6)

例 :

```
ESCON Config> mod
Net: 1 Protocol: MPC+ LAN type: MPC+ LAN number: 0
      Maxdata: 2048
      Reply TO: 45000 Sequencing Interval Timer: 3000
      MPC Group is for exclusive use of UDP+
      Outbound protocol data blocking is enabled
      Block timer: 5 ms ACK length: 10 bytes
Net: 2 Protocol: MPC+ LAN type: MPC+ LAN number: 1
      Maxdata: 2048
      Reply TO: 45000 Sequencing Interval Timer: 3000
      Outbound protocol data blocking is enabled
      Block timer: 5 ms ACK length: 10 bytes
Virtual net number to configure: [1]? 2
ESCON Config Virtual> ?
REply timeout
SEQuencing int timer
MAXdata
SUBchannels
Exit
ESCON Config Virtual>re
Reply Time Out (range 1-50000 milliseconds): [45000]? 30003
ESCON Config Virtual>sub list
Read Subchannels:
Sub 0 Device address : 7 LPAR number : 0
      Link address : F4 CU Logical Address : 0
Write Subchannels:
Sub 1 Device address : 6 LPAR number : 0
      Link address : F4 CU Logical Address : 0
ESCON Config Virtual>sub addr
ESCON Add MPC+ Read Subchannel> ?
LINK address (ESCD Port)
LPAR number
CU logical address
Device address
Exit
ESCON Add MPC+ Read Subchannel>d 5
ESCON Add MPC+ Read Subchannel>? e
ESCON Config Virtual>sub list
Read Subchannels:
Sub 0 Device address : 7 LPAR number : 0
      Link address : F4 CU Logical Address : 0
Sub 1 Device address : 5 LPAR number : 0
      Link address : F4 CU Logical Address : 0
Write Subchannels:
Sub 2 Device address : 6 LPAR number : 0
      Link address : F4 CU Logical Address : 0
ESCON Config Virtual>sub ?
ADDRead subchannel
ADDWrite subchannel
MODify subchannel
DElete subchannel
List subchannels
ESCON Config Virtual>sub del
Read Subchannels:
Sub 0 Device address : 7 LPAR number : 0
      Link address : F4 CU Logical Address : 0
Sub 1 Device address : 5 LPAR number : 0
      Link address : F4 CU Logical Address : 0
Write Subchannels:
Sub 2 Device address : 6 LPAR number : 0
      Link address : F4 CU Logical Address : 0
Subchannel number to delete: [0]? 0
Are you sure?(Yes or [No]): y
ESCON Config Virtual>sub list
Read Subchannels:
Sub 0 Device address : 5 LPAR number : 0
      Link address : F4 CU Logical Address : 0
Write Subchannels:
Sub 1 Device address : 6 LPAR number : 0
      Link address : F4 CU Logical Address : 0
```

```

ESCON Config Virtual>sub mod
  Read Subchannels:
    Sub 0 Device address : 5 LPAR number : 0
      Link address : F4 CU Logical Address : 0
  Write Subchannels:
    Sub 1 Device address : 6 LPAR number : 0
      Link address : F4 CU Logical Address : 0
Subchannel number to modify: [0]? 1
ESCON Modify MPC+ Subchannel>d 2
ESCON Modify MPC+ Subchannel>e
ESCON Config Virtual>sub list
  Read Subchannels:
    Sub 0 Device address : 5 LPAR number : 0
      Link address : F4 CU Logical Address : 0
  Write Subchannels:
    Sub 1 Device address : 2 LPAR number : 0
      Link address : F4 CU Logical Address : 0
ESCON Config Virtual> exit
ESCON Config>

```

List (ESCON)

list コマンドは、チャンネル・アダプター構成をリストさせる場合に使用し、サブチャンネルの要約をリストさせる場合にも使用します (**list all** を用いて)。

構文 :

```

list (no parameters)
all

```

(no parameters)

チャンネル・アダプター構成がリストされます。

例 : ESCON 構成のリスト

```

ESCON Config>li
Net: 5 Protocol: LSA LAN type: Token Ring LAN number: 0
Maxdata: 2052
Loopback is enabled.
MAC address: 400022160005
Block timer: 10 ms ACK length: 10 bytes

```

all チャンネル構成にサブチャンネルの要約を添えてリストします。2つの例を示します。最初の例は、サブチャンネルが LSA および LCS のチャンネル・アダプターの場合です。2番目の例は、サブチャンネルが MPC+ のチャンネル・アダプターの場合です。

LSA および LCS の場合の例 : ESCON 構成にサブチャンネルの要約を添えたリスト

```

ESCON Config>li all
Net: 2 Protocol: LCS LAN type: LCS FDDI LAN number: 0
Maxdata: 4478
MAC address: 400000002216
Block Timer: 5 ms ACK Length: 10 bytes
Sub 0 Dev addr: 8 LPAR: 0 Link addr: C5 CU addr: 0

Net: 5 Protocol: LSA LAN type: Token Ring LAN number: 0
Maxdata: 2052
Loopback is enabled.
MAC address: 400022160005
Block timer: 10 ms ACK length: 10 bytes
Sub 0 Dev addr: 0 LPAR: 0 Link addr: 1 CU addr: 0

```

MPC+ の場合の例 : ESCON 構成にサブチャンネルの要約を添えたりリスト

```

Net: 1 Protocol: MPC+ LAN type: MPC+ LAN number: 0
Maxdata: 2048
Reply TO: 45000 Sequencing Interval Timer: 3000
MPC Group is for exclusive use of UDP+
Outbound protocol data blocking is enabled
Block Timer: 5 ms ACK Length: 10 bytes
Read Subchannels:

```

チャンネル・アダプター構成コマンド (Talk 6)

```
Sub 0 Dev addr: 40 LPAR: 0 Link addr: F5 CU addr: 0
Write Subchannels:
Sub 1 Dev addr: 41 LPAR: 0 Link addr: F5 CU addr: 0

Net: 2 Protocol: MPC+ LAN type: MPC+ LAN number: 1
Maxdata: 2048
Reply TO: 45000 Sequencing Interval Timer: 3000
Outbound protocol data blocking is enabled
Block Timer: 5 ms ACK Length: 10 bytes
Read Subchannels:
Sub 0 Dev addr: 42 LPAR: 0 Link addr: F5 CU addr: 0
Write Subchannels:
Sub 1 Dev addr: 43 LPAR: 0 Link addr: F5 CU addr: 0
```

List (PCA)

list コマンドは、構成された転送モードおよびチャンネル転送速度、または構成されたバーチャル・インターフェースをリストさせる場合に使用します。

構文 :

```
list                                base
                                       virtual
```

base 構成された転送モードおよびチャンネル転送速度をリストします。

virtual [all または (no parameter)]

バーチャル・インターフェースに関する構成、またはすべてのバーチャル・インターフェースおよびそれらのサブチャンネルの構成 (**all**) の要約をリストします。

Set (PCA の場合のみ)

set コマンドは、並列チャンネル・アダプター (PCA) に関する転送モードおよびチャンネル転送速度を設定する場合に使用します。

構文 :

```
set                                tmode value
```

tmode *value*

2216 がホストにデータを転送する場合に使用する転送のモード (DC インターロックとデータ・ストリームのどちらか)、およびデータ・ストリームを使用する場合のチャンネル転送速度を指定します。

有効値 :

D 直結 (DC) インターロックを指定します。このモードが要求への応答を必要とする標準入出力インターフェースです。

S 3.0 MB データ・ストリーム・モード以下の速度を指定します。

S4 4.5 MB データ・ストリーム・モード以下の速度を指定します。

デフォルト値 : D

チャンネル・インターフェース監視プロセスへのアクセス

ESCON または PCA インターフェースにアクセスする手順は、次のとおりです。

1. OPCON プロンプトで **talk 5** と入力する。下に例を挙げます。

```
* talk 5
+
```

2. チャンネル・インターフェース、またはチャンネル・アダプターのバーチャル・インターフェースのいずれかに関する監視プロンプトを表示させるために、**network** コマンドの後に続けてインターフェースのインターフェース番号を入力する。

インターフェース番号が分からない場合は、+ プロンプトで **configuration** コマンドを使用して、ルーター上に構成されているインターフェース番号のリストを表示させます。

```
Multiprotocol Access Services
```

```
2216-MAS Feature 2822 V3.2 Mod 0 PTF 0 RPQ 0 MAS.EF9 cc4_2a
```

```
Num Name Protocol
0 IP DOD-IP
3 ARP Address Resolution
11 SNMP Simple Network Management Protocol
23 ASRT Adaptive Source Routing Transparent Enhanced Bridge
28 APPN Advanced Peer-to-Peer Networking [HPR]
29 NHRP Next Hop Routing Protocol
30 APPN Advanced Peer-to-Peer Networking [ISR]
```

```
Num Name Feature
2 MCF MAC Filtering
7 CMPRS Data Compression Subsystem
8 NDR Network Dispatching Router
10 AUTH Authentication
```

```
31 Networks:
Net Interface MAC/Data-Link Hardware State
0 TKR/0 Token-Ring/802.5 Token-Ring Up
1 Eth/0 Ethernet/IEEE 802.3 Ethernet Up
2 PCA/0 Parallel Channel Parallel Channel Up
3 LCS/0 LCS Parallel Channel Up
4 MPC/0 MPC Parallel Channel Up
5 LSA/0 LSA Parallel Channel Up
6 TKR/1 Token-Ring/802.5 APPN Loopback Up
7 ESCON/0 ESCON ESCON Channel Up
8 MPC/1 MPC ESCON Channel Up
9 LCS/1 LCS ESCON Channel Up
10 LSA/1 LSA ESCON Channel Up
```

チャンネル・インターフェース監視コマンド

以下のコマンドは、チャンネル・アダプター監視プロンプト (ESCON> または PCA>) で入力することができます。

表 49. チャンネル・インターフェース監視コマンド

コマンド	説明
? (Help)	このコマンド・レベルで使用可能なコマンドをすべて表示するか、特定のコマンドに関するオプション (ただし、選択可能な場合) をリストします。12ページの『ヘルプを得る』を参照してください。
List	サブチャンネルをリストするか、ネットワークをリストします。
Net	特定のネットワーク・インターフェースをリストします。
Exit	直前のコマンド・レベルに戻ります。13ページの『下位レベル操作環境を終了する』を参照してください。

チャンネル・インターフェース監視コマンド (Talk 5)

List

list コマンドは、サブチャンネルをすべてリストさせる場合、またはネットワーク・インターフェースをすべてリストさせる場合に使用します。PCA インターフェースの速度をリストさせることもできます。

構文：

```
list                base (PCA only)
                    nets
                    subchannels
```

base チャンネル・アダプターの転送モードおよび転送速度がリストされます。

nets ネットワーク・インターフェースをリストします。

例：ネットワークのリスト

```
PCA>li ne
+ net 1
PCA Base Monitoring
PCA> li nets
Net: 2   Type: LSA   LAN Type: Token-Ring/802.5   LAN Number: 0
        Net state: Up
Net: 4   Type: LSA   LAN Type: Token-Ring/802.5   LAN Number: 1
        Net state: Up
Net: 5   Type: LCS   LAN Type: FDDI                LAN Number: 0
        Net state: Down
```

Type バーチャル・インターフェースのタイプで、LCS、LSA、または MPC+ です。

LAN Type

LAN タイプで、トークンリング/802.5、イーサネット/802.3、イーサネット/V2、イーサネット、または FDDI のいずれかです。

注：MPC+ インターフェースのサブチャンネルの場合は、このフィールドは表示されません。

LAN Number

LAN のインターフェース番号

注：MPC+ インターフェースのサブチャンネルの場合は、このフィールドは表示されません。

Group Number

グループ番号は、装置がチャンネル・アダプター上のバーチャル MPC+ ネットワーク・インターフェースを識別するために内部で使用します。

Net State

ネットワークの状態で、Up、Down、Disabled、Not Present、HW Mismatch、Testing のいずれかです。

Up リンクがアップであることを示します。

Down リンクがダウンであることを示します。

Disabled

オペレーターがリンクを使用不可にしたことを示します。

チャンネル・インターフェース監視コマンド (Talk 5)

Not Present

ネットワーク・インターフェースのアダプターが存在しないことを示します。

HW Mismatch

スロットに入っているのがチャンネル・アダプター以外のアダプターであるか、取り付けられている物理チャンネル・アダプターが構成済みチャンネル・アダプターと同じタイプではありません。

注: 『Not present』 および 『HW mismatch』 の状態が生じるのは、基本ネットワークの場合だけです。

Testing

システムがネットワーク・コネクションが存在するかどうかを調べています。

subchannels

サブチャンネルをリストします。

```
ESCON> li sub
The following subchannels are defined:
  Local address: 00   Device address: 00   CU Logical Address: 00
                    Link: C5   LPAR: 00
                    Type: LSA
    The following lantypes/lannums are using this subchannel:
                    LAN type: Token-Ring/802.5 LAN number: 0
  Local address: 01   Device address: DD   CU Logical Address: 0B
                    Link: 5C   LPAR: 02
                    Type: LSA
    The following lantypes/lannums are using this subchannel:
                    LAN type: Token-Ring/802.5 LAN number: 0
  Local address: 02   Device address: 07   CU Logical Address: 00
                    Link: C5   LPAR: 00
                    Type: LSA
    The following lantypes/lannums are using this subchannel:
                    LAN type: Token-Ring/802.5 LAN number: 1
  Local address: 03   Device address: 02   CU Logical Address: 00
                    Link: C5   LPAR: 00
                    Type: LCS
    The following lantypes/lannums are using this subchannel:
                    LAN type: FDDI   LAN number: 0
  Local address: 04   Device address: 03   CU Logical Address: 00
                    Link: C5   LPAR: 00
                    Type: LCS
    The following lantypes/lannums are using this subchannel:
                    LAN type: FDDI   LAN number: 0
```

Local Address

装置が内部で使用するサブチャンネル・アドレス・インデックス。

Device Address

装置を選択するためにチャンネル・パス上を送信される装置アドレス。S/370 入出力アーキテクチャーでは、チャンネル番号とも呼ばれます。これは、2 桁の 16 進値で、範囲は X'00' ~ X'FF' です。この値は、ホストIOCP 内で、実装置の CNTLUNIT マクロ命令の UNITADD ステートメントによって定義されます。

注: ESCON アダプターの場合は、表示されるのは CU Logical Address、Link Address、および LPAR だけです。

CU Logical Address

装置に関してホスト内で定義された制御装置アドレス。この値は、ホスト入出力構成プログラム (IOCP) の CNTLUNIT マクロ命令の CUADD ステートメントで定義されます。

チャンネル・インターフェース監視コマンド (Talk 5)

制御装置アドレスは、同じホスト上で定義された各論理区画ごとに固有でなければなりません。

Link Address

通信パスに ESCON ディレクター (ESCD) が 1 つある場合、リンク・アドレスは、ホストに接続された ESCD ポート番号。

通信パスに ESCD が 2 つある場合は、動的接続で定義された ESCD のホスト側のポート番号です。

通信パスに ESCD がない場合、この値は 0x01 に設定する必要があります。

LPAR 論理区画番号。これは、論理区画 (LPAR) ホスト内の複数の区画が、1 つの ESCON ファイバーを共用できるようにします。

この値は、ホスト入出力構成プログラム (IOCP) の RESOURCE マクロ命令によって定義されます。

ホストが EMIF を使用していない場合、LPAR 番号は 0 (ゼロ) です。

Type バーチャル・インターフェースのタイプで、LCS、LSA、または MPC+ です。

LAN Type

LAN タイプで、トークンリング/802.5、イーサネット/802.3、イーサネット/V2、イーサネット、または FDDI のいずれかです。

注: MPC+ インターフェースのサブチャンネルの場合は、このフィールドは表示されません。

LAN Number

LAN のインターフェース番号。

注: MPC+ インターフェースのサブチャンネルの場合は、このフィールドは表示されません。

Group Number

グループ番号は、装置がチャンネル・アダプター上のバーチャル MPC+ ネットワーク・インターフェースを識別するために内部で使用します。

Net

net コマンドは、下記の各項で説明されているバーチャル・インターフェースの 1 つの監視環境に入る場合に使用します。

- 425ページの『チャンネル・アダプター LCS インターフェース監視コマンド』
- 426ページの『チャンネル・アダプター LSA インターフェース監視コマンド』
- 428ページの『チャンネル・アダプター MPC+ インターフェース監視コマンド』

構文 :

net *net_number*

チャンネル・アダプター LCS インターフェース監視コマンド

以下のコマンドは、LCS 監視プロンプト (LCS) で入力できます。

表 50. チャンネル・アダプター LCS インターフェース監視コマンド

コマンド	説明
? (Help)	このコマンド・レベルで使用可能なコマンドをすべて表示するか、特定の コマンドに関するオプション (ただし、選択可能な場合) をリストします。 12ページの『ヘルプを得る』を参照してください。
List	サブチャンネルをリストするか、ネットワークをリストします。
Exit	直前のコマンド・レベルに戻ります。13ページの『下位レベル操作環境を 終了する』を参照してください。

List

list コマンドは、LCS インターフェースに関する情報を表示させる場合に使用します。

構文：

list

例：

```
LCS> list
LCS Virtual Adapter
LCS Information for Net 4
-----
LAN Type: Token-Ring/802.5      LAN Number: 0
Local Read Subchannel number: 7
Local Write Subchannel number: 6
MAC Address: 400022160001
Local IP Address: 9.192.200.1
Status: Down
```

LAN Type

LAN タイプで、トークンリング/802.5、イーサネット/802.3、イーサネット/V2、イーサネット、または FDDI のいずれかです。

注: MPC+ インターフェースのサブチャンネルの場合は、このフィールドは表示されません。

LAN Number

LAN のインターフェース番号。

注: MPC+ インターフェースのサブチャンネルの場合は、このフィールドは表示されません。

Read Subchannel

装置がデータを受信するローカル・サブチャンネル

Write Subchannel

装置がデータを送信するローカル・サブチャンネル

MAC Address

このバーチャル・インターフェースを識別する固有の MAC アドレス

チャンネル・インターフェース監視コマンド (Talk 5)

Local IP address

このネットワーク・インターフェースに割り当てられた IP アドレス。IP アドレスを構成していなかった場合、この行は表示されません。

LCS Bridging

ブリッジングが構成されている場合にだけ表示されます。(例では示されていません。)

Status

ネットワークの状態で、Up、Down、Disabled、Not Present、HW Mismatch、Testing のいずれかです。

Up ネットワーク・コネクションが確立されています。

Down ネットワーク・コネクションを判別できません。

Disabled

装置が使用不可にされており、診断テストを実行できます。

Not Present

ネットワーク・インターフェースのアダプターが存在しないことを示します。

HW Mismatch

スロットに入っているのがチャンネル・アダプター以外のアダプターであるか、取り付けられている物理チャンネル・アダプターが構成済みチャンネル・アダプターと同じタイプではありません。

注: 『Not present』 および 『HW mismatch』 の状態が生じるのは、基本ネットワークの場合だけです。

Testing

システムがネットワーク・コネクションが存在するかどうかを調べています。

チャンネル・アダプター LSA インターフェース監視コマンド

以下のコマンドは、LSA 監視プロンプト (LSA) で入力できます。

表 51. チャンネル・アダプター LSA インターフェース監視コマンド

コマンド	説明
? (Help)	このコマンド・レベルで使用可能なコマンドをすべて表示するか、特定のコマンドに関するオプション (ただし、選択可能な場合) をリストします。12ページの『ヘルプを得る』を参照してください。
List	アダプター、SAP、またはリンク・ステーションの情報をリストします。
Exit	直前のコマンド・レベルに戻ります。13ページの『下位レベル操作環境を終了する』を参照してください。

List

list コマンドは、アダプター、SAP、およびリンク・ステーションに関する情報を表示させる場合に使用します。

構文 :

チャンネル・インターフェース監視コマンド (Talk 5)

list
adapter
sap
link stations

adapter

LSA のバーチャル・アダプターをリストします。

例: LSA のバーチャル・アダプターのリスト

```
LSA> list ad
LSA Virtual Adapter
LSA Information for Net 2
-----
LAN Type: Token-Ring/802.5      LAN Number: 0
MAC Address: 4000000000CF
Downstream network: Loopback - Net 2
Status: Host connected

#SAPs Open: 1      #Link Stations Open: 1
Maximum frame size: 2052 (0x804)
Host User ID      Subchannel
-----
00000000          0
```

1 host user(s)

#SAPs Open

この LSA インターフェース上の VTAM によってオープンされた SAP の数

#Link Stations Open

この LSA インターフェース上のすべての SAP のためにオープンされたリンク・ステーションの数

Maximum Frame Size

この LSA インターフェース上でサポートされる最大フレーム・サイズ

Host User ID

指定のサブチャンネル上のホスト・ユーザーを識別するために、VTAM によって生成された固有の ID

Subchannel

このホスト・ユーザーが使用しているローカル・サブチャンネル。

sap LSA のサービス・アクセス・ポイント (SAP) をリストします。

例: LSA の SAP のリスト

```
LSA> list sap
SAP   Provider   User   Max Link   Open Link
Number Provider   SAP ID SAP ID   Stations   Stations
-----
4     02000000    00000001 1         1
1 SAPs currently open
```

SAP Number

LLC への SAP を識別します。

Provider SAP ID

この SAP を識別するために VTAM によって生成された固有の ID

User SAP ID

この SAP を識別するために装置によって生成される固有の ID

チャンネル・インターフェース監視コマンド (Talk 5)

Max Link Stations

この SAP 上で VTAM がオープンできるリンク・ステーションの最大数

Open Link Stations

この SAP 上で現在オープンされているリンク・ステーションの数

link LSA のリンク情報をリストします。

例: LSA のリンクのリスト

```
LSA> list link
Please specify a SAP number (0-236): [4]? 4
Link Stations on SAP 4
```

Station ID	Destination MAC Address	Destination SAP Number	Link Status	Frames Sent	Frames Received
02000001	40000000ABCD	4	Connected	9	9

1 link station(s) open on SAP 4

Station ID

このリンク・ステーションを識別するために装置によって生成される固有の ID

Destination MAC Address

リモート LLC リンク・ステーションの MAC アドレス

Destination SAP Number

リモート LLC リンク・ステーションの SAP 値

Link Status

LLC コネクションの現在の状態

Frames Sent

このリンク・ステーションの VTAM に送信されたパケットの数

Frames Received

このリンク・ステーションの VTAM から受信したパケットの数

チャンネル・アダプター MPC+ インターフェース監視コマンド

以下のコマンドは、MPC+ 監視プロンプト (MPC+) で入力できます。

表 52. チャンネル MPC+ インターフェース監視コマンド

コマンド	説明
? (Help)	このコマンド・レベルで使用可能なコマンドをすべて表示するか、特定のコマンドに関するオプション (ただし、選択可能な場合) をリストします。12ページの『ヘルプを得る』を参照してください。
List	サブチャンネルをリストします。
Exit	直前のコマンド・レベルに戻ります。13ページの『下位レベル操作環境を終了する』を参照してください。

List

list コマンドは、MPC+ グループ、サブチャンネル、コネクション管理プログラム (CM)、およびコネクション情報を表示させる場合に使用します。

構文 : **list** cm

チャンネル・インターフェース監視コマンド (Talk 5)

connection

mpc group

subchannel

cm MPC+ グループ上で実行されているコネクション管理プログラムに関する情報を表示します。表示される情報は、グループ・トークン、コネクション管理プログラムのタイプ、および現在の状態です。

状態は、次のとおりです。

Reset CM は現在、非アクティブです。

Pending Active-waiting for MPC+ Group

基礎の MPC+ グループがアクティブになる途中です。

Pending Active-waiting for this side

相手側は CM の立ち上げを開始しましたが、こちら側はまだ CM の立ち上げを開始していません。

Pending Active-waiting for other side

こちら側は CM の立ち上げを開始しましたが、相手側はまだ CM の立ち上げを開始していません。

Pending Active-callee

こちら側は、これを立ち上げたコーラーである相手側がコールを開始するのを待っています。

Pending Active-caller

こちら側は、相手側にコールし、相手側がそのコールに応答するのを待っています。

Active アクティブで、使用可能です。

例: MPC+ のアクティブ CM のリスト

```
MPC+>li cm
MPC+ Connection Managers(CM)
      Group Token      type      state
-----
090144953400000009      PTP Active
```

例: リスト、MPC+ のアクティブ CM なし

```
MPC+>li cm
No CMs on this MPC+ Group
```

connection

MPC+ グループ/コネクション管理プログラムで稼働中のコネクションに関する情報を表示します。表示される情報は、2つの部分に分けられています。すなわち、バーチャル・サーキットとそのバーチャル・サーキット下のコネクションです。バーチャル・サーキットについて表示される情報は、ローカルおよびリモートのバーチャル・サーキット・トークン、プロトコル・タイプ、および現在の状態です。

Local Virtual Circuit Token

このバーチャル・サーキットを表す、装置内のトークン

チャンネル・インターフェース監視コマンド (Talk 5)

Remote Virtual Circuit Token

このバーチャル・サーキットを表す、ホスト内のトークン。不明の場合は、このフィールドはブランクです。

Protocol

このバーチャル・サーキットが使用している高位レイヤー・プロトコル

States for the Virtual Circuit

バーチャル・サーキットの状態は、次のとおりです。

Reset バーチャル・サーキットは現在非アクティブです。

Active-other side

相手側は現在、このバーチャル・サーキットのコール (コネクション) を受け入れています。

Active-this side

こちら側は現在、このバーチャル・サーキットのコール (コネクション) を受け入れています。

Active-both sides

バーチャル・サーキットの両側が、このバーチャル・サーキットのコール (コネクション) を受け入れています。

Not accepting new calls

このコネクションは、新規のコール (コネクション) を受け入れていません。ただし、すでにバーチャル・サーキット上で稼働中のコネクションは、アップのままです。

コネクションについて表示される情報は、ローカルおよびリモートのコネクション・トークンと現在の状態です。IP プロトコル (つまり、UDP+ および TCP/IP) の場合は、コネクションに対応するローカルおよび先 IP アドレスも、分かっている場合は表示されます。

Local Connection Token

このコネクションを表す、装置内のトークン

Remote Connection Token

このコネクションを表す、ホスト内のトークン。不明の場合は、このフィールドはブランクです。

States for the Connection

コネクションの状態は、次のとおりです。

Reset コネクションは現在、非アクティブです。

Pending Active - callee

こちら側は、相手側からのコール・リクエストに応答しようとしています。

Pending Active - caller

こちら側は、相手側にコールし、相手側がそのコールに応答するのを待っています。

チャンネル・インターフェース監視コマンド (Talk 5)

Pending Active - awaiting datastart

コネクションは、ユーザー・データを流し始めるために、両側の準備が整うのを待っています。

Active アクティブで、使用可能です。

Local IP address

装置内の MPC+ インターフェース上の、このコネクションに対応する IP アドレス。このフィールドが表示されるのは、IP プロトコルの場合だけです。

Destination IP Address

このコネクションに対応する、ホスト内の IP アドレス。このフィールドが表示されるのは、IP プロトコルの場合だけです。

例：MPC+ のアクティブ・コネクションのリスト

```
MPC+>1i conn
MPC+ Connections
Virtual Circuit Token = 090144C22C00000000
Remote Registration Token(s) = 05000101A5
Protocol = APPN, State = Active-both sides
                Local Connection Token = 090144C33000000000E
                Remote Connection Token = 05000101A6
                State = Active

Protocol = TCP/IP, State = Active-both sides
                Local Connection Token = 090144C44000000000F
                Remote Connection Token = 05000101B0
                State = Active
                Local IP address = 100.0.0.1
                Destination IP address = 100.0.0.2
```

例：リスト、MPC+ に対してアクティブのコネクションなし

```
MPC+>1i conn
No User Connections on this MPC+ Group
```

mpc MPC+ グループに関する情報を表示します。ローカルおよびリモート登録トークン (分かる場合)、および MPC+ グループの現在の状態を表示します。また、MPC+ が UDP+ による専用の場合は、その旨も示されます。MPC+ グループが UDP+ による専用でない場合は、表示で専用に言及されることはありません。

注：UDP+ は並列チャンネル・アダプター (PCA) ではサポートされません。

例：

```
MPC+>1i mpc
MPC+ Group
Local registration token = 0901422A3C0000000000
Remote registration token = 050001019D
state = Active
This MPC+ Group is for the exclusive use of UDP+.
Outbound protocol data blocking is enabled for the MPC+ Group.
```

Local registration token

この MPC+ グループを表す、装置内のトークン

Remote registration token

この MPC+ グループを表す、ホスト内のトークン。不明の場合は、このフィールドはブランクです。

State MPC+ グループの状態

Reset MPC+ グループは現在、非アクティブです。

チャンネル・インターフェース監視コマンド (Talk 5)

Pending Active-xid2(00)

アクティブになる途中で、現在 xid2(00)s を処理中です。

Pending Active-xid2(07)

アクティブになる途中で、現在 xid2(07)s を処理中です。

Active アクティブで、使用可能です。

Pending Reset

非アクティブ保留中 (つまり、ダウンになる途中で。)

subchannel

MPC+ グループに含まれるサブチャンネルに関する情報を示します。ローカル・サブチャンネル番号、論理区画番号、リンク・アドレス、制御装置 (CU) 論理アドレス、装置アドレス、サブチャンネルのタイプ (READ または WRITE)、およびサブチャンネルの現在の状態を表示します。タイプは、ホストで構成されている値の反対の値でなければなりません。

例: MPC+ のサブチャンネルの例

```
MPC+>li sub
MPC+ Subchannels
Local  Link  CU Log.  Device
number LPAR  addr  address  address  type  state
-----
      1   0   F4     0     9     READ  Active
      0   0   F4     0     8     WRITE Active
```

注: PCA サブチャンネルのリスト時に表示されるのは、装置アドレスだけです。

Local number

装置が内部で使用するサブチャンネル・アドレス・インデックス。

注: ESCON アダプターの場合は、表示されるのは CU Logical Address、Link Address、および LPAR だけです。

LPAR 論理区画番号。これは、論理区画 (LPAR) ホスト内の複数の区画が、1 つの ESCON ファイバーを共用できるようにします。

この値は、ホスト入出力構成プログラム (IOCP) の RESOURCE マクロ命令によって定義されます。

ホストが EMIF を使用していない場合、LPAR 番号は 0 (ゼロ) です。

Link Address

通信パスに ESCON ディレクター (ESCD) が 1 つある場合、リンク・アドレスは、ホストに接続された ESCD ポート番号。

通信パスに ESCD が 2 つある場合は、動的接続で定義された ESCD のホスト側のポート番号です。

通信パスに ESCD がない場合、この値は 0x01 に設定する必要があります。

CU Logical Address

装置に関してホスト内で定義された制御装置アドレス。この値は、ホスト入出力構成プログラム (IOCP) の CNTLUNIT マクロ命令の CUADD ステートメントで定義されます。

チャンネル・インターフェース監視コマンド (Talk 5)

制御装置アドレスは、同じホスト上で定義された各論理区画ごとに固有でなければなりません。

Device Address

装置を選択するためにチャンネル・パス上を送信される装置アドレス。S/370 入出力アーキテクチャーでは、チャンネル番号とも呼ばれます。これは、2 桁の 16 進値で、範囲は X'00' ~ X'FF' です。この値は、ホストIOCP 内で、実装置の CNTLUNIT マクロ命令の UNITADD ステートメントによって定義されます。これは、2 桁の 16 進値で、範囲は X'00' ~ X'FF' です。この値は、ホストIOCP 内で、実装置の CNTLUNIT マクロ命令の UNITADD ステートメントによって定義されます。

Type このサブチャンネルが読み取り用か書き込み用か。

state サブチャンネルの状態

Reset サブチャンネルは現在、非アクティブです。

Pending Active-xid2(00)

サブチャンネルはアクティブになる途中で、現在 xid2(00)s を処理中です。

Pending Active-xid2(07)

サブチャンネルはアクティブになる途中で、現在 xid2(07)s を処理中です。

Active サブチャンネルはアクティブで、MPC+ グループに含まれています。

Pending Reset

サブチャンネルは非アクティブ保留中 (つまり、ダウンになる途中です)。

チャンネル・インターフェース監視コマンド (Talk 5)

第32章 シリアル・ライン・インターフェースの構成

この章では、シリアル・インターフェースのインターフェース構成プロセスについて説明します。以下の節が含まれています。

- 『インターフェース構成プロセスへのアクセス』
- 436ページの『ネットワーク・インターフェースと GWCON インターフェース・コマンド』

重要: シリアル・インターフェース上のフレーム・リレー、PPP、X.25、V.25bis、SDLC リレー、および SDLC プロトコルを構成する場合は、本章のコマンドを使用した後で、特定プロトコルについて説明している章のコマンドを参照してください。

プロトコルのリストおよびこれらのプロトコルをサポートするインターフェースの一覧表は、22ページの『ネットワーク・インターフェースの構成』を参照してください。

インターフェース構成プロセスへのアクセス

シリアル・インターフェースを追加する方法についての説明は、19ページの『ネットワーク・インターフェースの構成および操作プロセスへのアクセス』を参照してください。それが完了している場合は、以下で、インターフェースのデータ・リンクを正しく設定する方法、およびそのデータ・リンクの構成コマンドにアクセスする方法について説明します。

シリアル・インターフェースのインターフェース構成プロセスにアクセスするには、最初に `Config>` プロンプトにアクセスし、コマンド **set data-link** を出します。次に、`Config>` プロンプトで、インターフェースのタイプと番号を入力して、そのインターフェースの構成環境にアクセスします。

たとえば、X.25 のシリアル・インターフェースを構成する場合は、次のようなコマンドを出して、X.25 `config>` 環境にアクセスする必要があります。

```
Config> set data-link X25 2
Config> network 2
```

X.25 `config>` 環境から、シリアル・インターフェース上の X.25 の構成を完成させることができます。437ページの『第33章 X.25 ネットワーク・インターフェースの使用』を参照してください。

シリアル・インターフェースの構成が完了したら、OPCON プロンプト(*) の後に **restart** コマンドを入力し、新規構成を使用可能にするかどうかを尋ねるプロンプトに対して **yes** と応答します。

クロックとケーブル・タイプ

FR、PPP、X.25、SDLC リレー、および SDLC でのシリアル・ポートのすべての使用が、この項の対象になります。

シリアル・ライン・インターフェースの構成

モデムまたは CSU/DSU がシリアル・ポートに接続される場合は、ルーターが伝送路上のクロックとしての DTE の役割を担うので、DTE ケーブル・タイプと外部クロックを構成します。

モデムも CSU/DSU もモデム・エリミネーターも使用しないで、2 つのルーターを直接接続したい場合は、いずれか一方のルーターが伝送路上のクロックとしての DCE の役割を担います。DCE の役割を果たすルーターに直接接続ケーブルを接続し、そのシリアル・インターフェースに関する以下のパラメーターを構成します。

1. DCE ケーブル・タイプ
2. 内部クロック
3. クロック/伝送路速度

もう一方のルーターはクロックとしての DTE の役割を担うので、モデムまたは CSU/DSU に接続される場合と同じように構成する必要があります。

注: DTE を構成する場合は、DCE ケーブルの場合とは異なり、WAN ネットワーク・ハンドラーがピア装置の役割を担うかどうか、それによって影響を受けることはありません。たとえば、たとえフレーム・リレー・インターフェースが DCE ケーブルを使用する構成になっているときでも、ルーターは常にフレーム・リレー DTE 装置の役割を果たし、FR UNI インターフェースを使用します。

ネットワーク・インターフェースと GWCON インターフェース・コマンド

シリアル・ライン・インターフェースには、監視のための独自のコンソール・プロセスはありませんが、GWCON 環境から **interface** コマンドを使用すれば、ルーターはすべての導入済みネットワーク・インターフェースの完全な統計を表示することができます。**interface** コマンドと統計の表示について詳しくは、第10章 操作/監視プロセス (GWCON - Talk 5) とコマンド を参照してください。

第33章 X.25 ネットワーク・インターフェースの使用

X.25 ネットワーク・インターフェースは、ルーターを X.25 バーチャル・サーキット交換ネットワークに接続します。X.25 ネットワーク・インターフェースのソフトウェアとハードウェアにより、ルーターは公衆 X.25 ネットワークを介して通信することができます。X.25 ネットワーク・インターフェースは、X.25 インターフェースの CCITT 1980、CCITT 1984、CCITT 1988、および ISO 8208 1990 仕様に準拠しており、多重化チャネルおよび広域ネットワークを経由する高信頼性エンド・エンド間データ転送を提供します。

本章には、以下の節が含まれています。

- 『基本構成手順』
- 440ページの『ヌル・カプセル化 (Null Encapsulation)』
- 442ページの『閉域ユーザー・グループの概要』

TCP/IP を通して X.25 トラフィックをトランスポートするための X.25 トランスポート・プロトコル (XTP) の構成に関する説明については、485ページの『第35章 XTP の使用』を参照してください。

基本構成手順

この節では、X.25 インターフェースを立ち上げて実行するのに必要な最小構成ステップについて概説します。X.25 パラメーターは、ルーター上のインターフェースが接続する X.25 ネットワークと一致していなければなりません。詳細については、本章で説明する構成コマンドを参照してください。

注: 構成変更を有効にするためには、ルーターをリスタートする必要があります。

1. **OPCON** プロンプト (*) で **talk 6** と入力する。
Config> プロンプトが表示されます。
2. **list devices** を入力して、インターフェースのリストを表示すると、そこから選択することができます。以下のステップでは、該当するインターフェース番号を使用してください。
3. **set data-link x25** と入力する。
Interface Number [0]? プロンプトが表示されます。
4. 該当するインターフェース番号を入力する。
5. Config> プロンプトで **net #** と入力して、ネットワークに接続する。
X.25 Config[#]> プロンプトが表示されます。
6. このプロンプトで、**set address x.25-node-address** と入力する。

X.25 アドレスは、コール設定時に使用される固有の X.121 アドレスです。DDN ネットワークの場合は、**add htf-addr** コマンドおよび **set htf-addr** コマンドを使用して、このインターフェースに対応するプロトコル・アドレスを DDN アドレス変換に必要な X.121 アドレス・フォーマットに変換します。ネットワーク・アドレスを設定しないと、X.25 インターフェースを接続ネットワークに結合できません。

X.25 ネットワーク・インターフェースの使用

7. **set equipment-type** と入力し、フレームおよびパケット・レベルが DCE または DTE のいずれとして動作するのかを指定する。このコマンドのデフォルト値は DTE です。
8. **set svc** と入力して、使用する SVC 数の最低値と最高値を定義する。デフォルトは 1 SVC です。
9. **add protocol** *protocol_name* と入力して、X.25 インターフェースを介して実行されるプロトコルを追加する。ウィンドウ・サイズ、デフォルト・パケット・サイズ、最大パケット・サイズ、回線アイドル・タイム、および最大 VC 数を尋ねるプロンプトが出ます。

注: ルーター上のすべてのX.25 ネットワークに対して 1 回だけプロトコルを追加すれば済みます。
10. **add address** *protocol_name* と入力して、このインターフェースを介して到達可能な各プロトコルのあて先アドレスのアドレス変換を追加する。
11. **exit** と入力して、Config> プロンプトに戻る。
12. **Ctrl-P** を押して OPCON prompt (*) プロンプトに戻る。
13. **restart** と入力し、プロンプトに対して **yes** と応答する。

ナショナル・パーソナリティーの設定

各公衆データ通信網 (GTE の Telenet や DDDN の Defense Data Network など) は、それぞれ独自の標準構成を持っています。ナショナル・パーソナリティー という用語は、公衆データ通信網の特性を定義するのに使用される変数グループを指定します。ナショナル・パーソナリティー内の構成情報は、リンクを介して転送されるパケットの制御情報をルーターに提供します。ナショナル・パーソナリティー・オプションでは、各公衆データ通信網ごとに 27 のデフォルト・パラメーターを定義します。

X.25 ナショナル・パーソナリティーの構成値を表示するには、X.25 構成 **list detailed** コマンドを実行します。ルーターに接続されている各公衆データ通信網を構成するには、X.25 構成 **national-personality set** コマンドを実行します。

ナショナル・パーソナリティーは、ネットワーク構成の汎用テンプレートです。必要な場合は、各フレームおよびパケット・レイヤー・パラメーターを個別に構成することができます。

X.25 のデフォルト値について

下表は、X.25 *set*、*national set*、および *national enable* コマンドの各種パラメーターのデフォルト値をリストしています。

表 53. Set コマンド

パラメーター	デフォルト値
<u>address</u> ...	なし
<u>cable</u>	なし
<u>calls-out</u> ...	4
<u>clocking</u> ...	外部

X.25 ネットワーク・インターフェースの使用

表 53. Set コマンド (続き)

パラメーター	デフォルト値
<u>default-window-size</u> ...	2
<u>encoding</u>	NRZ
<u>equipment-type</u> ...	DTE
<u>htf addr</u> ...	なし
<u>inter-frame-delay</u> ...	0
<u>mtu</u>	1500
<u>national-personality</u> ...	GTE Telenet
<u>pvc</u> ...	低=0 高=0
<u>speed</u>	9600
<u>svc</u>	低 インバウンド=0、高 インバウンド=0 低 両方向=1、高 両方向=64 低 アウトバウンド =0、高 アウトバウンド=0
<u>throughput-class</u> ...	インバウンド=アウトバウンド=2400
<u>vc-idle</u> ...	30

表 54. National Enable パラメーター

パラメーター	DDN デフォルト 値	GTE デフォルト 値
<u>accept-reverse-charges</u>	オフ	オン
<u>bi-cug</u>	オフ	オフ
<u>bi-cug-with-outgoing-access</u>	オフ	オフ
<u>cug</u>	オフ	オフ
<u>cug-deletion</u>	オフ	オフ
<u>cug-insertion</u>	オフ	オフ
<u>cug-with-incoming-access</u>	オフ	オフ
<u>cug-with-outgoing-access</u>	オフ	オフ
<u>cug-zero-override</u>	オフ	オフ
<u>flow-control-negotiation</u>	オン	オン
<u>frame-ext-seq-mode</u>	オフ	オフ
<u>packet-ext-seq-mode</u>	オフ	オフ
<u>request-reverse-charges</u>	オフ	オン
<u>suppress-calling-addresses</u>	オフ	オフ
<u>throughput-class-negotiation</u>	オン	オン
<u>truncate-called-addresses</u>	オフ	オフ

表 55. National Set パラメーター

パラメーター	DDN デフォルト値	GTE デフォルト値
<u>call-req</u>	20 デカ秒	20 デカ秒
<u>clear-req</u> ...	再試行=1	再試行=1
	18 デカ秒	18 デカ秒
<u>disconnect-procedure</u> ...	受動	受動
<u>dp-timer</u>	500 ミリ秒	500 ミリ秒

X.25 ネットワーク・インターフェースの使用

表 55. *National Set* パラメーター (続き)

パラメーター	DDN デフォルト値	GTE デフォルト値
<u>frame-window-size</u>	7	7
<u>n2-timeouts</u>	20	20
<u>packet-size ...</u>	128、最大=256	128、最大=256
<u>reset ...</u>	再試行=1	再試行=1
	18 デカ秒	18 デカ秒
<u>restart ...</u>	再試行=1	再試行=1
	18 デカ秒	18 デカ秒
<u>min-recall</u>	10 秒	10 秒
<u>min-connect</u>	90 秒	90 秒
<u>collision-timer</u>	10 秒	10 秒
<u>standard-version</u>	1984	1984
<u>t1-timer</u>	4 秒	4 秒
<u>t2-timer</u>	0	0
<u>truncate-called-addr-size</u>	2	2

ヌル・カプセル化 (Null Encapsulation)

ヌル・カプセル化を使用すると、ユーザーは、1 本の X.25 回線上で複数のネットワーク・レイヤー・プロトコルを多重化することができます。この機能を使用すれば、不当に多くのバーチャル・サーキットの使用を避けることができる場合があります。

制限

ヌル・カプセル化は、QLLC の場合はサポートされません。この機能は、スイッチド・バーチャル・サーキット (SVC) ではサポートされますが、パーマネント・バーチャル・サーキット (PVC) ではサポートされません。

構成変更

カプセル化オプション NULL が追加されたのは、次の T6 コマンドの場合です。

X25 config の下 : add address IP (enc type = NULL を入力してもよい)

X25 config の下 : add address IPX (enc type = NULL を入力してもよい)

X25 config の下 : add address DNA (enc type = NULL を入力してもよい)

X25 config の下 : add address VINES (enc type = NULL を入力してもよい)

X25 config の下 : list addr によって active enc type = NULL が表示される (優先順位 1 のタイプが NULL の場合)

次の T5 コマンドの場合もそうです。

X25 iint* の下 : list SVCS に enc type = NULL が組み込まれる

マルチカプセル化と閉域ユーザー・グループ (CUG) の構成

マルチカプセル化を使用しているときは、複数のプロトコルが 1 本のバーチャル・サーキット上で稼働できるので、そのサーキット上の各プロトコルごとに定義される CUG (複数の場合もある) は同じであることが必要です。ユーザーが次のように複数プロトコル同一先を構成することを、強く推奨します。

`add address` を使用して CUG を構成します。定義された CUG (複数の場合もある) は、同一アドレスに定義された各プロトコルごとに、それぞれ同じである必要があります。

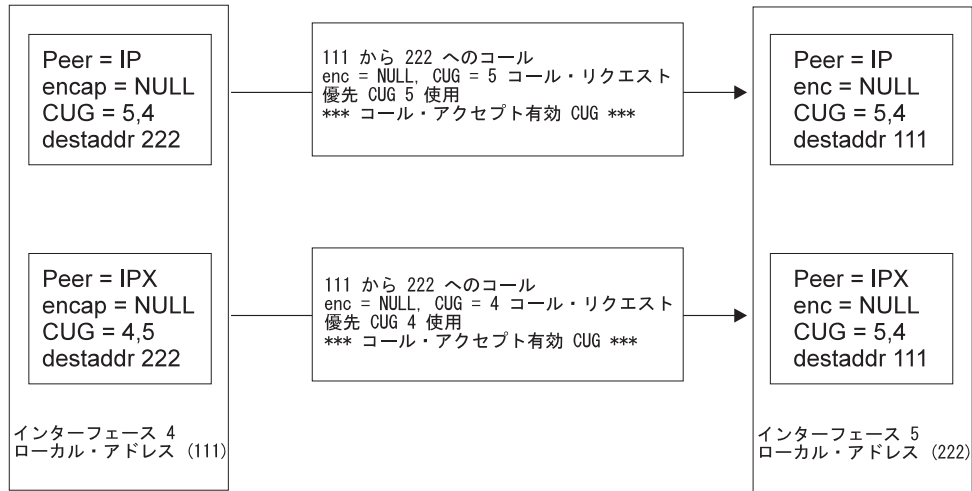
CUG が `add protocol` レベルで定義されている場合は、CUG (複数の場合もある) はすべてのピアで同じである必要があります。(この方式の方が制約が多くなります。)

CUG をインターフェース・レベルで構成します。こうすれば、すべてのピアに同じ CUG 値が確保されます。(この方式の場合が制約は最も多くなります。)

着信コール CUG 定義がいずれもその回線を共用するすべてのプロトコルで有効である限り、上記の方式のいずれも使用することができます。有効とは、CUG が特定アドレスに関して定義されたか、またはデフォルトでプロトコルとインターフェースのどちらかの回線定義を使用したことを意味します。

X.25 ネットワーク・インターフェースの使用

事例 1: 着信閉域ユーザー・グループ (CUG)
両方のピアで有効



事例 2: 着信閉域ユーザー・グループ (CUG)
両方のピアでは有効ではない

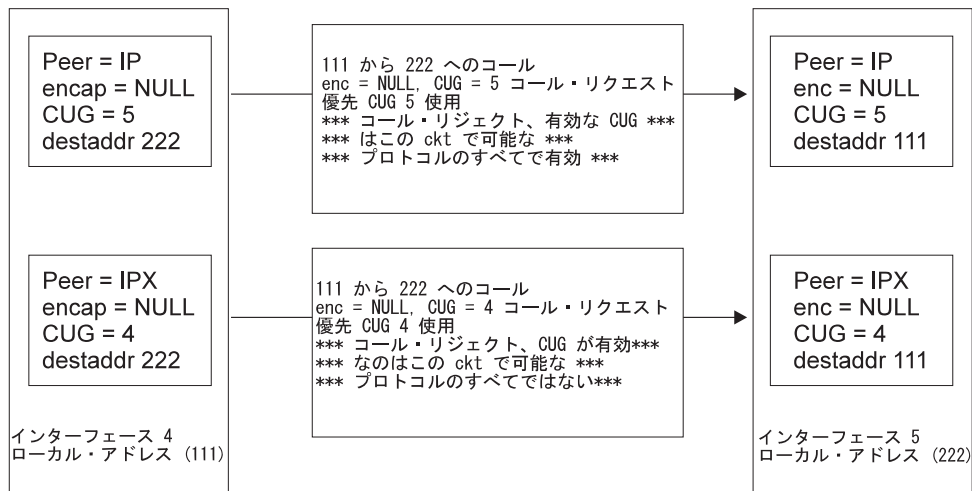


図 36. 閉域ユーザー・グループのヌル・カプセル化

閉域ユーザー・グループの概要

閉域ユーザー・グループ (CUG) とは、他の特定の DTE との接続を確立することができる X.25 DTE のグループのことです。CUG 番号はネットワーク提供者が定義するものであり、使用できるのはネットワーク提供者によって割り当てられる CUG だけです。アドレス固有 CUG、プロトコル固有 CUG、またはインターフェース固有 CUG を構成することができます。3 つのタイプの CUG 番号のすべてが DTE に関して構成されている場合は、閉域ユーザー・グループ・ファシリティーでは、別の DTE との接続時に、コール・リクエストの中でアドレス固有であって先 CUG を使用します。DTE に関して構成されているのがプロトコル固有 CUG とインターフェース固

X.25 ネットワーク・インターフェースの使用

有 CUG だけである場合は、閉域ユーザー・グループが別の DTE との接続時にコール・リクエストの中で使用するの、プロトコル固有 CUG です。

1 つの DTE が複数の CUG に属することができます。そのような DTE に関しては、優先 CUG を指定する必要があります。優先 CUG が使用されるのは、ルーターが他の DTE に対してコールを開始する場合です。1 つの DTE に合計が 5 つを超える優先または通常閉域ユーザー・グループは認められません。

相互閉域接続ユーザー・グループ

相互閉域接続ユーザー・グループ (BCUG) とは、2 つの DTE のみで構成される閉域ユーザー・グループのことです。BCUG 内の DTE がコールを発信できる先は、その BCUG のメンバーと、どの CUG または BCUG のメンバーにもなっていないすべての DTE です。1 つの DTE に合計が 5 つを超える優先または通常相互 CUG は認められません。

DTE が BCUG を使用して回線を確立する方法は、DTE が CUG を使用して回線を確立する場合と同じです (444ページの表56 を参照)。ただし、インターフェース、プロトコル、またはアドレスに関して BCUG と CUG の両方が定義されている場合は、BCUG を使用して回線を確立します。

拡張閉域ユーザー・グループのタイプ

閉域ユーザー・グループに対する次の拡張がサポートされます。

発信アクセス付き CUG

DTE は 1 つまたは複数の CUG に属することができます。DTE がコールを発信できる先は、その CUG のメンバーと、他の着信アクセス可能 CUG に属するすべての DTE です。

着信アクセス付き CUG

DTE は 1 つまたは複数の CUG に属することができます。DTE がコールを受信できる発信元は、どの CUG にも属していない DTE、または他の発信アクセス可能 CUG に属する DTE です。

発信アクセス付き BCUG

DTE は 1 つまたは複数の BCUG に属することができます。DTE がコールを発信できる先は、その BCUG のメンバーと、どの BCUG にも属していないすべての DTE です。

装置上における閉域ユーザー・グループとの X.25 回線の確立

閉域ユーザー・グループ・ファシリティーを使用可能にしてある場合に、DTE がコール・リクエストを受信すると、そのコール・リクエスト内の CUG を使用して、DTE からのコールを受け入れるか拒否するかを決めます。コール・リクエスト内の CUG が、インターフェース、プロトコル、またはコールされた DTE に対応するあて先での構成済み CUG に一致しない場合は、そのコール・リクエストは拒否されます。444ページの表56 には、インターフェース、プロトコル、およびアドレス CUG 番号が異なり、着信アクセスが使用可能にされていない場合に、X.25 回線が CUG に基づいて確立される方法を要約してあります。

X.25 ネットワーク・インターフェースの使用

表 56. 閉域ユーザー・グループの着信 X.25 回線の確立

着信 コール・ リクエスト の内容	受信 DTE CUG 定義							
	インター フェース CUG のみ	プロトコル CUG のみ	アドレス 固有 CUG	インター フェース および プロトコル CUG	インター フェース および アドレス CUG	プロトコル および アドレス CUG	すべての CUG	CUG なし
CUG なし	拒否	拒否	拒否	拒否	拒否	拒否	拒否	受け入れ
インター フェース CUG	受け入れ	拒否	拒否	拒否	拒否	拒否	拒否	拒否
プロトコル CUG	拒否	受け入れ	拒否	受け入れ	拒否	拒否	拒否	拒否
アドレス固 有 CUG	拒否	拒否	受け入れ	拒否	受け入れ	受け入れ	受け入れ	拒否

インターフェース上の発信コールの場合は、CUG と BCUG のどちらかのファシリティが使用可能にされていれば、各コール・リクエストにあて先の構成済み優先 CUG (もしあれば) が入るか、アドレス固有 CUG が構成されていない場合は、使用される CUG がプロトコルに関して定義された CUG になるか、プロトコル固有 CUG が構成されていない場合は、使用される CUG はインターフェースに関して定義された CUG になります。CUG 番号が構成されていなかった場合は、CUG ファシリティが発信コール・リクエストに組み込まれることはありません。

CUG 0 の閉域ユーザー・グループ処理のオーバーライド

DTE は、コール・リクエスト内の 0 という CUG で着信コールの妥当性検査を行うことがないように構成することができます。この能力を使用すると、着信アクセスを使用可能にしていない場合でも、特定のコールを完了させることができます。**national enable cug 0 override** コマンドを使用すると、CUG 番号が 0 の場合は、装置は CUG ファシリティの無視を強制されます。コール・リクエストが構成済み CUG 番号と照合されることはありません。

X.25 閉域ユーザー・グループの構成

X.25 インターフェース上で閉域ユーザー・グループを使用する場合は、以下のようになります。

1. ネットワーク提供者に CUG 番号を要求する。このような番号は、X.25 の構成時に必要です。
2. **national enable cug** コマンドおよび関連コマンドを使用して、閉域ユーザー・グループ・ファシリティを使用可能にする。
3. 必要なら、**national enable bi-cug** コマンドおよび関連コマンドを使用して、相互閉域接続ユーザー・グループ・ファシリティを使用可能にする。
4. DTE 用として該当する CUG 番号を構成する。必要に応じて、優先 CUG、CUG、優先相互 CUG、および相互 CUG を指定します。これには **add address** コマンドを使用します。

X.25 ネットワーク・インターフェースの使用

5. 必要なら、プロトコル用の該当する CUG および相互 CUG を構成する。これには **add protocol** コマンドを使用します。

注: これらの CUG を構成する必要があるのは、このプロトコル用として X.25 インターフェースを通して確立された X.25 回線を、アドレス固有 CUG でオーバーライドしない限り、固有の CUG または BCUG のこのセットに属する DTE にすべて制限する場合だけです。

6. 必要なら、インターフェース用の該当する CUG および相互 CUG を構成する。これには **add cug** コマンドを使用します。

注: これらの CUG を構成する必要があるのは、X.25 インターフェースを通して確立されたすべての X.25 回線を、この一組の固有の CUG または BCUG に属する DTE に制限する場合だけです。ただし、アドレスまたはプロトコル固有の CUG でオーバーライドする場合は別です。

X.25 ネットワーク・インターフェースの使用

第34章 X.25 ネットワーク・インターフェースの構成と監視

この章では X.25 の構成およびオペレーショナル・コマンドについて説明します。この章は以下の節に分かれています。

- 『X.25 構成コマンド』
- 476ページの『インターフェース監視プロセスへのアクセス』
- 477ページの『X.25 監視コマンド』
- 480ページの『X.25 ネットワーク・インターフェースと GWCON インターフェース・コマンド』

X.25 構成コマンド

この節では、すべての X.25 構成コマンドの要約を示し、個々のコマンドについて説明します。

X.25 構成コマンドでは、X.25 パケットを転送するルーター・インターフェースのネットワーク・パラメーターを指定することができます。構成コマンドで指定した情報は、ルーターをリスタートすると有効になります。

X.25 構成コマンドは X.25 config> プロンプトで入力します。表57 は、コマンドをリストしています。

表 57. X.25 構成コマンドの要約

コマンド	機能
? (Help)	このコマンド・レベルで使用可能なコマンドをすべて表示するか、特定のコマンドに関するオプション (ただし、選択可能な場合) をリストします。12ページの『ヘルプを得る』を参照してください。
Set	ローカルおよび DDN X.25 ノード・アドレス、パケット・レベルのウィンドウ・サイズを設定し、ナショナル・パーソナリティーの識別、MTU、およびコールの最大数を識別します。PVC および SVC チャネル範囲、交換回線が切断される前にアイドル状態でいられる秒数を定義し、1 つのルーターが DCE として動作する必要があるかどうか (X.25 ネットワークが介在せずに 2 つのルーターが直接接続されている場合) あるいは X.25 ネットワークに接続されている DTE で一般的な方式で動作するかを指定します。また、速度、符号化、クロック、スループット・クラス、およびケーブル・タイプも設定します。
Enable/Disable	着信コール禁止フィーチャー、発信コール禁止フィーチャー、動的 DDN アドレス変換、および lower-dtr フィーチャーを使用可能/使用不可にします。
National Enable or National Disable National Set	ナショナル・パーソナリティー構成で定義されたパラメーターを使用可能/使用不可にします。 ナショナル・パーソナリティー構成で定義されたパラメーターを設定します。
National Restore	ナショナル・パーソナリティー構成をそのデフォルト値に復元します。

X.25 ネットワーク・インターフェースの構成

表 57. X.25 構成コマンドの要約 (続き)

コマンド	機能
Add/Change/Delete	アドレス変換、プロトコル・カプセル化、または PVC 定義を追加/変更/削除します。
List	定義済みのアドレス変換、ナショナル・パーソナリティー・パラメーター、プロトコル・カプセル化、または PVC 定義をリストします。
Exit	直前のコマンド・レベルに戻ります。 13ページの『下位レベル操作環境を終了する』を参照してください。

Set

set コマンドは、ローカル X.25 ノード・アドレス、コールの最大数、フレームおよびパケット・レベルのウィンドウ・サイズ、PVC および SVC チャネル数の最低値と最高値、および交換回線のアイドル時間を構成する場合に使用します。

構文 :

```
set address . . .  
cable  
calls-out . . .  
clocking . . .  
default-window-size . . .  
encoding  
equipment-type . . .  
htf addr . . .  
inter-frame-delay . . .  
mtu  
national-personality . . .  
pvc . . .  
speed . . .  
svc  
throughput-class . . .  
vc-idle . . .
```

address *x.25-node-addr*

ローカル X.25 インターフェース・アドレス (*x.25-node-addr*) を設定します。
ローカル X.25 アドレスを削除する場合は、ローカル X.25 ノード・アドレスを 0 に (00 ではなく) 設定します。

例 : **set address 8982800**

cable *type*

ケーブル・タイプを次のように設定します。

- RS-232 DTE
- RS-232 DCE

X.25 ネットワーク・インターフェースの構成

- V35 DTE
- V35 DCE
- V36 DTE
- V36 DCE
- X21 DTE
- X21 DCE

ルーターをあるタイプの DCE 装置 (たとえば、モデムまたは DSU/CSU) に接続する場合は、DTE ケーブルを使用します。

ルーターが DCE として動作し、直接接続のためのクロックを提供する場合は、DCE ケーブルを使用します。

注:

1. 8 ポート EIA 232 アダプター上にインターフェースを構成している場合は、構成できるケーブルのタイプは RS-232 DTE と RS-232 DCE だけです。
2. 6 ポート V.35/V.36 アダプター上にインターフェースを構成している場合は、構成できるケーブルのタイプは V.35 DTE、V.35 DCE、V.36 DTE、および V.36 DCE だけです。
3. 8 ポート X.21 アダプター上にインターフェースを構成している場合は、構成できるケーブルのタイプは X.21 DTE と X.21 DCE だけです。

calls-out *value*

ローカルで開始し、同時にアクティブにできる SVC の最大数を設定します。

有効値: 1 ~ 239

デフォルト値: 4

clocking *external or internal*

モデムまたは DSU に接続する場合は、クロックを外部として構成します。別の DTE 装置に直接接続する場合は、DCE ケーブルを使用し、クロックを内部として設定し、回線速度を構成します。内部クロックの場合、451 ページの表 58 に示すように、回線速度はインターフェースに依存します。

デフォルト値: 外部

default-window-size *value*

コール・リクエスト・パケット内にウィンドウ・サイズ・ファシリティーが存在しない場合、ルーターによって割り当てられるパケット・レベルのウィンドウ・サイズを設定します。範囲は、ナショナル・パーソナリティーのパケット・モジュール (PACKET-EXT-SEQ-MODE) によって決まります。

デフォルト値: 2

例 : **set default-window-size 3**

encoding *NRZ* または *NRZI*

インターフェースの HDLC 伝送符号化法を設定します。符号化法は、NRZ (非ゼロ復帰記録) または NRZI (非ゼロ復帰反転) に設定できます。NRZ は、広く一般的に使用されている符号化法であり、一方の NRZI は一部の IBM 構成で使用されます。

デフォルト値: NRZ

X.25 ネットワーク・インターフェースの構成

equipment-type *DCE* または *DTE*

フレームおよびパケット・レベルが DCE として動作するのか、DTE として動作するのかを指定します。このコマンドは、使用しているケーブル・タイプには無関係です。

デフォルト値：DTE (X.31 の場合は DTE であることが必要)

htf addr *x.25-node-addr*

DDN が使用されている場合、ローカル DTE アドレスを設定します。これは、CCITT が使用されているときにローカル DTE アドレスを設定するのに使用される **set address** コマンドとは反対に、IP アドレスを X.121 アドレスに変換します。

inter-frame-delay *value*

このパラメータは、送信フレーム間の最小遅延を定義します。旧型の機器に直接インターフェースしている場合には、このパラメータを設定すると便利です。このパラメータは、フレーム間の時間の量を秒単位で表したものです。

注：8 ポート EIA-232E アダプター、6 ポート V.35/V.36 アダプター、または 8 ポート X.21 アダプター上の X.25 インターフェースの非ゼロ・フレーム間遅延を構成する場合は、**set speed** コマンドを使用して、速度を構成します。

デフォルト値：0

mtu *value*

最大送信単位 (MTU) をバイト数で設定します。これは、パッケージに入れてシリアル・ライン経由で転送するために X.25 インターフェースに送達される最大メッセージ・サイズです。範囲は 576 ~ 16384 です。

デフォルト値：1500

X.25 インターフェースを介してデータを転送するときにパケット再組み立てタイムアウトが発生する場合、エンドポイントにつながるすべての LAN またはシリアル・インターフェースの最小パケット・サイズを調べて、より適切な X.25 MTU を計算する必要があります。X.25 は実際より小さいパケット・サイズを使用する傾向があるので、この計算の際には、実際の X.25 パケット・サイズを直接考慮してはなりません。X.25 は通常、最大 7 パケットを一度に送信して、確認を待ちます。

たとえば、以下のものが含まれているネットワーク・トポロジーを考えてみましょう。

- パケット・サイズが 4000 のトークンリング LAN
- パケット・サイズが 128、ウィンドウ・サイズが 7、およびビット・レートが 9600 bps の X.25 シリアル・ライン
- パケット・サイズが 1500 のイーサネット LAN

この場合、X.25 MTU は 1500 に設定する必要があると考えられます。これは、約 12 パケットが X.25 インターフェースを介して送信されることを意味しています (MTU / X.25 パケット・サイズ = 送信される X.25 パケット数)。

X.25 ネットワーク・インターフェースの構成

MTU が 4096 のときは、X.25 インターフェースを介して 32 パケットを送信する必要があります (4000 /128 = 31.25)。この場合、X.25 モデムの速度が 9600 bps の場合は、パケット再組み立てタイムアウトが発生することが予想されます。X.25 モデムの速度を 56 Kbps にすれば、おそらくこの問題を解決できると思われます。

注:

1. MTU パラメーターは、装置のメモリー所要量とメモリー使用率に大きな影響を与えます。メモリーが 8M より小さい装置では、8192 以下の MTU 値を使用してください。
2. 装置が稼働中に使用可能なメモリーの量によって、確立できながらもなお最適性能を維持できる SVC の数が制限されます。SVC の最大数に関する推奨事項については、ワールド・ワイド・ウェブ (WWW) の製品ホーム・ページを参照してください。

national-personality GTE-Telenet または DDN

GTE-Telenet または DDN ナショナル・パーソナリティーの 28 のデフォルト・パラメーターを設定します。

デフォルト値: GTE-Telenet

pvc low/high value

最低および最高のパーマネント・バーチャル・サーキット・チャンネル番号を定義します。ゼロは、PVC がないことを示します。デフォルトでは「PVC なし」になります。

pvc low

0

pvc high

0

範囲は 1 ~ 4095 です。これらの値は、指定の VC 範囲の限界値を設定します。最大 2500 の PVC があります。

例 : `set pvc low 40`

注: 値は、SVC に設定した値にオーバーラップしてはなりません。

speed speed-setting

内部クロックの場合、このコマンドは送信および受信クロック回線の速度を指定します。

Valid values: 表58 を使用して、各種のアダプターに設定できるクロック速度を調べてください。

表 58. 2216 インターフェースで内部クロックが使用される場合の回線速度

アダプター・タイプ	速度範囲
8 ポート EIA 232	9600 ~ 64 000 bps
6 ポート V.35/V.36	9600 ~ 460 800 bps、1 544 000 bps、または 2 048 000 bps
8 ポート X.21	9600 ~ 460 800 bps、1 544 000 bps、または 2 048 000 bps

外部クロックの場合、このコマンドはハードウェアには影響を与えませんが、一部のプロトコル (IPX など) では、ルーティング・コスト・パラメータ

X.25 ネットワーク・インターフェースの構成

ーを決めるのに使用される速度を設定します。その場合、速度は実際の回線速度に一致するように設定してください。外部クロックを使用する場合に構成可能な最大回線速度は、表59に示すとおりです。

表 59. 2216 インターフェースで外部クロックが使用される場合の回線速度

アダプター・タイプ	速度範囲
8 ポート EIA 232	2400 ~ 64 000 bps
6 ポート V.35/V.36	2400 ~ 2 048 000 bps
8 ポート X.21	2400 ~ 2 048 000 bps

デフォルト値: 9600

注: X.25 ソフトウェアは、最高 256 000 bps までの速度しかサポートされません。

svc low/high inbound または **two-way** または **outbound value**

最低および最高のスイッチド・バーチャル・サーキット・チャンネル番号を定義します。low=high=0 のときは、このカテゴリーの VC は定義されていません。

例 : **set SVC low-two-way 1**

Inbound

インバウンド SVC に割り当てられる論理チャンネル番号の範囲を指定します。デフォルトでは、インバウンド専用の SVC はないことになります。

有効値: 0 ~ 4095

デフォルト値: 0

Two-way

両方向 SVC に割り当てられる論理チャンネル番号の範囲を指定します。デフォルトでは、64 の両方向 SVC があります。

有効値: 0 ~ 4095

デフォルト値:

svc low

1

svc high

64

Outbound

アウトバウンド SVC に割り当てられる論理チャンネル番号の範囲を指定します。デフォルトでは、アウトバウンド専用の SVC はないことになります。

有効値: 0 ~ 4095

デフォルト値: 0

注: 各範囲の値は、他の SVC 範囲とも、PVC 範囲ともオーバーラップしてはなりません。453ページの表60は、可能な VC 構成を示しています。

X.25 ネットワーク・インターフェースの構成

表 60. VC 定義の例

	低	高
PVC	1	40
インバウンド	0	0
両方向	41	59
アウトバウンド	60	500

throughput-class inbound または outbound *bit-rate*

スループット・ネゴシエーションが使用可能な場合、コール・リクエストを
するときに要求されるスループット・クラスを定義します。

デフォルト値: 2400 bps

この設定値は、着信コール・リクエストの処理時には無視されます。

vc-idle *value*

ルーターによって切断される前に、交換回線がアイドル状態でいられる秒数
を定義します。ゼロは、ルーターがアイドル回線を切断しないことを示しま
す。

有効値 : 1 ~ 255

デフォルト値: 30 秒

Enable

enable コマンドは、DDN アドレス変換、インターフェース・リセット、または着信
コール禁止、発信コール禁止、および lower-dtr のフィーチャーを使用可能にする場
合に使用します。

構文 :

enable ddn--address-translations

注: ddn-address-translations は、使用可能にすることが
できなくなりました。この機能は、選択された
ナショナル・パーソナリティーが DDN の場合
は、デフォルトで使用可能になり、その他の場
合は、デフォルトで使用不可になります。

incoming-calls-barred

lower-dtr

outgoing-calls-barred

incoming-calls-barred

ルーターは着信コールを受け入れないことを指定します。このパラメーター
のデフォルト設定値は、使用不可またはオフで、これは着信コールを受け入
れます。

lower-dtr

このパラメーターは、使用不可にされている専用シリアル・ライン・インタ
ーフェースにおけるデータ端末レディー (DTR) 信号の処理方法を決めます。
このパラメーターが "使用不可" (デフォルト値) に設定されている場合、イン
ターフェースが使用不可のときは、DTR 信号は上がります。

X.25 ネットワーク・インターフェースの構成

`lower-dtr` が "使用可能" に設定されている場合、インターフェースが使用不可のときは、DTR は下がります。この動作が適している状況は、インターフェースが WAN 再ルートの代替リンクとして構成されており、インターフェースが、DTR 信号の状態に基づいてダイヤル接続を維持するダイヤルアウト・モデムに接続されているような場合です。

`lower-dtr` が使用可能で、インターフェースが使用不可のとき、DTR 信号は下がり、モデムはダイヤル接続をダウンに維持します。インターフェースが使用可能になると (WAN 再ルートのバックアップ・シナリオにより)、DTR は上がり、モデムは保管しているバックアップ・サイトへの番号をダイヤルします。1 次インターフェースが復元すると、代替インターフェースは使用不可にされ、DTR は下がって、モデムはダイヤル接続を切断します。

以下のケーブル・タイプがサポートされます。

RS-232

V.35

V.36

デフォルト設定値は使用不可です。

outgoing-calls-barred

ルーターは発信コールを許可しないことを指定します。このパラメーターのデフォルト設定値は、使用不可またはオフで、これは発信コールを許可します。

Disable

disable コマンドは、DDN アドレス変換、ネットワーク認証の一環としてのインターフェース・リセット、あるいは着信コール禁止または発信コール禁止のフィーチャーを使用不可にする場合に使用します。

注: DDN をナショナル・パーソナリティとして設定した場合、DDN アドレス変換が自動的に使用可能になり、このパラメーターは無効になります。

構文 :

disable

ddn-address-translations

注: `ddn-address-translations` は、使用不可にすることができなくなりました。この機能は、選択されたナショナル・パーソナリティが DDN の場合は、デフォルトで使用可能になり、その他の場合は、デフォルトで使用不可になります。

incoming-calls-barred

lower-dtr

outgoing-calls-barred

National Enable

national enable コマンドは、ナショナル・パーソナリティ構成で定義された機能を使用可能にする場合に使用します。

X.25 ネットワーク・インターフェースの構成

構文 :

national enable acept-reverse-charges
bi-cug
bi-cug-outgoing-access
cug
cug-deletion
cug-incoming-access
cug-insertion
cug-outgoing-access
cug-zero-override
flow-control-negotiation
frame-ext-seq-mode (X.31 の場合は必須)
packet-ext-seq-mode
request-reverse-charges
suppress-calling-addresses
throughput-class-negotiation
truncate-called-addresses

accept-reverse-charges

コール設定時の着信課金を受け入れます。このオプションは、DDN では利用不能です。

DDN デフォルト値

オフ

GTE デフォルト値

オン

bi-cug この装置上で相互閉域接続ユーザー・グループ・ファシリティを使用可能にします。デフォルトでは、このファシリティは disabled (使用不可) です。

注: このパラメーターが enabled (使用可能) でない限り、相互 CUG を追加することはできません。

bi-cug-outgoing-access

この装置上で発信アクセス付き相互 CUG ファシリティを使用可能にします。デフォルトでは、このファシリティは disabled (使用不可) です。

cug この装置上で閉域ユーザー・グループ・ファシリティを使用可能にします。デフォルトでは、このファシリティは disabled (使用不可) です。

注: このパラメーターが enabled (使用可能) でない限り、CUG を追加することはできません。

cug-deletion

XTP から受信したコール・パケットを X.25 を通して送信する前に、そのコ

X.25 ネットワーク・インターフェースの構成

ール・パケットから CUG ファシリティーを削除します。デフォルトでは、この機能は disabled (使用不可) です。

cug-incoming-access

この装置上で着信アクセス付き相互 CUG を使用可能にします。デフォルトでは、このファシリティーは disabled (使用不可) です。

cug-insertion

XTP が X.25 インターフェースから受信したコール・リクエストを IP を通して送信する前に、そのコール・リクエストに該当する (アドレス固有、プロトコル固有、またはインターフェース固有) 優先 cug 番号を挿入します。コール・パケットに CUG ファシリティーがすでにある場合は、それが置き換えられることはありません。デフォルトでは、この機能は disabled (使用不可) です。

cug-outgoing-access

この装置上で発信アクセス付き CUG ファシリティーを使用可能にします。デフォルトでは、このファシリティーは disabled (使用不可) です。

cug-zero-override

CUG 番号が 0 のコール・リクエスト・パケット内に CUG ファシリティーがあっても、閉域ユーザー・グループ・ファシリティーにこれをいずれも無視させます。デフォルトでは、この機能は disabled (使用不可) です。

flow-control-negotiation

SVC のコール設定時にパケットおよびウィンドウ・サイズのネゴシエーションを使用可能にします。

DDN デフォルト値

オン

GTE デフォルト値

オン

frame-ext-seq-mode

フレーム・レイヤー・シーケンス番号をモジュロ 128 (つまり、0 ~ 127) に設定します。

DDN デフォルト値

オフ (X.31 の場合はオンであることが必要)

GTE デフォルト値

オフ

packet-ext-seq-mode

パケット・レイヤーでの拡張シーケンス番号 (0 ~ 127) の使用を使用可能にします。

DDN デフォルト値

オフ

GTE デフォルト値

オフ

request-reverse-charges

すべての発信コールに対して着信課金を要求します。

DDN デフォルト値
オフ

GTE デフォルト値
オン

suppress-calling-address

コール・パケット内の発信元アドレスを抑制します。

DDN デフォルト値
オフ

GTE デフォルト値
オフ

throughput-class-negotiation

スループット・クラスの登録を使用可能にします。

DDN デフォルト値
オフ

GTE デフォルト値
オン

truncate-called-addresses

DTE へのコールの転送時のコールされる DTE アドレスの切り捨てを使用可能にします。このオプションは XTP 回線にのみ適用されます。

DDN デフォルト値
オフ

GTE デフォルト値
オフ

National Disable

national disable コマンドは、ナショナル・パーソナリティ構成で定義された機能を使用不可にする場合に使用します。

構文 :

national disable acept-reverse-charges
 bi-cug
 bi-cug-outgoing-access
 cug
 cug-deletion
 cug-incoming-access
 cug-insertion
 cug-outgoing-access
 cug-zero-override
 flow-control-negotiation
 frame-ext-seq-mode

X.25 ネットワーク・インターフェースの構成

packet-ext-seq-mode
request-reverse-charges
suppress-calling-addresses
throughput-class-negotiation
truncate-called-addresses

National Set

national set コマンドは、ナショナル・パーソナリティー構成のデフォルト値の 1 つまたはすべてを設定する場合に使用します。

構文 :

national set call-req
clear-req . . .
disconnect-procedure . . .
dp-timer
frame-window-size
n2-timeouts
packet-size . . .
reset . . .
restart . . .
min-recall
min-connect
collision-timer
standard-version
t1-timer
t2-timer
truncate-called-addr-size

call-req

コール・リクエストをあきらめて切断する前に許される 10 秒間隔の回数を指定します。ゼロは、無期限に待つことを示します。list コマンドの出力では、これは t21 タイマーとして表示されます。

DDN デフォルト値

20 デカ秒

GTE デフォルト値

20 デカ秒

clear-req *retries* または *timer*

復旧要求の再送の回数を指定します。

X.25 ネットワーク・インターフェースの構成

Retries

アクションを取る前に許される復旧要求の伝送の回数。 `list` コマンドの出力では、これは `r23` 再試行カウントとして表示されます。

DDN デフォルト値

再試行=1

GTE デフォルト値

再試行=1

Timer 復旧要求パケットを再送する前に待つ 10 秒間隔の回数。 タイマー値のゼロは、無期限に待つことを示します。 `list` コマンドの出力では、これは `t23` タイマーとして表示されます。

DDN デフォルト値

18 デカ秒

GTE デフォルト値

18 デカ秒

disconnect-procedure *passive* または *active*

接続時に使用する接続手順のタイプを指定します。

DDN デフォルト値

受動

GTE デフォルト値

受動

Passive

SABM フレームが接続時にルーターによって開始されないよう指定します。

Active SABM フレームが接続時にルーターによって開始されるよう指定します。

dp-timer

フレーム・レベルが切断状態にとどまるミリ秒数を指定します。ゼロは、即時に切断フェーズからリンク設定状態に変換することを示します。

DDN デフォルト値

500 ミリ秒

GTE デフォルト値

500 ミリ秒

frame-window-size

確認の前に未処理状態に置くことができるフレーム数を指定します。

DDN デフォルト値

7

GTE デフォルト値

7

n2-timeouts

インターフェースがリサイクルされる前に再送タイマー (T1) を満了させることができる時間数を指定します。

X.25 ネットワーク・インターフェースの構成

DDN デフォルト値

20

GTE デフォルト値

20

packet-size *default* または *maximum* または *window*

パケットのサイズを指定します。

default

パケットのデータ部分のバイト数。可能なオプションは、128、256、512、1024、2048、および 4096 です。この値は、パケット・サイズ・ネゴシエーションが行われない場合に使用されます。*Default* は *maximum* より大きい値であってはなりません。

DDN デフォルト値

128

GTE デフォルト値

128

maximum

パケットのデータ部分の最大バイト数。可能なオプションは、128、256、512、1024、2048、および 4096 です。

DDN デフォルト値

256

GTE デフォルト値

256

window

確認が必要になる前に許される未処理 I フレームの数。範囲は、ナショナル・パーソナリティーのパケット・モジュラスによって決まります。

関連の構成パラメーターは、次のとおりです。

- Protocol max default window
- Set default window size

reset *retries* または *timer*

リセット要求の再送回数を指定します。

例 : **national set reset retries 2**

retries

コールが切断される前に許されるリセット要求の伝送回数。範囲は 0 ~ 255 です。list コマンドの出力では、これは r22 再試行カウントとして表示されます。

DDN デフォルト値

1

GTE デフォルト値

1

timer リセット要求パケットを再送する前に待つ 10 秒間隔の回数。 範囲

X.25 ネットワーク・インターフェースの構成

は 0 ～ 255 です。タイマー値のゼロは、無期限に待つことを示します。list コマンドの出力では、これは t22 タイマーとして表示されます。

DDN デフォルト値

18 デカ秒

GTE デフォルト値

18 デカ秒

restart *retries* または *timer*

リスタート要求の伝送回数を指定します。

retries

インターフェースがリサイクルされる前に許されるリスタート要求の伝送回数。範囲は 0 ～ 255 です。list コマンドの出力では、これは r20 再試行カウントとして表示されます。

DDN デフォルト値

1

GTE デフォルト値

1

timer リスタート要求パケットを再送する前に待つ 10 秒間隔の回数。範囲は 0 ～ 255 です。タイマー値のゼロは、無期限に待つことを示します。list コマンドの出力では、これは t20 タイマーとして表示されます。

DDN デフォルト値

18 デカ秒

GTE デフォルト値

18 デカ秒

min-recall

SVC をオープンするためにコールを再初期設定する前に待つ最小秒数を指定します。範囲は 0 ～ 255 秒です。

DDN デフォルト値

10 秒

GTE デフォルト値

10 秒

min-connect

すべての誤り状態を禁止する接続が確立された後、SVC が確立状態に保たれる最小時間を秒数で指定します。範囲は 0 ～ 255 秒です。

DDN デフォルト値

90 秒

GTE デフォルト値

90 秒

X.25 ネットワーク・インターフェースの構成

collision-timer

元の試行結果がコール衝突であった場合、SVC をオープンするためにコールを再初期設定する前に使用される時間遅延を秒数で指定します。範囲は 0 ～ 255 秒です。

DDN デフォルト値

10 秒

GTE デフォルト値

10 秒

standard-version

オプションは、none、v1980、v1984、および v1988 です。

DDN デフォルト値

1984

GTE デフォルト値

1984

t1-timer

フレーム再送時間を秒数で指定します。範囲は 1 ～ 255 です。

DDN デフォルト値

4 秒

GTE デフォルト値

4 秒

t2-timer

I フレームを確認する前の遅延時間を秒数で指定します。これは最適化パラメーターです。タイマーを 0 に設定すると、これは使用不可になります。範囲は 0 ～ 255 です。

DDN デフォルト値

0

GTE デフォルト値

0

truncate-called-addr-size

コールされるアドレスの末端から切り捨てられる文字数を指定します。このオプションは XTP 回線にのみ関係します。範囲は 0 ～ 10 です。

DDN デフォルト値

2

GTE デフォルト値

2

National Restore

national restore コマンドは、**national set**、**national enable**、または **national disable** コマンドでナショナル・パーソナリティー構成に設定したデフォルト値の 1 つまたはすべてを復元する場合に使用します。

構文 :

national restore

X.25 ネットワーク・インターフェースの構成

all
accept-reverse-charges
bi-cug
bi-cug-outgoing-access
call-req
clear-req . . .
cug
cug-deletion
cug-incoming-access
cug-insertion
cug-outgoing-access
cug-zero-override
disconnect-procedure . . .
dp-timer
flow-control-negotiation
frame-ext-seq-mode
frame-window-size
min-collision-timer
min-connect-timer
min-recall-timer
network-type . . .
n2-timeouts
packet-size . . .
packet-ext-seq-mode
request-reverse-charges
reset . . .
restart . . .
standard-version
suppress-calling-addresses
throughput-class-negotiation
t1-timer
t2-timer
truncate-called-addresses
truncate-called-addr-size

X.25 ネットワーク・インターフェースの構成

Add

add コマンドは、X.121 アドレス、DDN X.25 アドレス、プロトコル構成、または PVC 定義を追加するのに使用します。

構文：

```
add                address
                   bi-cugs
                   cugs
                   htf-address
                   protocol
                   pvc
```

address

ルーターの構成でサポートされているプロトコルの X.121 アドレス変換を追加します。表示されるプロンプトは、追加するプロトコル・アドレスによって異なります。(以下の例を参照してください。) 入力するプロトコル・アドレスおよび X.121 アドレスは、そのプロトコルと、ルーター X.25 インターフェースに接続するリモート DTE の X.121 DTE アドレスを表します。プロトコルが APPN か DLSw でない限り、プロトコル・アドレスと X.121 アドレスのマッピングは固有であることが必要です。1つのプロトコル・アドレスが複数の X.121 アドレスにマップすることはできません。また、特定の1つの X.121 アドレスが複数のプロトコル・アドレスにマップすることもできません。ローカル X.25 アドレスを設定する場合は、**set address** コマンドを使用します。ローカル X.25 アドレスを設定した後は、X.25 リモート・アドレスを使用してダイヤルアウトしたり、オプションの着信リモート・アドレスをコール ID として使用することができます。コールされたリモート・アドレスだけが入力された場合は、このアドレスは発信コールおよび着信コールの検証に使用されます。

例: **add address**

IP の例：

```
Protocol [IP]? IP
IP Address [0.0.0.0]? 128.185.1.2
Enc Priority 1 [ ]? CC
Enc Priority 2 [ ]? SNAP
Enc Priority 3 [ ]? Nu11
X.25 Address [ ]? 1234590
Remote address [ ]?
Pref CUG [ ]? 11
CUG (2) [ ]? 12
CUG (3) [ ]? 13
CUG (4) [ ]? 14
CUG (5) [ ]? 15
Pref BI-CUG [ ]? 21
BI-CUG (2) [ ]? 22
BI-CUG (3) [ ]?
```

IPX の例：

```
Protocol [IP]? IPX
CUD Field Usage (Standard or Proprietary)
IPX Host Number (in hex) [ ]?
Enc Priority 1 [ ]? SNAP
Enc Priority 2 [ ]? Nu11
X.25 Address [ ]?
```

X.25 ネットワーク・インターフェースの構成

Pref CUG [] ?
Pref Bi-CUG[]? 1
BI-CUG (2)[]? 3
BI-CUG (3)[]

Protocol

追加するアドレス・マッピングのプロトコル・タイプを指定します。有効値は、APPN、DECnet、DLSw、IP、IPX、および VINES です。デフォルト値は IP です。

Enc Priority

CUD に書き込まれるカプセル化タイプ (RFC 1356 で定義) を決めます。IP の場合は、CC、SNAP、または Null が有効な値として選択できます。IPX の場合は、SNAP または Null が有効な値として選択できます。

IP Address

あて先の IP アドレスを指定します。

CUD Field Usage

このフィールドは、IPX の X.25 アドレス・マッピング専用です。これは、IPX のコール・リクエスト・パケットを受信したときのコール・ユーザー・データ (CUD) フィールドの記入方法を決めます。CUD フィールドは Standard または Proprietary のいずれかです。Standard (標準) は、その使用法が RFC 1356 で使用されているプロトコル多重化であることを示します。Proprietary (専有) は、2216 またはこれと整合性のあるルーターのみが使用できる専有の CUD フィールドであることを示します。デフォルト値は Standard です。

IPX Host Number

あて先の IPX ホスト番号を指定します。

X.25 Address

ルーター X.25 インターフェースに接続するリモート DTE の X.121 DTE アドレスを指定します。アドレスの最大長さは 15 桁です。

pref cug

この DTE の優先閉域ユーザー・グループ番号を指定します。DTE がこの CUG を使用するの、発信コールを行うときです。

有効値 : 0 ~ 9999

デフォルト値 : なし

注: **national enable** コマンドを使用して閉域ユーザー・グループ・ファシリティを使用可能にしている場合は、この値の入力を指示するプロンプトが出されることはありません。

CUG この DTE の閉域ユーザー・グループ番号を指定します。優先 CUG も含めて、最大 5 つの CUG が定義できます。

有効値 : 0 ~ 9999

デフォルト値 : なし

X.25 ネットワーク・インターフェースの構成

注: national enable コマンドを使用して閉域ユーザー・グループ・ファシリティを使用可能にしている場合は、この値の入力を指示するプロンプトが出されることはありません。

pref bi-cug

この DTE の相互閉域接続ユーザー・グループ番号を指定します。DTE がこの CUG を使用するの、発信コールを行うときです。

有効値 : 0 ~ 9999

デフォルト値 : なし

注: national enable コマンドを使用して相互閉域接続ユーザー・グループ・ファシリティを使用可能にしている場合は、この値の入力を指示するプロンプトが出されることはありません。

bi-cug この DTE の相互閉域接続ユーザー・グループ番号を指定します。最大 5 つの CUG が定義できます。

有効値 : 0 ~ 9999

デフォルト値 : なし

注: national enable コマンドを使用して相互閉域接続ユーザー・グループ・ファシリティを使用可能にしている場合は、この値の入力を指示するプロンプトが出されることはありません。

cugs この X.25 インターフェースの閉域ユーザー・グループ番号を指定します。

有効値 : 0 ~ 9999

デフォルト値 : なし

注: national enable コマンドを使用して閉域ユーザー・グループ・ファシリティを使用可能にしている場合は、この値の入力を指示するプロンプトが出されることはありません。

例 :

```
add cugs
Pref CUG [ ]? 23
CUG (2) [ ]? 24
CUG (3) [ ]? 25
CUG (4) [ ]? 26
CUG (5) [ ]? 27
```

pref cug

この DTE の優先閉域ユーザー・グループ番号を指定します。この DTE がこの CUG を使用するの、発信コールを行うときです。

有効値 : 0 ~ 9999

デフォルト値 : なし

注: national enable コマンドを使用して閉域ユーザー・グループ・ファシリティを使用可能にしている場合は、この値の入力を指示するプロンプトが出されることはありません。

X.25 ネットワーク・インターフェースの構成

cug この DTE の閉域ユーザー・グループ番号を指定します。最大 5 つの CUG が定義できます。

有効値 : 0 ~ 9999

デフォルト値 : なし

注: **national enable** コマンドを使用して閉域ユーザー・グループ・ファシリティを使用可能にしている場合、この値の入力を指示するプロンプトが出されることはありません。

bi-cugs

この DTE の閉域ユーザー・グループ番号を指定します。

有効値 : 0 ~ 9999

デフォルト値 : なし

注: **national enable** コマンドを使用して閉域ユーザー・グループ・ファシリティを使用可能にしている場合、この値の入力を指示するプロンプトが出されることはありません。

例 :

```
add bi-cugs
Pref BI-CUG []? 23
BI-CUG (2) []? 24
BI-CUG (3) []? 25
BI-CUG (4) []? 26
BI-CUG (5) []? 27
```

pref bi-cug

この DTE の優先閉域ユーザー・グループ番号を指定します。この DTE がこの BI-CUG を使用するの、発信コールを行うときです。

有効値 : 0 ~ 9999

デフォルト値 : なし

注: **national enable** コマンドを使用して相互閉域接続ユーザー・グループ・ファシリティを使用可能にしている場合、この値の入力を指示するプロンプトが出されることはありません。

bi-cug この DTE の閉域ユーザー・グループ番号を指定します。最大 5 つの BI-CUG が定義できます。

有効値 : 0 ~ 9999

デフォルト値 : なし

注: **national enable** コマンドを使用して相互閉域接続ユーザー・グループ・ファシリティを使用可能にしている場合、この値の入力を指示するプロンプトが出されることはありません。

htf-address

Defense Data Network (DDN) X.25 アドレス変換を追加します。

例 :

X.25 ネットワーク・インターフェースの構成

```
add htf-address
Protocol [IP]
Convert HTF address
```

Protocol

X.25 インターフェースを介して実行するプロトコルを指定します。
DDN は IP のみをサポートします。

Convert HTF address

プロトコル・アドレスをホスト・テーブル・フォーマット (HTF) 形式のあて先 X.21 アドレスに変換します。 Enable/Disable コマンドの節の ddn-address-translations も参照してください。

protocol

プロトコル・カプセル化を使用可能にし、関連のパラメーターを定義します。

例：

```
add protocol
Protocol [IP]?
Window Size [2]?
Default Packet Size [128]?
Maximum Packet Size [256]?
Circuit Idle Time [30]?
Max VCs [4]?
Pref CUG []? 1
CUG (2) []? 2
CUG (3) []? 3
CUG (4) []? 4
CUG (5) []? 5
Pref BI-CUG []? 11
BI-CUG (2) []? 12
BI-CUG (3) []? 13
BI-CUG (4) []? 14
BI-CUG (5) []? 15
```

QLLC の例:

```
X.25 Config> add prot
Protocol [IP]? d1s
Idle timer [30]?
QLLC response timer (in decaseconds) [2]?
QLLC response count [3]?
Accept Reverse Charges [N]?
Request Reverse Charges [N]?
Station Type (1) PRI (2) SEC (3) (PEER) [3]?
Max Packet Size [128]?
Packet window size [7]?
Max Message Size [1500]?
Call User Data (in hex, 0 for null) []?
Pref CUG []? 20
CUG (2) []? 21
CUG (3) []?
Pref BI-CUG []?
```

Protocol

カプセル化パラメーターを追加したいプロトコル (APPN、XTP、IP、DECnet、IPX、DLSw、または Banyan VINES) を指定します。デフォルト値は IP です。

Window Size

パケットの確認が必要になる前に未処理状態に置けるパケット数を表す、最大ネゴシエーション可能パケット・ウィンドウ・サイズを指定します。デフォルト値は 2 です。ウィンドウ・サイズはコールされた DTE によって 1 まで交渉できます。

関連の構成パラメーターは、次のとおりです。

X.25 ネットワーク・インターフェースの構成

- Set Default Window

Default Packet Size

SVC のデフォルトの要求パケット・サイズを指定します。この値は、最低ネゴシエーション可能パケット・サイズとして使用され、**national set packet-size** コマンドを用いて指定された最大パケット・サイズ以下であることが必要です。最小 *default packet size* は 4096 バイトです。このパラメーターのデフォルト値は 128 バイトです。

関連の構成パラメーターは、次のとおりです。

- National Set Packet Size Default
- National Set Packet Size Maximum

Maximum Packet Size

SVC の最大ネゴシエーション可能パケット・サイズを指定します。この値は、**national set packet-size** コマンドを用いて指定された最大パケット・サイズ以下であることが必要です。このパラメーターのデフォルト値は 256 バイトです。このパラメーターに構成できる最大値は 4096 バイトです。この値は、この X.25 インターフェースの最大フレーム・サイズを計算するのに使用されます。

関連の構成パラメーターは、次のとおりです。

- National Set Packet Size Default
- National Set Packet Size Maximum

Circuit Idle Time

ルーターによって切断される前に、SVC がアイドル状態でいられる秒数を指定します。範囲は 0 ~ 65365 です。デフォルト値は 30 秒です。0 (ゼロ) は、その回線はルーターによって切断されることがないことを示します。

Maximum VCs

あるプロトコルの同じ DTE アドレスに対してオープンできる回線の最大数を指定します。このパラメーターの使用法については、RFC 1356 を参照してください。有効範囲は 1 ~ 10 です。デフォルト値は 4 です。

pref CUG, CUG, pref bi-cug, bi-cug

add address コマンドを参照してください。

以下は QLLC 固有のパラメーターです。

QLLC response timer

再送する前に Q レスポンス・パケットを待つ秒数

QLLC response count

QLLC を再送するする最大回数。この再試行回数が尽きると、回線がルーターによって切断またはリセットされる可能性があることを高位レイヤーに通知します。

Accept Reverse Charges

このプロトコルがこのナショナル・パーソナリティー・パラメータ

X.25 ネットワーク・インターフェースの構成

ーの設定値をオーバーライドすることを許します。これは、そのナショナル・パーソナリティー・パラメーターには影響を与えません。

Request Reverse Charges

このプロトコルがこのナショナル・パーソナリティー・パラメーターの設定値をオーバーライドすることを許します。これは、そのナショナル・パーソナリティー・パラメーターには影響を与えません。

Station Type

このプロトコルのデフォルトのステーション・タイプを指定します。

Pri 1 次ステーション

Sec 2 次ステーション

Peer ピア・ステーション

Max message size

このプロトコルの最大メッセージ・サイズ。インターフェースの最大 MTU サイズ以下の値を指定します。

Call User Data

このプロトコルのコール・パケットで使用されるデフォルトの CUD フィールドを指定します。1 ~ 16 文字を指定します。文字を指定しない場合は、デフォルトの 0xC3 が使用されます。

pvc PVC、ウィンドウ・サイズ、およびパケット・サイズの定義を追加します。

例 : add pvc

IP の例 :

```
Protocol [IP]?  
IP  
Packet Channel Range Start [1]?  
Destination X.25 Address [ ]?  
Packet Channel Range End [1]?  
Window Size [2]?  
Packet Size [128]?
```

Protocol

カプセル化を変更したいプロトコル (APPN、XTP、DECnet、Banyan Vines、DLSw、IP、または IPX) を指定します。デフォルト値は IP です。

Packet Channel Range Start

PVC のこの範囲の開始サーキット番号を指定します。

Packet Channel Range End

PVC のこの範囲の最終サーキット番号を指定します。Packet Channel Range Start の値がデフォルトです。

Destination X.25 Address

PVC のあて先の X.25 アドレスを指定します。

Remote Address

受信したコールでのコーラー ID としてリモート・アドレスを指定します。

X.25 ネットワーク・インターフェースの構成

Window Size

パケットの確認が必要になる前に未処理状態に置くパケット数を指定します。デフォルト値は 2 です。

関連の構成パラメーターは、次のとおりです。

- Set Default Window

Packet Size

PVC の最大ネゴシエーション可能パケット・サイズを指定します。この値は、**national set packet-size** コマンドを用いて指定された最大パケット・サイズ以下であることが必要です。このパラメーターのデフォルト値は 128 バイトです。このパラメーターに構成できる最大値は 4096 バイトです。X.31 の場合の最大値は 256 バイトです。この値は、この X.25 インターフェースの最大フレーム・サイズを計算するのに使用されます。

関連の構成パラメーターは、次のとおりです。

- Nat Set Packet Size Default
- Nat Set Packet Size Maximum

Change

change コマンドは、X.121 アドレス、DDN X.25 アドレス、プロトコル構成、または PVC 定義を変更する場合に使用します。

注: X.121 アドレスに関連付けられている IP アドレスを変更する場合は、アドレス相関が入っているレコードを削除した後で、アドレス・マッピングを再定義する必要があります。

構文 :

```
change                address
                        htf-address
                        protocol
                        pvc
```

address

X.121 アドレス変換を変更します。表示されるプロンプトは、変更するプロトコル・アドレスによって異なります。

例 : **change address**

IP の例 :

```
Protocol [IP] IP
IP Address [0.0.0.0]?
Enc Priority []?
X.25 Address [000000124040000]?
```

IPX の例 :

```
Protocol [IP] IPX
CUD Field Usage (Standard or Proprietary) [Standard]?
IPX Host number (in hex) []?
Enc Priority []?
X.25 Address [000000124040000]?
```

X.25 ネットワーク・インターフェースの構成

htf address

Defense Data Network (DDN) X.25 アドレス変換を変更します。

例 :

```
change htf-address
Protocol [IP]
Change HTF address [0.0.0.0]?
New HTF address [10.4.0.124]?
```

protocol

プロトコル構成定義を変更します。

例 :

```
change protocol
Protocol [IP]
Window Size [2]
Default Packet Size [128]
Maximum Packet Size [256]
Circuit Idle Time [30]
Maximum VCs [6]
```

QLLC の例:

```
X.25 Config> change prot
Protocol [IP]? d1s
Idle Timer [30]?
QLLC response timer (in decaseconds) [15]?
QLLC response count [255]?
Accept Reverse Charges [N]?
Request Reverse Charges [N]?
Station Type (1) PRI (2) SEC (3) PEER [3]?
Max Packet Size [256]?
Packet Window size [7]?
Max message size [2048]?
Call User Data (in HEX, 0 for Null) []? C3010000525450
```

pvc PVC、ウィンドウ・サイズ、およびパケット・サイズの定義を変更します。

注: プロトコル、パケット・チャネル、またはあて先 X.25 アドレスを変更する場合は、その定義が入っているレコードをいったん削除した後、変更されたパラメーターを使用して再び追加する必要があります。変更は、Packet Channel Range Start パラメーターによって定義されたサーキットの範囲内のすべての PVC に適用されることになります。

例 :

```
change pvc
Protocol [IP]? IP
Packet Channel Range Start[1]?
Destination X.25 Address [ ]?
Packet Channel Range End [1]
Window Size [2]?
Packet Size [128]?
```

Delete

delete コマンドは、X.121 アドレス、プロトコル構成定義、または PVC 定義を削除する場合に使用します。

構文 :

```
delete address
bi-cugs
```

X.25 ネットワーク・インターフェースの構成

cugs
protocol . . .
pvc

address

X.121 アドレス変換を削除します。

例 : **delete address**

IP の例 :

```
Protocol [IP]?  
IP Address [0.0.0.0]?
```

IPX の例 :

```
Protocol [IP]? IPX  
IPX Host Number (in hex) [2]?
```

bi-cugs

このインターフェースが使用した相互閉域接続ユーザー・グループ番号を削除します。

有効値 :

Y 現行 CUG を削除します。

N 現行 CUG を削除しません。

ALL 残りの CUG をすべて削除します。

Q 残りの CUG の削除を停止します。

例 :

```
delete bi-cugs  
Delete Pref BI-CUG [Y]?  
Delete BI-CUG (2) [Y]? N  
Delete BI-CUG (3) [Y]? q
```

cugs このインターフェースが使用した閉域ユーザー・グループ番号を削除します。このコマンドの働きは、**delete bi-cug** の場合に似ています。

例 :

```
del cug  
  
Delete Pref CUG [Y]?  
Delete CUG (2) [Y]?  
Delete CUG (3) [Y]? q
```

protocol *prot-type*

プロトコル・カプセル化構成定義を削除します。*Prot-type* は、ルーターの構成に現在定義されているプロトコル・カプセル化の名前または番号です。

pvc PVC 定義を削除します。Packet Channel Range Start パラメーターによって定義されたサーキットの範囲内のすべての PVC が削除されます。

例 :

```
delete pvc  
Protocol [IP]?  
Destination X.25 Address [ ]?  
Packet Channel Range Start [ ]?
```

X.25 ネットワーク・インターフェースの構成

List

list コマンドは、指定したパラメーターに関する現行構成を表示させる場合に使用します。

構文：

```
list                address
                    all
                    cugs
                    detailed
                    protocols
                    pvc
                    summary
```

address

すべての X.121 アドレス変換をリストします。

例：

```
list address
IF#      Prot #      Active Enc      Protocol ->  X.25 address
1        0(IP)         CC             10.1.2.3 ->  1238765742
1        7(IPX)         SNAP          10          ->  12389
                CUGS: 11 12 13 14 15      BI-CUGS: 21 22
```

all すべての X.25 アドレス、ナショナル・パーソナリティ・パラメーター、すべての定義済みプロトコルとそれらの値、およびすべての定義済み PVC をリストします。

例：

list all

X.25 Configuration Summary

```
Node Address:      313131
Max Calls Out:    4
Inter-Frame Delay: 0      Encoding: NRZ
Speed:            64000    Clocking: Internal
MTU:              2048     Cable: V.35 DCE
Lower DTR:        Disabled
Default Window:   2        SVC idle: 30 seconds
National Personality: GTE Telenet (DTE)
PVC               low: 1   high: 1
Inbound           low: 0   high: 0
Two-Way           low: 2   high: 64
Outbound          low: 0   high: 0
Throughput Class in bps Inbound: 2400
Throughput Class in bps Outbound: 2400
```

X.25 National Personality Configuration

```
Request Reverse Charges: on  Accept Reverse Charges: on
Frame Extended seq mode: off Packet Extended seq mode: off
Incoming Calls Barred: off  Outgoing Calls Barred: off
Throughput Negotiation: on  Flow Control Negotiation: on
Suppress Calling Addresses: off DDN Address Translation: off
Truncate Called Addresses: off
Number of digits to truncate called addresses to: 2
CUG Support: off          BI-CUG Support: off
CUG Outgoing Access: off  CUG Incoming Access : off
BI-CUG Outgoing Access: off CUG 0 Override: off
CUG Isertion: off        CUG deletion: off
Call Request Timer:      20 decaseconds
Clear Request Timer:     18 decaseconds (1 retries)
```

X.25 ネットワーク・インターフェースの構成

```
Reset Request Timer: 18 decaseconds (1 retries)
Restart Request Timer: 18 decaseconds (1 retries)
Min Recall Timer      10 seconds
Min Connect Timer     90 seconds
Collision Timer        5 seconds
T1 Timer: 4.00 seconds  N2 timeouts: 20
T2 Timer: 2.00 seconds  DP Timer: 500 milliseconds
Standard Version: 1984  Network Type: CCITT
Disconnect Procedure: passive
Window Size          Frame: 7      Packet: 2
Packet Size          Default: 128   Maximum: 256
```

X.25 protocol configuration

No protocols defined

X.25 PVC configuration

No PVCs defined

X.25 address translation configuration

No address translations defined

cugs この装置内の各 X.25 インターフェースごとに、CUG 番号および BI-CUG 番号をリストします。

例 :

```
li cugs
CUGS: 23 24 25 26 27
```

detailed

national set コマンドで変更されるすべてのデフォルト・パラメーターの値をリストします。画面表示の記述については、後でこの章で説明する **national set** コマンドの項にリストしてあります。

例 :

list detail

X.25 National Personality Configuration

```
Follow CCITT: on      OSI 1984: on      OSI 1988: off
Request Reverse Charges: off  Accept Reverse Charges: off
Frame Extended seq mode: off  Packet Extended seq mode: off
Incoming Calls Barred: off    Outgoing Calls Barred: off
Throughput Negotiation: on    Flow Control Negotiation: off
Suppress Calling Addresses: off  DDN Address Translation: off
Truncate Called Addresses: off
Number of digits to truncate called address to: 2
CUG Support: off            BI-CUG Support: off
CUG Outgoing Access: off    CUG Incoming Access : off
BI-CUG Outgoing Access: off  CUG 0 Override: off
CUG Isertion: off          CUG deletion: off
T21 (Call Request Timer): 20 decaseconds
T23 (Clear Request Timer): 18 decaseconds (1 retries)
T22 (Reset Request Timer): 18 decaseconds (1 retries)
T20 (Restart Request Timer): 18 decaseconds (1 retries)
Min Recall Timer: 10 seconds
Min Connect Timer: 90 seconds
Collision Timer: 8 seconds
T1 Timer: 4.00 seconds  N2 timeouts: 20
T2 Timer: 0.00 seconds  DP Timer: 500 milliseconds
Standard Version: 1984  Network Type: CCITT
Disconnect Procedure: active
Window Size          Frame: 7      Packet: 2
Packet Size          Default: 256   Maximum: 256
```

protocols

すべての定義済みプロトコル構成をリストします。パラメーターの説明は、464ページの『Add』を参照してください。

例 :

X.25 ネットワーク・インターフェースの構成

list protocols

X.25 protocol configuration

Protocol Number	Window Size	Packet-Size Default	Packet-Size Maximum	Idle Time	Max VCs
0(IP)	2	128	256	30	4

CUGS: 11 12 13 14 15 BI-CUGS: 21 22

QLLC Protocols

Protocol Number	Packet Window	Packet MaxSize	Idle Time	Response Timer	Response Count	Reverse Charges Accept	Reverse Charges Request	Max Message	Station Type
26(DLSW)	7	256	30	15	255	N	N	2048	PEER

CUD : [C3 01 00 00 52 54 50]
CUGS: 11 12 13 14 15 BI-CUGS: 21 22

pvc すべての定義済み PVC をリストします。

例 :

list pvc

X.25 PVC configuration

Prtcl	X.25 Address	Active Enc	Window	Pkt_len	Pkt_chan
0	8383838383	CC	4	1024	3 - 3

summary

set コマンドおよび **enable** コマンドで設定されたすべての値をリストします。これらの値は X.25 構成を変更します。

例 :

list summary

X.25 Configuration Summary

Node Address: 313131
Max Calls Out: 4
Inter-Frame Delay: 0 Encoding: NRZ
Speed: 64000 Clocking: Internal
MTU: 2048 Cable: V.35 DCE
Lower DTR: Disabled
Default Window: 2 SVC idle: 30 seconds
National Personality: GTE Telenet (DTE)
PVC low: 1 high: 1
Inbound low: 0 high: 0
Two-Way low: 2 high: 64
Outbound low: 0 high: 0
Throughput Class in bps Inbound: 2400
Throughput Class in bps Outbound: 2400

インターフェース監視プロセスへのアクセス

X.25 ネットワーク・インターフェースに関連する情報を監視する場合は、以下のようにしてインターフェース監視プロセスにアクセスします。

1. OPCON プロンプトで **talk 5** と入力する。下に例を挙げます。

```
* talk 5  
+
```

GWCON プロンプト (+) がコンソールに表示されます。最初に GWCON に入ったときにプロンプトが表示されない場合は、再度 **Return** を押してください。

2. GWCON プロンプトで **configuration** コマンドを入力して、ルーターが構成されているプロトコルおよびネットワークを表示させる。たとえば、次のように入力します。

```
+ configuration
```


X.25 ネットワーク・インターフェースの構成

configuration コマンドの出力例については、120ページの『Configuration』を参照してください。

3. **network** コマンドと X.25 インターフェースの番号を入力する。

```
+ network 2
X.25>
```

X.25 監視プロンプトがコンソール上に表示されます。したがって、X.25 監視コマンドを入力すれば、X.25 インターフェースに関する情報を表示させて見ることができます。

X.25 監視コマンド

この節では、X.25 監視コマンドのすべてについて要約した上で説明します。X.25 監視コマンドを使用すると、X.25 パケットを送信するインターフェースとネットワークのパラメーターおよび統計を表示させて見ることができます。監視コマンドによれば、物理レベル、フレーム・レベル、およびパケット・レベルの構成値が表示されます。この3つのプロトコル・レベルのすべての値を同時に表示するオプションもあります。

X.25 監視コマンドは、X.25> プロンプトで入力します。表61は、コマンドを示しています。

表61. X.25 監視コマンドの要約

監視コマンド	機能
? (Help)	このコマンド・レベルで使用可能なコマンドをすべて表示するか、特定のコマンドに関するオプション (ただし、選択可能な場合) をリストします。12ページの『ヘルプを得る』を参照してください。
List	個々の PVC または SVC 統計および一般情報をリストします。
Parameters	X.25 構成の任意のレベルの現行パラメーターを表示します。
Statistics	X.25 構成の任意のレベルの現行統計を表示します。
Exit	直前のコマンド・レベルに戻ります。13ページの『下位レベル操作環境を終了する』を参照してください。

List

list コマンドは、現在アクティブの PVC および SVC を表示させる場合に使用します。

構文 :

```
list                pvc
                    svc
```

pvc 構成されたパーマネント・バーチャル・サーキットを表示します。

svc アクティブのスイッチド・バーチャル・サーキットを表示します。

例 :

```
list svc
```

```
LCN/ Destination Originate Transmits Protocol Totals
State Address Call Queued Encapsulated Xmts Rcvs Resets
13 D 898280077113 YES 0 IP 8943 261 1
```

X.25 ネットワーク・インターフェースの構成

20	D	898280077114	NO	0	IP	943	43	0
42	P	898280077116	YES	6	IP	0	0	0
23	C	898280077117	YES	0	IP	3054	110	0

D - Data Transfer P - Call Progressing
C - Call Clearing

Parameters

parameters コマンドは、X.25 構成のいずれかのレベルについて、現行パラメータを表示させる場合に使用します。

構文：

```
parameters           all
                        frame
                        packet
                        physical
```

all パケット、フレーム、および物理レベルのパラメータを表示します。

frame フレーム・レベルのパラメータを表示します。

例：

```
parameters frame
Frame Layer Parameters:
Maximum Frame Size = 262 Maximum Window Size = 7
Protocol Enabled   = YES Equipment Type       = DTE
T1 Retransmit Timer = 4 T2 Acknowledge Timer = 2
N2 Retry Counter   = 20 Disconnect Procedure = PASSIVE
Disconnect Timer   = 500 Network Type         = GTE
Protocol Options: Inhibit Idle RRs No MOD 128 NO Enable SARM NO
```

packet

パケット・レベルのパラメータを表示します。

例：

```
parameters packet
Packet Layer Parameters:
Default Packet Size = 128 Maximum Packet Size = 256
Log 2 Packet size  = 2 Acknowledge Delay = 0
Layer Enabled       = YES Default Window Size = 2
Lowest SVC          = 1 Highest SVC         = 64
Lowest PVC          = 0 Highest PVC         = 0
T20 (Restart)      = 18 R20 (Retry)        = 1
T21 (Call)         = 20
T22 (Reset)        = 18 R22 (Retry)        = 1
T23 (Clear)        = 18 R23 (Retry)        = 1
Network Type       = GTE Equipment Type     = DTE
```

physical

物理レベルのパラメータを表示します。

例：

```
parameters physical
Physical Layer Parameters:
Interface Type      = V.35

Maximum Frame Size = 264 InterFrame Delay = 2
Configured Speed   = 0 Clocking           = External
Encoding           = NRZ
Protocol Enabled    = Yes
```

Statistics

statistics コマンドは、X.25 構成のいずれかのレベルについて、現行統計を表示させる場合に使用します。

構文：

statistics

all

frame

packet

physical

all パケット、フレーム、および物理レベルの統計を表示します。

frame フレーム・レベルの統計を表示します。

例：

```

statistics frame
Frame Layer Counters:      Received      Transmitted
Information Frames         0              0
RR Command                 0              0
RR Response                0              0
RNR Command                0              0
RNR Response               0              0
REJ Command                0              0
REJ Response               0              0
SABM                       0              71
SABME                      0              0
UA                         0              0
DISC                       0              0
DM                         0              0
FRMR                       0              0
Total Bytes                0              0
Frame Layer Miscellaneous:
Queued Output Frames = 0 Protocol Layer State = Link Setup
Send Sequence N(S)   = 0 Receive Sequence N(R) = 0

```

packet

パケット・レベルの統計を表示します。

例：

```

statistics packet
Packet Counters:          Received      Transmitted
Call Request              0              0
Call Accepted             0              0
Clear Request             0              0
Clear Confirm             0              0
Interrupt Request         0              0
Interrupt Confirm         0              0
RR Packet                 0              0
RNR Packet                0              0

Reset Request             0              0
Reset Confirm             0              0
Restart Request           0              0
Restart Confirm           0              0
Diagnostic                0              0
  Data Packet             0              0
  Data Bytes              0              0
  Buffers Queued          0              0
  Invalid Packets Received = 0
  Switched Circuits Opened = 0

```

physical

物理レベルの統計を表示します。

例：

X.25 ネットワーク・インターフェースの構成

```
statistics physical
X.25 Physical Layer Counters:
Rx Bytes          0 Tx Bytes          0

Adapter cable:          V.35 DTE

Nicknames:   RTS CTS DSR DTR DCD
PUB 41450:   CA  CB  CC  CD  CF
State:       ON  ON  ON  ON  ON

Line speed:          unknown
Last port reset:    12 minutes, 21 seconds ago

Input frame errors:
CRC error            0 alignment (byte length)  0
missed frame        0 too long (> 0 bytes)    0
aborted frame       0 DMA/FIFO overrun        0
Output frame counters:
DMA/FIFO underrun errors  0 Output aborts sent  0
```

X.25 ネットワーク・インターフェースと GWCON インターフェース・コマンド

X.25 インターフェースには監視を目的とする独自の監視プロセスがありますが、GWCON 環境から **interface** コマンドを使用すると、ルーターでも導入済みネットワーク・インターフェースに関する完全な統計を表示します。(**interface** コマンドについて詳しくは、第10章 操作/監視プロセス (GWCON - Talk 5) とコマンド を参照してください。)

X.25 インターフェースについて表示される統計

GWCON 環境から X.25 インターフェースに関して **interface** コマンドを実行すると、以下の統計が表示されます。

```
+interface 11

Nt Nt' Interface Slot-Port          Self-Test Self-Test Maintenance
11 11 X25/0 Slot: 8 Port: 1          Passed   Failed   Failed
                                   1         0         0

X.25 MAC/data-link on V.35/V.36 interface
Interface State: DCD CTS Packet Layer Frame Layer
                 ON  ON  UP          UP
Packet Counters: Received          Transmitted
Data Packet      0                  353
Data Bytes       0                  18888
Buffers Queued   0                   0
Invalid Packets Received = 0
Switched Circuits Opened = 0

Frame Layer Counters: Received          Transmitted
Information Frames  354                  354

X.25 Physical Layer Counters:
Rx Bytes          3316 Tx Bytes          22204

Adapter cable:          V.35 DTE

V.24 circuit: 105 106 107 108 109
Nicknames:   RTS CTS DSR DTR DCD
PUB 41450:   CA  CB  CC  CD  CF
State:       ON  ON  ON  ON  ON

Line speed:          ~64.000 Kbps
Last port reset:    1 hour, 20 minutes, 25 seconds ago

Input frame errors:
CRC error            0 alignment (byte length)  0
missed frame        0 too long (> 2057 bytes)  0
aborted frame       0 DMA/FIFO overrun        0
```

X.25 ネットワーク・インターフェースの構成

```
Output frame counters:
DMA/FIFO underrun errors      0   Output aborts sent      0
Interface buffer pool: Total = 57, Free = 56
```

以下のリストでインターフェース統計について説明します。

Nt グローバル・インターフェース番号

Nt' 将来のダイヤル回線用として予約済み

Interface

インターフェースの名前と番号 (同じタイプのインターフェース内)

Slot インターフェースのスロット番号

Port インターフェースのポート番号

Self-Test Passed

自己テストが正常に行われた回数

Self-Test Failed

自己テストが正常に行われなかった回数

Maintenance Failed

保守障害の回数

Interface state

入力モデム制御信号、パケット・レイヤー (X.25 レイヤー 3)、およびフレーム・レイヤー (X.25 レイヤー 2) の現在の状態を表示します。

Packet Counters

送受信されたパケットに関する統計を示します。

Data Packets

インターフェースがネットワーク上で送受信するデータ・パケットの数を表示します。

Data Bytes

インターフェースがネットワーク上で送受信するデータ・バイトの数を表示します。

Buffers Queued

ネットワーク上への送信に備えて現在待ち行列化されているバッファの数を表示します。これらはフレーム・レイヤーまたはパケット・レイヤーの監視メッセージ、ならびに転送機能パケットの場合があります。

Invalid Packets Received

ネットワークから受信した無効の X.25 パケットの数を表示します。

Switched Circuits Open

現在オープン of 交換回線の数を表示します。

Frame Layer Counters

フレーム・レイヤー・カウンターから生成される統計を示します。

Information Frames

インターフェースが送受信した X.25 情報フレームの数を表示します。

X.25 Physical Layer Counters

物理レイヤー・カウンターから生成される統計を示します。

X.25 ネットワーク・インターフェースの構成

RX Bytes

物理レイヤーが受信したバイト数を表示します。

TX Bytes

物理レイヤーが送信したバイト数を表示します。

Line speed

送信クロック・レート

Last port reset

前回のポート・リセット以降の時間の長さ

Input frame errors:

CRC error

受信されたが、チェックサム・エラーがあったため廃棄されたパケットの数

Alignment

受信されたが、長さが 8 ビットの偶数倍でなかったため廃棄されたパケットの数

Too short

長さが 2 バイト未満であったために廃棄された受信パケットの数

Too long

構成されたサイズより大きかったために廃棄されたパケットの数

Aborted frame

受信されたが、送信側が放棄したか、伝送路誤りのため放棄されたパケットの数

DMA/FIFO overrun

シリアル・インターフェース・カードがシステム・パケット・バッファ・メモリーにデータを送信する速度が遅かったため、データをネットワークから受信できなかった回数

Missed frame

フレームが装置に到着したときに利用可能なバッファがない場合、ハードウェアはそのフレームを廃棄し、紛失フレーム・カウンターを増分します。

L & F bits not set

シリアル・インターフェース上で、ハードウェアは到着するフレームの入力記述子情報をセットします。バッファが到着したフレーム全体を受け入れることができる場合、ハードウェアはそのフレームの最後のビットと最初のビットの両方をセットして、バッファが完全なフレームを受け入れたことを示します。いずれかのビットがセットされていない場合、パケットは廃棄され、L & F bits not set カウンターが増分され、バッファは消去されて再利用できるようになります。

注: L & F bits not set カウンターがトラフィックによる影響を受けるとは考えられません。

Output frame counters:

X.25 ネットワーク・インターフェースの構成

DMA/FIFO underrun errors

シリアル・インターフェース・カードがシステム・パケット・バッファ・メモリーからデータを取り出す速度が遅かったため、データをネットワーク上に送信できなかった回数

Output aborts sent

上位ソフトウェアの要求に応じて放棄された伝送の数

X.25 ネットワーク・インターフェースの構成

第35章 XTP の使用

この章では、TCP/IP を通して X.25 トラフィックをトランスポートするための X.25 トランスポート・プロトコル (XTP) について説明します。この章には以下の節があります。

- 『X.25 トランスポート・プロトコル』
- 488ページの『DTE アドレスのワイルドカード』
- 488ページの『XTP バックアップ・ピア機能』
- 490ページの『ローカル XTP』
- 490ページの『XTP と閉域ユーザー・グループ』
- 490ページの『XTP の構成』
- 490ページの『構成手順』

X.25 トランスポート・プロトコル

X.25 トランスポート・プロトコル (XTP) によって、『プロトコル転送機能』のサービスが得られます。プロトコル転送機能とは、インバウンドおよびアウトバウンド・プロトコル・パケット処理の中心拠点のことです。転送機能では、1つのネットワーク・インターフェース上でパケットを受信し、別のインターフェースにそれを送信します。

XTP は、複数のリモート・サイトにある X.25 装置で使えるように設計されています。そのような環境では、XTP を使用すると、1つまたは複数の中央ロケーションにあるサーバーと通信する場合に、X.25 パケット交換ネットワークを使用する必要がなくなります。

これができるようにするためには、サーバー・ロケーションおよびリモート・ロケーションでルーターを使用して、データをカプセル化し、クライアントとサーバーの間で TCP/IP を経由して X.25 パケットを送信します。

486ページの図37 に、XTP の使用前および使用後のネットワーク構成を図示してあります。

XTP の使用

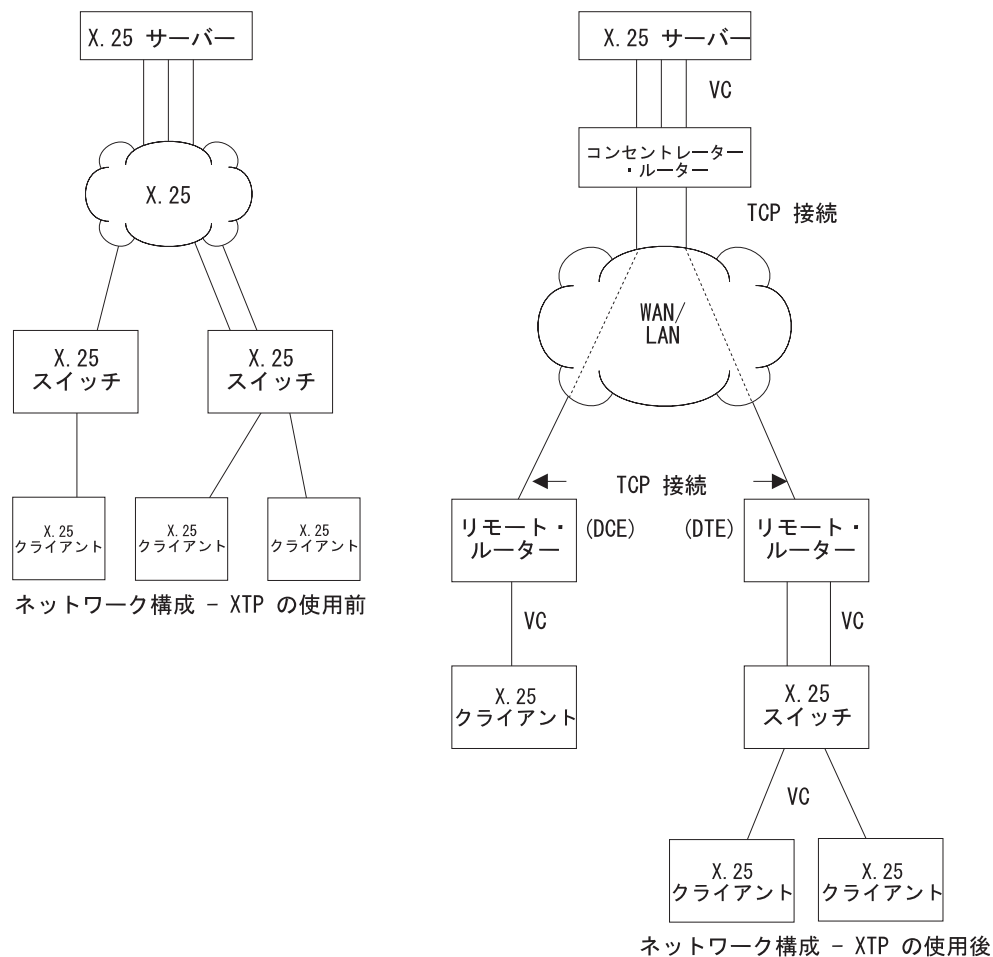


図 37. XTP の使用前および使用後の構成

構成情報

X.25 は、XTP 用として構成されたノード・アドレスを基にして XTP に関する着信コールを認識します。したがって、X.25 ノード間で X.25 トラフィックをトランスポートするためには、ノードが接続されているルーターのデータ端末装置 (DTE) アドレスと IP アドレスにマップするよう、X.25 を構成する必要があります。

たとえば、図37 では、リモート・ルーター上およびコンセントレーター・ルーター上に X.25 クライアントを構成します。この例の リモート・ルーター は、X.25 サーバーにアクセスする場合に使用する TCP/IP ネットワークに X.25 クライアントを接続するルーターです。コンセントレーター・ルーター は、リモート・ルーターにアクセスする場合に使用する TCP/IP ネットワークに X.25 クライアントを接続します。

注: XTP を構成する際に、ルーターが X.25 スイッチに接続される場合は、DTE と見なされます。ルーターがスイッチに接続されない場合は、DCE (データ回線終端装置) と見なされます。

XTP 用としてルーターを構成する場合は、次の情報を XTP config> プロンプトから定義した上で、ルーターをリスタートします。

- ローカル DTE
- ピア・ルーター
- リモート DTE
- PVC
- CUG

ローカル DTE

ルーター上の X.25 インターフェースに接続される X.25 ノード

ローカル DTE を構成する場合は、ローカル DTE に割り当てられている X.121 アドレスを使用します。1 つのインターフェース上に複数の DTE を構成することができます。

ピア・ルーター

TCP/IP を通して通信する相手側のルーター

ピア・ルーターは、『立場』に応じて異なる可能性があります。たとえば、486ページの図37 では、コンセントレーター・ルーターの観点に立てば、2 つのリモート・ルーターがピア・ルーターです。しかし、2 つのリモート・ルーターの観点に立てば、コンセントレーター・ルーターがピア・ルーターです。

ピア・ルーターは、その内部 IP アドレスで指定することができます。

リモート DTE

X.25 ノードが接続をオープンし、データを交換するリモート X.25 ノード。リモート DTE に割り当てられている X.121 アドレスを使用します。

それぞれのピア・ルーターごとに、固有の IP アドレスを構成します。たとえば、486ページの図37 では、コンセントレーター・ルーターには、各リモート・ルーターの固有の IP アドレスが分かっている必要があり、各リモート・ルーターには、コンセントレーター・ルーターの IP アドレスが分かっている必要があります。

PVC X.25 のリスタート後、接続されたままになる固定チャネル

PVC は、固定チャネルであるため、専用電話回線に似ています。PVC は、XTP のコンテキストでは、ローカル X.25 DTE ノードからリモート X.25 DTE への PVC です。

PVC 用のルーターを構成する際は、ピア・ルーターの IP アドレスとリモートおよびローカル DTE の PVC 番号をマップします。PVC の識別は、次のような 4 つの情報を用いて行います。

- ローカル PVC の論理チャネル番号
- ローカル DTE の X.121 アドレス
- リモート (ピア) ルーター上の PVC の論理チャネル番号
- リモート DTE の X.121 アドレス

CUGS XTP プロトコルの閉域ユーザー・グループ。442ページの『閉域ユーザー・グループの概要』を参照してください。

XTP の使用

追加の構成情報については、490ページの『XTP の構成』 および 499ページの『XTP 構成コマンド』 に記載してあります。

DTE アドレスのワイルドカード

DTE アドレス構成では、ワイルドカード 『*』 が使用可能です。これ例外にも 『?』 文字が使用できます。これを DTE アドレスの中で指定して、1 桁の文字であればそのアドレス内のその位置にあるどんな文字でも表すことができます。たとえば、『1?2?3』 と指定した場合は、1 桁目、3 桁目、および 5 桁目がそれぞれ 1、2、および 3 である、アドレス 18243 に合致します。

『*』 ワイルドカード文字の場合は、0 桁以上のどんなストリングをも表すことができます。その使用は、DTE アドレス指定の末尾に限定されます。たとえば、『123*』、『5555*』、『9*』、または 『*』 のように指定します。DTE アドレスの特殊な事例である 『*』 の場合は、ヌル・アドレスも含めて、すべての DTE アドレスを表します。ヌル・アドレスが有用なのは、X.25 コール・リクエスト・パケットにコーリング・アドレスがない着信コールを処理する場合です。

『*』 ワイルドカードの使用によって、既存のアドレスと競合するローカルまたはリモート DTE アドレスを追加する可能性が高くなります。 **add local-dte** コマンドおよび **add remote-dte** コマンドが拡張されて、ユーザーが既存のアドレスと競合する DTE アドレスの追加を試みると、競合アドレスが示されます。

例 : xtp config> add local-dte

```
Interface number [0]? 1
DTE address [ ] 123456
DTE address [ ]?

XTP config>add local-dte
Interface number [0]?1
DTE address [ ]?1*
DTE address conflicts with existing DTE address 123456
```

XTP バックアップ・ピア機能

バックアップ・ピア機能によれば、複数のピア・ルーターを 1 つのリモート DTE に対応付けることができます。ユーザーは、1 つのリモート DTE に対応するピア・ルーターのリストを指定します。

例 :

```
XTP config>add rem
DTE address [ ]?123456
Peer router's internal IP Address [0.0.0.0]?10.0.0.2
Peer router's internal IP Address [0.0.0.0]?10.0.0.4
Peer router's internal IP Address [0.0.0.0]?11.0.0.1
Peer router's internal IP Address [0.0.0.0]?
```

リモート DTE に関する着信コールが受信されると、リスト内の各ルーターを介する接続が、ルーターがリモート DTE に関して表示される順序で試みられます。

リモート DTE の検索

DTE がリモート DTE に対するコールを発すると、両方の DTE アドレスを調べて、X.25 トランスポートのために受け入れ可能かどうか判別します。受け入れ可能の場合は、どのピア・ルーターを通して接続の完了を試みるかを、X.25 トランスポート・プロトコル転送機能が決めます。リモート DTE のピア・ルーター・リストの最初のルーターから検索を開始します。適合する必要がある最初の条件は、アクティブな TCP 接続がピア・ルーターにあることです。そのピア・ルーターにアクティブな TCP 接続がない場合は、リスト内の次のルーターをチェックします。アクティブな TCP 接続が見つかった場合は、接続の完了の試みがなされます。接続要求タイマーが開始されて、接続完了プロセスの時間を刻みます。

次のいずれか 1 つのイベントが生じると、リモート DTE の検索は終了します。

- ピア・ルーターを介する接続の正常な完了
この場合は、コール設定処理が完了し、リモート DTE の検索は終了します。
- ピア・ルーターによるコールの拒否
この場合は、リモート DTE の検索がピア・ルーター・リスト内の次のルーターに進みます。
- 接続要求タイマーの満了
この場合は、リモート DTE の検索がピア・ルーター・リスト内の次のルーターに進みます。

ピア・ルーターのいずれかを介する接続も正常に行われないうまま、ピア・ルーターのリスト全体にわたる検索が完了した場合は、ローカル DTE に対するコールは切断されます。

接続要求タイマー

接続要求タイマーを使用するのは、時間が未確定のままコール設定手順がハングすることがないようにするためです。各ピア・ルーターごとにタイマーを構成します。

例：

```
XTP config>add peer-router
Router's internal IP Address [0.0.0.0]?10.0.0.2
Connection setup timeout [230]?60
```

接続要求タイマーは、10 ～ 480 秒の範囲で構成することができます。デフォルトでは 230 秒です。このデフォルト値は、X.25 コール・リクエスト・タイマーのデフォルト設定値が 200 秒であるという事実に基づいて決められたものです。

ピア・ルーターを介する接続完了の試みがなされた時点で、タイマーは開始されます。コールの試みがピア・ルーターによって受け入れられても拒否されても、その時点でタイマーは停止します。

ローカル XTP

ローカル XTP によれば、着信 X.25 トラフィックを現行ルーター上の同じまたは別のインターフェースにルーティングすることができます。ローカル XTP を構成する場合は、**add peer** コマンドでルーターの内部アドレスをピア・アドレスとして指定します。

XTP と閉域ユーザー・グループ

XTP では、**add local** コマンドまたは **add cug** コマンドによって定義されたローカル DTE アドレスを用いて、閉域ユーザー・グループをサポートします。XTP で閉域ユーザー・グループを使用できるようにするには、以下のことを行う必要があります。

- 該当する X.25 インターフェースで CUG または BI-CUG を使用可能にする。
- 必要なら、**add cug** コマンドおよび **add bi-cug** コマンドを使用して、XTP プロトコル固有 CUG を提供する。
- **add local** コマンドで該当する閉域ユーザー・グループ番号を提供する。この番号としては次のものがあります。
 - 閉域ユーザー・グループ番号
 - 優先閉域ユーザー・グループ番号
 - 相互閉域接続ユーザー・グループ番号
 - 優先相互閉域接続ユーザー・グループ番号
- 必要なら、**national enable cug_insertion** コマンドまたは **national enable cug_deletion** コマンドで、インターフェースに関して CUG の追加または削除を使用可能にする。
- 必要なら、**national enable cug 0 override** コマンドで、CUG 0 オーバーライド・オプションを使用可能にする。

XTP の構成

XTP は、TCP/IP を通して X.25 トラフィックをトランスポートする場合に使用するプロトコル転送機能です。XTP を使用すると、既存の X.25 装置で TCP/IP バックボーンを介する通信ができ、X.25 ネットワークからユーザーが選択するネットワークに移行することができます。

構成手順

ここでは、491ページの図38 に示すネットワークの構成に関する詳細を説明します。

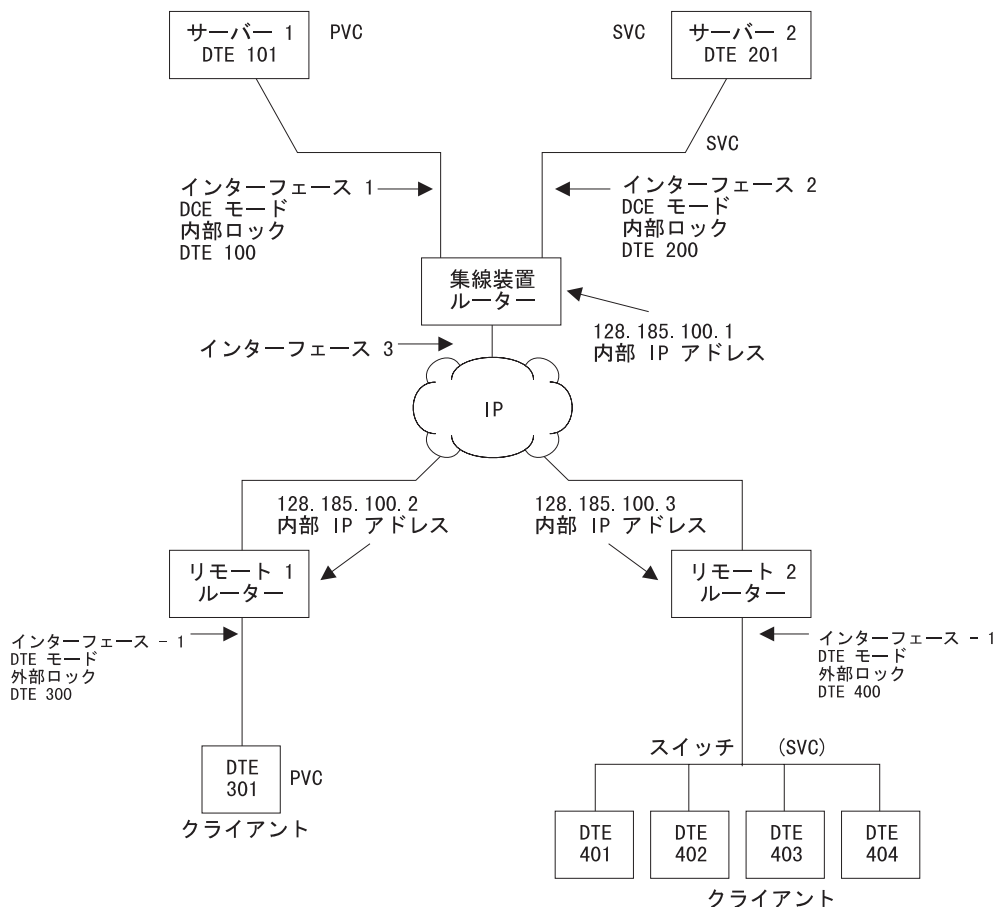


図 38. XTP 構成例

この構成には、コンセントレーター・ルーター、リモート 1 ルーター、リモート 2 ルーターの 3 つのルーターが示されています。XTP がこのネットワークで作動できるようにするためには、これらのルーターのそれぞれについて、以下のステップを実行します。

- データ・リンクを設定する。
- IP インターフェースを構成する。
- X.25 を構成する。
- ナショナル・パーソナリティの値を設定する。
- IP アドレスを定義する。
- 内部 IP アドレスを設定する。
- XTP を設定する。

注: 新規構成が有効になるのは、ルーターをリスタートしてからです。

データ・リンクの設定

データ・リンクでは、ネットワークを通してデータ・パケットを送信する場合に使用するプロトコルを定義します。構成するルーターと各シリアル・インターフェー

XTP の使用

スの間にデータ・リンクを定義します。491ページの図38の例では、インターフェースが3つある(2つはX.25用、1つはPPP用)コンセントレーター・ルーターが構成されています。

シリアル・インターフェースに関するデータ・リンク・プロトコルを設定します。

```
Config>set data-link X25 1
Config>set data-link x25 2
Config>set data-link ppp 3
```

IP インターフェースの構成

491ページの図38では、PPPがIPインターフェースです。Config>プロンプトで**network 3**と入力して、このPPPインターフェースを構成します。

```
Config>network 3
PPP interface configuration
```

注: ここで説明する手順には、PPPの構成に関する詳細は含まれていません。詳細については、[ソフトウェア使用者の手引き](#)を参照してください。

X.25 の構成

XTPを構成する前に、それぞれのインターフェースごとにX.25パラメーターを構成しておきます。次の例は、X.25に関する基本パラメーターを構成する場合で、491ページの図38のトポロジーに基づいています。

構成に必要なパラメーターは、ネットワーク・トポロジーに応じて異なります。すべてのX.25パラメーターの詳細については、[ソフトウェア使用者の手引き](#)を参照してください。

インターフェース 1

491ページの図38に定義されているコンセントレーター・ルーター上にインターフェース1を構成する場合は、以下のステップに従います。

1. Config>プロンプトで、**network**に続けてX.25インターフェースの番号を入力する。この例では、インターフェース1です。

```
Config> network 1
X.25 User Configuration
X.25 Config>
```

2. XTPプロトコルをX.25インターフェースに追加し、一般インターフェース値を定義する。X.25 Config>プロトコルで、**add protocol xtp**と入力する。このコマンドを入力する必要があるのは、1回だけです。

```
X.25 Config>add protocol xtp
Window Size [2]?
Default Packet Size [128]?
Maximum Packet Size [256]?
```

3. **set address X.25 node address**を入力して、ネットワーク・アドレスを指定する。491ページの図38では、ノード・アドレス(DTEアドレス)は100です。

```
X.25 Config>set address 100
```

4. **set clocking**の後に続けて、ルーター・タイプに応じて、**internal**または**external**と入力する。


```
X.25 Config>set clocking internal
```

5. **set speed** の後に続けてアクセス速度 (伝送速度) を入力する。

```
X.25 Config>set speed
Access rate in bps [9600]?19200
```

6. **set equipment-type** と入力し、フレーム・レベルおよびパケット・レベルが DCE と DTE のどちらとして使用されるのかを指定する。

```
X.25 Config>set equipment-type dce
```

7. **set pvc** と入力し、使用する PVC の最低値および最高値を定義する。

```
X.25 Config>set pvc low 1
X.25 Config>set pvc high 1
```

8. **add pvc** を入力して、個々の PVC を定義する。

```
X.25 Config>add pvc
Protocol [IP]?xtp
Packet Channel [1]?
Destination X.25 Address [ ]?101
Window Size [2]?
Packet Size [128]
```

9. (オプション) **national enable truncate-called-addresses** を入力する。コールされるアドレス・サイズを切り捨てたい場合は、**national set truncate-called-addr-size** の後に続けてコールされる DTE アドレスの切り捨て後の桁数を入力します。

10. (オプション) 必要に応じて、CUG サポート、CUG 追加、および CUG 削除を使用可能にします。

インターフェース 2

インターフェース 2 を構成する場合は、以下のステップに従います。

1. Config> プロンプトで、**network** に続けて X.25 インターフェースの番号を入力する。491ページの図38 では、これは 2 です。

```
Config>network 2
X.25 User Configuration
X.25 Config>
```

2. 492ページの『インターフェース 1』の項に定義されている手順と同じ手順を使用して、インターフェース 2 の場合の以下のパラメーターを設定します。

- address (アドレス) = 200
- clocking (クロック) = internal
- speed (速度) = 19200
- equipment (装置) = dce

3. **set svc** と入力して、使用する SVC の最低値および最高値を定義する。

SVC には、両方向、インバウンド、およびアウトバウンドの 3 つのタイプがあります。デフォルトでは、『svc low-two-way = 1』 および 『svc high-two-way = 64』 です。それ以外の SVC タイプの場合は、デフォルト値はすべて 0 です。SVC および PVC に関する追加情報については、ソフトウェア使用者の手引き を参照してください。

```
X.25 Config>set svc ?
X.25 Config>set svc low-inbound 0
X.25 Config>set svc high-inbound 0
X.25 Config>set svc low-outbound 0
X.25 Config>set svc high-outbound 0
X.25 Config>set svc low-two-way 2
X.25 Config>set svc high-two-way 2
```

XTP の使用

4. X.25 Config> プロンプトを終了する。

```
X25 Config>exit  
Config>
```

ナショナル・パーソナリティーの設定

各 X.25 公衆ネットワークには、それぞれ独自の標準構成があります。ナショナル・パーソナリティーでは、公衆データ・ネットワークの特性を定義する 28 の変数を指します。これらの変数は、リンクを通して転送されるパケットに関する制御情報をルーターに提供し、XTP ルーターとそのローカル DTE の間で使用される X.25 のファシリティーに影響を与えます。

着信コール・リクエストに入っているファシリティーは、ローカル・ルーターが該当のファシリティーをサポートする構成であるかどうかに関係なく、すべてピア・ルーターに渡されます。たとえば、パケット・サイズ交渉が着信コール内で要求され、流れ制御交渉がルーター内に構成されていない場合です。

ルーターでは、ネゴシエーション中のパケット・サイズおよびウィンドウ・サイズがいずれも、X.25 インターフェースの定義時に指定された範囲内にあることを保証します。たとえば、packet-ext-seq-mode が X.25 インターフェースに関して定義されていない場合は、7 より大きいパケット・ウィンドウはネゴシエーションによって 7 に縮小されます。

構成値を表示させて見る場合は、X.25 Config> プロンプトで **list detailed** と入力します。ナショナル・パーソナリティーのデフォルト値を設定する場合は、X.25 Config> プロンプトで **set national-personality** と入力します。詳細については、ソフトウェア使用者の手引き を参照してください。

IP アドレスの定義

XTP 用のコンセントレーター・ルーター (491ページの図38 に図示されている) の構成にあたっては、その前にこのルーターの IP アドレスを定義しておきます。Config> プロンプトで **protocol ip** と入力し、IP config> プロンプトで **add address** と入力します。

```
Config>protocol ip  
IP config>add address  
Which net is this address for [0]?3  
New address [0.0.0.0]?128.185.100.7  
Address mask [255.255.0.0]?255.255.255.0
```

内部 IP アドレスの設定

ルーターではそれぞれ、そのピア・ルーターの識別をピア・ルーターの内部 IP アドレスによって行います。

ピア・ルーターの内部 IP アドレスを設定する場合は、IP Config> プロンプトで **set internal IP address** と入力します。

```
IP config>set internal-ip-address  
Internal IP address [0.0.0.0]?128.185.100.1
```

XTP の構成

X.25 の構成と IP アドレスの定義が終われば、ルーター用として XTP を構成する準備が整ったことになります。

XTP の構成にあたって詳細な構成情報が必要な場合は、499ページの『XTP 構成コマンド』を参照してください。

注: XTP 用としてネットワークを構成するにあたっては、TCP/IP を通して通信する相手側のルーターが常にピア・ルーターになることを忘れないようにします。したがって、ピア・ルーターは立場に応じて異なる可能性があります。491ページの図38 でリモート 1 ルーターおよびリモート 2 ルーターとして定義されているルーターを構成する場合は、それらのルーターにとっては、コンセントレーター・ルーターがピア・ルーターです。

以下のステップを実行して、ルーター用の XTP を構成します。

1. XTP config> プロンプトにアクセスするために、Config> プロンプトで **protocol xtp** と入力する。
2. インターフェース 1 を XTP 構成に追加する。XTP Config> プロンプトで **add local-dte** と入力します。

```
XTP config>add local-dte
Interface number [0]?1
Allow inbound calls without calling DTE address? (Y or N) [N]? n
DTE address [ ]?101
Pref CUG [ ]? 18
CUG (2) [ ]? 2
CUG (3) [ ]?
Pref BI-CUG [0]?
DTE address [ ]?
```

ヌル DTE アドレスを入力すると、コマンド入力は終了します。

3. インターフェース 2 を XTP 構成に追加する。XTP Config> プロンプトで **add local-dte** と入力します。

```
XTP config>add local-dte
Interface number [0]?2
Allow inbound calls without calling DTE address? (Y or N) [N]? n
DTE address [ ]?201
DTE address [ ]?
```

ヌル DTE アドレスを入力すると、コマンド入力は終了します。

4. (オプション) XTP プロトコル固有 CUG を追加します。

```
add cug
Pref CUG [ ]? 11
CUG (2) [ ]? 12
CUG (3) [ ]? 13
CUG (4) [ ]? 14
CUG (5) [ ]? 15

add bi-cug
Pref BI-CUG [ ]? 21
BI-CUG (2) [ ]? 22
BI-CUG (3) [ ]?
```

5. リモート 1 ルーターをピア・ルーターとして追加する。 **add peer-router** と入力し、このルーターの IP アドレスを入力します。

```
XTP config>add peer-router
Router's internal IP Address [0.0.0.0]?128.185.100.2
Connection setup timeout [230]?
```

6. リモート 1 ルーター用のリモート DTE を追加する。 **add remote-dte** と入力し、この DTE の IP アドレスおよび DTE アドレスを入力します。

XTP の使用

```
XTP config>add remote-dte
DTE address [ ]?301
Peer router's internal IP Address [0.0.0.0]?128.185.100.2
Peer router's internal IP Address [0.0.0.0]?
```

注: リモート DTE が 必要なのは、次のどちらか 1 つか該当する場合だけです。

- コンセントレータ・ルーターが、そのローカル DTE からの着信コールのため、リモート DTE への XTP 接続を開始する。
- DTE が XTP PVC 定義の一部である。

7. リモート 2 ルーターを (ピア・ルーターとして) 追加する。 **add peer-router** と入力し、このルーターの IP アドレスを入力します。

```
XTP config>add peer-router
Router's internal IP Address [0.0.0.0]?128.185.100.3
Connection setup timeout [230]?
```

8. リモート 2 ルーター用のリモート DTE を追加する。 **add remote-dte** と入力し、この DTE の IP アドレスおよび DTE アドレスを入力します。

```
XTP config>add remote-dte
DTE address [ ]?401
Peer router's internal IP Address [0.0.0.0]?128.185.100.3
Peer router's internal IP Address [0.0.0.0]?
```

```
XTP config>add remote-dte
DTE address [ ]?402
Peer router's internal IP Address [0.0.0.0]?128.185.100.3
Peer router's internal IP Address [0.0.0.0]?
```

```
XTP config>add remote-dte
DTE address [ ]?403
Peer router's internal IP Address [0.0.0.0]?128.185.100.3
Peer router's internal IP Address [0.0.0.0]?
```

```
XTP config>add remote-dte
DTE address [ ]?404
Peer router's internal IP Address [0.0.0.0]?128.185.100.3
Peer router's internal IP Address [0.0.0.0]?
```

9. XTP PVC を追加して、サーバー 1 へのローカル PVC にリモート DTE 301 を論理的に対応付けます。

```
XTP config>add pvc
Local PVC Range Start [1]?
Local PVC Range End [1]?
Local X.25 DTE address [ ]? 101
Remote PVC Range Start [1]?
Remote PVC Range End [1]?
Remote X.25 DTE address [ ]? 301
```

DTE アドレスを入力するときは、次の指定のいずれも可能です。

任意の桁の代わりに '?' を指定する。 '?' は、1 桁であればその桁位置がどのような数字でも構わないことを意味します。

アドレスの最後の桁として '*' を指定して、ゼロ桁以上の桁数の任意の組み合わせを表す。

リモート・ルーターの構成例

以下に示すのは、リモート 1 ルーターおよびリモート 2 ルーター (491ページの図38を参照) のサンプル構成です。プロセスは、490ページの『構成手順』の項で定義したものと同じです。

リモート 1 ルーター

```

* talk 6

Config>set data-link x25 1
Config>set data-link ppp 2
Config> network 1

X.25 Config>set address 300
X.25 Config>set clocking internal
X.25 Config>set speed 19200
X.25 Config>set equipment-type dce
X.25 Config>set pvc low 1
X.25 Config>set pvc high 1
X.25 Config>add pvc
Protocol [IP]?xtp
Packet Channel [1]?1
Destination X.25 Address [ ]?301

Window Size [2]?
Packet Size [128]?
X.25 Config>exit
Config>

Config>protocol ip
IP config>add address
Which net is this address for [0]?2
New address [0.0.0.0]?128.185.100.8
Address mask [255.255.0.0]?255.255.255.0

IP config>set internal-ip-address
Internal IP address [0.0.0.0]?128.185.100.2
IP Config> exit
Config>

Config>protocol xtp
XTP config>add local-dte
Interface number [0]?1
Allow inbound calls without calling DTE address? (Y or N) [N]? n
DTE address [ ]?301
DTE address [ ]?

XTP config>add peer-router
Router's IP address?128.185.100.1

XTP config>add remote-dte
DTE address [ ]?101
Peer router's internal IP Address [0.0.0.0]? 128.185.100.1
Peer router's internal IP Address [0.0.0.0]?

XTP config>add pvc
Local PVC Range Start [1]?
Local PVC Range End [1]?
Local X.25 DTE address [ ]? 101
Remote PVC Range Start [1]?
Remote PVC Range End [1]?
Remote X.25 DTE address [ ]? 301

```

リモート 2 ルーター

```

* talk 6

Config>set data-link x25 1
Config>set data-link ppp 2
Config> network 1

X.25 Config>set address 400
X.25 Config>set clocking external
X.25 Config>set speed 19200
X.25 Config>set equipment-type dte
X.25 Config>set svc low-inbound 0
X.25 Config>set svc high-inbound 0
X.25 Config>set svc low-outbound 0
X.25 Config>set svc high-outbound 0
X.25 Config>set svc low-two-way 1
X.25 Config>set svc high-two-way 64
X.25 Config>add protocol
Protocol [IP]?xtp
Window Size [2]?

```

XTP の使用

```
Default Packet Size [128]?
Maximum Packet Size [256]?
X.25 Config>exit

Config>protocol ip
IP config>add address
Which net is this address for [0]?2
New address [0.0.0.0]?128.185.100.9
Address mask [255.255.0.0]?255.255.255.0

IP config>set internal-ip-address
Internal IP address [0.0.0.0]?128.185.100.3
IP Config> exit
Config>

Config>protocol xtp
XTP config>add local-dte
Interface number [0]?1
Allow inbound calls without calling DTE address? (Y or N) [N]? n
DTE address [ ]?401
Pref CUG [ ]? 23
CUG (2) [ ]? 24
CUG (3) [ ]? 25
CUG (4) [ ]? 26
CUG (5) [ ]? 27

DTE address [ ]?402
Pref CUG [ ] ?
DTE address [ ]?403
Pref CUG [ ] ?
DTE address [ ]?404
Pref CUG [ ] ?
DTE address [ ]?

XTP Config>add peer-router
Router's IP address?128.185.100.1

XTP config>add remote-dte
DTE address [ ]?201
Peer router's internal IP Address [0.0.0.0]?128.185.100.1
Peer router's internal IP Address [0.0.0.0]?
XTP config>exit

Config>
```

第36章 XTP の構成と監視

この章では、XTP の構成および監視コマンドについて説明します。この章は以下の節に分かれています。

- 『XTP 構成コマンド』
- 506ページの『XTP 監視コマンド』

XTP 構成コマンド

この節では XTP 構成コマンドについて説明します。

XTP 構成環境にアクセスする場合は、Config> プロンプトで **protocol xtp** コマンドを入力します。

```
Config> p xtp
XTP config>
```

XTP 構成コマンドは、XTP config> プロンプトで入力します。

表 62. XTP 構成コマンドの要約

コマンド	機能
? (Help)	このコマンド・レベルで使用可能なコマンドをすべて表示するか、特定のコマンドに関するオプション (ただし、選択可能な場合) をリストします。 12ページの『ヘルプを得る』を参照してください。
Add	インターフェース、ピア・ルーター、閉域ユーザー・グループ、リモート DTE または PVC 定義を追加します。
Change	ピア・ルーター、リモート DTE または PVC 定義を変更します。
Delete	ローカル DTE、ピア・ルーター、閉域ユーザー・グループ、リモート DTE または PVC 定義を削除します。
Enable-XTP	XTP 転送機能を起動します。
Disable-XTP	XTP 転送機能を停止します。
Set	XTP キープアライブ・タイマーの値を設定します。
List	インターフェース、ピア・ルーター、リモート DTE および PVC 定義をリストします。
Exit	直前のコマンド・レベルに戻ります。 13ページの『下位レベル操作環境を終了する』を参照してください。

Add

ローカル X.25 ノード、ピア・ルーター、リモート X.25 ノードと対応するルーター、またはローカル X.25 ノードからリモート X.25 ノードへの PVC を追加します。

ワイルドカード・アドレッシングが XTP 転送機能に組み込まれています。ローカルまたはリモート DTE アドレスの入力にあたっては、ワイルドカード文字 (? または *) が含まれていてもかまいません。ワイルドカードの使用に関する追加情報については、488ページの『DTE アドレスのワイルドカード』を参照してください。

構文 :

```
add                                bi-cug
                                       cug
```

XTP 構成コマンド (Talk 6)

local-dte
peer-router
remote-dte
pvc

cug XTP プロトコルの相互閉域接続ユーザー・グループ番号を指定します。プロンプトで最初に入力を指示される CUG が優先 CUG です。

有効値 : 0 ~ 9999

デフォルト値 : なし

例 :

```
add cug
Pref CUG [ ]? 114
CUG (2) [ ]? 314
CUG (3) [ ]? 478
CUG (4) [ ]?
```

bi-cug XTP プロトコルの相互閉域接続ユーザー・グループ番号を指定します。プロンプトで最初に入力を指示される bi-cug が優先 BI-CUG です。

有効値 : 0 ~ 9999

デフォルト値 : なし

例 :

```
add bi-cug
Pref BI-CUG [ ]? 50
BI-CUG (2) [ ]? 51
BI-CUG (3) [ ]? 52
BI-CUG (4) [ ]? 53
BI-CUG (5) [ ]? 54
```

local-dte

指定されたインターフェース上のルーターと通信する X.25 DTE アドレス、または X.25 ノードを追加します。XTP とともに使用する有効なインターフェース番号は 0 ~ 255 です。

複数のローカル・ノードが構成できます。ただし、コーリング DTE アドレスを伴わない着信コールを許可するオプションが選択されていて、そうしたコールを受信した場合、追加された最新のローカル DTE アドレスがそのコールのコーリング DTE アドレスになります。

例 :

```
add local-dte

Interface number [0]?4
Allow inbound calls without calling DTE address? (Y or N) [N]? y
DTE address [ ]?101
Pref CUG [ ]? 23
CUG (2) [ ]? 24
CUG (3) [ ]? 25
CUG (4) [ ]? 26
CUG (5) [ ]? 27
Pref BI-CUG [ ]? 6
BI-CUG (2) [ ]? 7
BI-CUG (3) [ ]? 8
BI-CUG (4) [ ]? 9
BI-CUG (5) [ ]? 10
DTE address [ ]?
```

peer-router

ピア・ルーターを追加します。リモート X.25 ノードが接続されているルータ

XTP 構成コマンド (Talk 6)

一の内部 IP アドレスを入力します。これらの IP アドレスは、TCP 接続をオープンする場合、および接続要求と X.25 データが入っている X.25 パケットをトランスポートする場合に使用することができます。

ピア・ルーターに関して構成する内部 IP アドレスが、このルーターの内部 IP アドレスである場合は、ソフトウェアがローカル XTP 接続を確立します。

例：

```
add peer-router
```

```
Router's internal IP Address [0.0.0.0]?128.185.100.2
Connection setup timeout [230]?
```

remote-dte

リモート X.25 ノードと対応するルーターを追加します。リモート・ノードとローカル X.25 を接続して、データを交換できるようにすることができます。構成する各リモート X.25 ノードごとに、それぞれ IP アドレスを構成する必要があります。このリモート・ノードに送信された要求やデータは、いずれもルーターに向かいます。そこで、ルーターはそのローカル X.25 インターフェースの 1 つを使用して、データを X.25 ノードに転送します。

このルーターが、そのローカル DTE からの着信コールのため、リモート DTE への XTP 接続を開始する場合、またはリモート DTE が XTP PVC 定義の一部である場合は、リモート DTE を定義します。

ローカル XTP を使用するためには、ピア・ルーター・アドレスがローカル・ルーターの内部アドレスである必要があります、その DTE アドレスが、**add local** コマンドの使用によって、前もって定義されている必要があります。

例：

```
add remote-dte
```

```
DTE address [ ]?301
Peer router's internal IP Address [0.0.0.0]?128.185.100.2
Peer router's internal IP Address [0.0.0.0]?
```

pvc

ローカル X.25 ノードからリモート X.25 ノードへの PVC を追加します。

PVC 構成を起動するためには、次の 3 つが存在する必要があります。

- ルーターからローカル X.25 ノードへの X.25 PVC
- ピア・ルーターからリモート X.25 ノードへの X.25 PVC
- リモート・ノードが常駐しているピア・ルーターへの TCP 接続

例：

```
XTP config>add pvc
Local PVC Range Start [1]?
Local PVC Range End [1]?
Local X.25 DTE address [ ]? 101
Remote PVC Range Start [1]?
Remote PVC Range End [1]?
Remote X.25 DTE address [ ]? 301
```

注：

1. PVC をルーター構成に追加するにあたっては、X.25 内に PVC を構成する必要もあります。X.25 インターフェースの構成に関する詳細については、ソフトウェア使用者の手引きを参照してください。
2. ローカル XTP の場合は、両方向に PVC を定義する必要があります。この定義が必要なのは、ルーターがローカル機能とリモート機能の両方を

XTP 構成コマンド (Talk 6)

実行するためです。たとえば、ローカル XTP を使用するとき、ローカル PVC 8 とリモート PVC 10 を定義する場合は、次のようにします。

```
XTP config>add pvc
Local PVC Range Start [1]? 8
Local PVC Range End [1]? 8
Local X.25 DTE address [ ]? 108
Remote PVC Range Start [1]? 10
Remote PVC Range End [1]? 10
Remote X.25 DTE address [ ]? 301

XTP config>add pvc
Local PVC Range Start [1]? 10
Local PVC Range End [1]? 10
Local X.25 DTE address [ ]? 310
Remote PVC Range Start [1]? 8
Remote PVC Range End [1]? 8
Remote X.25 DTE address [ ]?108
```

3. PVC の範囲は、PVC range start および PVC range end パラメーターによって定義できます。回線数は、ローカル PVC 範囲にもリモート PVC 範囲にも同じ数を定義する必要があります。たとえば、ローカル PVC 範囲に 1 つの回線が定義されている場合、リモート PVC 範囲にも 1 つの回線を定義しなければなりません。
4. 定義する PVC の範囲は 1 ~ 255 である必要があります。

注: PVC をルーター構成に追加するにあたっては、X.25 内に PVC を構成する必要もあります。X.25 インターフェースの構成に関する詳細については、ソフトウェア使用者の手引きを参照してください。

Change

ピア・ルーター、リモート DTE、または PVC を XTP 構成から変更します。

構文 :

```
change peer-router
remote-dte
pvc
```

peer-router

特定のピア・ルーターを XTP 構成から変更します。

例 :

```
change peer-router
Router IP Address [0.0.0.0]?128.185.100.2
```

remote-dte

XTP 構成内のリモート DTE を変更します。

例 :

```
change remote-dte
DTE address [ ]?401
Peer router's internal IP Address [0.0.0.0]?128.185.100.2
Peer router's internal IP Address [0.0.0.0]?
```

pvc

Local PVC Range Start パラメーターによって定義済みの範囲内の、すべての PVC の PVC 定義を変更します。

例 :

```
change pvc
Local PVC Range Start [1]?1
Local DTE address [ ]?301
```

Delete

ローカル DTE、ピア・ルーター、リモート DTE、または PVC を XTP 構成から削除します。

構文：

```
delete                bi-cug
                        cug
                        local-dte
                        peer-router
                        remote-dte
                        pvc
```

bi-cug このインターフェイスが使用した相互閉域接続ユーザー・グループ番号を削除します。

有効値：

- Y** 現行 CUG を削除します。
- N** 現行 CUG を削除しません。
- ALL** 残りの CUG をすべて削除します。
- Q** 残りの CUG の削除を停止します。

例：

```
delete bi-cug
Delete Pref BI-CUG [Y]?
Delete BI-CUG (2) [Y]? N
Delete BI-CUG (3) [Y]? q
```

cug このインターフェイスが使用した閉域ユーザー・グループ番号を削除します。このコマンドの働きは、**delete bi-cug** の場合に似ています。

例：

```
del cug
Delete Pref CUG [Y]?
Delete CUG (2) [Y]?
Delete CUG (3) [Y]? q
```

local-dte

特定のローカル・インターフェイスを XTP 構成から削除します。

例：

```
delete local-dte
Interface number [0]?1
DTE address [ ]?101
Record deleted
```

peer-router

特定のピア・ルーターを XTP 構成から削除します。

例：

XTP 構成コマンド (Talk 6)

```
delete peer-router
Router IP Address [0.0.0.0]?128.185.100.2
Record deleted
```

remote-dte

特定のリモート DTE を XTP 構成から削除します。

例 : **delete remote-dte**

```
DTE address [ ]?401
```

pvc Local PVC Range Start パラメーターによって定義済みの範囲内の、すべての PVC の PVC 定義を削除します。

例 :

```
delete pvc
Local PVC Range Start [1]?1
Local DTE address [ ]?301
Record deleted
```

Enable

XTP 転送機能を起動します。

構文 : enable-xtp

例 : **enable-xtp**

Disable

XTP 転送機能を停止します。

構文 : disable-xtp

例 : **disable-xtp**

Set

XTP キープアライブ・タイマーを設定します。

構文 : keep-alive-timer

例 :

```
set keep-alive-timer
Keepalive timer in seconds [10]?60
```

List

インターフェース、ピア・ルーター、リモート DTE、または PVC をリストします。

構文 :

```
list                                all
                                     cugs
                                     interface
                                     router
                                     shows
```

keep-alive-timerlocal-dtespeer-routersremote-dtespvcsxtp-status

all XTP 用として構成されたインターフェース、ピア・ルーター、リモート DTE、および PVC をすべて表示します。

例 :**list all**

STATUS: XTP-DISABLED

Local DTEs:

Interface	DTE Address	Calling DTE address is optional
1	44444	
	Pref CUG : 7777	Others : 9999 0
	Pref BI-CUG : 0	Others :
4	33333	Calling DTE address is optional
	Pref CUG : 1	Others : 2 3 4 5
	Pref BI-CUG : 6	Others : 7 8 9 10

Peer Routers Connection Timeout

Remote DTEs:

DTE Address Peer Router(s)

PVCs:

Local PVC LCN Range	Local DTE Address	Remote PVC LCN Range	Remote DTE Address
Pref CUG : 114	Others : 314 478		
Pref BI-CUG : 1	Others : 1 1 1 1111		

KEEP-ALIVE-TIMER: 10 seconds

cugs XTP プロトコルに関して定義された CUG および BI-CUG 番号をリストします。

keep-alive-timer

XTP 用として構成されたキープアライブ時間をすべて表示します。

local-dtes

XTP 用として構成されたローカル DTE をすべて表示します。

例 :**list local-dtes**

Local DTEs:

Interface	DTE Addr	Calling DTE address is required
1	101	Calling DTE address is required
2	201	Calling DTE address is required

peer-routers

XTP 用として構成されたピア・ルーターをすべて表示します。

例 :**list peer-routers**

```
Peer Routers:
128.185.100.2
128.185.100.3
```

XTP 構成コマンド (Talk 6)

pvcs XTP 用として構成された PVC をすべて表示します。

例 -

```
list pvcs
```

```
PVCs:
```

Local PVC LCN Range	Local DTE Address	Remote PVC LCN Range	Remote DTE Address
1 - 1	100	1 - 1	301

remote-dtes

XTP 用として構成されたリモート DTE をすべて表示します。

例 :

```
list remote-dtes
```

Remote DTEs: DTE Address	Peer Router
301	128.185.100.2
401	128.185.100.3
402	128.185.100.3
403	128.185.100.3
404	128.185.100.3

xtp-status

使用可能か使用不可かを示す XTP の状態を表示します。

例 :

```
list xtp-status
```

```
STATUS: XTP-ENABLED
```

XTP 監視コマンド

この節では XTP 監視コマンドについて説明します。これらのコマンドを使用すると、現在アクティブのインターフェース、ピア・ルーター、リモート DTE、PVC、および SVC を表示させることができます。また、インターフェース、DTE、またはピア・ルーターを動的に追加または削除することもできます。

XTP> プロンプトを表示させるには、監視 (+) プロンプトで **protocol xtp** と入力します。

```
+protocol xtp
X.25 Transport Console
XTP>
```

XTP 監視コマンドは、XTP> プロンプトで入力します。

表 63. XTP 監視コマンドの要約

コマンド	機能
? (Help)	このコマンド・レベルで使用可能なコマンドをすべて表示するか、特定のコマンドに関するオプション (ただし、選択可能な場合) をリストします。 12 ページの『ヘルプを得る』を参照してください。
Add	ローカル DTE、リモート DTE、またはピア・ルーターを動的に追加します。
Delete	ローカル DTE、リモート DTE、またはピア・ルーターの構成を動的に削除します。
List	個々の PVC または SVC 統計、および一般情報を表示します。
Exit	直前のコマンド・レベルに戻ります。 13 ページの『下位レベル操作環境を終了する』を参照してください。

Add

インターフェース、ピア・ルーター、またはリモート DTE を XTP 構成に追加します。

構文 :

```
add                               local-dtes
                                       peer-router
                                       remote-dtes
```

local-dtes

ローカル・インターフェースを XTP 構成に追加します。

例 :

```
add local-dtes
Interface number [0]?1
DTE address [ ]?101
```

peer-router

ピア・ルーターを XTP 構成に追加します。

例 :

```
add peer-router
Router's IP Address [0.0.0.0]?128.185.100.2
```

remote-dtes

リモート DTE を XTP 構成に追加します。

例 :

```
add remote-dtes
Peer router's IP Address [0.0.0.0]?128.185.100.2
DTE address [ ]?301
DTE address [ ]?
```

Delete

ローカル DTE、ピア・ルーター、またはリモート DTE をルーター構成から削除します。

構文 :

```
delete                             local-dtes
                                       peer-router
                                       remote-dtes
```

local-dtes

ローカル・インターフェースを XTP 構成から削除します。

例 :

```
delete local-dtes
Interface Number [0]?1
DTE address [ ]?101
DTE address [ ]?
```

XTP 監視コマンド (Talk 5)

peer-router

ピア・ルーターを XTP 構成から削除します。

例 : **delete peer-router**

Router's IP Address [0.0.0.0]?**123.185.100.2**

remote-dtes

リモート DTE を XTP 構成から削除します。

例 :

delete remote-dtes

DTE address []?**401**

DTE address []?

List

現在アクティブのインターフェース、ピア・ルーター、リモート DTE、PVC、および SVC を表示します。

構文 :

```
list                                all
                                     xtp-status
                                     local-dtes
                                     peer-routers
                                     remote-dtes
                                     pvc
                                     pvc-detailed
                                     pvc-all-detailed
                                     svcs
                                     svc-detailed
                                     svc-all-detailed
```

all すべての list コマンド・オプションの出力を表示します。

例 :

list all

```
STATUS: XTP-ENABLED
KEEP-ALIVE TIMER = 20 seconds
```

LIST OF LOCAL DTES

```
-----
Interface      Local
No             DTE
1              101    Calling DTE address is required
2              201    Calling DTE address is required
```

LIST OF PEER ROUTERS

```
-----
Router          CNN      Number  Received      Sent
                State   of Ckts  Pkts  Bytes  Pkts  Bytes
128.185.100.3  Active  15      60    1533   12    142
128.185.100.2  Active  12      63    1620   10    130
```


LIST OF REMOTE DTES

```

-----
Remote   Router
DTE      IP
404      128.185.100.3
403      128.185.100.3
402      128.185.100.3
401      128.185.100.3
301      128.185.100.2

```

LIST OF PVCS

```

-----
Index    Int   PVC   Local   Local   Remote   Remote
No       No   State LCN     DTE     LCN     DTE
1         1   Active LCN     100     301

```

LIST OF SVCS (list svcs)

```

-----
Index    Int   Logical   SVC     Local   Remote   Peer
No       No   Channel   State   DTE     DTE     Router
1         2     5         ACT     333333333333 444444444444 3.3.3.3

```

SVC 1 IN DETAIL (list svc-detailed)

```

-----
Int     Log   SVC     Received   Sent   Dropped
No      Chn  State   Pkts      Bytes Pkts      Bytes Pkts      Bytes
2       5    ACT     2         116   2         106   0         0

```

LIST OF SVCS (svcs-all-detailed)

```

-----
Int     Log   SVC     Received   Sent   Dropped
No      Chn  State   Pkts      Bytes Pkts      Bytes Pkts      Bytes
2       5    ACT     1         7     1         2     0         0

```

xtp-status

XTP が使用可能か使用不可かを表示し、キープアライブ・タイマーに指定された時間を表示します。

例：

```
list xtp-status
```

```
STATUS: XTP-ENABLED
KEEP-ALIVE-TIMER = 20 seconds
```

local-dtes

XTP 用として構成されたインターフェースをすべて表示します。

例：

```
list local-dtes
```

LIST OF LOCAL DTES

```

-----
Interface  Local
No         DTE
1          101   Calling DTE address is required
2          201   Calling DTE address is required

```

peer-routers

XTP 用として構成されたピア・ルーターをすべて表示します。

例：

```
list peer-routers
```

LIST OF PEER ROUTERS

```

-----
Router      CNN   Number   Received   Sent
            State of Ckts  Pkts      Bytes Pkts      Bytes
128.185.100.3 Active 15       60       1533 12       142
128.185.100.2 Active 12       63       1620 10       130

```

remote-dtes

XTP 用として構成されたリモート・インターフェースをすべて表示します。

XTP 監視コマンド (Talk 5)

例 :

```
list remote-dtes
LIST OF REMOTE DTES
-----
Remote      Router
DTE         IP
404         128.185.100.3
403         128.185.100.3
402         128.185.100.3
401         128.185.100.3
301         128.185.100.2
```

pvc XTP 用として構成された PVC をすべて表示します。

例 :

```
list pvcs
LIST OF PVCS
-----
Index      Int      PVC      Local      Local      Remote      Remote
No         No      State   LCN        DET        LCN         DTE
1          1      Active  100        100        301
```

pvc-detailed

特定の PVC 定義に関する詳細情報を表示します。索引番号のリストが必要な場合は、xtp> プロンプトで **list all** と入力します。

例 :

```
list pvc-detailed
PVC Index Number [1]?1
PVC 1 IN DETAIL
-----
Int      PVC      Received      Sent      Dropped
No      State   Pkts  Bytes  Pkts  Bytes  Pkts  Bytes
1      ACTIVE  55    3220  35    2350  15    1870
```

pvcs-all-detailed

すべての PVC 定義に関する詳細情報を表示します。

例 :

```
list pvcs-all-detailed
LIST OF PVCS
-----
INT Local      PVC      Received      Sent      Dropped
No  LCN        State   Pkts  Bytes  Pkts  Bytes  Pkts  Bytes
1   100        ACTIVE  55    3220  35    2350  15    1870
```

svcs すべての SVC 定義を表示します。

例 :

```
list svcs
LIST OF SVCS
-----
Index      Int LOG      SVC      Local      Remote      Peer
No         No Chan  State   DTE        DTE        Router
1          1      1      Active  200        401        3.3.3.3
2          1      1      Active  200        402        3.3.3.3
3          2      2      Active  200        403        3.3.3.3
4          2      2      Active  200        404        3.3.3.3
```

svc-detailed

特定の SVC 定義に関する情報を表示します。

例 :

```
list svc-detailed
SVC Index Number [1]?1
SVC 1 IN DETAIL
-----
```

XTP 監視コマンド (Talk 5)

Int No	LOG Chan	SVC State	Received		Sent		Dropped	
			Pkts	Bytes	Pkts	Bytes	Pkts	Bytes
1		ACTIVE	75	4220	55	3350	20	870

svcs-all-detailed

すべての SVC 定義に関する情報を表示します。

例 :

```
list svcs-all-detailed
```

```
LIST OF SVCS
```

```
-----  
Index      Int Log   SVC      Received      Sent      Dropped  
No         No  Chn  State   Pkts  Bytes  Pkts  Bytes  Pkts  Bytes  
1          1   1    ACTIVE  4220  55    550   20    870  
2          1   1    ACTIVE  3220  40    2350  15    970  
3          2   2    ACTIVE  4003  50    3892  20    870  
4          2   2    ACTIVE  3967  58    4167  12    800
```

XTP 監視コマンド (Talk 5)

第37章 フレーム・リレー・インターフェースの使用

この章では、フレーム・リレー・インターフェースについて説明します。この章は以下の節に分かれています。

- 『フレーム・リレーの概説』
- 522ページの『フレーム・リレー・ネットワーク管理』
- 524ページの『フレーム・リレー・データ速度』
- 528ページの『回線輻輳 (ふくそう)』
- 531ページの『フレーム・リレー上の帯域幅予約』
- 531ページの『フレーム・リレー構成プロンプトの表示』
- 531ページの『フレーム・リレー基本構成手順』
- 532ページの『フレーム・リレー PVC マネージメントの使用可能化』
- 533ページの『フレーム・リレー SVC マネージメントの使用可能化』

フレーム・リレーの概説

フレーム・リレー (FR) プロトコルとは、X.25 のパケット交換とポート共用を、高速で遅延の少ない時分割多重 (TDM) 回線交換と組み合わせて、相互接続パケットを転送する方式です。FR を使用すると、複数の LAN を、複数のポイント・ポイント・バーチャル・サーキット (VC) をもつ単一の高速 (1.54 Mbps) WAN リンクに接続することができます。FR は、以下の機能を提供します。

- 高いスループットと少ない遅延。D チャネル (LAPD) データ・リンク・プロトコルであるリンク・アクセス・プロトコルの中心機能 (誤り検出、アドレッシング、および同期) を利用することにより、FR ではすべてのネットワーク・レイヤー (レイヤー 3) の処理を不要にします。FR は、中心機能のみを使用することにより、各フレームの処理の遅延を減らします。
- 輻輳 (ふくそう) 検出。逆方向明示的輻輳 (ふくそう) 通知 (BECN) または順方向明示的輻輳 (ふくそう) 通知 (FECN) を受信すると同時に、ルーターは制御下でのトラフィックの減速を開始するので、これによってFR ネットワークの完全な遮断が回避されます。
ルーターは、統合リンク・レイヤー・マネージメント (CLLM) 輻輳 (ふくそう) メッセージを受信した場合も、トラフィックの減速を開始することができます。CLLM は、フレーム・リレー・ネットワークの動作に関する追加管理情報を、接続された DTE に提供する、フレーム・リレー標準のオプション部分です。
- 回線アクセスと制御。ルーターは非構成回線 (オーファン回線) の利用可能性を動的に確認するので、これらの新規回線へのアクセスを制御することができます。
- ネットワーク管理オプション。ネットワークの要件に応じて、FR プロトコルは、ローカル・ネットワーク管理インターフェースを使用して動作することも、使用せずに動作することもできます。
- 多重化プロトコル。1 つの VC を使用して複数のプロトコルを渡します。

フレーム・リレーの使用

- データ圧縮。FRF.9 標準がサポートされます。詳細については、機構の使用と構成のデータ圧縮サブシステムの使用を参照してください。
- データ暗号化。専用暗号化体系が使用されます。詳細については、機構の使用と構成の暗号化の概説を参照してください。

FR は、誤り訂正または再送の機能は提供しません。FR は、ホスト装置の機能に依存して、誤りのないエンド・エンド間のデータ転送を行います。

フレーム・リレー・ネットワーク

FR ネットワークは、FR サービスを提供する FR バックボーン (FR キャリアによって提供される FR スイッチから成る) から構成されます。ルーターは、FR 接続装置として機能します。ルーターは FR フレームをカプセル化し、それらをデータ・リンク接続識別子 (DLCI) に基づいてネットワーク上でルーティングします。DLCI は、ルーターと FR あて先装置間の PVC または SVC を識別する媒体アクセス制御 (MAC) アドレスです。たとえば、図39 では、ルーター B からルーター D に送られるパケットは、ルーター D に到達するために DLCI は 19 になりますが、ルーター D からルーター B に送られるパケットの DLCI は 16 になります。

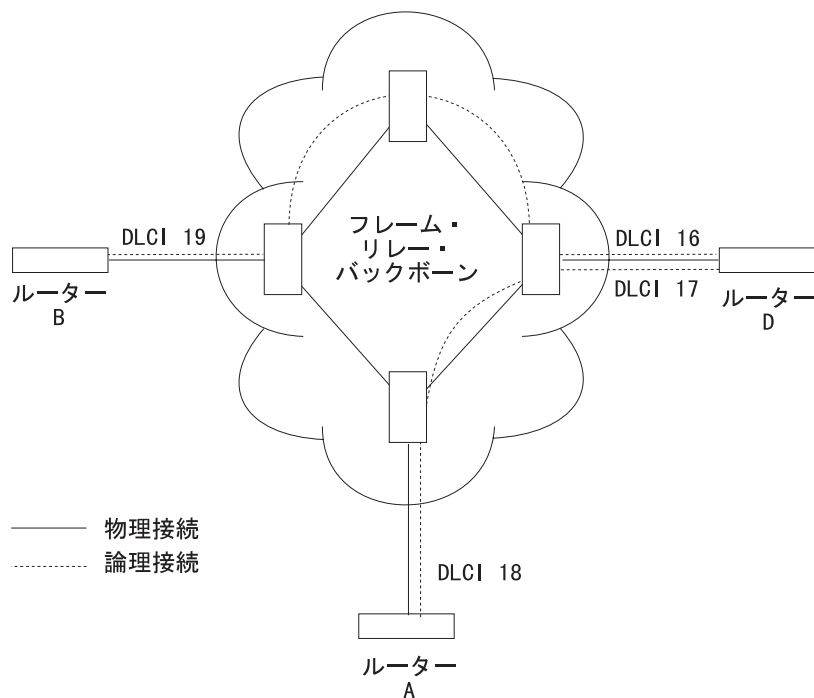


図39. フレーム・リレー・ネットワーク内の DLCI

DLCI は、ローカルまたはグローバルの意味を持つことができます。ローカル DLCI は、ネットワークへの入り口点で有効であり、グローバル DLCI はネットワーク全体で有効です。ただし、ユーザーから見ると、ルーターがパケットをルーティングするのに使用する DLCI は、ユーザーがフレームのグローバルまたはローカルあて先に対応付ける DLCI ということになります。DLCI は、FR 構成プロセスで構成するか、あるいは FR マネージメントを通して確認されます。

フレーム・リレーの使用

FR PVC は、事前定義された接続で、FR ネットワークを通じてデータのルートを決めるために使用されます。ネットワーク内部の PVC に割り振られる帯域幅は加入時オプションで、PVC がこれを使用するかどうかにかかわらず、PVC に割り当てる必要があります。

フレーム・リレー・ネットワークには、次のような特性があります。

- フレームを透過的に伝達します。ネットワークが変更できるのは、DLCI、輻輳（ふくそう）ビット、およびフレーム・チェック・シーケンスだけです。ハイレベル・データ・リンク制御（HDLC）フラグおよびゼロ・ビット挿入により、フレームの区切り、配列、および透過性を実現します。
- 伝送誤り、フォーマット誤り、および運用誤り（不明 DLCI を持つフレーム）を検出します。
- 個々の VC 上のフレーム転送順序を保存します。
- フレームの確認または再送は行いません。

フレーム・リレー・スイッチド・バーチャル・サーキット

フレーム・リレー・スイッチド・バーチャル・サーキット（SVC）は、フレーム・リレー・ネットワーク内に“カットスルー”ルーティングを設定する能力を提供し、DTE 間の中間ルーター・ホップを最小化もしくは除去します。これにより、ネットワークの複雑さを単純化することができ、DTE の性能も向上します。

SVC が PVC に代わってネットワーク帯域幅を保持し、帯域幅コストを削減することもできます。

FR SVC 標準は、ISDN 標準のサブセットで、ISDN と同じ多くの利点を提供するとともに、複雑さも少なくなります。

FR SVC では以下のプロトコルがサポートされます。

- AppleTalk 2
- ARP
- ブリッジング
- DECnet IV
- DLSw
- IP/OSPF/RIP/BGP4
- IPX

SVC を必須にすることはできません。また、必須グループに属することもできません。

フレーム・リレー・インターフェースの初期化

フレーム・リレー・インターフェース上の PVC の状況を判別するために、ローカル管理インターフェース（LMI）を使用します。ローカル管理インターフェース（LMI）が使用可能な場合、ルーターと FR スイッチ間の LMI フレームの交換が正常に行われると、FR インターフェースはアクティブになります。しかし、その DLCI の相手側ルーターへの PVC 状況がアクティブであることが LMI 状況メッセージで示される

フレーム・リレーの使用

までは、別のルーターとの間でのデータの受信または送信を行うことはできません。また、FR インターフェースの状態が PVC の状態と結合されているために、LMI または Q.922 交換が正常に行われてもインターフェースが起動しないといった事態が生じることもあります (詳細については、518ページの『フレーム・リレー・インターフェースの状態に影響を与える PVC 状態の構成』を参照してください)。

LMI が使用可能になっておらず、SVC が使用可能な場合、ルーターと隣接装置との間で Q.922 フレームの交換が正常に行われると、フレーム・リレー・インターフェースはアクティブになります。この時点で、すべての PVC はアクティブとみなされます。ただし、SVC がアクティブになるのは、Q.933 活動化交換が正常に完了した後です。

PVC 状態は、すべての PVC について、アクティブまたは非アクティブとして示されます。アクティブ PVC は、エンド・システムへの完全なコネクションが確立されています。非アクティブ PVC は、エンド・システムまたは FR スイッチのいずれかがオフラインであるために、エンド・システムへの完全なコネクションが確立されていません。

たとえば、図40 では、ルーター B はルーター D への PVC が構成されています。ルーター B は、FR スイッチ B を介して FR マネージメントと正常に相互動作しています。別の FR スイッチがダウンしているか、エンド・システムがダウンしているために、エンド・エンド PVC コネクションは確立されていません。ルーター B は、その PVC について非アクティブ状態を受け取ります。

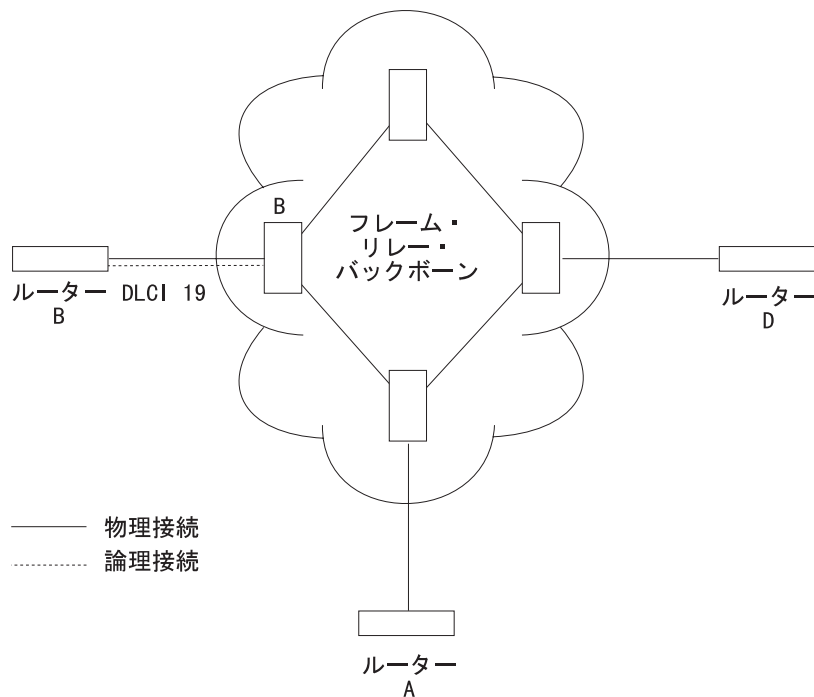


図40. フレーム・リレー・ネットワーク内の DLCI

LMI および SVCが使用不可にされ、FR インターフェースがシリアル・ライン上で稼働し、DTE ケーブルが使用されている場合、FR プロトコルが DTR および RTS モデム制御信号を代入します。(X.21 の場合は、Control 信号が代入されます。)

DSR、CTS、および DCD モデム制御信号がオンになると、FR インターフェースはアップになります。(X.21 が使用されている場合、Indication モデム制御信号がオンになると、FR インターフェースはアップになります。) DSR、CTS、または DCD がオフであるか、あるいは X.21 が使用されている場合は、Indication 信号がオフのときは、FR インターフェースはダウンしているか、テスト状態にあります。したがって、FR スイッチまたは他の FR DTE (FR DTE と DTE の接続性のために構成されている場合) が失われた場合、使用されているモデム、モデム・エリミネーター、または DSU が、これらの信号の 1 つまたは複数ドロップしていないか確認する必要があります。

オーファン回線

オーファン・パーマnent・バーチャル・サーキットとは、ルーターには構成されていないが、ネットワーク管理エンティティのアクションを通して間接的に確認された PVC のことです。たとえば、518ページの図41 では、ルーター B には、ルーター D への構成された PVC がありますが、ルーター A への構成された PVC はないものと想定しています。ルーター A がルーター B への PVC を構成すると、ルーター B は、LMI メッセージからルーター A への PVC を確認し、それをオーファンとして分類します。

オーファン PVC は、**enable orphan-circuit** および **disable orphan-circuit** コマンドを使用してそれらを使用可能または使用不可にすることを除いて、構成された回線と同じに扱われます。

オーファン回線を使用不可にすると、構成されていない回線からネットワークに無許可で入るのを防止できるので、ネットワークのセキュリティー手段を追加できます。オーファン回線を使用可能にすると、ルーターは、構成されていなかった回線を介してパケットを転送することができます。通常ならば廃棄されていたパケットが転送できるようになります。

フレーム・リレーの使用

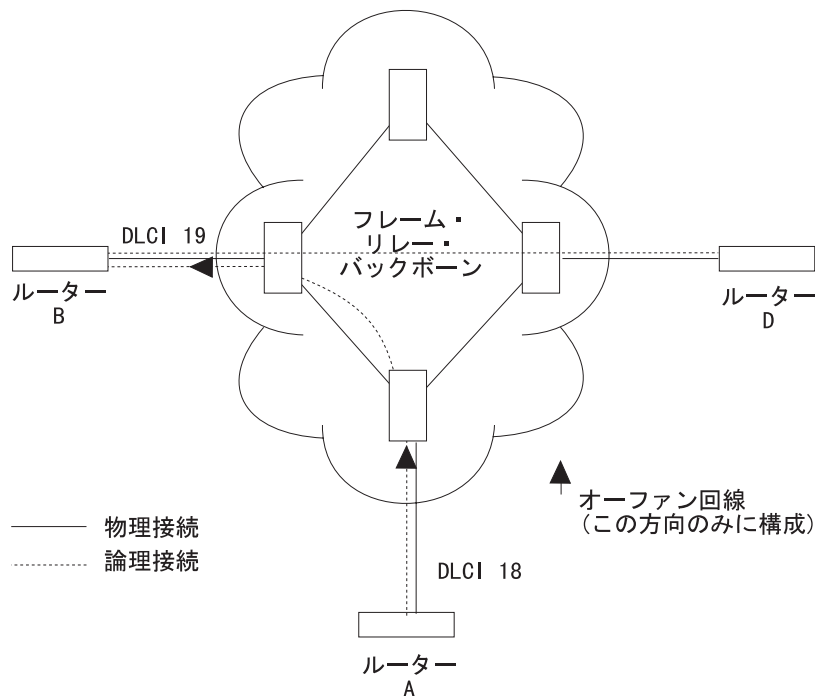


図41. オーファン回線

オーファン・スイッチド・バーチャル・サーキットは、ルーターには構成されていないが、コールインを受信したとき作成される SVC です。これは、図41 と類似しています。ただし、LMI の代わりに Q.933 メッセージを使用して回線を生成し、該当するパラメーターをそれと関連付けます。オーファン SVC は、**enable switched-virtual-circuit** コマンドのコールイン・オプションを使用してそれらを使用可能または使用不可にすることを除いて、構成された SVC と同じに扱われます。

フレーム・リレー・インターフェースの状態に影響を与える PVC 状態の構成

以下により、フレーム・リレー・インターフェースの動作を制御することができます。

1. 『No-PVC』 機能を使用可能にする
2. 『必須 PVC』 を構成する
3. 『必須 PVC グループ』 を構成する

フレーム・リレー 『No-PVC』 機能を使用可能にした場合、インターフェース上にアクティブの PVC が存在しないと、フレーム・リレー・インターフェースは非アクティブになります。少なくとも 1 つの PVC がアクティブの場合、ルーターと FR スイッチ間で LMI 交換が正常に行われると、フレーム・リレー・インターフェースはアクティブになります。

PVC を 『必須 PVC』 として構成することができます。ある PVC が必須であるが、グループに含まれていない場合、その PVC が非アクティブになると、フレーム・リレー・インターフェースは非アクティブになります。その PVC がアクティブになっ

フレーム・リレーの使用

HDLC フラグ

これらのフラグは、最初と最後のオクテットにあり、フレームの開始と終了を示します。

データ・リンク接続識別子 (DLCI)

この 10 ビットのルーティング ID は、オクテット 2 のビット 3 ~ 8 およびオクテット 3 のビット 5 ~ 8 にあります。 DLCI は、回線の MAC アドレスです。 DLCI により、ユーザーおよびネットワーク管理は、そのフレームが特定の PVC から来たことを識別することができます。また DLCI により、1 つの物理リンクを介する複数の PVC の多重化が可能になります。

コマンド/レスポンス (C/R)

このフィールドの使用は、フレーム・リレー標準には定義されていません。このフィールドはネットワークを経由して透過的に渡されます。

拡張アドレス

このバージョンの FR は、拡張アドレス方式をサポートしません。

順方向明示的輻輳 (ふくそう) 通知 (FECN)

FR バックボーン・ネットワークはこのビットを 1 にセットすることにより、PVC 上のこのフレームが送信されている方向で輻輳 (ふくそう) が発生していることを、フレームを受信するユーザーに通知します。 **enable throttle-transmit-on-fecn** コマンドを使用すれば、装置が FECN を受信する方向のデータ伝送を減速するように、装置を構成することができます。また、**enable notify-fecn-source** コマンドを使用して、FECN の発信元に送信するデータ・フレームに BECN ビットをセットすることもできます。

APPN 高性能ルーティング (HPR) は、このビットがセットされているのを検出し、高速トランスポート・プロトコルの適応速度フロー/輻輳 (ふくそう) 制御アルゴリズムにより、データ送信速度を調整できるようにします。このアルゴリズムは、トラフィックのバーストと輻輳 (ふくそう) を防止し、スループットを高レベルに維持します。

逆方向明示的輻輳 (ふくそう) 通知 (BECN)

FR バックボーン・ネットワークはこのビットを 1 にセットすることにより、この PVC 上でこのルーターによって送信されたフレームが輻輳 (ふくそう) に遭遇したことをユーザーに通知します。次にルーターは、CIR または輻輳 (ふくそう) 監視が使用可能にされている場合、ユーザー定義の CIR 以下の速度まで減速し始めます。PVC の CIR は、FR サービス提供者によって提供され、**add permanent-virtual-circuit** コマンドを使用して構成されます。

廃棄可能性 (DE)

フレーム・リレー・ネットワークは、PVC 上の CIR を超過した転送データを廃棄することがあります。ルーターは、DE ビットをセットすることにより、一部のトラフ

ックを廃棄可能と見なすように指示することができます。該当する場合、フレーム・リレー・ネットワークは廃棄可能としてマーク付けされたフレームを廃棄します。これによって、廃棄可能のマークが付いていないフレームがネットワークを通過できるようになることがあります。廃棄可能なトラフィックを識別するには、次のようにします。

1. フレーム・リレー・インターフェースおよび廃棄可能にするトラフィックが通るすべての FR 回線上に BRS を構成する。
2. **assign** コマンドを使用して、BRS トラフィック・クラスにプロトコルまたはフィルターを割り当てる。このプロトコルまたはフィルター・トラフィックについて、DE ビットをオンにセットするかどうかを指定します。

ユーザー・データ

このフィールドには、転送されるプロトコル・パケットが入っています。このフィールドには最大 8188 オクテットを含めることが可能ですが、フレーム・チェック・シーケンス (FCS) が効率的に誤りを検出できるのは、最大 4096 オクテットまでのデータです。プロトコル・データの前に、RFC 1490 で定義されているフレーム・リレー・カプセル化ヘッダーが置かれています。

フレーム・チェック・シーケンス

このフィールドは、HDLC および LAPD フレームが使用する標準 16 ビット巡回冗長検査 (CRC) です。このフィールドは、フレームの開始フラグと FCS の間のビットに発生したビット誤りを検出します。

注: HSSI アダプター上にフレーム・リレー・インターフェース用の 32 ビット CRC の使用を構成することができます。

フレーム・リレー・ネットワークを介したフレーム転送

FR プロトコルは、カプセル化のためにパケットを受信すると、パケットのネットワーク・アドレスをアドレス解決プロトコル (ARP) キャッシュ内のエントリと比較します。ARP キャッシュにネットワーク・アドレスに一致する DLCI 番号が含まれている場合、FR プロトコルは、そのパケットをフレームにカプセル化し、指定されたローカル DLCI を介してフレームを転送します。ARP キャッシュに一致するものが含まれていない場合、FR プロトコルは、インターフェース上のすべての構成済み PVC 上に ARP 要求を送信します。該当するエンドポイントが ARP レスポンスで応答した場合、FR プロトコルは、その ARP レスポンスを受信したローカル DLCI を ARP キャッシュに追加します。同じネットワーク・アドレスあての後続のデータ・パケットは、フレームにカプセル化され、そのローカル DLCI を介して転送されます。

プロトコル・アドレス

プロトコル・アドレスは、ローカルに構成された名前を使用して、静的に FR ネットワーク PVC アドレスまたは SVC にマップすることも、逆 ARP または ARP を介して動的に見付けることもできます。(ARP および逆 ARP についての詳細は、プロトコルの構成と監視 解説書 を参照してください。) いずれの方法も、522ページの表64 に示すように、プロトコルに依存します。

フレーム・リレーの使用

注: 静的プロトコル・アドレスは、静的 ARP エントリーとも呼ばれます。静的 ARP エントリーは、**add protocol-address** コマンドを使用して構成に追加します。

表 64. プロトコル・アドレス・マッピング

プロトコル・タイプ	ARP および		プロトコル構成で 構成された VC
	逆 ARP の使用	静的マッピング	
AP2	可	可	不可
IP	可	可	不可
IPX	可	可	不可
Banyan VINES**	不可	不可	不可
DNA IV	可	可	不可
OSI*, **	不可	不可	可

* プロトコル・アドレスを FR PVC にマップするためには、プロトコル・レベルで OSI を構成する必要があります。

** SVC の使用はサポートされません。

マルチキャスト・エミュレーションとプロトコル同報通信

マルチキャスト・エミュレーションは、ARP のようなマルチキャストを必要とするプロトコルが FR インターフェース上で正常に機能できるようにするオプション機能です。マルチキャスト・エミュレーションを使用すると、マルチキャスト・フレームが各アクティブ PVC 上に転送されます。**enable** および **disable multicast** コマンドを使用して、この機能をオンまたはオフにすることができます。マルチキャストを使用するプロトコルは、AP2、ARP、Banyan VINES、DNA4、IP、および IPX です。

プロトコル同報通信は、FR インターフェース上で IP RIP プロトコルが正常に機能できるようにする、もう 1 つのオプション機能です。**enable protocol-broadcast** および **disable protocol-broadcast** コマンドを使用して、この機能をオンまたはオフにすることができます。

プロトコルがフレーム・リレーを介する ARP/InARP をサポートする場合は、フレーム・リレーが回線を通してプロトコル・パケットをマルチキャストするのは、プロトコル・アドレスがその回線について確認されたか、構成されたかどうかの場合だけです。

マルチキャストは、個別 SVC の場合も、使用可能または使用不可にすることができます。マルチキャスト・オプションを **add switched-virtual-circuit** で使用してください。

フレーム・リレー・ネットワーク管理

FR ネットワークのバックボーンを提供者が FR ネットワーク管理を提供します。インターフェースで利用可能な PVC の状態情報および構成情報を FR エンド・ステーション (ルーター) に提供するのネットワーク管理の責任です。

PVC の場合、FR プロトコルは、ANSI T1.617 付録 D、ITU-T Q.933 付録 A (CCITT Q.933 付録 A と呼ばれる)、および一時ローカル管理インターフェース (LMI) マネージメント・エンティティをサポートします。これらのエンティティは、**enable**

および **disable** LMI 構成コマンドを使用して、オンまたはオフにすることができます。特に、FR LMI は以下の情報を提供します。

- 追加 PVC (オーファン) およびそれらがアクティブか非アクティブかの通知、または PVC の削除の通知
- 構成された PVC の利用可能性の通知。PVC の利用可能性は、PVC エンドポイントがハートビート・ポーリング プロセスに正常に参加できるかどうかに関係します。これについては、524ページの『リンク整合性検証報告書』で詳しく説明します。
- キープアライブ シーケンス番号交換の使用による、エンド・ステーションとネットワーク間の物理リンクの整合性の検証

FR インターフェースはネットワーク管理をサポートしますが、インターフェースが FR バックボーンを介して動作するためには、マネージメントを FR バックボーン上で実行する必要はありません。たとえば、バックツーバック・テストのマネージメントを使用不可にすることができます。

SVC の場合、FR プロトコルは、FRF 4 (フレーム・リレー・フォーラム・インプリメンテーション・アグリーメント 4) をサポートします。これには、ANSI Q.922 および ANSI Q.933 のサブセットのインプリメンテーションが含まれます。Q.922 は、ルーターとネットワークとの間の物理リンクの保全性の検査を提供します。Q.933 は、ネットワークでの SVC の確率と切断のための手段を提供します。SVC が使用されている場合、Q.922 と Q.933 は常に使用可能になっています。

管理状態報告書

要求に応じて、FR LMI 2 種類の状態報告書、つまり、全状態報告書とリンク整合性検証報告書を提供します。全状態報告書は、インターフェースが知っているすべての PVC に関する情報を提供します。リンク整合性検証報告書は、特定のエンド・ステーションとネットワーク・スイッチの間のコネクションを検証します。すべての状態照会および応答は、ANSI T1.617 付録 D および ITU-T Q.933 付録 A の場合は DLCI 0 を介して、また中間 LMI マネージメントの場合は DLCI 1023 を介して送信されます。

全状態報告書

FR インターフェースが全状態報告書を必要とする場合、ルーターの FR プロトコルは、全状態報告書を要求する状態照会メッセージを FR ネットワーク・バックボーンに送信します。状態照会メッセージは、インターフェース上のすべての PVC の状態に対する要求です。この要求を受信すると、FR マネージメントは、リンク整合性検証要素と各 PVC の PVC 状態情報要素から成る全状態報告書で応答する必要があります。(524ページの『リンク整合性検証報告書』を参照してください。)

PVC 状態情報要素には、以下の情報が入っています。すなわち、特定 PVC のローカル DLCI 番号、PVC の状態 (アクティブまたは非アクティブ)、および PVC が新しいものか、あるいはマネージメントがすでに知っている既存の PVC であるかです。

フレーム・リレーの使用

注: FR インターフェースで提供される PVC の数は、ネットワークのフレーム・サイズ、および全状態報告書に入れることができる個々の PVC 情報要素の量によって制限されます。たとえば、フレーム・サイズが 1K のネットワークの PVC の最大数は 202 です。

リンク整合性検証報告書

リンク整合性検証報告書 (ハートビート・ポーリングとも呼ばれる) には、リンク整合性検証要素が入っています。この要素は、送信シーケンス番号と受信シーケンス番号の交換が行われる場所です。シーケンス番号を交換することによって、マネージメントとエンド・ステーションは、同期リンクの整合性を評価することができます。送信シーケンス番号は、メッセージ発信元の現在の送信シーケンス番号です。受信側はこの番号を見付け、それを前回の送信シーケンス番号と比較して、この番号が正しく増分されているかどうかを検証します。受信シーケンス番号は、発信元がインターフェースを介して送信した前回の送信シーケンス番号です。送信シーケンス番号のコピーを受信シーケンス番号フィールドに入れるのは、受信側の責任です。この方法で、発信元は受信側がフレームの受信と解釈を正しく行ったことを確認できます。

あるエンド・ステーションがこのポーリング・プロセスに参加できなかった場合、マネージメントの全状態報告書機構を介して、論理接続された PVC をもつすべてのリモート・エンド・ステーションに、その PVC は非アクティブであることが通知されます。

統合リンク・レイヤー・マネージメント (CLLM)

CLLM は、業界で広くサポートされてはいませんが、一部のフレーム・リレー・スイッチの製造元で採用されているオプションの FR 管理機能です。CLLM は、LMI によって提供されるのと同じ管理情報の幾つか (特に、故障通知) を提供します。CLLM の主な用途は、接続装置に PVC の非同期輻輳 (ふくそう) 通知を提供することです。1 つの CLLM メッセージで、複数の PVC の故障または輻輳 (ふくそう) を示すことができます。フレーム・リレー・プロトコルは、CLLM について以下の標準をサポートしています。すなわち、ANSI T1.618, ITU-T (CCITT) Q.922 付録 A および ITU-T (CCITT) X.36 付録 C です。

フレーム・リレー・データ速度

この節では、フレーム・リレーのパーマネント・バーチャル・サーキット (PVC) のデータ速度について説明します。

認定情報速度 (CIR)

CIR は、通常の輻輳 (ふくそう) のない条件下の VC に対して、ネットワークがサポートすることを認定しているデータ速度です。構成または確認されたすべての VC に対して、CIR が提供されます (FR サービス提供者によって)。CIR は、VC 用として予約されている物理リンクの総帯域幅の一部で、0 と 300 bps ~ 2 Mbps * のいずれかです。64 Kbps または 1 つの DS0 チャンネルが、最も一般的です。

* 注: HSSI アダプター上の FR インターフェースの最大 CIR 値は 52 Mbps です。

add permanent-virtual-circuit、**change permanent-virtual-circuit**、**add switched-virtual-circuit**、または **change switched-virtual-circuit** 構成コマンドを使用して、CIR を定義することができます。**set circuit** コンソール・コマンドを使用すれば、CIR を動的に変更することができます。また、**set CIR-defaults** コマンドを使用して、このインターフェース上のすべてのフレーム・リレー回線に関して、デフォルトの CIR を設定することもできます。

一部のフレーム・リレー・スイッチでは、CIR を値 0 に構成することが可能です。CIR が 0 のときは、フレーム・リレー・ネットワーク・バックボーンには VC 用に予約されている帯域幅はほとんど、あるいはまったくなく、VC のトラフィックは予約されていない帯域幅を使用します。

オーファン・パーマメント・バーチャル・サーキット CIR

ルーターは、インターフェース・レベルで構成された CIR デフォルトに基づいて、オーファン回線に CIR を割り当てます。重要なデータのルーティングをオーファン回線に依存しており、CIR、Bc、および Be 値がインターフェース・レベルで構成された値と異なっている場合は、オーファン回線の代わりに PVC を定義することをお勧めします。これにより、ネットワークがサポートすることを認定している CIR を割り当てることができます。

認定バースト (Bc) サイズ

認定バースト (Bc) サイズ とは、算定時間 (Tc) 間隔 に送達することをネットワークが認定しているデータの最大量 (ビット数) です。Tc は、Bc を CIR で割った値に等しくなります ($Tc = Bc / CIR$)。CIR として 0 を構成した場合は、フレーム・リレーは Tc として 1 秒という値を使用します。

たとえば、VC の CIR を 9600 bps に設定し、認定バースト・サイズを 14 400 ビットに設定した場合、時間間隔は 1.5 秒になります。(14 400 ビット / 9600 bps = 1.5 sec)。これは、VC は 1.5 秒間に最大 14 400 ビットを転送できることを意味しています。

注: FR がサポートする最小 Tc は .1 秒です。

認定バースト・サイズと最大フレーム・サイズの関係から、このパラメーターは重要です。最大フレーム・サイズ (ビット数) が認定バースト・サイズより大きい場合、ネットワークはサイズが認定バースト・サイズを超過しているフレームを廃棄する可能性があります。したがって、認定バースト・サイズは最大フレーム・サイズ以上にすることが必要です。また、ネットワークの提供者と共に設定したバースト・サイズに等しくすることも必要です。

add permanent-virtual-circuit、**change permanent-virtual-circuit**、**add switched-virtual-circuit** または **change switched-virtual-circuit** 構成コマンドを使用して、認定バースト・サイズを設定します。**set circuit** コンソール・コマンドを使用すると、認定バースト・サイズを動的に変更することができます。また、**set**

フレーム・リレーの使用

CIR-defaults コマンドを使用して、このインターフェース上のすべてのフレーム・リレー回線に関して、デフォルトの認定バースト・サイズを設定することもできます。

装置では、ユーザーが **set CIR-defaults** コマンドを用いて設定したデフォルト値を基にして、オーファン回線に認定バースト・サイズを割り当てます。CIR を 0 に構成すると、認定バースト (Bc) サイズも 0 になります。

超過バースト (Be) サイズ

超過バースト (Be) サイズ は、CIR および Bc が非ゼロの場合、Tc ($Tc = Bc / CIR$) 期間中にルーターが PVC 上で Bc を超過して転送できる非認定データの最大量です。CIR = 0 のときは、フレーム・リレーは Tc として 1 秒という値を使用しました。

ネットワーク上では、この超過データは、認定バースト・サイズよりも成功の確率が低い状態で送達されます。Be をゼロより大きい値に設定するのは、データが廃棄されるリスクと高位レイヤーのプロトコルの性能に与える影響を容認できる場合に限ってください。Be は、ネットワークの提供者と共に設定した値に等しくする必要があります。

フレーム・リレーの構成中に、**add permanent-virtual-circuit**、**change permanent-virtual-circuit**、**add switched-virtual-circuit** または **change switched-virtual-circuit** コマンドを使用して、超過バースト・サイズを設定します。**set circuit** コンソール・コマンドを使用すると、超過バースト・サイズを動的に変更することができます。オーファン回線は、**set CIR-defaults** コマンドで設定された値に等しいデフォルトの超過バースト・サイズを受信します。CIR を 0 に構成する場合は、超過バースト (Be) サイズを非ゼロ値に構成する必要があります。また、**set CIR-defaults** コマンドを使用して、このインターフェース上のすべてのフレーム・リレー回線に関して、デフォルトの超過バースト・サイズを設定することもできます。

回線速度

回線速度 とは、インターフェースの回線速度のことです。

FR インターフェースの回線速度は、**set line-speed** 構成コマンドを使用して構成します。内部クロックを使用する場合は、回線速度の構成は必須です。ただし、外部クロックの場合も回線速度を構成することをお勧めします。輻輳 (ふくそう) 監視が使用可能になっている場合、ルーターは最大情報速度として回線速度を使用するからです。また、一部のプロトコルは、ルートのコストを計算するときに、インターフェースに構成されている回線速度を使用します。

フレーム・リレー・ダイヤル回線インターフェース上では、回線速度は構成不能です。ダイヤル回線が ISDN 基本インターフェースにマップされる場合は、64 Kbps が回線速度として使用されます。

ダイヤル回線が基本ネットワークとしてチャンネル化 T1/E1 を使用している場合は、回線速度は 64 Kbps を割り当てられたタイム・スロット数倍した値か、または 56 Kbps

(チャンネル化回線の帯域幅を 56 Kbps に設定した場合) です。たとえば、チャンネル化回線のタイム・スロット数を 3 に設定した場合は、回線速度は 192 Kbps (3 * 64 Kbps) です。

ダイヤル回線が V.25bis 基本インターフェースにマップされる場合は、V.25bis インターフェースの回線速度が FR ダイヤル回線として使用されます。

最小情報速度

最小情報速度 (IR) は、輻輳 (ふくそう) が通知されたときにルーターがそこまで減速する VC の最小データ速度です。 **set ir-adjustment** 構成コマンドを使用して、最小 IR を CIR の比率として設定します。 **set ir-adjustment** コンソール・コマンドを使用すれば、動的に変更することができます。 CIR を 0 に等しく構成した場合は、最小 IR は 1500 bps になります。

最大情報速度

maximum information rate は、ルーターが VC 上で転送する最大データ速度です。 CIR 監視機能が使用可能であり、CIR および Bc が非ゼロの場合、最大情報速度は、CIR、Bc、および Be を使用して、次のように計算します。

$$(Bc + Be) \text{ per } Tc \text{ interval}$$

CIR 監視機能が使用可能であり、CIR および Bc が 0 に構成されている場合、最大情報速度は 1 秒当たりの超過バースト・サイズ (Be) に等しくなります。

CIR 監視機能が使用可能でない場合、最大情報速度は回線速度に等しくなります。

可変情報速度

CIR 監視または輻輳 (ふくそう) 監視機能が使用可能である場合、可変情報速度 (VIR) は、構成された最小 IR から計算された最大 IR までの範囲です。ルーターが回線の輻輳 (ふくそう) を通知されると、VIR は徐々に最小情報速度まで減速され、ルーターが輻輳 (ふくそう) 通知を受信しなくなると、徐々に最大情報速度まで加速されます。 **set ir-adjustment** 構成コマンドを使用して、ルーターが輻輳 (ふくそう) を通知されたときに VIR を減速する情報速度の比率を構成します。輻輳 (ふくそう) が終わったときに VIR を徐々に加速する情報速度の比率も、このコマンドを使用して構成します。

ネットワークのインパルス・ロードを避けるために、ルーターは VC がアクティブになったときに、VIR を CIR に初期設定します。 CIR を 0 に構成した場合、VIR は超過バースト (Be) に MIR 調整比率を掛けた値に初期設定されます。たとえば、Be が 64 000 に設定され、MIR 調整比率が 25% に設定されている場合、初期 VIR は 16 000 bps になります。

場合によっては、VIR が実際上は最大値を超えても構わないことがあります。フレームの長さ (ビット数) が最大 IR より大きくても、フレーム・リレーはともかくフレームを転送します。

回線輻輳 (ふくそう)

回線の輻輳 (ふくそう) は、次の理由の 1 つによって発生します。

- 送信側が許容されるスループットより高速で転送している。
- 受信側のフレームの処理が遅過ぎる。
- 中間バックボーン・リンクが輻輳 (ふくそう) しており、結果的に、送信側が利用可能なスループット許容値より高速で転送することになる。

回線の輻輳 (ふくそう) が発生すると、ネットワークはパケットを廃棄するか、遮断する (もしくは、その両方を行う) が必要になります。

回線輻輳 (ふくそう) に応じて、ルーターは減速 を実施します。これは、構成された最小 IR まで、パケット転送の速度を段階的に減らして行くこと言います。減速は、以下の条件を満たすときに行われます。

- 回線が輻輳 (ふくそう) している。
- ルーターがフレームの送信側である。
- CIR 監視または輻輳 (ふくそう) 監視が使用可能になっている。

この節では、フレーム・リレーのデータ速度および回線輻輳 (ふくそう) の監視について説明します。

CIR の監視

CIR 監視は、ルーターが FR ネットワーク上に輻輳 (ふくそう) 状態が生じるのを防止するために各インターフェースに設定することができる、オプションのフレーム・リレー機能です。CIR 監視により、VC の VIR を、構成された最小 IR と最大 IR の間の範囲に設定することができます。

CIR 監視は、**enable cir-monitor** 構成コマンドを使用して構成し、デフォルトでは使用不可になります。CIR 監視が使用可能にされている場合、輻輳 (ふくそう) 監視をオーバーライドします。また、**enable cir-monitor** および **disable cir-monitor** コンソール・コマンドを使用して、動的に CIR 監視を使用可能にしたり、使用不可にしたりすることもできます。

輻輳 (ふくそう) 監視

輻輳 (ふくそう) 監視は、インターフェースごとに設定されるオプション機能で、VC の VIR をネットワークの輻輳 (ふくそう) に応じて変えることができます。VIR は、回線速度の最小 IR と最大 IR の間の値を取ります。デフォルトでは、輻輳 (ふくそう) 監視は使用可能になります。使用不可にするときは **disable congestion-monitor** 構成コマンドを使用し、再び使用可能にするときは **enable congestion-monitor** コマンドを使用します。また、**enable congestion-monitor** および **disable congestion-monitor** コンソール・コマンドを使用して、動的に輻輳 (ふくそう) 監視を使用可能および使用不可にすることもできます。

CIR 監視が使用可能の場合、輻輳 (ふくそう) 監視をオーバーライドします。 CIR 監視と輻輳 (ふくそう) 監視の両方とも使用不可にされている場合には、インターフェース上の各 VC の VIR は回線速度に設定され、ネットワーク輻輳 (ふくそう) に応じて減速されません。

注: 圧縮が使用可能の場合であっても、装置は非圧縮サイズのフレームを使用して、VIR が超過しているかどうかを判別します。

輻輳 (ふくそう) 通知と回避

輻輳 (ふくそう) が発生すると、FR バックボーン・ネットワークは、FECN または BECN 信号を送って、送信側と受信側に通知する責任があります。 FECN および BECN は、輻輳 (ふくそう) が発生していることを VC の各端の DTE に通知するために、フレーム内に設定されるビットです。 FECN は、フレームを受信したのと同じ方向で輻輳 (ふくそう) が発生していることを示します。送信側が輻輳 (ふくそう) の原因になっています。 BECN は、この DTE によって送信されたフレームがネットワーク輻輳 (ふくそう) の原因になっていることを示します。

オプションで、ネットワークは CLLM メッセージを使用して、PVC の輻輳 (ふくそう) 情報を伝えることができます。 CLLM メッセージは、輻輳 (ふくそう) の発生源にのみ送信され、DTE は BECN メッセージと同様に処理する必要があります。

530ページの図43 の例は、フレームがルーター X からルーター Y に送信される場合の、スイッチ B における輻輳 (ふくそう) 状態を示しています。 FR バックボーン・ネットワークは、ルーター X に送信するフレームに BECN ビットをセットして、送信するフレームが輻輳 (ふくそう) に遭遇していることをルーター X に通知します。また、FR バックボーン・ネットワークはルーター Y に対しても、FECN ビットをセットして、それが受信するフレームが輻輳 (ふくそう) に遭遇していることを通知します。

ルーターが BECN の入っているフレームを受信した場合、CIR 監視または輻輳 (ふくそう) 監視のいずれかが使用可能のときは、ルーターは VC の VIR (可変情報速度) を減速する責任があります。 ルーターは、最小 IR に達するか、BECN のないフレームが到着するまで、BECN が入っている連続フレームを受信している間、徐々に減速します。 FR では、しばしば、輻輳 (ふくそう) しきい値に達した後で複数のフレーム内に BECN を設定します。 ネットワークが BECN のある複数のフレームを設定しているとき、FR がネットワーク輻輳 (ふくそう) に過剰反応するのを避けるために、FR は最大限毎秒 1 回 VC の VIR を減速します。 こうすることによって、VIR は徐々に減速することができます。 BECN のない連続フレームを受信するようになったら、VIR を最大 IR まで徐々に加速します。

FR ネットワークの運用によっては、装置が FECN を受信した場合、装置は VC の VIR を減速して、ネットワークに送られるトラフィックの全体量をできるだけ速やかに最小化することが必要になる場合があります。 ネットワーク上の全体的な負荷を削減すると、輻輳 (ふくそう) を緩和するためにすべての VC で廃棄されるパケットの数を減らすことができます。 CIR または輻輳 (ふくそう) 監視オプションと合わせて、**throttle-transmit-on-fecn** パラメーターを使用可能にすると、装置は FECN を BECN と同様に扱うので、輻輳 (ふくそう) 通知を受け取ったときに、全体的な FR ネットワーク輻輳 (ふくそう) を軽減することができます。 throttle-transmit-on-fecn パラ

フレーム・リレーの使用

メーターは、入力と出力の両方について、専用のバッファを提供しない待ち行列化方式を採用している FR ネットワークでのみ使用してください。

throttle-transmit-on-fecn が使用可能にされている場合は、FR は、BECN または FECN を受信するたびに、それぞれ最大限毎秒 1 回 VC の VIR を減速します。

一部の FR ネットワーク・スイッチは、輻輳（ふくそう）を通知するために FECN をセットしますが、BECN はセットしません。輻輳（ふくそう）の発生元に輻輳（ふくそう）通知を提供したい場合、**notify-fecn-source** パラメーターを使用可能にすると、装置は FECN を受信した VC を介して送信するフレームに BECN をセットします。このアクションは、ネットワーク輻輳（ふくそう）の原因になっている装置に、その VC の VIR を減速するように知らせる信号を提供します。

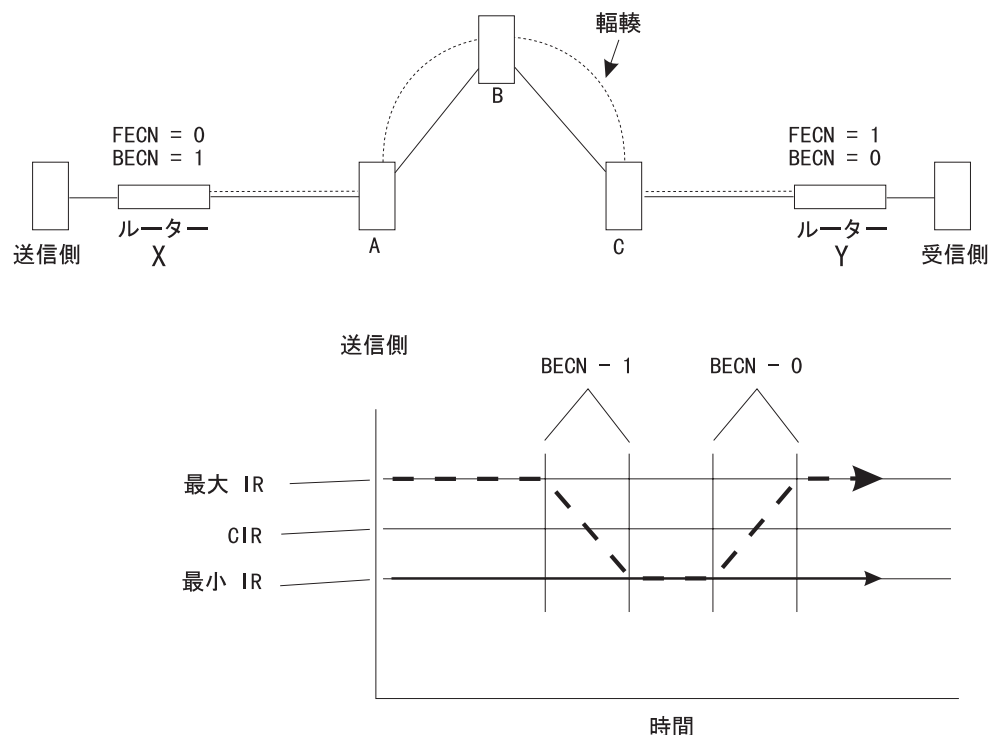


図 43. 輻輳（ふくそう）通知と減速

注：輻輳（ふくそう）が発生したときに 2 つのエンド・ステーション間に複数の DLCI が構成されている場合、最初の DLCI 上の輻輳（ふくそう）状態が解決されるまで、第 2 の DLCI を使用すれば、より高いスループットでデータを転送できる可能性があります。

同様に、ネットワークの提供者が CLLM をサポートしている場合、CLLM メッセージに入っている PVC の伝送速度を減速するようにフレーム・リレーを構成することができます。CLLM メッセージには、報告されている問題のタイプと重大度を示す原因符号が入っています。装置の反応は、原因符号および CLLM メッセージ内の各 PVC に構成されている CIR によって異なります。装置が受け取る CLLM メッセージの内容とそれに対する反応は、次のとおりです。

- 短期的状態を受け取り、PVC に構成されている CIR が非ゼロの場合、フレーム・リレー・プロトコルは、該当する PVC の伝送速度を、構成された IR 減分率で減速します。

- 長期的状態を受け取った場合、フレーム・リレー・プロトコルは、該当する PVC の伝送速度を、計算された最小情報速度に設定します。
- ファシリティーまたは装置の障害あるいは保守作業を受信した場合、または CIR がゼロに構成されていた場合、FR プロトコルは、該当する PVC への待ち行列データの転送は続けますが、輻輳 (ふくそう) 状態が解消されるまでは、高位レイヤー・プロトコルからの発信パケットは受け付けません。

ある PVC の CLLM メッセージを受信した後、装置が Ty タイマーの期間内に CLLM メッセージまたは BECN を受信しない場合、あるいは BECN を含まないフレームを受信した場合、装置は輻輳 (ふくそう) 状態が解消されたものと見なし、徐々に PVC を構成された伝送速度に戻します。輻輳 (ふくそう) 制御のために CLLM を使用している場合は、他の用途のために DLCI 1007 を構成してはなりません。

フレーム・リレー上の帯域幅予約

フレーム・リレー上の帯域幅予約については、[機構の使用と構成](#) 中の [帯域幅予約](#) および [優先待ち行列の使用](#) および [帯域幅予約の構成](#) および [監視](#) を参照してください。

フレーム・リレー構成プロンプトの表示

フレーム・リレー構成環境にアクセスするには、次のようにします。

1. OPCON プロンプト (*) で **talk 6** と入力する。
2. 構成プロンプト (Config>) で **list devices** コマンドを入力して、ルーターに構成されているインターフェースのリストを表示する。
3. **network** コマンドを入力して、フレーム・リレー構成プロンプトを表示する。ネットワーク番号は、フレーム・リレー・インターフェースの番号です。

```
Config>network
What is the network number [0] 2
Frame Relay user configuration
FR 2 Config>
```

4. フレーム・リレー・インターフェース構成プロンプト (FR Config>) で、本章で説明するコマンドを使用して、フレーム・リレー・パラメーターを構成する。

フレーム・リレー基本構成手順

この節では、フレーム・リレー・プロトコルを立ち上げて実行するのに必要な最小構成ステップについて概説します。詳しい構成情報および説明が必要な場合は、本章の構成コマンドの説明箇所を参照してください。

注: 新しい構成変更を有効にするためには、ルーターをリスタートする必要があります。

- **FR マネージメントを選択する。** FR ローカル管理インターフェース (LMI) プロトコルは、デフォルトでは ANSI になります。中間 LMI (REV1)、ANSI T1.617 付録 D マネージメント、または ITU-T/CCITT Q.933 付録 A マネージメントを使用

フレーム・リレーの使用

するネットワークに接続するオプションが提供されています。 **enable** および **set** コマンドを使用して、必要なマネージメントを使用可能にしたり、設定したりしてください。

- **PVC を追加する。** FR マネージメントが使用不可のとき、またはオーファン回線が使用不可のときに必要な必須 PVC を追加します。 FR PVC を介してブリッジしたい場合、または FR PVC を介して APPN を実行したい場合には、その PVC も構成する必要があります。 **add permanent-virtual-circuit** コマンドを使用してください。
- **FR あて先アドレスを構成する。** FR インターフェースを介して IP または IPX のようなプロトコルを実行しており、FR 上のアドレス解決プロトコル (ARP) または逆 ARP をサポートしない装置と接続している場合、**add protocol-address** コマンドを使用して、静的プロトコルとアドレス・マッピングを追加します。
- **フレーム・リレー上の帯域幅予約を構成する。** 必須の基本フレーム・リレー構成に加えて、フレーム・リレー上の帯域幅予約 (オプション機能) も構成することができます。帯域幅予約の構成については、**機構の使用と構成** の中の **帯域幅予約および優先待ち行列の使用** を参照してください。
- **廃棄可能性を構成する。** 帯域幅予約を使用時の廃棄可能性 (DE) 輻輳 (ふくそう) 制御を構成することができます。廃棄可能性の構成については、**機構の使用と構成** の中の **帯域幅予約および優先待ち行列の使用** を参照してください。
- **データ圧縮を構成する。** フレーム・リレーに対するデータ圧縮を構成することができます。データ圧縮の構成については、**機構の使用と構成** の中の **データ圧縮の使用** を参照してください。

フレーム・リレー PVC マネージメントの使用可能化

フレーム・リレーのもとには 3 つのマネージメント・オプションがあります。

- 一時ローカル管理インターフェース 改訂 1
- ANSI T1.617 付録 D マネージメント
- ITU-T/CCITT Q.933 付録 A マネージメント

フレーム・リレーのデフォルトでは、ANSI が使用可能になります。マネージメント・タイプを変更したい場合、あるいは ANSI マネージメントを再び使用可能にしたい場合は、以下の手順で行います。フレーム・リレー上のマネージメントを使用可能にするには、2 つのステップで行います。

1. FR Config> プロンプトで **enable lmi** コマンドを入力して、マネージメント・アクティビティを使用可能にする。
2. **set lmi-type** コマンドを入力して、そのインターフェースのマネージメントのタイプを選択する。

set コマンドで利用可能なマネージメント・タイプについての詳細は、533ページの表65 を参照してください。

これらのマネージメント・タイプの設定方法の例を、表の後に示してあります。詳細については、この章の **enable** および **set** コマンドの節も参照してください。

表 65. フレーム・リレー・マネージメント・オプション

コマンド	オプション	説明
set	lmi-type rev1	LMI 改訂 1 (Stratacom のフレーム・リレー・インターフェース仕様) に準拠します。
set	lmi-type ansi	ANSI T1.617 ISDN-DSS1-Signalling Specification for Frame Relay Bearer Service (付録 D と呼ばれます) に準拠します。
set	lmi-type ccitt	ITU-T/CCITT 勧告 Q.933 の付録 A - DSS1 Signalling Specification for Frame Mode Basic Call Control に準拠します。

例: **enable lmi**
 set lmi-type ansi

フレーム・リレー SVC マネージメントの使用可能化

フレーム・リレー SVC マネージメントは、SVC が使用可能になっている場合、自動的に使用可能にされます。

第38章 フレーム・リレー・インターフェースの構成と監視

この章ではフレーム・リレーの構成およびオペレーショナル・コマンドについて説明します。この章は以下の節に分かれています。

- 『フレーム・リレー構成コマンド』
- 567ページの『フレーム・リレー監視プロンプトへのアクセス』
- 567ページの『フレーム・リレー監視コマンド』
- 580ページの『フレーム・リレー・インターフェースと GWCON インターフェース・コマンド』

注: フレーム・リレー上の帯域幅予約の監視については、機構の使用と構成 の中の 帯域幅予約の構成および監視 を参照してください。

フレーム・リレー構成コマンド

この節では、フレーム・リレー構成コマンドについて説明します。コマンドはすべて Frame Relay> プロンプトで入力します。

新しい構成変更を有効にするためには、ルーターをリスタートする必要があります。表66 は、コマンドを示しています。

表 66. フレーム・リレー構成コマンドの要約

コマンド	機能
? (Help)	このコマンド・レベルで使用可能なコマンドをすべて表示するか、特定のコマンドに関するオプション (ただし、選択可能な場合) をリストします。12ページの『ヘルプを得る』を参照してください。
Add	PVC、必須 PVC グループ、SVC およびあて先プロトコル・アドレスを、フレーム・リレー・インターフェースに追加します。
Change	以前に add コマンドによって定義された PVC、SVC または必須 PVC グループを変更します。
Disable	使用可能にされたフレーム・リレー機能を使用不可にします。
Enable	回線監視、マネージメント・オプション、マルチキャスト、プロトコル同報通信、およびオーファンなどのフレーム・リレー機能を使用可能にします。
List	LMI、PVC、必須 PVC グループ、SVC、HDLC 情報、およびプロトコル・アドレスの現行構成を表示します。
LLC	フレーム・リレー・インターフェース上の LLC パラメーターを構成します。これらの LLC パラメーターは、フレーム・リレーを介して APPN を実行するときに必要です。
Remove	以前に追加された PVC、SVC、必須 PVC グループ (空のとき)、またはプロトコル・アドレスを削除します。
Set	フレーム・リレー・マネージメント・オプションおよびパラメーター (N1-parameter、N2-parameter、N3-parameter、P1 parameter、および T1-parameter) を構成します。FR シリアル・インターフェースの物理レイヤー・パラメーターを構成します。最大フレーム・サイズを設定します。

フレーム・リレー・インターフェースの構成

表 66. フレーム・リレー構成コマンドの要約 (続き)

コマンド	機能
Exit	直前のコマンド・レベルに戻ります。 13ページの『下位レベル操作環境を終了する』を参照してください。

注: この節では、回線番号 および PVC という用語は、DLCI (データ・リンク回線識別子) という用語と同義です。

Add

add コマンドは、フレーム・リレー・インターフェースによってサポートされる PVC、必須 PVC グループ、または着信先プロトコル・アドレスを追加するのに使用します。

構文 :

```
add                permanent-virtual-circuit . . .  
                    protocol-address . . .  
                    pvc-group . . .  
                    switched-virtual-circuit . . .
```

permanent-virtual-circuit

フレーム・リレー・インターフェースの予約された範囲 0 ~ 15 を超えて PVC を追加します。追加が可能な PVC の最大数は約 992 ですが、インターフェースが実際にサポートできる PVC の数は、各 PVC に必要なスループット、回線速度、インターフェース上で実行されているプロトコルのタイプ、および最大フレーム・サイズに収めることができるローカル管理インターフェース PVC 情報要素の数によって決まります。

例 :

```
add permanent-virtual-circuit  
Circuit Number [16]?  
Committed Information Rate (CIR) in bps [64000]?  
Committed Burst Size (Bc) in bits [64000]?  
Excess Burst Size (Be) in bits [0]?  
Assign Circuit name []?  
Is circuit required for interface operation [N]?  
Does the circuit belong to a required PVC group [N]?  
What is the group name []?  
Do you want to have data compression performed [Y]?  
Do you want to have data encryption performed [N]? y  
  
Data encryption requires a key that is 16 hexadecimal characters long  
You will be asked to enter the key twice for security reasons  
  
Please enter the key for the first time now  
  
A valid encryption key has been entered  
  
Please confirm the key by entering it again  
  
The encryption keys match - the key has been accepted
```

Circuit Number

この PVC の回線番号を示します。

有効値: 16 ~ 1007

Committed Information Rate

認定情報速度 (CIR) を示します。 CIR は、0 または 300 bps ~ 2 048 000 bps の範囲の値です。詳しくは、524ページの『認定情報速

フレーム・リレー・インターフェースの構成

度 (CIR)』を参照してください。インターフェースに関して構成されているデフォルトの CIR の値が最大値です。

注: デフォルト値は、インターフェース・レベルで設定される CIR デフォルトに従って判別されます。

Committed Burst Size

ネットワークが認定バースト (Bc) サイズ/CIR 秒に等しい測定間隔中の伝送に合意するデータの最大量 (ビット数)。300 ~ 2048000 ビットの範囲です。インターフェースに関して構成されているデフォルトの認定バーストの値が最大値です。

注:

1. デフォルト値は、インターフェース・レベルで設定される Bc デフォルトに従って判別されます。
2. CIR が 0 として構成されている場合は、認定バースト・サイズは 0 に設定され、値の入力を指示するプロンプトが出されることはありません。追加情報については、525ページの『認定バースト (Bc) サイズ』を参照してください。

Excess Burst Size

(認定バースト・サイズ/CIR) 秒に等しい測定間隔中にネットワークが伝送を試みる、認定バースト・サイズを超える未認定データの最大量 (ビット数)。0 ~ 2 048 000 ビットの範囲です。インターフェースに関する超過バースト・サイズとして構成されている値が最大値です。詳しくは、526ページの『超過バースト (Be) サイズ』を参照してください。

注: デフォルト値は、インターフェース・レベルで設定される Be デフォルトに従って判別されます。

Assign Circuit Name

回線を記述するために割り当てられる ASCII スtring を示します。デフォルト値は「未割り当て」です。

Is the circuit required for operation

その回線がインターフェースの運用に必要であるかどうかを示すために、Y または N を指定します。

Does the circuit belong to a required PVC group

このプロンプトは、必須の回線に対してのみ表示されます。その回線が必須 PVC グループに属するかどうかを示すために、Y または N を指定します。

What is the group name

PVC を必須グループに所属するとして定義した場合、必須 PVC グループの名前を指定することができます。疑問符 (?) を入力すると、現在定義されているグループのリストが表示されます。

Do you want to have compression performed

回線がデータ・パケットを圧縮するかどうかを指定することができます。この質問は、インターフェースで圧縮が使用可能にされている場合にのみ出されます。

フレーム・リレー・インターフェースの構成

注: PVC 上の圧縮を使用可能にし、インターフェースの圧縮回線限界を超過した場合、メッセージが出ます。回線上の圧縮は、可能な場合 (つまり、回線がアクティブになったときにアクティブ圧縮限界を超えていなかった場合) に実行されます。圧縮限界には、SVC および PVC に割り振られた圧縮コンテキストの数が含まれます。

Do you want to have data encryption performed

回線がデータ・パケットを暗号化するかどうかの指定を行うことができます。この質問が表示されるのは、暗号化がインターフェース上で使用可能にされている場合だけです。暗号化キーの入力を指示するプロンプトが表示されるのは、この質問に『yes』 (または『y』) と応答した場合だけです。

暗号化キーの指定: 暗号化キーは長さが 16 文字の 16 進文字です。暗号化キーは X'0000000000000000' ~ X'FFFFFFFFFFFFFF' の範囲の値として指定する必要があります。

注: 暗号化サポートはオプションであり、**load add** コマンドを使用して、ソフトウェア・ロードに追加する必要があります。102ページの『Load』を参照してください。

protocol-address

このコマンドは、静的に構成されたあて先プロトコル (プロトコル名) アドレスを、フレーム・リレー・インターフェースに追加します。静的に構成されたあて先プロトコル・アドレスは、逆 ARP も ARP も選択できない場合やセキュリティの上で役立ちます。プロトコル名とアドレス・マッピング (静的 ARP) を追加するのは、逆 ARP または ARP より非効率的です。

- 逆 ARP は、同報通信せずに動的にアドレス・マッピングを行うので、推奨される効率的な方法です。
- ARP は、逆 ARP を選択できない場合に使用することをお勧めします。これは、アドレスを同報通信し、一定の間隔でマッピングを再確認するので、逆 ARP より非効率的です。

このパラメーターでは、追加するプロトコルのタイプによって、異なる情報を求めるプロンプトが出ます。

例:

```
add protocol-address
Protocol name or number [0]?
```

IP プロトコル:

```
IP Address [0.0.0.0]?
Circuit Number or name[16]?
```

IPX プロトコル:

```
Host Number (in hex) []?
Circuit Number or name[16]?
```

AppleTalk フェーズ 2 プロトコル

```
Network Number (1-65279) []?
Node Number (1-253) []?
Circuit Number or name[16]?
```

DN プロトコル :

Node address [0.0]?
Circuit Number or name[16]?

Protocol name or number

追加するプロトコルの名前または番号を定義します。サポートされないプロトコルを指定すると、システムはエラー・メッセージを出して知らせます。

Unknown protocol name, try again

たとえば、次のいずれかを誤って指定している可能性があります。

Prot#	Name
0	IP
4	DN
7	IPX
22	AP2

サポートされるプロトコル・タイプのリストを見たい場合は、Protocol name or number [IP]? プロンプトで、 ? を入力します。

IP Address

リモート IP ホストの 32 ビット・インターネット・アドレスを小数点表記法で定義します。

Host Number

リモート IPX ホストの 48 ビット IPX ノード・アドレスを定義します。

Network Number

リモート AppleTalk ホストの AppleTalk フェーズ 2 ネットワーク番号を定義します。

Node Number

リモート AppleTalk ホストに接続されているインターフェースのノード番号を定義します。

Node address

リモート DECnet ホストの DECnet ノード・アドレスを定義します。ノード・アドレスは x.y フォーマットで構成します。ただし、x は 6 ビットのエリア・アドレスで、y は 10 ビットのノード番号です。

Circuit Number or name

PVC を DLCI または名前によって定義します。あるいは、SVC をこのリモート・プロトコル・アドレスが関連付けられている名前によって定義します。

pvc-group *groupname*

必須 PVC グループ名を追加します。

注: SVC は必須 PVC グループに属さないことがあります。

switched-virtual-circuit

スイッチド・バーチャル・サーキット (SVC) の追加 SVC は PVC と同じように動作します。ただし、SVC がアクティブなときだけ、SVC の帯域幅が FR ネットワークによって動的に割り振られる点が異なります。追加可能な SVC の数は、追加可能な PVC の数の場合とほぼ同じです。つまり、それぞれの回線に必要なスループット、回線速度、などによって左右されます。た

フレーム・リレー・インターフェースの構成

だし、SVC の帯域幅は SVC がアクティブな場合に限り予約されているため、インターフェース上でサポートできる SVC の数は PVC より多くすることができます。

```
FR 4 Config>add switched-virtual-circuit
Circuit name []? svc01
Remote party number []? 12345
Remote party number numbering plan (E.164 or X.121) [E.164]?
Remote party number type (Unknown or International) [International]?
Remote party subaddress in hexadecimal []? 01
Remote party subaddress format (private or NSAP) [private]1?
Requested outgoing Committed Information Rate (CIR) in bps [64000]?
Minimum acceptable outgoing Committed Information Rate (CIR) in bps [64000]?
Requested incoming Committed Information Rate (CIR) in bps [64000]?
Minimum acceptable incoming Committed Information Rate (CIR) in bps [64000]?
Requested outgoing Committed Burst size (Bc) in bits [64000]?
Requested incoming Committed Burst size (Bc) in bits [64000]?
Requested outgoing Excess Burst size (Be) in bits [0]?
Requested incoming Excess Burst size (Be) in bits [0]?
Idle timer in seconds [60]?
Establish circuit to learn remote protocol addresses [Y]?
Is multicast required for this circuit [Y]?
Are call-ins allowed for this circuit [Y]?
```

Circuit name

SVC の回線名を指定します。この名前は、コールをプロトコルおよび BRS 定義の両方と関連付けるために使用され、また、コネクションを識別するために回線番号の代わりに使用されます。

有効値: 1 ~ 32 文字の ASCII スtring

デフォルト値: 名前は必須で、このインターフェースに固有でなければなりません。

Remote party number

リモート側先のフレーム・リレー・アドレスを指定します。

有効値: 1 ~ 20 文字の 10 進数字 String

デフォルト値: なし

Remote party numbering plan

リモート側番号のフォーマットを指定します。番号計画は、FR ネットワークで使用されたものと一致していなければなりません。

有効値: E.164 (ISDN) または X.121 (データ)

デフォルト値: E.164

Remote party number type

先フレーム・リレー・パーティー番号タイプを指定します。番号タイプは、FR ネットワークで使用されたものと一致していなければなりません。

有効値: International または Unknown

デフォルト値: International

Remote party subaddress

先ノード内部でパーティー・エンティティ (たとえば、プロトコル) を指定します。サブアドレスを使用すると、リモート装置のサブアドレスと突き合わされます。コネクションの両端のサブアドレスは同じでなければなりません。

remote party subaddress のフォーマットは、次のようにできます。

フレーム・リレー・インターフェースの構成

- NSAP

入力する桁数は偶数で、X'0' ~ X'F' の範囲である必要があります。

- 私有

符号化方式が BCD の場合、入力する桁数は奇数で、範囲は 0 ~ 9 です。

符号化方式が BCD 意外の場合、入力する桁数は偶数で、範囲は X'0' ~ X'F' です。

remote party number および **remote party subaddress** の組み合わせは、このインターフェース上で固有である必要があります。2つのルーター間の並列コネクションが必須の場合、サブアドレスは、それぞれのスイッチド・バーチャル・コネクション定義を識別するためにのみ使用する必要があります。

有効値: 1 ~ 40 文字の 16 進数ストリング

デフォルト値: なし

Requested outgoing throughput (CIR)

要求された発信 CIR を指定します。使用可能な場合、ネットワークはこの帯域幅を提供します。

有効値: CIR は、0 または、300 bps ~ 2 048 000 bps の範囲内の値

注: HSSI アダプター上の FR インターフェースの有効値 : 0 または 300 ~ 52 000 000

デフォルト値: デフォルト値は、インターフェース・レベルでの CIR デフォルトに従って判別されます。

Minimum acceptable outgoing Committed Information Rate (CIR)

ネットワークが要求 CIR を提供できない場合、許容可能な最小 CIR を指定します。

有効値: CIR は 0、または、300 bps ~ 2 048 000 bps (**requested outgoing throughput (CIR)** の最大値まで)

注: HSSI アダプター上の FR インターフェースの有効値 : 0 または 300 ~ 52 000 000

デフォルト値: デフォルト値は、インターフェース・レベルでの CIR デフォルトに従って判別されます。

Requested incoming CIR

要求された着信 CIR を指定します。

有効値: CIR は、0 または、300 bps ~ 2 048 000 bps の範囲内の値

注: HSSI アダプター上の FR インターフェースの有効値 : 0 または 300 ~ 52 000 000

デフォルト値 : **requested outgoing CIR** の値

フレーム・リレー・インターフェースの構成

Minimum acceptable incoming Committed Information Rate (CIR)

ネットワークが要求 CIR を提供できない場合、許容可能な最小 CIR を指定します。

有効値: CIR は 0、または、300 bps ~ 2 048 000 bps (**requested incoming CIR** の最大値まで)

注: HSSI アダプター上の FR インターフェースの有効値 : 0 または 300 ~ 52 000 000

デフォルト値 : **minimum acceptable outgoing CIR** と同じ

Requested outgoing committed burst size (Bc)

要求された発信の認定バースト・サイズを指定します。

有効値: CIR は、0 または、300 bps ~ 2 048 000 bps の範囲内の値

注: HSSI アダプター上の FR インターフェースの有効値 : 0 または 300 ~ 52 000 000

デフォルト値 : インターフェース・レベルで CIR デフォルトに従って判別される値

Requested incoming committed burst size (Bc)

要求された着信の認定バースト・サイズを指定します。

有効値: CIR は、0 または、300 bps ~ 2 048 000 bps の範囲内の値

注: HSSI アダプター上の FR インターフェースの有効値 : 0 または 300 ~ 52 000 000

デフォルト値 : **requested outgoing Bc** と同じ

Outgoing excess burst size (Be)

要求された発信のバースト・サイズを指定します。

有効値: CIR は、0 または、300 bps ~ 2 048 000 bps の範囲内の値

注: HSSI アダプター上の FR インターフェースの有効値 : 0 または 300 ~ 52 000 000

デフォルト値 : インターフェース・レベルで CIR デフォルトに従って判別される値

Requested incoming excess burst size (Be)

要求された着信の超過バースト・サイズを指定します。

有効値: CIR は、0 または、300 bps ~ 2 048 000 bps の範囲内の値

注: HSSI アダプター上の FR インターフェースの有効値 : 0 または 300 ~ 52 000 000

デフォルト値 : **requested outgoing excess burst size (Be)** と同じ

Idle timer

SVC がトラフィックがない場合でもアクティブのままている時間間隔

フレーム・リレー・インターフェースの構成

を指定します。0 を指定すると、この SVC を固定回線に指定することになり、最初にデータが SVC に来たときに接続が確立され、トラフィックがそこがない場合でも切断されることはありません。

有効値: 0 ~ 65535 秒

デフォルト値: 60

Establish circuit to learn remote protocol addresses

インターフェースが隣接ノードのプロトコル・アドレスを確認するために立ち上がる時、この SVC を確立するかどうかを指定します。このオプションは、静的に構成されたあて先プロトコルの名前やアドレスの代わりに使用され、動的アドレス・ディスカバリーをサポートするプロトコル (IP、IPX、Appletalk2、DECnet IV など) が、送信された InARP を経由してリモート装置と関連したプロトコル・アドレスを確認するようルーターを強制できるようにします。このオプションを使用すると、ARP 同報通信を削減することができます。プロトコル・アドレスが確認されると、アイドル・タイマーが SVC を切断するために使用されます。

有効値: yes または no

デフォルト値: yes

Is multicast required for this circuit

このインターフェース上でマルチキャスト・パケットを送信するためにこの SVC を使用すべきかどうかを指定します (そのためだけに SVC をセットアップすることになっても)。ルーティング情報の交換のためだけに SVC を確立しないしておくには、静的ルートを使用して SVC を介してのマルチキャストが必要でないようにすることができます。

有効値: yes または no

デフォルト値: インターフェース・レベルでのマルチキャスト・エミュレーション設定値に応じたデフォルト値

Are call-ins allowed

このリモート DTE からのコールインを許容するかどうかを指定します。no を指定すると、特定ユーザーからのコールインをブロックし、コールイン / コールアウトの競合条件を除去することができます。

有効値: yes または no

デフォルト値: yes

Compression capable

フレーム・リレー圧縮をサポートするかどうかを指定します。

有効値: yes または no

デフォルト値: yes (そのインターフェースに圧縮が使用可能になっている場合)。no (その他の場合)。

Encryption capable

この SVC に対して暗号化をサポートするかどうかを指定します。

フレーム・リレー・インターフェースの構成

有効値: yes または no

デフォルト値 : yes (そのインターフェースに暗号化が使用可能になっている場合)。 no (その他の場合)。

Change

change permanent-virtual-circuit コマンドは、以前に **add permanent-virtual-circuit** コマンドを使用して追加された PVC を変更するのに使用します。

構文 :

```
change                permanent-virtual-circuit . . .  
                        switched-virtual-circuit . . .
```

例 :

```
change permanent-virtual-circuit  
Circuit Number [16]?  
Committed Information Rate in bps [64000]?  
Committed Burst Size (Bc) in bits [64000]?  
Excess Burst Size (Be) in bits [0]?  
Assign Circuit Name: []?  
Is the circuit required for interface operation [N]?  
Does the circuit belong to a required group [N]?  
What is the group name []?  
Do you want to have data compression performed []?  
Do you want to have data encryption performed []?
```

permanent virtual circuit

パラメーターの説明については、536 を参照してください。

switched-virtual-circuit

```
FR 4 Config>change switched-virtual-circuit  
Circuit name []? svc01  
Remote party number []? 12345  
Remote party number numbering plan (E.164 or X.121) [E.164]?  
Remote party number type (Unknown or International) [International]?  
Remote party subaddress in hexadecimal []? 01  
Remote party subaddress format (private or NSAP) [private]1?  
Requested outgoing Committed Information Rate (CIR) in bps [64000]?  
Minimum acceptable outgoing Committed Information Rate (CIR) in bps [64000]?  
Requested incoming Committed Information Rate (CIR) in bps [64000]?  
Minimum acceptable incoming Committed Information Rate (CIR) in bps [64000]?  
Requested outgoing Committed Burst size (Bc) in bits [64000]?  
Requested incoming Committed Burst size (Bc) in bits [64000]?  
Requested outgoing Excess Burst size (Be) in bits [0]?  
Requested incoming Excess Burst size (Be) in bits [0]?  
Idle timer in seconds [60]?  
Establish circuit to learn remote protocol addresses [Y]?  
Is multicast required for this circuit [Y]?  
Are call-ins allowed for this circuit [Y]?
```

パラメーターの説明については、539 を参照してください。

Disable

disable コマンドは、以前に **enable** コマンドを使用して使用可能にした機能を使用不可にするのに使用します。

構文 :

```
disable                cir-monitor
```

フレーム・リレー・インターフェースの構成

cllm

compression

congestion-monitor

dn-length-field

encryption

lmi

lower-dtr

multicast-emulation

no-pvc

notify-fecn-source

orphan-circuits

protocol-broadcast

switched-virtual-circuits

throttle-transmit-on-fecn

cir-monitor

このフィーチャーを使用不可にすると、回線の情報速度は、**add permanent-virtual-circuit** コマンドまたは **add switched-virtual-circuit** コマンドで構成したパラメーターを用いて計算された、最大情報速度を超えることが許されます。このフィーチャーのデフォルト設定は、使用不可です。詳細については、528ページの『回線輻輳 (ふくそう)』を参照してください。

cllm 装置が CLLM メッセージに応答して減速 するのを使用不可にします。デフォルトは使用不可です。詳細については、528ページの『回線輻輳 (ふくそう)』を参照してください。

compression

インターフェース上の圧縮を使用不可にします。どの VC でも圧縮は行われなくなります。

congestion-monitor

輻輳 (ふくそう) 監視機能を使用不可にします。この機能を使用不可にすると、回線の情報速度が、輻輳 (ふくそう) に応じて最小情報速度から回線速度までの間で変えられなくなります。詳細については、528ページの『回線輻輳 (ふくそう)』を参照してください。この機能のデフォルト設定は、使用可能です。

dn-length-field

フレーム・リレーのフレーム内の DECnet パケットの前に長さフィールドを必要とする DECnet フェーズ IV の実現を、フレーム・リレーを介して相互運用できなくしますが、DECnet パケットの前に長さフィールドを使用しない DECnet フェーズ IV フレーム・リレー・ソフトウェアとの相互運用は許されます。dn-length-field を使用不可にすると、フレーム・リレーは DECnet パケットが入っている転送フレームに長さフィールドを挿入せず、また DECnet パケットが入っている受信フレームからの長さフレームの除去も試みません。

フレーム・リレー・インターフェースの構成

注: このオプションは、構成オプションとしてのみ提供されています。

encryption

インターフェース上での暗号化を使用不可にします。たとえこのインターフェース上の PVC が暗号化対応可能の場合でも、暗号化が行われることはありません。

注: 暗号化サポートはオプションであり、**load add** コマンドを使用して、ソフトウェア・ロードに追加する必要があります。102ページの『Load』を参照してください。

lmi このパラメーターを使用不可にすると、実際のネットワークまたは管理インターフェースを使用せずに、通常の運用またはエンド・エンド間のフレーム・リレー・テストを行うことができます。エンド・エンド間のフレーム・リレー・テストの場合は、リンクの両端に同様の PVC (同じ PVC 番号、たとえば、16 と 16 のように) を追加することが必要です。

lower-dtr

このパラメーターは、ルーター上の専用シリアル・ライン・インターフェースのデータ端末レディー (DTR) 信号の扱い方を決めます。フレーム・リレー・ダイヤル回線インターフェースではサポートされません。lower-dtr パラメーターについての詳しい説明は、**enable lower-dtr** コマンドの項を参照してください。

以下のケーブル・タイプがサポートされます。

EIA 232 (RS-232)

V.35

V.36

デフォルト設定値は **disable lower-dtr** です。

multicast-emulation

各アクティブ VC 上のマルチキャスト・エミュレーションを使用不可にします。このフィーチャーのデフォルト設定は、使用可能です。このフィーチャーを使用不可にする場合は、プロトコル静的アドレス・マップを追加する必要があります。

マルチキャスト・エミュレーションが使用不可にされている場合、一部のプロトコル (IPX RIP など) はフレーム・リレー・インターフェース上で機能しません。また、プロトコル同報通信 (protocol-broadcast) フィーチャーも、正しく機能するためにはマルチキャスト・エミュレーションを必要とします。詳細については、522ページの『マルチキャスト・エミュレーションとプロトコル同報通信』を参照してください。

no-pvc

インターフェースをアクティブと見なすか、非アクティブと見なすかを制御します。no-pvc が使用不可にされている場合、インターフェース上のアクティブ PVC の存在は、フレーム・リレー・インターフェースをアクティブまたは非アクティブのいずれに見なすかには影響を与えません。

notify-fecn-source

ルーターが、FECN ビットがセットされた受信パケットの発信元の装置に最初

フレーム・リレー・インターフェースの構成

に送るパケットに BECN ビットをセットするのを使用不可にします。詳細については、528ページの『回線輻輳 (ふくそう)』を参照してください。

orphan-circuits

インターフェースでのすべての未構成 PVC オーフアン回線の使用を禁止します。オーファン回線のデフォルト設定は、使用可能です。オーファン回線を使用不可にすると、未構成回線からの不許可侵入が防止されるので、ネットワークのセキュリティー手段が追加されます。ただし、オーファン回線を使用不可にする場合は、インターフェースで使用する PVC を追加することが必要になります。

protocol-broadcast

IP RIP のようなプロトコルがフレーム・リレー・インターフェースを介して機能するのを禁止します。詳細については、522ページの『マルチキャスト・エミュレーションとプロトコル同報通信』を参照してください。このフィーチャーのデフォルト設定は、使用可能です。

switched-virtual-circuits

SVC の使用を禁止します。

throttle-transmit-on-fecn

FECN ビットがオンにセットされているパケットに応答して、装置がパケットの転送を減速するのを禁止します。デフォルトは使用不可です。詳細については、528ページの『回線輻輳 (ふくそう)』を参照してください。

Enable

enable コマンドは、フレーム・リレー機能を使用可能にするのに使用します。

構文 :

```
enable                cir-monitor
                        cllm
                        compression
                        congestion-monitor
                        dn-length-field
                        encryption
                        lmi
                        lower-dtr
                        multicast-emulation
                        notify-fecn-source
                        no-pvc
                        orphan-circuits
                        protocol-broadcast
                        switched-virtual-circuits
                        throttle-transmit-on-fecn
```

フレーム・リレー・インターフェースの構成

cir-monitor

回線監視フィーチャーを使用可能にします。回線監視フィーチャーは、**add permanent-virtual-circuit** コマンドまたは **change permanent-virtual-circuit** コマンドで構成されたパラメーターを用いて計算された最小情報速度と最大情報速度の間で、回線の情報速度を変化させます。

注: 輻輳 (ふくそう) が存在するときは、回線監視フィーチャーは輻輳 (ふくそう) 監視フィーチャーをオーバーライド します (両方のフィーチャーが使用可能にされている場合)。このフィーチャーのデフォルト設定は、使用不可です。

CIR 監視について詳しくは、528ページの『CIR の監視』 を参照してください。

注: データ圧縮を実行している回線のスループットを最大化するために、圧縮を使用可能にしたのと同じインターフェースでは、CIR 監視を使用可能にすべきではありません。装置は PVC の VIR を超過しているかどうかを調べる際には未圧縮サイズのフレームを使用しますが、圧縮されたフレームはそれより少ない帯域幅しか必要としないので、装置が監視を厳重に実施して構成済み CIR を超過しないようにすると、PVC の CIR が十分に活用されないこととなります。代わりに、輻輳 (ふくそう) 監視を使用して、装置が FR ネットワークから送られた輻輳 (ふくそう) 表示に反応できるようにすれば、フレームの損失を回避できます。

cllm 装置が CLLM メッセージに応答して減速 するのを使用可能にします。このサポートが利用可能かどうかについては、FR ネットワークの提供者に尋ねてください。詳細については、528ページの『回線輻輳 (ふくそう)』 を参照してください。

compression

インターフェース上の圧縮を使用可能にします。コンテキストが利用可能であり、アクティブ圧縮回線限界を超えていない場合、インターフェース上のすべての圧縮可能 VC がデータ・パケットを圧縮できます。(詳細については、機構の使用と構成 の データ圧縮サブシステムの使用 を参照してください。)

注: データ圧縮を実行している回線のスループットを最大化するために、圧縮を使用可能にしたのと同じインターフェースでは、CIR 監視を使用可能にすべきではありません。装置は VC の VIR を超過しているかどうかを調べる際には未圧縮サイズのフレームを使用しますが、圧縮されたフレームはそれより少ない帯域幅しか必要としないので、装置が監視を厳重に実施して構成済み CIR を超過しないようにすると、VC の CIR が十分に活用されないこととなります。代わりに、輻輳 (ふくそう) 監視を使用して、装置が FR ネットワークから送られた輻輳 (ふくそう) 表示に反応できるようにすれば、フレームの損失を回避できます。

congestion-monitor

輻輳 (ふくそう) 監視フィーチャーを使用可能にします。このフィーチャーは、回線の情報速度を輻輳 (ふくそう) に応じて最小情報速度から回線速度までの間で変化させることができます。

フレーム・リレー・インターフェースの構成

注: 輻輳 (ふくそう) が存在するときは、回線監視フィーチャーは輻輳 (ふくそう) 監視フィーチャーをオーバーライド します (両方のフィーチャーが使用可能にされている場合)。このフィーチャーのデフォルト設定は、使用可能です。

輻輳 (ふくそう) 監視についての詳細は、528ページの『輻輳 (ふくそう) 監視』を参照してください。

dn-length-field

フレーム・リレーのフレーム内の DECnet パケットの前に長さフィールドを必要とする DECnet フェーズ IV の実現を、フレーム・リレーを介して相互運用することをサポートします。dn-length-field を使用可能にすると、フレーム・リレーは DECnet パケットが入っている転送フレームに長さフィールドを挿入し、また DECnet パケットが入っている受信フレームからの長さフレームを除去します。このオプションは、デフォルトでは使用不可になります。デフォルトでは、フレーム・リレーは長さフィールドの挿入も除去も行いません。

注: このオプションは、ルーター・ソフトウェアに DECnet フェーズ IV プロトコルが含まれている場合に、構成オプションとしてのみ提示されます。

encryption

インターフェース上での暗号化を使用可能にします。暗号化を使用可能にして構成されているすべての VC で、転送データはすべて暗号化されます。

注: 暗号化サポートはオプションであり、**load add** コマンドを使用して、ソフトウェア・ロードに追加する必要があります。102ページの『Load』を参照してください。

lmi マネージメント・アクティビティを使用可能にします。

enable lmi コマンドを出した後、**set lmi-type** コマンドを使用して、フレーム・リレー・インターフェースの管理モードを選択します。532ページの『フレーム・リレー PVC マネージメントの使用可能化』を参照してください。システムのデフォルトでは ANSI T1.617 付録 D マネージメントになります。

以前にフレーム・リレー・マネージメントを使用不可にした場合は、**enable lmi** コマンドを使用して、LMI マネージメントを再開してください。

LMI は、インターフェース上の PVC に関する情報を提供するだけなので、ネットワークが必要としないのに SVC のみで使用される場合は、使用可能にする必要はありません。Q.922 は、インターフェース上のすべての SVC の使用可能度を判別します。そして、これはインターフェース自体の状態の標識になります。インターフェース上に PVC と SVC の両方が存在する場合、LMI および Q.922 は同時にアクティブになることができます。

lower-dtr

このパラメーターは、使用不可にされている専用シリアル・ライン・インターフェースのデータ端末レディー (DTR) 信号の扱い方を決めます。フレーム・リレー・ダイヤル回線インターフェースではサポートされません。このパラメーターが『使用不可』(デフォルト値) に設定されている場合、インターフェースが使用不可のときは DTR 信号は上がったままになります。

フレーム・リレー・インターフェースの構成

lower-dtr が使用可能な場合は、インターフェースが使用不可にされると、DTR は下がります。この動作が適している状況は、インターフェースが WAN 再ルートの代替リンクとして構成されており、インターフェースが、DTR 信号の状態に基づいてダイヤル接続を維持するダイヤルアウト・モデムに接続されているような場合です。

このフィーチャーが使用可能で、インターフェースが使用不可のとき、DTR 信号は下がり、モデムはダイヤル接続をダウンに維持します。インターフェースが使用可能になると (WAN 再ルートのバックアップ・シナリオにより)、DTR は上がり、モデムは保管しているバックアップ・サイトへの番号をダイヤルします。1 次インターフェースが復元すると、代替インターフェースは使用不可にされ、DTR は下がって、モデムはダイヤル接続を切断します。

以下のケーブル・タイプがサポートされます。

EIA 232 (RS-232)

V.35

V.36

デフォルト設定値は **disable lower-dtr** です。

multicast-emulation

マルチキャスト・エミュレーションを使用可能にします。これにより、各アクティブ VC 上でマルチキャスト / 同報通信フレームを転送できるようになります。ARP、IPX RIP、および IP RIP などのプロトコルは、フレーム・リレー・インターフェースを介して正しく機能するためには、マルチキャスト・エミュレーションを使用可能にしておく必要があります。詳細については、522ページの『マルチキャスト・エミュレーションとプロトコル同報通信』を参照してください。このパラメーターのデフォルト値は、使用可能です。

no-pvc

インターフェースをアクティブと見なすか、非アクティブと見なすかを制御します。このフィーチャーが使用可能のとき、インターフェース上にアクティブの PVC が存在しないと、フレーム・リレー・インターフェースは非アクティブになります。少なくとも 1 つの PVC がアクティブの場合、ルーターと FR スイッチ間で LMI 交換が正常に行われると、フレーム・リレー・インターフェースはアクティブになります。

notify-fecn-source

ルーターが、FECN ビットがセットされた受信パケットの発信元の装置に最初に送るパケットに BECN ビットをセットするのを使用可能にします。このパラメーターは、FR スイッチ自体は BECN をセットしないが、FECN はセットするネットワークで、装置の輻輳 (ふくそう) 制御機構を拡張するのに使用します。詳細については、528ページの『回線輻輳 (ふくそう)』を参照してください。

orphan-circuits

すべての未構成オーファン回線の使用を使用可能にします。このフィーチャーのデフォルトは、使用可能です。デフォルト CIR 値についての詳細は、525ページの『オーファン・パーマネント・バーチャル・サーキット CIR』を参照してください。

protocol-broadcast

IP RIP のようなプロトコルがフレーム・リレー・インターフェースを介して正しく機能するようにします。プロトコル同報通信フィーチャーが正しく機能するには、マルチキャスト・エミュレーション・フィーチャーを使用可能にする必要があります。このフィーチャーのデフォルト設定は、使用可能です。

switched-virtual-circuits

SVC の使用を許可し、次のプロンプト指示を行います。つまり、ローカル SVC ネットワーク番号、番号計画、オフファン SVC からのコールインを許可するかどうか、インターフェース上のすべての SVC について実行されたダイヤルアウト再試行の数、およびバックツーバック (たとえば、ダイヤル・サーキット) ルーター構成で使用されるネットワーク・エミュレーション・モード が必須であるかどうかのプロンプト指示です。

enable switched-virtual-circuits コマンドを使用すると、SVC が使用可能になっている場合、構成済み SVC インターフェース・パラメーターを変更することもできます。

例 :

```
FR 1 Config> enable switched
Local party number []? 4141990
Local party number numbering plan (E.164 or X.121) [E.164]?
Local party number type (Unknown or International) [International]?
Are call-ins allowed on this interface [Y]?
Call-out redial attempts [2]?
Network emulation mode [N]?
```

Local party number

あて先のフレーム・リレー・アドレスを指定します。

有効値: 1 ~ 20 文字の 10 進数字ストリング

デフォルト値: なし

Local party numbering plan

パーティー番号のフォーマットを指定します。番号計画は、FR ネットワークで使用されたものと一致していなければなりません。

有効値: E.164 (ISDN) または X.121 (データ)

デフォルト値: E.164

Local party number type

あて先フレーム・リレー・パーティー番号タイプを指定します。番号タイプは、FR ネットワークで使用されたものと一致していなければなりません。

有効値: International または Unknown

デフォルト値: International

Call-ins allowed

このインターフェースで、未構成 (オフファン) SVC からのコールが許可されるかどうかを指定します。

フレーム・リレー・インターフェースの構成

Call-out redial attempts

このインターフェースでコールアウト・タイムアウトになった場合の、各 SVC に対して行われるコールアウト再ダイヤル試行の数を指定します。

デフォルト値 : 2

Network emulation mode

この SVC をネットワーク・エミュレーション・モードにするかどうかを指定します。これは、バックツープック・ルーター構成のために使用します。

throttle-transmit-on-fecn

FECN ビットがオンにセットされているパケットに回答して、装置がパケットの転送を減速 するのを使用可能にします。このパラメーターは、輻輳 (ふくそう) 表示を受信したときに FR ネットワーク全体の輻輳 (ふくそう) を最小化するのに使用します。これにより、装置は BECN に反応するのと同様の方法で FECN に反応します。

List

list コマンドは、現在構成されている管理情報および PVC 情報を表示するのに使用します。

構文 :

```
list
_
    all
    _hdlc
    _lmi
    _permanent-virtual-circuits
    _protocol-address
    _pvc-groups
    _switched-virtual-circuits
```

all フレーム・リレー構成を表示します。表示されるのは、**list hdlc**、**list lmi**、および **list permanent virtual circuits** コマンドを組み合わせたものです。パラメーターの説明については、**list hdlc** および **list lmi** を参照してください。

hdlc フレーム・リレー・ハイレベル・データ・リンク制御 (HDLC) 構成を表示します。

例 :

```
list hdlc
Frame Relay HDLC Configuration

Maximum frame size = 2048
Encoding            = NRZ
Idle state          = Flag
Clocking            = External
Cable type          = V.35 DTE
Line speed (bps)   = 64000
Transmit delay      = 0
Lower DTR           = Enabled
```

フレーム・リレー・インターフェースの構成

Encoding

シリアル・インターフェースの伝送符号化法。符号化法は NRZ (非ゼロ復帰) または NRZI (非ゼロ復帰反転) です。

Idle データ・リンク・アイドル状態: フラグまたはマーク。

Clocking

クロックのタイプ: 内部または外部

Cable type

シリアル・アダプター・ケーブル・タイプ: RS-232、V.35、V.36、または X.21

Line Speed (bps)

フレーム・リレー・インターフェースの物理データ速度を示します。

Maximum frame size

どの特定の時間を取っても、その時点でネットワークを通して送受信できる最大フレーム・サイズを示します。

Transmit delay

フレーム間に送信される追加のフラグ・バイト数を示します。

Lower DTR

WAN 再ルート代替リンクが不要になったときに、ルーターが DTR 信号を下げるかどうかを示します。DTR 信号が降下すると、モデムは代替リンクの専用回線接続を終了します。ケーブル・タイプが X.21 のときは、Lower DTR は表示されません。

注:

- FR ダイヤル回線インターフェースの場合は、表示されるのは最大フレーム・サイズだけです。
- HSSI アダプター上の FR インターフェースの場合は、**list hdlc** コマンドで表示されるのは、上記の HDLC パラメーターのサブセットだけです。

lmi フレーム・リレー・インターフェースの論理マネージメントおよび関連構成情報を表示します。

例 :

```
list lmi
Frame Relay Configuration

LMI enabled          = Yes  LMI DLCI          = 0
LMI type             = ANSI  LMI Orphans OK    = Yes
CLLM enabled        = Yes  Timer Ty seconds  = 10

SVC network number  = 4141990
SVC Number type     = International
SVC Numbering plan  = E.164  SVC Call-out redial attempts = 2
SVC Call-ins allowed = Yes  SVC Network emulation mode = No

Protocol broadcast   = Yes  Congestion monitoring = Yes
Emulate multicast    = Yes  CIR monitoring        = No
Notify FECN Source   = Yes  Throttle Transmit on FECN = Yes

Data compression    = Yes  Orphan compression   = No
Compression circuit limit = 10  Number of compression circuits = 5 1
Data encryption      = Yes  Number of encryption circuits = 1 2

PVCs P1 allowed     = 64  Interface down in no PVCs = No
Timer T1 seconds    = 10  Counter N1 increments   = 6
LMI N2 error threshold = 3  LMI N3 error threshold window = 4
```

フレーム・リレー・インターフェースの構成

MIR % of CIR	=	25	IR % Increment	=	25
IR % Decrement	=	25	DECnet length field	=	No
Default CIR	=	64000	Default Burst Size	=	64000
Default Excess Burst	=	0			

1 この行が表示されるのは、データ圧縮がオン (yes) の場合だけです。

2 この行が表示されるのは、データ暗号化がオン (yes) の場合だけです。

LMI enabled

フレーム・リレー・インターフェース上でマネージメント機能が使用可能になっているかどうか (yes または no) を示します。

LMI DLCI

マネージメント回線番号を示します。この番号は LMI タイプを反映します。ANSI および ITU-T/CCITT の場合は 0 で、REV1 の場合は 1023 です。

LMI Type

LMI タイプ (REV1、ANSI、または CCITT) を示します。

LMI Orphans OK

未構成回線を使用できるかどうか (yes または no) を示します。

CLLM Enabled

フレーム・リレー・インターフェース上で CLLM が使用可能かどうかを示します。

Timer Ty seconds

装置が輻輳 (ふくそう) 状態は解消されたものと見なして徐々に PVC を構成された伝送速度に戻す前に、装置が CLLM メッセージまたは BECN を受信せずに経過する必要がある時間の長さを指定します。

SVC network number

このインターフェース上の SVC のネットワーク番号を指定します。

SVC number type

SVC 番号タイプ、不明 (unknown) または国際 (international) を指定します。

SVC numbering plan

番号計画が E.164 か X.121 かを指定します。

SVC call-out redial attempts

このインターフェース上でのコールアウト再ダイヤル試行の数を指定します。

SVC network emulation mode

SVC の場合にこのインターフェースがネットワーク・エミュレーション・モードで動作するかどうかを指定します。

SVC call-ins allowed

このインターフェースでコールインを許可するかどうかを指定します。

Protocol Broadcast

IP RIP のようなプロトコルがフレーム・リレー・インターフェースを介して機能できるかどうか (yes または no) を示します。

フレーム・リレー・インターフェースの構成

Emulate multicast

各アクティブ PVC 上のマルチキャスト・エミュレーション・フィーチャーが使用可能かどうか (yes または no) を示します。

Congestion Monitoring

ネットワーク輻輳 (ふくそう) に対応する輻輳 (ふくそう) 監視フィーチャーが使用可能かどうか (yes または no) を示します。

CIR monitoring

伝送速度を強制する回線監視フィーチャーが使用可能かどうか (yes または no) を示します。

Notify FECN Source

この装置が、FECN ビットがセットされた受信パケットの発信元の装置に最初に送るパケットに BECN ビットをセットするかどうかを示します。

Throttle Transmit on FECN

この装置が、FECN ビットがオンにセットされているパケットにตอบสนองして、パケットの転送を減速 するかどうかを示します。

Data compression

このインターフェースではデータ圧縮が使用可能にされているかどうかを示します。

Data encryption

このインターフェースでデータ暗号化が使用可能になっているかどうかを示し、暗号化対応可能な回線の数を示します。

注: 暗号化サポートはオプションであり、**load add** コマンドを使用して、ソフトウェア・ロードに追加する必要があります。102ページの『Load』を参照してください。

Orphan compression

このインターフェース上のオーファン回線で、データ圧縮が使用可能かどうかを示します。

注: オーファン回線上の圧縮を使用可能にすると、装置上のネイティブ PVC が利用可能な圧縮コンテキストの数が減ります。

オーファン圧縮は、PVC と SVC の両方に適用されます。

Compression circuit limit

データ圧縮に参加できる回線の最大数を示します。

Number of compression VCs

データ圧縮をサポートしている現行の VC 数を示します。

P1 allowed

このインターフェースで使用できる PVC および SVC の数を示します。

Timer T1 seconds

フレーム・リレー・インターフェースがフレーム・リレー・スイッチ LMI エンティティとシーケンス番号交換を行う頻度を示します。

フレーム・リレー・インターフェースの構成

Counter N1 increments

完全な LMI 状態照会を実行する前に満了する必要がある T1 タイマー間隔の回数を示します。

LMI N2 error threshold

N3 ウィンドウ内で発生した、フレーム・リレー・インターフェースのリセットの原因になる管理イベント誤りの数を示します。

LMI N3 error threshold window

N2 誤り限界値を測定するのに使用される、監視された管理イベントの数を示します。

MIR % of CIR

CIR の比率として表される最小 IR

IR % Increment

最大 IR に達するまで、ルーターが BECN のないフレームを受信するたびに IR を増分する比率

IR % Decrement

最小 IR に達するまで、ルーターが BECN を含むフレームを受信するたびに IR を減分する比率

Default CIR

このインターフェース上の VC のデフォルト値として使用される認定情報速度 (ビット/秒)

Default Burst Size

このインターフェース上の VC のデフォルト値として使用される認定バースト・サイズ (ビット数)

Default Excess Burst Size

このインターフェース上の VC のデフォルト値として使用される超過バースト・サイズ (ビット数)

permanent-virtual-circuits

フレーム・リレー・インターフェース上のすべての構成済み PVC を表示します。

例 :

```
FR Config>li perm
```

```
Maximum circuits allowable = 64
Total circuits configured = 9
Total PVCs configured = 7
```

Circuit Name	Circuit Number	Circuit Type	CIR in bps	Burst Size	Excess Burst
cir16	16	\$@#Permanent	64000	64000	0
cir244	244	#Permanent	64000	64000	0
cir33	33	#Permanent	64000	64000	0
cir1005	1005	#Permanent	64000	64000	0
cir55	55	#Permanent	64000	64000	0
cir22	22	@Permanent	64000	64000	0
cir66	66	@*Permanent	64000	64000	0

* = circuit is required

= circuit is required and belongs to a Required PVC group

@ = circuit is data compression capable

\$ = circuit is data encryption capable

Maximum circuits allowable

このインターフェースに存在できる PVC および SVC の数を示しま

フレーム・リレー・インターフェースの構成

す。この数には、**add permanent-virtual-circuit** コマンドを使用して追加された PVC、および **add switched-virtual-circuit** コマンドを使用して追加された SVC、および管理インターフェースを通して動的に確認されたものも含まれます。

Total circuits configured

このインターフェースに存在可能な現在構成済みの PVC および SVC の合計数を示します。

Circuit Name

構成された PVC の ASCII 名を示します。

Circuit Number

現在構成されている PVC の DLCI を示します。

Circuit Type

現在構成されているバーチャル・サーキットのタイプを示します。フレーム・リレーのこのリリースでは、パーマネント・バーチャル・サーキットのみがサポートされます。

Committed Information Rate

ネットワークで合意されている、通常の条件下でのデータ転送の情報速度を示します。

Committed Burst Size

ネットワークで合意されている、(認定バースト・サイズ/CIR) 秒数に等しい測定期間中に送達できる最大データ量 (ビット数)

Excess Burst Size

(認定バースト・サイズ/CIR) 秒数に等しい測定期間中にネットワークが送達を試みることができる、認定バースト・サイズを超過した未認定データの最大量 (ビット数)

pvc-groups

フレーム・リレー・インターフェース上のすべての必須 PVC グループを表示します。

例 :

```
list pvc-groups
  Required PVC group = group1

  Circuit # 16
```

protocol-addresses

フレーム・リレー・インターフェースのすべての静的に構成された回線マッピングのプロトコル・アドレスを表示します。

例 :

```
list protocol-addresses
  Frame Relay Protocol Address Translations
```

Protocol Type	Protocol Address	Circuit Number or Name
IP	125.2.29.4	21
IPX	000000004503	16

Protocol Type

インターフェースを介して実行されているプロトコルの名前を表示します。

フレーム・リレー・インターフェースの構成

Protocol Address

回線の相手側の装置のプロトコル・アドレスを表示します。

Circuit Number or Name

そのプロトコルを処理している PVC の DLCI または SVC の名前を表示します。

switched-virtual-circuits

```
FR 4 Config>list s
```

```
Maximum circuits allowable = 64
Total circuits configured = 9
Total SVCs configured = 2
```

Circuit Name	Options	Idle Timer		Outgoing Value	Incoming Value
-----	-----	-----	-----	-----	-----
circ01	ILM	60	CIR:	64000	64000
Remote party number: IE12345			Min CIR:	64000	64000
Remote subaddress: None			Burst:	64000	64000
			Excess:	0	0
svc01	ILM	60	CIR:	64000	64000
Remote party number: IE12345			Min CIR:	64000	64000
Remote subaddress: P01			Burst:	64000	64000
			Excess:	0	0

Options: I - call-ins allowed, L - learn protocols, M - Multicast required
c - compression capable, e - Encryption capable

Address type: I - International, U - Unknown

Numbering plan: E - E.164, X - X.121

Subaddress format: N - NSAP, P - private

```
FR 4 Config>
```

Maximum circuits allowable

このインターフェースに存在できる回線数を示します。

Total circuits configured

このインターフェースに現在構成済みの回線の合計数を示します。

Circuit Name

構成された回線の ASCII 名を示します。

Committed Information Rate

ネットワークで合意されている、通常の条件下でのデータ転送の情報速度を示します。

Committed Burst Size

ネットワークで合意されている、(認定バースト・サイズ/CIR) 秒数に等しい測定期間中に送達できる最大データ量 (ビット数)

Excess Burst Size

(認定バースト・サイズ/CIR) 秒数に等しい測定期間中にネットワークが送達を試みることができる、認定バースト・サイズを超過した未認定データの最大量 (ビット数)

Idle Timer

SVC がトラフィックのない場合にアクティブのままの時間間隔

Options

その回線に構成されているオプションを示します。

Remote party number

リモートあて先 FR アドレス。このアドレスには、使用されるアドレス・タイプと番号計画がプレフィックスとして置かれます。

Remote subaddress

このコネクションに割り当てられたリモート側サブアドレス。このサブアドレスにはサブアドレス・フォーマットがプレフィックスとして置かれます。

LLC

LLC コマンドは、LLC 構成環境にアクセスするのに使用します。これらの各コマンドの説明は、255ページの『LLC 構成コマンド』を参照してください。

注: **LLC** コマンドは、ソフトウェア・ロードに APPN が含まれている場合にのみサポートされます。

構文 :

llc

Remove

remove コマンドは、PVC、必須 PVC グループ、または以前に **add** コマンドを使用して追加されたプロトコル・アドレスを削除するのに使用します。

構文 :

```
remove                permanent-virtual-circuit . . .
                        protocol-address
                        pvc-group
                        switched-virtual-circuit circuit-name
```

permanent-virtual-circuit *pvc#*

16 ~ 1007 の範囲の構成された PVC を削除します。

注:

1. 圧縮を実行している PVC を削除すると、インターフェースはアクティブ圧縮 PVC のカウントを減らします。このアクションによって圧縮 PVC のカウントが限界以下になる場合、それを知らせるメッセージを受け取ります。
2. 暗号化を実行している PVC を削除すると、インターフェースはアクティブ暗号化 PVC のカウントを減らします。

注: 暗号化サポートはオプションであり、**load add** コマンドを使用して、ソフトウェア・ロードに追加する必要があります。 *Nways* マルチプロトコル・アクセス・サービス ソフトウェア使用者の手引き 中の CONFIG プロセス **load** コマンドを参照してください。

フレーム・リレー・インターフェースの構成

protocol-address

構成されたプロトコル・アドレス (静的 ARP エントリー) を削除します。このパラメーターでは、追加するプロトコルのタイプによって、異なる情報を求めるプロンプトが出ます。

例 :

```
remove protocol-address  
Protocol name or number [IP]?
```

IP プロトコル :

```
IP Address [0.0.0.0]?  
Circuit Name or Number [16]?
```

IPX プロトコル :

```
Host Number (in hex) []?  
Circuit Name or Number [16]?
```

AppleTalk フェーズ 2 プロトコル

```
Network Number (1-65279) []?  
Node Number (1-253) []?  
Circuit Name or Number [16]?
```

DN プロトコル :

```
Node address [0.0]?  
Circuit Name or Number [16]?
```

Protocol name or number

削除するプロトコルの名前または番号を定義します。サポートされないプロトコルを削除しようとする、システムは誤りメッセージを出します。

```
Unknown protocol name, try again
```

サポートされるプロトコル・タイプのリストを見たい場合は、Protocol name or number [IP]? プロンプトで ? を入力します。

IP Address

リモート IP ホストの 32 ビット・インターネット・アドレスを小数点表記法で定義します。

Host Number

リモート IPX ホストの 48 ビット・ノード・アドレスを定義します。

Network Number

AppleTalk フェーズ 2 ネットワーク番号を定義します。

Node Number

リモート AppleTalk ホストに接続されているインターフェースのノード番号を定義します。

Node address

リモート DECnet ホストの DECnet ノード・アドレスを定義します。ノード・アドレスは x,y フォーマットで構成します。ただし、x は 6 ビットのエリア・アドレスで、y は 10 ビットのノード番号です。

Circuit Number

プロトコルが実行される PVC または SVC の名前を定義します。

pvc-group *groupname*

構成された PVC グループを名前によって削除します。グループは、メンバー回線をもっていない場合にも削除されます。

例 : **remove pvc-group PVC group name [IP]?**

switched-virtual-circuit

構成された SVC を回線名によって削除します。

Set

set コマンドは、フレーム・リレー・プロトコルを実行するインターフェースを構成するのに使用します。

Set コマンドの考慮事項

構成を始める前に、2つのパラメーター (n2-parameter と n3-parameter) について説明しておきます。n2-parameter は、管理イベントの誤り限界値を設定し、n3-parameter は、イベント・ウィンドウで監視されるイベントの数を設定します。イベント・ウィンドウ内の管理誤りの数が n2 に等しくなると、フレーム・リレー・インターフェースはリセットされます。下に例を挙げます。

set n3-parameter 4

set n2-parameter 3

ここでは、ウィンドウ・サイズは 4 (n3 = 4)、誤り限界値は 3 (n2 = 3) に設定されました。これは、システムは 4 つの管理イベントを監視して、いずれかに誤りがないかチェックします。誤りのあるイベントの数が 3 (n2 parameter) に等しくなると、フレーム・リレー・インターフェースはリセットされ、ネットワークの状態はネットワークダウン と見なされます。

ネットワークの状態がネットワークアップ と見なされるためには、状態が変更される前の、ウィンドウ内の誤りのあるイベント数が n2 より少なくなければなりません。

構文 :

```

set                                cable*
                                       cir-defaults
                                       clocking*
                                       crc-type*
                                       encoding*
                                       frame-size
                                       idle . . .*
                                       ir-adjustment . . .
                                       line-speed*
                                       lmi-type n1-parameter
                                       n2-parameter
                                       n3-parameter
    
```

フレーム・リレー・インターフェースの構成

pl-parameter
tl-parameter
transmit-delay . . . *
ty-parameter

* 注: 後ろに * が付いているコマンドは、FR ダイヤル回線インターフェースでは利用不能です。

cable *physical-interface-link-type data-connection-type*

ネットワークの物理リンクのケーブル・タイプを設定します。

ルーターをあるタイプの DCE 装置 (たとえば、モデムまたは DSU/CSU) に接続する場合は、DTE ケーブルを使用します。ルーターが DCE として動作し、直接接続のためのクロックを提供する場合は、DCE ケーブルを使用します。

利用可能なオプションを以下に示します。

物理インターフェース・リンク・タイプ	データ接続タイプ
EIA 232 (RS-232)	DTE、DCE
V35	DTE、DCE
V36	DTE、DCE
X21	DTE、DCE
HSSI	DTE、DCE (注を参照)

注: HSSI DCE ケーブルが使用される場合は、他の装置についても、HSSI DCE ケーブルを使用する構成にする必要があります。

cir-defaults

回線輻輳 (ふくそう) パラメーターのデフォルト値を設定します。パラメーターは、以下のとおりです。

cir *cir* のデフォルト値を、フレーム・リレー・ネットワークの提供者によって提供された値に設定します。

有効値: 0 または 300 ~ 204 800 bps

デフォルト値: 64 000

HSSI の場合は、構成できる最大値は 52 000 000 bps です。

bc *bc* のデフォルト値を、フレーム・リレー・ネットワークの提供者によって提供された値に設定します。

有効値: 525ページの『認定バースト (Bc) サイズ』を参照してください。

デフォルト値: 64 000

HSSI の場合は、構成できる最大値は 52 000 000 bps です。

be *be* のデフォルト値を、フレーム・リレー・ネットワークの提供者によって提供された値に設定します。

有効値: 526ページの『超過バースト (Be) サイズ』を参照してください。

デフォルト値: 0

HSSI の場合は、構成できる最大値は 52 000 000 bps です。

例 :

```
FR 6 config> set cir-default
Default Committed Information Rate (CIR) in bps [64000]? 48000
Default Committed Burst Size (Bc) in bits [64000]? 40000
Default Excess Burst Size (Be) in bits [0]? 52000
```

clocking [external または internal]

モデムまたは DSU に接続する場合は、クロックを外部として構成します。別の DTE 装置に直接接続する場合は、DCE ケーブルを使用し、クロックを内部として設定します。内部クロックの場合、以下を入力する必要があります。

- インターフェース 1
- 4 ポート WAN コンセントレーション・アダプターのポート 1
- 8 ポート WAN コンセントレーション・アダプターのポート 1 および 5

set line-speed コマンドでクロック速度を構成するには、564ページの表67に示す範囲を使用します。

注: **clocking** は、ケーブル・タイプが *HSSI DTE* の場合は、*external* に設定し、ケーブル・タイプが *HSSI DTE* で構成不能の場合は、*internal* に設定します。

crc-type [crc-ccitt-16 または crc-ccitt-32]

CRC タイプは、16 ビット CRC と 32 ビット CRC のどちらかとして構成することができます。デフォルトでは、**crc-ccitt-16** です。

注: CRC タイプが構成できるのは、HSSI アダプター上の FR インターフェースの場合だけです。

encoding [NRZ または NRZI]

HDLC 符号化法を NRZ (非ゼロ復帰) または NRZI (非ゼロ復帰反転) に設定します。ほとんどの構成では NRZ が使用され、これがデフォルト値です。

注: 符号化は、HSSI アダプター上の FR インターフェースに関しては NRZ に設定され、構成不能です。

frame-size

インターフェース上で送受信されるフレームのネットワーク・レイヤー部分の最大サイズを設定します。この最大サイズには、2 バイトの DLCI アドレスと、図 39-4 に示されているユーザー・データが含まれます。構成するサイズについては、フレーム・リレー・スイッチおよびフレーム・リレー・ネットワーク内のその他の FR DTE によってサポートされる最大フレーム・サイズとの整合性が必要です。値は 262 ~ 8190 の範囲です。デフォルト値は 2048 です。構成されたフレーム・サイズには DLCI アドレスと FR RFC 1490 マルチプロトコル・カプセル化ヘッダーが含まれるので、送信できる最大プロトコル・パケット・サイズは、構成されたフレーム・サイズより小さく、しかもプロトコルによって異なります。下の表には、インターフェース上で送受信できる最大プロトコル・パケット・サイズを決める場合に、構成されたフレーム・サイズから差し引くバイト数が示してあります。

IP	4 バイト
IPX	10 バイト
AppleTalk フェーズ 2	10 バイト

フレーム・リレー・インターフェースの構成

DECnet フェーズ IV (DNA IV)	12 バイト
Banyan Vines	10 バイト
OSI	10 バイト
ブリッジング	10 バイト
APPN	58 バイト (注を参照)

注: APPN BAN の最悪の場合として、FR ヘッダーのバイト数以外に、T/R MAC アドレス・ヘッダーと LLC ヘッダーが追加される場合を想定しています。

データ暗号化が使用可能にされている場合は、最大 12 バイトを追加して差し引く必要があります。

フレーム・リレー SVC を使用する場合、最大情報フィールド・サイズは、バーチャル・サーキットの両端で同じである必要があります。最大情報フィールド・サイズを決定するには、SVC で暗号化が使用可能になっている場合はそのフレーム・サイズから 16 バイトを減算し、SVC で暗号化が使用不可の場合は 4 バイトを減算してください。

idle [flag または mark]

HDLC フレームの伝送アイドル状態を設定します。デフォルト値は **flag** で、フレーム間に連続フラグ (16 進数 7E) が入ります。マーク・オプションは、フレーム間の伝送路をマーキング状態 (OFF, 1) にします。

注: idle は、HSSI 上の FR インターフェースに関しては **flag** に設定され、構成不能です。

ir-adjustment increment-% decrement-% minimum-IR

最小情報速度 (IR) と、ネットワーク輻輳 (ふくそう) に応じて IR を増分および減分する比率を設定します。

最小 IR (CIR の比率で表す) は、情報速度の下限です。最小比率は 1 で、最大比率は 100 です。デフォルト値は 25 です。

ネットワークの輻輳 (ふくそう) が解消されると、情報速度は、最大情報速度に達するまで、IR 調整増分比率ずつ徐々に増分されます。最小比率は 1 で、最大比率は 100 です。デフォルト値は 12 です。

ネットワークの輻輳 (ふくそう) が発生すると、情報速度は、最小情報速度に達するまで、BECN が入ったフレームを受信するたびに IR 調整減分比率ずつ減分されます。最小比率は 1 で、最大比率は 100 です。デフォルト値は 25 です。

例 :

```
set ir-adjustment
IR adjustment % increment [12]?
IR adjustment % decrement [25]?
Minimum IR as % of CIR [25]?
```

line-speed rate

内部クロックの場合、このコマンドは送信および受信クロック回線の速度を指定します。

表 67. 2216 インターフェースで内部クロックが使用される場合の回線速度

アダプター・タイプ	速度範囲
8 ポート EIA 232	9600 ~ 64 000 bps

フレーム・リレー・インターフェースの構成

表 67. 2216 インターフェースで内部クロックが使用される場合の回線速度 (続き)

アダプター・タイプ	速度範囲
6 ポート V.35/V.36	9600 ~ 460 800 bps、1 544 000 bps、または 2 048 000 bps
8 ポート X.21	9600 ~ 460 800 bps、1 544 000 bps、または 2 048 000 bps
1 ポート HSSI	22 368 000 bps または 44 736 000 bps

外部クロックの場合、このコマンドはハードウェア (つまり、回線の実際の速度) には影響を与えませんが、ルーティング・コスト・パラメーターを決めるのに使用される一部のプロトコル (IPX など) の速度を設定します。輻輳 (ふくそう) 監視も、構成された回線速度を使用して、最大情報速度を決めます。そのため、この速度は実際の回線速度に一致するように設定することをお勧めします。

- インターフェース 1
 - 4 ポート WAN コンセントレーション・アダプターのポート 1
 - 8 ポート WAN コンセントレーション・アダプターのポート 1 および 5
- 外部クロックが使用されている場合は、表68 を使用して、シリアル・アダプターでサポートされている回線速度を調べてください。

表 68. 2216 インターフェースで外部クロックが使用される場合の回線速度

アダプター・タイプ	速度範囲
8 ポート EIA 232	2400 ~ 64 000 bps
6 ポート V.35/V.36	2400 ~ 2 048 000 bps
8 ポート X.21	2400 ~ 2 048 000 bps
1 ポート HSSI	1 544 000 bps ~ 52 000 000 bps

lmi-type [rev1 または ansi または ccitt]

インターフェースのマネージメント・タイプを設定します。フレーム・リレー・マネージメントの設定についての詳細は、532ページの『フレーム・リレー PVC マネージメントの使用可能化』を参照してください。デフォルトでは、タイプ **ansi** が使用可能です。

表 69. フレーム・リレー・マネージメント・オプション

コマンド	マネージメント・タイプ	説明
set	lmi-type rev1	LMI 改訂 1 (Stratacom のフレーム・リレー・インターフェース仕様) に準拠します。
set	lmi-type ansi	ANSI T1.617 ISDN-DSS1-Signalling Specification for Frame Relay Bearer Service (付録 D と呼ばれます) に準拠します。
set	lmi-type ccitt	ITU-T/CCITT 勧告 Q.933 の付録 A - DSS1 Signalling Specification for Frame Mode Basic Call Control に準拠します。

n1-parameter count

完全な PVC 状態照会を実行する前に満了する必要がある T1 タイマー間隔の回数を構成します。Count は、1 ~ 255 の範囲の間隔です。デフォルト値は 6 です。

n2-parameter max#

フレーム・リレー・インターフェースがリセットされる前に、n3-parameter に

フレーム・リレー・インターフェースの構成

よって監視される管理イベント・ウィンドウで発生しても構わない誤りの数を構成します。Max# は、1 ～ 10 の範囲の数です。デフォルト値は 3 です。このパラメーターは、n3-parameter の値以下でなければなりません。そうでない場合は、誤りメッセージを受け取ります。

n3-parameter max#

n2-parameter を測定するのに使用される、監視された管理イベントの数を構成します。Max# は、1 ～ 10 の範囲の数です。デフォルト値は 4 です。

p1-parameter max#

フレーム・リレー・インターフェースによってサポートされる PVC の最大数を構成します。これには、アクティブ、非アクティブ、除去済み、および構成済み PVC が含まれます。Max# は、0 ～ 992 の範囲の数です。デフォルトは 64 です。0 (ゼロ) は、インターフェースが PVC をサポートしないことを意味します。

t1-parameter time

フレーム・リレー・マネージメントとのシーケンス番号交換の間隔 (秒数) を構成します。マネージメントの T2 タイマーは、エンド・ステーションがマネージャーとのシーケンス番号交換を要求するのに許される間隔です。T1 間隔は、ネットワークの T2 間隔より小さくなければなりません。Time は、5 ～ 30 の範囲の値です。デフォルト値は 10 です。

transmit-delay

転送されるパケット間に遅延を挿入することができます。このコマンドの目的は、シリアル・ラインを減速して、相手側の旧型で低速のシリアル装置に整合させることです。伝送路間でシリアル・ライン・ハロー・パケットが失われるのも防止できます。# は、0 ～ 15 個の余剰フラグです。デフォルト値はゼロ (0) です。このパラメーターを設定すると、送信フレーム相互間に 0 ～ 15 個の余剰フラグが挿入されます。表70 は、シリアル・インターフェースの単位と範囲を示しています。

注: 8 ポート EIA-232E アダプター、6 ポート V.35/V.36 アダプター、または 8 ポート X.21 アダプター上の X.25 インターフェースに関して、非ゼロ送信遅延を構成する場合は、**set line-speed** コマンドを使用して、伝送速度を構成する必要があります。

表 70. 2216 シリアル・インターフェースの転送遅延の単位と範囲

単位	最小	最大
余剰フラグ	0	15

ty-parameter time

装置が CLLM メッセージの受信によって示された既存の輻輳 (ふくそう) 状態が解消されたと見なす前に経過する必要があるインターバルを構成します。このタイマーが満了する前に、装置が CLLM メッセージを受信した場合、装置はこのタイマーをリセットします。

有効値: 5 ～ 30 秒

デフォルト値: 11 秒

フレーム・リレー監視プロンプトへのアクセス

フレーム・リレー操作コマンドにアクセスし、ルーター上のフレーム・リレーを監視する場合は、以下のステップを実行します。

1. OPCON プロンプト (*) で **talk 5** と入力する。
2. GWCON プロンプト (+) で、**interface** コマンドを入力して、ルーター上に構成されているインターフェースのリストを表示する。
3. **network** コマンドに続けて、フレーム・リレー・インターフェースのネットワーク番号を入力する。下に例を挙げます。

```
+ net 2
Frame Relay Monitoring
FR 2 >
```

フレーム・リレー監視コマンド

この節では、フレーム・リレー監視コマンドについて要約した上で説明します。これらのコマンドは、データベースから情報を収集するのに使用します。表71 は、コマンドを示しています。

表71. フレーム・リレー監視コマンドの要約

コマンド	機能
? (Help)	このコマンド・レベルで使用可能なコマンドをすべて表示するか、特定のコマンドに関するオプション (ただし、選択可能な場合) をリストします。12ページの『ヘルプを得る』を参照してください。
Clear	フレーム・リレー・インターフェースに関する統計情報を消去します。
Disable	フレーム・リレー・インターフェース上の CIR 監視および輻輳 (ふくそう) 監視を使用不可にします。
Enable	フレーム・リレー・インターフェース上の CIR 監視および輻輳 (ふくそう) 監視を使用可能にします。
List	データ・リンク・レイヤーおよびフレーム・リレー・マネージメントに特有の統計を表示します。
LLC	LLC 監視プロンプトを表示します。
Notrace	個別の回線またはインターフェース全体についてパケット・トレース機能を使用不可にします。
Set	フレーム・リレー VC の CIR、認定バースト・サイズ、および超過バースト・サイズを設定します。
Trace	個別の回線またはインターフェース全体についてパケット・トレース機能を使用可能にします。
Exit	直前のコマンド・レベルに戻ります。13ページの『下位レベル操作環境を終了する』を参照してください。

注: この節における *回線番号* および *PVC* という用語は、データ・リンク回線識別子 (*DLCI*) という用語と同等です。

Clear

clear コマンドは、フレーム・リレー・インターフェースに関する統計カウンターをゼロにリセットするのに使用します。

注: 統計は、OPCON **clear** コマンドを使用して除去することもできます。

フレーム・リレー・インターフェースの監視

switched-virtual-circuit

svcs

virtual-circuits

all フレーム・リレー・インターフェースの回線、マネージメント、および VC 統計を表示します。このコマンドで表示される出力は、**list lmi** コマンドと **list permanent-virtual-circuit** コマンドの組み合わせです。

circuit *name* または *number*

入力回線名または DLCI を使用して、特定 VC に関する詳細バーチャル・サーキット構成および統計情報を表示します。

例 :

list circuit 347

```
Circuit name = Valencia

Circuit state = Active Circuit is orphan = No
Frames transmitted = 0 Bytes transmitted = 0
Frames received = 0 Bytes received = 0
Total FECNs = 0 Total BECNs = 0
Times congested = 0 Times Inactive = 0
CIR in bits/second = 64000 Potential Info Rate = 56000
Committed Burst (BC) = 1200 Excess Burst (Be) = 54800
Minimum Info Rate = 16000 Maximum Info Rate = 64000
Required = Yes PVC group name = group1

Compression capable = Yes Operational = Yes
R-Rs received = 0 R-Rs transmitted = 0
R-As received = 0 R-As transmitted = 0
R-R mode discards = 0 Enlarged frames = 0
Decompress discards = 0 Compression errors = 0
Compression ratio = 1.72 to 1 Decompression ratio = 1.10 to 1

Encryption capable = Yes Operational = Yes
Encryption errors = 0 Decryption errors = 0
Rcv error discards = 0

Current number of xmit frames queued = 0
Xmit frames dropped due to queue overflow = 0
```

Circuit state

回線の状態 (非アクティブ、アクティブ、または輻輳 (ふくそう)) を示します。非アクティブ (Inactive) は、フレーム・リレー・インターフェースがダウンしているか、もしくはフレーム・リレー・マネージメント・エンティティーが回線がアクティブであることをフレーム・リレー・プロトコルに通知しなかったために、トラフィックのために回線を利用できないことを示しています。アクティブ (Active) は、データを転送中であることを示しています。輻輳 (ふくそう) (Congested) は、データ・フローが制御されていることを示しています。

Circuit is orphan

その回線が LMI マネージメントを通して確認された未構成 PVC であるか、未構成 SVC 用のコールインであるかどうかを示します。

Frames/Bytes transmitted

この VC が送信したフレーム数およびバイト数を示します。

Frames/Bytes received

この VC が受信したフレーム数およびバイト数を示します。

フレーム・リレー・インターフェースの監視

Total FECNS

この VC がインバウンドまたはダウンストリームの輻輳 (ふくそう) を通知された回数を示します。

Total BECNS

この VC がアウトバウンドまたはアップストリームの輻輳 (ふくそう) を通知された回数を示します。

Times congested

この VC が輻輳 (ふくそう) 状態になった回数を示します。

Times inactive

この VC が運用不可になった回数を示します。

CIR in bits/sec

300 bps ~ 2048000 bps の間の VC の情報速度を示します。値 0 もサポートされます。

Potential Info Rate

回線上のデータ転送の現行の最大速度 (ビット/秒) を示します。実際のデータ速度は、待ち行列の長さおよび回線に対応付けられている優先順位によって決まります。

このフィールドの値が 『Line Speed』 の場合は、このインターフェースに対して回線速度が構成されていなかったり、間違っていて構成されていても、最大データ速度は実際の回線速度になります。

Committed Burst (Bc)

この時間間隔 (Tc) の間にルーターが送信できるデータの最大量 (ビット数)。 ($Tc=Bc/CIR$ 。)

Excess Burst (Be)

この時間間隔 (Tc) の間に、ルーターが VC 上で Bc を超過して転送できる未認定データの最大量 (ビット数)

Minimum Info Rate

最小情報速度。輻輳 (ふくそう) を通知されたときにルーターがそこまで減速する VC の最小データ速度

Maximum Info Rate

最大情報速度。ルーターが VC 用に転送する最大データ速度

Required

Yes または No。yes の場合、PVC は必須 PVC です。

PVC group name

PVC が必須 PVC グループのメンバーの場合、その名前がここに表示されます。そうでない場合は 『Unassigned』 が表示されます。

Compression capable

回線がデータ・パケットを圧縮できるかどうかを示します。

Operational

回線上で圧縮がアクティブかどうかを示します。これが yes の場合、このリンク上でデータが圧縮中です。

R-Rs received

ピア解凍器によって送信されたりセット要求パケットの数を示しま

フレーム・リレー・インターフェースの監視

す。ピア解凍器は、ピア圧縮器との同期が外れたことを検出するたびに、リセット要求を送信します。この数が急激に増える場合は、この回線上のパケットは失われているか、破壊されています。

R-Rs transmitted

回線上で圧縮が開始された以降に送信されたりセット要求パケットの数を示します。この数が急激に増える場合は、この回線上のパケットは失われているか、破壊されています。

R-As received

リセット要求へのレスポンスとして受信されたりセット確認の数を示します。圧縮器は、圧縮ヒストリーをリセットしたことを知らせるときも、このパケットを送信します。

R-As transmitted

これは、ピアに送信されたりセット確認の数です。

R-R mode discards

R-R を送信した後 R-A を待っている間に廃棄された圧縮データ・フレームの数を示します。

Enlarged frames

これは圧縮できなかったフレームの数です。通常、圧縮不能なフレームは、圧縮されない形式で特殊な圧縮フレーム・タイプに入れて送信されるので、圧縮器と解凍器の同期を保つことができます。

Decompress discards

解凍誤りのために廃棄された圧縮フレームの数を示します。

Compression errors

圧縮されない形で転送された圧縮誤りのあるフレームの数を示します。

Compression ratio

圧縮器の概略の効率を示します。

Decompression ratio

解凍器の概略の効率を示します。

Encryption capable

この回線が暗号化使用可能かどうかを示します。

注: 暗号化サポートはオプションであり、**load add** コマンドを使用して、ソフトウェア・ロードに追加する必要があります。102ページの『Load』を参照してください。

Operational

回線上で暗号化がアクティブかどうかを示します。これが yes の場合は、データはこのリンク上で暗号化されています。

Encryption errors

暗号化誤りがあったフレームの数を示します。

Decryption errors

復号誤りがあったフレームの数を示します。

フレーム・リレー・インターフェースの監視

Rcv error discards

受信に問題があったために廃棄された圧縮フレームの数を示します。

Current number of xmit frames queued

FR によってこの回線のために現在待ち行列化されているフレームの数を示します。これらのフレームは、このインターフェースのシリアル装置ハンドラー送信待ち行列上のスペースが利用可能になるのを待っています。

Xmit frames dropped due to queue overflow

出力待ち行列オーバーフローが原因で、この VC 用に送信できなかったフレーム数を示します。

lmi フレーム・リレー・インターフェース上の論理マネージメントに関する統計を表示します。

例 :

list lmi

Management Status:

```
-----
LMI enabled           = Yes   LMI DLCI           = 0
LMI type              = ANSI  LMI Orphans OK      = Yes
CLLM enabled          = No
SVC local net number = 12345678
SVC Number type       = International
SVC Numbering plan   = E.164  SVC Call-out retries = 2
SVC Call-ins allowed = Yes   SVC Network emulation mode = No
Protocol broadcast    = Yes   Congestion monitoring = Yes
Emulate multicast     = Yes   CIR monitoring        = No
Notify FECN source    = No   Throttle transmit on FECN = No
Number VCs P1 allowed = 64   Interface down if no PVCs = No
Line speed (bps)      = 1000000 Maximum frame size (bytes) = 2048
Timer T1 seconds     = 10   Counter N1 increments = 6
LMI N2 threshold     = 3    LMI N3 threshold window = 4
MIR % of CIR          = 25   IR % Increment        = 12
IR % Decrement        = 25   DECnet length field    = No
Default CIR           = 64000 Default Burst Size     = 64000
  Default Excess Burst = 0
Current receive sequence = 0
Current transmit sequence = 1
Total status enquiries = 9   Total status responses = 0
Total sequence requests = 0   Total responses        = 0
Data compression enabled = No
Data encryption enabled = No
```

Virtual Circuit Status:

```
-----
Total allowed = 64   Total configured = 2
Total active = 0   Total congested = 0
Total PVCs left net = 0   Total PVCs join net = 0
```

Management Status:

LMI enabled

フレーム・リレー・マネージメントがアクティブかどうか (yes または no) を示します。

LMI DLCI

マネージメント回線番号を示します。この番号は 0 (ANSI デフォルトまたは ITU-T/CCITT) または 1023 (中間 LMI REV1) です。

LMI type

使用されているフレーム・リレー・マネージメントのタイプ (ANSI、ITU-T/CCITT、または LMI 改訂 1) を示します。

LMI orphans OK

フレーム・リレー LMI マネージメントから確認されたすべての未構成回線を使用できるかどうか (yes または no) を示します。

CLLM enabled

CLLM フレームを受信したときに、この回線が減速するかどうかを指定します。

Timer Ty seconds

CLLM Ty タイマーの値を示します。このフィールドは、CLLM が使用可能のときにのみ表示されます。

Last CLLM cause code

受信した最後の CLLM メッセージに示されていた輻輳 (ふくそう) の原因符号を示すか、あるいは CLLM メッセージを受信しなかった場合は **None** が示されます。このフィールドは、CLLM が使用可能のときにのみ表示されます。

SVC network number

このインターフェース上の SVC のネットワーク番号を指定します。

SVC number type

SVC 番号タイプ、不明 (unknown) または国際 (international) を指定します。

SVC numbering plan

番号計画が E.164 か X.121 かを指定します。

SVC call-out redial attempts

このインターフェース上でのコールアウト再ダイヤル試行の数を指定します。

SVC network emulation mode

SVC の場合にこのインターフェースがネットワーク・エミュレーション・モードで動作するかどうかを指定します。

SVC call-ins allowed

このインターフェースでコールインを許可するかどうかを指定します。

Protocol broadcast

IP RIP のようなプロトコルがフレーム・リレー・インターフェースを介して動作できるかどうかを示します。

Congestion monitoring

ネットワーク輻輳 (ふくそう) に対応する輻輳 (ふくそう) 監視フィーチャーが使用可能かどうか (yes または no) を示します。

Emulate multicast

各アクティブ PVC 上のマルチキャスト・エミュレーション・フィーチャーが使用可能かどうか (yes または no) を示します。

CIR monitoring

伝送速度を強制する回線監視フィーチャーが使用可能かどうか (yes または no) を示します。

フレーム・リレー・インターフェースの監視

PVCs P1 allowed

このインターフェースで使用できる VC の数を示します。この数は、インターフェース上でサポートできるアクティブ、輻輳（ふくそう）、非アクティブ、および除去された VC の最大数です。

Interface down if no PVCs

アクティブ PVC が存在しないときに、ルーターがインターフェースを利用不能と見なすかどうかを示します。

Line speed (bps)

フレーム・リレー・インターフェースの構成されたデータ速度を示します。

Timer T1 seconds

フレーム・リレー・インターフェースがフレーム・リレー・スイッチ LMI エンティティとシーケンス番号交換を行う頻度を示します。

Counter N1 increments

完全な LMI 状態照会を実行する前に満了する必要がある T1 タイマー間隔の回数を示します。

LMI N2 error threshold

N3 ウィンドウ内で発生した、フレーム・リレー・インターフェースのリセットの原因になる管理イベント誤りの数を示します。

LMI N3 error threshold window

N2 誤り限界値を測定するのに使用される、監視された管理イベントの数を示します。

MIR % of CIR

CIR の比率として表される最小 IR

IR % Increment

最大 IR に達するまで、ルーターが BECN のないフレームを受信するたびに IR を増分する比率

IR % Decrement

最小 IR に達するまで、ルーターが BECN を含むフレームを受信するたびに IR を減分する比率

DECnet length field

DECnet 長さフィールド・フィーチャーが使用可能かどうかを示します。一部のフレーム・リレー DECnet フェーズ IV 実現では、フレーム・リレー・マルチプロトコル・カプセル化ヘッダーと DECnet パケットの間に長さフィールドが必要です。DECnet 長さフィールド・フィーチャーが使用可能な場合は、長さフィールドが挿入されます。

Default CIR

このインターフェースのデフォルト CIR を指定します。

Default Burst Size

このインターフェースのデフォルト・バースト・サイズを指定します。

Default Excess CIR

このインターフェースのデフォルト超過バースト・サイズを指定します。

Current receive sequence

フレーム・リレー・インターフェースがフレーム・リレー管理エンティティから受信した現行の受信シーケンス番号を示します。

Current transmit sequence

フレーム・リレー・インターフェースがフレーム・リレー管理エンティティに送信した現行の送信シーケンス番号を示します。

Total status enquiries

フレーム・リレー・インターフェースがフレーム・リレー管理エンティティに行った状態照会の合計数を示します。

Total status responses

フレーム・リレー・インターフェースが、状態照会への応答としてフレーム・リレー管理エンティティから受け取ったレスポンスの合計数を示します。

Total sequence requests

フレーム・リレー・インターフェースがフレーム・リレー管理エンティティに送信したシーケンス番号要求の合計数を示します。

Total responses

フレーム・リレー・インターフェースがフレーム・リレー管理エンティティから受信したシーケンス番号レスポンスの合計数を示します。

Data compression enabled

このインターフェース上でデータ圧縮が使用可能かどうかを示します。

Orphan compression

このインターフェース上のオーファン回線で、データ圧縮が使用可能かどうかを示します。

注: オーファン回線上の圧縮を使用可能にすると、装置上のネイティブ VC が利用可能な圧縮コンテキストの数が減ります。

オーファン圧縮は、PVC と SVC の両方に適用されます。

Compression circuit limit

このインターフェース上でデータを圧縮できる VC の最大数を指定します。

Active compression circuits

このインターフェース上で現在データを圧縮中の VC 数を指定します。

Data encryption enabled

このインターフェース上でデータ暗号化が使用可能にされているかどうかを示します。

フレーム・リレー・インターフェースの監視

注: 暗号化サポートはオプションであり、**load add** コマンドを使用して、ソフトウェア・ロードに追加する必要があります。102ページの『Load』を参照してください。

Active encryption circuits

現在データを暗号化している VC の数を示します。

Virtual Circuit Status:

Total allowed

このインターフェースでの使用状態がアクティブ、輻輳（ふくそう）、除去、または非アクティブであることが許容される VC の数（オフファンを含む）を示します。

Total configured

このインターフェースに現在構成されている VC の合計数を示します。

Total active

このインターフェース上のアクティブ VC の数を示します。

Total congested

ネットワーク内の輻輳（ふくそう）のために減速されている VC の数を示します。

Total PVCs left net

ネットワークから除去された PVC の数を示します。

Total PVCs joined net

ネットワークに追加された PVC の合計数を示します。

permanent-virtual-circuit

フレーム・リレー・インターフェース上に構成されているすべての PVC の一般リンク・レイヤー統計および構成情報を表示します。

例 :

list permanent-virtual-circuit

Circuit#	Circuit Name	Orphan Circuit	Type/ State	Frames Transmitted	Frames Received
16	Valencia	No	%*P/A	2	1
17	Raleigh	No	@#P/A	15	14
18	Boston	No	&#P/A	0	0
19	Orlando	No	*P/A	0	0
20	Port Royal	No	\$P/A	0	0
21	New York	No	@P/A	2	0

A - Active I - Inactive R - Removed P - Permanent C - Congested
* - Required # - Required and belongs to a PVC group
@ - Data compression capable but not operational
& - Data compression capable and operational
\$ - Data encryption capable but not operational
% - Data encryption capable and operational

Circuit#

PVC の DLCI を示します。

Circuit Name

回線の名前の ASCII ストリングです。

Orphan Circuit

PVC が未構成回線かどうか (yes または no) を示します。

Type/State

回線の状態、A (アクティブ)、I (非アクティブ)、P (固定)、C (輻輳 (ふくそう))、または R (除去) を示します。

Frames Transmitted

この PVC が送信したフレームの数を示します。

Frames Received

この PVC が受信したフレームの数を示します。

pvc-groups

すべての必須 PVC グループの必須 PVC グループ情報を表示します。各グループは、グループ名、グループ内の回線、および各回線の状態 (アクティブ、非アクティブ、または除去) からなっています。

例 :

```
list pvc-groups
Group name          Circuits in group  Circuit status
-----
group1              16                active
                   44                inactive
                   240               removed
```

svcs 状態とは無関係に、インターフェース上のすべての SVC (構成済みまたはオーファン) を表示します。

例 :

```
FR 1>list svcs

Circuit Name          Remote party number  Circuit State  Call State  DLCI
-----
flotsam               911                  R           N           0
jetsam                666                  R           N           0
Circuit states: A - Active  I - Inactive  R - Removed  C - Congested
Call states: N - Null      I - Call Initiated  O - Outgoing call proceeding
A - Active  D - Disconnect request  R - Release request
```

switched-virtual-circuit

以下の例では、名前別の単一 SVC に関する構成と運用情報を表示します。

例 :

```
FR 1>list switched-virtual-circuit flotsam
Circuit Name          Opt-Idle          Outgoing          Incoming
Name                  ions  Timer          Value             Value
-----
flotsam               ILM      60          CIR: 0            0
Call state: Null          Burst: 0        0
Call Initiated by: None  DLCI: 0        Excess: 0        0
Remote party number: IE911
Remote subaddress: None

Options: I - call-ins allowed, L - learn protocols, M - multicast required
C - compression capable and operational, c - compression capable
E - encryption capable and operational, e - encryption capable
Address type: I - International, U - Unknown
Numbering plan: E - E.164, X - X.121
Subaddress format: N - NSAP, P - private
```

virtual-circuits

list permanent-virtual-circuit コマンドと同一の関連情報をもつ、すべての PVC およびすべてのアクティブ SVC を表示します。

FR 1>list virtual-circuits

Circuit Number	Circuit Name	Orphan Circuit	Type/State	Frames Transmitted	Frames Received
-----	-----	-----	-----	-----	-----

フレーム・リレー・インターフェースの監視

16	circ16	No	P/A	4	8
17	Unassigned	Yes	@ P/I	0	0
18	flotsam	No	S/A	12	10
19	Unassigned	Yes	@ P/A	7	2
24	circ24	No	P/R	0	0

P - PVC S - SVC A - Active I - Inactive R - Removed C - Congested

* - Required # - Required and belongs to a PVC group

@ - Data compression capable but not operational

& - Data compression capable and operational

LLC

LLC コマンドは、LLC 監視プロンプトにアクセスするのに使用します。LLC コマンドは、この新たに表示されたプロンプトで入力します。これらの各コマンドの説明は、259ページの『LLC 監視コマンド』を参照してください。

構文：

llc

注: LLC コマンドは、ソフトウェア・ロードに APPN が含まれている場合にのみサポートされます。

Notrace

notrace コマンドは、個別の回線またはインターフェース全体のパケット・トレースを使用不可にするために使用します。このコマンドは、特定の回線またはインターフェースのトレースが必要な場合に、フィルターとして使用できます。デフォルト設定はすべての回線のトレースです。

構文：

```
notrace                circuit#  
                        circuitname  
                        all
```

例：

```
notrace 16  
Disables packet tracing on circuit (PVC or SVC) with DLCI 16.  
notrace circuit phoenix  
Disables packet tracing on circuit (PVC or SVC) named phoenix.  
notrace circuit all  
Disables packet tracing on all circuits on this interface.
```

Set

set コマンドは、指定された VC の認定情報速度 (CIR)、認定バースト速度、および超過バースト速度の値を設定するのに使用します。IR 調整比率の値も設定できます。

このコマンドで行った変更は、構成データには影響を与えません。ルーターがリスタートされるまでしか有効ではありません。

構文：

```
set                    circuit . . .
```

`ir-adjustment . . .`

circuit *circuit# または name cirvol bcval beval*

指定された VC の認定情報速度 (CIR)、認定バースト速度、および超過バースト速度の値を設定し、PVC またはアクティブ SVC の作動可能な発信 CIR、Bc、および Be を変更するために使用することができます。

例 :

```
set circuit
Circuit number [16]?
Committed Information Rate (CIR) in bps [1200]?
Committed Burst Size (Bc) in bits [1200]?
Excess Burst Size (Be) in bits [56000]?
```

Circuit Number

回線番号を 16 ~ 1007 の範囲で示します。

Committed Information Rate

認定情報速度 (CIR) を示します。CIR は 0 と 300 bps ~ 2048000 bps の範囲の値のどちらかになります。デフォルトでは 64000 bps です。詳しくは、524ページの『認定情報速度 (CIR)』を参照してください。

Committed Burst Size

認定バースト (Bc) サイズ/CIR 秒に等しい測定間隔中に、ルーターが送信するデータの最大量 (ビット数)。300 ~ 2048000 ビットの範囲です。デフォルト値は 64000 bits です。

注: CIR が 0 として構成されている場合は、認定バースト・サイズは 0 に設定され、値の入力を指示するプロンプトが出されることはありません。追加情報については、525ページの『認定バースト (Bc) サイズ』を参照してください。

Excess Burst Size

(認定バースト・サイズ/CIR) 秒数に等しい測定期間中にルーターが送達を試みることができる、認定バースト・サイズを超過した未認定データの最大量 (ビット数)。0 ~ 2048000 ビットの範囲です。デフォルトでは 0 です。追加情報については、526ページの『超過バースト (Be) サイズ』を参照してください。

ir-adjustment *increment-% decrement-% minimum-IR*

最小情報速度 (IR) と、ネットワーク輻輳 (ふくそう) に応じて IR を増分および減分する比率を設定します。

最小 IR (CIR の比率で表す) は、情報速度の下限です。最小比率は 1 で、最大比率は 100 です。デフォルト値は 25 です。

ネットワークの輻輳 (ふくそう) が解消されると、情報速度は、最大情報速度に達するまで、IR 調整増分比率ずつ徐々に増分されます。最小比率は 1 で、最大比率は 100 です。デフォルト値は 12 です。

ネットワークの輻輳 (ふくそう) が発生すると、情報速度は、最小情報速度に達するまで、BECN が入ったフレームを受信するたびに IR 調整減分比率ずつ減分されます。最小比率は 1 で、最大比率は 100 です。デフォルト値は 25 です。

例 :

フレーム・リレー・インターフェースの監視

```
set ir-adjustment
IR adjustment % increment [12]?
IR adjustment % decrement [25]?
Minimum IR as % of CIR [25]?
```

Trace

Trace コマンドは、個別の回線またはインターフェース全体のパケット・トレースを使用可能にするために、また、このインターフェース上のすべての回線のトレース能力をリストするために使用します。このコマンドは、特定の回線またはインターフェースのトレースが必要な場合に、フィルターとして使用できます。デフォルト設定はすべての回線のトレースです。

構文：

```
trace                all
                    circuitname
                    circuit#
                    list
```

例：

```
trace 16
    Enables packet tracing on circuit (PVC or SVC) with DLCI 16.
```

```
trace circuit phoenix
    Enables packet tracing on circuit (PVC or SVC) named phoenix.
```

```
trace circuit all
    Enables packet tracing on all circuits on this interface.
```

```
trace list
The following circuits are available for packet trace
Circuit Name                Circuit Number
-----
Unassigned                   16
phoenix                       25
jetsam                        0
```

Lists the packet tracing capability of all circuits on this interface.

フレーム・リレー・インターフェースと GWCON インターフェース・コマンド

フレーム・リレー・インターフェースには監視目的の監視プロセスがありますが、GWCON 環境から **interface** コマンドを使用すると、ルーターでも導入済みインターフェースに関する完全な統計が表示されます。(**interface** コマンドについての詳細は、117ページの『第10章 操作/監視プロセス (GWCON - Talk 5) とコマンド』を参照してください。)

フレーム・リレー・インターフェースについて表示される統計

フレーム・リレー・インターフェースに関して GWCON 環境から **interface** コマンドを実行すると、次のような統計が表示されます。

```
+interface 10
Nt Nt' Interface Slot-Port                Self-Test Self-Test Maintenance
10 10 FR/0      Slot: 8 Port: 0                Passed   Failed   Failed
                                     2       1       0
```


フレーム・リレー・インターフェースの監視

Frame Relay MAC/data-link on V.35/V.36 interface

Adapter cable: V.35 DTE

V.24 circuit: 105 106 107 108 109
Nicknames: RTS CTS DSR DTR DCD
PUB 41450: CA CB CC CD CF
State: ON ON ON ON ON

Line speed: 64.000 Kbps

Last port reset: 1 hour, 20 minutes, 42 seconds ago

Input frame errors:

CRC error	0	alignment (byte length)	0
missed frame	182	too long (> 2062 bytes)	0
aborted frame	0	DMA/FIFO overrun	0

Output frame counters:

DMA/FIFO underrun errors	0	Output aborts sent	0
--------------------------	---	--------------------	---

Nt 初期構成時にソフトウェアによって割り当てられたインターフェース番号を示します。

Nt' 初期構成時にソフトウェアによって割り当てられたインターフェース番号を示します。

注: FR ダイヤル回線インターフェースの場合、Nt' は Nt と異なります。Nt' は、ダイヤル回線が実行されている基本インターフェース (ISDN) を示します。

Interface

インターフェースのタイプとそのインスタンス番号を示します。フレーム・リレーは FR 名を持っています。

Slot フレーム・リレーを実行しているインターフェースのスロットを示します。

Port フレーム・リレーを実行しているインターフェースのポートを示します。

Self-test Passed

フレーム・リレー・インターフェースが自己テストに合格した回数を示します。

Self-test Failed

フレーム・リレー・インターフェースが自己テストに失敗した回数を示します。

Maintenance Failed

インターフェースがフレーム・リレー・マネージメントと通信できなかった合計回数を示します。

V.24 circuit, Nicknames, and State

回線、制御信号、ピン割り当てとそれらの状態 (ON または OFF)。注: 監視出力に記号 - - - が現れている場合は、値または状態が不明であることを示します。

Line speed

送信クロック・レート

Last port reset

前回のポート・リセット以降の時間の長さ

Input frame errors:

フレーム・リレー・インターフェースの監視

CRC error

受信されたが、チェックサム・エラーがあったため廃棄されたパケットの数

Alignment

長さが 8 の偶数倍でないために廃棄された受信パケットの数

Too short

長さが 2 バイト未満であったために廃棄された受信パケットの数

Too long

構成されたサイズより大きかったために廃棄されたパケットの数

Aborted frame

受信されたが、送信側が放棄したか、伝送路誤りのため放棄されたパケットの数

DMA/FIFO overrun

シリアル・インターフェースがシステム・パケット・バッファ・メモリーにデータを送信する速度が遅かったために、データをネットワークから受信できなかった回数

Missed frame

フレームが装置に到着したときに利用可能なバッファがない場合、ハードウェアはそのフレームを廃棄し、紛失フレーム・カウンターを増分します。

L & F bits not set

シリアル・インターフェース上で、ハードウェアは到着するフレームの入力記述子情報をセットします。バッファが到着したフレーム全体を受け入れることができる場合、ハードウェアはそのフレームの最後のビットと最初のビットの両方をセットして、バッファが完全なフレームを受け入れたことを示します。いずれかのビットがセットされていない場合、パケットは廃棄され、L & F bits not set カウンターが増分され、バッファは消去されて再利用できるようになります。

注: L & F bits not set カウンターがトラフィックによる影響を受けるとは考えられません。

Output frame counters:

DMA/FIFO underrun errors

シリアル・インターフェースがシステム・パケット・バッファ・メモリーからデータを取り出す速度が遅かったために、データをネットワーク上に送信できなかった回数

Output aborts sent

上位ソフトウェアの要求に応じて放棄された伝送の数

GWCON 環境から interface コマンドを実行すると、フレーム・リレー・ダイヤル回線について次のような統計が表示されます。

+interface 3

Nt	Nt'	Interface	Passed	Self-Test Failed	Self-Test Failed	Maintenance
3	2	FR/1		1	0	0

Frame Relay MAC/data-link on ISDN Primary Rate interface

第39章 ポイント・ポイント・プロトコル・インターフェースの使用

この章では、装置上のインターフェースに関するポイント・ポイント・プロトコルの使用法について説明します。本章には、以下の節が含まれています。

- 『PPP の概説』
- 586ページの『PPP リンク制御プロトコル (LCP)』
- 590ページの『PPP 認証プロトコル』
- 595ページの『PPP による AAA の使用』
- 596ページの『PPP ネットワーク制御プロトコル』
- 599ページの『バーチャル・コネクションの使用と構成』

マルチリンク PPP プロトコルの使用に関する説明については、651ページの『第41章 マルチリンク PPP プロトコルの使用』 および 657ページの『第42章 マルチリンク PPP プロトコル (MP) の構成と監視』 を参照してください。

PPP の概説

PPP は、シリアル・ポイント・ポイント・リンクを介して、データ・リンク・レイヤーでプロトコル・データグラムを転送する方法を提供します。PPP は、以下のサービスを提供します。

- リンク接続を確立、構成、およびテストするためのリンク制御プロトコル (LCP)
- シリアル・ポイント・ポイント・リンク上でプロトコル・データグラムをカプセル化するためのカプセル化プロトコル
- ピア (リモート) 装置の識別子の妥当性を検査し、またユーザー自身の識別子をピアに転送して妥当性検査を依頼するための認証プロトコル (AP)
- 各種のネットワーク・レイヤー・プロトコルの設定および構成を行うためのネットワーク制御プロトコル (NCP)。PPP では、複数のネットワーク・レイヤー・プロトコルを使用できます。

584ページの図44 は、ポイント・ポイント・シリアル・リンクの例を示しています。

PPP の使用

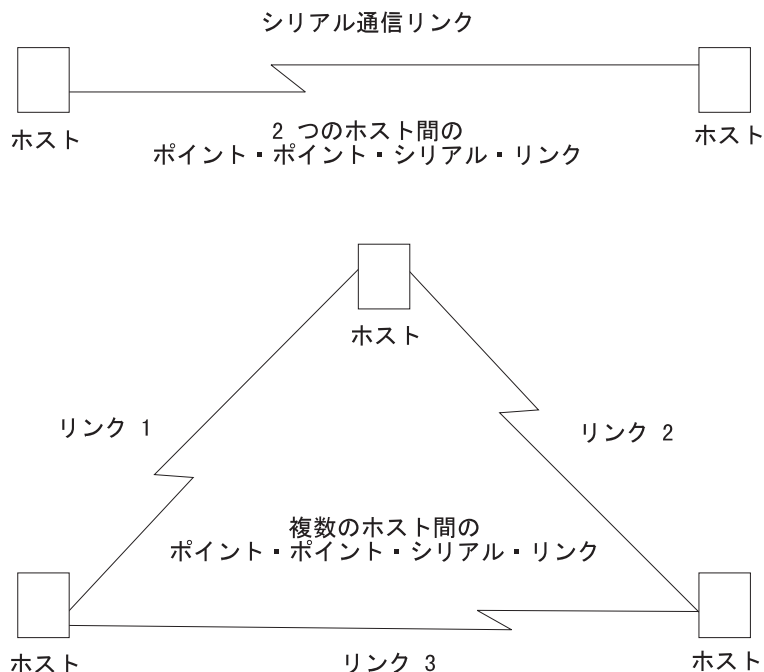


図 44. ポイント・ポイント・リンクの例

PPP は現在、以下の制御プロトコルをサポートしています。

- AppleTalk 制御プロトコル (ATCP)
- DECnet プロトコル制御プロトコル (DNCP)
- Banyan VINES 制御プロトコル (BVCP)
- ブリッジング・プロトコル (BCP、NBCP、および NBFCP)
- Internet プロトコル制御プロトコル (IPCP)
- インターネット・プロトコル・バージョン 6 制御プロトコル (IPv6CP)
- IPX 制御プロトコル (IPXCP)
- APPN HPR 制御プロトコル (APPN HPRCP)
- APPN ISR 制御プロトコル (APPN ISRCP)
- OSI 制御プロトコル (OSICP)

各端は、始めに LCP パケットを送信して、データ・リンクを構成し、テストします。リンクが確立された後、PPP は NCP パケットを送信して、1 つまたは複数のネットワーク・レイヤー・プロトコルを選択し、構成します。ネットワーク・レイヤー・プロトコルを構成すると、各ネットワーク・レイヤーからのデータグラムをリンクを介して送信できるようになります。以下の節では、これらの概念についてさらに詳しく説明します。

PPP データ・リンク・レイヤー・フレーム構造

PPP は、ハイレベル・データ・リンク制御 (HDLC) フレームと同じ構造のデータ・フレームを転送します。PPP は、単一のフレーム・フォーマットを用いてすべてのデー

タ交換および制御交換を行うバイト指向の伝送方式を使用します。図45 は PPP フレーム構造を示しており、その後に各フィールドの詳しい説明があります。

フラグ	アドレス	制御	プロトコル	情報	FCS	Flag
8ビット	8ビット	8ビット	16ビット	可変	16ビット	8ビット

図45. PPP フレーム構造

フラグ・フィールド

フラグ・フィールドは、各フレームを開始および終了し、固有のパターン 01111110 をもっています。通常は、1 つのフラグが、あるフレームを終了し、次のフレームを開始します。リンクに接続されている受信側は、このフラグ・シーケンスを継続的に探索して、次のフレームの開始と同期します。

アドレス・フィールド

アドレス・フィールドは 1 オクテット (8 ビット) で、2 進シーケンス 11111111 (16 進 0xff) が入っています。これは、全ステーション・アドレスと呼ばれます。PPP は個別ステーション・アドレスは割り当てません。

制御フィールド

制御フィールドは 1 オクテットで、2 進シーケンス 00000011 (16 進 0x03) が入っています。このシーケンスは、P/F ビットがゼロにセットされた非番号制情報 (UI) コマンドを識別します。

プロトコル・フィールド

プロトコル・フィールドは PPP によって定義されます。このフィールドは 2 オクテット (16 ビット) で、その値はフレームの情報フィールドにカプセル化されたプロトコル・データグラムを識別します。

'0xC000' ~ '0xFFFF' の範囲のプロトコル・フィールドは、LCP、PAP、CHAP のようなレイヤー 3 データ (プロトコル・データグラム) を示します。

情報フィールド

情報フィールドには、プロトコル・フィールドに指定されているプロトコルのデータグラムが入っています。これは、ゼロまたはそれ以上のオクテットです。

プロトコル・タイプが LCP の場合、PPP データ・リンク・レイヤー・フレームの情報フィールドには、正確に 1 つの LCP パケットがカプセル化されています。

フレーム・チェック・シーケンス (FCS) フィールド

フレーム・チェック・シーケンス・フィールドは、16 ビット巡回冗長検査 (CRC) です。

PPP リンクは、各種のオプションの使用をネゴシエーション (交渉) することにより、基本フレーム・フォーマットを変更することができます。以下の説明は、このような変更を行う前のフレーム・フォーマットに適用されます。PPP LCP パケットは、交渉で決められたオプションに関係なく、常にこのフォーマットでも送信され、伝送路上の同期が失われた場合でも、LCP パケットを認識できるようにされています。

PPP の使用

ルーターは、このようなオプションのうちの 2 つをサポートしています。すなわち、アドレスおよび制御フィールド圧縮 (ACFC) とプロトコル・フィールド圧縮 (PFC) です。これらについては、後で詳しく説明します。

PPP リンク制御プロトコル (LCP)

PPP のリンク制御プロトコル (LCP) は、ポイント・ポイント・リンクを確立、構成、保守、および終了します。このプロセスは 4 つのフェーズで行われます。

1. PPP は、ネットワーク・レイヤー・データグラムを交換する前に、最初に LCP 構成パケットを交換して、コネクションをオープンします。このネゴシエーション・プロセスの一部として、PPP は、転送できる最大パケット・サイズや、リンクの各端がネットワーク・トラフィックを伝送する前に認証機構を使用してそれぞれのピアに自分自身を識別する必要があるかどうかなど、さまざまな基本的リンク・レベル・パラメーターについて、リンクの各端で合意が得られるように処理します。

このネゴシエーションが不成功の場合、リンクは『ダウン』と見なされ、ネットワーク・トラフィックを伝送することはできません。ネゴシエーションに成功した場合、LCP が『オープン』状態になり、PPP は次のフェーズに進みます。

2. LCP が正常にオープン状態になったら、リンク確立の次のステップは、認証を実行することです。つまり、リンクの各端は、LCP ネゴシエーションで相手側が指定した『認証プロトコル』を使用して、相手側に自分自身を識別します。

認証が不成功の場合、リンクは『ダウン』としてマークされ、ネットワーク・トラフィックを伝送することはできません。認証に成功した場合、または認証が不要の場合、PPP リンクは次のフェーズに移ります。

3. 認証を交渉した後、ピア間でリンクの暗号化を交渉します。認証フェーズが完了した後、ルーターは暗号化制御プロトコル (ECP) パケットを使用して、暗号化の使用を交渉します。つまり、リンクの各端は、この PPP リンク上のデータを暗号化するのに使用する暗号化アルゴリズムを交渉します。ECP が『オープン』状態に達することができなかった場合、リンクは『ダウン』としてマークされ、ネットワーク・トラフィックを伝送することはできません。ECP が正常に『オープン』状態に達した場合、または暗号化は不要の場合、PPP リンクは次のフェーズである NCP ネゴシエーション (ECP を除く、これも技術的には NCP です) に移ります。リンクは『オープン』またはこの場合は『アップ』(ただし、まだレイヤー 3 プロトコル・データグラムは転送できません) と見なされます。

4. リンクがオープンしたら、ルーターはネットワーク制御プロトコル (NCP) パケットを使用して、各種のレイヤー 3 プロトコル (たとえば、IP、IPX、DECnet、Banyan Vines) の使用を交渉します。各レイヤー 3 プロトコルには、それぞれ独自の関連ネットワーク制御プロトコルがあります。たとえば、IP には IPCP があり、IPX には IPXCP があります。これらの NCP パケットの基本フォーマットと機構は、すべてのプロトコルで同一であり、基本的には、この節で後述する LCP 機構のスーパーセットです。

各レイヤー 3 プロトコルは、それぞれ個別に交渉されます。特定の NCP の交渉に成功した場合、リンクはそのプロトコルのトラフィックに対して『アップ』になります。LCP の場合と同様に、この交渉の中で構成情報を交換することができます。たとえば IPCP は、IP アドレスを交換したり、“Van Jacobson IP ヘッダー圧縮”の使用を交渉したりすることができます。

LCP と同様に、NCP もそのピアとの交渉が不成功に終わる可能性があります。ピアが特定のプロトコルをサポートしなかったり、一部の構成オプションが受け入れられなかった場合にそうなります。NCP が『オープン』状態に達しなかった場合、他のレイヤー 3 プロトコルが PPP リンクを介して正常にトラフィックの受け渡しを行っていても、そのプロトコルのレイヤー 3 プロトコル・パケットは交換することができません。

- 最後に、LCP はいつでもリンクを終了させることができます。このリンクの終了は通常ユーザーの要求で行われますが、その他の理由でも行われる場合があります。たとえば、管理上の理由でリンクをクローズしたり、アイドル・タイマーが満了したり、CHAP 再チャレンジ時に再認証が正常に行われなかった場合などです。

PPP LCP、認証、および汎用 NCP 交渉機構の詳細については、RFC 1331、1334、1570、および 1661 を参照してください。

LCP パケット

LCP パケットは、PPP リンクを確立し、管理するのに使用され、おおまかに 3 つのカテゴリに分けることができます。

- リンク確立パケット は、構成情報を交換し、リンクを確立します。
- リンク終了パケット は、リンクを切断するか、あるいは特定の時点でリンクが接続を受け入れていないことを知らせます。また、特定のプロトコルが認知されない (たとえば、NCP ネゴシエーション時に) ことを知らせるのにも使用できます。
- リンク保守パケット は、リンクを監視し、デバッグします。

PPP データ・リンク・レイヤー・フレームの情報フィールドには、正確に 1 つの LCP パケットがカプセル化されます。LCP パケットの場合、プロトコル・フィールドには“リンク制御プロトコル”(16 進 C021)が入ります。図46 は LCP パケットの構造を示しており、その後に各フィールドの詳しい説明があります。

符号	識別子	長さ	データ(オプション)
----	-----	----	------------

図 46. LCP フレーム構造 (PPP 情報フィールド内の)

符号 符号フィールドは 1 オクテットの長さで、LCP パケットのタイプを識別します。588ページの表72 の符号は、パケット・タイプの区別を示します。これらについては、後で詳しく説明します。

表 72. LCP パケット符号

符号	パケット・タイプ
1	Configure-Request (リンク確立)
2	Configure-Ack (リンク確立)
3	Configure-Nak (リンク確立)
4	Configure-Reject (リンク確立)
5	Terminate-Request (リンク終了)
6	Terminate-Ack (リンク終了)
7	Code-Reject (リンク確立)
8	Protocol-Reject (リンク確立)
9	Echo-Request (リンク保守)
10	Echo-Reply (リンク保守)
11	Discard-Request (リンク保守)

識別子 識別子フィールドは 1 オクテットの長さで、パケット要求と応答を一致させるのに使用されます。

長さ 長さフィールドは 2 オクテットの長さで、LCP パケットの全長 (すなわち、すべてのフィールドを含めた) を示します。

データ (オプション)

データ・フィールドは、長さフィールドに示されているゼロまたはそれ以上のオクテット数です。このフィールドのフォーマットは、符号によって決まります。

NCP パケットは、構造は LCP パケットと同一ですが、異なる PPP 『プロトコル』値を持っているので識別できます。各 LCP パケット・タイプ (符号フィールドによって識別) は、各 NCP に対しても同じ意味を持ちます。ただし、個々の NCP にすべての可能な LCP パケット・タイプが実現されているわけではありません。NCP は通常、LCP で定義されているリンク確立タイプ・パケットはすべて実現されています。また、幾つかの追加 LCP パケット・タイプが実現されている場合もあり、LCP で使用されている以外の追加パケット・タイプを定義することもできます。LCP パケットの場合とは異なり、リンク確立フェーズで LCP によって交渉されたオプションに従って NCP フレームの構造を変更することが可能です。

リンク確立パケット

リンク確立パケットは、ポイント・ポイント・リンクを確立し、構成するもので、以下のパケット・タイプが含まれます。

Configure-Request

LCP パケット符号フィールドは 1 にセットされます。LCP はポイント・ポイント・リンクをオープンしたいときに、このパケット・タイプを送信します。Configure-Request を受信すると、ピア・ステーションの LCP エンティティでは、パケットを処理する準備ができていないかどうかに応じて、適切な応答を送信します。

Configure-Ack

LCP パケット符号フィールドは 2 にセットされます。Configure-Request パケット内の各構成オプションが受け入れ可能な場合、相手側はこのパケット・タイプを送信します。Configure-Ack (ack = 確認) を受信すると、発信元ステーションは識別子フィールドを検査します。このフィールドは、最後に送

信された `Configure-Request` からの値に一致していなければなりません。そうでない場合、そのパケットは無効です。

両側が `Configure-Request` を送信し、両側が `Configure-Ack` を受信しなければ、リンクはオープンしません。ある方向について交渉されたオプションが、他の方向について交渉されたオプションと異なっても構いません。『マスター・スレーブ』の関係はなく、それぞれの端が対称的に動作します。

Configure-Nak

LCP パケット符号フィールドは 3 にセットされます。`Configure-Request` パケット内の構成オプションのある部分が受け入れ不能である場合、ピアはこのパケット・タイプを送信します。識別子フィールドは受信した `Configure-Request` からコピーされ、データ (オプション) フィールドには、受信した受け入れ不能の構成オプションが記入されます。識別子フィールドは最後に送信された `Configure-Request` からの値に一致していなければなりません。そうでない場合、そのパケットは無効であり、廃棄されます。

発信元は、`Configure-Nak` パケットを受信すると、修正された、受け入れ可能な構成オプションを入れた新たな `Configure-Request` パケットを送信します。

Configure-Reject

LCP パケット符号フィールドは 4 にセットされます。`Configure-Request` パケット内の構成オプションのある部分が受け入れられない場合、ピアはこのパケット・タイプを送信します。識別子フィールドは受信した `Configure-Request` からコピーされ、データ (オプション) フィールドには、受信した受け入れ不能の構成オプションが記入されます。識別子フィールドは最後に送信された `Configure-Request` からの値に一致していなければなりません。そうでない場合、そのパケットは無効であり、廃棄されます。

発信元は、`Configure-Reject` パケットを受信すると、`Configure-Reject` パケットで受信した構成オプションのいずれも含んでいない新たな `Configure-Request` パケットを送信します。

Code-Reject

LCP パケット符号フィールドは 7 にセットされます。このパケット・タイプの送信は、受信したパケットの LCP 『符号』 フィールドが有効な値と見なされないことを示します。これは誤りを示している可能性があります。ユーザーが使おうとしている機能がピアで実現されていないことを示している場合もあります。

Protocol-Reject

LCP パケット符号フィールドは 8 にセットされます。このパケット・タイプの送信は、サポートされない、または不明のプロトコルが含まれている PPP フレームが受信された (パケットの PPP 『プロトコル』 フィールドが認知されなかった) ことを示しています。これは通常、相手側端がサポートしないプロトコルの NCP を交渉しようとした場合に起こります。たとえば、DECnet CP (DNCP) が `Config-Request` を送信したが、相手側端で DECnet について知らない場合は、相手側端では DNCP に対する LCP `Protocol-Reject` で応答します。`Protocol-Reject` パケットを受信すると、リンクは不正なプロトコルの送信を停止します。

注: NCP パケット・タイプと構造は LCP と同じですが、一部の NCP に関連した幾つかの追加 『符号』 フィールドがあります。

リンク終了パケット

リンク終了パケットはリンクを終了させるもので、以下のパケット・タイプが含まれます。

Terminate-Request

LCP パケット符号フィールドは 5 にセットされます。ポイント・ポイント・リンクをクローズする必要があるときに、LCP はこのパケット・タイプを送信します。これらのパケットは、Terminate-Ack パケットが返送されるまで、または Ack を待っている間に再試行カウンターが超過するまで送信されません。

Terminate-Ack

LCP パケット符号フィールドは 6 にセットされます。Terminate-Request パケットを受信した場合、符号フィールドを 6 にセットして、このパケット・タイプを送信しなければなりません。予期していなかった Terminate-Ack パケットの受信は、リンクがクローズされたことを示します。

リンク保守パケット

リンク保守パケットは、リンクを管理し、デバッグするもので、以下のパケット・タイプが含まれます。

Echo-Request および Echo-Reply

LCP パケット符号フィールドは、それぞれ 9 および 10 にセットされます。LCP は、リンクの両方向のデータ・リンク・レイヤー・ループバック機構を提供するために、これらのパケット・タイプを送信します。これらの機能は、たとえば、障害のあるリンクをデバッグした後でリンクの品質を調べる場合などに便利です。これらのパケットは、リンクがオープン状態にあるときにのみ送信されます。

Discard-Request

LCP パケット符号フィールドは 11 にセットされます。LCP は、データ・リンク・レイヤーのテストのために、このパケット・タイプをデータ受信側に提供します。Discard-Request を受け取ったピアは、そのパケットを廃棄する必要があります。これは、リンクをデバッグする場合に便利です。これらのパケットは、リンクがオープン状態にあるときにのみ送信されます。

PPP 認証プロトコル

PPP 認証プロトコルは、PPP リンクを介して接続されている 2 つのノード間に一種のセキュリティーを提供します。あるボックスで認証が必要な場合、2 つのボックスは LCP レイヤーのリンクの使用に関するネゴシエーションに成功した直後に (LCP が『オープン』状態になるまで LCP パケットが交換されます) 『認証』フェーズに入り、認証パケットを交換します。認証のネゴシエーションが正常に完了するまでは、ボックスはネットワーク・データ・パケットを伝送することも、ネットワーク・プロトコル (NCP トラフィック) の使用を交渉することもできません。

異なるタイプの認証プロトコルを使用できます。つまり、パスワード認証プロトコル (PAP) とチャレンジ/ハンドシェイク認証プロトコル (CHAP) です。Microsoft PPP CHAP (MS-CHAP) も Windows ワークステーションおよびピア・ルーターを認証す

るために使用可能です。PAP および CHAP は RFC 1334 に詳細に記述されていますが、この節の後方でも簡単に説明しておきます。MS-CHAP は RFC 1994 年版に説明があります。

リモート・ダイヤルイン・アクセス・ポートでは、3 番目の認証プロトコルが使用可能です。これは Shiva パスワード認証プロトコル (SPAP) で、Shiva のプロプラエタリー (所有権を主張できる) プロトコルです。詳しくは、592ページの『Shiva パスワード認証プロトコル (SPAP)』を参照してください。

あるボックスが相手側に対してそれ自身の認証を要求しているかどうか (要求している場合は、どのプロトコルを使用するか) については、LCP ネゴシエーション・フェーズで判別されます。一方の側が相手側に必要な認証プロトコルの使用法を知らなかったり、その使用を拒否する場合、リンク確立フェーズ (LCP ネゴシエーション) の段階でも、認証は『不成功』と見なすことができます。

リンクの各端は、相手側が自身を認証する方法について、独自の要件を設定します。たとえば、2 つのルーター『A』と『B』が PPP リンクを介して接続されている場合、A 側は B が PAP を使用して自身を A に認証することを要求し、同様に B 側は A が CHAP を使用して自身を識別することを要求するといったことが可能です。また、一方の側が認証を必要とし、他方の側は認証を必要としないというのも有効です。

リンク確立時の初期認証に加えて、一部のプロトコルの認証機能は、ピアが定期的に再証明することを要求することもできます。たとえば、CHAP では、認証機能はいつでも再チャレンジを出すことができ、ピアは正常に応答できなければなりません。そうでないと、リンクは失われます。

複数の認証プロトコルがリンク上で使用可能にされている場合は、ルーターは初期には以下の優先順位でその使用を試みます。

1. MS-CHAP
2. CHAP
3. PAP
4. SPAP

注: SPAP が使用可能なのは、IBM DIAL ダイヤルイン回線が構成されているインターフェースの場合だけです。

リモート側が認証要求に対して NAK で応答し、代替を提案した場合、ルーターは、その代替がリンク上で使用可能になっていれば代替を使用します。リモート側がルーターの提案に対して NAK で応答し続け、ルーターで使用可能にされている代替を提案しない場合、リンクは終了されます。

パスワード認証プロトコル (PAP)

パスワード認証プロトコル (PAP) は、ピアが両方向ハンドシェイクを使用して自身のアイデンティティを設定する簡単な方法を提供します。これは初期リンク確立時のみ行われます。リンク確立の後、認証が確認されるかコネクションが終了されるまで、ピアは認証機能に ID/パスワードの組みを送信します。パスワードは『解放

PPP の使用

された』回線を介して送信され、再生や反復的試行および誤ったアタックに対する保護はありません。ピアが試行の頻度とタイミングを制御します。

チャレンジ/ハンドシェーク認証プロトコル (CHAP)

チャレンジ/ハンドシェーク認証プロトコル (CHAP) は、両方向ハンドシェークを使用して、ピアのアイデンティティを定期的を確認するのに使用します。これは初期リンク確立時に行われ、リンク確立後の任意の時点で反復しても構いません。初期リンク確立後に、認証機能はピアに『チャレンジ』メッセージを送ります。ピアは、『単方向ハッシュ』機能を使用して計算された値で応答します。認証機能は、その応答を、自身が計算した予想ハッシュ値と突き合わせて検査します。値が一致している場合、認証は確認されます。そうでない場合、コネクションは終了します。

Microsoft PPP CHAP 認証 (MS-CHAP)

MS-CHAP は、リモート Windows ワークステーションおよびピア・ルーターを認証するために使用される PPP CHAP の拡張版です。MS-CHAP と CHAP は、両方とも PPP のリンク制御プロトコル (LCP) を使用して、必要な認証プロトコルを一方または両方向に交渉します。両方とも、CHAP プロトコル識別子を PPP プロトコルとして使用します。また、それぞれのプロトコルは、暗号化されたランダム・チャレンジを応答の一部として使用します。

MS-CHAP は内部 PPP ユーザーのローカル・リスト・データベースとともに使用できますが、外部 AAA 認証サーバーと一緒に使用できません。この認証サーバーについては、機構の使用と構成の中の『ローカルまたはリモート認証の使用』の章で説明してあります。PPP インターフェースで Microsoft PPP 暗号化 (MPPE) を使用する予定の場合、MPPE を構成する前に MS-CHAP をそのインターフェースで使用可能にする必要があります。talk 6 コマンド **enable mschap** を使用して MS-CHAP を使用可能にしてください。

Shiva パスワード認証プロトコル (SPAP)

注: SPAP が使用可能なのは、IBM DIALs ダイアルイン回線が構成されているインターフェースの場合だけです。

Shiva パスワード認証プロトコル (SPAP) には、PAP に類似する 2 方向ハンドシェークを使用して、ピアがそのアイデンティティを確立する単純な方式が用意されています。リンク確立フェーズが完了すると、認証が確認されるか、接続が終了するか、再試行カウンターが満了するまで、ID/パスワードがピアによって認証機能に繰り返し送信されます。

SPAP は、認証プロトコルとしてはそれほど強力なものではなく、パスワードに専用暗号化アルゴリズムを使用しています。認証の外に、SPAP は以下を提供します。

- パスワードを変更できる能力

注: SPAP のパスワード変更サポートは、2216 では使用不能です。

- パスワード認証後にクライアントからの確認を必要とする、構成可能なバナーをルーターが送信できる能力
- コールバックを追加セキュリティ機能として使用できる能力

- バーチャル・コネクション

PPP 認証の構成

以下では、2 つの状況での PPP 認証の構成について説明します。

- リモート装置を認証する 2216 を構成する。
- リモート装置によって認証される 2216 を構成する。

この 2 つの状況は、それぞれ独立しています。一方または他方を構成することができます。

リモート装置を認証する PPP インターフェースの構成

リモート装置またはダイヤルイン・クライアントの認証は、以下の手順で行います。

1. PPP インターフェース上の認証を使用可能にする。
 - Config> プロンプトで **network** コマンドを入力して、構成する PPP インターフェースを選択します。
 - PPP Config> プロンプトで、使用する認証プロトコルを使用可能にします。次のプロトコルを使用できます。
 - PAP
 - MS-CHAP

注: MS-CHAP は PPP ローカル・データベースを使用して認証することはできませんが、認証サーバーを使用することはできません。

- CHAP
- SPAP

注: SPAP が使用可能なのは、IBM DIALs ダイヤルイン回線が構成されているインターフェースの場合だけです。

2. 認証をローカルで行うか、認証サーバーを通して行うかを決める。
 - ローカルで認証する場合は、名前とパスワードを PPP ユーザー・データベースに入力します。

Config> プロンプトで **add ppp_user** コマンドを使用します。詳細については、78ページの『Add』を参照してください。

2216 は単一の PPP ユーザー・データベースを維持しています。認証フェーズで、リモート・ルーターまたは装置がその名前とパスワードを装置に送ると、装置はその名前とパスワードが PPP ユーザー・データベース内に存在するかどうか検査します。
 - TACACS、TACACS+、または RADIUS を使用して、認証サーバーを通して認証する場合は、認証サーバーに到達するように装置を構成する必要があり、その名前とパスワードがサーバーのデータベースに存在していなければなりません。機構の使用と構成 中の『ローカルまたはリモート認証の使用』を参照してください。

リモート装置によって認証される PPP インターフェースの構成

リモート装置またはダイヤルイン・クライアントによって認証される装置を構成する場合は、次のようにしてその装置の名前とパスワードを構成します。

1. Config> プロンプトで **network** コマンドを使用して、構成するインターフェースを選択する。
2. PPP Config> プロンプトで **set name** コマンドを使用して、認証フェーズで装置が自身をリモート・ルーターまたは装置に識別する名前とパスワードを提供します。

重要: 装置が機構の使用と構成 中の 『ローカルまたはリモート認証の使用』 に説明されている認証を行うのでない限り、次のコマンドは使用しないでください。

- **enable pap**
- **enable chap**
- **enable spap**

注: SPAP が使用可能なのは、IBM DIALs ダイヤルイン回線が構成されているインターフェースの場合だけです。

- **enable mschap**

PPP コールバックの構成

コールバックは、単一ユーザー・ダイヤルイン・ソリューションに対応する PPP 機能です。これによって 2 つの目標の達成を試みます。つまり、次のような目標です。

- コールバックは、セキュリティの 1 つの形式として使用できる。このように使用される場合は、一般的にコールバックは必須コールバックと呼ばれます。必須コールバックがネゴシエーションされると、ユーザーは事前に決められた番号にダイヤルバックされます。PPP リンクが立ち上がることができるのは、その時だけです。
- コールバックは、トール・サーバー機能としても使用できる。このように使用される場合は、コールバックは一般的にローミング・コールバックと呼ばれます。必須コールバックの場合とは異なり、ローミング・コールバックはクライアントが要求します。ローミング・コールバックの 1 次機能は、料金の請求先をユーザーではなく、DIALs サーバーを維持する組織にする点にあります。

コールバックがサポートされるのは、ISDN ネットワークを介するダイヤルイン・ダイヤル回線の場合だけです。

例 1: 必須コールバック使用可能

```
Config>add PPP
Enter user name: [ ]? nocalldback
Password:
Enter password again:
Is this a Single-User or a Network? (Single-User, Network): [Single-User]

IP address for user nocalldback [0.0.0.0]?
Enter HostName: [ ]?
Give 'nocalldback' default time allotted ? (Yes, No): [Yes]
Enable Callback for 'nocalldback' ? (Yes, No): [No] yes
Type of Callback (Roaming Callback, Required Callback): [Roaming Callback] Requ
Dialback number for this user [ ]? 555-1234
Will 'nocalldback' be able to dial-out ? (Yes, No): [No]
```

```

PPP User Name: nocalldback
Type: Single User
User IP Address: Interface Default
SubNetMask: 255.255.255.255
Hostname: <undefined>
Time-Allotted: Box Default
Call-Back Type: Required Callback
Phone Number: 543-3186
Dial-Out: Not Enabled
Encryption: Not Enabled

Is information correct? (Yes, No, Quit): [No] yes

```

例 2: コールバック使用不可

```

Config>add PPP
Enter user name: [ ]? sallydoe
Password:
Enter password again:
Is this a Single-User or a Network? (Single-User, Network): [Single-User]

IP address for user nocalldback [0.0.0.0]?
Enter HostName: [ ]?
Give 'no callback' default time allotted ? (Yes, No): [Yes]
Enable Callback for 'no callback' ? (Yes, No): [No]
Will 'no callback' be able to dial-out ? (Yes, No): [No]

PPP User Name: no callback
Type: Single User
User IP Address: Interface Default
SubNetMask: 255.255.255.255
Hostname: <undefined>
Time-Allotted: Box Default
Call-Back Type: Not Enabled
Dial-Out: Not Enabled
Encryption: Not Enabled

Is information correct? (Yes, No, Quit): [No] yes

```

例 3: ローミング・コールバック使用可能

```

Config>add PPP roaming_callback
Password:
Enter password again:
Is this a Single-User or a Network? (Single-User, Network): [Single-User]

IP address for user roaming_callback [0.0.0.0]?
Enter HostName: [ ]?
Give 'roaming_callback' default time allotted ? (Yes, No): [Yes]
Enable Callback for 'roaming_callback' ? (Yes, No): [No] yes
Type of Callback (Roaming Callback, Required Callback): [Roaming Callback]

Will 'roaming_callback' be able to dial-out ? (Yes, No): [No]n

PPP User Name: roaming_callback
Type: Single User
User IP Address: Interface Default
SubNetMask: 255.255.255.255
Hostname: <undefined>
Time-Allotted: Box Default
Call-Back Type: Roaming Callback
Dial-Out: Not Enabled
Encryption: Not Enabled

Is information correct? (Yes, No, Quit): [No] yes

```

PPP による AAA の使用

この説明については、機構の使用と構成の中の『ローカルまたはリモート認証の使用』および『認証の構成』を参照してください。

PPP ネットワーク制御プロトコル

PPP には、各種のネットワーク・レイヤー・プロトコルを設定および構成するためのネットワーク制御プロトコル (NCP) ファミリーがあります。NCP は、ポイント・ポイント・リンクの両端で、ネットワーク・レイヤー・プロトコルの構成、使用可能化、および使用不可化を行います。LCP がコネクションをオープンし、リンクがオープン状態に達するまでは、NCP パケットを交換することはできません。

PPP は、以下のネットワーク制御プロトコルをサポートします。

- AppleTalk 制御プロトコル (ATCP)
- Banyan VINES 制御プロトコル (BVCP)
- ブリッジング制御プロトコル (BCP、NBCP、および NBFCP)
- コールバック制御プロトコル
- DECnet 制御プロトコル (DNCP)
- IP 制御プロトコル (IPCP)
- IPv6 制御プロトコル (IPv6CP)
- IPX 制御プロトコル (IPXCP)
- OSI 制御プロトコル (OSICP)
- APPN 高性能ルーティング制御プロトコル (APPN HPRCP)
- APPN 中間セッション・ルーティング制御プロトコル (APPN ISRPC)

AppleTalk 制御プロトコル

ATCP は Request for Comments (RFC) 1378 に指定されています。IBM の ATCP の実現は AppleTalk アドレス・オプションをサポートします。この実現は、全ルーター・モードおよび半ルーター・モードをサポートします。追加の情報については、プロトコルの構成と監視 解説書 第 2 巻 中の『PPP を介する AppleTalk』を参照してください。

Banyan VINES 制御プロトコル

RFC 1763 に BVCP の記述があります。IBM の BVCP の実現は、どのオプションもサポートしません。

ブリッジング制御プロトコル

BCP は RFC 1638 に指定されています。IBM の BCP の実現は、IEEE 802.5 回線識別オプションおよび Tinygram 圧縮オプションをサポートします。

NetBIOS 制御プロトコル (NBCP) は、Shiva Corporation が開発したプロプラエタリー NCP であり、「IBM Dial In Access to LAN Client for OS/2, DOS and Windows」で単一ユーザー・ダイヤルイン用として使用しています。NBCP は、2216 DIAL サーバーにダイヤルインした、これらのクライアントからの NetBIOS および LLC/802.2 ブリッジ・トラフィックを、接続されている LAN 上にトランスポートする場合に使用します。IBM による NBCP のインプリメンテーションでは、MAC-Address オプションおよび NetBIOS Name Projection オプションをサポートします。

NetBIOS フレーム制御プロトコル (NBFCP) は、RFC 2097 で指定されています。NBFCP は、単一ユーザー・ダイヤルイン用として、Microsoft Windows 95 および Windows NT の Dial-Up Networking クライアントで使用されています。NBFCP は、2216 DIAL サーバー にダイヤルインした、これらのクライアントからの NetBIOS ブリッジ・トラフィックを、接続された LAN 上にトランスポートする場合に使用されます。IBM による NBFCP のインプリメンテーションでは、Name-Projection オプション、Peer-Information オプション、および IEEE-MAC-Address-Required オプションをサポートします。

コールバック制御プロトコル

注: CBCP が使用可能なのは、IBM DIALs ダイヤルイン回線が構成されているインターフェースの場合だけです。

コールバック制御プロトコル (CBCP) は、Microsoft ダイヤルアップ・ネットワーキング・クライアントによって、コールバックを交渉するために使用されます。2216 は、単一ユーザー指定の番号に対するコールバック (ローミング・コールバック) および管理者指定の番号に対するコールバック (必須コールバック) をサポートします。番号リストのローミング CBCP オプションはサポートされません。

CBCP コールバックを使用したい PPP ユーザーは、なんらかの認証形式 (PAP、CHAP、SPAP または MS-CHAP など) を使用可能にしておく必要があります。CBCP には構成パラメータはありません。(クライアントがその使用時期を決定します。) コールバックのための PPP ユーザーの構成に関しては、594ページの『PPP コールバックの構成』を参照してください。

DECnet IV 制御プロトコル

DNCP は RFC 1762 に指定されています。IBM の実現は、どの DNCP オプションもサポートしません。

IP 制御プロトコル

IPCP は RFC 1332 に指定されています。IBM の実現は、次のオプションをサポートします。

- RFC 1144 に記述されている Van Jacobsen IP ヘッダー圧縮
- IP アドレス

ルーターは、その IP アドレスを送信したり、ピアからの IP アドレスを受け入れたり、あるいは要求された場合は、ピアに IP アドレスを提供したりすることができます。特定のインターフェース上のルーターが『Send Our Address』用に構成されており、そのインターフェースに有効な番号制 IP アドレスがある場合、IPCP は初期 Configure-Request でオプション 3 (IP アドレス) としてそのアドレスを送信します。また、その PPP インターフェースに有効な番号制アドレスが構成されている場合、ピアがオプション 3 (IP アドレス) を 0.0.0.0 にセットした Configure NAK を送信した場合にも、IPCP はそのアドレスを送信します。IPCP は、非番号制アドレスはピアに送信しません。

ピアはこのアドレスを指定することも (『クライアント指定』と呼ばれます)、初期構成要求のオプション 3 で 0.0.0.0 を送信してルーターからアドレスを要求する

PPP の使用

こともできます。ルーターはこのアドレスを、認証されたユーザー・プロファイルまたはインターフェース自体から入手できます。ユーザー・プロファイル・アドレスがインターフェース・アドレスより優先されます。ユーザー・プロファイルからのアドレスを提供したくない場合は、プロファイル内のそのユーザーのアドレスを 0.0.0.0 のままにしておけば、ルーターがそのインターフェースに構成されているリモート・アドレスを提供します。インターフェースまたはユーザー・プロファイルにリモート・アドレスが構成されておらず、ピアがアドレスの要求を続けた場合は、IPCP は失敗します。

ルーターは、正常にネゴシエーションされたアドレスに関して、PPP インターフェースに向かう静的ルートを自動的に追加するので、データをダイヤルイン・クライアントに適正にルーティングすることができます。どんな理由にせよ、この IPCP 接続が終了すると、この静的ルートもそれに続いて除去されます。デフォルトでは、このルートのネットワーク・マスクは 255.255.255.255 (ホスト・ルート) ですが、ネットワーク・マスクが認証ユーザーのプロファイル内で指定されている (593ページの『PPP 認証の構成』を参照) 場合は、これ以外のネットワーク・マスクを使用して、PPP リンクを通して複数のホストへのルーティングを可能にすることができます (必要なら、RIP またはその他のルーティング・プロトコルを使用してルートを検出することもできます)。

IPv6 制御プロトコル

IPv6 制御プロトコルは RFC 2023 に指定されています。IPv6CP の IBM 実装では、ルーターは、その IP アドレスを送信したり、ピアからの IP アドレスを受け入れたり、あるいは要求された場合は、ピアに IP アドレスを提供したりすることができます。特定のインターフェース上のルーターが『Send Our Address』用に構成されており、そのインターフェースに有効な番号制 IP アドレスがある場合、IPv6CP はその初期構成要求でオプション 3 (IP アドレス) としてそのアドレスを送信します。また、その PPP インターフェースに有効な番号制アドレスが構成されている場合、ピアがオプション 3 (IP アドレス) を ::/0 にセットした Configure NAK を送信した場合にも、IPv6CP はそのアドレスを送信します。IPv6CP は、非番号制アドレスをピアに送信しません。

ピアはこのアドレスを指定することも (『クライアント指定』と呼ばれます)、初期構成要求のオプション 3 で ::/0 を送信してルーターからアドレスを要求することもできます。ルーターでは、このアドレスをインターフェースから入手します。インターフェースにリモート・アドレスが構成されておらず、ピアがアドレスの要求を続けた場合は、IPv6CP は失敗します。

ルーターは、正常にネゴシエーションされたアドレスに関して、PPP インターフェースに向かう静的ルートを自動的に追加するので、データをダイヤルイン・クライアントに適正にルーティングすることができます。どんな理由にせよ、この IPv6CP 接続が終了すると、この静的ルートもそれに続いて除去されます。デフォルトでは、このルートのプレフィックス長さは、128 (ホスト・ルート) です。

IPX 制御プロトコル

IPXCP は RFC 1552 に指定されています。IBM の実装では、どの IPXCP オプションもサポートしません。

OSI 制御プロトコル

OSICP は RFC 1377 に指定されています。IBM の OSICP の実現は、どのオプションもサポートしません。

APPN HPR 制御プロトコル

拡張ピアツーピア・ネットワーキング機能 (APPN) 高性能ルーティング (HPR) 制御プロトコルは、RFC 2043 に指定されています。この制御プロトコルでは、どのオプションも交渉されません。

APPN ISR 制御プロトコル

拡張ピアツーピア・ネットワーキング機能 (APPN) 中間セッション・ルーティング (ISR) 制御プロトコルは、RFC 2043 に指定されています。この制御プロトコルでは、どのオプションも交渉されません。

PPP インターフェースに関する暗号化の構成については、[機構の使用と構成](#) 中の『暗号化の概説』を参照してください。

バーチャル・コネクションの使用と構成

バーチャル・コネクション (VC) は DIALs ダイアルイン回線で、非アクティブになると、事前決定された期間、中断することができます。コネクションを中断できることは、アクティブでない DIALs ダイアルイン・クライアントの回線課金を節約することによって、ネットワーキング・コストの制御に役立ちます。コネクションをアクティブに保つ代わりに、システムはそのセッションに関する情報を保管し、次にそのコールをクローズするためです。同じ DIALs ダイアルイン・クライアントがそのサーバーに再接続すると、セッション情報は復元され、中断が無かったかのようにコネクションが再開されます。詳しくは 600ページの『VC の構成』を参照してください。

指定された期間中断していた VC を終了させるように DIALs サーバーを構成することができます。また、いつでも手動で VC を終了させることもできます。関連コマンドについては、[機構の使用と構成](#) 中の **set DIALs** コマンド、および『DIALs グローバル監視コマンド』を参照してください。

VC に関する考慮事項

VC を構成する場合は、以下を念頭に置いてください。

- VC を使用する場合、AAA ローカル・リストまたは RADIUS 認証だけが使用できる。
- VC は IPX をサポートしない。あるユーザーを VC を使用するように構成すると、そのユーザーに対する IPX サポートは使用不可になります。
- クライアント構成が VC の中断と再開を制御する。DIALs サーバーはコネクションのこの局面を制御しません。
- VC は MP バンドルによって確立できる。

PPP の使用

- VC は L2TP では実行できない。
- 中断 VC は、現行のネットワーク管理ツールでは表示できない。
- IP アドレスはインターフェースによってリモート・ユーザーに割り当てられない。VC を確立するのに使用するインターフェースは別のクライアントが使用する可能性があるため、VC がサーバーに再接続しようとしても、その IP アドレスが使用中であると、そのコネクションは失敗してしまうからです。
- ダイアルイン・クライアントは認証のために SPAP を使用する必要がある。

VC の構成

DIALs クライアントを追加する場合、Config> プロンプトで VC を構成します。ユーザーを構成するに当たって、最大中断時間および非活動タイムアウトには DIALs ダイアルイン・デフォルト（機構の使用と構成 の中の **set DIALs** コマンドを参照）を使用しても、特定クライアントに特定の値を構成してもかまいません。以下の例は、DIALs ダイアルイン・クライアント 『jose』 のための VC 用の最小構成を示しています。

```
Config>
Config> add ppp
Enter user name: []? jose
Password:
Enter password again:
Is this a 'DIALs' user? (Yes, No): [Yes$
Type of route? (hostroute, netroute): [hostroute]
IP address: [0.0.0.0]?
Enter hostname for dynamic DNS: []?
Allow Virtual Connections ? (Yes, No): [No] Yes
  Use Box Default inactivity timeout value and maximum suspended time? (Yes, No): [Yes] No
  User-based Max Suspend Time (hours)
  0-48 0=unlimited: [12] ? 10
  User-based Inactivity Timeout (seconds)
  10-1024: [30] ? 60
Give 'jose' default time allotted ? (Yes, No): [Yes]
Enable callback for 'jose' ? (Yes, No): [No]
Will 'jose' be able to dial-out ? (Yes, No): [No]
```

```
      PPP user name: jose
      User IP address: Interface Default
      Netroute Mask: 255.255.255.255
      Hostname:
      Time allotted: Box Default
      Callback type: Not Enabled
      Dial-out: Not Enabled
```

```
Is information correct? (Yes, No, Quit): [Yes]
```

```
User 'jose' has been added
Config>
```

最大バーチャル・コネクション数、アイドル・タイムアウト期間、およびグローバル・デフォルト最大中断時間のボックス・レベルのデフォルト値を表示するには、DIALs 機能の DIALs config>**list vc-parameters** コマンドを使用します。すべてのバーチャル・コネクションについて、最大中断時間と非活動タイムアウトとともにこれらのパラメーターを表示する場合は、DIALs 機能の **list all** コマンドを使用します。機構の使用と構成 の中の 『DIALs グローバル監視コマンド』 を参照してください。

第40章 ポイント・ポイント・プロトコル・インターフェースの構成と監視

この章では、装置内のポイント・ポイント・プロトコル・インターフェース構成およびオペレーショナル・コマンドについて説明します。本章には、以下の節が含まれています。

- 『インターフェース構成プロセスへのアクセス』
- 602ページの『ポイント・ポイント構成コマンド』
- 622ページの『インターフェース監視プロセスへのアクセス』
- 622ページの『ポイント・ポイント監視コマンド』
- 647ページの『ポイント・ポイント・プロトコル・インターフェースと GWCON インターフェース・コマンド』

インターフェース構成プロセスへのアクセス

ルーターの構成プロセスにアクセスするには、以下の手順を使用します。このプロセスにより、特定のインターフェースの構成プロセスにアクセスできます。

1. OPCON プロンプト (*) で **status** コマンドを入力して、CONFIG の PID を見付ける。(status コマンドの出力例については、11 ページを参照してください。)
2. OPCON プロンプトで、OPCON **talk** コマンドと CONFIG の PID を入力する。(このコマンドの詳細については、33ページの『第4章 OPCON プロセス』を参照してください。) 下に例を挙げます。

* talk 6

talk 6 コマンドを入力すると、CONFIG プロンプト (Config>) がコンソールに表示されます。初めて **CONFIG** を入力したとき、プロンプトが表示されなかった場合は、**Return** キーをもう一度押します。

3. CONFIG プロンプトで、**list devices** コマンドを入力して、ルーターが現在構成されているネットワーク・インターフェース番号を表示させる。
4. インターフェース番号を記録する。
5. CONFIG **network** コマンドと、構成したいインターフェースの番号を入力する。下に例を挙げます。

```
Config> network 1
```

これで、該当する構成プロンプト (たとえば、トークンリングの場合は TKR Config>) がコンソールに表示されます。

注: ネットワーク・インターフェースはすべてがユーザー構成可能とは限りません。構成できないインターフェースの場合は、次のようなメッセージが出ます。

```
That network is not configurable
```

PPP インターフェース (Talk 6) の構成

PPP インターフェース構成プロンプトへのアクセス

PPP config> プロンプトを表示するには、次のようにします。

1. Config> プロンプトで **list devices** と入力して、インターフェースのリストを表示させる。
2. まだ行っていない場合は、Config> プロンプトで **set data-link ppp** と入力して、シリアル・インターフェースの 1 つの上のデータ・リンク・プロトコルを PPP に設定する。下に例を挙げます。

```
Config> set data-link ppp
Interface Number [0]? 2
```

3. **network** の後に続けて、PPP インターフェースの番号を入力する。下に例を挙げます。

```
Config> network 2
PPP config>
```

ポイント・ポイント構成コマンド

表73 は、PPP 構成コマンドの要約を示しており、本節の残りの部分で、これらのコマンドについて説明します。コマンドは PPP config> プロンプトで入力します。

表 73. ポイント・ポイント構成コマンドの要約

コマンド	機能
? (Help)	このコマンド・レベルで使用可能なコマンドをすべて表示するか、特定のコマンドに関するオプション (ただし、選択可能な場合) をリストします。12ページの『ヘルプを得る』を参照してください。
Disable	データ圧縮 (CCP)、DTR 回線処理、CHAP、PAP、ECP を使用不可にします。また、リモート LAN アクセス機能イメージの中の SPAP 認証を使用不可にします。
Enable	データ圧縮 (CCP)、DTR 回線処理、CHAP、PAP、ECP を使用可能にします。また、リモート LAN アクセス機能イメージの中の SPAP 認証を使用可能にします。
List	ポイント・ポイント・インターフェース・プロトコル、パラメーター、およびオプションに関連するすべての情報をリストします。
Set	物理回線 (HDLC) パラメーター、LCP パラメーター、一般 NCP パラメーター、および各種の NCP 特有のオプションを設定します。
Exit	直前のコマンド・レベルに戻ります。13ページの『下位レベル操作環境を終了する』を参照してください。

Disable

データ圧縮、認証プロトコル、マルチリンク PPP、および Lower DTR フィーチャーを使用不可にします。

構文 :

```
disable                ccp
                        chap
                        enp
                        lower-dtr
```

mpmppemschappap

ccp インターフェース上のデータ圧縮の使用を使用不可にします。詳細については、機構の使用と構成の『データ圧縮サブシステムの使用』を参照してください。

chap チャレンジ/ハンドシェイク認証プロトコルの使用を使用不可にします。詳細については、592ページの『チャレンジ/ハンドシェイク認証プロトコル (CHAP)』を参照してください。

ecp これは、ルーターがこのインターフェースでの ECP 暗号化の使用を強制しないようにすることができます。ピアが ECP を使用している場合には、インターフェースは暗号化制御プロトコル (ECP) を受け入れ、これを実行します。

注: 暗号化サポートはオプションであり、**load add** コマンドを使用して、ソフトウェア・ロードに追加する必要があります。Nways マルチプロトコル・アクセス・サービス ソフトウェア使用者の手引き の中の CONFIG プロセス **load** コマンドを参照してください。

lower-dtr

使用不可にされている専用シリアル・ライン・インターフェースのデータ端末レディー (DTR) 信号の扱い方を決めます。このパラメーターが『使用不可』(デフォルト) に設定され、インターフェースが使用不可の場合、DTR 信号は降下しません。

mp このインターフェース上のマルチリンク・プロトコル (MP) を使用不可にします。詳細については、651ページの『第41章 マルチリンク PPP プロトコルの使用』を参照してください。

例 :

```
disable mp
Disabled as a MP link
```

mppe Microsoft ポイント・ポイント暗号化 (MPPE) をこのインターフェースで使用不可にします。

注: 暗号化サポートはオプションであり、**load add** コマンドを使用して、ソフトウェア・ロードに追加する必要があります。102ページの『Load』を参照してください。

mschap

このインターフェース上で MS-CHAP 認証を使用不可にします。MS-CHAP を使用不可にすると、MPPE に 2 つの影響を及ぼします。MPPE の構成が必須であるかオプションであるかによってそれぞれ異なります。MPPE が必須の場合、MS-CHAP を使用不可にするとリンクをダウンさせます。MPPE がオプションの場合、MS-CHAP を使用不可にするとリンク上の MPPE を使用不可にします。詳細については、592ページの『Microsoft PPP CHAP 認証 (MS-CHAP)』を参照してください。

PPP インターフェース (Talk 6) の構成

- pap** パスワード認証プロトコルの使用を使用不可にします。詳細については、591ページの『パスワード認証プロトコル (PAP)』を参照してください。
- spap** Shiva パスワード認証プロトコル (SPAP) の使用を使用不可にします。

注: SPAP が使用可能なのは、IBM DIALs ダイアルイン回線が構成されているインターフェースの場合だけです。

Enable

この PPP インターフェース上でデータ圧縮、暗号化、認証プロトコル、lower-DTR、およびマルチリンク PPP プロトコルを使用可能にします。複数の認証プロトコルが使用可能にされている場合、装置は次の優先順位でそれらの使用を試みます。

1. MS-CHAP
2. CHAP
3. PAP

構文 :

```
enable                ccp  
                        chap  
                        ecp  
                        lower-dtr  
                        mp  
                        mppe  
                        mschap  
                        pap
```

ccp インターフェース上のデータ圧縮の使用を使用可能にします。

注: HSSI アダプター上の PPP インターフェースに関しては、データ圧縮を使用可能にすることは推奨できません。

chap チャレンジ/ハンドシェイク認証プロトコルの使用を使用可能にします。再チャレンジ間隔を指定するように求めるプロンプトがでます。初期認証フェーズが完了した後に定期的に再チャレンジしない場合は、0 を指定します。詳細については、592ページの『チャレンジ/ハンドシェイク認証プロトコル (CHAP)』を参照してください。

例 :

```
enable chap  
Rechallenge Interval in seconds (0=NONE) [0] 10  
CHAP enabled
```

ecp 暗号化制御プロトコル (ECP) と交渉して、このインターフェース上でデータ暗号化を使用することを使用可能にします。これが行われると、暗号化が使用可能にされ、有効な暗号化キーを持っているすべての PPP ユーザーは、MS-CHAP がリンクのアクティブ認証プロトコルでない場合、このポートに接続するために ECP を使用しなければなりません。認証プロトコルが MS-CHAP の場合、ECP は使用できません。暗号化は MPPE を使用して完成

PPP インターフェース (Talk 6) の構成

する必要があります。暗号化が使用可能にされていない PPP ユーザーはまだこのインターフェースに接続することができます。

ECP を使用可能にすると、ローカル・ルーターの ECP 暗号化キーを入力するようプロンプト指示されます。また、Config > プロンプトで **talk 6 add ppp-user** コマンドを使用してリモート・ユーザーを構成する場合も、そのリモート・ユーザーに暗号化キーを提供する必要があります。MPPE では、ローカル・ユーザーにもリモート・ユーザーにも暗号化キーを構成する必要はありません。

注: 暗号化サポートはオプションであり、**load add** コマンドを使用して、ソフトウェア・ロードに追加する必要があります。102ページの『Load』を参照してください。

lower-dtr

使用不可にされている専用シリアル・ライン・インターフェースのデータ端末レディー (DTR) 信号の扱い方を決めます。このパラメーターが『使用不可』(デフォルト)に設定され、インターフェースが使用不可の場合、DTR 信号は降下しません。

Lower DTR が『使用可能』に設定されている場合は、インターフェースが使用不可のときには、DTR 信号は降下します。この動作が適している状況は、インターフェースが WAN 再ルートの代替リンクとして構成されており、インターフェースが、DTR 信号の状態に基づいてダイヤル接続を維持するダイヤルアウト・モデムに接続されているような場合です。

インターフェースが使用不可のときは、DTR 信号は下がり、モデムは接続をダウンに保ちます。インターフェースが使用可能になると (WAN 再ルートのバックアップ・シナリオにより)、DTR は上がり、モデムは保管しているバックアップ・サイトへの番号をダイヤルします。1 次インターフェースが復元すると、代替インターフェースは使用不可にされ、DTR は下がって、モデムはダイヤル接続を切断します。

以下のケーブル・タイプがサポートされます。

RS-232

V.35

V.36

注: **enable lower-dtr** コマンドは、PPP ダイヤル回線インターフェースではサポートされません。

mp

このインターフェース上のマルチリンク・プロトコル (MP) を使用可能にします。詳細については、651ページの『第41章 マルチリンク PPP プロトコルの使用』を参照してください。

例 :

```
enable mp
Enabled as a MP link
Is this link a dedicated MP link? [no] yes
MP interface for this MP link? [0] 3
```

mppe [mandatory/optional] [stateless/stateful]

Microsoft ポイント・ポイント暗号化 (MPPE) を使用可能にします。MS-CHAP がインターフェースで使用可能にされていない場合、MPPE はそのインターフ

PPP インターフェース (Talk 6) の構成

エース上で使用可能にはできません。詳細については、機構の使用と構成の中の『暗号化の概説』の章の『Microsoft ポイント・ポイント暗号化 (MPPE)』を参照してください。

mandatory

クライアントとサーバーは MPPE を交渉する必要があります。そうしないと、リンクはドロップします。

optional

クライアントが MPPE を交渉しようとしても、ネゴシエーションが失敗すると、PPP リンクはアクティブなままにとどまります。

stateless

それぞれのパケットの送信の後で、セッション・キーが再生成されます。この機能は、Microsoft ダイアルアップ・ネットワークング (DUN) クライアントによって現在サポートされていません。

stateful

256 のパケットの送信ごとに、セッション・キーが再生成されます。

注: 暗号化サポートはオプションであり、**load add** コマンドを使用して、ソフトウェア・ロードに追加する必要があります。102ページの『Load』を参照してください。

mschap

MS-CHAP 認証を使用可能にします。MS-CHAP を使用可能にすると、認証機能再チャレンジ間隔の指定を求めるプロンプトがでます。この秒単位の値は、認証機能が認証を再確認するために認証要求の受信側に対して別のチャレンジを送信するまでに経過する時間の長さを定義します。値 0 は、初期認証以後にはチャレンジの送信が行われなことを示します。

ピア・ルーターが 2216 のローカル名を認証するように構成されている場合は、**set name** コマンドを使用して 2216 の名前を構成してください。

機構の使用と構成の『ローカルまたはリモート認証の使用』の章で説明されているように、外部認証サーバーが構成済みの場合、MS-CHAP は使用可能にはできません。詳細については、592ページの『Microsoft PPP CHAP 認証 (MS-CHAP)』を参照してください。

pap

パスワード認証プロトコルの使用を使用可能にします。詳細については、591ページの『パスワード認証プロトコル (PAP)』を参照してください。

List

list コマンドは、PPP インターフェースとそのプロトコル・パラメーターおよびオプションに関連する情報を表示するのに使用します。

構文 :

```
list                all  
                    bcp  
                    ccp  
                    ecp
```

hdlc
ipcp
ipv6cp
lcp
ncp

all PPP インターフェースに関連するすべてのオプションおよびパラメータをリストします。

list all コマンドは、以下で説明する個々の **list...** パラメータのすべての出力を表示します。

bcp ブリッジング・ネットワーク制御プロトコル・オプションをリストします。

例 :

```
list bcp
BCP Options
-----
Tinygram Compression:DISABLED
```

Tinygram Compression:

Tinygram 圧縮の使用可能/使用不可を表示します。

ccp データ圧縮が使用可能になっている場合、現在選択されているデータ圧縮オプションを表示します。追加の情報については、機構の使用と構成の『データ圧縮サブシステムの使用』を参照してください。

Microsoft ポイント・ポイント暗号化 (MPPE) およびデータ圧縮の両方が使用可能な場合、データ圧縮のタイプは MPPC です。

ecp 暗号化制御プロトコルの現在の状態を表示します。

例 :

```
list ecp
ECP Options
-----
Data Encryption enabled
Algorithm list: DESE-CBC
DESE (Data Encryption Standard Encryption
Protocol)
```

注: 暗号化サポートはオプションであり、**load add** コマンドを使用して、ソフトウェア・ロードに追加する必要があります。102ページの『Load』を参照してください。

Data Encryption Enabled/Disabled

インターフェース上のデータ暗号化が使用可能か使用不可かを示します。

Algorithm List

サポートされる暗号化アルゴリズムを表示します。DES (RFC 1969 に記述) が、現在サポートされている唯一の暗号化アルゴリズムです。

hdlc ハイレベル・データ・リンク制御 (HDLC) プロトコルに関連するパラメータを表示します。PPP ダイアル回線インターフェースでは、『list hdlc』オプションは利用不能です。ダイアル回線の場合、ハードウェア・データ・リ

PPP インターフェース (Talk 6) の構成

リンク・パラメーターは、PPP ダイアル回線ではなく、基本ネットワークの機能です。詳細については、759ページの『第50章 ダイアル回線の構成と監視』を参照してください。

例 :

```
list hdlc
Encoding: NRZ
Idle State: Flag
Clocking: Internal
Cable type: V.35 DCE
Speed (bps): 6400

Transmit Delay Counter: 0
Lower DTR: Disabled
```

Encoding:

HDLC 伝送符号化法、NRZ (非ゼロ復帰) または NRZI (非ゼロ復帰反転)

Idle State:

インターフェースがデータを転送していないときにポイント・ポイント・リンク上で転送されるビット・パターン、フラグまたはマーク

Clocking:

インターフェースのクロック、外部または内部

Cable type:

使用するケーブルのタイプ (RS-232、V.35、または V.36) を指定します。

Speed (bps):

インターフェースの物理データ速度。クロックが内部の場合、これは内部クロックによって生成されるデータ速度です。

Transmit Delay Counter:

フレーム相互間に送信されるフラグの数

Lower DTR:

使用可能または使用不可。 Lower DTR が使用可能のとき、WAN 再ルートの代替リンクが不要になると、ルーターは DTR 信号を下げます。 DTR 信号が低下すると、モデムは代替リンクの専用回線接続を終了します。

注:

1. **list hdlc** コマンドは、PPP ダイアル回線インターフェースではサポートされません。
2. このコマンドで Lower DTR 状態が表示されるのは、構成されたケーブル・タイプに関して Lower DTR がサポートされている場合だけです。
3. HSSI アダプター上の PPP インターフェースに関するこのコマンドでは、上記の HDLC パラメーターのサブセットが表示されます。

ipcp インターネット・プロトコル制御プロトコル・オプションをリストします。

例 :

```
list ipcp
IPCP Options
-----
```

PPP インターフェース (Talk 6) の構成

```
IPCP Compression:          None
Send Our IP Address:       Yes
Remote IP Address to Offer if Requested: 10.0.0.3
```

IPCP compression

PPP ハンドラーが圧縮された IP ヘッダーを受け入れるかどうかを示します。PPP は Van Jacobson TCP/IP ヘッダー圧縮 (RFC 1144) をサポートします。ポイント・ポイント・リンクが低いボー・レートで動作しているときは、このオプションを使用可能にしてください。

値 『Van Jacobson』 は、ヘッダー圧縮がサポートされることを示します。値 『NONE』 は、ヘッダー圧縮が受け入れられていないことを示します。

Send Our IP Address

IPCP が初期 『構成要求』 でこの PPP インターフェースのローカル IP アドレスをリンクのリモート側に送信するように構成されているかどうかを示します。一部の PPP 実現は、この情報を必要とします。

ipv6cp

インターネット・プロトコル・バージョン 6 制御プロトコル・オプションをリストします。

例 :

```
list ipv6cp
IPv6CP Options
-----
Send Our IP Address:          Yes
```

Send Our IP Address

IPv6CP が初期 『構成要求』 でこの PPP インターフェースのローカル IP アドレスをリンクのリモート側に送信するように構成されているかどうかを示します。一部の PPP 実現は、この情報を必要とします。

lcp

リンク制御プロトコルのパラメーターおよびオプションをリストします。

例 :

PPP 7 Config>list lcp

```
LCP Parameters
-----
Config Request Tries:          20   Config Nak Tries:          10
Terminate Tries:              10   Retry Timer:              3000

LCP Options
-----
Max Receive Unit:              1522  Magic Number:              Yes
Peer to Local (RX) ACCM:      A0000
Protocol Field Comp(PFC):     No   Addr/Cntl Field Comp(ACFC): No

Authentication Options
-----
Authenticate remote using:    none
Identify self as:             ibm
```

リンク制御プロトコルには、リモート・ピアを認証するために使用する認証プロトコルが含まれます。認証プロトコルが CHAP または Microsoft PPP CHAP (MS-CHAP) のいずれかの場合、再チャレンジ間隔が表示されます。

例 :

PPP インターフェース (Talk 6) の構成

PPP 7 Config>list lcp

```
LCP Parameters
-----
Config Request Tries:          20  Config Nak Tries:          10
Terminate Tries:              10  Retry Timer:                3000

LCP Options
-----
Max Receive Unit:             1522  Magic Number:              Yes
Peer to Local (RX) ACCM:      A0000
Protocol Field Comp(PFC):     No   Addr/Cntl Field Comp(ACFC): No

Authentication Options
-----
Authenticate remote using:    MSCHAP or SPAP or CHAP or PAP [Listed in priority order]
CHAP Rechallenge Interval:    0
MSCHAP Rechallenge Interval:  0
Identify self as:             ibm
```

Config Request Tries:

PPP リンクのオープンを試みているときに、LCP がピア・ステーションに configure-request パケットを送信した回数

Config Nak Tries:

PPP リンクのオープンを試みているときに、LCP がピア・ステーションに configure-nak (『not acknowledged』) パケットを送信した回数

Terminate Tries:

PPP リンクをクローズするときに、LCP がピア・ステーションに terminate-request パケットを送信した回数

Retry Timer:

『Config tries』 パラメーターによって設定された回数に従ってパケット転送を続行する前に経過するミリ秒数

Max Receive Unit:

リンクによって処理される最大情報フィールド (パケット) サイズを表示します。

Peer to Local (Rx) ACCM

非同期伝送路上のルーターにパケットを転送するときに、ピアが『エスケープ』 する必要がある文字を表示します。

Magic Number:

マジック番号ループバック検出オプションが使用可能かどうかを示します。

Protocol Field Comp (PFC):

PFC オプションが使用可能かどうかを示します。

Addr/Cntl Field Comp(ACFC):

ACFC が使用可能かどうかを示します。

Authenticate remote using:

使用可能にされている認証プロトコルのリスト

Identify Self As:

set name コマンドで設定された名前

ncp すべてのネットワーク制御プロトコルのパラメーターをリストします。

例 :

PPP インターフェース (Talk 6) の構成

```
list ncp
NCP Parameters
-----
Config Request Tries:          20  Config Nak Tries:          10
Terminate Tries:              10  Retry Timer:                3000
```

Config Request Tries:

PPP リンクのオープンを試みているときに、NCP がピア・ステーションに `configure-request` パケットを送信した回数

Terminate Tries:

Terminate-Ack を待っている間に、NCP が PPP リンクをクローズする前に `Terminate-Request` を送信した回数

Config Nak Tries:

PPP リンクのオープンを試みているときに、NCP がピア・ステーションに `configure-nak` (not acknowledged) パケットを送信した回数

Retry Timer:

NCP の `configure-request` パケット (リンクをオープンするため) および `terminate-request` パケット (リンクをクローズするため) の転送がタイムアウトになる前に経過するミリ秒数

LLC

LLC コマンドは、LLC 構成環境 (APPN がソフトウェア・ロードに組み込まれている場合にのみ使用可能) にアクセスする場合に使用します。各コマンドについての説明は、255ページの『LLC 構成コマンド』を参照してください。

構文 :

llc

Set

set コマンドは、HDLC パラメーター、LCP オプションおよびパラメーター、IPCP オプション、BCP オプション、および NCP パラメーターを設定する場合に使用します。『パラメーター』は、再試行などに関する内部操作に関連するものです。『オプション』は、相手側端とネゴシエーションされるものです。

注:

1. コマンド・オプション・プロンプトの直後の値は、そのオプションの現行設定値です。それらは必ずしも、この章に示されているデフォルト値とは限りません。
2. **set hdlc** コマンドは、PPP ダイアル回線インターフェースではサポートされません。

構文 :

```
set                bcp
                   ccp options
                   ccp algorithms
                   hdlc...
                   ipcp
```

PPP インターフェース (Talk 6) の構成

ipv6cp

lcp...

name...

ncp...

bcp ブリッジング制御プロトコル (BCP) パラメーターを設定します。

例 :

```
set bcp
TINYGRAM COMPRESSION [no]:
```

Tinygram Compression

Tinygram 圧縮が使用されるかどうかを示します。このオプションは、低速 (64 Kbps 以下) 伝送路を介してブリッジするときの問題が起こりやすいプロトコルには便利です。これらのプロトコルは、データとフレーム・チェックサムの間でゼロを追加して、プロトコル・データ単位 (PDU) を最小サイズまで埋め込みます。Tinygram 圧縮は、ゼロを除去し、フレーム・チェックサムを送信側で保存します。受信側でパケットを最小長さに復元します。

ccp options

圧縮アルゴリズムの構成可能オプションに関するプロンプトを出します。一部のオプションは、WAN リンク上のピア・ルーターとの PPP ネゴシエーションによって、後で変更することができます。追加の情報については、機構の使用と構成の『データ圧縮サブシステムの使用』を参照してください。

例 :

```
set ccp options
STAC: # histories [1]?
STAC: check mode (0=none, 1-LCB, 2=CRC, 3=Seq) [3]?
```

STAC: # histories

これは、STAC 圧縮エンジンによって使用される圧縮『コンテキスト』または『ヒストリー』の数を設定します。

非ゼロ値では、圧縮エンジンが指定された数のヒストリーを維持し、そこにパケットで送信された以前のデータに関する情報を保持することを意味します。このヒストリー・データは、圧縮の効率を改善するのに使用されます。

受信側も同様のヒストリーを維持しており、送信側と受信側のヒストリーの同期が保たれている限り、受信側は受信したパケットを正しく解凍することができます。ヒストリーの同期が外れると、パケットは使用不能データとして廃棄されます。リンクの品質が非常に悪くない限り、通常はヒストリーの数は 1 に設定します。

ゼロの値は、送信される各パケットは、過去に送信されたパケットに関係なく圧縮されることを意味しており、常に受信側によって高信頼性で解凍される可能性があります。しかし、圧縮器は残っている過去のパケットから何も情報を取り出せないため、圧縮の効率はあまりよくないのが一般的です。

PPP インターフェース (Talk 6) の構成

一部の実現は、複数の履歴をサポートし、データ・ストリームを別々のストリームに分けて、独立して圧縮します。ルーターは、PPP リンクでの複数の履歴の使用をサポートしません。

STAC: check mode (0=none, 1=LCB, 2=CRC, 3=Seq)

STAC 圧縮データグラムには通常、リンクの両端が圧縮パケットの紛失または破壊の時点を認識する場合に使用する検査値が組み込まれ、送信側と受信側の履歴を再同期するために、何らかのアクションが必要です。

注: 不良パケットを検出できないと、後続のすべてのデータが正しく圧縮されない可能性があります。

このオプションは、使用する正確な形の検査値を設定します。以下の1つを選択してください。

- 0** None: 検査値は使用されません。検査値がないと、パケットの紛失、シーケンス誤り、または破壊を調べる方法がありません。基礎のデータ・リンクが高信頼性の順序保存パケット送達を行わない限り、このモードは使用しないでください。
- 1** LCB: 『縦方向制御バイト』が使用されます。これは単純な8ビット排他 OR チェックサムです。受信側はパケットの紛失またはシーケンス誤りを検出できず、PPP フレーム・チェックサムの方が高い信頼性でパケットの整合性をテストできるので、これを使用することは、まったくお勧めできません。
- 2** CRC: 16ビットの巡回冗長検査文字が使用されます。これは、パケットの整合性のテストとして LCB よりは良いと言えますが、受信側はやはりパケットの紛失やシーケンス誤りを検出できず、またフレーム・チェックサムと大きく重複することになるので、この使用もあまりお勧めできません。
- 3** SEQ: 8ビットのシーケンス番号が使用されます (デフォルト)。これは運用上優れた方式です。履歴の数が0でない場合は、これ以外のモードを使用しないように強くお勧めします。ただし、ある種の RFC 非準拠のルーターとの相互運用性のために別のモードを使用することが必要になる場合もあります。
- 4** EXT: シーケンス番号モードに似ている拡張モード。各パケットにシーケンス番号が組み込まれますが、圧縮されたフレーム・フォーマットが、より大きく変更されます。拡張モードでは、ピアとの再同期を実行する方法が、他のモードの場合とは異なっています。つまり、2つのノード間のシグナルは、別個の CCP 制御パケットではなく、圧縮されたデータグラムのヘッダーで渡されるフラグに基づいて行われます。

拡張モードは、ある種の非 RFC 準拠の実現との整合性のために提供されています。モード3をサポートしないクライアントの場合にのみ使用してください。

PPP インターフェース (Talk 6) の構成

ccp algorithms *list-of-algorithms*

使用する圧縮プロトコルの正確なリストを指定します。優先順位は、リスト内のエントリーの順序によって決まります。MPPE がリンクで起動されると、CCP アルゴリズムは無視され、Microsoft ポイント・ポイント圧縮 (MPPC) だけが使用されます。

リンクは、別のノードと圧縮を交渉するときに、プロトコルの全リストを優先順にピア・ノードに提供します。ピア・ノードは、優先順位リストから使用できる最初のプロトコルを選択する必要があります。複数のプロトコルを使用可能にすると、ピアはリンク上で使用する圧縮アルゴリズムを指示できるようになります。あるアルゴリズムを避けたい場合は、そのアルゴリズムをリストに指定しないようにします。

none を指定すると、圧縮を使用不可にするのに有効なプロトコルが使用できなくなります。有効な圧縮アルゴリズムは、次のとおりです。

STAC-LZS

RFC 1974 に記述されている STAC-LZS

MPPC RFC 2118 に記述されている Microsoft ポイント・ポイント圧縮アルゴリズム

例 :

```
set ccp protocols
Enter a prioritized list of enabled compressors
(first is preferred), all on one single line.
Choices (can be abbreviated) are:
Stac-LZS, MPPC
Compressor list [Stac-LZS:]?
```

hdlc cable *cable type*

HDLC ケーブル・タイプ (インターフェースに接続されている) を、以下のタイプの 1 つに設定します。

RS-232 DTE
RS-232 DCE
V35 DTE
V35 DCE
V36 DTE
V36 DCE
X21 DTE
X21 DCE
HSSI DTE
HSSI DCE

表74 は、各種のアダプターに構成できるケーブル・タイプを示しています。

表74. 2216 インターフェースのケーブル・タイプ

アダプター・タイプ	ケーブル・タイプ
8 ポート EIA 232	RS-232 DTE および RS-232 DCE
6 ポート V.35/V36	V.35 DCE、V.35 DTE、V.36 DCE、または V.36 DTE
8 ポート X.21	X.21 DCE および X.21 DTE
1 ポート HSSI	HSSI DCE および HSSI DTE*

PPP インターフェース (Talk 6) の構成

*注: HSSI DCE ケーブルが使用される場合は、他の装置についても、HSSI DCE ケーブルを使用する構成にする必要があります。

例 : `set hdlc cable rs-232 dce`

ルーターをあるタイプの DCE 装置 (たとえば、モデムまたは DSU/CSU) に接続する場合は、DTE ケーブルを使用します。

ルーターが DCE として動作し、直接接続のためのクロックを提供する場合は、DCE ケーブルを使用します。

hdlc clocking *external* または *internal*

モデムまたは DSU に接続する場合は、クロックを外部として構成します。別の DTE 装置に直接接続する場合は、DCE ケーブルを使用し、一方の側ではクロックを『内部』に設定し、他方は『外部』に設定します。

内部クロックを使用している側で、クロック速度を構成します。616ページの表75を使用して、内部クロックが使用されているときに各種アダプターに設定できるクロック速度を調べてください。

例 : `set hdlc clocking internal`

注: **clocking** は、ケーブル・タイプが *HSSI DTE* の場合は、*external* に設定し、ケーブル・タイプが *HSSI DTE* で構成不能の場合は、*internal* に設定します。

hdlc encoding *NRZ* または *NRZI*

インターフェースの HDLC 伝送符号化法を設定します。符号化法は、NRZ (非ゼロ復帰記録) または NRZI (非ゼロ復帰反転) に設定できます。NRZ は、広く一般的に使用されている符号化法であり、一方の NRZI は一部の IBM 構成で使用されます。デフォルト値は NRZ です。

注: **encoding** は、HSSI アダプター上の PPP インターフェースに関しては NRZ に設定され、構成不能です。

例 : `set hdlc encoding nrz`

hdlc idle *flag* または *mark*

データ・リンク・アイドル状態をフラグまたはマークに設定します。

フラグ・オプションは、フレーム間に連続フラグ (7E 16 進数) を提供します。

マーク・オプションは、フレーム間の伝送路をマーキング状態 (OFF, 1) にします。

注: **idle** は、HSSI アダプター上の PPP インターフェースに関しては *flag* に設定され、構成不能です。

例 : `set hdlc idle flag`

hdlc speed *value*

内部クロックの場合、このコマンドは送信および受信クロック回線の速度を指定します。616ページの表75を参照してください。

PPP インターフェース (Talk 6) の構成

表 75. 2216 インターフェースで内部クロックが使用される場合の回線速度

アダプター・タイプ	速度範囲
8 ポート EIA 232	9600 ~ 64 000 bps
6 ポート V.35/V.36	9600 ~ 460 800 bps、1 544 000 bps、または 2 048 000 bps
8 ポート X.21	9600 ~ 460 800 bps、1 544 000 bps、または 2 048 000 bps
1 ポート HSSI	22 368 000 bps または 44 736 000 bps

外部クロックの場合、このコマンドはハードウェアには影響を与えませんが、一部のプロトコル (IPX など) では、ルーティング・パラメーターを決めるのに使用される速度を設定します。その場合、速度は実際の回線速度に一致するように設定してください。表76 を使用して、各種のアダプターに設定できるクロック速度を調べてください。

表 76. 2216 インターフェースで外部クロックが使用される場合の回線速度

アダプター・タイプ	速度範囲
8 ポート EIA 232	2400 ~ 64 000 bps
6 ポート V.35/V.36	2400 ~ 2 048 000 bps
8 ポート X.21	2400 ~ 2 048 000 bps
1 ポート HSSI	1 544 000 bps ~ 52 000 000 bps

- インターフェース 1
- 4 ポート WAN コンセントレーション・アダプターのポート 1
- 8 ポート WAN コンセントレーション・アダプターのポート 1 および 5

例 : `set hdlc speed 56000`

hdlc transmit-delay value

フレーム相互間に送信されるフラグの数を設定します。このコマンドの目的は、シリアル・ラインを減速して、相手側の旧型で低速のシリアル装置に整合させることです。

範囲は 0 ~ 15 です。デフォルトは 0 です。

注: 8 ポート EIA- 232E アダプター、6 ポート V.35/V.36 アダプター、または 8 ポート X.21 アダプター上の PPP インターフェースに関して、非ゼロ送信遅延を構成する場合は、`set hdlc speed` コマンドを使用して、伝送速度を構成する必要があります。

例 : `set hdlc transmit-delay 15`

ipcp そのリンクのインターネット・プロトコル制御プロトコル・オプションを設定します。

例 :

```
set ipcp
IP COMPRESSION [yes]:
Number of Slots: [16]?
Send our IP address [yes]:
Note: unnumbered interface addresses will not be sent.
Interface remote IP address to offer if requested (0 for none) [0.0.0.0]? 10.0.0.3
```

IPCP compression

PPP ハンドラーが圧縮 IP データを受け入れるかどうかを選択します。PPP は、RFC 1144 に記述されている Van Jacobson (VJ) TCP/IP

PPP インターフェース (Talk 6) の構成

ヘッダー圧縮をサポートします。ポイント・ポイント・リンクが低いポー・レートで動作しているときは、このオプションを使用可能にする必要があります。

この値を **yes** に設定すると、圧縮オプションが使用可能になります。この値を **no** に設定すると、オプションは使用不可になります。デフォルト設定値は **no** です。

Slots 使用可能にされている圧縮のタイプを調べるときに参照するために保存される IP ヘッダーの数を設定します。範囲は 1 ~ 16 です。デフォルト値は 16 です。

Send Our IP address

ローカル IP アドレスをリンクのリモート側に送信するかどうかを指定します。リンクの相手側が IP アドレスを必要とする場合は、このオプションを **yes** に設定する必要があります。

この値を **yes** に設定すると、インターフェースに番号制 IP アドレスが構成されている場合 (つまり、アドレスが 0 で始まっていない場合)、IPCP は PPP インターフェースの IP アドレスを送信します。このオプションが **no** に設定され、ピアが IP アドレス・オプションを 0.0.0.0 にセットした Configure NAK を送信した場合、2216 は、番号制アドレスが構成されている場合には、PPP インターフェースのアドレスで応答します。

ipv6cp

IPv6 制御プロトコル・オプションをそのリンクに設定します。

例 :

```
set ipv6cp
Send Our IP address [no]:
```

Send Our IP address

ローカル IPv6 アドレスをリンクのリモート側に送信するかどうかを指定します。リンクの相手側が IPv6 アドレスを必要とする場合は、このオプションを **yes** に設定する必要があります。

このパラメーターを **yes** に設定すると、インターフェースに番号制 IPv6 アドレスが構成されている場合 (つまり、アドレスが 0 で始まっていない場合)、IPv6CP は PPP インターフェースの IPv6 アドレスを送信します。このオプションが **no** に設定され、ピアが IPv6 アドレス・オプションを ::0 にセットした Configure NAK を送信した場合、2216 は、番号制アドレスが構成されている場合には、PPP インターフェースのアドレスで応答します。

lcp options または parameters

PPP リンクのリンク制御プロトコル・オプションおよびパラメーターを設定します。

例 :

```
set lcp options
Maximum Receive Unit (bytes) [2048]?
Magic Number [yes]:
Peer-to-Local Async Control Character Map (RX ACCM) [A0000] ?
Protocol Field Compression (PFC) [no]?
Addr/Cntl Field Compression (ACFC) [no]?
```

PPP インターフェース (Talk 6) の構成

Maximum receive unit

1 つのデータグラムで転送される情報フィールドの最大サイズを設定します。範囲は 576 ~ 4089 バイトです。デフォルト値は 2048 です。

Magic number

マジック番号オプションが使用可能かどうかを指定します。マジック番号は、シリアル・ライン構成内のループバック・リンクを検出する方法を提供します。このオプションが使用可能な場合、リンクはシステム・クロックを乱数発生器として使用します。生成された乱数は、マジック番号と呼ばれます。

LCP は、マジック番号が存在する (つまり、マジック番号オプションが使用可能にされている) 構成要求を受信すると、受信したマジック番号をピアに送信した最後の構成要求内のマジック番号と比較します。2 つのマジック番号が異なっている場合、リンクはループバックと見なされません。2 つの番号が同一の場合、PPP ハンドラーはリンクをダウンにし、マジック番号を再交渉するために再度アップにすることを試みます。

この値を Yes に設定すると、マジック番号オプションが使用可能になります。この値を no に設定すると、オプションは使用不可になります。デフォルト設定値は Yes です。

Async Control Character Map

非同期伝送路上のルーターにパケットを転送するときに、ピアが『エスケープ』する必要がある文字を示します。これにより、特定の重要な ASCII 制御文字 (XON や XOFF など) をリンク上で透過的に転送することができます。

32 ビットのビット・マスクを 16 進数で指定します。マスクの位置 'N' のビットがセットされている場合、対応する ASCII 文字 'N' をエスケープする必要があります (LSB はビット番号 0 で、ASCII NUL 文字に対応します)。

このオプションのデフォルト値は '0A0000' で、XON および XOFF (control-Q および control-S) をエスケープする必要があることを示します。これは、XON/XOFF を使用してソフトウェアのハンドシェイクを行うモデムのために取られている処置です。これが問題でない場合には、ACCM をゼロ (どの文字もエスケープしない) に変更することをお勧めします。

LCP は常に ACCM の交渉を望み (同期伝送路でさえも)、PPP 監視プロセスの **list lcp** コマンドによって、交渉された値が表示されます。しかし、同期伝送路では『エスケープ』機構ではなく『ビット・スタッフィング』機構が採用されているので、ACCM は同期伝送路上では意味をもたないのが通常です。ただし、ルーターが同期から非同期への変換を行うモデムに接続されている場合は、意味を持つことがあります。その場合、その値は非同期側に接続されているモデムの要件を反映させることが必要です。

Addr/Cntl Field Compression (ACFC)

ピアがアドレスおよび制御フィールドの圧縮を採用できるかどうかを指定します。

ACFC オプションが LCP によって正常に交渉されている場合には、リンク上でやり取りされるデータグラムでは、各パケットを開始するアドレスおよび制御フィールド・バイトを省略しても構わないことを意味します。これらのバイトは常に 0xFF 03 で、実際の情報は提供しません。ACFC を使用可能にすることは、転送されるデータグラムが 2 バイト短くなることを意味します。

正確に言うと、ユーザーが ACFC を使用可能に設定することは、受信側の能力を示していることになります。ACFC を使用可能にし、LCP がその交渉に成功した場合、相手側はローカル側に転送するパケットに ACFC を採用できるようになります (ほとんどの PPP オプションはこのように動作します)。ローカル側は、相手側もそのようなパケットを処理する能力があることを示した場合にのみ、アドレスおよび制御フィールドを含まないパケットを転送します。

ACFC を使用可能にすることは、たとえ、相手側がそのオプションを受け入れたとしても、相手側にアドレスおよび制御フィールドなしでパケットを送信することを義務付けるものではありません。ACFC を使用可能にすることは、オプションで ACFC を使用しても構わないこと、およびルーターはその着信パケットを処理できることを、ピアに通知するに過ぎません。ピアが ACFC を処理できることを示した場合、ACFC がローカルで使用可能にされているかどうかに関係なく、ルーターは常に転送するパケットで ACFC を実行します。

LCP パケットは、常にアドレスおよび制御フィールドを付けて送信されます。これにより、リンクの同期が失われても、LCP パケットが認知されることが保証されます。

Protocol Field Compression (PFC)

ピアがプロトコル・フィールドの圧縮を採用するかどうかを指定します。

『yes』を指定し、PFC オプションが LCP によって正常に交渉された場合、転送するパケットで 1 バイト節約するために、'0x0000'~'0x00FF' の範囲のこれらのプロトコル値の『プロトコル』フィールドから先行ゼロ・バイトを省略しても構いません。この範囲には、大多数のレイヤー 3 プロトコル・データグラムが含まれます。

PPP プロトコル値はすべて、プロトコルの上位バイトには偶数値、下位バイトには奇数値が割り当てられています (ISO 3309 アドレス・フィールドの拡張機構に記述されている汎用機構の使用の一部)。そのため、受信側はプロトコル値の先行バイトが省略されていることを容易に検出できるので (プロトコル・フィールドの最初のバイトは偶数ではなく奇数)、PFC を使用してもフレームの解釈があいまいになることはありません。

PFC は、ACFC と同様に、受信側の能力であり、前述の ACFC の説明が PFC にも当てはまります。

PPP インターフェース (Talk 6) の構成

例 :

```
set lcp parameters
Config tries [20]?
NAK tries [10]?
Terminate tries [10]?
Retry timer (mSec) [3000]?
```

注: コマンド・オプション・プロンプトの直後の値は、そのオプションの現行設定値です。これは必ずしも、この章に示されているデフォルト値とは限りません。

Retry timer

LCP の configure-request パケット (リンクをオープンするため) および terminate-request パケット (リンクをクローズするため) の転送がタイムアウトになる前に経過する時間 (ミリ秒) を設定します。このタイマーが満了するとタイムアウトになり、configure-request および terminate-request パケットの転送が停止します。範囲は 200 ~ 30000 ミリ秒です。デフォルト設定値は 3000 ミリ秒です。

Config tries

PPP リンクをオープンするために LCP が configure-request パケットをピア・ステーションに送信する回数を設定します。デフォルト値は 20 です。範囲は 1 ~ 100 です。

最初の configure-request パケットが送信された後、再試行タイマーがスタートします。これはパケット紛失を防止するために行われます。

NAK tries

PPP リンクのオープンを試みているときに、LCP がピア・ステーションに configure-nak (nak = not acknowledged) パケットを送信する回数を設定します。デフォルト値は 10 です。範囲は 1 ~ 100 です。

LCP は、受け入れ不能の構成オプションを含んでいる configure-request パケットを受信すると、configure-nak パケットを送信します。これらのパケットは、提供された構成オプションを拒否し、変更された受け入れ可能な値を提案するために送信されます。

Terminate tries

PPP リンクをクローズするために LCP がピア・ステーションに terminate-request パケットを送信する回数を設定します。デフォルト値は 10 です。範囲は 1 ~ 100 です。

最初の terminate-request パケットが送信された後、再試行タイマーがスタートします。これはパケット紛失を防止するために行われます。

name ルーターが別のルーターからの認証要求に応答するとき使用する名前を設定します。

注:

1. この製品では、リンク上のピアに送信する名前およびパスワードに使用する『大文字小文字』はそのまま保たれますが、すべての名前およびパスワードを小文字で入力した方が、他のベンダーの製品との相互運用が容易です。

PPP インターフェース (Talk 6) の構成

2. 他の実現では、この製品でサポートされているのと同じ最大長の名前を扱えない場合があります。そのような場合の指示は、認証機能から無効な名前またはパスワードがあることを知らせるメッセージが出るだけです。このタイプのメッセージを受け取った場合は、ルーター ID を短くしてみてください。
3. このコマンドはローカル・ルーターの名前を設定します。ローカル・データベースを使用してリモート・ユーザーを追跡したい場合は、talk 6 **add ppp-user** コマンドを Config> プロンプトで使用して、各リモート・ユーザーをローカル・データベースに追加します。代替りの方法は、外部 AAA 認証サーバーを構成することです。この認証サーバーについては、機構の使用と構成の中の『ローカルまたはリモート認証の使用』の章で説明してあります。

注: 外部 AAA 認証サーバーを MS-CHAP が使用することはできません。

例 :

```
set name
PPP 7 Config>set name
Enter Local Name: [ ]? newyork
Password:
Enter password again:
PPP Local Name = newyork
```

ncp parameters

ほとんどの NCP の基本動作パラメーターを設定します。

注: このコマンドには特定のインターフェースを通してアクセスしますが、このコマンドはすべての PPP インターフェースのパラメーターをリセットします。

例 :

```
set ncp parameters
Config tries [20]
NAK tries [10]?
Terminate tries [10]?
Retry timer (mSec) [3000]?
```

Config tries

PPP リンクをオープンするために NCP が configure-request パケットをピア・ステーションに送信する回数を設定します。範囲は 1 ~ 100 です。デフォルト値は 20 です。

このアクションは、指定された一組の構成オプションを使用して NCP コネクションをオープンしたいことを示します。configure-request パケットが送信された後、再試行タイマーがスタートします。これはパケット紛失を防止するために行われます。

NAK tries

PPP リンクのオープンを試みているときに、NCP がピア・ステーションに送信する configure-nak (nak = not acknowledged) パケットの数を設定します。範囲は 1 ~ 100 です。デフォルト値は 10 です。

受け入れ不能の構成オプションを含んでいる configure-request パケットを受信すると、NCP は configure-nak パケットを送信します。これらのパケットは、提供された構成オプションを拒否し、変更された受け入れ可能な値を提案するために送信されます。

PPP インターフェース (Talk 6) の構成

Terminate tries

PPP リンクをクローズするために NCP がピア・ステーションに送信する terminate-request パケットの数を設定します。範囲は 1 ~ 100 です。デフォルト値は 10 です。

このアクションは、NCP コネクションをクローズしたいことを示します。terminate-request パケットが送信された後、再試行タイマーがスタートします。これはパケット紛失を防止するために行われます。

Retry timer

NCP の configure-request パケット (リンクをオープンするため) および terminate-request パケット (リンクをクローズするため) の転送がタイムアウトになる前に経過する時間 (ミリ秒) を設定します。このタイマーが満了するとタイムアウトになり、configure-request および terminate-request パケットの転送が停止します。範囲は 200 ~ 30000 ミリ秒です。デフォルト設定値は 3000 ミリ秒です。

インターフェース監視プロセスへのアクセス

PPP インターフェース監視プロセスにアクセスする場合は、以下の手順を実行します。

1. + プロンプトで **interface** と入力して、構成済みインターフェースのリストを表示させる。
2. **network** の後に続けて、PPP インターフェースの番号を入力する。

```
+ network 2
PPP>
```

ポイント・ポイント監視コマンド

この節では、ポイント・ポイント監視コマンドを要約した上で説明します。コマンドは PPP> プロンプトで入力します。表77 は、コマンドを示しています。

注: このコマンドで利用可能なオプションは、ルーター・ソフトウェアで利用可能なプロトコルによって決まります。たとえば、ルーター・ソフトウェア (イメージ) に APPN サポートが含まれていない場合は、**list isrcp**、**list isr**、**list hprcp**、**list hpr**、および **llc** コマンドは使用不能です。

表 77. ポイント・ポイント監視コマンドの要約

コマンド	機能
? (Help)	このコマンド・レベルで使用可能なコマンドをすべて表示するか、特定のコマンドに関するオプション (ただし、選択可能な場合) をリストします。12ページの『ヘルプを得る』を参照してください。
Clear	ポイント・ポイント・インターフェースからすべての統計を消去します。
List	ポイント・ポイント・インターフェースと PPP パラメーターおよびオプションに関連した情報およびカウンターを表示します。
LLC	LLC 監視プロンプトを表示します。
Exit	直前のコマンド・レベルに戻ります。13ページの『下位レベル操作環境を終了する』を参照してください。

Clear

clear コマンドは、ポイント・ポイント・インターフェースからすべての統計を消去する場合に使用します。

構文 :

clear

List

list コマンドは、ポイント・ポイント・インターフェースと PPP パラメーターおよびオプションに関連した、情報およびカウンターを表示させる場合に使用します。

構文 :

<u>list</u>	<u>all</u>
	<u>cbcp</u> callback cp
	<u>control</u>
	<u>errors</u>
	<u>interface</u>
	<u>lcp</u> - PPP link CP
	<u>pap</u> - PAP Authentication CP
	<u>chap</u> - CHAP Authentication CP
	<u>mschap</u> - MS-CHAP Authentication CP
	<u>ecp</u> - Encryption Control Protocol
	<u>edp</u> - Encrypted packet statistics
	<u>mppe</u> - Microsoft PPP Encryption (MPPE)
	<u>spap</u> - SPAP Authentication CP
	<u>ccp</u> - PPP Compression CP
	<u>cdp</u> - PPP compression
	<u>compression</u> - PPP compression
	<u>bcp</u> - Bridging (ASRT) CP
	<u>brg</u> - Bridging (ASRT)
	<u>stp</u> - Spanning Tree Protocol
	<u>nbc</u> - NetBios
	<u>nbcf</u> - NetBios Frame
	<u>ipcp</u> - Internet Protocol CP
	<u>ip</u> - Internet Protocol
	<u>ip6cp</u> - Internet Protocol version 6 CP
	<u>ip6</u> - Internet Protocol version 6

PPP インターフェース (Talk 5) の監視

ipxcp - Novell IPX CP

ipx - Novell IPX

atcp - AppleTalk (Phase 2) CP

ap2 - AppleTalk (Phase 2)

dncp - DECnet IV CP

dn - DECnet IV

osicp - ISO's OSI CP

osi - ISO's OSI

bvcp - Banyan VINES CP

vines - Banyan VINES

isrcp - APPN ISR CP

isr - APPN ISR

hprcp - APPN HPR CP

hpr - APPN HPR

all ポイント・ポイント・インターフェースと PPP パラメーターおよびオプションに関連したすべての情報およびカウンターをリストします。このコマンドで表示される出力は、すべての個別の **list item** コマンドからの表示の組み合わせです。

注: あるネットワーク制御プロトコルがインターフェース上で利用不能の場合、そのネットワーク制御プロトコルの **list** コマンドに対して、プロトコルまたは統計情報が得られないことを知らせるメッセージが表示されます。

cbcp Callback 制御プロトコルの統計をリストします。

例 : list cbcp

CBCP Statistics	In	Out
-----	---	----
Packets:	0	0
Octets:	0	0
Callback attempts:	0	
Successful callbacks:	0	

Packets

現行のポイント・ポイント・インターフェースを介して送信 (out) および受信 (in) された CBCP パケットの合計数を示します。

Octets

CBCP フレームの場合に、現行のポイント・ポイント・インターフェースを介して送受信されたオクテット単位のバイトの合計数を示します。

Callback attempts

試行された CBCP コールバックの数 (進行中のものも含む)。

Successful callbacks

正常に完了したコールバックの数

control

制御プロトコルの交渉されたオプションまたはその他の状態情報をリストします。

```

ccp
ecp
lcp
bcp
nbcP
nbfcP
ipcp
ipxcp
atcp
dnCP
osicP
bvcp
isrcP
hprcp

```

List Control CCP コマンドの例**STAC-LZC 圧縮の例 :**

```

list control ccp
CCP State      :      Open
Previous State:      Ack Sent
Time Since Change:  264 hours, 56 minutes and 58 seconds

Compressor:  STAC-LZS histories 1, check_mode SEQ
Decompressor: STAC-LZS histories 1, check_mode SEQ

Max size of compression dictionary:  12494.
Max size of decompression dictionary:  4424.

```

MPPC 圧縮の例 :

```

list control ccp
CCP State      :      Open
Previous State :      Listen
Time Since Change:  167 minutes

Compressor :  none
Decompressor : none

MPPE : Negotiated 40 bit stateful

```

List Control CCP の例の中の用語の定義**CCP state**

ポイント・ポイント・リンクの現在の状態。『Open』の場合、このリンクでは圧縮の交渉に成功しています。Openでない場合は、リンク上では圧縮は実行されていません。MPPEの交渉が成功した場合も、『Open』と表示されます。

Previous State

現在の状態フィールドに表示されている状態の前のポイント・ポイント・リンクの状態

PPP インターフェース (Talk 5) の監視

Compressor

交渉された圧縮器と使用されているオプションを示します。

Decompressor

交渉された解凍器と使用されているオプションを示します。

Max size of compression dictionary

圧縮 『コンテキスト』 または 『ヒストリー』 に割り振られたデータ・スペースのサイズ

Max size of decompression dictionary

解凍 『コンテキスト』 または 『ヒストリー』 に割り振られたデータ・スペースのサイズ

MPPE 交渉された MPPE オプション。これらのパラメーターの説明については、talk 6 **enable mppe** コマンドおよび **機構の使用と構成** の中の『暗号化の概説』の章の『Microsoft ポイント・ポイント暗号化 (MPPE)』を参照してください。

List Control ECP コマンドの例

例：

```
PPP x>list control ecp
```

```
ECP State:                Open
Previous State:           Ack Sent
Time Since Change:       16 minutes and 40 seconds
```

```
Local (transmit) encrypter: DES
Remote (receive) encrypter: DES
```

List Control ECP の例の中の用語の定義

ECP State:

ポイント・ポイント・リンクの現在の状態。『Open』の場合、このリンクでは暗号化の交渉に成功しています。『Open』でない場合は、リンク上では暗号化は実行されていません。

注: 暗号化サポートはオプションであり、**load add** コマンドを使用して、ソフトウェア・ロードに追加する必要があります。102ページの『Load』を参照してください。

Previous State:

現在の状態フィールドに表示されている状態の前のポイント・ポイント・リンクの状態

Time Since Change:

上記の 2 つの状態変更の間の経過時間

Local (transmit) encrypter:

この暗号化アルゴリズムが、この PPP インターフェース上で送信されるデータの暗号化に使用されます。

Remote (receive) encrypter:

この暗号化アルゴリズムが、このインターフェースで受信されたデータの復号に使用されます。

List Control LCP コマンドの例

例 :

`list control lcp`

```

Version:                1
Link phase:             Establishing connection (LCP)
LCP State:              Listen
Previous State:         Req Sent
Time Since Change:     1 minute and 57 seconds
Remote Username:       - No Authentication -
Last Identification Rx'd
Time Connected:        - No Connection -

LCP Option              Local              Remote
-----
Max Receive Unit:      2048              1500
Async Char Mask:      FFFFFFFF          FFFFFFFF
Authentication:       None                None
Magic Number:         7A8CBFD7          None
Protocol Field Comp:  No                  No
Addr/Cntl Field Comp: No                  No
32-Bit Checksum:      No

```

不可

List Control LCP の例の中の用語の定義**Version**

ポイント・ポイント・プロトコルの現行バージョンを表示します。

Link phase

リンク上の現行アクティビティを表示します。これは次の値のいずれかです。

Dead リンク上にはアクティビティが存在しません。インターフェースはダウンしています。

LCP リンクは LCP ネゴシエーションの最中です。インターフェースを最初に立ち上げるときに、この状態になります。このとき、インターフェースは自己テストを実行している可能性があります。

Authenticate

リンクは初期認証を実行中です。

ECP リンクは ECP 暗号化アルゴリズムを交渉中です。

注: 暗号化サポートはオプションであり、`load add` コマンドを使用して、ソフトウェア・ロードに追加する必要があります。 *Nways* マルチプロトコル・アクセス・サービス ソフトウェア使用者の手引き の中の CONFIG プロセス `load` コマンドを参照してください。

Ready リンクは通常どおり運用可です。 NCP はネゴシエーションを実行し、NCP ネゴシエーションが成功した後、関連のデータ・トラフィックを伝送することができます。

Terminate

リンクは遮断中です。

PPP インターフェース (Talk 5) の監視

LCP State

ポイント・ポイント・リンクの現行状態を表示します。これらの状態には、以下のものが含まれます。

OPEN - コネクションが確立され、データを送信できることを示します。この状態では、再試行タイマーは動作しません。

CLOSED - リンクはダウンしており、それをオープンする試みは行われていないことを示します。この状態では、ピアからのすべての接続要求はリジェクトされます。

LISTEN - リンクはダウンしており、それをオープンする試みは行われていないことを示します。ただし、CLOSED 状態とは異なり、ピアからのすべての接続要求は受け入れられます。

REQUEST-SENT - リンクをオープンする試みが実行されていることを示します。Configure-request パケットが送信されましたが、Configure-Ack はまだ受信も送信もされていません。このときは、再試行タイマーが動作しています。

ACK-RECEIVED - Configure-request パケットが送信され、Configure-Ack パケットを受信したことを示します。Configure-Ack パケットが送信されていないので、再試行タイマーはまだ動作しています。

ACK-SENT - Configure-Ack パケットと Configure-request パケットが送信されたが、Configure-Ack パケットを受信していないことを示します。この状態では、常に再試行タイマーが動作しています。

CLOSING - リンクをクローズする試みが実行されていることを示します。Terminate-request パケットが送信されましたが、Terminate-Ack パケットを受信していません。この状態では、再試行タイマーが動作しています。

Previous State

現在の状態フィールドに表示されている状態の前のポイント・ポイント・リンクの状態を表示します。これらの状態は、Current state フィールドで説明したものと同じです。

Time since change

前回のリンク状態変更からの経過時間を表示します。

Remote Username

リンク上で認証が必要とされている場合、このフィールドはピアが提供した名前を示します。

Last Identification Rx'd

LCP に対して定義されているオプションのパケット・タイプは『Identification』パケットです。このパケットの内容は未定義ですが、通常は、名前、製造業者、モデル番号、あるいは製造業者が提供するその他の情報など、何らかの識別情報を与えるためにピアによって提供される人間可読ストリングが想定されます。ルーターがこの種のパケットを受信した場合、最後に受信したパケットの内容がここに表示されます。

Time Connected

ピアがこのリンクに接続されていた時間の長さを示します。

LCP Option

これらのフィールドは、LCP がオープン状態のときは、ピアと交渉されたオプションの値を示します。LCP がオープンしていないときは、これらの値は、以降の LCP ネゴシエーションで使用される初期デフォルト値または構成値を表します。

Max Receive Unit

ローカル側とリモート側が送信できるパケット・サイズの最大長を示します。これは PPP パケットのペイロード部分の最大長であり、PPP ヘッダーとトレーラーのバイト数は含まれません。

LCP がオープン状態のときは、この値はピアと交渉された長さを示します。ルーターは、相手側とローカル側で MRU 長さが異なることはサポートしないので、これらの値は同一になります。

Async Character Mask

これは、交渉された非同期制御文字マスクを示します。ルーターは同期伝送路でも ACCM ネゴシエーションを受け入れます。ただし、これは実際のパケット・データ送信には影響を与えません。ACCM の詳細については、617ページの **set lcp options** コマンドの項を参照してください。

Authentication

リンクの各側に必要な認証プロトコル (もしあれば) を示します。各側で複数のプロトコルを使用することも可能です。この値は、装置が使用することに合意したプロトコルを示します。

Magic number

リンクのローカル側とリモート側の両方でループバック検出に使用されている現行のマジック番号を表示します。

Protocol compression

PFC が交渉されたかどうかを示します。

Address/Control compression

ACFC が交渉されたかどうかを示します。

32-bit checksum

現在はサポートされていません。PPP は、受信した場合、このオプションをリジェクトします。

List Control BCP コマンドの例

例 :

```
list control bcp
BCP State:          Closed
Previous State:     Closed
Time Since Change:  5 hours, 25 minutes and 3 seconds

BCP Option          Local          Remote
Tinygram Compression  DISABLED          DISABLED
Source-route Info:
Remote side does not support source-route ブリッジング
```

PPP インターフェース (Talk 5) の監視

List Control BCP の例の中の用語の定義

BCP 状態フィールドは、**list control lcp** コマンドの項で説明されているものと同じです。

Tinygram Compression

リンクのローカル側およびリモート側の Tinygram 圧縮が使用可能か使用不可かを表示します。

Source-route Info

このインターフェースに対応するローカル・ポートおよびリモート・ポートのソース・ルート・ブリッジングが使用可能かどうかを表示します。

List Control NBCP コマンドの例 List Control NBFCP の例の中の用語の定義 List Control NBFCP コマンドの例

例 :

```
list control nbfcip
NBFCIP State:          Closed
Previous State:        Closed
Time Since Change:    4 hours, 5 minutes and 58 seconds

NetBIOS Frame Control Protocol Info:
Local MAC Address = 0x000000000000
Remote MAC Address = 0x444553540000
Remote NetBIOS Names: (0)

Remote Peer Class:    0
Remote Peer Version Major: 0
Remote Peer Version Minor: 0
```

List Control NBFCP の例の中の用語の定義

NBFCP 状態フィールドは、**list control lcp** コマンドの項で説明されているものと同じです。

Local MAC Address

ローカル MAC アドレスは、Win 95/NT ダイアルアップ・ネットワーク・クライアントが使用する MAC アドレスです。これは疑似乱数であるか、またはローカル管理アドレス (LAA) (クライアント内に LAA を構成した場合) です。

Remote MAC Address

リモート MAC アドレスは、2216 DIALs サーバーが LAN 上で使用するためにこのクライアントに割り当てた MAC アドレスです。

Remote NetBIOS Name

クライアントがアクセスを要求した LAN 資源の NetBIOS 名のリストです。

Remote Peer

Remote Peer Class、Version Major、および Version Minor は、NBFCP ピアの情報オプションが 2216 に渡して返す情報です。

List Control IPCP コマンドの例

例 :

PPP インターフェース (Talk 5) の監視

```
list control ipcp
IPCP State:          Listen
Previous State:      Closed
Time Since Change:   1 hour, 57 minutes and 52 seconds

IPCP Option          Local          Remote
-----
IP Address           0.0.0.0          10.0.0.152
Compression Slots    None              None

DHCP State:          BOUND
Lease Server:        10.0.0.111
Leased IP Address:   10.0.0.152
Lease Time:          4 minutes and 0 seconds
Renewal Time:        2 minutes and 0 seconds
Rebind Time:         3 minutes and 30 seconds
Lease Time Elapsed: 1 second
Lease Time Remaining: 3 minutes and 59 seconds

DHCP Client ID:      0100120B0000
```

List Control IPCP の例の中の用語の定義

IPCP 状態フィールドは、**list control lcp** コマンドの項で説明したのと同じです。

IP Address:

このインターフェースの IP アドレス (Local) およびリモートの交渉されたアドレス (Remote) (もしあれば) を示します。

Compression Slots

使用可能にされている圧縮のタイプを調べるときに参照するために保存された IP ヘッダーの数を示します。

DHCP State

RFC 1541 に記述されているプロキシ DHCP です。

Lease Server

専用の獲得元のサーバーです。

Leased IP address

クライアントの専用アドレスです。このアドレスは、上記の『Remote IP Address』に等しい必要があります。

Lease Time

このアドレスに関して DHCP サーバーから獲得した専用の長さです。『Lease Time Elapsed』がこの時間に等しくなると、専用は有効期限が切れ、IPCP 接続はクローズします。

Renewal Time

プロキシ DHCP がサーバーから獲得した専用の延長を試みるまでの時間です。『Lease Elapsed Time』がこの時間に等しくなると、プロキシ DHCP は専用の更新を試み、正常に行われた場合は、『Lease Time』、『Lease Elapsed Time』、および『Lease Time Remaining』をリセットします。

Rebind Time

プロキシ DHCP が構成済み DHCP サーバーから新規専用の獲得を試みるまでの時間です。『Lease Elapsed Time』がこの時間に等しくなると、プロキシ DHCP は新規専用の獲得を試み、正常に行われた場合は、『Lease Time』、『Lease Elapsed Time』、および『Lease Time Remaining』をリセットします。

PPP インターフェース (Talk 5) の監視

Leased Time Elapsed

この専用に関して経過した時間です。専用は更新されている可能性があるため、これは必ずしもこの特定のダイヤルイン・セッションの時間とは限りません。専用が更新されると、このタイマーは 0 に戻して設定されます。

Leased Time Remaining

この専用に関して残っている時間です。このパラメーターは、『Lease Time』から『Lease Time Elapsed』を引いた値に等しくなります。

DHCP client ID

このクライアント (ダイヤルイン・ユーザー) の固有の ID です。DHCP メッセージはすべて、DHCP サーバーとの間でこのクライアント ID によって識別されます。

List Control IPXCP コマンドの例

例 :

```
list control ipxcp
IPXCP State:      Closed
Previous State:   Closed
Time Since Change: 2 hours, 9 minutes and 9 seconds
```

IPXCP 状態フィールドは、**list control lcp** コマンドの項で説明されているものと同じです。

List Control ATCP コマンドの例

例 :

```
list control atcp
ATCP State:      Closed
Previous State:   Closed
Time Since Change: 6 hours, 27 minutes and 7 seconds

AppleTalk Address Info:
Common network number = 12
Local node ID = 49
Remote node ID = 76
```

List Control ATCP の例の中の用語の定義

ATCP 状態フィールドは、**list control lcp** コマンドの項で説明されているものと同じです。

Common Network Number

ポイント・ポイント・リンクの 2 つの端のネットワーク番号。(リンクの両端は、同じネットワーク番号を持つように静的に構成する必要があります。)

Local Node ID

リンクのローカル側の固有のノード番号

Remote Node ID

リンクのリモート側の固有のノード番号

例 :

PPP インターフェース (Talk 5) の監視

```
list control dnpc
DNCN State:          Closed
Previous State:      Closed
Time Since Change:   2 hours, 2 minutes and 58 seconds
```

DNCN 状態フィールドは、**list control lcp** コマンドの項で説明されているものと同じです。

例 :

```
list control osicp
OSICP State:         Closed
Previous State:      Closed
Time Since Change:   6 hours, 28 minutes and 32 seconds
```

OSICP 状態フィールドは、**list control lcp** コマンドの項で説明されているものと同じです。

List Control BVPC コマンドの例

例 :

```
list control bvcp
BVCP State:          Open
Previous State:      Ack Sent
Time Since Change:   403 hours, 49 minutes and 2 seconds
```

BVCP 状態フィールドは、**list control lcp** コマンドの項で説明されているものと同じです。

注: コマンド・ワード **bvcp** および頭字語 BVCP は、Banyan VINES 制御プロトコル (BVCP) を表します。

List Control ISRCP コマンドの例

例 :

```
list control isrcp
APPN ISRCP State:    Open
Previous State:      Ack Rcvd
Time Since Change:   1 hour, 48 minutes and 5 seconds
```

APPN ISR 制御プロトコル (ISRCP) 状態フィールドは、**list control lcp** コマンドの項で説明したのと同じです。

List Control HPRCP コマンドの例

例 :

```
list control hprcp
APPN HPRCP State:    Open
Previous State:      Ack Rcvd
Time Since Change:   1 hour, 48 minutes and 10 seconds
```

APPN HPR 制御プロトコル (HPRCP) 状態フィールドは、**list control lcp** コマンドの項で説明したのと同じです。

error PPP ソフトウェアによって検出されたすべての誤り状態に関連する情報をリストします。

例 :

```
list error
Error Type          Count          Last One
-----
```

PPP インターフェース (Talk 5) の監視

```
Bad Address:          0          0
Bad Control:          0          0
Unknown Protocol:    0          0
Invalid Protocol:    0          0
Config Timeouts:     0          0
Terminate Timeouts:  0          0
```

Bad address

ポイント・ポイント・リンク上で検出された不正なアドレスの合計数を示します。『Bad addresses』は、パケットの先頭の HDLC フレーム・バイトを表します。

Bad control

ポイント・ポイント・リンク上で検出された不正な制御パケットの合計数を示します。『Bad control』は、HDLC カプセル化 PPP パケットの 0x03 プレフィックス (0xFF の後に続く 『UI』 値) を表します。

Unknown protocol

現行のリンクで検出された不明なプロトコル・パケットの合計数を示します。

Invalid protocol

現行のリンクで検出された無効なプロトコル・パケットの合計数を示します。

Config timeouts

リンクで発生した構成タイムアウトの合計数を示します。

Terminate timeouts

リンクで発生したリンク終了タイムアウトの合計数を示します。

interface

PPP インターフェースの統計をリストします。

例 :

```
list interface
Interface Statistic      In      Out
-----
Packets:                 0        0
Octets:                  0        0
```

Packets

このインターフェースで送受信されたパケットの数を示します。

Octets

このインターフェースで送受信されたオクテット数を示します。

lcp

リンク制御プロトコルの統計をリストします。

例 :

```
list lcp
LCP STATISTIC           IN      OUT
-----
PACKETS:                42      42
OCTETS:                 1260    1260
CFG REQ:                 0        0
CFG ACK:                 0        0
CFG NAK:                 0        0
CFG REJ:                 0        0
TERM REQ:                0        0
TERM ACK:                0        0
ECHO REQ:                21      21
ECHO RESP:               21      21
DISC REQ:                 0        0
CODE REJ:                0        0
```

Packets

現行のポイント・ポイント・インターフェースを介して送信 (out) および受信 (in) された LCP パケットの合計数を示します。

Octets

LCP フレームの場合、現行のポイント・ポイント・インターフェースを介して送受信されたバイトの合計数をオクテットで示します。

CFG REQ

現行のポイント・ポイント・インターフェースを介して送受信された構成要求 (configure-request) LCP パケットの合計数を示します。

CFG ACK

現行のポイント・ポイント・インターフェースを介して送受信された構成確認 (configure-ack (acknowledged)) LCP パケットの合計数を示します。

CFG NAK

現行のポイント・ポイント・インターフェースを介して送受信された構成非確認 (configure-nak (not acknowledged)) LCP パケットの合計数を示します。

CFG REJ

現行のポイント・ポイント・インターフェースを介して送受信された構成リジェクト (configure-reject) LCP パケットの合計数を示します。

TERM REQ

現行のポイント・ポイント・インターフェースを介して送受信された終了要求 (terminal-request) LCP パケットの合計数

TERM ACK

現行のポイント・ポイント・インターフェースを介して送受信された終了確認 (terminal-ack) LCP パケットの合計数

ECHO REQ

現行のポイント・ポイント・インターフェースを介して送受信されたエコー要求 (echo-request) LCP パケットの合計数を示します。

ECHO RESP

現行のポイント・ポイント・インターフェースを介して送受信されたエコー応答 (echo-response) LCP パケットの合計数を示します。

DISC REQ

現行のポイント・ポイント・インターフェースを介して送受信された廃棄要求 (discard-request) LCP パケットの合計数を示します。

CODE REJ

現行のポイント・ポイント・インターフェースを介して送受信された符号リジェクト (code-reject) LCP パケットの合計数を示します。

pap パスワード認証プロトコルの統計をリストします。

例 :

```
list pap
PAP Statistics           In           Out
-----
Packets:                 0             0
```

PPP インターフェース (Talk 5) の監視

```
Octets:          0          0
Requests:        0          0
Acks:            0          0
Naks:            0          0
```

Packets

送信または受信された PAP パケットの合計数

Octets

このパケットで送信または受信されたデータのバイト数

Requests

送信または受信された PAP 『要求』 パケットの数。これらは PAP 名前/パスワードの対が入っているパケットです。

Acks PAP 要求に対して送信または受信された Ack (肯定応答) の数 (たとえば、ピアが有効な要求パケットを送信した場合、ルーターは Ack で応答します。)

Naks PAP 要求に対して送信または受信された Nak の数 (たとえば、ピアが無効な要求パケットを送信した場合、ルーターは Nak で応答します。)

chap チャレンジ/ハンドシェイク認証プロトコルの統計をリストします。

例 :

```
list chap
CHAP Statistics      In      Out
-----
Packets:            0      0
Octets:             0      0
Challenges:         0      0
Responses:          0      0
Successes:          0      0
Failures:           0      0
```

Packets

送信または受信された CHAP パケットの合計数

Octets

パケットで送信または受信されたデータのバイト数

Challenges

送信または受信された CHAP 『チャレンジ』 パケットの数。CHAP チャレンジ・パケットには、ランダムに生成された暗号化キーが入っており、その暗号化キーおよび保管されているパスワード情報に基づいて適切なレスポンスを生成することをピアに要求します。

Responses

送信または受信された CHAP 『レスポンス』 パケットの数。レスポンス・パケットには、『チャレンジ』 要求に対するピアの応答が入っています。

Successes/Failures

送信または受信された成功 (Success) または不成功 (Failure) パケットの数。装置はチャレンジ・パケットを送信し、ピアのレスポンス・パケットを待ちます。次に、レスポンス・パケットを調べて、そのレスポンスが有効であったかどうかを示すために成功または不成功パケットを送信します。

PPP インターフェース (Talk 5) の監視

これらのカウンターは、送信された成功または不成功パケットを反映します。認証が失敗と見なされる前に、ピアは正常に応答するために数回試行します。

mschap

各方向についての MS-CHAP 統計をリストします。

Packets

MS-CHAP パケットの合計数

Octets

MS-CHAP パケットに含まれるバイトの合計数

Challenges

MS-CHAP チャレンジ・パケットの数

Responses

MS-CHAP レスポンス・パケットの数

Successes

MS-CHAP 成功パケットの数

Failures

MS-CHAP 障害パケットの数

Failure: Restricted Hours

PPP ユーザーが許された時間外に 2216 にアクセスしようとしたために送信された、障害パケットの数。このカウンターはサポートされておらず、常に 0 です。

Failure: Account Disabled

PPP ユーザーの ID が 2216 で使用不可にされたために送信された、障害パケットの数

Failure: Password Expired

PPP ユーザーのパスワードが 2216 で期限切れになったために送信された、障害パケットの数

Failure: No Dialin Permission

PPP ユーザーが 2216 へのダイヤルインを許可されていないために送信された、障害パケットの数

Failure: Authentication

PPP ユーザーの認証 (ID またはパスワード) が 2216 に認識されないために送信された、障害パケットの数

Failure: Change Password

Change Password パケットの処理中に生じた誤りの結果として送信された、障害パケットの数

Change Password

パスワード変更パケットの数。ルーターはパスワード変更パケットを送信することはありません。したがって、アウトバウンド・カウンターは常に 0 です。

ecp

インターフェース上で送信または受信された ECP (暗号化制御プロトコル) の統計をリストします。

PPP インターフェース (Talk 5) の監視

例 :

```
PPP x>list ecp
```

ECP Statistic	In	Out
-----	--	---
Packets:	2	2
Octets:	26	26
Reset Reqs:	0	0
Reset Acks:	0	0
Prot Rejects:	0	-
Local (transmit) encrypter:	DES	
Remote (receive) encrypter:	DES	

注: 暗号化サポートはオプションであり、**load add** コマンドを使用して、ソフトウェア・ロードに追加する必要があります。102ページの『Load』を参照してください。

Packets

現在のポイント・ポイント・インターフェースを介して送信 (out) および受信 (in) された ECP パケットの合計数を示します。

Octets

ECP パケットで送受信された合計バイト数を示します。

Reset Reqs

このインターフェースで送受信されたリセット要求の数を示します。リセット要求は、ECP が EDP パケットを廃棄するたびに送信されます。

注: DES (サポートされる唯一の暗号化アルゴリズム) はリセット要求を送信しないので、この数はゼロになります。

Reset Acks

このインターフェースで送受信されたリセット確認の数を示します。リセット確認 (Reset Ack) パケットは、リセット要求パケットを受信するたびに送信されます。

注: DES (サポートされる唯一の暗号化アルゴリズム) はリセット要求を送信しないので、この数はゼロになります。

Prot Rejects

現在のポイント・ポイント・インターフェースを介して送受信されたプロトコル・リジェクト・パケットの合計数を示します。

Local (transmit) encrypter

このポイント・ポイント・インターフェースで送信されるデータの暗号化には、この暗号化アルゴリズムが使用されます。

Remote (receive) encrypter

このポイント・ポイント・インターフェースで受信したデータの復号には、この暗号化アルゴリズムが使用されます。

edp インターフェース上で送信または受信される ECP 暗号化パケットに関連した統計をリストします。

例 :

```
PPP x>list edp
```

Encryption Statistic	In	Out
-----	--	---
Packets:	20	30

PPP インターフェース (Talk 5) の監視

```
Octets:                29164                44790
Encrypted Octets:      29280                44880
Discarded Packets:    0                    0
Prot Rejects:         0                    -
```

注: 暗号化サポートはオプションであり、**load add** コマンドを使用して、ソフトウェア・ロードに追加する必要があります。102ページの『Load』を参照してください。

Packets

現行のポイント・ポイント・インターフェースを介して送信 (out) および受信 (in) された IP パケットの合計数を示します。

Octets

現行 IP コネクションを介して送受信されたデータ・バイトの合計オクテット数を示します。

Encrypted Octets

このインターフェースで送受信された、暗号化されたオクテット数を示します。

Discarded Packets

正常に復号できないために廃棄されたパケットの数を示します。

Prot Rejects

現行のポイント・ポイント・インターフェースを介して送受信されたプロトコル・リジェクト・パケットの合計数を示します。

mppe Microsoft PPP 暗号化 (MPPE) 構成の暗号化データ統計を表示します。

例 :

```
list mppe
MPPE Statistic      In      Out
-----
Encrypted Octets :   0        0
Encrypted Packets :   0        0
Discarded Packets:   0        0
```

spap Shiva パスワード認証プロトコルの統計をリストします。

例 :

```
list spap
SPAP Statistic      In      Out
-----
Packets:            0        0
Octets:              0        0
Requests:            0        0
Acks:                0        0
Naks:                0        0
Dialbacks:           0        0
PleaseAuthenticates: 0        0
Change Passwords:   0        0
Alerts:              0        0
MCCP Call Regs      0        0
MCCP Callbacks      0        0
MCCP ACKs            0        0
MCCP NAKs            0        0
```

Packets

送受信された SPAP パケットの合計数

Octets

このパケットで送信または受信されたデータのバイト数

PPP インターフェース (Talk 5) の監視

Requests

送受信された SPAP 『Request』 パケットの数。これらは、SPAP の名前 / パスワードの対を含むパケットです。

Acks SPAP 要求に対して送受信された Acks (成功応答) の数 (たとえば、ピアが有効な要求パケットを送信すると、ルーターは Acks で応答します)。

Naks SPAP 要求に対して送受信された Naks の数 (たとえば、ピアが無効な要求パケットを送信すると、ルーターは Nak で応答します)。

Dialbacks

1 ユーザーが次のことを行った回数

- コールバック (ローミング・コールバック) を要求して、それが与えられた。
- ダイヤルインし、必須コールバック用に構成されていたので、ユーザー・プロファイルに保管されていた事前決定の番号でコールバックした。

PleaseAuthenticates

このインターフェースで送受信された SPAP please authenticate (認証要請) パケットの数。SPAP please authenticate (認証要請) パケットは、相手側が SPAP authenticate request (認証要求) を送信するのを待っているときの、タイムアウトの結果として送信されます。

Change Passwords

このインターフェースで送受信されたパスワード変更要求の数

Alerts 送受信された SPAP バナーの数

MCCP Call Reqs

2 番目の MP リンクにダイヤルするために送信側が別の電話番号を要求したことを示します。

MCCP Callbacks

2 番目の MP リンクを確立するために、送信側がコールバックされる電話番号を与えたことを示します。

MCCP ACKs

MCCP によって送受信された肯定応答の数

MCCP NAKs

MCCP によって送受信された否定応答の数

ccp 圧縮制御プロトコルの統計をリストします。

例 :

```
list ccp
CCP  Statistic      In      Out
-----
Packets:           24      25
Octets:            174     177
Reset Reqs:         0        0
Reset Acks:         0        0
Prot Rejects:      0        0
```

Packets

このインターフェースで送受信されたパケットの数を示します。

Octets

このインターフェースで送受信されたオクテット数を示します。

Reset Reqs

送信または受信された CCP ディクショナリー 『リセット要求』 の数

Reset Acks

送信または受信された CCP ディクショナリー 『リセット確認』 の数

リセット要求およびリセット確認パケットは、リンクの各端でデータ・ディレクトリーの同期を維持するために、各端の CCP エンティティ間で渡される制御パケットです。

Prot Rejects

ピアによって送信された CCP パケットのプロトコル・リジェクトの数を示します (プロトコル・リジェクトの受信は、ピアが CCP をサポートしないことを意味しています)。

cdp このインターフェースで送信または受信された圧縮データ・パケットに関連する統計を表示します。

例 :

```
list cdp
Compression Statistic      In                Out
-----
Packets:                   31035            46550
Octets:                    1614885         2421137
Compressed Octets:        931416
Incompressible Packets:    0
Discarded Packets:        0
Copied Packets:           1
Prot Rejects:              0
Compressor (transmit) statistics:
  Recent compression ratio: 1.7:1
Decompressor (receive) statistics:
  Recent compression ratio: 1.7:1
```

Packets

これらのカウンターは、送受信された圧縮データグラムの数を示します。出力側では、カウントには実際に PPP 圧縮データグラムとして送信されたパケットのみが含まれます。圧縮不能であることが検出され、元の未圧縮の形で送信されたパケットは含まれません。

これらのカウンターは、送信または受信された PPP プロトコル・タイプ X'00FD' (CDP) のパケットをカウントします。STAC 拡張モードまたは MPPC が交渉された場合、圧縮不能パケットを CDP データグラムにカプセル化することができます。このカプセル化の場合は、圧縮不能パケットもこれらのカウントに含まれます。

Octets

これらのカウンターは、圧縮された形で有効に送信または受信されたバイト数を示します。これらのカウントは、圧縮前または解凍後の元のデータグラムの長さを反映します。

Compressed octets

これらのカウンターは、送受信されたすべての圧縮データグラムのバイト数を示します。これらのカウントは、圧縮後または解凍前の実際の CDP パケットの長さです。

PPP インターフェース (Talk 5) の監視

Incompressible packets

これらのカウンターは、圧縮不能であったために元の未圧縮の形で送信されたパケットの数を示します。

Discarded packets

これらのカウンターは、正常に解凍できなかつたために廃棄されたパケットの数を示します。通常、これらのパケットは、ルーターがリセット要求を送信した直後、ただしピアがそのリセット要求を受信して処理する前に、ピアが送信したパケットです。また、ルーターがパケット内のデータに誤りを検出した場合も、パケットは廃棄されます。データの誤りの一例は、不正なシーケンス番号が入っているパケットです。

廃棄されたパケット数が急増する場合は、おそらく伝送路のノイズまたはリンク性能の低下が原因で、パケットが失われているか、破壊されています。

Protocol rejects

このカウンターは、ピアから受信した CDP パケットのプロトコル・リジェクトの数を示します。このカウントはゼロでなければなりません。圧縮の使用が交渉済みでなければ、リンクは CDP パケットを送信しないからです。

Compression ratios

比率は、圧縮器または解凍器の概略の効率を表示します。これらの比率は、テキスト・バイト数を対応する圧縮バイト数で割った値に基づいているので、入力側と出力側の両方とも、1 より大きい値が望まれます。数値が高いほど、圧縮効果が高くなります。

出力比率は、元のテキスト・バイト数を圧縮を試みた結果として送信された (パケットが実際に圧縮されたか、あるいは CDP パケットとして送信された) バイト数で割った比率として計算されます。データ・ストリームが十分に圧縮されず、ほとんどのパケットが元の形あるいは拡大 CDP パケットで送信される場合には、圧縮出力比率は低下します。比率が 1.0 以下に低下する場合は、圧縮器は実際には伝送路の有効帯域幅を増やすどころか、減らしていることになるので、この状態が長く続く場合は、そのインターフェース上の圧縮を使用不可にすべきです。

入力比率は、CDP フレームで受信したバイト数を解凍されたバイト数で割って計算されます。出力比率とは異なり、このカウントには圧縮不能のためテキスト形式で送信されたパケットは含まれません。これはルーターが、受信した非 CDP パケットは、ピアがテキスト形式で送信した圧縮不能パケットであるのか、単にピアが圧縮を試みなかったパケットであるのかを判別できないからです。

この計算方法のため、リンクの一端の出力比率は、必ずしも他端の入力比率と一致していません。

compression

このコマンドは `list cdp` と同じ情報を表示します。

PPP インターフェース (Talk 5) の監視

bcp ブリッジング制御プロトコルの統計をリストします。これらのフィールドは、**list ip** コマンドの項で説明したのと同じです。(644ページの『ip』を参照してください。)

例 :

```
list bcp
BCP Statistic          In          Out
-----
Packets:               0           0
Octets:                0           0
Prot Rejects:         0           -
```

brg PPP インターフェースを介して送受信されたブリッジ・パケットに関する統計をリストします。これらのフィールドは、**list ip** コマンドの項で説明したのと同じです。(644ページの『ip』を参照してください。)

例 :

```
list brg
BRG Statistic          In          Out
-----
Packets:               0           0
Octets:                0           0
Prot Rejects:         0           -
```

stp スパニング・ツリー・プロトコルの統計をリストします。これらのフィールドは、**list ip** コマンドの項で説明したのと同じです。(644ページの『ip』を参照してください。)

例 :

```
list stp
Spanning Tree Statistic In          Out
-----
Packets:               0           0
Octets:                0           0
```

nbcip ポイント・ポイント・インターフェースの NetBIOS 制御プロトコルの統計をリストします。これらのフィールドは、**list ip** コマンドの項で説明したのと同じです。(644ページの『ip』を参照してください。)

例 :

```
list nbcip
NBCIP Statistic       In          Out
-----
Packets:              0           0
Octets:               0           0
Prot Rejects:        0           -
```

nbfcp ポイント・ポイント・インターフェースの NetBIOS フレーム制御プロトコルの統計をリストします。これらのフィールドは、**list ip** コマンドの項で説明したのと同じです。(644ページの『ip』を参照してください。)

例 :

```
list nbfcp
NBFCP Statistic       In          Out
-----
Packets:              0           0
Octets:               0           0
Prot Rejects:        0           -
```

ipcp ポイント・ポイント・インターフェースのインターネット・プロトコル制御プロトコルの統計をリストします。これらのフィールドは、**list ip** コマンドの項で説明したのと同じです。(644ページの『ip』を参照してください。)

例 :

PPP インターフェース (Talk 5) の監視

```
list ipcp
IPCP STATISTIC      IN      OUT
-----
PACKETS:            0        0
OCTETS:             0        0
PROT REJECTS:      0
```

ip ポイント・ポイント・リンクを経由する IP パケットに関するすべての情報をリストします。

例 :

```
list ip
IP Statistic        In      Out
-----
Packets:            349    351
Octets:             128488 129412
Prot Rejects:       0      -
```

Packets

現在のポイント・ポイント・インターフェースを介して送信 (out) および受信 (in) された IP パケットの合計数を示します。

Octets

現在の IP コネクションを介して送受信されたオクテットの合計数を示します。

Prot Rejects

現在のポイント・ポイント・インターフェースを介して送受信されたプロトコル・リジェクト・パケットの合計数を示します。

ipv6cp

ポイント・ポイント・インターフェースのインターネット・プロトコル・バージョン 6 制御プロトコルの統計をリストします。これらのフィールドは、**list ip** コマンドの項で説明したのと同じです。(『ip』を参照してください。)

例 :

```
list ipv6cp
IPv6CP STATISTIC   IN      OUT
-----
PACKETS:           0        0
OCTETS:            0        0
PROT REJECTS:     0
```

ipv6 ポイント・ポイント・リンクを経由する IPv6 パケットに関するすべての情報をリストします。これらのフィールドは、**list ip** コマンドの項で説明したのと同じです。(『ip』を参照してください。)

例 :

```
list ipv6
IPv6 Statistic     In      Out
-----
Packets:           0        0
Octets:            0        0
Prot Rejects:     0
```

ipxcp IPX 制御プロトコルの統計をリストします。これらのフィールドは、**list ip** コマンドの項で説明したのと同じです。(『ip』を参照してください。)

例 :

```
list ipxcp
IPXCP Statistic    In      Out
-----
```


PPP インターフェース (Talk 5) の監視

```
Packets:          0          0
Octets:           0          0
Prot Rejects:    0          -
```

ipx ポイント・ポイント・インターフェースの IPX 統計をリストします。これらのフィールドは、**list ip** コマンドの項で説明したのと同じです。(644ページの『ip』を参照してください。)

例 :

```
list ipx
IPX Statistic      In      Out
-----
Packets:          0        0
Octets:           0        0
Prot Rejects:    0        -
```

atcp AppleTalk 制御プロトコルの統計をリストします。これらのフィールドは、**list ip** コマンドの項で説明したのと同じです。(644ページの『ip』を参照してください。)

例 :

```
list atcp
ATCP Statistic    In      Out
-----
Packets:          0        0
Octets:           0        0
Prot Rejects:    0        -
```

ap2 ポイント・ポイント・インターフェースの AppleTalk フェーズ 2 の統計をリストします。これらのフィールドは、**list ip** コマンドの項で説明したのと同じです。(644ページの『ip』を参照してください。)

例 :

```
list ap2
AP2 Statistic     In      Out
-----
Packets:         349      351
Octets:        128488  129412
Prot Rejects:    0
```

dncp DECnet 制御プロトコル・パケットに関する統計をリストします。これらのフィールドは、**list ip** コマンドの項で説明したのと同じです。(644ページの『ip』を参照してください。)

例 :

```
list dncp
DNCP Statistic    In      Out
-----
Packets:          0        0
Octets:           0        0
Prot Rejects:    0        -
```

dn PPP インターフェースを介して送受信された DECnet パケットに関する統計をリストします。これらのフィールドは、**list ip** コマンドの項で説明したのと同じです。(644ページの『ip』を参照してください。)

例 :

```
list dn
DN Statistic      In      Out
-----
Packets:          0        0
Octets:           0        0
Prot Rejects:    0        -
```

osicp OSI 制御プロトコルの統計をリストします。これらのフィールドは、**list ip** コマンドの項で説明したのと同じです。(644ページの『ip』を参照してください。)

PPP インターフェース (Talk 5) の監視

例 :

```
list osicp
OSICP Statistic      In      Out
-----
Packets:             0        0
Octets:              0        0
Prot Rejects:       0        -
```

osi PPP インターフェースを介して送受信された OSI パケットに関する統計をリストします。これらのフィールドは、**list ip** コマンドの項で説明したのと同じです。(644ページの『ip』を参照してください。)

例 :

```
list osi
OSI Statistic      In      Out
-----
Packets:           0        0
Octets:            0        0
Prot Rejects:     0        -
```

bvcp Banyan VINES 制御プロトコルに関する統計をリストします。これらのフィールドは、**list ip** コマンドの項で説明したのと同じです。(644ページの『ip』を参照してください。)

例 :

```
list bvcp
BVCP Statistic      In      Out
-----
Packets:            0        0
Octets:            0        0
Prot Rejects:     0        -
```

vines PPP インターフェースを介して送受信された Banyan VINES パケットに関する統計をリストします。これらのフィールドは、**list ip** コマンドの項で説明したのと同じです。(644ページの『ip』を参照してください。)

例 :

```
list vines
Vines Statistic      In      Out
-----
Packets:           10       13
Octets:           320     340
Prot Rejects:     0        -
```

isrcp APPN ISR 制御プロトコル・パケットの統計をリストします。これらのフィールドは、**list ip** コマンドの項で説明したのと同じです。(644ページの『ip』を参照してください。)

例 :

```
list isrcp
APPN ISRPC Statistic In      Out
-----
Packets:            3        3
Octets:            12       12
Prot Rejects:     0        -
```

isr PPP インターフェースを介して送受信された APPN ISR パケットに関する統計をリストします。これらのフィールドは、**list ip** コマンドの項で説明したのと同じです。(644ページの『ip』を参照してください。)

例 :

```
list isr
APPN ISR Statistic  In      Out
-----
Packets:           220     219
Octets:          1266    1157
Prot Rejects:     0        -
```

PPP インターフェース (Talk 5) の監視

hprcp APPN HPR 制御プロトコル・パケットの統計をリストします。これらのフィールドは、**list ip** コマンドの項で説明したのと同じです。(644ページの『ip』を参照してください。)

例 :

```
list hprcp
APPN HPRCP Statistic      In          Out
-----
Packets:                  3           3
Octets:                   12          12
Prot Rejects:             0           -
```

hpr PPP インターフェースを介して送受信された APPN HPR パケットに関する統計をリストします。これらのフィールドは、**list ip** コマンドの項で説明したのと同じです。(644ページの『ip』を参照してください。)

例 :

```
list hpr
APPN HPR Statistic        In          Out
-----
Packets:                   780         715
Octets:                   131907      69685
Prot Rejects:              0           -
```

LLC

LLC コマンドは、LLC 監視プロンプトにアクセスする場合に使用します。LLC コマンドは、この新たに表示されたプロンプトで入力します。各コマンドについての説明は、259ページの『LLC 監視コマンド』を参照してください。

注: このコマンドは、ソフトウェア・ロードに APPN が含まれている場合にのみ表示されます。

構文 :

llc

ポイント・ポイント・プロトコル・インターフェースと GWCON インターフェース・コマンド

PPP インターフェース・トラフィックは、基礎のデータ・リンク・レベルの装置ドライバーによって伝送されます。PPP リンクの監視時に役立つ可能性がある追加統計については、GWCON 環境から **interface** コマンドを使用して表示される装置ドライバー統計から得られる場合があります。(interface コマンドについて詳しくは、117ページの『第10章 操作/監視プロセス (GWCON - Talk 5) とコマンド』を参照してください。)

この節に示す統計は、ポイント・ポイント構成で使用される以下のインターフェースについて、GWCON 環境 (talk 5) から **interface** コマンドを実行すると表示されます。

例 :

```
+ interface 12
Net Net' Interface Slot-Port          Self-Test Self-Test Maintenance
 12 12  PPP/0      Slot: 8 Port: 2          Passed   Failed   Failed
                                2         1         0
```

PPP インターフェース (Talk 5) の監視

Point to Point MAC/data-link on V.35/V.36 interface

Adapter cable: V.35 DTE

V.24 circuit: 105 106 107 108 109
Nicknames: RTS CTS DSR DTR DCD
PUB 41450: CA CB CC CD CF
State: ON ON ON ON ON

Line speed: 64.000 Kbps
Last port reset: 1 hour, 20 minutes, 42 seconds ago

Input frame errors:
CRC error 0 alignment (byte length) 0
missed frame 182 too long (> 2062 bytes) 0
aborted frame 0 DMA/FIFO overrun 0
Output frame counters:
DMA/FIFO underrun errors 0 Output aborts sent 0

Net 初期構成中にソフトウェアによって割り当てられるインターフェース番号

Net' 初期構成中にソフトウェアによって割り当てられる基本インターフェース番号

注: ダイヤル回線インターフェースの場合、Net' は Net と異なります。ダイヤル回線インターフェースの場合、Net' は、ダイヤル回線が使用する基本インターフェース (ISDN または V.25bis) を示します。

Interface No

インターフェースのタイプおよびそのインスタンス番号。ポイント・ポイント・インターフェース・タイプは PPP です。

Slot PPP が稼働しているインターフェースのスロット番号

Port PPP を実行しているインターフェースのポート番号

Self-Test: Passed

ポイント・ポイント・インターフェースがそれ自体を渡した回数の合計

Self-Test: Failed

ポイント・ポイント・インターフェースがその自己テストに失敗した回数の合計

Maintenance: Failed

保守障害の合計数

Adapter cable

構成されたアダプター・ケーブルのタイプ (たとえば、V.35 DTE)

V.24 circuit

V.24 で使用される回線。注: 監視出力に記号 - - - が現れている場合は、値または状態が不明であることを示します。

Nicknames

制御信号。注: 監視出力に記号 - - - が現れている場合は、値または状態が不明であることを示します。

PUB 41450

ピン割り当て。注: 監視出力に記号 - - - が現れている場合は、値または状態が不明であることを示します。

State V.24 回線の状態 (オンまたはオフ)。注: 監視出力に記号 - - - が現れている場合は、値または状態が不明であることを示します。

Line speed

構成済みの回線速度または前提とされるデフォルト値 (回線速度が 0 に構成されている場合)。

Last port reset

ポートのリセット以降の時間の長さ

CRC error

チェックサム誤りが含まれているために廃棄された受信パケットの数

Alignment (byte length)

受信されたが、長さが 8 ビットの偶数倍でなかったため廃棄されたパケットの数

Too long (> 2048 bytes)

受信されたが、構成済みフレーム・サイズより大きかったために廃棄されたパケットの数。

Aborted frame

受信されたが、送信側が放棄したか、伝送路誤りのため放棄されたパケットの数

DMA/FIFO overrun

シリアル・インターフェースがシステム・パケット・バッファ・メモリーにデータを送信する速度が遅かったために、データをネットワークから受信できなかった回数

Missed frame

フレームが装置に到着したときに利用可能なバッファがない場合、ハードウェアはそのフレームを廃棄し、紛失フレーム・カウンターを増分します。

L & F bits not set

シリアル・インターフェース上で、ハードウェアは到着するフレームの入力記述子情報をセットします。バッファが到着したフレーム全体を受け入れることができる場合、ハードウェアはそのフレームの最後のビットと最初のビットの両方をセットして、バッファが完全なフレームを受け入れたことを示します。いずれかのビットがセットされていない場合、パケットは廃棄され、L & F bits not set カウンターが増分され、バッファは消去されて再利用できるようになります。

注: L & F bits not set カウンターがトラフィックによる影響を受けるとは考えられません。

出力フレーム・カウンター :

DMA/FIFO underrun errors

シリアル・インターフェースがシステム・パケット・バッファ・メモリーからデータを十分に速く検索できなかったために、データをネットワークに伝送できなかった回数。

Output aborts sent

高位レベルのソフトウェアの要求によって打ち切られた伝送の数

GWCON 環境から **interface** コマンドを実行すると、PPP ダイアル回線に関して次のような統計が表示されます。

PPP インターフェース (Talk 5) の監視

```
+interface 29
Net Net' Interface          Self-Test Self-Test Maintenance
29 10  PPP/20              Passed      Failed    Failed
                               2           1         0
Point to Point MAC/data-link on V.25bis Dial Circuit interface
```

第41章 マルチリンク PPP プロトコルの使用

この章では、マルチリンク PPP プロトコル (MP) の使用方法について説明します。この章は以下の節に分かれています。

- 652ページの『MPの考慮事項』
- 653ページの『マルチシャシー MP』
- 653ページの『マルチリンク PPP インターフェースの構成』

マルチリンク PPP プロトコルによって以下の帯域幅を増加することができます。

- PPP 専用回線 (チャンネル化回線および I43x ISDN 回線を含む)
- PPP ISDN ダイヤル回線
- PPP V.25bis ダイヤル回路
- PPP レイヤー 2 トンネル伝送回線

複数のリンクで構成されるバーチャル・リンクを定義することにより、帯域幅を増やすことができます。得られる MP バンドルの帯域幅は、個々のリンクの帯域幅の合計にほぼ等しくなります。この方式の利点は、単一リンクを介して転送される大きなデータ・パケットを分割して複数のリンクを介して転送し、受信側ステーションで再び組み立てることができることです。MP は、帯域幅割り当てプロトコルと帯域幅割り当て制御プロトコルの両方を使用して、PPP ダイヤル回線をバーチャル・リンクに追加したり、バーチャル・リンクから除去したりします。MP はまた、また、帯域幅オンデマンド (BOD) を使用して『専用』MP ダイヤル・リンクを既存のバンドルに追加します。

MP リンクには、2 つのタイプがあります。すなわち、専用のものと、単に使用可能にされるものです。専用 MP リンクは、特定の MP インターフェースへのリンクとして構成されている、MP が使用可能にされたインターフェースです。このダイヤル回線は、別の MP バンドルに結合しようとした場合、あるいは MP がまったくネゴシエーションされていない場合、ソフトウェアはリンクを終了します。レイヤー 2 トンネル伝送インターフェースを除くすべての PPP リンクは、専用 MP リンクと同様に構成できます。PPP 専用リンクは、専用 MP リンクと同様に構成する必要があります。

PPP ダイヤル回線およびレイヤー 2 トンネル伝送は、使用可能にされた MP と同様に構成できます。専用ではない、MP が使用可能にされたダイヤル回線は、任意の MP バンドル内のリンクにすることができます。MP がネゴシエーションされていない場合、リンクは、そのリンクの構成済みプロトコルを使用して、独立したインターフェースとして稼働します。

複数の PPP ダイヤル回線からなるマルチリンク PPP インターフェースを、MP バンドルの一部として構成することができます。

MP インターフェースにも 2 種類あります。すなわち、専用リンクを持っているものと、持っていないものです。以下の状況のいずれの場合も、MP インターフェースには専用リンクが必要です。

- リンクがその MP インターフェース専用である。

MP の使用

- MP インターフェースがアウトバウンド・コール用に構成されている。この場合、専用リンクには、あて先の電話番号とコーラー ID を構成する必要があります。
- MP インターフェースが、特定のインバウンド・コールを受信するように構成されている。この場合、専用リンクにはインバウンドあて先の電話番号とコーラー ID を構成する必要があります。
- MP インターフェースがアウトバウンド認証を行う必要がある。この場合、すべてのリンクが同じ認証名を使用します。

専用リンクを持たない MP インターフェースは、インバウンド専用インターフェースでなければなりません。これらのインターフェースは、インバウンド・ダイヤル回線に似ています。

帯域幅割り当てプロトコル (BAP) およびその制御プロトコル (BACP) を用いて、MP インターフェースは、ダイヤル回線を追加したり除去したりして、その帯域幅を増やしたり減らしたりすることができます。帯域幅使用率アルゴリズムがバンドルにリンクを追加する必要があると判断した場合、利用可能な PPP ダイヤル回線があり、またピアの合意がある場合には、追加の発信コールがなされます。

BAP は最初に、その MP インターフェースにアイドル状態の専用 PPP ダイヤル回線がないか探し、次に MP が使用可能にされている PPP ダイヤル回線を探します。しかし、別の MP 回線の専用 PPP ダイヤル回線は使用しません。MP インターフェースに構成されているリンクの最大数を超えることはありません。

BOD は、専用 MP ダイヤル・リンクを既存のバンドルに追加する必要がある場合、構成済みダイヤル回線電話番号を使用してコールを発信します。リンクは、必要な場合、ポーリング期間中に 1 回に 1 つずつバンドルに追加されます。BOD はまず任意の PPP シリアル・リンクをバンドルに追加し、バンドルの存続中、そのシリアル・リンクを保存します。BOD はダイヤル・リンクだけを除去します。

MP は、以下の機能をサポートします。

- BRS
- WRR
- WRS
- ダイヤル・オンデマンド
- DIALs

ただし、WRS、ダイヤル・オンデマンド、および DIALs は、ダイヤル回線を含む MP バンドルでのみサポートされます。

MPの考慮事項

MP バンドルを構成するときは、次のことを念頭に入れてください。

- 『専用』回線をもつ混合ダイヤル回線は、ソフトウェアにバンドル上の BAP を使用不可にさせ、代わりに BOD を使用する。BOD をバンドルの管理に使用したい場合、『専用』回線をもつ混合ダイヤル回線のみが可能です。
- PPP 『専用』回線またはレイヤー 2 トンネル伝送回線のいずれかを含む MP バンドルの場合、ダイヤル・オンデマンドまたは WRS は使用できない。
- PPP 『専用』回線を含むバンドルでは、DIALs は使用できない。

- MP バンドルを結合するすべての装置では、リンク速度を構成しておく必要がある。

重要:

1. 極度に異なる特性をもつ媒体を使用してバンドルを構成してはならない。たとえば、HSSI リンクと V.25bis リンクを含むバンドルを構成しても、バンドルを有効に利用できません。最大のリンクでも、最小のリンクの能力の 4 倍しかありません。MP バンドル内のリンクの速度が著しく異なる場合は、もっとも速いリンクに受信バッファを追加する必要があることがあります。
2. ISDN B チャネルを速度の遅い媒体に組み込む場合、ISDN バッファの数を増やす必要があることがあります。ISDN B チャネルを速度の遅いリンクに組み込むことは、ISDN 1 次の場合には推奨できません。

マルチシャシー MP

複数の物理ネットワーク・アクセス・サーバーに及ぶフォーン・ハント・グループを含んだレイヤー 2 トンネルとの MP バンドルは、マルチシャシー MP と呼ばれています。マルチシャシー MP は、レルムまたはユーザー・ベースのトンネル伝送 (機構の使用と構成) 中の『ローカルまたはリモート認証の使用』を参照) を使用して MP エンドポイントあて先を確立します。L2TP の詳細については、機構の使用と構成) 中の『レイヤー 2 トンネル伝送プロトコル (L2TP)』を参照してください。

マルチリンク PPP インターフェースの構成

MP インターフェースの構成は、MP バンドルで使用されるインターフェースのタイプに左右されます。以下の節では、さまざまな構成の例を挙げます。

MP インターフェースを構成した後で、帯域幅オンデマンド (BOD) を構成することができます。次の例では、既存の MP インターフェース 17 に BOD を構成しています。

```
Config> net 17
MP config: 17> enable bod
Enable BAP? [N]

MP config: 17> set bandwidth-on-demand parameters
Add bandwidth % [90]:
Drop bandwidth % [70]:
Bandwidth test interval (sec) [15]

MP config: 17>
```

PPP ダイアル回線での MP の構成

この節では、2 つの ISDN ダイアル回線をもつマルチリンク PPP インターフェースの例を使用して、マルチリンク PPP インターフェースを構成する方法を示します。

1. 2 つのダイアル回線とマルチリンク PPP インターフェースを追加する。

```
*t 6

Config>add dev dial-circuit
Adding device as interface 7
Defaulting Data-link protocol to PPP
Use "net 7" command to configure circuit parameters
Config>add dev dial-circuit
Adding device as interface 8
```

```
Defaulting Data-link protocol to PPP
Use "net 8" command to configure circuit parameters
Config>add dev multilink-ppp
Enter the number of multilink PPP interfaces [1]?
Adding device as interface 9
Defaulting Data-link protocol to PPP
Use "net intf" command to configure circuit parameters
Config>
```

2. 各 PPP ダイアル回線を構成する。(759ページの『第50章 ダイアル回線の構成と監視』を参照してください。)この例では、あて先、コールの方向、および LID は、ダイアル回線の 1 つに設定されています。

```
Config>net 7
Circuit configuration
Circuit config: 7>set dest out
Circuit config: 7>set calls outbound
Circuit config: 7>set net 6
Circuit config: 7>
```

3. 次のように入力して、MP 用に使用する各ダイアル回線上の MP を使用可能にする。

```
Circuit config: 7>encapsulator
Point-to-Point user configuration
PPP 7 Config>enable mp

Enabled as a Multilink PPP Link,
Use as a dedicated Multilink PPP link? [No]: yes
Multilink PPP net for this Multilink PPP link [1]? 9
NOTE: PPP configuration will be obtained from the Multilink PPP
net. It is NOT necessary to configure PPP for this net!
```

注: このプロンプトからは、専用リンクの PPP パラメーターを構成することはできません。専用リンクは、既存の MP インターフェースの PPP 構成を使用します。

質問 『Use as a dedicated Multilink PPP link?』 に対して 『Yes』 と応答すると、そのリンクは指定されたマルチリンク PPP インターフェース (この例では 9) の専用になります。この場合、このリンクは MP バンドル用に使用する**必要**があり、指定された MP インターフェースに結合する**必要**があります。このリンクは、通常の PPP ダイアル回線として使用することはできません。

『Use as a dedicated Multilink PPP link?』 に対して 『No』 と応答すると、この PPP ダイアル回線は任意の MP インターフェースに結合することができます。少なくとも 1 つの PPP ダイアル回線を、アウトバウンド MP インターフェースへの専用リンクにする**必要**があります。

専用 PPP ダイアル回線は、すべての PPP パラメーター (LCP オプション、認証、その他) を、その MP インターフェースから入手します。同じ MP バンドルに結合されている MP 使用可能 PPP ダイアル回線は、同じ LCP パラメーターおよび認証名をネゴシエーションする**必要**があります。

4. MP インターフェースを構成する。プロトコル BAP、BRS、WAN 復元、WAN 再ルート、およびダイアル・オンデマンドはすべて、PPP ダイアル回線ではなく、MP インターフェース上で実行されます。

PPP シリアル・リンクでの MP の構成

PPP シリアル・リンクで MP を構成する場合、**net** コマンドを使用して、インターフェース上で MP を使用可能にします。リンクは、MP ネットからその PPP 構成を入手します。

例 :

```
Config>net 1
PPP 1 Config> enable MP

Multilink PPP net for this Multilink PPP link [1]? 8
NOTE: PPP configuration will be obtained from the Multilink PPP
      net. It is NOT necessary to configure PPP for this net!
PPP 1 Config>
```

レイヤー 2 トンネル伝送ネットでの MP の構成

MP を L2TP ネットで構成する場合、L2TP カプセル化機能を通じて MP を使用可能にします。次に、単一バンドルに結合するすべてのネットに関する情報について、同じ PPP ネゴシエーション・パラメーターを構成する必要があります (機構の使用と構成の中の『L2TP の構成』を参照してください)。

例 :

```
Config> feature layer-2-tunneling
Layer-2-Tunneling Config> encapsulator
PPP-L2TP Config> enable mp

NOTE: It IS necessary to configure PPP for this net! PPP
      negotiation parameters must be configured the same for
      all nets wishing to join the same Multilink PPP bundle.
PPP-L2TP Config>
```

マルチシャシー MP の構成

マルチシャシー MP の MP を構成するには、マルチシャシー MP に DIALs 機能を構成します。ソフトウェアは、使用するエンドポイント判別プログラムを入力するようプロンプト指示します。

例 :

```
Config> feature DIALs
DIALs Config> set multi-chassis-mp
      Enter Endpoint Discriminator to use from stacked group (0 for box S/N): 2345
DIALs Config>
```

下記の例は、ポート RTR-2 および RTR-3 がハント・グループ内にあるときの、マルチシャシー MP を示します。

MP の使用

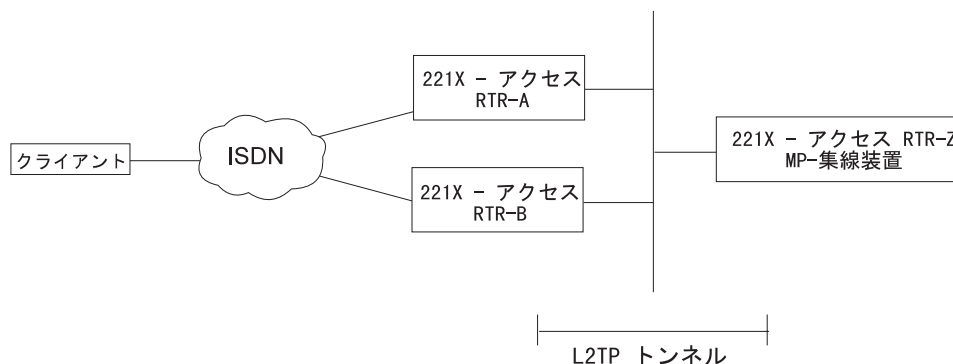


図47. マルチシャシー MP

アクセス・ルーターと MP コンセントレーターとの間には多対多の関係があるため、すべてのアクセス・ルーター (RTR-A、RTR-B) は、『MP コンセントレーター』ルーター (RTR-Z) とは別の管理ドメインに保持する必要があります。リモート認証 (つまり RADIUS) を使用したい場合には、2 つの RADIUS サーバー (1 つはアクセス・ルーター用で、もう 1 つは MP コンセントレーター用) が必要になるため、以上が適用されます。ローカル・リストを使用している場合は、すでに別個の管理ドメインを使用しています。

このシナリオでは、PPP ユーザー名または "rhelm"(レルム) 名を基にトンネルを選択できます。レルム・ベースのトンネル伝送の方が規則が緩やかです。考えかたとしては、RTR-A および RTR-B の両方で RTR-Z のトンネル・プロファイルを構成することです。これらのルーターでは追加の PPP ユーザーは不要です。RTR-Z には、2 つのトンネル・プロファイル (1 つは RTR-A 用、1 つは RTR-B 用) と PPP ユーザー名 (<username>@RTRZの形式) がそれぞれの予想されるユーザーごとに必要となります。『アクセス』ルーターでは、すべてのダイヤルイン回線が構成されます。『MP コンセントレーター』には、レイヤー 2 トンネル伝送装置とマルチリンク PPP 装置が必要になります。

以上で、マルチシャシー MP を『静的に構成した』ことになります。つまり、MP バンドル・ヘッドとトンネルを必要に応じて動的に検出する追加のプロトコルをサポートするのではなく、特定の PPP ユーザー名が事前構成されたルーター上で常に MP を終了させるということです。こうしたネットワークを実現すると、バンドル内のリンクごとに異なる媒体タイプを使用する場合 (たとえば、1 つのリンクはトンネルし、他のリンクはそうしない)、クライアント PPP ネゴシエーションの特異性を避けるのにも役立ちます。たとえば、DIALs クライアントはどの時点でも LCP ネゴシエーションができません。また、Microsoft DUN クライアントも完全には LCP 再ネゴシエーションをサポートしません。

第42章 マルチリンク PPP プロトコル (MP) の構成と監視

この章では、装置内に特定のマルチリンク PPP インターフェースを構成する方法について説明します。本章には、以下の節が含まれています。

- 『MP 構成プロンプトへのアクセス』
- 『マルチリンク PPP インターフェースの MP 構成コマンド』
- 661ページの『MP インターフェース状態の監視』
- 661ページの『MP 監視コマンドへのアクセス』
- 661ページの『マルチリンク PPP プロトコル監視コマンド』

MP 構成プロンプトへのアクセス

MP config> プロンプトへのアクセス手順は、次のとおりです。

1. * プロンプトで **talk 6** と入力する。
2. **net n** と入力する。ただし n は、MP を使用可能にしたダイヤル回線または MP インターフェースの番号です。

注: ここでは、マルチリンク PPP インターフェースを構成するのであり、MP バンドルの一部である PPP ダイヤル回線を構成するものではありません。

マルチリンク PPP インターフェースの MP 構成コマンド

表78 は、MP config > プロンプトで利用可能なコマンドをリストしています。

表 78. MP 構成コマンド

コマンド	機能
? (Help)	このコマンド・レベルで使用可能なコマンドをすべて表示するか、特定のコマンドに関するオプション (ただし、選択可能な場合) をリストします。12ページの『ヘルプを得る』を参照してください。
Disable	オンデマンドの帯域幅ネゴシエーションを使用不可にします。
Enable	オンデマンドの帯域幅ネゴシエーションを使用可能にします。
Encapsulator	PPP config > プロンプトに入り、データ・リンク・プロトコル構成を変更できるようにします。
List	MP インターフェース構成パラメーターを表示します。
Set	MP インターフェースをインバウンドまたはアウトバウンド・トラフィック用に構成します。アイドル・タイムアウトやその他の MP および BAP パラメーターを設定することもできます。
Exit	直前のコマンド・レベルに戻ります。13ページの『下位レベル操作環境を終了する』を参照してください。

Disable

disable コマンドは、帯域幅オンデマンド (BOD) のネゴシエーションを使用不可にするのに使用します。BOD を使用不可にすると、リンクが追加帯域幅を必要に応じて割り振るのを防止します。

MP の監視

構文 :

disable bod

Enable

enable コマンドは、BOD のネゴシエーションを使用可能にするのに使用します。BOD を使用可能にすると、リンクは必要なときに追加帯域幅を割り振ることができます。

構文 :

enable bod

Encapsulator

encapsulator コマンドは、マルチリンク PPP インターフェースの PPP リンク・レイヤー構成にアクセスするのに使用します。

構文 :

encapsulator

例 :

```
encapsulator
Point-to-Point user configuration
PPP config>
```

List

list コマンドは、現行の MP 構成を表示するのに使用します。

構文 :

list

例 :

```
list
Idle timer = 0 (fixed circuit)
Outbound calls = allowed
Dialout MP Link net = 7
Max fragment size = 750
Min fragment size = 375
Maximum number of active links = 2
Links associated with this MP bundle:
net number 7
net number 8
BAP enabled
Add bandwidth percentage = 90
Drop bandwidth percentage = 70
Bandwidth test interval (sec) = 15
```

Idle timer

この回線のアイドル・タイマーの設定値 (秒)

設定値 0 は、固定回線を示します。設定値が非ゼロの場合は、回線が指定された秒数の間アイドル状態であるとダウンになるダイヤル・オンデマンド MP 回線が構成されます。ネットワーク・トラフィックが再開されると、回線は再起動されます。

Outbound calls

インターフェースをアウトバウンド・コールを開始するために構成するかどうかを指定します。インターフェースがアウトバウンド・コールを開始できない場合、この行は表示されません。

Inbound calls

インターフェースをインバウンド・コールを開始するために構成するかどうかを指定します。インターフェースがインバウンド・コールを受け入れることができない場合は、この行は表示されません。

Max fragment size

MP リンクを介して送信するためにパケットを分割する前に、パケットに含めることができるデータの最大バイト数を指定します。

Min fragment size

これは、パケットが **Max fragment size** を超過する場合にソフトウェアが作成するフラグメントの最小サイズ (バイト) です。

Maximum number of active links

MP バーチャル・リンク (バンドル と呼ばれます) に構成できるリンクの最大数を指定します。

Links associated with this MP bundle

この MP インターフェースに専用のリンクを表示します。

BAP enabled

このインターフェース上で BAP が使用可能かどうかを指定します。

Add bandwidth percentage

BAP が使用可能の場合、ソフトウェアが新規リンクの追加を試みる際の帯域幅使用率

Drop bandwidth percentage

BAP が使用可能の場合、ソフトウェアが MP バンドルからリンクを除去する際の帯域幅使用率

Bandwidth test interval

バンドルにリンクを追加したり、除去したりする必要があるかどうかを調べるために、ソフトウェアが帯域幅使用率をチェックする時間間隔 (秒)

Set

set コマンドは、以下を構成するのに使用します。

- インバウンドまたはアウトバウンド・コールの MP インターフェース
- アイドル・タイムアウト
- MP パラメーター
- BAP パラメーター

構文 :

```
set                               bod parameters
                                     calls
                                     idle
```

mp parameters**bod parameters**

BOD 追加および除去帯域幅比率と BOD テスト間隔を指定するように求めるプロンプトを出します。

例 :

```
set bod parameters
Add bandwidth % [90]? 80
Drop bandwidth % [70]? 50
Bandwidth test interval (sec) [15]? 25
```

Add bandwidth %

ソフトウェアが新規リンクの追加を試みるときの帯域幅使用率

有効値: 1 ~ 99

デフォルト値: 90

Drop bandwidth %

ソフトウェアが MP バンドルからリンクを除去するときの帯域幅使用率

有効値: 1 ~ 99

デフォルト値: 70

Bandwidth test interval (sec)

バンドルにリンクを追加したり、除去したりする必要があるかどうかを調べるために、ソフトウェアが帯域幅使用率をチェックする時間間隔 (秒)

有効値: 10 ~ 200 秒

デフォルト値: 15

calls この MP インターフェースがアウトバウンド・コールを開始するか、アウトバウンド・コール受信専用か、あるいは両方のタイプのコールに参加するかどうかを指定します。

有効値: インバウンド、アウトバウンド、または両方

デフォルト値: インバウンド

注: アウトバウンドまたは両方を指定した場合、ソフトウェアは最初にコールする専用 MP リンクのネット番号を要求します。

例 :

```
set calls outbound
Dialout MP link net for this MP net []? 4
```

idle MP インターフェースがすべてのリンク上のコールを終了する前に、インターフェースにプロトコル・トラフィックがない状態が可能な期間 (秒数) を指定します。

有効値: 0 ~ 65535

デフォルト値: 0

mp parameters

最大および最小フラグメント・サイズとアクティブ・リンクの最大数を入力するように求めます。

例 :

```
set mp parameters
Max frag size [750]? 675
Min frag size [375]? 300
Max number of active links [2]? 4
```

Max frag size

MP リンクを介して送信するためにパケットを分割する前に、パケットに含めることができるデータの最大バイト数を指定します。

有効値: 100 ~ 3 000

デフォルト値: 750

Min frag size

これは、パケットが **Max fragment size** を超過する場合にソフトウェアが作成するフラグメントの最小サイズ (バイト) です。

有効値: 100 ~ 3 000

デフォルト値: 375

Max number of active links

MP バーチャル・リンク (バンドル と呼ばれます) に構成できるリンクの最大数を指定します。

有効値: 1 ~ 64

デフォルト値 : 2

MP インターフェース状態の監視

装置内のすべての MP の状態を調べる場合は、**configuration** コマンドを **talk 5** (120ページの『Configuration』を参照) で使用します。

MP 監視コマンドへのアクセス

MP 監視コマンドにアクセスするには、次のようにします。

1. * プロンプトで **talk 5** と入力する。
2. **net n** と入力する。ただし、**n** は、**add device multilink-ppp** コマンドを使用して **talk 6** で作成された MP インターフェースの番号です。

マルチリンク PPP プロトコル監視コマンド

表79 は、MP インターフェースで利用可能なコマンドを示しています。

表 79. MP 監視コマンド

コマンド	機能
? (Help)	このコマンド・レベルで使用可能なコマンドをすべて表示するか、特定のコマンドに関するオプション (ただし、選択可能な場合) をリストします。12ページの『ヘルプを得る』を参照してください。
List	BAP、BACP、BOD、および MP 統計、誤り、およびその他の情報を表示します。

MP の監視

表 79. MP 監視コマンド (続き)

コマンド	機能
Exit	直前のコマンド・レベルに戻ります。13ページの『下位レベル操作環境を終了する』を参照してください。

List

list コマンドは、帯域幅割り当て統計を含めて、MP インターフェースに関する情報を表示するのに使用します。

構文：

```
list                bacp
                    bap
                    control bacp
                    control bod
                    control mp
                    mp
```

注：以下の例では、この装置上の MP インターフェースは、ネットワーク番号 6 と想定しています。

bacp list bacp コマンドは、この MP 回線上で送信または受信された帯域幅割り当て制御パケットの統計をリストします。

例：

```
PPP 6> list bacp
```

```
BACP Statistic      In      Out
-----
Packets:            6        8
Octets:             60       80
Rejects:            0         -
```

bap list bap コマンドは、この MP 回線上で送信または受信された帯域幅割り当てプロトコル・パケットの統計をリストします。

例：

```
PPP 6> list bap
```

```
BAP Statistic      In      Out
-----
Packets:            3         3
Octets:             22       37
Call Requests:      1         0
Call Response(ACK): 0         1
Call Resp(NK & FLLNK): 0         0
Call Response(Rej): 0         0
Callback Requests: 0         0
Callback Response(ACK): 0         0
Cllbck Resp(NK & FLLNK): 0         0
Callback Response(Rej): 0         0
Drop Requests:      0         1
Drop Response(ACK): 1         0
Drop Resp(NK & FLLNK): 0         0
Drop Response(Rej): 0         0
Call Status(Success): 1         0
Call Status(Fail):  0         0
```

ピアの要求に対するレスポンスは、ACK、NAK、FULL-NAK、および REJECT の 4 種類があります。

ACK ピアの要求が容認されたことを示します。

NAK (NK)

ピアの要求はサポートされますが、この時点では望ましくないことを示します。後で再試行します。

FULL-NAK (FLLNK)

ピアの要求はサポートされますが、資源の状態により、この時点では容認できないことを示します。MP バンドル全体の合計帯域幅が変更されるまでは、この要求を再び送信してはなりません。

REJECT (REJ)

要求はサポートされないことを示します。

control bacp

list control bacp コマンドは、PPP 内部の BACP 状態遷移の現在の状態をリストします。この状態情報は、すべての PPP 制御プロトコルで生成されるものと同一です。優先ピアに関する情報もリストされます。優先ピアは、BAP パケット衝突（両側が同時に要求を開始した場合）を回避するために使用されます。BACP ネゴシエーション中に、それぞれの側がマジック番号を送信し、マジック番号が小さい方の側が優先ピアで、衝突が生じた場合には優先される必要があります。通常は、コール発信側はマジック番号 X'1' を選択し、コールの受信側はマジック番号 X'FFFFFFFF' を選択するので、コール発信側が優先ピアになります。

PPP 6> list control bacp

BACP State:	Open	
BACP Option	Local	Remote
-----	-----	-----
Magic Number:	FFFFFFFF	1
Favorite Peer:	NO	YES

control bod

list control bod コマンドは、帯域幅オンデマンド (BOD) の現在の状態をリストします。この情報には、BAP 状態、帯域幅の追加および削除のために構成されたオンデマンドの帯域幅パラメーター、現行の帯域幅、および前回の帯域幅ポーリングからの情報が含まれます。

有効な BAP 状態は、以下のとおりです。

Closed

BACP はオープンされていません - BAP が使用可能にされていないか、ピアによってサポートされないかのいずれかです。

Ready BACP がオープンされ、処理中のアウトスタンディング要求はありません。

Call Req Sent

ローカル・マシンから送信されたアウトスタンディング・コール・リクエストがあります。

Callback Req Sent

ローカルで送信されたアウトスタンディングのコールバック要求があります。

Call Placed

帯域幅を追加するための BAP 要求の結果、コールが発信されました。

Retry Status Sent

発信コールが MP バンドルに結合するのに失敗し、再試行状態が送信されました。

No Retry Status Sent

発信コールが成功したか、またはすべての再試行回数を使い尽くして、非再試行状態が送信されました。

Drop Req Sent

ローカルで送信されたアウトスタンディングの除去要求がありません。

構成された bandwidth-on-demand パラメーターには、追加比率、除去比率、MP バンドル内のアクティブ・リンクの最大数、および帯域幅ポーリング間隔が含まれます。

バンドルにリンクを追加するための BAP 要求は、次の条件が両方とも満たされている場合に開始されます。

- 現在のアクティブ・リンク数が、構成されたリンクの最大数より少ない。
- MP バンドル内のすべてのリンクの帯域幅使用率が、その MP バンドルで利用可能な合計帯域幅の追加比率より大きい。

MP からリンクを除去するための BAP 要求は、次の条件が両方とも満たされている場合に開始されます。

- アクティブ・リンクの数が 1 より多い。
- MP バンドル内のすべてのリンクの帯域幅使用率が、その MP バンドルのリンク数マイナス 1 に対して利用可能な合計帯域幅の除去比率より小さい。

帯域幅のポーリングは、BAP がレディー状態のときにのみ行うことができます。前回のポーリングからリストされた情報は、MP バンドル全体の帯域幅使用率の様子を伝えます。

除去を開始できるときには、次の 2 組の情報が表示されます。

- バンドル全体の帯域幅使用率
- リンク数マイナス 1 の帯域幅使用率

スラッシングを防止するために、リンクを除去するかどうかを判別するときには、2 番目の組の情報が使用されます。

例 :

```
PPP 11>list control bod
```

```
BOD :                               Disabled
BAP :                               Disabled
Bandwidth test interval (sec):      15
Add bandwidth percentage:           90
Drop percentage (links-1):          70
Max # active links in MP bundle:    2
Time since last Bandwidth check (sec): 19
Currently:
  # active links in MP bundle:      0
  Total MP bandwidth (Bytes/sec):    0
```

```

Last Bandwidth Check:
# active links in MP bundle:          0
Avg Inbound bandwidth util (%):       0
Avg Outbound bandwidth util (%):      0

```

control mp

list control mp コマンドは、アクティブ・リンク数と帯域幅、構成されたりリンクの最大数、および廃棄されたパケット数の統計を含めて、この MP 回線の現行状態をリストします。廃棄された MP パケットは、4 つのカテゴリに分類されます。

M シーケンス番号が受信されず、すべてのリンクの前回受信したシーケンス番号のうち、最小シーケンス番号より小さいためにパケットが廃棄されました。

Timeout

タイムアウト期間中にシーケンス番号を受信しなかったため、パケットが廃棄されました。

Q depth

最大待ち行列の長さを超えたために、パケットが廃棄されました。

Seq order

予期しなかったシーケンス番号を受信したために、パケットが廃棄されました。これは MP が、すでに紛失と宣言された遅延パケットを受信した場合に起こります。

パケットがネットワーク・レイヤーで廃棄された場合は、M、Timeout、または Q depth パケットのいずれかです。これらのカウンターは、パケットが廃棄されると、それに応じて増分されます。

```

PPP 11> list control mp
Current # active links in MP bundle:    0
Max # active links in MP bundle:       2
Total MP bandwidth (Bytes/sec):         0
Dropped Frags (lost packets):          0
Dropped Frags (timeout or receive overflow): 0
Dropped Frags (sequence not expected):  0

PPP 11>

```

mp

list mp コマンドは、この MP 回線で送信または受信されたパケットの統計をリストします。表示されるバイト数は、マルチリンク PPP バンドルについて圧縮がネゴシエーションされた場合は、解凍前のパケットに関するものです。

```

PPP 6> list mp
MP Statistic          In          Out
-----
Bytes (Compressed):   61230      60259

```

MP の監視

第43章 SDLC リレーの構成

この章では、同期データ・リンク制御 (SDLC) リレーの構成およびオペレーショナル・コマンドについて説明します。

DLSw SDLC と SDLC リレー の使い分けの詳細については、プロトコルの構成と監視 解説書 第 1 巻 の『DLSw の使用と構成』の章の『SDLC リレー機能との関係』の項を参照してください。

本章には、以下の節が含まれています。

- 『基本構成手順』
- 675ページの『SDLC リレー監視環境へのアクセス』
- 676ページの『SDLC リレー監視コマンド』
- 679ページの『SDLC リレー・インターフェースと GWCON インターフェース・コマンド』

基本構成手順

この節では、SDLC リレー・プロトコルを立ち上げて実行するのに必要な最小構成ステップについて概説します。詳しい構成情報および説明が必要な場合は、本章の構成コマンドの説明箇所を参照してください。

注: 新しい構成変更を有効にするためには、ルーターをリスタートする必要があります。

- 番号を追加する。 **add group** コマンドを使用して、1 次または 2 次ポートのグループに番号を追加することが必要です。このコマンドのデフォルト番号は 1 です。
- ローカル・ポートを追加する。これは、ローカル・ポートで使用するインターフェースを識別します。またこれにより、選択したインターフェースに対して IP アドレスが構成されないことも保証されます。 **add local-port** コマンドを使用します。
- リモート・ポートを追加する。これは、シリアル・ラインのリモート側に直接接続されたポートを識別します。 **add remote-port** コマンドを使用します。

SDLC リレー構成環境へのアクセス

SDLC リレー (SRLY) 構成環境にアクセスするには、次のようにします。

1. Config> プロンプトで **set data-link srlly** と入力する。
2. インターフェース番号を入力する。
3. SRLY インターフェースを構成するために、**network interface#** コマンドを入力する。 **network interface#** を入力すると、SRLY *interface#* Config> プロンプトが表示されます。

```
Config>network 2
SDLC relay interface user configuration
SRLY 1 Config>
```

SDLC リレーの構成と監視

4. SRLY プロトコル・パラメーターを構成するために、**protocol sdhc** コマンドを入力する。**protocol sdhc** を入力すると、SDLC Relay config> プロンプトが表示されます。

```
Config>protocol sdhc
SDLC Relay protocol user configuration
SDLC Relay config>
```

SDLC リレー構成コマンド

この節では、SDLC リレー構成コマンドについて要約します。この章には、SDLC リレーの **network** パラメーターと **protocol** パラメーターの両方が記載されています。

SDLC リレー構成コマンドでは、SDLC リレー・フレームを転送するインターフェースのルーター・パラメーターを指定することができます。構成コマンドをアクティブにするには、ルーターをリスタートする必要があります。表80 は、**network sdhc** および **protocol sdhc** の両方のコマンドを示しています。

表 80. SDLC リレー構成コマンドの要約

コマンド	Network SRLY	Protocol SDLC	機能
? (Help)	可	可	すべての SDLC リレー構成コマンドをリストするか、または特定のコマンドに関連するオプションをリストします。
Add		可	グループ、ローカル・ポート、およびリモート・ポートを追加します。
Delete		可	グループ、ローカル・ポート、およびリモート・ポートを削除します。
Disable		可	グループおよびポートを使用不可にします。
Enable		可	グループおよびポートを使用可能にします。
List	可	可	SDLC リレー全体の構成およびグループ特有の構成を表示します。
Set	可		リンク・パラメーターおよびリモート端末パラメーターを設定します。
Exit	可	可	SDLC リレー構成環境を終了して、CONFIG 環境に戻ります。

Add

add コマンドは、グループ番号、ローカル・ポート、およびリモート・ポートを追加するのに使用します。

構文：

```
add                group group#
                    local-port
                    remote-port
```

group ルーターに追加された 1 次または 2 次ポートのグループに番号を割り当てます。

例: **add group**

```
1                Group number: [1]?
```


Group number

そのポートに指定するグループ番号

local-port

ローカル・ポートに使用するインターフェースを識別します。

例: add local-port

```
Group number: [1]? 1
Interface number: [0]? 2
(P)rimary or (S)econdary:[S]? p
```

Group numberそのポートのグループ番号。この番号は、以前に構成された **add group** パラメーターの 1 つに一致していなければなりません。**Interface number**

ローカル・ポートを示すルーターのインターフェース番号

Primary or Secondary

ポート・タイプ (1 次 (P) または 2 次 (S)) を指定します。

remote-port

リモート・ルーターのシリアル・ラインに直接接続されたポートの IP アドレスを識別します。

例: add remote-port

```
Group number: [1]? 1
IP address of remote router:[0.0.0.0]? 128.185.121.97
(P)rimary or (S)econdary:[S]? s
```

Group numberそのポートのグループ番号。この番号は、以前に構成された **add group** パラメーターの 1 つに一致していなければなりません。**IP address of remote router**

リモート・ルーター上のインターフェースの IP アドレスを識別します。

Primary or Secondary

ポート・タイプ (1 次 (P) または 2 次 (S)) を指定します。

Delete

delete コマンドは、グループ番号、ローカル・ポート、およびリモート・ポートを削除するのに使用します。

構文 :

```
delete                group . . .
                        _local-port . . .
                        _remote-port
```

group *group#*SDLC リレーの構成済みポートのグループ (*group#*) を除去します。**例: delete group 1**

<u>port</u>	
group <i>group#</i>	指定されたグループ (group#) との間の SDLC リレー・フレームの転送を可能にします。 例: enable group 1
port	指定されたローカル・ポートとの間の SDLC リレー・フレームの転送を可能にします。 例: enable port
	<small>Group number: [1]? 2 (P)primary or (S)secondary:[S]? s</small>
	Group number 使用可能にするポートのグループ番号
	Primary or Secondary ポート・タイプ (1 次 (P) または 2 次 (S)) を指定します。

List (ネットワーク SRLY の場合)

list コマンドは、特定のグループまたはすべてのグループの構成を表示するのに使用します。

構文 :

list

例 :

```
list
Maximum frame size in bytes = 2048
Encoding: NRZ
Idle State: Flag
Clocking: External
Cable Type: RS-232 DTE
Speed (bps): 0
Transmit Delay Counter: 0
```

Maximum frame size in bytes

リンクを介して送信できる最大フレーム・サイズ。最大フレーム・サイズは、最大フレームと 15 バイトの SRLY ヘッダーが収まる大きさでなければなりません。

Encoding

シリアル・インターフェースの伝送符号化法。符号化法は、NRZ (非ゼロ復帰) または NRZI (非ゼロ復帰反転) です。

Idle State

データ・リンク・アイドル状態: フラグまたはマーク

Clocking

クロックのタイプ: 内部または外部

Cable Type

シリアル・インターフェースのケーブル・タイプ

Speed (bps)

送信クロックと受信クロックの速度をリストします。

SDLC リレーの構成と監視

Transmit Delay Counter

連続するフレーム相互間に送信されるフラグの数

List (プロトコル SDLC の場合)

list コマンドは、特定のグループまたはすべてのグループの構成を表示するのに使用します。

構文：

```
list                                all
                                      group . . .
```

all すべてのローカル・ポートの構成を表示します。

例: **list all**

SDLC Relay Configuration					
Group Number	Port Status		Net Number	SDLC Station address (hex)	IP Address
1 (E)	Local	PRMRY (D)	2		128.185.452.11
1 (E)	Remote	SCNDRY (E)			
2 (D)	Local	PRMRY (D)	1		128.185.450.31
2 (D)	Remote	SCNDRY (D)			

Group Number

グループ番号とグループの状態 (使用可能 (E) または使用不可 (D)) を示します。

Port Status

ポートのタイプ (ローカル/リモート 1次/2 次) とその状態 (使用可能 (E) または使用不可 (D)) を示します。

Net Number

ローカル・ポートの装置番号を示します。この番号は、`Config list devices` コマンドを使用して表示した番号に一致します。

IP Address

リモート・ポートの IP アドレスを示します。

group *group#*

指定されたグループの構成を表示します。

例: **list group 1**

SDLC Relay Configuration					
Group Number	Port Status		Net Number	SDLC Station address (hex)	IP Address
1 (E)	Local	PRMRY (D)	2		128.185.452.11
1 (E)	Remote	SCNDRY (E)			

Group Number

グループ番号とグループの状態 (使用可能 (E) または使用不可 (D)) を示します。

Port Status

ポートのタイプ (ローカル/リモート 1次/2 次) とその状態 (使用可能 (E) または使用不可 (D)) を示します。

Net Number

ローカル・ポートの装置番号を示します。この番号は、Config list devices コマンドを使用して表示した番号に一致します。

IP Address

リモート・ポートの IP アドレスを示します。

Set

set コマンドは、SRLY パラメーターを構成するのに使用します。

構文：

```
set                                cable
                                   clocking
                                   encoding
                                   frame-size
                                   idle
                                   speed
                                   transmit-delay
```

cable シリアル・インターフェースで使用されるケーブルを設定します。オプションは、次のとおりです。

- RS-232 DTE
- RS-232 DCE
- V35 DTE
- V35 DCE
- V36 DTE
- V36 DCE
- X21 DTE
- X21 DCE

表81 は、各種のアダプターに構成できるケーブル・タイプを示しています。

表 81. 2216 インターフェースのケーブル・タイプ

アダプター・タイプ	ケーブル・タイプ
8 ポート EIA 232	RS-232 DTE および RS-232 DCE
6 ポート V.35/V36	V.35 DCE、V.35 DTE、V.36 DCE、または V.36 DTE
8 ポート X.21	X.21 DCE および X.21 DTE

例: **set cable V35 dte**

ルーターをあるタイプの DCE 装置 (たとえば、モデムまたは DSU/CSU) に接続する場合は、DTE ケーブルを使用します。

ルーターが DCE として動作し、直接接続のためのクロックを提供する場合は、DCE ケーブルを使用します。

SDLC リレーの構成と監視

clocking *internal* または *external*

SRLY リンクのクロックを構成します。モデムまたは DSU に接続する場合は、クロックを外部として構成します。別の DTE 装置に直接接続する場合は、DCE ケーブルを使用し、クロックを内部として設定し、クロック速度を構成します。675ページの表83 を使用して、内部クロックが使用されているときに各種アダプターに設定できるクロック速度を調べてください。

例: **set clocking internal**

encoding *nrz* or *nrzi*

SRLY インターフェースの伝送符号化法を NRZ (非ゼロ復帰) または NRZI (非ゼロ復帰反転) として構成します。NRZ がデフォルトです。

例: **set encoding nrz**

frame-size

データ・リンク上で送受信できるフレームの最大サイズを構成します。この値を `add remote-secondary` コマンドで指定した値より大きく設定した場合、この値はその最大値を反映するように変更されます。IBM 2216 は、この値が変更されることをユーザーに警告するメッセージを生成します。ユーザーは、これが SRAM 構成内で変更されるまで、この ELS メッセージを継続的に受け取ります。有効な入力値を表82 に示します。

注: 最大フレーム・サイズは、最大フレームと 15 バイトの SRLY ヘッダーが収まる大きさでなければなりません。

表 82. *Set Frame-Size* コマンドのフレーム・サイズの有効値

最小	最大	デフォルト値
128	8187	2048

idle flag

SRLY インターフェース上のフレーム転送の送信アイドル状態を構成します。デフォルト設定はフラグ・オプションで、これはフレーム相互間に連続フラグ (16 進 7E) を提供します。

リンクはフラグ・アイドルを透過的に受け取ります。

idle mark

SRLY インターフェース上のフレーム転送の送信アイドル状態を構成します。マーク・オプションは、フレーム間の伝送路をマーキング状態 (OFF, 1) にします。

リンクはマーク・アイドルを透過的に受け取ります。

speed 内部クロックの場合、このコマンドは送信および受信クロック回線の速度を指定します。

- インターフェース 1
 - 4 ポート WAN コンセントレーション・アダプターのポート 1
 - 8 ポート WAN コンセントレーション・アダプターのポート 1 および 5
- 675ページの表83 を使用して、各種アダプターに設定できる回線速度を調べてください。

表 83. 2216 インターフェースで内部クロックが使用される場合の回線速度

アダプター・タイプ	速度範囲
8 ポート EIA 232	9600 ~ 64 000 bps
6 ポート V.35/V.36	9600 ~ 460 800 bps、1 544 000 bps、または 2 048 000 bps
8 ポート X.21	9600 ~ 460 800 bps、1 544 000 bps、または 2 048 000 bps

外部クロックの場合、このコマンドはハードウェアに影響を与えません。外部クロックが使用されているときにサポートされる回線速度は、表84 を参照してください。

表 84. 2216 インターフェースで外部クロックが使用される場合の回線速度

アダプター・タイプ	速度範囲
8 ポート EIA 232	2400 ~ 64 000 bps
6 ポート V.35/V.36	2400 ~ 2 048 000 bps
8 ポート X.21	2400 ~ 2 048 000 bps

transmit-delay value

転送されるパケット間に遅延を挿入することができます。このコマンドは、フレーム相互間の最小遅延を保証することにより、相手側の旧型で低速のシリアル装置に整合させます。この値は、連続するフレーム間に送信するフラグ・バイト数として指定します。範囲は 0 ~ 15 です。デフォルト値は 0 です。

注: 8 ポート EIA- 232E アダプター、6 ポート V.35/V.36 アダプター、または 8 ポート X.21 アダプター上の SDLC リレー・インターフェースに関して非ゼロ送信遅延を構成する場合は、**set speed** コマンドを使用して伝送速度を構成する必要があります。

SDLC リレー監視環境へのアクセス

SDLC リレー・インターフェースに関連する情報を監視する場合は、以下のようにしてインターフェース監視プロセスにアクセスします。

1. **status** コマンドを入力して、GWCON の PID を見付ける。(status コマンドの出力例については、11 ページを参照してください。)
2. OPCON プロンプトで、**talk** コマンドと GWCON の PID を入力する。下に例を挙げます。

```
* talk 5
+
```

GWCON プロンプト (+) がコンソールに表示されます。初めて GWCON に入ったとき、プロンプトが表示されない場合は、もう一度 **Return** キーを押します。

3. GWCON プロンプトで **configuration** コマンドを入力して、ルーターが構成されているプロトコルおよびネットワークを表示させる。下に例を挙げます。

```
+ configuration
```

configuration コマンドのその他の出力例については、120 ページを参照してください。

4. **protocol sdlc** コマンドを入力する。下に例を挙げます。

SDLC リレーの構成と監視

```
+ prot sdlc
SDLC Relay>
```

SDLC リレー・プロンプトがコンソールに表示されます。したがって、SDLC リレー監視コマンドを入力すれば、SDLC リレー・ポートに関する情報を表示させて見ることができます。

SDLC リレー監視コマンド

この節では、SDLC リレー監視コマンドについて要約した上で説明します。SDLC リレー監視コマンドを使用すると、SDLC リレー・フレームを転送するインターフェースに関するパラメータを表示させて見ることができます。SDLC Relay> プロンプトが表示されるので、SDLC リレー監視コマンドをすべて入力することができます。表 85 は、コマンドを示しています。

表 85. SDLC リレー監視コマンドの要約

コマンド	機能
? (Help)	このコマンド・レベルで使用可能なコマンドをすべて表示するか、特定のコマンドに関するオプション (ただし、選択可能な場合) をリストします。12ページの『ヘルプを得る』を参照してください。
Clear-Port-Statistics	指定されたポートの SDLC リレー統計を消去します。
Disable	グループおよびポートを一時的に抑制します。
Enable	グループおよびポートを一時的にオンにします。
List	SDLC リレー全体の構成およびグループ特有の構成を表示します。
Exit	直前のコマンド・レベルに戻ります。13ページの『下位レベル操作環境を終了する』を参照してください。

Clear-Port-Statistics

clear-port-statistics コマンドは、すべてのポートに関する SDLC リレー統計を廃棄させる場合に使用します。統計には、転送されたパケットおよび廃棄されたパケットのカウンターが含まれます。

構文：

```
clear-port-statistics
```

```
clear-port-statistics
```

前回のルーターのリスタートまたは統計の消去以降に収集されたポート統計を消去します。

例：

```
clear-port-statistics
Clear all port statistics? (Yes or No): Y
```

Disable

disable コマンドは、グループ全体または特定のリレー・ポートのデータ転送を抑制します。SRAM (静的読み取りアクセス・メモリー) には、**disable** 監視コマンドの影響が永続的に保管されることはありません。そのため、ルーターをリスタートすると、このコマンドの影響は消去されます。

構文 :

```
disable                group . . .
                           port
```

group *group#*
特定のグループ (group#) との間の SDLC リレー・フレームの転送を抑制します。

port *interface# primary-or-secondary*
特定のローカル・ポートとの間の SDLC リレー・フレームの転送を抑制します。

例 :

```
disable port
Interface number: [0]? 2
(P)rimary or (S)econdary: [s]? P
```

Interface number

使用不可にするローカル・ポートのインターフェース番号を示します。

Primary or Secondary

ポートが 1 次であるか、2 次であるかを示します。

Enable

enable コマンドは、グループ全体または特定のローカル・インターフェース・ポートに関するデータ転送をオンにする場合に使用します。SRAM には、**enable** 監視コマンドの影響が永続的に保管されることはありません。そのため、ルーターをリスタートすると、このコマンドの影響は消去されます。

構文 :

```
enable                group . . .
                           port
```

group *group#*
指定されたグループ (group#) との間の SDLC リレー・フレームの転送を可能にします。

port 指定されたローカル・ポートとの間の SDLC リレー・フレームの転送を可能にします。

例 :

```
enable port
Interface number: [0]? 2
(P)rimary or (S)econdary: [s]? P
```

Interface number

使用可能にするローカル・ポートのインターフェース番号を示します。

Primary or Secondary

ポートが 1 次であるか、2 次であるかを示します。

List

list コマンドは、特定のグループまたはすべてのグループの構成を表示させる場合に使用します。

構文：

```
list                all
                    group . . .
```

all すべてのローカル・ポートの構成を表示します。

例：

```
list all
          SDLC Relay Configuration

Group  Port Status      Net  Packets  IP Address
Num    Num    Num    fwr disc
1 (E)  Local PRMRY (E)    2    2880    57
1 (E)  Remote SCNDRY (E) 4860   13    128.185.452.11
2 (D)  Local PRMRY (D)    1     0     0
2 (D)  Remote PRMRY (D)   0     0     128.185.450.31
```

Group Number

グループ番号とグループの状態 (使用可能 (E) または使用不可 (D)) を示します。

Port Status

ポートのタイプ (ローカル/リモート 1次/2次) とその状態 (使用可能 (E) または使用不可 (D)) を示します。

Net Number

ローカル・ポートの装置番号を示します。この番号は、Config> **list devices** コマンドを使用して表示した番号と一致します。

Packets (fwr and disc)

そのポートで転送 (fwr) および廃棄 (disc) されたパケット数を示します。

IP Address

リモート・ポートの IP アドレスを示します。

group *group#*

指定されたグループの構成を表示します。

例：

```
list group 1
          SDLC Relay Configuration

Group  Port Status      Net  Packets  IP Address
Num    Num    Num    fwr disc
1 (E)  Local PRMRY (D)    2    2880    57
1 (E)  Remote SCNDRY (E) 4860   13    128.185.452.11
```

SDLC リレー・インターフェースと GWCON インターフェース・コマンド

SDLC リレー・インターフェースには監視を目的とする独自の監視プロセスがありますが、GWCON 環境から **interface** コマンドを使用すると、ルーターでも導入済みネットワーク・インターフェースに関する完全な統計を表示します。(**interface** コマンドの詳細については、第10章 操作/監視プロセス (GWCON - Talk 5) とコマンド を参照してください。)

第44章 SDLC インターフェースの使用

この章では SDLC インターフェースの使用法について説明します。この章は以下の節に分かれています。

- 『基本構成手順』
- 『交換 SDLC コールイン・インターフェースの構成』
- 683ページの『SDLC 構成要件』

SDLC 構成コマンドは `SDLC # Config>` プロンプトで入力します。ただし、`#` は `network` コマンドで指定するインターフェースを識別します。ルーターの構成に加えた変更は、即時には有効にはならず、ルーターがリスタートされたときに、ルーターの静的構成メモリーの一部になります。

基本構成手順

この節では、DLSw または APPN で SDLC を使用できるようにするのに必要な最小構成について概説します。

構成手順を開始する前に、`config` プロセスから `list device` コマンドを使用して、各種の装置のインターフェース番号のリストを表示します。Config プロンプトで、`network interface number` または `n interface number` のいずれかを入力して、構成するインターフェースを選択します。構成コマンドについて詳しい説明が必要な場合は、本章の構成コマンドの説明箇所を参照してください。

交換 SDLC コールイン・インターフェースの構成

交換 SDLC コールイン・インターフェースを使用すると、PU タイプ 2.0 装置で、SDLC ラインを使用して 2216 にダイヤルインすることができ、ネットワークへの追加接続オプションが得られます。インターフェースは PU タイプ 2.0 装置に制限され、実行できるのは DLSw だけです。

注: 交換 SDLC コールイン・インターフェース上に APPN を構成することはできません。

交換 SDLC コールイン・インターフェースの構成は、以下の手順で行います。

1. V.25bis 基本ネットワークを構成する。

```
Config> set data-link v25bis 2
Config> net 2
V25bis Config>
(configuration the V25bis net)
```

V.25bis の構成についての詳細は、709ページの『第46章 V.25bis ネットワーク・インターフェースの使用』を参照してください。

注: `encoding type` および `full` vs. `half duplex` など、物理レイヤー・パラメーターは、いずれも交換 SDLC ダイヤル回線インターフェース上ではなく、V.25bis インターフェース上に構成されます。

SDLC インターフェースの使用

2. ダイヤル回線装置を追加する。

```
Config> add device dial
```

3. ダイヤル回線インターフェースのデータ・リンクを SDLC に設定する。この例では、ダイヤル回線はインターフェース 3 です。

```
Config> set data-link sdlc 3
```

4. ダイヤル回線を構成する。

```
Config> net 3
Dial circuit config> set net 2 1
Dial circuit config> encapsulator
sdslc config>
  (configure SDLC)
sdslc config> exit
Dial circuit config> exit
Config>
```

5. DLSw を構成する。

```
Config> prot dls
DLSw protocol user configuration
DLSw config> add sdslc
Interface # [0]? 3
SDLC Address or 'sw' (switched dial-in) [sw]? sw 2
Source MAC address [4000112402C1]? 4000003174d2
Source SAP in hex [4]?
Destination MAC address [000000000000]? 400000000004 3
Destination SAP in hex [0]? 4 4

XID0 block num in hex (0-0xfff) [0]? 017
XID0 id num in hex (0-0xffff) [0]? 00001
For a switched dial-in link station .....
- PU type is forced to be 2
- Configured XID block/id num is used to override
  fields in the XID0 from the SDLC station
  - if block/id set to zeroes, XID0 is not modified
  - otherwise configured fields are put into XID0
- Poll type is not configured (not used)
DLSw config>li sdslc all
Net Addr  Status  Source SAP/MAC  Dest SAP/MAC  PU  Blk/IdNum  PollFrame
3  FF(sw) Enabled  04 4000003174D2  04 400000000004  2  017/00001  TEST

DLSw config> exit
Config>
```

1 他のダイヤル回線パラメーターについては、ソフトウェアがすべてデフォルト値を取るため、いずれも設定することはできません。デフォルト値の説明については、760ページの『Encapsulator』を参照してください。

2 『sw』と指定すると、交換 SDLC コールイン・インターフェースであることを示します。

3 あて先 MAC アドレスは、オール 0 にはできません。値 0 を指定したり、デフォルト値にした場合は、ソフトウェアがプロンプトで有効なアドレスの入力を指示してきます。

4 あて先 SAP は 0 にはできません。値 0 を指定したり、デフォルト値にした場合は、ソフトウェアがプロンプトで有効なアドレスの入力を指示してきます。

DLSw の構成に関する追加情報については、プロトコルの構成と監視 解説書 第 1 巻 中の『DLSw の使用と構成』および『DLSw の監視』の章を参照してください。

SDLC 構成要件

本章に説明されている SDLC 特有の構成手順およびコマンドに加えて、DLSw または APPN プロトコルでも SDLC を構成する必要があります。特定の SDLC インターフェース上では、一度に 1 つのプロトコル (DLSw または APPN) しか実行できません。言い換えると、特定の SDLC インターフェース上のリンク・ステーションは、APPN と DLSw 間で分割することはできません。同じ SDLC インターフェースに対する DLSw 構成と APPN 構成が存在する場合は、最初にアクティブになったプロトコルが、その SDLC インターフェースを所有します。

第45章 SDLC インターフェースの構成と監視

この章では、SDLC の構成および操作コマンドについて説明します。

この章は以下の節に分かれています。

- 『SDLC 構成環境へのアクセス』
- 686ページの『SDLC 構成コマンド』
- 697ページの『SDLC 監視環境へのアクセス』
- 697ページの『SDLC 監視コマンド』
- 705ページの『SDLC インターフェースと GWCON インターフェース・コマンド』
- 705ページの『SDLC インターフェースで表示される統計』

構成コマンド・コンソール (SDLC CONFIG>) で行った変更は、ルーターをリスタートすると SRAM 構成の一部になります。

逆に、SDLC 監視プロセス内で入力した SDLC 監視コマンドは、即時に有効になります。ただし、監視コマンドを用いて行った変更は、ルーターの静的構成の一部にはなりません。ルーターをリスタートすると、監視コマンドの影響は、ルーターの静的構成によって上書きされます。監視は、以下のアクションから構成されます。

- 現在ルーターによって使用されているプロトコルおよびネットワーク・インターフェースを監視する。
- SDLC 構成に永続的な影響を与えずに、SRAM 構成をリアルタイムで変更する。
- ルーターのアクティビティおよび性能に関連する ELS (イベント・ログ・システム) メッセージを表示する。

SDLC 構成環境へのアクセス

ルーターの構成を変更するには、CONFIG プロセスを使用します。新規の構成は、ルーターをリスタートすると有効になります。

構成プロセスに入るには、次のようにします。

1. OPCON (*) プロンプトで **talk 6** (または **t 6**) を入力する。これにより、次の例のような CONFIG> プロンプトが表示されます。

```
MOS Operator Control
```

```
* talk 6
```

```
CONFIG>
```

CONFIG> プロンプトがすぐに表示されない場合は、**Enter** キーをもう一度押してください。SDLC 構成コマンドは SDLC config> プロンプトで入力します。

2. Config> プロンプトで、**set data-link sdlc** コマンドを入力する。プロンプトが出たら、SDLC 装置に関連付けるインターフェースの名前を入力します。

```
Config>set data-link sdlc  
Interface number [0]? 2  
Config>
```

SDLC インターフェースの構成

- 次に、**network** コマンドに加えて、前に入力した SDLC インターフェースの番号を入力する。

```
Config>network 2
SDLC 2 Config>
```

構成環境に関する情報は、3ページの『第1章 はじめに』を参照してください。

SDLC 構成コマンド

SDLC 構成コマンドを用いて、SDLC インターフェース構成を作成または変更することができます。この節では、ネットワーク構成コンソール内の SDLC Config> プロンプトから出すことができるコマンドの要約を示し、個々のコマンドについて説明します。コマンドとそのパラメーターのデフォルト値は、プロンプトの直後に大括弧で囲んで表示されています。

注: 本章に説明されているコマンドを使用して SDLC を構成するのに加えて、DLSw または APPN プロトコルでも SDLC を構成する必要があります。

2216 は、RS-232、X.21、および V.35 シリアル・インターフェースを介する SDLC コネクションをサポートします。表86 は、SDLC 構成コマンドとその機能をリストしています。

表 86. SDLC 構成コマンドの要約

コマンド	機能
? (Help)	このコマンド・レベルで使用可能なコマンドをすべて表示するか、特定のコマンドに関するオプション (ただし、選択可能な場合) をリストします。12ページの『ヘルプを得る』を参照してください。
Add	SDLC エンド・ステーションを追加します。
Delete	SDLC エンド・ステーションを除去します。
Disable	SDLC リンク・ステーションの1つへの接続を阻止します。
Enable	SDLC リンク・ステーションの1つへの接続を可能にします。
List	SDLC リンク・ステーションの1つの構成情報を表示します。
Set	特定のインターフェースおよびリンク・ステーション情報を構成します。
Exit	直前のコマンド・レベルに戻ります。13ページの『下位レベル操作環境を終了する』を参照してください。

Add

add コマンドは、エンド・ステーションを追加する場合に使用します。ルーターは、デフォルトでは、1次エンド・ステーションです。このコマンドを使用しないで、DLSw または APPN で SDLC ステーションを構成した場合、そのエンド・ステーションが追加されます。ソフトウェアは、以下のようなデフォルト値をステーションに割り当てます。

- Maximum BTU は、インターフェースによって許容される最大値
- Tx および Rx ウィンドウは、MOD 8 の場合は 7、MOD 128 の場合は 127

デフォルト値で十分な場合は、SDLC ステーションを追加する必要はありません。

構文 :

add station

例 :

```
add station
Enter station address (in hex) [C3]?
Enter station name [SDLC_C3]?
Include station in group poll list ([Yes] or No):
Enter max packet size [2009]?
Enter receive window [7]?
Enter transmit window [7]?
```

Enter station address

ステーションの SDLC アドレスで、範囲は 01 ~ FE

Enter station name

SDLC ステーションの名前指定 (最大で 8 文字)

Include station in group poll list

このリンクに関するグループ・ポーリング・リストにこのステーションを含めるかどうかを選択します。SDLC ソフトウェアは、SDLC 2 次ステーションの IBM 3174 グループ・ポーリング機能をサポートします。このパラメータを有効にするため、**set link group-poll** コマンドを使用して、グループ・ポーリング・アドレスを追加する必要があります。

Enter max packet size

リモート・リンク・ステーションとの間で送受信することができる最大パケット・サイズ。この値は、リンクに指定された最大値より大きくすることはできません。この値は、**set link frame-size** コマンドを用いて構成します。

Enter receive window

ルーターが応答を送信しないで受信できるパケットの最大数

Enter transmit window

ルーターが応答を受信しないで送信できるパケットの最大数

Delete

delete コマンドは、エンド・ステーション (ステーションの名前とアドレス) を指定して、SDLC 構成から除去する場合に使用します。ルーターは 1 次エンド・ステーション (デフォルト) と見なされます。

構文 :

delete station name or address

Disable

disable コマンドは、SDLC リンク・ステーションとの接続の作成を阻止する場合に使用します。

構文 :

disable link
station . . .

link インターフェース上のすべての構成済み SDLC リンクへのデータの送受信を防止します。

SDLC インターフェースの構成

station name または *address*

指定されたエンド・ステーション (ステーション名またはアドレス) へのデータの送受信を防止します。

Enable

enable コマンドは、リモート SDLC リンク・ステーションへの接続を使用可能にする場合に使用します。

構文 :

```
enable                link
                        station
```

link ルーター内のサブシステム (たとえば、DLSw) が SDLC のファシリティーを使用できるようにします。

station name または *address*

指定された 2 次リモート・エンド・ステーション (リンク・ステーション名) に接続できます。

List

list コマンドは、1 つまたはすべての SDLC リンク・ステーションに関する構成情報を表示させる場合に使用します。

構文 :

```
list                  link
                        station name or all
```

link SDLC インターフェースの構成を表示します。

例 :

```
list link
Link configuration for: LINK_2 (ENABLED)

Role:          SECONDARY      Type:          POINT-TO-POINT
Duplex:        FULL           Modulo:        8
Idle state:    FLAG           Encoding:      NRZ
Clocking:      EXTERNAL       Frame Size:    2048
Speed:         0              Group Poll:    F3
Cable          V.36 DTE

Timers:        XID/TEST response: 2.0 sec
               SNRM response:     2.0 sec
               Poll response:      0.5 sec
               Inter-poll delay:   0.2 sec
               Inter-frame delay:  DISABLED
               Leading flags:      DISABLED
               Inactivity timeout  30.0 sec

Counters:      XID/TEST retry:    8
               SNRM retry:        6
               Poll retry:         10
```

Link configuration

ルーターの構成内の SDLC リンク・ステーションの名前と状態

Role set link role コマンドを使用して構成するリンク・ステーションの役割 (1 次、2 次、または交渉可能)

SDLC インターフェースの構成

- Type** リンクのタイプ (MULTIPOINT または POINT-TO-POINT)
- Duplex**
二重構成 (HALF または FULL)
- Modulo**
リンク上で使用するシーケンス番号範囲 (MOD 8 (0 ~ 7) または MOD 128 (0 ~ 127))
- Idle state**
インターフェースがデータを送信していないときに、伝送路上を送信されるビット・パターン (FLAG または MARK)
- Speed** インターフェースの物理データ速度。クロックが内部の場合、これは内部クロックによって生成されるデータ速度です。
- Group Poll**
多地点間リンク構成のためのグループ・ポーリング機能に使用されるアドレス。グループ組み込みが yes として構成されている 2 次ステーションは、このアドレスから受信した非番号制ポーリングに応答します。このリンクの 2 次ステーションに対してグループ・ポーリング機能を有効にするためには、このアドレスを非空文字にする必要があります。各 2 次ステーションには、グループ・アドレスに加えて、それぞれ固有のステーション・アドレスもあります。
- Cable** 使用するケーブルのタイプ (RS-232、V.35、V.36、または X.21) を指定します。
- Encoding**
SDLC 伝送符号化法を NRZ (非ゼロ復帰記録) または NRZI (非ゼロ復帰反転) として構成します。
- Clocking**
インターフェースのクロック (EXTERNAL または INTERNAL)
- Frame Size**
インターフェースを通して送信することができる最大フレーム・サイズ
- Timers:**
以下にリストされているタイマーは、すべて分解能 100ms です。
- XID/TEST resp.**
XID または TEST フレームを再送する前に、XID または TEST 応答メッセージを待つ時間。値が 0 の場合は、ルーターが際限なく再試行を続けることを示します。
- SNRM response**
ステーションが SNRM(E) を再送する前に、UA 応答メッセージを待つ最大時間
- Poll response**
再試行する前に、ポーリングされたステーションからの応答を待つ最大時間
- Inter-poll delay**
ルーター (1 次の役割をもつ構成) が応答を受信した後、次のステーションをポーリングするまでに待つ時間の長さ

SDLC インターフェースの構成

Interframe delay

フレーム間に送信されるフラグの数

Leading Flags

interframe delay (フレーム間遅延) が不十分でこのリンクの相手側端に応答が送信されなかった場合に送信されるフラグの数

Inactivity timeout

アイドル NRM/E 2 次ステーションの場合、インターフェースがステーションを回復状態に変更する前に経過する時間を設定します。0 (ゼロ) に設定すると、ステーションは無期限にアイドル状態のままになります。

Counters:

XID/TEST retry

ルーターがタイムアウト前に応答を受信しないで XID または TEST フレームを送信する最大回数。値が 0 の場合は、ルーターが際限なく再試行することを示します。

SNRM ルーターがタイムアウト前に応答を受信しないで SNRM(E) フレームを送信する最大回数。値が 0 の場合は、ルーターが際限なく再試行することを示します。

Poll retry

ルーターがタイムアウト前に応答を受信しないでステーションをポーリングする最大回数。値が 0 の場合は、ルーターが際限なく再試行を続けることを示します。

注: duplex type、 speed、 cable type、 encoding、 clocking、 leading flags、 および inter-frame delay などの物理レイヤー・パラメーターは、SDLC ダイアル回線の場合は該当せず、 **list link** コマンドでは表示されません。

station all または **address** または **link station name**

指定された SDLC リンク・ステーションまたはすべてのリンク・ステーションの情報を表示します。

例 :

```
list station c1
Address  Name      Status  Max BTU  Rx Window  Tx Window
-----  -
C1(00)  SDLC_C1   Enabled  2005     7           7
```

例 :

```
list station all
Address  Name      Status  Max BTU  Rx Window  Tx Window
-----  -
C1(00)  SDLC_C1   ENABLED  2005     7           7
C3(F3)  SDLC_C3   DISABLED  2009     7           7
```

Address

SDLC リンク・ステーションのアドレス。括弧内のアドレスは、そのステーションのグループ・アドレスです。(00) は、グループ・アドレスが定義されていないことを示します。

Name SDLC リンク・ステーションの文字ストリングでの名前指定

Status

SDLC リンク・ステーションの状態 (ENABLED または DISABLED)

Max BTU

ステーションのフレーム・サイズ限界。このフレーム・サイズは、**set link frame-size** コマンドを用いて構成された最大基本伝送単位 (BTU) パケット・サイズより大きくすることはできません。

Rx Window

受信ウィンドウのサイズ

Tx Window

送信ウィンドウのサイズ

Set

set コマンドは、1 つまたはすべての SDLC リンク・ステーションに関する特定の情報を構成する場合に使用します。

構文 :

```

set                link cable*
                    link clocking*
                    link duplex* . . .
                    link encoding* . . .
                    link frame-size
                    link group poll* ...
                    link idle* . . .
                    link inactivity ...
                    link inter-frame delay*
                    link leading flags*
                    link modulo . . .
                    link name
                    link poll . . .
                    link role* . . .
                    link snrm
                    link speed*
                    link type* . . .
                    link xid/test
                    station address . . .

```

* 注: これらのコマンドは、SDLC ダイヤル回線インターフェースの場合は使用不能です。

link cable *type*

このインターフェースに接続されるケーブルを設定します。オプションは、次の DCE および DTE タイプ、つまり V.36、RS-232、V.35、および X.21 です。

SDLC インターフェースの構成

表87 は、各種のアダプターに構成できるケーブル・タイプを示しています。

表 87. 2216 インターフェースのケーブル・タイプ

アダプター・タイプ	ケーブル・タイプ
8 ポート EIA 232	RS-232 DTE および RS-232 DCE
6 ポート V.35/V36	V.35 DCE、V.35 DTE、V.36 DCE、または V.36 DTE
8 ポート X.21	X.21 DCE および X.21 DTE

ルーターをあるタイプの DCE 装置 (たとえば、モデムまたは DSU/CSU) に接続する場合は、DTE ケーブルを使用します。

ルーターが DCE として動作し、直接接続のためのクロックを提供する場合は、DCE ケーブルを使用します。

link clocking *internal* または *external*

SDLC リンクのクロックを構成します。モデムまたは DSU に接続する場合は、クロックを外部として設定します。別の DTE 装置に直接接続する場合は、DCE ケーブルを使用し、クロックを内部として設定し、クロック速度を構成します。695ページの表89 を使用して、内部クロックが使用されているときに各種アダプターに設定できるクロック速度を調べてください。

link duplex *full* または *half*

SDLC 伝送路を 全二重 または 半二重 シグナル用として構成します。半二重 では、2216 が RTS を上げ、データを送信する前に CTS が見えることを予想することを意味します。全二重 では、2216 は CTS が立ち上がるのを待たないでデータを送信することを意味します。

注: 全二重では、SDLC プロトコル・レベルでの SDLC の動作の仕方を制御しません。2216 でサポートされるのは、SDLC 半二重とも呼ばれる両方向交互モードだけです。

link encoding *nrz* または *nrzi*

SDLC 伝送符号化法を NRZ (非ゼロ復帰記録) または NRZI (非ゼロ復帰反転) として構成します。NRZ がデフォルトです。

link frame-size

データ・リンク上で送受信できるフレームの最大サイズを構成します。有効な入力値を表88 に示します。

表 88. Link Frame-Size コマンドのフレーム・サイズの有効値

最小	最大	デフォルト値
128	8187	2048

リンク・フレーム・サイズは、**set station xxx max packet** コマンドを用いて構成した最大パケット・サイズより大きく設定します。そうでないと、ルーターは自動的に最大パケット・サイズをリンク・フレーム・サイズとして設定し直し、次のような ELS メッセージを出します。

```
SDLC.054: nt 3 SDLC/0 Stn xx-MaxBTU too large for Link adjusted (4096->2048)
```

例 : set link frame-size

```
Frame size in bytes (128 -8187)[2048]?
```


link group-poll

リンク上の 2 次ステーションのグループ・ポーリング・アドレスを設定します。SDLC ソフトウェアは、IBM 3174 グループ・ポーリング機能をサポートします。グループ・ポーリング・リストにステーションを組み込む場合は、**add station** または **set station group inclusion** コマンドを使用します。

例 :

```
set link group-poll
Enter group poll address (in hex) [00:]?f3
Group poll support enabled
```

link idle flag

SDLC フレーム転送の送信アイドル状態を構成します。デフォルト設定はフラグ・オプションで、これはフレーム相互間に連続フラグ (7E) を提供しません。

例 : **set link idle flag**

リンクはフラグ・アイドルを透過的に受け取ります。

link idle mark

SDLC フレーム転送の送信アイドル状態を構成します。マーク・オプションは、フレーム間の伝送路をマーキング状態 (OFF, 1) にします。

link inactivity #-of-seconds

アイドル NRM/E 2 次ステーションの場合、インターフェースがステーションを回復状態に変更する前に経過する時間を設定します。範囲は 0 ~ 7200 秒です。デフォルト値は 30 です。0 (ゼロ) に設定すると、ステーションは無期限にアイドル状態のままになります。

例 :

```
set link inactivity
Enter secondary link station inactivity timeout :[30.0]?
```

link inter-frame delay seconds

転送されるパケット間に遅延を挿入することができます。このコマンドは、フレーム相互間の最小遅延を保証することにより、相手側の旧型で低速のシリアル装置に整合させます。このパラメーターは、フレーム間の時間の量を秒単位で表したものです。

有効値: 0 ~ 120

デフォルト値 : 0

例 :

```
set link inter-frame delay
Transmit Delay Counter [0]?
```

link leading flags

先行フラグの数を設定します。このコマンドを使用するのは、フレーム間遅延が不十分で、2216 から別の装置への応答の遅延が許されない場合です。モデムが CTS モデム・シグナルを上げしだい、パケットを受信することができない半二重モデムを使用している場合も、このコマンドを使用して先行フラグ遅延を設定する必要があります。

有効値 : 0 ~ 100

デフォルト値 : 0

SDLC インターフェースの構成

例 :

```
set link leading flags
Leading flags delay [0]?
```

link modulo 8 or 128

リンクで使用するシーケンス番号範囲 (MOD 8 (0-7) または MOD 128 (0 - 127)) を指定します。デフォルト値は 8 です。

注: この値を変更すると、ウィンドウ・サイズが無効になります。 **set station** コマンドを使用して、受信ウィンドウおよび送信ウィンドウのサイズを変更してください。有効なウィンドウ・サイズは、mod 8 の場合は 0 ~ 7 で、mod 128 の場合は 8 ~ 127 です。

また、接続の起動時に、SNRM ではなく SNRME が使用され、監視フレーム・ヘッダーは追加バイト分だけ拡張されます。

link name

構成するリンクの文字ストリングを設定します。このパラメーターは情報としてのみ使用されます。

例 :

```
set link name
Enter link name: [LINK_0]?
```

link poll delay

インターフェースを介して送信される各ポーリング間の時間遅延を構成します。

例 :

```
set link poll delay
Enter delay between polls [0.2]?
```

link poll retry

接続をクローズする前に、インターフェースが 2 次 SDLC リンク・ステーションのポーリングを再試行する回数を構成します。

例 :

```
set link poll retry
Enter poll retry count (0 = forever) [10]?
```

link poll timeout

タイムアウトになる前に、インターフェースがポーリング・レスポンスを待つ時間を構成します。

例 :

```
set link poll timeout
Enter poll timeout [2.0]?
```

link role *primary* または *secondary* または *negotiable*

インターフェースを SDLC 1 次、2 次、または交渉可能リンク・ステーションとして構成します (デフォルトは 1 次)。

注:

1. DLSw の場合、**negotiable** は初期ポーリングに X'FF' (放送アドレス) を使用します。

役割を交渉するのに放送アドレスを使用する場合、リンクはデフォルトの SDLC 構成を使用します。

SDLC インターフェースの構成

primary がリンクの役割のときは、リンクは特定アドレスに対して初期ポーリングを行います。

2. APPN ポイント・ポイントまたは交渉可能の場合、初期ポーリングには放送アドレスが使用されます。1次多地点の場合は、特定のアドレスが使用されます。
3. 交換 SDLC の場合は、装置は1次である必要があるため、**link role type** は、SDLC ダイアル回線インターフェースでは構成不能です。

link snrm timeout または retry

一次ステーションの以下の SNRM(E) 情報を構成します。

timeout

SNRM(E) を再送する前に、非番号制確認 (UA) 応答を待つ時間

retry あきらめる前に、レスポンスを受信せずに SNRM (E) 再送する回数

例 :

```
set link snrm timeout
Enter SNRM response timeout [2.0]?
```

例 :

```
set link snrm retry
Enter SNRM retry count (0=forever) [6]?
```

link speed

内部クロックの場合、このコマンドは送信および受信クロック回線の速度を指定します。

- インターフェース 1
 - 4 ポート WAN コンセントレーション・アダプターのポート 1
 - 8 ポート WAN コンセントレーション・アダプターのポート 1 および 5
- 範囲は 2400 ~ 2048000 bps です。表90 を使用して、各種のアダプターに設定できるクロック速度を調べてください。

表 89. 2216 インターフェースで内部クロックが使用される場合の回線速度

アダプター・タイプ	速度範囲
8 ポート EIA 232	9600 ~ 64 000 bps
6 ポート V.35/V.36	9600 ~ 460 800 bps、1 544 000 bps、または 2 048 000 bps
8 ポート X.21	9600 ~ 460 800 bps、1 544 000 bps、または 2 048 000 bps

クロックが外部の場合も回線速度を設定できます。ただし、これはハードウェアには影響を与えません。外部クロックが使用されているときにサポートされる回線速度は、表90 を参照してください。

表 90. 2216 インターフェースで外部クロックが使用される場合の回線速度

アダプター・タイプ	速度範囲
8 ポート EIA 232	2400 ~ 64 000 bps
6 ポート V.35/V.36	2400 ~ 2 048 000 bps
8 ポート X.21	2400 ~ 2 048 000 bps

例 :

```
set link speed
Line Speed [64000]?
```

SDLC インターフェースの構成

link type *multipoint* または *point-to-point*

SDLC リンクを多地点間リンクまたはポイント・ポイント・リンクとして構成します。

注: 交換 SDLC の場合は、リンクはポイント・ポイントである必要があるので、**link type** は、SDLC ダイアル回線インターフェースでは構成不能です。

link xid/test *timeout* または *retry*

1 次ステーションの以下の XID/test 情報を構成します。

timeout

XID または TEST フレームを再送する前に、XID または TEST フレーム応答を待つ最大時間

retry あきらめる前に、XID または TEST フレームを再送する最大回数。0 (ゼロ) に設定すると、ルーターは無期限に再試行します。

remote-secondary *address* または *link_station_name address <argument>*

リモート・ステーションの SDLC アドレス (02 ~ FE の範囲) を変更します。

例 : `set remote-secondary SDLC_C1 address ce`

station *address* または *name address*

ステーションの SDLC アドレス (01 ~ FE の範囲) を変更します。

例 :

```
set station c1 address
Enter station address (in hex) [C1]?
```

station *address* または *link station name group-inclusion no* または *yes*

SDLC 2 次ステーションの場合、このステーションをこのリンクのグループ・ポーリング・リストに含めるかどうかを設定します。これを有効にするためには、**set link group-poll** コマンドを使用して、グループ・ポーリング・アドレスを追加します。

例 : `set station c1 group-inclusion yes`

station *address* または *name max-packet*

ステーションが受信できるパケットの最大サイズ (デフォルトは 2048)。最大パケット・サイズは、**set link frame-size** コマンドを用いて構成されるリンク・フレーム・サイズより大きく設定しないようにします。そうしないと、ルーターが最大パケット・サイズをリンク・フレーム・サイズに自動的に設定し直して、次のような ELS メッセージを出します。

```
SDLC.054: nt 3 SDLC/0 Stn xx-MaxBTU too large for Link adjusted (4096->2048)
```

例 :

```
set station c1 max-packet
Enter max packet size [2048]?
```

station *address* または *name name*

SDLC ステーションの名前

例 :

```
set station c1 name
Enter station name [SDLC_C1]?
```

station address または name receive window

ルーターがレスポンスを送信する前に受信できるフレームの最大数。範囲は 1 ~ 7 で、デフォルトは 7 です。

例 :

```
set station c1 receive-window
Enter receive window [7]?
```

station address または name transmit-window

ルーターがレスポンス・フレームを受信する前に送信できるフレームの最大数。範囲は 1 ~ 7 で、デフォルトは 7 です。

例 :

```
set station c1 transmit-window
Enter transmit window [7]?
```

SDLC 監視環境へのアクセス

監視環境は GWCON プロセスです。GWCON プロセスに入るには、次のようにします。

- OPCON (*) プロンプトで **talk 5** (または **t 5**) と入力する。これにより、次の例のような GWCON (+) プロンプトが表示されます。

```
MOS Operator Control
```

```
* talk 5
+
```

- 次に、SDLC 装置に関して以前に構成したインターフェースを識別する番号を指定して、**network #** コマンドを入力する。

```
+ network 2
SDLC Console
SDLC-2>
```

GWCON (監視) コマンドはすべて + プロンプトで入力します。

監視環境に関する情報は、3ページの『第1章 はじめに』を参照してください。

SDLC 監視コマンド

この節では、SDLC コンソールおよび関連のコマンドの要約を示し、個々のコマンドについて説明します。これらのコマンドは、データベースから情報を収集するのに使用します。表91 に、SDLC 監視コマンドとその機能がリストしてあります。

表91. SDLC 監視コマンドの要約

コマンド	機能
? (Help)	このコマンド・レベルで使用可能なコマンドをすべて表示するか、特定のコマンドに関するオプション (ただし、選択可能な場合) をリストします。12ページの『ヘルプを得る』を参照してください。
Add	SDLC リンク・ステーションを追加します。
Clear	SDLC インターフェースに関するカウンターをクリアします。
Delete	SDLC リンク・ステーションを動的に除去します。
Disable	1 つの SDLC リンク・ステーションへの接続を使用不可にします。
Enable	1 つの SDLC リンク・ステーションへの接続を使用可能にします。

Disable

disable コマンドは、SRAM 内の SDLC 構成に影響を及ぼさないで、1 つまたはすべての SDLC リンク・ステーション上の接続確立を使用不可にする場合に使用します。ステーションへの既存の接続がある場合は、**disable** コマンドを使用すると、いずれも終了します。

構文: **disable**

```
link
  station . . .
```

link 全ての接続を終了して、インターフェースに構成されているすべての SDLC リンク・ステーションの接続を防止します。

station *name* または *address*

既存の接続を終了して、指定されたエンド・ステーション (リンク・ステーション名) への接続を防止します。

Enable

enable コマンドは、SRAM 内の SDLC 構成に影響を及ぼさないで、リモート SDLC リンク・ステーションとの接続確立を使用可能にする場合に使用します。

構文 :

```
enable
  link
  station . . .
```

link サブシステム (たとえば、DLSw) が SDLC のファシリティーを使用できるようにします。

station *name* または *address*

指定されたエンド・ステーションへの接続を可能にします。

List

list コマンドは、データ・リンク・レイヤーおよびインターフェースに特有の統計を表示するのに使用します。

構文 :

```
list
  link configuration
  link counters
  station . . .
```

link configuration

インターフェース上のすべての構成済み SDLC リンク・ステーションの情報を表示します。

list コマンドの例および追加情報については、688ページの『List』を参照してください。

link counters 前回のルーターのリスタートまたは前回の `clear counters` 以降の SDLC カウンターの情報を表示します。

SDLC インターフェースの構成

I-Frames

送受信された情報フレームの合計数

I-Bytes

送受信された情報バイトの合計数

Re-Xmit

再送されたフレームの合計数

UI-Frames

送受信された非番号制情報フレームの合計数

UI-Bytes

送受信された非番号制情報バイトの合計数

RR 送受信された受信可 (RR) の合計数

RNR 送受信された受信不可 (RNR) の合計数

REJ 送受信されたリジェクトの合計数

UP 送受信された非番号制ポーリング数 (グループ・ポーリング)

station all または *address* または *link station name*

指定された SDLC リンク・ステーションまたはすべてのステーションの状態を表示します。ソフトウェアでは、**add station** コマンドを使用して明示的に構成されてはいないが、プロトコル・レイヤー (DLSw または APPN) で定義および起動されたため、構成に追加されたステーションの横に * を表示します。

インターフェース上の指定された SDLC リンク・ステーション (リンク・ステーション名) の情報を表示します。

Address

SDLC リンク・ステーションのアドレス。括弧内のアドレスは、そのステーションのグループ・アドレスです。(00) は、グループ・アドレスが定義されていないことを示します。

Name SDLC リンク・ステーションの文字ストリングでの名前指定

Status

SDLC リンク・ステーションの状態

Enabled

使用可能であるが、割り当てられていない。

Idle 割り当てられているが、使用されていない。

Connected

接続状態

Disconnected

切断状態

Connecting

接続確立中

Discnectng

切断中

Recovering

一時データ・リンク誤りからの回復を試行中

Max BTU

リモート・ステーションのフレーム・サイズ限界。このフレーム・サイズは、**set link frame-size** コマンドを用いて構成された最大基本伝送単位 (BTU) パケット・サイズより大きくすることはできません。デフォルト値は 2048 バイトです。

Rx Window

受信ウィンドウのサイズ

Tx Window

送信ウィンドウのサイズ

station name または address counters

指定されたリンク・ステーションのフレーム送信および受信カウンタを表示します。

I-Frames

送受信された情報フレームの数

I-Bytes

送受信された情報バイトの数

Re-Xmit

再送されたフレームの数

UI-Frames

送受信された非番号制情報フレームの数

UI-Bytes

送受信された非番号制情報バイトの数

XID-Frames

送受信された識別交換フレームの数

RR 送受信された受信可フレームの数

RNR 送受信された受信不可フレームの数

REJ 送受信されたリジェクトの数

TEST 送受信されたテスト・フレームの数

SNRM 送受信された通常応答モード設定フレームの数

DISC 送受信された切断フレームの数

UA 送受信された非番号制確認フレームの数

DM 送受信された切断モード・フレームの数

FRMR 送受信されたフレーム・リジェクト・フレームの数

UP 送受信された非番号制ポーリング数 (グループ・ポーリング)

例 :

```
list link counters
  I-Frames   I-Bytes   Re-Xmit   UI-Frames   UI-Bytes
  -----   -
```

SDLC インターフェースの構成

Send	0	0	0	0	0
Recv	0	0		0	0
	RR	RNR	REJ	UP	
	-----	-----	-----	-----	
Send	0	0	0	0	
Recv	0	0	0	0	

例 :

list station all

Address	Name	Status	Max BTU	Rx Window	Tx Window
-----	-----	-----	-----	-----	-----
C1(00)	SDLC_C1	IDLE	2048	7	7
C2(F3)	SDLC_C2	ENABLED	2048	7	7

例 :

list station c1

Address	Name	Status	Max BTU	Rx Window	Tx Window
-----	-----	-----	-----	-----	-----
* C1(00)	SDLC_C1	ENABLED	2048	7	7

例 :

list station c1 counters

	I-Frames	I-Bytes	Re-Xmit	UI-Frames	UI-Bytes	XID-Frames
	-----	-----	-----	-----	-----	-----
Send	9	384	0	0	0	6
Recv	29	42792		0	0	3
	RR	RNR	REJ	TEST	SNRM	DISC
	-----	-----	-----	-----	-----	-----
Send	598	0	0	0	1	0
Recv	587	0	0	0	0	0
	UA	DM	FRMR	UP		
	-----	-----	-----	-----		
Send	0	0	0	0		
Recv	1	0	0	0		

Set

set コマンドは、SRAM 構成に影響を及ぼさないで、1 つまたはすべての SDLC リンク・ステーションに関する特定の情報を動的に構成する場合に使用します。SDLC 監視環境では、**set** コマンドが実行できるのは、リンクまたはステーションが使用不可にされている場合だけです。タイム値はすべて 0.1 秒の分解能で、秒数で入力します。

構文 :

```

set                link modulo . . .
                    link name
                    link poll . . .
                    link role* . . .
                    link type* . . .
                    link xid/test
                    station . . .

```

* 注: これらのコマンドは、SDLC ダイアル回線インターフェースではサポートされません。

link modulo

SRAM 構成に影響を与えずに、データ・リンクで使用されるシーケンス番号の範囲を動的に変更します。モジュール 8 はシーケンス番号範囲 0 ~ 7 を指定し、モジュール 128 は 0 ~ 127 を指定します。デフォルト値は 8 です。

注: この値を変更すると、送信および受信ウィンドウ・サイズが無効になります。 **set station** コマンドを使用して、受信ウィンドウおよび送信ウィンドウのサイズを変更してください。

link name

SRAM 構成に影響を与えずに、リンクの名前を動的に変更します。最大 8 文字を入力できます。このパラメーターは情報としてのみ使用されます。

例 :

```
set link name
Enter link name: [LINK_0]?
```

link poll delay または timeout または retry

SRAM 構成に影響を与えずに、以下のポーリング情報を動的に変更します。

delay インターフェースを介して送信される各ポーリング間の遅延を構成します。

timeout

タイムアウトになる前に、インターフェースがポーリング・レスポンスを待つ時間を構成します。

retry コネクションをクローズする前に、インターフェースがリモート SDLC リンク・ステーションのポーリングを再試行する回数を構成します。

例 :

```
set link poll delay
Enter delay between polls [0.2]?
```

link role primary、secondary、または negotiable

インターフェースを SDLC 1 次、2 次、または交渉可能リンク・ステーションとして構成します。デフォルトは 1 次です。このコマンドの使用は SRAM 構成には影響を与えません。

注:

1. DLSw の場合、**negotiable** は初期ポーリングに X'FF' (放送アドレス) を使用します。
役割を交渉するのに放送アドレスを使用する場合、リンクはデフォルトの SDLC 構成を使用します。
primary がリンクの役割のときは、リンクは特定アドレスに対して初期ポーリングを行います。
2. APPN ポイント・ポイントまたは交渉可能の場合、初期ポーリングには放送アドレスが使用されます。1 次多地点の場合は、特定のアドレスが使用されます。
3. 交換 SDLC の場合は、装置は 1 次である必要があるため、**link role type** は、SDLC ダイアル回線インターフェースでは構成不能です。

SDLC インターフェースの構成

link snrm timeout または **retry**

1 次ステーションの場合、SRAM 構成に影響を与えずに、以下の SNRM(E) 情報を動的に変更します。

timeout

SNRM(E) を再送する前に、非番号制確認 (UA) レスポンスを待つ時間

retry あきらめる前に、レスポンスを受信せずに SNRM (E) 再送する回数

例 :

```
set link snrm timeout
Enter SNRM response timeout [2.0]?
```

link type multipoint または **point-to-point**

SRAM 構成に影響を与えずに、SDLC リンクを多地点間リンクまたはポイント・ポイント・リンクに動的に変更します。

注: 交換 SDLC の場合は、リンクはポイント・ポイントである必要があるので、**link type** は、SDLC ダイアル回線インターフェースでは構成不能です。

link xid/test timeout または **retry**

1 次ステーションの場合、SRAM 構成に影響を与えずに、以下の XID/テスト情報を動的に変更します。

timeout

テスト・フレームを再送する前に、XID または TEST フレーム・レスポンスを待つ最大時間

retry あきらめる前に、XID または TEST フレームを再送する最大回数。
0 (ゼロ) に設定すると、ルーターは無期限に再試行します。

注: 以下のパラメーターの例および説明については、SDLC の構成に関する章の 691ページの『Set』に記載してあります。

station address または **name address**

ステーションの SDLC アドレスを変更します。

station address または **name max-packet**

このステーションが受信できるパケットの最大サイズ

station address または **name name**

SDLC ステーションの名前

station address または **name receive-window**

ルーターが、応答する前に送信するフレームの最大数

station address または **name transmit-window**

ルーターが、レスポンス・フレームを受信する前に送信するフレームの最大数

Test

指定された数の TEST フレームを指定されたステーションに送信し、レスポンスを待ちます。このコマンドは、接続の整合性をテストするのに使用します。テストを取り消すときは、任意のキーを押します。

注: このコマンドを使用する場合は、その前に指定したリンク・ステーションを使用不可にしておきます。

構文 :

```
test                station name or address #frames-to-send frame-size
```

例 :

```
test station c1
Number of frames to send [1]? 5
Frame length [265]?
Starting echo test -- press any key to abort
5 frames sent, 5 frames received, 0 compare errors, 0 timeouts
```

Number of test frames to send

送信するフレームの合計数

Frame length

送信するフレームの長さ。フレームの長さは、指定されたステーションの最大フレーム長より大きくすることはできません。

任意のキーを押せば、テストを打ち切ることができます。

SDLC インターフェースと GWCON インターフェース・コマンド

SDLC インターフェースには監視目的のコンソール・プロセスがありますが、GWCON 環境から **interface** コマンドを使用すると、2216 でも導入済みインターフェースに関する完全な統計を表示します。(interface コマンドの詳細については、117ページの『第10章 操作/監視プロセス (GWCON - Talk 5) とコマンド』を参照してください。)

SDLC インターフェースで表示される統計

interface コマンドを使用すると、SDLC 監視プロセスに入らなくても、SDLC 装置に関する統計を表示させることができます。この場合は、次のようにして、+ プロンプトで **interface** コマンドとインターフェース番号を入力します。

```
+ interface 12
```

このコマンドは、以下のフォーマットで統計をリストします。

Nt	Nt'	Interface	Slot-Port	Self-Test Passed	Self-Test Failed	Maintenance Failed
12	12	SDLC/0	Slot: 8 Port: 2	2	1	0

SDLC MAC/data-link on V.35/V.36 interface

Adapter cable: V.35 DTE

V.24 circuit: 105 106 107 108 109
 Nicknames: RTS CTS DSR DTR DCD
 PUB 41450: CA CB CC CD CF
 State: ON ON ON ON ON

SDLC インターフェースの構成

```
Line speed:          64.000 Kbps
Last port reset:    1 hour, 20 minutes, 42 seconds ago

Input frame errors:
  CRC error          0 alignment (byte length)          0
  missed frame       182 too long (> 2062 bytes)        0
  aborted frame      0 DMA/FIFO overrun              0
Output frame counters:
  DMA/FIFO underrun errors 0 Output aborts sent          0
```

Nt 初期構成時にソフトウェアによって割り当てられたインターフェース番号を示します。

Nt' 初期構成時にソフトウェアによって割り当てられたインターフェース番号を示します。

注: SDLC インターフェースの場合、Nt' インターフェース番号は、常に Nt インターフェース番号と同じです。

Slot SDLC を実行しているインターフェースのスロット番号を示します。

Port SDLC を実行しているインターフェースのポート番号を示します。

Self-test passed

SDLC インターフェースが自己テストに合格した合計数を示します。

Self-test failed

SDLC インターフェースが自己テストに合格できなかった合計数を示します。

Maintenance failed

保守障害の数の示します。

以下のパラメーターは、ケーブルが接続されている場合にのみ表示されます。表示される情報は、接続されているケーブルによって決まります。他のケーブルでは、異なるパラメーターが表示されます。

Adapter cable

レベル変換器が使用されているアダプター・ケーブルのタイプを示します。

V.24 circuit

V.24 で使用されている回線を示します。

Nicknames

V.24 回線で使われている信号を示します。

RS-232

EIA 232 (RS 232) 回線名

State V.24 回線、信号、およびピン割り当て (ON または OFF)

Line speed (configured)

SDLC インターフェースに現在構成されている回線速度を示します。

Last port reset

前回にポートがリセットされた時期を示します。

Input frame errors

入力フレーム誤りタイプ (CRC 誤り、短過ぎる、アポルト、アライメント、長過ぎる、DMA/FIFO オーバーラン) および発生した誤りの合計数を示します。

Output frame counters

出力フレームの DMA/FIFO オーバーランおよび送信された出力強制終了の合計数を示します。

Missed frame

フレームが装置に到着したときに利用可能なバッファがない場合、ハードウェアはそのフレームを廃棄し、紛失フレーム・カウンターを増分します。

L & F bits not set

シリアル・インターフェース上で、ハードウェアは到着するフレームの入力記述子情報をセットします。バッファが到着したフレーム全体を受け入れることができる場合、ハードウェアはそのフレームの最後のビットと最初のビットの両方をセットして、バッファが完全なフレームを受け入れたことを示します。いずれかのビットがセットされていない場合、パケットは廃棄され、L & F bits not set カウンターが増分され、バッファは消去されて再利用できるようになります。

注: L & F bits not set カウンターがトラフィックによる影響を受けるとは考えられません。

SDLC インターフェースの構成

第46章 V.25bis ネットワーク・インターフェースの使用

V.25bis インターフェースは、ルーターが V.25bis モデムを使用して、交換電話回線を介してシリアル・コネクションを確立できるようにします。この章では、V.25bis インターフェースの使用法について説明します。本章には、以下の節が含まれています。

- 『開始の前に』
- 『構成手順』

注:

1. あて先名をコネクション・リストに割り当て、あて先番号をリスト内の各回線に割り当てることができます。あて先名がコールされると、接続されるまで、またはリストが尽きるまで、リスト内の番号が 1 つずつ試されます。
2. V.25bis は 8 ポート EIA 232 アダプターでのみサポートされます。

開始の前に

ルーター上の V.25bis を構成する前に、以下が用意されていることを確認してください。

- 同期 V.25bis コマンドおよび 1988 ITU/CCITT V.25bis 仕様をサポートする V.25bis モデム
- モデムが自動的に応答の発信元を検出しない場合は、以下を行う必要があります。
 - リンクの一端のモデムを発信コール用に構成する。
 - リンクの他端のモデムを応答用に構成する。
 - 応答側のモデムを自動応答用に設定する。

構成手順

この節では、ルーターを V.25bis 用に構成する方法について説明します。実行する必要があるタスクは、次のとおりです。

1. V.25bis アドレスを追加する。
2. V.25bis パラメーターを構成する。
3. ダイヤル回線を追加する。
4. ダイヤル回線を構成する。

注: V.25bis 構成の変更を有効にするためには、ルーターをリスタートする必要があります。

V.25bis アドレスの追加

各ローカル V.25bis インターフェースおよび各あて先の V.25bis アドレスを追加する必要があります。V.25bis アドレスには、次のものが含まれます。

V.25bis の使用

- アドレス名。アドレス名は、アドレスの記述です。最大 23 字までの印刷可能 ASCII スtringを使用できます。
- ネットワーク・ダイヤル・アドレス。ローカル・ポートまたはあて先ポートの電話番号です。最大 32 文字を接続された V.25bis モデムの有効なフォーマットで入力することができます。追加情報については、モデムの資料を参照してください。

注: CCITT によって定義され、IBM 2216 によってサポートされている電話番号の有効な文字セットには、以下が含まれます。

- 10 進数の 0 ~ 9
- コロン (:) -- "待機トーン"
- 左かぎ括弧 (<) -- "ポーズ"、数字シーケンス間に一定の遅延 (モデムによって異なる) を挿入するのに使用されます。たとえば、PBX または PTN を通す場合などに使用します。
- 等号 (=) -- "区切り記号 3"、これは "国内用" です。(モデムのマニュアルを参照してください。)
- 文字 P -- "パルス方式でダイヤルを継続" (一部のモデムではサポートされません。)
- 文字 T -- "DTMF 方式でダイヤルを継続" (一部のモデムではサポートされません。)

V.25bis アドレスを追加するには、Config> プロンプトで **add v25-bis-address** コマンドを入力します。たとえば、次のように入力します。

```
Config>add v25-bis-address
Assign address name [1-23] chars []? remote-site-baltimore
Assign network dial address [1-30 digits] []? 19095551234
```

V.25bis インターフェースの構成

この節では、V.25bis インターフェースを構成する方法について説明します。構成するには、以下を行います。

1. V.25bis 用のシリアル・ライン・インターフェースを設定するために、シリアル・ライン・インターフェースのデータ・リンク・プロトコルを設定する。Config> プロンプトから **set data-link v25bis** コマンドを使用します。たとえば、次のように入力します。

```
Config>set data-link v25bis
Interface Number [0]? 2
```

2. **network** コマンドに続けてインターフェースの番号を入力して、V.25bis Config> プロンプトを表示する。たとえば、次のように入力します。

```
Config>network 2
V.25bis Data Link Configuration
V25bis Config>
```

Config> プロンプトで **list devices** コマンドを使用すると、ルーター上に構成されているインターフェース番号のリストとを表示することができます。

3. **set local-address** コマンドを使用して、ローカル・ポートのネットワーク・アドレス名を指定する。 **add v25bis-address** コマンドを使用して定義したアドレス名の 1 つを入力する必要があります。たとえば、次のように入力します。

```
V25bis Config>set local-address
Local network address name []? remote-site-baltimore
```

注: 構成変更を有効にするためには、ルーターをリスタートする必要があります。

オプション V.25bis パラメーター

以下は、ユーザーが設定できるオプション V.25bis パラメーターです。これらのコマンドの詳しい説明は、715ページの『V.25bis 構成コマンド』を参照してください。

- アクセス不能なアドレスまたはその種のコールを拒否するアドレスへの連続コール回数を制限することができます。これを行うには、**set retries-no-answer** および **set timeout-no-answer** コマンドを使用します。
- **set disconnect-timeout** コマンドは、ルーターが前回のコールからの信号を除去した後、コールを開始するまでに待つ時間を制御します。
- **set command-delay-timeout** コマンドは、ルーターが DTR をオンにした後、コールを開始するかコールに応答するまでに待つ時間を制御します。
- **set connect-timeout** は、コールを設定するのに許容される秒数を指定します。
- **set duplex** コマンドでは、コールに関する二重化モードを指定します。
- **set encoding** コマンドでは、コールに関する符号化を設定します。
- インターフェースの構成を終了したら、**list** コマンドを使用して、構成を表示することができます。

ダイヤル回線の追加

ダイヤル回線は、V.25bis シリアル・ライン・インターフェースにマップされます。複数のダイヤル回線を 1 つのシリアル・ライン・インターフェースにマップすることも可能です。

ダイヤル回線を追加するには、Config> プロンプトから **add device dial-circuit** コマンドを使用します。ソフトウェアが、各回線にインターフェース番号を割り当てます。この番号を使用して、ダイヤル回線を構成します。

例:

```
Config>add device dial-circuit
Adding device as interface 6
```

注: ダイヤル回線は、デフォルトではポイント・ポイント・プロトコル (PPP) になります。また、ダイヤル回線がフレーム・リレー (FR) または SDLC を使用する設定にすることもできます。

ダイヤル回線の構成

この節では、ダイヤル回線の構成方法について説明します。ダイヤル回線コマンドの詳しい説明は、759ページの『第50章 ダイヤル回線の構成と監視』を参照してください。

注: encapsulator (カプセル化機能) タイプが SDLC の場合は、設定できるダイヤル回線パラメーターは、基本ネットワーク番号だけです。

ダイヤル回線を構成するには、以下を行います。

1. **network** コマンドに続けてダイヤル回線のインターフェース番号を入力して、Circuit Config> プロンプトを表示する。Config> プロンプトで **list devices**

V.25bis の使用

コマンドを使用すると、追加したダイヤル回線のリストを表示することができます。たとえば、次のように入力します。

```
Config>network 6
Circuit configuration
Circuit Config>
```

- ダイヤル回線を V.25bis インターフェースにマップする。基本ネットワークは V.25bis インターフェース番号です。たとえば、次のように入力します。

```
Circuit Config>set net
Base net for this circuit [0]? 0
```

- ダイヤル回線を接続するリモート・ルーターのアドレス名を指定する。 **add v25-bis-address** コマンドを使用して定義した名前の 1 つを入力する必要があります。たとえば、次のように入力します。

```
Circuit Config>set destination
Assign destination address name []? newyork
```

- ダイヤル回線をアウトバウンド・コール発信専用、インバウンド・コールの受信専用、またはコールの発信と受信の両方として構成する。

set calls コマンドを使用します。リンクの両側が同時にコール設定を試みた場合に競合を避けるために、リンクの一端のダイヤル回線はインバウンド・コールの受信専用構成し、リンクの他端のダイヤル回線はアウトバウンド・コールの発信専用構成します。たとえば、次のように入力します。

```
Circuit Config>set calls outbound
Circuit Config>set calls inbound
```

注: WAN 復元動作または別のダイヤル・オンデマンド・アプリケーションの場合は、回線はインバウンド・コール用とアウトバウンド・コール用のどちらかに設定する必要があります。

- 回線のタイムアウト期間を指定する。

set idle コマンドを使用します。この指定された期間、回線上にトラフィックがないと、ダイヤル回線はハングアップします。回線を専用回線として構成する場合は、アイドル・タイマーをゼロに設定します。回線をダイヤル・オンデマンドに構成する場合は、アイドル・タイマーをゼロ以外の値に設定します。範囲は 0 ~ 65535 で、デフォルトは 60 秒です。たとえば、次のように入力します。

```
Circuit Config>set idle
Idle timer (seconds, 0 means always active) [60]? 0
```

注: WAN 復元動作または WAN 再ルート動作の場合は、アイドル時間は 0 に設定する必要があります。

- オプションで、コール設定と初期パケット送信の間の時間を遅らせることができます。

set selftest-delay コマンドを使用します。自己テスト遅延を設定すると、初期パケットが廃棄されるのを防止できます。モデムが同期のために余分な時間が必要な場合は、この遅延を調整します。たとえば、次のように入力します。

```
Circuit Config>set selftest-delay
Selftest delay(milli-seconds,0 means no delay)[150]?200
```

- インバウンド・アドレス名を設定する。

set inbound コマンドを使用します。このコマンドを使用する必要があるのは、回線がインバウンド・コールとアウトバウンド・コールの両方に設定されており、ルーターのあて先アドレスが、リモート・ルーターがダイヤルするあて先

V.25bis の使用

アドレスと異なっている場合だけです。たとえば、ルーターの 1 つが PBX、国際、または LATA 間交換局を通す必要がある場合は、番号が異なることとなります。たとえば、次のように入力します。

```
Circuit Config>set inbound  
Assign destination inbound address name []? newyork
```

add v25-bis-address コマンドを使用して定義した名前の 1 つに一致していることが必要です。

8. **set duplex** コマンドを使用して、回線について二重化モードを設定する。
9. **set encoding** コマンドを使用して、回線について符号化モードを設定する。
10. オプションで、ダイヤル回線上で実行されているデータ・リンク・レイヤー・プロトコル (PPP またはフレーム・リレー) の構成プロセスに入ることができます。 **encapsulator** コマンドを使用します。たとえば、次のように入力します。

```
Circuit Config>encapsulator
```

V.25bis の使用

第47章 V.25bis ネットワーク・インターフェースの構成と監視

この章では、V.25bis の構成およびオペレーショナル・コマンドと GWCON コマンドについて説明します。本章には、以下の節が含まれています。

- 『インターフェース構成プロセスへのアクセス』
- 『V.25bis 構成コマンド』
- 720ページの『インターフェース監視プロセスへのアクセス』
- 720ページの『V.25bis 監視コマンド』
- 725ページの『V.25bis と GWCON コマンド』

インターフェース構成プロセスへのアクセス

V.25bis 構成プロセスにアクセスするには、以下の手順を使用します。

1. OPCON プロンプトで **talk** コマンドと CONFIG の PID を入力する。(このコマンドの詳細については、第4章 OPCON プロセス を参照してください。) たとえば、次のように入力します。

```
* talk 6  
Config>
```

talk 6 コマンドを入力すると、コンソール上に CONFIG プロンプト (Config>) が表示されます。最初に **CONFIG** に入ったときにプロンプトが表示されない場合は、再度 **Return** を押してください。

2. CONFIG プロンプトで、**list devices** コマンドを入力して、ルーターが現在構成されているネットワーク・インターフェース番号を表示させる。
3. インターフェース番号を記録する。
4. CONFIG **network** コマンドと、構成したいインターフェースの番号を入力する。たとえば、次のように入力します。

```
Config> network 1  
V.25bis Config>
```

これで、V.25bis 構成プロンプトがコンソールに表示されます。

V.25bis 構成コマンド

716ページの表92 は、V.25bis 構成コマンドの要約を示しており、本節の残りの部分で、個々のコマンドについて説明します。これらのコマンドを用いて、V.25bis 構成を表示、作成、または変更することができます。V.25bis 構成コマンドは、V.25bis Config> プロンプトで入力します。

V.25bis 構成コマンド

表 92. V.25bis 構成コマンドの要約

コマンド	機能
? (Help)	このコマンド・レベルで使用可能なコマンドをすべて表示するか、特定のコマンドに関するオプション (ただし、選択可能な場合) をリストします。 12ページの『ヘルプを得る』を参照してください。
List	V.25bis 構成を表示します。
Set	ローカル・アドレス、接続、切断、および無応答タイムアウト、無応答後の再試行回数、二重化モード、コマンド遅延タイムアウト、および符号化を設定します。
Exit	直前のコマンド・レベルに戻ります。 13ページの『下位レベル操作環境を終了する』を参照してください。

List

list コマンドは、現行の V.25bis 構成を表示するのに使用します。

構文：

list

例：

```
list
      V.25bis Configuration

Duplex                = Full
Encoding              = NRZ
Local Network Address Name = v403
Local Network Address  = 15088982403

Non-Responding addresses:
Retries               = 1
Timeout               = 0 seconds

Call timeouts:
Command Delay         = 0 ms
Connect               = 60 seconds
Disconnect            = 2 seconds

Cable type            = V.35 DTE
Speed                 = 9600
```

Duplex

ダイヤル接続が確立された後のインターフェースに関する二重モードを表示します。

Encoding

ダイヤル接続が確立された後のインターフェースに関する伝送符号化法を表示します。符号化法は、NRZ (非ゼロ復帰) と NRZI (非ゼロ復帰反転) のどちらかです。

Local Network Address Name:

ローカル・ポートのネットワーク・アドレス名を表示します。

Local Network Address:

ローカル・ポートのネットワーク・ダイヤル・アドレスを表示します。

Non-responding addresses:

Retries

ルーターがタイムアウト期間中に無応答アドレスに対して試みるコールの最大回数

Timeout

無応答アドレスへの最大試行回数に達した場合は、ルーターは、この時間が満了するまでは、コールの設定を試みません。このタイムアウト期間は、ルーターが最初のコールを試みた時点から始まります。

Call timeouts:

コールのタイムアウトの回数

Command Delay

ルーターが DTR (データ端末レディー) をオンにした後で、コールの開始またはコールへの応答を行うまでに待つ時間の長さ (ミリ秒数)。このパラメーターを 0 に設定した場合、モデムが CTS (送信可) で DTR に応答するのを待ってから、ルーターはコマンドを出します。

Connect

コールを設定するのに許容される秒数。このパラメーターが 0 に設定されている場合は、モデムが接続確立タイムアウトを制御します。

Disconnect

DTR を除去した後、ルーターはこの時間だけ待ってから次のコールを開始します。このパラメーターを 0 に設定した場合は、モデムが CTS および DSR を除去することによって DTR 除去に応答するのを待ってから、ルーターは次のコールを開始します。

Set

set コマンドは、ローカル・アドレス、コールに関するタイムアウトと遅延、無応答アドレスに関する再試行回数とタイムアウト、および HDLC ケーブル・タイプを構成する場合に使用します。

構文 :

```
set                command-delay timeout . . .
                   connect-timeout . . .
                   disconnect-timeout . . .
                   duplex
                   hdlc cable . . .
                   hdlc encoding . . .
                   hdlc speed . . .
                   local-address . . .
                   retries-no-answer . . .
                   timeout-no-answer . . .
```

V.25bis 構成コマンド

command-delay-timeout # of milliseconds

ルーターは DTR (データ端末レディー) をオンにした後、この時間数だけ待ってから、コールの開始またはコールに応答します。このパラメーターを 0 に設定した場合、モデムが CTS (送信可) で DTR に応答するのを待ってから、ルーターはコマンドを出します。範囲は 0 ~ 65535 ミリ秒で、デフォルトは 0 です。

connect-timeout # of seconds

コールを設定するのに許容される秒数を設定します。範囲は 0 ~ 65535 秒で、デフォルトは 60 です。このパラメーターを 0 に設定すると、モデムが接続タイムアウトを制御します。最初にこのパラメーターを 0 に設定してから、ELS イベント V25B.027 を使用して、種々のあて先に接続を確立するのにかかる時間を見付けます。その後で、このパラメーターを、最長接続時間よりわずかに高い値に設定することができます。

注: 通常は政府規制により、モデム製造業者はコール設定を最大長にするように制限されています。この値は単に最適化に過ぎませんが、一部の DSU と相互運用するときは、このパラメーターを変更することが必要になる場合があります。

disconnect-timeout # of seconds

ルーターが DTR を除去した後、次のコールを開始するまでの時間 (秒数) を指定します。範囲は 0 ~ 65535 秒で、デフォルト値は 2 です。このパラメーターを 0 に設定した場合、モデムが CTS (送信可) で DTR に応答するのを待ってから、ルーターはコマンドを出します。

duplex

伝送路の二重のタイプを指定します。

全二重が構成されている場合は、ダイヤル接続が確立されると、RTS モデム・シグナルは代入されたままです。

半二重が構成されている場合は、送信する時間になると、ルーターは RTS を上げ、CTS がモデムによって代入されるのを待ちます。CTS が代入された後は、ルーターはデータ・パケットを送信してから、ルーターが送信を終えると、RTS を除去して、ピア装置が応答できるようにします。

半二重を構成するのは、V.25bis インターフェースを使用して交換 SDLC を処理し、接続されたモデムが半二重モードの動作を必要とする場合だけにします。

注:

1. PPP 回線またはフレーム・リレー回線の場合は、全二重であることが必要です。
2. 8 ポート EIA-232E アダプター上の V.25bis インターフェースに関して半二重を構成する場合は、**set hdlc speed** コマンドを使用して、伝送速度を構成する必要があります。

有効値: 全二重または半二重

デフォルト値: 全二重

hdlc cable rs232 dtc

このインターフェースに接続されるケーブルのタイプを指定します。このパ

V.25bis 構成コマンド

ラメーターを設定した場合は、GWCON (+) プロンプトで **interface** コマンドを入力したり、V.25bis> 監視プロンプトで **statistics** コマンドを入力すると、ケーブル・タイプを表示させて見ることができます。このパラメーターは、ルーターの動作には影響を与えません。

hdlc encoding

HDLC 符号化法を NRZ (非ゼロ復帰) または NRZI (非ゼロ復帰反転) に設定します。ほとんどの構成では NRZ を使用します。構成された符号化はエンド・エンド・コネクションに使用されます。

注: NRZI を構成する場合でも、DTE とモデムとの間の交換 (CCITT 勧告 V.25bis に記述されている) では、符号化法として NRZ を使用します。

有効値 : NRZ または NRZI

デフォルト値 : NRZ

hdlc speed

このインターフェースの回線速度を指定します。このパラメーターを設定した場合、GWCON (+) プロンプトで **interface** コマンドを入力したとき、および V.25bis> 監視プロンプトで **statistics** コマンドを入力したときに、回線速度が表示されます。範囲は 2400 ~ 64 000 bps です。デフォルトは 9600 bps です。

注: このコマンドは実際の回線速度には影響を与えませんが、一部のプロトコル (IPX など) が、V.25bis インターフェースにマップされるダイヤル回線のルーティング・コストを計算するのに使用する速度を設定します。

local-address *address name*

ローカル・ポートのネットワーク・ダイヤル・アドレスを表示します。このアドレス名は、Config> で、**add v25-bis-address** コマンドを使用して定義した名前の 1 つに一致する必要があります。

例: **set local-address line-1-local**

retries-no-answer *value*

一部の電話サービス提供者は、自動リコール装置に対して、アクセス不能アドレスまたはその種のコールを拒否するアドレスへの連続コール回数を制限しています。このパラメーターは、ルーターがタイムアウト期間に無応答アドレスに試行するコールの最大数を指定します。範囲は 0 ~ 10 で、デフォルトは 1 です。

注: 政府規制により、モデム製造業者がこのパラメーターを変更するのを制限している場合もあります。

timeout-no-answer # of seconds

ルーターは、無応答アドレスへの **retries-no-answer** の最大数に達した場合、この時間が満了するまで、次のコールを開始しません。このタイムアウト期間は、あるアドレスにルーターが最初のコールを試みた時点で開始します。範囲は 0 ~ 65535 秒で、デフォルトは 0 です。このパラメーターを 0 に設定すると、モデムがタイムアウト期間を制御します。

インターフェース監視プロセスへのアクセス

V.25bis に関するインターフェース監視プロセスにアクセスする場合は、GWCON (+) コマンドで次のようにコマンドを入力します。

```
+ network #
```

ただし、# は、V.25bis シリアル・ラインの番号です。ダイヤル回線に関する V.25bis 監視プロセスに直接アクセスすることはできませんが、シリアル・ライン・インターフェースにマップされるダイヤル回線を監視することはできます。

注: V.25bis インターフェースには、V.25bis 関連のアクティビティを監視するのに使用できる ELS トラブルシューティング・メッセージもあります。詳細については、*IBM Nways イベント・ログ・システム・メッセージの手引き* を参照してください。

V.25bis 監視コマンド

この節では、V.25bis 操作コマンドについて要約した上で説明します。これらのコマンドを用いて、V.25bis インターフェースのコール、回線、パラメーター、および統計を見ることができます。

V.25bis 監視コマンドは、V.25bis> プロンプトで入力します。表93 は、コマンドをリストしています。

表 93. V.25bis 監視コマンドの要約

監視コマンド	機能
? (Help)	このコマンド・レベルで使用可能なコマンドをすべて表示するか、特定のコマンドに関するオプション (ただし、選択可能な場合) をリストします。12ページの『ヘルプを得る』を参照してください。
Calls	前回ルーター上で統計がリセットされた後で、このインターフェースにマップされた各ダイヤル回線ごとにそれぞれ行われて、完了した接続および試行された接続の数をリストします。
Circuits	V.25bis インターフェースに構成されたすべてのデータ回線の状態を示します。
Parameters	V.25bis インターフェースの現行パラメーターを表示します。(このコマンドは、V.25bis Config> list コマンドに似ています。)
Statistics	V.25bis インターフェースの現行統計を表示します。
Exit	直前のコマンド・レベルに戻ります。13ページの『下位レベル操作環境を終了する』を参照してください。

Calls

calls コマンドは、前回ルーター上で統計がリセットされた後で、このインターフェースにマップされた各ダイヤル回線ごとにそれぞれ行われて、完了した接続および試行された接続の数をリストする場合に使用します。

構文 :

calls

例 :

```
calls
Net Interface Site Name      In   Out  Rfsd  Blckd
1   PPP/0     v403          2    0    0     0

Unmapped connection indications:  0
```

Net このインターフェースにマップされたダイヤル回線の数

Interface

インターフェースのタイプおよびそのインスタンス番号

Site Name

ダイヤル回線のネットワーク・アドレス名

In このダイヤル回線に関して受け付けられたインバウンド接続の数

Out このダイヤル回線によって開始されて、完了した接続の数

Rfsd このダイヤル回線によって開始されて、ネットワークまたはリモートあて先ポートによって拒否された接続の数

Blckd ルーターがブロックした接続試行の回数。ルーターが接続試行をブロックするのは、ローカル・ポートがすでに使用中である場合、無応答アドレスへの再試行の最大回数に達している場合、またはモデムが応答していない場合です。

Unmapped connection indications:

着信コールを受け付けるよう構成されたダイヤル回線で、使用可能にされているものがなかったため、ルーターによって拒否された接続試行の回数

Circuits

circuits コマンドは、V.25bis ポート上に構成されたすべてのダイヤル回線の状態を表示させる場合に使用します。

構文 :

circuits

例 :

```
circuit
Net Interface MAC/Data-Link State Reason Duration
2   PPP/0     Point to Point Avail Rmt Disc 1:02:25
```

Net このインターフェースにマップされたダイヤル回線の数

Interface

インターフェースのタイプおよびそのインスタンス番号

MAC/DataLink

このダイヤル回線に関して構成されたデータ・リンク・プロトコルのタイプ

State ダイヤル回線の現在の状態

Up - 現在接続されています。

Available - 現在は接続されていませんが、利用可能です。

Disabled - ダイヤル回線は使用不可にされました。

V.25bis 操作コマンド

Down - ダイヤル回線がビジーであるか、リンク・レイヤー・プロトコルがダウンしているために、接続に失敗しました。

Reason

現在の状態の理由:

nnn_Data - (nnn はプロトコルの名前) プロトコルに送信するデータがあったので、回線は Up です。

Remote Disconnect - リモートあて先がコールを切断したので、回線は Down または Available のいずれかです。

Operator Request - 前回のコールが監視コマンドによって切断されたため、回線は Available です。

Inbound - 回線がインバウンド・コールに応答したので、回線は Up です。

Restoral - WAN 復元動作のため、回線は Up です。

Self Test - 回線は静的として構成されており (アイドル時間 = 0)、使用可能にされたときに正常に接続されました。

Duration

回線が現在の状態にある時間の長さ

Parameters

parameters コマンドは、現行の V.25bis シリアル・ライン構成を表示させる場合に使用します。これは、V.25bis Config> list コマンドで表示される情報と同じです。

構文 :

parameters

例 :

```
parameters
V.25bis port Parameters

Local Network Address Name   = v402
Local Network Address       = 15088982402

Non-Responding addresses:
Retries                     = 1
Timeout                     = 0 seconds

Call timeouts:
Command Delay               = 0 ms
Connect                    = 0 seconds
Disconnect                  = 0 seconds
```

Local Network Address Name:

ローカル・ポートのネットワーク・アドレス名

Local Network Address:

ローカル・ポートのネットワーク・ダイヤル・アドレス

Non-responding addresses:

Retries

ルーターがタイムアウト期間中に無応答アドレスに対して試みるコールの最大回数

Timeout

無応答アドレスへの最大試行回数に達した場合は、ルーターは、こ

V.25bis 操作コマンド

の時間が満了するまでは、コールの設定を試みません。このタイムアウト期間は、あるアドレスにルーターが最初のコールを試みた時点で開始します。

Call timeouts:

Command Delay

ルーターが DTR (データ端末レディー) をオンにした後で、コールの開始またはコールへの応答を行うまでに待つ時間の長さ (ミリ秒数)。このパラメーターを 0 に設定した場合、モデムが CTS (送信可) で DTR に応答するのを待ってから、ルーターはコマンドを出します。

Connect

コールを設定するのに許容される秒数。このパラメーターが 0 に設定されている場合は、モデムが接続確立タイムアウトを制御します。

Disconnect

DTR を除去した後、ルーターはこの時間だけ待ってから次のコールを開始します。このパラメーターを 0 に設定した場合は、モデムが CTS および DSR を除去することによって DTR 除去に応答するのを待ってから、ルーターは次のコールを発信します。

Statistics

statistics コマンドは、この V.25bis インターフェースに関する現行統計を表示させる場合に使用します。

構文 :

statistics

例 :

```
statistics
  V.25bis port Statistics

Adapter cable:          RS-232 DTE

Nicknames:   RTS CTS DSR DTR DCD RI
RS-232      CA CB CC CD CF CE
State:       OFF OFF OFF OFF OFF OFF

Line speed:          4800
Last port reset:    24 seconds ago

Input frame errors:
CRC error           0 alignment (byte length)    0
missed frame        0 too long (> 2182 bytes)    0
aborted frame       0 DMA/FIFO overrun          0
L & F bits not set  0

Output frame counters:
DMA/FIFO underrun errors  0 Output aborts sent      0
```

Adapter cable:

使用されているアダプター・ケーブルのタイプ

V.25bis 操作コマンド

Nicknames:

回線の通常名

RS-232

回線の EIA 232 (RS-232 と呼ばれる) 名

State: 回線の現在の状態で、ON、OFF、または "---" (これは状態がこのタイプのインターフェースについては未定義であることを意味します)。

Line speed:

送信クロック速度 (近似値)

Last port reset:

ポートのリセット以降の時間の長さ

Input frame errors:

CRC error

受信されたが、チェックサム誤りが含まれていたため廃棄されたパケットの数

Alignment (byte length)

受信されたが、長さが 8 の偶数倍でなかったため廃棄されたパケットの数

Missed Frame

フレームが装置に到着したときに利用可能なバッファがない場合、ハードウェアはそのフレームを廃棄し、紛失フレーム・カウンタを増分します。

too long (> nnnn bytes)

受信されたが、構成されたフレーム・サイズ (nnnn) より大きかったため廃棄されたパケットの数

aborted frame

受信されたが、送信側によって、または伝送路誤りによって廃棄されたパケットの数

DMA/FIFO overrun

シリアル・インターフェース・カードがシステム・パケット・バッファ・メモリーにデータを送信する速度が遅かったため、ネットワークからパケットを受信できなかった回数

L & F bits not set

シリアル・インターフェース上で、ハードウェアは到着するフレームの入力記述子情報をセットします。バッファが到着したフレーム全体を受け入れることができる場合、ハードウェアはそのフレームの最後のビットと最初のビットの両方をセットして、バッファが完全なフレームを受け入れたことを示します。いずれかのビットがセットされていない場合は、パケットは除去され、「L & F bits not set」カウンタが増分され、バッファはクリアされて再利用できるようになります。

注: L & F bits not set カウンタがトラフィックによる影響を受けるとは考えられません。

Output frame counters:

DMA/FIFO underrun errors

シリアル・インターフェース・カードがシステム・パケット・バッファ・メモリーからデータを取り出す速度が遅かったため、パケットをネットワーク上に送信できなかった回数

Output aborts sent

上位ソフトウェアの要求に応じて廃棄された伝送の数

V.25bis と GWCON コマンド

V.25bis には監視目的の独自の監視プロセスがありますが、GWCON 環境から interface、statistics、および error コマンドを使用すると、ルーターでも装置および回線に関する構成情報と完全な統計を表示します。また、GWCON **test** コマンドを使用して、DCE および回線をテストすることもできます。

注: V.25bis シリアル・インターフェースに対して **test** コマンドを出すと、現行のコールは除去され、再ダイヤルされます。

GWCON コマンドについての詳細は、117ページの『第10章 操作/監視プロセス (GWCON - Talk 5) とコマンド』を参照してください。

V.25bis インターフェースおよびダイヤル回線の統計

V.25bis シリアル・ラインおよびダイヤル回線に関する統計を表示させる場合は、**interface** コマンドを GWCON (+) プロンプトで使用します。

V.25bis シリアル・ライン・インターフェースに関して以下のような統計を表示させる場合は、**interface** コマンドを使用し、その後続けて V.25bis シリアル・ライン・インターフェースの インターフェース番号 を入力します。

例 : interface 10

```

Nt Nt' Interface Slot-Port          Self-Test Self-Test Maintenance
10 10  V.25/0   Slot: 4 Port: 0          Passed    Failed    Failed
      V.25bis Base Net MAC/data-link on EIA 232E/V.24 interface

Adapter cable:          RS-232 DTE

V.24 circuit: 105 106 107 108 109 125
Nicknames:   RTS CTS DSR DTR DCD RI
RS-232:      CA CB CC CD CF CE
State:       OFF OFF OFF ON  OFF OFF

Line speed:           ^19.200 Kbps
Last port reset:     55 minutes, 1 second ago

Input frame errors:
CRC error                6 alignment (byte length)      0
missed frame             1 too long (> 2054 bytes)      0
aborted frame           34 DMA/FIFO overrun            0
Output frame counters:
DMA/FIFO underrun errors 0 Output aborts sent          0

```

ダイヤル回線に関して以下のような統計を表示させる場合は、**interface** コマンドを使用し、その後続けてダイヤル回線の インターフェース番号 を入力します。

V.25bis 操作コマンド

例 :

```
interface 29
Nt Nt' Interface Self-Test Passed Self-Test Failed Maintenance Failed
29 10 PPP/20 2 1 0
Point to Point MAC/data-link on V.25bis Dial Circuit interface
```

以下のリストには、シリアル・ライン・インターフェースとダイヤル回線の両方の出力について説明してあります。

Nt シリアル・ライン・インターフェース番号またはダイヤル回線インターフェース番号

Nt' “Nt” がダイヤル回線の場合は、これはダイヤル回線がマップされる V.25bis シリアル・ライン・インターフェースの番号です。

Interface

インターフェース・タイプとそのインスタンス番号

Slot V.25bis が稼働しているインターフェースのスロット番号

Port V.25bis が稼働しているインターフェースのポート番号

Self-Test Passed

成功した自己テストの回数

Self-Test Failed

失敗した自己テストの回数

Maintenance: Failed

保守障害の数

Adapter cable:

使用されているアダプター・ケーブルのタイプ

V.24 circuit:

V.24 仕様によって識別されている回線番号

RS-232

回線の EIA 232 (RS-232 と呼ばれる) 名

State 回線の現在の状態 (ON または OFF)

Line speed

送信クロック速度 (近似値)

Last port reset

ポートのリセット以降の時間の長さ

Input frame errors:

CRC error

受信されたが、チェックサム誤りが含まれていたため廃棄されたパケットの数

Alignment (byte length)

受信されたが、長さが 8 の偶数倍でなかったため廃棄されたパケットの数

Missed Frame

フレームが装置に到着したときに利用可能なバッファがない場合、ハードウェアはそのフレームを廃棄し、紛失フレーム・カウンターを増分します。

too long (> nnnn bytes)

受信されたが、構成されたフレーム・サイズより大きかったので廃棄されたパケットの数

DMA/FIFO overrun

シリアル・インターフェース・カードがシステム・パケット・バッファ・メモリーにデータを送信する速度が遅かったため、ネットワークからパケットを受信できなかった回数

L & F bits not set

シリアル・インターフェース上で、ハードウェアは到着するフレームの入力記述子情報をセットします。バッファが到着したフレーム全体を受け入れることができる場合、ハードウェアはそのフレームの最後のビットと最初のビットの両方をセットして、バッファが完全なフレームを受け入れたことを示します。いずれかのビットがセットされていない場合は、パケットは除去され、「L & F bits not set」カウンターが増分され、バッファはクリアされて再利用できるようになります。

注: L & F bits not set カウンターがトラフィックによる影響を受けるとは考えられません。

aborted frame

受信されたが、送信側によって、または伝送路誤りによって廃棄されたパケットの数

Output frame counters:**DMA/FIFO underrun errors**

シリアル・インターフェース・カードがシステム・パケット・バッファ・メモリーからデータを取り出す速度が遅かったため、パケットをネットワーク上に送信できなかった回数

Output aborts sent

上位ソフトウェアの要求に応じて廃棄された伝送の数

V.25bis 操作コマンド

第48章 ISDN インターフェースの使用

重要

元の 2216 ISDN T1 および E1 単一ポート LIC (それぞれ IBM PN 11J7466 または 78H6147 および 11J7465 または 78H6148) では、DIAL クライアントに関する MAC アドレス割り当てをサポートしません。この割り当てが必要なのは、ユーザーが DIAL リモート LAN アクセス環境で固有に NetBIOS または SNA プロトコル、あるいはその両方を使用したいと考える場合だけです。その他の ISDN 機能および DIAL 機能 (たとえば、ダイヤルイン IP および IPX) については、すべてが正しく動作し、アップグレードを必要としません。新しい ISDN T1 および E1 単一ポート LIC では、DIAL クライアントおよびすべての DIAL 機能に関して、MAC アドレス割り当てをサポートします。元の ISDN LIC を使用されているユーザーで、NetBIOS または SNA DIAL 機能、あるいはその両方を使用したい場合は、新しい LIC へのアップグレードについて、IBM サービス技術員にご相談ください。

この章では、IBM 2216 上のサービス総合デジタル網 (ISDN) インターフェースについて説明します。この章は以下の節に分かれています。

- 『ISDN の概説』
- 733ページの『ISDN 原因符号』
- 735ページの『サンプル ISDN 構成』
- 736ページの『チャンネル化 T1/E1』
- 737ページの『ISDN インターフェースの要件と制約』
- 737ページの『開始の前に』
- 738ページの『構成手順』
- 743ページの『I.431 スイッチ変数』

ISDN の概説

ISDN インターフェース・ソフトウェアを使用すると、ISDN を介してルーターを相互接続することが可能になります。インターフェースは、専用リンクとして動作するように設定するか、もしくは交換回線接続を開始および受け入れるように設定して、リスタートから自動的にオンデマンドで動作するか、またはオペレーターがコマンドを出したときに動作するようにすることができます。

I.430、I.431、およびチャンネル化 T1/E1 は交換ではありません。固定専用回線タイプの接続です。

ISDN の使用

ISDN アダプターとインターフェース

IBM 2216 は、以下の ISDN-PRI アダプターをサポートします。

- 1 ポート・チャンネル化 E1 ISDN-PRI
- 1 ポート・チャンネル化 T1/J1 ISDN-PRI
- 4 ポート・チャンネル化 E1 ISDN-PRI
- 4 ポート・チャンネル化 T1/J1 ISDN-PRI

PRI/チャンネル化アダプターには、内蔵 CSU/DSU が備えられているので、外付け CSU/DSU は必要ありません。

注: BRI から PRI へ talk 6 からアップグレードする場合は、まず ISDN およびダイヤル構成をクリアしてから、PRI を立ち上げて、PRI 用に構成する必要があります。

- PRI アダプターは、多地点をサポートしません。
- PRI アダプターは、T1/J1 および E1 サポートを提供します。
 - T1/J1 は、23 の 64-Kbps B チャンネルと 1 つの 64-Kbps D チャンネルをサポートします。
 - E1 は、30 の 64-Kbps B チャンネルと 1 つの 64-Kbps D チャンネルをサポートします。
- PRI アダプターは、拡張ライン ID (LID) サポートを提供します。

ダイヤル回線

ダイヤル回線には 4 つのタイプがあります。

- 静的回線 (または、リンク)

注:

1. I.430、I.431、およびチャンネル化 T1/E1 は専用回線接続であり、したがって、ダイヤルはしません。
2. ISDN では、D チャンネルを通る X.25 トラフィックを静的回線と見なします。ただし、**encapsulator** コマンドをダイヤル回線構成のもとで使用しても、X.25 回線を PVC または SVC として構成することはできません。

- オンデマンドでダイヤルし、指定されたアイドル時間後にハングアップする交換回線
- 割り当てられた 1 次専用回線が故障したときにのみ使用される WAN 復元回線
- ダイヤルイン回線は、リモート・クライアントにネットワーク上の資源へのアクセスを与える場合に使用します。

ダイヤル・オンデマンド・インターフェースを介してブリッジングするときは、スパンニング・ツリーを使用不可にし、MAC フィルターを作成して、すべての不要なトラフィックを排除することをお勧めします。(MAC フィルターは、特定の MAC アドレスをあて先としないすべてのフレームを廃棄します。) これにより、不要なトラフィックのためにダイヤル回線が接続されたままになるのを防止できます。

注: FR ダイヤル・オンデマンド・インターフェース上で BAN トラフィックを伝送する場合は、MAC フィルターを追加する必要はありません。BAN ソフトウェア

ISDN の使用

アは常にフィルターを実行し、ダイヤル・オンデマンド回線をハングアップさせないブリッジング・トラフィックは、あて先 MAC アドレスが BAN DLCI MAC アドレスに一致するトラフィックだけであるようにします。

可能な各あて先ごとにダイヤル回線を追加します。複数のダイヤル回線を 1 つの ISDN インターフェイスにマップすることができます。各ダイヤル回線は、ポイント・ポイント・プロトコル (PPP)、フレーム・リレー、または D チャンネル専用の X.25 が稼働する、通常のシリアル・ライン・ネットワークです。これらのプロトコルは、ダイヤル回線を介して動作するように構成されています。

注: あて名を **コネクション・リスト** に割り当て (add ISDN address)、あて先番号をリスト内の各伝送路に割り当てることができます。あて名がコールされると、接続されるまで、またはリストが尽きるまで、リスト内の番号が 1 つずつ試されます。

ルート可能プロトコルやブリッジングおよびルーティング・フィーチャーは、ISDN インターフェイスと直接通信することはできません。これらのプロトコルはダイヤル回線上で実行するように構成する必要があります。この実現では、以下の ISDN ダイヤル回線のプロトコルおよびフィーチャーをサポートします。

- APPN
- Banyan VINES
- DECnet
- DLSw
- IP
- IPX
- AppleTalk 2
- ブリッジング (SRB、STP、SR-TB、および SRT)
- 帯域幅予約
- WAN 復元
- DIALS

アドレッシング

ISDN コールを行うには、あて先の電話番号を指定する必要があります。ユーザー自身をスイッチに識別するためには、ユーザー自身の電話番号を指定する必要があります。ISDN の場合、電話番号はコールされる側のネットワークのダイヤル・アドレスであり、便宜上、電話番号を表すネットワーク・アドレス名と呼ばれる名前が与えられています。

ISDN インターフェイスの設定時に、可能な各あて先のアドレスとユーザー自身の電話番号 (ローカル・ネットワーク・アドレスと呼ばれる) を追加します。ダイヤル回線の構成時に、ローカル・ネットワーク・アドレスを物理インターフェイス構成から入手して、その回線のあて先アドレスを設定します。

回線過多と回線の競合

ISDN PRI T1/J1 インターフェースでは、最大 25 の通信中のコールがサポートでき、ISDN PRI E1 インターフェースでは、最大 30 の通信中のコールがサポートできます。したがって、サポートされる通信中のコールより多くのダイヤル回線が、ISDN インターフェース上に構成されている可能性があります。このことを回線過多と呼びます。ISDN インターフェースですべてのコールが通信中であるとき、ダイヤル回線がコールを試みた場合は、起こりうる可能性として次の 2 つがあります。1) そのダイヤル回線の方がコールを通信中のダイヤル回線より優先順位が高い場合は、優先順位の低いダイヤル回線での通信中のコールは終了し、優先順位が高いダイヤル回線でのコールが試みられる。2) そのダイヤル回線がコールを通信中のどのダイヤル回線よりも優先順位が高くない場合は、コールは行われません。ルーターでは、ISDN であて先に接続できないダイヤル回線上のプロトコルによって送信されたパケットは、すべて除去します。

注: D チャンネルを通して X.25 が稼働している場合は、回線の競合は起こりません。D チャンネルは常時 X.25 接続で使用可能だからです。

優先順位についての詳細は、763ページの『Set』を参照してください。

デマンド回線を介したコスト制御

プロトコルから見ると、ダイヤル・オンデマンド回線は常にアップ状態に見えます。ほとんどのプロトコルは定期的にルーティング情報を送信し、ルーターはルーティング情報が送信されるたびに、ダイヤル・オンデマンド回線を介してダイヤルすることになります。定期的なルーティング更新を制限するために、IP および OSI が静的ルートのみを使用するように構成し、ダイヤル回線を介するルーティング・プロトコル (RIP、OSPF) を使用不可にします。IPX を使用している場合は、静的ルートおよびサービスを構成し、ダイヤル回線を介するルーティング・プロトコル (RIP、SAP) を使用不可にします。もう 1 つの選択は、RIP および SAP 更新間隔を低い頻度に構成することです。ただし、これは RIP および SAP が、発生したルーティング情報の変更を同報通信するのは防止できません。また、IPX キープアライブ・フィルターも使用可能にすることが必要です。これは、キープアライブおよびシリアル化パケットが連続的にダイヤル・オンデマンド・リンクを起動するのを防止します。

コーラー ID と LIDS

ISDN サービスが、ISDN セットアップ・メッセージの中に発信側番号 (CPN) を提供することによって、ANI または コーラー ID (CLID) を提供する場合、これを使用してダイヤル回線を該当するコーラーと照合することができます。そうしない場合は、プロプラエタリー (専有) 伝送路 ID プロトコル (LID) を使用するか、あるいは“ANY INBOUND”である回線を提供する必要があります。

LID プロトコルは、ダイヤル回線構成内のインバウンドあて先と受信した LID を使用して、発信側ダイヤル回線を受信側ダイヤル回線と照合します。LID プロトコルは、コーラーが開始し、受信側が応答する、簡単な識別プロトコルです。コーラーが

LID メッセージを提供しない場合、any_inbound ダイヤル回線が構成されていないと、受信側はそのコールを拒否することがあります。LID 交換は B チャンネルで行われます。

論理 ID (LID) をサポートしないルートに接続するときは、個々のダイヤル回線下の構成オプションを使用して、LID 交換を抑制することができます。

```
config> set lid_used no
```

着信側で lid_used=no の場合、そのコールは完了し、IBM 2216 は LID が B チャンネルに来るのを待ちません。そのかわり、IBM 2216 は、受信したコーラー ID を使用しようとします。コーラー ID に一致がないと、IBM 2216 は any_inbound ダイヤル回線が使用可能かどうかを検査します。そして、any_inbound 回線が使用可能でない場合は、そのコールは拒否されます。

発信側では、B チャンネルが割り当てられるとすぐに、PPP/FR 自己テストが開始します。

ISDN 原因符号

この ISDN 実現では、ルーターが ISDN インターフェースを介して接続の確立を試みるのを停止させる原因符号を指定しています。アプリケーションが再試行されると、ルーターは再びこのインターフェースを介して接続の確立を試み、元の問題が解決されていれば、その試みは成功します。再試行中にルーターが同じ原因符号を検出した場合は、アプリケーションがこのインターフェースを通してさらに接続処理を試みることはありません。

原因符号は、次のように解釈します。

1. cause0 が "0x5" でないときは、原因符号を無視する。
2. cause0 が "0x5" のときは、cause1 を見る。cause1 の高位 (最上位) ビットが ON のときは、それを OFF にセットする。
3. 結果を 10 進数に変換し、下表 (ITU-T 勧告 Q.850 から抜粋) で意味を調べる。

表 94. ISDN Q.931 原因符号

符号	原因
1	未割り当て (割り当てられていない番号)
2	指定中継ネットワークへのルートなし
3	あて先へのルートなし
6	チャンネル受け入れ不能
7	コール受付、確立チャンネルでコール通知中
16	通常のコール切断
17	ユーザー・ビジー
18	ユーザー応答なし
19	相手ユーザー応答なし (ユーザー呼出中)
21	コール・リジェクト
22	相手端末番号変更
26	非選択ユーザー切断

表 94. ISDN Q.931 原因符号 (続き)

符号	原因
27	相手端末故障
28	無効番号フォーマット (アドレス不完了)
29	ファシリティ拒否
30	状態照会 (STATUS ENQUIRY) への応答
31	正常、未指定
34	回線/チャンネル利用不可
38	ネットワーク障害
41	一時障害
42	スイッチング機器輻輳 (ふくそう)
43	アクセス情報廃棄
44	要求回線/チャンネル利用不可
47	リソース利用不可、未指定
49	サービス品質利用不可
50	要求ファシリティ未登録
57	伝達能力不許可
58	現在伝達能力不許可
63	サービスまたはオプション利用不可、未指定
65	伝達能力未定義
66	未提供チャンネル・タイプ指定
69	要求ファシリティ未定義
70	限定デジタル情報伝達能力のみ利用可
79	サービスまたはオプション未定義、未指定
81	無効コール番号値
82	識別チャンネル未定義
83	コール中断コールあり、ただしこのコール識別ではない
84	コール識別使用中
85	コール中断なし
86	要求されたコール識別のコールが切断された
88	端末属性不一致
91	無効中継ネットワーク選択
95	無効メッセージ、未指定
96	必須情報要素不足
97	メッセージ種別未定義
98	コール状態とメッセージ不一致、またはメッセージ種別未定義
99	情報要素未定義
100	無効通知要素
101	コール状態とメッセージ不一致
102	タイマー満了による回復
111	プロトコル誤り、未指定
127	相互接続、未指定

サンプル ISDN 構成

以下に、幾つかの標準的な ISDN 構成を示します。

ISDN を介するフレーム・リレー構成

図48 は、ISDN ネットワークを介してフレーム・リレー・ネットワークを接続する方法を示しています。この構成では、ダイヤル回線上のデータ・リンクをフレーム・リレーとして設定します。

注: ダイヤル回線は、デフォルトではポイント・ポイント (PPP) プロトコルになります。プロトコルをフレーム・リレーに変更するには、Config> プロンプトで **set data-link fr** と入力します。コネクションを使用できるのは、両側のデータ・リンクが一致している場合 (たとえば、FR と FR、あるいは PPP と PPP) だけです。

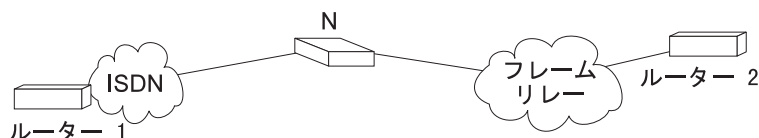


図 48. ISDN を介するフレーム・リレー構成

注: N は、FR スイッチに接続された ISDN TA と FR スイッチ内の ISDN カードのどちらでも構いません。

WAN 復元構成

736ページの図49 は、障害が起きた専用 WAN リンクをバックアップするために (WAN 復元) ISDN 接続を使用する方法を示しています。この例では、ルーター A は通常は WAN リンクを使用してルーター B と通信します。その接続に障害が起きた場合、ISDN ダイヤルアップ・リンクが 2 つのルーターを再接続します。WAN リンクが回復すると、2 次リンクは自動的に切断します。WAN 復元用にルーターを構成する方法についての詳細は、機構の使用と構成 の WAN 復元の使用 を参照してください。

ISDN の使用

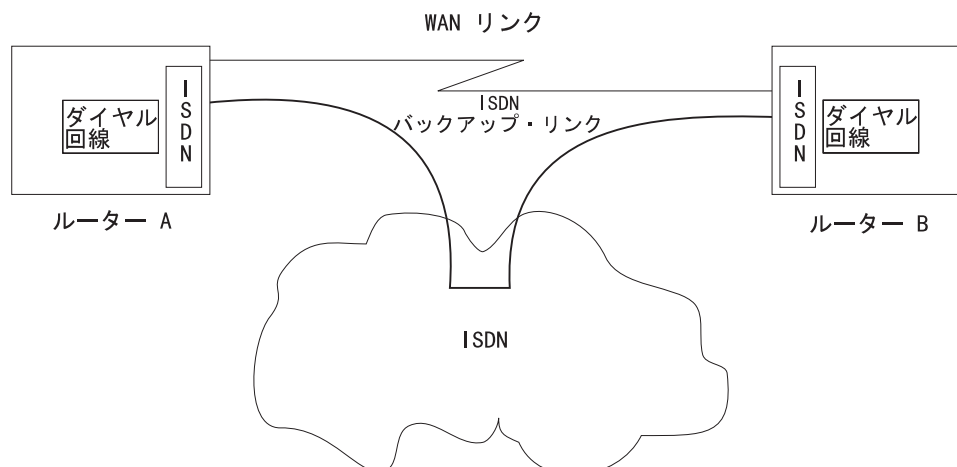


図49. WAN 復元のための ISDN の使用

WAN 復元の場合、2 次リンクとして使用できるのは、PPP 用に構成されたダイヤル回線だけです。WAN 再ルートの場合、PPP ダイヤル回線または FR ダイヤル回線を代替リンクとして使用できます。

チャネル化 T1/E1

チャネル化構成の場合は、チャネル化/PRI アダプターを使用すると、分割/チャネル化 T1/J1/E1 サポートが得られます。56-Kbps または $N \times 64$ -Kbps のチャネルが使用できます。したがって、複数の専用線接続を多重化して (たとえば、V.35 を 56-Kbps で使用)、1 つの物理接続にすることができます。

T1 または E1 基本アダプターをチャネル化として構成する手順は、次のとおりです。

1. 『Channelized』 (チャネル化) を ISDN インターフェースの switch variant (スイッチ変数) として選択する。
2. ダイヤル回線使用時にこの ISDN インターフェース用として使用するタイム・スロットを構成する。詳しくは、763ページの『Set』を参照してください。

チャネル化 T1 インターフェースの構成例 :

```
Config>n 6
ISDN Config>set switch chan
ISDN Config>list
```

ISDN Configuration

```
Maximum frame size in bytes      = 2048
Switch Variant/Service Type      = Channelized
Available Timeslots: 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24
```

```
Config>n 7
Circuit config: 7>set net 6
Circuit config: 7>set timeslot 2 3 4 24
Circuit config: 7>list
```

```
Base net          = 6
Idle character    = 7E
Bandwidth         = 64 Kbps
Timeslot         = 2 3 4 24
```

注: これが E1 回線であったとすれば、使用可能なタイム・スロットは 1 ~ 31 になります。

ISDN インターフェースの要件と制約

サポートされるスイッチ/サービス

ISDN 1 次群インターフェース (PRI) では、以下のスイッチ/サービスをサポートします。

スイッチ名	有効なコマンド
AT&T 5ESS (北米)	5ESS
AT&T 4ESS (北米)	4ESS
オーストラリア (AUSTEL)	AUSPRI
INS-Net 1500 (日本、NTT)	INSPRI
National ISDN 2 (北米)	USNI2
NET 5 (Euro-ISDN、ETSI)	NET5
Northern Telecom DMS (DMSPRI)	DMSPRI
Native I.431	I431 (743ページの『I.431 スイッチ変数』を参照)
チャンネル化 T1/E1	CHANNELIZED

ISDN インターフェースの制約事項

- ISDN インターフェースを介してルーターのブートまたはダンプを行うことはできません。
- X.25 パケット・データ用に D チャンネルの使用が許可されている BRI を除いて、データ・トラフィック用に D チャンネルを使用することはできません。通常、D チャンネルは、D チャンネル・コネクションの設定と切断にのみ使用します。

ダイヤル回線の構成要件

ISDN を使用する PPP またはフレーム・リレーを構成するときは、以下の要件を考慮する必要があります。

- ISDN インターフェースは、PPP 構成で設定した転送遅延カウンターを強制しません。
- ダイヤル回線では pseudo-serial-ethernet を使用可能にしてはなりません。

開始の前に

ISDN の構成を開始する前に、以下の情報が必要です。

- ローカル ISDN ポートの電話番号
- あて先の電話番号 (内線番号を含む)
- ISDN インターフェースを接続するスイッチのタイプ。スイッチのリストは、『サポートされるスイッチ/サービス』を参照してください。

注: スイッチのタイプおよびサービス提供者によっては、TEI および SPID など、追加パラメーターが必要になる場合もあります。

構成手順

この節では、ISDN インターフェースと関連のダイヤル回線を構成する方法について説明します。特に、以下のタスクを実行する必要があります。

1. ISDN アドレスの追加
2. ISDN パラメーターの構成
3. ISDN インターフェースの構成
4. ダイヤル回線の追加
5. ダイヤル回線の構成

注: 構成変更を有効にするためには、ルーターをリスタートする必要があります。

ISDN アドレスの追加

各 ISDN インターフェースおよび各あて先の ISDN アドレスを追加することが必要です。ISDN アドレスには、次のものが含まれます。

- アドレス名。アドレス名は、アドレスの記述です。最大 23 字までの印刷可能 ASCII スtringを使用できます。
- ネットワーク・ダイヤル・アドレス。ローカル・ポートまたはあて先ポートの電話番号です。句読点を含めて最大 25 桁の数字と 6 文字を入力できます。ルーターは数字のみを使用します。
- ネットワーク・サブダイヤル・アドレス。これはオプションです。これは、インターフェースが PBX に接続した後で解釈される、電話番号の追加部分 (たとえば、内線番号) です。最大 20 桁の数字の他に、11 個のスペースと句読点を含めることができますが、ルーターは数字のみを使用します。

ISDN アドレスを追加するには、Config> プロンプトで **add isdn-address** コマンドを入力します。下に例を挙げます。

```
Config>add isdn-address
Assign address name [23] chars []? baltimore
Assign network dial address [1-15 digits] []? 1-555-0983
Assign network subdial address [1-20 digits] []? 23
```

ISDN アドレスのリストを見たい場合は、Config> プロンプトで **list isdn-address** を入力します。

リストから ISDN アドレスを削除する場合は、Config> プロンプトで **delete isdn-address** コマンドを入力します。

ISDN パラメーターの構成

ISDN Config> プロンプトにアクセスします。ISDN Config> プロンプトにアクセスするには、Config> プロンプトで、**network** コマンドに続けて ISDN インターフェースのインターフェース番号を入力します。下に例を挙げます。

```
Config>network 3
ISDN user configuration
ISDN Config>
```

Config> プロンプトで **list devices** コマンドを使用すると、ルーター上に構成されているインターフェース番号のリストを表示することができます。構成コマンドについての詳細は、745ページの『ISDN 構成コマンド』を参照してください。

1. この ISDN インターフェースが接続されるスイッチ/サービスのタイプを指定する。
この ISDN インターフェースが接続されているスイッチのタイプを指定するには、**set switch-variant** コマンドを使用します。スイッチ/サービスのリストについては、737ページの『サポートされるスイッチ/サービス』を参照してください。下に例を挙げます。

```
ISDN Config>set switch net5
```

これはスイッチで稼働するソフトウェア・タイプです (たとえば、DMS100 は DMS100 カスタム・ソフトウェアが稼働していることを意味します)。

2. ローカル・ポートのネットワーク・アドレス名を指定する。
ローカル・ポートのネットワーク・アドレス名を指定するには、**set local-address-name** コマンドを使用します。**add isdn-address** コマンドを使用して定義したアドレス名の 1 つを使用する必要があります。下に例を挙げます。

```
ISDN Config>: set local-address-name
Assign local address name []? baltimore
```

注: これは、ISDN セットアップ・メッセージの Calling Party Number (コーリング側番号) フィールドに入れて送信します。

3. ローカル・ポートのディレクトリー番号を設定する。
4. **set framesize** コマンドを使用して、フレーム・サイズを設定する。下に例を挙げます。

```
ISDN Config>set framesize
Framesize in bytes (1024/2048/4096/8192) [1024]? 2048
```

注: PPP の最小フレーム・サイズは 1500 なので、1024 のフレーム・サイズを選択すると、PPP は ISDN ダイアル回線上で動作しません。

ISDN フレーム・サイズの設定については、746ページの『Set』を参照してください。

オプション ISDN パラメーター

この節では、ユーザーが設定できるオプション ISDN パラメーターについて説明します。これらのコマンドの詳細な説明は、745ページの『ISDN 構成コマンド』を参照してください。

- INSPRI を除くすべての ISDN スイッチについて、あるアドレスへのコールの数に制限を構成することができます。無応答あて先へのコールの数を設定する場合は、**set retries-call-address** コマンドを使用します。また、**set timeout-call-address** コマンドは、コールを再試行する前に待つ時間を設定するのに使用します。

ISDN インターフェースの構成が終了したら、**list** コマンドを使用して、構成を表示して確認することができます。

ISDN インターフェースの構成

ISDN PRI の場合、各アダプターに対して T1/J1 または E1 (アダプターに応じて) を構成する必要があります。

T1/J1 PRI インターフェース

以下の T1/J1 パラメーターを指定します。

1. T1/J1 PRI インターフェースの場合、伝送路構成 (line build out) は、ルーターの T1 ポートによって送信される信号の減衰を指定します。サービス提供者によって提供された情報に基づいて、lbo (line build out) を指定します。

a= -00.0 dB

b= -07.5 dB

c= -15.0 dB

d= -22.5 dB

下に例を挙げます。

```
set int lbo a
```

2. code を B8ZS または AMI に指定する。B8ZS がデフォルトです。この情報はサービス提供者が提供します。

下に例を挙げます。

```
set int code AMI
```

3. ZBTSI (ゼロ・バイト・タイム・スロット反転) を ENABLED または DISABLED に指定する。デフォルトは DISABLED です。この情報はサービス提供者が提供します。

下に例を挙げます。

```
set int ZBTSI enabled
```

4. esf-data-link を指定する。サービス契約に基づいて、次の 1 つを選択します。

ANSI-T1.403 ANSI-IDLE AT&T-IDLE

デフォルトは ANSI-T1.403 です。

下に例を挙げます。

```
set int esf-data-link ansi-idle
```

E1 PRI インターフェース

E1 PRI インターフェースの場合、以下のパラメーターを指定します。

1. code を HDB3 または AMI に指定する。HDB3 がデフォルトです。この情報はサービス提供者が提供します。

下に例を挙げます。

```
set int code HDB3
```

2. crc4 を ENABLED または DISABLED に指定する。デフォルトは ENABLED です。この情報はサービス提供者が提供します。

下に例を挙げます。

```
set int crc4 enabled
```


ダイヤル回線の追加

ダイヤル回線は ISDN インターフェースにマップされます。複数のダイヤル回線を 1 つの ISDN インターフェースにマップすることができます。

ダイヤル回線を追加するには、Config> プロンプトで **add device dial-circuit** コマンドを入力します。ソフトウェアが、各回線にインターフェース番号を割り当てます。この番号を使用して、ダイヤル回線を構成します。下に例を挙げます。

```
Config>add device dial-circuit
Enter the number of PPP Dial Circuit interfaces [1]?
Adding device as interface 6
Base net for the circuits(s) [0]?
```

構成できるダイヤル回線の数、構成されるパラメーターの合計数と結果として得られる構成ファイルのサイズによって異なります。

注: ダイヤル回線は、デフォルトではポイント・ポイント (PPP) プロトコルになります。ダイヤル回線プロトコルをフレーム・リレーに変更するには、Config> プロンプトで **set data-link fr** コマンドを入力します。その他のデータ・リンク・タイプ (X.25、SDLC、および SRLY) は、ISDN ではサポートされません。

ダイヤル回線の構成

この節では、ダイヤル回線の構成方法について説明します。

1. **network** コマンドに続けてダイヤル回線のインターフェース番号を入力して、Circuit Config> プロンプトを表示する。Config> プロンプトで **list devices** コマンドを入力すると、ルーター上に構成されているインターフェース番号のリストとを表示することができます。下に例を挙げます。

```
Config>network 6
Circuit configuration
Circuit Config>
```

2. ダイヤル回線を ISDN インターフェースにマップする。 **set net** コマンドを使用します。基本ネットワークは ISDN インターフェース番号です。(これは基本ネットワークを変更する場合にのみ必要です。) 下に例を挙げます。

```
Circuit Config> set net
Base net for this circuit [0]? 3
```

注: ダイヤル回線データ・リンク・タイプが X.25 であるか、基本ネットワークのスイッチ変数が I.43x またはチャンネル化である場合は、以下のステップ (3 ~ 743ページの11) は該当しません。

3. ダイヤル回線を接続するリモート・ルーターのアドレス名を指定する。 **add isdn-address** コマンドを使用して定義した名前の 1 つを使用する必要があります。下に例を挙げます。

```
Circuit Config> set destination
Assign destination address name []? baltimore
```

4. ダイヤル回線をアウトバウンド・コール発信専用、インバウンド・コール着信専用、またはコールの発信と着信の両方として構成する。

set calls コマンドを使用します。下に例を挙げます。

```
Circuit Config> set calls outbound
Circuit Config> set calls inbound
Circuit Config> set calls both
```

ISDN の使用

注: WAN 復元動作または別のダイヤル・オンデマンド・アプリケーションの場合、回線をインバウンド・コール用またはアウトバウンド・コール用のいずれかに設定することが必要です。

5. 回線のタイムアウト期間を指定する。

set idle コマンドを使用します。この指定された期間、回線上にトラフィックがないと、ダイヤル回線はハングアップします。回線を専用回線として構成する場合は、アイドル・タイマーをゼロに設定します。回線をダイヤル・オンデマンドに構成する場合は、アイドル・タイマーをゼロ以外の値に設定します。範囲は 0 ~ 65535 で、デフォルトは 60 秒です。下に例を挙げます。

```
Circuit Config> set idle
Idle timer (seconds, 0 means always active) [0]? 0
```

注: WAN 復元 / 再ルートは固定される必要があります。

6. オプションで、**lid_out_addr** を指定することにより、送信する LID 名を (あて先の名前であるデフォルト LID の代わりに) 提供することができます。

2 つのルーター間に複数の回線が構成されている場合 (並列回線)、どちらのダイヤル回線が接続するのかを両方のルーターが知る方法が必要です。この目的のために、一端のルーター (コーラー) から **lid_out_addr** が送信されます。ダイヤル回線が接続するためには、受信側ルーターに、送信側ルーター上の **lid_out_address** に一致するインバウンドあて先アドレスが必要です。 **lid_out_addr** は、以前に **config>** プロンプトで 『ADD ISDN-ADDRESS』 を使用して追加したアドレス名でなければなりません。

```
Circuit Config> set lid_out_addr router2
```

7. オプションで、ダイヤル回線の相対的な優先順位を設定することができます。

優先順位フィールドは、利用可能なチャネルがないときに、ある回線を別の回線より優先させることを可能にします。アウトバウンド・コールが行われ、すべてのチャネルが使用中である場合は、要求しているダイヤル回線の優先順位を、通信中のすべてのダイヤル回線と照合してチェックします。それより低い優先順位の回線があった場合、その回線は切断され、高い優先順位のダイヤル回線のためのコール設定が行われます。

注: ダウンにされるのは、アウトバウンド・ダイヤル・オンデマンド回線だけです。

優先順位についての詳細は、763ページの『Set』 を参照してください。

```
Circuit Config> set priority 1
```

8. オプションで、コール設定と初期パケット送信の間の時間を遅らせることができます。 **set selftest-delay** コマンドを使用します。一部の ISDN スイッチは、あて先の回線の確立が完了したことを示す信号を受信する前にデータの送信を開始します。自己テスト遅延を設定すると、初期パケットが廃棄されるのを防止できます。下に例を挙げます。

```
Circuit Config>set selftest-delay
Selftest delay(milli-seconds,0 means no delay)[150]?200
```

9. インバウンド・アドレス名を設定する。

set inbound コマンドを使用します。このコマンドはインバウンド回線専用です。下に例を挙げます。

```
Circuit Config>set inbound
Assign destination inbound address name []? newyork
```

インバウンドあて先番号は、着信 LID またはコーラー ID をダイヤル回線と突き合わせるために使用されます。一致していれば、そのダイヤル回線がコールを獲得します。

10. オプションで、ダイヤル回線上で実行されているデータ・リンク・レイヤー・プロトコル (PPP またはフレーム・リレー) の構成プロセスに入ることができます。

encapsulator コマンドを使用します。下に例を挙げます。

```
Circuit Config>encapsulator
```

11. オプションで、**set bandwidth** コマンドを使用して、コールする場合の回線速度を設定することができます (56-Kbps または 64-Kbps のいずれか)。これにより、ISDN インターフェースにコールごとの制御が与えられます。下に例を挙げます。

```
Circuit Config> set bandwidth 56Kbps
```

I.431 スイッチ変数

ISDN PRI (T1/J1 のみ) を介して専用回線を稼働する場合は、I.431 スイッチの変数を符号化する必要があります。

ネイティブ I.431 サポート

ネイティブ I.431 サポートを構成する場合は、1 つだけダイヤル回線を使用します。これは基本ネットワークに接続します。I.431 は ISDN PRI T1 アダプター上でのみ動作します。速度は 1.5 Mbps で一定です。

注: マルチポート ISDN PRI アダプターでは、I.431 スイッチ変数をサポートしません。フル PRI 伝送路を使用する場合は、チャンネル化変数を選択し、1 本のダイヤル回線にすべてのタイム・スロットを割り当てます。

例 : Base ISDN net

```
Config> n 5
ISDN Config> set sw i431
ISDN Config> list all
ISDN Configuration
Maximum frame size in bytes    = 2048
Switch Variant                  = I431 PRI
```

例 : Dial Circuit

```
Config> n 6
Circuit config: 6>set net 5
Circuit config: 6>list all

Base net                        = 5
```

ISDN の使用

第49章 ISDN インターフェースの構成と監視

この章では、ISDN コマンドと GWCON コマンドについて説明します。本章には、以下の節が含まれています。

- 『ISDN 構成コマンド』
- 751ページの『インターフェース監視プロセスへのアクセス』
- 751ページの『ISDN 監視コマンド』
- 756ページの『ISDN と GWCON コマンド』

注:

1. ISDN インターフェースは、ISDN 関連のアクティビティーを監視するのに使用できる ELS メッセージおよび原因符号も提供します。 イベント・ログ・システム・メッセージの手引き を参照してください。
2. ISDN、Q931、CEME、LAPD、および DIAL ELS のサブシステムが使用可能です。

ISDN 構成コマンド

表95 に ISDN 構成コマンドを記述し、以下の各項でコマンドについて説明します。これらのコマンドは ISDN Config> プロンプトで入力します。

表 95. ISDN 構成コマンドの要約

コマンド	機能
? (Help)	このコマンド・レベルで使用可能なコマンドをすべて表示するか、特定のコマンドに関するオプション (ただし、選択可能な場合) をリストします。 12ページの『ヘルプを得る』を参照してください。
Block-calls	特定のコーラーからの着信コールをブロックします。
Disable	BRI の場合にのみ有効です。電源 1 検出を使用不可にします。
Enable	BRI の場合にのみ有効です。電源 1 検出を使用可能にします。
List	ISDN 構成を表示します。
Remove	ISDN 構成から DN0 エントリーを除去します。
Set	フレーム・サイズ、ローカル・アドレス、無応答タイムアウト、無応答後の再試行回数、ISDN スイッチのタイプ、ディレクトリー番号、SPIDS、および TEI を設定します。
Cause Code	インターフェースを介して接続を確立するための試行をそれ以上処理するのを停止します。
Exit	直前のコマンド・レベルに戻ります。 13ページの『下位レベル操作環境を終了する』を参照してください。

Block-Calls

block-calls コマンドは、着信コールをブロックするのに使用します。ブロックされるコーラー番号は認証リストに追加する必要があります。コーラー・ブロック・コールの最大数は、インターフェース当たり 16 です。

コール・ブロックは次の場合に使用できます。

- 不要なコールをいつも受信する場合

ISDN 構成コマンド

- ネットワークの立ち上げ / テストなどのとき、一定のコールを無視する必要がある場合。

構文 :

```
block-calls          add
                        list
                        remove
```

Add ブロックする必要のあるコーラーの番号を追加します。

List ブロックするコーラーの番号をリストします。

Remove

ブロックするリストからコーラーの番号を除去します。

List

list コマンドでは、現行の ISDN 構成が表示されます。

構文 :

```
list
```

例 : **list**

```
ISDN Configuration
Local Network Address Name      = local2216
Local Network Address:Subaddress = 2542216:

Maximum frame size in bytes     = 2048
Outbound call address Timeout  = 180 Retries = 2
Switch Variant                  = NT DMS-250
DN0 (Directory Number 0)       = 2542216
No circuit address accounting information being kept.

T1/J1 Interface Parameters:
LBO                             = 00.0 dB
Code                             = B8ZS
ZBTSI                            = Disabled
ESF-Data-Link                    = ANSI-IDLE
```

Remove

remove コマンドは、**set DN0** または **set DN1** コマンドを使用して前回設定した DN0 または DN1 のエントリーを除去するために使用します。

構文 :

```
remove          DN0-entry...
```

例: **remove DN0**

Set

set コマンドでは、フレーム・サイズ、アドレス、およびタイムアウトが構成されます。スイッチ変数および TEI 番号も指定します。PRI の場合、端末終端点識別子 (TEI) は常にゼロ (0) です。

構文 :

```

set
    framesize...
    frame-type1
    interface
    local-address-name...
    RAI-type1
    retries-call-address...
    switch-variant...
    dn0...

```

framesize 1024 または 2048 または 4096 または 8192

ISDN インターフェース上で送受信されるフレームの、ネットワーク・レイヤー部分のサイズを設定します。データ・リンクおよび MAC レイヤー・ヘッダーは含まれません。ISDN フレーム・サイズは、ダイヤル回線に構成されたフレーム・サイズ以上の大きさになるよう ISDN インターフェースを使用して設定する必要があります。

PPP ダイヤル回線インターフェースの場合、**set lcp options** コマンドを使用して PPP MRU を変更することができます。ISDN フレーム・サイズには、PPP MRU および PPP ヘッダー用に十分なバイトを組み込んでおく必要があります。

注: PPP の最小フレーム・サイズは 1500 なので、1024 のフレーム・サイズを選択すると、PPP は ISDN ダイヤル回線上で動作しません。

FR ダイヤル回線インターフェースの場合、フレーム・サイズは **set framesize** コマンドを使用して変更できます。ISDN フレーム・サイズは FR フレーム・サイズ以上でなければなりません。

ダイヤル回線のフレーム・サイズが ISDN フレーム・サイズより大きい場合、ダイヤル回線のフレーム・サイズはルーターの初期化の時点で減少されません。

例 :

```

set framesize
Framesize in bytes (1024/2048/4096/8192) [1024]? 2048

```

frame-type

D4 または ESF を選択します。これは T1 マルチ・フレーム・フォーマットを指定します。非チャンネル化モードの場合は、ESF だけがサポートされます。フレーム・タイプは、基本 ISDN ネット・メニューのもとで構成されます。

例 :

```

set frame-type
Circuit config: 10>set frame type

```

ISDN 構成コマンド

interface

PRI の場合のみ。T1 および E1 回線の以下のインターフェース・パラメータ値を設定します。

T1 PRI の場合 :

lbo ルーターの T1 ポートによって送信された信号の減衰。この情報はサービス提供者によって提供されます。

有効値 :

a= -00.0 dB

b= -07.5 dB

c= -15.0 dB

d= -22.5 dB

デフォルト値 : a

code この情報はサービス提供者によって提供されます。

有効値 : B8ZS または AMI

デフォルト値 : B8ZS

ZBTSI ゼロ・バイト・タイム・スロット反転。この情報はサービス提供者によって提供されます。

有効値 : Enabled または Disabled

デフォルト値 : Disabled

esf-data-link

サービス加入。この情報はサービス提供者によって提供されます。

有効値 :

ANSI-T1.403

ANSI-IDLE

AT&T-IDLE

デフォルト値 : ANSI-T1.403

E1 PRI の場合 :

code この情報はサービス提供者によって提供されます。

有効値 : HDB3 または AMI

デフォルト値 : HDB3

crc4 ルーターの E1 ポートが crc4 コード・ワードを送信して受信フレーム内でそれらを検査するかどうかを指定します。この情報はサービス提供者によって提供されます。

有効値 : Enabled または Disabled

デフォルト値 : Disabled

local-address-name *address name*

ローカル ISDN インターフェースのネットワーク・アドレス名です。このアドレス名は、**add isdn-address** コマンドを使用して Config> プロンプトで定義された名前の 1 つに一致する必要があります。

有効値 : 任意の有効なアドレス

デフォルト値: なし

例 :

```
set local-address-name
Assign local address name []? line-1-local
```

RAI-type

ANSI または Japanese を選択します。これは、D4 フレーム指示を使用する場合に、T1 回線上に RAI を指示する方式を指定します。ANSI RAI は、すべてのチャンネルのビット 2 の中の値 0 によって指示されます。日本語 RAI は、フレーム 12 の S ビット部分の中の値 1 によって指示されます。RAI タイプは、基本 ISDN ネット・メニューのもとで構成されます。

retries-call-address value

一部の電話サービス提供者は、自動リコール装置に対して、アクセス不能アドレスまたはその種のコールを拒否するアドレスへの連続コール回数を制限しています。Retries-call-address は、ルーターが 1 回に試行できる発信コールの最大数を指定します。retries-call-address を 0 に設定すると、ルーターにすべての回線を一度に立ち上げさせます。

スイッチ変数を INS64 に設定すると、retries-call-address のデフォルト値を変更することはできません。これは 2 に固定されます。

有効値 : 0 ~ 30

デフォルト値 : 23 (BRI の場合は 2)

スイッチ変数 4ess または 5ess または auspri usni2 または ins1500 または dms250 または channel

この ISDN インターフェースが接続する先のスイッチのモデルを指定します。以下のリストから、ISDN の 1 次群速度インターフェースのためのスイッチ変数 / サービス・タイプを選択できます。

有効値 ISDN 1 次群速度インターフェース (PRI)/ チャンネル化 T1/E1 :

- AT&T 5ESS (北米)
- AT&T 4ESS (北米)
- オーストラリア (AUSTEL)
- INS-Pri (日本、NTT)
- National ISDN 2 (北米)
- NET 5 (Euro-ISDN、ETSI)
- Northern Telecom 250 (DMSPRI)
- ネイティブ I.431
- チャンネル化 T1/E1

デフォルト値 : DMSPRI

dn0 directory number 0

インバウンド・コールを受信するには、DN0 が、set local-address-name コマンドを使用して構成されたネットワーク・ダイヤル・アドレス (電話番号) に一致する必要があります。DN0 が未構成の場合、検査は行われず、すべてのコールが受け入れられます。スイッチが着信セットアップ・メッセージ内

ISDN 構成コマンド

にコールされる側の番号を提供しない場合、DN0 を構成する必要はありません。追加の情報については、750 を参照してください。

例：

```
set dn0
Enter DN0 (Directory-Number-0) [ ]? 5088981234
```

注：これは基本速度 ISDN スイッチ変数に適用されます。

- DN0 および DN1 は、着信コールが正しい ISDN あて先に送達されつつあるかどうかを検査するために使用されます。
- 送達されている ISDN コールの中のをあて先番号（コールされる側の番号）が DN0 にも DN1 にも一致しない場合、そのコールはリジェクトされます。
- ユーザーがあて先検査をバイパスしたい場合は、DN0 も DN1 も構成しないでください。ISDN 回線に1つの DN しか供給されていない場合で、ユーザーがあて先検査を使用したい場合は、DN0 を構成する必要があります。ISDN 回線に2つの DN が供給されていない場合、DN1 は構成しないでください。
- SPID および TEI を構成するとき、必ず一番目の SPID (SPID[0]) と TEI (TEI[0]) を構成するようにしてください。SPID[0] または TEI[0] を構成しないで SPID[1] または TEI[1] を構成した場合、誤りの原因になります。

Cause Code

Cause Code コマンドは、ルーターが『specified』（有効値）応答を受信したとき、ISDN インターフェースを介する接続の確立を再試行しないようにする場合に使用します。これらのコマンドは Cause Config> プロンプトで入力します。

構文：

```
cause code          ? (Help)
                   _
                   add
                   _
                   list
                   _
                   remove
                   _
                   exit
                   _
```

表 96. ISDN Cause Codes コマンドの要約

コマンド	機能
? (Help)	このコマンド・レベルで使用可能なコマンドをすべて表示するか、特定のコマンドに関するオプション（ただし、選択可能な場合）をリストします。12ページの『ヘルプを得る』を参照してください。
Add	原因符号エンタリーを ISDN 構成に追加します。
List	ISDN 構成の原因符号リストを表示します。
Remove	ISDN 構成から原因符号エンタリーを除去します。
Exit	直前のコマンド・レベルに戻ります。13ページの『下位レベル操作環境を終了する』を参照してください。

Add **add** コマンドは、原因符号を ISDN 構成に追加するのに使用します。

有効値: 01 ~ FF の間の任意の 16 進値

デフォルト値: なし

構文：**cause code add value**

例: add FF

List **list** コマンドは、ISDN 構成の原因符号リストを表示するのに使用します。

構文 : cause code list

Remove

remove コマンドは、原因符号を ISDN 構成から除去するのに使用します。

有効値: 01 ~ FF の間の任意の 16 進値

デフォルト値: なし

構文 : cause code remove *value*

例: remove FF

インターフェース監視プロセスへのアクセス

ISDN に関するインターフェース監視プロセスにアクセスする場合は、GWCON (+) プロンプトで次のようにコマンドを入力します。

+ network #

ただし、# は、ISDN インターフェースの番号です。ダイヤル回線の監視プロセスに直接アクセスすることはできませんが、ISDN インターフェースにマップされるダイヤル回線を監視することはできます。

ISDN 監視コマンド

以下の各節では、ISDN インターフェースに関する料金計算エントリー、コール、回線、パラメーター、および統計を表示させて見ることができる ISDN 操作コマンドについて説明します。これらのコマンドは ISDN> プロンプトで入力します。

表 97. ISDN 監視コマンドの要約

監視コマンド	機能
? (Help)	このコマンド・レベルで使用可能なコマンドをすべて表示するか、特定のコマンドに関するオプション (ただし、選択可能な場合) をリストします。12ページの『ヘルプを得る』を参照してください。
Block-calls	特定のコーラーからの着信コールをブロックします。
Calls	前回ルーター上で統計がリセットされた後で、このインターフェースにマップされた各ダイヤル回線ごとにそれぞれ行われて、完了した接続および試行された接続の数を表示します。
Channels	ISDN 1 次群速度インターフェース上のチャンネルの統計を表示します。
Circuits	ISDN インターフェース上に構成されたすべてのデータ回線の状態を表示します。
Dial-dump	特定のダイヤル回線の操作特性を表示します。
L2_counters	一部の L2 カウンターとともに L2/L1 の状態をリストします。
L3_counters	送信 / 受信 / 許容されたセットアップのカウンターをリストします。
TEI	TEI の状態をリストします (BRI のみ)。
Parameters	ISDN インターフェースの現行パラメーターを表示します。

ISDN 監視コマンド

表 97. ISDN 監視コマンドの要約 (続き)

監視コマンド	機能
Signaling-L3	このコマンドは、ネットワーク管理者だけが使用します。
Statistics	ISDN インターフェースの現行統計を表示します。
Exit	直前のコマンド・レベルに戻ります。13ページの『下位レベル操作環境を終了する』を参照してください。

Block-Calls

block-calls コマンドは、着信コールをブロックするのに使用します。ブロックされるコーラー番号は認証リストに追加する必要があります。コーラー・ブロック・コールの最大数は、インターフェース当たり 16 です。

構文 :

```
block-calls          add
                        list
                        remove
```

Add ブロックする必要のあるコーラーの番号を追加します。

List ブロックするコーラーの番号をリストします。

Remove

ブロックするリストからコーラーの番号を除去します。

Calls

calls コマンドは、前回ルーター上で統計がリセットされた後で、このインターフェースにマップされた各ダイヤル回線ごとにそれぞれ行われて、完了した接続および試行された接続の数をリストする場合に使用します。

構文 :

calls

例 :

```
calls
Net Interface Site Name      In   Out  Rfsd  Blckd
  4   PPP/1  v403          2    0    0     0
```

Unmapped connection indications: 0

Net このインターフェースにマップされたダイヤル回線の数

Interface

インターフェースのタイプおよびそのインスタンス番号

Site Name

ダイヤル回線のネットワーク・アドレス名

In このダイヤル回線で受け入れられたインバウンド接続

Out このダイヤル回線によって開始された、完了した接続の数

Rfsd ネットワークまたはリモートポートによってリジェクトされた、このダイヤル回線によって開始された接続の数

Blockd ルーターがブロックした接続試行。ルーターが接続試行をブロックするのは、すべての使用可能なチャンネルが使用中である場合、最大試行回数が使い尽くされて、ルーターがタイマーのカウントダウンを待っている場合、またはレイヤー 1 はアップであるが、レイヤー 2 がダウンしている場合です。

Unmapped connection indications:

着信コールを受け入れるように構成されて使用可能にされているダイヤル回線がないために、ルーターによってリジェクトされた接続試行の回数

Channels

channels コマンドでは、ISDN 1 次群速度インターフェース上のチャンネルに関する統計がリストされます。

構文：

channels

Circuits

circuits コマンドでは、ISDN インターフェース上に構成され、『Up』 または『Available』 の状態にあるダイヤル回線の状態が表示されます。

構文：

circuits

例：

```

circuit
Net Interface  MAC/Data-Link  State  Reason  Duration
4   PPP/1  Point to Point  Up B1  SelfTest  91:24:03
5   PPP/2  Point to Point  Up B2  Inbound   91:24:00

```

Net このインターフェースにマップされたダイヤル回線の数

Interface

インターフェースのタイプおよびそのインスタンス番号

MAC/Data-Link

このダイヤル回線に構成されたデータ・リンク・プロトコルのタイプ

State ダイヤル回線の現在の状態

Up 現在接続された状態です。

Available

現在は接続されていませんが、利用可能です。

Disabled

ダイヤル回線は使用不可にされています。

Down ダイヤル回線がビジーであるか、リンク・レイヤー・プロトコルがダウンしているために、接続に失敗しました。

Reason

現在の状態の理由:

ISDN 監視コマンド

nnn_Data

(nnn はプロトコルの名前です。) プロトコルに送信するデータがあったので、回線はアップです。

Rmt Disc

リモート切断。リモートあて先がコールを切断したので、回線はダウンまたは利用可能のいずれかです。

Opr Req

オペレーター要求。前回のコールが監視コマンドによって切断されたため、回線は available です。

Inbound

回線がインバウンド・コールに応答したので、回線はアップです。

Restoral

WAN 復元動作のため、回線はアップです。

Self Test

回線は静的として構成されており (アイドル・タイム = 0)、使用可能にされたときに正常に接続されました。

Duration

回線が現在の状態にある時間の長さ

| **Dial-dump**

| **dial-dump** コマンドは、特定のダイヤル回線の操作特性を表示するのに使用します。

| 構文 :

| **dial-dump** *circuitname*

| **L2_Counters**

| **L2_counters** コマンドは、一部の L2 カウンターとともに L2/L1 の状態をリストするのに使用します。

| 構文 :

| **L2_counters**

| **L3_Counters**

| **L3_counters** コマンドは、送信 / 受信 / 許容されたセットアップのカウンターをリストするのに使用します。

| 構文 :

| **L3_counters**

TEI

TEI くまは、TEIs の状態をリストするのに使用します。BRI の場合だけです。

構文 :

parameters

例 :

parameters

ISDN Port parameters:

```
Local Address Name:      v1233
Local Network Address:   20
Local Network Subaddress:
Frame Size:             2048
TEI 0:                  Automatic
TEI 1:                  Automatic
```

```
Switch Variant:        AT&T 5ESS (United States)
Multipoint Selection:   Multipoint
Directory Number 0:    20
Outbound call address Timeout: 180      Retries: 0
```

Parameters

parameters コマンドは、現行の ISDN 構成を表示させる場合に使用します。

構文 :

parameters

例 :

parameters

ISDN Port parameters:

```
Local Address Name:      v1233
Local Network Address:   20
Local Network Subaddress:
Frame Size:             2048
TEI 0:                  Automatic
TEI 1:                  Automatic
```

```
Switch Variant:        AT&T 5ESS (United States)
Multipoint Selection:   Multipoint
Directory Number 0:    20
Outbound call address Timeout: 180      Retries: 0
```

Statistics

statistics コマンドは、この ISDN インターフェースの現行統計を表示するのに使用します。

構文 :

statistics

E1 をもつ **PRI** の例 :

```

statistics
Link: Active ISDN Firmware: 1.0 Handler State: Running
Transmit D Channel Receive D Channel
Packets 68422 Packets 68419
```

ISDN 監視コマンド

```
Bytes          411656  Bytes          413592
Overflow       23      Overflow       3
Underrun       0      Too Long      6
                Abort      4
                CRC error   8
                Misaligned  3

Transmit  B Channels  Receive  B Channels

Packets      1499094  Packets      1499228
Bytes        59955660  Bytes        59951780
Overflow     0      Overflow     90
Underrun     0      Too Long    171
                Abort      139
                CRC error   232
                Misaligned  72

E1 Status Register      E1 Error Count Registers

Receive AIS      : Off  CRC6 Errors:      4
Receive RAI     : Off  LCV Errors:     38
Receive Carrier Loss: Off  FEB Errors:     11
Receive Loss of Sync: Off  FAS Errors:     24
```

I.431 を使用する T1 をもつ PRI の例 :

```
statistics
Transmit

Packets      0
Bytes        0
Overflow     68480
Underrun     0

Receive

Packets      0
Bytes        0
Overflow     0
Too Long     0
Abort        0
CRC error    0
Misaligned   0

T1 Status Register      T1 Error Count Registers

Receive AIS      : Off  LCV Errors:      0
Receive RAI     : Off  CRC6 Errors:    0
Receive Carrier Loss: Off  Sync Errors:   47937328
Receive Loss of Sync: On

T1 PRM Events          Local      Remote

CRC Error              0          0
Controlled Slip        0          0
Line Code Violation    0          0
Frame Sync Bit Error   0          0
Severely Errored Frame 0          0
Payload Looback Active 0          0
PRMs Processed (1/sec) 0          0
```

ISDN と GWCON コマンド

ISDN には監視目的の独自の監視プロセスがありますが、GWCON 環境から **interface**、**statistics**、および **error** コマンドを使用すると、ルーターでも装置および回線に関する構成情報と完全な統計を表示します。また、GWCON **test** コマンドを使用して、DCE および回線をテストすることもできます。

注: ISDN インターフェースに対して **test** コマンドを出すと、現行のコールは除去され、再ダイヤルされます。

Interface -- ISDN インターフェースとダイヤル回線の統計

interface コマンドは、ISDN インターフェースおよびダイヤル回線に関する統計を表示させる場合に、GWCON プロンプト (+) で使用します。

ISDN と GWCON コマンド

ダイヤル回線に関する統計を表示させる場合は、**interface** コマンドの後に続けてダイヤル回線のインターフェース番号を入力します。ISDN インターフェースの場合、情報は **D** および **B** チャンネル・ベースで表示されます。(これは **ISDN statistics** コマンドで表示されるものと同じ情報です。)

例 :

interface 2

```
Nt Nt' Interface Slot-Port          Self-Test Self-Test Maintenance
2 2  ISDN/0   Slot: 8 Port: 1          Passed   Failed   Failed
                                1         0         0
```

```
ISDN Base Net MAC/data-link on ISDN Primary Rate interface
Link: Active ISDN Firmware: 1.0 Handler State: Running
```

```
Transmit  D Channel    Receive  D Channel
Packets           36    Packets           36
Bytes             214    Bytes             214
Overflow           0    Overflow           0
Underrun           0    Too Long           0
                                Abort               0
                                CRC error           0
                                Misaligned          0
```

```
Transmit  B Channels  Receive  B Channels
Packets           0    Packets           0
Bytes             0    Bytes             0
Overflow           0    Overflow           0
Underrun           0    Too Long           0
                                Abort               0
                                CRC error           0
                                Misaligned          0
```

```
T1 Status Register          T1 Error Count Registers
Receive AIS                 : Off LCV Errors:          0
Receive RAI                 : Off CRC6 Errors:         0
Receive Carrier Loss: Off Sync Errors:          0
Receive Loss of Sync: Off
```

```
T1 PRM Events              Local      Remote
CRC Error                   0          0
Controlled Slip             0          0
Line Code Violation         0          0
Frame Sync Bit Error        0          0
Severely Errored Frame     0          0
Payload Looback Active      0          0
PRMs Processed (1/sec)     365       367
```

ダイヤル回線に関する次のような統計を表示させる場合は、**interface** コマンドを使用し、その後続けてダイヤル回線のインターフェース番号を入力します。

例 :

interface 3

```
Nt Nt' Interface          Self-Test Self-Test Maintenance
3 2  PPP/1                Passed   Failed   Failed
                                1         0         0
```

```
Point to Point MAC/data-link on ISDN Primary Rate interface
```

下のリストは、ISDN とダイヤル回線の両方の出力を説明しています。

Nt シリアル・ライン・インターフェース番号またはダイヤル回線インターフェース番号

Nt' *Nt* がダイヤル回線の場合、これはダイヤル回線がマップされる ISDN インターフェースのインターフェース番号です。

ISDN と GWCON コマンド

Interface

インターフェース・タイプとそのインスタンス番号

Slot ISDN アダプターが入っているスロット

Port ISDN アダプター上のポート番号

Self-Test Passed

成功した自己テストの回数

Self-Test Failed

失敗した自己テストの回数

Maintenance: Failed

保守障害の数

Configuration -- ルーターのハードウェアおよびソフトウェアに関する情報

ルーターのハードウェアおよびソフトウェアに関する情報を表示させる場合は、GWCON (+) プロンプトで **configuration** コマンドを入力します。これには、ルーター上に構成されたインターフェースとそのインターフェースの状態を表示するセクションが含まれています。

ダイヤル回線がダイヤル・オンデマンドとして構成されている場合、ダイヤル回線の状態は、接続されているかどうかに関係なく、常に Up として表示されます。この場合、Up は、ダイヤル回線が接続状態または利用可能のいずれかであることを意味しています。

ダイヤル回線が静的回線として構成されている場合には、ダイヤル回線が接続されている場合にのみ、状態は Up と示されます。(**configuration** コマンドの出力例については、120ページの『Configuration』を参照してください。)

第50章 ダイヤル回線の構成と監視

この章では、V.25bis または ISDN インターフェースにマップされたダイヤル回線インターフェース上でのダイヤル回線の構成方法について説明します。この章は以下の節に分かれています。

- 『ダイヤル回線構成コマンド』
- 766ページの『ダイヤル回線監視コマンド』

注:

1. PPP ダイヤル回線インターフェースでは、ISDN または V.25bis ネットワークを基本ネットワーク・インターフェースとして使用することができます。
2. FR ダイヤル回線インターフェースでは、ISDN または V.25bis ネットワークを基本ネットワーク・インターフェースとして使用することができます。
3. 交換 SDLC コールイン・ダイヤル回線インターフェースでは、V.25bis ネットワークを基本ネットワーク・インターフェースとして使用します。
4. X.25 回線は、BRI 用の ISDN D チャンネル上で使用することができます。

ダイヤル回線の構成方法については、以下を参照してください。

- ISDN インターフェースについては、729ページの『第48章 ISDN インターフェースの使用』を参照してください。
- V.25bis インターフェースについては、709ページの『第46章 V.25bis ネットワーク・インターフェースの使用』を参照してください。

ダイヤル回線構成コマンド

表98 は、ダイヤル回線構成コマンドを説明しています。ダイヤル回線構成コマンドは、Circuit Config> プロンプトで入力します。構成変更を有効にするためには、ルーターをリスタートする必要があります。

Circuit Config> プロンプトにアクセスするには、**network** コマンドに続けて『ダイヤル回線』のインターフェース番号を入力します。(ダイヤル回線番号は、**add device dial-circuit** コマンドを入力したときに割り当てられています。) Config> プロンプトで **list devices** コマンドを入力すると、ユーザーが追加したダイヤル回線のリストを表示することができます。

表 98. ダイヤル回線構成コマンドの要約

コマンド	機能
? (Help)	このコマンド・レベルで使用可能なコマンドをすべて表示するか、特定のコマンドに関するオプション (ただし、選択可能な場合) をリストします。12ページの『ヘルプを得る』を参照してください。
Delete	インバウンド・コールの設定をダイヤル回線構成から削除します。
Encapsulator	データ・リンク・プロトコル構成を変更することができます。
List	ダイヤル回線構成パラメーターを表示します。

ダイヤル回線の構成

表 98. ダイヤル回線構成コマンドの要約 (続き)

コマンド	機能
Set	ダイヤル回線をインバウンド・コール用またはアウトバウンド・コール用に構成したり、ダイヤル回線をシリアル・ライン・インターフェースにマップしたり、アドレス、アイドル・タイムアウト、優先順位、 <code>lid_out</code> アドレス、インバウンドあて先、および自己テスト遅延を設定したりします。
Exit	直前のコマンド・レベルに戻ります。13ページの『下位レベル操作環境を終了する』を参照してください。

Delete

delete コマンドは、インバウンド・コールの設定をダイヤル回線構成から除去するのに使用します。

構文：

delete *inbound destination*

inbound destination

INBOUND あて先および ANY_INBOUND 設定値をダイヤル回線構成から除去します。これによって、ダイヤル回線が受け付けるコールは、電話番号が *destination* パラメーターに一致するコーラーからのものだけになります。

Encapsulator

encapsulator コマンドは、ダイヤル回線インターフェース上で稼働するリンク・レイヤー・プロトコル (たとえば、PPP、フレーム・リレー、X.25、SDLC) の構成プロセスに入る場合に使用します。

注: **add device dial-circuit** コマンドによって作成されるダイヤル回線インターフェースのデフォルトは PPP になります。リンク・レイヤー・タイプを変更するには、Config> プロンプトで次のようにします。

- フレーム・リレーの場合、**set data-link frame-relay** を入力します。
- SDLC の場合、**set data-link sdlc** を入力します。

構文：

encapsulator

次の例には、PPP ダイヤル回線インターフェースの場合に **encapsulator** コマンドを使用すると、PPP 構成プロセスに入ることが示されています。

例：

```
encapsulator  
Point-to-Point user configuration  
PPP Config>
```

V.25bis を基本ネットワークとして使用するダイヤル回線を構成する場合は、以下のことに注意してください。

ダイヤル回線の構成

- V.25bis インターフェースでは、クロックは外部として事前定義されています。モデム (DCE) がクロック速度を制御します。クロック、符号化、およびその他の HDLC パラメーターは、ダイヤル回線構成の一部として構成することはできません。

PPP またはフレーム・リレーを ISDN 用に構成する場合は、ダイヤル回線構成の HDLC パラメーターは構成できません。物理レイヤー・パラメーターは、ISDN インターフェース上で構成されます。

PPP プロトコルの構成については、435ページの『第32章 シリアル・ライン・インターフェースの構成』 または 583ページの『第39章 ポイント・ポイント・プロトコル・インターフェースの使用』 を参照してください。

フレーム・リレー・プロトコルの構成については、513ページの『第37章 フレーム・リレー・インターフェースの使用』 または 535ページの『第38章 フレーム・リレー・インターフェースの構成と監視』 を参照してください。

SDLC インターフェースの構成または監視の説明については、681ページの『第44章 SDLC インターフェースの使用』、または 685ページの『第45章 SDLC インターフェースの構成と監視』 を参照してください。

X.25 インターフェースの構成または監視の説明については、447ページの『第34章 X.25 ネットワーク・インターフェースの構成と監視』 を参照してください。

Circuit Config> プロンプトに戻るには、**exit** コマンドを使用します。

List

list コマンドは、現行のダイヤル回線構成を表示するのに使用します。

I.430 および I.431 について詳しくは、743ページの『I.431 スイッチ変数』 を参照してください。

構文：

list

例：

注：リストされているオプションは、使用するインターフェースのタイプによって異なります。すべてのオプションがすべてのインターフェース・タイプについて表示されるわけではありません。

```
list
Any inbound          set
Bandwidth:           64
Base net:             1
Callback:            yes
Calls:               inbound
Destination name:    remote-site-sanfrancisco
Idle char:           7E
Idle timer:          = 60 sec
Inbound calls        allowed
Inbound dst name:    local-1
LID out address:     1234
LID used:            enabled
Net #:               2
```

ダイヤル回線の構成

Outbound calls allowed
Priority: 8
SelfTest Delay Timer: = 0 ms
Time slot: 1 4 5 8

Any inbound

他のどのダイヤル回線にも一致しないインバウンド・コールがこの回線にマップされ、着信コールとして受け入れられる場合、この設定を表示します。

帯域幅 (Bandwidth)

帯域幅値を Kbps 単位で表示します。

Base net

このダイヤル回線がマップされるシリアル・ライン・インターフェースの名前を表示します。

Callback

このオプションの設定を表示します。

Calls このオプションの設定を表示します。

Destination name

アウトバウンド回線の場合のコーラーのネットワーク・アドレス名、およびインバウンド・コールに関して LID 機構によって使用されるデフォルトの比較用アドレスを表示します。

Idle char

I.43x またはチャンネル化回線に関して使用するアイドル文字を表示します。

Idle timer

アイドル・タイマーの設定値を秒数で表示します。範囲は 0 ~ 65535 であり、0 の場合は、専用回線 (専用線) であることを示します。

Inbound calls allowed

このパラメータを表示するのは、回線がインバウンド・コールを受け付ける構成になっている場合です。

Inbound dst name

このパラメータが表示されるのは、回線が他のどのアドレスにも一致しないインバウンド・コールを受け付ける構成になっている場合です。これは、インバウンド・コールに関して LID 機構によって使用される代替比較用アドレス名です。

LID out address

ルーターを接続しているダイヤル回線の名前を表示します。

LID used

このオプションの設定を表示します。

Net # 基本回線番号を表示します。

Outbound calls allowed

このパラメータを表示するのは、回線がアウトバウンド・コールを開始するために構成されている場合です。

Priority

このパラメータの設定値を表示します。

SelfTest Delay Timer

自己テスト遅延タイマーの設定値をミリ秒数で表示します。範囲は 0 ～ 65535 です。0 は遅延なしを示します。

Time slot

このダイヤル回線に関して使用するスロットのリストを表示します。

Set

set コマンドは、ダイヤル回線をインターフェース (たとえば、ISDN または V.25bis) にマップする場合、ダイヤル回線をインバウンド・コール用またはアウトバウンド・コール用、あるいはその両方用として構成する場合、およびあて先アドレス、インバウンド・アドレス、アイドル・タイムアウト、および自己テスト遅延を設定する場合に使用します。

注:

1. ダイヤル回線上で SDLC、I.430、I.431、チャンネル化、または X.25 を実行している場合は、**set** コマンドを使用して以下のパラメータを変更することはできません。ソフトウェアで特定のデフォルト値が使用されるためです。

- Any_inbound - any_inbound is set
- Calls - inbound
- Destination - default address
- Inbound destination - no destination inbound address
- Idle - 0
- Lid_out_addr - no LID name
- Lid_used - disabled
- Priority - 8
- Self_test_delay

構文 :

```
set          any_inbound
              bandwidth...
              callback...
              calls...
              destination...
              idle...
              idle-char...
              inbound destination...
              lid_out_addr...
              lid_used...
              net...
              priority...
              selftest-delay...
```

ダイヤル回線の構成

timeslot...

any_inbound

他のどのダイヤル回線にも一致しないインバウンド・コールは、この回線にマップして、インバウンド・コールとして受け入れることを指定します。

bandwidth *kbps*

I.430 およびチャンネル化 T1/E1 回線の帯域幅を Kbps 単位で設定します。

有効値：

I.430 の場合：64 または 128

チャンネル化の場合：56 または 64

デフォルト値：64

callback [*Yes* または *No*]

コールバック機能は、コーラーの電話番号を使用してコールを認証テーブルと照合して検査してから、着信コールを切断します。コールバックは、次に、そのコーラーに対して発信コールを行います。コールバックは常に使用不可にしておく必要があります。デフォルト値は *no* です。

calls [*outbound* または *inbound* または *both*]

このダイヤル回線をアウトバウンド・コールの開始専用、インバウンド・コールの受信専用、またはコールの発信と着信の両方に指定します。デフォルトは「両方」です。

destination *address_name*

このパラメーターは、ダイヤル回線が動作するために必要です。これは、このダイヤル回線が接続するリモート・ルーターのネットワーク・ダイヤル・アドレスです。LID プロトコルでは、このパラメーターを着信コールに関するデフォルトの比較用アドレスとして使用します。このパラメーターは、Config> プロンプトで **add isdn address** コマンドまたは **add v25-bis address** コマンドを使用して割り当てたアドレス名と一致しなければなりません。

例：**set destination remote-site-sanfrancisco**

idle # of seconds

回線のタイムアウト期間を指定します。この指定された期間、回線上にプロトコル・トラフィックがないと、ダイヤル回線はハングアップします。範囲は 0 ~ 65535 秒で、デフォルトは 60 秒です。設定値がゼロでは、タイムアウト期間がないことを指定し、これが専用回線であることを示します。

注:

1. WAN 復元動作の場合は、アイドル・タイムアウトを 0 に設定する必要があります。
2. I.43x、X.25、またはチャンネル化回線では、このパラメーターは設定できません。

idle-char

I.43x またはチャンネル化回線に関して使用するアイドル文字を指定します。

注：このパラメーターは、通常の ISDN 回線の場合は構成できません。

有効値：7E または FF

デフォルト値 : 7E

例 : `set idle-char 7E`

inbound-destination *address_name*

このパラメーターは、ダイヤル回線がインバウンド・コールとアウトバウンド・コールの両方に設定されており、このルーターのローカル・ダイヤル・アドレスが、リモート・ルーターがダイヤルするあて先ダイヤル・アドレスと異なる場合に設定します。たとえば、ルーターの 1 つが PBX、国際、または LATA 間交換局を通す必要がある場合は、番号が異なることになります。このパラメーターは、`Config>` プロンプトで **add isdn address** コマンドまたは **add v25-bis address** コマンド を使用して割り当てたアドレス名と一致しなければなりません。インバウンドあて先番号は、着信 LID またはコーラー ID をダイヤル回線と突き合わせるために使用されます。一致していれば、そのダイヤル回線がコールを獲得します。

例: `set inbound remote-site-1`

lid_out_addr *address_name*

`lid_out_addr` は、2 つのルーター間のダイヤル回線の名前です。2 つのルーター間に複数の回線が構成されている場合 (並列回線)、どちらのダイヤル回線が接続するのかをルーター間で明確に知る方法が必要です。この目的のために、一端のルーター (コーラー) から `lid_out_addr` が送信されます。受信側の他方のルーターは、同じストリングをインバウンドあて先名として構成します。`lid_out_addr` は、以前に `config>` プロンプトから **ADD ISDN-ADDRESS** を使用して追加したアドレス名でなければなりません。

lid_used [enabled または disabled]

論理 ID をサポートしない装置への回線の論理 ID の交換を抑制します。

有効値 : Enabled または disabled

デフォルト値 : Disabled

net

インターフェースの基本回線番号を、この回線をマップしたい対象のシリアル・ライン・インターフェースの # に設定します。

例 :

```
Circuit Config> set net
Base net for this circuit [ ]? 2
```

priority

優先順位フィールドは、利用可能なチャネルがないときに、ある回線を別の回線より優先させることを可能にします。コール・リクエストがあり、すべてのチャネルが使用中の場合、要求しているダイヤル・オンデマンド回線の優先順位を、通信中のすべてのダイヤル・オンデマンド回線に突き合わせてチェックします。これより低い優先順位のアウトバウンド・ダイヤル・オンデマンド回線があった場合、その回線は切断され、高い優先順位のダイヤル・オンデマンド回線のためのコールが設定されます。接続のアウトバウンド・エンドの優先順位のみが考慮されます。インバウンド・ダイヤル・オンデマンドのコールは、高い優先順位のアウトバウンド・コールのためにダウンにされることはありません。インバウンド・ダイヤル・オンデマンドのコールは、それより低い優先順位のコールをダウンにすることはできません。

ダイヤル回線の構成

selftest-delay # of milliseconds

このパラメーターを使用して、コールが設定されてから初期パケットが送信されるまでの間の時間を遅らせることができます。 **selftest-delay** を設定すると、初期パケットが除去されるのを防ぐことができます。範囲は 0 ～ 65535 で、デフォルトは 150 です。

V.25bis ダイヤル回線の場合、モデムが同期のために余分な時間が必要な場合は、この遅延を調整します。

ISDN ダイヤル回線の場合、一部の ISDN スイッチは回線の確立が完了したことを相手側に知らせる前にデータ転送を開始するので、ダイヤル・オンデマンド・リンクでは、この設定値を調整することが必要になる場合があります。

timeslot list of slots

このダイヤル回線に関して使用するスロットまたはスロット・リストを指定します。回線に関して使用するスロットの番号は、サービス提供者が発行します。リストを指定する場合は、スロット番号をブランクで区切ります。

注: このパラメーターが使用できるのは、チャンネル化 T1/E1 回線の場合だけです。

有効値 :

チャンネル化 T1 の場合 : 1 ～ 24

チャンネル化 E1 の場合 : 1 ～ 31

デフォルト値 : なし

例 : `set timeslot 1 4 5 8`

ダイヤル回線監視コマンド

表99 は、ダイヤル回線監視コマンドを説明しています。ダイヤル回線監視コマンドは、Circuit Config> プロンプトで入力します。新しい監視変更を有効にするためには、ルーターをリスタートする必要があります。

表 99. ダイヤル回線監視コマンドの要約

コマンド	機能
? (Help)	このコマンド・レベルで使用可能なコマンドをすべて表示するか、特定のコマンドに関するオプション (ただし、選択可能な場合) をリストします。 12ページの『ヘルプを得る』を参照してください。
Callback	認証キャッシュ内の情報を追加、削除、またはリストします。
Exit	直前のコマンド・レベルに戻ります。 13ページの『下位レベル操作環境を終了する』を参照してください。

Callback

callback コマンドは、認証キャッシュ内の情報を追加、削除、またはリストするのに使用します。

構文 :

	<u>callback</u>		<u>add</u>
			<u>delete</u>
			<u>list</u>
	add		認証リストにコールバック番号を追加します。
	delete		認証リストからコールバック番号を削除します。
	list		認証リスト内のコールバック番号およびその他の情報をリストします。

ダイヤル回線の構成

第4部 付録および後付け

付録A. クイック構成リファレンス

重要

IBM 2216 の構成および監視を行おうとしており、サービス端末が読み取り不能の場合は、2216 Nways Multiaccess Connector Service and Maintenance Manual の “Service Terminal Display Unreadable” の項を参照してください。

クイック構成に関する注記

クイック構成プロセスを開始する前に、以下の注記をお読みください。

1. ASCII 端末を、クイック構成プログラムを実行するサービス・ポートに接続します。導入および初期構成の手引きを参照してください。
2. 特定の項目をクイック構成を通して構成する場合、その項目の既存の構成は除去されます。
3. 構成は、アダプター上の 1 つのポートに対応するインターフェース・レベルで行います。アダプターのタイプによってポートの数が異なるので、アダプター上のすべてのインターフェースをアクティブにするために、最大 8 つのポートを構成することが必要になる場合があります (たとえば、X.21 アダプター、FC 2291)。

注: ESCON アダプターまたは PCA では、1 つの物理インターフェースに最大 16 のバーチャル・インターフェースを構成することができます。このバーチャル・インターフェースはすべて、1 つのポートに対応します。

4. **add device** コマンドを使用して、IBM 2216 に導入されているアダプターに必要なすべてのネットワーク・インターフェースまたはバーチャル・インターフェースを『追加』する必要があります。これは、クイック構成を実行する前に行うことが必要です。インターフェースの追加については、78ページの『Add』を参照してください。
5. **network** コマンドを使用して、ネットワーク・インターフェース構成情報を入力する必要があります。103ページの『Network』を参照してください。

選択

クイック構成プログラムの使用時に表示されるパネルで、大括弧 [] で囲んで示されている情報は、デフォルト値です。たとえば、次のように表示されます。

Configure Bridging? (Yes, No, Quit): [Yes]

- デフォルト値の Yes を使用する場合は、**Enter** を押します。
- デフォルト以外の値 (No または Quit) を使用する場合は、小括弧の中の値から選択します。
- 大括弧の中に値が表示されない場合は、デフォルトがないので、値を入力する必要があります。

終了と再開

- **r** を入力すれば、いつでも現行のクイック構成セクションを最初からやり直すことができます。たとえば、インターフェース構成セクションにいるときに、**r** と入力して **Enter** を押すと、そのセクションの始めに戻ります。
- クイック構成を終了するには、**q** と入力して **Enter** を押します。Config> プロンプトが表示されます。
- Config> プロンプトからクイック構成を再開するには、**qc** と入力して **Enter** を押します。

完了

- 構成を完了したら、構成を有効にするために、IBM 2216 をリスタートする必要があります。クイック構成プログラムの終わりに、このオプションが与えられます。

クイック構成プログラムの開始

以下の節では、クイック構成プログラム (**qconfig**) を使用したサンプル構成について説明します。

クイック構成プログラムを開始するには、Config> プロンプトで **qc** と入力します。

開始すると、プログラムは次のようなパネルを表示します。

```
Router Quick Configuration for the following:
o Bridging
  Spanning Tree Bridge (STB)
  Source Routing Bridge (SRB)
  Source Routing Transparent Bridge (SRT)
o Protocols
  IP (including OSPF, RIP, and SNMP)
  IPX
  DNA (DECnet)

Event Logging will be enabled for all configured subsystems
with logging level 'Standard'

Note: Please be warned that any existing configuration for a particular item
will be removed if that item is configured through Quick Configuration
```

イベント・ログ は、システム・アクティビティ、状態の変更、データの送受信、データ誤りと内部誤り、およびサービス要求を記録します。ログ・レベルは標準 (デフォルト) に設定されます。エラー・ログについての詳細は、[イベント・ログ・システム・メッセージの手引き](#) を参照してください。

クイック構成では、次のことが行えます。

1. ブリッジングを構成する
2. プロトコルを構成する
3. ルーターをリスタートする

LAN エミュレーションの構成

ATM 装置を追加した場合、次のようなプロンプトが表示されます。

```
*****
LAN Emulation Configuration
*****

Type 'Yes' to Configure LAN Emulation
Type 'No' to skip LAN Emulation Configuration
Type 'Quit' to exit Quick Config

Configure LAN Emulation? (Yes, No, Quit): [Yes]
```

この質問に回答して、トークンリングとイーサネットのどちらの LAN エミュレーション・クライアントでも構成することができます。

ブリッジングの構成

```
*****
Bridging Configuration
*****

Type 'Yes' to Configure Bridging
Type 'No' to skip Bridging Configuration
Type 'Quit' to exit Quick Config

Configure Bridging? (Yes, No, Quit): [Yes]
```

1. Configure Bridging に応答して、以下の処置の 1 つを行います。
 - **y** と入力して、ブリッジング構成プロンプトを表示する。表示されるプロンプトは、ネットワーク構成によって異なります。
 - **n** と入力して、ブリッジング構成を飛ばし、クイック構成を継続する。
 - **q** と入力して、クイック構成を終了する。これにより、Config> プロンプトが表示されます。クイック構成に再び入るには、このプロンプトの後に **qc** と入力します。
2. ブリッジングを構成することを選択すると、すべての LAN インターフェース上のスパンニング・ツリー・ブリッジング (STB) が使用可能になります。次のようなパネルが表示されます。

```
Type 'r' any time at this level to restart Bridging Configuration

STB will be enabled on all LAN interfaces
```

SRT ブリッジングを構成する場合は、**y** を入力します。そうでない場合は、**n** と入力します。構成内の各トークンリング・インターフェースごとに、インターフェース上でソース・ルーティングを使用可能にするよう指示するプロンプトが出ます。

```
Configure SRT Bridging? (Yes, No): [Yes]
You are now configuring the Source Routing part of SRT Bridging
Bridge Number (hex) of this Router (1-F): [A]
```

3. ブリッジ番号を入力します。これは、2 つの並列セグメント間に固有の 1 ~ F の 16 進値です。

```
Interface 0 (Port 1) is of type Token Ring
Configure Source Routing on this interface (Yes, No): [Yes]
```

4. **y** と入力して、インターフェース上のソース・ルーティングを構成します。コンソールに、次の 2 行が表示されます。

```
Configuring Interface 0 (Port 1)
Segment Number (hex) of this Interface (1-FFF): [A1]
```

注: ソース・ブリッジングではゼロのポート番号は使用できないので、ポート番号が 1 だけ増えます。

各インターフェースに、1 ~ FFF の固有の 16 進値が割り当てられます。各リング (セグメント) 上のインターフェースは同じセグメント番号を持ち、セグメント番号は各リングに固有です。

各トークンリング・インターフェースごとに、次のようなプロンプトが表示されます。

```
Interface 1 (Port 2) is of type Token Ring
Configure Source Routing on this interface? (Yes, No): [Yes]
Configuring Interface 1 (Port 2)
Segment Number (hex) of this Interface (1-FFF): [A2]
```

3 つ以上のインターフェースをソース・ルーティング用に構成する場合は、内部バーチャル・セグメントに対して固有の 1 ~ FFF の 16 進値を入力します。

```
Virtual Segment Number (hex) of this Router (1-FFF): [A4]
```

5. 次のようなパネルが表示されます。

```
This is all configured bridging information:

Interfaces configured for STB:

Interface #   Port #   Interface Type
    0         1         Token Ring
    1         2         Token Ring

The Source Routing part of SRT Bridging has been enabled
Bridge Number of this Router: A

Interfaces configured for Source Routing:

Interface #   Port#   Segment #   Interface Type
    0         1         A1         Token Ring
    1         2         A2         Token Ring

Virtual Segment Number of this Router: A4

Save this Configuration? (Yes, No):
[Yes]
```

6. ブリッジング構成を保管し、クイック構成を継続する場合は、**y** と入力します。ブリッジング構成プロンプトを再表示させる場合は、**n** と入力します。

y と入力すると、次のようなメッセージが表示されます。

```
Bridging configuration saved
```

プロトコルの構成

ブリッジング構成を保管すると、次のようなパネルが表示されます。

```
*****
Protocol Configuration
*****
Type 'Yes' to Configure Protocols
Type 'No' to skip Protocol Configuration
Type 'Quit' to exit Quick Config
Configure Protocols? (Yes, No, Quit): [Yes]
```

次の処置のいずれかを行います。

- **y** と入力して、プロトコルを構成する。
- **n** と入力して、プロトコル構成を飛ばし、クイック構成を継続する。
- **q** と入力して、クイック構成を終了する。

最初に IP を構成し、次に IPX、その後で DECnet を構成します。

IP の構成

Configure Protocol パネルに **y** と応答すると、クイック構成は次のメッセージを表示します。

```
Type 'r' any time at this level to restart Protocol configuration
Configure IP? (Yes, No): [Yes]
```

1. 次の処置のいずれかを行います。

- **y** と入力して、IP を構成する。
- **n** と入力して、IP 構成を飛ばし、クイック構成を継続する。

各インターフェースごとに、次の行が表示されます。

```
Configuring Per-Interface IP Information
Configuring Interface 0 (Token Ring)
Configure IP on this interface? (Yes, No): [Yes]
IP Address: [ ] 128.185.141.1
Address Mask: [255.255.0.0]
```

2. IP アドレスを 10 進表記で入力します。たとえば、128.185.142.20。無効な IP アドレスを入力すると、次のエラー・メッセージのいずれかがコンソールに表示されます。

```
Bad address, please try again.
```

```
This address has already been assigned. Enter a different address
```

アドレス・マスクは、このインターフェースが接続する IP ネットワークまたはサブネットワークを表す 10 進値です。

IP アドレッシングまたはアドレス・マスクについての詳細は、*プロトコルの構成と監視 解説書* を参照するか、あるいはネットワーク管理者に相談してください。

```
Per-Interface IP Configuration complete
```

```
Configuring IP Routing Information
Enable Dynamic Routing (Yes, No): [Yes]
```

3. ルーティング・プロトコル (RIP または OSPF) がルーティング・テーブルを作成する必要がある場合は、**y** と入力します。手動で IP アドレスをルーティング・テーブルに追加する場合 (静的ルート) は、**n** と入力します。

```
Enable OSPF? (Yes, No): [Yes]
```

4. OSPF ルーティング・プロトコルを 1 次動的 IP ルーティング・プロトコルとして使用可能にする場合は、**y** と入力します。RIP は、公示の受信ではなく、公示の送信についてのみ使用可能にされます。OSPF を使用したくない場合は、**n** と入力します。RIP は、公示の送信および受信に対して使用可能にされます。

```
OSPF Enabled with Max routes = 1000 and Max routers = 50
```

Max routes は、OSPF ルーティング・ドメインにインポートされた自律システム (AS) 外部ルートの最大数です。Max routers は、ルーティング・ドメイン内の OSPF ルーターの最大数です。

```
Routing Configuration Complete
```

```
SNMP will be configured with the following parameters:
```

```
Community: public
Access:     READONLY
```

```
If you plan to use the graphical configuration tool
to download a configuration, it requires the definition
of a community name with read_write_trap access.
```

```
Define community with read_write_trap access ? (Yes, No): [Yes]
```

```
This is the information you have entered:
```

Interface #	IP Address	Address Mask
0	128.185.141.1	255.255.255.0
1	128.185.142.1	255.255.255.0
2	128.185.143.1	255.255.255.0

```
OSPF is configured, and RIP is configured only for 'sending'
```

```
SNMP has been configured with the following parameters:
```

```
Community: public
Access:     read_trap

Community: dana
Access:     read_write_trap
```

```
Save this configuration? (Yes, No): [Yes]
```

5. IP 構成を保管し、クイック構成を継続する場合は、**y** と入力します。プロトコル構成プロンプトを再表示させる場合は、**n** と入力します。

IPX の構成

IP 構成を保管すると、次のようなメッセージが表示されます。

```
Configure IPX? (Yes, No): [Yes]
```

1. IPX を構成する場合は、**y** と入力します。 IPX 構成を飛ばして、クイック構成を継続する場合は、**n** と入力します。

次のようなメッセージが表示されます。

```
Type 'r' any time at this level to restart IPX Configuration
IPX Configuration is already present
Configure IPX anyway? (Yes, No): [No] yes
```

2. 既存の構成を置き換える場合は、**y** と入力します。 現行の構成を保持し、継続する場合は、**n** と入力します。

```
Configuring Per-Interface IPX Information
```

```
Configuring Interface 0 (Token Ring)
Configure IPX on this interface? (Yes, No): [Yes]
```

3. 次のメッセージとユーザーの応答は、トークンリング、FDDI、またはイーサネットのいずれを構成しているかによって異なります。

トークンリングの IPX の構成:

- a. 次のプロンプトが表示されます。

```
Token Ring encapsulation (frame) type? (TOKEN--RING MSB, TOKEN--RING LSB,
TOKEN--RING_SNAP MSB, TOKEN--RING_SNAP LSB): [TOKEN--RING MSB]
```

- b. トークンリング・エンド・ステーション上の IPX プロトコルが使用するカプセル化タイプを入力します。

Token--Ring MSB: 最も一般的なカプセル化タイプで、これがデフォルトです。 IBM 2216 は、3 バイト 802.2 ヘッダー (0xE0, 0xE0, 0x03) を付けて、発信パケットを作成します。これは、発信元および先アドレスを MSB (最上位ビット) に入れて、つまり、非標準フォーマット (トークンリングに固有のアドレス・フォーマット) で送信します。

Token--Ring LSB IBM 2216 がアドレスを LSB (最下位ビット) で、つまり標準フォーマットで送信する点を除いて、Token-Ring MSB と同じです。

Token-Ring SNAP MSB IBM 2216 は、8 バイトの 802.2/SNAP ヘッダー (0xAA, 0xAA, 0x03, 0x00, 0x00, 0x00, 0x81, 0x37) を付けて、発信パケットを作成します。これは、発信元および先アドレスを MSB (最上位ビット) に入れて、つまり、非標準フォーマットで送信します。

Token-Ring SNAP LSB IBM 2216 がアドレスを LSB (最下位ビット) で、つまり標準フォーマットで送信する点を除いて、Token-Ring SNAP MSB と同じです。

イーサネットの IPX の構成:

- a. 次のようなプロンプトが表示されます。

```
Ethernet encapsulation type? (ETHERNET_8022, ETHERNET_8023, ETHERNET_ii, ETHERNET_SNAP): [ETHERNET_8023]
```

- b. イーサネット・エンド・ステーション上で IPX プロトコルが使用するカプセル化タイプを入力します。

Ethernet_8022	パケットには 802.2 ヘッダーが含まれています。
Ethernet_8023	802.2 ヘッダーが付かない IEEE 802.3 パケット・フォーマットを使用します。これがデフォルトで、NetWare バージョン 4.0 より前のバージョンのデフォルトです。イーサネット 802.3 は、802.2 ヘッダーを含まないので、IEEE 802 標準に適合しません。これは、ネットワーク上の他のノードとの問題の原因になることがあります。
Ethernet_II	イーサネット・タイプ 8137 をパケット・フォーマットとして使用します。このフォーマットが必要なのは、イーサネット上で NetWare VMS を使用している場合です。NetWare バージョン 4.0 以上の場合は、これがデフォルトです。
Ethernet_SNAP	SNAP ヘッダーが付いた 802.2 形式を使用します。このカプセル化タイプは、トークンリング SNAP カプセル化との整合性のためのもので、ただし、IEEE 標準には違反しており、この標準に準拠するブリッジを介しての相互運用は不可です。

FDDI の IPX の構成:

- a. 次のようなプロンプトが表示されます。

```
FDDI encapsulation (frame) type? (FDDI, FDDI_SNAP): [FDDI_SNAP]
```

- b. FDDI エンド・ステーション上の IPX プロトコルが使用するカプセル化タイプを入力します。

```
fddi                カプセル化タイプを FDDI IEEE 802.2 に設定します。  
fddi_snap          カプセル化タイプを FDDI SNAP に設定します。
```

```
Network Number (hex) (1-FFFFFFFD):[1] 1
```

4. 対応する直接接続ネットワークに IPX ネットワーク番号を割り当てます。各 IPX インターフェースには、固有のネットワーク番号が必要です。

```
Configuring Interface 1 (WAN PPP)  
Configure IPX on this interface? (Yes, No): [Yes]  
Network Number (hex) (1-FFFFFFFD): [1] 2  
  
Enable IPXWAN? (Yes, No): [No] yes  
  
Configuring Interface 2 (WAN PPP)  
Configure IPX on this interface? (Yes, No): [Yes]  
Network Number (hex) (1-FFFFFFFD):[1] 3  
  
Enable IPXWAN? (Yes, No): [No] yes  
  
Host Number for Serial Lines: (000000000000) 1  
  
Configure IPXWAN NodeID? (Yes, No): [Yes]  
NodeID (hex) (1 - FFFFFFFD): [1] 4
```

使用可能にされている場合、IPXWAN プロトコルは、IPX パケットの転送を開始する前に、PPP シリアル・インターフェースで使用するルーティング・パラメータ

ーをネゴシエーションします。IPXWAN は、PPP シリアル・インターフェース上で IPX パケットを転送する必要はありません。IPXWAN Node ID は、ルーターを識別する固有の IPX ネットワーク番号で、ネットワーク・インターフェース上で IPXWAN が使用可能にされている場合に必要です。

5. ホスト番号は、IPX ルーターに割り当てられた固有の 12 桁の 16 進値です。これが必要なのは、シリアル・ラインにはホスト番号を作成する元になるハードウェア・ノード・アドレスがないからです。

```
This is the information you have entered:

                Per-Interface Configuration Information

Cir  Ifc  IPX Net(hex)  Encapsulation  IPXWAN
---  ---  ---          ---          ---
1    1    10           ETHERNET_8023  Not Configured
2    3    300          ---          Not Configured
3    5    400          ---          Not Configured
4    6    600          ---          Enabled

Host Number for Serial Lines: 0002210A0000
IPXWAN Node ID = 2210A
IPX Router Name = ipxwan_router-2210A

Save this configuration? (Yes, No): [Yes]
```

6. IPX 構成を保管し、クイック構成を継続する場合は、**y** と入力します。IPX 構成プロンプトを再表示させる場合は、**n** と入力します。
y と入力すると、次のようなメッセージが表示されます。

```
IPX configuration saved
```

DECnet (DNA) の構成

IPX 構成を保管すると、次のようなメッセージが表示されます。

```
IPX Configuration saved
Configure DNA? (Yes, No): [Yes]
```

1. DNA を構成する場合は、**y** と入力します。DNA 構成を飛ばして、クイック構成を継続する場合は、**n** と入力します。

```
Type 'r' any time at this level to restart DNA Configuration

Configuring Global DNA information

Highest Node Number (decimal) (1-1023): [32]
Router Level (Level1, Level2, DEC Level1, DEC Level2):
[ Level2]
Highest Area (decimal) (1-63): [63]
Node Address (area.node): (63.32)
```

上記の構成フィールドは、以下を考慮して構成します。

Highest Node Number

ルーターのエリアの最高ノード・アドレス。これを過度に高く設定すると、ルーターの効率に影響を与え、過剰な記憶域が必要になります。

Router Level

ルーターがレベル 1 またはレベル 2 のどちらのルーターであるかを識別します。レベル 1 のルーターは、そのエリア内のすべてのノードを追跡しますが、エリア外のノードには関与しません。レベル 2 のルーターは、エリア間でトラフィックをルートします。

通常は Level1 または Level2 を選択します。ただし、ルーターが X.25 ネットワークを介して DEC X.25 標準準拠のルーターと通信する必要がある場合は例外で、その場合にのみ DEC Level1 または DEC Level2 を選択します。

Highest Area

この番号は、少なくともネットワーク全体で最も高いエリア番号と同じ値である必要があります。

Node Address

このルーターのノード ID で、ネットワーク内で固有である必要があります。

Enter キーを押すと、次のような画面が表示されます。

```
Configuring Per-Interface DNA Information
Configuring Max Routers on each interface

Configuring Interface 0 (Ethernet)
Configure DNA on this interface? (Yes, No) [YES]
Max Routers (decimal) (1-33): [16]

Configuring Interface 1 (WAN PPP)
Configure DNA on this interface? (Yes, No) [Yes]

Configuring Interface 2 (Token Ring)
Configure DNA on this interface? (Yes, No) [Yes]
Max Routers (decimal) (1-33): [16]
```

- DECnet ネットワークに接続されるすべてのインターフェースに対して **y** を入力します。LAN の場合、Max Routers は、この回線上に存在できる他のルーターの数を指定します。ルーターの効率とメモリー所要量のため、この引き数は、この回線上の隣接ルーターの合計数より少し多めに設定します。

次のようなパネルが表示されます。

```
This is the information you have entered:

Global Configuration Information

Highest Node Number:      32
Router Level:             Level2
Highest Area:             63
Node Address:             63.32

Pre-Interface Configuration Information
Interface Number          Max Routers

0                          16
1                          1
2                          16

Save this configuration? (Yes, No): [Yes]
```

- DECnet 構成を保管し、クイック構成を継続する場合は、**y** と入力します。DECnet 構成プロンプトを再表示させる場合は、**n** と入力します。

y と入力すると、次のようなメッセージが表示されます。

```
DNA Configuration Saved
```

IBM 2216 のリスタート

プロトコルを構成した後、次のようなメッセージを受け取ります。

```
Quick Config Done  
Do you want to write this configuration? (Yes, No): [Yes]
```

y と入力すると、変更が保管され、次のような情報が表示されます。

```
Default config file written successfully.  
  
Configuration was written.  
The system must be restarted for this configuration to take effect.
```

新しい構成で IBM 2216 をリスタートするには、OPCON プロンプト (*) で **reload** と入力します。現行の構成を変更または表示するには、**qc** と入力します。

付録B. X.25 ナショナル・パーソナリティー

この付録には、GTE-Telenet および DDN のデフォルトの設定値をリストします。

GTE-Telenet

以下のパラメーターが GTE-Telenet のデフォルト設定値です。

- コール・リクエスト: 20
- 復旧要求:
 - 再試行: 1
 - タイマー: 18
- 切断: 受動
- DP タイマー: 500 ミリ秒
- フレーム・ウィンドウ・サイズ: 7
- ネットワーク・タイプ: CCITT
- N2 タイムアウト: 20
- パケット:
 - デフォルト・サイズ: 128
 - 最大サイズ: 256
 - ウィンドウ・サイズ: 2
- リセット
 - 再試行: 1
 - タイマー: 18
- リスタート
 - 再試行: 1
 - タイマー: 18
- 標準: 1984 年版
- T1 タイマー: 4
- T2 タイマー: 2

DDN

以下のパラメーターが DDN のデフォルト設定値です。

- コール・リクエスト: 20
- 復旧要求:
 - 再試行: 1
 - タイマー: 18
- 切断: 受動
- DP タイマー: 500 ミリ秒
- フレーム・ウィンドウ・サイズ: 7

- ネットワーク・タイプ: CCITT
- N2 タイムアウト: 20
- パケット:
 - デフォルト・サイズ: 128
 - 最大サイズ: 256
 - ウィンドウ・サイズ: 2
- リセット
 - 再試行: 1
 - タイマー: 18
- リスタート
 - 再試行: 1
 - タイマー: 18
- 標準: 1984 年版
- T1 タイマー: 4
- T2 タイマー: 2

付録C. 複数のディスクからのルーター・ロード・ファイルの作成

ソフトウェア・ロードが複数のディスクで到着した場合、以下の手順を使用して、ロードを結合して1つのロード・ファイルを作成し、ルーターがブート時に使用できるようにします。

最初のディスクには、既存のロードを分割して複数のディスクでトランスポートするのに必要な、次の4つのファイルが入っています。

cutup.c

(標準 C コンパイラを使用してコンパイルできる UNIX C ソース・ファイル)

cutup.exe

(DOS)

以下のファイルは、分割されたロードを再アセンブルして、DOS または UNIX サーバーにロードするのに使用します。

kopy.bat

(DOS)

kopy (UNIX シェル・スクリプト)

DOS でのロード・ファイルのアセンブル

2枚のディスクからロードをアセンブルするには、ディスク1 (KOPY.BAT) で提供された DOS バッチ・ファイルを使用し、次の構文を用いて行います。

```
kopy <installation_drive><destination_directory>
```

ロードをアセンブルする前に、あて先ディレクトリーを作成したこと、および installation_diskette_drive パラメーターで指定されたドライブに最初のディスクが挿入されていることを確認してください。次の例は、これらの手順を示しています。

```
B:\>kopy b: c:\source\cutup\tmp
B:\>copy c:\gw0/B c:\source\cutup\tmp\gw.tmp
1 file(s) copied
.
Please mount the second diskette
Press any key to continue . . .
Copying the second load file fragment
B:\>
B:\>copy c:\source\cutup\tmp\gw.tmp/B + b:\gw1
c:\source\cutup\tmp\gw.tmp c:\SOURCE\CUTUP\TMP\GW.TMP
B:\GW1
1 file(s) copied
B:\>rename c:\source\cutup\tmp\gw.tmp gw.ldc
Load file reassembly was successful
B:>
```

UNIX でのロード・ファイルのアセンブル

2 枚の UNIX ディスケットからロードをアセンブルするには、ディスク 1 で提供された UNIX Bourne シェル・スクリプト (kopy) を使用し、次の構文を用いて行うことができます。

```
kopy<installation_drive><diskette_directory><destination_directory>
```

ロードをアセンブルする前に、あて先ディレクトリーを作成したこと、および installation_diskette_drive パラメーターで指定されたドライブに最初のディスクが挿入されていることを確認してください。次の例は、これらの手順を示しています。

```
kopy /dev/fd0 /kew /pcfs
```

```
Please insert the first diskette
Copying the first load file fragment
Please mount the second diskette
Copying the second load file fragment
Load file reassembly was successful
# ls /kew
gw0 gw1 gw.ldc
```

UNIX Bourne シェル・スクリプトを使用できない場合は、以下の手順を使用して、手動でロードをアセンブルすることができます。

1. 2 枚のディスク (gw0 および gw1) に分割されたロードを、UNIX ファイル・システム上のディレクトリーにコピーする。
2. 次の UNIX コマンドを入力する。

```
cat gw0 gw1 > gw.ldc
```

得られたファイル (gw.ldc) は、アセンブルされたルーター・ロードです。

DOS でのロード・ファイルの分割

DOS のもとでロードを分割するには、CUTUP.EXE ファイルを使用して、次のようにして行います。

```
cutup<file_extension><file_name><cut_length>
```

file_extension は、分割する必要がある各スライスの先頭に付加されます。file_name は、分割されるファイルの DOS ファイル名です。cut_length は、CUTUP.EXE がファイルを分割するときの各フラグメントの長さです。次の例は、これらの手順を示しています。

```
C: \source\cutup>dir
Volume in drive C has no label
Volume Serial Number is XXXXXXXX
Directory of C: \SOURCE\CUTUP
.0730934:46p
..0730934:46p
GW LDC 10225660728931:22p
CUTUP EXE 105410902939:38a
2 file(s) 1033107 bytes
14811136 bytes free
C: \source\cutup>cutup gw.ldc gw 1000000
.....
```

```

.....
c: \SOURCE\CUTUP>dir
Volume in drive C has no label
Volume Serial Number is XXXXXXXX
Directory of C: \SOURCE\CUTUP
.0730934:46p
..0730934:46p
GW      0 10000000801931:22p
GW      LDC    10225660728931:22p
CUTUP   EXE    105410902939:38a
GW      1  225660801931:22p
4 file(s)  2055673 bytes
14811136 bytes free

```

UNIX でのロード・ファイルの分割

ロードの分割は、cutup.c を使用して行います。始めに、UNIX コンパイラーを使用してプログラムをコンパイルし、分割実行可能ファイルを作成します。その後で、次の構文を使用します。

```
cutup<file_extension><file_name><cut_length>
```

file_extension は、分割する必要がある各スライスの先頭に付加されます。file_name は、分割されるファイルの DOS ファイル名です。cut_length は、ファイルを分割するのに使用される長さ CUTUP.EXE です。次の例は、これらの手順を示しています。

```

# ls -la
total 658
drwxrwxr-x 2 root  512 Aug 114:41 .
drwxrwxr-x 26 root 1024 Aug 114:41 ..
drwxrwxr-x 2 root 24576 Aug 114:41 cutup
drwxrwxr-x 2 root1022566 Aug 114:41 gw.ldc

# cutup gw.ldc gw 100000

# ls -la
total 658
drwxrwxr-x 2 root  512 Aug 114:41 .
drwxrwxr-x 26 root 1024 Aug 114:41 ..
drwxrwxr-x 2 root 24576 Aug 114:41 cutup
drwxrwxr-x 2 root1022566 Aug 114:41 gw.ldc
drwxrwxr-x 2 root1000000 Aug 114:41 gw0
drwxrwxr-x 2 root  22566 Aug 114:41 gw1

```

付録D. リモート AAA 属性

この付録には、Radius、TACACS、および TACACS+ サーバーで使用されるリモート AAA 属性が記載してあります。

Radius

IBM 取引先 ID : 211

許可属性

ドラフト標準

TUNNEL_TYPE	64
TUNNEL_MEDIUM_TYPE	65
TUNNEL_CLIEN_TYPE	66
TUNNEL_SERVER_EP	67
TUNNEL_CONN_ID	68
TUNNEL_PASSWORD	69

値

TUNNEL_TYPE		整数
3	L2TP	
TUNNEL_MEDIUM_TYPE		整数
1	IP	
TUNNEL_SERVER_EP		ストリング
	IP アドレス	

IBM 取引先固有

NAS_TUNNEL_PASSWORD	101
CALLBACK_FLAGS	210
ENCRYPTION	211
HOSTNAME	213
SUBNETMASK	215
PRIVILEGE	216

キーワード

取引先固有フィールド <keyword>=<value> への入力ができる Radius サーバーの場合は、キーワードが使用されます。

KWD_CALLBACK_FLAGS	CBF
KWD_ENCRYPTION	ENC
KWD_HOSTNAME	HSN
KWD_SUBNETMASK	SNM

KWD_PRIVELGE	PRV
値	
PRIVILEGE:	
ADMIN	
OPER	
MONITOR	
CALLBACKFLAGS	
REQ	必須コールバック
ROAM	ローミング・コールバック

TACACS+

認証

許可

PPP サービス =ppp protocol=ip
 LOGIN サービス =shell cmd=null pri_lvl*0

標準 TACACS+ 属性

service
 protocol
 cmd
 addr
 timeout
 priv_lvl
 callback-dialstring

IBM 固有属性

encryption_key 16 進 16 文字
 dial_out TRUE FALSE ONLY

会計

task_id
 start_time
 stop_time
 elapsed_time
 timezone
 event
 reason
 bytes
 bytes_in
 bytes_out
 paks
 paks_in

paks_out
status
err_msg

略語集

- AARP** AppleTalk アドレス解決プロトコル (AppleTalk Address Resolution Protocol)
- ABR** エリア・ボーダー・ルーター (area border router)
- ack** 確認応答 (acknowledgment)
- AIX** 拡張対話式エグゼクティブ (Advanced Interactive Executive)
- AMA** 任意 MAC アドレス指定 (arbitrary MAC addressing)
- AMP** アクティブ・モニター・プレゼント (active monitor present)
- ANSI** 米国規格協会 (American National Standards Institute)
- AP2** AppleTalk フェーズ 2 (AppleTalk Phase 2)
- APPN** 拡張ピアツーピア・ネットワーキング機能 (Advanced Peer-to-Peer Networking)
- ARE** 全ルート探索 (all-routes explorer)
- ARI** ATM 実インターフェース (ATM real interface)
- ARI/FCI**
アドレス認知標識/フレーム複写標識 (address recognized indicator/frame copied indicator)
- ARP** アドレス解決プロトコル (Address Resolution Protocol)
- AS** 自律システム (autonomous system)
- ASBR** 自律システム境界ルーター (autonomous system boundary router)
- ASCII** 情報交換用米国標準コード (American National Standard Code for Information Interchange)
- ASN.1** 抽象構文表記法 1 (abstract syntax notation 1)
- ASRT** 適応ソース・ルーティング透過 (adaptive source routing transparent)
- ASYNC**
非同期 (asynchronous)
- ATCP** AppleTalk 制御プロトコル (AppleTalk Control Protocol)
- ATP** AppleTalk トランザクション・プロトコル (AppleTalk Transaction Protocol)
- AUI** 接続ユニット・インターフェース (attachment unit interface)
- AVI** ATM バーチャル・インターフェース (ATM virtual interface)
- ayt** are you there (相手確認)
- BAN** 境界アクセス・ノード (Boundary Access Node)
- BBCM** ブリッジング・ブロードキャスト・マネージャー (Bridging Broadcast Manager)
- BECN** 逆方向明示的輻輳 (ふくそう) 通知 (backward explicit congestion notification)
- BGP** ボーダー・ゲートウェイ・プロトコル (Border Gateway Protocol)
- BNC** bayonet Niell-Concelman
- BNCP** ブリッジング・ネットワーク制御プロトコル (Bridging Network Control Protocol)

BOOTP

BOOT プロトコル (BOOT protocol)

BPDU ブリッジ・プロトコル・データ単位 (bridge protocol data unit)

bps ビット/秒 (bits per second)

BR ブリッジング/ルーティング (bridging/routing)

BRS 帯域幅予約システム (bandwidth reservation system)

BSD Berkeley ソフトウェア配布 (Berkeley software distribution)

BTP BOOTP リレー・エージェント (BOOTP relay agent)

BTU 基本伝送単位 (basic transmission unit)

CAM コンテンツ・アドレス可能メモリー (content-addressable memory)

CCITT 国際電信電話諮問委員会 (Consultative Committee on International Telegraph and Telephone)

CD 衝突検出 (collision detection)

CGWCON

ゲートウェイ・コンソール (Gateway Console)

CIDR 無クラス・ドメイン間ルーティング (Classless Inter-Domain Routing)

CIP クラシカル IP (Classical IP)

CIR 認定情報速度 (committed information rate)

CLNP コネクションレス型モード・ネットワーク・プロトコル (Connectionless-Mode Network Protocol)

CPU 中央演算処理装置 (central processing unit)

CRC 巡回冗長検査 (cyclic redundancy check)

CRS 構成報告書サーバー (configuration report server)

CTS 送信可 (clear to send)

CUD コール・ユーザー・データ (call user data)

DAF あて先アドレス・フィルター (destination address filtering)

DB データベース (database)

DBsum

データベース要約 (database summary)

DCD データ・チャネル受信回線信号検出器 (data channel received line signal detector)

DCE データ回線終端装置 (data circuit-terminating equipment)

DCS 直接接続サーバー (directly connected server)

DDLC デュアル・データ・リンク制御装置 (dual data-link controller)

DDN 国防データ・ネットワーク (Defense Data Network)

DDP データグラム送達プロトコル (Datagram Delivery Protocol)

DDT 動的デバッグ・ツール (Dynamic Debugging Tool)

DHCP 動的ホスト構成プロトコル (Dynamic Host Configuration Protocol)

dir	直接接続 (directly connected)
DL	データ・リンク (data link)
DLC	データ・リンク制御 (data link control)
DLCI	データ・リンク接続識別子 (data link connection identifier)
DLS	データ・リンク交換 (data link switching)
DLSw	データ・リンク交換 (data link switching)
DMA	直接メモリー・アクセス (direct memory access)
DNA	デジタル・ネットワーク体系 (Digital Network Architecture)
DNCP	DECnet プロトコル制御プロトコル (DECnet Protocol Control Protocol)
DNIC	データ・ネットワーク識別子コード (Data Network Identifier Code)
DoD	米国国防総省 (Department of Defense)
DOS	ディスク・オペレーティング・システム (Disk Operating System)
DR	指定ルーター (designated router)
DRAM	動的ランダム・アクセス・メモリー (Dynamic Random Access Memory)
DSAP	あて先サービス・アクセス・ポイント (destination service access point)
DSE	データ交換装置 (data switching equipment)
DSE	データ交換機 (data switching exchange)
DSR	データ・セット・レディー (data set ready)
DSU	データ・サービス装置 (data service unit)
DTE	データ端末装置 (data terminal equipment)
DTR	データ端末レディー (data terminal ready)
Dtype	あて先タイプ (destination type)
DVMRP	距離ベクトル・マルチキャスト・ルーティング・プロトコル (Distance Vector Multicast Routing Protocol)
E1	2.048 Mbps 伝送速度 (2.048 Mbps transmission rate)
EDEL	終了区切り文字 (end delimiter)
EDI	エラー検出標識 (error detected indicator)
EGP	外部ゲートウェイ・プロトコル (Exterior Gateway Protocol)
EIA	米国電子工業会 (Electronics Industries Association)
ELAN	エミュレート LAN (Emulated LAN)
ELAP	EtherTalk リンク・アクセス・プロトコル (EtherTalk Link Access Protocol)
ELS	イベント・ログ・システム (Event Logging System)
ELSCon	2 次 ELS コンソール (Secondary ELS Console)
ESI	エンド・システム識別子 (End system identifier)

EST	東部標準時 (Eastern Standard Time)
Eth	イーサネット (Ethernet)
fa-ga	機能アドレス・グループ・アドレス (functional address-group address)
FCS	フレーム検査シーケンス (frame check sequence)
FECN	順方向明示的輻輳 (ふくそう) 通知 (forward explicit congestion notification)
FIFO	先入れ先出し (first in, first out)
FLT	フィルター・ライブラリー (filter library)
FR	フレーム・リレー (Frame Relay)
FRL	フレーム・リレー (Frame Relay)
FTP	ファイル転送プロトコル (File Transfer Protocol)
GMT	グリニッジ標準時 (Greenwich Mean Time)
GOSIP	米国政府 OSI 調達仕様 (Government Open Systems Interconnection Profile)
GTE	一般電話会社 (General Telephone Company)
GWCON	ゲートウェイ・コンソール (Gateway Console)
HDLC	ハイレベル・データ・リンク制御 (high-level data link control)
HEX	16 進法 (hexadecimal)
HPR	高性能ルーティング (high-performance routing)
HST	TCP/IP ホスト・サービス (TCP/IP host services)
HTF	ホスト・テーブル形式 (host table format)
IBD	統合ブート装置 (Integrated Boot Device)
ICMP	インターネット制御メッセージ・プロトコル (Internet Control Message Protocol)
ICP	インターネット制御プロトコル (Internet Control Protocol)
ID	識別 (identification)
IDP	イニシアル・ドメイン・パート (Initial Domain Part)
IDP	インターネット・データグラム・プロトコル (Internet Datagram Protocol)
IEEE	米国電気電子学会 (Institute of Electrical and Electronics Engineers)
lfc#	インターフェース番号 (interface number)
IGP	内部ゲートウェイ・プロトコル (interior gateway protocol)
InARP	逆アドレス解決プロトコル (Inverse Address Resolution Protocol)
IP	インターネット・プロトコル (Internet Protocol)
IPCP	IP 制御プロトコル (IP Control Protocol)
IPPN	IP プロトコル・ネットワーク (IP Protocol Network)
IPX	インターネットワーク・パケット交換 (Internetwork Packet Exchange)
IPXCP	IPX 制御プロトコル (IPX Control Protocol)

ISDN	サービス総合デジタル網 (integrated services digital network)
ISO	国際標準化機構 (International Organization for Standardization)
Kbps	キロビット/秒 (kilobits per second)
LAC	L2TP ネットワーク・アクセス・コンセントレーター (L2TP Network Access Concentrator)
LAN	ローカル・エリア・ネットワーク (local area network)
LAPB	リンク・アクセス・プロトコル (link access protocol-balanced)
LAT	ローカル・エリア・トランスポート (local area transport)
LCS	LAN チャンネル・ステーション (LAN Channel Station)
LCP	リンク制御プロトコル (Link Control Protocol)
LED	発光ダイオード (light-emitting diode)
LF	最大フレーム、改行 (largest frame; line feed)
LIS	論理 IP サブネット (Logical IP subnet)
LLC	論理リンク制御 (logical link control)
LLC2	論理リンク制御 2 (logical link control 2)
LMI	ローカル管理インターフェース (local management interface)
LNS	L2TP ネットワーク・サーバー (L2TP Network Server)
LRM	LAN 報告機構 (LAN reporting mechanism)
LS	リンク状態 (link state)
LSA	リンク状態公示 (link state advertisement)
LSA	リンク・サービス体系 (Link Services Architecture)
LSB	最下位ビット (least significant bit)
LSI	LAN ショートカット・インターフェース (LAN shortcuts interface)
LSreq	リンク状態要求 (link state request)
LSrxl	リンク状態再送リスト (link state retransmission list)
LU	論理装置 (logical unit)
MAC	媒体アクセス制御 (medium access control)
Mb	メガビット (megabit)
MB	メガバイト (megabyte)
Mbps	メガビット/秒 (megabits per second)
MBps	メガバイト/秒 (megabytes per second)
MC	マルチキャスト (multicast)
MCF	MAC フィルター (MAC filtering)
MIB	管理情報ベース (Management Information Base)
MIB II	管理情報ベース II (Management Information Base II)

MILNET

軍用ネットワーク (military network)

MOS マイクロ・オペレーティング・システム (Micro Operating System)

MOSDBG

マイクロ・オペレーティング・システム・デバッグ・ツール (Micro Operating System Debugging Tool)

MOSDDT

マイクロ・オペレーティング・システム動的デバッグ・ツール (Micro Operating System Dynamic Debugging Tool)

MOSPF

マルチキャスト拡張付き最短パス最優先オープン (Open Shortest Path First with multicast extensions)

MPC マルチパス・チャンネル (Multi-Path Channel)

MPC+ ハイパフォーマンス・データ転送 (HPDT) マルチパス・チャンネル (High performance data transfer (HPDT) Multi-Path channel)

MSB 最上位ビット (most significant bit)

MSDU MAC サービス・データ単位 (MAC service data unit)

MRU 最大受信単位 (maximum receive unit)

MTU 最大伝送単位 (maximum transmission unit)

nak 否定応答 (not acknowledged)

NAS Nways スイッチ管理ステーション (Nways Switch Administration station)

NBMA 非同報通信マルチアクセス (Non-Broadcast Multiple Access)

NBP ネーム・バインディング・プロトコル (Name Binding Protocol)

NBR 近隣、ネイバー (neighbor)

NCP ネットワーク制御プロトコル (Network Control Protocol)

NCP ネットワーク・コア・プロトコル (Network Core Protocol)

NDPS 非介入パス・スイッチ (non-disruptive path switching)

NetBIOS

ネットワーク基本入出力システム (Network Basic Input/Output System)

NHRP ネクスト・ホップ解決プロトコル (Next Hop Resolution Protocol)

NIST 米国連邦情報技術局 (National Institute of Standards and Technology)

NPDU ネットワーク・プロトコル・データ単位 (Network Protocol Data Unit)

NRZ 非ゼロ復帰 (non-return-to-zero)

NRZI 非ゼロ復帰反転 (non-return-to-zero inverted)

NSAP ネットワーク・サービス・アクセス・ポイント (Network Service Access Point)

NSF 米国科学財団 (National Science Foundation)

NSFNET

米国科学財団ネットワーク (National Science Foundation NETWORK)

NVCNFG

不揮発性構成 (nonvolatile configuration)

OPCON

オペレーター・コンソール (Operator Console)

OSI 開放型システム間相互接続 (open systems interconnection)

OSICP

OSI 制御プロトコル (OSI Control Protocol)

OSPF 最短パス最優先オープン (Open Shortest Path First)

OUI 組織固有識別子 (organization unique identifier)

PC パーソナル・コンピューター (personal computer)

PCA 並列チャンネル・アダプター (parallel channel adapter)

PCR ピーク・セル速度 (peak cell rate)

PDN 公衆データ網 (public data network)

PING パケット・インターネット・グローパー (packet internet groper)

PDU プロトコル・データ単位 (protocol data unit)

PID プロセス識別 (process identification)

P-P ポイント・ポイント (Point-to-Point)

PPP ポイント・ポイント・プロトコル (Point-to-Point Protocol)

PROM プログラム式読み取り専用メモリー (programmable read-only memory)

PU 物理装置 (physical unit)

PVC パーマネント・バーチャル・サーキット (permanent virtual circuit)

RAM ランダム・アクセス・メモリー (random access memory)

RD ルート記述子 (route descriptor)

REM リング・エラー監視 (ring error monitor)

REV 受信 (receive)

RFC Request for Comments (コメント要求)

RI リング標識、ルーティング情報 (ring indicator; routing information)

RIF ルーティング情報フィールド (routing information field)

RII ルーティング情報標識 (routing information indicator)

RIP ルーティング情報プロトコル (Routing Information Protocol)

RISC 縮小命令セット・コンピューター (reduced instruction-set computer)

RNR 受信不可 (receive not ready)

ROM 読み取り専用メモリー (read-only memory)

ROpcon

リモート・オペレーター・コンソール (Remote Operator Console)

RPS リング・パラメーター・サーバー (ring parameter server)

RTMP ルーティング・テーブル保守プロトコル (Routing Table Maintenance Protocol)

RTP	ルーティング更新プロトコル (RouTing update Protocol)
RTS	送信要求 (request to send)
Rtype	ルート・タイプ (route type)
rxmits	再送 (retransmissions)
rxmt	再送する (retransmit)
s	秒 (second)
SAF	発信元アドレス・フィルター (source address filtering)
SAP	サービス・アクセス・ポイント (Service access point)
SAP	サービス公示プロトコル (Service Advertising Protocol)
SCR	持続セル速度 (sustained cell rate)
SCSP	サーバー・キャッシュ同期プロトコル (Server Cache Synchronization Protocol)
sdel	開始区切り文字 (start delimiter)
SDLC	SDLC リレー、同期データ・リンク制御 (SDLC relay, synchronous data link control)
seqno	シーケンス番号 (sequence number)
SGID	サーバー・グループ ID (sever group id)
SGMP	シンプル・ゲートウェイ監視プロトコル (Simple Gateway Monitoring Protocol)
SL	シリアル・ライン (serial line)
SMP	待機モニター・プレゼント (standby monitor present)
SMTP	シンプル・メール転送プロトコル (Simple Mail Transfer Protocol)
SNA	システム・ネットワーク体系 (Systems Network Architecture)
SNAP	サブネットワーク・アクセス・プロトコル (Subnetwork Access Protocol)
SNMP	シンプル・ネットワーク管理プロトコル (Simple Network Management Protocol)
SNPA	サブネットワーク接続ポイント (subnetwork point of attachment)
SPF	OSPF エリア内ルート (OSPF intra-area route)
SPE1	OSPF 外部ルート・タイプ 1 (OSPF external route type 1)
SPE2	OSPF 外部ルート・タイプ 2 (OSPF external route type 2)
SPIA	OSPF エリア間ルート・タイプ (OSPF inter-area route type)
SPID	サービス・プロファイル ID (service profile ID)
SPX	順次パケット交換 (Sequenced Packet Exchange)
SQE	信号品質エラー (signal quality error)
SRAM	静的ランダム・アクセス・メモリー (static random access memory)
SRB	ソース・ルーティング・ブリッジ (source routing bridge)
SRF	特定ルート・フレーム (specifically routed frame)
SRLY	SDLC リレー (SDLC relay)
SRT	ソース・ルーティング透過 (source routing transparent)

SR-TB	ソース・ルーティング - 透過型ブリッジ (source routing-transparent bridge)
STA	静的 (static)
STB	スパンニング・ツリー・ブリッジ (spanning tree bridge)
STE	スパンニング・ツリー探索 (spanning-tree explorer)
STP	シールド付き対より線、スパンニング・ツリー・プロトコル (shielded twisted pair; spanning tree protocol)
SVC	スイッチド・バーチャル・サーキット (switched virtual circuit)
TB	透過型ブリッジ (transparent bridge)
TCN	トポロジー変更通知 (topology change notification)
TCP	伝送制御プロトコル (Transmission Control Protocol)
TCP/IP	伝送制御プロトコル/インターネット・プロトコル (Transmission Control Protocol/ Internet Protocol)
TEI	端末終端点識別子 (terminal endpoint identifier)
TFTP	トリビアル・ファイル転送プロトコル (Trivial File Transfer Protocol)
TKR	トークンリング (token ring)
TMO	タイムアウト (timeout)
TOS	サービスのタイプ (type of service)
TSF	透過スパンニング・フレーム (transparent spanning frames)
TTL	活動回数 (time to live)
TTY	テレタイプライター (teletypewriter)
TX	送信 (transmit)
UA	非番号制確認 (unnumbered acknowledgment)
UDP	ユーザー・データグラム・プロトコル (User Datagram Protocol)
UI	非番号制情報 (unnumbered information)
UTP	シールドなし対より線 (unshielded twisted pair)
VCC	バーチャル・チャネル・コネクション (Virtual Channel Connection)
VINES	バーチャル・ネットワーキング・システム (Virtual NEtworking System)
VIR	可変情報速度 (variable information rate)
VL	バーチャル・リンク (virtual link)
VNI	バーチャル・ネットワーク・インターフェース (Virtual Network Interface)
VR	バーチャル・ルート (virtual route)
WAN	広域ネットワーク (wide area network)
WRS	WAN 復元/再ルート (WAN restoral/reroute)
X.25	パケット交換網 (packet-switched networks)
X.251	X.25 物理レイヤー (X.25 physical layer)

- X.252** X.25 フレーム・レイヤー (X.25 frame layer)
- X.253** X.25 パケット・レイヤー (packet layer)
- XID** 交換 ID (exchange identification)
- XNS** Xerox ネットワーク・システム (Xerox Network Systems)
- XSUM** チェックサム (checksum)
- ZIP** AppleTalk ゾーン情報プロトコル (AppleTalk Zone Information Protocol)
- ZIP2** AppleTalk ゾーン情報プロトコル 2 (AppleTalk Zone Information Protocol 2)
- ZIT** ゾーン情報テーブル (Zone Information Table)

用語集

この用語集には、以下からの用語および定義が含まれています。

- *American National Standard Dictionary for Information Systems*, ANSI X3.172-1990 (米国規格協会 (ANSI) が 1990 年に著作権を取得)。この複製版が米国規格協会 (ANSI: 11 West 42nd Street, New York, New York 10036) から発売されています。定義の後に記号 (A) を付けて出典を示してあります。
- ANSI/EIA Standard--440-A, *Fiber Optic Terminology*。この複製版が米国電子工業会 (2001 Pennsylvania Avenue, N.W., Washington, DC 20006) から発売されています。定義の後に記号 (E) を付けて出典を示してあります。
- *Information Technology Vocabulary*。国際標準化機構および国際電気標準会議の第 1 合同技術委員会第 1 分科会 (ISO/IEC JTC1/SC1) によって編さんされたものです。この語い集の刊行部分から転載した定義については、その後に記号 (I) を付けて示してあります。また、ISO/IEC JTC1/SC1 で編さん中の国際規格草案、分科会草案、および作業文書から採用した定義については、その後に記号 (T) を付けて、SC1 の加盟各国諸団体間で最終合意がなされていないことを示してあります。
- *IBM Dictionary of Computing*, New York: McGraw-Hill, 1994
- Internet Request for Comments: 1208, *Glossary of Networking Terms*
- Internet Request for Comments: 1392, *Internet Users' Glossary*
- *Object-Oriented Interface Design: IBM Common User Access Guidelines*, Carmel, Indiana: Que, 1992.

この用語集では、以下の形で相互参照しています。

と対比:

反対の意味または実質的に異なる意味をもつ用語を示します。

の同義語:

この用語集の該当箇所に記述されている、優先的に使用してほしい、同じ意味をもつ用語を示します。

と同義:

逆方向参照として、定義の対象となっている用語から、同じ意味をもつ他の用語をすべて参照します。

を参照:

一部の語 (特に最後の語) が同じ複数語からなる用語を参照します。

も参照:

関連する意味 (同義ではない) をもつ用語を参照します。

A

AAL. ATM アダプテーション・レイヤー (ATM Adaptation Layer)。ヘッダーを追加/除去し、セルへからのデータを細分化/再組み立てすることにより、ATM ネットワークへからのユーザー・データを適応させるレイヤー。

AAL-5. ATM アダプター・レイヤー 5 (ATM Adaptation Layer 5)。複数ある標準 AAL の 1 つ。AAL-5 はデータ通信用に設計されたもので、LAN エミュレーションおよびクラシカル IP によって使用される。

抽象構文 (abstract syntax). データ伝送に必要な特性はすべて含んでいるが、その他の明細 (たとえば、特定のコンピューター・アーキテクチャーに依存する明細など) は省略 (抽象化) されているデータ仕様。抽象構文表記法 (ASN.1) (*abstract syntax notation 1 (ASN.1)*) および基本符号化規則 (BER) (*basic encoding rules (BER)*) も参照。

抽象構文表記法 1 (ASN.1) (abstract syntax notation 1 (ASN.1)). 次の標準で指定されている抽象構文の開放型システム間相互接続 (OSI) 方式。

- ITU-T 勧告 X.208 (1988) | ISO/IEC 8824: 1990
- ITU-T 勧告 X.680 (1994) | ISO/IEC 8824-1: 1994

基本符号化規則 (BER) (*basic encoding rules (BER)*) も参照。

ACCESS. シンプル・ネットワーク・マネージメント・プロトコル (SNMP) において、管理ノードがオブジェクトに対して提供する最小レベルのサポートを定義する、管理情報ベース (MIB) モジュール内の文節。

確認応答 (acknowledgment). (1) 受信側が送信側に肯定応答として確認応答文字を伝送すること。(T) (2) 送信された項目が受信されたことを示すこと。

アクティブ (active). (1) 運用可。(2) 別のノードまたは装置に接続された、またはそれへの接続が利用可能なノードまたは装置に関する用語。

アクティブ・モニター (active monitor). トークンリング・ネットワークにおいて、一度に 1 つのリング・ステーションによって実行される機能で、トークンの伝送を開始し、トークン誤り回復機能を提供する。現在のアクティブ・モニターに障害が起こった場合、リング上の任意のアクティブ・アダプターが、アクティブ・モニター機能を提供することができる。

アドレス (address). データ通信において、通信ネットワークに接続された各装置、ワークステーション、またはユーザーに割り当てられる固有のコード。

アドレス・マッピング・テーブル (AMT) (address mapping table (AMT)). 現在のノード・アドレスとハードウェア・アドレスのマッピングを提供する、AppleTalk ルーター内に維持されているテーブル。

アドレス・マスク (address mask). インターネット・サブネットワークにおいて、IP アドレスのホスト部分のサブネットワーク・アドレス・ビットを識別するために使用される、32 ビットのマスク。サブネット・マスク (*subnet mask*) およびサブネットワーク・マスク (*subnetwork mask*) と同義。

アドレス解決 (address resolution). (1) ネットワーク・レイヤー・アドレスを媒体特有アドレスにマッピングする方法。(2) アドレス解決プロトコル (ARP) (*Address Resolution Protocol (ARP)*) および AppleTalk アドレス解決プロトコル (AARP) (*AppleTalk Address Resolution Protocol (AARP)*) も参照。

アドレス解決プロトコル (ARP) (Address Resolution Protocol (ARP)). (1) インターネット・プロトコルにおいて、サポートされる大都市圏ネットワークやローカル・エリア・ネットワーク (イーサネットやトークンリングなど) が使用するアドレスに、IP アドレスを動的にマップするプロトコル。(2) 逆アドレス解決プロトコル (RARP) (*Reverse Address Resolution Protocol (RARP)*) も参照。

アドレッシング (addressing). データ通信において、端末局がデータの送信先の端末局を選択する方法。

隣接ノード (adjacent nodes). 他のノードとは接続していない少なくとも 1 つのパスによって相互に接続されている 2 つのノード。(T)

管理ドメイン (Administrative Domain). 1 つの管理機関によって管理される、ホストとルーターおよび相互接続ネットワークの集合。

拡張ピアツーピア・ネットワーキング機能 (Advanced Peer-to-Peer Networking) (APPN). SNA の拡張機能で、次の特長を備えている。(a) 重大な階層間の依存関係を回避することによって、単一点の障害の影響を分離できるようにした、分散ネットワーク制御の機能強化。(b) 接続、再構成、および柔軟なルート選択を容易に実現できる、動的なネットワーク・トポロジー情報の交換。(c) ネットワークの資源の動的定義。(d) 資源の登録およびディレクトリー検索の自動化。APPN は、エンド・ユーザー・サービス向けの LU 6.2 ピア間通信機能をネットワークの制御に拡張し、LU 2、LU 3、および LU 6.2 を含む複数の LU タイプをサポートする。

拡張ピアツーピア・ネットワーキング機能 (APPN) エンド・ノード (Advanced Peer-to-Peer Networking (APPN) end node). 広範囲のエンド・ユーザー・サービスを提供し、そのローカル・コントロール・ポイント (CP) と隣接するネットワーク・ノード内の CP との間のセッションをサポートするノード。このノードは、これらのセッションを使用して、隣接 CP (ネットワーク・ノード・サーバー) に資源を動的に登録し、ディレクトリー検索要求を送受信し、管理サービスを受ける。APPN エンド・ノードは、サブエリア・ネットワークに周辺ノードまたは他のエンド・ノードとして接続することもできる。

拡張ピアツーピア・ネットワーキング機能 (APPN) ネットワーク (Advanced Peer-to-Peer Networking (APPN) network). 相互接続されたネットワーク・ノードとそれらのクライアント・エンド・ノードの集合。

拡張ピアツーピア・ネットワーキング機能 (APPN) ネットワーク・ノード (Advanced Peer-to-Peer Networking (APPN) network node). 広範囲のエンド・ユーザー・サービスを提供するノードで、次のものを提供することができる。

- 分散ディレクトリー・サービス (中央ディレクトリー・サーバーへのドメインの資源の登録を含む)
- トポロジー・データベースは他の APPN ネットワーク・ノードと交換し、そのネットワーク内のネットワークが、要求されたサービス・クラスに基づいて LU-LU セッションの最適ルートを選択できるようにする。
- そのローカル LU とクライアント・エンド・ノードのセッション・サービス
- APPN ネットワークの中間ルーティング・サービス

拡張ピアツーピア・ネットワーキング機能 (APPN) ノード (Advanced Peer-to-Peer Networking (APPN) node). APPN ネットワーク・ノードまたは APPN エンド・ノード。

エージェント (agent). エージェントの役割を果たすシステム。

アラート (alert). 問題または切迫した問題を識別するためにネットワーク内の管理サービス中心拠点に送られるメッセージ。

全ステーション・アドレス (all-stations address). 通信において、*同報通信アドレス (broadcast address)* の同義語。

米国規格協会 (ANSI) (American National Standards Institute (ANSI)). 認定組織が米国の自主業界標準を作成して維持するための手順を決める、生産者、消費者、および一般の関係団体から構成される組織。(A)

アナログ (analog). (1) 連続的に変化する物理量から構成されるデータに関する用語。(A) (2) デジタル (*digital*) と対比。

AppleTalk. Apple Computer, Inc. によって開発されたネットワーク・プロトコル。このプロトコルは、ネットワーク上の装置を相互接続するために使用される。装置は、Apple 製品と非 Apple 製品を混合して使用できる。

AppleTalk アドレス解決プロトコル (AARP) (AppleTalk Address Resolution Protocol (AARP)). AppleTalk ネットワークにおいて、(a) AppleTalk ノード・アドレスをハードウェア・アドレスに変換し、(b) 複数のプロトコルをサポートするネットワーク内のアドレッシングの矛盾を調整するプロトコル。

AppleTalk トランザクション・プロトコル (ATP) (AppleTalk Transaction Protocol (ATP)). AppleTalk ネットワークにおいて、ゾーン情報を得るためにゾーン情報プロトコル (ZIP) にアクセスするホストに対して、クライアント/サーバー要求・応答機能を提供するプロトコル。

APPN ネットワーク (APPN network). *拡張対等間通信ネットワーク機能 (APPN) ネットワーク (Advanced Peer-to-Peer Networking (APPN) network)* を参照。

APPN ネットワーク・ノード (APPN network node). *拡張ピア間通信ネットワーク機能 (APPN) ネットワーク・ノード (Advanced Peer-to-Peer Networking (APPN) network node)* を参照。

任意 MAC アドレッシング (AMA) (arbitrary MAC addressing (AMA)). DECnet 体系において、一元管理アドレスとローカル管理アドレスをサポートする、DECnet フェーズ IV-Prime によって使用されるアドレッシング機構。

エリア、区域 (area). インターネットおよび DECnet ルーティング・プロトコルにおいて、ネットワークの通信事業者の定義によってグループ化された、ネットワークまたはゲートウェイのサブセット。各エリアは自己完結型で、あるエリアのトポロジーは他のエリアからは見えない。

非同期 (ASYNC) (asynchronous (ASYNC)). 共通タイミング信号のような特定の事象の発生に依存しない 2 つ以上のプロセス。(T)

ATM. 非同期転送モード (Asynchronous Transfer Mode)。セル交換を基礎とした、コネクション型高速ネットワーク・テクノロジー。

ATMARP. クラシカル IP 内の ARP。

接続ユニット・インターフェース (AUI) (attachment unit interface (AUI)). ローカル・エリア・ネットワークにおいて、媒体接続ユニットとデータ・ステーション内のデータ端末装置間のインターフェース。(I) (A)

属性値ペア (AVP) (Attribute Value Pair (AVP)). メッセージ・タイプおよび本文をコード化する一律的な方法。この方式は、L2TP の相互運用性を可能にすると同時に、拡張性を最大化する。

認証障害 (authentication failure). シンプル・ネットワーク・マネージメント・プロトコル (SNMP) において、要求側クライアントが SNMP コミュニティーのメンバーでない場合に、認証エンティティーが生成するトラップ。

自律システム (autonomous system). TCP/IP において、1 つの管理機関の下にあるネットワークとルーターの集まり。このようなネットワークとルーターは緊密に協力し、自ら選択した内部ゲートウェイ・プロトコルを使用して、相互にネットワークの到達可能性とルーティングの情報を伝送する。

自律システム番号 (autonomous system number). TCP/IP において、IP アドレスの割り当てを行うのと同じ中央電気通信事業者が自律システムに割り当てる番号。自律システム番号により、自動ルーティング・アルゴリズムは、自律システムを区別することができる。

B

バックボーン (backbone). (1) ローカル・エリア・ネットワークのマルチ・ブリッジ・リング構成において、ブリッジまたはルーターを用いてリングが接続されている高速リンク。バックボーンは、バスまたはリングとして

構成することができる。(2) 広域ネットワークにおいて、ノードまたはデータ交換機 (DSE) が接続されている高速リンク。

バックボーン・ネットワーク (backbone network). より小規模の (通常は、より低速の) ネットワークを接続する中央のネットワーク。バックボーン・ネットワークは通常、相互接続するネットワークよりもはるかに大容量の通信ネットワーク、あるいは公用パケット交換データグラム・ネットワークのような広域ネットワーク (WAN) である。

バックボーン・ルーター (backbone router). (1) エリア間でデータを転送するのに使用されるルーター。(2) ネットワークをより大規模なインターネットに接続するのに使用される、一連のルーターの中の 1 つ。

帯域幅 (Bandwidth). 光リンクの帯域幅は、リンクが情報を運ぶ容量を表し、光リンクがサポートできる最大ビット・レートを示す。

基本伝送単位 (BTU) (basic transmission unit (BTU)). SNA において、パス制御コンポーネント間で受け渡されるデータと制御情報の単位。BTU は、1 つまたは複数のパス情報単位 (PIU) から構成される。

ボー (baud). 非同期伝送において、1 秒当りの変調速度の単位。つまり、サイクル間隔が 20 ミリ秒の場合、変調速度は 50 ボーになる。(A)

ブートストラップ (bootstrap). (1) コンピューター・プログラムが完全に記憶装置に入り終わるまで、後に続く命令をロードして実行させる一連の命令。(T) (2) それ自体の働きによって望ましい状態に到達するように設計された技法または装置。たとえば、最初の幾つかの命令が、残りの命令を入力装置からコンピューターに読み込むようになっている機械ルーチン。(A)

ボーダー・ゲートウェイ・プロトコル (BGP) (Border Gateway Protocol (BGP)). ドメインと自律システムの間で使用されるインターネット・プロトコル (IP) ルーティング・プロトコル。

ボーダー・ルーター (border router). インターネット通信において、自律システムの端に位置し、別の自律システムの端にあるルーターと通信するルーター。

ブリッジ (bridge). 複数の LAN を (ローカルまたはリモート側で) 相互接続する機能を持った装置で、同じ論理リンク制御プロトコルを使用するが、異なる媒体アクセス制御プロトコルを使用することができる。ブリッジは、媒体アクセス制御 (MAC) アドレスに基づいてフレームを別のブリッジに転送する。

ブリッジ識別子 (bridge identifier). スパニング・ツリー・プロトコルで使用される、最下位ポート識別子をもつポートの MAC アドレスとユーザー定義の値から構成される 8 バイトのフィールド。

ブリッジング (bridging). LAN では、フレームを 1 つの LAN セグメントから別のセグメントに転送すること。着側は、フレーム・ヘッダーの着信アドレス・フィールドに符号化された媒体アクセス制御 (MAC) サブレイヤー・アドレスによって指定される。

同報通信 (broadcast). (1) すべての着信先に同じデータを伝送すること。(T) (2) 複数の着信先に同時にデータを伝送すること。(3) マルチキャスト (*multicast*) と対比。

同報通信アドレス (broadcast address). 通信において、リンク上のすべてのステーションに共通のアドレスとして確保されているステーション・アドレス (8 桁の 1 で構成)。全ステーション・アドレス (*all-stations address*) と同義。

C

キャッシュ (cache). (1) 主記憶装置から読み出した、プロセッサが次に必要になる可能性がある命令とデータのコピーを入れておくために使用される、主記憶装置より小さくて高速の特殊用途バッファ記憶装置。(T) (2) 頻繁にアクセスされる命令とデータを入れておくバッファ記憶装置。アクセス時間を短縮するために使用される。(3) ディレクトリーの検索速度を上げるために、頻繁に使用されるディレクトリー情報を入れておくことができる、ネットワーク・ノード内のディレクトリー・データベースのオプション部。(4) キャッシュに入れる、または保管すること。

コール・リクエスト・パケット (call request packet). (1) コールのための接続を確立することを要求するために、データ端末装置 (DTE) がネットワーク全体に伝送するコール監視パケット。(2) X.25 通信において、ネットワークを通してコール設定を要求するために、DTE によって伝送されるコール監視パケット。

標準アドレス (canonical address). LAN において、トークンリングまたはイーサネット・アダプターの媒体アクセス制御 (MAC) アドレスを伝送するための IEEE 802.1 形式。標準形式では、各アドレス・バイトの最下位 (右端) ビットが最初に伝送される。非標準アドレス (*noncanonical address*) と対比。

キャリア (carrier). 通信システムを介して伝送される情報を運ぶ信号によって変化する電波、電磁波、またはパルス列。(T)

キャリア検出 (carrier detect). 受信回線信号検出器 (RLSD) (received line signal detector (RLSD)) の同義語。

キャリア・センス (carrier sense). ローカル・エリア・ネットワークにおいて、別のステーションが伝送中であるかどうかを検出する、データ・ステーションの機能。
(T)

搬送波検知多重アクセス/衝突検出 (CSMA/CD) (carrier sense multiple access with collision detection (CSMA/CD)). キャリア・センスを必要とするプロトコル。送信側データ・ステーションは、伝送中に別の信号を検出すると、送信を停止し、ジャム信号を送り、可変時間待ってから再試行する。(T) (A)

CCITT. 国際電信電話諮問委員会 (International Telegraph and Telephone Consultative Committee)。以前は国際電気通信連合 (ITU) の組織であったが、1993年3月1日にITUは再編成され、標準化の任務は、電気通信連合の電気通信標準化部門 (ITU-TS) という名前の下部組織に移管された。『CCITT』という用語は、再編成の前に承認された勧告を表すのに引き続き使用される。

チャンネル (channel). (1) 信号を送ることができるパス。たとえば、データ・チャンネル、出力チャンネル。(A) (2) 主記憶装置とローカル周辺装置との間のデータ転送を扱う、処理装置によって制御される装置。

チャンネル・サービス・ユニット (CSU) (channel service unit (CSU)). デジタル・ネットワークへのインターフェースを提供する装置。CSUは、チャンネル帯域幅内で信号の効率を一定に保つ伝送路調整 (等化) 機能、バイナリー・パルス・ストリームを構成する信号再編成機能、およびCSUと通信事業者のオフィス・チャンネル装置間のテスト信号伝送を含めたループバック・テスト機能を提供する。データ・サービス装置 (DSU) (data service unit (DSU)) も参照。

チャンネル化 (channelization). 通信回線上の帯域幅を多数のチャンネル (サイズが異なる場合もある) に分割するプロセス。**時分割多重方式 (time division multiplexing) (TDM)** とも呼ばれる。

チェックサム (checksum). (1) グループに関連し、検査目的で使用される、データのグループの合計。(T) (2) 誤り検出において、ブロック内の全ビットを対象とする。書き込まれて計算された合計に一致しない場合は、誤りが指示される。(3) ディスケットにおいて、誤り検出の目的でセクターに書き込まれるデータ。計算されたチェックサムが、セクターに書き込まれたデータのチェックサムに一致しない場合は、不良セクターを示している。データは、数字またはチェックサムの計算では数字とみなされる他の文字列のいずれかである。

サーキット交換 (circuit switching). (1) 必要に応じて、2つ以上のデータ端末装置 (DTE) を接続し、その接続が解放されるまで、それらの装置間のデータ回線を専用を使用することができるプロセス。(I) (A) (2) 回線交換 (line switching) と同義。

クラス A ネットワーク (class A network). インターネット通信において、IP アドレスの上位 (最上位) ビットが0に設定され、ホスト ID が下位の3オクテットを占めるネットワーク。

クラス B ネットワーク (class B network). インターネット通信において、IP アドレスの2つの上位 (最上位と最上位の次の) ビットがそれぞれ1と0に設定され、ホスト ID が下位の2オクテットを占めるネットワーク。

サービス・クラス (COS) (class of service (COS)). セッションのパートナー間のルートを確立するために使用される一組の特性 (ルートのセキュリティ、伝送の優先順位、帯域幅など)。サービス・クラスは、セッションの開始プログラムによって指定されたモード名から導出される。

クライアント (client). (1) サーバーから共用サービスを受け取る機能単位。(T) (2) ユーザーのこと。

クライアント/サーバー (client/server). 通信において、一方の側のプログラムが相手側のプログラムに要求を送信して応答を待つという、分散データ処理における対話のモデル。要求側プログラムをクライアントといい、応答側プログラムをサーバーという。

クロッキング、刻時 (clocking). (1) 2進データ同期通信において、クロック・パルスを使用して、データおよび制御文字の同期を制御すること。(2) 一定時間に通信回線上で送信するデータ・ビット数を制御する方法。

衝突 (collision). チャンネル上の同時伝送によって生じる望ましくない状態。(T)

衝突検出 (collision detection). 搬送波検知多重アクセス/衝突検出 (CSMA/CD) において、2台以上のステーションが同時に伝送していることを示す信号。

認定情報速度 (Committed information rate). ネットワークが送達することに同意した、ビットで表されたデータの最大量。

コミュニティ (community). シンプル・ネットワーク・マネージメント・プロトコル (SNMP) において、エンティティ間の管理関係。

コミュニティ名 (community name). シンプル・ネットワーク・マネージメント・プロトコル (SNMP) において、コミュニティを識別するオクテット列。

圧縮 (compression). (1) レコードまたはブロックの長さを短縮するために、ギャップ、空のフィールド、冗長要素、および不必要なデータを除去する処理。(2) メッセージまたは記録を表すのに使用するビット数を減らすために符号化すること。

構成 (configuration). (1) 情報処理システムのハードウェアとソフトウェアを編成し、相互に接続する方法。(T) (2) システム、サブシステム、またはネットワークを構成する装置とプログラム。

構成データベース (CDB) (configuration database (CDB)). 1 つまたは複数の装置の構成パラメーターを保管するデータベース。構成プログラムを使用して作成し、更新する。

構成ファイル (configuration file). システム装置またはネットワークの特性を指定するファイル。

構成パラメーター (configuration parameter). 構成定義内の変数で、その値により、あるプロダクトと同じネットワーク内の別のプロダクトの特性を表したり、プロダクト自体の特性を定義する。

構成報告書サーバー (CRS) (configuration report server (CRS)). IBM トークンリング・ネットワーク・ブリッジ・プログラムにおいて、LAN ネットワーク・マネージャー (LNM) からのコマンドを受け入れて、ステーション情報を入手する、ステーション・パラメーターを設定する、およびステーションをリングから除去するサーバー。また、このサーバーは、リング上のステーションによって生成された構成報告書の収集および転送も行う。構成報告書には、新しいアクティブ・モニター報告書および最近隣アクティブ・アップストリーム (NAUN) 報告書が含まれる。

輻輳 (ふくそう) (congestion). ネットワーク輻輳 (ふくそう) (*network congestion*) を参照。

接続、コネクション (connection). データ通信において、情報を伝達するために装置間に設定される関係。(I) (A)

コントロール・ポイント (CP) (control point (CP)). (1) ノードの資源を管理する、APPN ノードまたは LEN ノードのコンポーネント。APPN ノードでは、CP は他の APPN ノードとの CP-CP セッションを行うことができる。APPN ネットワーク・ノードでは、CP は APPN ネットワークの隣接エンド・ノードへのサービスも提供する。(2) ノードの資源を管理し、オプションでネットワークの他のノードにサービスを提供する、該当ノードの

コンポーネント。その例としては、タイプ 5 サブエリア・ノードのシステム・サービス・コントロール・ポイント (SSCP)、APPN ネットワーク・ノードのネットワーク・ノード・コントロール・ポイント (NNCP)、および APPN または LEN エンド・ノードのエンド・ノード・コントロール・ポイント (ENCP) がある。SSCP および NNCP は、他のノードへのサービスを提供することができる。

コントロール・ポイント管理サービス (CPMS) (control point management services (CPMS)). 管理サービス機能から構成され、問題管理、効率および会計管理、変更管理、および構成管理を実行するのに役立つ機能を提供する、コントロール・ポイントの構成要素。CPMS によって提供される機能には、システム資源をテストするために要求を物理装置管理サービス (PUMS) に送信する機能、システム資源に関する統計情報 (たとえば、誤りデータやパフォーマンス・データ) を PUMS から収集する機能、およびテスト結果と収集されたシステム資源に関する統計情報を分析および表示する機能が含まれる。問題判別およびパフォーマンス監視を分析および表示する機能は、複数の CPMS 間に分散することができる。

コントロール・ポイント管理サービス単位 (CP-MSU) (control point management services unit (CP-MSU)). 管理サービス機能セット間を流れる、管理サービス・データが入っているメッセージ単位。このメッセージ単位は、汎用データ・ストリーム (GDS) 形式である。管理サービス単位 (MSU) (*management services unit (MSU)*) およびネットワーク管理ベクトル移送 (NMVT) (*network management vector transport (NMVT)*) も参照。

CU 論理アドレス (CU Logical Address). 2216 に対してホストによって定義された制御装置アドレス。この値は、ホスト入出力構成プログラム (IOCP) の CNTLUNIT マクロ命令の CUADD ステートメントによって定義される。制御装置アドレスは、同じホスト上で定義された各論理区画ごとに固有でなければならない。

D

D ビット (D-bit). 送達確認ビット (Delivery-confirmation bit)。X.25 通信において、受信側からのエンド・エンド確認 (送達確認) が必要な場合に 1 にセットされる、データ・パケットまたはコール・リクエスト・パケット内のビット。

デーモン (daemon). 標準サービスを行うために無人で実行されるプログラム。デーモンには、そのタスクを実行するために自動的に起動されるものと、定期的に動作するものがある。

データ・キャリア検出 (DCD) (data carrier detect (DCD)). 受信回線信号検出器 (RLSD) (received line signal detector (RLSD)) の同義語。

データ回線 (data circuit). (1) 両方向データ通信の手段を提供する、関連付けられた一対の送信チャネルと受信チャネル。(I) (2) SNA においては、リンク接続 (link connection) の同義語。(3) 物理サーキット (physical circuit) およびバーチャル・サーキット (virtual circuit) も参照。

注:

1. データ交換装置相互間では、データ回線は、データ交換装置で使用するインターフェースのタイプによって、データ回線終端装置 (DCE) を含むことがある。
2. データ端末とデータ交換装置またはデータ・コンセントレーターとの間では、データ回線は、データ装置側のデータ回線終端装置を含み、またデータ交換装置またはデータ・コンセントレーター側の DCE と類似の装置を含むことがある。

データ回線終端装置 (DCE) (data circuit-terminating equipment (DCE)). データ端末において、データ端末装置 (DTE) と回線の間で信号変換および符号化を行う装置。(I)

注:

1. DCE は、独立した機器であるか、DTE または中間装置に組み込まれている。
2. DCE は、伝送路のネットワーク側で一般的に必要なとされる機能を果たす。

データ・リンク接続識別子 (DLCI) (data link connection identifier (DLCI)). フレーム・リレー・サブポート、またはフレーム・リレー・ネットワークの PVC セグメントの数字識別子。1 つのフレーム・リレー・ポート内の各サブポートは、固有の DLCI を持っている。下表 (米国規格協会 (ANSI) 標準 T1.618 および国際電信電話諮問委員会 (ITU-T/CCITT) 標準 Q.922 から抜粋) は、特定の DLCI 値に関連する機能を示している。

DLCI 値	機能
0	チャネル内信号
1-15	未使用
16-991	フレーム・リレー接続手順を用いて割り当て
992-1007	フレーム・リレー・ベアラー・サービスのレイヤー 2 管理
1008-1022	未使用
1023	チャネル内のレイヤー管理

データ・リンク制御 (DLC) (data link control (DLC)). データ・リンク (SDLC リンクまたはトークンリングなど) 上のノードが、情報を正確に交換するために使用する規則。

データ・リンク制御 (DLC) レイヤー (data link control (DLC) layer). SNA において、2 つのノード間のリンクを介するデータ転送をスケジュールし、そのリンクの誤り制御を行うリンク・ステーションから構成されるレイヤー。データ・リンク制御の例としては、ビット順次リンク接続の SDLC や、システム/370 チャンネルのデータ・リンク制御がある。

注: 通常、DLC レイヤーは物理トランスポート機構から独立しており、上位レイヤーに送るデータの保安全性が確保される。

データ・リンク・レイヤー (data link layer). 開放型システム間相互接続参照モデルにおいて、ネットワーク・レイヤー内のエンティティが通信リンクを通して相互にデータを転送するサービスを提供するレイヤー。データ・リンク・レイヤーは、物理レイヤーで発生した誤りを検出し、訂正する。(T)

データ・リンク・レベル (data link level). (1) データ・ステーションの階層構造において、ハイレベル論理とデータ・リンクの制御を維持するデータ・リンクとの間の、制御または処理論理の概念的レベル。データ・リンク・レベルは、送信ビットの挿入および受信ビットの削除、アドレス・フィールドおよび制御フィールドの解釈、コマンドとレスポンスの生成、送信、および解釈、フレーム・チェック・シーケンスの計算と解釈といった機能を実行する。パケット・レベル (packet level) および物理レベル (physical level) も参照。(2) X.25 通信において、フレーム・レベル (frame level) の同義語。

データ・リンク交換 (DLSw) (data link switching (DLSw)). IEEE 802.2 論理リンク制御 (LLC) タイプ 2 を使用する、ネットワーク・プロトコルの伝達方法。SNA および NetBIOS は、LLC タイプ 2 を使用する例である。カプセル化 (encapsulation) およびスプーフィング (spoofing) も参照。

データ・パケット (data packet). X.25 通信において、DTE/DCE インターフェースのバーチャル・サーキット上でユーザー・データを伝送するために使用されるパケット。

データ・サービス装置 (DSU) (data service unit (DSU)). データ端末装置にデジタル・データ・サービス・インターフェースを直接提供する装置。DSU は、ループ等化機能、リモートおよびローカル・テスト機能、および標準 EIA/CCITT インターフェース機構を提供する。

データ・セット・レディー (DSR) (data set ready (DSR)). DCE レディー (DCE ready) の同義語。

データ交換機 (DSE) (data switching exchange (DSE)). 1 つの場所に設置され、回線交換、メッセージ交換、およびパケット交換などの交換機能を提供する装置。(I)

データ端末装置 (DTE) (data terminal equipment (DTE)). データ・ステーションにおいて、データ送信側、データ受信側、またはその両方として動作する部分。(I) (A)

データ端末レディー (DTR) (data terminal ready (DTR)). EIA 232 プロトコルで使用されるモデムへの信号。

データ転送速度 (data transfer rate). データ伝送システムの通信している装置の間を単位時間に通過するビット、文字、またはブロックの数の平均値。(I)

注:

1. 速度は、秒、分、または時間当たりのビット数、文字数、またはブロック数で表す。
2. 通信する装置、たとえば、モデム、中間装置、または送信側と受信側を示す必要がある。

データグラム (datagram). (1) パケット交換において、発信データ端末装置 (DTE) から着信 DTE までのルーティングに必要な十分な情報を伝達し、前もって DTE とネットワーク・ノード間で情報交換をする必要がない、他のパケットから独立した自己完結型パケット。(I) (2) TCP/IP においては、インターネット環境で受け渡される情報の基本単位。データグラムには、データの他に発信元アドレスと着信先アドレスが入っている。インターネット・プロトコル (IP) データグラムは、IP ヘッダーと後続のトランスポート・レイヤー・データによって構成される。(3) パケット (packet) および セグメント (segment) も参照。

データグラム送達プロトコル (DDP) (Datagram Delivery Protocol (DDP)). AppleTalk ネットワーク・ノードにおいて、インターネット・レイヤーのコネクションレス・ソケット間送達サービスによってネットワークの接続性を提供するプロトコル。

DCE レディー (DCE ready). EIA 232 標準において、ローカル・データ回線終端装置 (DCE) が通信チャンネルに接続され、データ送信が可能になっていることを、データ端末装置 (DTE) に知らせる信号。データ・セット・レディー (DSR) (data set ready (DSR)) と同義。

DECnet. 通常は資源の共用、分散計算、またはリモート・システム構成の目的で、Digital Equipment Corporation のシステムを相互連結するのに使用される、一連のソフ

トウェア・モジュール、データベース、およびハードウェア・コンポーネント動作を定義するネットワーク体系。DECnet ネットワークの実現方式は、デジタル・ネットワーク体系 (DNA) モデルに準拠している。

デフォルト (default). 明示的に指定されていない場合に仮定される属性、状態、値、またはオプション。(I)

従属 LU リクエスター (dependent LU requester) (DLUR). APPN エンド・ノードまたは APPN ネットワーク・ノードで、従属 LU を所有するが、従属 LU サーバーがそれらの従属 LU に SSCP サービスを提供することを要求する。

指定ルーター (designated router). 他のルーターの存在とアイデンティティをエンド・ノードに知らせるルーター。指定ルーターの選択は、最高の優先順位をもつルーターに基づいて行われる。最高の優先順位をもつルーターが複数ある場合は、最高のステーション・アドレスをもつルーターが選択される。

あて先ノード (destination node). 要求またはデータの送信先のノード。

あて先ポート (destination port). 順次サービスを提供するコネクション・ポイントとして機能する 8 ポート非同期アダプター。

あて先サービス・アクセス・ポイント (DSAP) (destination service access point (DSAP)). SNA および TCP/IP において、システムがリモート装置からのデータを該当する通信サポートにルーティングするのに使用される論理アドレス。送信元サービス・アクセス・ポイント (SSAP) (source service access point (SSAP)) と対比。

装置 (device). 特定の目的をもつ機械的、電気的、または電子的な仕組み。

装置アドレス (device address). 2216 装置を選択するためにチャンネル・バスで伝送される装置アドレス。S/370 入出力アーキテクチャーでは、サブチャンネル番号とも呼ばれる。この値は、ホスト IOCP 内の実装置に対する CNTLUNIT マクロ命令の UNITADD ステートメントによって定義される。

デジタル (digital). (1) 数字からなるデータを表わす用語。(T) (2) 数字の形をしたデータを表わす用語。(A) (3) アナログ (analog) と対比。

デジタル・ネットワーク体系 (DNA) (Digital Network Architecture (DNA)). すべての DECnet ハードウェアおよびソフトウェア実現モデル。

直接メモリー・アクセス (DMA) (direct memory access (DMA)). マイクロチャネル・バス上の装置が、システム処理装置を介さずに、システムまたはバス・メモリーに直接アクセスできるシステム機能。

ディレクトリー (directory). 識別子およびそれに対応するデータ項目への参照からなるテーブル。(I) (A)

ディレクトリー・サービス (DS) (directory service (DS)). アプリケーション・プロセスによって使用される記号名を、OSI 環境で使用される完全なネットワーク・アドレスに変換するアプリケーション・サービス要素。(T)

ディレクトリー・サービス (DS) (directory services (DS)). ネットワーク・リソースの場所に関する情報を維持する、APPN ノードのコントロール・ポイント・コンポーネント。

使用不可 (disable). 機能しないようにすること。

使用不可の (disabled). (1) 特定のタイプの割り込みの発生を防止する処理装置の状態を表わす用語。(2) 伝送制御装置または音声応答装置が線路上の着信コールを受け入れることができない状態を表わす用語。

定義域、ドメイン (domain). (1) データ処理資源が共通制御下に置かれているコンピューター・ネットワーク部分。(T) (2) 開放型システム間相互接続 (OSI) において、共通のポリシーが適用される、分散システムの部分または管理オブジェクトの集合。(3) 管理領域 (*Administrative Domain*) およびドメイン名 (*domain name*) を参照。

ドメイン名 (domain name). インターネット・プロトコルにおける、ホスト・システムの名前。ドメイン名は、区切り文字によって区切られた一連のサブネームから構成される。たとえば、ホスト・システムの完全修飾ドメイン名 (FQDN) が `ralvm7.vnet.ibm.com` である場合、以下がそれぞれドメイン名である。

- `ralvm7.vnet.ibm.com`
- `vnet.ibm.com`
- `ibm.com`

ドメイン名サーバー (domain name server). インターネット・プロトコルにおいて、ドメイン名を IP アドレスにマップすることにより名前からアドレスへの変換を行うサーバー・プログラム。ネーム・サーバー (*name server*) と同義。

ドメイン名システム (DNS) (Domain Name System (DNS)). インターネット・プロトコルにおいて、ドメイン名を IP アドレスにマップするために使用される分散データベース・システム。

ドット 10 進表記 (dotted decimal notation). 基底を 10 とし、ピリオド (ドット) で相互を分離して書かれた、4 つの 8 ビット数字からなる 32 ビット整数の構文表記。IP アドレスを表すのに使用される。

ダンプ (dump). (1) ダンプしたデータ。(T) (2) 誤り情報を収集するために、バーチャル記憶装置のコンテンツの全部または一部をコピーすること。

動的再構成 (DR) (dynamic reconfiguration (DR)). 完全な構成テーブルを再生成したり、影響を受けるメジャー・ノードを停止せずに、ネットワーク構成 (周辺 PU および LU) を変更するプロセス。

動的ルーティング (Dynamic Routing). 初期化時に静的に構成されたルートではなく、動的に確認されたルートを使用するルーティング。

E

エコー (echo). データ通信において、通信チャネル上の反射信号。たとえば、通信端末装置では各信号は 2 度表示される。ローカル端末に入ったときに一度表示され、通信リンクを経由して戻ってきたときに再度表示される。これにより、信号が正確であるかどうかを検査することができる。

EIA 232. データ通信において、順次 2 進データ交換を使用して、データ端末装置 (DTE) とデータ回線終端装置 (DTE) 間のインターフェースを定義する米国電子工業会 (EIA) の仕様。

米国電子工業会 (EIA) (Electronic Industries Association (EIA)). 業界の技術成長を促進し、各メンバーの意見を代表し、業界標準を開発するために組織された電子機器製造業者の団体。

EIA 単位 (EIA unit). 米国電子工業会で確立された測定単位で、44.45 mm (1.7 インチ) に等しい。

カプセル化 (encapsulation). (1) 通信において、階層化されたプロトコルによって使用される技法で、これを用いて各レイヤーはサポートするレイヤーからのプロトコル・データ単位 (PDU) に制御情報を追加する。この場合、このレイヤーは、サポートするレイヤーからのデータをカプセル化する。インターネット・プロトコルでは、たとえば、パケットには、物理レイヤーからの制御情報が入り、その後にネットワーク・レイヤーからの制御情報が続き、その後にアプリケーション・プロトコル・データが入っている。(2) データ・リンク交換 (*data link switching*) も参照。

コード化 (encode). 元の形に再び変換できるような方法で、規則を使用してデータを変換すること。(T)

エンド・ノード (EN) (end node (EN)). (1) 拡張対等間通信ネットワークング (APPN) エンド・ノード (Advanced Peer-to-Peer Networking (APPN) end node) およびローエントリー・ネットワークング (LEN) エンド・ノード (low-entry networking (LEN) end node) を参照。(2) 通信において、頻繁に 1 つのデータ・リンクに接続されるノードで、中間ルーティング機能を実行できないもの。

入り口点 (EP) (entry point (EP)). SNA において、分散ネットワーク管理サポートを提供する、タイプ 2.0、タイプ 2.1、タイプ 4、またはタイプ 5 ノード。それ自体に関するネットワーク管理データとそれが制御する資源を、集中処理のために中心拠点に送り、中心拠点が開始したコマンドを受け取って実行することによって、その資源を管理および制御する。

等価容量 (equivalent capacity). NBBS 体系において、パケット紛失率を限界値以下にするために、コネクションに必要な帯域幅の最少量。

イーサネット(Ethernet). 複数の端末が事前の調整なしに伝送媒体に自由にアクセスできる、10 Mbps のベースバンド・ローカル・エリア・ネットワーク。搬送波検知/延期を使用して競合を回避し、衝突検出/遅延再送を使用して競合を解決する。イーサネットは、搬送波検知多重アクセス/衝突検出 (CSMA/CD) を使用する。

例外 (exception). データ・セットまたはファイルの処理中に見付かった入出力誤りのような異常な状態。

例外応答 (ER) (exception response (ER)). SNA において、受信した要求が受付不能または処理不能の場合にのみ応答を戻すように受信側に指示する (つまり、否定応答は戻すことができるが肯定応答は戻せない)、要求ヘッダーの「要求された応答形式」フィールドで指定されたプロトコル。固定応答 (*definite response*) および応答なし (*no response*) と対比。

交換 ID (XID) (exchange identification (XID)). 隣接ノード間でノードおよびリンクの特性を伝達するために使用される、基本リンク単位の 1 つのタイプ。XID は、リンク起動の前と起動中はリンクおよびノード特性の設定と交渉を行うためにリンク・ステーション間で交換され、またリンク起動後はそれらの特性の変更を通知する。

明示ルート (ER) (explicit route (ER)). SNA において、2 つのサブエリア・ノードを接続する 1 つまたは複数の伝送グループ。明示ルートは、発側サブエリア・アドレス、着側サブエリア・アドレス、明示ルート番号、および逆明示ルート番号によって識別される。バーチャル・ルート (VR) (*virtual route (VR)*) と対比。

探索フレーム (explorer frame). 探索パケット (*explorer packet*) を参照。

探索パケット (explorer packet). LAN において、発信元ホストによって生成され、LAN のソース・ルーティング全体を探索して、ホストが利用可能なパスに関する情報を収集するパケット。

外部ゲートウェイ (exterior gateway). インターネット通信において、ある自律システム上の、別の自律システムと通信するゲートウェイ。内部ゲートウェイ (*interior gateway*) と対比。

外部ゲートウェイ・プロトコル (EGP) (Exterior Gateway Protocol (EGP)). インターネット・プロトコルにおいて、ドメインと自律システム間で使用され、ネットワーク到達可能性情報を公示および交換することができるプロトコル。ある自律システム内の IP ネットワーク・アドレスが、EGP に参加しているルーターによって、別の自律システムに公示される。EGP の例としては、ボーダー・ゲートウェイ・プロトコル (BGP) がある。内部ゲートウェイ・プロトコル (IGP) (Interior Gateway Protocol (IGP)) と対比。

F

ファックス (fax). ファクシミリ機から受け取ったハードコピー。テレコピー (*telecopy*) と同義。

ファイル転送プロトコル (FTP) (File Transfer Protocol (FTP)). インターネット・プロトコルにおいて、TCP および Telnet サービスを使用して、計算機間またはホスト間で大量データ・ファイルを転送する、アプリケーション・レイヤー・プロトコル。

フラッシュ・メモリー (flash memory). プログラム式で、消去可能で、連続的な電力を必要としない、データ記憶装置。他のプログラム式、消去可能データ記憶装置と比べたフラッシュ・メモリーの主な長所は、回路ボードから取り外さずに再プログラムできることである。

フロー制御 (flow control). (1) SNA において、データ・トラフィックがネットワークのコンポーネント間を通過する速度を管理するプロセス。フロー制御の目的は、メッセージの流れを最適化してネットワーク輻輳 (ふくそう) を最小にすることである。つまり、受信側または中間ルーティング・ノードのバッファがオーバーフローせず、また受信側が追加メッセージ単位の到着を待つこともないようにする。(2) ペーシング (*spacing*) も参照。

フラグメント (fragment). 分割 (*fragmentation*) を参照。

断片化 (fragmentation). (1) 伝送する物理媒体の容量に合わせるために、データグラムをより小さい部分つまり断片に分割する処理。(2) 分割 (*segmenting*) も参照。

フレーム (frame). (1) ある特別な情報で構成されるデータ構造。特別な情報とは、いくつかのロットで成り立ち、各ロット内の属性値を読むことにより適切な接続手順が決められる。(T) (2) IBM トークンリング・ネットワークなどのローカル・エリア・ネットワークにおける伝送単位。区切り文字、制御文字、情報、および検査文字が含まれる。(3) SDLC において、SDLC 手順を使用して伝送される、コマンド、レスポンス、およびすべての情報を運ぶ手段。

フレーム・レベル (frame level). データ・リンク・レベル (*data link level*) と同義。リンク・レベル (*link level*) を参照。

フレーム・リレー (frame relay). (1) ユーザーの装置と高速パケット・ネットワークの境界を記述したインターフェース標準。フレーム・リレー・システムでは、無駄なフレームは廃棄される。回復はホップごとではなく、エンド・エンドで行われる。(2) サービス総合デジタル網 (ISDN) D チャネル標準から導出された技法。接続は高信頼性で、ネットワークの誤り検出と制御のオーバーヘッドはないものと想定している。

フロントエンド・プロセッサ (front-end processor). メインフレームの通信制御タスクを軽減する、IBM 3745 または 3174 のようなプロセッサ。

G

ゲートウェイ (gateway). (1) ネットワーク体系が異なる 2 つのコンピューター・ネットワークを相互に接続する機能単位。ゲートウェイは、異なる体系をもつネットワークまたはシステムを接続する。ブリッジは、同一または類似の体系をもつネットワークまたはシステムを接続する。(T) (2) IBM トークンリング・ネットワークにおいて、ローカル・エリア・ネットワークを、異なる論理リンク・プロトコルを使用する別のローカル・エリア・ネットワークまたはホストに接続する、装置と関連ソフトウェア。(3) TCP/IP においては、ルーター (*router*) の同義語。

汎用データ・ストリーム (GDS) (general data stream (GDS)). LU 6.2 セッション内の会話に使用されるデータ・ストリーム。

汎用データ・ストリーム (GDS) 変数 (general data stream (GDS) variable). 識別子と長さフィールドで始まり、アプリケーション・データ、ユーザー制御データ、または SNA 定義制御データのいずれかを持つ RU 副構造の 1 タイプ。

H

ヘッダー (header). (1) ユーザー・データの前に置かれるシステムが定めた制御情報。(2) 1 つまたは複数の着信先フィールド、発信元ステーションの名前、入力シーケンス番号、メッセージのタイプを示す文字列、メッセージの優先順位レベルなどの制御情報が入っているメッセージの部分。

ヒープ・メモリー (heap memory). データ構造を動的に割り振るために使用される RAM の量。

ハロー (Hello). 協働する承認ルーターが最小遅延ルートを見付けるために使用するプロトコル。

ハロー・メッセージ (hello message). (1) ルーター相互間またはルーターとホスト間の到達可能性を設定し、テストするために定期的に送られるメッセージ。(2) インターネット・プロトコルにおいて、ハロー・プロトコルによって内部ゲートウェイ・プロトコル (IGP) として定義されるメッセージ。

ヒューリスティック (heuristic). 最終結果に向けての進展状況を評価することによって解答を見付けるといふ、問題解決の探索的方法を表わす用語。

ハイレベル・データ・リンク制御 (HDLC) (high-level data link control (HDLC)). データ通信において、HDLC 国際規格 ISO 3309 フレーム構造および ISO 4335 手順要素に準拠して、指定された一連のビットを使用してデータ・リンクを制御すること。

高性能ルーティング (HPR) (high-performance routing (HPR)). 特に高速リンクの使用時に、データ・ルーティングの効率と信頼性を高める、ピア間通信ネットワーク機能 (APPN) 体系の追加機能。

ホップ (hop). (1) APPN において、中間ノードを含まないルート部分。隣接ノード間を接続する 1 つの伝送グループだけで構成される。(2) ルーティング・レイヤーにおいては、ネットワークの 2 つのノード間の論理距離。

ホップ・カウント (hop count). (1) 2 点間の距離の尺度。(2) インターネット通信において、着信先までの線路でデータグラムが通過するルーターの数。(3) SNA において、着信先までのパスで通過するリンク数の尺度。

ホスト (host). インターネット・プロトコルにおいて、エンド・システムのこと。エンド・システムはどのワークステーションでも構わず、必ずしもメインフレームである必要はない。

ホット・プラグ可能、常時交換可能 (hot pluggable). 該当するコンポーネントに接続されていない、あるいは依存していない他のリソースの動作を妨害せずに、取り付けや取り外しを行うことができるハードウェア・コンポーネントを表す用語。

ハブ (インテリジェント) (hub (intelligent)). 異なるケーブルおよびプロトコルをもつ LAN に対してブリッジングおよびルーティング機能を提供する、IBM 8260 のようなコンセントレーター。

ヒステリシス (hysteresis). アラート条件がクリアされる前に、設定されたアラート限界値を超過して変化する必要のある温度の量。

I フレーム (I-frame). 情報フレーム (Information frame)。

情報 (I) フレーム (information (I) frame). 番号制情報転送に使用される I フォーマットのフレーム。

入出力チャンネル (input/output channel). データ処理システムにおいて、内部機器と周辺機器の間のデータ転送を扱う装置。(I) (A)

統合デジタル網交換機 (IDNX) (Integrated Digital Network Exchange (IDNX)). 音声、データ、および画像アプリケーションを統合する処理装置。伝送資源の管理や、マルチプレクサーおよびネットワーク管理支援システムへの接続も行う。異なるベンダーからの装置を統合することができる。

サービス総合デジタル網 (ISDN) (integrated services digital network (ISDN)). 音声やデータも含めた多数のサービスをサポートするデジタル・エンド・エンド通信ネットワーク。

注: ISDN は公衆網および私設網体系で使用される。

インターフェース (interface). (1) 機能特性、信号特性、またはその他の該当する特性によって定義された、2 つの機能単位間の共有された境界。この概念には、異なる機能をもつ 2 つの装置を接続するための仕様も含まれる。
(T) (2) システム、プログラム、または装置をつなぐハードウェア、ソフトウェア、またはその両方。

内部ゲートウェイ (interior gateway). インターネット通信において、専用の自律システムとのみ通信するゲートウェイ。外部ゲートウェイ (exterior gateway) と対比。

内部ゲートウェイ・プロトコル (IGP) (Interior Gateway Protocol (IGP)). インターネット・プロトコルにおいて、自律システム内部でネットワーク到達可能性およびルーティングに関する情報を伝送するのに使用されるプロトコル。IGP の例としては、ルーティング情報プロトコル (RIP) および最短パス優先オープン (OSPF) がある。

中間ノード (intermediate node). 複数の分岐の終端にあるノード。(T)

中間セッション・ルーティング (ISR) (intermediate session routing (ISR)). そのノードを通過するが、エンドポイントは別の場所にあるすべてのセッションに対して、セッション・レベルのフロー制御と障害報告を提供する、APPN ネットワーク・ノード内のルーティング機能の 1 タイプ。

国際標準化機構 (ISO) (International Organization for Standardization (ISO)). 製品やサービスの国際的な交流を容易にするため、また知的、科学的、技術的、経済的活動の分野における相互協力を進めるための標準化を推進するために設立された国際的な組織。

国際電気通信連合 (ITU) (International Telecommunication Union (ITU)). 世界の周波数割り振りおよび無線規制を含めて、標準化された通信手順および実施要領を提供するために設立された米国の特殊通信機関。

インターネット (internet). 一組のルーターによって相互接続され、1 つの大規模ネットワークとして機能することができるネットワークの集合体。インターネット (Internet) も参照。

インターネット (Internet). 世界中の大規模な国営バックボーン・ネットワークと、多数の地域や構内のネットワークから構成される、インターネット体系委員会 (IAB) によって管理されるインターネット。インターネットでは、1 組のインターネット・プロトコルを使用する。

インターネット・アドレス (Internet address). IP アドレス (IP address) を参照。

インターネット体系委員会 (IAB) (Internet Architecture Board (IAB)). TCP/IP として知られるインターネット・プロトコルの開発を監督する技術団体。

インターネット制御メッセージ・プロトコル (ICMP) (Internet Control Message Protocol (ICMP)). インターネット・プロトコル (IP) レイヤーの誤りを処理し、メッセージを制御するために使用されるプロトコル。問題の報告と誤っているデータグラム着信先が、データグラムの発信元に戻される。ICMP は、インターネット・プロトコルの一部である。

インターネット制御プロトコル (ICP) (Internet Control Protocol (ICP)). 例外通知、メトリック通知、および PING サポートを提供するバーチャル・ネットワーク・システム (Virtual Networking System (VINES))。ルーティング更新プロトコル (RTP) (*RouTing update Protocol (RTP)*) も参照。

インターネット技術特別調査委員会 (IETF) (Internet Engineering Task Force (IETF)). インターネットの短期的な技術問題の解決を担当する、インターネット体系委員会 (IAB) の特別調査委員会。

インターネットワーク・パケット交換機能 (IPX) (Internetwork Packet Exchange (IPX)). (1) Novell のサーバー、または IPX を実装したワークステーションまたはルーターと、他のワークステーションを接続するために使用される、ネットワーク・プロトコル。IPX は、インターネット・プロトコル (IP) に類似しているが、異なるパケット・フォーマットおよび用語を採用している。(2) Xerox ネットワーク・システム (XNS) (*Xerox Network Systems (XNS)*)も参照。

インターネット・プロトコル (IP) (Internet Protocol (IP)). 1 つのネットワークまたは相互接続ネットワークを通してデータをルーティングするコネクションレス・プロトコル。IP は、上位のプロトコル・レイヤーと物理ネットワークの間の中間層として働く。ただし、このプロトコルは、誤り回復やフロー制御は行わず、また物理ネットワークの信頼性も保証しない。

相互運用性 (interoperability). ユーザーが装置固有の特性をほとんど (または、まったく) 知らなくても、種々の機能単位間で通信したり、プログラムを実行したり、あるいはデータを転送できること。(T)

エリア内ルーティング (intra-area routing). インターネット通信において、エリア内部でデータをルーティングすること。

逆アドレス解決プロトコル (InARP) (Inverse Address Resolution Protocol (InARP)). インターネット・プロトコルにおいて、事前設定されたハードウェア・アドレスを使用してプロトコル・アドレスを見付けるために使用されるプロトコル。フレーム・リレー文脈において、データ・リンク・コネクション識別子 (DLCI) は、事前設定ハードウェア・アドレスと同義。

IPPN. 他のプロトコルが IP を通じてデータをトランスポートする場合に使用するインターフェース。

IP アドレス (IP address). インターネット・プロトコル、標準 5、Request For Comments (RFC) 791 によって定義された 32 ビット・アドレス。通常は、ドット付き 10 進表記で示される。

IP データグラム (IP datagram). インターネット・プロトコルにおいて、インターネットを通して伝送される情報の基本単位。発信元と着信先のアドレス、ユーザー・データ、および制御情報 (データグラムの長さ、ヘッダー・チェックサム、データグラムの分割が可能かどうか、あるいは分割されているかどうかを示すフラグなど)が入っている。

IP ルーター (IP router). ネットワーク上のトラフィックが流れるパスを決定する、IP インターネット内の装置。ルーティング・プロトコルを使用して、ネットワークに関する情報を収集し、データグラムを最終着側に転送する最善ルートを決める。データグラムは、IP 着信アドレスに基づいてルーティングされる。

IPXWAN. 広域ネットワーク (WAN) を介してインターネットワーク・パケット交換機能 (IPX) ルーティング情報を交換する前に、ルーター相互間で情報を交換するために使用される Novell プロトコル。

J

ジッター (jitter). (1) デジタル信号の有意瞬間における、その理想位置からの短時間の非累積的な変動。(2) 伝送されたデジタル信号の好ましくない変動。(3) ネットワーク遅延の変動。

L

L2TP アクセス・コンセントレーター (LAC) (L2TP Access Concentrator (LAC)). PPP プロトコルと L2TP プロトコルの両方を扱うことができる 1 つまたは複数の公衆サービス電話網 (PSTN) 回線または ISDN 回線に接続されるコンセントレーター。装置には、L2TP が稼働するためのメディアをサポートする必要がある。L2TP はトラフィックを 1 つまたは複数の L2TP ネットワーク・サーバー (LNS) に渡す。L2TP は、PPP ネットワークによって搬送されたプロトコルをトンネルすることができる。

L2TP ネットワーク・サーバー (LNS) (L2TP Network Server (LNS)). LNS は PPP エンド・ステーションなど任意のプラットフォーム上で稼働する。LNS は L2TP プロトコルのサーバー側を扱う。L2TP は、L2TP トンネルを通じて到着する単一の媒体にだけ依存しているので、LNS は単一の LAN または WAN インターフェースだけをもつが、LAC によってサポートされる全範囲の PPP インターフェースのうちどのインターフェースから到着する呼び出しも着信する。これらには、非同期 ISDN、同期 ISDN、V.120、およびその他のタイプの接続が含まれる。

LAN ブリッジ・サーバー (LBS) (LAN bridge server (LBS)). IBM トークンリング・ネットワーク・ブリッジ・プログラムにおいて、2 つ以上のリング間で (ブリッジを介して) 転送されたフレームに関する統計情報を保持しているサーバー。LBS は、LAN 報告機構 (LRM) を通じて、これらの統計を該当の LAN マネージャーに送信する。

LAN エミュレーション (LE) (LAN Emulation (LE)). ATM ネットワークの従来の LAN アプリケーションをサポートする ATM フォーラム標準。

LAN エミュレーション・クライアント (LEC) (LAN Emulation Client (LEC)). エミュレートされた LAN のユーザーを表す LAN エミュレーション・コンポーネント。

LAN エミュレーション構成サーバー (LECS) (LAN Emulation Configuration Server (LECS)). 構成データを中央に集めて広く配布する、LAN エミュレーション・サービス・コンポーネント。

LAN エミュレーション・サーバー (LES) (LAN Emulation Server (LES)). LAN 着信先を ATM アドレスにする、LAN エミュレーション・サービス・コンポーネント。

LAN ネットワーク管理プログラム (LNM) (LAN Network Manager (LNM)). ユーザーが中央のワークステーションから LAN 資源を管理および監視できるようにする、IBM ライセンス・プログラム。

LAN セグメント (LAN segment). (1) 独立して動作することができるが、ブリッジによってネットワークの他の部分に接続されている LAN の部分 (たとえば、バスまたはリング)。(2) ブリッジのない環状ネットワークまたはバス・ネットワーク。

レイヤー (layer). (1) ネットワーク体系において、階層的に配列された一組のグループのうちの 1 つで、ネットワーク体系に一致するすべてのシステム間にまたがっている、概念的に完全なサービス・グループ。(T) (2) 開放型システム間相互接続参照モデルにおいて、7 つの概念的に完全な、階層的に配列されたサービス、機能、およびプロトコルのグループのうちの 1 つで、すべての開放型システム間にまたがっている。(T) (3) SNA において、他のグループの機能からは論理的に分離されている、関連する機能の集まり。あるレイヤーの機能の実現方式を変更しても、他のレイヤーの機能には影響を与えない。

LE. LAN エミュレーション (LAN Emulation)。ATM ネットワークの従来の LAN アプリケーションをサポートする ATM フォーラム標準。

LEC. LAN エミュレーション・クライアント (LAN Emulation Client)。エミュレートされた LAN のユーザーを表す LAN エミュレーション・コンポーネント。

LECS. LAN エミュレーション構成サーバー (LAN Emulation Configuration Server)。構成データを中央に集めて広く配布する、LAN エミュレーション・サービス・コンポーネント。

LES. LAN エミュレーション・サーバー (LAN Emulation Server)。LAN 着信先を ATM アドレスにする、LAN エミュレーション・サービス・コンポーネント。

回線交換 (line switching). サーキット交換 (*circuit switching*) の同義語。

リンク (link). リンク接続機構 (伝送媒体) と、2 つのリンク局 (リンク接続機構の両側に 1 つずつ) の組み合わせ。多地点構成またはトークンリング構成では、1 つのリンク接続を複数のリンクで共用できる。

平衡型リンク・アクセス・プロトコル (LAPB) (link access protocol balanced (LAPB)). リンク・レベルで X.25 ネットワークにアクセスするのに使用されるプロトコル。LAPB は、ポイント・ポイント通信に使用される全二重、非同期、対称プロトコルである。

リンク・アドレス (Link Address). ESCON チャネル・アダプター付きの 2216 の場合は、次のように決められたポート番号である。つまり、通信パスに ESCD が 1 つある場合は、ホストに接続された ESCON ディレクター (ESCD) ポート番号。通信パスに ESCD が 2 つある場合は、動的接続で定義された ESCD のホスト側ポート番号。通信パスに ESCD がない場合、この値は 'X'01' に設定する必要がある。

リンク接続 (link-attached). (1) データ・リンクによって制御装置に接続されている装置を表す用語。(2) チャネル接続 (*channel-attached*) と対比。(3) リモート (*remote*) と同義。

リンク接続機構 (link connection). (1) 1 つのリンク局と他の 1 つまたは複数のリンク局の間で両方向通信を提供する物理装置。たとえば、通信回線およびデータ回線終端装置 (DCE)。(2) SNA においては、データ回線 (*data circuit*) と同義。

リンク・レベル (link level). (1) 加入者の機械をネットワーク・ノードに接続する全二重リンクを通してネットワークとの間でデータを受け渡しするのに使用されるリンク・プロトコルを定義している X.25 勧告の部分。LAP および LAPB は、CCITT によって推奨されているリンク・アクセス・プロトコルである。(2) データ・リンク・レベル (*data link level*) も参照。

リンク状態 (link-state). ルーティング・プロトコルにおいて、ルーターまたはネットワークの使用可能なインターフェースおよび到達可能な近隣に関する、公示された情報。プロトコルのトポロジー・データベースは、収集されたリンク状態公示から作成される。

リンク・ステーション (link station). (1) 特定のリンクを介した隣接ノードへの接続を表す、ノード内のハードウェアおよびソフトウェア・コンポーネント。たとえば、ノード A が 3 つの隣接ノードに接続する多地点回線の 1 次エンドのとき、ノード A は隣接ノードへの接続を表す 3 つのリンク・ステーションをもつことになる。(2) 隣接リンク・ステーション (ALS) (*adjacent link station (ALS)*) も参照。

ローカル (local). (1) 通信回線を使用しないで直接アクセスされる装置を表わす用語。(2) リモート (*remote*) と対比。(3) チャンネル接続 (*channel-attached*) の同義語。

ローカル・エリア・ネットワーク (LAN) (local area network (LAN)). (1) 地理的に限定された区域内にある、ユーザーの構内に置かれているコンピューター・ネットワーク。ローカル・エリア・ネットワーク内部の通信は、外部の規制の対象にはならないが、LAN の境界を越えた通信は、何らかの形で規制を受ける場合がある。(T) (2) 1 組の装置が相互通信を目的として接続されているネットワークで、さらに大きなネットワークに接続することができる。(3) イーサネット (*Ethernet*) およびトークンリング (*token ring*) も参照。(4) 大都市圏ネットワーク (*MAN*) (*metropolitan area network (MAN)*) および広域ネットワーク (*WAN*) (*wide area network (WAN)*) と対比。

ローカル・ブリッジング (local bridging). 通信リンクを使用せずに 1 つのブリッジが複数の LAN セグメントを接続することができるブリッジ・プログラムの機能。リモート・ブリッジング (*remote bridging*) と対比。

ローカル管理インターフェース (LMI) (local management interface (LMI)). ローカル管理インターフェース (*LMI*) プロトコル (*local management interface (LMI) protocol*) を参照。

ローカル管理インターフェース (LMI) プロトコル (local management interface (LMI) protocol). NCP において、DLCI X'00' を介して回線状況の情報を交換するために隣接フレーム・リレー・ノードが使用する、1 組のフレーム・リレー・ネットワーク管理手順とメッセージ。NCP は、米国規格協会 (ANSI) と国際電信電話諮問委員会 (ITU-T/CCITT) の両方のバージョンの LMI プロトコルをサポートする。これらの標準では、LMI プロトコルをリンク保全検査テスト (*LIVT*) (*link integrity verification tests (LIVT)*) として参照している。

ローカル管理アドレス (locally administered address). ローカル・エリア・ネットワークにおいて、出荷時設定アドレスを指定変更するためにユーザーが割り当てることができるアダプター・アドレス。出荷時設定アドレス (*universally administered address*) と対比。

論理チャンネル (logical channel). パケット交換モードの動作において、データ・リンクを介して同時にデータの送信と受信を行うために一緒に使用される、送信チャンネルと受信チャンネル。パケットの伝送をインターリーブすることにより、同じデータ・リンク上に複数の論理チャンネルを確立することができる。

論理リンク (logical link). 1 対のリンク・ステーション (2 つの隣接ノードのそれぞれに 1 つ) とその基礎になるリンク接続。2 つのノード間に 1 つのリンク・レイヤー接続機構を提供する。2 つのノードを接続する同一の物理媒体を共用しながら、複数の論理リンクを区別することができる。その例としては、ローカル・エリア・ネットワーク (LAN) ファシリティーで使用される 802.2 論理リンクと、2 つのノード間の同じポイント・ポイント物理リンクを使用する LAP E 論理リンクがある。論理リンクという用語には、DTE から X.25 ネットワークへのアクセス・リンクを共用する複数の X.25 論理チャンネルも含まれる。

論理リンク制御 (LLC) (logical link control (LLC)). 情報を正確に交換するために、2 種類のデータ・リンク制御 (DLC) 動作を提供するデータ・リンク制御 (DLC) LAN サブレイヤー。最初のタイプはコネクションレス・サービスで、リンクを確立せずに情報を送受信することができる。コネクションレス・サービスの場合、LLC サブレイヤーは誤り回復またはフロー制御を行わない。2 番目のタイプはコネクション指向のサービスで、情報を交換する前にリンクを確立する必要がある。コネクション指向のサービスは、順序保存情報転送、フロー制御、および誤り回復を提供する。

論理リンク制御 (LLC) プロトコル (logical link control (LLC) protocol). ローカル・エリア・ネットワークにおいて、伝送媒体の共用方法からは独立して、データ・ステーション間の伝送フレームの交換を規定するプロトコル (T) LLC プロトコルは IEEE 802 委員会によって開発されたもので、すべての LAN 標準に共通である。

論理リンク制御 (LLC) プロトコル・データ単位 (logical link control (LLC) protocol data unit). 異なるノードのリンク・ステーション間で交換される情報の単位。LLC プロトコル・データ単位には、送信先サービス・アクセス・ポイント (DSAP)、送信元サービス・アクセス・ポイント (SSAP)、制御フィールド、およびユーザー・データが入っている。

論理区画 (logical partition). 論理区分 (LPAR) モードで動作できる、ホスト内の区画に割り当てられた番号。LPAR モードでは、ESCON アダプターは複数のホスト区画と論理ファイバー接続を共用することができる。

論理区分 (LPAR) モード (Logically Partitioned (LPAR) mode). 処理を論理区画 (LP) に分割して、複数のプロセッサがあるように見せる、一部のホスト・プロセッサの機能。LPAR モードでは、ESCON アダプターは複数のホスト区画と論理ファイバー接続を共用することができる。

LP. 論理区画 (logical partition)

LP 番号 (LP number). 論理区画番号 (Logical partition number)。これによって、複数の論理ホスト区画 (LP) が 1 つの ESCON ファイバーを共用することができる。この値は、ホスト入出力構成プログラム (IOCP) の RESOURCE マクロ命令によって定義される。ホストで EMIF を使用していない場合は、LP 番号としてデフォルト値 0 を使用する。

LPAR. 論理区分 (logically partitioned)。

LPAR モード (LPAR mode). 論理区分 (LPAR) モード。

論理装置 (LU) (logical unit (LU)). ユーザーがネットワーク・リソースにアクセスし、相互に通信することができる、ネットワーク・アクセス可能単位の一つ。

ループバック・テスト (loopback test). テスターからの信号をモデムや他のネットワーク要素でループさせてテスターに戻し、それを計測して通信パスの品質を調べたり、確認したりするテスト。

ローエントリー・ネットワーキング (LEN) (low-entry networking (LEN)). 論理装置間の複数の並列セッションをサポートするために、基本ピア間プロトコルを使用して相互に直接接続することができるノードの機能。

ローエントリー・ネットワーキング (LEN) エンド・ノード (low-entry networking (LEN) end node). 隣接 APPN ネットワーク・ノードからネットワーク・サービスを受ける LEN ノード。

ローエントリー・ネットワーキング (LEN) ノード (low-entry networking (LEN) node). 一連のエンド・ユーザー・サービスを行い、ピアプロトコルを使用して他のノードと直接接続し、隣接 APPN ネットワーク・ノードから暗黙に (すなわち、CP-CP セッションを直接使用せずに) ネットワーク・サービスを受けるノード。

M

管理アクセス (management access). ネットワーク管理ステーション、または変更制御サーバーを NBBS ネットワークに接続する Nways スイッチ。

管理情報ベース (MIB) (Management Information Base (MIB)). (1) ネットワーク管理プロトコルによってアクセスできるオブジェクトの集合。(2) ホストやゲートウェイから入手できる情報および許容される動作を指定する管理情報の定義。(3) OSI では、開放型システム内の管理情報の概念的リポジトリ。

管理ステーション (management station). インターネット通信において、ネットワーク全体 (または、一部) を管理するシステム。管理ステーションは、シンプル・ネットワーク・マネージメント・プロトコル (SNMP) のようなネットワーク管理プロトコルを使用して、被管理ノードに常駐するネットワーク管理エージェントと通信する。

マッピング (mapping). あるフォーマットで送信側から伝送されたデータを、受信側が受け入れられるデータ形式に変換するプロセス。

マスク (mask). (1) 他の文字パターンの一部を保持または削除することを制御するために使用する文字パターン。(I) (A) (2) 他の文字パターンの一部を保持または削除することを制御するために、文字パターンを使用すること。(I) (A)

最大伝送単位 (MTU) (maximum transmission unit (MTU)). LAN において、1 つのフレームに入れて所定の物理媒体で送信できる最大可能データ単位。たとえば、イーサネットの MTU は 1500 バイトである。

媒体アクセス制御 (MAC) (medium access control (MAC)). LAN において、媒体に依存する機能をサポートし、物理レイヤーのサービスを使用して論理リンク制御 (LLC) サブレイヤーにサービスを提供する、データ・リンク制御レイヤーのサブレイヤー。MAC サブレイヤーには、装置が伝送媒体にアクセスできる時期を判別する方法が含まれている。

媒体アクセス制御 (MAC) プロトコル (medium access control (MAC) protocol). ローカル・エリア・ネットワークにおいて、データ・ステーション間でデータを交換できるようにするために、ネットワークのトポロジーを考慮に入れて、伝送媒体へのアクセスを規制するプロトコル。(T)

媒体アクセス制御 (MAC) サブレイヤー (medium access control (MAC) sublayer). ローカル・エリア・ネットワークにおいて、媒体アクセス方式に適用されるデータ・

リンク・レイヤーの部分。MAC サブレイヤーは、トポロジー依存の機能をサポートし、物理レイヤーのサービスを使用して、論理リンク制御サブレイヤーにサービスを提供する。(T)

メトリック (metric). インターネット通信において、同じ自律システムへの複数の出入口ポイントを区別するために使用される、ルートに関連する値。最低のメトリックをもつルートが優先される。

大都市圏ネットワーク (MAN) (metropolitan area network (MAN)). 2 つ以上のネットワークを相互接続して形成された通信ネットワーク。個々のネットワークより高速で動作すること、行政の境界にまたがること、および複数のアクセス方式を使用することが可能になる。
(T) ローカル・エリア・ネットワーク (*local area network (LAN)*) および広域ネットワーク (*wide area network (WAN)*) と対比。

MIB. (1) MIB モジュール。(2) 管理情報ベース (Management Information Base)。

MIB オブジェクト (MIB object). MIB 変数 (*MIB variable*) の同義語。

MIB 変数 (MIB variable). シンプル・ネットワーク・マネジメント・プロトコル (SNMP) において、MIB モジュールに定義されているデータの特定インスタンス。MIB オブジェクト (*MIB object*) と同義。

MIB ビュー (MIB view). シンプル・ネットワーク・マネジメント・プロトコル (SNMP) において、特定のコミュニティに見える、エージェントと呼ばれる管理オブジェクトの集合。

MILNET. 本来は ARPANET の一部であった軍用ネットワーク。1984 年に ARPANET から分割された。MILNET は、軍用施設に高信頼性のネットワーク・サービスを提供している。

モデム (変復調装置) (modem (modulator/demodulator)). (1) 信号を変調および復調する装置。モデムの機能の 1 つは、デジタル・データをアナログ伝送ファシリティーを介して伝送できるようにすることである。(T) (A) (2) コンピューターからのデジタル・データを、通信回線上で伝送できるアナログ信号に変換し、また受信したアナログ信号をコンピューターのためのデータに変換する装置。

モジュール (module). Nways スイッチにおいて、論理カード、コネクタ、およびライトが含まれている、パッケージされたハードウェア装置。モジュールは、アダプター、回線インターフェース・カプラー、音声サーバ

ー拡張、およびその他のコンポーネントをパッケージするのに使用される。すべてのモジュールが論理サブラックに**ホット・プラグ可能**。

モジュロ (modulo). (1) モジュラスに関する用語。たとえば、9 は 4 モジュロ 5 と同等。(2) モジュラス (*modulus*) も参照。

モジュラス (modulus). 剰余を残さずに 2 つの関連する数値の差を除算する関係式における、正整数のような数。たとえば、9 と 4 はモジュラス 5 をもつ ($9 - 4 = 5$, $4 - 9 = -5$ 、かつ 5 は 5 と -5 の両方とも割りきれぬ)。

モニター (monitor). (1) 分析するために、データ処理システムの中の選ばれた活動を監視し、記録する機能。基準から著しく逸脱していることを示すため、または特定の機能の利用度を測るために使用する。(T) (2) システムの操作を観察、監視、制御、検査するソフトウェアまたはハードウェア。(A) (3) リング上のトークンの伝送を開始し、トークンの紛失、フレームの循環、またはその他の問題が生じた場合にソフト誤り回復を提供するために必要な機能。この機能は、すべてのリング・ステーションに存在する。

マルチキャスト (multicast). (1) 選択された着信先グループに同じデータを伝送すること。(T) (2) パケットのコピーが可能ならすべての着信先のサブセットだけに伝達される、特殊な形式の同報通信。

マルチパス・チャンネル (multipath channel) (MPC). VTAM-VTAM 間両方向通信用として複数の単一方向サブチャンネルを使用するチャンネル・プロトコル。

マルチドメイン・サポート (MDS) (multiple-domain support (MDS)). LU-LU および CP-CP セッションを介して管理サービス機能セット相互間で管理サービス・データを伝送する手法。マルチドメイン・サポート・メッセージ単位 (*MDS-MU*) (*multiple-domain support message unit (MDS-MU)*) も参照。

マルチドメイン・サポート・メッセージ単位 (MDS-MU) (multiple-domain support message unit (MDS-MU)). 管理サービス・データが入っているメッセージ単位で、マルチドメイン・サポートによって使用される LU-LU および CP-CP セッションを介して管理サービス機能セット相互間に流される。このメッセージ単位およびその中に入っている実際の管理サービス・データは、一般データ・ストリーム (GDS) 形式である。コントロール・ポイント管理サービス単位 (*CP-MSU*) (*control point management services unit (CP-MSU)*)、管理サービス単位 (*MSU*) (*management services unit (MSU)*)、およびネットワーク管理ベクトル伝達 (*NMVT*) (*network management vector transport (NMVT)*) も参照。

N

ネーム・バインディング・プロトコル (NBP) (Name Binding Protocol (NBP)). AppleTalk ネットワークにおいて、AppleTalk エンティティ (資源) 名 (文字列) からトランスポート・レイヤーの AppleTalk IP アドレス (16 ビットの数字) へのネーム変換機能を提供するプロトコル。

ネーム・レゾリューション (name resolution). インターネット通信において、機械名を対応するインターネット・プロトコル (IP) アドレスにマップする処理。ドメイン名システム (DNS) (*Domain Name System (DNS)*) も参照。

ネーム・サーバー (name server). インターネット・プロトコルにおいて、ドメイン名サーバー (*domain name server*) の同義語。

最近隣活動アップストリーム (NAUN) (nearest active upstream neighbor (NAUN)). IBM トークンリング・ネットワークにおいて、リング上の所定のステーションにデータを直接送信するステーション。

近隣 (neighbor). ネットワーク管理者によってルーティング情報を受信するように指定された、共通サブネットワーク上のルーター。

NetBIOS. ネットワーク基本入出力システム (Network Basic Input/Output System)。メッセージ、プリンター・サーバー、およびファイル・サーバーの機能を提供するために LAN 上で使用される、ネットワーク、IBM パーソナル・コンピュータ (PC)、および互換 PC への標準インターフェース。NetBIOS を使用するアプリケーション・プログラムは、LAN データ・リンク制御 (DLC) プロトコルの詳細を処理する必要がない。

網、ネットワーク (network). (1) 情報交換のために接続されたデータ処理装置とソフトウェアの構成。(2) ノードとそれを相互接続するリンクの集合。

ネットワーク・アクセス・サーバー (Network Access Server) (NAS). ユーザーに一時的なオンデマンド・ネットワーク・アクセスを提供する装置。このアクセスは、PSTN または ISDN 伝送路を使用するポイント・ポイントです。

ネットワーク・アクセス可能単位 (NAU) (network accessible unit (NAU)). 論理装置 (LU)、物理装置 (PU)、コントロール・ポイント (CP)、またはシステム・サービス・コントロール・ポイント (SSCP)。パス制御ネットワークによって伝送される情報の発側または着側となる。ネットワーク・アドレス可能単位 (*network addressable unit*) と同義。

ネットワーク・アドレス (network address). ISO 7498-3 によると、1 組のネットワーク・サービス・アクセス・ポイントを識別する、OSI 環境内であいまいさのない名前。

ネットワーク・アドレス可能単位 (NAU) (network addressable unit (NAU)). ネットワーク・アクセス可能単位 (*network accessible unit*) の同義語。

ネットワーク体系 (network architecture). コンピューター・ネットワークの論理構造と運用原則。(T)

注: 運用原則には、サービス、機能、およびプロトコルが含まれる。

ネットワーク輻輳 (ふくそう) (network congestion). 通信量がネットワークで処理できる量を上回ったことによって起こる望ましくない過負荷状態。

ネットワーク制御 (network control). 以下の目的のために Nways スイッチのコントロール・ポイントによって実行される NBBS 体系の機能。

- Nways スイッチ資源の割り振りと制御
- トポロジーおよびディレクトリー・サービスの提供
- ルートの選択
- 輻輳 (ふくそう) の制御

ネットワーク識別子 (network identifier). (1) TCP/IP において、ネットワークを定義する IP アドレスの部分。ネットワーク ID の長さは、ネットワーク・クラス (A、B、または C) のタイプによって異なる。(2) 特定のサブネットワークを固有に識別する、1~8 バイトのユーザーが選択した名前、または 8 バイトの IBM 登録名。

ネットワーク情報センター (NIC) (Network Information Center (NIC)). インターネット通信において、ユーザーに援助、資料、訓練、およびその他のサービスを提供する、全世界の局所的、地域的、および国家的なグループ。

ネットワーク・レイヤー (network layer). 開放型システム間相互接続 (OSI) 体系において、OSI 環境全体のルーティング、交換、およびリンク・レイヤー・アクセス機能を提供するレイヤー。

ネットワーク管理 (network management). 通信用のデータ処理または情報システムを計画、組織、および制御するプロセス。

ネットワーク管理ステーション (NMS) (network management station (NMS)). NetView/AIX および Nways スイッチ管理プログラムを稼働するステーション。NBBS ネットワーク・トポロジー、会計、効率、構成の更新、および問題分析を管理する。

ネットワーク管理ステーションは、イーサネット LAN を介して管理アクセス Nways スイッチに接続される。

ネットワーク管理ステーション (network management station). シンプル・ネットワーク・マネージメント・プロトコル (SNMP) において、ネットワーク要素を監視、制御する管理アプリケーション・プログラムを実行する端末。

ネットワーク管理ベクトル転送 (NMVT) (network management vector transport (NMVT)). 物理装置管理サービスとコントロール・ポイント管理サービス間のアクティブ・セッション (SSCP-PU セッション) を介して流される、管理サービス要求応答単位 (RU)。

ネットワーク・マネージャー (network manager). ネットワーク・ノードの問題を監視、管理、および診断するプログラムまたはプログラムの集まり。

ネットワーク・ノード (NN) (network node (NN)). 拡張ピア間通信ネットワーク機能 (APPN) ネットワーク・ノード (*Advanced Peer-to-Peer Networking (APPN) network node*) を参照。

ネットワーク・サポート・センター (Network Support Center). IBM が NBBS ネットワークにリモート・サポートを提供する場所。

ネットワーク・サポート・ステーション (network support station). ローカルで動作し、Nways スイッチにサービスするために使用される処理装置。Nways スイッチの管理者または保守担当者が使用する。

ネットワーク・ユーザー・アドレス (NUA) (network user address (NUA)). X.25 通信において、最大 15 桁の 2 進コード数字を含む X.121 アドレス。

ネットワーク広帯域サービス (NBBS) (Networking BroadBand Services (NBBS)). ATM 標準を補完して以下の機能を提供する、高速ネットワーク用の IBM 体系。

- アクセス・サービス
- トランスポート・サービス
- ネットワーク制御

ノード (node). (1) ネットワーク・ノードにおいて、1 台または複数の装置がチャネルまたはデータ回線を接続する点。(I) (2) ネットワークに接続された、データを送受信する装置。

非標準アドレス (noncanonical address). LAN において、トークンリング・アダプターの媒体アクセス制御 (MAC) アドレスを送送するためのフォーマットの 1 つ。非標準フォーマットでは、各アドレス・バイトの最上位

(左端) ビットが最初に伝送される。標準アドレス (*canonical address*) と対比。

非ゼロ復帰 (1) 記録 (NRZ-1) (Non-Return-to-Zero Changes-on-Ones Recording (NRZ-1)). 磁化状態の変化が 1 を表し、変化しないことが 0 を表す記録方式。1 の信号のみが明示的に記録される。(以前は**非ゼロ復帰反転 (NRZI)** 記録と呼ばれていた。)

非シード・ルーター (nonseed router). AppleTalk ネットワークにおいて、同じネットワークに接続されているシード・ルーターからネットワーク番号範囲とゾーン・リスト情報を獲得するルーター。

Nways スイッチ (Nways Switch). IBM 2220 Nways ブロードバンド・スイッチ (IBM 2220 Nways BroadBand Switch) と同義。

Nways スイッチ構成端末 (Nways Switch configuration station). Nways Switch 構成ツール (NCT) の独立バージョンを稼働している専用 OS/2 端末。ネットワーク構成データベースを生成するのに使用され、リモート・コンソールに導入する必要がある。

O

最短パス最優先オープン (OSPF) (Open Shortest Path First (OSPF)). インターネット・プロトコルにおいて、領域ドメイン内の情報転送を行う機能。ルーティング情報プロトコル (RIP) の代替として、OSPF は最低コストのルーティングが可能であり、大きい地域や企業ネットワークのルーティングを扱う。

開放型システム間相互接続 (OSI) (Open Systems Interconnection (OSI)). (1) 情報交換のための国際標準化機構 (ISO) の標準に準拠した開放型システムの相互接続。(T) (A) (2) データ処理システムの相互接続を可能にする標準的手順の使用。

注: OSI 体系は、コンピューター・システムの相互接続のための現在および将来の標準の開発を統合するための枠組みを設定している。ネットワーク機能は 7 つのレイヤーに分けられている。各レイヤーは、異なるアプリケーションをサポートする標準的方法で実行できる、関連したデータ処理および通信機能の集まりを表している。

開放型システム間相互接続 (OSI) 体系 (Open Systems Interconnection (OSI) architecture). 開放型システム相互接続に関連する特定の一組の ISO 規格に準拠したネットワーク体系。(T)

開放型システム間相互接続 (OSI) 参照モデル (Open Systems Interconnection (OSI)). 開放型システム相互接続、およびその 7 つのレイヤーの目的と階層式配列の一般原則を記述したモデル。(T)

発信元 (origin). メッセージまたはその他のデータが発信された外部論理装置 (LU) またはアプリケーション・プログラム。着信先 (*destination*) も参照。

孤立回線 (orphan circuit). その利用可能性が動的に学習される未構成の回線。

P

ペーシング (pacing). (1) オーバーランまたは輻輳 (ふくそう) を防止するために、受信側コンポーネントが送信側コンポーネントの伝送速度を制御する方法。(2) フロー制御 (*flow control*)、受信ペーシング (*receive pacing*)、送信ペーシング (*send pacing*)、セッション・レベル・ペーシング (*session-level pacing*)、およびバーチャル・ルート (VR) ペーシング (*virtual route (VR) pacing*) も参照。

パケット (packet). データ通信において、1 つのまとまりとして送信および交換される、データと制御信号を含む 2 進数の列。データ、制御信号、および誤り制御情報が、特定の形式に配列されている。(I)

パケット・インターネット・グローパー (PING) (packet internet groper (PING)). (1) インターネット通信において、インターネット制御メッセージ・プロトコル (ICMP) エコー要求を宛先に送って応答を待つことにより、宛先に到達できるかどうかをテストする、TCP/IP ネットワーク・ノードで使用されるプログラム。(2) 通信における、到達可能性のテスト。

パケット損失率 (packet loss ratio). パケットが指定の着信先に到達しない、または指定された時間内に到達しない確率。

パケット・モード動作 (packet mode operation). パケット交換 (*packet switching*) の同義語。

パケット交換 (packet switching). (1) アドレス指定されたパケットを用いてデータのルーティングと転送を行うことによって、パケットの伝送中だけチャンネルが占有されるようにする処理。伝送が完了すると、そのチャンネルは他のパケットの伝送に利用可能になる。(I) (2) パケット・モード動作 (*packet mode operation*) と同義。回線交換 (*circuit switching*) も参照。

並列ブリッジ (parallel bridges). 同じ LAN セグメントに接続され、そのセグメントへの冗長パスを形成する 1 対のブリッジ。

並列伝送グループ (parallel transmission groups). 各グループが異なるグループ番号をもつ、隣接ノード間の複数の伝送グループ。

パス (path). (1) 通信ネットワークにおける 2 つのノード間のルート。パスは複数の分岐を含むことができる。

(T) (2) 2 つのネットワーク・アクセス可能装置間で交換される情報を通る、一連の伝送ネットワーク・コンポーネント (パス制御およびデータ・リンク制御)。明示ルート (*ER*) (*explicit route (ER)*)、ルート拡張 (*route extension*)、およびバーチャル・ルート (*VR*) (*virtual route (VR)*) も参照。

パス制御 (PC) (path control (PC)). 通信ネットワークのネットワーク・アクセス可能装置間でメッセージをルーティングし、相互間のパスを提供する機能。伝送制御からの基本情報単位 (BIU) を (場合によっては分割して) パス情報単位 (PIU) に変換し、1 つまたは複数の PIU を含む基本伝送単位をデータ・リンク制御と交換する。パス制御はノード・タイプによって異なる。あるノード (たとえば、APPN ノード) は、ローカルに生成されたセッション識別子をルーティングに使用し、あるノード (サブエリア・ノード) は、ネットワーク・アドレスをルーティングに使用する。

パス・コスト (path cost). リンク状態ルーティング・プロトコルにおいて、2 つのノードまたはネットワーク・ノード間のパス上のリンク・コストの合計。

パス情報単位 (PIU) (path information unit (PIU)). 伝送ヘッダー (TH) のみから成る、または TH の後に基本情報単位 (BIU) または BIU セグメントが続いているメッセージ単位。

パターン突き合わせ文字 (pattern-matching character). 1 文字または複数の文字を表すために使用できる、アスタリスク (*) や疑問符 (?) のような特殊文字。任意の 1 文字または一組の文字を、パターン突き合わせ文字と置き換えることができる。グローバル文字 (*global character*) およびワイルドカード文字 (*wildcard character*) と同義。

パーマネント・バーチャル・サーキット (PVC) (permanent virtual circuit (PVC)). X.25 およびフレーム・リレー通信で、各データ端末装置 (DTE) に論理チャンネルが固定的に割り当てられているバーチャル・サーキット。コール設定プロトコルは不要である。スイッチド・バーチャル・サーキット (*SVC*) (*switched virtual circuit (SVC)*) と対比。

物理回線 (physical circuit). 多重化なしで確立されている回路。データ回線 (*data circuit*) も参照。バーチャル・サーキット (*virtual circuit*) と対比。

物理レイヤー (physical layer). 開放型システム間相互接続参照モデルにおいて、伝送媒体を介して物理接続を確立、維持、および解放するための機械的、電氣的、機能的、および手順的な手段を提供するレイヤー。(T)

物理装置 (PU) (physical unit (PU)). (1) SSCP-PU セッションを介した SSCP の要求に応じて、ノードに関連する資源 (接続リンクや隣接リンク・ステーションなど) を管理および監視するコンポーネント。SSCP は、接続リンクのようなノードの資源を PU を介して間接的に管理するために、物理装置をもつセッションを起動する。この用語は、タイプ 2.0, タイプ 4, およびタイプ 5 ノードにのみ適用される。(2) 周辺 PU (*peripheral PU*) およびサブエリア PU (*subarea PU*) も参照。

PING コマンド (ping command). インターネット制御メッセージ・プロトコル (ICMP) エコー要求パケットをゲートウェイ、ルーター、またはホストに送信し、その応答を待つコマンド。

ポイント・ポイント・プロトコル (PPP) (Point-to-Point Protocol (PPP)). パケットをカプセル化し、シリアル・ポイント・ポイント・リンクを介して伝送する方法を提供するプロトコル。

ポーリング (polling). (1) 多地点接続またはポイント・ポイント接続において、データ・ステーションに対して一度に 1 台ずつ送信するように促す処理。(I) (2) 競合を避けるため、動作状況を調べるため、またはデータの送信または受信が可能かどうかを調べるための、装置に対する問い合わせ。(A)

ポート (port). (1) データを入出力するためのアクセス・ポイント。(2) 他の装置 (ディスプレイ、プリンターなど) のケーブルが接続される装置上のコネクタ。(3) リンク・ハードウェアへの物理接続の表現。ポートはアダプターと呼ばれることもあるが、アダプターは 2 つ以上のポートをもつことができる。単一の DLC プロセスで、1 つまたは複数のポートを制御することができる。(4) インターネット・プロトコルにおいて、TCP またはユーザー・データグラム・プロトコル (UDP) と、上位レベルのプロトコルまたはアプリケーションの間の通信に使用される 16 ビットの番号。ファイル転送プロトコル (FTP) やシンプル・メール転送プロトコル (SMTP) など一部のプロトコルでは、すべての TCP/IP 実装に同一の割り当て済みポート番号が使用される。(5) ホスト計算機内の複数の宛先を区別するために、トランスポート・プロトコルが使用する抽象概念。(6) ソケット (*socket*) と同義。

ポート・アダプター (port adapter). ポート回線に NBBS 体系のアクセス・サービスを提供するコードを実行している、Nways スイッチの 2216 以外の型式のモジュール。2216 では、ポート・アダプターとトランク・アダ

プターの機能が結合された多重化ポート/トランク・アダプター (MPTA) が使用されている。

ポート回線 (port line). 外部ユーザー装置を Nways スイッチに接続し、それにより NBBS ネットワークへの接続を可能にする通信回線。回線エミュレーション・サービス (CES)、パルス符号変調 (PCM)、ハイレベル・データ・リンク制御 (HDLC)、またはフレーム・リレー (FR) など、各種のアクセス・サービスおよびインターフェースを使用できる。

Nways スイッチでは、各ポート回線は 1 つの (または、複数の) NBBS ポートに関連付けられている。

ポート番号 (port number). インターネット通信において、トランスポート・サービスに対してアプリケーション・エンティティを識別するもの。

ポテンシャル接続 (potential connection). NBBS 体系において、NBBS ネットワークの外部の 2 つの装置間の事前定義された接続。エンドポイント Nways スイッチの 1 つに保管されている構成パラメーターによって定義される。

構内交換機 (PBX) (private branch exchange (PBX)). 公衆電話網と相互にコールを伝送する構内電話交換機。

問題判別 (problem determination). プログラムのコンポーネント、機械の障害、通信設備、ユーザー所有または外注のプログラムや機器、停電などの環境障害、あるいはユーザーの誤りなど、問題の原因を判別するプロセス。

プログラム一時修正 (PTF) (program temporary fix (PTF)). プログラムの未変更の現行リリースに含まれる、IBM によって診断された問題の一時的な解決策または迂回策。

プロトコル (protocol). (1) 機能単位が通信する方法を規定する、意味上および構文上の一組の規則。(I) (2) 開放型システム間相互接続体系において、同じレイヤー内のエンティティが通信機能を実行する方法を規定する、1 組の意味上および構文上の規則。(T) (3) SNA において、ネットワーク管理、データ伝送、およびネットワーク・コンポーネントの状態の同期化を行うために使用する要求とレスポンスの意味と順序の規則。**回線制御規則 (line control discipline)** および**伝送制御手順 (line discipline)** と同義。**ブラケット・プロトコル (bracket protocol)** および**リンク・プロトコル (link protocol)** を参照。

プロトコル・データ単位 (PDU) (protocol data unit (PDU)). 特定のレイヤーのプロトコルに指定されており、このレイヤーのプロトコル制御情報 (および、このレ

イヤーのユーザー・データが含まれる場合もある) から構成されるデータの単位。(T)

パルス符号変調 (PCM) (pulse code modulation (PCM)). アナログ音声信号のデジタル化のために採用された標準。PCM では、音声は 8 kHz の速度でサンプリングされ、各サンプルは 8 ビット・フレームに符号化される。

NBBS ネットワークでは、PCM は音声および FAX データを運ぶための回線エミュレーション・サービス (CES) の代替である。

Q

サービス品質 (QoS) (quality of service (QoS)). NBBS 体系では、サービス品質でネットワーク接続の特性を保証する。これは、エンド・エンド遅延、ジッター、およびパケット紛失率などを表わす。

R

高速トランスポート・プロトコル (RTP) コネクション (Rapid Transport Protocol (RTP) connection). 高性能ルーティング (HPR) において、セッション・トラフィックを伝達するためにルートのエンドポイント間に確立される接続。

到達可能性 (reachability). ノードまたは資源が、別のノードまたは資源と通信できること。

読み取り専用メモリー (ROM) (read-only memory (ROM)). 特殊な条件を除いて、保管されたデータをユーザーが変更できないメモリー。

リアルタイム処理 (real-time processing). 処理操作中に、ある処理が必要とするデータまたは生成するデータを処理すること。通常はその結果が、実行中の処理 (および、おそらく関連の処理にも) 使用され、それに影響を与える。

再組み立て (reassembly). 通信において、分割されたパケットを受信後に相互に結合して元に戻すプロセス。

受信不可 (RNR) (receive not ready (RNR)). 通信において、着信フレームを受け入れることができないという一時的な状態を示す、データ・リンク・コマンドまたはレスポンス。

受信不可 (RNR) パケット (receive not ready (RNR) packet). RNR パケット (RNR packet) を参照。

受信回線信号検出器 (RLSD) (received line signal detector (RLSD)). EIA 232 標準において、リモート・データ回線終端装置 (DCE) からの信号を受信中であるこ

とをデータ端末装置 (DTE) に示す信号。キャリア検出 (carrier detect) およびデータ・キャリア検出 (DCD) (data carrier detect (DCD)) と同義。

認定私企業 (RPOA) (Recognized Private Operating Agency (RPOA)). 電気通信サービスを提供し、国際電信電話諮問委員会の定める義務と規則に従う、政府省庁や機関以外の個人、会社、または組織。たとえば、通信事業者。

縮小命令セット・コンピューター (RISC) (reduced instruction-set computer (RISC)). 実行速度を上げるために、少数の単純化された頻繁に使用される命令セットを使用するコンピューター。

リモート (remote). (1) 通信回線を介してアクセスされるシステム、プログラム、または装置を表わす。(2) リンク接続 (link-attached) と同義。(3) ローカル (local) と対比。

リモート・ブリッジング (remote bridging). 2 つのブリッジが通信リンクを使用して複数の LAN を接続することができる、ブリッジの機能。ローカル・ブリッジング (local bridging) と対比。

リモート・コンソール (remote console). OS/2、TCP/IP、およびリモート Nways スイッチ資源制御プログラムを実行しているステーション。任意のネットワーク・サポート・ステーションに接続し、リモートから Nways スイッチの操作と保守を行うことができる。

接続は、以下を介して行う。

- モデムを使用して交換回線を介して
- NBBS ネットワークを介して (リモート・コンソールが、イーサネット LAN を通してそのアクセス Nways スイッチに接続されている場合)

任意のネットワーク・サポート・ステーションを、別のネットワーク・サポート・ステーションのリモート・コンソールとして使用することができる。

リモート実行プロトコル (REXEC) (Remote Execution Protocol (REXEC)). ネットワーク・ノード内の任意のホストからコマンドまたはプログラムを実行することができるプロトコル。ローカル・ホストは、コマンドの実行結果を受け取る。

コメント要求 (RFC)(Request for Comments (RFC)). インターネット通信において、インターネット・プロトコルの一部とそれに関連する実験を記述した文書シリーズ。すべてのインターネット標準は、RFC として文書化されている。

リセット (reset). バーチャル・サーキットにおいて、データ・フロー制御を再初期化すること。リセットすると、転送中のデータはすべて削除される。

リセット要求パケット (reset request packet). X.25 通信において、バーチャル・コールまたはパーマネント・バーチャル・サーキットのリセットを要求するために、データ端末装置 (DTE) またはデータ回線終端装置 (DCE) に送信するパケット。要求の理由もパケットに指定することができる。

資源 (resource). Nways スイッチにおいて、ハードウェア要素または制御プログラムによって作成される論理エンティティ。たとえば、アダプター、LIC、および伝送路は物理資源である。コントロール・ポイント、NBBS 中継線、NBBS ポート、およびコネクションは論理資源である。

NBBS ネットワークでは、資源を活用する前に、それを構成しておくことが必要である。

リング (ring). 環状ネットワーク (*ring network*) を参照。

環状ネットワーク (ring network). (1) 各ノードに正確に 2 本の分岐が接続されており、任意の 2 つのノード間には正確に 2 つのパスがあるネットワーク・ノード。(T) (2) 装置が単方向伝送リンクで接続されて閉じたパスを形成しているネットワーク構成。

リング・セグメント (ring segment). リングの残りの部分から分離することができる (コネクタを引き抜くことによって) リングの区間。LAN セグメント (*LAN segment*) を参照。

rlogin (リモート・ログイン) (rlogin (remote login)). Berkeley UNIX ベースのシステムによって提供されるサービス。ある機械の許可ユーザーがインターネットを介して他の UNIX システムに接続し、相互の端末が直接接続されているかのようにして対話することができる。rlogin ソフトウェアは、ユーザーの環境に関する情報 (たとえば、端末タイプ) をリモートの機械に渡す。

RNR パケット (RNR packet). データ端末装置 (DTE) またはデータ回線終端装置 (DCE) が、バーチャル・コールまたはパーマネント・バーチャル・サーキットに対する追加パケットを一時的に受付不能であることを示すために使用するパケット。

ルート (根) ブリッジ (root bridge). ブリッジ・ネットワークにおいて、他のアクティブ・ブリッジとの間に形成されたスパンニング・ツリーのルート (根) となるブリッジ。ルート (根) ブリッジは、スパンニング・ツリー・トポロジーを維持するために、ブリッジ・プロトコル・

データ単位 (BPDU) を発信し、他のアクティブ・ブリッジに転送する。これは、ネットワーク内の最高の優先順位をもつブリッジである。

ルート (route). (1) 発信ノードから着信ノードまでのパスを表し、相互間で交換されるトラフィックが通る、正しいシーケンスのノードと伝送グループ (TG)。(2) ネットワークのトラフィックが発信元から着信先に達するために使用するパス。

ルート (経路) ブリッジ (route bridge). 2 つのブリッジ・コンピューターが通信リンクを使用して 2 つの LAN を接続することができる、IBM ブリッジ・プログラムの機能。各ブリッジ・コンピューターは LAN の 1 つに直接接続されており、通信リンクが 2 つのブリッジ・コンピューターを接続する。

ルート拡張機能 (REX) (route extension (REX)). SNA において、サブエリア・ノードと隣接周辺ノード内のネットワーク・アドレス可能単位 (NAU) 間のパス部分を形成する、周辺リンクを含めたバス制御ネットワーク・コンポーネント。明示ルート (ER) (*explicit route (ER)*)、パス (*path*)、およびバーチャル・ルート (VR) (*virtual route (VR)*) も参照。

ルート選択制御ベクトル (RSCV) (Route Selection control vector (RSCV)). APPN ネットワーク内のルートを記述する制御ベクトル。RSCV は、発信元ノードから着信先ノードまでのパスを形成する TG とノードを識別する、正しいシーケンスの制御ベクトルから構成される。

ルーター (router). (1) ネットワークのトラフィックの流れのパスを決めるコンピューター。パスの選択は、特定のプロトコル、最短または最善パスを識別するアルゴリズム、およびその他の基準 (メトリックやプロトコル特有の着信先アドレスなど) から得られた情報に基づいて、複数のパスから選ばれる。(2) 参照モデル・ネットワーク・レイヤーにおいて、類似または異なる体系を使用する 2 つの LAN セグメントを接続する装置。(3) OSI 用語では、エンティティに到達できるパスを判別する機能。(4) TCP/IP では、ゲートウェイ (*gateway*) と同義。(5) ブリッジ (*bridge*) と対比。

ルーティング (routing). (1) メッセージを着側に到達させるためのパスを割り当てること。(2) SNA において、メッセージ単位で運ばれるパラメーター (伝送ヘッダー内の着信先ネットワーク・アドレスなど) によって決められた、ネットワークの特定パスを通してメッセージ単位を転送すること。

ルーティング・ドメイン (routing domain). インターネット通信において、ルーティング・プロトコルを使用してネットワーク全体の表示が各中間システム内で同一に

なるようにしている、中間システムのグループ。ルーティング・ドメインは、外部リンクによって相互に接続されている。

ルーティング情報プロトコル (RIP) (Routing Information Protocol (RIP)). インターネット・プロトコルにおいて、領域間のルーティング情報を交換し、インターネット・ホスト間の最適ルートを決めるために使用される、内部ゲートウェイ・プロトコル。RIP は、リンク伝送速度ではなく、ルート・メトリックに基づいて最適ルートを決める。

ルーティング・ループ (routing loop). コンバージェンスが起こるまで、あるいは関係のネットワークが到達不能とみなされるまで、ルーターが相互間で情報を循環するとき発生する状態。

ルーティング・プロトコル (routing protocol). ルーターが他のルーターを見付け、到達可能なネットワークに達する最善ルートに関する情報を最新に保つために使用される技法。

ルーティング・テーブル (routing table). データグラムを転送したり、接続を確立するために使用されるルートの集まり。この情報は、ネットワーク・トポロジーと着側への到達可能性を識別するために、ルーター間で受け渡される。

ルーティング・テーブル保守プロトコル (RTMP) (Routing Table Maintenance Protocol (RTMP)). AppleTalk ネットワークにおいて、AppleTalk ルーティング・テーブルを用いて、トランスポート・レイヤーでルーティング情報を生成し、保守する機能を提供するプロトコル。AppleTalk ルーティング・テーブルは、インターネットを通して、発信元ソケットから着信先ソケットにパケットを送る。

ルーティング更新プロトコル (RTP) (Routing update Protocol (RTP)). ルーティング・データベースを維持しているバーチャル・ネットワーク・システム (Virtual Networking System (VINES)) プロトコルで、VINES ノード間でのルーティング情報の交換を可能にする。インターネット制御プロトコル (ICP) (Internet Control Protocol (ICP)) も参照。

rsh. ログイン・ステップを完全に飛ばして、リモート UNIX 機械上のコマンド解釈プログラムを呼び出し、そのコマンド解釈プログラムにコマンド行引き数を渡す、`rlogin` コマンドの変数。

S

SAP. サービス・アクセス・ポイント (service access point) を参照。

シード・ルーター (seed router). AppleTalk ネットワークにおいて、ネットワーク構成データ (たとえば、ネットワーク範囲の数やゾーン・リスト) を維持するルーター。各ネットワークには、少なくとも 1 つのシード・ルーターがある。シード・ルーターは、構成ツールを使用して、最初に設定する必要がある。非シード・ルーター (*nonseed router*) と対比。

セグメント (segment). (1) コンポーネント間または装置の相互間のケーブル区間。セグメントは、1 本のパッチ・ケーブル、相互接続された複数のパッチ・ケーブル、または相互接続された建物ケーブルとパッチ・ケーブルの組み合わせから成る。(2) インターネット通信において、異なる機械にある TCP 機能の間の転送単位。各セグメントには、制御フィールドとデータ・フィールドが入っており、現在のバイト・ストリーム位置、実際のデータ・バイト、および受信データを妥当性検査するためのチェックサムが付加されている。

分割 (segmenting). OSI において、サポートするレイヤーからの 1 つのプロトコル・データ単位 (PDU) を複数の PDU にマップするためにレイヤーが実行する機能。

シーケンス番号 (sequence number). 通信において、伝送の流れやデータの受信を制御するために、フレームまたはパケットに割り当てられる番号。

シリアル・ライン・インターネット・プロトコル (Serial Line Internet Protocol) (SLIP). シリアル・ライン (たとえば、シリアル・ケーブルまたは電話回線を介したモデムへの RS232 接続) を介した 2 つの IP ホスト間のポイント・ポイント接続上で使用されるプロトコル。

NBBS ネットワークでは、SLIP は、ネットワーク・サポート・ステーションと IBM ネットワーク・サポート・センター (NSC) の間の接続にまたがって使用される。

サーバー (server). 通信ネットワークを通してワークステーションに共用サービスを提供する機能。たとえば、ファイル・サーバー、プリント・サーバー、メール・サーバー。(T)

サービス・アクセス・ポイント (SAP) (service access point (SAP)). (1) 開放型システム間相互接続 (OSI) 体系において、あるレイヤーのサービスが、そのレイヤーのエンティティによって、すぐ上のレイヤーのエンティティに提供されるポイント。(T) (2) アダプターによって提供される、情報を送受信することができる論理ポイント。1 つのサービス・アクセス・ポイントで、多数のリンクを終端させることができる。

サービス公示プロトコル (SAP) (Service Advertising Protocol (SAP)). インターネットワーク・パケット交換機能 (IPX) において、以下を提供するプロトコル。

- インターネット上の IPX サーバーが、そのサービスの名前とタイプを公示することができる機構。このプロトコルを使用するサーバーの名前、サービス・タイプ、およびアドレスは、NetWare を稼働するすべてのファイル・サーバーに記録されている。
- ワークステーションが、すべてのタイプのすべてのサーバー、特定タイプのすべてのサーバー、または特定タイプの最近隣サーバーのアイデンティティを見付けるために、照会を同報通信できる機構。
- ワークステーションが、特定タイプのすべてのサーバーの名前とアドレスを見付けるために、NetWare を稼働するすべてのファイル・サーバーを照会することができる機構。

セッション (session). (1) ネットワーク体系において、装置間のデータ通信を目的として、接続の確立、維持、および解放の過程で生じるすべての活動。(T) (2) 要求に応じて、活動化し、さまざまなプロトコルを提供するように調整し、非活動化することができる、ネットワーク・アクセス可能単位 (NAU) 間の論理結合。各セッションは、セッション中に交換されるすべての伝送を伴う伝送ヘッダー (TH) の中で固有に識別される。(3) L2TP において、ダイヤル・ユーザーと LNS 間でエンドツーエンド PPP 接続が試行されるとき、ユーザーがセッションを開始したか、LNS がアウトバウンド・コールを開始したかどうかにかかわらず、L2TP はセッションを生成する。そのセッション用のデータグラムは、LAC と LNS 間のトンネルを通じて送信される。LNS および LAC は、LAC に接続された各ユーザーについての状態情報を保持する。

シンプル・ネットワーク管理プロトコル (SNMP) (Simple Network Management Protocol (SNMP)). インターネット・プロトコルにおいて、ルーターと接続ネットワークを監視するのに使用されるネットワーク管理プロトコル。SNMP は、アダプテーション・レイヤー・プロトコルである。管理される装置に関する情報が定義され、そのアプリケーションの管理情報ベース (MIB) に保管される。

SNA 管理サービス (SNA/MS) (SNA management services (SNA/MS)). SNA ネットワークの管理を援助するために提供されるサービス。

ソケット (socket). (1) 処理間またはアプリケーション・プログラム間の通信のエンドポイント。(2) カリフォルニア大学の Berkeley ソフトウェア配布 (一般には、Berkeley UNIX または BSD UNIX と呼ばれる) によって提供される抽象概念で、プロセスまたはアプリケーション間の通信のエンドポイントとして働く。

ソース・ルート・ブリッジング (source route bridging). LAN において、フレームの IEEE 802.5 媒体アクセス制御 (MAC) ヘッダー内のルーティング情報を使用して、フレームが送信する必要があるリングまたはトークンリング・セグメントを判別するブリッジング方式。ルーティング情報は、発信元ノードによって MAC ヘッダーに挿入される。ルーティング情報フィールド内の情報は、発信元ホストが生成する探索パケットから取り出される。

ソース・ルーティング (source routing). LAN において、送信元ステーションがフレームの通るルートを決めて、そのルーティング情報をフレームに組み込む方式。ブリッジは、そのルーティング情報を読み取り、フレームを転送するかどうかを判別する。

発信元サービス・アクセス・ポイント (SSAP) (source service access point (SSAP)). SNA および TCP/IP において、システムがリモート装置にデータを送信することを可能にする論理アドレス。宛先サービス・アクセス・ポイント (DSAP) (destination service access point (DSAP)) と対比。

スパンニング・ツリー (spanning tree). LAN において、ブリッジが自動的にルーティング・テーブルを作成し、トポロジーの変更にに応じてそのテーブルを更新することによって、ブリッジ・ネットワーク内の任意の 2 つの LAN 間に 1 つしかルートが存在しないようにする方式。この方式により、パケットがルートを循環して送信元ルーターに戻るといったパケットのループを防止することができる。

制御範囲 (SOC) (sphere of control (SOC)). 1 つの管理サービス中心拠点によってサービスされるコントロール・ポイント・ドメインの集合。

制御範囲 (SOC) ノード (sphere of control (SOC) node). 中心拠点の制御範囲内にあるノード。SOC ノードは、その中心拠点と管理サービス機能を交換している。APPN エンド・ノードは、管理サービス機能を交換する機能をサポートする場合は、SOC ノードになれる。

水平分割 (split horizon). ネットワークのコンバージェンスを達成する時間を最小化するための技法。ルーターは特定のルート (経路) を受信したインターフェースを記録し、そのルートに関する情報は再び同じインターフェースに伝送しないようにする。

スプーフィング (spoofing). データ・リンクにおいて、エンド・ステーションから開始されたプロトコルが、最終着側の代わりに中間ノードによって確認応答されて処理される技法。たとえば、IBM 6611 データ・リンク交換では、SNA フレームはカプセル化して TCP/IP パケットに入れられ、非 SNA 広域ネットワーク・ノードを通して

伝送され、別の IBM 6611 によってアンパックされて、最終着側に渡される。スプーフィングの利点は、エンド・エンド・セッションのタイムアウトを防止できることである。

標準 MIB (standard MIB). シンプル・ネットワーク・マネージメント・プロトコル (SNMP) において、管理情報構造 (SMI) の管理の下に置かれ、インターネット技術作業部会 (IETF) によって標準とみなされている MIB モジュール。

静的ルート (static route). ルーティング・テーブルに手入力される、ホスト間、ネットワーク・ノード間、またはその両方のルート。

ステーション (station). 通信機能を使用するシステムの入力または出力ポイント。たとえば、通信回線を通してデータを送信または受信することができる、ある特定の場所にある 1 台または複数のシステム、コンピューター、端末、装置、および関連のプログラム。

StreetTalk. バーチャル・ネットワーキング・システム (VINES) において、利用者がネットワークのトポロジーを知らなくても、ネットワーク上の任意のリソースを見つけてアクセスすることができる、ネットワーク全体の固有のネーミング/アドレッシング・システム。インターネット制御プロトコル (ICP) (*Internet Control Protocol (ICP)*) および ルーティング更新プロトコル (RTP) (*RouTing update Protocol (RTP)*) も参照。

管理情報構造 (SMI) (Structure of Management Information (SMI)). (1) シンプル・ネットワーク・マネージメント・プロトコル (SNMP) において、ネットワーク管理プロトコルを用いてアクセスできるオブジェクトを定義するのに使用される規則。(2) OSI において、情報の管理に関連する標準の集合。この集合には、管理情報モデル (*Management Information Model*) および管理オブジェクト定義の指針 (*Guidelines for the Definition of Managed Objects*) が含まれる。

サブエリア (subarea). サブエリア・ノード、接続された周辺ノード、および関連の資源から構成される SNA ネットワークの部分。サブエリア・ノード内では、すべてのネットワーク・アクセス可能単位 (NAU)、リンク、およびサブエリア内のアドレス可能な隣接リンク端末 (接続された周辺ノードまたはサブエリア・ノード内の) は、共通のサブエリア・アドレスを共用し、異なる要素アドレスを持っている。

サブネット (subnet). (1) TCP/IP において、IP アドレスの一部によって識別されるネットワークの部分。(2) サブネットワーク (*subnetwork*) の同義語。

サブネット・アドレス (subnet address). インターネット通信において、ホスト・アドレスの一部がローカル・ネットワーク・アドレスとして解釈される、基本 IP アドレッシング機構の拡張。

サブネット・マスク (subnet mask). アドレス・マスク (*address mask*) の同義語。

サブネットワーク (subnetwork). (1) 1 組の共通特性 (同一ネットワーク ID など) を持つノードの集まり。(2) サブネット (*subnet*) の同義語。

サブネットワーク・アクセス・プロトコル (SNAP) (Subnetwork Access Protocol (SNAP)). LAN において、パケットが属している非 IEEE 標準プロトコル・ファミリーを識別する、5 バイトのプロトコル識別子。SNAP 値を使用して、\$AA をサービス・アクセス・ポイント (SAP) 値として使用する各プロトコルを区別する。

サブネットワーク・マスク (subnetwork mask). アドレス・マスク (*address mask*) の同義語。

サブシステム (subsystem). 制御システムから独立して、または非同期で、動作することができる、2 次的または従属的なシステム。(T)

スイッチド・バーチャル・サーキット (SVC) (switched virtual circuit (SVC)). 必要に応じて動的に確立される X.25 回線。交換回線と同等の X.25 回線。パーマネント・バーチャル・サーキット (PVC) (*permanent virtual circuit (PVC)*) と対比。

同期 (synchronous). (1) 共通タイミング信号のような特定の事象の発生に依存する 2 つ以上のプロセス。(T) (2) 規則的または予測可能な時間的関係をもって起こること。

同期データ・リンク制御 (SDLC) (Synchronous Data Link Control (SDLC)). (1) リンク接続上で同期、コード透過、ビット直列情報伝送を管理するための、米国規格協会 (ANSI) のアドバンスト・データ通信制御手順 (ADCCP) および国際規格のハイレベル・データ・リンク制御 (HDLC) のサブセットに従う規則。伝送交換は、交換回線または非交換回線上で、全二重または半二重で行われる。リンク接続の構成は、ポイント・ポイント、多地点、またはループのいずれかである。(I) (2) 2 進データ同期通信 (BSC) (*binary synchronous communication (BSC)*) と対比。

同期光ネットワーク (synchronous optical network) (SONET). 光インターフェースを介してデジタル情報を伝送するための米国標準。これは、同期デジタル階層 (SDH) 勧告と密接な関連がある。

SYNTAX. シンプル・ネットワーク・マネージメント・プロトコル (SNMP) において、管理オブジェクトに対応する抽象データ構造を定義する、MIB モジュール内の文節。

システム (system). データ処理において、特定の機能を達成するために組織された人間、機械、および方式の集まり。(I) (A)

システム構成 (system configuration). 特定のデータ処理システムを形成する装置とプログラムを指定するプロセス。

システム・サービス・コントロール・ポイント (SSCP) (system services control point (SSCP)). 構成の管理、ネットワーク運用者および問題判別の要求の調整、およびネットワーク利用者にディレクトリー・サービスやその他のセッション・サービスを提供するめの、サブエリア・ネットワーク内のコンポーネント。相互に対等の立場で協働する複数の SSCP は、ネットワークを複数の制御領域に分割し、各 SSCP が自身の領域内の物理装置および論理装置に対して階層的な制御関係を持つようにすることができる。

システム・ネットワーク体系 (SNA) (Systems Network Architecture (SNA)). ネットワークを通して情報単位を伝送し、ネットワークの構成と運用を制御するための、論理構造、フォーマット、プロトコル、および動作手順の記述。SNA の階層化された構造により、情報の最終的な発信元と着信先 (つまり、利用者) が、情報交換に使用される SNA ネットワークの特定のサービスや機能から独立し、その影響を受けなくすることができる。

T

TCP/IP. (1) 伝送制御プロトコル/インターネット・プロトコル (Transmission Control Protocol/Internet Protocol)。(2) 本来は米国国防総省によって開発された UNIX に似ている、イーサネットを基礎にしたシステム相互接続プロトコル。TCP/IP により、レイヤー 4 が TCP でレイヤー 3 が IP のパケット交換方式リサーチ・ネットワークである ARPANET (拡張研究プログラム機関ネットワーク (Advanced Research Projects Agency Network)) の利便性が向上した。

Telnet. インターネット・プロトコルにおいて、リモート端末接続サービスを提供するプロトコル。このプロトコルによって、あるホストのユーザーがリモート・ホストにログオンし、そのホストに直接接続されている端末ユーザーとして対話することができる。

しきい値 (threshold). (1) IBM ブリッジ・プログラムにおいて、『しきい値超過』オカレンスがカウントされて

ネットワーク管理プログラムに通知される前に、誤りのためにブリッジを通過して転送されないフレームの最大数として設定される値。(2) そこからカウンターが 0 まで減分される初期値、または初期値からカウンターが増分または減分されて到達する値。

スループット・クラス (throughput class). パケット交換において、データ端末装置 (DTE) パケットがパケット交換ネットワークを通過する速度。

時分割多重 (TDM) (time division multiplexing (TDM)). チャンネル化 (*channelization*) を参照。

活動回数 (TTL) (time to live (TTL)). ベストエフォート送達プロトコルが、パケットの無限ループを禁止するために使用する技法。TTL カウンターが 0 に達すると、パケットは廃棄される。

タイムアウト (timeout). (1) 指定された事象の発生時から始まる事前定義された時間間隔の終了前に起こる別の事象。(I) (2) システム操作を中断してリスタートすることが必要になる前の、ポーリングまたはアドレッシングに対するレスポンスのような、特定の動作を起こすために割り当てられた時間。

トークン (token). (1) ローカル・エリア・ネットワークにおいて、あるデータ装置が一時的に伝送媒体を制御していることを示すために、そのデータ装置から別のデータ装置に連続的に渡される許可信号。各データ装置には、媒体を制御するためにトークンを獲得して使用する機会が与えられる。トークンというのは、伝送許可を示す特別のメッセージまたはビット・パターンである。(T) (2) LAN において、伝送媒体上を、ある装置から別の装置に渡される一連のビット。トークンにデータが付加されるとフレームになる。

トークンリング (token ring). (1) IEEE 802.5 では、媒体に接続されたステーション間でトークン (特殊なパケットまたはフレーム) を渡すことによって媒体アクセスを制御するネットワーク技術。(2) ある接続リング・ステーション (ノード) から別のノードにトークンを渡すリング・トポロジーを持つ、FDDI または IEEE 802.5 ネットワーク。(3) ローカル・エリア・ネットワーク (LAN) (*local area network (LAN)*) も参照。

トークンリング・ネットワーク (token-ring network). (1) トークン・パッシング手順により、データ・ステーション間で単方向のデータ伝送を行い、伝送されたデータが送信元ステーションに戻ってくる構造の環状ネットワーク。(T) (2) ノードからノードへ順にトークンを渡すリング・トポロジーを使用するネットワーク。送信の準備ができていないノードは、トークンを取り込み、伝送するデータを挿入することができる。

トポロジー (topology). 通信において、ネットワーク・ノード内のノードの物理的または論理的な配置。特に、ノードとそれを結ぶリンクの関係を表す。

トポロジー・データベース更新 (TDU) (topology database update (TDU)). ネットワーク・トポロジー・データベースを維持するために、APPN ネットワーク・ノード間に同報通信され、各ネットワーク・ノードに完全に複製される、新規または変更されたリンクまたはノードに関するメッセージ。TDU には、以下のものを識別する情報が入っている。

- 送信元ノード
- ネットワークの各種資源のノード特性およびリンク特性
- 記述されている各資源の最新の更新のシーケンス番号

トレース (trace). (1) コンピューター・プログラムの実行の記録。命令が実行された順序を表す。(A) (2) データ・リンクの場合は、送信または受信されたフレームとバイトの記録。

トランシーバー (送受信装置) (transceiver (transmitter-receiver)). LAN において、ホスト・インターフェースをイーサネットのようなローカル・エリア・ネットワークに接続する物理装置。イーサネット・トランシーバーには、ケーブルに信号を送って衝突を検出する電子機器が内蔵されている。

伝送制御プロトコル (TCP) (Transmission Control Protocol (TCP)). インターネット、およびインターネットワーク・プロトコルに関する米国国防総省の規格に準拠するその他のすべての通信ネットワークで使用されている通信プロトコル。TCP は、パケット交換通網のホストとそのネットワークの相互接続システムのホストとの間に、高信頼性ホスト間プロトコルを提供する。基礎となるプロトコルとして、インターネット・プロトコル (IP) を使用している。

伝送制御プロトコル/インターネット・プロトコル (TCP/IP) (Transmission Control Protocol/Internet Protocol (TCP/IP)). ローカル・エリア・ネットワークと広域ネットワーク・ノードの両方で、ピア間接続機能をサポートする一組の通信プロトコル。

伝送グループ (TG) (transmission group (TG)). (1) 伝送グループ番号によって識別された隣接ノード間の接続。(2) サブエリア・ネットワークにおいて、隣接ノード間の単一リンクまたはリンク群。伝送群がリンク群で構成される場合、リンクは単一の論理リンクと見なされ、伝送群はマルチリンク伝送群 (MLTG) と呼ばれる。混合媒体マルチリンク伝送群 (MMMLTG) とは、異なる媒体タイプのリンク (たとえば、トークンリング、交換 SDLC、非交換 SDLC、およびフレーム・リレー・リンク) を含む

ものを言う。(3) APPN ネットワークにおいて、隣接ノード間の 1 つのリンク。(4) 並列伝送群 (parallel transmission groups) も参照。

伝送ヘッダー (transmission header) (TH). パス制御が、メッセージ単位をルーティングし、ネットワークの中の流れを制御するために作成して使用する制御情報。オプションでその後に基本情報単位 (BIU) または BIU セグメントを続けることができる。パス情報単位 (path information unit) も参照。

透過ブリッジング (transparent bridging). LAN において、媒体アクセス制御 (MAC) レベルを通して、個々のローカル・エリア・ネットワークを相互に結合する方式。透過型ブリッジには MAC アドレスが入ったテーブルが保管されており、テーブルに指示されている場合は、ブリッジが検出したフレームを別の LAN に転送することができる。

トランスポート・レイヤー (transport layer). 開放型システム間相互接続参照モデルにおいて、高信頼性エンド・エンド・データ転送サービスを提供するレイヤー。パス内に中継開放型システムが存在する場合もある。(T) 開放型システム間相互接続参照モデル (Open Systems Interconnection reference model) も参照。

トランスポート・サービス (transport services). 以下の目的のために Nways スイッチのコントロール・ポイントによって実行される NBBS 体系の機能。

- トランク・ラインと Nways スイッチの接続サポート
- 帯域幅の使用率の最大化
- サービス品質の保証
- Nways スイッチ間のパケット転送
- 論理待ち行列の管理と、伝送のスケジューリング

トラップ (trap). シンプル・ネットワーク・マネージメント・プロトコル (SNMP) において、例外条件を報告するために、管理ノード (エージェント機能) が管理ステーションに送るメッセージ。

トランク・アダプター (trunk adapter). トランク・ラインに NBBS 体系のトランスポート・サービスを提供するコードを実行する、Nways スイッチの 2216 以外の型式のモジュール。2216 では、ポート・アダプターとトランク・アダプターの機能が結合された多重化ポート/トランク・アダプター (MPTA) が使用されている。

トランク・ライン (trunk line). 2 つの Nways スイッチを接続する高速伝送路。同軸ケーブル、ファイバー・ケーブル、または無線を使用でき、通信会社からリースすることもできる。

Nways スイッチでは、各トランク・ラインは 1 つの NBBS トランクに関連付けられている。

トンネル (Tunnel). トンネルとは、LNS-LAC の対によって定義されるもので、LAC と LNS の間で PPP データグラムを伝える。単一のトンネル で多くのセッションを多重化することができる。制御接続が同じトンネルを介して作動する場合は、すべてのセッションおよびトンネル自体の設定、解放、および保守を制御する。

トンネル伝送 (tunneling). トランスポート・ネットワークを、単一の通信リンクまたは LAN のように扱うこと。カプセル化 (*encapsulation*) も参照。

T1. 米国では、1.544-Mbps の公衆アクセス回線。24 個の 64 Kbps チャンネルで利用可能。欧州方式 (E1) は 2.048 Mbps で伝送する。

U

出荷時設定アドレス (universally administered address). ローカル・エリア・ネットワークにおいて、製造時にアダプターに永久的に符号化されるアドレス。出荷時設定アドレスは固有である。ローカル管理アドレス (*locally administered address*) と対比。

ユーザー・データグラム・プロトコル (UDP) (User Datagram Protocol (UDP)). インターネット・プロトコルにおいて、低信頼性のコネクションレス・データグラム・サービスを提供するプロトコル。このプロトコルを使用して、ある計算機またはプロセス上のアプリケーション・プログラムが、別の計算機またはプロセス上のアプリケーション・プログラムに、データグラムを送信することができる。UDP では、インターネット・プロトコル (IP) を使用してデータグラムを送達する。

V

V.24. データ通信において、データ端末装置 (DTE) とデータ回線終端装置 (DCE) 間の交換回線の一連の定義を規定した CCITT の仕様。

V.25. データ通信において、手動および自動で設定されたコールのエコー制御装置を使用禁止にする手順を含めた、一般交換電話ネットワークの自動応答装置および並列自動発呼装置を定義する CCITT の仕様。

V.34. 標準の市販の音声グレードの 33.6 Kbps (およびそれより低速の) チャンネルを介してのモデム通信に関する ITU-T 勧告。

V.35. データ通信において、種々のデータ転送速度のデータ端末装置 (DTE) とデータ回線終端装置 (DCE) 間の交換回線の一連の定義を規定した CCITT の仕様。

V.36. データ通信において、48, 56, 64, または 72 キロビット/秒のデータ転送速度のデータ端末装置 (DTE) とデータ回線終端装置 (DCE) 間の交換回線の一連の定義を規定した CCITT の仕様。

バージョン (version). 通常は重要な新しいコードまたは新しい機能を含む、別個のライセンス・プログラム。

VINES. バーチャル・ネットワーキング・システム (Virtual NETworking System)。

バーチャル・サーキット (virtual circuit). (1) パケット交換で、実際の接続箇所をユーザーに見えるようにする、ネットワークによって提供される機能。(T) データ回線 (*data circuit*) も参照。物理回線 (*physical circuit*) と対比。(2) 2 台の DTE 間に確立された論理接続。

バーチャル・コネクション (virtual connection). フレーム・リレーにおいて、ポテンシャル接続の戻りパス。

バーチャル・リンク (virtual link). 最短パス最優先オープン (OSPF) において、非バックボーン中継エリアによって分離されたボーダー・ルーターに接続する、ポイント・ポイント・インターフェース。エリア・ルーターは OSPF バックボーンの一部なので、バーチャル・リンクはバックボーンに接続する。バーチャル・リンクは、OSPF バックボーンが不連続にならないようにする。

バーチャル・ネットワーキング・システム (VINES) (Virtual NETworking System (VINES)). Banyan Systems, Inc. からのネットワーク運用システムとネットワーク・ソフトウェア。VINES ネットワークにおけるバーチャル・リンクでは、たとえ実際には数百マイル離れていても、すべての装置およびサービスが相互に直接接続されているように見える。*StreetTalk* も参照。

バーチャル・ルート (VR) (virtual route (VR)). (1) SNA において、次のような論理接続。(a) 特定の明示ルートとして物理的に実現されている 2 つのサブエリア・ノード間の論理接続。または (b) ノード内のセッション用のサブエリア・ノード内に完全に収まっている論理接続。別個のサブエリア・ノードの間のバーチャル・ルートは、使用する明示ルートに伝送優先順位を定め、バーチャル・ルート・ペーシングによってフロー制御を行い、パス情報単位 (PIU) にシーケンス番号を付けることによりデータ保全性を確保する。(2) 明示ルート (*ER*) (*explicit route (ER)*) と対比。パス (*path*) およびルート拡張 (*REX*) (*route extension (REX)*) も参照。

W

広域ネットワーク (WAN) (wide area network (WAN)). (1) ローカル・エリア・ネットワークや大都市圏ネットワークよりも広い地域に通信サービスを提供し、公衆通信

施設を使用または提供することができるネットワーク。
(T) (2) 何百キロあるいは何千キロも離れた区域にサービスを行うように設計されたデータ通信ネットワーク。たとえば、公衆および私用パケット交換ネットワークや各国の電話網など。(3) ローカル・エリア・ネットワーク (*local area network (LAN)*) および大都市圏ネットワーク (*metropolitan area network (MAN)*) と対比。

ワイルドカード文字 (wildcard character). パターン突き合わせ文字 (*pattern-matching character*) の同義語。

X

X.21. 公衆データ網上の同期動作のための、データ端末装置とデータ回線終端装置の間の汎用インターフェースに関する、国際電信電話諮問委員会 (CCITT) の勧告。

X.25. (1) データ端末装置とパケット交換データ網間のインターフェースに関する、国際電信電話諮問委員会 (CCITT) の勧告。(2) パケット交換 (*packet switching*) も参照。

Xerox ネットワーク・システム (XNS) (Xerox Network Systems (XNS)). Xerox Corporation によって開発された一組のインターネット・プロトコル。TCP/IP プロトコルに類似しているが、XNS は異なるパケット・フォーマットと用語を使用している。インターネットワーク・パケット交換機能 (*IPX (Internetwork Packet Exchange (IPX))*) も参照。

Z

ゾーン (zone). AppleTalk ネットワークにおいて、インターネット内部のノードのサブセット。

ゾーン情報プロトコル (ZIP) (Zone Information Protocol (ZIP)). AppleTalk プロトコルにおいて、セッション・レイヤーのインターネット全体のゾーン名とネットワーク番号のマッピングを維持してゾーン管理サービスを提供するプロトコル。

ゾーン情報テーブル (ZIT) (zone information table (ZIT)). インターネットのネットワーク番号と対応ゾーン・ネームのマッピングをリストしたもの。このリストは、AppleTalk インターネットの各インターネット・ルーターによって維持される。

特殊文字 (Special Characters)

2216 Nways ブロードバンド・スイッチ (2216 Nways BroadBand Switch). NBBS ネットワークでの高速通信を可能にする高速パケット交換機。2220 Nways ブロードバンド・スイッチでは、ネットワーキング・ブロード

バンド・サービス体系で定義されている機能を実装している。**Nways スイッチ (Nways Switch)** と同義。

索引

日本語, 英字, 数字, 特殊文字の順に配列されています。なお, 濁音と半濁音は清音と同等に扱われています。

[ア行]

アクセス

- コンソール・プロセス 421
- 第 2 レベルのプロセス 16, 18
- チャンネル・インターフェース
 - 構成 399
 - コンソール 421

プロトコル

- 構成プロセス 25
- 操作 (監視) プロセス 25

変更管理

- アクセス 49
- 要約 49

アクセス、監視コマンドへの 661

アクセス、MP 構成プロンプトへの 657

アドレス

ISDN 731

アドレス解決、LAN エミュレーションの 296

アドレス登録、LAN エミュレーションの 296

アドレスの入力

ATM 305

アドレスのワイルドカード、DTE 488

暗号化

構成 621

イーサネット

カプセル化タイプ 777

統計の表示 267

統計の表示、10/100 Mbps 275

ネットワーク・インターフェース

構成 271

10/100 Mbps ネットワーク・インターフェース

構成 279

IPX のカプセル化タイプ 778

イーサネット 10/100 Mbps ネットワーク・インターフェース

使用 275

イーサネット監視コマンド 274

要約 273

collisions 274

イーサネット構成コマンド

アクセス 271

要約 271, 279

connector-Type 272

ip-encapsulation 272, 332

イーサネット構成コマンド (続き)

list 271

physical-address 272, 281

イーサネット操作コマンド

アクセス 273

イーサネット・ネットワーク・インターフェース
使用 267

一時ローカル管理インターフェース 289

イベント

原因 138

イベント番号パラメーター 139

イベント・ログ

サブシステム 139

イメージ

特定時刻にロード 48

インターセプト文字 13

変更 38

インターフェース

ユーザー 7

予備 224

予備の構成 68

リスト、プロセスの 7

ATM 監視コマンド 320, 323

ATM 構成コマンド 310

インターフェース 監視コマンド

チャンネル・アダプター 421

インターフェース監視コマンド

LCS 425

LSA 426

MPC+ 428

インターフェース装置

追加 78

変更 85

インターフェースの制約事項 70

インターフェース番号の表示 421

エンド・システム識別子 287

オーファン・スイッチド・バーチャル・サーキット
フレーム・リレー 518

オーファン・パーマネント・バーチャル・サーキット
フレーム・リレー 517

オペレーティング・システム

2216 の定義 360

[カ行]

概説

ソフトウェアの 7

バーチャル・コネクション (VC) 599

ELS ネット・フィルター監視コマンド 205

概説 (続き)

- ELS ネット・フィルター構成コマンド 7
- 概説、LAN エミュレーションの 285
- 回線情報速度 (CIR) 524
- 回線速度 526
- 回線の競合
 - ISDN 732
- 回線輻輳 (ふくそう) 528
 - 減速による対応 528
- カプセル化タイプ 777
- 可変情報速度
 - フレーム・リレーの 527
- 監視
 - 性能監視コマンド 217
 - ネットワーク・インターフェース 24
 - プロンプトの表示 421
 - ATM 309
 - MP コマンドへのアクセス 661
- 監視コマンド
 - マルチリンク PPP プロトコル 661
 - LAN エミュレーション・クライアント (LEC) 327
- キープアライブ・タイマーの設定、XTP 504
- キーワード 789
- 技術サポート・アクセス 68
- 起動、予備インターフェースの 118
- 逆方向明示的輻輳 (ふくそう) 回避 529
- 逆方向明示的輻輳 (ふくそう) 通知 (BECN)
 - フレーム・リレー 520
- クイック構成 9, 17
 - 説明 66
 - ブリッジング構成 773
 - プロトコル構成
 - 手順 775
 - IP ユーザー・インターフェース 775
 - IPX ユーザー・インターフェース 777
- クイック構成リファレンス 772
- グループ
 - 削除 159
- グループ名パラメーター 141
- クロック、設定と変更 115
- クロックとケーブル・タイプ 435
- ケーブル・タイプ、クロックと 435
- 計画と準備
 - ホスト 355, 376
 - 2216 ESCON アダプター 376
- コールの検証
 - ISDN 732
- コールバック制御プロトコル (CBCP)
 - PPP の 597
- 交換 SDLC コールイン・インターフェース
 - 構成 681

交換回線大ノード定義ファイルの例

- VTAM 制御ブロック 370
- VTAM ホストでの LSA APPN 接続 372
- VTAM ホストでの LSA DLSw 接続 372
- VTAM ホストでの LSA DLSw ローカル変換 373
- VTAM ホストでの LSA 直接接続 371
- 更新
 - 構成 14
- 構成
 - 暗号化 621
 - 概説 355
 - 更新 14
 - コマンドへのアクセス 397
 - 再構成 377
 - 推奨事項 13
 - チャンネル・アダプター・インターフェース
 - 必要な処置 397
 - add 401
 - チャンネル・インターフェース
 - コマンドの要約 400
 - delete 416
 - list コマンド 419, 420
 - mod コマンド 417
 - set コマンド 420
 - ネットワーク・インターフェース 22
 - バーチャル・コネクション (VC) 600
 - 初めての 14
 - 並列チャンネル・アダプター (PCA) 399
 - ホスト
 - 接続の定義に必要 355
 - 定義の計画 355
 - マルチリンク PPP インターフェース 653
 - シリアル・リンクでの 654
 - ダイヤル回線での 653
 - マルチシャシー MP の 655
 - レイヤー 2 トンネル伝送ネット 655
 - メモリーの更新 116
 - 基づく、既存の構成に 14
 - ユーザー・アクセス 68
- APPN
 - ループバック 415
- DECnet 779
- ESCON チャンネル・アダプター 399
- FDDI 247
- IP 775
- IPX 777
- LCS
 - サブチャンネル 402
 - バーチャル・インターフェース 401
- LSA
 - サブチャンネル 407
 - 直接接続 384

構成 (続き)
 バーチャル・インターフェース 621
 2216 での DLSw 接続 386
 APPN 接続 385
 DLSw ローカル変換、2216 での 388
 VTAM ホストでの直接接続 371
MP プロンプトへのアクセス 657
MPC+ 391, 392, 394
 サブチャンネル 411
 バーチャル・インターフェース 409
network コマンド、チャンネル・アダプター 400
OPCON 35
PPP コールバック 594
TCP/IP の MVS ホスト 362
TCP/IP パススルー 382
VTAM ホスト
 APPN 接続 371
 DLSw 接続 372
 MPC+ 374, 375
XTP 499
構成、予備インターフェースの 68
 起動 118
 構成 68
 制約事項 70
 定義 224
構成コマンド
 マルチリンク PPP プロトコル (mp) 657
 GWCON プロンプト 26
 set prompt-level
 プレフィックスをホスト名に追加 111
高速トークンリング監視コマンド
 要約 239
 dump 239
高速トークンリング構成コマンド
 アクセス 235
 要約 235
 list 236
 LLC 236, 240
 LLC 用に使用可能化 238
 media 237
 packet-size 237
 set 237
 source-routing 237
 speed 238
高速トークンリング・インターフェース
 表示される統計 240
高速トークンリング・ネットワーク
 構成 235
考慮事項
 バーチャル・コネクション (VC) 599
 マルチリンク PPP プロトコル (MP) 652
コマンド 13

コマンド 11 (続き)
 入力 11
 exit 13
コマンド活動記録 27, 38
コンソール・プロセスへのアクセス 421
コンポーネント、LAN エミュレーションの 286

[サ行]

再構成 377
最小情報速度
 フレーム・リレーの 527
最大情報速度
 フレーム・リレーの 527
最大フレーム・サイズ・ポリシー 292, 294
再ロード 17
 ルーター 6
 OPCON コマンド 6
サブチャンネル
 提供される番号 377
 LCS の構成 402
 LSA の構成 407
 MPC+ の構成 411
識別、プロンプトの 12
シグナル・バージョンの構成、LAN エミュレーション
 の 290
時刻
 イメージのロードの起動 48
システム・ダンプ、使用 75
始動パラメーター、VTAMの、ATCSTRxx 375
終了 13
 下位レベルの操作環境 13
終了、ルーターの 7
終了、Telnet セッションの 43
出力
 送信、他のコンソールに 36
 中断 37
 廃棄 37
順方向明示的輻輳 (ふくそう) 回避 529
順方向明示的輻輳 (ふくそう) 通知 (FECN)
 フレーム・リレー 520
冗長度、LAN エミュレーション・サーバーの 302
初期設定ファイル ATCSTRxx、VTAM の 375
シリアル PPP リンク
 MP の構成 654
シリアル・ライン・インターフェース
 構成 435
 構成プロセスへのアクセス 435
信頼性、LAN エミュレーションの 302
推奨事項
 構成 13
スイッチ変数 743
 ISDN 用の 設定 749

- 性能
 - 構成 215
 - 性能監視コマンド
 - アクセス 217
 - 要約 217
 - disable 218
 - enable 218
 - list 218
 - report 218
 - set 219
 - 性能構成コマンド
 - 要約 216
 - disable 216
 - enable 216
 - list 217
 - set 217
 - セキュリティ、LAN エミュレーションの 303
 - セッション
 - 終了 38
 - 接続、プロセスへの 11
 - 接続要求タイマー 489
 - 設定と変更、時刻、日付、およびクロックの 115
 - 説明、OPCON の 33
 - セレクター 287
 - 相互閉域接続ユーザー・グループ
 - 概説 443
 - 操作環境、下位レベルの 13
 - 終了 13
 - 装置追加の例
 - マルチリンク PPP 20
 - 属性、リモート AAA 789
 - ソフトウェア
 - 概説 7
 - ユーザー・インターフェース 7
- ## [夕行]
- 第 2 レベル
 - プロセス
 - アクセス 16, 18
 - タイプ/長さ値 294
 - ダイヤルイン回線
 - 装置追加の例 20
 - バーチャル・コネクション (VC) 599
 - 構成 600
 - 考慮事項 599
 - ダイヤル回線
 - 構成 711, 741
 - 追加 710, 741
 - ISDN 730
 - MP の構成 653
 - ダイヤル回線監視コマンド
 - callback 766
 - ダイヤル回線構成コマンド
 - 要約 759
 - delete 760
 - encapsulator 760
 - list 761
 - set 763
 - 探索、ILMI の使用による LECS の 290
 - チャンネル・アダプター
 - インターフェース 監視コマンド
 - list 422
 - インターフェース監視コマンド
 - 要約 421
 - net 424
 - インターフェースの構成 397
 - 概説 377
 - 構成コマンド
 - 要約 400
 - add 401
 - delete 416
 - list 419, 420
 - mod 417
 - set 420
 - コンソール・プロセスへのアクセス 421
 - 使用 355
 - マルチパス・チャンネル+ (MPC+)
 - 概説 389
 - トランスポート・リソース・リスト (TRL) 制御ブ
ロック 374, 375
 - ローカル SNA 大ノード制御ブロック 374, 375
 - APPN の 構成 391
 - TCP/IP の MVS ホストの構成 364
 - VTAM ホストの構成 374, 375
 - リンク・サービス・アーキテクチャー (LSA)
 - 概説 382
 - 直接接続 384
 - ホスト制御ブロック 370
 - APPN 接続 385
 - DLSw ローカル変換 388
 - LAN チャンネル・ステーション (LCS)
 - 概説 380
 - 2216 の構成 381
 - TCP/IP の MVS ホストの構成 363
 - LCS インターフェース 監視コマンド
 - 要約 425
 - list 425
 - LSA インターフェース 監視コマンド
 - 要約 426
 - list 426
 - MPC+ インターフェース 監視コマンド
 - 要約 428

- チャンネル・アダプター (続き)
 - list 422
 - TCP/IP パススルー
 - 2216 の構成 382
- チャンネル・アダプターの概説 377
- 超過バースト・サイズ
 - 定義 526
 - フレーム・リレー用の設定 526
- 重複ポリシー値 294
- 直接接続の構成、LSA 384
- 追加 20
 - ダイヤルイン回線
 - 例 20
 - マルチリンク PPP 回線
 - 例 20
- データ・ダイレクト VCC 298
- データ・リンク接続識別子 (DLCI)
 - フレーム・リレー 514, 520
- トークンリング
 - IPX のカプセル化タイプ 777
- トークンリング監視コマンド
 - アクセス 229, 238
 - 要約 229
 - dump 230
- トークンリング構成コマンド
 - アクセス 225
 - 要約 225
 - list 226
 - LLC 226
 - llc 230
 - LLC 用に使用可能化 228
 - media 227
 - packet-size 227
 - set 227
 - source-routing 228
 - speed 229
- トークンリング・インターフェース
 - 表示される統計 231
- トークンリング・ネットワーク・インターフェース
 - 構成 225
- 統合リンク・レイヤー・マネージメント (CLLM)
 - 説明 524
- 動的ルーティング
 - OSPF 776
 - RIP 776
- 同報通信および不明サーバー 287, 297
- トランスポート・リソース・リスト (TRL) 制御ブロック 374, 375, 376

[ナ行]

- ナショナル・パーソナリティの設定 494
- 入出力構成データ・セット 356

- 認証
 - リモート装置
 - 使用する PPP インターフェースの構成 594
 - PPP インターフェースの構成 593
- 認定バースト・サイズ
 - 最大フレーム・サイズとの関係 525
 - 定義 525
- ネットワーク制御プロトコル (NCP)
 - PPP インターフェースの 596
 - コールバック制御プロトコル (CBCP) 597
 - ブリッジング制御プロトコル (BCP) 596
 - AppleTalk 制御プロトコル 596
 - APPN HPR 制御プロトコル 599
 - APPN ISR 制御プロトコル 599
 - Banyan VINES 制御プロトコル (BVCP) 596
 - DECnet 制御プロトコル (DNCP) 597
 - IP 制御プロトコル (IPCP) 597
 - IPv6 制御プロトコル (IPv6CP) 598
 - IPX 制御プロトコル (IPXCP) 598
 - OSI 制御プロトコル (OSICP) 599
- ネットワーク・インターフェース
 - アクセス、コンソール・プロセスへの 23
 - 監視 24, 223
 - 検証 132
 - 構成 19, 223
 - 構成プロセスへのアクセス 19
 - コンソール・プロセス 19, 223
 - 削除 94
 - サポートされるインターフェース 22
 - 使用可能化 132
 - 使用不可化 123
 - 情報の表示 99, 120, 126
 - 表示、構成の 21
 - GWCON インターフェース・コマンド 223
 - SDLC 705
 - X.25 480
- ネットワーク・ソフトウェア
 - 統計情報の表示 131

[ハ行]

- バーチャル
 - インターフェース
 - LCS の構成 401
 - LSA の構成 404
 - MPC+ の構成 409
 - ネットワーク・ハンドラー 377
- バーチャル・コネクション (VC)
 - 概説 599
 - 構成 600
 - 考慮事項 599
- ハードウェア構成定義プログラム 355

- パケット完結符号 141
- パケット転送機能
 - CONFIG 環境に入る 106
- パケット・トレース・メッセージ
 - パケット・トレース 190
- 初めての
 - 構成 14
- パスワード 5
- パスワード、ユーザー用の設定 84
- バックアップ・ピア機能、XTP 488
- パラメーター
 - イベント番号 139
 - 主要 LAN エミュレーション 285
 - LAN エミュレーションの 304
- パラメーターのデフォルト値
 - X.25 438
- 日付、設定と変更 115
- 表示
 - ブート構成データベース 55
- 表示、監視プロンプトの 421
- 表示、ホスト名の 111
- 表示、ホスト名を時刻と共に 111
- 表示、ホスト名をソフトウェア VPD と共に 111
- 表示、ホスト名を日付と共に 111
- 表示、ホスト名を復帰と共に 111
- 表示、ホスト名を変更と共に 111
- ピン・パラメーター
 - 設定 168
- ブート構成データベース
 - 表示 55
- ファイバー分散データ・インターフェース
 - 概説 243
 - プロトコル、サポートされる 243
- フィーチャー
 - アクセス、構成プロセスおよびコンソール・プロセスへの 24
- フォーラム準拠 LEC
 - 特定クライアントの構成 329
 - ARP configuration 329
- 不揮発性構成メモリー
 - 置き換え 85
- 輻輳 (ふくそう) 監視 528
- 輻輳 (ふくそう) 通知と回避
 - 逆方向明示的輻輳 (ふくそう) 回避 529
 - 順方向明示的輻輳 (ふくそう) 回避 529
- ブリッジング
 - LCS を通じて
 - パラメーター 382
- ブリッジング、クイック構成を使用しての構成 773
- ブリッジング制御プロトコル (BCP)
 - PPP の 596
- フレーム・リレー 516
- フレーム・リレー 515 (続き)
 - インターフェースの初期化 515
 - オフファン・スイッチド・バーチャル・サーキット 518
 - オフファン・パーマネント・バーチャル・サーキット 517
 - 回線情報速度 524
 - 回線速度 526
 - 概要 513
 - 拡張アドレス 520
 - 可変情報速度 527
 - 可変情報速度 (VIR) 527
 - 管理状態報告書 523
 - 説明 523
 - 全状態報告書 523
 - リンク整合性検証報告書 524
 - 逆方向明示的輻輳 (ふくそう) 通知 520
 - 構成 531, 535
 - 構成へのアクセス 531
 - コマンド/レスポンス 520
 - 最小情報速度 527
 - 最大情報速度 527
 - 順方向明示的輻輳 (ふくそう) 通知 520
 - 使用 513
 - 静的 ARP 538
 - 帯域幅予約 531
 - 超過バースト・サイズ 526
 - データ速度 524
 - データ・リンク接続識別子 (DLCI) 520
 - ネットワーク 514
 - ネットワーク管理 522
 - ネットワーク・インターフェース 535, 580
 - バーチャル・サーキット 513
 - パーマネント・バーチャル・サーキット 516
 - 廃棄可能性 520
 - 必須グループ 518
 - 輻輳 (ふくそう) 通知と回避 529
 - フレーム転送の説明 521
 - フレーム・フォーマット 519
 - プロトコル・アドレス・マッピング 521
 - マルチキャスト・エミュレーション 522
 - ユーザー・データ 521
 - DLCI (データ・リンク接続識別子) 514
 - HDLC フラグ 520
 - LAPD データ・リンク・プロトコル 513, 519
 - LMI マネージメント・エンティティ 522
 - PVC および 518
 - PVC マネージメントの使用可能化 532
 - SVC
 - FRF 4 523
 - SVC マネージメントの使用可能化 533

フレーム・リレー監視コマンド

- 要約 567
- clear 567
- disable 568
 - cllm 568
 - notify-fecn-source 568
 - throttle-transmit-on-fecn 568
- enable 568
 - cllm 568
 - notify-fecn-source 568
 - throttle-transmit-on-fecn 568
- list 568
 - all 568
 - circuit 568
 - lmi 568
 - permanent-virtual-circuits 568
 - pvc-groups 568
- llc 578
- notrace 578
- set 578
- trace 580

フレーム・リレー構成コマンド 544, 547

- 要約 535
- add 536
 - permanent-virtual-circuit 536
 - protocol-address 536
- add protocol-address
 - IP プロトコル 538
- add-protocol
 - AppleTalk2 プロトコル 538
 - DN プロトコル 539
 - IPX プロトコル 538
- change 544
- disable
 - 圧縮 545
 - 暗号化 545
 - 輻輳 (ふくそう) 528
 - cir-monitor 544
 - cllm 545
 - congestion-monitor 545
 - dn-length-field 545
 - lmi 545
 - lower-dtr 545
 - multicast-emulation 545
 - notify-fecn-source 545
 - no-pvc 545
 - orphan-circuits 545
 - protocol-broadcast 545
 - throttle-transmit-on-fecn 545
- enable
 - 圧縮 547
 - 暗号化 547

フレーム・リレー構成コマンド 528, 547 (続き)

- enable (続き)
 - 輻輳 (ふくそう) 547
 - cir-monitor 547
 - cllm 547
 - congestion-monitor 547
 - dn-length-field 547, 549
 - lmi 547
 - lower-dtr 547
 - multicast-emulation 547
 - notify-fecn-source 547
 - no-pvc 547
 - orphan-circuits 547
 - protocol-broadcast 547
 - throttle-transmit-on-fecn 547
- list 552
 - all 552
 - hdlc 552
 - lmi 552
 - permanent-virtual-circuits 552
 - protocol-address 552
- llc 559
- remove
 - permanent-virtual-circuit 559
 - protocol-address 559
- remove protocol-address
 - Appletalk2 プロトコル 560
 - IP プロトコル 560
 - IPX プロトコル 560
- remove-protocol
 - DN プロトコル 560
- set
 - 転送遅延パラメーター 562
 - cable 561
 - clocking 561
 - crc-type 561
 - default cir 561
 - frame-size 561
 - lmi-type 561
 - n1-parameter 561
 - n2-parameter 561
 - n3-parameter 561
 - p1-parameter 562
 - t1-parameter 562

フレーム・リレー・スイッチド・バーチャル・サーキット (SVC) 515

- 除去 561
- 追加 539
- 変更 544
- リスト表示 558, 577

- フレーム・リレー・パーマナント・バーチャル・サーキット (PVC)
 - 変更 544
- フレーム・リレー・フォーラム・インプリメンテーション・アグリーメント 4 (FRF 4) 523
- フロー制御
 - パケット 119
- ブロードキャスト・マネージャー 299
- プロセス
 - 第 2 レベル
 - アクセス 16, 18
 - 通信 7
 - リスト 7
- プロトコル
 - クイック構成の使用による構成 775
 - 構成環境に入る 106
 - 構成プロセス 223, 224
 - 構成プロセスおよびコンソール・プロセス
 - アクセス 25
 - 構成プロセスに入る 25
 - コンソール・プロセス 17, 223, 224
 - コンソール・プロセスに入る 26
 - 情報の表示 120
 - 生成、リストの 106
- プロトコル・コンソール・プロセス
 - 入る 26
- プロンプト
 - 識別 12
 - ルーター・プロセス 12
 - CONFIG 12
 - GWCON 12
 - OPCON 12
- プロンプトの表示、監視 421
- 分析、問題の 377
- 閉域ユーザー・グループ
 - 概説 442
 - 拡張
 - タイプ 443
 - 構成 444
 - cug 0 のオーバーライド 444
 - XTP サポート
 - 概説 490
 - X.25 回線の確立 443
- 並列チャネル・アダプター (PCA)
 - 概説 377
 - 構成 399
 - IOCP 定義例 359
- ヘルプを得る 12
- 変更管理
 - アクセス 49
 - 概要 47
 - 構成 49
- 変更管理 (続き)
 - コマンド、使用可能な 49
 - モデル 47
- 変更管理構成コマンド
 - add 50
 - copy 51
 - describe 52
 - disable 52
 - enable 52
 - erase 53
 - list 55
 - lock 55
 - set 56
 - tftp 57
 - unlock 61
 - update-firmware 62
- ポイント・ポイント構成コマンド
 - アクセス 602
 - 要約 602
 - list 606
 - LLC 611
- ポイント・ポイント・インターフェース
 - 構成 601
- ポイント・ポイント・ネットワーク・インターフェース
 - 使用 583
- ポイント・ポイント・プロトコル (PPP) 597
 - アドレス・フィールド 585
 - 概説 583
 - コールバック制御プロトコル (CBCP) 597
 - 構成プロセスへのアクセス 601
 - 情報フィールド 585
 - 制御フィールド 585
 - 認証 590
 - ネットワーク制御プロトコル (NCP) 596
 - フラグ・フィールド 585
 - ブリッジング制御プロトコル (BCP) 596
 - フレーム構造 584
 - フレーム・チェック・シーケンス・フィールド 585
 - プロトコル・フィールド 585
 - リンク確立パケット 588
 - リンク終了パケット 590
 - リンク制御プロトコル (LCP) 586
 - リンク保守パケット 590
 - AppleTalk 制御プロトコル 596
 - APPN HPR 制御プロトコル 599
 - APPN ISR 制御プロトコル 599
 - Banyan Vines 制御コントロール (BVCP) 596
 - DECnet 制御プロトコル (DNCP) 597
 - IPv6 制御プロトコル (IPv6CP) 598
 - IPX 制御プロトコル (IPXCP) 598
 - LCP パケット 587
 - OSI 制御プロトコル (OSICP) 599

方法、プロトコルをリストする 106
ホスト
 制御ブロック 370
 入出力構成プログラム 355
 プログラム
 VTAM の構成 374, 375
 2216 接続、必要なアクティビティ 355
ポリシー 285
 一致 292
ポリシーとポリシー値 291

[マ行]

マルチシャシー MP 653
 構成 655
マルチパス・チャネル+ (MPC+)
 概説 389
 構成
 TCP/IP の MVS ホスト 364
 サブチャネルの構成 411
 バーチャル・インターフェースの構成 409
 要約、インターフェース監視コマンドの 428
 APPN の構成 391
 list、インターフェース監視コマンド 428
 TCP/IP の構成 394
 UDP+ の構成 392
 VTAM ホストの構成 374, 375
マルチリンク PPP プロトコル (MP)
 概説 651
 監視コマンド 661
 構成
 シリアル・リンク 654
 ダイヤル回線 653
 マルチシャシー MP 655
 レイヤー 2 トンネル伝送ネット 655
 構成コマンド 657
 考慮事項 652
 マルチシャシー 653
 レイヤー 2 トンネル伝送との関係 653
マルチリンク PPP プロトコル (mp) 監視コマンド
 アクセス 661
マルチリンク・プロトコル (MP) 構成プロンプト
 アクセス 657
メッセージ
 解釈 139
 受信 136
 説明 141
メッセージ通信プロセス
 影響するコマンド 135
 受信、メッセージの 136
 説明 135
 出入り 135
 OPCON コマンド 135

メッセージ・バッファリング
 概説 155
 ELS 監視コマンド 208
 flush 208
 list 209
 log 209
 nolog 210
 read-file 210
 set 211
 tftp 212
 view 212
 write-buffer 213
 ELS 構成コマンド 177
 list 177
 log 178
 nolog 178
 set 179

メモリー
 情報の消去 192
 情報の入手 39
 情報の表示 127
基づく構成
 既存の構成に 14
問題の分析と解決 377

[ヤ行]

ユーザー・アクセス
 構成 68
 パスワードの設定 84
 パスワード変更 91
 ユーザー情報のリスト 101
 ユーザーの削除 95
 ユーザーの追加 84
 ユーザー変更 92
ユーザー・インターフェース
 ソフトウェア 7
 プロセス 7

[ラ行]

リスタート、IBM 2216 の 781
リスト、構成の 106
利点、LAN エミュレーションの 285
リモート AAA 属性 789
 キーワード 789
 radius 789
 TACACS 790
リモート DTE の検索 489
リモート装置
 認証
 使用する PPP インターフェースの構成 594
 PPP インターフェースの構成 593

- リモート端末 5
- リモート・コンソール 5
- リモート・ログ
 - 出力例 150
 - 追加考慮事項 153
 - シーケンス番号の再発 154
 - 重複ログ 154
 - IP アドレスを含むメッセージ 153
- リモート・ログイン 5
- リンク制御プロトコル (LCP)
 - パケット 587
 - PPP との関係 586
- リンク・サービス・アーキテクチャー (LSA)
 - 概説 382
 - サブチャネルの構成 407
 - 直接接続
 - 2216 の構成 384
 - VTAM ホストでの構成 371
 - バーチャル・インターフェースの構成 404
 - ホスト
 - 制御ブロック 370
 - APPN 接続
 - 2216 の構成 385
 - VTAM ホストでの構成 371
 - DLSw 接続
 - 2216 の構成 386, 388
 - VTAM ホストでの構成 372, 373
 - LSA インターフェース 監視コマンド
 - 要約 426
 - list 426
- ルーター
 - 構成情報の削除 92
 - 再ロード 6, 17
 - 時間統計の表示 133
 - 終了 7
 - 情報の表示 99
 - リポート 39
- ルーター・コンソール
 - 使用 4
 - リモート 5
 - ローカル 4
- ルーター・ソフト ウェア
 - 再ロード 39
- ルーター・ソフトウェア
 - 通信 130
 - ユーザー・インターフェース 4
- ルーター・プロセス
 - 情報の表示 40
 - 接続 11, 41
- ルーター・ロード・ファイル
 - 複数のディスクからの作成 785
 - DOS でのアセンブル 785
- ルーター・ロード・ファイル (続き)
 - DOS での分割 785
 - UNIX でのアセンブル 786
 - UNIX での分割 787
- ルート記述子ポリシー 292
- ループバックの構成、APPN 415
- 例
 - 交換回線大ノード定義ファイル
 - VTAM 制御ブロック 370
 - VTAM ホストでの LSA APPN 接続 372
 - VTAM ホストでの LSA DLSw 接続 372
 - VTAM ホストでの LSA DLSw ローカル変換 373
 - VTAM ホストでの LSA 直接接続 371
 - 2216 の定義、LCS 用の MVS または VM の TCP/IP に対する 366
 - 2216 の定義、MPC+ 用の MVS または VM の TCP/IP に対する 368
 - 2216 の定義、MVS または VM の場合の HPDTP UDP に対する 370
 - IOCP
 - 並列チャネル・アダプターに関する定義 359
 - EMIF ホストの定義 357
 - ESCON チャネルの定義 356
 - XCA 大ノード定義ファイル
 - VTAM 制御ブロック 370
 - VTAM ホストでの LSA APPN 接続 371
 - VTAM ホストでの LSA DLSw 接続 372
 - VTAM ホストでの LSA DLSw ローカル変換 373
 - VTAM ホストでの LSA 直接接続 371
- 例、クイック構成 772
- レイヤー 2 トンネル伝送
 - マルチリンク PPP (MP) との関係 653
- レイヤー 2 トンネル伝送ネット
 - MP の構成 655
- ローカル SNA 大ノード制御ブロック 374, 375
- ローカル XTP
 - 説明 490
- ローカル端末 4
- ローカル・コンソール 4
- ロード
 - 特定時刻に 48
- ロード・ファイル、ルーターの
 - 複数のディスクからの作成 785
 - DOS でのアセンブル 785
 - DOS での分割 786
 - UNIX でのアセンブル 786
 - UNIX での分割 787
- ログイン
 - 使用不可化 95
 - リモート・コンソールから 5

ログイン (続き)

- リモート・ログイン名 95
- ローカル・コンソールから 5

[ワ行]

ワイルドカード、DTE アドレスの 488

[数字]

- 10/100 Mbps イーサネット監視コマンド 282
 - アクセス 282
 - 要約 282
 - collisions 282
- 10/100 Mbps イーサネット構成コマンド
 - duplex 280
 - exit 281
 - ip-encapsulation 280
 - list 280
- 10/100 イーサネット構成コマンド
 - アクセス 279
- 2216
 - ホスト定義、必要なアクティビティ 355
- 2216 の定義
 - オペレーティング・システムへの 360

A

- AAA 属性、リモート 789
- activate
 - GWCON コマンド 118
- add
 - チャンネル・アダプター 401
 - フレーム・リレー構成コマンド 536
 - 変更管理構成コマンド 50
 - add 698
 - ATM 構成コマンド 311
 - ATM バーチャル・インターフェース構成コマンド 318
 - CONFIG コマンド 78
 - ELS 構成コマンド 158
 - SDLC 監視コマンド 698
 - SDLC 構成コマンド 686
 - SDLC リレー構成コマンド 668
 - XTP 監視コマンド 507
 - XTP 構成コマンド 499
 - X.25 構成コマンド 464
- advanced
 - ELS 監視コマンド 182
 - ELS 構成コマンド 158
- AppleTalk 制御プロトコル
 - PPP の 596

- APPN
 - LA ループバックの構成 415
 - LSA
 - 2216 の構成 381
 - IBM 2216、構成 385
 - VTAM ホストの構成 371
 - APPN HPR 制御プロトコル
 - PPP の 599
 - APPN ISR 制御プロトコル
 - PPP の 599
 - ARP configuration
 - config 330
 - list 331
 - remove 331
 - set 331
 - ATCSTRxx、VTAM 初期設定ファイル 375
 - ATM
 - アドレスの入力方法 305
 - ATM LLC 監視コマンド
 - list 324
 - ATM アドレッシング 287
 - ATM 監視コマンド
 - アクセス 319
 - インターフェース 320, 323
 - 要約 320
 - atm-llc 320
 - interface 320
 - list 321
 - trace 322
 - wrap 323
 - ATM 構成コマンド
 - アクセス 309
 - インターフェース 310
 - 要約 310
 - add 311
 - disable 317
 - enable 317
 - LE-Client 310
 - LE-Services 310
 - list 311
 - qos 312
 - remove 312
 - set 312
 - ATM ネットワーク・インターフェース
 - 監視 309
 - 使用 305
 - ATM バーチャル・インターフェース監視コマンド
 - 要約 324
 - ATM バーチャル・インターフェース構成コマンド
 - 要約 318
 - add 318
 - list 318

ATM バーチャル・インターフェース構成コマンド (続
ぎ)

remove 318

atm-llc

ATM 監視コマンド 320

B

Banyan VINES 制御プロトコル (BVCP)

PPP の 596

BCM 299

サポート、ソース・ルート・ブリッジングの 301

サポート、IP の 300

サポート、IPX の

防止、LEC の取り扱いの 300

BCM IPX サーバー・ファーム 300

サポート、NetBIOS の 301

NetBIOS 名前共用 301

BCM IPX サーバー・ファーム

防止、LEC の取り扱いの 300

boot

CONFIG コマンド 85

Boot CONFIG

プロセス

CONFIG から入る 85

Boot CONFIG コマンド

timeload 59

buffer

GWCON コマンド 119

BUS 285, 287

機能 297

接続 297

BUS の機能 297

BUS への接続 297

C

callback

ダイヤル回線監視コマンド 766

calls

ISDN 監視コマンド 752

V.25bis 監視コマンド 720

change

フレーム・リレー構成コマンド 544

CONFIG コマンド 85

XTP 構成コマンド 502

X.25 構成コマンド 471

channels

ISDN 監視コマンド 753

CHAP

監視 622

構成 602

PPP の認証 592

CIR

オーファン・パーマネント・バーチャル・サーキット

CIR 525

監視 527, 528

VIR に対する関係 527

circuits

ISDN 監視コマンド 753

V.25bis 監視コマンド 721

clear

フレーム・リレー監視コマンド 567

CONFIG コマンド 92

ELS 監視コマンド 182

ELS 構成コマンド 159

GWCON コマンド 120

PPP 監視コマンド 623

SDLC 監視コマンド 698

clear-counters

LLC 監視コマンド 259

clear-port-statistics

SDLC リレー監視コマンド 676

CLLM

説明 524

CLLM サポート 530

collisions

イーサネット監視コマンド 274

10/100 Mbps イーサネット 監視コマンド 282

CONFIG コマンド

要約 77

add 78

boot 85

change 85

clear 92

delete 94

disable 95

enable 96

event 97

features 98

List 99

load 102

network 103

patch 103

protocol 106

qconfig 107

set 107

system retrieve 113

system view 114

time 115

unpatch 116

update 116

write 116

CONFIG プロセス

アクセス 17

CONFIG プロセス (続き)
 コマンド、使用可能な 17
 システム・ダンプ 75
 終了 77
 説明 65
 入る 17, 77

configuration
 情報の表示 120
 GWCON コマンド 120

Config-Only モード
 自動的に入る 66
 手動で入る 66
 説明 66

connector-Type
 イーサネット構成コマンド 272

copy
 変更管理構成コマンド 51

CPU
 メモリー使用量の表示 127

create
 ELS ネット・フィルター監視コマンド 206
 ELS ネット・フィルター構成コマンド 175

D

DDN
 デフォルト設定値 783

DECnet 制御プロトコル (DNCP)
 PPP の 597

DECnet の構成 779

default
 ELS 構成コマンド 159

delete
 ダイアル回線構成コマンド 760
 チャンネル・アダプター 416
 CONFIG コマンド 94
 delete 698
 ELS 構成コマンド 159
 ELS ネット・フィルター監視コマンド 207
 ELS ネット・フィルター構成コマンド 176
 ISDN 95
 SDLC 監視コマンド 698
 SDLC 構成コマンド 687
 SDLC リレー構成コマンド 669
 XTP 監視コマンド 507
 XTP 構成コマンド 503
 X.25 構成コマンド 472

describe
 変更管理構成コマンド 52

diags
 OPCON コマンド 36

disable
 性能監視コマンド 218
 性能構成コマンド 216
 データ圧縮 602
 認証プロトコル 602
 フレーム・リレー監視コマンド 568
 フレーム・リレー構成コマンド
 cir-monitor 544
 変更管理構成コマンド 52
 マルチリンク・プロトコル 602
 ATM 構成コマンド 317
 CONFIG コマンド 95
 ELS ネット・フィルター監視コマンド 207
 ELS ネット・フィルター構成コマンド 176
 GWCON コマンド 123
 Lower DTR 602
 SDLC 構成コマンド 687
 SDLC リレー監視コマンド 676
 SDLC リレー構成コマンド 670
 SDLC リンクの接続確立 699
 XTP 構成コマンド 504
 X.25 構成コマンド 454

display
 ELS 監視コマンド 183
 ELS 構成コマンド 159

divert
 OPCON コマンド 36

DLCI (データ・リンク接続識別子)
 フレーム・リレー 514

DLSw 接続
 構成
 ローカル変換、2216 での 388
 2216 386
 VTAM ホスト 372, 373
 LSA 386, 388

DOS
 ロード・ファイルのアセンブル 785
 ロード・ファイルの分割 786

DTE アドレスのワイルドカード 488

dump
 高速トークンリング監視コマンド 239
 トークンリング監視コマンド 230

duplex
 イーサネット構成コマンド 280

E

ELAN タイプ・ポリシー 294
 ELAN ネーム・ポリシー 293

ELS
 概念 138
 監視 157

ELS (続き)

- 再ロード 138
- 使用法 142
- 説明 137
- トラップ 195, 201
- トラップの設定 143
- トラブルシューティング 1 144
- トラブルシューティング 2 145
- トラブルシューティング 3 145
- トラブルシュートのための使用 144
- トレース 170, 196
- 入る 97
- 保管 193
- メッセージの解釈 139
- メッセージ・バッファリング
 - 概説 155
- リモート・ログ
 - シーケンス番号の再発 154
 - 出力 150
 - 重複ログ 154
 - 追加考慮事項 153
 - IP アドレスを含むメッセージ 153
- remote-logging 168, 193
- Telnet の使用による出力のキャプチャー 143

ELS 監視コマンド

- メッセージ・バッファリング 208
 - flush 208
 - list 209
 - log 209
 - nolog 210
 - read-file 210
 - set 211
 - tftp 212
 - view 212
 - write-buffer 213
- 要約 181
- advanced 182
- clear 182
- display 183
- files 184
- filter 184
- list 184
- nodisplay 187
- noremote 188
- notrace 188
- notrap 189
- remote 190
- remove 192
- restore 193
- retrieve 193
- save 193
- set 193

ELS 監視コマンド (続き)

- statistics 208
 - trap 201
 - view 202
- ## ELS 構成環境
- 出入り 157
- ## ELS 構成コマンド
- メッセージ・バッファリング 177
 - list 177
 - log 178
 - nolog 178
 - set 179
 - 要約 157
 - add 158
 - advanced 158
 - clear 159
 - default 159
 - delete 159
 - display 159
 - filter 160
 - list 160
 - nodisplay 162
 - noremote 163
 - notrace 164
 - notrap 165
 - remote 166
 - set 168
 - trace 200
 - trap 173
- ## ELS コンソール環境
- リモート・ログ 146
 - リモート・ワークステーション
 - 構成 147
 - レベル
 - 定義済み 146
 - 2216 リモート・ログ記録
 - 構成 148
 - SYSLOG の機能
 - 定義済み 146
- ## ELS 操作環境
- 出入り 181
- ## ELS ネット・フィルター監視コマンド
- 概説 205
 - create 206
 - delete 207
 - disable 207
 - enable 207
 - list 208
- ## ELS ネット・フィルター構成コマンド
- 概説 174
 - create 175
 - delete 176

ELS ネット・フィルター構成コマンド (続き)
 disable 174
 enable 176
 list 177
ELS の構成
 出入り 138
ELS メッセージ 141
 回転の管理 142
 グループ 141
 説明 141
 トラップ 173, 201
 トラップの抑制 165, 189
 トラップの抑制 (notrap) 189
 トレース 200
 トレースの抑制 188
 ネットワーク情報 141
 表示の抑制 162
 表示の抑制 (nodisplay) 187
 リモート・ファイルへの ログ記録の使用可能化
 (Remote) 166, 190
 リモート・ログの抑制 (noremote) 163, 188
 ログ・レベル 140
 trace 173
EMIF
 IOCP 定義例 357
enable
 性能監視コマンド 218
 性能構成コマンド 216
 データ圧縮 604
 認証プロトコル 604
 フレーム・リレー監視コマンド 568
 フレーム・リレー構成コマンド 547
 変更管理構成コマンド 52
 マルチリンク・プロトコル 604
 ATM 構成コマンド 317
 CHAP 604
 CONFIG コマンド 96
 ELS ネット・フィルター監視コマンド 207
 ELS ネット・フィルター構成コマンド 176
 GWCON コマンド 124
 Lower DTR 604
 PAP 604
 SDLC 監視コマンド 699
 SDLC 構成コマンド 688
 SDLC リレー監視コマンド 677
 SDLC リレー構成コマンド 670
 XTP 構成コマンド 504
 X.25 構成コマンド 453
enable lmi 565
encapsulator
 ダイヤル回線構成コマンド 760

erase
 変更管理構成コマンド 53
error
 GWCON コマンド 124
ESCON
 概説 377
ESCON チャンネル・アダプター
 構成 399
 マルチパス・チャンネル+ (MPC+)
 TCP/IP の 構成 394
 UDP+ の 構成 392
ESI 287
event
 CONFIG コマンド 97
 GWCON コマンド 125
exit
 10/100 Mbps イーサネット 構成コマンド 281
exit コマンド 13
F
FDDI
 構成 247
 GWCON 251
FDDI 概説 243
FDDI 監視コマンド
 アクセス 250
 list 251
 SRT-STATS 251
FDDI 構成コマンド 247
 アクセス 247
 list 248
 set 248
FDDI と GWCON 251
FDDI (ファイバー分散データ・インターフェース)
 使用 243
features 98
 帯域幅予約 125
 CONFIG コマンド 98
 GWCON コマンド 125
 MAC フィルター 98, 125
 WAN 復元 125
 WAN 復元/再ルート 98
files
 ELS 監視コマンド 184
filter
 ELS 監視コマンド 184
 ELS 構成コマンド 160
flush
 OPCON コマンド 37

G

GTE-Telenet

デフォルト設定値 783

GWCON

コマンド

SDLC インターフェース 705

X.25 インターフェース 480

プロセス

入る 18

FDDI 251

GWCON コマンド

インターフェース 223

要約 118

activate 118

buffer 119

clear 120

configuration 120

disable 123

enable 124

error 124

event 125

features 125

interface 126

memory 127

network 128

protocol 130

queue 130

reset 131

statistics 131

test 132

uptime 133

GWCON と FDDI 251

GWCON プロセス

説明 117

出入り 117

H

halt

OPCON コマンド 37

HCD

プログラム 355

MVS/ESA 定義 361

HDLC フラグ

フレーム・リレー・フレーム内の 520

help 12

コンソール・コマンド 12

HPDT UDP

2216 の定義例、MVS または VM の 場合の 370

HSSI

set

回線速度 565

回線輻輳 (ふくそう) デフォルト値 562

cable 562, 614

clocking 563, 615

crc タイプ 563

crc-type 561

I

IBM 2216

Config-Only モード 66

ILMI 機能、LAN エミュレーションの 289

intercept

OPCON コマンド 38

interface

ATM 監視コマンド 320

GWCON コマンド 126

IOCDS 356

IOCP

定義 356

並列チャンネル・アダプターに 関する定義例 359

ESCON チャンネルの定義例 356

IP (インターネット・プロトコル)、クイック構成の使用
による構成 775

IP 制御プロトコル (IPCP)

PPP の 597

IP の構成 775

IPv6 制御プロトコル (IPv6CP)

PPP の 598

IPX (インターネットワーク・パケット交換機能)

イーサネット・カプセル化タイプ 778

クイック構成の使用による構成クイック構成 777

トークンリング・カプセル化タイプ 777

IPX 制御プロトコル (IPXCP)

PPP の 598

IPX の構成 777

ip-encapsulation

イーサネット構成コマンド 272, 332

10/100 Mbps イーサネット 構成コマンド 280

ISDN

アクセス、監視プロセスへの 751

アドレス 731

インターフェースの制約事項 737

概説 729

コールの検証 732

構成 738, 745

削除、アドレスの 95

サポートされるスイッチ 737

サンプル構成 735

ダイヤル回線 730

- ISDN (続き)
 - ダイヤル回線の競合 751
 - デマンド回線を介したコスト制御 732
 - 要件と制約 737
 - GWCON コマンド 756
 - PPP 構成 737
- ISDN インターフェース
 - 使用 729
- ISDN 監視コマンド
 - 要約 751
 - calls 752
 - channels 753
 - circuits 753
 - L2_Counters 754
 - L3_Counters 754
 - parameters 755
 - statistics 755
 - TEI 755
- ISDN 構成コマンド
 - スイッチ変数の設定 749
 - 要約 745
 - list 746
 - remove 746
 - set 746
- I.431 スイッチ変数 743
- L**
- L2_Counters
 - ISDN 監視コマンド 754
- L3_Counters
 - ISDN 監視コマンド 754
- LAN あて先ポリシー (MAC アドレス・ポリシー) 293
- LAN エミュレーション 285
 - 概説 285
 - 関連 ILMI 機能の概説 289
 - クライアント 286
 - 構成サーバー 286
 - 構成サーバー、ポリシーとポリシー値 291
 - コンポーネント 286
 - コンポーネントの ATM アドレス 289
 - サーバー 286
 - 最大フレーム・サイズ・ポリシー 294
 - シグナル・バージョン 290
 - シグナル・バージョンの構成 290
 - 主要な構成パラメーター 304
 - 冗長度 302
 - 信頼性 302
 - セキュリティ 303
 - 探索、ILMI の使用による LECS の 290
 - 重複ポリシー値 294
 - データ・ダイレクト VCC の確立 298
 - 同報通信および不明サーバー (BUS) 287
- LAN エミュレーション 299 (続き)
 - ブロードキャスト・マネージャー (BCM) 285
 - 利点 285
 - ATM アドレッシング 287
 - ATM でのアドレッシング 287
 - BUS 287
 - BUS の機能 297
 - BUS への接続 297
 - ELAN タイプ・ポリシー 294
 - ELAN ネーム・ポリシー 293
 - ILMI 機能、関連の 289
 - LAN エミュレーション構成サーバーの概説 290
 - LAN エミュレーション用のルーター拡張機能の概説 299
 - LAN エミュレーション・コンポーネントの ATM アドレス 289
 - LECS LAN あて先ポリシー (MAC アドレス・ポリシー) 293
 - LECS TLV 294
 - LECS の概説 290
 - LECS の割り当てポリシー例 292
 - LECS、ポリシーとポリシー値 291
 - LES によるアドレス解決 296
 - LES へのアドレス登録 296
 - LES への接続 295
 - LAN エミュレーション構成サーバー 290
 - LAN エミュレーションの主要パラメーター 304
 - LAN エミュレーション用のルーター拡張機能 299
 - LAN エミュレーション・クライアント (LEC) 325
 - 構成 325, 327
 - LAN エミュレーション・コンポーネントの ATM アドレス 289
 - LAN エミュレーション・サーバー 295
 - LAN チャンネル・ステーション (LCS)
 - 概説 380
 - 構成
 - 2216 381
 - TCP/IP の MVS ホスト 363
 - サブチャンネルの構成 402
 - バーチャル・インターフェースの構成 401
 - LCS インターフェース 監視コマンド
 - 要約 425
 - list 425
 - LCS
 - ブリッジング
 - パラメーター 382
 - LE クライアント 286
 - LEC 監視コマンド
 - アクセス 344
 - 要約 345
 - list 345
 - mib 348

LECS 285
最大フレーム・サイズ・ポリシー 294
重複ポリシー値 294
とLAN エミュレーション 286
割り当てポリシー例 292
ELAN タイプ・ポリシー 294
ELAN ネーム・ポリシー 293
LAN あて先ポリシー (MAC アドレス・ポ
リシー) 293
LAN エミュレーションのコンポーネン
ト 290
LAN 拡張 290
TLV 294
LES 285, 286
アドレス解決 296
アドレス登録 296
接続 295
LE-Client
ATM 構成コマンド 310
LE-Services
ATM 構成コマンド 310
list 25
イーサネット構成コマンド 272
高速トークンリング構成コマンド 236
性能監視コマンド 218
性能構成コマンド 217
ダイヤル回線構成コマンド 761
チャンネル・アダプター
インターフェース監視コマンド 422
インターフェース構成コマンド 400
構成コマンド 419, 420
トークンリング構成コマンド 226
フレーム・リレー監視コマンド 568
フレーム・リレー構成コマンド 552
変更管理構成コマンド 55
ポイント・ポイント構成コマンド 606
10/100 Mbps イーサネット 構成コマ
ンド 280
ATM LLC 監視コマンド 324
ATM 監視コマンド 321
ATM 構成コマンド 311
ATM バーチャル・インターフェース
構成コマンド 318
CONFIG コマンド 99
ELS 監視コマンド 184
ELS 構成コマンド 160
ELS ネット・フィルター監視コマ
ンド 208
ELS ネット・フィルター構成コマ
ンド 177
ISDN 構成コマンド 746
LCS インターフェース監視コマ
ンド 425
LEC 監視コマンド 345
list 699
LLC 監視コマンド 260
LSA インターフェース監視コマ
ンド 426

list 428 (続き)
MPC インターフェース監視コマ
ンド 272
PPP 監視コマンド 623
SDLC 監視コマンド 699
SDLC 構成コマンド 688
SDLC リレー監視コマンド 678
SDLC リレー構成コマンド 671, 672
V.25bis 構成コマンド 716
XTP 監視コマンド 508
XTP 構成コマンド 504
X.25 監視コマンド 477
X.25 構成コマンド 474
list devices 309
list devices コマンド 20, 271, 279, 399, 601, 715
llc
高速トークンリング監視コマ
ンド 240
高速トークンリング構成コマ
ンド 236, 240
トークンリング監視コマ
ンド 230
トークンリング構成コマ
ンド 226, 230
フレーム・リレー監視コマ
ンド 578
フレーム・リレー構成コマ
ンド 559
ポイント・ポイント構成コマ
ンド 611
PPP 監視コマンド 647
PPP 構成コマンド 611
LLC 監視コマンド
アクセス 259
要約 259
clear-counters 259
list 260
set 265
LLC 構成コマンド
アクセス 255
要約 255
list 256
set 257
LLC ネットワーク・インター
フェース
構成 255
LMI マネージメント・エン
ティティ 522
load
CONFIG コマンド 102
lock
変更管理構成コマンド 55
logout
OPCON コマンド 38

M

MAC アドレス・ポリシー (LAN あ
て先ポリシー) 293
media
高速トークンリング構成コマ
ンド 237
トークンリング構成コマ
ンド 227

memory
 GWCON コマンド 127
 OPCON コマンド 39

mib
 LEC 監視コマンド 348

mod、チャンネル・アダプター構成コマンド 417

MONITR プロセス
 影響するコマンド 135
 受信、メッセージの 136
 説明 135
 出入り 135
 OPCON コマンド 135

MPPE オプション
 リスト表示 607

MS-CHAP
 PPP の認証 592

MVS ホストの構成、TCP/IP の 362

MVS/ESA
 ハードウェア構成定義 361
 2216 の定義 361
 HCD 361

MVS/XA に対する 2216 の定義 361

N

national disable
 X.25 構成コマンド 457

national enable
 X.25 構成コマンド 454

national restore
 X.25 構成コマンド 462

national set
 X.25 構成コマンド 458

network
 コマンド 400
 CONFIG コマンド 103
 environment 103, 128
 GWCON コマンド 128

network コマンド 21, 271, 279, 309, 344, 601, 715

net、チャンネル・インターフェース監視コマンド 424

nodisplay
 ELS 監視コマンド 187
 ELS 構成コマンド 162

noremove
 ELS 監視コマンド 188
 ELS 構成コマンド 163

notrace
 フレーム・リレー監視コマンド 578
 ELS 監視コマンド 188
 ELS 構成コマンド 164

notrap
 ELS 監視コマンド 189
 ELS 構成コマンド 165

O

off
 packet trace 監視コマンド 203

on
 packet trace 監視コマンド 203

OPCON
 アクセス、チャンネル・インターフェースへの 399
 チャンネル・アダプター・インターフェース、コンソール 421

OPCON インターフェース
 構成 35

OPCON コマンド
 要約 35
 diags 36
 divert 36
 flush 37
 halt 37
 intercept 38
 logout 38
 memory 39
 reload 39
 status 40
 talk 41
 telnet 41

OPCON プロセス
 アクセス 35
 コマンド、使用可能な 35
 説明 33
 戻る 13
 要約 7

OSI 制御プロトコル (OSICP)
 PPP の 599

OSPF 776

P

packet trace
 packet trace 監視コマンド 190

packet trace 監視コマンド
 off 203
 on 203
 packet Trace 190
 reset 203
 set 203
 subsystems 204
 trace-status 204
 view 205

packet-size
 高速トークンリング構成コマンド 237
 トークンリング構成コマンド 227

parameters
 構成 107

parameters (続き)

- ISDN 監視コマンド 107
- V.25bis 監視コマンド 722
- X.25 監視コマンド 478

patch

- CONFIG コマンド 103

PCA

- 概説 377
- 構成 399
- IOCP 定義例 359

perf コマンド 216

physical-address

- イーサネット構成コマンド 272, 281

PPP

- IP 制御プロトコル (IPCP) 597

PPP インターフェースの監視プロセス

- アクセス 622

PPP 監視コマンド

- 要約 622
- clear 623
- IPCP パラメーターのリスト 623
- LCP パラメーターのリスト 623
- list 623
 - dn 645
 - dncp 645
 - osi 646
 - osicp 645
- llc 647

PPP コールバック

- 構成 594

PPP 構成コマンド

- IPCP パラメーターの設定 611
- LCP パラメーターの設定 611
- list
 - ccp 607
 - ecp 607
- set 611

PPP の PAP 認証 591

prompt-level

- 構成コマンド
 - 表示、ホスト名の 111
 - プレフィックスをホスト名に追加 111
- 追加機能
 - 表示、ホスト名を VPD と共に 111
 - 表示、ホスト名を時刻と共に 111
 - 表示、ホスト名を日付と共に 111
 - 表示、ホスト名を復帰と共に 111
 - 表示、ホスト名を変更と共に 111

protocol

- CONFIG コマンド 106
- GWCON コマンド 130

protocol コマンド 25, 26

Q

qconfig

- CONFIG コマンド 107

QoS

- ATM 構成コマンド 312

queue

- GWCON コマンド 130

Quick Config モード 67

- 手動で入る 67

R

radius 789

reload

- OPCON コマンド 39

remote

- ELS 監視コマンド 190
- ELS 構成コマンド 166

remove

- フレーム・リレー構成コマンド 559
- ATM 構成コマンド 312
- ATM バーチャル・インターフェース構成コマンド 319
- ELS 監視コマンド 192
- ISDN 構成コマンド 746

report

- 性能監視コマンド 218

reset

- GWCON コマンド 131
- packet trace 監視コマンド 203

restore

- ELS 監視コマンド 193

retrieve

- ELS 監視コマンド 193

RIP 776

S

save

- ELS 監視コマンド 193

SDLC

- 交換コールイン・インターフェース
 - 構成 681
 - 構成 681, 685
 - 構成手順 681
 - 構成へのアクセス 685
 - 構成要件 683
 - ネットワーク・インターフェース 705

SDLC 監視コマンド

- アクセス 697
- 要約 697
- clear 698

SDLC 監視コマンド (続き)

link counters 697

list 699

SDLC 構成コマンド

要約 686

add 686

delete 687

disable 687

enable 688, 699

list 688

set 691

SDLC コネクション

サポート 686

SDLC リレー

アクセス、監視環境への 675

構成 667

構成へのアクセス 667

SDLC リレー監視コマンド

要約 676

clear-port-statistics 676

disable 676

enable 677

list 678

SDLC リレー構成コマンド

要約 668

add 668

delete 669

disable 670

enable 670

list 671, 672

set 673

set

高速トークンリング構成コマンド 237

性能監視コマンド 219

性能構成コマンド 217

ダイヤル回線構成コマンド 763

チャンネル・アダプター

構成コマンド 420

トークンリング構成コマンド 227

フレーム・リレー監視コマンド 578

フレーム・リレー構成コマンド 561

変更管理構成コマンド 56

ATM 構成コマンド 312

CONFIG コマンド 107

ELS 監視コマンド 193

ELS 構成コマンド 168

ISDN 構成コマンド 746

LLC 監視コマンド 265

packet trace 監視コマンド 203

PPP 構成コマンド 611

SDLC 監視コマンド 702

SDLC 構成コマンド 691

set (続き)

SDLC リレー構成コマンド 237

V.25bis 構成コマンド 717

XTP 構成コマンド 504

X.25 構成コマンド 448

source-routing

高速トークンリング構成コマンド 237

トークンリング構成コマンド 228

speed

高速トークンリング構成コマンド 238

トークンリング構成コマンド 229

statistics

消去 120

ELS 監視コマンド 198

GWCON コマンド 131

ISDN 監視コマンド 755

V.25bis 監視コマンド 723

X.25 監視コマンド 479

status

OPCON コマンド 40, 601

subsystems

packet trace 監視コマンド 204

system retrieve

CONFIG コマンド 113

system view

CONFIG コマンド 114

T

TACACS 790

talk

OPCON コマンド 19, 41, 216, 217

TCP/IP

マルチパス・チャンネル+ (MPC+) の構成 364

2216 の定義例、LCS 用の MVS または VM の
366

2216 の定義例、MPC+ 用の MVS または VM の
368

LAN チャンネル・ステーション (LCS) の構成 363

MVS ホストの構成 362

TCP/IP パススルー

構成 382

TCP/IP を介する X.25 トラフィックのトランスポート

485

TDM (時分割多重) 513

TEI

ISDN 監視コマンド 755

telnet

セッションの終了 43

接続のクローズ 43

OPCON コマンド 41

Telnet セッションの状態の入手 42

telnet コマンド 42
telnet セッションの状態の入手 43
Telnet 接続 5
 クローズ 43
 状態の入手 42
test
 GWCON コマンド 132
 SDLC 監視コマンド 705
 test 705
TFTP
 説明
 変更管理関連の 47
tftp
 変更管理構成コマンド 57
time
 設定と変更 115
 CONFIG コマンド 115
timeload
 Boot CONFIG コマンド 59
Tinygram 圧縮 612
TLV
 ELAN ベースで定義 294
trace
 フレーム・リレー監視コマンド 580
 ATM 監視コマンド 322
 ELS 構成コマンド 200
trace-status
 packet trace 監視コマンド 204
trap
 ELS 監視コマンド 201
 ELS 構成コマンド 173

U

UNIX
 ロード・ファイルのアセンブル 786
 ロード・ファイルの分割 787
unlock
 変更管理構成コマンド 61
unpatch
 CONFIG コマンド 116
update
 CONFIG コマンド 116
update-firmware
 変更管理構成コマンド 62
uptime
 GWCON コマンド 133

V

V25bis アドレス 102

VC
 フレーム・リレー 513
view
 ELS 監視コマンド 202
 packet trace 監視コマンド 205
VM/ESA に対する 2216 の定義 361
VM/SP に対する 2216 の定義 360
VM/XA に対する 2216 の定義 361
VSE/ESA に対する 2216 の定義 362
VTAM
 始動パラメーター 375
 初期設定ファイル ATCSTRxx 375
 ホストの構成
 APPN 接続、LSA 371
 DLSw 接続 372
 MPC+ 374, 375
 LSA 直接接続の構成 371
V.25bis
 アクセス、監視プロセスへの 720
 アドレスの追加 709
 構成 709, 715
 構成へのアクセス 715
 GWCON コマンド 725
V.25bis 監視コマンド
 要約 720
 calls 720
 circuits 721
 parameters 722
 statistics 723
V.25bis 構成コマンド
 要約 715
 list 716
 set 717

W

wrap
 ATM 監視コマンド 323
write
 CONFIG コマンド 116

X

XCA 大ノード定義ファイルの例
 VTAM 制御ブロック 370
 VTAM ホストでの LSA APPN 接続 371
 VTAM ホストでの LSA DLSw 接続 372
 VTAM ホストでの LSA DLSw ローカル変換 373
 VTAM ホストでの LSA 直接接続 371

XTP
 監視コマンド
 Add 507

XTP (続き)

- Delete 507
- List 508
- 構成 499
- 構成コマンド 499
 - Add 499
 - Change 502
 - Delete 503
 - Disable 504
 - Enable 504
 - List 504
 - Set 504
- 構成手順 490
- 使用 485
- 設定、キープアライブ・タイマーの 504
- 設定、ナショナル・パーソナリティーの 494
- バックアップ・ピア機能 488
- 閉域ユーザー・グループ
 - 概説 490
- ローカル XTP
 - 説明 490

X.25

- パラメーターのデフォルト値 438

X.25 インターフェース

- 相互閉域接続ユーザー・グループ
 - 概説 443
- 閉域ユーザー・グループ
 - オーバーライド、cug 0 の処理の 444
 - 概説 442
 - 回線の確立 443
 - 拡張タイプ 443
 - 構成 444

X.25 監視コマンド

- 要約 477
- list 477
- parameters 478
- statistics 479

X.25 構成コマンド

- 要約 447
- add 464
- change 471
- delete 472
- disable 454
- enable 453
- list 474
- national disable 457
- national enable 454
- national restore 462
- national set 458
- set 448

X.25 トランスポート・プロトコル (XTP) 485

X.25 ネットワーク・インターフェース

- アクセス、監視プロセスへの 476
- 構成 447
- 使用 437
- 統計 480
- ナショナル・パーソナリティー 438, 783



Printed in Japan

SC88-6699-03



日本アイ・ビー・エム株式会社
〒106-8711 東京都港区六本木3-2-12

Spine information:



Nways
マルチプロトコル・アクセス・
サービス

MAS V3.2 ソフトウェア使用者の手引き